新群書類從

第一



新群書類從

例言

一本編採錄するところの書は、すべて德川氏の世の撰著編述にかかるもの、ならびに德川氏の世の文藝風俗に緊密の關係ある其前後の撰著編述にかゝり、未だ世に刊行せざるもの、若くは漸く湮滅せんとするものを收めたり。これ新群書類從の特色として、本會の尤も苦心したるところなり。

一古書を新刊する、增訂校正して之を公にするを利益ありとすべきものあり。また舊に依りて改めず、純ら古色を存して、影本に等しきものを刊行するを趣味ありとすべきものあり。本編採錄するところの書、或は大に新訂し、或は殆ど覆刻して、必ずしも畫一ならずと雖も、要するに皆觀者をして不利益無趣味の歎を發せ

ざらしむるを期す。其新訂を歷たると、舊樣に依れるとは、一々其書の卷端に就て之を知るべし。

一本編凡て十二册を以て成る。本會は其第一册より第六册迄を水谷不倒氏に、第七册より第十二册迄を幸田露伴氏に託して各嚴密精細なる原稿の編纂校訂を經たり、されば其原稿の蒐集に於ても、其編輯の方針に於ても終始兩氏の親切叮嚀なる周旋敎導を煩したる事少からず、爰に之を附記して本會の兩氏に對する謝意を表す。

明治三十九年四月

國書刊行會識

べきを見ず、卑近を以て之を鄙むが如きは、實に學者古を尚び近きを侮るの弊のみ。新群書類從は主として德川氏の世の書册の、或は傳ふること稀にして覯ること罕なるもの、或は未だ刊せずして泯ぶに垂たるもの、或は叢脞斷片漸く將に塵散灰滅せんとするものを集め刊して、之を今に頒ち後に貽らんとす。これ強ひて近きに厚くし遠きに薄くするに似たりと謂ふべし。然りと雖も新といひ、古といふ、齊しく皆假稱なり。今にして德川氏の前後を論ずるや、おのづから新の名あり古の名あり、今より後にして德川氏の前後を論ずるや、今の所謂古はもとより古にして、今の所謂新もまた同じく古ならずんばあらじ。然らば則ち古も猶新の如く、新も猶古の如きなり。新群書類從を編する所以の意は、卽ち是塙氏が群書類從を編する所以の意ならんのみ。

明治丙午初夏　　幸田露伴識

緒言

我が邦の叢書、塙氏の群書類從を以て其の魁とす。而して塙氏の期するところ、古を存し舊を徵するにあるを以て、其の收むるところの書、故を採り新を擱く。續群書類從に至つては、料理物語尤の草紙等の近古の書を收むと雖も、猶連歌を收めて俳諧を收めず、管絃を收めて演劇を收めず、其の採錄の遠きに厚くして近きに薄きや知る可きなり。燕石十種出づるに及びて、始めて專ら近古俚俗の書を集む。採錄多からずと雖も、然も後の學者其の惠を荷ふこと少からず。蓋し德川氏府を江戸に開きし以來、世運祥寧民庶和樂、足利氏末造大亂の後を受けたるの故を以て天地一新し、文藝もまた朝紳桑門の手を脫して、市民野人の手に移り、嶄然として面目を前代に異にし、煥乎として文華を一時に發す。今よりして之を論ずれば、德川氏の世の文藝は、寧ろ前代に比して、其の重んずべきを見て、輕んず

例言

一本卷及び次卷に收むる所の西澤叢書は歌舞妓淨瑠璃の故實を知るには、他に多く類例を見ず、劇道の寶典と稱せられし書なれども、傳本極めて稀にして、容易に手に入るゝことを得ず、たまたまこれあるも、『傳奇作書』『皇都午睡』中の一二編に止り、全本を所有する人殆どなく、中には書目のみを知れど、傳本の有無さへ確むる能はざるものありて、頗る遺憾としたるところなるが、大阪市に於ては、去る三十四年より、市史編纂に著手し、文學士幸田成友氏主任となりて、專ら史料蒐集中、同所の發達には殊に關係深き本書の散佚を惜み、各藏書家に就て其の在本を尋ね、多年苦心の結果、『傳奇作書』の初編より六編まで十八卷、『脚色餘錄』『皇都午睡』の全部合せて十八卷、『讃佛乘』の全部六卷、通計四十二卷を同編纂係に藏することを得、こゝに久しく散亂したる西澤文

庫の主要部は、同所に蒐集せらるゝの運に際會したり。今其の原本と藏書家諸氏の姓名とを擧ぐれば左の如し。

傳奇作書初編	言狂作書	三卷	東京饗庭篁村氏及び大阪鹿田靜七氏異本二種
同	拾遺	三卷	大阪小栗仁平氏
同	殘編	三卷	同　殿村平右衞門氏
同	續編	三卷	同　平瀨龜之輔氏
同	附錄	三卷	饗庭篁村氏
同	後集	三卷	
皇都午睡	全	九卷	平瀨龜之輔氏
脚色餘錄	全	九卷	
讚佛乘	全	六卷	

以上の如く、東西五氏の文庫を漁り、漸く此の書の完備に近づきたるを見ても、いかに西澤文庫の稀本なるかを知るに足らん。唯『傳奇作書』追加の一編のみ未だ發見せられず、然れども西澤文庫中、類纂にかゝる書を除き、劇道の六韜三略と稱せられたる隨筆の殆ど全部が網羅されたるは、誠に慶ぶべし。刊行會に於ては、去歳大阪市及び同市史編纂係の承諾を得、且各原本所有諸氏の承諾をも經て、其の全部を謄寫せしめ、今回これを刊行するに至りたり。

一本書の著者西澤氏は、書肆より出て狂言作者となりたる人なれば、文才はあれども深く學問の素養あるにあらず。殊に狂言作者の常として、理に反したる事あれば狂言綺語と遁れ、外題等を定むるには濫りに新字を作り、登場人名には假名を用ゆる等、殆ど習慣となり、正史傳記の區別立ず、破格、無文法、誤字、當字、假名違ひ、

てにはの誤り等若し文章の上の瑕疵を數ふれば枚擧に遑あらず、又地方訛りあり、樂屋通言あり、普通の讀者には頗る難解の箇所も少からず、殊に傳へ〳〵て誤寫を生じ、義理の通ぜざる所もなきにあらず。原本には幸田氏が一々附箋して疑を存し訂正に便せられたるを、校訂者は更に考査し、其の全く誤謬の判明したるものはこれを訂正し、未だ決せざるものは、なほ疑を存し、義理明快ならざる所には傍らに「本ノマヽ」と斷り。缺字には□を以て補へり。されど原文の保存を主とし、當字、假名違ひの稍不穩當なるも、讀下に差支なき限り敢て改訂を施さず。

一本書のうち『傳奇作書』の初編(言狂作書)のみは、編纂係の藏本に據らず、直ちに鹿田氏の藏本を謄寫し、これを原本として、更に饗庭氏の藏本に據りて校訂を了したり。然るに此の二書異同甚しく、雙方に增減あり、長きは十數行に亘れる脫文あり、到底傳寫の

誤りと見做すべからざるものあり。蓋し『言狂作書』は西澤文庫中最も世に流布したるものなれば、人々により增補省略を敢てし、こゝに至りたるものか頗る疑はし。若し一々是等二書の相違を記入する時は、毎頁挿註を以て埋められるゝの奇觀を呈すべし。依て二書の意義には何等障りなく、文の長短、詞形のみに相違あるもの、又傳寫の誤りと思はるゝものは、其宜しきに從ひ訂正を加へ、義理全く反するもの、若しくは事實の原本に缺けたるものは、饗庭氏の藏本に據りてこれを補ひ、異本として本文中に挿入せり。

一本書原本には諸所に挿繪あり。其の繪は概ね板行にありしものを、著者が素人筆に寫しゝもの、傳寫毎に少しづゝ誤りを生じ、後には殆ど原形を失ひしもあり。唯形を示すのみのものは差支なきも、原本の繪を見せしめんとするには用に立たざるあり。又殆

ど無意味なる挿繪もあり。是等は已む事を得ず省くこととしたり。例へば『傳奇作書』中にある作者の畵像の如き、肖像にもあらず、原圖あるにもあらず、殆ど意義をなさゞるものゝ如き、雨夜の三盃機嫌の役者繪の如き、原圖を寫すにあらざれば趣味なきもの等是なり。

一本書には又所々に重複の事實あり。例へば「謠曲作者目錄」の如き『傳奇作書』附錄にもあれば『讚佛乘』の初編にもあり。寶曆漂流談の如き亦然り。是等は其の一を存して他は削れり。但し同じき事實にても、其の間多少異なる消息を傳ふるものは、重複を厭はず存し置けり。又本書はもと筐中の秘書たりし性質上、時としては猥褻に亘るものなきにあらず、例へば『傳奇作書』拾遺中「奈河龜助が戲編」の如き、『皇都午睡』初編中「好色合戰」の如き、『讚佛乘』二編中「新道成寺緣起」の如きは刊行上遠慮すべき性質のものな

れば、割愛して態と省きたるもあり。

一本書原本には大概巻頭に目次、毎章には標題を設けたれども、中には目次あれど、標題を設けざるあり。標題あれども目次のなきあり。是等は體裁上及び索引上、一定の目次標題を附することゝしたり。又著者の署名の所或は編といひ著といふ「上の巻」「巻之上」など區々なるは、何れも體裁上一定の方針を取れり

一本書の刊行に就ては、幸田成友氏大阪市及各原本所有諸氏の間に立ちて、斡旋の勞を取られたり。又饗庭篁村氏、鹿田靜七氏は、其の藏本を貸與せられたり。其の他大阪市、原本所有諸氏の好意に對し、感謝の意を表す。猶ほ本書は前述の如く通言、地方訛り又本書の特質ともいふべき破格の文體を保存する上に、寧ろ深き注意を要したれば、特に其の校正を森岡格雄氏に委托し大過なきを得たりこゝに一言氏の本書刊行に盡されたる勞を謝す。

明治三十九年四月

水谷不倒識

新群書類從第一目次

演劇（一）

西澤一鳳小傳……一
（西澤文庫）傳奇作書初編（言狂作書）の序……一
上の巻序……一
上の巻……三
○井原西鶴の傳○西澤一風の傳○八文字屋自笑の傳○近松平安堂の傳○江島屋其磧の傳○竹田出雲操の傳○作者となる近道の事○狂言趣向の種といふ事○淨瑠璃歌舞妓へ移る事○小說稗史を眞といふ事○淨瑠璃の作を行といふ事○歌舞妓の作を草といふ事○狂言四番續といふ事○世界定外題文字の事○三都狂言の異なる事
中の巻序……二一
中の巻……二三
○作者八景の狂詠○奈河龜助が傳○奈河七五三助が傳○太夫役者行儀崩れし話○新淨瑠璃本讀の話○奈河篤助が傳○奈河晴助が傳○芝屋芝叟が傳○鶴屋南北が傳○寂光門松後萬歲○並木の祖宗助が傳○並木正三が傳○並木五瓶が傳附淺草堂より文通の笑話○作をせし役者の傳○金澤龍玉梅玉が話
下の巻……五〇
○近松半二が傳獨判斷叙○近松德叟が傳○崇禪寺馬場敵討の實話○上田秋成中村大吉が話○櫻田治助が傳○金井三笑本讀の話○瀨川女皐の話○福森久助が傳○辰岡萬作が傳○歌舞妓古作者の話○小幡滑稽書

様の論○西澤一鳳軒が傳○狂歌浪華土産月名殘○月並本讀會引條○閑樂のつられ……七〇

西澤文庫 傳奇作書拾遺叙……七一

上の卷……七二

○俳優者七部の書の事○昔狂言浪人盃の筋書○同氏神詣の筋書○北の新地五人切の實說○宵庚申桂川情死の話○南北が遺稿極樂の連○江戸作者三升屋二三治が咄○同自墮落の連の寫○東都戲場名題付方の法○同役者年曆珍重記○同三梨園樂屋雜書○木村園次村岡幸治が話○戲作者著編拘欄話の論○聲曲類纂の作者名寄

中の卷……一〇〇

○繁昌記戲墨之辭○銅脈先醒婢女行○同觀戲場○同戲場書事○俳優見立評判の說○梨園による俳諧發句○白猿が長夜の書溜○戲場好者家の發句○俳優金毘羅樽○小春紙治情死の話附近松平安堂作文論○近松半二が獨判斷の寫○同後段の話○西澤一鳳一代不性○奈河龜助の戲編

下の卷……一二〇

○賴政扇子芝院本摹寫○昔米萬石通院本摹寫○北條時賴記院本摹寫○鼈道通鑑雜戀の話○三浦大助紅梅鞠の話○一谷嫩軍記須磨都の話○同千載集流しの枝の話○娘景清八島日記の話○狂言の筋は八文舍本に有○同黃金の鷄內讀の話○佛法乘合噺の筋書○戲場番附に名前を削る辭

拾遺跋……一四四

西澤文庫 傳奇作書殘編……一四五

上の卷序……一四五

上の卷……一四六

○湖上李笠翁の詩○醒々齋稻妻表紙の話○小說を潤色せし傳奇の話○南總里見八犬傳脚色の話○けいせい筭傳授外題の話○同古今傳血達摩の話○淺草靈驗記大川が傳○淨瑠璃の作文をせし話○謠曲狂言釣狐の證考○讀院本釣狐尾花褶附同序文

中の巻序……一七一
中の巻……一七二
○芝東長話葬の話○東都合巻の外題の寫○同戯場にての外題の寫○當狂言外題見立番附○瀬川菊之亟俳名の話○淨光我童に闌平を教し話○蘭奢待助市役の話○秋里籬島翁の話○十返舍が膝栗毛の話○伽羅先代萩世界の話○義經腰越狀院本の話○岩井風呂人殺の實說○女郎富再び情死の實說○慶子紅桔梗女團七の話
下の巻……一九七
○歌舞妓道中圖繪○故人役者舊跡鑑○歌舞妓道中道しるべ○忍ばずにて作者咄初の話○碁太平記白石噺の說○脚色に筆拍子と云話○筆拍子七草齊囃子の話○化菖蒲いろは連歌の話○同四十七段返しの段書○市村家橘忠臣藏所作の事○四季寫土佐畵拙の文談○男哉婦將門勢田橋の文○富本常盤津外題角力○謠曲狂言釣狐尾花淨
殘編跋……二二六
四澤文庫 傳奇作書續編……二二七
上の巻序……二二七
上の巻……二二八
○當世芝居賢氣○竹豐故事の序○音曲狂言綺語の事○呂律五音十二調子の事○名人上手下手評判の事○太夫教訓名言の事○五段續語場役柄の事○淨瑠璃作者の事○淨瑠璃古今の序○同東西外題番附○古今いろは評林の序○古今いろは評林の發端○忠臣藏狂言の說○伊賀越復讐の說○昔八丈城木屋の說○椀久物狂ひの說
中の巻……二五八
○三勝半七惰死の話○簑笠雨談の齟齬○梅の由兵衛小梅の話○勢州龜山敵討の話○箱根彦山靈驗記の話○累怨靈解脫の實話○播州皿屋敷の實說○鴈金組五人男の話○扇屋夕霧が略傳○八百屋お七が事跡○黑船一代男狂言の話○女達奴の小萬が事跡○盜賊日本左衛門が話○東海道茶屋娘の話○灰屋紹益吉野の話○景清重忠茶湯の話

下の巻……二八三
○狂言人名實說の話○英一蝶遠島の說○生島新五郎流罪の話○市川才牛横死の話○江戸三芝居替地の說○芳澤春水名譽の說○能に新工夫を用ひぬ話○畵に畵虛事有の話○詩歌連俳を評する語○狂言綺語を評する語○淨瑠璃狂言穴の話○古淨瑠璃名作の話○歌舞妓狂言穴の話○古名人役者に妙有る話○同狐忠信思入異なる話○菜種御供狂言の話

西澤文庫 傳奇作書附錄……三一一
上の巻……三一二
○唐土奇譚の寫○古淨瑠璃本の寫○諸流能舞謠名所競の寫○謠曲作者目錄の事○同內百番の部○同外百番の部○同習十番の部○獨吟八十五曲の部○同作者姓名附○復讐見立番附○武藝名譽一覽番附○男達見立角力番附○新大橋復讐新聞○同歌舞妓濶色の話○天王橋復仇の紀聞

中の巻……三四二
○元文奇說銀の笄○同纏兩家落著の話○歌舞妓濶色の話○三十石艗始人名の話○極彩色娠扇の話○富士見月通者壞の話○淀屋辰五郎の事跡○持丸長者狂言の話○心中情死人名錄○長崎丸山細見圖の話○角觝取狂言人名錄○中興奇賊撰の話○妹背山婦女庭訓の話○花相撰蝶々敍日の話○東鑑御狩卷の話○素人藝畠水練の話

下の巻……三六九
○雨夜三盃機嫌の寫○同歌牧童の辭の狂文○天河屋儀兵衞の實說○伊勢と日向の物語の草稿○纏敎免最淸の草稿○南北軍問答院本の話○泣男杉本佐兵衞の說○古代人名狂言の話○鹽賣長次郎の話○歌舞妓に名高き人名の話○饗灘入船噺の笑話○彫物師左甚五郎の話○目貫後藤浮世又平の話○鍛冶正宗國俊の話○高野女人堂心中の話○島原の靑葉薄情の話

西澤文庫 傳奇作書後集……三九四
上の巻……三九八
○京攝戲場三番叟の圖○同脇狂言の事並に圖○東都三座脇狂言の事○中村座酒呑童子の文句○市村座七福神の文句○河原崎座甲子待の文句○中古江戸三座通詞の事○江戸狂言待た暫の事○當世榮花物語の序○同初編六編迄の目錄○傾城纏幕湯の筋書○纏新齋夜話の一話○纏幕湯後齣脚色の話○豫州松山開城の

一奇話○假名手本四齣裏の正本

中の卷……四二一

○星野和佐矢數の話○最明寺諸國行脚の話○佐野治郎左衞門人殺の話○宮城野信夫敵討の話○山崎與次兵衞吾妻の話○富士淺間復讐の話○佐々木巖流敵討の話○嵐小六悴雛助へ敎訓の話○三浦屋高尾最期の話○尾上岩藤草履打の話○妹背山の鴛鴦景事の話○衣裳好み上手下手の話○謠曲望月復讐の話○復讐望月譚の草稿

下の卷……四四七

○那須與市宗高の話○扇的西海硯の草稿○同後段那須野狐退治の場○中興世話早見年代記○堀田稻葉安宅丸の話○下總佐倉宗吾の話○齊藤吾櫻花日記の草稿

西澤文庫 皇都午睡初編……四七九

上の卷……四八一

○表題の起原、枕を碎く○俗言の齟齬○秀句の渡守○東都の地口○似口行燈○浪華の口合、畵口合○川柳點○冠附○折句○もぢり笠○尻附跡附○粘頭續尾（山科の跡附）○雜俳の品目、札の立見○二字段々○鶴助の發句○物は附○何に附○何曾々々○考へ物○古代の謎○字謎○字謎の發句、犬の足跡○前句附○落首○戯場の落首○所俳諧○金毘羅樽○畵に似たる文字○字にて畵を書く○古代の看板○畵噺○宛字讀○鈍畵○落噺○講釋○浮世物まね○玉川三吾○大人遊○幼童の遊戯○鳥指○俄茶番○拳○所作拳○童謠ふれ〳〵小雪○十夜童謠○橋の下の菖蒲○地藏の勸化○木遣音頭○遠國の唱歌○鞠のかけ聲○手鞠唄○十二月萬歳○置錢一銖（大盡舞）○鑄懸駱駝○おつこち○胡麻摺○四谷鳶阿波座鴉○天王囃子天滿巫子○いろは譬○弄の名を異にす○寺子屋庵室○投壺投扇興○茶佳否記（餒嘗會）○圍碁將棊○祭將棊○宜山骨牌○佛像雙六○道中雙六○早口そゝり○竹田機關○大道具○輕業放下師○細工見世物○猿狂言、馬藝、力持○座敷影畵○おどけ開帳○子守歌○順禮歌○潮來節○伊勢音頭○馬士唄○船歌船頭歌○臼挽田植歌○豐後ぶし○淨瑠璃節○ちよんがれ節○娘道成寺○歌系圖○雪の唱歌○青葉の解○謠曲を唱歌にす○綾鶴○鉤簾の戸

中の卷……五〇一

○萬歳の唱歌○七草薺を囃す詞○女達摩の畵讃○男色影間○正五九月○松蟲鈴蟲○孫の手竹奴○金岸の發句○粹と通と程の解○曾呂利の畵讃○文七元結○懸鈎引墨○八百屋お七○妓王妓女○三井の家系○假

面打の作名○皷鳥帽子裝束○扇子の指方○三十六町一里○鯉鮒の地名○伏見の里の考○甑落月の客○庖丁刀○燧袋○兵庫の蕪○定家家隆○二月堂の茶筌賣○遊女町の衡○飲酒の十德夏日七快○肖拍ノ貫賊に逢○鷹匠○太平の腹皷○向島の狸囃子○山科のノ貫○蝶番○陶淵明の菊○折助亡六○文寶の石○水尾盡○無藝の大食○宗鑑の物數寄の竊香○金春の太皷○宗禪の笛○小人の閑居○隱居一枚起請○瓢輕者○木端の火○醫者の看板○煮染○杜鵑の蘇生○雀の隼人○木曾の猿酒○飛驒の篠魚○鵙の草莖○鵙鮓○蛸と蟹に灸をすへる○鯖の鮓○熊野の大樹○北野の連歌○閑間の御遊○茶人への諷諫○六憎○餝磨の搗染○謠曲の發明○太郎餘一郎○曾我兄弟六代御前○猪口太郎○慶庵肝煎○四方田四方八面○上米刎る○七里けつぱい(反物麁物)○日披露○手枕の歌○燈臺元暗○板倉の明斷○富士の裾野○梓巫子○日想觀○安德帝忌○大雅堂霞樵○兜軍記○天明京大火○辻能狼籍

下の卷……五三七

○白氏文集○紹益吉野を悼○淡々の示教○輕卒者の連歌○十干十二支○金烏玉兎○定賴の和歌○和泉式部○大佛餅屋○江島屋其磧○市中は中を行○道路は左を行○毛拔鮓○一噌の笛○赤良の狂歌○藤公の笑疾○百翁の茶會○富士と達摩の畫○長生殿の繪○月見の松○饂飩豆腐○李白仲麿を悼○支考の俳言○年中の雨○蕉雨の發句○行脚に句を買ふ○無名の短策○光次○內科外科○基俊歌を盜まる○よしにせよ○商人の學問立○短文の書狀○國姓爺弟○自鳴鐘○大男小男○兼良の元服○夜詰の太皷○不出門行の詩○義孝の連歌○馘塚三所に有○徂徠の戲言○磯の浪○下谷の爭論○狐川の名義○潘谷橋姫の考○そこにべ殿○名月は俳諧の題○辻能の道成寺○泊船寺住持○古今傳授○大佛の御首○七瀨川の秀句○蘆邊殿の婢女○故人の句を詠○青砥の續松○山伏の德政○三船の才○難波次郎○重衡盛長○罔兩の歌○六德牒記○內舍人老薫○厥風の子○馬の詠たる歌○かんにんの四字○乘平內兵衛○馬術に雅なし○羯摩乘親の面○雅人の傑○南方鑷○竹田近江○春日野の蟲○鶯白魚○賴政の亡魂○於菊蟲○鹿の時立○猿蟹を嫌ふ○置皷○水引○鳥貝○放島の試み○はなじろ○和歌に師なし○南面の障子○差合くり○二萬堂西鶴○三句の渡り○記錄表紙○餓鬼つぱた○兄弟の爭ひ○佛は佛師○運慶の口傳○鴟鴞の文○長範の詠○日本に象を涉○淸人發句を譯○師直の歌を譯○兼好を評す○勢語源語の評○解脫上人○西行の歌○幽齋の狂歌○信西豆○普賢像○楊貴妃櫻○利休織部の詫

西澤文庫 皇都午睡二編……五六七

上の卷……五六九

○心太○安らひ花よ○盆踊○かん〳〵踊○造り物○瀬戸物細工○煙草入○繪馬の繪○神佛の興廢○出開帳○空鐵炮（葛城の奇談）○石川の洪水○復讐の次第○泉岳寺○魁の箏○皿の爭ひ○通人の子○八坂の塔○鱚の骭○蜆の夢○蜃氣樓○檢校○古き俄○國姓爺○清姫○新町橋○雪の五輪○鼻黑○砂もち○若江の碑○御影參り○韓信を題せる歌○倉治の瀧○戲場の和歌○高野の玉川○猴に似た顏○朱買臣○狐戲るゝの詩○經聲人を感ぜしむ○箔の小袖○妓家の星合○平語小曲○琵琶に落涙○雪中庵五世○來山が門松○句の新しみ○釣狐の意見○淀川の抱鯉○馬の餞○經信の和歌○高麗王の惡瘡○白龍網にかゝる○眞喰の具足○匡房が强記○雙魚扁鵲の文○孕句○懷劍の發句○流行語は卑し○猫の飼やう○永井の屑衛○永井正宗○音曲の譬詞○古き文に有昧○領巾振山○應擧の畫○臥猪の眞寫○一蝶魚を鬻ぐ○鸚鵡籠を放る○遊女黃鳥を放す○臨寫摹寫○天龍川○行素夢常清○煙管筒の銘

中の巻……六〇四

○茶白山○飛梅○雪花の爭ひ○似雪閣書○香盆○阿闍寺○平家を評す○熊野の謠曲○去來の反古○釋智藏○望月蠻晴あり○絕景に句無○秋田の詠○けふの櫻○香阿彌の蒔繪○夜曆を見る○かまへ太刀○室の名所○室の八島○繪島の石○菜種の御供○花扇○急流の心得○粟田祭○住吉の奇瑞○慶安の塵劫記○東海道の算用○粟津の冠者○廣江寺の鐘○頭痛の占ひ○漂流の話○無人島○二島物語○影の膳○初午の句合○俳諧に學問いらず○西施が顰○鷹狩の始○小納言○天王寺の額○一河の流○燕子花を夏に定○初中後の子の日○反魂香○扇を鳴らす○十寸穗の薄○仁義を買ふ○空公行狀の碑○滿空の和歌○泥中に蛇を曳く龜○水車○常在法師○兎波上を走る○鵜は墨を貰す○流水を枕にす○門に鳳の字を書○老の接木○肘笠袖笠○草庵集○滿空言○千代能が歌○釋迦の法孫○味噌臭し○母子の訴へ○連歌の一直○如是院の米○戶津川の湯○座頭の茶挽○三輪の山もと○藍染川○煙草一錢○金の壺子○妻敵討○聖人賢人○儒士の孝行○龜田窮樂

下の巻……六三四

○奢侈の告○木賊苅○薪の能○堀池權兵衛○狐瓜を喰ふ○逆木柱○佐川田昌俊（苔の清水、筑間祭）○一枚起請○念佛無間○名人と功者○故人の句に似○松柏の節を顯す○眞雄の放蕩○渡邊庄太夫○赤穗順從錄○芝泉雜記○介石記の一話○復讐の落目○追悼の詩○昭君の額○義士筆の扇○碁打の言○渡邊綱の讖○九念面壁○筆道の論○宰予晝寢○妓女勝山○守武眞筆の極○香の物○比叡の山ぶみ○小野の於通○座禪に妄想○鹿笛○松茸山○丸山櫨太左衛門○此木戶の錠○大廻し三段切○松の雪○了然禪尼○乞食女の歌○蛙の聲を止む○しやの〳〵衣○木村重成○池上意三○金毘羅の神馬○應聲蟲○金閣寺○四つ子を產

○異形の觀場○十一屋の妻○梅心の辭世○非人の詠歌○五字の題目○竪題横題○熊澤の和歌○曾呂利の狂歌○滑稽頓作○信綱三仁政○井上の訴諧(玉の簪)○角觝の句○世を覆ふ句○我に飽○俳席の心得○句より心を聞け○尊氏の和歌○鎌倉の初鰹○明慧上人○泰時の無欲○畠山重忠○藤房遁世○正成韓信を評す

西澤文庫

皇都午睡三編……六六五

上の巻……六六七

○冬籠○鐘撞の階子○名聞は罪深し○賊の母歌を詠む○大野氏の女○嵯峨の山住○源語の發明○嵯峨の奥○神道の受○橘の下○欲は身の毒○鼠大根○作冤地を失ふ○下手のなき世○火替の神事○天下の俳諧○武運の稽古○宇治丸○羊肝半干○氣違法齋○氏神正一位○七子の彫物○淺葱崩葱○ひやかし逃助○辨慶太皷持○角兵衛獅子○悖餓鬼○戒紙神在餅○看板の謎○代神樂○月待日待代待○盃の銘○瓦茸○七嶽八平氏八庄司○愛子の庄司○我國のかな附○雷除桑原○めりやす莫大小○鐵火味噌○自墮落者○蓮葉女○鵜の目鷹の目○桃鬼灯○蝸牛○箱入娘○蚊の喰ぬ咒ひ○鞦韆蜻蛉返し○道具と牛○惣嫁の出火○小倉色紙○友衛員盡○有樂翁の茶○秀吉門破○泣涕微笑○鎗中村○石川丈山○時平公の墳○位牌の和歌○鯉の差身○穢多の訴○狐草履を送る○弓に蜻蛉を附る○九郎佛○惠心の佛像○道明法師○元政魚料理○火の見矢倉○宗祇の發句○幽靈の濡文○疫病神馬に乘○淀屋辰五郎○村井軍兵衛○國造の烏帽子○日本左衛門○鷹の尾筒

中の巻……六九七

○北山壽庵○要樞は蝕ず○變名○鵲の考○江口泊○陣兵羽織○南畝の辭世○牛の懸物○饅頭の名○正通の詩○往古の七種○漏刻の博士○貝原の書籍○大守三介○武林の八介○月廼雲客○法性寺の執行○瀧口帶刀○對句頓語○長谷雄の句○善光寺の號○歌の病○山家の秋月○鍛曳○蝙蝠○東の家土産○婦女の强氣○俠者は昔の事○名物に濃味無○婦人の情○八瀬や小原女○言葉の變○古着市○屋號不呼○金相場○檀代節句錢○地面持○土藏造○左官仕事○橋數少し○毎日法會○昔の人數○京の人別○茶店中宿○引越蕎麥○三都の商人○河岸の船宿○辻駕籠○四季の賣物○錢湯○厠便所○雜具の名○食物の異名○諸品の變名

下の巻……七二八

○流行言葉○婦人の髮○戲場の方言○貨食店の名○京攝の古遊所○深川の古遊所○吉原遊び○品川宿○內藤新宿○板橋千住○廻し床○通と野暮、持る持ぬの論、遊所の惣評○訛の惣評

終……

西澤一鳳小傳

水谷不倒撰

西澤一鳳は浪華の書肆にして、通稱を正本屋利助といふ。狂言綺語堂。李叟は其の別號なり。俳名は秋聲庵蒼々、後に滄々と改む。享和二年、大阪に生る。

元祿より享保の間、浮世草子淨瑠璃の作者にして、兼ねて其の版元たる西澤一風こと正本屋九左衞門は、實に一鳳が曾祖父なり。一風の父は太兵衞と稱し、大阪上久寶寺町三丁目に住へり。然れども其の家業等詳ならず。西澤の家名の聞えしは一風の代にあり。一風寬文五年に生れ、京阪文學の全盛を極めたる時に際し、其の思想に養はれ、文才おのづから煥發し、西鶴を祖述しては浮世草子を著し、近松を學びては淨瑠璃を作し、これを刊行し、これを拘欄にかけて、文

名一時に盛なりき。

寶永は西鶴の影響を受け、好色本の最も流行したる時なり。其の著者一二にして足らずといへども、就中自笑一風の名高し。而して自笑は自らこれを作せしにあらず、其磧をして代作せしめ、自笑自ら名を署して己れが書店より刊行したり。これ所謂八文字屋ものにして、浮世草子、正本筋書、評判記等其の類少なからず。一風はさながら自笑の如し、自ら著作をなし、これを其の店より刊行せり。正本屋九左衞門は大阪の八文字屋八左衞門なりき。一風が都の錦の落魄を助けて、其の文名を成さしめたる如き、或は新作を招致して盛に出版したるが如き、當時八文字屋等同業者に對する競爭の態度として、經營苦心の跡を見るべきなり。一風は文才に於て、世才に於て兩ながら兼備へたり。中興の祖といふべし。

一風享保十五年に歿し、其の子に利兵衞、其の孫に利右衞門ありて

其の家業を繼げり。一風の代、家を心齋橋南四丁目西側に移し、利兵衞に至り更に內本町二丁目に移轉せり。利右衞門また祖父に似て文才あり。俳名を一鳳と呼び、狂歌堂眞顏等と交りぬ。當時(明和安永頃)淨瑠璃漸く廢れ歌舞妓ひとり繁昌し、淨瑠璃には新作も稀にして歌舞妓には新脚本續出しぬ。狂言作者には奈河龜助、並木五瓶、近松德三、辰岡万作等の秀才あり。利右衞門は是等の人々と交り、且時勢の推移に鑑み、歌舞妓書類を集め、これを貸與して劇道の發達を助けしかば、作者俳優間に尊敬せられ、新作狂言の內讀本讀には、座頭と席を並べてこれを聞き、狂言の筋立に容喙し、これを取捨し添削するの株となれり。

利右衞門は又當時の習慣として、狂言の筋書卽ち臺帳は、作者俳優等芝居關係者の外は見るを得ざりしを遺憾とし、これを寫本に仕立、樂屋通言例へば一(てんがき)ト(とがき)等一々註解を加へ、貸本と

なし、素人の數寄者に讀ましめたり。これ京阪に於て狂言筋書を貸本にしたる嚆矢とぞ。爾來筋書の愛讀者を增加し、遂にはこれを刊行するものさへ出で來にけり。今普通根本と稱して、曉鐘成等の編輯せる拙き似顏繪入の版本あり。其の數二三十種に下らず。其のうち江戸狂言は僅に南北もの一二種に過ぎざれど、大阪の脚本は並木正三の作をはじめ、當時の名狂言は大概收められざるはなし。

利右衞門に男子二人あり。長を利兵衞といひ、俳名鳳堂、西澤の家を繼げり。次を利助といふ。これ西澤文庫の著者一鳳なり。父といひ曾祖父といひ、浪華文藝に貢獻少なからざる家に成長し、利助は遺傳と感化とによりて、幼き時より芝居を好み、歌舞妓書に眼を曝し、早く既に劇道の故實に精通したり。

然るに父利右衞門は、文化九年に世を去りしかば、家督は兄の利兵衞これを繼ぎぬ。利助は父が一鳳の名を襲ぎて、西澤一鳳軒と號し、

自らは堺筋清水町に居をトし、正本屋と貸本業を營み、傍ら狂言の筋立をなし、これを舞臺にかけしむるを無二の樂としけり。然れども一鳳は名利の爲めにするものにあらず、全く物數寄によるものなれば、自然と劇界に重きを致し、最初は決して自家の名を出さゞりしも、後には本道に入るの已を得ざるに至り、スケの名義にて名を番附面に掲げしことも屢あり。

當時浪華俳優には梅玉最も勢力あり。自ら金澤龍玉と名乘りて作者を兼ねし程なれば、狂言作者を視ることさながら奴僕の如く、殆ど彼れと衝突せざるものなかりしが、一鳳に對しては遖の梅玉も敬意を拂ひ、殊に晩年は一鳳が意見を好く容れたりといふ。七代目は、天保の改革に、驕奢の故を以て江戸を追放せられ、爾後數年間浪華に流寓せしこと人の知るところなるが、一鳳また屢彼れの爲めに筆を執りしことあり。

天保十二年の春一鳳は江戸に遊び、市村座に客たり。同年十月同座の燒失せしかば、暫時河原崎座に寄寓せしが、間もなく歸阪して『言狂作書』三巻を著はしぬ。弘化四年市村座の聘に應じ、再び江戸に下り、同座の帳元澤田なるものゝ隣家に居をトし、三年が間東都の客となれり。

是より先、兄鳳堂天保十一年に死去し、正本屋の業は殆ど一鳳の手に歸しぬ。然れども一鳳は此の頃漸く劇作に忙しく、また屢、諸方に漫遊し、家事を見るの暇なければ、義弟に本屋利助の家名を讓り自ら祖父が芳名を慕ふの餘り、西澤九左衞門と改め、且退隱の志切なりしかば、

臍の緒を落して四十九左衞門
　是より先きは生きたゞけ德

との狂詠あり。同年冬東都を辭して浪華に歸り、爾來劇作をなさず、

專ら著述に從事せり。今左に擧げたる著書は、多く此の間に成りしものにして、『皇都午睡』の如きは、江戸客舍中の漫筆なりといふ。

一傳奇作書	七編	二十一卷
一皇都午睡	三編	九　卷
一脚色餘錄	三編	九　卷
一綺語文草	四編	十二卷
一讚佛乘	二編	六　卷
一徒然文題		三　卷
一內外謠曲句集		三　卷
一勢語句抄		三　卷
一綺語堂發句集		一　卷
一忠臣藏類聚大成		四十八卷
一源平類聚大成		十八卷

一當世榮花物語　十八卷

以上は一鳳の著書中に散見する書目を擧げたるものにして、其の册數百五十一卷の多きに及べり。然れども『忠臣藏類聚大成』以下はいづれも淨瑠璃及び狂言の筋書等を集めたるものにして著述といふべからず。『徒然文題』以下四種の書は俳句集なり。されば一鳳が生涯の事業として、殊に其の心を籠めたる歌舞妓、淨瑠璃に關する隨筆は、『傳奇作書』『脚色餘錄』の全部と『皇都午睡』『綺語文草』『讃佛乘』の一部分なり。其の著書を繙けば、著者は紙上に躍如として、さながら其の人に接するの思ひあり。悉く自家の經驗の筆錄にして或意味にて、其の著書は一鳳の自傳といふを得べし。著書中に現はれたる一鳳は、少しも飾り氣なく、能く諧謔を弄し、時としては人を罵倒することあり。然れども又毫も邪氣なくまことに親むべし。自らは長く劇界に携はりしも、金の爲めにもあらねば、名の爲めに

もあらず、全く好事に盡せしことは一鳳自ら誇るところなり。曾祖父一風豐竹座の作者として、爾來同座の正本を刊行せしかば、一鳳は素より東贔負にして、一風を近松に比し、『北條時賴記』を『國姓爺合戰』に比し、賞揚至らざるなし。此の自負心は、やがて一鳳を作りしなり。一鳳當時俳優跋扈して、作者道の地に墜ちたるを慨し、奈河龜助の見識を說き、金井三笑の威力を賞揚するなど、狂言作者の爲めに、萬丈の氣を吐くものといふべし。當時の狂言作者は素より一鳳の眼中にあらず。其の李叟と稱したるは、幼名を利藏と呼びしに因れりと辯解しあれども、一鳳は恐らく我國の李笠翁を以て任じたるものなるべし。『聲曲類纂』の誤謬を指摘し、殊に馬琴が『簑笠雨談』の杜撰を論じたる精細痛快を極めたり。さすが傲頑なる馬琴、一鳳の爲めには面皮を剝れたるやの感あり。

嘉永五年十二月二日、一鳳は是等多數の著書を遺して、遂に不歸の

客となりぬ。時に享年五十一歳なり。

新群書類從第一

演劇

西澤文庫 傳奇作書初編(言狂作書)の序

夫言狂作書とは元亨釋書の地口にして戯謔の著作に名高き先哲の小傳を擧げ此道の好人に玄めす西澤一鳳軒が例の戯編也予幼年より梨園を好む癖有て遂に其門に入り狂言著作郎となり三都を遊歷して戯場傳奇の異なるを知りぬされど短き才をもて何を書べきや多くは故人の糟粕を嘗るのみ近來或人のいはくいかに珍らしからしめんとて商賣往來の表號を轉語して往來商賣と唱へたらんには飛脚屋の看板となるべしとの譏を得脫れずと雖も狂言に不易流行の論作者と呼るゝ早學問附ては小說稗史操淨瑠璃歌舞妓道の著作を眞草行の三つに註釋脚色の大概を叙て梨園遊客にあたふる事玄かり斯く演は元和時代より連綿舊

書林の隱居
時天保癸卯年晩春

西澤一鳳軒李叟誌

西澤文庫 傳奇作書初編(言狂作書)上の卷

日月燈江海油風雷皷版原天地一大戯場
堯舜且文武末走莽淨丑古今來許多脚色
大清康熙帝聯句

臺門揚西亭

世事是狂言綺語

戯場著作耶書應
西澤綺語堂先生屬

顧少虎

西澤文庫 傳奇作書初編(言狂作書)上の卷

目次

一井原西鶴の傳
一西澤一風の傳
一八文字屋自笑の傳
一近松平安堂の傳
一江島屋其磧の傳
一竹田出雲掾の傳
一作者となる近道の事
一狂言趣向の種といふ事
一淨瑠璃歌舞妓へ移る事
一小說稗史を眞といふ事
一淨瑠璃の作を行といふ事
一歌舞妓の作を草といふ事
一狂言四番續といふ事
一世界定外題文字の事
一三都狂言の異なる事

傳奇作書初編(言狂作書)上の巻

西澤綺語堂李叟著

井原西鶴の傳

井原西鶴は難波俳林松壽軒と號して俳諧師なり宗因の門人にして大坂鎗屋町に住り此人よく世情にわたりて戯作の冊子數多を著せり其書は男色大鑑、西鶴織留、世間胸算用、一目玉鉾、日本永代藏、西鶴置土産、西鶴彼岸櫻、西鶴名殘友此餘いくばくも有べし今日目前に見る所を述て滑稽を盡す事は此翁より始れり近松門左衞門も俳諧は此翁にならへり元祿六癸酉年八月十日に歿す年五十二墳墓は大阪八町目寺町誓願寺にあり辭世前文略

浮世の月見過しにけり末二年

西澤一風の傳

西澤一風は正本屋九左衞門とよびて大阪心齋橋南へ四町目に住す書林板元なりしが戯作を好み淨るり本數多を著せり其書は日本五山建仁寺供養、井筒屋源六戀寒晒、賴政追善芝、女蟬丸、昔米萬石通、南北軍問答、身替弓張月、本朝檀特山、北條時賴記、此餘操年代記等有り中にも近松が國姓爺は竹本座に名高く豐竹座には西澤が時賴記と當りを競ひ二ヶ年が間打續たる狂言を殘せり享保十六辛亥年五月廿四日歿せり年六十七墳墓は大阪下寺町大蓮寺にあり法號常譽貞寂禪定門、紀海音、田中千柳、並木宗助は一風が門人也、辭世

ちりゆくや風に常磐の木葉雨

八文字屋自笑の傳

八文字屋自笑姓は安藤八左衞門と呼て京師麩屋町通誓願寺下る所に住す書林也此人戯作の冊子を著す事幾百番八文字屋本とて今に呼べり傾城禁短氣、同曲三味線、同友三味線、同歌三味線、同玉子酒、野傾色狩(わけさとやさんざや)分里艷行脚、都鳥妻戀笛、富士裾野櫻、風流御伽會我、同東海硯、同東鑑、同軍配團、猶此餘浮世親仁形氣(おやじかたぎ)など數多あり延享四年卯冬自笑樂日記を書納めとして以後は悴其笑孫瑞笑に作意を任せぬれば常磐木の色かへずいや榮に御求め下されかしと序に書自像を畫

かせ南溟の大鵬寓言かと思へば終に敎となる

霜枯はさもあれ龜の長齡草

九十歲にちかき自笑しるすとあり（延享四卯年十一月十一日八十餘にて卒す）

近松平安堂の傳

近松門左衞門姓は杉森名は信盛平安堂巢林子と號し越後の人少して肥前唐津近松寺に遊學し後に洛に住す生涯武林を出て一度は浮屠に入り夫をも捨て淨るり數百番を著す其あらましは蟬丸、浦島年代記、嫗山姥、曾我五人兄弟、加古敎心七墓巡、用明天皇職人鑑、傾城反魂香、碁盤太平記、相模入道千匹犬、楓狩釼本地、持統天皇歌軍法、國姓爺合戰、嵯峨天皇甘露雨、天神記、日本振袖始、本朝三國志、信州川中島合戰、お千代半兵衞雷庚申、平家女護島、鎗權三重帷子、河內通、おふさ德兵衞重井筒、此餘あまた有享保九甲辰年霜月十一月廿二日歿せり法名は阿耨院穆矣日一具足居士辭世は

殘れとは思ふもおろか埋火の

けぬ間仇なる朽木書して

此人の事跡は南畝莠言にくはしければ是に略しぬ

江島屋其磧の傳

江島屋其磧は俗姓市郎右衞門と呼びて京師四條御旅町に住しが後六角通柳馬場の角に移り又綾小路通柳馬場西へ入所へも宅をかへたり八文字屋と同時の書林にて（俗稱江島屋市郎右衞門と呼で是も戲作の名高き人にて始自笑と心を合せ著せし戲編數百番估客老圃の頤を解せしが後自笑と中違ひしてより江島屋本とて一派を立世に行れたり）以下缺文但し次の異本に詳なり

異本、京師四條御旅町に住す大佛餅を鬻ぎて業とし自笑が戲作の代作す自笑其磧と兩名の本行はれて利を得ること夥し其書は傾城禁短氣、風流軍配團、風流御伽色紙子、略平家都遷、此餘質氣物とて數百番を著はして估客老圃の願を解かせしが後自笑と絕交して悋に書林をさせ六角通柳馬場角に移り綾小路通り柳馬場西へ入所へ宅を轉へ江島屋本とて一流をたてたり才は自笑に增したれどもその名自笑の右にいづることあたはず豈不幸にあらずや

竹田出雲掾の傳

竹田出雲は享保の頃淨瑠璃名譽の作者にて座本を兼て受領して出雲掾と成又千前軒とも云著せし傳奇は

大塔宮曦鎧、大内裏大友眞鳥、加賀國篠原合戰、男作五雁金、蘆屋道滿大内鑑、楠昔噺、平惟茂凱陣紅葉、菅原傳授手習鑑、双蝶々曲輪日記、源平布曳瀧、小野道風青柳硯、義經千本櫻、假名手本忠臣藏、此餘數多あり百餘年の今に廢らず院本歌舞妓に仕はやせる狂言は大約出雲が作意のもの也辭世と聞えしは「影すゞし水に彌勒の腹袋」小出雲が作も又尠からず時代世話新薄雪物語、軍法富士見西行、日高川入相花王、夏祭浪華鑑等也三好松洛、並木千柳、長谷川千四は千前軒が門子也

作者となる近道の事

或偏屈者近松半二に逢ひて淨るりの作者となるは如何すればなれる事ぞ又文句の內不分明の事かつ古語故實の謬を正して難問す半二が曰堂上の事實をしらば有職者となるべく弓箭の故實をしらば軍學者となるべし佛敎を覺悟せば大和尙と成べく聖經記典を記臆せば直に博識の儒者となるべし菅丞相が事も楠正成が事も丸のみに似つこらしく書て聞た程の語を奥深げにつばなかし和歌管絃より萬の道何ひとつ正しく覺えたる事なく聞取法問耳學問根氣をつめて學ぶことのならぬ自惰落者が則作者となる也と答へしかば口をつぐみて退きしと獨判斷の跋にものせし如く歌舞妓作者も是と同じく經學國學詩文などに長じたる人は作者には成難し牛刀割鷄其學力をたのみて下情に移らず歌舞妓の作は商家民間工匠遊里婦女子の情に通ずるを要とす然れ共小野の篁歌字盡を崇み實語敎童子敎を聖作也と心得たるも無下に拙なく四書五經は素讀して唐詩選徒然草を記臆せし程こそ其器に當れりとかいふべし其餘は和漢三才圖會和漢の軍談古今物語類和歌三代集國花萬葉名所類花實年浪草王代一覽內外謠曲本琴曲唱歌の本俳諧發句文集諸家隨筆物八文字屋本近來の小說稗史類此外眼力の及ぶ程は懈怠なく野史雜書を見るべしさりながら是程の書は作者ならず共見るべし是を讀得るまでに淨瑠璃本歌舞妓の正本古今來の仕くみいくらありともはかり難し是をあまさず熟覽せしうへ歌舞妓芝居淨るり操り芝居を見て是何の役はかようなる衣裳かの役は此樣な拵と胸に覺え置べし昔の作者には淨るり歌舞妓に殘りし正本なかりしゆゑ古今の書籍に涉臘して狂言にせしが今は舞臺にて役者の出來る樣先哲達

の書のこせし正本あり是を讀ずに外の書物をよむは廻り遠しとやいはん芝居には芝居の學問せし者ならでは作者には成難し三都の淨瑠璃歌舞妓の正本を熟覽せしうへ此門にいらば建作者に隨身して筆採を勤む筆採とは書役にて連俳の執筆とおなじ先作者の前に机を直し作者の詞にしたがひ正本の草稿に筆を下す事也其作者案文の內に和漢の故事古歌のてにはなど聞違へる事なく文字にあて字をかゝず道具の模樣衣裳の好み囃子の取合詞書の運び一トがきの差くり其場の國は何國ときはめ又は四季時候の月を定め時は何時と晝夜のわかちを聞置作者口拍子に乘り段々と詞の通りを書く內にも重復あらば前にかようなるせりふありと批判を言ひ我得心せぬ詞あらば作者にとくと問きはめ一場の草稿を書を作者道の修行と言なり又作者にも一日の趣向を立一幕の趣意をもふけ貴賤の詞をよく正し唄より唄までの一件を或は三人又は五人とおなじ人數のつゝかざる樣に愁の次へはをかしき事花やかなる色情の跡には見所ある詰合なんど都て同じ意の重ならぬやう一場〳〵の算用して詞付はなるだけ小短かく知れたる事は見物の眼にあづけくどからずして餘情を含ませる事第一の心得也尤道具立は工匠鳴物は囃子方の預かる所容と衣裳は役者の好によるものなれ共其源はみな作意より出れば輕卒に扱がたし然共餘り理屈詰にも成がたしいはゞ菅原傳授の判官輝國に野袴ぶつさき羽織を着せ挾間合戰の五右衞門に裏付の繼上下を着せたらば見苦しからん道具にても峨々たる山谷宮殿樓閣をわづか七間の舞臺に飾る事なれば是非なし囃子鳴ものにても太功記の本能寺禪囃子は聞苦しとて太皷拍子木をいれず題目にて幕明たらんにはお七吉三が吉祥院と思はれん是らは狂言綺語の逆道有て世に托鉢坊主が淨土の門には南無阿彌陀佛禪の家には禪語をちらつかせ眞言宗には陀羅尼のようなる事をつぶやき律僧には虫も殺さぬ顏にて付合日蓮宗にはだゞぶだゞ〳〵〳〵一向宗にはあゝ〳〵と計にて濟するが如し如此作者の脚色樣を覺へ詞書の付樣を習ふには筆採をつとめ修行すれば追々骨髓を知り後には作者の三枚目二枚目ともなり手輕き場は作する樣になる事也それも建作者より一幕か又は一件の筋書を請取書上て筆頭の作者に批判を請用ひがたきは幾度も添削し

て舞臺にかける事也當時は筆採をつかふべき作者もなく又筆とりをつとめ此道の修行するもの絶てなし作者のみばへは狂言方とて道具附小道具小裂衣裳附等の書抜なんどする役也此書抜にも心得有てせりふのくい切その役者の心に成て口調の能ように書を專一とし耳馴ぬ故事などにはかな附をして遣はし稽古讀合せの折書損落字かな違ひ等なき樣文字あらく書を要とす役者は皆文盲なるものと心得書ぬきの內我會得せぬ事は不審紙を張作者によく聞置事也而うして稽古の時役者是は何の事と尋ねし折夫は何々の事と即答の出來る樣にせねば正本のまゝ書抜文字違ひ一字二字の書謬より役者わからぬなりに覺えて仕舞ふ時には舞臺に於て見物に鄙言を聞せ譏をまぬかれず若後に言替させんと思ふ共口癖に成て改る事あたはず悔共詮なし日々幾萬人の看官に對したわいもなき詞を聞す時は作者の誤り役者の麁相と成物なれば能々書ぬきの時心を付るを狂言方の修行とは言なりそれより馴るに隨ひ正本をひかへ稽古をする樣に出世することなり稽古とは則俳諧の執筆を本式にするが如く本をひかへ其場々々に出る役者に心を配りいかなる建ものゝ役者たりとも呼び流しに名を呼び詞の言違ひ等ある時は遠慮なくかよう〳〵と敎ふる事いはゞ寺子屋の高弟が新弟子に筆の運びを敎ふる如くするなり其內役者より此間に今一口づゝ詞をふやし呉よなどあつらへある時は能々覺え置建作者へ言繼一口の詞たり共其場を書し作者の下知を受て殖す事第一なり追々修行の功を積み出這入りのせりふ作者へ言ひ入るゝ迄もなく即刻に我拵へる樣になりても其詞をならべ見て作者へ斷り相談の上計ふべしさなくては作者の意に違ふ事あり此稽古と筆採をよく手練して後作者とは成べし萬藝とも地に落たるは時運のしからしむる所是非なけれ共狂言方より作者になるはかく修行の功をつまではならざる事也今時の作者狂言方と名乘るもの書抜筆採稽古ども然するもの稀なりたゞ解らぬまゝに書寫しむづかしき字は考へもなく勝手にかなをふり稽古の折にも役者の見識におどされ閉口するがゆゑに一日の狂言は扨置一幕の算用立ず入我我入にてする事とはなりぬ稽古するとは何がゆゑに呼ぞや正本を前に控へたるのみにて湯屋の錢取番にもおとるべし東都にては道具方より

勤めて狂言方の預る役ならねど京攝の戲場にては影を打とも附を打共號て拍子木を狂言方に打しむる事例なり此木さへ打ば皆狂言方と思ひ作者の見ばへなりと思ふこそはかなけれたゞ梨園を好み作者道を學び傳奇の一番も著さんと思ふ者は右に演る如く院本正本を熟覽して閑暇には俳諧をすべし俳諧は普く世情に渉り俗に近くて作者はや學問とは此事なり往古より戲作を好む人大約俳諧をせぬ人なし東都に榮翁巢兆といへる俳諧師あり此人の著編の發句集に七代目市川團十郎幼き時下總の成田にて巢兆と同宿せし時三升巢兆に俳諧を教へ呉よと頼む其ゆゑは五代目祖父反古庵白猿のこと常々のしめしにも役者は俳諧を學ぶべし諸藝に通じ俗に近くてよき學問也との義ゆへ執心なりと語りしかば暫らく滯留の中懇に物語りせしとぞ書り實に尤なる事にて假初の話にも故人の語には味ひ多し一卷の俳諧の變化は公家かと思へば乞食となり戀かと見れば無常と成り貴人の館も埴生の小屋と變ずる所實に歌舞妓狂言は俳諧の變化の如し手など拙なからず書人能辯の人數萬卷の書に眼をさらせし人作者とならば寺子屋の高弟物書手代の放蕩者講釋師の前座に出る人腐儒者など皆作者に成べき物なれど論高ければ俗に落ず普く諸藝に渉り遊里洞房にはまる粹と稱する人にても押て作者とは成がたしかゝる拙なき業にも所謂五德を兼備せずんば眞の作者と呼るゝ事かたし爰に此年頃詩歌連俳あるは亂舞音曲をすこしく學び放蕩に身を持崩せし人梨園の樂房這入に狂言の穴を探り遊里に行ては藝子幇間の惡評をいふのみを是とする輩時々尋來て著作道に入りたし門葉にならん名を付呉よ抔いふ人數多あれども予決して許さず既に尾陽の俳人半掃庵也有先生は文集鶉衣など著し中興俳諧の名家なれ共生涯門人は一人も許さず斷られしよしたとへ門人となすとも初心の內は師匠〳〵と尊めぬれ共五七五の詞少しわかればば芭蕉の弟子其角が門葉のと言ばかり一たん師とたのみし人の批判をいふもの多かればとあり諸藝とも此境へはまるもの多し和歌をはじめ俳諧に師なしといへばましてや狂言の作に師あらん筈もなし也有叟が確言を思ひ出で斷りて教へずよしや師弟といはば師たる者の覺悟せし程の事悉く教へざれば詮なし其道をくはしく習ふべきの人もなし當時の張良は黃石公

の沓を取上たらば其座にて一巻を譲り受ずんば承知せぬ事にて孫呉が秘書も虎の巻もはした錢にて買る時節なればさもあるべし詩歌連俳にさへかくの通りいはんや薄情なる戯作者ものに於てをやゆめ〳〵好んで歌舞妓作者とは成べからずされど予が作者となりしは遁れぬ由縁あり祖一風が父西澤太兵衛は天和の頃よりの書林にして其子一風は享保に歿し元文より安永迄の内に其子九左衛門利兵衛と二代を經るうち浄瑠璃大にすたりて歌舞妓新作日々に流行す爰に於て太兵衛より五代目父利兵衛（俳名一風）は歌舞妓を好み其比の名たゝる作者を集め三都の正本を悉く所藏し自ら筋書をして作者に書しめ戯場者流のみならず素人にても讀易き様讀方の法を口に書き世に弘めしより屋號を呼て正本といふ故に院本正本數萬巻を閲し戯編を好むの癖あるを梨園者流に知られ誰かれにそゝのかされていつしか狂言著作郎とはなりぬ是所謂蓼蟲の一癖ならん

狂言趣向の種といふ事

古今の序にも倭歌は人の心を種としてよろづの言葉とぞなれりけると我傳奇にも種なくては綴りがたし其狂言の種に一話あり大岡忠相錄の中に板倉周防守殿京師所司代勤役の砌綾小路邊に高城瑞仙とて外科を業とする者あり或時奉行所へ訴へ出しは拙者獨身にて候所此廿日ばかり以前黄昏過ぎに宿に唯一人罷り在候へば何もの共しれざる大の男四五人來り私を引立て無二無三に繩をかけ口に手拭を押込聲を立る事ならざる様に致し外へ出候と駕に乗せ上より物を打かけ道を急ぎ何國共なく連行申候尤先の東西曾て知れ申さずやがて彼所へ着し所山の奥と覺しくて森々として松風の音のみ聞えし其所に一つの大家あり近所隣家と申もこれなき離れ家にて御座候其所へ私を引出し主人と覺しき大男立出て申は其方外科の聞え高し今我手下の者共悉く手負金瘡に惱めり何卒療治いたし呉よと申し否といはゞ打殺すべき體なるゆゑ拙者も一命にも及ぶべきかとまづそれ〳〵に療治仕り膏藥をつかはし大疵には縫遣し申し五六人も疵付候もの御座候より様々の療治にて大方快氣に及候へば今は古郷へ送るべし大義なりとて藥代金五兩を呉候て最初連行候時のごとく駕に乗（のせ）て夜中にもとの私宅へ送り届け駕のものは何方へやら逃行けるが

更に行方知れ申さず此段不審に存候へば隱し置て後日に相知れ申候ては如何と御訴へ申上候とあり板倉殿之を聞給ひ奇怪なること也先方角といひかたゞ〳〵しれぬとあれば手掛りもなし然れども其方廿日餘りも居し內に何ぞ替りし事はなきや食事等その外別義なかりしやとお尋ねあるにさして相替りし事御座なく候然し諸山にこれなき鳥の音折々相聞え申候佛法僧〳〵と鳴申候承り候へば鳥の名も佛法僧と申よし下野の日光山紀伊の國の高野山の外にはなき鳥なりと咄し申候もの御座候と申上ければ板倉殿聞玉ひよし〳〵夫にて相解りたり其金瘡の者はみな强盜の徒黨なるべし捕手をつかはすべしとて速時に役人を松の尾山の奥へと向はせらるゝ與力同心等はいかなればさは宣ふぞと伺へば板倉殿仰せらるゝやう彼醫師が申には佛法僧といふ鳥の鳴しよし彼鳥は高野日光の外になしといへどもよもや高野日光にまでは連行まじ推量するに松尾山の奥なるべし子細は藤原俊成千載集の歌に「松の尾の山の奥にも人ぞ住佛法僧の鳴につけても」此歌を聞く時はかならず松の尾山の奥なるべしと申されけり果して松尾山の奥より盜賊數人を搦め捕來りけるとなりされば板倉殿和歌の道にも委敷ゆゑ此裁判いたされし也此佛法僧の物語は世によく人の知りたる事なれば近頃の小說物にも粗遣ひしを見る中に享和の末か文化の始か東都の戲作者山東京傳が著作せし優曇華物語の卷中にきりはめ盜賊の頭を大蛇太郎とか呼び黑髮山にかくれ本文の如く手下數多疵を承しゆゑ近在の醫を盜ましめ醫に療治させるまでは聊もかはる事なし數日の滯留に手下の輩あら方快氣に趣く時賊首酒肴をもふけて醫をもてなす折節空に佛法僧の鳴聲聞ゆ醫はたと手を打奇也〳〵山海の珍美佳肴より彼「松の尾の峯靜なる曙に」とよめる佛法僧の聲こそ嬉しけれと言その時賊首足下はさすが識者なれば佛法僧の聲をしらるゝが鳥の聲聞ゆるからは此山寨は何國いかなる所と思はるゝやと問ふ醫の曰三才圖會などにも見えて此鳥は紀の高野洛の松尾東國にては日光山に住と言ひ我栖より里數と時刻とをはかればまさしく爰は黑髮山とも思ひ候ひぬといふ賊首あつぱれの名智褒美呉ん今一獻と盃をさし出す醫是を取んとする時拔打に醫の首は遙に飛んで崖の下へぞ落たりける是予が空覺

なれば人名居所等確とは覺えずされど醒々齋が著述誠に骨髓にしみおもしろく覺ゆる也今時生物知りの醫が良もすれば博識ぶりていへる所又賊送りかへさず藤戸の盛綱めきて只一討に切殺すなど人よく知りたる話を其まゝに書入れ終を轉じたる働實に感ずべし都て山東京傳が戯作の小說は此類多し近來小說稗史作者の冠たるべし

淨瑠璃歌舞妓へ移る事

扨佛法僧のはなしを種として淨瑠璃に編りしは寶曆六七年の頃三好松洛が姫小松子の日の遊三の口切なり嵯峨の里に俊寬が家來龜王丸若君德壽丸をかくまひ小辨と呼びて女の子にして女房お安には乳呑子ありはへぬきの岩といへる賊手下四五人を連來つてお安を盜みかへるにお安の親さゝへるを乳母を置けよと金の包を置小辨と共に連かへる是本文の醫者を盜みかへるの條也三の切（異本口トアリ）松尾山を轉じて男山の南洞が峠の岩窟にて主來現（あるじ）が前にお安小辨を連歸る來現手下の賊をよけて小督の局の懷胎ゆゑ產婦になれたるお安を盜ませし事を語り後お安鏡の金打より俊寬と本名を明し島物語をかたる此來現はこの賊首にてお安は醫師なり金瘡をば產婦の介抱に引直せし作意和らかにして誰か佛法僧の話を種とせしと思はん院本作者の見付所は小說（えほん）を書とはまた格別の案じかたならずや同好のかた〴〵能々味ひ玉へかし

我歌舞妓にも是を種とせしは安永六酉年奈河龜助なるもの伊賀越乘掛合羽を作せしに四幕目に般若坂の場有癩病の乞食共我身に飽（あき）冠山（異本郡山ニ作ル）の俗醫奧山左內癩病の療治に妙を得たりとて駕籠に乘せ盜みかへる此醫者はえせものにて始癩病になる藥を飮せ癩病ならぬ者に煩らはせのち又一服の解藥にて本復をさせるの方はしれど眞の癩病は治する事あたはずと云此時小屋頭の乞食出る時奧より骸骨の癩病といへる文句ありこれ則姫小松の院本を飜案して奧山左內はお安也小屋頭は岩窟の來現といへる地口なり股五郎言號の娘お園を連癩病石へ腰を掛るより癩病の仲間へ入よとて奧へ入しゆゑ骸骨の癩病のせりふに今客人もすや〳〵と寢入花とあり是來現が出の詞にて姫小松を其儘きりはめしと聞せたる作意なり後に混じて何れの狂言が先なりや跡なりや作者の趣向を失ふがゆゑ爰に出す此伊賀越は中の芝居にて二の替に

出し大當をとる唐木政右衞門に中山文七（元祖世ニ譽黒谷文七）二役中山來助（黒谷文七弟二代目新九郎也）澤井田内記佐々木丹右衞門二役中山來助（黒谷文七弟二代目新九郎也）澤井城五郎馬方の胴々大八二役中村歌七（加賀屋歌七祖中村歌右衞門）澤井股五郎奥山左内母鳴見三役淺尾爲十郎（實惡の名人奥山の事也）原來敵討の狂言を時代に取組遠責などを遣ひ世界を大きく書たるは龜助の手柄なり昧はふべし始歌舞妓にて當りしゆゑ後淨瑠璃にそのまゝ語る事とはなりぬのち天明三近松半二院本にて伊賀越道中雙六を出す是又大當せしゆゑ歌舞妓にも取立する事とはなりけり此二狂言とも歌舞妓院本兼たる名狂言也扨此佛法僧の本文を種として京傳が小說は是眞也松洛が姬小松は行也龜助が伊賀越は草也同じ作意の内に眞行草と三つにわかるは此話のみにあらず容をわけて解べし

小說稗史を眞といふ事

眞の位の小說をかくには七つの法則あり一に主客はシテワキの如く一部の主客を定めて筆を採也二に伏線後にかならず出すべき趣向を前に墨打をする事也三に襯染（しんせん）は仕込みをして後に出す是を纈染（せんせん）共言て下染の如くせよとなり四に照應とも照對共言て對句の如し重復に似たれど然らず態と對にてらし合す也五に反對照對は物おなじくて違ひ反對は其人は同じけれどする事の違ふ事也相背いて對する事也六に省筆事を人に立聞せ筆をばはぶき後話にていはす七に隱微は作者文の外に深き意ある事を云是らは唐山の湖上李笠翁などが作れる稗史にならひ國史經史歌書軍記をあさりあるは唐山の小說を通俗にして此頃の夜話に往古の年號月日を書入文花をかざり誤字書損ひ等をよくあらため梓にのぼし世に弘るもの也然し稗史小說の今の如くに讀はやらし出板の多くなりしは享和文化より此かた也その前には西鶴自笑其磧等が著せしものを八文字や本とて見はやらしたるが其後は橘南谿が出せし東西遊記より奇談怪談を書しものまれ〳〵に出しのみなるを英艸紙繁夜話兩月物語西山物語吉野物語（棧物語アリ）など戸河六藏建部陵岱上田餘齋の人人が著作せしより東都に平賀源内（福内鬼外風來山人と云）が滑稽本も廢りて山東京傳曲亭馬琴式亭三馬など我も〳〵と小說稗史を著し出板する事月に數百部凡元祿より此方の戲編を見れば連歌俳諧師あるは儒者醫者なんどの著せしものにて別に戲作者（げさく）とて業とす

る者まれ也よつて戯編には戯名を書て實名をのする事なし近來戯作者追々にふえて京傳馬琴が筆意に倣ひ一部の趣向も立ずましてや法則も辨へぬ輩あらぬ外題をつけて出板するがゆゑに看官も讀に飽て賣ぬ事とはなりぬ小說稗史の戯作にかけては往昔と今とはいはず京傳を冠として次に曲亭なり京傳が作には西鶴立圃が口調に讓りて新に案じを出さず馬琴は博識なれ共文中に癖有僞作類板を嫌ひて近來出板の小說にも名を賣らるゝ事を歎く斷りまゝ見及べり尤京傳は文化に歿し曲亭は今に存命なれば年々に書を閲月々に發明する事も多かるべし誰も生れながらの博識はなし學ぶに付てわかり習ふにつけて上達す幼き折に書しものは老て後讀で心耻かしくなる物也きのふの我に飽ものは俳諧の上手也とは森川許六(異本五老井)が詞也過たるは猶及ばずと頓着すべからず安永の頃都名所圖會を著はせし秋里籬島は博識にて五畿內を始東海道岐蘇街道の名所圖會まで世に著せしは此翁の功なり悉く引書をあらはし吾癖案を交へず實に感ずべき人なれど所々に湘夕斑竹とて下らぬ狂歌發句を書入たり變名ながら愚詠を書入るゝは拙し詩歌連俳ともにその輩あり變名なり共我句を入しは誤なり曲亭の稗史にも玄同簑笠抔とて詩歌連俳を書入しは拙し名を賣らるゝをいとはゞ魚魯のあやまちよりは先に是をつゝしむべし醒々齋には絶て此事なし天保の今に存命せば此誤りあるかもしらねど著作堂よりは一段勝れし所ありと予は思へり天保の今に至つては戯作者といへるものます〳〵尠し近來中本と唱へて出板するものは浮艶鄙猥にして八文舍にもよらず院本にもよらず笑本の文談をよむ如くにていと淺猿し小說稗史の出し始の比は近世の如くいつ幾日迄に作せよとの誂もなく我閑日のまに〳〵書綴しをやがて書肆の手に渡し梓に彫世に弘めて許よければ賣もし其頃の人氣に叶ひし物は再板せられ許よからぬものは買はやらさず讀はやらさぬのみにておのづと摺本もなくなるのみなり作意其比の情に通ずれば書林は利を得賣れぬ時は書肆が彫損摺損なればさまで作者の汚名も受ず作者のちからは一部の趣向文談に善惡はあらはるゝ物なれば草稿のゝち筆工彫刻の度に校合をさへよくすればよき物と知るべし

淨瑠璃の作を行といふ事

行の位に表したる淨瑠璃は又小說稗史とは事かはり年號人名國所等にてもさまでくどく糺さずともよく昔古流井上播磨掾山本土佐掾岡本文彌宇治加賀掾道具屋吉左衞門表具又四郎の頃は扨もそのゝちとのかかりにて文談もさら〳〵として道具立もなく木偶もなく謠曲の如く三段計につゞり所々に節をつけしのみにて外題とても俵藤太、中將姬、蟬丸などとつけ院本に殘りしも謠本の如しのち延寶貞享の比當流竹本筑後掾(義太夫ノ當流豐竹越前少掾ヨリ追々にひらけ豐竹を東竹本を西ととなへ竹本には近松門左衞門豐竹には西澤一風とて作名をあらはす事とはなりぬ尤五段つゞき三段續にて狂言を作するには其折々の太夫の音聲咽喉を辨へ木偶をつかはせよく世界をたて趣向をもうけ文談を綴り滿尾して印行し丸本とて後代に殘すにも手爾於葉假名違ひをとがめず譬へあて字あり共早く俗に聞え易きを專として節に耳をたのしめ木偶にめをよろこばせるをよしとすされば近松が國姓爺反魂香西澤が時賴記萬石通も東西の當り狂言にして其頃は名を噪うせり其後竹田出雲、三好松洛、並木宗助、近松半二等出で淨瑠璃の脚色段々巧になり一通りの作にては聞者も看官も承知せぬことに成り譬はゞ作者三人あれば場割とて建作者より誰は二の切かれは序切誰それは四の切と二の口我は大序と三段の切を書なんど一場〳〵と割付合作する樣になり行ふし付等も大落し表具などは三の切よりつかふ事ならずと法則を極めて作する事にはなりける也是より銘々文談をはげみ書籍を見たる力をあらはさんとてあるは戀女房の沓掛村に金石皆なる秋の夜のと秋風の辭をつかへば源平鄽蹋の扇やには青葉の笛の音に恨むが如く慕ふが如く愁ふが如くと赤壁の賦をきかせ薄雪の腹切に虎溪の三笑をつかへば姬小松の岩窟に漁父が辭をきかせるが如し是らはかく文章を自由につかひまはして世話物所謂お染久松お千代半兵衞の類ひ心中情死の狂言にしては其頃の人情流行の詞をうがちよく其實說をしりながら世俗にはやく聞せんが爲人名居所を引直す事譬はゞ小野の道風青柳硯に傳法轉所の文字を道風にかゝせるゆゑ文盲人は四天王寺の花表の額を見れば道風の筆なりと思ひ軍法富士見西行を見ては此春ばかり墨染に咲けと詠しは西行なりと思ふ人も多からんましてや

忠臣藏は鹽谷判官高の師直も太平記の世界と混じ近江源氏の佐々木高綱北條時政は辛崎坂本邊にて戰ひしものと思ふものもあらん此淨るりの作者も寛政の中頃までは日々新に名狂言も著せしがそのゝちは只古き當り淨瑠璃を幾度もかへす事にて新作はまれ〳〵にて邇近新外題を付しものもあれども所謂燒直しにて二番煎の茶と同じく味ひなし太夫木偶遣ひ三味線ども追々故人と成ゆくに隨ひおのづと此道の作者もなく衰へし物か

歌舞妓の作を草といふ事

草と見立たる歌舞妓狂言の作は小說稗史の作者淨瑠璃の作者とはかはり師の敎ゆる規矩もなく又弟子の習ふ準繩もあらじ往古の歌舞妓には作者たるものなく一座集りて何々の世界と定め誰は何役彼は此役と配當して詞は互ひに言合せ打囃子もその場に休座の者勤しを正德の比京師に橘良平と云外科醫有て此人芝居を好み日々に見物し都萬太夫座の役者と熟魂になる一座良平を賴みて狂言を作らしむ謝物として役者よりは衣類調度を贈り座本よりは家內の雜費を運び各師父の如く尊敬せしをいつしか謝儀を約金にて納ることになりたるゆゑ後々は作者役者朋友の如くなりぬ

異本、浪花にても狂言は一度に仕組しまゝにて役者が覺ゆればそれにて濟みしを狂言本に委しく書くことにて金子一二兩より始まる

是によつて今時の識者には（異本歌舞妓作者は）いと賤しめらるゝこともあるべしさりながら上は公卿大夫より下は乞食非人に至るまで常に其通語を記臆して用ゆる事勿論なり一體の世情にわたり遊里洞房の癡情は親しく交らずとも其佳境はしり安し高貴のいみじき人々に交はらざれば高情の場は知り難し作者さへ知らざれば來看も又知る人稀也是狂言綺語の塲にて公家は公家らしく女腹はいかにも女腹らしくし源氏物語伊勢物語あるは春曙抄をはじめ古代の物語の詞を交へ俗に通易き樣に用ひ武士は武士らしく源平時代ならば盛衰記（義經記）の詞を用ひ北條足利の世界ならば太平記の詞をかるべしましてや世話時代交へし狂言の武士には東都の方言をまじゑていはせ傾城は里詞とて新町のなます吉原のざんすなどそれぞれの方言を用ひ一日の世界を定め（異本一場の國

は何國と四季の時候を心に留め何時頃也と時刻を定め）小説にもある如く法則を極め切瑳琢磨の功成て一部の大筋をかく事也此階級をへざれば眞の歌舞妓作者とは唱へがたしかくの如く千思萬慮を累ね辛勞するにあらずんばいかでか日々幾千萬人の看官を引受尊卑上下男女老若の情に通じてあらぬ事をかなしみ又は嬉しと思はしむるの感動あるに至らんや小説は編安きとにはあらね共譬は〻往事をかたるにも細字にて書たるを數千枚が内につゞけて語る事あり歌舞妓は俳優いか程の辯者にても八行に書きて紙二枚ばかりよりは聲もつゞかず譬へ能辯にて語る共講釋の素讀を聞が如くにて看官の心にとめねば詮なし文字に書には口には善をいふ共心には惡計を巡らすなどまゝあれど歌舞妓は役者の詞にていはせるが心工みの惡計を見物によく見せて置かねば情通ぜず此餘に小説には數十年の間にかく者を歌舞妓にては一日にかき縮め一場は長くとも一晝夜よりのびたるはなしまた院本操りは文中にゆとり有て既にその夜も明方の（異本詮方泪暮六つのなど〻伸縮自由に利かせ）あるは屠所の歩の未の刻など又時ならぬ花の盛りなどは枕の文に出す事まゝ有て詞にきかせぬ事はいはんとせしがまて暫しとの遁道いくらも有てせりふの次にふしあれば木偶にふりあり歌舞妓には此自由なければ淨るりの作よりは一倍辛勞多しその上木偶は死物役者は活物なれば一口に論じがたし譬は〻小説の主客に用ひし者も操りの木偶にも役不足をいふ事なしまづ假名手本忠臣藏にても師直の役にあたり大序兜あらためより三段目殿中及傷の場までは立者の遣ふ役なれ共それより大切迄役なしにて敵うちには柴部屋にて討れさへすればよき役也手摺（人形遣也）の建もの大序と三つめをつかひ外に由良之助とか平右衛門とか本藏とかつかひ敵討の働のなき場にて外の役の差合ふ時には柴部屋より出る師直は門弟に遣はせても濟がゆゑに役不足をいふ事なし（異本又楓狩劍本地にて艾屋久作は敵役にて二代若君にもろく討れし儘にても濟むべし）歌舞妓は活物の役者をつかふ事なれば役のよき場は勤めても役あしき場は不承知なりとて作者へ對して斷る輩まゝあり是等は行義作法もしらぬ役者なり一日の狂言は勸善懲惡のすゝめなり役者は繪にかくべき者を活して働らく

が役なる事をしらず我仕勝手をいふなんど論ずるにたらず作者も常に一座の役者に親しみ人々の性質をよくしりて立役實役敵役女形道外及び小詰に至る迄各人品により行狀を辨へ役と人と相應ずる樣に作する事第一の心得也醫の病に應じ藥をあたへ僧の說法して佛道にみちびくに等しく仕打方（太夫元とも又世に銀主と云）にも讀きかせ一座の役者よく合點させて稽古にかゝらせその內道具鳴もの衣裳等の差圖をして熟してのち初日を出させること也かくの如く苦心して狂言を著はせし作者も其時々の番附にのみ名をのせ後世にては誰々の作せしとあげつらふは總に狂言見功者の人と其ころの俳優のみ也此歌舞妓作者といへる者も明和安永の比寬政の末までにて享和文化に移りて一兩輩も殘り居しが其後は一人もなく大方は狂言方とて拍子木を敲くもの鼻垂も次第送りとかにておこがましく作者と番附に名をのするのみにて役者も年々衰へ愚痴文盲なるゆゑ耳新らしき故事古歌など書入ても得覺えず辯言のろいへば詮なしいはんや月卿雲客の狂言にも容さへ公家女院に出たてばよきと心得詞は覺えず拙き卑賤の詞をつかひ作者の意に違ふ事多くたま〳〵小文才の走る役者は作者に相談もなく仕勝手にせりふづかひを直す事有てうるさし今時作者と名乘もの其身不學にして立物役者に諂らひ應せぬ高金を貪るゆゑ役者の無分別なる狂言の筋をいひ出すを聞書に書ことはかたくあれこれ取合すが故書にかける鳶の如く首尾手足とも違ひ狂言作者とあらはす者は役者の奴隷の如く皆人思へり著作道のすたれたる事嗚呼時のしからしむる所にやいと淺まし故名人の作者とひとつに混ずる事なかれ

狂言四番續といふ事

往古より歌舞妓狂言盡しを四番續と定めしは喜怒哀樂の四情にもとづくと見えたり口明は多く若殿の遊興花見茶屋場は是喜也中入謀反人國家を傾け忠義の家老切腹するは怒也次に小幕と號し次幕への仕込み道外のちやり事あるは若殿傾城姫君抔の道行を見せ引返して世話場は愛子を身替りに殺し寶物の質請に女房を廓へ賣悲しみを見せるは是哀也大切にて惡人亡び寶もとへ返つて家國治るは樂也人間鳥獸に及ぶまで四情の外に何をか慮らんや又詩作の起承轉合とも合せ見るべし大序は起二つ目は承三つ目より一變

して世話場は轉大切(おゝづめ)は合也是より元祿寶永正德享保の頃の脚色には未だ法則も定まらず昔物語のかな本をよむが如し元文寛保延享より追々ひらけ寶曆明和に至つては法則備はります〳〵巧みになりぬ右に云四情は不易にして實也人氣の好む所を計るは流行にして文花也一部の趣向一日の狂言を大筋といふは是も不易なれば實より入を要とす一場の趣向を仕組といふ詞書は流行なり花也實より入りて花を得ざれば妙作とは云べからず花實相對したる狂言は甚稀也古作の後世に殘て時々に用ひらるゝを見て知るべし流行にのみなづみて不易の實情を失ふが故に一旦は見物の心に叶ひ繁昌する樣なれ共日數纔にて永くたもつ事なしいはんや再三と用ゆべき役者も又しか也いにしへは作者役者共下手也しかれ共妙あり近來は上手にて妙なし梨園に限らず萬藝共亦しかり年々歲々氣根衰へ業に倦て淵底を探り得ざるは時のしからしむる所にや强て是非すべからず或人の曰萬の藝道古人には及びがたし今人にまさる樣に心がくべしとは實に今時の金言なりとこそ覺ゆれ世の流行は十年或は五年にて一變す戲場年々に變じ月々に移るその故いかんとなればけふの歌右衛門はきのふの鶴助(つるすけ)にあらず即今の團藏は昔の團三郎ならず其餘もしかなり能々辨ふべし

世界定外題文字の事

不易流行を考喜怒哀樂の四情を案ずる時は先筆を下すまでに世界を定むべし世界定めとは新作を著さんと思ふ時は大名題俗に一枚看板の事也に載る建役者五人とか七人とかを集め傳奇(けいげん)の脚色(しくみ)により源平とか又足利とか其頃の時代を定むる事也又世話物なれば小稻半兵衛にせうか於三茂兵衛にせうかと相談をする事にして是を世界定めとは云也此世界にも四世界あり一に王代と言は禁裡公卿都て堂上の事を綴るを云淨るりにては大友眞鳥姝春山の類ひ歌舞妓にては伊勢物語菜種御供その餘推て知るべし時代ものは是に繼ぎ二の位にて北條足利あるは大友菊池など軍記にもとづき武將歷代の名を假るなり京攝の二の替り狂言は多く此時代もの也所謂太功記の世界と定むる共御當代にかゝるは遠慮あるべし三に御家とは一國の騷動時代にあらず世話によらず中庸をもちふ千代萩鏡山等院本にては薄雪物語の類也敵討は御家に屬す四に世話

ものとは男達角力取又は心中情死の狂言いづれも農工商にかゝりしを云此世界の中にも御家には騒動と復讐と二種にわかち世話にも俠客情死の二種あれ共四品にわかち世話眞世話など唱へるも頗る佳境に入し者のいふ事なり此世界を定めし上にて表號をつくる外題は一部の惣評にて外題を見れば趣意はあらかじめ知るゝ物なれば深切に心を用ゆべし諺に流行歳場は外題より知るゝといへば假初に付べからず下語には必ず熟字を置べし下の文字熟せざれば止りがたし近來江戸作者元祖櫻田治助五十韻の假名返しによりて秘訣あるようにいへ共韻鏡反切の外に亦かな返しあるべく〳〵も非ずと知るべし又自字を造りしは中古大坂の作者並木正三三枡石燈始と登舟の二字を合せて一字とす是より專用ひ來れ共道の本意には背けり音訓をよく〳〵正し理なき假名を用ゆる事勿れ其後並木五瓶日本花赤城鹽竈此かなはよく叶へるといふべし春狂言二の替り外題の上に傾城と置事は寶永正德の頃京師より始まり今は京攝とも風儀とは成ぬ春は假名にてけいせい次には傾城秋冬には契情と法則を定めしといふは非也下の文字によるべし又傾城の文字を外題の中に用ゆるは目出度かしく傾城始國花萬葉傾城櫻咲方原傾城容氣など例なきにあらねど故名人作者は字義をよく穿鑿して聊誤りなし近來は一部の新作まれなれば外題も共に古き外題を呼ぶはよけれど其世界さへわからぬ者勝手に外題を附る事ゆゑ書組とはなれ看板に僞り有と譏るべし遉に新外題を附る時には適傾城花大矢數など無理に誣け譯もなき假名をふり不通の文字を我儘に作る事いかに賤業なればとて文筆の冥加に盡耻を後來に殘さん事淺ましき事ならずや近來曲亭馬琴が著作の南總里見八犬傳は數帙を重ね評よかりければ子は歌舞妓に潤色して春狂言にはあれど傾城は角外題に書入（角外題とは大外題の肩に書を云割外題とは大外題の脇に書をいふ）花魁荅八總と居たり其後淨瑠璃に取立しもの夏か秋か開肇たるに外題の假名を其まゝ梅魁荅八總と花の文字を梅と書替て看板に出しけり元來予が作意とは脚色異なれば外に新外題を附る共よきになまなか外題をかるのみか花と梅の文字をかへしは餘りに拙なしと獨笑うて過しが作者も心付しにや院本には花魁と改めけり浪華の顔見世狂言の外題と東都三座ともに道行所作事の外題の

附方（所謂常盤津清元富本のこと）は祝の語を置或はその一座の首領（ざがしら）又は新參俳優者の表徳など組合せるを趣向とすれば論の外なり東都作者瀬川如皐が瀬川仙女が（異本東都元祖櫻田治助が阪東彦三郎河原崎不座の時）道成寺の所作の外題に珍らしいものが振袖と付たり近來中村芝翫（當時の歌右衛門）江戸より上りし時御目見え狂言として姫山姥しやべりの場を勤し折予が附し外題に七重膝（なゝへのひざ）なりてやぎり希八重桐此類也予不學文盲なれ共博覧の識者に隨がひよく問明らめ筆を下すゆゑ甚敷誤りはあらじと思へ共猶五十歩にして百歩の譏りあるか

三都狂言の異なる事

三都劇場の狂言の異なるは東都は武國なれば人氣濶達にして滞るを嫌ひ俗に俠勇（きほひ）といふ早春の世界は往古より曾我物語を吉例とす年々三芝居とも同遍なるゆゑ趣向に盡江戸古作者壕越斉陽金井三笑のころより油屋お染實は化粧坂の少將丁兒（でつち）久松は五郎時宗などと附合して綴り享和中大坂の作者元祖並木五瓶彼地へ下りその實情を失はん事を愁ひて二番目と號け別に外題をもうけ世話狂言を作せしが例となり今に絶ず京攝に云切狂言也惣體の看板道具甚麁末にて狂言始り二幕ばかりは中通り小詰にて濟し夫より次幕に默（だんまり）とて花方役者或ひは新參の立物など寶物などを奪合事を見せ是より續て狂言を見せる事也京師は公卿堂上の高情庶民に移りて温順なるを好めるゆゑに花車風流を專と書べし浪速は商家のみにて中にも東都に似たる風は北地に有て所謂黒船忠右衛門根強四郎右衛門なんど堂島の俠客也船場は豪家軒をつらねん人氣僭上也江南は青樓（ちやや）多く陽氣を好む此三情を合して作すべし洛は勿論東都にても神社佛閣雪月花に遊ぶ景地數多あるがゆゑ見る目にともしからず浪華はさせる遊覽の雅境もなき所にや見聞識者多く作文役者の誤りを見出す人多し是を俗に穴を探すといふ格別骨の折る地なれば心を盡して作すべし都て梨園の上賓（おきやく）とするものは町家の御家御寮人嬢様若旦那等也よく〳〵其情を考ふべし詞を書にも傾城と藝子は書分るに易けれども遊女と藝子の詞は書わけ難きものなれば必うち混じぬ様書を作道の心得と知るべし

抑歌舞吹彈の伎は梵邦漢土に其例少なからず殊に吾皇朝は磐戸神樂に始り催馬樂は乙女廿五節の風曲萬世に傳れり伶倫は推古の御代聖德太子秦の川勝に命じ異邦の正樂を傳へしめ玉ふ其官荒陵山に殘りて千歲を經り後平氏繁昌の時は白拍子と號る女樂有て朗詠今樣に堪能の者尠からず室町殿の代となりては亂舞謠曲行れ今公門侯家の翫弄となれり當時の歌舞妓は世上よりして傳はれる舞曲の餘風一變して一劇苑を闢天正の頃濫觴するとなん其顚末は歌舞妓事始役者大全綱目の七書に委し操淨瑠璃の事跡は竹豐故事東西評林操年代記等に著せしかど未梨園作者道の意得規矩小傳を擧たる書を見ず故に言狂作書と題して既に肇卷に著近世歌舞妓作者の名高きを八景に准へ其小傳に及び樂屋雜談釋文傳奇の說を編此門に遊ぶ者に作業の徑路を演るものなり曩には西澤一鳳と名乘今は李叟と改めつる

狂言綺語堂主再識

目次

一作者八景の狂詠
一奈河龜助が傳
一同七五三助が傳
一太夫役者行義崩れし話
一新淨瑠璃本讀の話
一奈河篤助が傳
一同晴助が傳
一芝屋芝叟が傳
一鶴屋南北が傳
一寂光門松後萬歲
一並木の祖宗助が傳
一並木正三が傳
一並木五瓶が傳附淺草堂より文通の笑話
一作をせし役者の傳
一金澤龍玉梅玉が話

西澤文庫傳奇作書初編(言狂作書)中の巻

作者八景の狂詠

西澤綺語堂李叟著

並木晴嵐

朝嵐吹すさむ共幾もとの
　なみ木の梢おひしけるらん

並木五瓶ハ始吾八ト云浪花ノ産正三ノ門ニ入テ後東都ニ住並木舎淡草堂ト云

近松夜雨

降雨のいく夜重ねて近松の
　むかしも今も常盤なるかな

近松徳三又徳叟半二ノ門ニ入テ歌舞妓ノ作ヲナス浪花阪町ニ住大桝屋ト云

鶴屋夕照

夕日影むかふ鶴やの千代かけて
　みなみに北にてり渡るなり

鶴屋南北ハ始三代ガ間東都役者ナリ四代目ヨリ勝俵藏改名シテ作者トナル

奈河歸帆

漁舟かへる奈河の水馴棹
　さしての後もなほ流るらん

奈河一洗ハ始篤助龜助ノ門ニ入テ後洛東山眞葛原ニ隱レテ一服一泉ト呼ケリ

櫻田落雁

匂ひさへ色淺からぬ櫻田に
　雁もこゝろやなほ殘すらん

辰岡暮雪

暮る日のはては其名も辰岡に
　つもれる雪の消る時なき
（異本いく代消なく）

福森晩鐘

風さそふ森の木の間に入相の
　かねの音遠く世に響く也

西澤秋月

曇りなく世にすみ渡る西澤の
　水の面てる秋の夜の月

奈河龜助が傳

奈河龜助は中古歌舞妓作者の祖にして前にのぶる四情四番續の法則を定めしも龜助より始れり此人もと奈良の產にて放蕩より家業を捨河內の緣家に食客の內も遊里戲場に通ふの癖有て遂に浪華に來つて作者道に染たり奈河と呼は奈良と河內に身を漂泊（さすらひ）ぬとの洒落より附たると也此頃は仕打與行人は何事も作者に任す事にて一座の役者を抱へるも作者の指圖を請

櫻田治助ハ俳名左交ト云東都常盤津富元清元ノ淨瑠璃ヲ數多著ハセリ

辰岡萬作ハ始狂言方ヨリ功ヲ積浪花河南ニ住時代狂言ヲ著ハス事ヲ得

福森久助ハ又喜字助ト云俳名ヲ一雄ト呼東都ニテ京攝ノ狂言ヨクハメタリ

西澤一鳳ハ祖一風ヨリ書林ニテ淨瑠璃歌舞妓ノ作ヲ兼タリ本町本理トヨブ

狂言により一座の進退は諸事作者のまゝなりければ銀主與行人と同格にて威勢強く一座の俳優者流は作者に取入り出世をする事なれば近世の作者とは雲泥の相違なり龜助中にもよき金主有て諸事龜助次第なれば一座の尊敬も格別なる事也此人狂言數多著せし内にも競伊勢物語大願成就殿下茶屋聚伊賀越乘掛合羽加賀見山廓寫本等皆當狂言にして安永天明より今に廢らず與行の度毎に大入せずといふ事なし尤和歌俳諧にても人口に膾炙の句一句あればよきとおなじく作者道にても數十番の狂言悉く當るとは及び難き事にて外題一つ二つも殘ば至極の手柄にて龜助が如きは實に稀なるべし都て京攝の狂言には四季の時候によつて狂言にも亦規矩あり春二の替には陽氣に花やかなる事を書世界も時代を用ふる所謂大名の若殿の放蕩より謀反人幻術をつかひ或は遠責にて反逆人を亡す抔賑はしく有べき事三月狂言は永日の頃なれば時代世話を交へ御家復讐の仕組にして五月替りは前狂言に院本の時代王代もの切狂言を眞世話とて心中角力の世界とわかち永日の頃は看客に見飽せぬやう心得盆替りは極暑の頃故俠客の水試合なんどいさぎよきを專一とし九十月は陰氣に趣く時節ゆゑ傳奇の脚色をつゞまやかに御家敵討を取組顔見世は前卷にも演たる如く一年の終りなれば道外交りに種々と容をかへ入込せ所作事樣のめざましき樣書を法とする也然るに此龜助は伊賀越は復讐なれば三月又は九月に出すべきを二の替に仕組大序鞍負殺しより中入圓覺寺までを足利時代に取なし狂言を手廣く書たるは自在を得たりといふべしされど此人の作は餘りに細密過てくどき所あり乘掛合羽の傳法屋殿下茶屋の人形屋又伊勢物語の春日野の場加賀見山の菊酒屋各正本にて百餘枚づゝあり此中に略せんといふ所もなく詞にも省く所なし是ゆゑ正本にて讀時は當時の稗史に增り面白き事限なけれど後世の役者は氣衰へ下根になりしか紙數多き場は來賓より役者の飽ものか短かき場を好んで所々を略するがゆゑ自と狂言の筋通じ兼る事多し龜助後來の作者は一場を小短かく書一幕に道具をかへす事度々也かへしとは道具を廻しあるは引道具などする也道具さへ替へる時は來賓の目も改まれば役者よりも好める事也いはゞ酒宴の席にて長座せんより又亭をかへて飮直すが如し是役者未熟なる故長き場は持兼る

より起ると知るべし院本操（じやうるり）にはいか程長き場にても幕明の飾附し道具よりかはる事稀也歌舞妓も安永天明の比は一幕に道具かへしは一遍又は二遍よりなし廻り道具繰上げなど出來しは皆此藝道の衰へにて況や大道具を使ふは論ずるに足らぬ事ながら道具を一座のシテと頼み惣座中はワキ師也恥かしき事にあらずや龜助加賀見山を作せしは天明元丑とし中の芝居春狂言也前巻にもいへる世界寄をしてより脚色（しくみ）にかかり筆稿出來上り一座を寄て本讀をする迄に首領（かしら）と立物（たてもの）一兩輩には内讀とて惣座中に聞さぬ先に密に讀聞す事也その上役者の差繰をして改め一場〳〵に出る役者を寄せ樂屋三階にて披講するを本讀といふ此内讀の時尾上新七（南部屋芙雀後尾上鯉三郎）の役は多賀大將安田庄司と二役にて鳥井又助谷澤頼母の二役は嵐吉三郎元祖里環也此又助の役と多賀大將と二役を早替りにして見たきものと龜助へ所望せしゆゑ谷澤頼母安田庄司を里環に役を割替たれば元より聞込し役と違ふゆゑ此芝居を退座しければ芙雀心のまゝになり右二役を三保木儀左衛門（始富士松三十郎俳名素桐）出勤して大將又助の二役は芙雀が當り狂言とは成けり望月長玄に山村儀右衛門（俳名五斗）加賀の千代に山下金作（俳名里虹）何れも評よく舊冬より始三月中旬（なかごろ）まで打續き繁昌しける此後廿一ヶ年たち享和元酉年やはり中の芝居にて二の替に故郷錦鏡山草履打と廓寫本（さとのきがき）と類聚にして接合（つぎあはせ）北國梅と外題を附望月源藏局岩藤に片岡仁左衛門中老尾上に澤村國太郎召使お初に江戸上り松本よね三多賀大將安田庄司に尾上鯉三郎谷澤頼母鳥井又助に嵐吉三郎二代目璃寛にさせたり璃寛此又助役は中々我々が勤る役にあらずと達て辭退に及し時芙雀以前の時はか樣〳〵にて誠は先里環にて書し狂言なり我その役のして見たく先里環を落して樂屋方言に退座させるを落すといふ又助の役を奪取り幸ひにして評よかりしかど作者龜助始より里環と見こみ書たる故里環ならでは勤がたし今老衰して猶更こなせず親里環への言譯に今の璃寛へ此役をかへせば親の役と思ひ勤られよ爰はかうせよ此間はかくすべしなど敎へしまゝ璃寛此役を勤る所親里環の俤有て芙雀より遙に評よく切腹の跡にて此身の運の筑間川との長詞（せりふ）は今に殘れり都て新狂言は役者を見込で書ものなれば再三返してする時は役と役者に足不足ありていかなる當狂言にても始ての折よりは劣る物と知る

べし此後又十八年目に中の芝居にて文政元寅年二の替り望月源藏安田庄司に市川鰕十郎（始市川市藏俳名新弁）加賀の千代嵐小六（始叶眠子俳名紫朝）多賀大將烏井又助に嵐吉三郎勤めし時も大當りにて其時予に此物語をしけるゆゑ爰に出す此餘の役者も又助をすれ共二代目璃寛には及ぶべからず因に云加賀見山は草履打と茶坊主の立身せしと二種あつて本文はよく人の知る所也鏡山と云より江州多賀の名をかり望月長玄後左衞門と名乘より安田庄司友治の名をかりしは謠曲の望月を題にし多賀の大將は加賀の宰相のもぢり菊酒屋加賀の千代など名を集め世界は足利に假しは是龜助が作意の功なりけり

奈河七五三助が傳

奈河七五三助は龜助が高弟也此人天明より文化の末まで永く此道に染ながら多くは院本を譯文し物或は古狂言を添削するのみにて一部の趣向立たるもの少しそれ故戲場者流より洗濯物の七五三助と異名を附たり然れ共著せし奇傳は壔礎花大樹木下藤吉に市川團藏（今の團藏が親なり）山口九郎治郎に淺尾爲十郎（淺尾奥山）錦の長短の試合を見せ寛政四子年角の芝居にて古今の大當りを取たり續て三の替りに其後日狂言と色競續箭戰を出す江戸尾上松助（今の菊五郎が父松綠化ものゝ名人）に南巖寺の伴天連鏡に人面を寫せば馬に見ゆる木下藤吉の妻に芳澤いろは（俳名巴江菊の枝を折り鏡に照せばやはり馬の容に寫るより伴天連の謀逆をあらはす場を書たれ共二の替とは見劣りして興行日も暫にて有しと又寛政元酉年中の二の替にけせい北國曙世界は比良ヶ嶽大德寺の燒香など綴世話場にて美濃と近江寢物語の場堀尾小助に山村儀右衞門免受勝助に叶雛助（後嵐小六世に小六）玉と云幕切本名は今川四郎義國にて關帝堂へ隱幻術にて關羽の容と變じ靑龍刀を携へ花道へ躍上る此幕大に利たり（きくとは樂屋方言にて大當りをいふ）因に云叶雛助は先嵐小六（若女形のみせしものゝ悴にて始娘形より女形を勤しが所作に妙を得しうへ後殊の外肥滿なれば安永二巳の春けいせい花書合に始て小栗宗丹（總髮長袖の實惡）の役をせしがもと女形なるゆゑ生溫しとて甚不評にてありしを追々實惡色敵の役をせしかば後々には立役の逸人とはなり右に云北國曙の中入にて雛助柴田の奥方小谷の方秦の文花才に山村五登（儀右衞門のこと也）小谷の城落城にのぞみ郭公の一聲に辭世を詠自害する段あり此時雛助二役柴田勝

重の切首を卓の上に置文花才燒香する內は雛助は奈落（ぶたい）より本首を出す此頃珉獅（雛助が俳名）首領（たてもの）にて威勢尤強く家僕金剛（役者の下使の僕をいふ）を責つかふ事の甚しきを憎み奈落より珉獅の腰膝或は脇の下を搔（くすぐ）りければ來看者に頭を見（かしら）せ身體自由ならざれば悶苦しみ漸く其場を勤幕しまりければ樂屋に入て誰なればかゝる轉合（いたづら）をせしぞと詈し時僕金剛等詞を揃へて我々なりと名乘りかれ是いはゞ打擲も仕兼まじき體也その時珉獅僕一人に金壹圓（いちりやう）宛つかはし召使の其方等がかく憎む程なれば嘸樂屋內にても我を憎むらんけふの惡戲（いたづら）は我身の爲にはよき異見也とて咎もせず免しけり是より珉獅は玉じや性根が違ふ親小六增りの玉也と賞しより後改名して嵐小六となる又小七共いふ小六玉と呼しは此狂言の時よりして也扨此北國曙の三の替に七五三助が書し大振袖粧湖（けはひのみづうみ）の世界は太平碁軍傳（石田關ケ原の書寫本六十卷あり）を近江源氏に假りて北條時政に山村儀右衞門石田爲久に叶雛助宇治の方に山下金作（天王寺屋里虹といふ）序切和田義盛を始諸大名石田を憎み惡口の條に石田は先君賴朝公に諂ひ宇治の方に出頭して威勢を張る宇治の方の光を假ば螢大名也との詞あり後時政和諭（あつかひ）をして舘へかへる跡に諸大名と石田云合せの爭論にて北條を欺く計畧也との詞ありて今に北條を亡し實朝公の世にすべし石田どのと聲を揃へて云を石田おさへて謀は密也〳〵との幕也是は碁軍傳にて今もよく知つたる螢大名又石田の密なりを潤色したるにて來賓の嬉しがる物也此類誰々の作にも多し奧にも解べし此大振袖の三つ目に佐々木義秀に雛助九度山に隱れ眞田を織總領佐々木盛綱に中村京十郎弟高綱に中村十藏（雛助悴小珉兄は放埒にて勘氣を受け詫に事よせ時政方に味方させんとする弟は實朝方に仕へ軍術を農業に寄て習ふ義秀妻微妙に山下金作微妙の弟源次廣綱に坂東岩五郎（坂東壽太郎の親）懷に短刀を隱し刺客に入込折節家普請に壁の上塗の土こぼれ廣綱にかゝり着物を着替させんとする時短刀を落すなど悉く軍記に倣へり其後蝶花形名歌島臺の院本は是を種としたるもの也此狂言の時時政と佐々木遠見にて子役二人立廻り有時政の役は加賀屋福之助（後中村歌右衞門梅玉のことなり）佐々木の役は叶春之助（女形叶珉子小六のこと改名）高綱をせし中村十藏も秀次郎（小珉獅幼名）改名して子役上りの時也栴檀は嫩より芳とかゝる名人役者の中に育ぬれば後々各名を

得たる俳優になるべき筈なり當時の役者は修行もせず誰もゆるさぬ立物多くてうるさし

太夫役者行儀崩れし事

操淨瑠璃も昔は一人の作なりしが中古より三人或は五人の作者場割とて合作する事に成り太夫三絃も一座に多く成しより五段續にては役人餘り休座の者あるがゆゑ一の谷の三の切妹脊山の三四桂川の下などと見取淨瑠璃にて一座の場割出來る事とはなりぬ何なり共通し狂言にてする事稀になりしは素人が座鋪淨瑠璃と同じく此道衰へし物か往古受領せし名太夫は口中切など〳〵一場を割事なく幕明より段切まで語りしを名人とも上手とも賞たりしを中古惡聲の太夫工夫を凝し旦末淨丑と老若の聲を分け語出せしを始の內は不評にて有しが追々と人氣に叶ひ今にてはいかなる美聲妙音にても聲の替らぬ時は駄曲といやしめ微聲小音にても言語のかはるを名人上手といふ事にはなりぬ役者も昔は立役は立役計り女形はいつも女形のみをして今時招看板に實惡立役と書或ひは立役女形と書甚しきは兼るなど書を是とする事とはなりけり昔は敵役をするものは憎るゝ役なれば建敵となれば外に役を取ずいか程不座の時にても立役より女形をする事なし譬はゞ色情の狂言にても元男子艶冶郎なれば實情移らぬものゆゑ幼少より女の容にて育ちて成長後傾城にせよ娘にせよ出たては實の女より情を深くせずんば濡事師と口吾痴話の時來賓に情移らず往古水木辰之助と云女形は旦の名人にて男子なれ共月水を覺えしと云事菖蒲艸に出たり初代芳澤あやめ女形の心得を書たる書也當時立役良もすれば旦娘形を勤るは何ぞや世俗に餅は餅屋といへる如く一道ならで妙は得がたし前幕まで尻をからげ切合刻合などせし者が野良帽子を當振袖を着たりとて色繪作者方言にいろ事の事をいろ〳〵と云じ兼觀的に氣を惡くさせるなど絕てなし今時何の役にてもよく仕こなす調法役者の所謂多藝は君子の恥る所にて立役にても女形にても一つの妙さへ得ぬは商人にていはゞ幾商賣もする萬屋なるべし初代尾上菊五郎忠臣藏にてとなせをすべき女形なかりし故由良之助ととなせ二役勤しより此方仕來りとなり淨瑠璃太夫は古竹本政太夫世に鹽町といふより言語を語り分行儀作法も今の如く崩れし也と見聞識者の老人予が幼き頃話されしがさも有るべき事ながら今淨瑠璃を何に

ても一色歌舞妓も立役より外せぬ事とならば益下手也と誹るべし移り行世の流行は是非なしと云ふべし

新淨瑠璃本讀の話

享和文化の年間に豐竹麓太夫が大當りせし淨るりは蝶花形と繪本太功記八陣守護城等也此作者は長町河四郎といへる宿屋（分銅河内屋といふの主也）八七五三助と熟魂にて古淨瑠璃を能記憶してそこ爰添削して若竹笛躬中村魚眼近松柳等に筆を採せり麓太夫はいつも本讀の席へは我女房を連行聞する事例也段切まで本讀仕舞ふ時は麓太夫女房の顏を見らるゝ時女房には淨瑠璃の文談に聞入愁を催し泣顏なれば卽座に狂言納めらる女房さまで愁傷にもあらぬ時は今少し作有べしとて斷るゝと也此內儀は遖太夫に連添ふだけにや詞容もやさがたにて至極涙脆き人にて太功記尼が崎の場ならば重次郎の討死初菊が愁を聞嘸かし母子や（光秀妻操のこと）婆御前（老母皐月の悲しさ思ひやらるゝなど我子や孫に死別れたらん樣にくり言をいひ出大聲を上て泣るゝ事也麓太夫のいふ世に女程さらでもなき事に泣たり笑うたりする物はあらじ其女が泣ぬ淨瑠璃なればいか程上手に語共詮なし夫ゆゑ語る我より先へ女房に聞せて試る也と申されし名人と呼るゝ人は又一見識あるもの也さればこそ一部の趣向はともかくも太功記の尼が崎の文句に軍の門出にくれ〳〵もお諫申た其時に又蝶花形の八ッ目の文句に姉はよろこぶ妹は手おひにすがりなど三歲の嬰子までが口唱むは是みな鍋屋が功也（麓太夫家名也）往古山中平九郎が工夫をこらせし鬼女の姿に女房が見て氣を失ひしも事こそかはれ同日の論ともいふべきか何藝にても故人には一の妙あり

奈河篤助が傳

奈河篤助（後奈河一泉とも云）又東都にて一洗堂歸阪して奈河龜助と呼び又金龜堂とも呼べりもと泉州一向宗派の僧なりしが還俗して浪華に來て七五三助が弟子と成り狂言方より取上り老後洛東山眞葛原に茶店を開き一服一泉といふ天保十三寅年二月三日行年七十九にて歿しぬ法號釋達應とあり此人著せし狂言は復讐高音（たかね）皷（たいこ）曲亭馬琴作三けいせい薺佳節（なづなのせつく）大切鴛鴦の景事涙花歌右衛門（いろは、京三五郎友吉、江戸坂彦大吉）けいせい品評林（山東京傳の作稻妻表紙）東都にて臺頭綠色幕（三勝半七の母岩井半四郎半七と治部右衛門中村歌右衛門）早替り狂言けいせい繁夜語（しげくやはなし）等也此人一日の趣向放膽にして狂言を

手廣に書首尾調はぬ事多し初め七五三助より十九助と名をもらひ後篤助と文字を書替たり頭の髮眞赤なる故仇名を猩々の篤助といふ一洗といふ名は故中村歌右衛門加賀屋歌七といふ加州金澤の浪人梅玉が實父俳名芝翫江戸表へ行同七午年篤助を浪華より呼び一洗の俳名を讓れり同十酉年芝翫とおなじく浪華に歸り一兩年立て一洗の作意當時の人氣にかなはざりけるにや評よからず依て七五三助が師龜助の名を繼ぎ二代目龜助と成けり是より芝翫と絶交して一洗の名をかへし京友（りうとも）の抱作者京友は濱芝居の仕打若太夫又は大西芝居等也となり名を金龜堂一泉と更め濱芝居の作者と成て果けり此人本讀の名人にて披講の間にて一座中の顏色を詠て正本を空讀してさも面白くよき役のように讀がゆゑに俳優者手を打て納る狂言納る時は一座手を打祝ふ後書拔をとればさまでよき役にもあらぬゆゑ又一洗に欺されしと詰詢（つぶやく）もをかし是を樂屋の方言に讀生ると云面白き狂言にても愚字（じ）〳〵と讀時は聞人退屈して眠出る是を讀殺すといひて甚忌嫌ふ事也奈河の祖龜助も甚能辯者にて本讀の名人也前の條に叙る如く龜助威勢を振ひしゆゑ役者一兩輩拒て休座せし事あり是を樂屋詞に浪人といふ也龜助は是に屈せず座敷〳〵へ鳴物囃子（ざうろ）を連れ行き戲場狂言正本講釋とて見臺にかゝり院本の素語をする如くせしとぞ奈河一泉も龜助の跡を追ひ妙を得たるが芝翫と絶交の後京師に於て芝居狂言の正本講釋を座敷〳〵へ請招（せうだい）せられて披講せし事あり此人作意編と號して著作道の一二を書し草稿を先年予に見せし事有此中に或人一泉に云て曰何ぞ新しく面白き趣向ありや一泉無しと答ふ難じて曰作者にして趣向無しとは如何一泉答ていふ狂言は役者にあり譬は〻千金を求るもの千兩の力あり百兩を與ふるものは百金の術あり種々と並べ此一座にて趣向は如何と問ば一晝夜勘考せば王代御家世話と各二番づゝ都合八組の趣向を立談話すべし又曰年々歲々狂言ならざるはなし（異本書盡して新奇の趣向あるまじと一泉曰天地の間は森羅万象一として狂言ならざるなし）大千世界一戲場量うすく才微にして書得ざるは己が罪也國土あらん限りは狂言もまた盡ること有べからずといへば彼人諾して去ると有實に此辭の通り生肴四五種も持來つて料理人に見せなば庖丁にかけいかなる會席料理にても出來るべし魚は鯛か鱧か見

合に遣ふべしなど有ては料理獻立定らぬと同じく狂言の料理には生魚精物の役者と取交是々を吸物是を取肴と俎の机にかゝり加減鹽梅のある事なれば輕卒に庖丁の筆はつかひ難しと予も毎度話して笑ひぬ

奈河晴助が傳

奈河晴助後豐晴助は元京師の產にて宮島屋嘉兵衞と呼で素人俄狂言の作を好み此門に入て一泉の門人となり京道場因幡藥師芝居の狂言を書き居しを予が父浪華へ呼下嵐吉三郎二代目璃寛の狂言のみを書り狂言の筋さら〳〵として能解れど世界狹くて狂言の筋狹端手になくいつも九月狂言の如し然共嵐吉三郎璃寛嵐小六淺尾工左衞門金田屋鬼丸など何れも老練なるがゆゑ自然と移りよく狂言を仕生ること多ければ狂言今に殘れり女夫池駒か池敵討義戀柵是は寫本にては雲水錄繪本にては若葉榮とて一種あるを脚色しもの也出村進平玉屋眞平越前三國夫婦墳（是も寫那智山御利生敵討浦朝霧（異本これは尾張傳內を小割傳內とし明石を網干とし世に說敎チヨンガレにかたる女盜賊と巡禮殺しを寄せたるものにて大當りを取る）遠江潟戀賊は日本駄右衞門の狂言なり此頃遠州濱松侯に雜說ありしを取組月本圓秋に淺尾勇次郎後に改名して寶川額十郎俳名紫朝後湖鹿日本駄右衞門に嵐吉三郎中入にて敵役の諸士圓秋に向ひ惡口の條に密夫府君井の內の蛙侍向後は井の內蛙の守と名をかへさつしやれとあるは前に云七五三助が石田を螢大名といふに同じく作者が腹稿にもあらず一時の筆拍子より出るものなり此外に又けいせい筑紫獄一名を朝顏とよび晴助の名にしあれどこは故人芝屋芝叟が長話にて稗史にあるを近松德叟が作れり娘深雪後盲人となりぁさがほといふを勤る女形なきゆゑ遺稿なりしを澤村田之助俳名曙山宗十郎悴江戶よりかへりし當座にさせ當りを取しなり中山由男始一德大叶珉子右にいふ小六又小鹿とも等は琴三絃をひかず田之助は三曲ともによく彈がゆゑなり晴助終始多病の上二代目璃寛嵐橘三郎と改名す俳名はじめ李冠ともいふは文政四巳年九月廿六日に死しければ（異本奈河の苗字を改めて豐晴助と更へ）晴助も中村歌右衞門作名金澤龍玉といふに助作せしがけいせい染分手綱三幕目頓々の場は晴助なり是は江戶市山七藏といへる役者が話にてある豪家の娘色男との忍路に裏の切戶口にて足駄をとん〳〵と鳴すを合圖に切戶を明忍び込す約束あり折節

其夜雪降けるゆゑ近邊の者軒傳ひに來て足駄に雪の挟りければ露路口にてとん〳〵と敲きけり内には合圖と心得其ものゝ手を取叫きなどして娘は寢所へ連行しと云間違の話なり都て狂言の種はか樣なる思ひかけぬ事を佳とす市山が話又外にあり此奥に出すべし爰に笑談ありさきにいふ篤助の一泉は七五三助が弟子なれ共後には龜助が門人なりといふ晴助は一泉が弟子なれど七五三助が門人なりと云しは各其作意に倣ふて言ふもの成べし肇卷に演る也有翁の確言思ひ出て予は笑ひぬ七五三助の門人に奈河十八助（是は文化中濱芝居作者也）奈河九二一助（是は歌舞妓狂言方）と云有り其餘奈河の苗字を名乘るもの數多あれど擧るに足らず

芝屋芝叟が傳

芝屋勝助は芝叟とも又司馬叟とも書く享和文化中淨るり歌舞妓の門に遊びし畸人なり元肥前長崎の産にて母は圓山の遊女にて來舶清人の胤なりとぞ僧にあらず醫にもあらず浪華に來つて淨瑠璃を四五番著せり箱根靈驗覺仇討、新吉原瀨川仇討、太閤艷書合等なり常に長話とて小說稗史を綴自素人好人を寄せ一夜讀切講ずる事をし此連中を組其社中に話の種をいふ人あれば夫を稗史に綴り重ねての席に講じ一夜の讀切とはする事なり長話數種あり（今繪本にあり）舜（熊澤が事跡）油唐の小說賣油郎（今油商の狂言）首（島の内の名妓首のぶがことを云）櫛（三光の櫛吳服屋十兵衛）狗（佐野の經世が事跡源）此餘數多あり皆一字題にて予も此人の長話の内に瘤（婚禮の間違）の一話耳底に殘り覺え居しを近頃角の芝居にてけいせい濱眞砂（中村富十郎の女五右衛門狂言）第三段目四段目に用ひ膳所の鮒屋より三井寺にて見合して次幕滋賀の里へ聟入の脚色に浦辻十内に淺尾工左衛門（二代目始大谷友治）娘お瀧に中村富十郎（始松江又三光）乳母のお松に嵐璃光（始中村重次郎又粂太郎共云）聟平野屋平平に中村友三（先友三悴始も）三九（にせむこ）も幸と云贋聟鮒屋源五郎に片岡我童（片岡仁左衛門之養子なり）にて古今の大當をとりし事あり是らは役者によくはまり看客の意にもかなふがゆゑに當りも取れ共瘤の話の筋よければ也この芝叟にをかしき說あり或夕暮予が方へ芝叟來つて靑銅百文借くれよと乞ふいと易き事也とて出せしを袂に入れ湖上の雜談をせられき愚父存命の頃にて予はまだ幼少なり傍にて話の面白さに聞居しが愚父が曰鳥目は何を買玉ふにやと芝叟が曰此程本町の曲によき夜發を見たれば其魁闈を買はんと思へど懷中空しければ拜借したりと云つゝ空を詠時刻

もてうど夜鷹の出句又重ねてと歸られしが誠に飽りなき畸人なりと愚父も跡にて感じられし事あり予も幼心に覺え居て餘りをかしければ筆の序に記置ものなり

鶴屋南北が傳

鶴屋南北は東都近來世話事作りの作者(前にも云二番目なり)にして此名始三代が間は半道(道外交りを云ちやりやく也)の役者なりしが(異本三代の娘に聟を取る)四代目を勝俵藏と呼び狂言道に入て後滑稽道化場を能書後舅の名を繼ぎ鶴屋南北とて建作者とはなりけり此人肚裏に一字の文學なけれど狂言に一流あつて入組たる出し物なれど筋からみ合て新しくこれを氣世話と稱へて其頃の人氣に叶ふ其上松本幸四郎(二代目の高麗や)坂東三津五郎(大和屋秀佳今は秀調が父)岩井半四郎(始岩井粂三郎の杜若が事)此三人の役者の呼吸をよく知り二番目狂言を著せし事數多中にもお染久松色讀販(うきなのよみうり)(半四郎七役なり)東海道四ツ谷怪談(今の菊五郎お岩の狂言)古今の當りを取れり隅田川花御所染(はなのごしよぞめ)(半四郎女清玄)は一番の佳作にて浪花狂言にも相似たる脚色なり其餘は文章猥褻にして所謂江戸狂言とて一部の趣向立たるもの稀なれ共近世の痴情にやかなひけん南北風とて一時作名を高くせり文政十二丑年霜月廿七日行年七十五にて歿せりこの人常に棺桶を狂言につかふ事を好み棺を用ひたる狂言を見れば作者は南北也と江戸の來賓は云事なり辭世はかねて正本仕立に拵へ摺物として野送り(江戸にては吊ひと云)の節是を配れり當る寅の孟春とせしは大方春まで生きるであらうとのつもりなり

寂光門松後萬歳

菩提所は本所押上春慶寺と外題

異本、元鶴屋南北は歌舞妓役者勤むるは三代深川雲光院に印を殘す下拙其名跡を繼ぎて四代作者を業とす文盲にして愚作を著すこと五十餘歳と正本の如く書けり

本堂正面三寶祖師大菩薩文珠普賢佛前には常燈香花を備へ旛(はた)天蓋を飾り能所に棺をすへ置施主の輩並よく並び半鐘の知らせに付住僧所化がた花やかに出立葬の鳴物に成り讀經始まる實にも妙なる法華經の功力によつて娑婆の苦患をまぬがれすみやかに往生極樂

ト南北思入には自由になるなら野邊送り被下置候各樣へ御目に懸り御禮申上度候へども黄泉(めいど)の

客と相成升れば心に任せずよつて亡者が心底一
冊につゞり御出の御方様へ御覧に入奉り升る
一南北畧儀ながらせまうはムり升れど棺の内より頭をうなだれ手足を縮め御禮申上奉り升る先は私存生の間永々御贔屓になし下されましたる段飛去りましたる心魂にてつしいか計か有難い冷あせに存奉り升る扨私事もとくより老衰に及び升れば皆々様の御機嫌をも損はぬ内早う冥途へ赴けと是まで度々佛菩薩の靈夢を蒙り升れど流石は凡夫の淺猿しさに達て辭退仕升れど定業はもだしがたく是非なく彼地へ赴き升れば誠に是が此世のお名殘いまはの際の死おくれ萬歳太夫才若兼まして亡者の私舞納升る間いく萬々歳御長久の各様御宗體の御回向の程庫裏からすみ迄偏に奉希上升
ト是を聞て施主の人々扨は佛に魔がさしたか但しはよみじがへりしかと顔見合せて思入此時住僧棺のそばに立より合掌して
一住僧得入無上道速成就佛身南無妙法蓮華經
ト松明をもつてポン〳〵とうてば棺砕けて内より南北額にごましほをあて經帷子にて桶ぞこをポン〳〵とうち鳴らし
一南「徳若に御りんきうとは御家も戸ざしてましんますィヤ「葬禮ありける新佛の年寄親仁の火葬にはィヤ「しらんがあたまへごましほをハリヤノィヤ「末期の水を口に含んで樒の花をば手に持てィヤ「あら玉のやうなる涙をこぼしてィヤ「御客殿の御位牌堂に戒名並べて見てあればィヤ「常香盤の煙の中に白銀の劒の山をつかせけるィヤ「四十九日の餅をば喰んと烏が大ぶん舞遊ぶィヤ「住持と所化たちつらりやつんとおならびなされて引導お經始りけるは誠に悲しう葬ひけるィヤ「京の三十三間堂佛の數が三万三千三百三十三體あると申が誠にさやうでムるかのう「是なるお寺のゆかん場などは竹田の番匠飛彈ンの内匠が立たる所のゆかんばにて一本の卒塔婆が一佛一體誠に因果の守り神二本のそとばが人面獸心三本のそうとばはおんば三途の川原に譬へンたり四本のそとばで死かね申せば五本のそとばでごほりや〳〵と痰が手傳ひ六本のそとばが六字の名號七本のそとばが七字の題目八本のそとばが八苦のくるしみ九本のそとばが

苦痛のお仕舞十本のそとばでじいいがとふ〳〵ごねられけるは誠にめでたうなられんける「ウンといふてたえられける是からそろ〳〵萬歳〳〵ヤレ萬歳「さつても是からみんどもらが「才藏なんどもほろりやほろりほつと泣つ笑ひつおくやみ申せばのうヤレのう「旦那寺へ當年のゑほから新佛がまゐる「さらりやさつとまゐる「ホホヤレまゐる「とんしの佛がまゐる「とんしと申せばわれらもとんしだ「なんで又とんしだ「ぽつくりごねたとんしだ「とんし〳〵〳〵エヽホホヤレとんし「穴ほりの三助なんどはかなてこやつるツぱしをおんがらかいてふつくりした餅のようなつゆ澤山な所をばかつぽじつてまゐらう「アアまゐらう「かよう申みんどもなんどはむつく起に雜煮なんどをその椀へ五六ばいもかつ〳〵らつちやア餅がのどへつまつてギックリ〳〵〳〵ぎくついてやアとんし〳〵〳〵「とんしとん病よい〳〵病で未來成佛なさしめ玉へ「百千萬の御回向を皆樣願ひ上升

ト舞納る此時家主羽織袴にて施主大勢を引連

一家主「遠方の所御苦勞樣にムり升御銘々樣へ上り升る筈の所是にてお禮申上升萬歳も相濟升てムり升れば御勝手次第に御かへり被下升せ

ト葬禮打だし

文政十二己丑歳霜月廿七日行年七十五先祖代々叶

俗名鶴屋南北

右は小杉原五枚の綴物とし存生中拵置しと也餘り洒落たる物故爰に出す南北が悴に幼名阪東鯛藏（阪東彦三郎薪水の弟子）後に阪東鶴十郎役者を止め直江屋十兵衞とて作名は出さね共南北の狂言を能呑込て遺稿を綴り抔せしが續て故人と成けり是も東都の名物男なりけらし異本、此悴孫太郎は幼名丑左衞門とて役者なりしが祖父の名を繼ぎ南北とはなりけり祖父南北門人に槌井兵七（後に增山金八と改む）勝周藏（後勝井源八と云ふ）花笠魯助（文京と云ふ）高麗金助等あり南北の話殘るは後帙に出す

並木の祖宗助が傳

並木宗助並木丈助並木永助とて三人とも淨瑠璃東もの丶作者なり（所謂豐竹）此後歌舞妓作者並木正三より並木五瓶へ傳はれり其祖宗助は享保十二年安田蛙文と共に著せし院本數多中にも清和源氏十五段（大切山伏せつたい攝

津國長柄人柱、和田合戰女舞鶴、釜淵双級巴、寛延年間に死し遺稿名殘の作は一谷嫩軍記也並木丈すけが作は那須與市西海硯、苅萱桑門筑紫轢、容競出入湊、東鑑御狩卷、攝州渡邊橋供養、八重霞浪花濱荻等なり何れも不易の狂言ながら此八重霞は（異本今に專ら流行せし中にも此濱荻は）寛延二巳年三月十八日天滿砂原の兄殺しかしくの引廻しと長ほり問屋橋材もく屋濱にて大工と南新やしきの女郎が情死と神崎の渉し場の喧嘩と此三ッ同日の事なりしをすぐに作して廿日に外題を出し廿六日に初日を出せし所古今の大當をとり同年七月末迄打通せしも此三ッの咄は別々にて由緣もなきをひとつ狂言に著せしは並木丈助が手柄と云べし因に云かしくが引廻しの時永々の牢舍にて色は透通る計白きうへ髮の艷よくうるはしく誠に胡國に嫁す王照君の容もかくやと惜まぬ者はなかりしとぞ此頃は科人落着の日はひとつの願ひは御聞屆ある事にて何にまれ好べしとありし時油揚を三枚計望しゆゑ食する事と心得求あたへられしをかしく戴取透上髮の上へかの揚豆腐の油を絞り附しゆゑ色光澤よく今死する身にいらぬ事乍ら女の身だしなみなりしとぞ云しを皆人聞て感せしとぞ天滿神明前にかしく寺とて辭世の印せし石碑あり又南新屋敷の女郎お園といへるは今云素湯具の如く價の安き賣女也大工の穴彫なんど馴染なればさもあるべし故に是も流の島の內花珍らしきとの文句あり福清の女房於梶が異見の詞にも病氣本復したれば郡內縞に紅の一陽裏を着せて開帳參りに連行うなど尤價の安き賣女とはいへ其頃の質素なる事思ひやるべし此淨瑠璃に限らず都て此頃は心中情死のある時は一夜附とて日數十日も立ば操淨るりに取立し上（異本板元より賣出すと也）書林の店にて番頭手代丁稚を始板摺工表紙屋の職人まで手傳ひて本渡とて入口に丸太圍ひにて木戶を拵へ何百冊何十冊と印せし切手を前に渡し置しを持來ればかの木戶口より一人づゝ入取渡しにする事也今時の如く畫本の赤本のと諸處より賣出す事なければ買流行見はやらす事おびたゞしく尤價も安ければ院本を好めるものもついに芝居など見ぬ者迄も一冊は買うて見し物と聞り今書林に新本を拵らへ一部の手本の製出來たる折は杉原紙二つ折にして水引にて綴價何程と書部數澤山に求呉よと仲間

をあるく是を入銀帳と云又入銀にあるくともいふ此譯解せずこは右丸本賣出しの時先に手本一冊をもて仲間へ披露の時此方へは何十部求むるとて其代銀を先へ板元へ渡す板元よりは切手を置かへり來る幾日本渡也とてかへる是ゆゑこの帳を入銀帳とも入銀にあるく共云し也今は入銀は扱置延銀にても餘計には賣れぬ事とはなりぬいかにとならば愚作の書物に價高く諸處より出板する本の多ければ也其頃予が家に出板せし入銀帳を近頃見出し發明せしゆゑ因にしるし置きぬ並木永助が著せしは相馬太郎学文談、天智天皇苅穗庵、岸姫松轡鑑等豐竹千落豐竹應律等と同作名を出せり是は寶暦年間の事也此東ものとは前にいふ豐竹座の通號也西物所謂竹本にも並木千柳是はもと田中千柳とて享保年間は西澤に隨がひ東ものゝ作者なりしが元文寛保には竹田出雲掾弟小出雲と共に竹本座の作者となり並木と改めけり

異本、竹田小出雲が作も又少なからず時代世話新薄雪物語、軍法富士見西行、日高川入相花王、夏祭難波鑑等なり三好松洛、並木千柳、長谷川千四等は千前軒が門子なり

扨丈助永助は淫瑠璃のみにもあらず歌舞妓の狂言も書並木翁助並木十助並木利助等の門人あり

並木正三が傳

並木正三は道頓堀宗右衞門町に住高砂屋平左衞門といへる菓子屋にて年古く住町人也若き比より戯場を好み並木宗助に入門して歌舞妓狂言を數多著せり霧太郎天狗酒醼（さかもり）けいせい天羽衣（きのにのやのはのものかりのじんじ）桑名屋德藏入船話三千世界商往來（やりくりわうらい）日本第一和布苅神事三拾石艘（よふねの）始（はじまり）等なり和布苅神事を名殘の作として安永二巳の年歿しぬ墳墓は法善寺中に南無三寶正三が墓と碑に彫刻せり作者道に譯文（はめもの）とて古作の狂言を遣ふ事あり和歌は詞の古きを用ひて心を新しくせよと定家卿も教へ玉へりと聞り狂言は此うらうへにて心の古きを詞あたらしくするをはめ物といふ並木正三が卅石の神道源八關口平太は淨るりの双蝶々のぬれ髪と放駒に上下を着せたる也と語りしと也筆力なくては出來ざる活用實に奇才といふべし近來のはめ物は趣向仕組詞付其儘にて役者の名付ばかりを改たるは切繼敷寫しともいはんか恥べき事の甚しきといふべし正三生涯に當狂言も多けれど世に名高きは宿無團七時雨

傘一名岩井風呂の狂言にて團七茂兵衛に異見の間澤村國太郎此頃八嵐三五郎是もようやく二枚目やつし兩人狂言の相談に來るゆゑ七十餘年先の故人乍ら拘攣好の女童にまで名を知らるゝ事也是は明和五子年八月廿二日道頓堀太左衛門橋北詰（異本岩井風呂利助抱女郎富と食客佐助といふ者色情より事起り主利助を殺せしを此實說委しく予が著述讀佛乘にあり之を略す）の床に茂兵衛といへる毛剃女郎富を殺せしを翌日若太夫の芝居にて急作の一夜附にて敵役者中山卯八といふものその茂兵衛（異本佐助に作る）に面體格好のよく似たれば則卯八に茂兵衛をさせ（異本元堺の者ゆゑ夏祭の團七九郎兵衛の名を假り）大當を取し也尤岩井風呂の狂言は比翼鳥部山小菊半兵衛永樂や孫太郎の古き狂言の名前或は阿彌陀池の開帳場を堺の魚市場に直し抔して前に云譯物也是等をはめものの中にても活取と唱へ濱芝居の作者の仕事にて並木正三の作にあらず夫ゆゑ始て此狂言を出せし時には高砂屋平左衛門と正本にも書道具の餝付も菓子屋暖簾などかけあり宗右衛門町の年寄を勤作者にもあり太左衛門橋近所のとなれば幸ひにしてつかひしものなれど正三は甚迷惑がられし由所の老人に聞り明和七寅六月中の芝居にても此狂言を出し高砂屋平左衛門を並木正三と作名を直せしは正三歿後寛政二戌年五月角の芝居にて中山來助二代目也始中山猪八後二代目中山文七髷附屋と云勤めし時なり以前は近邊にてありし事にても直に一夜附とて構はず狂言にせし事也後々は芝居にしらるゝを名聞に心中情死などする族あるゆゑ風義惡敷なり行とて御差とめなされしと也二代目並木正三は寛政五六年頃中の芝居前茶屋の主正三の名をつぎ享和文化の始迄に並木五瓶近松德三辰岡萬作らと共に此道に遊しかども一部の趣向立たる物を見ず唯古き狂言知りにてこれを正三隱居と呼びなしけり並木十輔も明和中に著せし狂言はけいせい陸玉川、天竺德兵衛聞書往來、敵討巖流島宮本武者之助佐々木巖流等也安永に至つては並木五瓶が助作せられけり

並木吾瓶が傳附淺草堂より文通の笑話

並木五瓶は天明寬政中の作者にて始並木吾八といふ狂言著作數百番かぞへ擧るに盡ざれ共名高きをのみ爰に出す鍋祀貞婦競、日本花赤城鹽竈、金門五山桐、掉歌木津川八景、袖簿播州巡、歸命曲輪敦、けいせい黃金鯱、けいせい忍術池、けいせい倭莊子、入間詞、

大名賢儀、天満宮榮種御供、けいせい飛馬始、けいせい路島臺、けいせい誰伏水、平井權八吉原街、島巡戯聞書、此狂言の三段目迄は琉球の狂言にて（異本、島津琉球攻を潤色）させる面白みもなかりしが四ッ目より今三都にて専出る五大力戀縅これ也古今珍らしき大當りを取り寛政六寅年より江戸表へ趣きかの地にても春狂言に二番目を仕始しは此人の功にして上巻に委し寛政十一未年に浪華へ歸り澤村宗十郎同道にて傀儡傴淺妻船、源平柱礎暦、隅田春妓女容性を著し嵐助小紫子と云澤村宗十郎同道して享和酉年に東都へ趣きかの地にても五大力戀縅涙花にては菊野いろは源五兵衛源五兵衛宗十郎なり金門五山桐五右衛門小紫子久吉宗十郎是等を始都て江戸狂言を京攝風に直し又東都にて仕組し狂言の中にても隅田春宗十郎の梅の出兵衛などは浪華にても五瓶の作りなとて來賓のよろこぶこと限なし東都にては大門通高砂町に居を構へ淺草堂と號表を雷神門の如くに立風樂雷除香を商ひ門人に風治並木陸六雷次高柳宗治と呼びしは異本、江戸座の俳諧を好み其比ひ附合の句に「兩國の二人かむろは柳ばし」といふ句に名を高くしどこの俳席へも出たるが至つて女好にて其頃藏前に青我といへる行燈掛けたる水茶屋に廿四五の女あり毎日觀音へ參詣の道此女を見染め此店に腰をかけ朝より晩方まで半日づゝ遊ぶ狂言方柳川忠藏俳名賀之を知つて五瓶に云ふ毎日〳〵青我の店へござつて半日づゝをられてはさつても迷惑女は承知してお手に入りしかと尋ぬれば五瓶の曰まだ半日では手に入らぬ一日ついてゐねば色にはなられまいといひし跡にて此女は月圓ひにて三分出せば一月圍はるゝといふ其女に高料の茶代を費すなど高名の人どこにか滑稽あり

淺草並木所の名なり雷神門による戯號なるべし文化五辰年二月二日東都にて歿せり

異本、元日三節の摺物に上代の寶船を寫させ辱くも百敷の御壽の畫を略寫奉りて歳端奈加幾代のためし始ぞ今日の春春興七種の音のよきかな皆目さめ歳暮いさぎよき浪乘船や年の灘右辰年並木舍五瓶これを配り其二月二日京都にて歿せり年六十二辭世梅は咲我は散行如月や日頃風交の銘々より追善の摺物出る其内兩三句を爰に出す並木五瓶ことし百敷の御賀の寶船を摹し是に三節の句をつかねて年禮

に來る此方へと申せどはやいぬめりと聞て奴僕を走らせけれど呼得ず西の方さして行けるが姿も見えぬよし申す西方へ行て姿を見失ふとはいぶかしき事よと獨つぶやきけるが十日を過ずして二月二日身まかりしと聞てもて來る三節を今は紀念と取出し遺文感情を動かし侍る「さればこそ彼岸に至る寶船」晉子堂芳川、淺草觀音の境内に碑の殘りたるに「碑に朽ぬ名悲し花の陰」梅路、「梅の花是も五の字の紀念かな」丞車「並木にも殘る匂ひや夜の梅」角馬、彩雲散じやすく美器のもろきためしおしめどもすべなし「名物の並木も海苔の脆さかな」四方歌垣眞顏、花飛蝶驚てなんどはいとかしこき人の見所ぞかしいつまで草のいつまでもと五瓶の作せられし五大力もかたみとこそはなりにけれ「散る花にをしき筆とめ候かしく」俳諧堂葛呂中略釋尊の方便も並木が胸の作に及ばず「嗚呼五瓶其如月の涅槃像」松前、「春の霜並木を鶴の林かな」如皐、並木の高き恩は我が師の如く思ひ我を又丁稚の如く思はれ常に幸三々々とのみ「呼人のなくて淋しや春の雨」讓屋、作者の心持は色々敎示せられしが今朝夕に思出られて「今迄の世話狂言や土の筆」金二、いかなるすぐせのえにしにや此東に下り廿とせにたらず住居つるに此はるの始つ比より心地常ならず惱みしとて打ふさがれしが

異本、次第〳〵におもりはべればくすしも術の盡きたるにや餘の人に見せよなんどいへる悲しさに神にいのり佛に申せども其甲斐も見えず如月云々如月二日の夕と申に稱名の聲と共に言きれはべりぬいかなれば〳〵難波を去て東なる梅の盛りに散行との一句を殘されしを長き別の紀念と思へば今は泪の種とぞなりける「をやみなく降るや木のめも春の雨」五瓶妻美與、終焉の枕にありて稱名を勸め侍るに正念に念佛して往生疑ふべくもあらず「今迄の狂言綺語や法の花」獨歩庵、同七午年春三回忌の摺物に」

異本、菜の花の畵を薪水書坂東彦三郎後樂善といふて此如月二日は並木五瓶の三回忌なれば志の一句を示しなは諸君のお手向を希ふのみ

「造り物三年の間梅並木」金二「追善やよつて世話場の山笑ふ」讓屋、亡父より年比のよしみなれば「本讀か經よみ鳥を聞泪」訥子此摺物の繪は薪水也坂東彦三郎讓屋の松井幸三は始名薪幸後に作者となる

異本、右譲屋の松井幸三は古作者金井三笑の家に松井由輔といふあり其苗字を名乗て五瓶に随ふ元僧落にして佛事に委し五瓶歿後暫く建作者となれり此門人二代目幸三（初名新幸）大酒を好み吉原に住て牽頭を兼師の名を穢せり

金二は篠田金治後に二代目並木五瓶となる

異本、金二は篠田金治後に並木五瓶となる此人本所割下水の御旗本の次男にして狂言方とはなりぬ性質下戸にして男色を好み一畸人なり文化八未年五月堺町にて花菖蒲佐野八橋といふ狂言にて三浦荒二郎佐野の兵衛政經傳逸坊三役中村歌右衛門（後年玉助）秋田城之助白砂大助に坂東彦三郎源左衛門妾玉笹新造船橋二役澤村田之助船橋勇助佐野治郎左衛門に尾上松助（今の菊五郎なり）佐野源左衛門紀國や文藏二階信濃之助三役澤村源之助（後宗十郎となり田之助の兄なり）萬字屋八橋勇助女房お袖に瀬川路考（仙女）作者は奈河篤助（後一洗）松井幸三（譲屋）大切落合秋田屋敷の場を篠田金治（後三代目並木五瓶）書きけるが讀どもく納らず三度目の本讀に誰ひとりも手を打ざりければ金治如何と案じ皆皆の顔を詠めし時思はずプッと放屁しにけり皆々笑を堪へんとする程猶をかしく金治も赤面しける折から路考曰此場は難作場にて是より仕方もあるまじ何れも今の放屁にめんじて打升うかと發言しけるゆゑ皆々笑ひながら手を打納めたり金治は五瓶の弟子故放屁で狂言を納めし故四瓶であらうと興じけり後二代目並木となり建作者とはなりぬ此弟子に篠田宗六今三代目並木五瓶となりけり

訥子は澤村宗十郎なり江戸淺草金龍山の奥山に（八丸堂の前に初代）五瓶の狂言塚あり浪花四天王寺西門前納骨堂の前（傍に同じく五瓶の）墓碑を營て予が父を馴染の俳優者誰彼と施主の姓名を彫刻せり浪花に並木三四助（吾助坂町茶や伯父）並木長藏（並木清井筒峯）並木吾助（幼名並木清造後芝落と改名）並木喜多助等皆祖五瓶が門人なり並木五瓶戯財錄とて劇場作者の祕事を門葉に教んが爲書し自筆の一小冊予祕藏したりしを先年槌田萬造といへる狂言方（異本江戸狂言方槌田萬造なり）貸せしが其者相果行衛しれず本意なき事してけりと悔めど詮なし其中に大名題に乘る俳優者は味方の大將にて作者は座中の大軍師なりよく指揮して座中の軍兵をつかひ或は魚鱗鶴翼に備へを立諸萬人の觀的（りんてき）は敵方なれば是を日々に降參させず

んば有べからずとの敎へおもしろき見立ならずや此人に付ては笑話また種々あり一二を爰に記す或人五瓶に難じて曰奈河龜助が表號は字義にかなへり曲輪敎の外題に足下は歸命と書て穴賢とはいかゞと五瓶笑つて曰狂言綺語とは是をいへり戲場の表號は學者に見せんとにはあらず作者に學文の心あつて金門五山桐と呼ばるべきか我書く所は芝居の外題とは云也と答ければ彼人感じて去る因にいふ金門の中入に此村大炊の助本名は唐の宋蘇卿謀逆顯れ唐土に一人の躰（せがれ）を殘す素友と云（日本へ渡つて明智左馬之助盜賊となつて石川五右衛門と名乘）我朝へ渡つて後瀨川采女傾城花橘三人を兄弟とする事は謠曲唐船を借し物也御當代にさしてさはる事は世界を謠曲に借るなど歌舞妓作者の用心とは爰なるべし日本花赤城鹽竈の二つめに大星力彌元服する場に力彌役嵐雛助（小六玉）由良之助に尾上菊五郎お石に花桐豐松小浪に嵐松次郎幕切に至つて（花道へ駈出す力彌を由良之介呼止め）矢を一本出して折らせ數本の矢を出して一時に折らすに折れず一本の矢は折ても數多の矢は折れまじ敵討も徒黨をせねば大敵は討れぬと敎諭して小浪と婚禮をさせ時節をまてと諫める跡にて心變せぬ誓の大石と力彌手水鉢をこぶしにて打割る由良之助の詞にこりやちからの程を隱すが肝要と云幕なり是大石主稅を匂はせたる詞にて竹田出雲が忠臣藏にて淺きたくみの鹽谷殿とあるも同日の論なりと知るべし文化三四年頃江戸堺町葺屋町出火の次第予が家へ知らせの文體に霜月十三日夜五ツ時前兩芝居ともまづ今日は是切と打出し扨葺屋町はわけて明日が第二ばんめ落合まで殘らず御覽に入申候と口上書出し則打出し後稽古にて各樂屋中皆殘りやうやく風呂に入ものも有り又は顏を落してゐる者も有り此時そりや火事と騷立より早く直に燃立四つ少し過迄に兩芝居殘らず葭町までずいと燒出し申候誠に近比の急火ゆる芝居茶や其外も中〳〵道具其外一つも殘さずやきすて申候火元かづら師音羽屋友九郎奈河七五三助殿は右友九郎居宅土藏造の事ゆる兼々正本幷に道具類等入置申され候所火元の事ゆる灰も殘らず燒失扨々氣の毒に御座候扨私義痰氣にて火事さい中大なやみにて道具片付候所へ行かず折節俳諧師杉甫と申人參り合せ道具を入る籠長持へ熊の革を敷蒲團を入此中へ五瓶這入是を金治と右俳諧師兩人にて兩

國橘詰までかづき參申候勿論兩人共一向に非力にて肩もきかぬ事ゆゑ息杖の才覺もなく折節見せに有合し候金剛杖是は私此前富士山へ登りし時杖に突し金剛杖なり此時五瓶右長持の中にて淺草觀世音を信じ觀音經三遍くりかへし候内痰も漸しづまり安堵仕候全體さのみ大火にても無御座候此位の火事は隨分まま有る事毎晩〳〵小便に起候度毎にどこにか一つ宛ある火事に御座候され共此度は町家の建家殊に兩芝居燒申候事ゆゑさすが繁華の地何となく大そうに聞え申候葺屋町市村羽左衛門座來る廿一日より普請に取かゝり則取あへず正月七日初日やはり今迄の狂言ゆゑ一座へどこへも外へいてくれなとの事に御座候堺町中村勘三郎座急に假ぶしんにて正月二日より興行の由何さま芝居は隨分勢ひ宜敷是のみ安堵仕候先は取急知らせ申上候如此御座候以上霜月十七日西澤樣並木五瓶右手紙の外に火事場の圖をくはしく書送れり病中に近火にあひ殊に葺屋町はわが住芝居燒失しても洒落たる文體を書送る氣質の闊達なる事推てしるべし此餘にも笑話あれ共事しげければ略しぬ

作をせし役者の傳

都て役者は愚痴文盲にして記臆よきを最上とする也なま中に文才の走りし者は自己の量見にて詞を引直して作意を失ふ事多し役者にて作者と呼ぶ者江戸にては元祖市村羽左衛門中村傳九郎早川傳四郎京攝にては明和安永の頃初代中山新九郎の悴中山來助（俳名舍柳と呼黒谷文七兄弟なり）家名松屋と呼び松屋來助と作名を出す事久し近來にては金澤龍玉（三代目歌右衛門後玉助梅玉井筒一齋二代目百村友九郎百猪三（異本猿之助）共伯父共云）是等は文盲なる役者なれば作意有筈はなけれど幼稚より古名人役者のせし狂言を爰かしこ見覺ゑるを思ひ出我役のよき事を一番に見込み容衣裳體（からだ）のあがき迄勝手によき樣に書がゆゑ狂言の趣意はわからず共華美なり（狂言の筋をかまはず見渡し美麗なり）譬は〻自分所作事を得ば狂言の中に景事樣の事を書我能辯なれば狂言のくゝりに長詞を言ひ又小男にて小手利なれば躍ながら立廻り或は鳥目（とりめ）を隱して詰合などゝ（異本或はちんば鳥目なんど）癖を拵へ己が常々得たる事にて仕組がゆゑ相手の女形顏役などには念頃に詞（せりふ）も付れど我休の場の狂言又は中通役者の詞は一向放埒（やりはなし）になるものなれば一日の趣向は立がたきものと知るべし

異本、女形顏役などには念頃に詞も付れど一場の

内二件か三件に過ぎず一日の趣向一場の著作は出來兼間々は一向放曠にて首尾揃へるには作者の手に掛けずんば成りがたしと知るべし

井筒翁（一才の事）字は中芝居（異本濱芝居とあり）の役者にて兄百村友九郎を始中山楯藏柴崎林左衞門萩野伊太郎（大場共云近比澤村國太郎の親なり）等が狂言のみ覺えし事ゆゑ振附は相應に出來れ共作者など業とせん事難しもとより濱芝居の狂言は一切〳〵に入替り一日通しの來賓は稀なれば狂言一部の趣向に拘はらず一場毎に見渡しさへ面白ければ佳とせしものなり尤濱芝居にも古來より作者數多あれど正本を殘す事もなく是を作道にては竹田狂言とよび佳作の狂言有ても歌舞妓につかふを恥とせしものなり譬はゞ幕明に出たる役者奥へ這入ていつの間にかへりしやら知れず又花道より建者役者出て茶屋場とか世話場とかへ來て道具替り奥座敷になる時又向うより其役者出て今始て出た樣なるせりふまゝ有此餘時候晝夜の差別なく重復多しゆゑに濱宮地芝居にては新作をする共新外題を附る事を禁じ古來の狂言の外題を借つて附る新外題は京攝とも大歌舞妓芝居より外附る事なし是ゆゑ正本の草稿を月番の御公儀へ差上作者誰々興行人誰々と書伺濟で狂言を始る事なれば輕卒には付る事能はず今若太夫筑後竹田京都にては道場（今島原へ退たり）藥師（今宮川町へ退たり）此餘浪花北の新地堀江市の側天滿社内（異本天滿天神御靈座摩稻荷社内の小屋にてもとあり）等にては新外題つくる事ならずと知るべし其内堀江北の新地（兩座）は新作の節は上本（あげほん）をして新外題を願ふ事あり如此作法なれば一日の趣向を新作を著さんと思ふ者は大歌舞妓にて書べし名利の欲を捨し好人か此道に離れては口に糊する事のかなはぬ者ならば不知世に雜俳とて冠づけ折句等に苦心するも詩歌連俳に心を碎くも同じく竹田狂言を綴らんより一場半幕にても歌舞妓狂言に筆を採るべし爰に作者の名は出さねども役者にて作意有しものは尾上新七なり（南部屋芙雀後尾上鯉三郎）然れ共自筆を削作する事をせず其座には作者あるゆゑ我思ひし趣向あらば作者に咄作者の手にて狂言に作らせ首尾して當りをとらば我手柄にて我も則作者なり天明の始新七ふと古代の枕畫（春畫共いふわらひ畫のこと以下數行故ありて削る）の卷物を贔屓よりもらひ是より趣向うかみ五瓶に是をかたる五瓶諾して世界を柿の木金助高阪甚内を齋藤時代にさだめ黄金鯱是なり龍興が新七言

號の姫假に娘關屋に國太郎鎧びつより畫卷物を出しあら方承知といへる場今に殘れり（異本人口に膾炙すとあり）かように筋を思付けば作者を見定め書せる事なり舞臺にかけてはいか程役者の名人にても脚色は作者ならでは前後の連續仕がたき所あり何にもせよ我して見たき筋あらば作者に噺し綴らせ心に叶はねば幾度も再案をさせ其上にて狂言をいだせば後世に誰々のせし狂言とて殘るもの也我納得せざる役を附燒刄にて急稽古にする事多ければ芝居に當りをとらず狂言の筋通らず詮なき事なりけらし

金澤龍玉梅玉が話

近來故人と成し中村玉助（三代目中村歌右衛門始芝翫後梅玉）は曩に篤助一洗と絶交に及し後は自ら金澤龍玉と作名を出し金澤芝助（始奈河十喜助）金澤芝洛（後並木吾助）金澤一洗（始奈河恒助といふ（異本、といへる狂言方を取立金澤の苗字を名乘らせとあり）此餘濱松歌國（戯作者）といへる狂言方を用ひ諂ふものを建作者二枚目の位に昇し我も机に直り年頃三都にて見し狂言を所々に譯文邂逅（きりはめたまく）新外題を附しものもあれど大約歌舞妓院本の古狂言を少しく添削するのみにて筆を採るものにも誰か一人一日の趣向を立る筆力者なければ多くは寄物にて一場は龍玉自作する事にて予にも代作を頼みし事度々有り前にもいふ如く役者にかけては古今の名人と呼るゝ者なれど作道にかけては一文不才にて時代人名の新古解（わか）らず片腹痛きことまゝあれど首領（ざがしら）の勢に閉口して諫むるものなし予は一場の代作なれば誂の筋まかせ草稿出來れば前後讀合す時意の違ふ事多くして始のあつらへの筋とは世界かはれり予は此役は市川鰕十郎（始市藏初代なり）と見込書しも片岡（仁左衛門なり）とかはり國太郎（始萩野龜吉新升が事）と見込し遊女も松江（後富十郎のことなり）とかはれり姫君の身替りを此場の眼目と見込しも前幕に子役を殺し血しほ用だつなど重復のみ多くこはいかにと問ば前段の趣向につき取組たり又役者の違ひしは誰々に合ひ一時の戯に役をふりかへんと云ひし故趣向筆意の的も狂ひ片腹痛きこと（異本的も狂ひ筆も立ざれど再案して與へし事とあり）まゝ有され共當時首領にて其餘は皆門人の役者の多ければ師の權威に推れて役も納る事なり

異本、既に頓々の狂言本讀の時序の筋世話場へ通らずして奈河晴助は立腹して龍玉と刺違死んものと相口に手をかけしを予もとゞめし事あり

然共世にいふこぼれ幸とかにて首尾わからぬ儘にも

觀客よろこび相應の當りを採りし狂言も有けりけいせい廓大門（美濃正九郎と椀久を混ぜし狂言）適傾城花大矢數（傀儡淺妻船傾を種とす）城百萬石、天滿宮花梅松櫻（此外題の附假名あまり拙きゆゑ再度せし時愛梅櫻松と予が一直せし事あり）花雪歌（清水此外題は薄雪の類聚にはかなへるといふべし天保元寅伊勢御影參の年早春に石川五右衞門の狂言をあれ是集めてけいせい雪月花と呼しは龍玉の意より出たるにあらず始けいせい價千金と出せし所いかに歌舞妓の外題にても千金などゝ自賞せしは聞苦し遠慮すべしと公儀より御差留ありける夫より龍玉種々案じ外題を三つ四つも書て伺ひし所何れも惡しく都て外題には花鳥風月とか雪月花とか花車風流に付たらば上にも障らずよかるべしと其時の御役人申されしを聞手代頭取かへつて龍玉に曰今日の外題も納らず花鳥風月とか雪月花とか二つの内にすべしと仰ありしと龍玉も上よりの指圖とあるにせん方なく花鳥風月にては四季になれば雪月花に定め濟しけり是にては外題を付し作者はその時の御役人にて作者の附し外題ならねば何の狂言にても外題にも通うて調法なり外題は肇の卷にも演る通り一部の惣標にて何々の世界とわかるやうに附るを專一とす表題を見れば五右衞門の世界ならば釜が淵双級巴是等は眉間尺の故事をとり皇都七條の竈が淵は河原院融の鹽竈の故跡殘り有を態と五右衞門が釜煎の跡なりと聞かせたる趣向にて奇なり歌舞妓にては艷競石川染けいせい忍逢淵など古作者は附たり此餘にいくらも有べし雪月花は五右衞門に限るべからず是らは手代の聞違へと外題を付る事を知らぬ黨のみなれば是非なし予も此時三ッ目髮結床の場三二五郎七に歌右衞門妾司に中村松江前野左島に淺尾奥山（始淺尾友藏）家老治郎大夫に嵐璃寬（始德三郎世にて一場代作せしが此外題の間違を聞てせめて假名をかへて雪月花とすれば語路なり共よきにと笑ひしこと有り此前年けいせい繁夜話の中へ藥種屋の番頭隣家の妾にほれ忍び合ふ夜盜賊に見付られ金をとらるゝ場を龍玉自作にて書入たり是は蜃の藻汐艸とて江戸芍藥亭長根の書し雙紙の中にある噺を脚色せし物也其のち東都より役者必讀妙々痴談とて役者の常のみもち（異本役者當住座臥とあり）を批評したる書出けり此中に近松門左衞門金澤龍玉をなじるとの口畫を出し文中に歌右衞門文化中にいまだ

芝翫と呼びし頃江戸中村座にてさるおやしきの贔屓より扇面を携へ是に畫なり共發句なり共書くれよと乞れしかど風雅の心得なく甚迷惑せしが是に達ての所望に是非なく麁畫をしたゝめ芝翫寫すと惡筆にて書けるを其人もちかへつて後坂東彦三郎(俳名薪水後に樂善)に見せ(異本芝翫の餘り拙し是に贊をして與をそへよとあるに薪水は書畫共に出來たれば「椽先や蚯蚓のたくる五月雨」と書そへ芝翫が拙書を補ひしと有り都て江戸は役者の書畫を愛する所なれば日々扇面など書くされば恥をかく事あり此後芝翫も少し宛は風雅の道を學手跡もこるに上り後々は狂歌發句も少しは出來る樣になりけり東都にて蜀山先生に狂歌發句の代作を頼み句帳に發句狂歌等蜀山自筆の書一冊龍玉祕藏して予にも見せたる事有り

異本、江戸にて坂東三津五郎(秀佳)と二人奴の所作をせし時太田南畝先生(蜀山人)秀佳贔屓にて芝翫を始て見物に來られたり芝翫是を聞くと直に棧敷へ挨拶に行きしかば蜀山芝翫の扇へ思案もなく書かれし狂歌「大和屋と加賀屋と二人奴(やっこ)らさこんのだいなし外にねば〳〵」是より蜀山も芝翫贔屓となり狂歌の發句の代作を句帳に書てあたへられし也蜀山自筆の書一冊龍玉祕藏して予にも見せたる事あり

かくの通りなれば一日の狂言著す事はかたけれど全體根氣强く工夫に懲つては寢食を忘れ藝道にはげむがゆゑ歿前には役者改名妓女の名弘め等摺物にも追加の發句狂歌などあまたよみけり語路てにをはの分らぬながら中には相應に出來たる句も有り天保の始天保山の川浚の時銘々鈴を腰に付テウ〳〵と懸聲をして砂を運び或は踊歩行て土砂を踏かためし事有り其時(異本其時梅玉の狂歌にとあり)の狂詠に「呵らりよと儘よてんばの川浚砂といふ程踊る蝶々」此餘にもあれどくだ〳〵しければ略す惣じて京攝の役者には近來風雅の心がけあるは尠し(異本元祖中村富十郎は書を英一蝶に習ひ英慶子と云元祖中山文七は書を能書て黑谷淨光此兩人の書し書畫とも今に殘れり)東都にては諸所の御屋敷より扇面團扇(帛紗)など(に句を)好まるゝゆゑ役者立ものは勿論安き役者にても俳諧ぐらいは嗜め中にも市川海老藏(七代目團十郎始三升今白猿)は代々其角流の發句又狂詠をよくし手跡も拙なからず五代目白猿(島向島隱居)は相應の博識(ものしり)にて一代の狂詠甚だ多し長夜の書溜(かきだめ)

徒然文談など文集今に殘れり當時の白猿御影年に浪華にての發句主親もゆるさせ〇ぬけ參り是等白猿流とて一派あり前巻にも演る如く役者は藝道に凝り遊藝のたしなみには俳諧發句の一通り位は心得おかしたきもの也奈河一泉が弟子に奈河元助後江戸にて本助といへるもの是も元狂言方にて有りしが東都にも中興作者ともしきゆゑ次第送りにて建作者と成り天保六未年浪華に歸りしが龍玉根氣弱り狂言も仕盡し上妙々痴談にたしなめられ(作者を止まりしかば)作名(龍玉)を譲り度心あり此本助へ繼さばいかにと予がすゝめに二代目金澤龍玉となりけるがさまで殘せる狂言もなく去寅の春黄泉の旅に赴けり此人の書しは去る酉の春けいせい玉手綱三幕目に入間屋喜十郎に歌右衛門(四代目歌右衛門改雀)番頭彦七に玉助(前玉助門梅玉)講釋師左内に工左衛門娘お三富十郎是は江戸市山(前に云七藏こと)の話にてテレメンコチリメンコと言ふ藥屋にてろくろ首也と嫁の惡名を付し話を先龍玉(玉助が梅玉)指圖にて筆を採らせしはなしなり

西澤文庫傳奇作書初編(言狂作書)中の巻終

傳奇作書初編(言狂作書)下の卷

目次

一近松半二が傳獨判斷叙
一近松德叟が傳
一崇禪寺馬場敵討の實話
一上田秋成中村大吉が話
一櫻田治助が傳
一金井三笑本讀の話
一瀨川女皐が話
一福森久助が傳
一辰岡萬作が傳
一歌舞妓古作者の話
一小幕滑稽書樣の論
一西澤一鳳軒が傳
一狂歌浪花土產月名殘
一月並本讀會引條
一閑樂(ひまらく)のつらね

西澤文庫傳奇作書初編(言狂作書)下の卷

西澤綺語堂李叟著

近松半二が傳獨判斷叙

獨判斷叙、近松半二的、浪速的人、穗積先生兒子了、自年紀後生、好了破落戶社裏勾當、住在烟花陣裏、托地入拘欄部了、仍舊會造曲本兒、那社裏各位、攛擧做了竹本坐的傳奇作者、江湖上張揚了其名、大凡那舖謀定意院本數十百種、筆兒上夾七夾八打張了、延握佗戰聞的本事使看的列位打起精神掏乾了、演那悲哀伎倆使看的各位掉淚來叙這淨的本事使觀的衆位翻腸一般胡蘆、演些消魂種女且的、手段使叢人羅漢思情嫦峨相嫁、如他光掘紮囤的小十三幼兒大的老十三官粧紛的娼女兒的飛絮瓢花的奶々小娘々的保兒的幇間的做事、莫不寫其眞的弄出將來了、當眞與門左做了一本帳築後傳奇的老手了、小道若年時於京師做有隣軒徒弟習學傳奇曲兒有隣物故後虛華地撇了彼曲、近間做緣野居士寓在江南遊聞名的染大的門、打起舊癖學院本兒音操、只是小童一個老禿不記掛江湖上多口的譏誚、只顧習學了、因與那半二甜意投學只管相投、這箇漢子儀容上不十分招架、小道也是一箇躲懶的、借一步做伴還京師、做了弄友暫時的拋京小道歸浪速、災星臨身羅疾物故了、不等近松千歲的壽、被無常的風吹倒西方、小道風吹兒聆之了吃了一寒、倚于小几兒假寐、恰然跛聲蓼蓼裏隱々的抵面現了半二、髻鬚種々穿半晒夏布絆柳條棉束腰拿、若烟皮包舊短烟管、跛歌一般的肝張音的謳道、小可有一件掛念、陽生裡著生涯的安心、做了一小冊子了、欲示同好、當不得俄子兒點鬼簿了、紀官人异小可同好會造曲本兒、深蒙青些難得二官人爲小可將把小冊子去付着棗則筒隨手托庇成果得了、言畢也着了常套蓼裏消了、小道因與、紀上太商量了付了梓、普示江湖上的同好追薦法事云爾。

于時天明丁未十月上浣傳法門人平安疎懶堂仙人向十万億土的彼些聊振粹哩

右は近松半二が遺稿獨判斷の叙にて此人の傳にかへたり著せし狂言實に數十百種中にも名高きは蘭奢待新田系圖、姻袖鏡、本朝廿四孝、太平記忠臣講釋、近江

源氏先陣舘、京羽二重娘形氣、伊賀越道中雙六、新板歌祭文、妹脊山婦女庭訓、關取千兩幟、三日太平記、いろは藏三組盃、心中紙屋治兵衛等枚擧に限りあるべからず天明より天保の今に至つても院本歌舞妓にもてはやすこと全く此人の筆力の餘光成べし此獨判斷といへる一小冊は辭世にかへて疎懶堂と紀上太郎が梓に刻同好の人々へ配りし書也實に作者の一見識ありて當時の稗史小說を編る輩も半二に及ざる事遠し

近松德叟が傳

近松德叟は始德三と言て浪華伏見阪町の娼家大桝屋と呼びけり（俳名雅亮）幼き頃より芝居を好み院本作者近松半二が弟子となり歌舞妓作者となりけり尤伏見阪町には（大坂遊所）伏善（其頃の與行人）が歌舞妓の銀主なるが故勸により始は並木五瓶、辰岡萬作、並木正三（二代目隱居）等とともに作せしが寬政八九年より建作者と成り著せし傳奇は伊勢音頭戀寢釼（伊勢古市十人斬のこと）は伊勢古市にて大夫齋宮といふもの色情により大勢のものに手疵を負せしを彼地より文通にて知らせしもの有て直に狂言に取立しが當年は嵐小六（前嵐雛助と云女形夫より叶雛助とて立役）三月廿九日死しければ悴嵐雛助（始秀之助後琅子といふ）四月五日より父の替り役をしたる盆替り狂言にて小六生前增りの大當りを取り續て敵討安榮錄（小栗栖十兵衛も丶ちどり鳴門白浪淺草靈驗記（印南數馬大川友右衛門けいせい挾妻櫛けいせい會稽山寺子屋慶二郎池上七九郎異本慶二郎なく新柳とあり）紅楓秋葉話是は其一年前棧物語とて小說の中に岐蘇の山道にて寺に宿す酒の中に毒を仕込み主僕大勢を殺す中に一人活殘り蔦に取付虎口をのがる千仞の谷底に孤家有其主は老婆にて此日の盜賊の黨也內に小娘有てこの男を憐み老婆山寨へ知らせに出る間に譯を告此男を落し母への言譯に死す是水滸傳の棗商人淺草の孤家石枕の話を合せし如し夫を種として脚色しもの也後京師にてせし時けいせい棧物語と外題に賦しけりけいせい花山崎（荒木攝津頭と古曾部主水異本荒木村重齋藤內藏介有と）俠競廓日記（芝曳が賣油郎）けいせい筥傳は授は中入に仕組三つ目筑紫權六チギリンタイの齣は上田餘齋が作の小說秋雨物語の中に有一話を取組り（後京にての外題は艷色秋雨譚と付る）柵自來也譚（栗枝亭鬼卵が作の小說也）競かしく紅翅（船越十右衛門に嵐吉三郎絞是は文化五辰の春北新地の或茶屋にて振舞有て藏やしきの留主居行かれ此供の者臺所に居ける所へ名うての妓

女來て二階へ上らんとする時笄を落しけるを僕下に居けるゆゑ拾うて渡せり藝子憚りと言さま僕の手と共に握つて戴取りける此僕遠國に育ち始てかゝる美女に手をにぎられし事故嬉しさ心魂にてつし屋敷へ歸りても片時も忘れられず女郎と違ひ藝子なれば小金にては求められず人の花と詠めさせんよりはと無分別なる了簡を發して其後曾根崎（北の新地をいふ）の途中にて一刀に切殺しけり藝子はもとより馴染にてもなく思ひもかけぬ者の手にかゝり不便さ言ん樣もなしかの僕は其場を逃去り大仁村麥飯屋の簀の子の下に隱れ居しが翌夕方空腹に成しかば這出て食を乞ひし所を召捕て出しけり此頃は大仁村茶店賑ひし時分也是を德叟かしくの世界に仕組しもの也名作切籠曙一名高槻是も噂ものにて伏見京橋諍實錄といふ古狂言に里見伊助といふ役名有りそれを借し者也けいせい廓源氏（物草太郎と金魚や金八）いろは歌譽櫻花（ゆいはく）は文化三寅年二の替りにて大當りせり此四五（此四幕目カ）に岐蘇の畚おろしの場あり百姓與市兵衞に二代目嵐吉三郎滅法彌八本名斧定九郎に淺尾工左衞門（初代鬼丸にて斧九大夫中山文五郎やんまといふ）山岡覺兵衞（猪三郎（異本嵐猿三郎に作る）璃寬の兄）兩人爭ひ（異本連判をとり合ひ）谷底へ落込與市兵衞定九郎是を助けんとて畚に入て釣下ろさるゝ狂言也是は四天王剿盜異錄（馬琴作小說也）の中より見出したる也けいせい英艸紙舞扇南柯話は三七全傳南柯夢（曲亭の作）島廻月弓張は椿說弓張月（馬琴の作）等也（異本斯の如く小說ものを脚色こと來賓も好ける故皆々當りを取けり）此節は小說稗史も各讀はやせし程有て作も後々の物とは違ひ筋もよく面白かりしが後は是を拘欄（しがらみ）にせよ此役は誰にさせよと歌川豐國葛飾北齋等に書しめ狂言作者の心得にて著述するがゆゑこれを歌舞妓に脚色む時は却て古くなり作するに詮なし文化七午年八月廿三日に德三は歿せり近松門喬（後江戸に近松加造桂壽と云近松万て歿す）兵衞等は皆德叟が弟子なり（近松柳は半二が末弟子淨瑠璃濱芝居の作者近松千葉軒といふは此柳の弟子なり）

崇禪寺馬場敵討の實話

寶曆八寅年三月に淨瑠璃にせし敵討崇禪寺馬場は作者竹田小出雲（竹田瀧彦なり）今寫本にも畫本にも有て世によく知れる所也返り討となりし兄弟が墳墓は北中島にあり此實說を去る老人の夜話に聞し所返り討にあらず合討にて有しとぞ生田傳八郎は武術も鍛練してさまで卑

怯なる武士にもなかりしが郡山の藩中にて遠藤宗左衛門を意恨有て討取り浪華へ來つて谷町弓師丹波方の食客と成て居しが其頃浪華には劍術柔術を勵む武士多く此生田が門弟と成けり丹波は常に心易き曾根崎新地の妓家花屋何某が離れ座敷をかり受傳八郎を入れ武藝の稽古場となしたり此花屋何某その一兩年前に死して後家と娘二人あり姉は病身にて藝者を休ませ內にて保養をさせ妹は舞子なれば勤に出し其外抱への女郎一兩輩も有て相應に暮しけれ共主なく成てより離れ座敷は茶室の好に建しまゝ空しく明家同前なれば丹波が引請にて生田にかしける傳八郎。の武術もよきゆゑ追々に門弟ふえ豐に月日を送りける內裏と表の事なれば病身の姉を傳八郎方に客來の節は茶の給仕等に出せしをいつしかわりなき中と成り懷胎しけるを母親知りけれど多くの門弟に尊敬せられ富るとにはあらねど暮しかたに不自由もなければ幸ひの事にして娘が心のまに〳〵暮させけり然る所ある門弟に誘はれ生玉邊へ傳八郎の出し途中にてはからず遠藤（異本遠城）治左衛門に出合ひ名乘かけて敵を討んと乞ひけれ共傍には門弟も數多居る事なれば段々と言なだめ明後日北中島崇禪寺にてと約してわかれぬ跡にて門弟口々に尋ねける故傳八郎にも是非なく郡山にての次第を物語りければ若手の門弟血氣にまかせ先生のお手を勞さるゝに及ばず我々が討取んと進むを段々と申なだめて曾根崎へ歸りぬ扨も治左衛門には石町異本谷町の借座敷にかへり弟喜八郎に其日の子細を語り約束の日遲しと待わび當日崇禪寺馬場へ行けれ共見えず空敷歸りがけに丹波方へ催促に行ける丹波方へもとくより傳八郎の書面來てあり今日はもだし難き用事出來明日は相違なく彼所にて勝負を決せんとの文言也翌日こそ優曇華勝りの敵討と兄弟諸共に小踊りして翌日未明より宿を出長柄の渡場さして行けり爰に傳八郎日限を延せしは門弟の銘銘面白き事に思ひ且は後學の爲などゝ同道せん事を乞へ共傳八郎にはまさか兄弟の者を討とて大勢の門弟を連行んも恥かしとて此評定に日限一日延しけれ共達てとのぞんでやまざりければ是非なく翌朝門弟の銘々を同道して渡しを先へ越すより兄弟も渡しを越へ勝負にかゝる迄は大體寫本の通りなれば略す互に姓名を名のり立合ふ頃はまだ薄暗き頃にて人顏も

朧に見ゆる計なれば松影より遠矢にて兄弟共に射て取んと雨の如くに放しかけたり兄弟是を事共せず傳八郎の雙方より薙刀と刀にて打かゝる傳八郎雙方に受ながらまつしぐらに戰ひけるが木陰よりは眼つぶし或は瓦石礫を投出し誰か一人顏は出さねど投かけ射かけする程に兄弟の眼へ砂や入けん互に喜八兄者人と聲をかけながら傳八郎に討てかゝりしが傳八郎にも疵やあうたりけん三人共に掛聲もかすかに成りひつそと成て靜まりける夜も明きらば道通りの者の目にやつかんと門弟共そこ爰より馳集り三人の傍へ立より見し所三人共朱に染み傳八郎傍に分れ兄弟は體をにじらせ負重なつてぞ息絶たり門弟あはて傳八郎には印籠の氣付をのませなどして介抱し兄弟の骸には惣々よつてとゞめをさし身に立し矢を拔とりし折遠藤兄弟よりは傳八郎の身に立し矢數多かりしとなりさも有べし鼎の足の如く三人の向ふ所へ的も定めず遠矢を射しゆゑ生田の身に立し箭の多きは是實說正銘也と思はる斯て門弟共師の助太刀をせんと思ひしに計らずも三人共に射殺せし事ゆゑ人々周章虫の息なる傳八郎を介抱がてら肩にかけ長柄の渡し場迄來し所に川端にて生田はあへなく息絶けり今更詮方なければ其儘長柄川へ投込み互ひに後日は沙汰なしに濟さんと言合せて歸りける程なく往來の者の目に付ければ兄弟の年格好をしるし檢使を願ひ意趣切にて事濟み傳八郎の事は誰知らするものなければ弓師丹波も花屋何某にも吟味もなくそのまゝ事濟みけるとぞ

上田秋成中村大吉が話

爰に哀をとゞめしはかの花屋の娘には生田が胤を懷胎し月も重なれど夫にはかへり來らず其節噂にきけば崇禪寺にて二人の侍の死骸ありといふに驚きもしやと家內より見せに遣はせし所終に見知らぬ面體なりと聞き少しは心落付けど昨日まで大勢來りし門弟誰一人も來らずしかし幸に吟味もなければ只家內のものゝ心の內には何方へか落延しものならんとひそひそ咄に日を送りし內かの姉娘臨月來つて男子を產み小兒は達者にて育てども母は何角と心勞せしにや產後に空しくなりければ後家は小兒を乳母にて育てかの客人はかへらねば殘りある金子調度の類を皆幼子に付け孤の事なれば不便さも一しほまし心の儘に

育し所追々成人にまかせ茶屋置屋の忰には似もやらず書畵琴碁は更也詩歌連俳など高尚なる事を好みけるが妹娘は藝者を勤居し內東國のよき客付て身をひかせけるゆゑ客に隨がひ東都へ趣き母も孫の成人のみ樂しみ居けるが姉には死わかれ妹は他國へ嫁し便なく思ひしにや孫が十七八の年終に空しく成にける此孫實は生田傳八郎が忘れ筐なれど世を憚かり花屋何某が內に育由緒ある武士の胤也と近しき人も思ひけるが誰か知らん此人成長して寬政の頃和歌及俳諧をよくし著述の書數多編せし上田秋成又餘齋とも無腸共呼び近來名家の逸人也其身は生田の姓を深く包み母方は遊里者なれば風雅の友に賤しめらるゝを嫌ひてや後には京師に住み心の儘に身をもち放蕩なる事自笑其績等が口調にならひ聞耳世間猿といへる戲編を著はす讀て知るべし其餘前に言ふ雨月秋雨の稗史を著し近頃癖物語とて勢語に倣ひし滑稽書は無腸子が遺稿なり又花屋某が妹娘東都に於て男子を產む成人して俳優者中村大吉(家名鳴尾屋俳名巴丈といふ)始娘形の頃は(藤川大吉後鳴尾關太郎)文化元子年坂東彦三郎同じく浪速へ來り同十一戌秋東都へかへり後役者を止め剃髮して彼地にはてけりかゝれば無腸子と巴丈は從弟同士にて巴丈は生田傳八郎が爲には甥也然れ共餘齋は氣性高ければ是をいはず大吉も深くつゝみ語ることなかりしとぞ此咄しは無腸子が成立よりよく知りたる老人より傳へ聞く虛實の程わかり難けれども餘齋が著作に緣あり巴丈が俳優に成たれば劇場に因みあるにより此事をしるし置事しかり

櫻田治助が傳

櫻田治助は俳名を左交と呼て東都にて中古より作者も多き中に寶曆の末より劇場に出淨るりを著すこと百廿餘段に及び此道に遊ぶ事五十年生涯の內淨瑠璃塚を築ん事を願ひしに計らず文化三寅年六月廿七日歿せり默了院左交日念信士と號す其志を遂げざる事を舊友門子悲しく翌卯の六月一周忌に辭世の一句を彫り淨瑠璃塚と號して柳島妙見の境內に建てたり此淨るりとは京攝にいふ院本と違ひ東都にて所謂常盤津富本とてそれ〴〵流義あつて所作事道行等文談を演る京攝にて云江戶歌の事也いはゞ歌淨瑠璃也(異本清元富本より近來別る)などの餘流出來て京攝の淨瑠璃を東西の論なく義太夫と唱へ此歌の文句を淨瑠璃と丶のふ

る事也）芝居にてする時は文談の長短によつて七枚十枚の綴本として賣る事定例と成り其俤淺間嶽積雪戀關戸戻駕色相肩の類なり

異本、この櫻田左交は壕越二三次（俳名蕭陽）の門人にて師の蕭陽も豐後淨瑠璃を數冊著して其名高し左交師蕭陽の文句を和らげて當世に演べたるこそ此人の才智といふべけれされば左交は吉原に至て心をよせ廓に遊びて女郎の痴情をよく呑込み文句に傾城ごと多し年七十に及べど毎夜〳〵吉原へ行て大門をくゞらねば寢られぬといふ程の畸人也江戸の人氣其土地の風儀をしらんがため遊所場風景の地を望みて變宅すること度々老人に及びて花川戸柳の井の隣なる家に住て柳井隣と戲號せり又其頃左交吉原丁子屋に思を懸けたる女郎あり何卒これに近付きになりたしと種々心を碎きふと思ひ付たる淨瑠璃の心を用ひつくり花の梅が枝に文を書き結び付け懸想文の見立にし自分かたげて丁子屋の格子へ投込みければ女郎皆々立寄り騒て文の名宛を見れば誰の君さまへ櫻田と書あればさすがの全盛丁子屋の名の譽と部屋に餝り女郎より櫻田へ返事を送りし事ありとぞ是よき年をして眞の戀にあらず流行に遲れじと我が名を高く弘めんが爲めなり是等は餘人の思ひよらぬ名弘めならすや二代目櫻田治助は始松島陽助とて笠縫專助の弟子なりしが後櫻田に取立られ松島半二（俳名調布）と云改名して櫻田治助左交となる師匠櫻田風をよく呑込み淨瑠璃を書事妙を得たり

阪東三津五郎（秀佳）が七化の所作事に著せし源太箙の梅松風の汐汲など今京攝にても專諷ひはやして文談のこれり此汐汲の文句によれる渚に世を送るとの唱歌は行平卿の歌なり歌舞妓ものゝ作にはよく穿鑿したりしと尾崎雅嘉（浪華歌人）も百人一首一夕話に賞められたり二代目左交亡師の女房を五七年も扶助せしが不和となり名を返へして松島調布と改名して後終れり此弟子初め松島音助後半二となり今三代目櫻田治助左交とはなりけり

金井三笑本讀の話

金井三笑は江戸古狂言作者の冠たる人にして壕越齋陽と對せり此三笑草稿を至つて細字に書く我も本讀の折は目鏡をかけて讀事也よつて紙數甚だ少し悕嗇

にて紙を惜まるゝかとも思ふ者あり三笑曰く細字に書くは本讀の節脇外より延上り役者共が見たがるもの也文字あらければ讀るゝがうるさゝにかく細字に書也といはれし由其上本讀の席へはいつも長き刀をさしてゆかれひやうし幕と讀切るや否直に刀を取上げ柄を握てサア宜しいか悪いかと万一その場の批評をいふものあらば一刀に切て捨んとの勢ひにてあたかも首實檢の場の竹部源藏の如く八方へまなこを光らし長き刀をひけらかすが故此權威に恐れ今少し有たしと思ふ所も我慢して直に納め手を打しとぞ是らは實に年功にも身柄にもよるべし予も毎度本讀の時は三笑の心持にて利法權の三つの旨を以てすれど若年といひ帶刀すべき身ならねば是非なし御城代とか御奉行にて作者をすれば如何なる悪き役を書く共直に納るべきと獨笑捨る事も多かりし三笑は作者より役者の方上手にてありつらんと思ふ

瀬川如皐が話

元祖瀬川如皐は始女形にて瀬川乙女と云し者なるが後作者の道へ入りしかどさせる狂言も殘らず河竹文次又六見ともといへる者（二代目瀬川如皐となり）天明七未年東都より上り役者中村仲藏俳名秀鶴に付て角の芝居へ出勤しけり此仲藏は志賀山一流三番叟世に舌出三番叟と云を始め翌申年歸國するまでに狂言數多作せしが忠臣藏の定九郎尤是までは丹前にほくそ頭巾にてせしを仲藏江戸にて為家人の俄雨にあひ尻からげに蛇の目傘の破れしをかぶり走りしを見しより思ひつき黒羽二重の紋付に朱鞘の大小とせしより今誰にても此拵へとはなりけり又千本櫻の權太も銀あたまどてら姿もと鮓屋の悴なれば馬士めきたる拵にてはあるまじとて工夫の上三の口椎の木かはたりばは青月代の旅形にて主馬小金吾に中村京十郎是を相手にかたりの時衒と知つて衒りとらるゝ廿兩と言ながら荷物より卅兩ばかりの包を出し廿兩かぞへて渡す内延上つて是を詠めヱゝまだあるなアとの仕うち衒とてもまだ仕馴ぬ思入と拵らへのよかりけるより是又今も秀鶴の形をとる樣になりけり鷄鳴吾妻世話事といへる狂言は江戸にて秀鶴土手の道哲大切は姫と道哲の二面の所作事垣衣戀寫繪大當りせしを市川團藏今の團藏の親なりかの地にて見置き五ヶ年先に江戸より歸坂せし當座に隅田川續俤のちのと外題を直し聖天町の法界坊として秀鶴の當り狂言を我がものとして出し大當りを取

りけりこの狂言の源は秀鶴なりければ此鶏鳴をせんと云一座のものより夫は圍藏が名をかへて仕てゐればば如何あらんかととどめしかど秀鶴の曰く市紅の圍藏の俳名をゑられしまね也我は誠の道哲を見せる也と出せしが又市紅よりは見所多く男はよし江戸訛の悪坊主の仕打にてさすが秀鶴は名人なりと一座の役者までが感じけると也河竹文次も秀鶴と共に江府にかへり後如皐と改め瀬川路考に随がひ菊之亟後仙女享和三亥年に京攝へ來り此時好繻子帶屋おはん路考長右衛門片岡道行瀬川の仇浪は此如皐が作なりけいせい筥傳授二つ目長岡勇齋に片岡仁左衛門小西行長に嵐吉三郎同妻唐織に瀬川路考宋蘇卿に大谷友右衛門此場は如皐が筆を立たり其秋瀬川路考は其俤淺間ヶ嶽淺間巴の烝に中山庄太郎傾城奥州の鑓に瀬川路考大切相生獅子餘波英石橋の景事を暇乞として如皐もろ共江戸表へ歸りけり近頃歿前には狂言を書ず外題のみを附けり此人中古芝居作者に似合ぬ博識にて外題割書等は字義を正し聊も誤なし仕組は時代王代ものを書く事を得たり

異本、其頃本屋宗七といふ二枚目作者あり初武井藤吉又豐島大作豐島は江戸の郡名にして大作は大作者といふ心自日本一といふ故日本〳〵と仇名せられし元增山金八の門人にて本所龜戸天神の社家より出でたる人なり社人の頃吉原の女郎に馴染み金に支へて困り寶藏へ忍び入りまんまと首尾よく天國の寶劒を盜出しさらば質屋へ持行き金にせんと門前へ出て柳島へさしかゝれば俄に空掻きくもり業平橋を渡らんとせし時しきりに稻光して雷鳴轟き寶劒を持たる儘立すくみになり倒れし故菅神の御罰恐しと心付取て返へし寶藏へ元の如く納めしかば天氣快晴したり不思議といふも恐れありと作道に入てより語りしとさまでのこせる狂言はなけれども此道に入るもの皆一癖ある故をかし今は斯樣な話さへもなき輩計にて風雅もなく滑稽もなき事是非なし

福森久助が傳

福森久助は後暫く（異本玉巻惠助の門人にて始め玉巻丘治といふ後に久の家を憚る事ありて）喜字助と書俳名一雄如皐南北等と同時の人也並木五瓶元祖を見ならひ京攝の院本を江戸狂言に引直すことを得たり譬はゞ關取二代鑑の秋津島を民谷源八に直し鬼嶽を堀口源太左衛門とし翌日殿の御前にて若殿の跡目を試合の

勝負にまかせるを堀口門弟を連來て民谷を詈り額を割てかへる內記は高倉隼人の如く推擧の誤りに切腹する分の事と屋敷へかへるあとにて源八切腹して坊太郎に血汐を呑せ翌日の試合に勝すなんど無雜作に譯文たり安永天明の頃中村重助俳名故逸と言建作ありけり此人の頃にも專京攝狂言を世界人名を呼かへて遣へ共誰も是をしらざりしとかや寛政中に江戸淺草御藏前に敵討ありけり悉く實說予が著述讀佛乘に編てあり略之直に狂言に仕組敵討覘鴈的といへるは京攝に古き狂言大和國非人實錄を後外題を改め敵討郡山染ともいへるを近松門喬江戸へ持行き松井由輔金井三笑の子也が作にて其まゝきりはめたる也都て東都は京攝の院本を一向不知近世女義太夫など流行して少しく淨瑠璃を覺えたるなり夫ゆゑ右に演る常盤津富本大薩摩河東一仲新內說經などの古風今に殘り眞の淨瑠璃はしらぬ筈也作者古淨るり本を祕藏して譯文る事有ども其道のものさへ知らぬ程の事也附ていふ東都にて琴歌とて近世山田檢校が作調したるもの數種ありて京攝に弄ぶ端唄をしらず婦女子に三味線を習すにも富本常盤津長唄などを敎ふる事也長唄とは安宅松などをさしていふ上方の端唄をめりやすと唱へ又上方唄ともいふて稀には彈諷ふて陰氣なりとなじれり並木五瓶の東都へ行し當座は端唄をかの地にてしらぬがゆゑめりやす本と唱へ黑髮雜子雪いさゝめ夕空などを拘欄にて諷はす折は二上りとか三下りとか印て五瓶調ぶるとして弘めしもの也京攝にても中古までは宮古路宮園國太夫重太夫など數種ありしが當時は淨瑠璃端唄の二種に止り其餘は江戸唄と號して常盤津富本淸元長唄を流行らす事とはなりぬ元音曲鳴物は異國より渡り九州地より闢しにや筑紫琴を始豐後節薩摩節などゝのふれば京攝にとゝまり夫より東武へ移りしものゆゑ竹本豐竹淨瑠璃琴三味線の唱歌を悉く知らぬも斷りなりかし東都狂言作者も藤本斗文津打治兵衞純通與三兵衞常盤津田平增山金八寶田壽來松井由輔松井幸三木村園次村岡幸治田名圓八より近年本屋宗七田島此助槌井兵七重扇助勝井源八三桝屋二三治なんどの傳を擧るも事繁ければ後編に讓つて爰に略す見る人予が杜撰を責る事なかれ

辰岡萬作が傳

辰岡萬作は浪華島の內疊屋町に住寬政享和中の建作

者にて著作の狂言尠からずけいせい楊柳櫻護國女太平記淀屋辰五郎事蹟東海道戀關札此中入は伊達新左衞門に尾上新七芙雀妙重の井に芳澤いろは後あやめ巴江の事鷲塚官太夫に山村儀右衞門五登にて重の井に心をかけ口説ども落ず其上何ものゝ胤にや懷姙しければ不義の相手を吟味する段に新左衞門は家老なれば重の井を預り不義の合手を詮義する所誰か知らん其男は新左衞門にて有馬の入湯の折節酒の機嫌に湯女を嬲る妙重の井は堅くろしき新左衞門の氣性に惚て湯女に替つて添臥をせし一度の情に懷胎せし也と語る是にて新左衞門は不義ものとなり上下大小をとられ追放となる家門佐々木玄蕃頭に三枡大五郎初三升時藏又改て調姫の乳母とする切前戀女房子別他人といふ男の重の井新左衞門自然生お三圓二郎の紋切形となる此二つめは桂川長右衞門に上下を着せたる趣向也と萬作は云けり曩に云正三が卅石と同じ考へなりけいせい春陽鵙は大久保武藏鐙といへる寫本を其まゝ仕組しものにて宇都宮騷動と日本橋大阪の馬切を書し本にて一說には辰岡德三と兩人にて狂言に出さん爲め先に寫本にして出し置しといふは非也此寫本面白けれど虛說多きゆゑしかいふか猶可ゝ考世界を太功記に倣ひ三輪五郎左衞門大久保忠教阿波屋太郎助金井三九郎花井三九郎三役淺尾爲十郎柴田修理之進勝重本田上野河田歌左衞門に嵐小六眞柴久吉井伊掃部三七信孝長七どのを云二役に市川團藏此狂言古今獨歩の大入大當りをせり中入に五郎左衞門炮燵頭巾長刀にて柴田の旅舘へ手に小松菜を一把提け杖を突き出て來て先日は鶴によばれし返禮に鶴一羽進上申すと投出す宅間玄蕃に山村友右衞門惡口の詞に貴殿は大坪流の馬術達人也と見ゆれば大久保と聞せしせりふ鶴じや〳〵とこの小松菜どふして鶴じや扨は老耄めされしかと言ふにイヤ三輪五郎左衞門虛言は吐ぬ先頃爰にて鶴の馳走に預かりし時お氣に入らば何盃もかへよといふゆゑヲゝ喰ふ〳〵といへばやは大久保を云仕舞には吸物の椀の中に菜ばかりゆゑ此樣な鶴ならば手前の庭にいくらもあるから重ねて持て來ようと申たのだ下略瀨川采女に泉川楯藏傾城園菊に中村野鹽兩人を三輪の謳曲にて柴田釣夜具の中へ寢させる所釣天井を和らかに仕組しなど辰岡が趣向也此信孝の役も柳營の公達ゆゑ男も優にやさしき樣中山文七二代目文七ぴん付や也にさせる積りにて書し所中の座へ勤めど虛說多きゆゑしかいふか猶可ゝ考世界を太功記に是非なく團藏にさせしが此人小男にて移り如何と案

じ居しに市紅段々工夫をこらし大和橋にて早切の太刀打を役として勤めしより今に市川流の狂言と也けり銘々得たる所の工夫ありたきもの也當世寄族撰是も寫本にあり白銀屋與左衞門に山村燈藏竹源藏に新七鶴木屋本の助に小六序切に桃園に義を結ぶ容に合せ此三人をせり上にしたれど惡口に當世きふくせんといひける故狂言取替姉妹達大礎を出しけり近松德叟と兩人の作にて辰岡は金襖物を得時代德叟は御家狂言を得意とすれば序馬場より甚內殺しの和らかみは德叟二つ目出立は辰岡三つ目岡崎德叟四つ目普傳の場は萬作五の返り討道行は德叟六敵討は萬作也時代世話と氣のかはりめ雙方共に筆力を震ひしゆるか古今の當り狂言となりけり艷競石川染も此兩人の作にて稽古中嵐小六三月二十九日に死しければ悴嵐雛助始秀之助中村十藏小珉子に親の役石川五右衞門石田の局をさせ四月五日始めしに大當りしにけりけいせい遊山櫻扇屋花扇達山甚三吉原細見圖遠州中山染是は世に云中山問答也忠孝譽二街雪國嫁威谷花盤淀川語馬士平太片岡仁左衞門渡守源八澤村宗十郎傾城忍逢淵五右衞門爲十郎濱眞砂續石川五右衞門團藏けいせい高砂松を書納として文化六巳年九月三日に歿せり

辰岡は實より花を得德叟は花より實に入るの脚色にて此二人歿してより後斯る作者を見ず此辰岡も安永五申年未だ狂言方にて春狂言に北條五代記會說の中入に三浦彈正の役に三枡大五郎初代逸風謀逆あらはれ軍兵大勢相手に立廻りの時萬作は拍子木を持ち附を打けり大五郎立廻りの內ふと萬作を見し所如何したりけん褌はづれて男根を出しながら一心不亂に木を打ゐけり大五郎をかしく小聲ながら萬作陽物が出てあるると言ながら立廻りけり軍兵銘々之を聞て萬作まらが出てあるといひ樣長柄の鎗にて突かけ之を知らすれ共萬作は耳にも入らず大五郎始軍兵共立廻りながら萬作尿が出てあると大音にて掛聲の如く口々にいへ共萬作更に心付かず此立廻を打しまひぬ大五郎軍兵を皆々切すてんとする時エイと矢聲をかけ花形大仁に嵐雛助小六花道よりせり上げ反謀を請繼彈正の首を落し宗尊親王の還御に紛れて向うへは入跡管紘殘り嵐文五郎金打文五郎とて小男にて上手なり由解大助仕丁の形にて出て向ふを急度見る姉川大吉北條時賴の御臺にて出て大助人も知つたるその面體ではといはれて文五郎ッカ〳〵と戻り石燈籠の油烟を鼻の下に付るホヽ

遖れと大吉あふぐ文五郎長柄の傘をちよんとかたげるを拍子幕になる（是昔より評判の幕也）近比淺草靈驗記大川友右衛門に中村歌右衛門（梅玉）雷神門の幕に一文奴にて鎗をちよんとかたげる時此油烟をつかひし事あり尤文五郎のは時代狂言なれば面體をあやどる事勿論なれど歌右衛門の折はお家狂言なればこじ付也共是らは人の喜こぶ仕打なれば故人の藝風を移す事老練のなす所也扨も辰岡萬作は幕しまりてより樂屋へ入皆々どつと笑うて前の事を語りければ萬作始て心付附を大事に思ひ皆々の聲の耳に入らざりしと赤面ながら笑ひける大五郎萬作を呼び我役を大事に勤るは賴母し後々遖れの作者となるべしと賞けるが後建作者とは成ける何の藝にても凝るとこらぬとは違のある者也

歌舞妓古作者の話

京攝にも寛保延享の頃の作者には田木幸助澤村文治市山角志爲永文蝶（淨瑠璃作者爲永太郎兵衛の弟子也）藤川茶谷松本佐流長谷川傳治（淨瑠璃作者長谷川千四が弟子）松屋久左衛門豐田一東寶暦後は高木里仲英霞烏岡井正平松田百花境喜平など（番附評判記等に名前のれども）一部の趣向殘らず殘念也中にも竹田治藏は（淨瑠璃作者竹田出雲の門人）秋葉權現廻船話清水清玄六道巡り銀閣寺祈始假名草紙國性爺實錄等を著せり

異本、此秋葉權現の二つ目日本駄右衛門に中村歌右衛門（加賀屋歌七梅玉の實父）衒あらはれ花道へそろ〳〵と歸る月本圓秋に中村四郎五郎呼びとめる所をとくと呼ばずに仕舞ひし故歌右衛門せん方なく花道へ入りしばしあつて花道より歸り來ること普く人口に膾炙する所爰に說く歌七は元加州金澤の浪人にて人品甚よく中年より役者となり上下容はべつしてよく寫れり故に此歌右衛門にても伊賀越の澤井城五郎にても今のやうに燕天かづらはかけず靑月代なり品柄よく衒とは見えぬ故四郎五郎も呼びかねたるが今例となりて誰がする時も呼びとめぬ也役ものを見立する作者の第一の心得也

安永後五十五十助爲川宗助中村阿契津打亭助筒井半二增山太郎七春木元助竹本三郎兵衛佐川藤造（江戸魚丸）市岡和七（後江戸へ行市岡禎記）是らの人皆建造りとなるべき才足らず殘り多き事なりかし

小幕滑稽書樣の論

曩に云喜怒哀樂の四情の外に小幕と號して道外色敵

半道等の勤る齣をかしみを旨として作る事也是を此道に遊ぶ人まで手輕く書ける樣に思へ共謠曲亂舞の狂言淨瑠璃の滑稽齣とおなじく來賓を笑はせんとて下がゝりの惡身差あひの事をいへば誰も笑ふものなれど夫となく腮をはづすばかりに笑はせるはいとなしがたき業也東都の風來山人(平賀源内福内鬼外)の洒落本皇都の銅脈先醒の狂詩以來滑稽本年々歲々出板すといへ共十遍舍一九が膝栗毛初篇より四五篇迄本町庵三馬が四十八癖浮世床に限るべし狂言の四情は求めず共自然に有(異本此小幕ををかしがらせんとすれば今時の俄茶番の如くなりて拙し)小幕師とて古より芝居には絕ず一人づゝはありしもの也大松百助といひしものはいつも狂言に舞臺にて物を喰事をする故今小兒食滯せし時は大松が過し杯いふ中古にては中村治郎三中山文五郎(やんまといふ)坂東岩五郎(坂東壽太郎親)大谷德治其後は淺尾友藏(後奥山淺尾國五郎と云)中村友三嵐團八桐山紋治(始利八と云て幇間なり)等各顏つきよりをかしきとか形の不束なりとか見付所ある者を見立書事也此うちにも中山文五郎大谷德治を此道の名人とする也近來の滑稽役者は假初にも尿桶小便壺など穢きものを舞臺につかひ或は裸身になり陰囊を出さぬ計の惡身をする事を是とし譬は〻人に笑はせんとて脇のしたをこそぐり笑はせるが如きいと淺猿し近時は此役者もなければ作者は猶更なかるべし狂言の書習ひに小幕なり共書せよとは了見ちがひの甚しと云べし書にていはゞ細密なる畫を書盡して麁畫輕がきの墨畫を書が如し練磨の功を積ずば書事あたはじ文五郎(俳名美男やんまといふ)が大船久右衞門ひよつくり兵藏藤屋伊左衞門德治が湯屋泥坊治郎三が諸葛幸平の正本を見ても嘸かしと思はれ獨腹をかゝゆる事也昔咄の中に或人鰻を料理せんとてとらへしが手の股より首を上へ出しけり左の手にもつ又上へ首を出す又右の手にて段々に握りなどする內鰻に付て空へ上り終に雲の中に入つて戻らずなりぬ翌年それの月其の日一周忌の追善の半へ空より短冊一葉落ければ見るに一首の歌あり去年のけふ鰻に付て昇りしがいまだに空へ上りこそすれ裏に兩手叶はず候ゆゑ代筆にて申上候と書たりける此話など品よくてをかし小幕の滑稽を書はかやうなかたちに有たき物なりかし又新作の歌舞妓狂言に一齣か半齣かは淨瑠璃の文を書入るをちよぼ入といふ是は始趣

向の內に其役者を見立操仕立になくて叶はぬ事あり其時は淨るり（ちよぼ）を加ふべし文句は成たけ役者の振りの仕よき樣に書べし餘り文花になづみては舞臺のびて面白からずさればとて自他のわからぬ院本は書べからず歌舞妓の來客にちよぼの文句まで聞とる人はなけれども院本に氣の有人は批判を言ふもの也

異本、中昔迄は歌舞妓は淨瑠璃の眞似をせず淨瑠璃は歌舞妓を似せず續耳塵集民屋四郎五郎俳名江音の撰の中に音羽治郎藏は淨瑠璃に仕立ることを遂にせず其故は元來操淨瑠璃は歌舞妓を眞似て語り人形も役者の眞似をして行ふ也然るを歌舞妓より操を眞似と歌舞妓衰微の基なりといへり澤村長十郎宗十郎の祖也も其心にや淨瑠璃事を勤むること嫌ひなりしに銀主より望つよく國性爺に新四郎故姉川の祖和藤內長十郎甘輝の役元より心に入らぬにや當らざりしとなり死物の木偶を活たやうに使ふが故近世吉田辰五郎はおやま遣ひに妙を得故人の格を外して端手に遣ふ來的丸で活てゐる樣など悅ぶ是尤なり今歌舞妓役者やゝもすれば道具まで木偶舞臺にて手摺を出し黑子の後見人足音をさせちよぼ太夫出語りにさせ人形仕立にするを是とす重井筒上の卷四ッ辻などなり其後我も〳〵と木偶を眞似る來的も取違へ丸で木偶じやようする抔と譽ることはなりぬ活物の役者人形の死物の眞似をすること手柄なるまじと思ふ近世中村歌右衞門梅玉のこと竹本組太夫藍玉のこと同座にて娘景淸八島日記島の場吉田千四に遣はれ首振をせし話あれど後編に讓り略す

所作事に歌と淨瑠璃所謂豐後掛合等の折は歌淨瑠璃異本歌豐後と有の文句ども成たけ筆力を盡して書べし後々節付のうへ世上にも彈諷ふものなれば拙文にては心耻しくなるもの也狂言により謠を囃子に遣ふ時は內外の內正しき謠を遣ふべし新作の謠には節付あしくて聞にくきもの也淨瑠璃にても新うた獨吟の歌等にても新作をせし時は役者へ書拔を渡す迄に早く床淨瑠璃三味線囃子鳴物方頭一人有へわたし節付出來次第に先へ聞べし文句のわからぬなりに非言を語り諷ふもの也是は冠字とか故事人名とか言聞せ語路の運びを呑込せ置ねば作意に違ふ事多し心得べき事也建道具も手放れ次第ぐらせよく見屆置ずんば書割等に誤りあつて貧家のあし

らひに築地塀足代垣を置あるは貴人の舘に世話欄間をかけ夏の山家に雪持のかき割をし能舞臺の橋懸りを左右に付なんどする事まゝ有惣稽古にさしかゝり造作多き時は初日のび混雑するもの也かゝる誤は作者の不穿鑿となる事也道具付を渡すとき棟梁と對談しよく〳〵誂の道具は言含め置べし

西澤一鳳軒が傳

我父西澤一鳳は祖正本屋太兵衛の二男は上久寶寺町三丁目に住其節賣出す院本の奥書にも音節は此道の父清濁は文句の母なれば正本まことに珍重すべきもの也豐竹上野少掾と印せり其悴九左衛門俳名一鳳の奥書に傳奇新法判意扮戯未生且淨丑淨寓基授文儀共武儀凛耶活手段具託弦誦談又伍齣付可笑樂院本掩的詞曲者清倣之云耳豐竹越前少掾（本ノマヽ）大坂心齋橋南四丁目西側西澤九左衛門板と印此外に右傳ふる所の正曲の調は節博士何れも其品多し七行和漢大字のかなづかひを世間あやまりて斯く類板を出す甲乙てにはの違ひ纔なりとても正本にあらず此故に西澤九左衛門義敎改て梓に壽き予花押の記を添る事しかりとも印せりこは寶永正德の頃なり後享保の院本には（異本右謳曲心通俗爲要故文字有正有俗且加文采節奏）爲正本云爾高弟豐竹越前少掾豐竹筑前少掾江戸大傳馬町三丁目鱗形屋孫兵衛大坂心齋橋南四丁目西澤九左衛門板と記せり一風著作のものは南水漫遊といふ書に萬石通の小野屋膏藥の連ねを賞曲亭が燕石雜志種彦が用捨箱にも見えたり享保に死してより悴九左衛門其子利兵衛と連綿のうちに內本町二丁目に宅を移す夫ゆゑ本町本利と呼けり父祖より院本の板元なれど明和安永の頃院本大に廢りて歌舞妓專ら新作興れり依て父祖の志を一變して戯場を好み作名を一鳳と呼び歌舞妓はじまりて以來の書を集め作者奈河龜助並木五瓶近松德叟辰岡萬作芝屋司馬叟を贔屓にして筋書を渡し書上げさせ本讀內讀にはいつも首頭と並んで一番に聞添削をする事例となりけり戯場の書を筋書とも詞書とも根本共臺帳ともいひ三都の作者俳優のみ讀事にて他見をゆるさぬ物にてありしを素人の好人にも讀せ後世誰々が書きしと作者も殘れかしと寫本に製て一部毎に讀方の通言を書▲（てんがき）一の下にあるせりふを點書と云やくしやめい〳〵のせりふがき也▲（とがき）トの下にある文をトがきと云役者のはたらき心得

を書く也▲ムり舛（ござ）御座りますの略字にて至急の作文なれば也記錄書に倣▲塑（こなし）その場合相應の仕打銘々の振りにてするをいふ也▲立廻（たちまはり）ちよつと切むすびあるは摑み合ふなど世話だち共大勢立廻るを大立とも▲思入（おもいれ）詞を一寸思案するを氣味合こなしに似て又思入はべつなり▲宜（よろしく）その場の樣子當意卽妙を云▲疾々（しかしか）とく〳〵とよめり手早きことを云▲見（みえ）何となく見物への見へよきをいふ▲留（とゞ）立廻り或は詰合のとゞまる略語也▲丁々（はたはた）組子とりて出ぬ内よりかげを打を云▲合方（あひかた）役者せりふの内のあしらひ▲唄（うた）舞臺へ出這入あと合方になる▲返し（かへ）まくなしに道具かはる▲鳥屋（とりや）花道の口▲橋懸（はしがゝ）り右の出口中古まで舞臺は四本柱有てはし懸りあり能舞台の如し▲臆病口（をくべうぐち）左の口ゆかの下▲向（むか）う花道▲屯々（ちよん〳〵）まく引拍子木▲留（とめ）の拍子木是にて幕開くとか又せり上るとか▲心意氣（こゝろぬき）じつとなる樣々あり呑込す早める屹度（きつと）なる能所（よきところ）抔いち〳〵讀方を記し賣出せしゆゑ今時の如く弘まり梨園など來賓に出難き貴人方にも讀又遠國の田舍芝居にも筋立言合せの世話なく正本を持行事となりぬ故に今我家號を呼んで三都ともに正本と云ふ文化九申年臘月四日に歿して釋淨西と法號す此年の夏東都狂歌堂眞顏天明ぶり狂歌連四方連の宗匠鹿津部の眞顏俳諧歌場と稱す息柳亭千萬多畫工辰齋浪華に遊歷の内狂歌の友たるがゆゑわが内に宿せり其頃の俳優も風雅の友に加へ四方連を組吉野和歌の浦を始祇園會天神和歌祭に誘引して仲秋東都へ歸國に及び留別の會の折から西澤の家號に倣ひ正本仕立のかたちにせし狂歌の摺物を製し風交のかた〳〵へ配りけり外題に東都の書方を交へしは狂歌堂主に送るがゆゑ也正本に因みあるゆゑ爰にあらはす當る申秋狂歌浪華土產月名殘本町橋の場、雛雄、辰齋、眞雛、珉子、眞顏、かぶら坊、千萬多、年布留、魚鱗、眞垣、百成、璃寬、太夫本とは父一鳳也造り物舞臺一面の橋舞臺先波板下座の方障子屋體椽先に三寶かざり付いつもの所へ月出ると幕あく仕出し大勢出で△一、噂すれば影さす月の太夫さん○一、アレ〳〵そこへ見えるは〳〵珉子一、さし向ふ月の桂の花道の、程よき所に峯の松がえ魚鱗一、珍らしや今宵くまなき月のまへトヒヨ〳〵と雁ぞ渡れるまがき一、月にとぶからすのみかは鳩までも戶屋の内にてばた〳〵とする雁いち羽おつると月の辰齋一、あり〳〵と片敷袖や宿のさむしろ百成一、宵の間の黑まく切て落すより仕かけの月のいでゝさやけきチヨン〳〵で道具も廻る吉三郎一、盃の顏も傾く山の端の月下座の藪たゞみよりぬつと出て本り一、月のひかりはようムり升年ふる一、遠ぜめは宵の程より太鼓三味月は峯にぞせり上となる眞ひな一、月にほれまだしき宵と詠むうち夜あけの鐘のごん〳〵となる ひな

を一、いつしかに今宵もふけて月はゝや深山の奥へツイト這入れり無坊一、鎗ぶすませうじ取のけ見る月に氣も浮瀬で大立と成る折々に月をもてなすこなし有てちまた一、あやしき雲のふるまひじやなァ立かゝる雲を見事に投のけてうた垣一、かまはずとゆけト月にいはまく

文化九年壬申八月大吉日日數六十餘日大々叶

狂歌板元　西澤一鳳

右の内眞雛といへるは家兄利兵衛幼名助市俳名を鳳堂と呼けり此年の冬一鳳死したりと東都狂歌堂へ申送ければ浪華土産の外題と同じく月の名殘にて有けりと眞顔よりも申來りける鳳堂眞雛も父の跡を繼し所天保十一子年二月廿九日歿す法號は釋鳳音存生の句を探れば「元日もやすまず暮ぬ水の音「漏屋根をついでに直す菖蒲哉「染まで霧の香嗅し野の祠「もちつとで時雨にあふぞ瀬田の橋次男利助幼名利藏幼少より戲場を好み堺筋通清水町に住で書林正本屋利助（書林榮海堂は義弟に讓り）父の名を繼ぎ西澤一鳳軒又狂言綺語堂共呼けり俳名は秋聲庵滄々始蒼々亡父が良闇忌祖一風が本然忌に當りし時先中村富十郎も五十年に成ければ追善には女鉢木の增補を著せり其時の番附を摺物にして今の慶子より配れり

五十囘忌の追福も實に光陰は矢車の紋所其緣に寄る段書は

加賀の梅田による御馴染の定紋越中の櫻井に寄る

御存知の の替紋上野の松が枝に寄る

御贔員の の誂紋

會稽雪後日鉢木 本領合 三ケ庄

將其時の着到に離具足の武者ぶりは思の外な焚火の返報情にこもる三木の其名芳經世が忠心

扨も其後の雪降に細布衣の艷容姿は以の外な子故の愛着筐に殘す三人の其名懷し白妙が貞心

捻梅の紋は梅玉佐野源左衞門經世、裏櫻は淺尾與六の紋にて佐野源藤太經景、光琳の松は今の慶子元松江共常盤とも言ひし頃よりの紋也父祖の狂言を飜案して改名李叟とよぶは幼名利藏と呼びしゆゑ也

又天保の始の頃東都戲作者花笠魯助浪華に來り催主

となつて一泉(皇都東山眞葛が原寶茶園一服一泉)金澤龍玉(梅玉)等と共に本讀會をせんと謀りしも魯助(俳名文京)は東都に歸り梅玉一泉も故人となり畫瓶とはなれりける

閑らくのつらね

天保辛丑の春予東都に趣き著述の內其冬中村座(堺町)市村座(ふきや町)の戲場燒失しければ暫の連ねに倣ひ閑樂(ひまらく)の連ねを演て戲れし事有圖を紋にこぢ附鉢の木の梅も櫻も榾(ほだ)と成雪を明りに冬籠一陽松劇場(いちぎのはるのまつのかほみせ)第一番目に書て三建目源藤太經景に西澤李叟新場座(しんば)と印し夫好は阿房に似て飛て散財し人は色情に依て徘徊す元より名題の惰け者梅の浪華の西澤から花の吾妻の名所を兼て見たさの雪の暮古鄕遠く立出て勸めに

新狂言月並本讀會

湖上の李笠翁は唐山編戲文漢其雷名を耳にきこらいびんかん多冊の傳奇を編て世に傳る事夥し平安の自笑其磧は皇國の戲作を編出操淨瑠璃の劇文も門左一風に益開け出雲半二に愈巧也夫よりこなた歌舞妓の脚色も口建したる往古はしらず正本に詞書仕肇てより江戸に菜陽三笑あり浪華に正三龜助有其他は邂逅作名ありといへ共皆牽合附會たゞ糟粕を嘗るのみ元來演義小說は文人才子の偶然に成ものなれば或人の勸に隨ひ一日の狂言一回の趣向慰がてら作意ある諸君子一場づゝ御認有ならば催主の幸福甚しからんといふ時代物世話物御草稿の上新古に拘らず連續致候分は判者校合有て御作名のまゝ狂言に致させ申候以上(以下異本になし)淨瑠璃は節附相成候て出板申候間役名は誰々と大座に御仕組の上催主迄御知らせ可被下候

助聲　奈河一泉堂

判者　西澤一鳳軒

會席　例月なん十八日ば　松の尾

聽衆　歌舞妓上るり惣役者中　太夫連中

催主　金澤龍玉　花笠魯助

異本こゝに閑樂のつらねの圖あり

ふわと乘物町歌の名におふ成駒にまてと一聲かけられて袖打拂ふも古嗅く客をふるのは女郎の野暮ちぎれ具足のつぎ合せ古狂言に飽果て新場の魚の朝市に柿の素袍や烏帽子籠市川の流れ一樹の影逸物の木ばに跨長刀ならぬ切筆追取勝閧上げて着到に罷出たる

某は祖父が作意の北條時頼記子々孫々に至るまで道崇殿のもて餘し源藤太經景といふ難作者當年積つて十八歳もひとつ重ねてやがて四十に手が屆くも何と若いじやムり□んか明暮遊ぶ一鳳がもふいくつ寢て正月と松梅櫻三番叟三座は此身の三箇の庄是が株木の大太刀とホヽ敬白

文化十酉の春より卅餘年の此のかた戯場に遊び傳奇脚色する事十萬言に過たり櫻はいつも白雲と見紅葉は常に錦と詠め夏雪を降らせ冬帷子の物好は幼稚すかしの化物話にひとしく狂言綺語の變體取るに足らざらんや始璃寛梅玉に趣向をたてそめ巖獅慶子が首領の劇場に筆を弄び東都にては白猿翫雀が首領の梨園に戯編をのべ此春筆をとゞむるに就て竊に己が著作の大概を告る是自得の見にして初入の門子に授るのみ

時天保癸卯年晩春　西澤狂言綺語堂李叟

劇場傳奇作者新狂言を著述の時は本文に出せし如く初めに世界寄をして筋書仕組(仕事にかゝるといふ云)内讀(草稿のまゝ本讀よむなり)此内役者のあつらへを聞狂言納まれば看板外題を出す次に書抜讀合より稽古にかゝる此内道具附衣裳附小裂附小道具附は狂言方にさせ番附書本等をする内鳴物節付調ひ稽古かたまりし時中ざらへ又附立とも云ひつ幾日より始ると日披露(ひびらう)を出し惣稽古これを惣ざらへとも足揃とも云翌日初日なり出揃目出度打納めの日を千秋樂と云此餘に口建(くちだて)ぶつゝけ小返し等急稽古の時に通言あり又狂言を書ても遣はざる時は是を御藏になりしと云

西澤文庫傳奇作書初編(言狂作書)下の巻終

西澤文庫言狂作書跋（此跋異本になし）

玉の貴き瓦の賤き三歳の嬰兒もよく分てりされど玉に朝鼠あり瓦に銅雀あり爰に此一帖古へ今の俳優に筆を弄び思を述し人々の傳をあげ其玉の屑其瓦の美なるものを集めものしたれば塞翁もみなむ日あらば樂しむべし褒姒も見る時あらば笑ふべし我樂しみ我笑ひて其しりへに一瓦を添ふ

白髪少年場の主

西澤文庫傳奇作書拾遺叙

往昔北條越後守平顯時は武州金澤に文庫を營建して内に和漢の群書を納め儒書には墨印佛書には朱印を用ひ世に金澤文庫と賞し上杉安房守憲實再興有しかど荒廢して今は書籍散失せりと聞此西澤文庫は予が友西澤李叟が其祖より傳はる竹豐兩派の院本は素より八文字舍が戲編を集めもて墨印を押亡父の集めし三都戲場狂言の正本には朱印を押數萬卷の書を綺語堂に藏むる實に西澤文庫の名僞りならじ曩に天保癸卯の春康熙帝が天地一大戲場の聯句を世事是狂言綺語と賦し言狂作書三卷を著し翌甲辰の冬なにはづに作者此度冬籠と自詠し讃佛乘三卷を輯錄せしは狂言綺語堂の謂なるべし弘化丁未再び東都に遊び此夏歸坂して紀行の狂詠戲文を集めて綺語文草五卷讃佛乘の二輯三卷言狂作書の拾遺三卷を著す李叟は幼名利藏と云しにや湖上笠翁を象る物歟書肆の通號を本利と呼て遊戲三昧風流一鳳軒傳奇脚色の名を賞して

月雪に花に日本李笠翁

時嘉永己酉初冬　洛東山の隱老

白髮少年場主識

西澤文庫傳奇作書拾遺上の卷

目次

一俳優者七部の書の事
一昔狂言浪人盃の筋書
一同氏神詣の筋書
一北の新地五人切の實說
一雫庚申桂川情死の話
一南北が遺稿極樂の連
一江戶作者三升屋二三治が咄
一同　自墮落の連の寫
一東都戲場名題付方の法
一同　役者年曆珍重記
一同　三梨園樂屋雜書
一木村園次村岡幸治が話
一戲作者著編拘欄話の論
一聲曲類纂の作者名寄
凡十四條

西澤文庫傳奇作書拾遺上の卷

西澤一鳳軒李叟著

俳優者七部の書の事

役者論語に舞臺百ヶ條を著す元祖坂田藤十郎師匠杉九兵衛と云花車形の書置く書にして心得を云藝鑑昔の作者富永平兵衛書置る書あやめ草元祖若女形の名人芳澤あやめがはなしを福岡彌五四郎後人の爲書とめたる書也耳塵集名人のはなしを金子吉右衛門しるす續耳塵集民屋四郎五郎江音書とめし書賢外集染川十郎兵衛の俳名を賢外と云聞覺しはなしを狂言作者東三八書置る書也佐渡島日記蓮智坊と云は佐渡島長五郎の法名也昔今藝者心得になる事を云右七部の書は俳優家の龜鑑なる物安永五申の秋八文舍自笑の板なり藝鑑に曰何事も時に隨ふ習ひなるにわきて狂言の風は時代品替れり昔狂言盡の頃古今大當りを取し浪人盃氏神詣の狂言こそ古風なれ

昔狂言浪人盃の筋書

萩山の家中高坂采女といふ武士馬上にて使者に趣く途中にて道の景色などほめ家來迄せりふ渡り采女が曰向うの舘は聟君のお國なれば國境より行義正しく何れも麁相なき樣にといへば皆領掌の答あり謠に成ると采女馬を廻らししと〳〵行向うへ深編笠着たる浪人者あゆみ來てしほ〳〵と平伏すれば家來咎めて何者なれば慮外もの笠を取て片よれろといへども答へなしイヤ推參なと侍共よらんとする所を采女ヤレまて〳〵彼者我に向ひて平伏の體見ゆれば是全く慮外にあらず去ながら笠をとらぬは心得ず是そな男某に向ひ用有氣に見えたるはいかなる人にて何の用事子細きかんとありければかの男諾て采女殿には御堅固の體先以て大慶至極以前御懇意の拙者なれど年へたれば聲も聞忘れ給ふべし今日此道筋を御通りと承りあまりおなつかしさに最前より待受御馬先に平伏いたし乍ら御勘氣を蒙し身なれば顏を貴殿に見せるも恐れ有又面目なく存慮外の編笠まつ平御めんと詞の內采女つく〴〵思入有てむゝ扨は貴殿こそ以前の傍輩轟辨右衛門殿な此方もなつかしく存る某は御用の道筋馬上は御免編笠を慮外と申にあらずお顏が見たいお斷の段何かくるしかるべきさあ〳〵笠を取給へ辨右衛門殿に違ひはあらじと詞かけられ扨て〳〵よくこそ御推量いかにも辨右衛門が成の果お恥かし

やと笠とれば先は御無事でおひさしやと互ひに經りし物語聊の事にて勘氣を得られし貴殿申出さぬ日とてもなし何とくらし給ふやと問はれて辨右衛門あゝ忝なき御詞浪人の身なれば朝夕の煙もかつ〳〵習置し謳の袖乞無念とは存ながらもと諫言過て御勘當かならず時節を待れよと其元の御詞をたのみに今日迄命永らへ候也御上使とあれば殿の御名代御目見いたす心地仕る是を浮世の思ひ出に致す了簡隨分御無事に御勤あれおいそぎの妨名殘りは盡ずお暇と泪ながらに立行を暫ととゞめ仰の如く今日は殿の御名代追付御勘氣御赦免有て所領安堵の印の盃を致さんハツアこは有難しと又手をつけば采女扇をひらき途中の馬上取あへぬ心ざしの大盃いざ〳〵つげと小姓にいひ付れば同じく扇を銚子としつぐ思入呑こなしさあいざと辨右衛門にさす此お盃といひお志の深切いつは呑ずとてうどたべんと三度戴き呑思入有て時刻うつると立ざまにお志の御酒に醉たりと足もとひよろ〳〵國を祝ひ禮をいふに舌廻ず小歌ぶしこなたは馬上に泪ぐみおさらば〳〵と別れ行幕

此一段にて狂言大當りせしとなり此餘昔の狂言は多く衆道の趣向有けり若衆形の立ものは若女形より高給金なり其時分には町々にも衆道はやりし事は自笑其磧が兩作の傾城禁短氣に男色女色の大問答などあり讀て見るべし

同氏神詣の筋書

殿さま氏神詣遊され六法の出所作あり跡に曳馬行列踊り其頃の歌二上り殿のお馬はさび月毛連錢あし毛鹿毛かすげしと〳〵打てばかけあがりお江戸そだちの髭男お馬の口をしつかりとつりてん〳〵髭男つりてん〳〵〳〵つりてん〳〵りん〳〵〳〵りんとはねたるいさみ馬つなぎとめたる戀のせき札と此唄にて舞臺へ來て殿皆々太義じや休め〳〵家來手をつき先殿樣には神主方にて御休息と歌にて皆々はいる奴共はけしきを詠め小姓の器量を評判して艷之丞がよいいやおらは友彌殿に惚れたと色々噂するを侍出何をたはこと御小姓の噂今一言いふてみよと咎られてそりやこそと跡を見ずに逃這入れば神奴お神樂々々と呼はりて侍はいる所へ艷之丞出て神前に向ひ拍手打主君國家太平御武運長久と祈念する折から茶道珍才うしろに立艷之丞が袖をひき小聲に成てそのも

とのお爲を申さん殿さまの御寵愛は其もとお一人と思ひしに此間は專ら友彌殿に御鼻毛を延し給ふ拙者はお使に參るこなたは神主へ參れと仰付られは跡にて友彌殿と殿樣と契らせ給ふはかりごと御油斷あるなと焚付てお使に走り入艷之丞腹を立樣々友彌め憎やはらだちやと妬のせりふある所へ殿樣おたちといふ內に家來數多出て並ぶ殿立出給ひ友彌に仰せて艷之丞を呼給へ共返事せず殿見給ひこりや艷之丞もはや歸らう是へ參れハウ爰へこいと手を取引よせ給へば艷之丞物をもいはず殿の顏を見てふいとふり切橋懸りへはいる是は扨きやつもついと行おつたと草履取を呼給ひコリャ艷之丞の仕方はどうじやあろと思ふぞと尋ね給へば草履取又殿の顏を見てふいとふり切ついとはいるかくのごとく家來共を一人〳〵呼び問給ふに皆々同じくふり切はいる扨もめんようなる今ははや引馬計りに成たと馬を引よせこりや馬よ何と艷之丞がふいといた心のどうであろと思ふと問給へば馬も殿の顏を見てついとはいるが幕（引カ）

今思へばかやうな狂言が大當りとはおかしな樣なれ共その頃の見物かゝる狂言をあつさりと面白く思ひ又役者もかやうの狂言をよくこなし勤けるとぞおもはる

北の新地五人切の實說

元文二巳年薩摩の侍早田八右衞門大阪北の新地曾根崎三丁目大和屋十兵衞夫婦並櫻風呂抱へ菊野と云女郎下女二人都合五人を殺せしあらましを尋ぬるに八右衞門菊野に思ひ込み段々と欺かれしより事起りし也八右衞門は留守居に付添ひ登り居たるが（留主居の與力也）此年の五月に歸國の日限來り留守居と共に國元へ歸るべき所國許より時計のお誂へ有之ゆゑ先達て竹田近江方へ誂へ置しかど甚だ六ヶ敷細工なる故出來隙取止事を得ず八右衞門は大阪に殘り時計出來次第歸る積りなり扨留守居は彌明日御歸國とて銀主より北の新地にて振舞いたしける刻八右衞門も留守居と同道にてかの茶屋にいたりぬ銀主よりは馳走として藝子法師幇間其外野良まで呼よせ心を盡してもてなしけるに留守居の相方いよといふ女郎此節病氣にて引籠り勤なり難きゆゑ甚殘念に思ひ妹女郎の菊野に云々の譯を語り我代りに勤呉よと賴みければ菊野も世話に成し姉女郎の事故早速納得して留守居の伽を勤め

ぬ此時八右衛門は菊野を見染ぞつこん思ひ込て何卒我相方にせばやと思ひ居たりけるが座敷は手をかへ品をかへ走にて（走の上馳を脫するカ）各機嫌よく興に入夜も明方に成りければ暇を告て留守居は歸國の出船しけり跡に殘りし八右衛門は夕見染たる菊野の事忘れがたく夜に入るも昨日の茶屋は如何と思ひ大和屋十兵衛と云茶屋に行て菊野を呼に遣しけるに早速菊野來りて八右衛門を見ていふはあなたは昨日のお客人樣その席のお留守居樣の御連中逢舛事はおゆるしとふられて八右衛門は當惑ながらいや〳〵夫は苦しからぬ事かの留守居といふは此度國元へ歸られては再び當地へ來らるゝ事なしすりや昨夜限といふ物なりなどゝ詞を巧みにしていひければ菊野もかれが眞實思ひ込たる樣子故日柄内證の借錢の助にもと思ひそこ〳〵に相手に成て其夜は座敷計にて歸りける夫より八右衛門は晝夜となく通ひし故菊野も打解たる顏して簪買への鏡袋拵るのと金をせがみ取その上着物までも拵させ取る事はなれ共兎角病氣を言立逢はぬ樣に立廻りしこそ道理堂島中町錢屋善兵衛といふに菊野はふかくいひかはし居れば日柄紋日は八右衛門に買はせてその身はみす〳〵な病氣をいひ立錢善方へ行て忍び逢ふ事毎度なり八右衛門も初の程は左も思はざりしが我を出し拔錢善に忍び逢ふ事を聞其上誰がゑたりけん狂歌に「させ〳〵といふても安い薩摩櫛とけて菊野がすく〳〵と云ふらしけるが後には すこし違へて「させ〳〵といふてもあらい薩摩櫛すかぬ此身は讐身をけづるとしてもときやせまいと節を付三味線に合してはやり歌の樣にうたひける是に依て八右衛門今は早堪へ兼おのれ賣女め一討にして我も腹切死なん物と覺悟きはめしきつそうを伴助と云家來夫と悟り涙をこぼして段々異見いたしける故八右衛門も納得して先事濟ぬ然れども菊野にかゝり時計代の金百兩の内廿兩遣ひ捨て不足と成し故是に行當り當惑いたしけるが爰に傍輩の若侍に宅之進といふは八右衛門の親父に世話になり學問兵術の師範たるにより八右衛門とは別て懇意に交りける依之八右衛門が此頃の行跡合點ゆかずと思ひひそかに對面して深切に異見致し其上詰らぬ事もあらば申候へ手に合候義ならば何にても承らんといふに八右衛門大に悦び菊野に欺かれし始終及金子不足せし事迄不殘

心底を打明語りしかば宅之進も外ならぬ八右衛門が事ゆゑ早速金子調進してわたしければ八右衛門押いたゞき〳〵扨々忝此御恩死しても忘不申と懐中し最早此金ある上は當地に滯留にも不及明日歸國致すべしとくりかへし〳〵一禮のべて別れける夫より八右衛門は時計も取寄出船の用意を致し置て知音の方へ暇乞に廻りしが何方にても暇乞の盃とて酒を出せし故殊の外酩酊に及び猶又ゑるべの茶屋へも行んと小唄を謳ひ千鳥足にて曾根崎三丁目大和屋十兵衛方へ趣ける此節菊野は八右衛門が重ねて恨み有噂を聞万一あやまちあらんかとて親方より外の店へ預け置やがて八右衛門歸國なれば暫しの間忍びて夜ばかり馴染の客は勤居しなり扨も八右衛門は大十方へ來り暇乞を告其上にて菊野が事を尋しかば十兵衛妻とめ答へて菊野は京へ仕替にお出なんしたといふに八右衛門も誠と思ひ田葉粉一二ふく呑歸るとて表へ出しがそこ爰にて呑し酒ゆゑ盛醉に乘じて見世付女郎をなぶらんと新地中をかけ廻りてぞめきけるがかの我方にとあてし小唄を往來の謠うて通るを聞と忽怒りの心火くわつとせしが能思へば此地に居ざる菊野なりと胸を押へてそこ爰覗き歩行て歸らんとせし向うより菊野何心なくわしや大十へすまぬ客で行わえといひつゝ摺違ふ計に行過る頃は七月二日やみはあやなし掛行燈の灯の明りにて顔は定かにわからねど聲は聞しる菊野めのれ本ノマヽ振歸り見ればちよこ〳〵走りにて行後姿寸分違はぬ菊野めおのれ此まゝ置べきかと跡より付て來たりしが菊野は八右衛門をちらと見たるゆゑ急いで大十へ走り入其まゝ二階へ上り聲もせずして忍びゐる此夜二階の客は堂島錢屋善兵衛平野町繪屋仁兵衛幇間磯八仁兵衛相方湊といふ女郎と都合四人來合せて居たり依之菊野を呼にやり菊野は泊りの約束にて來りしなり扨引つゞいて八右衛門大十へ來り聲をあらゝげて大阪に居る菊野を京に居るというて武士を欺くかといふに妻のとめはつと思へど隱しかけたる事ゆゑ嘘付はいたさぬ京に居なさるに違ひはないと云に八右衛門彌怒り二階へ上り菊野めを引摺おろさんとは思へ共さすが武士客座敷へふんごむも如何と胸をおさへて然らば京に居る菊野が今此内へ這入りしはいかに我とくと見付跡より付て來たりと云とめ笑うて夫は湊さんじやと云いや菊

野じやと爭うて居る所へ家來伴助は土產物等買調へ主人を待共歸らざれば心元なく思ひ先新地を尋んと此場所へ來り樣子を聞て胸をいため何卒無事に旦那を伴ひ歸らんととめにむかいさほど湊に違ひなくばその湊とやらんを是へ出して旦那のおめにかけ候へと目でしらせければとめ早くもさとりそんなら湊さんを呼び升て參り升ふと二階へ上り湊にとくといひ含めやがて二階より連て下りしかば湊は八右衞門がそばに行最前松みよの門で行合升たはあなた樣かいなわたしや爰へ氣をせいて來たゆゑどなたやら覺ません私を菊野と見ておくれなましたかヲヽ嬉しと云に八右衞門はこやつも同じ穴の狐どももう了簡がとも思ひしが伴助の手前又場所も惡しと態と面を和らげいかさまさう聞ば身どもが見違に極まつたもうよい〳〵と機嫌を直し暇を告て表へ出おのれ夜更なば斯々と思案を極め半丁計來てふと見かへれば後より伴助付そひ來れば八右衞門立留りコリヤ伴助その方も明日國もとへ歸れば又と當所へ來る事成がたし最早今宵限りなれば大阪の女郎を買て國もとへ土產にせよと旅銀少々遣し見世付女郎を買はせ其身は一人と成り今は心安しと又新地中を步行夜の更るをぞ待居ける大十家內は手に汗にぎり居たりしが八右衞門機嫌直して歸りしかば各吐息をつぎ先安堵致しぬ錢善は最前より二階にふるうて居しが氣色あしきとて磯八を連て歸りける跡は仁兵衞湊と二階にとまり菊野はとめと下座敷の蚊帳に二人臥し其間に十兵衞臥臺所の蚊帳には下女二人臥居たるに次第に夜も更皆皆前後も知らず寢入たり扨八右衞門は既に丑滿の頃になれば時分はよしと立戻り十兵衞が隣の路次より這入裏へ廻り庭先の切戶を押はづし椽先へ來り見れば暑にや雨戶を少し開かけあれば直に座敷へふんごみ蚊帳の外より伺へば菊野とめは前後もしらず寢入ばなしすましたりと釣手の四てんを切落し蚊帳の裾を一つに束ねねぢ結べば袋に入し鼠の如く二人はいかにもがけども出る事叶はず聲を立る事(所カ)を蚊帳越に刀を次てぐさ〳〵と突ければワツと苦しむその聲に十兵衞目を覺しやれ盜賊よと呼はつて蚊帳より出る所を飛かゝり肩先一つ切付返す刀に右の腕を切落せばそのまゝ爰に倒れたり臺所の蚊帳に寢入し下女二人はなきさけびて逃出んとする所を八右衞門

走りよりめつた切に二人を庭に切り倒す二階には仁兵衛と湊最前より此のありさまを見て魂きへ手足の置所なくふるひ〳〵かけ廻り表の方の戸を明庇の上なる目かくしを破り是より飛下んといへど湊はとても飛ぶ事叶はねばたとへ切らるゝ共爰に居んといふ仁兵衛も湊をのこし置ん事不便に思ひさらばいづれにても隠れ忍ばんとかしこの押入の中へはいれば長持の上に蒲團をのせたり此ふとんを身にのせて二人は長持の上に忍ばんとする拍子に天の助け給へる命にやわづかにせまき長持の向うへ二人共落たりしが幸ひにして忍び居たり扨八右衛門は五人の死骸を片端より伺ひ少にても息あるを突通し〳〵て今は心よしと悦び猶二階に客ある體助け置じとかけ上り爰かしこ尋ね廻り釣たる蚊帳を引まくる拍子に傍なる行燈打轉て灯きへ眞くらがり物のあいろもみえざれば扱身をふり廻し探りもて押入の長持蓋引あけ扱身にて突廻れど夫と手答へあらざればかく蚊帳釣り寝たる跡なれば何にもせよ居るに違ひなしと猶二階中を尋ねめぐり表の方へ來りし所戸明放し目かくし板の破れたるに扨は爰より逃歸りしと思ふ折節鶏の音八聲を告るに心せき今は是迄と走りもとに行井水汲て刀を洗ひ身を繕らうて一さんに屋敷にぞ歸りぬ扨夜も明百姓小便取に來り見付かくといひしかば追々寄集り猶聞付て他町遠方よりも見舞やら見物やらその騒動大方ならず直さま御公儀へ御屆申是に依て早速御檢使下され御吟味の上相手は大體八右衛門に極り直に薩摩屋敷へ仰遣はされたるに八右衛門は早出船致したるにより早船を仕立追かけ早速召捕牢獄仰付らるゝ夫より明る午年二月十二日八右衛門死罪の御仕置に成首は千日に梟首と成り係り合ひの銘々も事相濟けり右の一件を廿一年立て淨瑠璃に取立薩摩歌妓鑑とて寶暦七年に出せり歌舞妓には國言詞音頭とて出す又薩摩歌五人切子とも外題をかへてせしかどもさ迄の當りもなかりしが淨瑠璃には木偶の名譽吉田文三郎（寶暦年間の人）が遣ふ八右衛門の人形樂屋にて夜な夜な動くなど人口に膾炙す安永六年淨瑠璃にて置土産今織上布と外題して右本文の通りを取組たり是を歌舞妓にとりたて初嵐元文噺とも呼けり此頃の濱芝居にはあれど佐久間源五兵衛（早田八右衛門の事柴崎林左衛門）中間伴助（家來伊助萩野伊太郎）笹野三五兵衛（傍輩宅右衛門百村友九郎）其餘錢屋善兵衛を

繪屋伊三郎とし菊野大十などは名を其まゝにして大當りを取けり此柴崎林左衛門は實惡なれど當藝多き名人にて八島日記の景清釜ヶ淵の五右衛門文月の八郎兵衛など古今になしと嵐小六（小六玉也）もほめしとなり（此柴崎の咄のちにとくべし）此源五兵衛にて五人切の所は故人吉田文三郎の木偶にせし通り死骸の腹の疵口へ思はず足をふんごみ足先に腹臟を引かけ上る思ひ入物すごき事見物身の毛よだちしと毎度老人の咄に聞たり此柴崎は實惡の役者なれば八右衛門の役を敵役にてする故かゝる凄みを思ひ付しものなり今專ら用る五大力の源五兵衛は眞立役なり一つに混ずる事なかれ扨前編並木五瓶が傳に出たる五人切は寛政六寅年中の二の替りに島廻戲聞書とて島津の狂言の繼に勝間源五兵衛に尾上新七笹野三五兵衛に片岡仁左衛門藝子菊野に芳澤いろはと見込本文に拘らず書て狂言の筋一變す前の時代の間は評あしゝ富市の場より毎日大入をする故奥だけを裂て後に五大力戀緘と外題に改三都に及び伊勢尾張にても仕はやらせる事とは成けり是五瓶の手柄にして五大力とは神か佛かの名にして既に住居神宮寺にありて其頃のやはり神なり狀の封じめに五大力と書て送る時は他見を忌て滯なく達するとて其頃は專ら流行しけり五瓶三五兵衛との役名より計らず此五大力を遣ひしが今五人切といはんより五大力の方通名となりけり元文二年より今年迄百十三年になりけり

霄庚申桂川の話

大坂新靱町の八百屋半兵衛嫁お千代と心中情死したるを直に霄庚申として出せしは誰もよく知りたる事にはあれど予幼少の時新靱の老人の話に聞しは實說も淨瑠璃の如く唯違ひあるは八百屋の姑婆には虫も殺さぬといふ程のよき人なり伊右衛門といへる老人もあながち惡人ならねど兎に角若い女好にて下女雇女を孕せる事度々にて嫁お千代を口說事甚しければ姑に是を告れどまさか男の半兵衛には此事もいひ兼年月を過す內半兵衛は用事有て遠方へ行長らくの留主中なれば舅伊右衛門かゝる折にこそ本望を達せんとてか晝夜とも透間さへあれば嫁をくどく老婆是を氣の毒に思ひ常盤町の伯母の方へ預け世間の人の聞ふ時には連合の惡性よりとはいはれずよん所なく嫁の身持家風にあはぬ故預けし抔答へけり半兵衛歸宅

の上は子細なくお千代も呼戻せしが伊右衛門ますます煩惱の犬の如く人めをかまはず口説聞入ざるを根にもちて養子聟半兵衛すこしの仕あやまちも仰山に言りけるにぞ老婆も種々と諫言しけれど伊右衛門は猶逆立物いひの絶ぬ故義理にせまつて暇を出し雪庚申の夜遂にはかなき情死をしたりとぞ淨瑠璃に書く時には老婆を惡人にせぬ時は憎み增さぬ故にや門左衛門の作意より善人がへつて惡人といはるゝも老婆の不幸なるべし又皇都虎石町の帶屋長右衛門信濃屋おはんの跡を町内の虎石町好者家穿鑿して百回忌の追善を營み遣はせしと云事以前隣町に住友より聞し事有是も歌舞妓狂言淨瑠璃とは違ひお半懷胎したれば身二つにせんと丹波の親類へ預んものと長右衛門付添ひ夜深く立て樫原へ行んとする途中にて盜賊にあひ旅用金着替等を奪とられ兩人共に害め殺され跡の死骸を心中情死の體にして桂川へ打込まれしなりとぞ其後盜賊相知れお仕置になると聞此狂言は安永元年歌舞妓にて立龍桂川と云是を堀江市の側此太夫座にて安永五申年淨瑠璃に仕組桂川連理柵とは云也近來お勘長三とておはん長右衛門の前生を拵らへしは月桂新話と云小說物より出たる也

鶴屋南北が遺稿暫の寫

本堂三寶の間七字の題目左右に四季の造花能所に淺黃の掛無垢をかけし棺を直し此前にいろ〳〵の飾物惣て南北葬式好の道具半鐘に連れ奉納の幕引あげる

ト直に葬禮の鳴物に成り向ふより袴股立棺脇四人蛇燈籠を持敷石の上に立並んで

一四人今度此度老人のよい年だけによい往生二つ合せてよい〳〵といへば四神は當りまへ夫にはあらぬ蛇どうろう四人一所に差かけべいか

ト又鳴物に成りみな〳〵本堂へ來る此時奥にて

一よび葬式の刻限

ト是にて施主みな〳〵宜敷住ふそれより

「今身より佛心に至る迄たもちたもつも法華經の御法の德や題目の利益の程こそ有難き

ト奥より假僧吳服屋へ誂の袈裟衣所化二人後に上下の世話人天蓋を差かけ須彌壇の前へ押出す是を見て

一施主是は

一世話人けふ御住持の他行により假りの引導

一假僧一天四海皆歸妙法落る所は法華一人の成佛と祖師の極めし宗旨のいしづえ皆題目をとなへろヱヱ

一皆々唯々御悔み申上舛る

ト此時向うばた〳〵にてのりおくれの施主高股立にて藥鍋と帛紗づゝみの短冊を持走り出で

一施主まつた〳〵成佛解脫の御引導暫御待被下升うけふ葬式の供にもおくれ參りしも南北をせめてま一度いかしたくそれ故持參の獨參湯かつは是なる辭世の短冊御覽被成て下され升う

ト假僧の前へ出すひらき見て

一假僧遺言に辭世發句とすゝむれど死ぬ氣なければとんと失念

一施主サア死ぬ氣ないとの歌の心何卒蘇生致させ度夫故持參の獨參湯

一世話人サア役にも立ぬ獨參湯呑せし上にて生るとも年をかさねし上からは苦痛をさせなば大きな罪さすればこなたはきどくな罪だぞ

一施主きどくの罪との一言に手出しもならぬかトほろりと思入

一世話人いらざる落るい黃泉のさまたげいで此上はいそひで香刺引導終らば施主のめん〳〵とく〳〵燒香

一委細畏つてムり升

トどろんと葬式の太鼓に成り施主きつと成て股立をおろし幷能居並ぶ假僧たいまつを持て棺に迎ふ所化髮刺を持控へる此內始終わや〳〵と題目の聲よろしく有て

一假の浮世に假僧が祖師の利益をかうべにいたゞきいでや冥途へ導引かん

一寺法なれば佛を改め香刺せん鶴屋南北今が坊主だどれ

ト立かゝる此時棺の內にて

一南北香刺しばらく

一世話人いや〳〵まて〳〵今香刺引導一時に成佛させんとする所へ

一假僧しばらくと聲をかけたは

一皆々何やつだヱヽ

一南北しばらく〳〵

一皆々暫くとは

一暫らく〳〵しばらプウ

かゝる所へ往生なしたる南北が

トどらによう鉢に成り棺の内より南北いつもの佛の拵にてひよろ〳〵と出でべつたりすわり

「得入無上どう行か踊みもならはぬ六道をまごつきあるく有様はかなしくも又あはれなり

トよろしく有て住ふ皆々是を見て

一世話人まて〳〵今暫と聲をかけのたくりつん出た佛を見りやア黒船のぢひさんだななぜ香剌を受けないのだエ、

一南北葬禮南北卽身成佛天地乾坤の其間に人たる者の死なからんや命は自分の持まへにて當年積つて七十六歳何と死にはまだ早ひでは厶り升せぬか早いがお徳此上に生て逆さま有時はうき目三升に業恥を柿の素袍にかき衣帽子筋隈ならぬしづわらは猿が人まね何事も無學文盲戈もなく書く狂言はそれ佛又は葬禮度々に出した報ひが廻り來てけふは此身の葬式にお出の御方へ清めのため一ばんさきに拂ひ升う一夜置たら青々と鶴は線香龜は末香東方作者はついにがつくり浦山しくば御同道三浦の大助明六ッから七字唱へて八苦の患を十でとふとふ往生致すとホ、つらまつて坊主

一世話人扨はこいつは魔がさしたな差詰引立はお迎ひ僧があたりまいで厶る

一施主誰かれと申さうより施主の事也且は皆様へ御禮がてら惣一座で參らう

一南北イヤ〳〵わいらが行くにも及ばぬ折角御出の御方々へあまり失禮だ爰は一ばん新らしく晩には佛が自身にゆくは

一みな〳〵ヤア、

一南北夜はこわいからひるま出るぞ

一みな〳〵ヤア、

一南北旦那寺からすぐにゆくぞ

一みな〳〵ヤア、

一南北同年の衆は用心しろ

一みな〳〵ヤア、

一南北去らば棺をばかき上げべいか

ト葬禮の鳴物に成り本堂の眞中に居直りがつくりと往生する是を木がしらに題目だいこに成り此折家主袴羽織にて出で

一家主東西〳〵どなたも遠方の所御苦勞に存升まづ南北はこれぎり
ト是にて葬禮おひらき

七代目三升印

銀世界蕪のぼさつの立作者

魂祭之砌任聖靈之幸便一筆啓上致候亡者事も無異儀極樂往生致松綠菩薩樂善菩薩御世話にて早速菩薩の仲間入蓮の臺の借家住然るに勝兵助源八瓢七の菩薩達被參世話致し呉候うち二代目俵藏も參り殊に皆近付の菩薩達何不自由なく歌舞の音樂にて遊び申候なれども鱧もこち(たべヵ)付ては鼻につくとやらちと地獄へといて見まほしく皆々打連參りしが彼方も聖代のしるしにや罪人もすくなく閻魔どのも噺し相手のほしき最中大歡びにて閻魔王宮に逗留のうち先達て參りし二代の松井幸三地獄へも落ず極樂へも行ずごろつき菩薩となりはや牛頭馬頭とも心安く地獄の事なれば鬼殺はなく三途川といふ銘酒を呑あげくの果が赤鬼の虎の皮の褌をそふつ(さんづヵ)の姥の處へ質物におきあちらでも困り申候扨閻王申さるゝは此土に長く住めど未だ暫くをも(と云ヵ)狂言見たる事なし極樂には元祖よりして代々の團十郎菩薩も居られ候得共地獄より極樂へ呼寄るもいなものなれば打すぎしが皆々參られしこそ幸ひ打寄て暫くの狂言がさせて見たいとの事達て辭退仕候へども再三の進めいなみがたく閻魔のうげ赤鬼と幸三の中受えらの圓八鮫坊主源八其外太刀下にて爺の暫と役割致し候所地藏菩薩の申出されしには我に濟度の節承り候はとかく早桶が出ねば南北が狂言の樣に思はれず殊に葬禮の暫くまだ聞ず是非其仕組が見たきとお好にまかせ南北往生記と申名題にて仕候亡者御近付樣方へ別紙狂言自作のつらねを奉御覽入候乍去御心遣ひは御無用此方へは何も屆不申先は盆便之時待候空々寂々鶴屋南北事一心院法念日遍信士右暫の連ねは前編に解く鶴屋南北始勝俵藏生前に寂光門松後萬歲とともに書置たる遺稿にして躬直江屋十兵衞も南北歿せし翌年死したりければ二代目勝俵藏一周忌と祖父南北が三回忌に摺物にして配りたる也孫太郎といふは今の南北也後二代增山金八松井幸三樂善菩薩坂東彦三郎俳名薪水勝兵助勝井源八始勝周藏槌井兵七後二代增山金八松井幸三讓屋の二代新幸皆此頃死したる者故文中に出せり祖父南北合卷雙紙物を書

高砂町に住し故名を姥　尉助と呼びたり（極樂のつらね繪番附略す）

三升屋二三治が話

三升屋二三治は原淺草　御藏前札差し（にカ）て旗本衆の相應の暮しの人なるが此道に入て終に業を捨て今に存命なり世に藏前者といへば一流立て往古十八大通抔とて浪花に云堂島そだち抔の類にして俠客有祖父南北と親しみ深く互ひにおかしき新らしき趣向を負じおとらじと思ひ付果は否がらせる事のみを案じてある秋南北風邪の心地とて臥し居たるを見て二三治宿所へ歸り其頃奥詰御醫師に吉田快庵と云は二三治至て心易ければかの御典醫を頼みて本供にて南北が住所高砂町の裏店へ長棒の乘物にて行南北病氣ゆゑ二三治より頼みによつて見舞ふと案内させて入ければ南北驚き床の上より這出で恐れ敬ひ誤り入る典醫は御立にて跡に若黨中間兩人殘り酒代を乞ふ南北再び惱りしていかゞしてよからうやら始て御典醫の御見舞に預り當り付ねばいか程と問ふに若黨何れの町人にても金百匹也と云に詮方なし一歩出して歸し此徒らこそ正しく二三治が思ひ付にぞむやくしゝとて二三治白銀清正公へ月參して聖り坂に大野屋と云水茶屋有爰に美しき娘有て一兩度爰に休むをはや浮名にたつ南北是を聞て女の名と二三治の名の書紋を聞出し男女の比翼紋付たる提灯を清正公の神前へ掛させ諸所の近付へ風聽して二三治に困らせしは以前の醫師の返報とぞしられしかゝる馬鹿〳〵しき咄のあるを歌舞妓作者とも云べし年々人世事賢くなり行て風流滑稽なる人をきかず此二三治老人と予と故人櫻田左交が名譽淨瑠璃前編に云常盤津八百萬藏生梅枝此くどきの文句の通り廻り道合點にて行見んは如何と春日永の頃兩人旅支度にて早朝より出し事有委敷は予が著述綺語文草東都の部に出したれば爰に略す二三治老年なれど健也されば戯場の交りむづかしとて今年嘉永二己酉の三月劇場を辭してじだらくのつらねを著して風交の先々へ配るゆゑ爰に出す

じだらくのつらね

當時難澁北狄世間の噂にも年が寄たで追込と言れぬ内お暇を願ひ揚幕出づゝの向う音羽屋さんにもお世話を受上座にかゞやく金冠金がないゆゑ三十年くるし借着もやう〳〵とお禮がてらのじだらくはつらねの初音初鰹幸子が利たかよつく聞こともおろかな某

は成田屋ののれん内にて白木屋おこまじやなけれども聞えませぬは此春から遠くは八王寺の三太郎が股肱(耳カ)目と呼れたる鼈太郎耳遠當年積つて六十五歳なんと赤く(いカ)あたまじやござりませぬか髭がひつ込足元も親父はしれた正直正銘掛直なじみのいづれも様へ申譯やら面目が内證しつたひつてんからじゆばん古ぼろ古布子古金買に賣はご板思案も盡て明俵三だら法師と思へ共何にも白髪のお目見得は素袍も柿の下手作者桃栗三升柿八代目出度丁ど身の納めちやんころなしの木摺子木のつかいながしのでくの棒厄介邪魔といはれても御存しられた持まへのわんぱく爺の根元とホヽ、敬曰モウお仕舞(じだらくのつらね繪番附略す)

江戸芝居外題付方の事

既に前編にも述べたる江戸三座歌舞妓大名題を付るには文字にかゝはらず上下の假名の相性をもつてすゆると云五代目白猿市川海老藏向島反古庵より木村園治前篇に云へ古作者也へ教しと云白猿自筆の歌に

あはやつちたらなは火也さしはかね
はまは水にてかは木とぞしれ

此書三代目櫻田治助俳名左交と云始の名前篇に有より予に送れり故に所藏すまた瀬川如皐も此假名の相性を見て名題をすゆる其歌少しく違へり

アハヤ土サ金ハマ水タラナ火ぞカは木なれども土もぞくする

土アイウエオヤイユ金サシスセソ水ハヒフヘホ火タチツテト
エヨワキウエオ マミムメモ ナ ニヌネノ
ラリル木カキ(是より下土にレロ ぞくする)クケコ

此意をもつておせば北條時頼記等は水也キは木也水生木假名手本忠臣藏カは木也ラは火也木生火彦山權現誓助劔ヒは水也チは火也水尅火箱根權現讐仇討ハは水也チは火也水尅火此相尅をもつて東都には外題をすゆると云京攝にては餘り用ゆる事を見ず

役者年暦珍重記

一枚摺にして裏は三芝居樂屋雜書瀬川如皐が戯作なり爰に出す

寛永　子　二　丑　三　寅　四　卯　五　辰　六　巳　七　午　八　未

中村勘三郎中ば此ころ中ばし生かつらぎ太夫日此ころ女かぶき此ころ一と切づ此ころ女かぶき桐長桐座くはん長桐座元祖幸若

しに於て櫓を上島丹後といふか本橋に高札女かつにして打出し興太夫天文の頃

興行　ぶき有　所々にあり　也　御禁制　東所々にて興行　初る

九　申　十　酉　十一　戌　十二　亥　十三　子　十四　丑　十五　寅　十六　卯

中村勘三郎れぎきれや喜三郎さ村上又三郎葺屋　作(者カ)九兵衛　此頃の狂言一ときぶれの道行よ

町へうつる　町にて興行市村　村山十平治下る　萬川千之亟下る　こ笛今川爲之介

る若の相手勤る　座元祖也　上方より下る　切もの也　所作

十七　辰　十八　巳　十九　午　廿　未　正保　申　二　酉　三　戌　四　亥

此せつ大方長唄多門庄口口門下小舞庄左衛門下右近源左衛門下丹前六法此頃さ此頃ひんだぶり早川初瀬下る　久松喜三太竹之

にておどり狂言　る　る　かり也　はやる　亟座へ下る

也

慶安　子　二　丑　三　寅　四　卯　承應　辰　二　巳　三　午　明暦　未

此頃河原崎權之中村勘三郎さか公命にて女方ま市川の先祖堀越　村山又三郎死　ふきや町二代目市村座にて一日道具だてかざり

助京より下り木い町へうつる　へがきを剃る　何某江戸に來る　市村羽左衛門　のつゞき狂言初

挽町にて興行　る　つけはじまる

二　申　三　酉　萬治　戌　二　亥　三　子　寛文　丑　二　寅　三　卯

引まくはじまる大火にて芝居類元祖さる若勘三二代目明石勘三森田太郎兵衛木桐太郎木挽町に　花川作彌下る

焼　郎死　郎興行　挽町にて芝居はじまる　て興行　柴崎權之助もり田勘彌桐座本にて興行

四辰	四代目市川竹之烝玉川主膳桐座元	五巳	いにしへ久三郎神田明神社内にて興行	六午	都傳内京より下る	七未	久三郎往古傳内改堺町にて興行
十二子	此頃山村長太夫芝居木挽町にて興行	延寶丑	都傳内下りさかい町にて芝居はじまる	二寅	三代目中村勘三郎興行	三卯	山村座にて五月そが狂言始る五郎時宗元祖團十郎
八申	はやし方いがらし嘉藏なり平權兵衛名人也	天和酉	元祖中村七三郎元ぶく立役となり曾我十郎丹前大當り	二戌	中村座正月元祖傳九郎始て奴朝ひな	三亥	此ころ迄は建やく者自分に狂言作りし也
元祿辰	松本左源太三條勘太郎上村かもん此ころの女方也	二巳	つた八郎兵衛長さき五郎治たるま所三郎皆立役なり	三午	元祖河原崎權之助死す	四未	河原崎二代目さかい町にて興行
九子	京都村山平右衛門座より市川團十郎中村座へ下る	十丑	元祖中村七三郎京都市川九藏八才にて初ぶたい市川ゑび藏也	十一寅	元祖團十郎鳴神上人外記上るり	十二卯	此頃荻野澤之烝むらさきほうし初める
八申	此ころ花道初る	九酉	附舞臺出來る	十戌	四之宮源八下る	十一亥	ぬげぶしはやる
四辰	霧浪瀧江市村座へ下る	五巳	大阪傳吉木村喜左衛門此頃のたてもの也	六午	四代目中村勘三郎興行	七未	三國彦作此頃の道外也
貞享子	四代目中村勘三郎隱居して傳九郎と改名奴あら事朝ひなの開山也	二丑	五代目中村勘三郎興行	三寅	往古傳内芝居今年迄興行	四卯	淺尾十次郎山村座へ下る
五申	市村八代目竹之烝興行元祖市川團十郎上京	六酉	若山五郎兵衛てれん五郎兵衛小唄の上手也	七戌	杵や勘五郎ぬれほれ半左衛門三味線の名人	八亥	小舞又三郎中村座へ下る
十三辰	岸田小才治下り京みやげ竹馬の所作	十四巳	六代目中村勘三郎興行	十五午	森田座にて元祖松本幸四郎御所五郎丸市川九藏ゑころ引	十六未	市村座にて市川才牛石山源太にてゑばらく

寶永申	元祖市川團十郎死九藏二代目市川團十郎改	二酉	四月生しま大吉死	三戌	去年二月大阪東又太郎死同八月荻野澤之烝死	四亥	正月出來島小ざらし死
二辰	十一月市川若松死	三巳	十月元祖中村傳九郎死山村座にて初て團十郎助六本名田はた之助也	四午	七月森田座にて團十郎扇賣のつられ山村座芝居止む	五未	中村座萬民大福帳團十郎權五郎かげ正初てしばらく
五子	森田座十郎三升や助十郎五郎市川團十郎將棊のかけ合大ざつま上るり	六丑	二月元祖大谷廣右衛門死	七寅	六月大くま宇田右衛門死	八卯	廣次大佛のみぶ團十郎小佛小兵衛大當り
十三申	市川舛五郎七才にて初ぶたい三代目團十郎也	十四酉	去年役者金のざい板元できる	十五戌	元祖瀨川菊之烝始て中村座へ下る	十六亥	中村座にて團十郎團藏わぼく和合一字太小記
元文辰	荻の伊三郎市川流の暫く大當り	二巳	八代目竹之烝市村羽左衛門と改何江名人也菊之烝たるやおせん物狂大入	三午	中村座津打治兵衛作女護のしまの對めん二代目幸四郎藤柳	四未	中村座澤村宗十郎露野五郎兵衛市川座海老藏どんす三本もみ五本のせりふ
五子	二月二日元祖中村七三郎死	六丑	二代目團十郎くめの八郎が艾賣大當り	七寅	二月みほ木なには死	正德卯	十月小勘太郎死十月小の川千壽死
享保申	中村座にてやわらぎ曾我助六團十郎半太夫上るりはち卷の文句	二酉	正月中村座五人男雁金文七市川團十郎雷正九郎中しま勘左衛門	三戌	元祖澤村宗十郎森田座にて	四亥	市村座にて曾我十郎澤村宗十郎同五郎二代目市川團十郎
九辰	團十郎山上源内鐘馗のあら事	十巳	團十郎池の庄司しばらく池づくしのつられ	十一午	中村座工藤元祖松本幸四郎五郎團十郎眞鳥のたいめん	十二未	五代目森田勘彌坂東又九郎名前にて興行
十七子	去年かほみせ瀨川菊次郎下る三月菊之烝初て無間鐘大當り	十八丑	佐渡じま長五郎下る所作の達人なり	十九寅	森田座所がへ願にて休座	二十卯	團十郎海老藏柏莚と改河原崎權之助木挽町にて興行
五申	四月五日元祖市川團藏死市川團三郎改二代目市川團藏	寬保酉	市川海老藏上る三代目團十郎ゑび藏不動團十郎愛ぜん大當り	二戌	二月廿七日三代目團十郎死幼名舛五郎中村富十郎下る河東夜編笠	三亥	澤村宗十郎上る菊之烝鳴神びくに大當り

延享子	森田勘彌再興二代目市川團藏上る中村座百廿年壽市川海老藏口上	二申	澤村長十郎始て實事の工藤祐經大當り	十辰	總角林彌ふたゝび吾妻藤藏と改
二丑	澤村宗十郎下り長十郎と改春五郎二代目宗十郎と改菊之烝もゝちどり道成寺	三酉	嵐九八坂東又太郎と改澤村長十郎高助と改名	十一巳	市川團藏中村松江森田座へ下る中村歌右衛門上坂
三寅	松しま八百藏ゑび藏門人と成市川と改菊之烝天人羽ごろもの所作	四戌	柏莚矢の根五郎松本幸藏初ぶたい二代目松本幸四郎四代目團十郎と改	十二午	九代目市村羽左衛門家橘座本相勤る
四卯	五月大谷廣治十二月大谷龍右衛門死此とし小六染はやる	五亥	澤村長十郎初て大星由良之助を江戸にてする京にては先年したる也	十三未	中村傳藏二代目市川八百藏と改中車也中村助五郎死
寛延辰	壬十月二代目澤村宗十郎死大谷鬼治事廣治と改	六子	瀬川吉次二代目菊之烝改名助高屋高助死瀬川菊二郎死	明和申	芳澤五郎市川崎之助と改十二年市川染五郎高麗藏と改
二巳	歌川四郎五郎改三代目澤村宗十郎九月元祖瀬川菊之烝死	七丑	山下金作下る中村富十郎四代目團十郎無間がいこつの所作大あたり	二酉	二代目坂東彦三郎元ぶく菊之烝十七回忌二代目菊之烝むげんのかね
三午	五代目勘三郎隱居七代目中村勘三郎興行坂東又八三八と改	八寅	元祖中村歌右衛門市村座へ下る市川ゑび藏柏莚死	三戌	二代目市川團藏上坂市川雷藏死
寶暦未	市川八百藏青砥五郎澤村長十郎佐野源左衛門はちの木大當り	九卯	市川八百藏辨長にて早口の願人大あたり十月に死す（辨長にて難解）	四亥	中村歌右衛門中村座へ下る尾上菊五郎上坂
五子	二代目坂東彦三郎死市川友藏初ぶたい跡がへり大評判	六丑	坂東三八死あらし音八死明年嵐三五郎下る	七寅	中村座初て工藤二代目菊之烝石橋大あたり中村歌右衛門清玄かほみせ上京
五申	去年中村仲藏大日坊ゑのぶうり富三郎三代目瀬川菊之烝と改幸四郎ゑび藏と改一世一代	六酉	去年市川こま藏松本幸四郎と改四十八年仲藏三五郎角力菊之烝おし鳥所作	七戌	三月四代目五粒市川ゑび藏死去年六月二代目市川八百藏死中村のじほ死
八卯	森田座へ中村富十郎中村のじほ下る澤村宗十郎同田之助上京	八亥	市川辨藏元ぶくして門之助と改菊之烝三代目淺間がだけ石橋	九子	中村座にて坂東三津五郎道成寺大あたり
安永辰	尾上菊五郎下る中村喜代三郎八月三代目澤村宗十郎京にて死	二巳	中村座百五十年壽四代目團十郎幸四郎と改松本幸四郎五代目團十郎	天明丑	市村座春三月かはり大當八月古大谷友右衛門死
三午	坂田半五郎上る市川こま藏狐の女郎買仲藏廣次やみじあい大當	四未	去年田之助宗十郎と京にて改名市村座へ瀬川富三郎下る三代目仙女ろこう也	二寅	六代目市川團十郎幼名德藏初ぶたい四月古坂東三津五郎死
三卯	市村座百五十年壽中村座にて瀬川乙女一世一代道成寺				

四　辰　五　巳　六　午　七　未　八　申　寛政　酉　二　戌　三　亥

四代目澤村宗十郎男傾城坂田時平五郎改

去る顔見世桐長門町にて山三番叟再興此時大切に積年の雪關戸小町ざくら上るり也

中村仲藏上坂中村座にてまが淺尾爲十郎桐座へ下り春二月が座再かう中村座仲藏死中村座松本幸四郎去年中島勘右衛門市川門之助死跡仁左衛門中村の鰕藏一世一代しほ下る春五大ばらく隱居してあかん平ばし菊之丞中村座六代目團十郎助六

顏みせより市村座へ下萬菊死中村座松本幸四郎去年三月三代目市川こま藏改松尾上松助初て水瀨川ろこう中山三月河原崎座類燒三月中村座二日替助六三つ五郎せつくの所作大當り

四月廿三日中村十三日古山田之助上京中村藏三五郎下る市村座再興七小代半四郎幸四郎下る嵐德三郎上る

五　午　六　未

中村大吉一世一

十三　子　十四　丑　文政　寅　二　卯　三　辰　四　巳　五　午　六　未

去年松綠死ふきや町桐長門目坂東彦三郎と改正月澤村田之助死十一月市川團之助死

市村龜三郎四代目坂東彦三郎と改下るふき淺尾工左衛門山科甚吉下る

芝翫中村歌右衛門と改下る十郎芝居興行九月中山安三郎死

ふきや町玉川彦三郎上阪團十郎五之助下る菊之丞十郎所作五月ふじ久米三郎高尾賴十郎門之助下るかれ一日替

澤村田之助道成田之助上京中村藏三五郎下る市松江下る三つ五郎藏鰕十郎と改歌右衛門一世一代と十一月四代目大當り中村歌右衛門六月再下る

市村座再興岩藤松代半四郎幸四郎下る嵐德三郎上る

五　辰　六　巳　七　午　八　未　九　申　十　酉　十一　戌　十二　亥

瀨川ろこう仙女と成路之助菊之丞二代目菊之丞三代目同忌追善山座へ歌右衛門下る關三十郎澤村田之助下る

小川吉太郎下るこう松綠一世一代

森田座へ市川市藏下る淺尾勇次郎一世一代菅原忠臣藏二日替大あたり

歌右衛門七化三代目坂東彦三郎十一年壽二代目尾上松助初て狂言中村座百八文七下る松本米燒十一月中村座男女藏半四郎五郎せつくの所作大當り

中村座再かう新助尾上常よお初之助改市川鰕藏一世一代しのかん平居してくる桐座へ嵐三八代目團十郎助六

市村再興岩藤松代半四郎幸四郎下る嵐德三郎上る

十二　申　享和　酉　二　戌　三　亥　文化　子　二　丑　三　寅　四　卯　五　辰　六　巳　七　午　八　申　十　酉　十一　戌　十二　亥

顏見世市村座坂東彦三郎暫く延壽才一世一代二代目嵐ひな助中村座へ下るう上京六部十一年壽二代目團十郎死

去年三月三代目市川こま藏改松本幸四郎去年中宗十郎死二月ひな助死瀨川ろこう中村大吉河原崎座へ下る淺尾左衛門中村座へ下る

去年中島勘右衛門市川門之助死仁左衛門中村の鰕藏一世一代しほ下る春五大ばらく隱居してあかん平ばし菊之丞中村座六代目團十郎助六

去る後藤生大當中村座三かつ牛五代目團十郎改木挽町傳内新桐座矢口渡市川初ぶたい力大あたり坂田半七代目團十郎也

去秋爲十郎上るおはこ二日替市猿藏白猿順禮市川團十郎へ出勤松本よれ三上る

岩井半四郎下る岩井半四郎下る門市川門之助死仁左衛門中村の鰕藏一世一代しほ下る春五大ばらく隱居してあかん平ばし菊之丞中村座六代目團十郎助六

去る顏見世桐長門町にて山三番叟中むら村十藏嵐龍藏下へ下り春二月が座再かう中村座仲藏死中村座松本幸四郎去年中島勘右衛門市川門之助死仁左衛門中村の鰕藏一世一代しほ下る春五大ばらく隱居してあかん平ばし菊之丞中村座六代目團十郎助六

淺尾爲十郎桐座へ下り春二月が座再かう中村座仲藏死中村座松本幸四郎去年中島勘右衛門市川門之助死仁左衛門中村の鰕藏一世一代しほ下る春五大ばらく隱居してあかん平ばし菊之丞中村座六代目團十郎助六

顏みせより市村座へ下萬菊死中村座松本幸四郎去年三月三代目市川こま藏改松尾上松助初て水瀨川ろこう中山三月河原崎座類燒三月中村座二日替助六三つ五郎せつくの所作大當り

五月十三日古山田之助常世草履打か八百藏菊之丞半四郎春駒の對面

七　申　八　酉　九　戌　十　亥　十一　子　十二　丑　天保　寅　二　卯

七月市川門之助 團十郎菊五郎權 片岡仁左衛門嵐 去年尾上菊五郎 中村歌六中村芝 三月三芝居類燒 坂東三津五郎一 尾上梅幸歸る二
三櫂八大當り菊龜之丞下る關三 下るかはらざき 翫下る阪東みの 澤村源之助下る 世一代秋つしま 代目お岩坂東三
死八月中村大吉 五郎上京名殘狂 十郎上阪名殘大 助中村芝翫兩座 七代目團十郎上 津五郎瀨川菊之
五郎上京名殘狂 十郎上阪名殘大 助中村芝翫兩座 七代目團十郎上 津五郎瀨川菊之
死 言おいは 當り 五十三次 にて合法 京 市川團十郎歸る 丞死市川鰕十郎
言おいは 當り 五十三次 にて合法 京 源之助かるかや 下る

三　辰　四　巳　五　午　六　未

三月團十郎改市川鰕藏助六簑助改三つ五郎源之助改澤村訥升 市川團藏下る八代目團十郎はつさばらく半四郎改杜若中村みより二月三芝居燒下る中村芝翫上る 海老藏半四郎菊五郎 岩井紫若坂東彦三郎下る 森田座再興

三芝居年中行事正月元日惣役者年禮式三番叟太夫元若太夫相勤る惣役者座付口上座頭春狂言名題幷役割附をよむ子役幷制外子踊初所作事小舞等相勤る春狂言の名題看板を出す五日或は七日春狂言本讀十五日初日往古は本よみ稽古は年の内にて正月二日或は七日初日二月初午新狂言出る一幕ぐらゐ三月三日替り狂言初日四月八日新狂言出る前に同じ五月五日替り狂言初日廿八日曾我兩神祭禮六月土用中休み近年夏芝居興行初日不定七月朔日頃盆狂言名題看板出る七日本讀十五日初日往古は七日也八月朔日新狂言出る前に同じ年より夏狂言大入の節は七月廿日頃迄興行八月朔日盆狂言初日也九月九日新狂言多くは上方へ登り役者名

殘狂言又は一世一代名殘狂言を出す十二日顔見せ世界定十月十五日頃年中の舞納めそゝり狂言座頭口上有十日頃新役者附配る翌日賣出し十七日子役踊初舞臺にて新はやし方太夫元盃有夜に入て寄初惣役者太夫元盆狂言作者顔見世名題幷役割附をよむ往古ははなし初あり廿日紋看板出る幷本讀廿五日顔見世名題看板出る廿七八日頃下り役者乘込み晦日惣ざらひ木戸前積物町内茶屋中餅り物出し終夜見物群集して賑はし霜月朔日正明七つ時式三番叟太夫元若太夫相勤顔見世初日十二日打出し後春狂言世界定十二月十日頃迄に顔見せ狂言舞納そゝり狂言惣役者座付口上座頭と云十三日煤拂ひ十七日仕切揚木戸前に餅り物

春狂言の趣向荒增口上看板出る木挽町は廿四日愛宕市より出す廿日舞臺大鏡餅搗卅日木戸前舞臺注連飾り右年中行事終り狂言替り毎稽古の次第本讀合立げいこ中ざらひ此間に（脫字あるか）（淨瑠璃ふし付同ふりげいこ所作ぶりのけいこ立廻り大惣ざらひ初日也但し中ざらひをつけたてともいふ）三座家の狂言幷脇狂言　中村座（さるわか新ワキぼち太皷）酒呑童子市村座（街道下ワキり門松）七福神森田座佛舍利（長者開ワキ甲子待）同休座之分桐座（なすの與市ワキ馬ぞろへ）老松都座（ほうろワキく劇）大社河原崎座（茶の猩ワキみ舞々）大立試合立廻りの名目中がへり、さるがへり、車がへり、佛がへり、ぎつくり、ひよつくり、ぎば、はゝ、ぎは、よこぎば、手ばい、逆さ立、杉だち、天地、大まくし、つき廻し、千鳥、がんつぶし、れんり引、あとがへり、遠あて、古來囃子外座付名目大略

○大太皷打込み、打出し、どろ〳〵、宮神樂、岩戸神樂三保かぐら、大拍子入時の太皷、ながし、山をろし、風の音、波の音、あばれ、丹前、樂、管絃、どん〳〵、遠よせ、唐がく、渡り拍子○笛らい序、寢鳥、早笛、とひよ、竹ぶへ入、ひしぎ、かけり、一聲、通り神樂、小皷、白囃子、こだま、のつと、こいやい、つつかけ○太皷もみ出し、一挺、大小の合方、しば、○小太皷天王立本神樂、和歌、下りは、舞ばたらき、片しやぎり、踊り地、出端、立の合方、狂ひの合方、角兵衞獅子の合方○唄長歌、めりやす、琴うた、ざいご歌、出の歌ぬめり、肥前ぶし、騷、馬士唄、順禮唄、佃ぶし、相の山、丹前、一つ鉦念佛○三昧線てんつゝ、三重行列三重、早三重、幕三重、忍三重、きほひ三重、愁ひ三重、對面三重、（兩座にてかはるあり）合方、戀慕の合方、礎の合方、こまわりの合方、狐釣の合方、化物の合方、琴胡弓尺八は加役也。故人狂言作者の分大略元祖市村羽左衞門

常盤井田平（後に中村河七）　早川傳四郎
增山金八　市山又太郎志山
笠縫專助米富　中村角止
瀨川如皐（初女形乙女）　機文輔
寶田壽齋（古）　馬雪（始瀨川秀助）　津打治兵衞英子
松（古）井由輔三幸　壕越二三治蓑陽
並（古）木五瓶淺草堂並木舍　中村傳九郎舞鶴
近松門喬　金井三笑興鳳亭
村岡幸治　中（古）村重助故一
木村紅粉助（始園次遠龜）　櫻田治助左交

松井幸三（始鴻藏）　純通　與三兵衛
奈河七五三助　並木良助
河竹新七（能進）　門田治兵衛
福森久助（一雄）　田口金藏
本屋宗七（大雄）　奥野瑳助（馬朝）
篠田金次（二代目五瓶）　櫻田治助（二代目）（始松島半次）
鶴屋南北（始勝俵藏）　槌井兵七（二代目増山金八）
直江屋重兵衛（南北悴）　松井幸三（始新幸）
勝兵助（始龜山爲助）　勝井源八（始周藏）
田島此助　重扇助（二代目松井）
瀨川如皐（始河井文治）

右の外中古達人唄三味線囃子方之名中古名人役者俳名大道具小道具藏衣裳迄あら增を出し三芝居三階中二階惣樂屋の圖を萬國の圖にまがえ年代記一枚摺にせし戲作なれば略す江戸京橋南傳馬町三丁目仙女香の施板にして天保六未年早春の歲玉なり

木村園次村岡幸治が語

右瀨川如皐が書し故人江戸作者の內名高き人は前編に出したりその內に書もらせし木村園次は古櫻田の門人（俳名園夫又遠兒共）俳諧を好松花堂の書を學びて小石川八百屋お七の石塔に筆を殘せり後に改名し木村紅粉助といふ市川團藏待請話と云名題にて忠臣藏の增補狂言に手柄をせり改名の年紅粉助の名によりて赤い物を着んと羽織小袖の縞がらも赤くして四ッ谷邊迄行し所往來の人見てあの人こそ誰人ならんと不審がるを悅びて人目に立は此容に增したるはなしと江戶中を其姿にて步行評判させ改名の名弘せしとぞ實は此年六十一の賀なれど年をかくして紅粉助の名によせて赤盡しの着物を着しこそおかし後にゑんぶと假名に書かへて寬政の末建作りなりしが文化の始に終る此門人に木村松六といふ狂言方有元角觝の行司にて幸ひ木村を名乘りてゑんぶが門弟となりしもおかし又村岡幸治も古左交の門人にして龜玉と云松本幸四郎（始市川高麗藏今の錦升が親）此人の從弟にて始左交の二枚目を勤後建作りとなる世話物に多く狂言を殘し福清（松本幸四郎）の書物は龜玉が作也森田座の顏見世に八百八町瓢箪の笄と云太閤記の名題は八百藏（後助高屋高助）の座頭に付たる也評判よく其頃は賣れたる作者にて有しが後業を休みて終ると三升屋榮子（二三治の俳名）が夜話を思ひ出て爰に書付置ものなり

戯作者戯場話の論

往古より梨園を好んで戯場の書を著せし人々頗多し東都には戯場三臺圖繪、三座例遺誌、劇場年中行事、俳優訓蒙圖彙、梨園狂言紋切形、歌舞妓年代記抔擧て數ふべからず中にも年代記は淡洲樓焉馬の戯編にて右に出せし瀬川如皐が年暦珍重記の委のみにて元江戸三座の外題年鑑に歌川豊國の似顔をまじへ其時々の當藝或は淨瑠璃（前に云常盤津）の綴物連ね等を出し古役者の似顔は古くは浮世畫師の鼻祖師宣（菱川）後には春亭（勝川）英山等の古圖を摸寫せしのみにて役者の改名上下の評を旨として狂言の説は二段となりたり又訓蒙圖彙は式亭三馬の戯作にして天文地理に合せ舞臺大道具小道具樂屋の圖まで豊國（初代槇町）の畫に三馬戯文を加へて出せり素人の見て戯場の樂屋の穴まで書たれば面白き事限りなく誠によく賣れたる本なり此中に狂言作者の見習鳥を遣ふ（黒子を着させ冠れにて遣ふ）圖あり其頃の狂言方一統是を見て大に腹立し本町庵三馬へ一兩輩行風にて密書散り雁鳩鷹衛雀なんど狂言によりて差がねにて遣ふには夫々の役人有何ゆゑ作者狂言方より遣ふ物とは書れしぞ以後は此役を勤めさゝるゝかしらずと雖戯場の事を知ぬ人々には狂言作りは左樣な賤しき業迄勤る者かと思はれん事文筆を弄ぶ作道に恥る所也といひし時三馬大に誤り卽刻板元にいひ付其文を削せりと云ふ如此誤り數多有べし京攝にて戯場によりたるを書に出す時は東都と違ひ戯作者を業とする人なく只金滿家の主戯場遊里に遊び俳優角觝藝者を愛し穴を探つて樂とする人是を皆粹人と號（東都に云大通人なり）中興河太郎丸平大江丸など是也出入の幇間醫俳諧師點者などに筆を下させ一部の草稿成つて板に彫賣出さすとも氣性高く我名をかゝず皆戯場によりたる書には八文字屋板と印せり八文字屋は初編にも演る通り京麩屋町誓願寺下る所の書林延享年中に自笑歿して躬其笑孫瑞笑に至りて身上甚衰へ浪花に下つて貧く暮し板元をするの力なしなれ共聞馴言馴たれば戯場評判記にも八文字屋と記して板元の名も出さず原より役者の批判を書し書なれば作名は猶さら出さず自笑とばかり書置が故に遠國の好人は自笑の子孫今に連綿すると思ひたがへる人もあらん寛政享和文化の内評判記を書には右に云粹人芝居見物後に各茶屋料理屋の席を定め黨を集て評を定て筆をとる

は京に俳諧師月居此二庵燕村の門定雅狼唄宿浪花に同俳人廬橘粹書數多可物二斗庵椎本と云馬宥酒屋隣と云など誰々を贔屓ゆゑ賞め誰々を嫌ひゆゑ惡く云など依怙の沙汰する人は斷て席を退け立物小語を論せず評有者は文長く間中の役者上分を八枚と云是につゞを間中にも紙數三四枚も有けり其頃は見聞識者多く贔屓連中にも大手筆瀨藤石花王雜喉場大連中紅奔とて連中數多ある故此中より評判を定る人多かりし是故刻成て翌正月二日早天に賣出す板元河太好人求て見るもの甚多かりし今は價の高きとて紙數に限り有惡口を書時は其役者より板元へ彼是といはせる故只何役もよう出來ましたゝと譽て計有是にては評判記にあらず役割を書出せるのみ也右に云評判記連の書し頃は作料むなし今は三都伊勢尾張田舍の部まで書集筆耕代までこめて金何程との限り有夫を請取人一遍の狂言見物に行ば年中の作料をとらるべし夫ゆゑに芝居は見ず役割番付を內にて詠め人傳に聞たるを書なるゝし役割にあれ共舞臺に一度もせざる事迄さも見た樣に書たるなどいと淺猿し此餘戲場に拘りたる書には大約別號假名を書來れり中にも文化中に歿したる浮世畫師似顏畫に名高きは松好齋半兵衞也此人芝居の好者にて樂屋圖會前編二卷を著す是は彼名所圖會秋里離島作五畿內諸處を出すに倣ひ始出雲のお國或は西の宮の傀儡師などの圖を著はし樂屋の圖看板の模樣など自畫人なるゆゑ自在に畫きけり京攝に浮世畫師と云もの往古より聞ず大津繪の岩佐又兵衞などは既に古き隨筆等にあればいはず役者の似顏を畫き浮世繪師と唱へるは流光齋より始りしなるべし扇面をよく書し子健と云は此兄なり流光齋の役者似顏の畫は三組ばかり有畫風當時畫く所と違ひ淋しけれども顏容老實によく似せたりと老人はほめけり松好齋は此門人にして畫風又一變す此人の畫きし顏にせ本又數冊あり其餘女繪をよく畫きしは西川春畫に妙を得しは月岡鳥羽僧正に倣ひしは耳鳥齋なるべし梨園看板の畫も一風有て中興杢兵衞九右衞門など有しが其後畫虎と云人歿してより看板一變して似顏畫師にかゝせる樣になりたり似顏畫も松好齋の後は蘆國春好此人は業と事なし蘆幸よし國重春北英など有しが近世書ざるにや見ず戲場看板は看板らしき畫法あるもの似顏の看板を出すは中古吾妻淸七といへるもの天神稻荷の社內にて最初は輕口をいひおどけたる事をして見物の顯をはづさせ跡

には清七身振物まね（故人淺尾爲十郎芳澤いろはなど妙を得）舞臺にて鏡臺にかゝり早替り二役三役かけ合等をするその者の類に長らく頭取をせし忠六と云へる者あり皆忠七の小屋小屋と云（東都にて豆藏と云淺草奥山兩國等に有）此表の看板に其頃のはやり役者の似顔を書て出したる物也今道頓堀の歌舞妓戲場の看板に海老藏の役を海老藏の似顔にて出すはほとんど忠七の小屋の看板めきて恥しからずや是も近世梅玉より此風とはなりたり嗚呼時のしからしむるにやいと淺猿し東都芝居の看板は三座とも代々鳥井風とて古風を守り鳥井一家に書せり年々歳々三座の看板顔見世新役者附（極り付とも云）人物圖取同じき樣に見ゆれ共新を挑み奇を爭ひ連綿絡繹として今に變らず鳥井の畵風も大江戸の名物なりけり

聲曲類纂作者名寄

弘化丁未冬東都にて發板の書聲曲類纂全六冊は神田齋藤月岑が編輯にて音曲に拘りたる高名家の傳を擧て古雙紙ものを奏りいと委敷書也然れど前編にも演る如く原音曲鳴物は異國より渡り九州地より關しにや筑紫琴を始豐後節薩摩節など唱れば大約は京攝にどゝまり竹豐兩派の淨瑠璃又歌舞妓小唄の音曲まで京攝より發り夫より東武に移りし物ゆゑ引書にても京攝よりともしく杜撰なきにしもあらず中にも淨瑠璃作者歌舞妓淨瑠璃作者（所謂當盤津富本清元の作）の名前を因みに擧たり尤正本によつて書出せしにあらざれば相違せしもまゝあれ共音曲家はいはず作者は此書による所なれば重復になれども爰に拾ふ

竹本座淨瑠璃作者近松門左衛門信盛（平安堂巢林子と改名して作なせしは二代目なり千前軒共云）不移山人等の號有　竹田出雲掾清定（初代出雲掾は近江）

長谷川千四　三好松洛　錦文流（錦頂子）

文耕堂（初名松田和吉）吉田冠四（文三郎）　近松半二

並木千柳　二歩堂　淺田可啓

中村潤助　八民平七　榮善平

竹本三郎兵衞　北窓俊一　竹田因幡

竹田平七　竹田外記　竹田和泉

竹田瀧彥　竹田正藏　小川半平

近松景鯉　竹田伊豆　並木永輔

竹土九　福松藤助　竹田文吉

北脇素文　一來堂　寺田兵藏

近松東南　松田才治　竹田新四郎

菖源七　青江堂　原羽裳

近松能助、松田ばく、守川文藏、中井粂次、春木元輔、豐竹座淨瑠璃作者 紀海音貞峩と號油烟齋貞柳が弟和州柿本寺の所化歸俗して大阪に住貞柳歿跡に送る知るしらぬ人を狂歌で笑はせしその返報に泣てたまはれ 西澤一風本には一鳳と書たり 田中千柳、爲永太郎兵衛千蝶と號 安田蛙文西澤にしたがひて作る 安田蛙桂、並木宗輔市中庵と號す西澤に習うて作る佳作尤多し松屋は家名にして後舍柳と改め寛延二年九月に終れり 並木丈助、並木良助、並木素柳、村上嘉助、豐竹應律、豐岡珍平、淺田一鳥、浪岡橘平、浪岡鯨兒、同蟹藏、中村阿契、中村阿笑、豐田正藏、梁塵軒、豐正助、難波三藏、黑藏主、七才子、三津欽子、竹本三郎兵衛竹本座の作者筑後の悴なり 若竹笛躬、清水三郎兵衛、近松東南菅專助、豐竹甚六、但見彌四郎、豐竹上野、並木齋治福竹藤助

同書追考南水漫遊を引て竹豐兩座作者の略傳を擧たり 紀海音榎並貞峩と云俗稱喜右衛門後善八と改僧となりて高節と云歸俗して醫を業として又契仲の門に入て歌道を學び契周と云鳥觀齋とも號元文元辰の夏法橋に叙し寛保二戌十月四日一說に延享四七月とも行年八十才にて歿 文耕堂始松田和吉と云千前軒門人なり 錦文流西鶴門人座摩社邊に住 櫻塚西吟攝州池田人西鶴門人 三好松洛醫師 吉田冠子人形遣ひ吉田文三郎二代目文三郎は此悴也 並木丈助北新地茶屋 竹本三郎兵衛竹本筑後掾が悴也 近松半二穗積伊助醫師の悴 爲永太郎兵衛始竹田庄藏 春草堂高田端庵と云醫者俳名笛十 菅專助醫師の悴竹本光太夫 長谷川千四和州長谷寺の僧歸俗せし也 安田蛙文有馬家に仕へし人 近松東南東南伊助老後法體して綾子播摩と改三味線上手也 淺田一鳥森長三郎謠の師也 中村阿契始閏助と云 八民平七大阪や太郎兵衛悴さか町 若竹笛躬若竹藤九郎人形つかひなり 二代目笛躬鹽や治兵衛復松鱗と云 紀の上太郎三井某嘉栗八貫仙果堂 豐竹應律若太夫芝居主甚六と云 松田ばく俳諧師岡本兼吉後表隣と云 男德齋竹本咲太夫上るりかたり 榮善平道頓堀いろは茶や 七才子岡本原一醫師なり 川四郎長町七丁目分銅河內屋四郎兵衛宿やの主なり 中村魚眼難波新地中村や茶やなり 近松柳始並木柳後柳太郎作 司馬芝叟獨笑庵 梅の下風湖水軒佐藤太 江戶歌舞妓狂言作者 河東節 常盤津 富本豐後節の淨瑠璃又は長唄めりやす等の文句は大かた歌舞妓作者の作なればと斷りて 玉井權入、南爪與惣兵衛、宮崎傳吉、立島七郎左衛門、樋口半右衛門、津打治兵衛英子 村瀨源三郎五月 村山十平次、玉松小十郎楓晩 竹島甚助、坂東田助、江田彌市富有 津打九平治、津打半右衛門沈席元役者鈴木平左衛門 津打又左衛門、藤本斗文、中村少長 中村清五郎正德年間流藏と成る 中村清三郎藤橘と云少長の弟なり 早川傳四郎竹且 津打菅祈、堀越齋陽二三次 並木良助蛙柳 中村太郎右衛門 津打國次、津打三郎次、機文輔、門田侯兵衛、純通與三兵衛、始津打傳十郎後治兵衛河齋と號 金井三笑與鳳亭俗稱半兵衛 櫻田治助左交津打治助後さくら田と成 中村重助故一 河井金次、奧野善助、中村山三、大里榮藏、增山金八吳山 眞野馬朝元左助 瀨川馬雪元秀介 河竹新七能進 萩馬岱元吟次 仲喜市仲元半二 峨澤井住藏注象 平田千次、西川仙助、梅田利助沙明 平田半三墨海 木村八一長鯨 八起好助大可 福

岡與市、市山又太郎（志山）中村角止、並木五瓶（辭世月雪のたわみごゝろや）松島半次（二代目櫻田）中村虎八、瀬川秀藏、笠縫專助（米富）瀬川如皐（乙女近松門喬）、勝俵藏（鶴堤南北）村岡幸治、常盤井田平（後中村河七）福森久助（推一實田壽來）、松井由輔（玉幸）松井幸三（始鴻藏）木村紅粉助（始國次遠皃）奈河七五三助、田口金藏、本屋宗七（大雄）奥野瑳助（間朝）篠田金次（二代目五瓶）槌井兵七（二代目增山金八）鶴屋南北、直江重兵衛（南北悖）勝兵助（始龜山爲助）勝井源八（始周藏）田島此助、重扇助（二代目松井由輔）瀬川如皐（始河竹文治二代目狂言堂）松井幸三（始新幸）此餘有名の輩頗る多し尚後編に詳なるべしと有

聲曲類纂は音曲家の事のみにて作者はついでにしるす事なれば一人を二名にわかち二人を一人に混合せしも尤なる事也されど其道々の博士有て江戸歌舞妓作者の事は曩に出す瀬川如皐が樂屋雜書に有名の輩は擧盡せり竹豐兩派の淨瑠璃作者にも少しく違ひあり西澤一風を一鳳と書豐竹座板元西澤九左衞門の事所々に書て別人と思へり又淨瑠璃作者の內へ並木五瓶を加へて辭世及歿年を寬政八十二月と有五瓶は前編に著せし通り文化五辰年二月二日に歿せり並木宗輔の家名を松屋と云後舍柳と改めしとは違へり松屋舍柳は役者にて又作もしたる事は前編に悉し松屋來助（中山來助假名金柳）と並木宗輔は別人なり此餘南水漫遊にも誤りあれど原京攝より發りし淨瑠璃を東都の齋藤氏よくも諸書を涉獵して一部の冊子とはなりけらし其苦心の程感心して作名だけを此しりへにのせぬ

目次

一繁昌記戯臺之辭
一銅脈先醒婢女行
一同　觀戯場
一同　戯場書事
一俳優見立評判の説
一梨園による俳諧發句
一白猿が長夜の書溜
一戯場好者家の發句
一俳優金毘羅樽
一小春紙治情死の話
一近松平安堂作文論
一同半二が獨判斷の寫
一同　後段の話
一西澤一鳳一代不性
一奈河龜助の戯編

凡十五條

西澤文庫傳奇作書拾遺中の卷

西澤一鳳軒李叟編

繁昌記戲臺之辭

江戸繁昌記は靜軒居士が著編にして天保三壬辰年新鐫發行せしが後子細有之絕板になりたり初篇にも戲場の文あり作者に因あれば爰に出す

演戲國語謂レ之曰二芝居一曰二歌舞妓一蓋聞在昔　平城帝大同中南都猿澤池側土陷吹レ烟觸者即病因大燒レ薪以壓二其氣一且舞二三番叟舞于二興福寺門前生レ芝之地一本邦古誤言二結縷草爲芝一而攘二其侵毒一焉是此名所二以緣起一也風俗歌舞俗妓等名目既見二于續日本紀一而　鳥羽帝世儀禪司者善レ舞或曰二男舞一或曰二白拍子一又曰二歌舞妓一此是也四海爲レ家後寬永初年猿若勘三郎陽レ命創開二戲場于中橋街　至二九年一移二于人形街一次都市村二氏之場亦皆成焉慶安四年又徙二于今地一而山村氏起二場于木挽街一者在二正保元年一始二於卯一終二於酉一此是演戲常式題在二看棚頭一東方將レ白皷聲始震例爲二三番叟舞一次演二家藝一俗謂二之脇狂言一中村氏演二酒呑童子事一市村氏七福神舞森田氏猩々舞既而旭日始映二招牌一爛燦喧塵漸揚田舍人早炊已往女兒夜粧急走昧一朱麋至陸續聚自二四方一人山人海鼠戸開不レ暇レ閉棚欄撓將二傾折一東西看棚紅氈連接眞不レ霽之虹臺面前棚人頭鱗次眞未レ雲之龍本舞臺三間內正面有レ亭左樓右門樓下掛二一箇吊燈一夜色靜寂由良助方乘二無レ人之時一手二主夫人所レ送書簡一悄立照二吊燈一展讀過就意何佳兒倚二定樓欄一把レ鏡照レ之九大夫自二階下一延レ頸捉二其紙端一斜引二月光一一紙長箋三人讀得正熟時佳兒頭上金釵溜落撲レ地有レ響由良助吃驚急掩二紙於背後一仰レ面始知二樓上有レ人階下人亦錯愕潛レ身三人有二三樣趣一觀者喝采齊呼山崩海翻佳兒旋正二驚襟一粧レ嬌含レ笑呼二由良助一由良助曰汝在二樓上一何爲佳兒曰妾被二君勸醉一不レ堪二困苦一倚レ風吹レ醒由良助曰如レ然甚善但我欲レ有二與汝言一奈何雙星相見徒守二銀河之阻一請下レ樓來佳兒曰曉得矣將レ起レ身由良助急呼二止之一曰如自二本階一恐耑間强住更困二勸盃一爲之奈何適見樓外有二

一梯子一乃大喜下レ庭自將二梯子一倚二住樓欄一曰幸矣此九級梯子徑躡レ此降レ之佳兒曰此非二平生所レ躡之物一無二乃危險一乎由良助曰言レ之汝妙年身上事自今一擧趾袴三步間過不四復及三膏藥醫二破裂一佳兒曰莫レ費二冗語一勤稱如レ此恰似レ乘レ船由良助曰宜哉出二現天后聖母一來時看棚中忽起二爭鬪一喧嘩沸騰兒女踏踐叫レ苦並望二本舞臺一走上由良助阿佳兒等皆錯愕乃向假驚却作二今眞驚一九大夫亦狼狽潛居不レ得自二階下一出身頓位二三階上一不二多時一天成地平復續二前伎一嗚呼若レ此爭鬪乍發若レ此沸騰乍歇箇這江戸人氣質但此都不二繁昌一何如起二此爭鬪一何如發二此沸騰一然則以二此爭鬪一以二此沸騰一言レ粧二此繁華一猶信矣

右忠臣藏一力の齣にて喧嘩の態江戸の人氣まの當りに見るが如し詩人の滑稽も珍らしきが故因に銅脈先生の太平樂府のうち戲場に寄する狂詩一二首を出す

銅脈先醒婢女行

遠國這出望二奉公一來レ京不レ知西又東、獨有二千本阿姥在一、賴レ之有附請狀窮、百文荷擔算用外、一枚布子葛籠中、布子萌葱若松鶴、袖口端掛茜草紅、律儀一片入二主氣一、數入三日名所遠、祇園清水兩門跡、愛宕大佛三條橋、翌日與レ姥復連立、音聞芝居今初看、取分投分危々思、斬分殺分慄々寒、尾上梅幸狐忠信、中村鯉長鮓屋娘、鯉長梅幸兩上手、今度狂言銘銘箱、還休四條河原上、熟感風流京繁華、從是每朝手水起、心欲レ洗二落在所沙一、八文白彩試塗レ面、五兩梅花初登レ頭、麥飯雜炊久不レ食、偶逢二茶粥一已爲レ憂、烟草飮習酒少就、一坐附逢相應劬、口謂不好鳴笑止、鼻唄道行國太夫、滅多偃伏金丞相、無正張出燈籠鬢、八寸長鬱脚鼈甲、眞鈕耳搔今不レ新、新裁染分屐前垂、半分桔梗半分鼠、中有二小川英子紋一、常履板屐絲鼻緒、近所有レ男字忠七、少宛無心依レ之恃、時見二繰出一行處何、二條新地御靈裏、二百席代三百酒、酒罷今宵有二談論一談論山山多是鍵、其而忠七終出奔、近頃能從二小錢回一、他行縮緬平生紬、縮緬紬子最易レ着、青梅三留身不レ柔、君不レ聞二在所親父一、長困窮如何僣上、驕此極試問二給銀一知、何程半季所取レ二十目

同觀二戲場一

一從レ失二寶物一、騷動及二家中一、若殿初踐レ土、上使肩切レ風、說レ愁幽魂白、巧レ事惡人紅、梅幸此場出、

詮議皆盡レ忠

同　戯場書事

藝當二金作一入如レ山、於染久松　袂白攀、割合　辨當茶
煖裏、水幸番附幕開間、皆言已宜初末、共喚爲何今
欲レ還、金槌音休鳴二折木一、青田高向棧敷班
此餘にも數多あれど略す明和己丑八月故逸滅方海著
惠萊安陀羅校とあり己丑は明和六年なり今年迄八十
一年になる梅幸は祖尾上菊五郎鯉長は中村粂太郎英
子は祖小川吉太郎山下金作皆その頃の建ものにて京
都芝居に出勤の折からなり八十年前の昔も世情は
かはらず太平舘（銅脈の號）は狂詩の冠たり

俳優見立評判の説

往昔より役者見立番附などは時々流行に隨ひ賣事あ
れどもさせる佳作もなく當然に散失して殘らず寛政
中に可物（前卷に云俳人推本二斗庵）が其頃の俳優を獸物に見立し草
稿予幼少の時家父が讓られ珍藏せしが第一を熊嵐小
六（始雛助小六玉）日本獸物の司にして唐土の虎に對すかたち
肥太り毛色麗しくて猛き中に胸に月の輪と云所作事
を抱き是に增すべき獸なし二番に猿市川團藏（近年歿せし團藏の
父形ち少さく顔見にくけれど猿の人眞似とていか
なる事もせずといふ事なし本手の早切早業なんど殆
深山木の梢を走るましらの如し第三に狼淺尾爲十郎
（淺尾奥山）此もの牙をむき出し一聲ほゆる時は身の毛立諸
見物に寒がらしめる猛獸也四つには狐尾上新七（祇園町南
部屋後尾上鯉三郎）是と云能もなけねど只の野狐ならず白狐通
を得たるにや諸人をたぶらかし喜ばせる事奇體なり
此餘猪鹿狸兎なんど末々の役者に見立女形は鳥類に
見立あり其評に依怙なく又文化中に江戸作者本屋宗
七が書し見立に其頃の役者松本幸四郎坂東三津五郎
中村歌右衛門（梅玉）澤村宗十郎（源之助田之助の兄）岩井半四郎等を太
閤記の人名今川義元織田信長武田信玄上杉謙信など
によく見立ありし草稿を梅玉祕藏して或時予に見せ
し事あり此宗七は狂言は一向書得ね共かやうの事に
はおもしろき書もの有けり今は諸藝とも地に落見立
る俳優者なく殘念なり

梨園による俳諧發句

前篇にも演し如く歌舞妓作者は勿論役者の學問は俳
諧をたしなみ置べし古作者櫻山庄右衛門はせりふ付
に便りよきとて古歌三千餘首を暗記せしとぞ俳名を
鶯山といひし又初代片岡仁左衛門も傍輩の役者に俳

諧を進めしと云心は神祇釋教戀無常何にても役に隨ひ心詞文盲ならず藝のたよりになる學問也と依て役者を俳優とて古く唱へ來り既に初代山下金作里虹明暦二丙申年京都芝居にて女形の下髪は法度なりしを金作下髪にて出しゆゑ歌舞妓停止仰付られしなり盥よりたらゐにかへる寒さかなとはよく生死の門を詠しといへり夫より已來初代中村富十郎慶子は英流の書も出來て庵書の物に自賛「いつ迄も娘心の柳かな女形の情よく含めり古水木辰之助の句「水無月は男になつて寢て見たし是ら人口に膾炙して實に世をおほふものなるべし近くは江戸五代目市川白猿俳諧狂歌をよく詠じ徒然文談の書を著す自筆の書予珍藏して既に讀佛乘前集に出す讀て知るべし又老の贅書とて是も自筆の書あり因に爰に出す家主成田屋七左衞門□の書判あり

白猿が長夜の書溜

天上天下唯我獨尊「釋迦も指さすや蝿もほと〳〵ぎす

白猿刑にちかき惡をせざればその身全し名に近き善をせざれば其心安らか也唯愚を守り天遊を樂しむべし

たのしみは春のさくらに秋の月夫婦中よく三度くふ飯反古庵述鼻しもふさの國成田山の街道に巨金の原といへるは里々に其名の替りある莫太の原なりこがねよりとふる者はこがねの原と心得のぶとよりいたる人はのぶとの原と覺えず或はしゆすいかまがいより（本ノマヽ）かゝるものはしゆすいのはらかまがいのはらともいふ又此原にしんだうよりおもむく人はたかまがはらと申すなり儒道よりゆく人は空原と號し佛道より來る者は極樂淨土の原と唱へ仙人街道より行く人は蓬萊のはらと思ひ莊子のぬけ道よりとふる者は本分の田地と往來なすなり神道には駕を用ひ佛道は船で廻り儒道はかちをたどる事也老子は馬より牛に乘てゆけと被申しを莊子は人におぶさつて通れと思ひ〳〵の了簡もみな勸善退惡の都にいたらしめんが爲なり

世中は子の日南無阿彌陀どふでござすに內外淸淨

市川白猿戲述鼻

市川團十郎は代々俳諧を好みて今の七代目白猿狂句延猿集とて天保の始に一集冊を出す花笠文京の賴みにて予筆を耕せし事あり

戯場好者家の發句

大江丸舊國俗性大和屋善右衞門内平野町金飛脚屋は予が父の友にして俳諧をよくし戯場をこのみ狂言を見物すれば吾一人の評判を書同好の者に見する俟なく批判を書面白き事限りなし予五六冊所持せり此人寛政二庚戌の冬俳懺悔三卷享和元年酉の春俳諧紙三卷を著す其中に戯場俳優傳奇に寄を爰に出す俳諧一卷の變化をとく序物語に昔淨瑠璃の作者近松門左衞門國姓爺といへる狂言を作り出して大當りせし跡をおもしろき趣向もがなと枕をわりて工夫に渡る其時の芝居主竹田近江が申は作者の心には左こそ存せらるべきが去ながら大當りの跡は大體すら〳〵としたる事をなしておかるべし國姓爺にてよほど德分あれば一二年不當りしたり共我ら式が給る程は澤山也其間は古き物にても出し其內には自然とよき狂言も出候はん夫よりうへそれよりうへと趣向に趣向を重ねたらんかくもて行ばわが家業は盡果申さむたゞ天然にまかされよと申たるは一道に秀たる者の詞諸道に通じ俳諧の一卷の變化も此心專要なるべしと云々

又古雪中庵曰雪中庵蓼太を云也三代目嵐雪の弟子史登其弟子也俳諧も年よりて段々と詞を伊達に遣ふように心がくべしさなくては物古びて靜かなる句も出る樣になる基也されば妓家の長といひし中村富十郎處子が心がけを心の師として我はする也と又云俳諧はものゝ模樣だてなる中に淋しみを聞かせたらんこそよからめ譬へば古團十郎が顏はあか〳〵隈どりながら紙子着て樂屋に居たらんやうに有こそよかるべしと又かぶき役者二代目海老藏が門人に云修行はおのれがかつ手あしきかたをならぬまでも精に入てはげむべし得たる方は夫につれて上達するもの也と申せし我はいかいもその如し發句が附合か勝手あしきと思ふ方を修行すべしと云云又市川五代目の團十郎わざをのがれて手島にかくれ白猿と號し少き庵をむすび老をたのしむ爰にたづねて

色の白きさるどのにそと見參まう　大江丸
とつぱ冷酒けふのもてなし　白猿
月を秋の花と詠むる世にすみて　完來

此完來は蓼太の跡四代目雪中庵也近世對山五代目を繼此餘にある妓家にてほし合を詠

七夕の今宵大星力彌かな　大江丸舊國

しのぶ戀といふことを
吉田屋の蚊に喰れけり伊左衛門　大江丸　舊國
戯場の雪を題
あまりの大雪に申事さへ遠げしき　同
顔見世や旦那みつけし馬の窓　同
此餘戯場好者家の句思ひ出るまゝ少し書つく
秋の風芝居の窓を吹やぶる　完來
かくれ家はしばゐなるべし年の暮　大江丸
二日からはて珍らしい初しばい　白猿
顔見世や馬の足跡名はなんと　文頂
張ものゝ山も笑ふか二の替り　鳳堂
瀬川仙女に送る
鰒喰ふときけば恐ろし菊の丞　米彦
吉例の曾我朝ひなを題
雨風のそこをこたへろ梅椿　金鷄
雙蝶々道行を題
道ばたの菜種は關に踏れけり　李叟
石川五右衛門の役をして
出代りや葛籠負ふたがおかしいか　眼玉
狂言も秋の半でムり升柴のト出に月の思入　眞顔
極樂へ功のものなる蓮生も西の棧敷に後見せけり　三馬
年の内に春を迎ふる顔見せはめに正月の事始かも　京傳
此餘枚擧に遑あらず又文化の始道頓堀角中の樂屋内にて狂言を題して東都の柳樽に倣ひ穴さがしの句集出來たり其番付に

俳優金毘羅樽
忠臣藏尾上青蛾評　夏まつり堀田馬宥評
卷首
となせ小浪手踊りの間供をよけ　つる井の　權羽
桃の井が屋敷荒神松買はず　天正の　天慶
勘平はその儘の手で門たゝき　並木の　五瓶
山科に一日後家が三人出來　儘の　川成
さし紙に去る屋敷出と書おかる　並木の　ぬけ道
長持へ尿瓶をいれる由良之助　入我の　我入
奥切らず理窟もとらず平右衛門　前髪の　秀南
伴内は師直が爲に由良のすけ　大佛の　竹馬
一力の亭主うそ〳〵石たづね　炭の　五郎三
定九郎を命の親じやと猪はいひ　きせたまの　直住
千崎が蚤に喰はれぬ藥買ひ　ちが松の　大舛
由良之助出しなに一寸髷直し　藥師の　のぶ女
天川屋鐵炮鍛冶で嘘をつき　中村の　芝翫
一夜さに二度月の出る祇園町　富舛の　床石
異見した諸士が三人新造買ひ　西澤の　一鳳

其のちは勘平が母高歩貸
右馬之丞いにしなにいふ京言葉
八軒屋まで寢つゞけにする力彌
下女のりんわれ三寶で焚付る

卷軸　月影でおかる見てとる左り文字

卷首　團七がしらみは床に置土産
德兵衛が女房の顔は鶉やき
團七は播磨あたりで錢きらし
賣聲に似ず團七が魚くさり
茂平治の方がりくつと駕はいひ
蚤の事一寸の虫といふ九郎兵衛
ぐれ宿の宿老立合ふ畠中
九郎兵衛は戻つてもどでん耳に付
殺さるゝやうに舅は理窟いふ
お鯛茶屋みだれ三人義を結ぶ
其後は手水半ぶんつかふ辰
氏地よけ囃子は畠まはりする

並木の ぬけ道
呂眞
小判の 錢丸
あらしの 李冠
儘の 川成
一斗の 升成
きせ又の 直住
淀川の 水成
天正の 天慶
まゝの 川成
まゝの 川成
富舛の 麻石
かゞやの 芝翫
やたばいの 五郎三
よし村の 秀南
やく師の のぶ女
並木の ぬけ道

蚤しらみとるは德兵衛が上手也
傳八は來世で首しめの指南する
其のちは寺へ來れど珠數もたず
茂平治が口をつぶやく借物屋
九郎兵衛は七丁目で髮ゆふていぬ
團七に水あびたかと女房とふ
團七が髮とけて鬢あつうなり

卷尾　妻は顔夫は雪踏へ燒印

近松の 慶壽
近松の 大升
竹田の 庵里
一笑
岡しまやの 李冠
まゝの 川成
岡しまやの 李冠
近松の 大升

右之外狂言の外題に寄り毎月會仕候御作意の御方何れの撰者へでも點相賴可申候間集元へ御遣し可被下候以上

信仰記うす雪　八月廿八日開卷　板元　正本屋利兵衛　河内屋太助

小春紙治情死の話　近松平安堂作文論

享保七寅年十月十四日十夜回向の折から網島大長寺の境内へ紙屋治兵衛紀伊國屋小春參詣群集に紛れ終夜法座に連り終に晨鐘の折から境内の傍らにて左の一紙を懷にして空敷なりける書殘す一通の寫のべ紙二枚なり

今宵ありがたき御敎に預り忝奉存候私共淺猿敷
身の果未來のほども覺束なく存候何卒なき跡御
弔ひ被成被下候はゞ忝奉存候是のみ御賴申上度
書殘申候以上

十月十四日　　治兵衛
　　小はる

大長寺樣

追善狂歌二首

網島大長寺一代進譽
皆人も南無あみ島のたむけ草
　紙屋ほとけの緣にひかれて

十月の小春の昔おもひ出で
　みな心中にゑかうあれかし

境內に墳墓有て書置も一紙に摺て彼寺より出す享保
壬寅年より今年迄百廿八年になれり然るに外題年鑑
には享保五子年十二月六日より小はる治兵衛心中天網島の
淨瑠璃初日とあり既に二年の相違あれど何れぞの書
損なるべし此作者は近松門左衛門にてひと日住吉へ
詣新家の酒樓にて遊びける時俄に大阪より芝居者來
り夕べ網島大長寺に男女の情死あり何卒速に淨瑠璃
に作りて給はらば翌一日の稽古にして明後日より興
行せんとてひたすらに賴ければ早駕にて走り歸りし
ま丶書つけしとて走り書と書出し直に謠の本は近衛
流野郎帽子は紫のと書つゞけしと近松翁の頓作を南
水漫遊にほめたるが享保子歟寅年にせよ情死は十月
十四日なり初日出しは十二月六日なり是にては五十
餘日のゆとりあり翌一日の稽古にて明後日より始め
んとは近松が頓作を賞んとて素人丁簡の詞也いかに
急作を得しとても歸つて其事實を聽く間もあり草稿
なつても節付木偶のふりもあり五日し七日とかたら
ずば五日と七日とかゝらずばカあら筋の立ものにはあらずいはんや
駕にてはしり歸りしゆゑ走り書謠の本は近衛流など
書しといふは後世好者家の拵事也歌舞妓にての外題
は心中のべの書置といふ天の網島とは盜賊惡徒の類
を云よう覺えて男女の情死にはのべの書置の方やす
らかでよかるべしと思はる是も事早卒の間なれば仕
かたなけれど五十餘日の暇あればいかなる事にても
書るべし又能或ヵ老人の話にいふ近松翁が文勢には
人を寒からしむる言葉多し元祿十六年未三月最明寺
殿百人上臈といへる院本に最明寺が道行ぶり蝶の翼
のおしろいを草にこぼして梢には鶴の霜毛を脫かく

る雪は花より花多きと書けり是なん圓機活法雪の部に鶴毛蝶粉といふ四字を出して書る所に石曼卿が雪を題せし詩を出せり蝶遺粉翼輕難拾鶴墜霜毛散未轉といふ此句を和語にうつせりかゝる才智をもつて和歌を詠じなば秀逸あまた有ぬべしとてやんごとなき御方の御感ありしよしをいへり又橘庵漫筆にある時竹田出雲穗積以貫などいふ人近松が方に赴し時淀屋辰五郎が事跡を記したる草稿に彼が驕奢のさまをいふとて金の冠り着ぬばかりと書るを見ていかに奢れるとても町人には似合しからぬ樣覺えて翌日行て猶草稿を見しに金の冠着ぬ計りといへる次に玄やくは持病にありとかやと書つゞけたるを見て各愕然たりしとかや院本文句評註を書し難波土産といへる草紙に穗積以貫翁近松平安堂が像に題する詩あり

見性却清醇　享齡擬壯椿　春溫渾滿腔
空眼轉洪鈞　句翰譫歌妙　少牋綺語神
申休門榜爍　樂隱特相親

又以貫翁は醫を業として半二が父なり半二を穗積伊助と云也

近松半二が獨判斷の寫

前編近松半二が傳にかへて獨判斷の叙（疎懶堂）を出せしが其本文のおかしければ爰に出す

我等元來生れ付たる不器用者にて何を稽古して見ても埒明ず其癖根弱くして二三日の中に退窟して捨て仕舞ふ故是まで何一つ覺たる事なし所詮いかぬ事と觀念してそれより一向人に物習ふ事を止て何事も我胸一つで得手勝手の了簡を付て人は何といはうと儘よこちのはかうじやと自身に濟して仕舞ふ一分了簡なれば人にいふ事もなけれども淋しき儘に思ふ事を書つけ置事左の如し

若人吾に問て世界に神佛といふ物ある物か無い物かといはゞ誠に有ものなりと答ふ其又誠にあるといふ證據はいかにと問はゞ所々方々に宮々あり寺々あり木に彫み銅に鑄たる佛あり是神佛あるにあらずや若其誠の神體佛體といふ物有りやと問はゞそれはあるやらないやらこちは知らぬ也是我等が玄らぬ計りならず聖人といふ者は人間の中の智惠の司なれども其聖人もしらぬ事なり知らぬ證據は唐の大聖人孔子と云人あり其弟子の子路といふ者神に事る仕樣はいかにと問へば孔子申さるゝは我いまだ人に奉公する道

さへとくとは手に入らずまして神に事ることは我力にも能はずと答へらる又死で先どう成るものぞと問へば我いまだ生て居る間の事さへとくとは知らずまして死での後のことは一向知らずと答へられたり是を孔子最員の人の評判には孔子は天地に通ずる聖人なれば是式の事はよく知て居給へども子路に言うて聞しても迚も合點の行ぬ事故わざと教給はぬなりなどゝいへども知て居る事を知らぬといふは嘘つきなり孔子は嘘つかぬ人なれば實にしらぬ事故知らぬといはれたるなるべし或人又難じて曰孔子は生民始つてより跡にも前にもない程の聖人なるに人に奉公するすべも知らず生て居る中の事さへ知らぬとの玉ふは是も嘘では有まいかといふされば嘘といふと卑下といふとの違ひあり是は卑下の言葉也管仲を仁者と譽て自身を仁者と云はぬにて知るべし孔子兼ての語に人に忠信を盡す事は我におとらぬ者一在所の中にも澤山に有らうが學問を好む者は凡我に勝る者は有まいと申されたり孔子程の聖人なれば最早學問は入そむないものなれども天下の道理は限無い物にて何程の聖人でも知盡されぬことなりさればこそ周公といふ聖人も過あり孔子の心にはまだ此樣な事では物知りといふものでないと一生學問を捨ず修行めさるゝ故人の目には聖人と見ゆれども自身は中々聖人などは此方如きの及事ではなしと申されたり又人に事るとは主人に奉公する計でなし親に事るも友達に付合ふも國の守が民百姓をあしらふも皆奉公する氣でなければならぬ事故今日人に事ることを知れば生て居る中の事は濟なり夫を孔子の心にもう是でよいとは思はれぬ故押放して知つたとは申されぬが聖人の聖人たる所也此目に見えたる世上の事さへ知り盡されぬことなるにまして目に見えぬ神の事や死で先の事は聖人も實に知らぬ事なりそれ故鬼神は隨分敬うて遠ざけるを智惠者といふなりすべて人の死したるを祭つて鬼と名づけ又天地の間山には山の靈あり川には川の靈ありとて是を祭つて神といふ是も靈が有やら無やら見た事はなけれども先昔から有として祭てあることゆゑ敬うに如くはなき也夫を無いものにして輕ずるは垣破無法ものなり又胡椒丸呑に信心して福德を祈るは愚人なり高は知れぬと云より外のことなし孔子子路に教て曰知を知とせよ知らざるを知

らずとせよ是知るなりと云ふ心は今日知らねばならぬ人倫の道は隨分と詮義して知るがよしなんぼ吟味しても所詮知れぬ事は知らぬにして捨て置くが誠の物知と言ふ物じやとの事也昔楚南公と言ふ人蕭寥子雲に向うて曰天地の際は有る歟無いか子雲答て曰聖人は天地の中のことは言へども天地の外の事は言はず楚南公笑うて曰聖人が言はぬといへば知つていはぬ樣なれども實は聖人も知らぬであるべし有よう知らぬといへばよけれども言はぬといふは負おしみなりと一口に打込しは尤かな今つく〳〵と案じて見るに此天地はいつ開きし物ぞ漢の司馬遷といふ馬鹿者天皇氏地皇氏などゝ知れもせぬ者を書並べて是を天地開闢の始とすれども一つも證據はなしよし亦其樣な人が有たにもせよ其開闢よりまだ前が無くては叶はず邵康節といふ唐の事觸が十二萬九千六百年に天地一度改まると言ひ經には釋尊より九十六億七千萬歳後に地火起りて燒盡すといふ夫より彌勒出世三會の曉是なり或は仙境の赤縣九州三十三天三千大千世界などゝいへどもその三千世界の外にまだ世界がなければ叶はぬ理也さらば又開闢もなし世界の際もなしといふ時は都ての物に始終の無い物はないに天地計り際がなうては是も又ばつとしてつまらぬもの也これを案じて居ようならば氣のかた病に成うより外はなしいつまでもとんと知れぬ事なり夫故孔子は堯舜より後のことを述て其前は伏義とも神農とも黃帝ともついに孔子の口から言はれた事なし是堯舜より後は上に史官とて物書の役人有て其時々の事を書記し置し故書經といふ書物有て證據正しきゆゑ也其書經さへ武成の篇は二三策を取用ると孟子は云へり然れども先は書經は證據に成べし尤堯舜より已前に農作を敎たり藥を呑おぼえたり衣類を織る事を思ひ付たる人は誰ぞありつらんなれ共伏義神農黃帝と言ひ傳へた計で有つたやら無いやら證據なし三墳といふ書も有れども是も後世の拵らへもの也素問といふ醫書に黃帝の語あれども是全周の末戰國の間に巫醫の輩黃帝の名を借つて俗の信仰する樣に拵へたる素問內經取るにたらず其文の體書經などゝ違うて古體ならざるを見ても知べし其時分の事さへ知ぬ事なるに天地の始つた所其始つた時の人がいまだに生て居て云うたらば誠ともいふべし誰が見て誰がいひ傳へた

る事ぞや吾日本神道の事は唐の鬼神などゝは格別の事にて我々匹夫の口にかけて申も恐多き御事ながら先一通り神代之巻を拝見すれば伊弉諾伊弉冊の二神をぞ國の始とも思はれぬれども日本とても同じ世界の中なれば日本の開闢が知るれば唐の開闢も知れる筈也但し輕く清るは天となり重く濁るは地と成とは開闢の事ではなし是は唐も日本も同じく一元氣の廻る所をいうたる物也天地の始る所はいざ知らず其輕きは昇り重きは降るは今において其通にて一元氣が絶えず昇り降りして居る者也是を大極といふは何故ぞ極は元屋の棟の名也凡天地の間森羅万象此一元氣から生せぬと言ふ事なく世界は此一元氣一つで持て居る故屋の棟に譬へて大極といふ日本にて國常立尊と申も此國のいつ始るとも知れず常住立て有る此一元氣を申す事なりと聞はべりしがいか樣舊事紀古事記日本紀の作者の心も孔子が堯舜より後を説かれし心と同じく諸冊の二神より已前幾億万年有る事やら知れぬ所を一元氣の國常立にて斷りたる物ならんか兎角孔子流の教へは目に見えた現金な事より外はいはぬ事なり生て居る心の事は説ども死での後の魂の事はついにいはれた事なし鬼神は中庸にある通り視れども見えず聽ども聞えず神の格測るべからずとて神を祭つて神が來り給ふや來り給はぬや測知られぬ不思議なる物なれば隨分敬はねばならぬ物とはいふて有れども又其鬼に非ずして祭るは諂也とて我先祖の鬼でもない餘所の先祖を祭るは鬼神に諂ふとて孔子が呵りし事也易は元占の書物なれ共孔子は易の道理を今日の人の身持の事に引直して占のことには用ひず論語に不占而已といへり一切今日の外の事は孔子の門では言はぬ事なり併し天地の始終の知れぬ事をおもへば誠に世界は浮ものにてどうした操で日輪といふものが出たり引こんだりする事やら何で星が澤山にある事やら一つも譯の立た事はない物爰を思へば鬼神は勿論化ものも天狗も有まいとは言はれず莊子が蝶の夢を見たのか蝶が莊子の夢を見て居るのかと紛はしう言へば言はれる筈なり爰の所は所詮人間の知恵では知れぬ事成程無量無邊那由多阿曾祇劫生通しにして居る佛といふ和郎が知つて居ねば此仕舞は付かぬなるべし阿彌陀佛を無量壽覺と釋して法藏菩薩の時より衆生濟度の事を御工夫なされた間さ

へ五劫非載とあればいかにも文字の如く量りなき壽命の佛也如來といふも無始已來生れもせず死もせず億萬劫の昔も億萬劫の後も替らず此の如く在來り給ふとの事なるべし法華經の壽量品に釋迦如來が弟子の諸菩薩に告ての給ふ我成佛して已來今まで行めぐる世界の數年數無量無邊百萬億那由多阿曾祇劫と云云那由多は萬億といふ事と見えたり劫といふは四十里四方の谷に一ぱい詰たる芥子粒の數を一劫といふよし此數を十弄盤で積つて見やうと思へば幅四十里底も四十里の谷を堀て其中へ芥子を一杯つめて夫を一粒づゝ讀んで見れば知れる事なれども其樣な大造な事を仕て見るあほうもなければ一向知れぬ事を言た物なり阿曾祇といふも無數とて算へるにもかぞへられぬ方量もなき數なり爰でみれば釋尊佛に成給ひてよりは誠に無量の年數其間にあそこ爰で色々と名を替へて幾度も滅してわざと死で見せては又現れ給ふ是則方便なりなぜなれば佛が常住傍に居る樣に見せては衆生が澤山に思ふて誠の信心が出ぬ故わざと死だ眞似して見せた物じやと壽量品に說給へり釋尊淨飯王の后の腹より生れ給ふと直に立て右の手を上て天上天下唯我獨尊との給ふよし今時生れし子がか樣の事を言はゝ化物也とて擲き殺すべし是は釋尊の心の中にての給ひしならん我土衆生は無明十氣の雲霧に覆はれ我前生も得知らず釋尊は右の通り幾億萬劫を歷る佛が假の方便に后の腹にやどり來り給ふ物なれば形は赤子でも心は三身卽一神通の佛體なり生てほぎやあとの給ふよりあまえ聲にて物をの給ふもわざと子供の眞似をし給ふ皆狂言也併し夫程の釋迦如來が阿羅々仙人などに事へて難行苦行の修行はいりそもない物じやとの不審ありそこで又ある經の說に人死して中有の魂の間は前生の事を覺て居れども胎內にやどり生れる時に子返りする時の苦しみにて忘れてしまふなり釋尊は凡人ならねば生れても忘れ玉はず七步あゆみ物をの給ひしが此世界の惡風が身にしみやがて倒れ給ひて氣を取失ひて忘れ給ふ元衆生の爲に此閻浮提へ出現ありし應身佛なれどもやゝもすれば佛體を忘れ給ふを忘れさせまいと光音天などがいろ〳〵と世話を燒かるゝ其力にて三明六神通を得給ふと也扨又凡夫にも輪廻といふ事有て死で再び生れ替るといふゆゑ我々も此一生こそ賤けれ今度

は大名に生れて來たいなどゝ願ふは大な了簡違ひなりなせといふにたとへば何兵衛といふ百姓が今度國の守に生れ替つても其以前の何兵衛の時の事を覺えて居ればよけれども我前生が牛で有たか馬で有たかとんと覺えぬからは此後何に生れ替て來ても今の何兵衛の事は忘れてしまふて覺えぬ時はたとへ其再來でも餘所の人と同じ事云はゞ中風病の痿れた足は我體でも痛うも痒うもない樣な物で何の益にも立ぬ事なり時に彼佛樣は識宿命通の通力にて八万大劫無量劫の事をよく覺えて居給へども凡夫の身分では行ぬ事なり其凡夫も佛に成た時は夢の覺たる如くにあらゆる事ども一時に合點の行事のよし此又佛に成うと思へば我と我身を科人を責る樣にする事なり衆生の體八百八煩惱でかたまつたる物なれば身口意の三業を戒律にて縛りからめ先酒は惡行の根本五辛は婬欲を起すとていましめ食事も一日に一度それも日中過ると時に非ずとて喰ふ事ならず虫を殺さぬ樣に水さへ水嚢で漉してのむ意に貪瞋癡の三毒有りとて密法三摩地に心を定め夏の中は大小便の外立事ならず結跏趺坐して觀法に智惠をみがけどもまだ色々の障り有是も三界にて品分れ見思の惑に五下五上の分ありて那含羅漢四果の衆はだん〳〵煩惱去つて過去の事を記する通を得る皆佛の雛子達是にも三乘の品有りて聲聞は四諦の法門に折空の理を觀じ三生六十劫の間七賢七聖の位を歷緣覺は四生百劫の間十二因緣を觀じ菩薩三祇百大劫の間六度の行を修すと云へり此衆が是程の因緣修行でどうやらかうやら實報土の圭圓滿報身の如來と云ふ物に成事なりされども此衆は昔より佛に成る株の有衆也尤我等衆生も佛性をうけて來たとは聞て居れども無始より已來迷ひに迷ふて其佛性はどこへ質に入て有やら今は株なしの我々いか程に修行しても五百羅漢の足元へ寄る按摩取にも所詮ならぬ事兎角世界はどうしても知れぬといふがいつち慥也但經に書てある事を眞受にすれば此しれぬ事を釋迦といふ佛樣が知て居給ふと思ふて濟す物か又は惡る氣を廻して見れば此釋迦どのもやつぱり同じ人間にて世界の事をどう思案して見ても知れぬ故知れぬといふては仕廻が付かぬ故せう事なしに人間の外に佛といふ物を拵へ四土の三界の或は須彌の四州などゝさま〴〵の廣大なる事を說て置かれたる物

か此後いかなる智者が出ても此二つより外は有まじ萬巻の書を學ても知れぬ事なればたとへ聖人に成つても一文不通の我々も詰る所は同じ事學問して氣を欝する丈が損一向あたまから何にも知れぬ方がまし又知れもせぬ經文を信仰して錢一文でも費すは眼前の損也神にも佛にもよらずさはらず只商人ならば商ひ百姓ならば農作の世渡りを精出して喰たい物喰うて死るが末代迄の德と知るべし必物知りに成給ふな

同後段のはなし

佛天竺より渡りて後種々の佛者出て諸宗さま〴〵ある中に唐土の善導大師と日本の法然上人ほど發明なる人は有まじと覺ゆるなり其ゆゑは右言ふごとく天竺の釋迦の有難は人間の外に佛といふ物を拵て世界の濟ぬ事どもを何もかも是に預けて置く掃だめをこしらへたる爰が釋迦如來の發明なる所なり然れども根が證據のない事を說擴げたるもの故空假中と立衆生は此假の世界を有と見る是惑也又空に偏るも塵砂の惑といふ眞實の所は有でなく空でなく其中道の所を語るが正覺を得たる佛なりといふけれども全體が世を捨る法なれば眞と假とを論ずれば無は眞也有は假也我身を諸苦の本として寂滅を樂とすれば詰る所は空に落無に落るなり予按ずるに此無といふが悟の至極なり仁齋の語孟字義に世界は萬億の昔も万億の後もやはり此通りの物にて開闢も終もなしと言へり或人難じて曰開闢有といふに證據なければ開闢無しといふにも證據なし然ればきつと無いとも言はれまいと仁齋答へてさすれば是はどの樣に詮議しても知れぬ事なりいつ迄も知れぬからは無いと言はふより外はなしと申されたり是が僞りも飾りもなき正眞の所也釋迦も爰を知つて居給ふゆゑ我成佛已來無量無邊那由多阿曾祇劫とて量なく邊無しとの給ふ是則仁齋の言はれし所と同じくどう詮議しても知れねば量無く邊無き也畢竟無といふは知れぬといふ事也大昔の事を無始と云て文字には始無しと書く人口を開けば阿といふと阿は物の始なるに經には阿字本不生とて阿の字を無生の義と說く是老莊の書に無名は天地の始といひ又は始有て始無し始なしといふものも無しと莊子がいうた樣なもの也佛阿難に告ての給ふ我昔文珠師利と有無の二諦を論じてより死して三途に墮ち無量劫を歷て地獄より出迦葉佛に値うて有無の二

諦の事を尋ねければ迦葉佛の給ふは汝此體を有といひ無といふそれが則迷ひなり一切諸法は定法なし萬法皆悉空寂有に非らず無にあらず實體不思議なりと答て其跡は語無し然れば此有無の二つは釋迦如來も合點が行かず殊の外難義なされし事を自身に言ふて置れし也いかさま有にもあらず無にもあらずといふ時は宙にぶらりでやつぱり空也此跡は最早知れぬ事ならん智論の中に可得の願とは願へばきつと叶ふ願の事なり不可得の願とはいか程願ふても所詮叶はぬ願の事なりたとへば地を堀て水を求め石を鑽て火を出さうと思ふ是らは願へば必叶ふ願なりと言へり夫なれば經の力でも佛の智惠でも知れぬ事はやつぱり知れぬなり惣じて老莊佛の說は目に見えぬ空なる所を說たる物ゆゑ條の通つた事は一つもなく行詰つた所では止なん〳〵不可說とて其所は口では言はれぬ所じやとよい加減に逃げて有所經の中に多く有る事也不立文字の悟りを以て禪宗が出ほうだいに人をおどしてもどの樣に高上にいふても畢竟空なり無なりいつ迄座禪工夫しても氣違に成がとりえにてついに本來の面目の開けるといふ期は無い事なり律宗が釋迦の行を學て二百五十戒をたもつ是れも五人と三人とは此行も出來れども世界中の人を皆此通りにせうといふ事は成まじ先夫婦の交は煩惱の第一なれば是を絕ねば佛法の本意ではなけれども男女の交は虫螻に至る迄生れついたる事なるを世界一まいに是を絕事一向出來ぬこと也もし又世界の人殘らず男女の道を絕ば子を生といふ事もなく世界に人種はたえて仕舞ふべし眞實禪律を修行すれば此穢土を離れて首くくつてなりと早ふ死ふより外はなし此きたない穢土に住で居る中はとても佛法の敎の樣には成らぬものゆゑ出家といへども寺の內の格式は在家に少しも違はず下男を使へば半季何程と給銀を極める飮酒戒といへども酒も呑ねば檀方に付合が出來ず六十日の勘定が合ねば寺が相續せぬゆゑ十弄盤に隙なく座禪工夫所ではなし日本には僧官僧位ありて何僧正何法印などゝ禁裏より官位を給はる是も佛法の本意は山林へ引籠り頭陀乞食を業とすそれには大に相違したる事也又俗家にも位牌に戒名をかいて年忌を吊ふ此位牌と言もの佛法には無い事にて是は儒者の神主といふ者が佛法者に移りたる也儒者の敎は佛法とは裏

はらにして我親たる者死してもやはり生て居る樣に敬ひ神主に諡號を記し詞堂に祭り置命日の一年目を小祥と名付て一門寄合ひ祭る事あり三年目を大祥とて祭る事なり佛法の本意にはかようの事はなき事なり又服といふは親類の死したる喪の中は悲みの情を姿に表はして常に替りて麁服を着る聖人の敎なり日本神道には穢を忌むゆゑ此麁服を着る喪の中は神事にたづさはる事を忌故服忌といふなり佛法の年忌を吊らふと云は彼儒者の方の小祥大祥の祭りの禮が佛法へ移りたるにて忌と言ふ名は神道が移りたるなり誠の佛の悟りには親にも妻子にも執着せぬを本意とすれば燒な埋むな野に捨てよにて魂此土を去れば親も兄弟も他人も犬も猫も皆一體何の着する事あらんなれどもそれでは一向世間が濟ぬゆゑ佛法にもいつともなう儒者の禮が移つて儒道と佛道と神道とまぜこせに成たる物なり唐の代に大原といふ地に佛法甚はやりて親兄弟の死したるを葬らず尸を犬にあたへて喰する故其他の犬は人に喰付く事習はしと成り次第にか樣の事つのりて政道の害になる故韓退之歐陽永叔などゝいふ儒者が佛法を邪說也とて惡みたる事なり誠にか樣に成ては天下國家の大害なり法然上人爰を能知つて諸經の說諸宗の論を放下し難行を捨て易行を用ひ南無阿彌陀佛の稱名一つで濟む樣におしへられしは發明の至極と言ふべし成程佛法を餘りふかく修行すればいやとも山林へ引込體を犬にあたへる樣に成る其樣になると世の亂れに成る事眼前なり兎角人の深う佛法に入らぬ樣に身力を禁しめたゞ今日銘銘の家業を大事に勤めて其間に阿彌陀如來をお賴申て置さへすればあなたが極樂といふ結構な所へやつて下さる程に自身にこしやくを出すな經もよむな戒もたもつなとの敎へ渡世なれば漁夫が鰯網引にも念佛申せば罪にならずにむづかしい戒定慧の三學する事もいらずいかにも世界は文盲片言で濟んだ事なり彼極樂へゆくと百味の食を給はるといふ是も佛說に段觸思識の四食とて此人界の人は五穀魚肉などを食とすれども色界無色界には我六根を活らかする識といふ物を食とする或は地獄には業苦を食とするといふ此理を以て見れば極樂往生の人は如來の無上菩提の法味を食として長く樂といふ事なるべしそれを心得違て念佛の德で往生すれば極樂の虎屋から毎

日羊羹でもつゞける樣に思ふて居る人も有り又世にいふ鬼と言ふ物あり鬼とは死人の事なれば諸の迷ひに鬼が責られるといふ事を地獄で鬼が責めると間違ふて居る人あり精進と潔齋とを取違へて肴喰はぬ事を精進と心得天竺と云へば空の事と思ひ駈落する事をしゆつほく（本ノマヽ出奔カ）と覺て居る人も南無阿彌陀佛さへ申せば極樂へ行と安心する是では今日人倫の道は道で立て政道の害に成る事微塵もなし此通りなれば儒者も神道者も佛法を惡ふ言はふ樣は根から無い事どこもかも中がようて是ほどようした宗旨はなく爰で見れば法然上人は釋迦よりはやつと發明なる祖師なり右云如く佛法の實の所は無の一字にて根が何やら知れぬ事を數千卷に說擴げたる物ゆゑ經々に說く所度々に違ふてどこが實やらどこが方便やらつかまへ所のない樣に仕たる經の面其中のいつち心安い所を敎へたるが淨土宗なり其後に日蓮が出られて題目の德で往生ずると說れたる是は念佛を先へ仕て取られて負おしみに題目とぬけたるもの也併し此日蓮宗にはまだ自力が有つて惡し只一筋に念佛にて死んだ先はよい所へ行と思ふて一生を安心すべし淨土の敎の如くに說けば佛法は今日の害にならぬ計ならず大に世界の爲になる事なりなせと言ふに今日同じ人間にて大名の家に生るゝも有り非人乞食の子に生るゝもありそれをめい〳〵足る事を知つて天も人も怨みぬは聖人賢者ならでは無し凡人は必身をうらみ人をそねみ惡心生ずるは人情なり所を過去の宿業といふ所で明らめが付故惡心起らず面々身の分際を守る時は天下泰平の基にあらずや唐土にて佛法ゆゑに世の亂れたるは無理に佛法の理を知らうとするから也さらば知りおほせた所が根が空なる事なれば修行すればするほどまつくろに成て一生迷ふて死る事たとへば傾城になづみて色町へ入こみ粹に成らう〳〵と深う入れば入る程商も手につかず身上叩き上げた所ではやつぱり野暮と同じ事それよりはどの傾城にも凝らず一坐流にさつと一つ飮んで氣を發して歸れば身上もいがまず養生にも成る是が本の粹といふ物也佛法もその如く深う釋迦の廓へ踏込ず唯上かは一通りの南無阿彌陀佛なりと法蓮華經なりと唱へるに格別腹もへらず時々寺へ布施取られるは付合に紋日くゝりつけられたと明らめれば濟む也是ぞ大悟道發明釋

尊爰に現はれ我詞を聞給はゝ善哉〳〵と讃歎し給ふべし南無阿彌陀佛〳〵

右は半二が遺稿にして疎懶堂と紀上太郎とが梓にのぼせ天明七未の仲冬同好の人々に配る予も是を一部祕藏して讀に至れるかな此翁かゝる博識ながら前編の始にも演る如く自聞取法問耳學問根氣を詰て物學ぶ事のならぬ自墮落者なりといはれしよし予も此翁の自墮落を眞似るにはあらねど東都においてひと日戲れに書たるは戲場正本寺の大上人

西澤一鳳一代不性

法然上人の一枚起請は愚痴無智の尼入道にあたへし文吾れ生れし折は氏神始諸神達のお世話に相成生ある內は孔夫子の仰をかれし仁義五常の道のはし〴〵をとなへ來り是から先死ぬ一段と成ては佛達のお世話に預らんさすれば念佛や題目ばかり唱るも見えぬ先の世の事ばかり願ふて其もとを忘るゝに似たりと一流神儒佛の尊きを思ひて朝夕天照孔子彌陀佛と吾のみ相となへ候我と心同じき衆は是をとなへ給へいやならよしにせよ

右一時の戲れながら半二の靈若是を聞かば善哉〳〵

と讃歎すべし扨遊里洞房の痴情などは親しくたちふるまふにあらずとも知りやすく書やすきものとはいへども戲作者ならぬ歌舞妓作者の奈河龜助が戲編有色相書文男女相姓とて自笑其磧が口調に倣ひその文意猥雜なれども遺稿なれば爰にのする

奈河龜助が戲編

（此一章稍猥雜にわたれるを以て略す）

目次

一賴政扇子芝院本摹寫
一昔米萬石通院本摹寫
一北條時賴記院本摹寫
一艷道通鑑雜戀の話
一三浦大助紅梅鞠の話
一一谷嫩軍記須磨都の話
一同千載集流しの枝の話
一娘景清八島日記の話
一狂言の筋は八文舍本に有
一同黃金の鷄內讀の話
一佛法乘合噺の筋書
一戲場番付に名前を削る辭
凡十二條

西澤文庫

傳奇作書拾遺下の巻

西澤一鳳軒李叟著

享保九甲辰年春始興行追善の芝廿八ヶ年後寛延四辛未年秋に扇子芝

賴政扇子芝

豐竹越前少掾直傳　豐竹筑前少掾直傳　西澤九左衛門版

享保十乙巳年春興行廿五ヶ年後己巳の秋是よりして雙蝶々の狂言を出しけり

昔米萬石通

豐竹上野少掾直傳　正本屋九左衛門版

享保十一丙午年四月八日より翌十二丁未閏正月晦日迄興行嘉永已酉迄百廿三年になる

北條時賴記

豐竹越前少掾直傳　豐竹筑前少掾直傳　正本屋九左衛門版

賴政扇子芝

作者　西澤一風　田中千柳

序詞　天上の衆星北に拱して尊を忘れず。地下の諸水東に朝して大よく細を容る。中に牙む葦原國。神日本磐余彦の天皇より。千餘り八百や四十の年。君を傳へて八十代。高倉院と申奉るは後白河の法皇第三の皇子。大政入道平清盛が御聟君治承四年も二月や位譲りの大内山　テロシ　御即位の大禮經營有。受禪の宮は言仁親王安德天皇と號し。御年いまだ三歳の。いとけなき御姿に衰晩を召せ。內大臣平の宗盛かきいだき奉れば。父みかど御惱によつて後白河法皇三種の神器を傳へられんともうけある。玉座は唐の例をうつし。四神の幡を堺に立、諸衞鼓を陣に

昔米萬石通上之巻

作者　西澤一風　田中千柳

西鶴法師が筆の跡女郎のよれる見世さきには。たけ

き虎もかうべをうなだれ印花禿が横町を。袂かゝるて通るには人かみ犬も尾をふつて。必よると書傳へ。あしこそしげれなには江や。夕暮ごとの。ぞめき人。相圖の小歌物まねやうかれ淨瑠璃口々の中に目に立東口。新町根元根本の。油鬢付仕出し家。虎やが見世にいろさはぐ。竹取唐土木々野など。客付る間の何がな慰み。是三五郎殿。あれ〳〵小野屋かうやくの聲がする。來たら呼込うたはせて聞せてや。なふもろこし樣木々野樣かゐらしいでつち殿じやないかいの。それ〳〵。見かけは十七か十八か年よりあどないおぼこ生れとそやされて。あほうのくせに口あはだて。おつと心得たんとはしらぬかうやくの。一座や二座はもめ姿。是〳〵小野やかうやくと。呼れて頃も六十餘りねばはづよなるかた親父。箱ふりかたげ立よれば小野やおの

北條時賴記

作者　西澤一鳳　田中千柳

序詞葵の花は日を見て轉じ。芭蕉は雷を聞て開き。耳目なくして時を知る。況や明君機に臨み變に應じて民を撫艱苦を憐み世を富す。惠みめぐれる國人の相摸守時賴朝臣古今に厚き仁德の。榮へ茂りて桑の門薤髮の昔を尋るに。建長かぞへて四つの年。卯の花月の都より。後嵯峨の院第一の皇子。宗尊親王と聞えしは鎌倉の御所に入御なつて前の將軍の御代嗣とナロシ「各かしづき。奉る親王御年十三歲。才智賢く渡らせ給へば。執權北條相摸守時賴。同若狹の前司泰村。御藏の典鑰佐野兵衞政經其外在鎌倉の諸大名。善盡し美盡して。御家督相續ことぶきて天下の悅び餘り有。宗尊親王御袖を引つくろひ某いまだ

艷道通鑑雜戀の話

艷道通鑑は正德五乙未年八月發板して似切齋殘口の著述なり神祇釋敎雜無常の戀を六卷にわかち昔より歷々の戀知りの情を書常世の薄情を謗りいとおもしろき書也雜の戀の部第十一段に白浪ばかりこそよると見えしかと詠せしは須磨明石の暗りみがゝれ出ると詠しは木賊山の有明頃同じ月ながら所によりておもしろくわけて武藏野の草より出て草に入月虫の聲も高調子に隣りをはゞからず露も大粒にて餘所より

耀めきつよし見る人の心も空とひとつに成て寛濶なるはむかう境界に隨ふ魂なるべし葉月の中の五日もろこしも大和も詩作り歌よむ人の宿に寢るはなし終夜友にさそはれて輿に乘ずるの望風願淺(頑世カ)もなき童も宵まとひせず病なしの奴婢も隙有ながら居眠らざるは東坡居士のいへる造物者の無盡藏か爰に中橋邊に人の家の賄する男伴ふ人もなく夜更まであこがれ歩き往還も稀なるさびしく成しまゝ我も家路に急ぎ足早に戻りけるに汐留あたりのほぐらき方よりふり袖着たる女の色白く品かたちのさもしからぬが差出てふるひ聲して見かけて申上ます御情けあれかしといふ男は思ひがけなく何事にかといへばたゞおたすけに鳥目少し給はれかしと云男扨は此頃夜鷹とやらんいふものにこそ何にもせよ今日は心ざしある日なり有合たるぞ幸ひと遍路打あけて殘らずとらせけるに此女左右の手を受け雨雫としやくりもあへず不審に覺えていかにかくまでは歎くと問ふに女のいふにはかく御めぐみに與り候上はつゝまずかたり參らせんみづからは浪人の獨り娘にて終にかゝる業に出たる身にあらず母にて候ものは去年相果て年老たる父親ひとり殊に病の床に臥して持合せたる雜具も賣代なし朝夕のけぶりも絶々なるにつけ隣あたりよりすゝめられ此頃は身過の爲めに夜々ちまたに出て往還の人に袖ふるればその日を送る儲はありと聞しまゝに遣る瀬なき貧しき恥を忘れて今宵此業に出參らせ候へどもしつけざるゆゑ又はおもはゆく宵には人にも近づきかねとかくと夜をふかしもはや宿にかへるべきかかくて歸りたればとて明日の便なければ是非なくそなたの御袖に取つき候にかほどの御たすけ身にとりてのよろこばしさと涙ながらに語るに此男も共に泣てあくる夜必と契りてわかれぬ扨それより夜をかさねて小宿をもとめ出合しに心だておとなしくいひ出すことばもあさはかなく次第〳〵にかあねさまさりけるにある夜女のいひけるは我身かゝる淺猿しきわざを親にしられんも口惜くそのかたと夫婦の約束致せしよしつゝまずしらせ候へば老後の悦び是に過ず何とぞ逢參らせんと願はれ候とかたる男も今はとてもぬれ衣かさねしうへのおもき緣いざ諸共につれだちて親の在家へ行て見れば娘がいひしにいさゝか違はず親仁おもき枕をあげて手を合せて

我等はいはれある者ながら幸ならぬ事彌増てかほどに落ぶれ候しかしむすぶ縁有てぞ娘はそなたにまかせぬらん今は浮世に思ひ置く事なしと古き衾の下より脇差一腰出して最後まで猛武のしるしに放さじと心がけたれど今の嬉しさ聟の引出に送り候と渡され忝しとおしいたゞき其日は家に歸る此男が主人は道具好にて取わけ此頃指料の求しけるに幸と見せければ本阿彌へ出し吟味の上菊一文字の助宗に極る世に稀成上道具と成ければ主人も日頃の勤を感じ今日のむすびを悦で家屋敷に金銀そへて此男に取らせ娘も親仁も迎へて心安く看病しぬ其年のくれ親仁はながく世を退ぬ扨も泉岳寺の土に埋むと聞しはたしかに大石のくだけにやあらん

此出板は元祿十五義士復讐の年より十四年目なれば近き事ゆゑ大石の碎にやあらんと遠慮の文なり此一段を借りて明和三丙戌年十月近松半二太平記忠臣講釋の六つ七つ目に仕組たり親仁を矢間喜内とし重太郎おりえに潤色したり實に浪人の堅氣嫁が貧苦にせまり河原へ夜毎に辻君に出るなど人情を盡せりといふべし予又此一段をもつて奈河晴助にすゝめ義士傳によらず本文の通り仕組祖父を鬼丸（初代淺尾工左衛門）惣嫁娘を湖鹿（娘琴子後小立）聟を璃寛（二代目嵐吉）此三人にさゝばよからんと晴助諾して璃寛にはなし筆を採り予に外題を商議す作者殘口子を賞じて艶道通鑑廓卯花などよかるべしといへるうち譯有て鬼丸は退座し市川鰕十郎（始市藏俳名新升）出勤と成ける璃寛新升久々の一座なれば幸ひと出村玉屋の名を借りて越前三國夫婦墳と外題して寫本十巻を出して文化十四丁丑の冬顔見世に出し幸に當りを取りけり是等狂言の種とするには其折の役者によるべし數多ある野史雜書の中に是を潤色して誰々にさせんとの腹稿新奇無量のもの數多あれ共時候座組により世に出ず年月立ば忘れ腹稿の儘徒とはなりけり詩歌連俳に孕三句とて趣向うかびながら句を惜しみて其場をまづ昔源の順が楊貴妃歸唐帝恩李婦人去漢皇情云詩を兼て嗜み對雨窓月といふ題を得て此句を出し津守の國基が薄墨にかく玉章と見ゆる哉の歌もおなじ其餘ふし柴の加賀は白川の能因も此類ひなり芭蕉も浮世の果はみな小町なりといふ句を久しく心にかけてさま〴〵に品かはりたる戀をしてと前句出しをりに爰でこそと附たり詩歌連俳にすら讀

ばえあるなしの跡あり況はんや諸萬人の看官に見せる狂言なれば時候人氣役者の三つに呼吸あはねば手柄とならず期をまつて期を失ふわる口に言へば辨當もお藏となりしといふべきか此三つを辨へずいかに當り狂言なればとて無理往生に出して益なく不評にして看物の入らぬ時は金主には損をさせいらざる氣根をへらすのみなり三つのうちひとつかけても時來らずと腹稿のまゝ持にしたらん方ぬかぬ太刀の高名なるべし

三浦大助紅梅鞠の話

此狂言も享保十五庚戌年の春竹本座の新淨瑠璃にて長谷川千四と文耕堂の作なり大序は眞鶴が崎にて頼朝敗軍を集める場二つ目は八丁礫の後家再緣して眞田文藏藤九郎盛長等と再會の場三つ目は稚子が辻青貝屋より星合寺四つ目は三浦義明衣笠城の場何れも面白き場ながら衣笠城にて三浦大助百八歳けふ討死のかどんでと老の粧ひの若々敷花田の衣に白の直垂金造りの太刀をはき心をもみに菱烏帽子しのゝめ芝毛の駒にのり紅梅鞠かいくり〳〵五色揃ゆる出たちばえとの齣あるゆゑ表號に紅梅鞠と出せり此三段目は餘の三の切と違ひ屋體組なく往還の狂言なり娘景清の三の切襤褸錦の大晏寺堤の外三の切を往來門傍にて書しはなく數百番の淨瑠璃の内にも所謂天狗ものにて老練の者ならで語らず三十年前北の素人淨瑠璃に名高き吹松獨是を語り予も幼少の折聽し事あり然るに文化十三丙子年璃寛を最負の老人よりすゝめて兒源氏道中軍記の二の切青墓熊坂長範の役又太政入道兵庫岬三の切能登守教經と二役をさせしに古今未曾有の大當りをせしより何がな珍敷院本を見出し璃寛にさせんと種々勸むる中に三浦大助の三の切梶原をせよと北の最負連より達ていへ共璃寛役は納りながら時節有べしとて是をせず六郎太夫を鬼丸娘梢を珏子ならば役割にも誣なかるべしと再三勸めし時璃寛の答へに六郎太夫と娘はよくとも大場景親俣野景久を冠十郎（俳名慶舍）團八（俳名團風）にさせたらんにはかゝる名譽の狂言を仕崩すべし其譯は石橋山合戰の頃は大庭俣野は大身なり梶原景時は身分遙に低からずや其兩人の見る前にて切る劒を手の内の術にて切らず鈍刀と僞る役ゆゑ大庭俣野は我藝と同じき立物にさゝでは狂言の情に叶はず先片岡の大庭新升の俣野なら

ばしても見ん狂言は是に限るべからずとて再言はず影にて看板等の手當までしたれ共出ずなりけり此時いかにしても殘念なりとて會稽三浦譽と外題して濱松歌國に託して繪入讀本に出させ文談は院本のまゝを書けり後五六年立て文政四辛巳年三月歌右衛門此頃芝翫梶原をしけり六郎太夫鬼丸娘梢松江大庭奥山俣野歌七にて外題も無雜作に梶原平三紅梅鮒と呼けり四の切をしてこそ紅梅鮒なれ譬はゝ紅梅の箙にするにせよ箙の梅は源太景季なりかゝる事は前編梅玉の條にのぶる如くなれば論なし其頃璃寛芝翫とて最負〳〵の鎬を削り甲乙を爭ひしかど璃寛は年も芝翫よりは十ばかり越修行も故銘人の狂言を見覺えし故か三段ばかりは丈夫に上なりされども芝翫は若手なり時の人氣に叶ひし故血氣にまかせ何役にても仕おほせ暗的も中には有けり此時予が文の友魚力といへる老人素人淨瑠璃俗號備七古今戯場の見功者にて珍敷狂言出しゆゑ一見せしが片腹痛くなりし故石切だけにて歸りしと予に咄さる其批評を聞くに此紅梅鮒の三の口切は寶曆明和の頃一見せしが其時の役割梶原景時に三保木儀左衞門俳名素桐六郎太夫に三桝大五郎元祖逸風娘梢に澤村國太郎いまだ娘形に有りしと大庭景親に嵐七五郎俳名舍丸股野五郎に山村儀右衞門此頃は喜吉俳名五登にてせしを見て餘りおもしろきまゝ其後此狂言出たれば老後の思ひ出に見物すべきと樂しみ暮せしに永らく出ず又當時の役者共は見るが物なしと近頃芝居は噂のみ聞て見物せず然るに此度中村歌右衞門工左衞門等がするよし聞早速角の芝居見物せしに衆人一統よろこべども此方の評するに論にかゝらず夫を大明神の親玉のと諸見物は皆盲同前なりと散々の評也予も老人の昔を賞め角觝の咄いづれば谷風小野川雷電に威され戯場ばなしには黒谷文七平九郎藤川初代あやめに倒され閉口するも口惜ければいかなる所が氣に入らず委敷評じ候へと魚力老人の評を聞に先梶原の了簡違へり大庭俣野は東國の大名なり景時は小身なり今の芝翫が梶原ならば大庭は片岡に限るべし俣野は新升か大友なるべし奥山歌七等にさせるは何ぞやその上今にも耳に殘り眼にさへぎるは茶の湯のうちなり評「此馬場先の松風を釜のたぎりと聞なして持參の茶箱澁くとも御兩所へ差上げんフシ「此場のあらけ汲流すお茶の手前は小扇從が色をゆかりの紫帛紗青しつ覆ひの挾箱腰をか

くれば是も又三疊臺目の心地ぞと梶をとつたる梶原が心の花ぞ優美なると此内茶の手前をするはかの北野の大茶湯のさまを見するが狂言なり茶の湯は東山殿以來の弄びなどとて芝翫が酒にかへ歌をよむかは知らねども都て小利口にて大名とは思はれず與力同心の心持なり後刀を改る所物語親子の影を手水鉢にうつす所も皆下卑たり幕切淋しきとてか大庭俣野が出て軍法の問事などは論にかゝらず又鬼丸の六郎太夫甚あしゝ逸風大五郎の事のせし時は「するどき劒のかゝみ打音はばつたり砂煙り血はたつなみと涌かへる上の死骸を引のくれば六郎太夫は茫然と起上つたるからだの門(内カ)聊も疵付ず繩目はふしぎにきれほどけ氣を空蟬のうつかりひよんと此時起上りしまゝ眼たゝきもせず正面を見つめ居たり大庭兄弟が惡口矢來の外にて娘のよろこびせりふ渡りて大庭俣野挨拶もなく立かへる迄長き間正面は見付いれ共袈は冥途か何國ぞと心の疑ひ顔にあらはれ兄弟の這入切た跡にて心付死んとする思ひ入得もいはれず鬼丸は骸うごかせて扨は刀はなまくらかと大庭兄弟の這入らぬうちから早心付たる體然らばとめ人のないうちに切腹は出來るべし嗚呼拙なしとつぶやかれたり予も此體のおもしろさに以前璃寛に勸めし時時有べしといへる事を老人にかたりければ實に璃寛にさせたらば鬼丸にも敎べし其心にてする時は素桐にも增るべし殘り多しといはれしが璃寛は期を待て期を失なひ芝翫は我を張り仕おほせたり夫すら又梅玉の狂言となりて仕樣を知らず星合寺を宮となし手水鉢變じて駒犬とかに化す役者はもとより見物の目も其時々にかはるなるべし

一谷嫩軍記須磨都の話

此狂言は今專ら歌舞妓淨瑠璃にも流行して誰も知りたる事乍ら並木宗助が遺稿にて歿後寶曆元辛未臘月より豐竹座に於て尤書さしの所は淺田一鳥浪岡鯨兒が補助もあれど宗助數十番の狂言ありと雖も是等を名譽の佳作と云須磨の若木の櫻を源平の世界へ借り敦盛を院の胤故無官太夫と云熊谷直實はもと佐竹の治郎などゝ思ひもかけぬ軍中の身代り斯押出しての趣向はつかぬものなり三の切枕淨瑠璃に要害嚴敷逆茂木の中に若木の花盛八重九重も及びなきそれかあらぬか人毎に熊谷櫻といふぞかしと嫩の櫻に熊谷櫻

を混じ寺内の餘木に梅有て此花江南の所務なりと辨慶執筆の制札を梅と櫻の樹はかはれど態と一本に寄たるなるべし予當仲秋月見がてら彼地に遊ぶに付古圖名所等を袮りかの地に引當て見る所源語須磨記の古きはいはず源平戰死の古墳は源平盛衰記平家物語より見出して爰か彼所かと定めしにはあらず大約嫩軍記の院本より所を定め標石を建しと思はる山上には内裏の跡あるが故三の谷の前に一門の古墳有を嫩軍記の淨瑠璃此かた敦盛の石碑と唱へ替たり古き船頭唄に「爰はどこじやと船頭衆に問へば爰は須磨の浦敦盛の石塔是寶暦明和頃の流行歌なるべし新書圖を見れば鉢伏山鐵楞嶺より須磨寺の北手を都て後の山と云とあり三の切物語の文談に逆去たる平山が後の山より聲高くと是より土俗唱へ來るを攝津國大繪圖に迄書入ると見えたり是に不限都て名所古跡は多くは淨瑠璃より出て所定まれる物人も尋ねて少々の廻り道をしても必訪代々の撰集に出し和歌の名所古物語物に出たる古跡は俗に遠ければ人行ず四天王寺の西門の花表の額を小野の道風の筆也とは竹田出雲が青柳硯より定め須磨の古戰場は並木宗助が嫩軍記より極る原より根なし事を書編る業ともいはゝいへ是らを作者の面目といふべし曩に云兒源氏の熊坂長範の珍らしかりしより銘々古淨瑠璃本より見出して文政元戊寅年五月堀江市の側芝居にて須磨都源平躑躅二の切扇屋若狹の場源平雛鳥越三の切鷲の尾經春の場を集め熊谷鷲尾の二役を璃寛にさせけり源平躑躅の院本は享保十五庚戌年霜月に始て長谷川千四文耕堂の兩人竹本坐にて作なり然る時は嫩軍記より廿二ヶ年前の狂言にて熊谷敦盛は嫩軍記の佳作に奪はれて久敷世に出ず其うへ二の切なれば齣輕く操りに取立ても眞の太夫は三の切をとり二の切は二枚目三枚目の太夫語れば輕き事勿論なり物によりて三の切は語り手なく二の切四の切など流行する狂言ありいはば蘆屋道滿大内鑑の三の切は人語らず四の切葛の葉の子別れのみ也攝州渡邊橋供養にても其場を語らず四の切袈裟御前鳥羽の戀塚のみ語るに同じ依て扇屋の場を人しらず漸北の吹松（前にいふ素人上るりの名譽は時々語ると聞たり近來こそ法則崩れ形容にもなき背けたる役を仕もしさせもすれど文化の末文政の始頃は嫩軍記の熊谷などは仕手の役者を好し事なり既に奥山爲十

耶の祖は容猛くいか樣坂東武士とも見ゆるが故熊谷は毎度せしが芙雀（南部屋祇園町）のせし時人柄に似合ずとて不評なりしとぞ寛政十戊午年盆替りに珉獅璃寛とて若手揃への折熊谷は小珉獅六彌太は璃寛切は（八郎兵衛雛助猿廻し與二郎嵐吉）毎日替りの時也其後は熊谷は片岡一人より仕手はなき樣に思ひしに文化十癸酉年江戸より歸りたての歌右衛門（後梅玉と云）小兵ながら嫩軍記の熊谷をしけりもとより手だれの芝翫なれば故人の仕來りと違ひ新奇無量の思入を加へたりければ二の口須磨の浦組打の場は古今に仕手あるまじと評よかりき三の切物語迄よく幕切切拂ふたる有髪の想との所にて兜の下くる〳〵坊主なり義經より暇の出るや否わからぬに青坊主になるとはあまりなる思入をとて甚不評の上角の芝居にて璃寛青柳硯の道風をして大當りをとりしゆゑ興行わづかにして京都芝居へ登りけり其時の落首に熊谷が夏のとうふにあてられてあたま丸めて京へ御隱居とてそしりけり此時より後歌右衛門度々出し坊主あたまを見馴しゆゑ今又有髪の想にしてしたれば古風なりとて笑ふべし右に云ふ如く熊谷の容璃寛には似合ざる故嫩軍記の熊谷はせぬ事に極めたるを源平蹶躅は狂言も違ひ殊に深編笠にて長く顏を隱し居るゆゑ薄肉砥の粉摺几しにて見せたらば珍らしかるべし拵へ（樂屋通言に顏のつくりを云）だけにても役になるべしと勸によつて始しに狂言の珍らしきと璃寛の拵衣裳萬端評よく大當りを取たり此時の役割は小萩の敦盛に萩野錦子（後澤村國太郎）扇屋上總に嵐冠十郎同女房に中山文七阿根輪の平治に嵐團八尤璃寛の心には此直實は院本のまゝ添削なくする事故役輕く狂言は次幕鷲尾經春にて見せ此場は拵容を役として勤けり翌年京にて此狂言を出し上總に工左衛門小萩に小六にて是又大入せしなり其後中絕して狂言出ざりしを十五年後天保三壬辰年歌右衛門（梅玉）年々根氣疲れ新に一日の狂言を稽古をする能はず大體の役は仕盡したり一齣は乃至（本ノマヽ）口切ものに殘る狂言のあらまほしと予に相談に及ぶ色々と話す內ふと源平蹶躅の事を咄せしかば梅玉も兼て噂に聞居る事商議の邪魔なりとて餘人を退け梅玉に其役出來ふや出來まじくやと問ふ予が曰璃寛は常に眞立役のみをして替りし造り拵へをせず故に見物珍らしがりたり前にもいへる璃寛すら役は不足なれども造拵にて勤めし事を語り聞す梅玉云

我に熊谷の造り拵へ珍らしからず殊に岡は（寛□□□の略）狂言を腹でして働きをせず看官に感心させる名人なれば所詮梅玉の狂言になるまじ予又曰二の切位故役輕し是を三の切に脚色ばいかにと院本正本を取よせ讀聞せければ梅玉聞て成程是は輕くてする所少なしいかゞすれば三の切になるやと問ふ本文の熊谷は菅原傳授の松王にて小太郎のなき役なれば輕し是を口と見て道具をかへ五條の橋にて嫩軍記の二の口組討をして見せなば梅玉素より檀得の（樂屋通言に二の口を然唱る）方評よく東都より岩井紫若（杜若悴始松之助）來り出勤なれば是に敦盛の小萩をさゝば取合よからんと云梅玉大によろこび兩人共に引抜の衣裳を誂へ予は正月元日に此增補にかゝり都て一幕を賑はしく人數をふやし五條の橋よりチヨボを駒太夫に書（豐竹駒太夫は延享寛延寶曆年間の人古今の美聲名音也とて駒太夫ぶしと有）愁ひ大落しの跡「かゝる歎きの折しもあれ俄にひびく鯨波耳をつらぬく鐘太鼓手に取如く聞ゆるにぞ夫婦ははつと打驚胸を痛る計り也敦盛耳を欹て給ひセリフ「ハテ心得ぬ人馬の物音扨は先刻の阿根輪とやらんが再び是へおしよするか我命はをしからねど名もなき匹夫の手にかゝる事一門の思はくハテ殘念やなア「御落涙ぞいたはしき（下略）敦盛を忠度につかひ熊谷を六彌太につかふ兩人役の肥たる事なし其末にセリフ「イヤウ熊谷殿御所望に候得ば此二本の陣扇わけて一本進上申すかさねて廻り扇の印チヨボ「互ひの勝負は戰場でといはぬはいふに彌增る涙かくして手に渡し夫婦さらばと立出れば是のふ暫しとひきとゞめ可愛いゝ娘の死顏をまいちど逢うて下されとすがる袂をふり拂ひ早立出る其隙に熊谷馬に乘り移りさもゆゝしげなるその有さま見るより敦盛心をはげましセリフ「いかに直實此場は此まゝ別るゝ共一の谷の戰場にて我ぞ誠の敦盛と名乘つておことに出合ひなば助る心かいかに〳〵チヨボ「いかに〳〵と呼はれば（此時花道にて紫若引ぬき）熊谷につこと打笑ひウタ「ホヽいしくもとがめたりモシ一の谷の戰場にて出合なばけふの情を其日の仇此加茂川の流れを直に須磨の浦になぞらへ一二の谷は東山今惠れし此陣扇さつとひらひて高聲にチヨボ「駒をはやめて追駈來り（舞臺で歌右衛門一セリフ「ヤアヽ夫へ打せ給ふは平家の大將軍と見奉るまさなうも敵に後ろを見せ給ふかかく申某は武藏の國の住人私の黨の旗頭熊谷の治郎直實見參せん返させ給へ

ヲヽイ〳〵チヨボ「扇をひろげ暫し〳〵と呼はつたり爰にて歌右衛門「敵に聲をかけられて何か猶豫なすべき馬上にて引抜き」ぞ敦盛駒をば引かへしイザ來い勝負と詰よれば熊谷も進みより互ひに打物拔かざし朝日かゞやく鈒の稻妻かけよりかけよせてう〳〵〳〵蝶の羽返し諸鐙駒の足なみかつし〳〵〳〵こは須磨の浦風に鎧の袖はひら〳〵〳〵群居る衞村千鳥むら〳〵ばつと引汐によせては歸り歸りては裳「又打かくる歌「虛々實々チヨボ「勝負果ねば太刀投すて馬上ながらもむんずと組ヱイ〳〵〳〵の聲諸共たとへ鐙を踏はづし兩馬が合に落る共歌「首かき切て高名なさん其時かならず情ある武士抔と油斷せば終にかの土にかばねをさらさん心得たるかといさめの詞下略次の狂言を前に云越し奇麗にて紫若と老練の梅玉と所作がヽりをさせる心に書上げ三日寄初に相談したりければ梅玉よろこびの餘二の替りには惜しとて三の替りに角の芝居にて出しけり熊谷梅玉敦盛紫若上總大友舍丸女房加納阿根輪甎十郎大當りを取けり是より梅玉の狂言と成り翌巳年三月京都にて敦盛を尾上多見藏にさせ同七申年の顏見世に敦盛を璃寬三代目めとくにさせ幸にしていつも評判よかりけれど敦盛は紫若に限るべし市川海老藏東都にて此噂を聞三升屋四郎狂言方の内彌助に院本を仕組ませ彼地にて熊谷をしたれどもかゝる增補とはしらざる故熊谷花道へかヽり敦盛本舞臺より呼もどすが故兩人とも引拔目立ず殘念しかし東都にては珍らしきゆゑ度々勤め今はねこも釋子も扇屋熊谷とてする事には成たれ然れば此源平つゞじの熊谷は璃寬を元祖と見て梅玉を中興の開基なれば今時の駄熊谷とひとつに混ずる事なかれ

同千載集流しの枝の話

天保十二辛丑の春予は東都遊歷に下りし處武州熊谷驛熊谷寺の靈佛靈寶等向兩國回向院にて開帳なりければ木挽町河原崎座にて蓮生坊が悟道の發起は一子を悲しむ制札櫻樂人齋が忠孝の懺悔は其名を惜しむ詠歌櫻一谷嫩軍記大序堀河御所の場二の口須磨浦組打の場三の切直實陣家の場四の切六彌太屋敷の場との看板出けり熊谷直實岡部六彌太訥舛相摸に杜若傾城菅原に大吉敦盛小次郎菊の前に紫若彌陀六田五平に海老藏にて四月上旬より始め相應に入けり原此四の切は佳作なれども院本にても語らず歌舞妓にても

至つて仕にくい場故京攝にても今迄歌舞妓にては二の切流しの枝の場限にて四の切はせし事なし東都にて先年故人三津五郎(秀佳)始て六彌太を勤め田五平は片岡市藏にてせし事有名人上手の秀佳ゆゑ工夫に工夫をしてせしがさ迄の當りはなかりしとぞ扨此時海老藏は晝後堺町勘三郎座へすけに出で雨がけにて例の扇屋熊谷一幕出勤也卽看板は開帳の略縁起奉納造物熊谷蓮生法師敦盛自作尊像東下向の時を得て實に有難き御利益もすけに頼みの取持は御最負よりの御勸に任て魁源平躑躅熊谷海老藏小萩榮三郎上總冠十郎女房常世阿根輪鶴藏此五月木挽町は神靈矢口渡に替り堺町は多見藏下て海老藏すけの一幕も堺開帳三舛花衣と外題して熊谷蓮生法師に海老藏玉織姫に榮三郎主馬盛久坂彦弟子尼常世松之助是は源平躑躅四の口の趣向をかり玉織小原の庵室に敦盛の菩提を吊らふ熊谷法師と成て尋ねるは鉢の木の最明寺と見て坊主頭にて組討の物語をして見たき誂へ也此後浪華に來つて是を扇屋熊谷と二幕ものに勤しが岡部六彌太をして見たく忠度を助けたき誂へなり予曰扇屋の狂言につぐならば忠度は生置れ共嫩軍記には次がたし其譯はと問ふに敦盛を小次郎と取かへ身代りに助け置くに次に忠度を助け置く時は二劇と成て魂入らず所詮嫩軍記の四の切を捨て新に趣向を立んより仕方なしと工夫に及べども四の切の文談に捨がたき所二三ヶ所あり菊の前傾城と容をやつし乳母の林も花車と成り出の文句別れにし其日ばかりはめぐり來て又もかへらぬ人ぞ戀しきと上東門院の女房伊勢の大輔の歌の心夕の雲朝の雨と誓ひし事も楚王の夢はかない浮世のあぢきなの此身の上と計りにて思はず結ぶ露時雨あゝ是々それはまあ何いはしやんすあられもない事ばつかりエヱ聞えた昔の勤をかくさうと堂上めかしてヲゝ陸都九條のお傾城菅原といふ事は何ぼ隱してもしれて有下略又菊の前と菅原とせり合の文句に其菅原といふ傾城の御本家殿をとらまへて菅原といふシャの果じやとはテモきつい間違ひようムゝ妙衆か但し又家中衆の御内儀樣か近付に成りましよと上から出れば菊の前ィヤ〳〵和歌三神を證據其菅原はわしじやわいな下略かように俊成卿の娘故自然と詞に雲上めく所佳作名文なりと味はへば捨るに惜しく忠度を生かし置けば樂人齋(田五平)にかせなく兎やせん角やと書ては捨て

捨てする事兩三度二の切兎原の里を見せねば奥へ趣向とゞかず口に奥立など見せる時は忠度傾城と成りても跡に役なし此時千載集櫻花の秀逸と外題をすえて草稿なりけれども夫を捨て弘化三丙午の春やうやく狂言とはなりけり田五平を後藤盛長の悴とあれ共須磨の戦ひの場所にて主人重衡を捨て逃たる盛長の後家躬兎原の里の貧家に暮すも時候違へる様に思ふが故伊賀の平内左衛門が悴と直し菅原を深谷の奥方にして伊達なる傾城の容は忠度に假りたるもの也中山道深谷の驛に岡部忠澄の舊領あるが故女房の名に賦したり源平盛衰記は元より謡曲の俊成忠則を始として忠度六彌太の名の出しもの丶書を捜し數多度練らずんば脚色するとも心よからず嗚呼痴なる哉此業笑ふべし〳〵此時の役割は江口の遊君連本名薩摩守忠度璃玉人足廻し茂平次本名番場忠太仲藏隠居樂人齋本名兎原田五平鍛十郎奥方ふかや壽美之丞平山武者所文五郎神崎の傾城長等本名巴丈彌太岡部六彌太海老藏琴唄獨吟流しの俊成卿の娘菊の前枝本調子江戸佐々木市藏調西澤一鳳軒著綴本を出す「行くれて木の下蔭を宿とせば空にしられぬ雪ぞ降り合花を枕に吹雪の褥ね憎や嵐の璃玉を云當言を聞て流しの花の枝合本利を云に男の氣ば木場を云か利本を云汲んで一夜まろ寐の添臥もいはぬがいふに彌増る合花や今霽のあるじならまし今年東都八代目團十郎父海老藏に逢はん爲夏休に上阪して土産狂言に是を習ひ歸府して三丁目猿若町河原崎芝居にて勤る其外題に源平櫻平家桧さゞ波や志賀の都はあれにしをむかしながらの作意をかへて江口の里忠度傾城姿難波の仕組に狂言の世界は春の錦行くれて木の下蔭を宿とせば花やこよひの趣向をかへて神崎の廓田五平大盡娄江戸の仕込に芝居の世界は秋の錦嫩軍記を艶色和げ六彌太が琴唄の物語古郷へ偖須磨凱陣一の谷武者畫土産新板五枚續と書たりけいせひ連本深谷名忠度小團治けいせい長等新車平山武者所奥山人足廻し茂治兵衛爲十郎谷菊次郎隠居樂人齋實は菊の前眼玉鍛十郎改名岡部六彌太忠澄團十郎幸ひにしてかの地にても評よかりしと云をこせり

娘景清八島日記の話

此淨瑠璃は明和元甲申年十月廿一日より始る作者は若竹笛躬黒藏主中村阿契三人の名を出し新淨瑠璃は三の切迄にて四の切は義經腰越狀三の口切を次にすえ大切は追善紀念口とて豐竹越前少掾藤原繁泰行年八十四才にして此秋九月十三日に死し其追善の段ありていはゞ三段目迄の端狂言なり序は清水より大佛供養二は武藏守知章監物太郎の場三の口切は手越の

宿日向島なり是を歌舞妓に取立勤めしは濱芝居にて柴崎林左衛門大歳場にては嵐小六なり寛政元己酉年十月叶雛助一世一代に出せしが尤三の口切計也此狂言程仕憎き役はなきよし泣ば弱し強ければ愁ひ利ず両眼は大佛供養の場にて繰抜たる眼なれば白眼む所も開く事ならず卽此時柴崎も同座なれば柴崎とも相談して始しが左程の當りもなかりしと也され共景清の人柄は小六に限るとて人も進め我も捨ず度々せしが寛政八丙辰年の顔見せに傾城阿古屋の松（序二の口切）の檀浦兜軍記（序切大佛供養二の口菊水三の口琴責三の口切鯉の場）琴責岩永小六重忠文七髪付やあこや國太郎段切所かへしにてあこやの母十六夜に小六井場重藏に文七早替り早拵へにて大に評よし娘景清八島日記（三の口切）の景清小六糸瀧いろは左治太夫山村三組譽景清と云外題にてやう〳〵此時小六の景清當り藝となり珉獅選玉の光（二組とも小六玉藝評を書し書也）にも大極上々吉に位せり小六柴崎歿して後誰も仕手なく適三桝清兵衛（今の大五郎の親始芳龜後大五郎）堀江市の側芝居にてせしを予も見た事あり其後文政元戊寅年盆中の芝居にて娘景清八島日記には北條義時に璃寛彌陀六に鬼丸敦盛幽靈に錦子三は糸瀧に小六左治大夫に鬼丸景清に璃寛舅澤村國太郎（舞鞴を辭して海老丸と（云カ））故柴崎の小六のせし事を委敷敎稽古万端再吟して出せしが其頃は見功者も多く小六柴崎等をよく見し者多きにや泣過愁きゝ過るゆゑ弱しと云けり小六玉すら數遍勤ても評よからず漸後に佳境に入りし役中々容易に出來る役ならずと璃寛もつぶやき居たり爰に天保二辛卯年五月狂言に角の芝居にて梅玉幼少の時（加賀屋福之助座）摩稻荷等の宮芝居にて淨瑠璃に木偶をつかはず子供役者に首振と唱へあまり人數の餘計出ざる物（をカ）見取狂言にせし事有此事を思ひ出淨瑠璃は竹本組太夫（素人の内藍玉と云ひし人なり）三味線に鶴澤勇造手摺木偶（かしら）つかひは吉田千四同新吾同三吾と打交同座にて興行せし其時口上書に私幼年より操り芝居へ出勤仕候往古は操歌舞妓打交是あり其後にも私首振と唱へ相勤ましたる先例も御座候に付操方衆中と打寄内談仕り右操歌舞妓興行之義一統坐組仕卽狂言は私多年八島日記三の切島之段相勤度候へども是迄名人達の致され候役儀故是迄相勤不申候所然御贔負の御方樣より押て右の役儀相勤候樣仰被下候に付操方衆中と打交にて組太夫殿を以て首振操にて私相勤申候誠にいちか罰か立横十文字の島景清を

奉御覽に入候下略扨も稽古は梅玉の部屋にて組太夫勇藏と並び千四は前狂言の權太の木偶を景清の心にて遣ひ見せ新吾は左治太夫三吾は糸瀧を遣ひ見せる事にて樂屋は中通り部屋を明て操り方に渡し舞臺建道具も操りと歌舞妓の道具同じ場を二つ宛拵らへ前狂言千本櫻打交と云は大序跋渡しは惣操り也序切堀川夜討は歌舞妓なり二の口はなし二の切渡海屋幕明より友盛の向うへ這入る迄操り千四友盛獨り遣ひにて這入切と拍子木にて道具歌舞妓にかはる國太郎典侍の局友盛梅玉辨慶歌七義經小川にて幕切迄歌舞妓なり三の口椎の木又操り幕切小金吾の立より歌舞妓三の切鮓屋豐竹此太夫同時太夫丸で操り八島日記三の口惣歌舞妓三の切島の段一幕手摺り舞臺幕明百姓賤の女は木偶にて這入る跡梅玉には千四上下出遣ひの容にて附そひ餘は黑子にて松江糸瀧に三吾鰕十郎瀧十郎事左治太夫に新吾小川嵐吉里人に東十郎彌三郎付そひ一統首振にて操歌舞妓とも名譽の者計り打よりする事なれば誤りはなけね共まづ眼に働きある梅玉を盲に遣ふは損也景清計りはいかにも木偶なれども餘はどう見ても歌舞妓也評判程にもなく一日の場代にて操りも見歌舞妓も見る事なれば朝の内は珍らし共思へど後はすこし飽る心地せられて切狂言曉烏祇園調お花半七は惣歌舞妓なれば見馴し見物やはり是をよろこぶ也是を試として評よくば時々打交にすべしと相談して操歌舞妓の二座を抱へ雜費かゝる事甚だ多く大騷立て興行せしも時候暖氣の頃にはあり長く興行もせで止けり前編にものぶる如く中昔迄は歌舞妓は淨瑠璃をまねず操りは歌舞妓を似せず見物も又別々なるものなり故澤村長十郎のいひし如く歌舞妓より操をまねぶこと歌舞妓衰微の基なりとは宜なる哉都て昔は諸藝ともに意地を立てはげむ事也所謂歌舞妓は淨瑠璃より古しと云ひ淨瑠璃よりは歌舞妓者とて卑しめる心あり淨瑠璃にさへ東西豐竹竹本の兩派有て始て竹本に取立し淨瑠璃は豐竹座のは語らず豐竹になる院本は竹本に語らず淨瑠璃の坐に作者を抱ゆる時他門の者へ我座の狂言の筋を申間敷と給分渡す時證文をとる事なり若此事あれば兩座より封じを出して遣はず歌舞妓にも大歌舞妓濱芝居宮芝居とて位をわかちて濱芝居の役者大歌舞妓へ出る時は出世と祝し歌舞妓より濱地へ出る時には卑しめらる斯意地を立るも

藝道のはげみかつは法則立たり今は其意地もなく法則もなし素人が直太夫と成り宮地濱芝居の役者も大歌舞妓の役者も一つに混じて人のゆるさぬ立物のふゆる事蚤虱の湧くよりも早し扨も八島日記の景清はなしがたき役とおもはる梅玉のは首振なれば我才覺有ても手摺と太夫とに任せるなれば論の外なり小六璃寛すら右に評ずる通りなれば所詮今の役者の出來る役には非ざるべし去嘉永改元申年の春東都中村座にて今の歌右衛門(改雀)此島の場を增補して段切船を呼戻す所檀風(赤松圓心緣陣幕)となり清水觀音の利益にて兩眼ひらくなどにしたれば東都にては島の景清は珍らしければ此樣なるものと思ふが故かよく入て長く興行したりけり斯新狂言とすれば格別狂言は濱の眞砂盡る期はなし是計りに限るべからずと思ひ捨今時若輩の俳優かならず好んでする役にあらざるべし

狂言の筋は八文舍本に有り

前集に演る自笑其積が合作傾城禁短氣の中より幾らか歌舞妓狂言の筋は出たり嘘の誠眞の嘘の論を壇礎花の大樹中入嵐來芝(元祖三五郎)が拍手公成に遣ひ碗久松山吾妻與治兵衛の條をひとつに書入戀ことばの下心と一字外題の狂言も是より成る(椀久爲十郎松山國太郎與五郎三五郎吾妻いろは)伊達の與作關の萬兵衛駕昇の條は戻駕色相肩に遣へり予此駕の條より思ひもふけし狂言有て天保始の頃にやあらん一日梅玉に筋を噺すに梅玉奇也とて手を打先世界は何にし給ふやと問ふに予傾城楊柳櫻にせんと云此傳奇は寛政五丑年春辰岡德叟兩人の作にて護國女太平記廿卷の寫本にもとづき武州足利義敎女色を嫌うて男色を愛る(常憲院樣を云ふ)榮飛驛守(酒井雅樂)木津關兵衛(根津右門)一色結城守は(柳澤)新七にて座頭なれば即外題柳櫻也淀屋辰五郎に三五郎此狂言によせて梅玉に結城守をさせ序二は是に少しの添削にて濟せ三四に至つては此より思ひよせ女太平記に出たる辰五郎廓戻りに白無垢を重ね着て駕にて歸りし奢の間を書入先幕明に短かき茶屋場有て返して北濱迄還る往來一面の雪もちとし淀屋辰五郎に圍藏駕昇關兵衛に坂東先肩の勝五郎に梅玉(五分月代いさみ也)露次口より牽頭末社送り出て後程とか明日とか云て這入る坂東梅玉駕をかき出し花道より西の通ひ道にかゝり本舞臺へ戻り其內向うの道具段々引て替る圍藏中に白無垢にて太夫の

文を出してよみ嬉しがる樣あるを所々にて肩を入る度に梅玉このもしがるおかしみ有てをれももとから鴉昇の家に生まれはせず相應のくらしなれど川東の色めにこつて以前は鴉に乘つた者が今は腰をふつて昇ねばならぬと述懷交りの穴を云坂東も是にあどを打ておれじやとて鴉にも馬にも乘りかねぬ武士の祿をかぢつた身が今の嚊めに打こんで梅玉ハヽアあの嚊衆も筋ものか道理ですつかりしてゐると思ふた團藏勝五郎はおもしろいやつじやそちの鴉昇になつたはどういふ遊びをしてからじや咄して聞せい〳〵梅玉旦那と違うておいら大金はつかはねど腹づくでする色事夫は〳〵おかしい事もムり升たぞえ坂東嗚呼相肩受賃がいるぞや梅玉一朱なら旦那からふり出してもらはう抔との捨ぜりふにて本舞臺へかへる此内犬の遠ぼえ十番提灯捨子番の穴などを梅玉おかしみ入にて卑陋て云とゝ幕切は淀屋橋を飾り付夜廻り役人此玉を附けて來る心にてひそめきて這入る梅玉坂東は是をあやしむ團藏は無中に太夫の事を云て文を又出す梅玉は辷りこける團藏は惘りし乍ら文を抱しめる坂東はあきれて困つた物じやとあたまをなでる梅玉膝頭へつばをぬる是を幕との書物團藏坂東梅玉三人をよせて内讀の時しばしは鳴りも靜らずまだ奥もきかずに三人とも言合せたる樣に手を打けり（本讀には手を打内よみには手を不打）其時は予も自笑が履物を直し其磧が提灯を見せ迎ひに來し心地せり

同黃金の鷄内讀の話

翌日より又次幕淀屋の場の著述にかゝるに梅玉次幕の趣向を聞度たび〳〵人を以て予を迎ふ予行ず面會する時は尋ぬ問へば語る梅玉一坐の者に風聽をして面倒なれば返書に次まくは黃金の鷄を脚色來る何日の夜讀べしと認め返す梅玉黃金鷄は淀屋の重寶誰もよく知りたる事乍ら外に黃金鷄と名付し筋もありやと一座をよせては評議したりとかや予草稿成つて又内讀聽人は梅玉市紅巖獅常盤松江俳名其答なり其筋は淀屋古番頭與茂四郎今年還曆にて赤いもの揃への白髪親仁是片岡也淀屋の看抱人にて榮飛驛守が謀反に組して淀屋の内を大名にもせんとの工みを隱し悋嗇なる事計り云辰五郎に幼少より養子娘暖簾内より貰ひある娘小庵松江也是奴の小萬の心にて俠氣をこのみ男嫌ひにて伊達なる姿をし乍ら近々剃髮するとて名

を小庵と云名前人辰五郎は圍藏にて唯奢りに長じ新町通ひにて南枝の吾妻にほだされて身持放埒なり此中庭の供部屋に坂東鴈昇の關兵衛女房お次國太郎にて夫婦共旦那の氣に入り久三やら鴈かきやらにて小川の手代新七（本名上杉三島之助）の受人にて繩暖簾の世話場を豪家の中庭にてする役なり梅玉の鴈昇の勝は新町の鴈なれど是又氣に入なれば爰に寢泊りする國五郎の手代敵娘小庵に惚れて小川の手代に爲替のかね紛失の科を塗付る梅玉は是に一味して安き敵をして居る片岡は松江を辰五郎が嫌ふ故嫁入さすか但し又庵寺へ坊主に成て這入れといふ小庵は先のとゝさまの云事は聞うが輿茂四郎のいふ事はきかぬとせり合ひ辰五郎挨拶すれば片岡放埒の異見する種々狂言有て歌七の役人來つて辰五郎は飛驒守が惡事に組せしとの疑ひかゝり奢のとがめ一時に發し國五郎梅玉また此中へ出て奢りを大業に云片岡坂東は是を言譯する圍藏我と名乘つて科に落る此時坂東誠は足利のかくし目付と本名なのり情をかけて今宵夜半のかせをかけ大本ムアハ一件這入る返して放れ座敷圍藏死罪を覺悟にて松江の小庵に身持放埒は此科を引受ん爲なり小川の三島之助に南枝の吾妻を逢はさん爲我は又誠淀屋の胤にあらず片岡の番頭惡心にて家の和子には何々の裂の守りをつけ捨させ我子を淀屋の跡目に立んとの工み事我は則片岡の子じやゆゑ跡目を繼ぐ了簡なくまだ其上に飛驒守に組して大名にも成べき心是が否さの放埒なればいまだ女の味をしらずとの言譯松江の小庵聞て扨はさうした心で有たか此身も幼少より娘にもらはれ一旦結びし妹脊なれば婚禮を待兼しが新町通ひは不束な此身を嫌ふてなさるゝと悋氣嫉妬の發るをたしなみ伊達なふりして力業と奴の小萬の云譯にとゞは罪科を受るには夫婦のかためと小庵の頼みに竝共に寢所敷せ後にたてし硝子の阿蘭陀細工の屏風をあくれば結構づくめ（此間三行餘削る）……屏風を廻す此内に梅玉は是を立聞おかしみ乍ら守りを取出し扨はおれがと思入笑壺の前へ國五郎圍ひの屋根より現になり落るを梅玉飛のいて是を見るのが返し道具梅玉此時思はず高聲あげ黄金の鷄受付た大當り〳〵と我を忘れて聞入るにぞ皆々ジャ〳〵いうたるは雜俳の卷開きに表題聞しに異ならず扨も夜半の鐘鳴れば坂東姿改て其答小川歌七も出て返答聞ん

と云入る市紅松江出て科にふくす片岡出ていや反逆に組せし覺なしと云坂東證據を出す市紅片岡をとらへ親人様ェ、こなた様はのふ主人の胤と取替て淀屋の内を横領しながらむほんとしつて組する欲心科を此身にあびんが爲め心に思はぬ放埒だちやく遣ふても〳〵へらぬは金と本行淀屋のせりふとなる梅玉出て片岡を二重より蹴飛しようマアおれを捨上つて我子にさせる榮耀榮華是からをれは淀屋の旦那どうするか覺えておらう國五郎出て若旦那おめでたう御最負ぶりに御めかけて梅玉つかうてくれる奉公始辰五郎夫婦をさいなめおりや親仁めをと立かゝるを坂東とめて梅玉の守りを改め淀屋の主は勝五郎向後名前も切かゆる上は辰五郎夫婦は八幡領へ追放せん皆々して與茂四郎が納りは片岡おりやいつ迄も看抱人坂東イヤ八幡に於ておしこめ隱居かならず用捨はならぬぞよ圍藏松江ェ、有難うム𠮟升梅玉皆がらくたは片付た是からおれは此家の主坂東申付し一義は何と國太郎廓の諸拂ひ皆相濟小川か七殘る有金諸色のむき皆々奥より役人成り出て封印付てかくの通り梅玉悔りして此淀屋の内は坂東のこらず闕所被成るゝはやいと騒く國五郎を投のけて梅玉こいつアどろらいめに逢しおつたとあたまを叩くが拍子幕又々内讀に手を打成程黄金の鷄なりと皆々よろこびたり是前篇に云並木五瓶が黄金鯱の二つ目を潤色したるものなり既に文政二己卯年三の替り中の座にて興行せしが其後の役者に一兩人よく役割に叶ひても餘はこぢ付に成て始て書上し時とは遙に見劣せり依て黄金の鯱の狂言を種として楊柳櫻の世界により種を見せて手妻をするに似たり齋藤龍興を淀屋辰五郎妛關屋を小庵山形道閑を與茂四郎向坂甚内と柿木金助の兩人を關兵衞勝五郎に盛分しものなり此虚にのつて踊子賣五郎八の世話場（本文の鯱賣）を書べしと看板等にかゝる内片岡は隣の芝居へ出勤の約束有て此座に遣へば國五郎にさせる時は折角見込みし狂言も浮くべしと評議の内一兩人役者間違せひなく是をお藏として繁々夜話に取かへて此草稿は梅玉にくれたり後年毎に是もせんと言出せども予又筆をとるの了簡なし此内一人間違ひても狂言の釣合あしく役者は追々故人と成り天保十二丑年に楊柳櫻を出せし時慶子のみ覺えいればあれはいかにと勸めしかど辰五郎を我童と見て

駕の二人を源之助今の大五郎芝翫にさせては寸尺あはずと思ひ捨たり纔十年餘りのその内に老練の役者は歿し仕古せし狂言にても當時の役者は始てすれば皆新狂言をするが如し心なしに仕られんよりさせぬ方遙にまされり

佛法乘合噺の筋書

是も其比の事にて有けり一夏虫干の折から古き八文字屋の本をしらぶるにたゞ一冊の闕本あり外題を佛法乘合噺とて自笑其磧の口調に劣れど紙虱に喰れし三の巻是も何ぞの種にもと鍼引延し讀たる所人名居所を忘れたれども曾根崎村の世界を借りていふ時には是より筋書平野屋德兵衛とも云べき色男天満屋のかゝへお初といふ女郎に馴染幸ひ未だ女房もなければすへは夫婦と相談極りもう一年で年季も明れば價何程と親方にかけ合半金をやう〳〵調へ殘金出來る間は氣儘勤の約束成りけり爰に又油屋九平次といふべき男お初を呼出し口說といへど初は嫌ふて逢はぬを根にもち内證を聞所德兵衛との約束あり其德兵衛は九平次が兄へ身上書入れ先祖より持傳へる祖師日蓮の曼荼羅もろ共九平次の兄に預け此比の半金も夫にて大かた調ひしなるべし九平次は兄の方へ讒言して德兵衛に金はかさねども郎(女郎カ)賣女に打こむかね氣違に松明もたせ石脊負わせて淵より浮雲し早く金子を取りかへすべしと戀路の意趣にいふとはしらず老實な兄より德兵衛に金返さずば約束通り家財ぐるめに渡すべしと德兵衛を突出しけり德兵衛も詮方なく漸裏店をかりお初に逢ひ身の不仕合をかこつのみお初には又德兵衛の胤をやどして七月ばかり此程は勤等もひき何かと物のいる事計り憂に月日を送る内河内敎興寺村に淺田宗司と云郷士有て以前お初を一兩度もよび馴染のよしにて病氣の容くるしからず是非にと茶屋よりいひ送る天満屋の女主お初にむかひ言聞すには德兵衛の手より跡がねこずばいつとも年は明まじ譬へ年季の明たりとて住べき家もなく成りては親子三人流浪すべし度々いひきか(せたるカ)河内の客は身もと慥な郷士にて奥樣あれどお子はなく子を產みさうな妾をとそなたをめざして呼遣ひ德兵衛殿の半金にて身二つ(誤脫アルカ)なつた上一年とか半季とか郷士の方へひかされて年通りの金子も濟せ其上尋常に暇をこひ德兵衛殿と夫婦になれば雙方

ともに身の納り是にうへこす思案もあるまじ分別せよと勸められ初も兎に角仕方なく德兵衞にはいはねども親方と相談極め客の方へは人をもつて病氣全快次第行べしとて內談すみて臨月になんなく男子を産しゆゑ客の方より金子を取り諸雜費の勘定殘り少しのかねと乳呑子諸共德兵衞の手に渡し心にすまぬ事ながらかよう〳〵の譯有て半季乃至小一年鄉士の方へ行間此子を私の筐と思ひ貰ひ乳でなりとも成長させ首尾好此身の歸り來る迄隨分短氣を出さぬ樣時節をまつて下されと涙ながらにいひのこし鄉士の方へ行にけり德兵衞詮方なく水子を抱へて貰ひ乳に月日を送りしが我乍ら身のあぢきなく所詮育る事ならねば誰になりともやらうかと幾たびか思ひしが妻の筐と一言の耳にのこりて捨られず折しも師走雪の夜にいつも連行乳を貰ふ先は留守にて歸りも待たれず薄き肌への懷に入たる水子は乳を乞ひ寢入もやらず泣いだすゆすぶれば寢入事もやと抱て北野の町はづれ當てはなけねど雪道をあちよこちよとあるくうち植込みにぐるりを圍ひ風雅に建し門構へ塀を見越しの二階より雪の夜道に往來あらじとざぶりと捨しは茶か水か德兵衞が子を抱たる襟からむねへかゝるにぞあつと飛のき二階を見こみ往來に人有と知つてかけたる情なや唯さへ冷たき雪の夜に懷に抱く親子共胴欲なめに逢ふ事とつぶやく聲を聞付て龜相したりと切戶より婢女二人が走り出わび つゝ親子の濕りを拭ひかく往來へ流せしはさら〳〵穢物ならず此內方に乳あまり呑子なければ絞りつゝ外には人も通るまじと思ひ誤り龜忽の段ゆるさせ給へと詫るにぞ德兵衞聞て歎息し親のなき子は乳を乞ひ子のなき內に（はカ）乳を捨るまゝならぬは浮世といへども見らるゝ通り此乳のみな（子カ）呑たがりて泣止ず哀れ其乳一口と呑せてやつては下さるまじきや婢女は龜忽の戀かへしに何より易しと切戶よりつれて勝手にまたせおき委細の樣子云入るに何よりの幸ひと奥より此家の妾と見へ出合頭に顏見合せ別れて程へしお初德兵衞互ひにあきれて物をも得いはず女共は心つかねば水子を取て妾に渡せば涙ながらにいだきしめ餘所にいはせる身のいひ譯果しなければ心中にと雙方死んとせし所を主淺田惣司夫婦とも立出て兩人を引とゞめ我元來一子のほしさ懷胎のお初を根引にせしが子

をふり捨て來し故に一つの望みを失ひしが其小兒はいかゞせしと問はれもせず此別莊に圍ひ置女房にいひ付産後の養生今日の今宵迄無事に育し幼子は此宗司にとらすべし淺田家は淨土宗なれどもし一子をあたへ給はゞ經宗にならんと佛に誓へり今こそのぞみたれりとて德兵衞が傳來の曼荼羅を買戻させお初の親と成て德兵衞と夫婦にする是卅石の夜船にて乘合の噺をそのまゝ佛法乘合噺と號しなるべしこはよき筋なりと書並べさせんと思へど役者なく腹稿のまゝ出さずありしが天保四巳年の春けいせい稚兒淵と世界を据えたり此狂言は文化十四丑年梅玉が自作にて序は稚兒が淵二は石川染三は寶永祀（岩木や四の場）は七浦の茶屋場五は大佛餅各類聚にて連續せねど時と役者のよかりしにや評判よくて入りしかど十餘年の內に役者衰へ役割にもこち付多く一場と二場は新物に增補なくては叶ふまじと予に梅玉が相談せしゆゑふと此乘合噺の筋を咄梅玉よろこびて是に極め三つ目仕込みは自身に書四ッ目乳貰ひの場は予が作なり梅玉の狂言は時代人名の差別なく道具立を度々かへおかしみを旨とすれば至つて癖ある書ものならでは仕がたき所あり其頃の狂言にもまづ頓々の三吉天滿宮の十作雪月花の五郎七繁夜話の銀太など皆おかしみを交へ下策なる所をするがゆゑ筋の善惡腹の善惡をいはず色敵と見こみて書なり右に云德兵衞ならば梅玉の役ならずされども腹稿を一變してやうやく狂言とはなりたれ石川五右衞門の世界に狩野の四郎次郎は無理なり然れども梅玉にいはせる時は信仰記にも久吉あり五右衞門の時にも久吉なり（ありカ）と一口にいふが故心のまゝにさせて見るより外なし是ら老練の役者ならで出來ぬ役也此三月京都芝居にて上下二幕に縮め花雪戀手鑑と外題して上の卷は洛陽の花に寄眞葛が原の闇仕合一刷毛に書起さばや花の雲此執筆は狩野の小雪下の卷は浪花の雪に寄東高津の再環會乳貰ひに往ては拂ふや袖の雪此秀吟は狩野の直信當春東都において歌右衞門（瓢雀）青砥調の中へ入れ（狩野直信）鐘馗新助（瓢子雀雪）言號おもと秀佳（岩木や藤三郎）富屋甚兵衞羽左衞門にてせしが幸ひ評よかりけれど梅玉がせしにしかず近來大西にて我童がせしより予は東都に居り得見ずいかなる事をせしやらんいと見たく有けり斯書付れば三都評判記めきて際限なかるべし是にもれたる

雜話は此冬殘編にいふべし

戯場番付に名前を削る辭

天保十二辛丑年春中の梨園にてけいせい楊柳櫻茶屋場を書て予は三月より東都に遊び葺屋町市村座に抑留せられ花菖蒲いろは連歌種花蝶々色成秋二部を書内十月に燒失して翌壬寅の春木挽町河原崎座にて岩藤波白石を彼地の名殘として歸坂せしが此秋慶子が勸にて角の座に出紅楓いろは文庫を著時賴記鳥邊山など增補せしが慶子は適せらて泉州に赴卯年の春言狂作書三卷を書中の座團藏より招きしかど名前を出さず手傳ふのみ此冬東都より眼玉堂白猿來つて勸にまかせ辰巳午と三ヶ年筆を弄して遊びしが年々戯場の作法崩れ傍若無人の輩多く作名を番付にのするもいと恥かしく成り行まゝ以後は名前を出すまじと演たる辭左の如し「近松並木の昔はいはず文化文政の末まで京攝の戯場に狂言作者とのする者はよくも惡くも一日の趣向一場の脚色をせざる者なし譬はゞ假名手本忠臣藏菅原傳授にもあれ新規の入場あれば作者の名を顯せども古き狂言をする時には作者をのせざる事古例なり我等幼きより此道に入作名を出せる事是に背かず然るに近來一場半幕の作意も得えせず古來より有來りの淨瑠璃歌舞妓狂言の世話やきをし頭取手代を兼立物役者に隨身し屋號俳名の一字を冠り狂言作者と墨黑に印する輩數多あり是をとがむる座頭仕打興行人もなし故に行義作法も崩れて大作者あるは狂言役者と印せるもあり依て我等狂言作の外餘事を勤めねば作者一鳳を守りたれど所謂多勢に不勢ちからなく是を恥らふ向(てカ)番付の名前を削るされば」とて大天狗となつて深山幽谷へ籠るにもあらず又一世一代と披露するにもあらじ今より狂言の相談相手誂直しものは好みに應じ內職としてもとの西澤本利と名乘り後來の名聞を削るさすれば一日の狂言に三つ四つの外題を出して古狂言の切賣見取狂言の嘲りを脫るゝ言譯にもならんと獨り笑ひ獨點(頭カ)て

根にかへる草何々ぞ冬木立

かく述るものは狂言綺語堂の主西澤一鳳軒李叟改西澤本利弘化三丙午年冬右を摺物にして披露せんと思ふ折から東都猿若町二丁目市村座より招かれたれば先に遊歷せし時元地の芝居燒失して今の淺草へひけ

る折から歸坂せし故當時の場所のさまも見たく翌未の正月より彼地に趣き好る道なれば筆を弄び傳奇は編ども名前を出さずたゞ狂言の相談相手と呼び三とせの内帳元澤田の隣家に籠り食客の能樂隱居も去春豆州熱海へ入湯の折から年號も嘉永と改りしゆゑ浪華の舍弟に本利といへる名前を譲り予が曾祖父の俗名を受繼西澤九左衞門と呼び半百の齡も近ければ吾たゞ足る事を知と云心より道外方引込の詞かうも有うかと

臍の緒を落して四十九左衞門

是より先は生たゞげ德

相替らず極樂蜻蛉の親仁分と呼れ遊戲三昧に暮さん事を願ふ

時嘉永二酉年初春於東都淺草猿若街綺語堂

西澤一鳳軒本利更九左衞門述る

西澤文庫傳奇作書拾遺下の卷終

西澤文庫 傳奇作書拾遺跋

此書や新に一部の趣向を立て著編するにあらず曩に天保癸卯の春言狂作書と題して歌舞妓作者の傳及梨園狂言道に遊ぶものに作業の徑路を演たるが尚それに落たる人名書もらせし雜話も尠からず又此三とせ東都に遊び新に聽たる珍說奇話まで歸坂の後思ひ出るに任せ拾遺として三卷を著編せりされど一時の戲墨にして猥雜なる事甚しく馬鹿等識者の笑ひを採るべし東武出立の前或人戲作者となる披露にとて曲亭京山の老人を始め當時の戲作者傳奇作り迄名高き人人の句を集めて予にも一句求められけり例の地口に世の馬鹿は三日見ぬ間に作者かなと譏りしも所謂る猿の尻笑ひにして我事を詠む時には熟す間もなくてや柿のへた作者といふべし戲場の傳奇は其時々に書捨て櫻木に彫刻ねば譏を殘す論もなけれど小說稗史を書とも調高ければ賣れず賣ればいやしめらるましてや當世の人情を盡す時は作者の心ざまも推量られ德を傷るものなるべし水滸を書たる羅貫中が事跡を思ひて此程

作者にはなる事勿れ孫子迄
唖に生れてたまる物かは

時嘉永二己酉年孟冬於浪華得々（本ノマヽ）清水街綺語堂

西澤九左衞門一鳳誌

枯蓮子打鴛鴦笠翁一家言作采蓮歌十首其五

郎看妾在水中央、妾笑回看岸上郎、去歲採蓮猶未嫁、曾將比翼妒鴛鴦。

李笠翁

斷畫新眉笠翁一家言作賢內吟十首其四

曉沐雖分次第班、互相掠髮整雲鬟、從今間殺張京兆、不復親勞畫遠山。

李漁

捲簾通紫燕笠翁一家言作納姬三首其二

脫却霓裳換縞衣、布裙窄稱楚宮圍、儒家不作婆娑舞、燕子無煩掌上飛。

笠翁

秋水澄月笠翁一家言作倚樓美人圖

樓倚娉婷子、疑眸顧水濱、淡烟深樹下、應有斷魂人。

李漁

目次

一湖上李笠翁の詩
一醒々齋稻妻表紙の話
一同豐國畫京傳贊圖の寫（略之）
一小說を潤色せし傳奇の話
一南總里見八犬傳脚色の話
一けいせい筥傳授外題の話
一同古今傳血達磨の話
一淺草靈驗記大川が傳
一淨瑠璃の作文をせし話
一謠曲狂言釣狐の證考
一讀院本釣狐尾花褶
一同序文及姓氏目錄
凡十二條
時嘉永二己酉年仲冬於綺語堂燈下筆採

西澤文庫 傳奇作書殘編上の卷

西澤綺語堂李叟著

湖上李笠翁の詩

唐山李漁先生は傳奇小說に因あれば曩に寫して序にかへたり尤每文圖有畵彩精密にして摹寫する事あたはず唐土奇談といへる書に笠翁の肖像を月儕の畵たる者予所藏したりしを何人にか貸失ひいと遺りおし後再び手に入らば補ふべし

醒々齋稻妻表紙の話

山東京傳が作往昔咄稻妻表紙の發板なりしは文化二三年の頃なり不破伴左衞門名古屋山三の事跡は京攝にては淨瑠璃の傾城反魂香又十帖源氏物草太郎にのみ有て草履打或は鞘當と唱て六法丹前の容に出たつは東都にて古ゝ云事也「稻妻の始り見たり不破の關と晉子其角の句より元祿年間赤穗の義士不破氏淺野侯及傷の狂言を梨園にてすると聞て看的に紛れ好んで口論して頭取花井才三郎を草履にて打しより始るとは妄言也其角の唫もおなじ元祿の比の事故後人作り設けし話也京傳は不破名古屋のみにあらず女太夫六字南無右衞門浮世畵師又平辻講釋露の五郎兵衞抔珍らしき人名を集て新に作り設けし稗史にて畵は一陽齋豐國畵此頃行るゝ事爰に文化五辰年に浪華角中の兩劇場にて是を潤色して外題看板出けり新作の小說を狂言に脚色しは是を起原とす此圖は團扇の表に摺一千本を兩座の芝居へ板元より贈りし也日々の見物へ配りしを予珍藏して書畵帳に貼置しを拙筆に摹寫して爰に著すものなり（團扇の圖略す）

角の外題（きのふは不破の關まねる　けふは名護屋の山まねる）けいせい輝艸紙名古屋山三さゝら三八梅津嘉門（三役）嵐吉三郎不破伴左衞門嘉門母（二役）市川團藏湯淺又平淺尾工左衞門山三妻葛城又平妻お國中山富三郎石塚玄蕃鹿藏市川市藏名古屋山左衞門關三右衞門不破伴作賴蒙院（二役）大谷友右衞門けいせい遠山三八妻儀榮（二役）中村大吉佐々木桂之助中山文七狂言作者奈河七五三助、近松德三中の外題（稻妻表紙は姿の彩色　十帖源氏は意の寫畵）けいせい品評林名古屋山三佐々木藏人浮世又平（三役）中村歌右衞門佐々木桂之助奴鹿藏嵐來

芝銀杏の前、又平女房さへだ叶珉子不破伴左衛門千島冠者(二役)中山新九郎嘉門の母逢生三枡德次郎傾城葛城藏人妻お澤(二役)中山よしを名古屋山左衛門片岡政元萩野伊三郎白拍子藤浪三八妻儀榮(二役)芳澤あやめさゝら三八梅津嘉門片岡仁左衛門狂言作者並木三四助奈河篤助狂言の脚色は異なりと雖書本の儘の人形看板なれば最負ノ〳〵の見物夥敷兩座とも大入大繁昌せしが道具衣裳役者の奇麗なるを好まば角の芝居狂言と上手役者を好まば中の芝居と評定まりけり尤中の座は先に催ふし角は跡より追うて作せしゆゑにか見所少なし是より不破名護屋の世界を京攝にては一變せり是山東京傳子の功なり予東都にて此世界を潤色せし猶反魂香に趣向を返へして狩野四郎元信を八代目三枡(升カ)にさせて見まほしく心は芝叟が長話の瘤先年浪華角の座にて作せし事前編にくはしを脚色して武隈の松を寫さん物と下人と容し長谷部雲谷につかゆる雲谷(文五耶)土佐將監三津五郎の娘お光しうに懸想して下男與四郎八代目を贋聲として光信の住家に至る大體先年の瘤の如し後名乘て父祐勢より松の口傳を受ず是を書て本知にかへらん爲と云將監は祐勢より讓られたればしれども元信の行衛尋ねて返さんため年頃尋ね居たると云白張の衝立に其場にて武隈の松を畫雲谷邪魔するを立廻乍ら將監雲谷の手足を松のふりに教ふる是反魂香に寫し繪の場とてけいせい遠山(土佐將監の娘の仲居お宮と云門弟歌之助の奴丹前)に花笠をもたせ元信に口授する間近松平安堂の名文を其儘とつて淨瑠璃に合させたり八代目は畫をよく畫ゆゑかくは思ひ付たり近年稀なる大入をとりけり其時の外題段書を爰に出す

世界は東山の櫻時

傘に塒かさうよ濡燕行ては戻り戻りては又繰かへす不束も古きを以て新敷との御差圖に任せ

昔語稻妻帖

繡像稗史　六冊續

山東庵の滑稽一陽齋の筆意

左の儘を敷寫して狂言の榮

第一　堅田の別舘に　主命の履打
第二　高島の城外に　意外の待伏
第三　石場の柏戸に　書畫の發會
第四　三井の坂下に　奇緣の見合
第五　六原の靈場に　身賣の調達
第六　逢坂の山越に　六部の惻憾
第七　大津の貧家に　吃訥の小舞

第八　志賀の名家に　武隈の寫繪
第九　鳥越の浪宅に　下女の初戀
第十　吉原の花街に　買論の鞘當
第十一　上林の青樓に　兄弟の割符
第十二　淺草の田甫に　本懷の復讐

不破伴左衞門狩野四郎治郎元信二役圖十郎浮世又平下部猿治郎二役小圖治佐々木桂之助土佐修理之助奴鹿藏王役源之助名古屋山左衞門土佐將監光信二役三津五郎修理女房お松綾の臺常世長谷部雲谷文五郎白拍子藤浪又平女房早枝二役花友傾城葛城始又平妹お柳將監娘お光下女お國三役しうか名古屋山三笹良三八六字南無右衞門羽左衞門三月四日より四月晦日迄興行しけり物の趣向は古き中に新らしみ有り反魂香といへば又平の場のみ知りて一日の趣向しらず是等を戲場の學問とはいふなり

小說を潤色せし傳奇の話

稻妻表紙の當りを取しより同年秋櫻姫曙雙紙京傳作豐國の畵を清水清玄契約櫻とし富士淺間三國一夜物語馬琴を復讐高音皷三七全傳南柯夢馬琴作三勝半七を舞扇南柯話と潤色せしが三勝は大當りせしが餘はさのみの當りもなかりし

此冬の顏見せに椿說弓張月を島廻月弓張とし座附狂言に迄續かせ中の芝居にて出しけるを江戶板元より壽きて摺ものを送りけり外の袋に大坂中の芝居已の顏見せを祝ふ新曲弓張月東都曲亭馬琴述葛飾北齋畵奉書一枚を二つ折とし北齋の畵に簸江あやめの紋付白縫琅子の紋付汐汲の圖眞中に八郎爲朝嵐吉紋付左の手に弓を突右に日の丸陣扇を遣ひ居る圖なり祝言「爲朝の名題芝居にあぐるかな弓はり月のいるあたりとて簑笠隱居と書裏はあづまぶり新曲弓はり月唱歌のかしらに一座の紋盡し摺たり

梓弓ひけや歌舞妓の顏見世に心なぐさむ爲ともならばうき事絕てしらぬひに身をば盡して來てもみよ曉の七つと八つしろに八町礫のあたりも嬉しさざらゑにしのつきやらぬうるまの國のおやこ草男島めじまに通ふ神風ふくろく壽聚し人の山雄にも野風さやけく礒菜つむ名にし高間の手どりして猛き心の鬼夜叉か鬼ならなくに照る月の稚兒は九つ藤市が牽馬の鞭に武藏太を懲らす誓は眞菅よし讀岐院のあら神靈廿八騎の功はしんせい揃勇しく遊べや阿蘇の忠國に冬よりひらく花壻の花の俳優よしとも〳〵に九郎が玉の春まち得るや梅の浪花津

なか〳〵に中の芝居を守もるめでたき時に大島の宮居久しきもの語宮居久しき物がたり予が著述の稗説弓張月に據て浪花中の芝居の顔見世今茲仲冬十三日より新場をひらくと聞え候に贈るとてかつしか翁の書るまゝに書肆平林堂の需に應じて

曲亭馬琴のぶ幷書

忠孝潮來府志種彦作をけいせい潮來諷新累解脱物語馬琴を草紅錦絹川小説稗史自來也物語鬼卵柵作自來也譚繪本若葉榮寫本にて雲水錄作者忘れたり敵討義戀柵等新に挑み奇を爭ひ出せしも後には珍しき小説もなく專ら戯作者より是を脚色此内を梨園にさせよと歌舞妓作者の心になりて作るが歌舞妓に潤色ならず小説の作者歌舞妓の作者共文化中に大約故人となりて脚色すべき稗史もなく潤色すべき歌舞妓作者もなく也文政中には古き淨瑠璃を見出して仕はやらせる事には成たり古淨瑠璃を出す事拾遺に委し

南總里見八犬傳脚色の話

享和文化の頃より小説稗史に作名を出し五十年の間存命て時々に作名の書を著はすは東都の曲亭馬琴飯田町に住ゆゑ飯台と云著作堂なり著作の小説數百篇近世性を瀧澤簑笠玄同の數號有り眼疾孫子に筆を採らせらるよし近世出板の書に著せり誠に命めで度翁なり文政後著述の書多き中に評よく數篇を重ねしは南總里見八犬傳なり初編より五編迄出し頃予は是を潤色して一日の趣向に立るものから發端鎌倉足利の沒落より神餘家亡びて里見義實房州をとる迄の條を略し里見家の大守を義基とし義成を若殿とし山下定包は杣木朴平の手を借りて義基を討せ義成を毒殺して伏姫始忠臣堀内藏人金鞠大助杉倉氏元等をなき者として八犬士の親を皆里見家の臣なれば是を離散させて里見家は一たん二段目にて亡べり伏姫富山の洞にて腹をさき珠數八つを走らせて里見忠臣の家々に孕再び家を起さんと云是二段目の幕にして次幕信乃が幼立の場まで十餘ヶ年を立せ又次幕へ七ヶ年をたゝせ滸家の成氏へ行ば十九か廿なりと見込道節額藏小文吾等も原より里見の浪人なり此八犬士集りて廢りし里見の家を起す義成の忘れ筐義實にて惡人亡びて里見家再興なるとせねば歌舞妓の狂言には成べからず此腹稿を立てまに〳〵筆を取草稿なつても是に合せる役者揃はず時節を見合せる内又四五年立たり其内古き草稿を取出して見れば我書たるものにも時々の流行有て捨る所あり又飜案し

て書かへる所あり是等も世に出る時節やありけん天保七申年中の芝居の春狂言に漸成れり夫すら一座に割合せる事なれば俳優の分量に輕重あり己々の仕勝手よき樣誂あり其度に筆を入るれば原の腹稿より趣向變り大筋狂ひて異る脚色と成也右に云里見家興廢は傳奇の原なれば新に思ひ設くると雖成たけ曲亭の趣向は崩さず居所人名までもらさず遣へり番附に割わり(割がきカ)外題等出すべきを役割多しとて略せり予が作名も略せしが段書と共に爰にあらはす

白妙の人くひ馬にゑいとはなせし弦音は覘ひ狂はぬ古歌のはん斷血筋にからむとり繩におもはずそろふはしやう風の良藥哀れもよふす一ふしは音色やさしき嵐山の名笛

傾城(けいせい)の八文字(はちもんじ)は閨(ねや)の勝閧(かちどき)花魁(はなのあに)荅八總(つはみのやつぶさ)　名木八株

里見(さとみ)の八犬士(はちけんし)は廓(くるわ)の先陣(せんじん)

その大寄(おゝよせ)を爰(こゝ)に見立(みた)て煩惱の犬張子にぼんと討たる筒先は當りはづさぬ玉のいんゑん戀ぢにこがすたぴの火に姿かきけすふしぎの道術再び手に入る一こしをぬけば玉ちる村雨の名劍

肇輯　洲崎社に玉梓戀情述　落葉畷に朴平白馬悞
貳輯　瀧田城に大輔逆臣誅　富山洞に伏姫八犬走
參輯　籔河原に信乃與白弄　大塚村に番作孤兒托
肆輯　枯華庵に濱路憂苦訟　神宮川に網干村雨奪
伍輯　莊官舍に額藏奸黨擊　圓塚山に道節故事譚
陸輯　滸我舘に在村雙狗阻　芳流閣に現八勇力顯
七輯　行德浦に鉤翁銘刀得　入江橋に文吾良藥求
八輯　紅梅亭に於尺歌舞賑　對牛樓に毛乃仇讐鏖

統計八輯の內芳流閣迄を正二月と見せ三四月には曩を少しく略して七輯より對牛樓迄見せて滿尾せり犬塚信乃金鞠大輔嵐璃寬(目德)大塚番作堀內藏人犬川額藏市川鰕十郎杉倉氏元犬田小文吾關三十郎犬山道節坂東壽太郎杣木朴平女房龜笹馬加常武大谷友右衞門大塚墓六安西景連中村翫十郎里見義成鮎原胤敎蜑崎照武犬村角太郎中村歌十郎姉ひく手いさらご御前紅梅やお尺山下金作里見治部大輔季基古那屋文五兵衞中山文七傾城玉梓番作妻手束中山南枝山下定包百姓糠助網干左母二郎犬飼現八小林房八片岡市藏里見伏姫娘濱路小文吾妻お縫舞子朝毛乃富十郎顯定橫堀史在村片岡仁左衞門番附は杜撰にして續編增補と書てあらぬ假名をふりたりかゝる長篇を僅に一日に縮め見せんはいと仕難き業也好てこそすれ所謂蓼虫の一癖ならめ

けいせい筥傳授外題の話

文化元子年角の芝居にて春狂言に出しが作者は近松徳叟瀬川如皐なり三つ目筑紫權六（本名瀬川采女）秋雨物語と云小説より徳叟が潤色せしは前編に委しく出す中入天の橋立の舘に長岡勇齋武事をすてゝ風雅に籠る壻小西行長妻唐綾を離縁して上使にたち白木の箱を封じ送る中に腹切刀と三寶入れ有後孫に腹切せる仕組大約蝶花形八つ目に似たり此箱の内や床しき箱傳授と云せりふ有て憚り有は狂言には外題に賦す程は脚色なし瀬川如皐の作にして勇齋片岡行長璃寛唐綾路考なり此箱傳授と云は東下野守より種玉庵宗祇へ古今傳授をつたふ三條西逍遙院へ宗祇より傳へ夫より圓智院公國へ傳ふ然るに公國早世の折柄其子實條未だ七歳なりしゆゑ細川兵部大輔藤孝へ傳ふ藤孝は文武兼備直實の名將にて其身の師範たる公國の子息實條卿へ傳へかへさん爲に實條卿を丹後田邊の城へ迎へ取て歌道神道の傳授悉く申と雖未幼弱なれば古今の傳授ばかりを殘し置ぬ扨實條も次第に成人なれば帝都へ歸し奉ら古今の傳授をもとげて師恩を報せばやと思はれし所に秀吉公より朝鮮征伐の御觸有によつて合戰の用意に取紛れ實條卿を呼迎へて傳授せん隙のあらざれば箱を幽齋の孫智烏丸大納言光廣卿へ持行て曰此度異國へ赴候我身武士の習ひ何時討死仕らんも難計候得ば永く此傳の絶なん事歎かはしく候依て預け置申なり無事に歸りなば藤孝が手より實條卿へ相渡申べし自然討死仕りなば此箱を貴卿より三條西殿へ渡し給はれと賴入て二首の和歌をぞ添にける幽齋

人の國引や八島も納りて
　二たびかへせ和歌のうら浪

もしほ草かきあつめつゝ跡とめて
　昔にかへせ和歌のうらなみ

烏丸光廣卿古今箱を預り給ふとて

萬代もちかひし龜の鏡しれ
　いかでかあけん浦島の箱

かくの通りにて藤孝入道玄旨は太閤に隨がひ肥前名護屋に詰られける其子忠興朝鮮にて軍功多きに依て豐前の國臼杵の城を加恩に預りぬ歸陣ののち光廣卿より箱を藤孝にかへすとて

明て見ぬかいもありけり玉手箱

二度かへる浦島の浪

幽齋かへし

浦島や光りをそへて玉手箱

明てだに見ずかへす浪哉

と吟詠ありて傳授の箱を送りかへしぬ斯る名家たるによつて慶長五年子の秋關ヶ原合戰の砌石田治部に組せし諸大名八万三千餘騎にて田邊の城を攻る事既に七月廿二日より九月十二日に至り城中も堅固に守防戰すと雖寄手は多勢新手を入かへ〳〵攻戰ふよし天聽に達し驚かせ給ひ藤孝討死に於ては古今の傳授空しからん急ぎ實條に傳授せよとの勅諚によつて則實條卿烏丸大納言光廣卿幷に加茂大宮司松下丹後の戰場に下向まし〳〵て大官司松下を以て寄手の大將共へ勅命をのべさせ給ふ其趣は勅使として兩卿實に參向まし〳〵て藤孝入道玄旨法印は天子の御師にて有る間此陣早引取べしくれ〴〵朝敵にひとしき振舞近頃尾籠也との仰を蒙り寄手の面々牙を噛乍らもいか樣藤孝入道は國師なれば弓を引べき謂なしと寄手の大軍圍みを解いて引せける天恩の重き事申も中々おごそかなり此籠城の場を仕組しものにて箱傳授のとなへはよくても狂言高尙にて俗に落ず三つ目筑紫權六チギリンタイの齣は今も折々出れ共外題箱傳授の場はそのゝち出ず宗祇の堺傳授と云事あれば堺傳授として可也

同古今傳血達磨の話

夫より程なく石田が徒も亡失て太平を樂しむ世とはなりぬ其後幽齋逝去ありて忠興は三齋と號して專ら茶湯連俳の風雅の道を樂しみ其友とする中に金森宗和茶人名家は茶の師範たるゆゑ誠に交はり厚く斷金の中なるに依て古今の傳を貸置けれ共其儘に打捨年月を經ける內金森家一亂起りて終に改易と成る（金森領分に一揆おこり し始末は寫本に有略之）是に依て細川家にはかの古今傳を取得たく家中の士を道具屋又は書畫屋抔に仕立さま〴〵手を廻し吟味有しかども終に行方知れず失たるこそ是非もなき爰に濃州洲の股の宿に文右衞門と云宿屋の主前年金森家爭論の砌右の古今傳を金貳分にて或士に買置しが何とやら大金にもなるべき物と思へ共何の譯も知らざればとかく見る人に見てもらはんと思ひ大身貴人の御泊りの節は彼古今を床の置物として飾置けれ共いつしか尋ね問ふ人もなかりしが或年細川

矣參勤の砌家老何某は尾州名古屋表に御用あるよしにて中仙道より下られ細川矣は東海道を御下り有て池鯉鮒の驛にて御出會奉るべき由にて何某殿は美濃洲の股文右衞門方に宿陣有るに彼床の置物を取上少し開き見られしがやがて立て手水を遣ひ身を清めや〳〵しく戴きとくと見終り亭主を呼び此品は其方の所持なるやと有るに亭主いかにも親の代より讓り受て私所持仕るといふ何某此方に望ある間何卒讓り申さんやと有ければ亭主扨こそと思ひ畏り奉り候得共親共より讓り受候品に候得ば放し難く奉存候然し乍ら財は身の差合也と申諺も候へば金百兩にも相成候儀に候はゝ如何樣とも可仕旨申上る然らば望の通り遣すべしとて金子百兩渡されければ文右衞門は存の外大金を得悅こと限りなし何某殿も殊の外悅の體にて先家來に申付て此趣主君へ御知らせ申上よとて早飛脚を以て告知らせ悅の餘り供廻り人足雲助に至るまで靑ざし鳥目壹貫文宛御祝儀下され宿の家內下女飯焚に至る迄紅絹一疋づゝ下され明六の御出立を一時早く七つ前に出立有越中矣は池鯉鮒にて御待合せあるに追付奉り委細申上古今傳を手渡し申上て事濟ぬ尤御歡び大かたならず扨又跡にて文右衞門つく〴〵思ふには斯程に歡び給ふ事は等閑の品にてはよもあるまじ扨々殘念なり今少し高金に申共下さるべき物と頻りに後悔せしが否々下されずば元々先願ふて見んと支度そこ〳〵にして道をいそぎ既に池鯉鮒に來り何某殿の許に尋ね參り取次を以洲の股文右衞門御願ひの義御座候て參上仕るとのべければやがて何某殿御出座有て如何樣なる願と御尋有文右衞門頭を地に付お願ひの義は昨日差上申候品にて御座候兎角代々讓り受持傳へ來り候處私の代に手放し仕る事甚歎かはしく本意なく存奉り候是に依て恐乍願ひ奉ると申上る何某殿御聞有て暫く相待べしとて奥に入らせられ間もなく金子持出て扨々その方は賤しき者じやなと一言のみにて又金百兩下されける文右衞門推戴き有難旨申上悅び勇みて歸りしが又々思案して悔けるは扨々殘念かな口惜かな此金子申受ずば永代御扶持も下されべきものと後悔いたしぬ人間の欲には限りなきものなり足る事を知らずんば有財我鬼といふ尤なるかな此一話は傳奇作者によらずといへども遠幽雜記といへる書に出て後大川友右衞門が傳細

川の重寶血の達磨の一軸に因みあれば爰に出す猶次の條を讀て知るべし

淺草靈驗記大川が傳

淺草觀世音の利生にて印南數馬美少年大川友右衞門と兄弟の約して父の敵横山圖書を討つ話は寫本廿卷畫本十卷淺草靈驗記とて有是を潤色して寛政九巳年五月角の芝居にて興行す印南數馬芳澤いろは大川友右衞門尾上鯉三郎横山圖書山村儀右衞門既に前編辰岡万作の傳にも演る通り男色の狂言珍らしく大當をせり後文政十二巳年三月又少しく增補して印南數馬嵐富三郎俳名露蝶大川友右衞門中村歌右衞門梅玉にせしかど今は男色廢りて歡ばずさ迄當りもなかりけり爰に去申年東都中村座にて印南數馬岩井粂三郎紫若の悴大川友右衞門中村歌右衞門甌雀にて興行せしが本文寫本畫本には友右衞門復讐助太刀のくち細川屋舖江戸出火して大守の重器寶藏納めし儘一塵の烟となる大守悔みて止ず寶藏にこめある重寶の內漢の武帝の書し達磨の一軸あり是を亡びん事を歎かるゝを友右衞門聞て重恩を報はんは此時なるべしと駿馬に跨り火中に飛入り寶藏に近付見れば火烟文庫に漫々たれども一軸の箱はいまだ燒ず是を取て外に出れど駿馬は早燒死て烟氣に包まれ其場を遁るゝ事あたはずとかくする內鬢髮燒ちゞれすべき樣なく寶藏の影を腰刀にてうがち土の窪みに端座して腹切あばき軸の飾りをすてゝ畫絹を腹中に納め終に火中に燒死たり火收りて大川が行衞知れず大守是をおしませ給ひ灰掻退て吟味をすれ共全身焦て何者かしれね共骸を堀出す傍らに友右衞門が覺えの腰刀散亂せるゆゑ大川と知れ死骸を改る所腹切て死したり子細有べしと疵口を搜せば腹中に一物あり大守直々に見らるゝ所漢の武帝の書し達磨の像也絹の兩幅鮮血に染て緣を取たる如し近臣血汐の穢を落さんと雖大守大川が義勇を賞して其儘に表裝し是を細川家の重寶血の達磨と賞し人口に唱へる事噪し甌雀此齟をする由評判して復讐の事は二段になりけり依て奥州の高木折右衞門是は又別に寫本あり を思ひ合せて印南數馬の助太刀を高木に托し大川は達磨の一軸を奪合横山大藏關三を殺害して琵琶湖の水中にて切腹して疵口へ件の一軸を隱し亡靈細川の舘へ歸つて手渡す狂言とはなりたり外題は高木折右衞門武勇話とか賦したり尤火は戲場に忌る事なれば水中にかへたれども

謠曲の海士は龍神を遠ざけん爲乳の下を掻切て寶珠を包めり畫絹の軸物ならば腹中に納めず共いか樣共仕方あるべしと彼地の穴探は批評言けり此時火中より出たるは達磨の畫といふは妄言にて誠は右に說く古今傳一軸にて大守身命にかへて惜しまれしと云は實なり大川氏寶藏の壁に向つて坐禪の容よく悟つたりと言心より智の達磨と云なるべし

淨瑠璃の作文をせし話附謠曲狂言釣狐證考

文政中淨瑠璃大夫播磨の大掾始竹本土佐太夫受領と心易くて文談の內不分明なる事あれば弟子をもつて尋問に來らせる事毎度なり予も好める道ゆゑ引書を携へて往註解す序に一世一代として語る物を書くれと乞はれ謠曲釣狐の狂言は古今來許多の脚色になど予兼て腹稿あれば書んと約す此一段は楠昔噺作者竹田出雲なりは五段を五節句にして大序正月元日楠の影にて正成夢見るの一の切三月三日八尾の別當のぼ三の切祖父婆々端午のぼ四の切赤坂城盆踊り七月七日大詰九月九日と割合せたり端午三の切のみ人知つて外の場を愛ず予是に習ひて謠曲の狂言ばかりにて五段を重て序花子ならば二を三人畸三を吼嚱なぞと見立て著述せんと思ふ事久し播磨の頼を幸ひ先三の切を先に書たり稿成て讀きかすに大に歡びとてもの事に前後滿尾させん事を云其內予は歌舞妓の作に隙なく一二ヶ年を送る內播磨故人に成り此場草稿の儘播磨の手にありて世にいでずいと殘り惜しく思ふから草稿を取かへして出板し追善にもと思ひ淨書仕かけてはまた捨置たり思ひいづるにまかせ爰に出す

英雙紙の抜萃に

謠曲狂言

釣狐尾花褥

むさしのにありといふなる逃水にとけた秀句の心とこ、心ろ恩愛からむ老が身の泣音に血をば伯藏主が誠心

東遊記のらん菊のもとに遊ぶときくの根にかけた野干の義理と畏因果は廻る己が名の作りをくらふお瓜が貞節

註釋に

古今來歌舞妓淨瑠璃の脚色を案に各趣向に證ありと雖多くは謠曲を父とし端唄を母とするもの解易くして後に遺れり今爰に著は謠曲の狂言を種として唯筆の走るに任せて書付たり專ら院本の文談に似たれど強て節を下さんにもあらず亦歌舞妓に仕組俳優者流に勞させんにもあらず讀んとすれば文章拙く諷はんとすれば語路直ならず劇場に見んとすれば詞くどく

其文の拙きは才なき筆と見ゆるし給へ此書原より首尾ありて時代は太平記趣向は狂言記を取組宗論花子三人畸末廣勒猿など一齣毎に用ひ作りもふけしかど未稿ならず此吼噦の條は所謂三輯の意にて幼き頃書付置しを朋友何某に需られて草稿の儘あたへぬ原より狂言綺語の根無ごとなれば時代人名地名等の誤をいはんには際限なかるべし是なん歌舞妓の筋書とも讀本淨瑠璃とも唱へて見給は幸甚しからん

作者西澤綺語堂誌

釣狐ノ證考、堺鑑ニ曰釣狐ハ南ノ莊少林寺ノ塔頭永德年中ニ耕雲菴ト云アリ其住僧ヲ伯藏主ト云リ此僧鎭守ノ稻荷明神ヲ信仰シテ毎日法施不怠或時神感應有テ森ノ中ニ三足ノ野狐アリ抱歸テ養愛ス此狐ニ有靈達隨仕用追賊難事アリ其孫々三足ニシテ今ニ至寺內ニ住居ス稻荷ノ靈驗新也世ニ云傳釣狐ノ狂言又吼噦共云リ此寺ヨリ發レリ然バ才覺ナリシ狐ノ謀ナレバ其時大藏其狂言ニ作シヲ彼狐感ジ老翁ニ化シテ狂言ヲ見テ猶野狐ノ骨髓ノ働ヲ口傳セシトナリ誠ニ狂言綺語トハ云ナガラ道ニ達シヌレバ如是奇特モ有事ニヤ尤家ノ大事トスル狂言也

釣狐尾花褥姓名錄一伯藏主本名殿法印了忠一囮ノ罠作本名速見下總一罠作妻於瓜一娘於菊一於瓜妹於蘭本名大塔宮護良親王一油揚鼠六一行脚ノ僧本名万里中納言藤房一足利ノ眼代野見ノ軍太

吾妻路に隈なき月の名所や武藏野の片邊り尾花隱れの孤家に主は囮の罠作とて名に似合ふたる惡業者耕す業は仕もやらで酒と喧嘩と殺生に其日を送るうたてさに妻のお瓜は連合ひの身もちを日にち諫むれど聞入もなきねじけ者けふは夫の留守ぞとて持佛の燧を打拂ひ心ばかりの吊らひに娘お菊は母親に替りて助く水仕事馴ぬ仕業も親思ひ母は御燈あげしまひいやのふお菊今更改云ふではなけれどそなたは夫罠作殿が先の御內儀に出來た子わしも其後嫁つて來たれど本にマア產の母より大切にしてたもる志忘れはせねど夫に引かへ連合の罠作殿どうした事やら此一二年の身持の惡さそなたも母も口の鮮うなる程異見すれど馬の耳に風とやら困つた物ではないかいのといふに娘も打しほれさいなア嚊樣のおつしやる通り現在實の爺樣なれど恐しい惡業ばかり夕も釣て戻つたとてあれあそこに釣てある狐毎晚〳〵狐を取つて夫

を肴に酒を呑みあちらでは喧嘩をしたりこちらでは殺生したり先の嚊様の着物からおまへの着物も賣代なし博奕とやらに入さしやんして異見をすれば猶逆立お前やわたしをうち打擲わしやあんまりの恐しさにいつそ死んでも仕舞ふかと思ふて常住死かけても嘸や私が死んだればお前獨りが便りなかろ又二つには大切な宮様の事もし爺様が知らしやんしたら難儀な事もあらうかとそればつかりが悲しさに生永らへて居まするとと母の小膝に顔すり付歎ば母も諸共に落る涙を押ぬぐひサヽ母もそなたと同じ事近頃夫が惡とうにならしやんしたも皆殺生の報ひかと思へば後生も恐しくせめてわしなと死んだならちつとは夫の殺生や惡い身持も直らうかと色々思案して見てもあの宮様はわらはが伯父様白藏主様が大切にせねばならぬお方もし世間の人に見知られてはとわざと女の姿にしてわしが實の妹と呼なし現在連添ふ夫に迄深う包て知らさぬはこちの人の身持もし宮様のお身の上どういふ事が出來うも知れず又二つにはそなたでも爺御ひとりでもぎどうに折檻したり敲ひたり當り所でも惡うして疵やなど付さんしたらわしや未來でそなたの母御に何と言譯ならうぞと二つの事が苦になつてけふまで命永らへしぞ孝行にしてたもるそなた故宮様の事まで打明てのちから草かならず〳〵忘れても罠作殿に此事を悟られてばしたもんなやと義理ある中に隔なき詞に娘は打點きそりやよう心得ておりまするあのこわい爺様でも伯父様の伯藏主様のいはしやんす事はついぞそむいてゝはござんせぬになせ伯父様にさういうて呵つてはもらはしやんせぬヲヽそなたのいやるまでもない伯父様に相談したれば姉のそなたを片付た罠作は甥同前器量骨柄揃ふた男兼て宮様のお力にもと思ふたれど咄すには折もあらう又惡とふがまつこと止ねば異見の仕様も有程にマアそれ迄はおくびにも宮様の事抔悟られぬ様にせいと吳々とのおしへどういふ夫の心かは知らね共今ではけつく世間の人よりこちの人が恐しいまだわしは女房の事可愛やとしもゆかぬそなた親ゆゑ苦勞をさす事ぞと互ひに手に手取かはし又さめ〳〵と泣居たる折から門に足音のするは夫の戻かと二人は泪おしぬぐひしぶる茶の下流しもと泣かぬ顔して立直る心ぞ思ひやられたり道の邊に清水流るゝ柳影と彼西

行が跡を追ふ諸國行脚の歌枕首にかけたる頭陀袋まぶかに着なす檜笠心なき此あたりには所化の僧とや思ふらん實に果しなき武藏野の中に見えたる孤家を目當に暫し立留り是は遙遠き都の者諸國歌枕修行の爲名所古跡を尋るもの一夜の宿を御無心といへばお瓜は手をとゞめヲヽ夫はマア遠ひ所をおやさしい嘸獨り旅で草臥給はん御一宿遊ばせと云にいはれぬ此あばらや殊に夫はむくつけ者留主の内にお宿申跡から御斷申たら夜に入ての御難儀も思ひやる夫ではかへつてお氣の毒ノウお菊お斷申がよからうかと問へばお菊は打點き本に嘸樣のいはしやんす通り爺樣が戻らしやんしたら何といはしやんせうやらしれねど人里遠い此むさしの折角のおたのみを無下に申もほいない事爺樣が戻らしやんしたら何となりといふても一夜の事おとめ申て下さんせといへば旅僧詞につきいやも旅の身の心易さには庭の隅でも厭ひは申さぬ是非に一夜とたのむにぞ本にけふはそなたの母御の忌日旅のお僧をお宿申も供養のはしもし夫が戻られたら賴寺の坊樣じやといふておかうごろじやる通りむさぐろしけれどゆるりとお休被成ませマア〳〵是へに旅僧は笠ぬぎ捨て内に入り夫はお志忝し一宿願ふも何ぞの因緣幸ひあたまも丸ければ御佛前へはあたま役と草鞋とく〳〵腰かくればお瓜お菊も共々に笠と頭陀とを片付て虧し茶碗に出くちたる澁茶ぞ一の馳走也お瓜は旅僧にうち向ひ都のおかたは殊更に同じ故郷の事なれば一しほましてお懷かしいホウすりやお内方も都のお生れとなそれはマア不思議な出合シテマア此遠い國へはどうしてお移なされたなアイ私も都では育たれど緣あつて此吾妻へ片付今ではちつと國馴て都の事は大方に風の便りも聞ませぬと語る内にも旅僧は身震ひ立てかむりふりアヽ其都はいはぬ事〳〵我等も都を飽果て此吾妻路へ歌枕イヤモウ都は修羅の街折角公家の世となつても足利といふ武士に支へられ新田楠といふ智勇兼た大將を始忠義の人は大かた討死足利殿の威勢は日に增し其修羅道のうるさゝにかゝはらぬ我等まで思ひ立た獨り行脚イヤモウ此方が何ぼう心易い事やらと咄す内にも女房が都の事を聞につけはつとむねに答へるも知らぬが佛行脚の僧イヤモウかう遠いをあるく内も兎角名所や舊跡が我等が友イヤお娘御あれ〳〵あの向

ふに見える川の様な所是はけしからぬ大川と便りの船を案ながら行ども〳〵向ふに見え今又爰のお内から見る時はどう思ふても渡てこねばならぬ道あの大川をいつの間に越て來たか此むさし野の狐にがなだまされはせぬか一向がてんが行ませぬがありや何と申川じやなと聞に娘は微笑てこの武藏野は西は秩父根東は海北南の向ふが岡都筑が原より北は川越迄縦横十郡にまたがつてその内に川と云のは玉川粂川入間川と此三つ又年とらず川と云はあるに甲斐なき細い流れ節分の夜は水流がないとやら又向ふの川の様に見えるのはありや川ではござんせぬ遠いから見る時は大川の様に見えれどもその所へゆく時は川はなく行ども〳〵向ふへ行ようなれば是をむさしの迯水とやら申まするとに云に旅僧は小膝をうちハア、すりやあれが武藏野の迯水と申かと驚く聲に案じゐるお爪はふつと心づきそしらぬ顔に紛らしてホウお珍らしいはお道理〳〵わらはも爰へ來た當座は眞實の川かと思ひましたが私が伯父様は敷島の道もお好きゆゑ常々私へのお咄にはあれをむさしの、迯水といふて古歌にも武さし野の草葉隱れに行水のと申もある

との事珍らしい物ではござりませぬかと聞につけ思ふにつけ獨感じて打うなづきア、誠に歌人は居ながら名所を知るといへど目前見るは行脚の德又古歌まで聞覺えてござるこな様方の生立も奥床しい今宵は夜ともお咄を承りたい程なう御亭主もお歸ならん僧の手前の役目ぶりお看經でも致さうかと立上るれば女房も眞にこちの人の戻らんすに間もあるまい何はなけねど粟のまゝいざ納戸へとお菊があない然らばお辭儀申さずと連立一間へ入にけり跡見送つて女房ははつとばかりに吐息つぎ今のお人の咄では宮方は日に〳〵衰へ足利一家はさかんとの事宮様の御供して旗上するは今此時伯父様が賴に思ふこちの人はあの通りおめ〳〵時節を見合す內國を隔し都の事どうならうやらわからぬ時宜すりやどうしたらよからうぞとしばし途方にくれけるがやう〳〵心取直しいやつい近所のことでさへ人の噂は違ふものまして隔たる都と東とくと夫の心もさぐり伯父様にも相談したうへ仕様もやうも有うぞと心でこゝろ取直しヲ、今のお人も嘸ひもじかろどれ御膳をあげて看經をたのみませうといひつゝ納戸へこそは立てゆく龍も池中

にある時は蚯蚓にたぐひをおなじうすと後醍醐帝の御弟君大塔宮護良親王足利の讒奏によつて御兄弟中不和となり淵邊伊賀守に預られあやうき場所を遁れ給ひ此隣村に忍びいで人目を包むお身なれば女姿に身をやつしお瓜が妹お蘭とて年も二八の莟の花ひらきそめたるやさ姿けふの忌日に備るとて片手に提し女郎花くねる野道をゑとやかにあゆむ姿は誰が見ても男へしとは見へざりし遙か跡から聲をかけヲヽイヲヽイと呼つゝも戻りかゝりし主の罠作舌もゝつるる酒機嫌お蘭は見るより振返へりヲヽお前は罠作様今内方へ行所最前から呼しやんしたかえイヤモ呼んだ段か伯父貴の門口をそ様が出たゆゑ呼とめうとは仕かけたがもし伯父貴めに顔を合しや又長咄を受るがつらさにちよこ〳〵走りて通り過村はづれから大聲で呼んでいるのに聞ぬ顔ヱヽ去とては聞えぬぞよ是蘭せんどからいふ通り貴様嗅が妹じやといふて伯父貴の所へ來た折からハテ美しいものじやと首だけ所かぞつこんおれが惚こんだが何の他人じやあるまいし姉聟は妹の我身の聟も同前じやないか是どうじやぞいの〳〵と鹽の目にゑなだれつくを振拂ひ又しても〳〵罠作様のゑやら〳〵とこちやそんな事は知りませぬハテそれはすげないコリヤ君よハヽア聞えたコリヤ姉のお瓜が聟じやゆゑゑんしやくかハテ貴様さへうんといや古くさい嗅めはばいまくり此罠作が宿の妻コリヤうんといふてくれヱヽ呉おれと附つまとひつ口説にぞヱヽ不作法なと心ではいかりながらもそぶりにはさとられまじと柳に受段々のお志は嬉しいけれど伯父様のお耳に入たら大體や大方やかましい事ではござんせぬと言せもやらずゑせ笑ひへヽヽ伯父貴がおこつたとてこはいかいムヽそんなら何もかも伯父様に告るぞへアヽめつさうなそれいふてたまる物か何でも内へ連ていんでうんといふ迄はなさぬ〳〵さあこい〳〵と門の口明るやあけずどつちよごえヤイ今戻たぞうぬら何してけつかるのじやと内中ひゝくわなり聲お瓜お菊は納戸を出ヲヽ今戻らしやんしたかヲヽ妹おじやつたかお蘭様ようマアお出と言ひながら小氣味の惡ひ罠作の顔にふさがる二人がむねお蘭は提し花を置さいなアけふはお菊様の實の母御の命日と伯父様が氣を付て此女郎花を備る様早う持てゆけいてゝその御使にきた道で罠作

様に出合たら酒機嫌かしてゑやら〳〵と云を罠作紛らせてヤイ〳〵〳〵おれがるすじやとうぬらマア何してけつかる見りや佛壇へ灯をあげて優長らしい佛なぶりあた情ない穢らはしいごくにも立ぬよまい事より寝酒の肴は出來てあるかハテうぢ〳〵せずとちやつきりちやつとさらせやいといふたらまた錢がないの金がないのとぬかすで有うハテ錢がなけりやうぬらが着ておる物なとぶち殺し買ふては置いでエ、いま〳〵しい衒妻めらとあたり眼のぐわつたぐわた火入引よせふと煙管ア、世の中におれ程精出す者はないぞよ博奕は打酒はのむ殺生なら得手の物毎晩〳〵狐を釣るもうぬらにどがひしよがないゆゑ寝酒の肴も得えせぬからせう事なしにお釣遊ばす狐をばイヤ殺生じやの可愛さうなのとエ、眞に情も張合もある物かいけさから方々かけあるいて草臥たお菊め腰なともめと寝腹這ひ何とお蘭女郎貴様も手を遊ばすはきつい毒ちと此姉聟を見習うて若ひ折のゑんどは乞うてせいとおれが足などもみやいのと足投出せばお瓜は聞兼ア、是勿體ない何じや勿體ないとはエ、サア勿體ないとはあの體を遊して置のは勿體ないサアさうじやによつて私が先へもみましよと此場をくろめるお瓜が氣轉罠作はふり拂ひエ、誰が頼もせぬにうぬがその割松の様なほねでもんではそげが立わいコリヤお瓜よう聞よもうおりやわれがとんと否になつたエ、エイヤサわりや古嗅ふておかしうない我にやもう隙やつてあの妹のお蘭又美くしい者じや此春まで京に奉公してゐたといふがイヤモたまつた姿じやないて是からあのお蘭を女房にするさう思へと無法無徹な夫の詞きくに二人はあきれ果何といらへも口籠そば腰もみながらお菊は聞兼是滅相もない爺様あのお蘭様を眞實の女とヤなんとサア眞實の女房にもたうとはそりやあんまりでござんせう何をうぬ迄がませくさつたおれが女房にしたらどうするイ、エイナア今お菊がいやるのは妹のおらんじやとてまだことしが十七なりや娘のお菊とは一つちがひすりや娘を女房にする様なものじやによつてハテ娘の様であらうが孫の様であらふが何のうぬらがいらぬ世話コリヤお蘭ヲ、といふて呉んかエ、是しか〳〵ともみ上れと妻や我子に手づよきも戀にはのろき物なりしお蘭はお瓜と顔見合せ唯もぢ〳〵とするふり

に罠作はこたへ兼もうたまらぬと起上り否がるお蘭が手をとつて抱付んとする所をお爪はわけて中に入イヤそうはなりませぬおまへもあんまり惡性なと悋氣によせてさゝゆるをヱ、置上れ法界悋氣面倒なそこ退うと振のけ蹴のけて行かけるを娘はかいなにすがりつくお蘭は傍にあぶ〳〵と案に果しなかりけり罠作始終に目を付て伯父坊主や女房めが大事がるといひどうやら合點が行ぬお蘭のそぶりコリヤ是正しく男ヱ、イヤサ男のおれがする事をなせうぬが邪魔ひろぐ退ておらうと飛付をお爪は屹度抱とめ是こちの人夫程迄に思はしやんすも他人ではなし妹の事隨分得心さしもせうが木折にならぬが戀の道ム、そんなら我が口說落しサア色よひ返事をさすわいなアム、面白い一口商ひ今爰でイヤ後迄にいひきかしア、申嚊さんそれではハテ何事もわしにまかしてそれお菊妹を連て奥の間へアイと返事は仕ながらも心は隔つ奥の間へお蘭を伴ひ入にけり跡に女房は興さめて何とせんかたなき折から猿戸ぐわら〳〵音さして罠作内に居るか罠作と猿の樣なる聲をしてずつと這入るは油揚鼠六罠作見るよりヱ、きよと〳〵しい何じやぞいイヤ何じや所もすさまじいせんど都築が原の盆の上で取かへた卅兩の金我が眞裸に成ておつたをおりや其時に手合はよしゑいわかしてやらうがあさつて迄に五拾兩にして返せよといふたればヲ、合點じやとぬかしながらイヤあすのあさつてのとけふが日迄素股ふませて所詮返す金はあるまいゑいわ金返さにや爰のめらうを連ていんで大磯か手越へ女郎に賣四拾兩と五拾兩にして腹いるわサア金返すか娘渡すか罠作返事はどゝうじやといふもそゝこしあぶらあけ鼠六罠作ゑせ笑らひへ、馬鹿盡すな猿松めうぬらに娘をうる事を習うかいめらうのお菊はさる所へ賣る約束して置た其金も我に返したら能らうがそれも外へ渡すかね我にかつた金は追付かへす落付て待ておれヤイ〳〵〳〵わりや太い事をほざくなア娘賣た金もおれにはおこさぬかよいわモウわれにやとらぬその替りにうぬが伯父隣村の伯藏主めにさういふて臍くりがねを取たつるか又それもなけりや向ふにおるめらうのお蘭めちと心當りの口もありあいつを連ていて金にするさゝ思へとかけ出すを罠作は立上り鼠六が弱腰引つかみゑのころ投にずでんどう傍

にお瓜は只ハア〳〵聞度毎に惚りの胸轟かすばかり也こなたは鼠六しめ上てヤイおのれそれを伯父坊主めに云てたまる物かうぬらが智恵は皆跡へん常住手合の悪ひ時は伯父坊主めをだましこみ臍繰は皆せしめてしまうた今時そんな事ぬかしたとてかんつの虧にもなる物か其うへあのお蘭めはおれが首切惚てゐれば此嘸アめをぼいまくりお蘭はおれが閨の花わいらが手儘にやエ、さゝぬコリャ我に返す金は爰にあると懐より取出す人相書鼠六は取て打詠めコリャ是けふ代官所から渡つた大塔の宮とやらの人相書是をおれへ渡すかねとはハテしれた事じや此大塔の宮といふやつを此間から嗅出して置た是をとらへて褒美の金をせしめたらコリャ我へ約束の五拾両まだその外にわけ口も添てやるムウ、してその宮はどこにおるイヤそりやおれが見込である何でも今夜は遁さぬ筈コリヤたのしんで待ておれと聞より俄ににた〳〵顔よし面白いそんなら晩に請取うとうなづき〳〵門に出歸へるふりして藪垣に身をひそめてぞ窺ひゐる内にはそれとしりながらそしらぬ顔に舌なめづり始終を聞てお瓜が當惑義理ある娘をうるといひ殊に宮の身のうへ迄最早夫に見だされたかといち〳〵胸に釘さす苦しみこなたはかまはぬ高あぐらコリヤイ（ママ）そけめ今もうぬが聞通りお蘭を女房にするかよし又それがならにやおれがきつと仕様があるサア手短に返事せいヲ、といふて抱れて寝さゝにやよもや此まゝでは濟まいと否といはさぬ夫の難題吐息つく〴〵顔打守りサア妹じやとて時分の年まんざら否でもあるまいがあんまりお前が邪慳な故何じやおれが邪慳なさいなアお前が常體のお人なら隨分心にもしたがはうし又わしじやとて何の悋氣もせぬけれど今更いふではなけねども近比おまへの身持悪さお年とられた伯父様の助ともなる心はなく畑仕事も打捨て博奕打たり喧嘩をしたり狐を釣てよしない殺生夫ばかりさへうたていに今鼠六との言合せ宮様をとらへて褒美の金のと現在連そふ私さへ恐しうてならぬもの年端もゆかぬ妹がついとくしんをしませうかいなアヤア二言めには聞たうもない意見立今時面倒な百姓業より遊んでくらすが男のかいしよふと思ひ付た狐釣イヤ又面白ひ物人を殺せば下手人にとらるゝ畜生の氣さんじには四五十疋も釣たれど誰が何ともいふては

來ず今亦いふた大塔の宮めも足利殿から配符の廻たお尋者ひつとらへて連てゆけば褒美はずつしりなりやうぬらまで出世の種是皆筋の立た事ばかり何で夫が恐しいサヽ其得手勝手が私が癪シテ其宮樣とやらはどこの何國に匿うてござんすえと裏問かくれば空とぼけハテそれをうぬが聞糺して何とすりやいらざる世話をやかうより奥へいてお蘭めに言聞せうんといふて抱れて寢させい又めらうのお菊めは今夜約束の所へ賣る拵賣物には花をかざれじやきり〳〵髮も結ふてやらうてヱヽそんなら眞實あのお菊をヲヽ賣たらどうすりやおれが娘をおれが賣るに何とぞしたかサアそりやお前の娘でもござんせうが私が爲にも大事の娘あの子を賣ては私の義理がヤア七めんどうな義理だてうぬがさらさにやおれが直にとけしきをすれば女房は手ごわき夫を諫め兼是非もなく〳〵納戸口打しほれてぞ入にける罠作は仕濟顏その儘そこに空寢入始終を立聞鼠六はそろ〳〵藪疊より這出て合圖の呼子に小蔭より足利の家來野見の軍太組子大勢付したがへひそ〳〵と近付ば鼠六は猶も聲をひそめ仰られた何角の事罠作をさぐりし所きやつも欲づら我等と同心ヲヽよし〳〵然らば罠作を是へ呼出せ畏つたと油揚鼠六門口あけて罠作にそれと合圖に起上り戸口へ出れば野見の軍太すりや其方は此家の主罠作とな身は足利の家來野見の軍太といふ者汝大塔の宮の詮議致し差上る條是なる鼠六より慥に聞くシテその者はアヽいかにも心當りのやつはあれどいまだ確（しか）とわかりませねば今一度さぐつたうへいよ〳〵大塔の宮とやらに相違なくばヲヽ搦て渡すか首で渡すかもし手にあまつた其時は心覺の山刀で首にして差上ませうヲヽ出かいた〳〵然らばのちに受取に參らう夫は御苦勞是そのかはりに褒美をずつしりハテつがうに及ばぬ首さへ見れば三百兩エヽ夫は忝い然らば罠作ぬかるなと蚤取眼の野見の軍太組子引連立かへる罠作は鼠六を近づけサア三百兩ももうこつちのものわりや伯藏主に是かう〳〵と叫けばヲヽそんならおれが釣出さう早う〳〵と點き合鼠六は野道へ罠作はどりや奥へいて前祝ひに夕の狐を肴にして一盃やらうと獨り笑一間の內へ入相の空さへ秋は哀れにて千草にすだく虫の音と共に泣たき娘ぎのお菊は一間を忍び出思案途方に暮六つの鐘ゆゑ賣らるゝ身

のうへととゝろく胸をおししづめて恐しい爺樣の巧み事宮樣の首を渡すと今の約束殊にわしまで今宵の内に遠い所へ賣との事此春今の嚊樣が妹御じやとて都からきやしやんした本間の女郎と思ふてゐたに義理を思ふて嚊樣が誰にも知らさぬ宮樣のお身のうへ包み隱さずいはしやんしてからても可愛らしい尋常なあんな殿御が此廣い世界に又とあらうかと思ひ染たが身の因果いとしいやらかわいゝやら常住目顏でしらしてもあのこわい爺樣に見付られたらどうせうとけふまで枕かはさねど思ひ詰た女子の操そのいとしい殿御をば今宵の内に首を討れ此身は女郎に賣渡され何にたのしみに生延てつらひ勤がならうぞと袖くひしばる忍び泣娘心の一筋に思ひ詰たる戀の道哀れにも又しほらしき涙拭うて思案を極めヲゝさうじやくど〳〵と思ふ間に爺樣に見付られては一大事それより此場をちつとも早う宮樣を落しまして爺樣への言譯にはお身がはりにさへ立ならばとはいふものせめて此世の思ひ出にたつた一度抱れて寢たい寢たいわいのと口說き泣いや〳〵〳〵夫よりは潔ぎよういお身替りに立たなら此世の緣こそ薄く共未來の緣を嚊樣に賴おきちつとも早う宮樣をそうじや〳〵と打點づき足音させじと忍び足窺ひ〳〵入にけるやゝ更渡る秋の夜の音のみ冴て聞ゆらん次第名殘の後の古狐〳〵こんくわいの涙なるらん恁る夜道を老の身の杖をちからに伯藏主甥子の爲に心の闇浮世はうしや墨染の衣頭巾もふすぼりて二重の腰を立そらし一狂言詞是は此邊りに住百年に餘る古狐のこつちやうでおじやる爰にある者の候がいつの頃よりか狐を一つ釣初て面白いと思うてか釣程に〳〵我等がけんぞく共を悉く釣とつて今某をもねらへども油斷致さぬ所で聊爾に餌をはみにでふ樣もござらぬ爰に彼者の伯父坊主に伯藏主といふてある此人の申さるゝ事はあまさか樣なる事をも彼者が承引致す程にけふはかの白藏主に化て居て異見をして釣止らせうと思ふて是程に化た急ぎ彼者の宅まで行ばやと思ひ候一道行住馴し我古塚をたち出て〳〵足に任せて行程に〳〵彼が元にぞ着にけり狂言詞いそぐ間彼がもとに着た扨々物には取得がある彼者が犬を飼ふならば我等如きも參る事もなるまいに犬を飼ぬによつて何より心易いとゆかんとしては飛しさり邊り見廻し息をつぎ

狂言詞ア、嬉しや遠鳴で有た物扨々ゑい肝をつぶした先案内を乞はう物もう案内もうおとなふ聲に納戸より眼をすりながら主の罠作誰じや〳〵と立出て覗けば伯父の白藏主南無三寶あた邪魔なと思へど俄に追從聲狂言詞案内は誰ぞヱ、イ白藏主様でござるかヲ、愚僧でおりやるこなた様ならば案内なしにお通りはなさらいで殊に暮におよふで何と思召てお出なされました案内なしに通らうずれどもけふは思ふ子細があるによつて案内を乞うた夫は心元ない何事でござりまする今日參つたは別の事でもないちとそなたに意見のしたい事有て參つた御意見とござるならいか様の事成共承はりませう先奥へお通りなされませいイヤ〳〵思ふ子細有て奥へは通るまい是にて申さう聞ばそなたは狐を釣さうなのア、申私は左様な事は存ませぬイ、ヤかくさしましぞ寺へくる人毎にそなたの甥の殿こそ狐を釣れ人の事をだに言はうずる者があれが目にかゝらぬかと何れも仰らるゝよもや僞りではおりやるまい眞直にいはしませ扨はしかとおきゝなされましたかいかにも聞ておりやるとも御存の上は隱しませう様はござらぬ成程釣らぬではござりませぬ此程一つ釣ましたが面白う存て釣程に〳〵七八疋も釣たでござらうア、それ〳〵人がない事は仰られぬまづそなたは狐を釣て何にお仕やるハアまづ革ははいで引敷に致しまするヱイ身は料理して食ますヱ、イ骨は黑燒にして膏藥煉へ遣しまするハア、最早聞てさへ身が震はア、あの狐といふ物は執心の恐しい物じやその狐の報ひで心があらあらしうなつて後には人の害になることもする物ぞ今迄の事は取も返されぬ此後はふつ〳〵と釣をとまらしませと狐に掛し身の意見罠作はぎつくりと胸に當れば謝り入狂言詞何が扨今迄は左様の事とも存ませなんだ此後はふつりと釣をとまりませう何じや釣を止らうハアさうあらば爰に狐の執心の恐しい物語がある是を語つて聞せうがとてもとまるまいならいらぬものイヤこなたの仰らるゝ事をいつ背きました事がござる成程釣をもとまりませうぞ先お物語が承りたうござるさうあらば追付語つて聞せう愚僧もはる〳〵來たればいかう草臥た其床几をくれさしませ畏つたとあり合す床几をとるも槌で庭白藏主は座に直り狂言詞此物語をお聞やつてふつ〳〵釣をおとまり

やれや畏つてござるカタリ抑狐と申は神にておはします天竺にてはやしほの宮唐土にてはきさらぎの宮我朝にては稻荷五社の大明神と申も是皆狐なりハア爰に鳥羽の院の御時玉藻前とて容顔美麗にして並びなき上童の有し然るに此女を玉藻の前と申子細は四角八方より其姿を見るに譬へば寶珠を見るが如く裏表なき女なり總じて裏表なき者なればとて玉藻の前とは呼れたりハア又化生の前と申は何ぞなれば一とせ帝に御歌合有て後御管絃の有し時ゐいその如くなる大風吹來つて禁中の灯火一燈も殘らず消ぬ其時玉藻の前が身より金色の光を出し玉殿は申に及ばず御庭の眞砂の數までも隈なく見え候程に玉藻の前は人間になく化生にてありやとて夫よりも化生の前とぞ呼れけるハア、其後帝程なく御惱とならせ給へば貴僧高僧を召れ色々御祈禱ありけれども夫にその驗なく安倍の泰成といふ博士を召れ占なはせ給へば泰成念比に考て申上けるは是皆玉藻の前が仕業なりそれをいかにと申に此女と申は根本狐なるが假に人間と化して天竺にては斑足太子の塚の神大唐にては幽王の后褒似と成りて既に七帝迄取り奉り今又日の本の帝王を取奉らんとするかゝる一大事の御事なれば急此者を調伏あつて然るべきと申上る頓て四檀のついで五檀を僭藥師の法を行はるべしと有し時大內にたまりかね下野の國那須野の原に落てゆく國內通化の者なれば疎にしては叶はじと犬は狐の相を得たるものなれば犬追物といふ事を以て御退治あるべしとて三浦之助上總之助に仰付られる兩人は勅諚を蒙り那須の原に下着して百日の犬追物とぞ聞えけるハア百日の犬滿じければ尾頭七尋に餘る三尾の古狐顯れ出るを一の矢は三浦之助二の矢は上總之助ヒョウどつきと射る得たりやヲヽと飛でおり劒をぬきかれを害し帝へ奏聞ありければ君の御惱も忽御平癒あり國土納り太平の御代となるぞとよハアされども狐の執心殘つて大石となり人を取る事數しらず地を走る獸空をかける翅まで地に落かゝる殺生をする石なればとて殺生石とは名付たりハア爰に玄翁といへる僧あり彼石に向つてがつす汝元來殺生石とう石靈せう何れの所よりか來り何れの所にか去ると桂杖を以て三つ打打れて此石割れしより猶も人を取ぞとよかゝる恐しい執心の深いものなればけふよりしては釣をふつ

とおとまりあれかしと思ひすよ是此伯父が一生の頼じや程にふつゝりと思ひとゞまつて下されと甥子を思ふ老の身の泪に誠は顯れたり罠作ふつ〳〵誤りいり狂言詞扨も〳〵恐しいお物語を承りましてござる其物語を聞ては狐を釣う物ではござらぬ此後はふつ〳〵止りまするで御座らう聞に伯父坊嬉しげに狂言詞何じや釣を止らうとおしやるか中〳〵左様でござるヲゝそれならば爰に狐を釣輪罠とやらいふ物があるげなそれを捨てお呉やれお歸りなされたらば捨ませういやといへば其道具があれば又釣たい心も出來いで叶はぬとても捨るならば愚僧が見る前で捨さしませハア畏つてござる罠と申は是でござる傍なる罠を鼻先へ突付出せば身を背け鼻動かしてふり拂ひ狂言詞ア、扨も腥や〳〵其道具でいか程か狐を釣やつたのふ早ふお捨やれ〳〵心得ました捨て參りませう是ごらんぜと罠折すてゝ外面にすて狂言詞ハア捨ましてござるおすてやつたかようお捨やつたの〳〵愚僧がいふ事じやと思うて早速承引おめさりやつた近頃満足した奥へ通つて子供にも逢うずれどもけふは穢らはしい重ねて來てあふでおりやろ夫は兎も角もでござる又そなたもちと寺へお出やれ成程お見舞申ませうお出やれとはいへども愚僧が事なれば別に振舞ふ物はない昆布に山椒でよい茶を申さう杖を便りに戸口へ出れば罠作は送り出す言詞それは何よりの御馳走でござりまするかならず〳〵出さしませお知りやる愚僧じやによつて何も振まう物がない昆布に山椒をまいてハア茶ばかり申さうようお出なされましした胸に一物罠作が門のやぶれ戸ぴつしやりとしめた振りして窺ふにぞ白藏主は只そろ〳〵狂言詞ア、馳走をしたうは思へども何も振舞ものがない昆布に山椒茶ばかり申さう昆布に茶ばかり〳〵と影隔つまで口の内道かい曲る尾花原姿は見えずなりにける跡見送つて罠作がまんまとばれはいなしてのけた此上は手延にならぬ宮の首さうじや〳〵と打うなづき戸棚に置し山刀腰にぼつこみかけこむをお爪はそれと走出夫の向ふに立ふさがり是罠作殿最前からの一部始終殘らず納戸で聞ました老としよつた伯父様が夜道もいとはず御意見にござんして頓と心を改たと今誤らしやんしたじやないかいのそれにマアその山刀をもつて一間へかけこみお前は何とさしやんすのじ

やえハテ知れた事伯父の意見も何の其耳にとめねば空吹風ムウ、すややれ程にいわしやんしてもヲ、十分手に入る褒美の金奥におるお蘭こそ大塔の宮に相違はない今又意見にうせた白藏主めは古狐のこつちようめ妖てうせたに違ひないア、是勿體ない何の狐が伯父様にイ、ヤぬかすな日頃から伯父貴めが意見がましい顔付に小氣味の悪ひと思ふを幸ひ妖てうせたに極つたよし又誠の伯父にもせよおれがかねもふけの邪魔するやつどちら道ばらして仕まうヱ、ヱイ誠の伯父めか狐めかきやつめが歸る道筋に用意罠も仕掛てある何れの道にも只はいなさぬマアそれよりは手短にお尋ものゝ宮めを生どりそのうへ伯父めもばらしてくれう邪魔さらさずとそこのけと取付お瓜をふりのけ蹴のけ猶かけ入んとする所へ娘のお菊は走り出罠作が手にむしやぶりつき是爺様堪忍して下さんせあんまりお前が胴欲さにお蘭様は今宵とめた御出家をたのんで裏道から落しましたと聞に罠作歯噛をなしヨ、すりや大塔の宮を落しおつたかチヱ、うぬマア現在親が金の蔓ようううま〳〵と落したなお菊が襟がみ引よせて欲にふけりし怒りの眼母はお菊を身におほひヱ、お菊よう落してたもつたのうせめて夫の罪亡し二つには又此母へ義理を立ての孝行さゃア何をうぬらが得手勝手遠くは行まいぼつついてとかけ出す足もと二人は引とめ是爺様是ばつかりはゆるしてたべどういう事やらわしや宮様がいとしさに孝も不孝も忘れはて思ひ染たが身の因果現在獨りの娘が頼みゃア忌々敷ひ色事三昧山の神めとひとつになりようううま〳〵と落したなうぬらどうして腹いよふぞチヱ、殘念やと立つ居つサ、、腹が立ならば私を殺してあの宮様のお身代りにして下さんせわしやあの宮様ゆゑなら譬へ死でも本望じやと身を突付て覺悟の體母は娘を突のけてイャそなたは殺さぬ落しましたはわしへの義理わしを殺して腹いせにと二人は足に取すがり果しなければ罠作はヱ、面倒なと突倒す折柄鼠六はすたすつた走り來つてコリャコリャ罠作約束のお尋者はヱ、約束所か宮は裏から二人りがふけらしあまつさへ邪魔さらすおれは是から跡追かけ宮めの首をちよち切てとめだてひろぎや伯父でも搆はぬ此めろどもの邪魔せぬようがてんか鼠六ヲ、呑こんだと取りすがるお瓜を支るその隙に得

たりと駈出す足もとをお菊がとつて動かさねばエヽ足手まとひの此めらうめ幸ひおのれを連ていて約束の所へばらしてくれうサアうせおらうとひつばさむさうさしては義理たゝずともかくお瓜を鼠六は引たて罠作早うヲヽ合點じやといふさへくらき露の闇欲のくらやみ幸ひにお菊をひんだき罠作は跡を慕うて

この段切まで今すこし長ければ下の卷に出す讀て知るべし右吼噦の狂言は此道の習ひことにして狂言記にも出さず予大藏流の何某より一書をかり受其餘書と參考して是に出す狂言詞に讀癖甚多し所謂是を大藏派の大事とする所なるべし

西澤文庫傳奇作書殘編上の卷終

露廼干努間能朝顔耳　輝壽日影農難面幾爾
安盤禮一無良佐免乃　婆羅々々登富連可之
（春江の朝顔の戲書略之）　璃　寬

西澤文庫 傳奇作書殘編中の卷

目次

一芝叟長話葬の話
一東都合卷の外題の寫
一同戲場にての外題の寫
一當狂言外題見立番附
一瀨川菊之丞俳名の話
一淨光我童に蘭平を教し話
一蘭奢待助市役の話
一秋里離島翁の話
一十返舍が膝栗毛の話
一伽羅先代萩世界の話
一義經腰越狀院本の話
一岩井風呂人殺の實說
一同京都芝居番附の寫（略之）
一女郎富再び情死の實說
一慶子紅梗桔女團七の話

西澤文庫傳奇作書殘編中の巻

西澤綺語堂李叟著

芝叟長話舜の話　（舜の戯書並讃略す）

前集芝屋司馬叟が傳に說長話數種ある內此舜は自得の話にて其頃の歌舞妓に取立璃寬に宮城阿曾次郎をさせ度望にて近松德叟に談じ狂言あら方書上たれども深雪をすべき女形なくて四五年を經にけり其內柳浪（馬田と云醫師也）に諾し（話しカ）て書を交へ小說稗史前編五卷後編五卷に出板したり又四五年を經るうちに芝叟德叟共に歿して舜日記の小說のみ擴まりて文化九年頃堀江市の側芝居にて生寫舜日記と外題して（濱芝居作者出來島千助）市川團三郎に駒澤をさせけり評よくてもさまで歡もせざりしが文化十一甲戌年東都より若女形澤村田之助（先宗十郎紛源之助の弟）七年目に浪華へ歸る併名曙山とて器量善く琴三絃に達したれば舜の深雪は是に限るべしとて芝叟德叟の遺稿を出して奈河晴助潤色して則外題をけいせい筑紫歎（つまこと）と賦したり（春狂言に舜と、なへし曙山醫女となり脊負ひ出る手琴を朝顏琴と唱へ璃寬には扇子に舜の唱歌を書せ持はやらせけるが故櫛簪團扇子縫摸樣染摸樣朝顏ならずと云事なし書人春好齋の門人春鄕といふ者橘を舜の花とし三吉の文字を葉あらしのかなを蔓に書けり唱歌は璃寬の認しを寫して前に出す此頃又朝顏の珍花をはやらせり何事も朝顏々々と唱へ芝居は古今稀成大入しけり芝叟存命ならば嘸かし歡ぶべしとて璃寬追善の摺物を出せり花蠟燭の艷摺にして左の如く三本有て上に漆越を置外袋に文を書たり餘紙に寫せし如くして風交子に配る是も三十餘年の昔となれば皆故人と成りて小說の板元なる予のみ殘れり然るに弘化四未年予は東都に行て五月頃にやあらん澤田氏の誂にて筑紫歎と江戶狂言復讐合法街（故鶴屋南北が作）是を混じて一日の傳奇に脚色を望まれ暑中をいとはず江州多賀家の世界と定め著述にかゝり日ならずして全部八冊草稿なる頃舊友花笠文京來つてさる書林より舜日記の合卷を賴まれたり兼て狂言出來ときけば其狂言の筋書を合卷に出し來春賣弘めし上にて此狂言を出す時は近くは戲場の報條

となりて見的に其筋を能知らしめ

（璃寛追善の摺物略す）

其まゝを芝に手向そ五形艸　璃寛

花すみれゆかりをとふや芝の露　曙山

筆のあと探りてとはん嫁菜哉　晴助

蕨の芽出しに種の噂かな　土卵

万倍の花朝がほの嫩より　柳浪外史

其圖に乘つて書林も幸を得んこと一事兩益ならんと勸るに澤田子も兼て其事を思へばよかるべしと云早速筋を認め文京に送る其後文京來つて書林何某朝顔を刻したがるは近頃淨瑠璃に蕨の宿屋の段を作りて語るに評よければ全部せし所を梓に彫んとの心にて外題を則かたり草瑠璃の朝顔と號最早願ひも相濟書書とも彫刻にかゝりしと云是を聞てこは以の外なることなり其宿屋場の一段は浪花山田野亭と云へる者阿古屋琴責と袖萩の祭文を混じ前後の筋も辨へず拵へし場也予も一兩度聞て片腹痛く覺えしに思ひきや予が著作の外題に淨瑠璃を題とせられんは好ましからずと悔め共願ひ濟しと聞て力に及ばず獨つぶやき思ひ捨たり年の暮本出來せしとて校合摺を文京持來り予見る所袋と叙文左の如く書組文談も紙數限り有とて曩に說く合法の筋を拔地名も略して草稿とは異なりその上名を賣るを厭ひて綺語堂作と書あたへしを屆もなく西澤一鳳と表にあらはし西澤と書では書林納らずと云劇場にすら名をのせぬに年頃の舊友たる文京にも似合ざる仕方と悔めども甲斐なし原此駒澤は熊澤の事蹟を書もふけしもの故常の戲雄とは同じからず夫を文京辨へず婦女子に歡せんとて心浮たる當世男と見しか螢狩の船中にて娘深雪と琴三絃を合奏せし樣に書たり柳里恭（柳澤淇園）などの人と思はる其餘書組等も予が心に落ず詠めて腹を立んよりはと再び見ず文京も利欲にふける書肆と言合せ我虛名を賣しを氣の毒とや思ひけん久しく來らず因て朝顔の唱歌にもとづき恨みを言ひ送る

東都合卷の外題の寫（朝顔艸紙表紙の繪あるも略す）

露も見ぬ間に蕨をほらす書屋のつれなきに哀れ一枚宛なりと花笠の見せかし

此外に述懷の狂詠一首

色々に作りし物をるり色の野ら朝顔となせし花笠

かく書送り以後は人の勸め有ともうかつに筆はとるまじと思ひ捨ぬ

此朝顔の物語は芝叟が夜話の中なるを柳浪採て小說に培て世に流布する事尙し京攝にはいち早く狂言に其蔓を傳せて異種の蕣と共にもてはやせしも廿年餘の昔と成にけり吾友浪華の西澤家產とすなる劇書の種を多く齎し來て猿若の地に蒔んとするを聞て書賈稗史の鉢植にせんとて校合を予に求む

東都戲場にての外題の寫

原來詞華言葉の繁き上に加之に合法の復讐なれば彼を摘是を省きて只幹すぢを助て榮枯全うせんとすれ共兎園の狹き爭でもらす事を得ん所謂小風呂敷に夜具を包に異らず小を以て大を覆んとするは愚の極なり苗を日陰に植たるは花も亦頗る遲かるべし

弘化五戊申春新鐫　　花笠文京

同芝居にて外題段書（略之）

孝貞忠信比四季花籠

時は應永年中江州多賀の兩執權駒澤主膳瀨左衞門が諫言耳に

界杭爰で立場の太平次がお米を乘て孫七の小室節

春はやり梅　早枝大學之助
夏はさつき　高橋彌十郎
秋はその菊　多賀采女之助
冬はみゆき　宮城阿曾次郎

復讐雙　合法榮　繪入稗史　蕣物語　全部八卷

あら不思議行衞慕て大井川と心を瞽女の筑紫琴

頃も秋月石山の妻子は宇治の螢狩闇に礫の岩代瀧太がたくみも忽

秀逸の吟に寄る　越川の村境に　鷹野の狼籍
盛りは憎し迎ひ駕　武射の陣屋に　意恨の欺討

第二の吟に寄る　宇治の川邊に　赤繩の螢狩
その日〳〵の花の出來　篠原の水門に　闇夜の曲者

第三の吟に寄る　八橋の泉水に　杜若の文使
うがひ茶碗に鐘の音　多賀の屋形に　發心の門出

第四の吟に寄る　藪原の峠道に　旅路の艱難
地にさく事の覺束な　楢井の建場に　名代の返討

第五の吟に寄る　石山の別業に　夢路の私語
扇のほねを垣根かな　鳥羽の湊戸に　暴風の別路

第六の吟に寄る　大磯の柳巷に　情死の仇討
紺にそめてもよは〳〵し　花形の青樓に　追善の燈籠

第七の吟に寄る　駿府の宿屋に　妻琴の憂話
釣瓶とられて貰ひ水　島田の河原に　主從の再會

卷頭の吟に寄る　鏡山の下館に　本復の祝着
露や朝々賑しき　柏原の辻堂に　開眼の復讐

右嘉永改元申年秋狂言に出せしに朝顔珍らしく合法のかた出來能ても見古したればと茶屋場總一座の揃太夫元家橘の紋にして綺麗也是を見て亦例の狂詠をはく

市むらの芝居に作る朝顔に
盛りあらそふ黄葉とうづ川　木端家橘

當狂言外題見立番附

大關　伊賀越乘掛合羽
關脇　金門五山桐
小結　けいせい黄金鱐
前頭　競伊勢物語
前頭　九州釣鐘岬
前頭　伽羅先代萩
前頭　天滿宮菜種御供
前頭　四天王寺伽藍鑑
前頭　傾城倭莊子
前頭　けいせい筥傳授

同　けいせい會稽山
同　姉妹達大礎
同　柶自來也談
同　義臣傳讀切講釋
同　いろは歌譽櫻花
同　天竺德兵衛聞書往來
同　けいせい素袍鱷
同　遠州中山染
同　加々見山廓寫本
同　日本第一和布苅神事
同　敵討安榮錄
同　清水清玄六道巡

大新板浪華歌舞妓（かぶき）當狂言（あたりきやうげん）外題見立觔（げだいみたてぜもふ）

大關　けいせい天羽衣
關脇　三十石艠始
小結　傾城忍術池
前頭　秋葉權現廻船話
前頭　日本花赤城鹽竈
前頭　和訓水滸傳
前頭　契情陸玉川
前頭　桑名屋德藏入船噺
前頭　けいせい楊柳櫻
前頭　舊礎花大樹

同　けいせい佐野の舟橋
同　けいせい青陽鷦
同　大和國井手下綴
同　敵討千手護助釼
同　忠臣二葉藏
同　契情正月陣立
同　長崎丸山細見圖
同　契情廓源氏
同　けいせい北國曙
同　近江源氏艎講釋
同　扇矢數四十七本
同　契情遊山櫻

同 紅楓松葉話
同 連歌茶屋譽文臺
同 東山殿婦狩
同 五大力戀緘
同 藍桔梗鴈金五紋
同 心中のべの書置
同 色競續箭戰
同 置土産今織上布
同 艶競石川染
同 三組譽景清
同 けいせい挾妻櫛
同 雙紋廊錦繪
同 霧太郎天狗酒醼
同 濱砂傳石川

同 奈良都大佛供養
同 伊勢日向の物語
同 泰平いろは行列
同 竹篦太郎怪談記
同 目出度かしく傾城始
同 傾城咬嚙吧文字
同 契情高砂松
同 けいせい花發船
同 同計略花吉野山
同 入間詞大名賢儀
同 もゝちどり鳴戸白浪
同 伊達姿萩燕都裙
同 露蝶廓名月
同 けいせい齋佳節
同 粧倭畵曾我
同 東訛戀深川

同 けいせい蕗島臺
同 美濃庄九郎廓軍配
同 東海道戀の關札
同 南詠戀抄書
同 植木や文藏遊里戀風
同 けいせい千貫樋
同 二月堂曉鐘
同 今織臺貫島
同 口來會顔見せ
同 足利御覽歌舞妓事始
同 八文字屋眞鳥實記
同 金花山雪曙
同 惟喬親王魔術符
同 けいせい都富士
同 八重霞廓の寫本
同 戀すまふ身受請入札
同 天下一鏡のはじめ
同 男作咲分櫻
同 嶋重けいせい櫻
同 けいせい播磨廻り
同 今織ゑぞにしき

行司

笹瀬連中
大手連中

頭取

辰岡萬作
近松德三

勸進元

大坂太左衛門
鹽屋九郎右衛門

同 淺草靈驗記
同 伊勢音頭戀寢及
同 吉原細見圖
同 鐘鳴今朝噂
同 文月恨切子
同 猿曳門出諷
同 小室諷道中雙六
同 擧褌廓大通
同 けいせい花大湊
同 掉歌木津川八景
同 けいせい花山崎
同 戀櫻清水詣
同 契情飛馬始
同 けいせい美鳥林

同 銀閣寺釿始
同 三千世界商往來
同 桃柳鄙島原
同 松平嘉平治連歌評判
同 井出玉川正平織
同 赤坂城皐月合戰
同 防州苗討松
同 敵討兄弟標
同 花艠淀川語
同 假名寫安土問答
同 極彩色倭繪艸紙
同 敵討丹波噂
同 雪國嫁咸谷
同 媚風俗文選
同 名作切籠曙
同 褄重勘助縞

同 ひらかな枕言葉
同 響灘入舟噺
同 大坂神事揃
同 都清水夜開帳
同 俠競廓日記
同 下總國累說
同 北條五代記會說
同 石川五右衛門一代噺
同 中山寺利生物語
同 九州かるかや關
同 世話料理鱸庖丁
同 傳聞むげんのかれ
同 後榮初音調
同 本朝龍門瀧
同 丹波國助太郎舘
同 稻光田每月
同 當世奇族撰
同 萬年艸妹脊褥袖
同 比翼鳥邊山
同 荒事江戸繪曾我
同 けいせい出口柳

右歌舞妓當狂言外題見立角力大番附は曩に豊竹竹本を東西にわけ當淨瑠璃の外題角力の番附出けり竹本座大關國姓爺合戰豊竹座大關北條時賴記夫に倣て出しは文化四五年の頃なり是にもれたる外題數多あり枚擧すべからず順は作の佳否に拘らず大入大繁昌せしを上段とせしものなり下段細字の所にも佳作なきにしもあらず當狂言の分此前編拾遺に解もらせしは此編に註すべし狂言の世界多き中にも假名手本忠臣藏は種々の增補有て評註甚多し予是を輯錄して別に忠臣藏類聚大成と題して四十餘卷傳奇の系圖作者の評論とも都合五十卷に著すべし好者是を見て悟したまへ

瀨川菊之丞俳名の話

昔文祿の頃小野攝津守息女優に艷敷氏を繼て小野が跡を追ひしかば六義の詠も大內に耻かしからで鄙人にはたぐゐもなかりけるを國ならびの龍造寺の家臣瀨川采女正といふ好者見ぬ戀にあこがれ千束の（文カ）通はせ星霜をかさねしかばえたふになびく習ひ終に兩親にしらせて迎へとりけり其二月ばかりに高麗の陣觸有て龍造寺も其催に采女も朝鮮の軍旅にとどまり一年も便あらざるを妻の菊女（一說に閨淋しきは園菊）に堪兼て思ひの餘りを一封の水莖に黑ませて渡海の便に賴つかはしけるに其船灘の風に破れ船の中の品々悉く行衞なく成しに彼文箱一つ名護屋の浦にあがりて浦人とり傳へて上聞に達す豊臣秀吉公其文を讀せ御聽あるに心まめやかに夫を思ふ情ふかゝりければ憐み給ひて龍造寺に命じて采女を朝鮮より呼歸らしめ給ふと太閤記に見えたり錦に文字をあらはして戀の心ざしを萬里に通はせ卒都婆に歌を彫て汐路に孝道を傳へし同日の話なり菊女が文高麗へ行たらば采女が歸國は有べからず波にゆられて浦人の手にわたり上聞に達せしは貞心天に通じ鬼神も感ずる所なるべし初代若女形瀨川菊之丞の名は采女夫婦が貞操に習ひ然呼といふ事人口に膾炙するゆゑ爰に出す因に俳諧を其頃美濃風の祖獅子庵支考に學ぶ（芭蕉翁の高弟東花坊西花坊と云）支考菊之丞に一字を免して路考と呼けりかゝれば元祖中山文七は（中山新九郎勘後黑谷淨光と云）かの元祿中に名高き忠臣大石の義に倣ひて由男と呼し物ならん此弟子に中山文五郎（始中山小三郎一道外役者なれば俳名を美男名やんまと云）と附たり名をきくさへおかしくてよし又初代芳澤あ

やめは俳名を春水と云春水四澤に滿るより呼なるべし郭公啼や五尺の菖蒲草と芭蕉翁の詠しも此あやめの事にて其頃の評判記に三ヶ津總藝頭とあり此躬芳澤崎之助親の名を繼二代目あやめとなる俳名を一鳳と云此弟中村新五郎の養子となり中村富十郎是又後三ヶ津總藝頭俳名を慶子と云此兄弟英一蝶の畫を學んで墨跡今に殘れり爰に笑話あり文政中長崎の雅友長岡梅子方より予に軸物一幅を送らる柳に燕の畫に由男の讃有畫は親父か祖父なるべし不思議と彼地にて見出せし故呈上すとの書狀添たり予一軸を開かぬうちより思へらく父は戲場にのみ遊び書畫を弄ばず祖父は享保に歿したれば由男の讃には年暦あはずとあやしみ乍ら軸物を開き見れば英ふうにて一鳳あやめの畫也由男の詩に柳に燕の二字を書ず則畫にて利せたる合作の書畫なり寶暦明和の頃の筆にして數百里隔てし崎陽より予が父の筆ならんと雅友梅子より送られしも奇なりとて表裝を更時々床にかけて樂めり昔の俳優家の俳名に師より讓り受しは格別多くは我身を卑下して呼しものなり所謂栢莚とあるを崎なると卑下して白猿となる里環の躬李冠と書しを後璃寛とは替ずともの事なり芝翫も役者にはよき名なるに弟子に讓りて後梅玉と改浪花の玉とは自賞なるべし其餘近來の俳名は熟字もせでいと狼籍なる俳名あり笑ふに堪たり

淨光我童に蘭平を敎し話

中山文七由男淨光は天明二壬寅年秋角の芝居にて一世一代とて物艸太郎切に蘭平物狂ひをし後に博多織の小平次切は紅葉一世壽に平惟茂役をし九月九日より霜月四日迄興行大入大繁昌せしとぞ此時弟中山來助初代中山新九郎躬松屋舍柳と云父の名を繼二代目新九郎となり門弟中山猪八京都にて改二代目中山來助となる是後寛政八辰年二代目中山文七髷附や一世一代に付風流連管三番叟は皆門弟より出る翁中山唉藏三番叟中山他藏二代目新九郎死てより俳名舍柳中山楯藏濱芝居立物也後泉川と改笛中山太四郎後淺尾と改又工左衞門と成小鼓中山新七後三代目新九郎喜樂也一蝶の父同中山榮藏同中山小三郎後文五郎美男の事笛中山金七太鼓中山友九郎後百村と改目出度打納また京都にて興行して直に剃髮して淨光と呼び墨の衣に着替て東山新黑谷の茶處に籠り念佛の信者となつて再び舞臺を踏ず信心堅固の大道心也爰に中興片岡仁左衞門七代目南麗舍我童は始淺尾國五郎とて爲十郎の弟子也師の不興を受山澤國五郎

と暫し名をかへ居たりしを叶雛助小六玉を云我弟子にほしく爲十郎の許をつくろひ片岡といふ名字は先祖中村十藏俳名虎看より因ある名にて吉右衞門虎看改名片岡又十藏小琅獅十と傳て六代目に及ぶ則七代目片岡仁左衞門と改名させて我弟子としたり此紋銀杏奥山の弟子なるゆゑ紋は丸に二ツ引きを付たり俳名我童と云て元色敵より後立役となり實惡となりたり敵役をする時は奥山の流をし立役女形實惡は小六を寫せり天明八年改名して寛政の中頃京都の芝居にて倭假名在原景圖の蘭平を好まれ我も兼て仕て見たき心あれば一日黒谷へ詣て淨光の庵室に尋ね茶菓子の見舞を送り浮世咄より言よりて蘭平の事を問ふに淨光も好の道なれば爰が仕どころ又此間がむづかしとて居ながらにして所作を敎ふるに誠に古今に通ずる名人の敎ふる所なれば一二應にては會とく仕難き處あり我童淨光に一禮をのべ甚申兼たる事なれど雙林寺中に閑靜なる座敷をかり受あればあの方へ一日御出あつて御傳授はなるまじくやと賴みに淨光一義もなく今は浮世に交らぬ身なれど元より覺えし好の道嘸や芝居からは急べし明日未明より參るべしと心易くいはれし嬉しさ然らば翌日と所を言置我童は返つて座敷しつらい淨光の來るを待に程なく淨光訪ね見え坊主あたまに手拭を冠り物狂ひの始より咲た櫻になせ駒つなぐ又浮世〳〵しん氣な顔うかせ浮たる物に取てはのふかよりお草履摑んで尻ふるべいの終り迄仕て見する事數十遍身うちの汗をぬぐひつゝいと懇ろに敎へけり我童は見入りて感に絶精進物の饗膳も淨光はそこ〳〵に取らせせりふの言樣身の取なり委しく敎て返りしが跡にて我童所々をさらゆるに淨光のする所言外餘情の妙ありて中々心に覺えられず途方に暮る其内に早芝居には看板出初日はいつとせつかるゝ淨光法師をさう度々は迎はれず詮方盡て一兩人の藝子を呼び夫とはなしに相談しければ藝子の中より山ねこ下河原舞子也この誰々は蘭平の役を得たるゆゑ圓山或は靈山にて毎度勤しを見しと云我童それこそ呼に心易しとかの山ねこを呼よせて藝子の地にて踊らせ見るに女のふりゆゑ端手あり色ありきつかけ有て覺えよく並んで振りを習ふ所一夜にして習得たり淨光に敎を受ては心改つて遠慮の氣味あり舞子は後の名聞ゐればよろこんで敎ふるなれば花を買ふて祝義ですむと高をくゝつて侮

る氣味あり心あらたまらねばくつろぎありて覺易しされど淨光のおしへし處々覺へし所は是を交やがて初日も出て相應に評もよかりしとぞ黒谷へは反物を送り其日の禮を言やりしを其又禮をのべんとて四五日程經て來りしゆゑ幸ひ唯今蘭平の場也見物有て批判を乞ふと棧敷を明て迎へければ淨光は衣のまゝ頭巾冠つて見物し幕しまつて宿へかへる我童返つて淨光に逢ひ御影で此役勤めしと一禮に及びし時淨光は當りをほめ扨我等が勤し頃より年數立ば流行もかはるべし我等教へし所は所々に見ゆれど一體が女のふりになつたるはいぶかしゝ小手の利し取廻りは當時流行の所なるべし此蘭平の役程仕難き役はあるべからず本名は伴の義雄にて行平を父の仇と心得復讐の爲に下郎と容(略しカ)及物を見れば狂亂すとは肌ゆるさせん謀事也然れば器用には踊れぬ役なり又拵事なれど附しは女の死靈也彼是と工夫を附度々勤て試み此頃我等がして見せしは手譽か知らねど頗得意を得し所也今日見物せし所を評せば舞子山ねこのふりに似て狂言には遙に遠しと名人の眼に見すかされ我童滿面に汗を流し淨光尊師のせらるゝ所誠に絶妙にして覺えがたく覺ゆるとも仕難き所有依之山根子何某に習ひて漸當座を凌げり實に恥べき所也と始終を懺悔しければ淨光も打點き夫にて樣子わかりしとて所々を口傳して黒谷へ歸られしと其頃の物語を歿前樂屋にて予に咄せり以前下手岡などゝ誣たれども古き役者は名人上手の狂言を見古人の教へを受たれば今時の役者と一口の論には及びがたし

蘭奢待助市役の話

蒼頡鶏の足形を見て文字を作る後世虚言を云者多からんと鬼神哭せしと云又文字を教へたる鶏今飛來らば一字も讀む事あたはずと啼べし豈筆道に限るべからず淨瑠璃歌舞妓の文談にも作者の始て書置たると後世語り勤る者了簡ぐわらりと違ひ若し古の作者當時の狂言を見たらんには我書し時とは心違ひ今更云とて癖は治らず眉を顰めて逃去るべし蘭奢待新田景圖は近松半二の作にて能操歌舞妓共に時々出て名譽の當狂言也然れどもいつも三の口切のみにて五段續にて興行せしは文化元子年の秋中の芝居にて義貞市藏(後鰕十郎)幸内團藏助市三五郎(二代來芝)女房路考四の切彦七團藏楠後家路考(仙がま女)六大友可兵衛三五郎也助市可

兵衛の二役は來芝得意の役にて度々出せり予來芝のせしは見ず文政二卯年中の座にて黄金鱗關取二代鑑當りを取日數長く興行せしゆゑ後に蘭奢待三の口切を添たり新田に片岡幸内に工左衛門誠の内侍に歌六助市に嵐吉女房に小六也何れも老練の輩のみゆゑ見物するに飽ず此時璃寛病氣に付三四日計助市役の替りを三桝他八當時の大五郎也勤て評よかりけり夫より以來是程揃ひし蘭奢待を見ず爰に予が父の友に平野町一丁目末廣師鶴卯といふ男有けり原堀江九平小六玉最負丸や平兵衛の幇間にて戯場遊里評を觸歩くを樂みとする老人なりしが古き事を聞には勝手よき故予も親しく交り或日蘭奢待の話に及び中興來芝が毎度するを見ねども璃寛のする所より仕所あるやと問ふに鶴卯端唄扇盡の作者也千代の舞鶴うつ頭をふつて來芝の得たるは庄屋可兵衛田舎座頭をよく踊るゆゑ也助市のあしきは凡來芝にとゝまるべし先助市の役は戰國の砌りなれば親幸内を宮方とも知らず足利尊氏に仕へて妻鹿孫三郎と名乘り軍慮の爲に造病臆病者となり親の勘當をゆるされんとの心也幼少にて家出せし兄は小山田太郎とて新田義貞に仕へ主にかはつて討死をしたり義貞は幸内の躬也とて勾當の内侍諸共に容を略し是も勘氣の侘に入りこむ小山田の女房を勾當の内侍と名乘らせ幸内の家にかくまはれり助市の臆病を父の幸内罵つて止ず女房およね聞兼て自害をし夫をはげます傍に内侍は介抱する嫁に苦しみさせんより早く首討苦痛を助けよと幸内の差圖にこは〳〵刀を引拔て此身に代つて死たる女房嘆とは思はぬ南無嘆大明神今が最期と振上し刀の著それて内侍の首打とり血刀提て門に飛出それ傳へ聞く漢の沛公は座する所に紫の運氣たなびきとせりふいひ終つて橋懸りへ駈込む此内幸内夫婦嫁およね餘りの事にあきれ果妻鹿孫三郎と名乘りしより扨は躬は尊氏に味方せしかそんなら夫とは敵方かと嫁是にて事きれる是本文を來芝は小才覺にて直し嫁の苦痛を助けよと聞くより刀を拔て立上りそれつたへきくとせりふの終りに内侍の首討駈こめり常々臆病の馬鹿者が唐倭のひきことをいふ隙に幸内も心付き内侍を傍には置べからず詞と仕草はかはらねど唯一處の跡先になるより此狂言の魂相違せり半二此世にあらはれ出て是を見ば大聲あげて泣なるべしと鶴卯は評せり故に淨瑠璃は木偶にかけて文を演

る歌舞妓は文を次にして我仕勝手の能を先にす古來在來りの淨瑠璃を我一人の才覺にて猥に前後のすべからず一人の思入より狂言の惣崩れとなれば愼しむべき事也去々未年の秋江戸河原崎座にて大塔宮旭鎧の二の切へ蘭奢待の三をきりはめ助市の本名を宇都宮公綱に直し錦升今の松本幸四郎新田義貞を楠正成にして瓢雀脇濱幸内を德太夫に呼かへ大友始萬作楠昔噺の三の切に混じたれど狂言浮きてさせる見處もなかりけり

秋里雛島翁の話

秋里雛島は五條橋下融の大臣が鹽竈の舊跡雛島に住居せしゆゑしか呼ぶとぞ常に人と雜談の時にも麁墨麁紙を持出て聞ごとに是をひかへ譬へ小兒婦女子の咄しにもせよ耳新らしき事は問ひたゞし記さずといふ事なしとぞ天明中貧窮の內にふと都名所圖會六卷を撰出して竹原春朝齋に畫を乞ひしに春朝下畫をかきて與へり雛島書林何某へ持行てちりばめ出板させんと勸るに書林是をよろこばず原より山城名跡誌京羽二重同織留京の水貝原氏の都廻り等有て山水美景は朝夕に見て飽たれば此書出板するとも行なはれまじとて彫刻の心なかりしを雛島の曰足下こそ洛陽長安に住み寺院社祠名所の奇觀は珍らしからねど遠國他邦の人此書を見れば愛で求る者多かるべしと一派の宗門を弘る如く達て發行を勸るに書林も澁々受引て筆工彫刻にかゝりけり畫は春朝に淨書させ雛島は校合にかゝり作料漸貳參圓金也長く著述に苦心をして數多の書籍を引書せし甲斐もなげねど此書世上に弘まりなば望は足りぬと思ひ捨しに全部六卷出板して賣る事夥しく僅の內に數千部摺出し書林は暫しに大利を得たり其上此平安城に名所舊跡いと多し是に漏れたるを拾ふて出せよと買手の方より催促によりこたびは雛島に誂らへければ秋里も面目にて作料何程と極し上引書のむきは書林より運びだしなき書物は穿鑿しても雛島に渡せり都の拾遺成ると早次は大和より五畿內を揃へ六十餘部も彫んと云雛島は餘事を打捨て畫工竹原と筆者をつれ筆墨紙と眼鏡を數葉山水の絶景堂社をうつし取る畫工の具也僕に持たせ着類調度を荷はせる剛力諸共以上五人けふ旅立ていつ歸ると云日數もいとはず大和路さして見物に路用雜費は書林より續送れば不自由もなくいとゝもたのしき旅立なり行先々にも都名所の噂高く埋れし舊地の世に出る事故大地の寺院

は坊に宿り大社は社司を宿として緣起寶物は文庫をひらいて取出して見せ寺社のひらけし年號はもとより社務開基の傳來まで殘る方なく寫すうち色々との饗應にあへり雨中は宿にとゞまりて著述にかゝり竹原は畫の清書して天氣快晴の日は畫圖に合せ國ざかひより界まで縱橫に廻りて殘る所なく書取る時には一度歸國し引書をあさりて成就すれば河內和泉津の國と經歷草稿成れば淨書にかゝり彫刻成れば校合し五畿內都合四十卷此餘伊勢參宮東海道岐蘇街道都林泉等の數編を著し其間々に法橋中和に畫を書せ源平盛衰記保元平治前太平記年代記年中行事まで畫抄を著し生涯安樂に過られしとぞ其後秋里の名所に倣ひ廿四拜順拜圖會播州廻り紀伊の國阿波近江尾張など出板したれど撰者は籬島畫は春朝に限るべし此兩人は名所圖會を世に著さん爲生れしなるべし近來江戶名所圖會出板せり原菊岡沾凉が江戶砂子を題として長谷川氏の畫を交へ齋藤氏の編輯なり夫すら作者三世を經てやうやく滿尾せりと聞寺島良安が輯錄せし和漢三才圖會も三世を經て漸成れりと聞けばかたき哉著述の道其書々々の世に出るも人と時節の廻り合ふなるべし

十返舍が膝栗毛の話

東都にて狂歌流行せしは天明年中より文化の始頃迄也其人々には四方赤良、鹿津部眞顏、唐衣橘洲、平秩東作、朱樂菅江、むりの光、錢屋金持、芍藥亭長根、六樹園飯盛、手柄岡持、問屋酒船、森羅萬象、淺草市人、三陀羅法師、金鷄入道、尙左堂俊滿等連中を組て四方連と云四方と云酒屋あつて菰包の印を太田南畝（杏花園赤良寐惚蜀山人）書れしより四方赤良と云此人詩作に妙を得て皇都の銅脈（珍芬舘など數號あり）を二大家と賞て狂詩の贈答數多あり四方の酒店の井より銅印一顆を汲上たり則文字は巴山人との三字也夫ゆゑ四方連の印に（印）是を押せり自ら四方山人と書詩の力を以て狂歌連に交はり尤書を能す扇子など賴めばおしまず書れ其詩崎陽の來泊人大淸に持返り日本の書を愛する輩見て詩は李白の風ありて日本にもかゝる人ありやと賞四方山人の文字を讀兼て蜀の字ならんと推量し當時大淸の詩人に是程出來る者は珍らし日本の蜀山人は詩と書を善すと賞越したり赤良是を聞て我名の異國まで聞へしをよろこびて其後蜀山人と呼かへ四方連を鹿津部

眞顔に譲る四方の眞顔狂歌堂歌垣と云是也巴山人の印を山東京傳に送る京傳俗姓京屋傳助醒々齋の號有戯作を業として卽  此印を用ゆ爰に又十返舍一九は若かりし時より身持放蕩にて晝夜吉原に通ひて遊廓の癡情を愛る故に女郎も浮氣となり一九に馴染めば餘の客落る彼是の譯ありて大門口にて一九をとゞめ以後廓中へ這入まじとの證文を取り今猶大門口の會所にありと云虚實わかち難けれど夜話に聞しまゝ爰にしるす扨も一九は貧くて仕方なきまゝ京傳方へ行て食客となる京傳小冊の草稿を出して一九にあたへ夫を淸書して書林にもち行小遣ともなすべしと云一九是を淨書して早速書林に持行て僅の料を取つて歸れり此書東海道羇旅の滑稽を書て神田八丁堀とちめんや彌次郎兵衞喜多八が洒落膝栗毛初編一冊是也其頃洒落本の小冊は風來山人福内鬼外平賀源内が六部の書の後櫻川慈悲成が落し噺より京傳馬琴三馬等の作のみにて旅の滑稽はなく傾城買二筋道仕懸文庫の類にして吉原深川の癡情を書或は浮世床浮世風呂のうがちのみなれば膝栗毛の評よくて賣る事甚多し書林は利を得て一九に誂へ二編三編と作させるゆゑ作料自ら高く伊勢參宮にて歸路に及ぶを猶京大坂迄出さんとて旅用を出して一九を登せ歸府して八編の大坂に止る歸路の木曾地はまだはやしと金毘羅より宮島を誂らへる一九浪華より西を知らねば長崎紀行といへる老實の書をもて海陸の里數挿畫は大約是より出し滑稽洒落を書まじへ續膝栗毛とゝなへて岐蘇道中を數編に出せり初編より二三編迄は趣向を惜しまぬがゆゑおかしみ多し後々は能滑稽の筋ありとも次に〳〵と引延すがゆゑ先觸ばかり仰山にて讀ども願をはづす迄なくいとも本意なき事乍滑稽を書し本に是程數編を重ねしはいと珍らし僅三冊の小本を書て後作料は數十金を取れりと云又書林より出すも妙也始京傳の書すてをもらひてより一九の作名は膝栗毛より弘まる其頃是に倣ひて僞作多く出たれ共膝栗毛の右に出る事あたはず曩に云雛島が名所圖會十返舍が膝栗毛同じ日の物語なるべし十返舍が墓碑は東都向ふ島長命寺に有り前書あれども覺えず內損と腎虚を我は願ふ也其百年を生延た上とあり又寛政のすえ霜月晦日名所圖會に名を知られし竹原春朝齋身まかりしを悼て深山樒おしわけひくかめいどづえと大江丸舊國の句あり思ひ出せしま

ま爰にしるす

伽羅先代萩世界の話

先代萩は安永六丁酉四月中の戯場にて奈河龜助作にて始て成る奥州秀衡跡目爭論と角外題に置て世界を伊達友衛（綱宗）にして（酒井）梶原景時に歌右衛門（板倉）秩父重忠に文七（原田）常陸坊海尊爲十郎（安藝）伊達治郎秋衡來助（片倉）泉小治郎親衛文七（朝岡）乳母政岡來助梶原奥方榮御前歌右衛門（松前）松ヶ枝駒之助文七と皆悉く此世界にすえたり谷地の爭ひの場に小治郎親衛の妻と治郎秋衛の妻と夫々の事を云居り夫治郎は氣短ゆゑ伊達の治郎秋衡とはいはひで伊達秋〳〵と申舛とせりふ有又大切對決に海尊負色になれば梶原引とり武さしのにありと聞なる逆水の逆隱れても世をすぐるかな抔と古歌にて紛らす重忠聞て景時殿は適の歌人そこで世上にては梶原殿は歌よみじや歌じや〳〵と譽まするとの詞も有九段續にて誠に名譽の狂言也翌七戌年京都にて竹本春太夫座にて此まゝ淨瑠璃に取立御殿場迄院本出板せり奈河龜助は前編にとて伊賀越を極月二日より出して明る三月末迄打續て此先代萩を四月始つかたより出して六月迄打たり又世界を江州佐々木にして（綱宗）佐々木六角（原田）才原勘解由（安藝）秋塚帶刀（板倉）岩倉主膳（酒井）榮飛驒守（淺岡）淺香（富十郎）（惣嫁場）（倉）片桐小十郎と名をもふけ其後伊達姿萩燕都据歌枕萩舊跡と外題を呼び新狂言成りても世界は大約陸玉川の世界人名を借し物也東都にては世界を應仁記に借りて（綱宗）足利小金吾賴兼（原田）仁木彈正（兵部）大江鬼貫（安藝）渡邊外記左衛門（酒井）山名宗全（松前）荒獅子男之助（板倉）細川勝元として都室町問注所にて對決としたり江戸淨瑠璃には伊達競阿國戯場と表題して累の解脫を取組たり都て江戸にては殘らず京にての狂言ゆゑ高雄は九條の里の傾城とし豆腐屋南禪寺前と云三股川の下ゲ切を宇治川に准らへせりふに京を言て方角けしからぬ道筋也九條の里より高雄丸の船に乘り宇治川へ行歸路浪籍者に出合ひ南禪寺前豆腐屋へ賴兼を預くるなど也其内に日本堤といふ土手の道哲など有て心は江戸也東都は前編に云如く狂言を見ぬ處なればさも有べし文政四巳年中の芝居にて龝花先代名松本とて仁木彈正に松本幸四郎渡邊外記左衛門に工左衛門細川勝元に歌右衛門此對決場は江戸仕組なれば應仁の世界也跡先は佐々木六角もあり奥州秀衡の類葉もあり世界わからず其後一日の仕組なく

色々古狂言を辨へなき輩が寄物にする事なれば御殿にては武將頼朝公より給はるお菓子毒とは何がお毒といひせり上と成り花道へ出る鼠は仁木彈正也荒獅子男之助に對して今川女之助と云有其上へ松が枝敵之助出て對決は鎌倉の問注所にて山名細川が裁斷あり足利頼兼が奥州五十四郡の主となり京の高雄やら江戸の高雄やら是もわからず此世界はよつてかゝつて眞暗と成りたり故人世界を定めて苦心せしもかう仕崩してはため直らず淺猿し近來角の芝居にて慶子五節句を一時にする政岡を二の替りの大切に一場仕けり予春に先代萩と呼ぶも不自由也とて先代萩の若葉と賦したり番附に摺たる外題までに心を附て見る人は稀なるべけれど是も一癖なれば免さるべし其後海老藏中の芝居にて先代萩類聚をし鹽澤丹三郎の場を脚色し事有り江戸には此寫本もあり講釋にても專ら讀事也是に牛井通仙の醫論伊賀越の前簇本騒動によむを書入彈正妹八汐に與六典醫大場道益に毒藥調合をさせ膳番鹽澤丹三郎海老藏に言含家の納りなれば幼君にあたへよと言付歸つて母宮城に文七召使お陸に路之助茶を煎て出す中へ蠅飛入て死したるより母下女を呵り主人に毒な物を呑せて濟かと異見のうち丹三郎我身に思ひ當り彈正には從來の恩義もあれど幼君を毒殺するは不忠なりと書置を殘して毒の入たる膳部をば合點にて我食し切腹して相果ると云場也上田餘齋子が作の秋雨物語に連歌師紹巴高野の玉川に毒有なしを辨ずる條を母の異見にいはせなどして潤色せしが幸ひに其齣評よかり跡先は世界混雜して片腹痛き事もいと多かりし

義經腰越狀院本の話

腰越狀は寶曆四戌年の秋並木永助の作にて五段續なりしを四の口切御差留になり院本も三段目迄出させ奥は絶板と成りけり予以前所持して讀たる事あり二の切目貫師後藤の内へ本田二郎近經頼朝方の軍師にせんと抱へに來る五斗酒樽にもたれ熟醉して心付ず五斗が先妻の子大三郎と云前髪の子をほめそやして養子にせんとて連歸る是五斗を義經方へ味方せぬ樣人質がはりに連て歸る也女房關女は義理ある子の出世を悦び渡せし跡にて五斗に問はれて悔む事あり是ゆゑ三の切覆水再び元へ復らずと大公望の故事を用ひ離緣を悔めど聞入なく娘德女の自害より關女も共

に死んとするを五斗推とめ今死する命を永らへ兄大三郎を取かへし來よと云付る關女鐵砲をひろひ取鎌倉武士は色好み筒と出かけて口藥のどの火ぶたの掛がねもはづゞヽ計の味みを見込みぼんといはする二つ玉やはか氣遣ひ遊ばすなと出行が三の切也是迄は本にもあり淨瑠璃にも語り歌舞妓にもして誰もよく知りたる事乍大約三の口切のみにて二の切もしらぬ人多しよく五斗が樽にもたれて寢たる看板あり是二の切の容也扨四の口鶴が岡八幡へ武將賴朝社參にて供は本田近經也並木の松原に供人賑はしゝ關女は鐵炮を懷中し大三郎に逢はんと旅の婆にて鶴が岡社參と聞もし逢事もやと尋ねより供の奴に聞く所奴共は關女を口說んと營中の事をさもよく知りたる樣に云然らば本田殿の身うちより大三郎といふ美少年は賴朝公の近習小姓を勤め居るかと問ふに居ると云連ていてあはせくれと云に迷惑して賴朝公の御氣にさはりとくお手討成りしと僞る關女悲しんで義理ある我子を死しては立歸つても言譯なし我子の敵は賴朝也とて懷鐵炮取出して還御の輿へどふと討是則空輿にて本田近經曲者を吟味するに關女をつれて突出すゆゑ近經見るより扨と思ひ關女に繩かけ我預かり館へかへるが四の口也此場に察度の入りしなるべし四の切本田の館にて近經に獨の娘有り兼ては大三郎とめ合せ本田の跡目母親が娘にいふてよろこばせけふ久久にて御前より大三郎をつれ歸ると噂半へ主近經大三郎を連立出大三郎に役付させる手始にかの鐵炮をうちたる女の詮議をさせんと言付る母も娘も共々に勇み進む所へ今日の詮議の橫目に梶原平次來つて兼て娘に執心なれば大三郎は若輩なれば此景高が詮議せんといつもの憎てい近經女を引出せと差圖にハッと近經懸り關女に繩かけ立出る關女は始終白狀せず空輿と聞しより狂氣と成りて夢現大三郎は白狀させんとしもとを取て庭に飛下り女を見れば義理の母關女も我子の無事な顏詠めて忽狂氣も雙方悔りしながらもうかつになのれぬ親子の案じ梶原は猶豫をとがめ近經は關女に向ひ大三郎の問狀には白狀せずば成まひとかせを掛たる手詰の場所討ば不孝討ねば主君へ不忠となり當惑したるを近經は夫と悟つてヲヽそれよ今日は御先祖義朝公の御忌日なれば拷問は重ねてと關女をば獄屋へ引かせ皆々引連入る跡に大三郎

は義理ある母何ゆゑ武將へ敵たいしぞ預り人は今の親何れを何れと分兼て涙に暮る奥の間より大三郎に暇を與る着替調度の入たる葛籠持て都へ歸るべしと葛籠を置て妙婢氣の毒さうに入るあとへ梶原出てせゝら笑ひ惡口云て立歸る大三郎は合點ゆかず葛籠ひらけば中には關女絶て久しき對面に我子の敵と思ひ詰鐵炮うちしと身の懺悔親子手に手を取合ふて歎きの內に奥より人音關女をもとの葛籠へ入れ涙を拭ふ其所へ近經夫婦娘も立出其葛籠を負ふて都へ歸り改めて東へ下らば其時こそはもとの親子此娘とも夫婦ぞと恩と情にからまれて父とはたとへ敵方なりとも賴朝公の御咏方再歸り來る迄は暫しの暇と泣々も葛籠背負ふて近經にわかれ出るが段切也四の切させる見所なけれど全く口の鐵炮より御差留とは成たる也是ゆゑ本も三迄出全本甚稀なるもの也今娘景清の四の卷に三の口切を綴入れあり尤世界は源平なれども眞田和泉の三郎後藤五斗兵衞を書たる物を景清と混ずる時は意合ず關女は何國へ行やらん覺束なき狂言とは成けり是も世に出ぬ時節なるべし

岩井風呂人殺の實說

大坂道頓堀太左衞門橋北詰岩井風呂と云女郎屋有主の名利兵衞と呼抱への白人四五人有中に富と云るおし立容貌よく相應に花數賣つて此家の立者なりしが爰に佐助と云者有是は岩井風呂女房の爲には甥にて泉州堺の者なりしが若氣の至り身もちあしく親一門に見限られ身を寄る方もなかりしを此利兵衞男氣の者なれば佐助にとくと異見を加へしかば佐助も寄る方なき難儀の身なれば以後は心を入替嗜み可申よし申により然らば我家へ來られよと呼寄召遣ひ同前にして匿ひ置けるが始の程は諸事精出してよかりしに燃杭に火の習ひいつとなく邪魔にさへならずばと見遁して末々は妻合せもすべしと了簡付れば色情の習ひ終には我を忘れ口說の言上りに門中にて敵き合大聲上て互ひに言ひ爭ひける事度々なれば聞人終に言ひ廣めて里中取々の沙汰と成れり是に依て富に馴染の客は皆々落ければ利兵衞夫婦大に困り內々にて意見すれど中々聞入ざる體ゆゑ持餘し所詮此儘おかばいかなる事や仕出さんと先佐助を堺へ戻しけれ共佐助は中々堺に立寄るべき方なければ其儘道頓堀邊に立歸り爰彼所に立寄居て何卒富に出合ていかにもせ

んと髪結の手間取抔して日を送り居ける扨また富には段々異見を加へければ合點して始終は詰らぬ事と思ひ廻し止る心も出來しとぞ然し世上の評判高くその上佐助が附廻す樣子聞えければ迚も客はなく又いかなる事を仕出さんも覺束なく此上は何れへなりと仕代にやらんと相談最中なりしが佐助は立寄方もなきゆゑいきどほり居けるうへ佐助に思ひ切せんため今は富も心を改めもはや佐助が事は思ひ切しと手を廻しいはせければ佐助いよ〳〵いきどほり何卒して富に出合諸共に死んと思ひ定めけれども岩井風呂には此事を恐れて最早京都へ登せしとて奥深く隱し置常の人にも逢さゝりしゆゑ徒に日を送りけれ共富はまだ何方へも仕代られず隱しある樣子をしり佐助は出刀庖丁を手拭に包み隱し持頃は明和五子年八月廿二日暮方過に岩井風呂へ來りければ利兵衞女房臺所に居ける故佐助庭に手をつかへ私自分此家へ參るべき筈は無御座候へども今にては頓と致方無之候ゆゑ今晩より京都へ登り申候夫に付恥かしき事に候得共何卒富に一寸逢度御情に御逢し下さるべしと願ひけるに女房大に立腹して夫利兵衞には我に緣ある其方故義理を立たちよる方もなき身を世話して呼よせ置れしに恩を仇なる不始末奉公人に惡名を付終には內には置れぬ樣に成しは皆其方故夫にまだ富に逢せ吳などゝはどの頰下て來りしと散々に言りけれども只御尤申べき詞も無御座候へ共御情に富に逢せ下されとひたすら手をつかへ申ければ主利兵衞奥より立出女房を奥へやり佐助に云樣何程我が富に逢たうても富は京へ登し爰には居ぬ早う歸れといひけれどもいや左樣仰られても富はまだこなたにおりますどうぞ逢して下さりませと申ける時八方の燈し火ほの暗くなりしゆゑ佐助は顏を隱さん爲八方の下につくばひ居たり利兵衞は佐助をねめつけ聲あらゝげ此方には居ぬといふに無體の言ぶん逢せたうても居ぬわいやいと云つゝ立て八方の灯を掻立る所を下より佐助隱し持たる出刀を持て逢す事がならずんばかうじやと云樣胸板へ深く突込しかば利兵衞たまらず其儘に倒れける內に居合す廻しの彌助といふ者是はと飛つく所を同じく突れて倒れふす時に武兵衞といふ出入の男表より來かゝりて此體を見て佐助が後より抱とめるを後さまに突ければ同じく胸をゑたゝかにつか

れ息絶たり其間に利兵衛起上り庭へ飛おりとらへんとせしに佐助は早くも表へ走り出彼出及を我咽へ突込けれども三人に手を負せ心轉動して咽の所々は疵だらけに成て大道をのたくり廻りて苦しみけり其内邊り近所より立寄その騒動いはん方なし扨御檢使も相濟佐助はその夜の曉方に死し利兵衛武兵衛にも手疵養生療治しけれど叶はずして利兵衛は翌日死し二人も養生叶はず死しにける芝居にて直に取組しは前編並木正三が傳に委しければ爰に略す宿無團七時雨傘と外題して今嘉永己酉年迄八十有二年になれど廢らず出て興行の度評よき狂言也さまで見所もなけれど所謂素人好のよきと思はる世界は夏祭の團七堺の者なるゆゑ佐助を團七茂兵衛とし利兵衛を治助彌助を久七武兵衛を佐兵衛と呼かへ八月末より始し狂言なれど今に帷子單物にてする狂言を時雨の傘はいかゞして賦しかいといぶかし今淨瑠璃にも愛想盡しの內を語れども卑陋にして聽れず予弘化四年未の春東都へ行たる跡京都にて此狂言を出し並木正三の役を西澤一鳳として國太郎三五郎狂言の筋を相談に來る所市川高麗藏中村梅花直々の役にて來る成田屋一鳳身ぶり聲色にてせしよし番附東都へ送らる是らも一時の戲れなり（此番附の寫し略す）

女郎富再び情死の實說

扨又富はその明る月九月になりて京都へ仕代られ登りける則內野新地五番町龜長と云茶屋に來り勤しに何が評判ある女郎ゆゑおし立もよければ日々の箏客絶る間なく二ヶ月程は全盛なりしが此界の習ひ翠帳紅閨に枕並べし妹脊もいつの間にかは隔つらんと例の箏客も掃仕舞馴染の客もそれ〴〵に出來たれ共緣の切めは錢のきれめ繁々通ふ跡は詰らぬだらけにて馴染の客の足が止ればまた出來又預らるゝなど兎や角して女郎は借錢拵へ客に無心いふて渡るが大體常也夫が中に蛭子屋某店の手代彼富に深く通ひしがある時富いふは其許樣繁々御通ひ下されかく馴染に相成嬉しく存候へば私命はそな樣へ差上居候何卒一所に死んで下されずやと云にかの手代商賣柄とて誰にもかくはいふぞとそこ〳〵にあしらひ其夜は歸り又一兩日過て呼向へしに初の如く一所に死たい死でくれぬか兎角死たひ〳〵と實心に云顏何となく物凄く色々欺して宿にかへりしが餘り恐しさに其後は頓

と通はざりけるか樣に死神の付しもかれゆゑ非業に死せし四人の恨ならんか扨も初冬も過霜月頃になりしかば初入込の時に引かへひつしと淋しく成ぬ爰に一條千本西に帶屋喜七といふ有て頃は霜月上旬の事なりしが町內に振舞事有て他に參會す終日飮酒にもてなされ夜に入て歸るさ酒機嫌の若輩同志五番町へ立寄り銘々女郎を呼迎へける是因果の始り也かの富を呼むかへし喜七は卅歲に滿ざる美男なれば富殊の外悅び眞實を盡してもてなしける旣に友達は打連歸らんと云に是非なく別れ歸りしかども富が實心忘れ難く翌日又彼處に行て富を呼迎へければ昨日より猶又面白く可愛がり近所の事なれば日々夜々に通ひ詰たり尤喜七に老母又妻子あれども打捨かく膠漆の中となれば朝每に富風呂屋へ行も時刻を合せ置一所に入などその餘は推して知るべし然れども錢財限りありその上喜七內證もとより豐なるにもあらざれば今は諺の錢の切目と成りしかば富は樣々工面して馴染の客はいふに及ばず一見客に迄無心を言ひ我あたまの挿物迄皆質物に入成だけ借錢拵明る年二月迄介抱して續けれども男も女郎も義理の借錢だらけに成り今は死より外あらじと互ひに心を定めて郡が淵へ身を投相對死をぞしたりける爰に奇なるは其夜喜七富かの淵に走り付富の帶を半引明綿をぬき兩端へ石を拾ひ入是にて二人の身をぐる〳〵卷にして其上喜七が褌にてしかと結びとめたり是二人一所に沈み浮上らぬ爲とぞ如此不工面なる形りゆゑ淵へはまるも思ふ儘にはなり難く岸の杭に額當り一寸餘打破り死し居たり是に依て檢使も隙入り一條町內年寄五人組その外過半かの所へ至り町內にるすとして殘り居しは若き輩兩三人のみ也其中に布屋何某と云有是は喜七が朋友にして年も同輩にて至て親友なりしが此日夜に入れど町衆一人も歸り來らず旣に夜半過る比にもなりしかば布や某炬燵に寄り掛り睡り居たる所夢共現ともなくふと面をあふむけ見れば顯然としてかの喜七立居たりその形色靑ざめ眼釣り上り額に一寸餘の疵より鮮血を流し無言にて立居けり何某驚き其方は非業に死せしと聞しが無事に歸りしやと言けれ共半句も答へなくひよろ〳〵とし表をさして出ると思へば夢さめぬ何某ふしぎに思ひとかくする內組頭屋根七といふ人歸れり何某落着を問ふに大體相濟候ゆ

ゑ先しらせの爲我計り歸れりやがて皆々歸るべしと云何某又問ふ喜七が額に是々の疵無やと云に屋根七大に驚き我より先へ歸る人無に如何して知れりや其通りの疵ありと云に彼喜七が亡靈まざ〳〵來る樣子を語り初て身の毛いよ立しと也二人の死骸は六波羅野南無地藏と云へ打込れしかど親類より石碑を拵へ今北野下の森下る西側にありと予以前京都に遊びし頃是を聞けり讃佛乘後編に書置たれど岩井風呂に因ある說なれば爰にしるす拾遺にのするお半長右衞門の前生お勘長三郎など作りもふくる程ならば岩井風呂の後日も雙紙ものに出そうなるもの也

慶子紅桔梗女圍七の話

役者五雜俎（拾遺に云七部の書より五部を出）の中に往々女形の心得を書たる物多し古名人の女形姬君あるいは娘などの役をする時には先書拔をとつて能々熟覽して夫より書拔を消し成たけ詞を少くして勤ると云婦人の詞多きは愛を失ふとのたしなみ也年增の世話女房にても亭主の用を助けるを旨として詞多きは嫌ひしゆゑ適淨瑠璃にも嫗山姥の八重桐廓話の場をしやべりと云傾城反魂香大門口の場のお宮物草太郎町盡しの段の葛城是皆しやべりと唱へて其頃は珍らしかりし物也先の慶子所作を善くし口跡あざやかなりしより此しやべり役を歌舞妓に取立勤し也天和貞享の頃は西鶴文流等が演たるごとく男色大に流行して女色を今世の如く歡ざるゆゑ婦女は至て內端めにて有し物を男色廢してより婦人の勢廣大無邊と也今は總一體女のしやべりと成りて八重桐（もと傾城）お宮（もと傾城遠山）葛城（山三女房もと傾城）皆それしやの果にて盛はとくに過て色氣捨たる役なれば心のまゝにしやべらせる也今は姬君でも娘御でも裏屋住の女房嚊に負ず劣ずゑやべる事常と成り詞少きを馬鹿か病人の如くおしらふ時節なれば狂言の外題男哉女鳴神又男哉女將門と立役でしては珍らしからぬ女形にさせて謂ば後家茶屋とて亭主のある靑樓より流行しに倣ふ爰に今の慶子（始市川十太郎弟子三光となり市川熊太郎と云）松江とかへ三都を修行して功を經富十郎と大名を受繼同輩の女形は皆故人と成つて所謂無盡の流込をとり右に云男は有てなきがごとく女でなくては夜が明ぬと云時節ゆゑ人氣にかなへり天保七申年予は八犬傳の著作すみて後暑中に思ひ付て女圍七富十郎女一寸壽太郎にて夏祭浪花鑑の後日を仕組めり稿なつて

兩人に讀し所早速納まり七月上旬より北の新地芝居にて興行せり前は五節句の政岡を題とすえ跡先先代萩のよせ物にて（萩の染小袖梅の縫衣裳）伊達姿吾妻寫繪切は一寸縞の媚容者戀には世話を燒鐵と釣船ならぬ土舟の三ぶが好に織替て紅色桔梗女團七仲居おかち富十郎大鳥嵯峨右衞門新九郎助松靱負延三郎玉島磯之丞權十郎伯人琴浦勇次郎魚仲買彌市歌十郎土舟三ぶお梶母お熊市藏お辰坂壽珍らしかりしか大入大繁昌しけり慶子是より何にても女の狂言にして仕度のぞみ發れり往古の女鉢木にても北條時賴記と外題していはば大切所作がゝり也近來江戸岩井半四郎の女清玄も隅田川花御所染と題しておやま（江戸では若女形を云）一通りより杜若は替りし造りをせず殊に器量よき女形に靑坊主いがぐりをさせるが故狂言の善惡はいはずとも歡べし（拾遺に云璃寬熊谷のつくり搭と同事也）いかに女を愛る世の中なりともそう度々見せる時は見おとりせらるべしと捨置けるが同九戌年の秋堀江市の側芝居にて女猿曳閙諷を書同十亥年の春女五右衞門を著せども外題はけいせい濱の眞砂とせり都て女形座頭なれば鎌倉時代の尼將軍の勢ひ有て一座の役者も上べには屈伏すれど蔭では誣者も多かりけり女と云狂言度々出るはうるさきゆゑ同年五月天滿天神奉納芝居に葉越廼月女熊坂二場を仕組て坂壽にさせ其後丗年東都へ行寅年歸りし所秋忠臣藏の世界と納り以前組太夫（藍玉）らと歌舞妓打交折士鑑堂島の段と記せし五行大字の床本一冊を見せ是に跡先を掎なばよからんと予に見せし事あり是は此場一段ものにて前後いかなる筋あるかわからず予前後を著編し置たるを出し天滿天神より鍋島船入橋を口として堂島貧家の場題に居矢當茂七に多見藏うどんや與三兵衞に工左衞門娘お梅に富十郎外題に義士の大石摺貞女のかな手本紅楓いろは文庫と賦し二度の淸書平右衞門注進の場を書かへんと著作にかゝる慶子女由良之助をして見たき由責て止ず此者に此病ひ有と仕かたなく望にまかせ先一力の場河原にて大文字の送り火などのうがちを趣向として書あたへぬ初日出て評を聞ばお石紫の羽織を着てめんない衞にて出るを女醫者也との見立尤なるかな原狂言綺語なればいかなる事も書れぬとにはあらねど嘗原の丞相と由良之助ばかりは女にては筆立ず魂なくては狂言になるべからずされども溫飩屋の場評よくて相應に

入けり其多舞臺出勤差とめられ長く預となりし内見舞に行て狂言の咄に及ぶ予戯れに曰先の女團七より出たる趣向あり女髪結にて色男の茂兵衛我童か延三郎也せかれて逢さぬから正三の内へゆく正三女房瑠光にて正三るす中へ役者相談に來て思はくを女房に誂らへて歸る此内女房お富（女髪結）に髪を透せる事有て跡が髪すきの獨吟近所の子供がさらへる體文句あはせ意見になりすべて岩井ぶろをうつむけたらんにはおかしかるべしと云慶子笑つて夫もよからん抔はなせし事ありしに翌年泉州堺へ拂ひと成りけり予も一兩度見舞に行て戯れに云たる女團七の身のうへになりたる事を思ひ出書狀のはしに堺へと富は仕かへにやられけり乾く間もなき時雨傘と書送りし事も有けり慶子は常々儉約をなし俳優者流には似ず奢侈僭上はなきとおもへど歌舞妓道にて富十郎慶子といへば神とも佛とも敬ふべき名にて同じ中村にても慶子の中村と加賀屋の中村とは異なり梅玉歿前此道の老ぺたる故進めて野鹽が娘（先慶子の孫老婆なり）を養ひて大名を受繼其名によつて出藍の譽高く其名によつてかゝるとがめも蒙りたるは塞翁が馬とや云べきか實は其名は負たるなるべし

西澤文庫傳奇作書殘編中の卷終

西澤文庫傳奇作書殘編下の巻

目次

一歌舞妓道中圖繪
一故人役者舊跡鑑
一歌舞妓道中道しるべ
一忍ばずにて作者咄初の一話
一碁太平記白石噺の說
一脚色に筆拍子と云話
一筆拍子七草薺囃子の話
一花菖蒲いろは連歌の話
一同四十七段返しの段書
一市村家橘忠臣藏所作の事
一四季寫土佐畵拙の文談
一男哉婦將門勢田の橋の文
一富本常盤津外題角力
一謠曲狂言釣狐尾花褄(結局)
凡十四條

歌舞妓道中圖繪

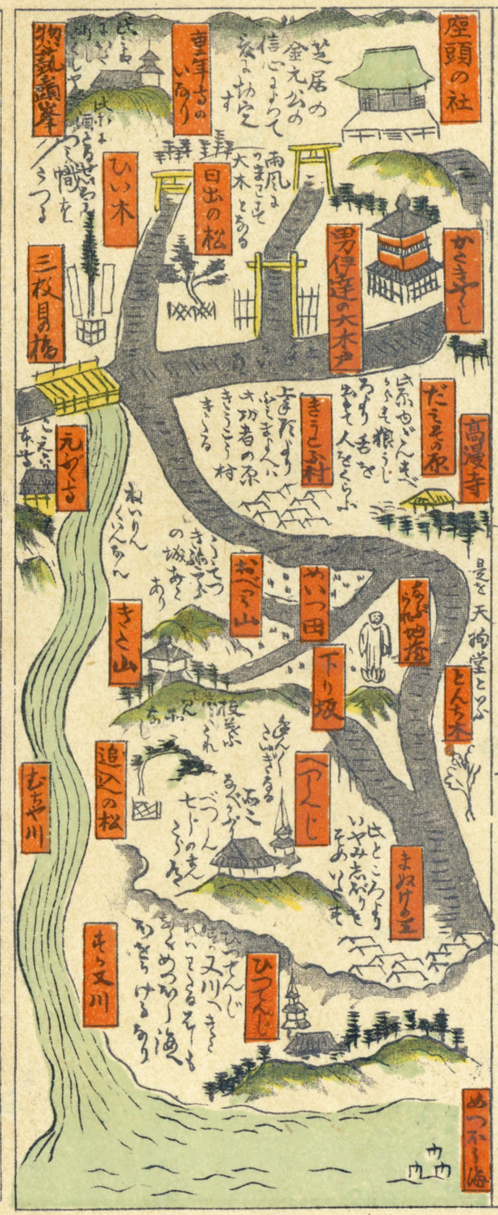
立川談笑樓焉馬戯編

喜多川月麿圖畫

故人市川海老蔵沢村宗十郎のあと子ども有妓衒氣とりふりを戯よ似りしをお代目白猿君ひもし陸者して子が許る踊りて有りを出肆衆星閣の雪と刻しそを補ひ桜木と花を咲せ初春のためとなる







傳奇作書殘編下の巻

西澤一鳳軒李叟著

故人役者舊跡鑑

抑歌舞妓の始りは天照大神天の石窟に入給ひ磐戸をとぢて幽居故に六合の內常闇となる時に猿女の君の遠祖天の鈿女の命則手に茅纏の矟を指石窟の前に立て巧に俳優す此時天照大神聞し召て宣いかんぞ天のうすめのみこと斯のごとく嘻樂するやとの給ひて則いわ戸を少明これを窺し給ふ是ぞ歌舞妓の根元なり年ふり代々おしうつりて永祿年中出雲の於國これをまなびしより京都大阪に興行す今京都においては寛永元きのへ子年中村勘三郎始同十一甲戌年市村羽左衛門始萬治三庚子年森田勘彌始る是を三座大權現とて芝居を守るに毎年霜月朔日顔見世の人事有左右に名人の瀧上手の瀧の流れたえず無類の峯は惣藝頭の山に並ぶ座頭の祖といふは往古元祖市川團十郎才牛上人こゝに俳優の神を安置す二世栢莚上人澤村訥子を別當社職の始といふ○市川寺の寶物もまた有中に景清が車のかづら暫の大太刀はおんてき退散の筒守となり助六が鉢卷にあくたいの卷物外郎賣のせりふに錢こまがはだしで逃る鬼もこはがる鐘馗の畫像關羽が青龍刀祐經が對面の盃時宗が鏃灸寺がけぬきは忍びの者をあらはし大鷲文吾が大槌は義士のかゝみと殘る伴左衛門が雲に稻妻鳴神上人の柄香爐五世口上辯の入道はらの白猿に傳り愛敬の守を出す門下に中車新車の二の車あり何れも女のひける車にて音は世界に五郎〳〵とひゞき今に其名のこる本尊成田屋不動明王あゝつがもない靈驗鼻高にまします○澤村の訥子寺は助高や高助の建立なり寶物には平相國清盛の扇油賣の柄拘齋藤道三よりの傳來安倍の清明が算木梅の由兵衛が頭巾に錠をおろし重忠が双六盤に四三をさとる衛の紙衣は祐成が大磯通ひ名產はこぶに山椒ハテいふてもいはいでもの事ハレやくたいもなまるひの錆刀は由良の助が名作忠臣藏のはじめ也○坂東の舊跡は薪水寺に大岸宮內が忠臣こがねの短冊あり日本武者之助が鶴の丸の鍔は代々ゆづりのき

ん鐵也○また坂東の平久寺に獨銀のごときもん有り朝いなの三郎の古跡夫より別れて坂東の三大寺は是業法師浪速より始て下り森田に賴朝堂を安置す又市村に長七唱の舊跡小栗太郎が茶臼梅津のかもん宿長作が晒布名所今にのこる○松本の男女川に鬼王新左衛門の舊跡それより道五粒ほど行て佐々木嚴流寺の元祖後に市川寺へ入院して四世木場の親玉上人といふ景清牢破りの尊像岩窟の五郎藏五大三郎の古跡今の世まで名高し○それより松本の錦江法師の開基ふくせい寺といふ有難波のかしくといふ女に敎化ありし所幡隨長兵衛といふ男達の住しあと有薮鶯を友として百文が米をもとめて白水を流せし所高麗屋島とも云○河津俣野が角力の跡は大谷より十町程ゆきて魚らくらかんの堂あり○坂田のさんきやうに髭の伊久の塚あり△中島の天幸寺に時平の目玉あり甚だ光る△道外方の名所は和光院に辻法印の古跡諸藝指南所名物かのこ餅今にあり○中村の秀鶴寺は縞の財布のしま黃金五十兩の金佛にて定くらうほぞんとも申なり又大日坊といふあく僧煩惱の迷ひに靈魂忍ぶ賣と顯はれ影の身だといふは是より始る○四紅葉の名所は市川のながれ瀧の谷のほとりにいなり九藏の社あり又やねこぞふといふ團三郎の古跡なり○市川寺六世三升ほつし廿一歲にて座頭となる橫川の覺範の像相摸次郎時ゆき日本廻國の笈佛あり○嵐山眠獅上人は吾妻へ下り白猿にたいし叶升の紋を立る扇の手より五右衛門のあたり六歌仙の里逆櫓の松蔦の細道名所多し淨心寺に塚あり石面に辭世をのこす「東風にちるなにはの梅に鶯のほうほけ經の聲のみぞきく○驪の團藏寺は元祖より二世市紅上人の開基猪の早太が眞向の如來大伴黑主やつしの像をのこす三世市紅忠臣藏を立是より七役始る知盛が長刀俊寬が島物語の舊跡あり○抑太夫山おやま寺は開基路考大師瀨川の水上において百万遍の所作をくり石橋を渡り獅子の座に直り給ひし始なり無間の手水鉢に鐘をなぞらへ拵拘を持て打給ふに忽黃金の花ふりける始なり八百屋お七の古跡あり其のち仙魚禪尼王子稻荷のかんとくを得て一子を育成長して二世路考上人是なり中村において田舍娘の踊りを始る業平吾妻下りの御影をのこす○芳澤のあやめの名所に一鳳國師の中村の慶子禪師道成寺を建立してより末世の衆生に是を

のこす其外かぶき堂に此人々の名所古跡あまたあり
○松本の里より岩井の水わき出て杜若の名所あり三浦のあげ巻三ヶ月お仙が古跡世の人しる所なり○夫より小佐川に巨撰山じげい寺月さよの里おのえが古跡をのこす役者の舊跡其數多ければ其一つ二つをしるす小紙にあらはす事をえざれば後編に述るといふ

歌舞妓道中道しるべ

まづはやし町よりむかうに見ゆる山はばんたち山とてめでたき山なりこなたに千載山とて若松のはやし枝をならべ白きは翁草黒きは尉とて是をさんば草と云皷が瀧の流れとう〳〵たらりとしからす飛の岩鈴のみねの松風壽をうたふ名所なり扨はやしまちの名所音曲道中淨瑠璃の名所表の繪圖にくわしければ爰にもらす○扨又こなたに三味せん堀くわりん堂杵屋の宿是より音曲街道の道筋をしるす△とこ山の麓にもとゞりの觀音堂あり後に巻立さうけまさかりつゝこみ茶筌大銀杏ゑんでん百日しつちうこうさい摺はがし島田勝山三兵庫忍ぶ髷三づと當世はぶたい様々の草木しげる是をかづらき山とも申なり△幕ひ木といふ木のもと道具直し岩臺おどり臺切穴まがきの名所あり諸鳥のこゑトヒヨ〳〵となく闇の夜の黒まく日覆の月にだんまりの顔見世又紅ひの花をちらせば三角の雪を降らす四季折々の詠は作者のはらより出たり爰に後見堂といふありてさゆを汲差出しの如來とて日暮よりかん寺に安置す本地は燭臺せいし菩薩靈驗新にして夜に入れば龍燈をあぐる事晝の如し○歌舞妓出世かい道はまづ稻荷町より序開の門に入りて花道にかゝり此中程に大音寺といふありこゝを申あげ村といふ夫より板おろしの關をこしおした山荒しやば不動の堂ありその上をおかしら山ともいふ口上の披露役者かへ名の次第をよみし處なり是を過てくらやみ峠杉たち宙返りといへる嶮岨を越してぎばの妙見へまいりそれより三階の峯に登る上り口に女人禁制の札あり又猿がへり跡がへりといふ難所を修行して合中の立山に至りやがて評ばんの辻に出る爰に身上石とて百兩よりだん〳〵おもき石いくらも有若き役者此石をもちて身分の力をまし出精して三枚目の橋へ出ると白猿の道の記にもあり○役者建物子供は親船の地藏堂よりおどりそめ若君の宮千歳山をこへ元服寺爰にこえがわりの彌陀といふあり信心

して程なく評判の辻へいで三枚目の橋にいたる○三枚目の橋にかゝれば左の方にひの木といふ大木あり枝葉せかいにかんばしく日の出の松は次第にさかへて重年寺の稲荷より座頭の社へ近道あり又和實の里男達の大木戸敵やくしの堂より登る道もあり脇道に赴く時は功者の原へ出る此所月雪の詠ばかりにて花はなし又舊功村へかゝれば駄味噌の原へ出る事あり此所狼出て後より舌を出して人をくふ油斷すべからず是より下の道へ迷へばかたはらいたき所に高慢寺といふ寺あり俗に天狗堂と云夫よりめいつ田といふたんぼを行過てよほどきた山寺あり本尊ねいりん觀音下り坂にはなぶられ地藏とんち木といふおかしな大木ありおひ込の松は腰をかゞめおべつか山にはうそつき彌太郎の城跡あり是より東西を失ふ事あれば間ぬけの里とていやみ絞りを染いだす所にうろたへゆけばへんしん寺といふあり是は昔鍋かむりへつしん七字の曼陀羅をのこす所むちや川の流れにはひつ天寺といふ寺あり此所のかね久しくたいてんして人々に金のくにうをたのむといへどもちう夜に限らずあまたの怨靈來りて恐ろし爰に出てすかまた川のほとりに來り滅法海へ帆をかける恐るべし愼べし○太夫山おやま寺は本尊金箱地藏と申なり此道筋は色子の濱といふより若衆潟袖ふる山に登り小詰の森にさしかゝり花笠の社は正月元日翁ぞめおどりを行ふ事吉例なりそれより腰元の藥師堂へゆく此道人の詠もなくはかどらずやう〳〵まだる木橋へ來り是を越て三立目村へいでたち下姫が井戸ぬれ事の里愛敬稲荷を信心して開運出世を願ひ櫓下にその名をあげる七化の地藏は大入村にあり有がたい野といふ原是はおどりの判官馬具を乘りし所といふ同じく譽池にはその筈の辨財天を安置す世話琴の里自藝房といふは時代と世話を鷄合ありし所なり道成寺を過て石橋を渡り所作山に登りお山寺にいたる○もしまだるき橋をふみちがへはづかしの森へ出ればいやらし川きざ橋を渡り淋しい野へ出る此所に春は花さく事あれどもよいとも惡ひともいはず此名をうにや櫻といふなり夫よりわる口村にかゝれば木生ひ茂りてやかましき風吹昔は半疊をうちこみしが今は糟をくはせる所多し下の道へゆけば大根畠あまたあり是より田舍道にふみまよへば立身出世おそし信心をこたるべから

す衆星閣梓

忍ばずにて作者咄初の話

曩に云戯場世界定すむと建作二枚目三枚目と打寄銘銘場割をして誰それはいくつ目誰はいくつ目と仕組場を定る是を咄しぞめとて建作りの内にて定る事定法なれど狭き家内にて咄しぞめにもあらずと静なる料理屋へ行閑静なる一間をかりて狂言の筋を通し誂らへを言などする事江戸にてはまゝある事なり以前鶴屋南北（始勝俵藏今の祖父也）槌井兵七松井幸三勝井源八などを連て上野より忍ばず辨財天の境内には茶店料理屋軒を並べて座敷へ通れば池の上に建出したれば閑談にはよき場所なれば爰に咄しぞめ然るべしと打揃ひ行く酒飯あつらへ出來る間に仕組を咄し合ふに此頃の役者は坂東三津五郎松本幸四郎岩井半四郎等盛んの頃にて南北の世話狂言時の人氣に叶ひしゆゑ幸四郎の業悪にて亭主三津五郎の前にて杜若の女房を強淫するなど度〳〵出すゆゑ各新奇の工夫に及び膝突合せて小聲になり國俊とか村政の刀はどこで盗んだどうして夫を質にいれた夫こそ大殿を毒殺して近習誰それの科にぬり用金を盗んで女郎買に遣ひなくし夫から寶の刀を奪ひ取贋物を質に入誠の刀はどこそこへ埋めて置してあの女房はサアあの嘆をふずくり出して二度のつとめにかせがせる是で又一もと手とゝは亭主をばらして隨徳寺など酒のみながら後は高らかに咄するゆゑ給仕の女は是を聞勝手へ立て手を叩けども自由に來らずやゝ暫し有て次の間より襖を細目に押明て此場の人數を窺あり又立替つて立聞する有り樣子有げに覺ゆれど座敷の者はこゝろ付ず女共が役者と心得立がわりて覗きに來ると俄に建物役者の氣どりになつたり所體を造りて厭氣をすれど誰も座敷へ來るものなく筋もあら増通つたれば歸つて翌より筆をとらんと先勘定を聞べしと手をうてば一人の大男此座敷へ來て何か言かけふと南北の顔を詠めて扨は此御人數は皆おまへの御仲間でござりますかと始て合點のいたる樣子こちらは何の氣も付ず南北も思ひ出せばまんざらしらぬ顔でもなくアイけふは例の狂言がはり咄しぞめに來ましたがお前は爰の御亭主かと尋にかの者迷惑していや此茶店は女主我等は役を勤る者此頃上州路より名うての盗賊五七人江戸へ入込みしと觸有て諸所を吟味の最中へけふ此内

の客人は銘々屈竟の男にて酒がいはすか惡事のもくろみ世間かまはず咄すゆゑ噂のあるお尋者の盜賊に相違ないと是の內より知らせに依て組のもの共手配りして爰で捕うか出る所をいち〳〵組で捕うかと最前より仲間の評定先一通り尋ねて見んと通つた我等は下地より顏しり合うた芝居のお作者鶴屋南北殿なれば扨は芝居の咄かと今と云今心付き間違とは言ひながら盜賊でもない各にいち〳〵繩をかけんものと合圖をきめしも鵙の嘴扨々ひあひな事かなと汗ぬぐひつゝ詫るにぞこなたは始て心付成程それで一間よりかわり〴〵の足音は役方の衆の見に來たのか扨もあやうき間違ひと始のみたる酒もさめ今一銚子と酒とりよせその男とも呑かはし果は笑うて歸りしとぞ世にあやしき業とて狂言作り程怪しき業も有まじ假初にも大國の大名を亡し十人廿人の人は立處に殺し金銀を自由にし有とあらゆる惡事を書も勸善懲惡の爲なればこそ免してもあれ君子の爲には耻べき業也其內同じ戲場の作にも南北が仕組を眞世話と云てよく當時の人情に合ひしが野鄙なる事甚しく見物後宿へ歸つて主親に對しては話し難き事まゝあり詞は卑く付るとも趣向はいつも高情に作すべき物なり因みに云近世東都より出板せし江戸名所の畫工長谷川氏は水戸橋の景色を摹寫せんとて鰻屋に行て座敷先より庭に下り懷中の紙筆取出し荒增を寫し取ゆる〳〵と酒飯したゝめ宿に歸り淸書にかゝれども今少し見殘したる景色あれば日數十日計も立て又右の鰻屋へ行猶も美景を寫せる內次の間より役人來つて有無をもいはず長谷川氏を召捕けり長谷川氏大に驚き何故あつて繩かくるぞ身に繩かゝる覺なし子細聞んと云ければかの役人の曰其方事先日此內へ來て此傍の勝手を見屆け其夜何某の方へ盜賊に入たるべし翌日種種と詮議せし處其晝一人の客有て川邊に下り立くわしくも忍び入べき所を見屆て歸りし由此家の者の申により外に思ひ當の盜賊もなく汝が業に極まつたり重ねて參らば知らすべしと待もふけたるけふの今我と名乘つて來たるも同前今更陳ずるとて遁しはせじと高聲に詈つたり思ひもよらぬ濡衣に長谷川大に迷惑して我は中々盜賊など働きし覺なし雪旦と云畫工にて此程東都名所圖會出板に付諸所の美景を寫すため懷に紙筆を用意しお茶の水より水戸橋此邊の圖を

書んとて此程爰へ來たれ共一應にては盡す事あたはず夫故猶も眞寫を圖せんと今日また來たつたり此事更に僞りあらず此近邊にて誰彼は我風流の朋友なり爰へ呼寄尋ぬべしと懷中の畫圖を改めさせ委敷言譯せしにより扨は盜賊にてはなかりしかと漸に明りたち無難に繩をゆるされしが世に間違も多しと雖是等は意外の間違なり溪齋英泉畫工一筆庵の主人存生の內予に咄されたり曩に云狂言作者の話初によく似かゝりし一笑話なれば思ひ出るにまかせ爰に誌す風雅の道は是に限らず聞えのあしき事多かり予幼き頃の狂詠に

風流は實に道らくの司なれ
　水雞に朝寢鹿に夜更し

英泉老人にはなし笑ひし事あり此人も去申の七月故人となられむかしがたりとはなりけらし

　　碁太平記白石噺の說

安永九庚子年の春白石噺は江戶淨瑠璃にて興行なる其時の作者連名

第一　堂上地下の主從は繩目に引るゝ大內の鷄合　紀上太郎

第二　仇と誠の朋友は義心に別るゝ一國の首塚　容楊黛

第三　お主と家來の妹脊は相圖に隱るゝ名鏡の奇特　焉烏旭

第四　孝と實義の伯父姪は愁ひに亂るゝ血筋の植付　紀上太郎

第五　娑婆と冥途の聟舅は餘所に見らるゝ一樹の宿賃　紀上太郎

第六　江戶と田舍の姉妹は我身に賣るゝ軍用の品玉　烏亭焉馬

第七　通と野暮との客と客は異見にしらるゝ曾我物語　烏亭焉馬

第八　白と黑との敵味方は位牌に紛るゝ幻術の仇討　三津環

第九　道行□□□□いはぬ色きぬ　紀上太郎

第十　色と情の娘と下女は智略にもつるゝ井出の山吹　紀上太郎

第十一　仁と禮との南北朝は武威顯るゝ和睦の勝閧　紀上太郎

名代薩摩屋小平太座元豐竹新太夫板元春松軒西宮新

六于時天保十三壬寅年三月予東都より歸らんとせし時市川海老藏木挽町河原崎座にて誂らへにより彼地の名殘の作として此白石噺と尾上岩藤草履打とを一狂言に混ぜよと云依て世界を奥州秀衡の役後と立志賀團七を劔澤團七とし百姓與茂作は前の名杉本甚内なり聟谷五郎の本名を根の井の小彌太宇治の常悦誠は清水の冠者義高にて駿河の清水にて成長し父義仲宇治川の武名にかたどり宇治の常悦と云二つめ（江戸にては中通りにて仕舞濟で三建目直に田植なり道具かわつて明神の森常悦海老藏谷五郎九藏本行にては明神の森すんで田植は次なれど轉じるに仕組ありて道具かわつて逆井村段切のノリ南北朝かわつて伊達の大木戸さしかため奥州駒に鞭打て龜割坂に駈登り遠く逃るを遠矢に射立近く勇を蹄にかけ四天王寺の東門に陣所をかまへと云など有て段切まくを引くと直に醫者毒藥を岩藤へ渡さんとの出有て這入る此幕切落して鎌倉清水お先揃へて花やかにの唄にて岩藤海老藏尾上榮三郎行列早拵總出にて此跡へ紫若お初にて出て玄なへ打となり一件這入る順禮歌にて忍ぶ（菊治郎大姫と早替り出て淺草の身賣の筋海老藏（宗六早拵へ抱へて連立這入る跡姫君のお立皆々早替りにて出て岩藤いつものお刀を穢し升たの幕（是本まく也次草履打より道具かわつて常悦園ひにて茶を立る湯氣にて謀反露顯を考へ大勢との立有て道具替つて尾上の部屋より門外烏啼仕返し迄にて幕次まく吉原仲の町（秋俊八代目團七嵐吉鞘當の出に成り伊平次九藏中にわけいり買論の仕舞は天水桶にて月を取る兩人切てかゝる千代能の古歌にてさばく道具かわつて宮城野の部屋出語にて（宮城野榮三郎しのぶ菊二郎曾我物語道具替つて大門口にて姉妹敵討にて脚色成れり名題は

當近江の舊跡に殘桃青塚
名陸奥の名所に殘芭蕉辻
口故擇新清水俳席の榮
前句の趣向は寄武家草履の返報
附句の旨案は寄農家泥土の怨
讐結題の仇討もかよわき婦
女の手爾を葉に能も切たり切字
の働き天晴なるかな忠孝の其
感吟は天下一末世に輝く秀逸の
鏡山

岩藤浪白石

懷紙表裏四番續

東都にて二日にすべき狂言も一日に縮る狂言は添削

によつて屈伸自由なるものなり名題役者心の合ふ時は二三日の稽古にても早く塊る物と云るべし

脚色に筆拍子と云話附七草薺囃の話

我著作道に筆拍子と云るは俳諧の歌仙或は百韻の席にて句者の銘々乘りが來て執筆いまだ前句を認めざるうち次韻附が如く執筆書と吟じるにおはるゝばかり面白き迄に句の附くあり狂言道にてすら〳〵とせりふ付認る內次の詞並ぶ是を筆拍子と云又少しの事心にかゝり早く書上んと心ばかりいらちて書ても書ても讀下す時に語路の運びあしく詞二重になりて行ては歸り〳〵して筆のゑぶる事ありか樣の時には筆をとらず快情の日は近き野邊を逍遙し雨中なれば靑樓柏戶に行て飮食入湯などして心を慰め而して後筆をとれば忽成る筆たつ時には思ひもかけぬ趣向うかみてさまで見所なき場も面白くなり詰らぬ役と思ひこみしもよき役となり俄に役者を取かへて端役を立物にさせる事あり是らを筆拍子と唱へること也天保十亥の春角の芝居にて新狂言けいせい濱眞砂序切南禪寺の山門の場は傾城石川屋眞砂路に慶子女順禮誠は淀町御前に璃光金門五山桐並木五瓶作の山門の如く立役と女形とかわりたる趣向にて禪囃子にて舞臺一面耀上となるを舊冬書つかはし三つ目より末は芝叟の長話瘤の一條を書居たる所へ慶子戲れて此山門の內へチヨボを入れよと云送りぬ原より歌舞妓仕立に書あるを俄にチヨボを書入るはいと心易き樣にて容易に筆は走らぬものなり脚色の卜書役者いろ〳〵の仕草を云なりをチヨボにていはせるなれば役者には仕よく文談跡より書入る時淨瑠璃とはだ〳〵に成りて語りにくゝ聞苦しきものなりよつてチヨボを入んと思ふ時は先の書上たるせりふを捨て改めチヨボ入の心に書時は意一變していひかけのせりふなど自由につかへ返つておかしき文談の出るものなり其時瘤の仕組を捨置て急作に書かへて遣はす其文談に所謂チヨボ駒太夫ぶしなり「九重の櫻に匂ふ山門の甍も花に埋もれて霞たなびく夕間暮南禪寺につく入相の枕にあらぬ檻に身を欹て聞すまし香爐峯の雪ならぬ簾を蒔繪の煙草盆よせてくゆらす煙りさへげに諺に傾城の晝寢ぬ程に思ひ詰願ひ有氣の獨りごと卜かすかに本釣がれ暮六つを打櫻ちら〳〵ちらす上るりの合は床と囃子の打合せ合方禪のつとめ一富十郎春の詠めを價千金とはさもしいたとへ此石川屋眞砂路が爲には詞にも言ひ盡されず日も山の端

に傾て暮の櫻も一入にハテ麗な詠じやなア下略右思ひよりなき枕詞さへ出る時はすら〳〵とつゞくものなり此文を書しは正月九日の夜にて雪夥しく降りやがて夜明放れたれば難波慶子の方へ此正本を送りやる手紙は例の戯れ文章尤正本仕立にして

造り物三間の間鐵眼寺山門の二重目高欄付右山門の兩脇落間にて一面に枯木の梢一面の雪もち屋根雪降りの體前蹴込み霞にて右椽先に富十郎寢間着丹前前に否身箱を置書扱をしらべゐる體木魚入禪の勤の中へ法華拍子木題目太皷を打交道具納る

一富十郎春の座を女形座頭とはかわつた趣向早初日も近付て日に〳〵ふへる我誂らへはて心せわしい事じやなア

ト否身箱にもたれせりふをくる此時トヒヨにて雁一羽口に誂らへの書入をくわへて高欄の前に下がるをきつと見て

ハテ心得ぬ此雁金かの蘇武ならで誰か玉章を傳へしぞト取て見てム、こりや是きのふ日暮に西澤へ遣はしたる誂らへの序切の上るり此雪の夜もいとはずに早出來しかム、是でよしさり乍今つよひ者がちのより合芝居此せり上へ若手の銘々我も〳〵と出ようといふが又立腹かはしらねども追々に書入させあの西澤を戯れに書よわらさいで置べきか

ト立上るチョン〳〵にて鳴物せわしく雪をふらせ段々と此山門をせり上る右山門の石壇のもとに西澤李叟髭ぼう〳〵と延し髷をいがめ蝙蝠羽織にて机をひかへ手あぶりをかゝへ乍硯の筆にて短冊を書居る體鳴物にて道具殘らずせり上げ宜敷納る

一李叟西澤や濱の役者はいふとも世に狂言の種は盡まじ

一富ヤ、なんと

ト雙方顔見合せ上より誂らへの書付をヱイとはうる宙につかんで

一李こりや又外の誂か

一富筆入れ升う

ト雙方こなし宜しく幕

此戯れ書を送りし處慶子直に表具をさせ畫後角の芝居稽古場の見付へ此文をかけ一座に見せて大笑ひをせし事あり右筆拍子の因に云同十二丑の春中の芝居

にてけいせい楊柳櫻に納りしが當時若手役者には役仕足らず三つ目に書入の新場一幕を加ふる冬のうちは脚色にもかゝらで正月二日より筆をとるに島原の福升屋と云揚屋にて入聟門兵衛誠は木津關兵衛中村芝翫けいせい七草誠は關兵衛女房中村富十郎廓の門番喜平治に淺尾工左衛門おかしみは友三文五郎蘭九郎にさせて門番の親父全盛の七草に戀煩らひと見せ誠は親子の名乘りになる（小栗の門番寐ず兵衛による）親仁は七草の殘黨にて夫關兵衛とは仇敵なり依て悋氣に事よせ關兵衛の手にかゝり本心を明すと云場なり芝居よりは急使度々來てうるさき故出來たるだけの草稿をわたせば直に書拔にかゝり後にはいかなる役になるか知ずに稽古にかゝれり結局二三分通を殘して先は早稽古かたまり催促する事噪し六日夕方幕切になつて趣向に盡芝翫に幕を切らす工夫に渡る催促の人數四五人狂言方待居て心せはしく書居る最中隣家には早薺を囃す音聞ゆるふと是に思ひよりて鬼丸慶子は手負なり依て詞に土は土水は水と今ぞ五行に歸す時との筆拍子出たり元より名に呼ぶ七草の鈴な鈴しろ佛の座遠どの土地へ歸參の賜渡らぬ先にその寶をと敵役のかかる抔地口よりせりふ續き俎抔子火箸にて立廻つておめでたう存升と芝翫の關兵衛が幕となり持せかへすと卽座に書拔翌日粥を祝ふ迄に稽古はすつぱり塊りけり是等原よりの腹稿ならず不意に出て不意に成る是則筆拍子なり原より一時の戲墨なれども拍子に乘らでは筆立ずあやしき業もあるもの也

花菖蒲いろは連歌の話

此夏東都にて葺屋町の芝居より好まれて義臣傳の新作にかゝり江戸にていまだ取扱はず珍らしき狂言のみ類聚して勘平の萱野村は廓景色雪の茶湯を題とすえ勘平家橘お輕菊次郎言號お組しうか小寺十內關三早野三左衛門歌右衛門にて脚色し天河屋の場は馬琴の小說稚枝の鳩より潤色して田舍娘お淋菊次郎にて道中の雲助共に手ごめに逢ひ難儀の所を定九郎九藏にて是を助け闇夜なれば顏も見とめず契りを結びて小抔をわたす此儘物わかれせしを五まくめに仕こみ後天河屋下女お淋と云は田舍娘なり住吉三文字屋の場をいつもの一力と見て斧定九郎は山名（京攝にする樂師寺也）の取立にて堺屋敷の留主居と成り天河屋の女房お園ふう）に心をかけ親了竹（菊四郎）をこまづけいろ〳〵にか

せをかけ義松を人質にとりお園にせまるお園是非なく操を破る約束なれり下女のりん是をきゝお園に操を破らさじと闇を幸ひに定九郎と寐るお園はしらず涙ながらに中二階へ上らんとする所へ天河屋義平（飯雀）伊丹屋に振舞有て下男に送られ三文字屋の妻子と連立歸らんとの心にて提灯ともさせ内へ這入る此物音に中二階ははいもうして見越の松より定九郎は下りる義平は提灯の明りにてお園のしどけなきを見てとがむ此時ヱイと定九郎は小柄を打義平消たる提灯を捨て小柄を取上げハテおつうな風が吹たわえと是口幕なり天河屋いろ〳〵狂言あつてとゞは女房を離縁する定九郎連かへつて了竹の内にて床へいるゝお園夫の謎をとき播摩潟の香爐を取かへして定九郎を切害す下女のりん自害して人殺の科をあびる義平かけ付て小柄を見せお淋が以前言かはせしは定九郎也と筋わかり縫之助石堂家へ寶を持參し本地にかへると言が幕以上予が著編なり此時作者まねき一枚出し看板は書六枚より餘計に出さぬを江戸の定めとするに書看板十二枚出し段書四十七段返へしと印せり看板に僞りあるは江戸の戯場の習ひながら餘り仰々敷ければ名題段書を爰にしるす

同四十七段返しの段書

精忠義士銘々傳今まで洩れたる傳をあげて拙なき筆に燕子花趣向も時のはなの色に似たりやにたり　假名手本の字數にあて、四十七段返しに仕候

花菖いろは連歌

い　賤しからぬ築山の鳥　諸侯營中に參衆のだん
ろ　樓閣のうへは霞の花の雲　和歌を吟じて憤りを發るのだん
は　はなに恨の春の山風　奉幣使へ猿樂を饗應のだん
に　にくまるゝ烏の羽音かしましく　執權威を奮つて拜膝を砕くの段
ほ　佛なき世になど生るらん　再び師直高貞を詈るのだん
へ　へつらはぬ祉武士の習ひかや　鹽谷判官切腹のだん
と　ともに住んといひし山里　諸士本國を離散なすのだん
ち　契り置言のは結ぶ草の庵　顔世御前佛門に入るのだん
り　龍の腮の玉のますらを　大星力彌父母に愛敬を盡すのだん
ぬ　抜ばぬけ是ぞ日本の要石　由良之助諸士の心中を試るのだん

る　瑠璃の世界の家づとにせよ　早野三左衛門悴に切腹を勸るのだん
を　をしむべき岩木の枝を折切て　勘平義に依て又に臥すのだん

わ　渉ればぬるむ春の川水　竹森喜太八鳴海宿に難に逢のだん
か　風匂ふ山本寒く梅咲て　大鷲文吾師直が館を窺ふのだん

よ　よる手にさわるさゝ蟹の糸　貞女おりえ計らず夫に廻り合ふの段
た　たまきの書くる事のならざれば　矢間重太郎盗賊の汚名を受るのだん

れ　連理の枝に月の傾く　小浪松が枝を切て貞操をあらはすのだん
そ　染つくせ紅葉むらごのかた時雨　平右衛門が妻身を賣て夫をすくふのだん

つ　罪も報ひもさもあらばあれ　下部權兵衛主を殺さんと謀るの段
ね　寢ぬ夜半に霜の劒のさやま風　斧定九郎お園に戀慕するのだん

な　詠にあはぬ月の長閑さ　茶道三才義士の勇氣を感ずるの段
ら　らうたけき文よむ娘かしづきて　おらんの方師直を諫言するのだん

む　昔床しき人の面影　岡野利太夫聟引手に繪畫を與へるの段
う　烏羽玉の黒髪山の秋の霜　老母唯七が柔弱をせむるのだん

ね　井の端に咲櫻一もと　義平女房敵に操をやぶるのだん
の　長閑さや筧の水のあふれきて　義疵戯れて天井に落書のだん

た　荻のうは風波の立ころ　寺岡平右衛門刀を求めんと願のだん
く　雲は雪月は氷と見ゆるかな　鹽谷壹岐守出立を祝すのだん

や　山の梢の秋しらぬ色　丁稚伊吾浮橋へ艶書を届るの段
ま　松のはに馴る時雨の晴やらで　小寺十内密書を奪かへすのだん

け　烟りもしめる五月雨の空　佐藤與茂七おすはと二世を契るのだん
ふ　降る雨もさのみはもらぬ松の影　堅川甚平雨舍して妻に逢ふのだん

こ　木の葉隱れに秋の澤水　種が島六藏等惡黨を語らふの段
え　えもしれぬ小草花さく山ぢかな　傾城浮橋縫の助の跡をしたふのだん

て　てる程凄き冬の夜の月　近藤源四郎主の用金を奪のだん
あ　足曳の山に臥猪の影見えて　獵師角兵衛過て旅人を害するの段

さ　定かに見えぬ晝の灯火　師直間者を京都へ登すのだん
き　炎すゆる皮切ひとり苦しくて　斧九大夫敵方へ内通するのだん

ゆ　行水遠く梅匂ふ里
め　惠ある春の朝たの日影かな
み　見る目に曇る長月の空
し　白露のとはれぬ袖は恨みにて
ゑ　醉ひさまさんと結ぶ川水
ひ　蜩の啼聲宿す峯の松
も　物思ふ夜半に啼時鳥
せ　瀬も淵もかはるが人の習ひまで
す　末の世迄もかほるたち花

天河屋義平實義を顯はすのだん
千崎彌五郎謀て敵地に忍び入るのだん
野間屋久兵衛孝子を憐むのだん
下女おりん主にかわつて身を捨るのだん
太田了竹惡事に組し切害せらるゝのだん
寺井玄庭東行の供に望むのだん
早野が妻お組剃髪染衣のだん
遊女かる稚子を抱て茅屋にたよるの段
本望を達して諸士凱歌をあぐるの段

綺語堂西澤一鳳作　狂言堂櫻田治助述

市村家橘忠臣藏所作の事

弘化四丁未年三月大切に市村羽左衛門忠臣藏十一段十一役の所作事を勤けり京攝にては歡ばぬものなれど餘り珍らしければ淨瑠璃の文談をしるす出雲が筆の操を歌舞妓の所作に名題もその儘假名手本忠臣藏作者櫻田治助大序直義常盤津文字太夫「八雲たつ出雲」が筆の操を歌舞妓の所作に假の御所源きよき康平のためしを爰に金澤や羽左衛門出「泰平の代の松が岡めでにも御浦片瀬川晉（秦カ）の除福が蓬萊の島も手もとの浦つゞき岩打浪はおのづから妙手を碎く皷の音引糸竹は越殿樂神釋無常戀草の妙なるしらべ面白やはや放生の時刻ぞと往昔源祖の例式を鳥籠一度におしあくれば國に羽を伸す鶴が岡鶴の齡の千代よろづ四方に輝く黃金の短冊虛空遙に二段目引ぬき小二上り涙常盤津「こがれ〳〵て神々さんに無理な御願はあつかわな女子と罰があたろとも思ひそめては夢の間も何のわすれうかほよ鳥たちねどしの言號たのみのしるし取かわし忍ぶに餘るその夜半は心床しと祝言を松にかけたる藤浪の巴の風のふくさものあいた家老の名代をせいもん實に冥加ない粹な御用を梅が枝の咲て一重に嬉しいけれど殿御心は仇櫻思ひ菫に置露の雫に色や增るらん夕顏の閨の扇のなぞの帶解て墨書の末廣う扇車のくる〳〵〳〵と浮たつや谷の戸明て鶯に中を結ぶの月と梅雲のさはりのうやつらやあぢきなやせり「せりつむ胸をおし賤のはしたなしとや岩躑躅奥殿さして三段目饗應の能卒都婆小四段浩元太兵衛「誰か謂水にも町歌也引ぬいて

心有明の櫻うつしてうづまくはかげ唇をはたらかすといにしへ人のからうたに殿の心を慰めんと鎌倉山の八重九重いろ〳〵櫻花かごへ生る人こそ花紅葉佐野のわたりにあらね共まづ冬木より咲そむる梅を切りやはつべき山里の櫻を見れば春毎に心盡して育しを仇に切とるかなしさに「松は元より庭木にて詠となるはむめ櫻「よしそれとても君ゆゑに何かをしまん諸枝を折から一天かき曇り俄に草木鳴動なし鐵炮雨の震動雷電たがみな月とゆふ立のはれ間を爰にたいずみぬ五段目大雷にて花道戸屋にて早がはり角兵衛獅子うたごかき「常盤津「ヲヤ目が覺たしかし夢にはなア富士に鷹どこか似よりの嬉しさは一獅子見たか三角兵衛こいつは仕合せ吉野塗辨當包ときほどきぜり「アヽラあやしやいぶか獅子夢ならでおれが晝餉のめしとりしいでや返報しばしきやつが心を引尾ならヱヽわんのこつた〳〵そんなよは犬じやごんしないアレむく犬ぞえ胴長なお前ゆゑには黑をしてかうしたわんけになつた物手もくれもせで犬ぬるとは何か心に一物がさういやおれもぶちまけてそんなら胸を噛合てさつしてかいなとよりそへばヱヽ畜生めとはおれが事嬉しい中じやないかいな今宵はどこへ息杖にまかせてかけごえホイカゴホイ「旦那御きりやう御如才はなんでものみこみしてこいな「いそぐぞ三まいがつてんだ「あづま駕其間に辨當ひつくわへ行をやらじと追て行七段目花に遊ばいの歌にて茶屋ばの道具廻し有ておかるうた引ぬき旅やつこ清元太八段目兵衛「ふるはみぞれか初時雨けさの出がけに棒ばなで手當りまかせ酒きげん五十三次また爰でなんで沼津に行かりやうものかそりやこそ腹もよし原と口あひまじり來りけるどつこいとまつた水たまりナヽなんだあるけばあるくとまればとまるおれがまねをしやあがる向ふは慥左りきヽあるけばあるく留ればとまるコリャどうじやハヽわかつたかげぼうし旅は道づれ世はふざけとんだ月夜とこむろぶし登り下りのお葛籠馬よ扨も見事な手綱染かいナアヱまご衆のくせか高聲で鈴をたよりに小室ぶし吉田通れば二階からナしかも鹿の子の振袖でふつてふりくる御國入殿の歸りを窓から見たれば臺傘立傘曳馬おかちに若黨草履取錦持コノ合羽籠「アレハサノサコレハサノエイエイ〳〵〳〵うきたつ空も入相の蒲原さしていそぎゆく九段目十段目下女りんでつち伊吾早がはりかけ「常盤津「世をすねて

風雅もしやれも内證のさし合くらぬ佗人の祇園の茶屋にきのふから雪の夜あかし朝戻り太鼓仲居におのくれて庭はほたへの雪こかし當「アイたのみませう〳〵ヲヽ誰さんじやヱ歌「のこへはなじみと思ひつき當「ヱヘンものもふヵタ「どうれは賣詞かいしよなしでも行義よく當「たすきはづして飛で出る昔の奏者今のりんあたり見廻しヲヤ〳〵ム、扨は噂のおきつならとらへて開帳の見せものと欲は微塵もなふ繩の柱合手の狐釣ヵタ「うかそ〳〵信田の森のきついあてずいいざゝらば當「こちらぬ(もカ)まけぬ一穴ヵ「一つ東山今花盛り手に短冊もつてゐる是は何じやと問ふたれば俳諧つく〳〵はいつくつ當「そりやこそ〳〵たぞ當「いゝヵ「いた當「ヲヤ〳〵〳〵狐じやと思ふたらヲヽすかん是いなア今度つかひにお出なら面白い事して見しよといふたぞや旦那の御用は跡にしてさあ〳〵はやうと夕間暮ヵ「下地は好なり御意まかせ當「東西ゝ古めかしうはござりますれどありふれましたる花鳥の働らき怪談の一曲まづは寫し書の始りその爲口上さよ當「三番始りヱイ〳〵〳〵ぶまな拍子の烏飛當「お菊は恨み幽靈のヱヽうらめしい鐵山様情なの心やなア是も何ゆゑ皿ゆゑにヱヽ九枚よヵタ「きやつときなせヵタ「跡は牡丹の石臺の花は一度にようと咲た當「ヲヽそれもよかろヵ「あぶない事よ天へのぼろ〳〵あぶない事よ當「のびてちゞんで氣儘ぶしヵ「わしがちいさいときやお龜といふたがの今は庄屋どんの孫だきねんころねんころねん當「伊吾よ〳〵と呼んでも見たがのかあいよし松はおとさんと寐んころ〳〵ねんおかしらし當「さらば取次してかうと打連てこそはしりゆく十一段目大薩摩にて大鷲源吾夜討の形りかけやをもつて立廻り打出し幕忠臣藏所作事は難作なりされども東都は所作を愛る故年々歳々出し盡ていかようなる事をするやらんと見物多く打續けり

四季寫土佐畵拙の文談

同年冬顔見世小團次所作の七役をするに浪花にてせし歌淨瑠璃ども東都の口にあはず文句覺えしものもなく予に書くれとの事なり依て又出る儘に書付やる龍女は土間の上より燈籠吊下し大約浪花の通りなり歌「わだつみのたつの都の殿造り珊瑚の柱瑪瑙の瓦宮殿樓閣ぎゝとしていはんかたなきけしきかな

燈籠ひらく「爰に八大龍王のまな娘乙姫君と聞しば柳の眉に桃の媚錦しう羅綾を身にまとひ八重の褥に座し給ふ御ありさまぞ艶しけれ合その戀人は故里の丹波の國の水の江を忍びかねつゝ出行てたよりなければ蜃氣樓合そなたの空も雲霧も浪もひとつに見渡せば雲路の雁の女夫づれ合ア、浦山し浦島に合すてられし身の何を花何をたよりに告やらん合わかれにおくる玉手箱よもや惡しよはあるまいと合思ひ捨ても男の心ぐちも女の耻かしや佛の在世虛空會に八歳の龍女成佛の悟れば是ぞ玉の都と夕風に合さしくる汐のどふ〳〵〳〵合波をけたてゝ入にけり〳〵船頭土間より出る常盤津夕月に凉風を待が花火や三股の岸につなぎし通ひ舟星もあざむく賑はひは愷ちがはぬきやつが聲ヲイ取かち篠を束ねてつく樣な雨にぬれて通ふがにくかろかセヽノ「あたる〳〵〳〵〳〵當りやすセリフ「爰に名高き淀川の流れを渡る氣さんじは氣も幅廣な緋ちりめんしめて結んだ鉢巻もそこが根生の水の恩三筋の糸をかりぶしに二上り「淀の川瀬のナアけしきを爰にひねてのぼるヤレ三十石船に清きながれをくむ水車めぐるまごとはみな水馴棹さいた盃おさへてすけりや醉うて伏見へくだまき綱よかうした所は千兩松ヨイ〳〵〳〵〳〵よいの雨「あいたさにひとり夜ぶかにきたものをちよつと切戸をあけてんかいな〳〵おゝなかさんモシお内かお宿かおるすさんかゐないのにとん〳〵〳〵とたゝいてもヱヽ〳〵玄れつたいではないかいな二上り「させばヱさせば出てゆくさゝねばゆかぬさしてくだんせヲヽイ船頭さんヲヽイ〳〵〳〵〳〵ヲイ〳〵〳〵〳〵あの聲は嬉しからうじやないかいな面白やな體囃子にそやされて甲子待と人毎に富貴を願ふ大黒は脊に大極の袋を負ひ手に混沌の槌をもち足下にふまへし俵こそ五穀成就豊年を守る神こそ尊けれかけ物より出「四つ世の中よい樣と槌ほう杖にこ〳〵〳〵と笑ふ門には福鼠又いたづらなと呵られてそりや胴欲な旦那さんそもわすれてか去年の冬豆鼠蒔く年越はつちの子なりとだく物と枕の下の寶船敷て假寐の初夢に「是のお庭に大きな池ほればぶくり〳〵ぶく〳〵〳〵〳〵水もわき候黄金もざくゞわき候池の汀に龜遊ぶ鶴の齡のながくも〳〵御ひねきを願ふも恐れいり豆に花の御江戸のお取立鼠の出「ヤア ひけやひけ〳〵引ものは何々子の

日小松春霞花さく頃の鶴と鴨卯月八日は團子の粉池のあやめに祭の鉾よまだも引ものは七夕の牛待霄は三味せん酒はあと獵師は網ひくうつい姉への袖妻は引手あまたであろぞいな打出の小槌ふりたてゝ寶盡しの福曳は實に顏見世の悅びとたのしき代々の福遊び引ぬき鼠も共に契情大盡常盤津うゥタ「たかけ戀風のもれてれんじの紙一重合隔てぬ胸の約束をちがへぬ筈の中〳〵に合女のぐちか廻り氣か合元は浮氣な男ゆゑちらすが野暮か粹かいな合鐘は上野か淺くさの田面の末の夕月夜合夜見世の鈴の音さえて人呼子鳥百千鳥つばさかはせし二人寐の床に關もる袖屏風常「春まつ里の夕げしき見せすがゞきを生聞も通ふ千鳥にさそはれてゥ「きぬ〴〵の心のうさを烏さへ合ないてたすけて東雲の土手の夜風に通ふ神見送る影の四つ手かご常「たれも戀路に身をやつす里の手管のわざくれにむつとせきたち合ゆきかゝるゥ「コレまたしやん常「コレハなんじやいやいゥ「んせアレまだ無りなひぞりごと常「まだ里なれぬわたしでも緣にひかれてはま弓のゥ「やがて廓の年あけて常「名も呼かへておかもじとたのしむ甲斐も七草とゥ「疊叩いてなくなみだ常「それで照日も笠きてぬれにゥ「ぬれに廓の花の雨常「それにそのよな胴欲な若水くさいすね詞ゥ「情はうれど心まで常「うらぬといふもこまらしいゥ「ヱヽにくらしいじや常「なゥ「い常「かいゥ「いゝな常「ちわがこふじて口舌のたねよおよりなんしと引屏風跡は二人が譯さへもおし繪羽子板手まり唄ゥ「宵の口舌に無理なお客のむなづくし合とりもつ酒のさゝめごとをしやわかれの合かねつく坊さま合憎いきぬ〴〵合それはほんに色じや一い二う三い四ういつか女夫になりふりもまゆげ落してさがした羽根を仇にとられた板屏風ふくな猶ふくなよい羽ごの合春あそびかぞへる文のやりばごの手にとる禿の袖几帳うかれ〳〵て遊びける雷常盤津「夕立や田をみめぐりの雷も富士と筑波を右左りはれ渡りたる雲のうへ平氣でしやれて鼻唄で中の「り出下の遊びの浦山しちと遠見の摺火打雲と見まがふ煙りかな下界遙に見わたせば木の間〳〵に茶船が見ゆる櫓をおす聲のヱッサッサさつと家根ぶでひく三味せんの中の小唄の顏見たやさへつおさへつ天目酒に三なん四のむり酒はヱヽ畜類めガしやれのめすこつちもまけじと持前の太鼓拍子で一踊り鉦

とエ念佛でわしや暮すなら雲に巻れてわたりやせ合んどんな事して太皷を落したこんな碇で引あげよか合三千餘丁成田屋のその稻妻の師の光り合音も高島やと鳴ひゞき雲間〳〵をかけり行く（本鐵炮にて宙のり落牛若丸上ろり出語り）「扨も源の牛若丸父の修羅の魂魄をなぐさめんと川風そゆる夜嵐の夕程なき秋の空面白や心うき立御出立肌には練の御袷紅の裾濃の御きせなが糸かす織の大口に薄綠と云御はかせ五條の橋をさして來る傘のえぶきも高足駄橋板とゞろとふみならし行かふ人を待給ふ御有さまぞ不敵なる西塔の武藏坊辨慶は其頃都にありけるが五條の橋には人を惱す曲者有りと聞しかばそれを從へ召仕んと心に空もはるゝ夜の月も音羽の山の端に（辨慶圓十郎の出）「出たつ鎧は黑皮威好む所の道具には熊手ない鎌鐵の棒戈槌鋸鉞さすまたさすまゝに權現より給はつたる大薙刀眞中取て打かつぎゆらり〳〵と出たる有樣いかなる天魔鬼神なりとも面をむくべきやうあらじと我身乍も物たのもしく手にたつものゝエ、ほしやとひとりごとして打渡る向ふをきつと見てあれば橋のほとりの青柳の糸より細き腰付にてすつくと立たる女姿傘かたむけておもはゆぶり辨慶元より法師の身女何と言かけん詞も嫺く氣色に恥橋のかたへを過行ば若君かれをなぶつて見んと右へよくれば右にたつ左りへ行けば左に行違ひさまに薙刀の拂をはつしと蹴上ればすはしれ者よ物見せんと長刀拂長くおつとりのべ切てかゝれば若君は薄衣取のけ打よする劍をあざむく傘は六十間の橋の上ひらり〳〵くる〳〵〳〵車にもまるゝ牛若丸辨慶いらつてさそくをふみ遁さじものと切込むを丁ど受たる勢ひは雨をおこせる蛇の目のかさ風吹拂へば飛かはしひらりとぬいたる小太刀影星の光りと水車所は名にあふ加茂川の流に立浪どう〳〵〳〵どうとよすれば白鷺の蘆邊に棲るかたし立姿はつくばねはご板の拍子は砧の音無双がへし現の太刀二の鍔音から〳〵〳〵欄干傳ふさゝ蟹の蜘の振舞木傳ふ猿水の月かや手にたまらぬ姿を慕ふ薙刀のえたりやおふとしつかと取るいやと引ばるいと引橋の葱帽子玉の汗鏑を削りて戰ひける辨慶秘術を盡せどもついに長刀打落され組んとすれば切拂ふすがらんとするも便りなく詮方なくて橋げたを二三間飛しさ（兩人ヒリフ）今より三世の主從ぞと約束堅き五條の橋辨慶と末の世に語

り傳へて繪にも書申の顔見せ市村に祝ひ壽き舞納む

男哉婦將門勢田橋の文

右橋辨慶は鬼一法眼三略巻の結局にて文耕堂の作にて節よく附て立廻りに淨瑠璃を遣ふには是に倣うて佳なり璃寛二代目嵐吉熊坂宿屋の場牛若市紅と立廻りの時故人吉田九孝音五郎に橋辨慶の立をさせて見て此時に引直したり橋辨慶は歌舞妓にて小六玉國太郎を牛若にて毎度勤めし事有璃寛は是を見て九孝に習ひし也予天保五午の秋婦將門三つ目瀬田の橋の段龍女の化神誠は白狐子岩涙富十郎俵藤太秀郷當時の歌右衛門芝翫両人の脚色の時橋辨慶に倣つて作文せり其文を爰に出す謡「鳰の海や霞て暮るゝ春の日に渡るも遠き瀬田の橋更行夜半の水音も物すさまじく聞えけり〳〵上ルリ「爰に名にあふ下野の押領使藤太秀郷と聞えしは左大臣魚名公の五男にして弓箭取ては無雙の達人此頃都にありけるが夜な〳〵瀬田の長橋にゆきゝを惱す化生の曲者ありとき〻怪異の正體見屆んと心も空も晴るゝ夜の月も三上の山の端に芝翫「芝翫の出出たつ姿はゆゝしくも足音轟に踏ならし弓杖突てあたりを詠一芝セリフそれいにしへ月郷の賢君都良香羅城門を過る折から氣は霽て風新柳の髪を梳りと七言を詠じけるに忽空中に聲有て水は消て浪舊苔の髭を洗ふと讀つゞけて再び答へず是は正しく鬼神の詞それは鬼神是はまたいとやんごとなき女房の姿をあらはし橋上に夜な〳〵出て往來の人民を惱す由ちまたの風聞實か虚かいで正體を見屆くれん上ルリ「好む所の弓箭かいこみ今や遲しと待かけたりやゝ更渡る潮面に川風颯と音につれあらはれ出しその形相慶子「慶子の出薄衣深くおもはゆぶりすつくと立たる異形の有樣秀郷見るより心にゑみ扨こそくせものござんなれと五人張にせき弦かけ十五束に三ぶせして三筋たばさみゆらり〳〵と近よりて摑みひしがんその勢ひ女らう恐れず打迎ひ右へよくれば右に立左りへ行ば左りへゆく大膽不敵のおこのものなぶつて見んと身をおこす秀郷是を物ともせず違ひさまにむんずと組を心に笑ひ振拂ふ蜘の振舞木傳ふ猴水の月かや手にたまらず姿かよわき檜扇のひやいさ危ふさ薄衣をちからにまかせて引のくる立廻り有一芝セリフア、ラいぶかしや化生の女め汝此頃爰に出往來を惱す由その正體を糺さん物と月てる夜影を幸ひにゆきつ戻りつ長橋の半も過ずへんぐるに今こそ廻り近江路や鳰

うつ浪に化の皮落して白狀なせ猶豫なさばいにしへの素輕の大臣が雷神を手取にしたるためしにならひ摑みひしいで某が末世の龜鑑に備へてくれん化生めと返答はど丶〳〵どうだ上「大手を廣げて話かくればこなたは猶も聲高く一富ヲリフヤアおろかや汝人間五輪の生をうくとも我通力に及ばんやそこ立され一芝なくなれ化生め一富立さるまいか一芝なくなるまいか一富達て妨なすにおいては忽五體は吹雪と散て鳶のみくずとなしてくれん一芝何を小しやくな上「秀郷いらつて早足をふみ遁さじものと組付を丁ど拂ひし有樣は風にもまるゝ青柳の雨吹拂ふその風情互ひにいどむ物音はげに轟の橋のもと流に立浪どう〳〵〳〵女らう遙に身をすさり一富マア〳〵まつた待てたべ一芝ヤア卑怯な變化女すみやかに正體を顯すまいか一富サアそれは一芝但し是にて打放さうか一兩人サア〳〵〳〵一芝サ丶返答は何と上「せめ問はれ女膓落くる涙を拂ひ一富かくなる上は何をか包まん誠われこそ人間ならず龍の都八大龍王の乙の姫たま〳〵生を受乍ノウ淺猿しや上「三惡道の苦しみものがれ渚の捨小船一富ゆき丶の人をためしたうへ我願ひをかなへん爲上「扨こそよな〳〵顯れ出化生變化と恥かしい此容一富然るに今宵不思議にも御身の如き武勇のかたにあひ奉る自が本望何卒此身の願ひをばもし叶へて給はらば彌勒の世に及ぶともかつて御恩は忘れまじどふぞ叶へて下されいのう上「思ひ入てぞ願ふにぞ一芝扨こそ我推量に違はず正しく蛇身の變化よな我神國に生を受萬物の司たる人界に依て望を叶へんとは尤なる事いかにも叶へ得させんがシテ其願ひは一富その願ひは只今御覽に入れん上「あやしの俤さしおしへ一富自が願ひは此一品一芝內やあやしき此俤上「立よる秀郷おしとゞめ一富サア何事も自が心をこめし願ひの一品一芝シテ其子細は一富その樣子は上「いはんとしたる折こそあれ漣よする浪の音龍女は渚を打詠一富アレ〳〵刻限きはまる此土の遊行はや龍宮へ歸れとある父龍王より知らせの浪礒打音は是非もなし早おさらば一芝ヤレまて乙ひめ一富いや〳〵おとゞめ有てはかへつて我身に仇浪の音を限りの龍神界名殘は盡ずはやおさらば上「名殘は盡じと振拂ひ霧立渡る長橋にくゞれる浪の水の音に姿紛れて失けるを末世の記錄に殘せしはあやしかりける次

第なり是段切跡將門芝翫岩浪慶子默（だんまり）りなり此文談橋辨慶に倣ふよき文談は何にても潤色なるもの也

富本常盤津外題角力

此一紙は其作者の甲乙をいふにあらず稽古する子供衆のいまだ習ざる外題を見るならば稽古をはげまん便りにと横山町二丁目和泉屋永吉板年號見えねど文政の始頃出板と見え富本さかんにして清元の外題見えず今清元の方流行して富本は衰へたり常盤津のみ色をかへずます〳〵もてはやせり作書に因みあれば爰に出す常盤津富本清元の系圖は聲曲類纂に委しければ略す好人此書を見て知るべし

富本方

大關 そのおもかげあさまがたけ 其俤淺間嶽
關脇 はろのよしめ 夕霧伊左衛門 春夜障子梅
小結 れんりのたちばな 小紫白井權八 りゝ連理橘
前頭 いとやなぎこいのおだまき 糸屋小いと 糸柳戀苧環
同 めいしゆもりいろのなかくみ 幸助 おきく 名酒盛色中汲
同 みやこけんぶつさいしきもみぢ 彦惣頭巾小琴帽子 都見物彩色楓
同 ありすがたじやうるりせかい 有姿淨瑠璃世界
同 みちゆきせがわのあだなみ 長右衛門 おはん 道行瀬川仇浪
同 しんきよくたかをぎんげ 新曲高尾懺悔
同 みちゆきひよくのきくちやう 清十郎 おなつ 道行比翼菊蝶
同 ぜんせいあやつりはなぐるま 全盛操花車
同 みちゆきこいのおだまき お三輪道行戀の繯

前頭 しんきよくかくらじゝ 新曲神樂獅子
同 はですがたあふみはつけい 小いな半兵衛 俠容形近江八景
同 おつまじづきこいのてどり 睦月戀の手取
同 さかまちよいのよつはぢ おつま八郎兵衛 坂町宵四辻
同 としのあさかれいのことぶき 歳朝嘉例壽
同 いくきくてうはつねのみちゆき 幾菊蝶初音道行
同 みちゆきおもひのたまかづら 道行念の玉かづら
同 おんなるかみせがはほうし 女鳴神瀬川帽子
同 みちゆきなたねのもすそ 道行菜種裳
同 しきのながめよせてみつだいじ 四季詠寄三大字
同 いたづらがみこいのくせもの 松風付雨 徒髪戀曲者
同 ふゆあみがさくるわすいせん 冬簦廓水仙
同 もゝよぎくいろのよのなか 通小町關寺小町 百夜菊色世中

前頭 おきく幸助 ちらし書仇な命毛
同 お染久松くめ川久兵衛 うきなのはつしも
同 はまちどりいろのなてう
同 めうとごとあめのやなぎ
同 四十八手こいのしよわけ
同 ふうりうつりぎつれ
同 てうちどりはるのすがたみ
同 ちりのころはなのかほ鳥
同 小むらさき白井權八 そのすがたより
同 松とむめいろのゆひわた
同 浮名のよつきびくぜたい
同 なつこだちさんげのおつごと
同 じうにだん君がいろのれ
同 はぎすゝき露のまろびれ

同 ゆふよそおい星あいのよ
同 山本久山白柄十右衛門 その妹脊花の朧
同 ゆきをまつれやのすごもり
同 ことぶきみやこのにしき
同 おはつ徳兵衛 道行しぐれの柳
同 ひなのめうと月のみづひき
同 おはな半七 道行なさけの水上
同 はなは今にはかの夕がほ
同 おつま八郎兵衛 ひよくのそてびやうぶ
同 おちよ半兵衛 道行かきれのゆひわた
同 八百屋お七 ふみづきさゝの一よ
同 小女郎新兵衛 櫻そうつゐのかゞもん
同 うたまくらこひの初たび
同 ひとふしものいみぶれ
同 おみわ道行 こいのおだまき
同 ふうふ酒もり奴なか〳〵

同 しんじうちく生づか
同 より〳〵ゆかりのつき
同 めいぶつよしのゝすし
同 ぞうほうごにちのあたか
同 行平いそのまつかぜ
同 るりこん五かりがれ
同 しんぢういせぢのはなし
同 君しらずいつせ一代
同 むかしばなし姥が一ッ屋
同 みちゆき色のおだまき
同 ぞうほうかぶとぐんき
同 五人づれなにはかゞみ
同 竹の園草かりさんろ
同 しんぢうくるはの水上
同 みちのく四十八たて
同 ならの都つま乞ふしか

常盤津

大關 やまとがないろのなゝ 倭假名色七文字
關脇 そも〳〵うきなのはるさめ 抑浮名春雨
小結 しのだづまはなれねなかとみ 信田妻容影中富
前頭 つまがさねあわせかたびら おふさ徳兵衛 褄重袷帷子
同 かつらがわつきのおもいで おはん長右衛門 桂川月思出
同 あかねぞめのたかのかくれゐ 茜染野中隱井
同 やほよろづそのおのうめがへ 八百萬薗生梅枝
同 してんおふおふへやまぶ 四天王大江山
同 おびのあやかつらのかはみづ 帶文桂川水
同 みこやまぶしちはしのことふれ 巫山伏千早經言
同 くものいとあづさのゆみ 蜘蛛絲梓弦
同 そのあふぎやうきなのこひかぜ 其扇屋浮名戀風

前頭 ふたおもてつきのすがたへ 兩顔月の姿繪
同 ほとゝぎすはなあるさと 時鳥花有里
同 みやこどりめいしよのわたし 都鳥名所渡
同 すいたどしかわぞひやなぎ おはな半七 好借川傍柳
同 はちじゝはちよるのさめざや おつま八郎兵衛 八十八夜鮫鞘
同 はつぎくらあさまがた 初櫻淺間ヶ嶽
同 みちゆきちぐさのみだれぎき あづま與五郎 道行千種亂咲
同 すみかづらみますはごいた 奴髷三升羽子板
同 ちかごろこいのせわ おしゆん傳兵衛 近頃戀世話
同 うきなのちらしかき 浮名の散書
同 しんぢうあすのうわさ おそめ久松 心中翌の噂
同 やまともじこひのうた 大和文字戀歌
同 もみぢそでなごりのにしきゑ 紅葉袖名殘錦畫

前頭 ひなのみやこもみぢ玉だれ
同 みつのあさゆかしきかほぶれ
同 あやつりときしゆたい
同 女もじいろのはなぶさ
同 たつた川もみぢしらさぎ
同 いろのとりでそいねのしがらみ
同 ふたごすみだがは
同 おひのはたごてうのたそがれ
同 てうおどりまつのたゆふ
同 はつれのたび吉野の道行
同 おそめ久松 いろ忍ぶ娘あきんど
同 はるをまつたにのもろこへ
同 しのぶぐさこいのうつしゑ
同 なすの與市 ういじんのちごよろひ

同 夕ぎりあはのなると
同 たまくしげふたばの楓
同 またこゝにすがた八景
同 あだくらべつもるおつごと
同 娘ざかりれやの取組
同 たれがみぞ色のじつごと
同 いろの岩や大江山入
同 おはな半七 道行戀路の松嶋
同 みだりばなしんのみち行
同 よるのつるゆきのけごろも
同 かむろもんびのひながた
同 女かみゆひこいのくせもの
同 みやま櫻とらぬ枝ぶり
同 だてもよふあづま八景
同 山ざき與次郎ふじやあづま 升おとし
同 同しやうきのだん

同 とうかいどうよなき石
同 いせのくにあこぎのあみじま
同 てうとますひよくの袖
同 女かみゆひおかしかつ山
同 みちゆきやごへのとり
同 そよとふくやかたのこひかぜ
同 だて娘二人のむこ入
同 色のめひきけんほう染
同 だてしらべ君をまつ嶋
同 もどりかごさかり朝がほ
同 いろのふか川おはなが袖
同 さらやしきお菊が俤
同 むめさくられんりのえだ
同 けいせいゆかりの月かげ
同 ゆらのみなと千兩むすめ
同 色ぼたん袖のしがらみ

爲御覽

行司 みちゆきこいのひきやく もどりかごいろのあいかた 梅川忠兵衛 道行戀飛脚 戻駕色相肩

みちゆきさかへのくわげつ ことぶきかどまつ いろざんげのべのはなみち こいとちうしやはつねのたび おはな半七 道行榮花月 ふじやあづま山崎與次兵衛 壽門松 色懺悔野邊花道 戀中車初音旅 勸進元

よるのはなすがたみかづき つもるこひゆきのせきのと 夜花姿三日月 積戀雪關戸

謠曲狂言釣狐尾花褥

行水の草葉隱れも武藏野や月代前の闇の空子故の闇にあらね共甥子を思ふ白藏主我突杖も音すへて芒の穗にも伯父の身の異見くわへし戻り道邊り窺ひ溜息して狂言詞ノウ〳〵嬉しや〳〵やう〳〵と意見をしてまんまと釣をとまらせた是から何方へ行うとも氣遣ひな事はない此樣な心面白時は小唄ぶしで古塚へ歸らう小唄此里に住ばこそ浮名も立のふいのやれ我古塚へしやなら〳〵と小唄うとふて嬉し氣にあゆむ向ふの草の中罠につまづき飛しさり狂言詞ワイのふ〳〵恐しや〳〵たつた今罠を捨たかと思ふたれば某の歸る道のまん中に罠を張すましておいた扨々罠作といふ者は近頃聞えぬものじや誠に人間の狐をばやこの心と申て物疑ひをすると申と聞たがきやつは狐にはおとつたやつじやいや又罠といふ物をいか樣にして置ばけんぞくどもがかゝつたぞついでながらわなのしつらひを見て置うそろ〳〵立より捨罠を杖突ながら打詠狂言詞何やら黑いちいさい物があるヤイ〳〵おのれその黑いちいさいなりをしておれがけんぞく共をようとつたなアよう儕それがよいか是がよいか覺えたか〳〵一杖打ては一あしより二杖打ては二足より打たる杖の勾をかぎ狂言詞ム、味い勾ひや〳〵若者共がかゝつたこそ道理なれよい頃な若鼠を油揚にして置た是がくわひで了簡がならうか飛かゝつてくわんとせしが足つま立て飛しさり狂言詞ア、よしない事を思ふた目のまへにけんぞく共をとられ今又此餌にほだされ某が怪我をしてはなるまいまづ二足三足行んとせしが立どまり鼻動かして振歸り狂言詞戻らうとは思へども此勾ひを聞てはなか〳〵戻らるゝ事ではないよう思へばけんぞく共が爲には敵じやその上若者共が餌ばかりむしつて喰ふ事はしらぬでよしない罠にかゝつた餌ばかり喰ふに何の事があらうぞ飛懸つてエ、喰ひたいな〳〵身もわな〳〵と震はれて勾にきゝとれ餘念なき芒おしわけ罠作が窺ふぞともいざしらず狂言詞イヤ〳〵喰たうても青緣本ノマヽを身にまとふて居るによつて身が重うてくわれぬヤイおのれ此化た裝束をぬいで來てたつた今ぶくする程にそこのいたらば卑怯で有うぞエ、イ〳〵行んとしたる後より罠作得たりと山刀ぬくより早く二太刀切付られてたまらばこそウンとこけこ

む芒の中罠作は仕すまし顔まんまと是もしてやつた此手次手に宮めもとうなづく所へ女房お瓜つまづきながら走りよりヱ、お前はとむしやぶりつく又うせたかと振拂ひばらをぐつと眞の當鼠六は跡より駈付て手ごわい女郎め手におへぬシテ宮めにぼつ付たかヲ、伯父の坊主も一ゑぐり宮めも爰へ手まへて來たと罠の中へ飛こんでエイと打たる首の音鼠六は又もや合圖の笛待もふけたる野見の軍太組子數多に提灯もたせヤア〳〵罠作約束の首請取ういかに〳〵と呼はつたり罠作は兩の手に首と血刀引提出まんまと爰まで釣出した手ごわいやつで手廻らず是非なく首に致しましたいざお受取とさし出せばヲ、出かいた〳〵女と容せし宮の首シテ約束の褒美はな家來共それ罠作に褒美をとらせはつと家來がさし出す包みヱ、忝い是もふけうとてどゑらい骨折ヲ、さう有う々々主君直義公へ差上なば嘸御滿悅鼠六にはまだ申付る用事もあり家來つゞけと野見の軍太皆打連て立歸る跡見送つて罠作は褒美の金を押戴きこいつもしめたと懷へ納るうちに氣のつくお瓜夫の胸ぐら引とらへヱ、胴欲な罠作殿義理も法も辨へぬ大惡人大事の〳〵宮樣をようも〳〵むごたらしう首切て渡さんしたのいかなる天魔が見入たぞと恨の泪たくしかけ宮樣を殺された言譯此身も共に南無阿彌と落たる夫の山刀取んとするをヤレ待と芒掻分白藏主あけに染つゝ起上りお瓜か刀引とればヤアお前は伯父樣ヨ、白藏主樣かとお瓜はもとより罠作も南無三寶と仰天顏ヱ、そんならお前も夫の爲にヱ、コリヤマア何とせうぞいのと云もうろ〳〵おろ〳〵淚罠作曇りし聲音にて宵に見置た形容狐の變化と思ひし故仕すましたりと手にかけしがやつぱり誠の伯父御で有たかチヱ、殘念やしなしたり御ゆるされてと俄のはいもうお瓜は夫にしがみつきチヱ、是あの樣にむごたらしう殺して置て今更何の驚顏あんまりむごいと聲ふるはせ恨泪にむせかへるこなたは苦しき息を繼コリヤお瓜必ず歎くまい元より覺期の我命子供たらしの咄にも聞置たる野干の身ぶり眞似たればこそ殺しもすれ殺される樣にしたればこそ强欲非道の惡者と思はせ心の底に納めたる罠作が大丈夫心底の程見屆たヲゝ天晴〳〵今こそあかす我本名罠作殿聞てたべと手負を屈せぬ丈夫の老人居直つて詞を糺し元某は官軍に

名高き殿の法印了忠といふ者大塔の宮に隨ひ參らせ紀の國に旗上して終に北條が大軍を攻亡し主上の御危難救ひしかど帝の御心定らねば遠からず亂發らんと未前を察して武門を捨我心底を宮に告大藏の局と呼れし內身の姪此お瓜を召連此武藏は我故郷なれば國へ歸つて名を包み白藏主と名乘る隱遁者又こなた社今民間に育ども一器量ある者なれば幸ひ姪のお瓜をば其方へ後妻に嫁らせまさかの時の力にもと心便に思ふ內我推量の的をはづさず足利兄弟は准后に取入り新田楠が軍慮を拒み大塔の宮を害せんと計り淵邊の手にてお命も落されんとせし所を不思議にまぬがれ我を尋ねて此地へ來給ふ此了忠が匿ひ奉りけだかき宮の御姿人目に立ば詮方なく女姿に出立せ參らせ是なるお瓜が妹と呼なし時節を計つて東國に旗上なさん我計略兼ては宮の御味方にと心賴は今此時まづかう〳〵と打明て物語んとは思へ共いや〳〵かく亂世の折なれば汝もし兼てより足利方へ心を運し宮方の我々を覗んも計られずもし打明て後悔やせん兎やせんかくやと思ふに付お瓜が賴を幸ひに異見に事よせ其方が心底を探り見るに人目を造る放蕩ぶらい誠は獨の娘を手にかけ大塔の宮のお身代りエイ〳〵と驚くお瓜サヽその心底を見るからは老さらぼいし此了忠此世に居ずとも事足りなんいかなればさ程まで宮方に心をよするぞ樣子ぞあらんサヽいかにと深手を屈せぬ物語きくに罠作いち〳〵に胸にこたゆる心の割符ヱヽ早まりし殘念やと落る涙を振拂ひゐヽ扨はこなたは殿の法印了忠殿にてありしよなかくなる上は何をか包まん我こそ足助重範が一族にて速見下總之助範廣と呼るゝ者と始て明す夫の本名きくにお瓜はあきれ果顏打守る計也手負も苦痛打忘れオヽすりや先年笠置籠城の折からいかにも六波羅方の虎口を蹴破り主上を始官軍を助て共に笠置に籠り數度の敵軍攻なやまし主上の御感も殊ならず一旦武名を上し身が運拙くして笠置は落城帝は捕子となり給ひ此身はその夜手疵を負ひ辛ふじて命を遁れ手疵保養をせんが爲本國に隱るゝ內北條一家は滅亡し自然と開く帝の高運我身の手疵も治す上は二三ミ嬉しや都へかけ付主上の龍顏拜せんものとは思へ共いや〳〵〳〵戰ひ過て公卿の世となり今更都にはせ行共恩賞を受んが爲と笑ひをとらんも口惜く其上

新田足利も功を爭ひ確執と街の風聞まち〳〵なればよし〳〵何れにもあれ主上に弓引朝敵謀逆の企あらばそやつを亡し再武名を發せん者と一人の娘を伴ひ此地へ移つて姿をかへ強欲非道と仕にせをうり數多の金銀むさぼるも皆是まさか軍用の手當又さいつ頃後妻にめとりしお瓜と伯父が氏素姓定めて宮方に由緒ある人々ならんと思へ共折もあらんと見合すうちはたして足利兄弟が讒言にて護良親王を追失ひ謀反の色を顯わせど主上はかへつて悟り給はず新田楠が諫を用ひず又もや天下の亂口此春お瓜が妹とて尋ね來りしお蘭こそ正しく大塔の宮に相違なしお力になるは此時と思へど未だ明さぬ心底かく乱國の砌には親子の中にも心おかれ互ひに探る胸の内此頃足利より配符を廻し犬に入たる油揚鼠六きやつ諸共に欺かねば身代りはとるまじといよ〳〵造る上邊の強惡其虚に付入る古狐伯父御の姿に出たつて釣を止れと異見を幸ひ是も手にかけ殺して見せなば横道者と思ふは必定兼て用意の捨罠に掛つて餘念なき有さま誠の狐と思ふが故誤つて此生害又手次でに宮の首討て見せしは兼てより心もふけの娘が命只一討に首をはね軍太鼠六に渡せしが跡の骸は尾花の中思へば不便の最期ぞと語る內より女房お瓜扨はと驚き走り寄哀を招く村尾花掻分見ればお菊が死骸是のふ母じやと抱上見れば甲斐なき亡骸に扨も〳〵可愛やな忠義故とは言ひ乍ら義理ある娘や伯父樣を先立てわしやどうせうぞとお菊が死骸抱きしめ聲も惜まず口説なき下總泪ふり落し娘お菊が身代りは兼てよりもふけし事鼠六めをたばかつて此所まで娘を連出し軍太に難なくつかませしが合點のゆかぬは丁忠殿左程大望ある身にて我手にかゝつて死する事是疑ひの晴ざる所我此程殺生に事よせ多くの野狐を釣とるを無益とも思されんが我家の先祖より傳來せし軍法の秘書のうち調伏の法有て年經る野干の生膽をのらふ者の家の巽隅に埋る時はする事なす事けつまづき忽家の亡るよし詳しく記せり足利調伏には屈竟一と思ひ立たる我殺生今迄數疋の狐はとれども未老狐は手にいらず今宵宮の御危難を窺ひ化てうせたる古狐仕濟したりと切付しが老狐は釣らで片腕の父とも伯父とも舅とも讐がたなき恩人を我手に掛て殺せしは何畜生と思ひ乍やつぱり是迄殺したる野狐の恨で有けるかと悔む

をまたず白藏主ャア悔まれな下總殿我も其調伏の法をしれば多くの狐を釣とるこなた正しく足利を調伏の爲求むるに相違なしと察せしゆへ何その老狐の生膽より百倍增りし奇法あり巳の年月揃ひし者の生血をとつてかたの如くおこなへば其効驗新なり此了忠は巳の年巳の月巳の日の産れ天子の爲に捨る命生過た此體腹かつさばいて望を叶へんとは思へ共なま中に夫を明さば義理立してよも我を殺すまじと思ひ付たる今宵のしぎ態と狐の變化と見せ罠に掛りし戲れも狐の人に化るはあれど畜生ならぬ此身をば狐と迄思わせて手にかゝりしも此身の本懷こなたの望を叶へん爲とかたるに下總あきれ果すりや調伏の血汐を用立んが爲にとや我もその法をしらぬにあらねどとしで本ノ揃ひし者もなく思ひ捨しが計からずも血汐調ふ上からは足利滅亡まのあたりチヱ、有難や忝やと天を拜し地を拜し勇むにつけて女房は空しき娘の亡骸を抱かゝへてむせかへりヱ、そふいふお前の心ならなせ始からこふ〳〵と打明ては下さんせぬ可愛そふに此お菊おぼこ心の一筋にあの宮樣を思ひ染一夜の契りも得えせずと死なした事の可愛やと又さめ〴〵と泣出せば夫もともに恩愛の涙にくれしが聲はげましャアめろ〳〵とかへらぬくり事勿體なくも後醍醐帝の御弟君大塔宮の御身代り立たる娘は親にましたる果報者子故に親は名を上る娘は天晴忠義ものと了忠殿にもほめてござる未練な泣なほゆるなと泣ぬは秋の虫よりも一しほまして哀なり了忠も泪をおさへヲ、お菊出かした同じ忠義に死ぬ身でも生て詮なき此了忠此世の望更になし可愛やお菊は思ひねもはらさず死せしふびんさといふにお瓜は猶百倍せめて宮樣のお世となり一日なりとも二日なとお宮仕もさせたならかうした歎きは有まいにと互ひに手に手取かはしたもちかねたる泪こそ此武藏野の三の川あふれ流るゝ如くなりかゝる歎の折しもあれ委細を窺ふ油揚鼠六芒原より現われ出ャア聞た〳〵大塔の宮のにせ首わたし足利殿に敵たふ罠作此通り注進せんと駈出す鼠六支る隙に弦音してはつしと立たる白羽のそ矢鼠六が咽ぶえ突通しわつと計に息絶えたり是はと驚くその隙に尾花の中より聲高くャア〳〵速水下總が忠心慥に見屆しと詞をかけて立出給ふ大塔の宮護良親王御裝束を改させ白木の弓を御手に携次

につゝいて以前の旅僧姿は烏帽子狩衣に粧ひ出る跡よりも數多隨がふ警固の官軍見るよりハツと三人は飛しさつて平伏す宮は御聲曇らせ給ひかくまで不幸の某を見捨ぬ忠義の丁忠下總其身を殺し娘を殺し厚き二人が志忘れは置ぬ嬉しやと忠義を感ずる御涓勿體なやと三人がありがた涙にうづくまるこなたの公卿御目を拭ひ我こそ萬里の中納言藤房といふ者我行脚の形りに出立今宵下總が家に宿りしは敷島の道の德當今准后の色香に迷わせ給ひ足利が讒奏にまかせ直義にお預けありし宮のお命危ければ某屢御諫言申上し處主上御答の御歌にむさしのにありときくなる逆水のにげ隱れても世をすごすかなと御宸筆の短冊を給はる我其意を知らざれば御心を尋ね奉りしに帝の御けしき大に損じ吾妻の歌枕見てこよと追やり給ふ我何の罪かは知らねども叡慮にまかせ深き御心のあるやらんと直にそれより旅立ていつかへりいつかまゝ、逢坂の關ならんと心細くも吾妻路の此武藏野に來りし所尾花隱れの孤家あり宮は此地にましますと我にゝしゆる古歌の御心殊に淵邊が毒蛇の口遁れ給ひし御宮を邪智深き足利直義猶も枝葉を枯さんとはかるにそれをふせぎし二人が忠節感じても猶餘りあり君御宸筆の御短冊下總にとらせ得さするぞと下し給へば三人はこは冥加かやと推戴く重ねて宮ののたもふには丁忠が今迄の忠節お瓜が辛勞下總が誠心何れをいつれとおとらねど不便なるは娘のお菊我にせつなる志殊に枕もかわさぬに我にかはつて死せしとは不便の最期をさする事よ此世の緣はむすばずと未來は必夫婦ぞと勿體なくも御歎下總始丁忠も恐れ入たる嬉しなきお瓜は嬉しさ死骸をだきあげ是娘魂魄此土にあるならば今の仰を聞やつたか親に增つた果報ものとは言ながら生ある內あの御詞を聞せたら嘸よろこぼう物かあいやとかへらぬ事を女房がくりかへすこそ果しなや丁忠はほゝ笑てア、忝や有難や忠義の爲に死する命老のよろこび此上なし又二つには下總が忠義故とは言ひながら執着深き狐をば多く殺せしそのかわり此身を狐の姿になり手に掛りしは後の世の報ひをはらはん我心是で心なき狐狸迄も長く恨を忘るべし末世に武藏野の狐の義理とも云ならば無益の殺生禁るはしともならん嬉しやと詞に宮はうなづき給ひゥ我都に歸りなば此所へ一宇を建忠

義と義理に死せし汝我にかわりしお菊が死骸も此所へひとつに葬り塚をさつらひ得さすべしと仰は今にむさし野の狐の義理や狐塚名を後の世に殘しけり了忠は喜悦の眉有難し〳〵サヽ此上は下總殿某が血汐をばちつとも早く絞り取足利調伏の用に立潔よく出立をといふも苦しき息遣ひ下總はつと泪を拂ひ事おくれては詮なしとよわる心を取直し死共朽ぬ忠義の生血是へと用意の器疵口にあて汲とればお瓜はあるにもあられぬ思ひけふ程嬉しい悲しい日はあるまひ連添ふ男の本心は聞ながら義理ある娘がむざんの最期まだその上に伯父様まではかなひ別れをする事よ生延はりし此身の役と傍に落ちる山刀とるよと見へしが黒髪をふつヽと切て差出し是此黒髪を切たるは先の母御へ申譯伯父様始娘の弔ひ首尾よう夫の高名を陰より守る尼法師大倉の小林尼とあらたむべしと法の心ぞけなげなる藤房感じ入給ひ後悔ならぬ吼嚇の口授をのこすも狂言綺語お亂お菊が文字を合せば亂菊なり狐は菊を愛るといひ瓜を好んで喰ふもの瓜の文字に化物箇を添る時は則狐我身を喰るヽお瓜が思ひ後世瓜の畑を狐のあらす事あらばうぬが名の作りをくらふ狐かなと書付おかばよもあらす事あるまじと仰にハッと皆々も感じ果たる計なり下總はいさみたち宮を都へ還御の御供只今是へ呼よせんと合圖の狼煙を上るにぞハッといらへて數多の軍兵列を亂さずはせよつて宮を見るよりハヽハッと恐れ入てぞ扣へいる下總は宮に向ひ我は是より姿を容し足利の舘へ忍び込みじゆその血汐を首尾よく埋跡より御供に追付んと云に藤房いさみ立某は宮を伴ひ楠正行が立籠る繩手の砦へ御供申さん路次の警固は了忠下總二人が集めし數千の軍兵はや還御と立上れば東に昇る月代に勇みすヽめど唯ひとり殘るお瓜が憂思ひ了忠今はのめを見ひらきヲヽ勇しき御出立御門出の血祭は殿の法印夜の殿忠義にからむ罠とかせなく音に血をば白藏主草葉隱れに行水と哀を爰に殘し置今の世迄も狂言に其名を呼て釣狐の謂を殘して出て行

天保改元庚寅年孟冬

歌舞妓狂言著作郎西澤一鳳著

西澤文庫傳奇作書殘編下の巻終

西澤文庫傳奇作書殘編跋

造り物三間の間と書正本屋の主人先年打拔遠見の奥深なる樂屋の珍說本舞臺の狂言には金輪奈落の切穴の祕事近松の釣枝奈河の浪手摺並木の書割を始め三都に名高き作者の傳によせて八景不審やなァと思ふ黑蓋も颪さず明るゝ作道の階梯を著外題の文字を田樂返しにして言狂作書と云今年夫を淸書の序拾遺殘篇を戲墨して淨瑠璃歌舞妓の世界をわかち王代時代世話眞世話の腹稿を一夜附同樣に書たるはまさに西澤氏のお家の物なるべしかゝる長しき作り物語三編が間引道具の書を用ひず幕無しに書續思入こなしのト書と共暗記でムり舛とブツゝケ書の內讀をきゝつけ予此道には黑幕なれどキツカケとたんの校合おして此本幕をゑむる事になん

時嘉永己酉霜月幕外花道にて六法ならぬ

一鳳軒にかはつて此道の好人　蘞窓飄翠述

益々其御地皆々樣御きげんよろしく御揃大壽山極奉申上候次に此方無事御安心可被下候しかれば言狂作書三編とも誠におもしろく覺候中々作者衆ばかりにてはなく我らが爲にも孫吳の祕書六韜三略の卷ともいひつべき珍書に御座候續編附錄とか追々御作出來候由早〳〵一見いたし度事に御座候かのなにはづに作者此たび冬籠といふ御作に

今わざをぎを書は此人

と下の句をよみそへ候御一笑〳〵

成田や

七左衞門拜

西澤九左衞門樣

無別條

目次

一當世芝居賢氣　狂言作者の部　安永年間の作
一竹豐故事の序　寶曆年間の作
一音曲狂言綺語の事　同
一呂律五音十二調子の事　同
一名人上手下手評判の事　同
一太夫敎訓名言の事　同金玉論六話
一五段續語場役柄の事　同
一淨瑠璃作者の事　同
一淨瑠璃古今の序　寶曆年間作
一同東西外題番附　天明年間作
一身替弓張月の寫　享保年間作
一古今いろは評林の序
一古今いろは評林の發端　天明年間作
一忠臣藏狂言の說　元祿年間の事
一伊賀越復讐の說　寬永年間の事
一昔八丈城木屋の說　享保年間の事
一椀久物狂ひの說　延寶年間の事

西澤文庫傳奇作書續編上の巻

西澤綺語堂李叟英

當世芝居賢氣狂言作者の部

道頓堀の因果經に曰人間の捨處野等の蘆場は作者也と宜なるかな就中歌舞妓作者涌出るは娼家の小息子下手俳諧師ならずば學者醫者の成損ひ坊主落いづれ錢なしの野等共也さり乍作者といへばいふものゝ立作者となるは野等では根からなられず上根に氣轉がなくては叶はずポイ〳〵作者には成易し立作者には容易に成がたしされば才覺氣轉を廻らす事は今時の醫者にひとしく素人が物しりの樣にいへば我は物識顏で鄙言だらけの仕組本役者のいひ損ひにぬすくり付けりやう文盲でもすんで通ればこそうだら〳〵と性もない咄する間に片假名本なりと讀ばよけれど地が野等氏なり錢遣ふにもカン〳〵坊貧乏苦にせぬ顏は莊周が濶轍顏回が一瓢の飲に張合たる貧樂の高枕あはれ聖人の心に叶ふ身持は作者なりと仇口も詮かた盡た產業也爰に瀧田治藏とて道頓堀より沸出たる異物有天晴作者にならんと心は矢竹に根氣を碎け共中々狂言の合點仕組の鹽梅滅多無性役者さへ得心すればヤレ嬉しやよい狂言じやそうなと我作ながら善惡見へず初日が出て舞臺へかけて脇から見るといかにも役者が下手屎作者とこき出した樣に呵るも尤仕組がだれたり又は味(うま)みのない狂言なること氣が付てどふぞ此事を机の上でがてんのゆく工夫役者の遣ひ樣座組によつて狂言の案じ方仕組樣急に呑込み三都一番の作者と呼れたいと一心不亂こりかたまつても力業にも及ばぬ所に當惑せしがふつと心付獨木は鄧林の茂をなす事あたはずといふ事あり萬事一本立では立身ならず人の工夫をとる中に我才覺も出來る物なり幸ひ中興の名人日の出の作者並木宗左に付隨ひ仕組の稽古せばやと早速宗左方に馳行假に師弟の契を結び上手の案じ所役者の遣ひ方に氣をつけ餘念なく執心なりしが一とせ顏見世の座組出來かゝりて銀主の變改一座さらりと解て仕まふ所を宗左切て出て我は無給金表の步錢を取るべし役者も寄合て興行

せん芝居一軒出來ると此廓で餘程の人のたつ事とかり廻りて相談するに役者も外聞旁尤なりと俄に顏見世番附を拵るか狂言を案じるやら座拂ひの銀子工面やら上分の役者は本給の內八分の仕切中通り部屋囃子方は初日の晩に六分三日めに二分十日めに又二分で本給丸拂ひと定めどふやらこふやら初日もふいごまつり思ひの外に繁昌せしかば役者もぐつと乘が來て二の替りの新狂言冬のうちに出そふと相談かため宗左はそれより取籠治藏を相談相手其外ごら〳〵作者二三人膝共談合ひとり咄しはならぬ道理用にたゝぬ作者もそれ〴〵に抱置は宗左が大腹中かの楠が泣男かゝへしも大將の器量夫に付隨ふ治藏自然と役者の遣ひ樣會得する事も有し油斷せぬ作者に精出す役者と持合ふて二の替りの評判よく注連の內より大入治藏つく〴〵思ふ樣淨瑠璃の作は素人が作つても出來る筈じや太夫が節付て語さへすればマア淨瑠璃になるといふ物素人作は操にかゝるかゝらぬはあの曲輪の妙も有ふが死物の木偶淨瑠璃本で諸事捌て通るこつちは役者といふ手にあはぬ人間共をつかふ事自由にならぬ筈じや是を思へば歌舞妓と淨瑠璃の作の懸隔する事を覺へたり全く並木の林に入りし德誠に勸學院の雀作者の飯くはねば作者になられず素人より出て歌舞妓作者の上手はなきものと感心の餘りいよ〳〵道の妙を探り得んと修行しける程なく三の替りの相談靜なる貸座敷にせふと宗左が差圖座敷をからふにも奇麗な所は宿賃高し寄合芝居の金も出じ止むなく濱屋敷の明屋家守を調子にのせてたゞ借り古疊四五疊に茶瓶風呂に眞黑な羽釜をかけ辨當持寄狂言の相談場元より河岸へ掛出したる濱屋敷の荒地下は物置納屋しまりの戶もあばらやにやぶれ損せし透間より吹上る下屋風根板の上には作者の面々煎餅の樣な借蒲團身にまとひまだ如月の餘寒もはげし伯母が心を焚しめた小袖を島迄めさるゝと鼻唄もおどぶるひながら狂言の相談の間には役者のそしり話に夜もふけ四五人がそれなりけりにまろび寢いとあはれなる寢姿寒さひだるさこたへられずぬけ出てかへるもあり心安き方へ酒のみにゆくもありこそやへうまりにぬけるもあり殘るは宗左治藏兩人狂言の工夫につかれ寢の枕もと治藏〳〵と呼ぶ聲にフット目さませばヒュウトロ〳〵にて四つの魂宙にぶらついたり治

藏きつと見てがてんゆかず舞臺でつかふ樟腦火の人玉は見馴たれど是は正しくさしがねでつかふにあらずたゞし化物屋敷かゝる繁華の地に狐狸の栖も珍らしい何にもせよハテ希有な事を見るなアと寐ながらまじ〳〵ひとり言おろかや治藏我は是並木宗助松屋來助じゃはやい是なるは姉川新四郎殿藤川半三殿役者にて名作者なることそちもよく聞しるらん我々四人が來りしはそちに作者道の秘事をつたへん爲極樂芝居の休みの間に假にあらはれ來たれりと寐鳥ドロ〳〵は芝居の樣なれど何にもせよ作者の秘事をつたへんとある四人の名作者達いかなる大事を傳へ給はらんおしへ下されかしと始て尻もつ立て敬へばさもそうず〳〵此道に執心なるそちが心をあはれみ立作者となる秘事の一卷開き見てとくとゑとくせよ併し冷酒をのんで半途にして根氣を破る事なかれといふかと思へばドロ〳〵〳〵火の玉は四方になくなり上からぼつたり落たは一卷なり治藏始て悅喜の眉一卷取ておしいたゞき四人の作者は四天王其秘事なればさぞやさぞ張良が黃石公に一卷を貰ひしは唐土の下邳の橋の上是は日本道頓堀の空家の內ヱ、大願成就添しと其儘開き見るに大文字にて第一氣轉第二大膽第三上根第四記臆第五堪忍と計り書附て外に何にもなし是は何の事じや秘事でもまつげでもないハテかわつた事を書た物じやとあざける體相に宗左むつくと起上り最前からのあやしみ寐た體にてとくと聞たりそちは稀もの故人の生靈に傳を受るとは作者道に叶うたる仕合せ我もあやかる爲其一卷いたゞかしくれよとあるに治藏猶もがてんゆかずスリヤ此五ヶ條は先生のいたゞく程の名語でござりますかいかにも〳〵先第一に氣轉と書たは作者道の肝要たとへば古き狂言を仕組改め新らしく見せるが歌舞妓其中において役者の遣ひ樣を工夫して其場の模樣を目あたらしう仕組時々の見物の悅ぶ穴をとらまへ所に定め狂言を取廣げる時は一日はでにして役者によく合ひ面白がるべしされればこそ大坂狂言は京にてしぶくて見物の氣にあはぬ所もあり又京狂言は大坂では一向手ぬるし江戶狂言はきる物着て帶せぬにたとへ何れそれ〴〵の氣轉第一也第二大膽とは膽が太くなくては仕組になつても行つまりどの樣な上手なる役者でも菜屎屁屎に思ひ丁稚小女童つかふ心にて仕組めば

机の上よく見へ役者自由につかはるゝ物也第三上根とは下根では上作者にはなられぬといふ禁なり第四記憶とは物覺のよいこと今誤つて氣丈なると取違へ覺へたるは作者の文盲がしれて恥かし古狂言を能覺前々の上手の仕組をとくとがてんしてゐる時は舞臺机の上に見へて役者に働らき付やすし第五堪忍とは作者の心入れなり此道によらずよく堪忍する物は立身出世せし事古今藝者に限らず就中操作者と違ふて口からさきへ生れたる役者を相手にする事屎糟の樣にいはれても腹立ず狂言本打付てこんな狂言がなる物かおのれして見いひりくそ作者の給金盜人めと惡たい云はれても何とも思はず又は惣々こぞりかゝつてあほらしい狂言じや是をおめ〳〵とよふ本よみがしられた事じやとたとへ叩かふが張まはそふがへちまとも思はず堪忍して幾度も修行じやと心得しかられた顏もせず仕組あらためて役者の穴をとらへるが肝心腹立たり口おしいと思ふ心が有ては此廓にすまぬがよし昔より藝者根性といへば今更の事にあらずよく〳〵堪忍を守るなり此五ヶ條は名作者の性根魂なる事先師並木宗助口受の意見おれが心魂にゑり付置たり然るに今まのあたりのふしぎの一卷授かりしは天晴上作者に成べき前表たのもし〳〵と逐一に利害をとけば治藏ほとんど感じ入やゝ有て一卷懷にねぢこみ物をもいはず根板ぐはた〳〵〳〵空家の戸蹴立て飛ぶが如くに立かへりけり宗左跡に片頬で笑ひあいつは何を思ひ出しをつた渡邊の姨になつて是取ふ計りじやと破風蹴破りしけしきはてなァと夫より案じかけのもやう烟草と相談しける扨治藏は夫より謀反を起し師匠と賴みし宗左を敵にとり晝夜根氣をくだき五ヶ條の法を守りわづか三年の內に一方の大將となりしはゆゝしき嗚呼の者也なれども命を的に仕上たる作者故勞れ毎には茶碗の一こくのみ冷酒のといこふり心の火を削り終にヒュウドロ〳〵に成しはその身の本望とやいはんもと治藏は立作者となつて名を上たるは作者道の祕事の一卷所持せし故と兼々沙汰有ければ治藏が息引とるといなやならず作者の面々悔にゆくを付たりにてかの一卷を奪ひとらんとたくらみ我一後家をたらしこみかの一卷をいたゞかしくれよとたのみ取出し見せる所を互ひに奪あひつかみあひ何が書てあるやら血眼になつて喧嘩の

最中へ宗左のら〳〵と出來り各さなせそ〳〵其一卷の曰因緣おれがいふて聞かそふ元來其卷物はおれが拵へて其夜芝居の魂を釣おろし家根から付聲にていはせ一卷を雨のもる所よりほふつてやりしもきやつは上作者になるべき性根魂を見すへ心をはげませし計略鬼一法眼の三段めの趣向うつむけしと咄を聞て皆々はアレと喧嘩の腰もぬけ作者始てがてんがいたかゆかぬかまじくじ〳〵

右當世芝居賢氣は安永六酉年浪華半井何某が戯作にして京寺町三條上る菊屋安兵衛の板なり五冊物にて役者を始淨瑠璃語り三味線ひき人形遣いなど數段有る中に此一段は狂言作者の因みあれば爰に出す文中並木宗左と云は並木正三瀧田治藏は竹田治藏の事にて秋葉權現廻船話など書たる寶暦中の作者にておかしければ寫し置ぬ

竹豐故事の序

時つ風浪靜なる難波の濱むかしの京と名に高き高津の宮の高臺に登りて見れば煙立茶屋はいろはの四十八橲は八つの定芝居爰繁榮の大湊ふかき惠や道廣き道頓堀の片邊に住居する老人有年壯き砌より竹本豐竹の淨瑠璃を好てかたる事は不得手なれど聞事は好者なり幾年か東西の淨瑠璃操の替りを見放したる事もなし住家より程近ければ芝居の木戸口へ成共毎日通ひ外題看板にても見てかへらねば氣分勝れずあまり此道を好るゆえ知れる友達異名して筑後越前の頭字を取筑越翁と稱じける獨住身の氣散じと虧天目と德利引寄一杯の酒に醉を催す酒呑童子の道行月に分れて月に行實や盧生が見し夢の榮華の程は五十年借の浮身の樂みと雪の段を副臥とし一睡せるぞ豐なれ時東雲の頃なるに若き者共數十人入來り先生は御內に有ますかと案內す主は突と起て戸を開き是は〳〵未夜も明ざるに各打連立ての御越は芝居行と推したり初る迄は餘程間も有ぬらん先煙草にても參緩々と御出あれして各々方は筑後へか越前へかとたづぬれば大勢の中より親父分進み出否此人數の中にも豐竹へ參る者も有又竹本を見に參る人も候が斯同道して宿元は出ましたれど西贔負の東連中のと二組に別れて動もすれば喧嘩を仕出し姦しい事でござります先生には此道の御粹方ゆえ芝居の譯を御存の義なれば若い者共が片意地成贔負論をいたさず納得仕る御示

しを頼みます然ればまづ今日は芝居行を追ての事にいたし幸ひよい次手なれば淨瑠璃の由來物語が聞ましし度存ます若い衆いづれも何と〳〵と尋ぬれば皆々聞て是は一段とよい思ひ付御苦勞ながら御咄を頼み上ますると筑越翁聞て同氣相求る御所望幸ひ某しも徒然の慰み然らば物がたり致すべしと大字七行の稽古本二三冊と卷物一軸とをたづさへて座上に居り此來歷の義は餘程年經りし事と云又物覺へ薄きは老人の習ひ傳へ聞しに違し品も忘れたる事も多からん併所まだらに咄し申さん聞給へと破れ扇を叉に搆へて聲繕し東西〳〵東ヲ、西イ

寶曆第六丙子の年　浪速散人一樂

右竹豐故事三卷は我家の板にして芝居の濫觴淨瑠璃の由來太夫の受領を始古流の太夫の評三味線の由來操人形の故事に至る迄筑越翁のはなしに寄て實に盡せりといふべし其文淨瑠璃歌舞妓共に通ずる確言一二段を爰にいだす

音曲狂言綺語の事

惣じての音曲を名談集には鄙曲共俳優共戲遊共云なり何れも狂言綺語の戲れ事なりと云々狂言とは物狂は敷詞なり法界次第に曰綺は側なり語は辭なりと云心は道理に卒を綺語と號と云々周禮の註に曰發端を言と云答述るを語と云と云々毛詩の註に曰直に言を言と云論難するを語と云と云々然れば狂言綺語と云は堅き事を和らげ或は方便の爲に戲れ言をなして愚なる人を善道に導く謀計の誠なり白樂天の洛中集の記に曰願くは今生世俗文字の業狂言綺語の誤を以て飜して當來世々讃佛乘の因轉法輪の緣となし給へと云々此文に依て見る則は諸法實相の理顯然たり峯の嵐谷の響き鴝鳴鵲噪皆佛法と觀ず況や此淨瑠璃の文句趣向表には世間の戲相を顯すと雖勸善懲惡の深理をふくみ詞には當世の人氣をさつして作文をなせり神祇釋敎幽玄戀慕哀傷兵戈君臣父子夫婦兄弟朋友等の五倫の道を正し世の爲人の爲專ら賞翫すべき道なり信すべし見物すべし聞べし心を止て語るべし

呂律五音十二調子の事

夫若以謠淨瑠璃等の鄙曲の譜は狂言綺語の嬉遊言也とは雖も其態堪能に達する時は音義正しく大鐘大族姑洗蕤賓夷則無射等の六律に通じ大呂夾鐘仲呂林鐘南呂應鐘等の六呂にも達す史記の正義に曰律は氣を

統べ物を類す呂は陽を統て氣を宣と云々呂律調和すれば化來宮商角徵羽の五音に達せる故衆人の六根に徹して心耳を清させ六塵六情の偏欲を猒離なさしめ神魂を清淨になさしむるなり調音祕訣に曰○甲は聲の始なり其音上つて天の五蘊と成寒暑燥濕風なり呼息則天なり陽なり一調子高きを甲の音とす○乙は聲の終りなり其音下つて地の五立と成金水木火土なり吸息則地なり三調子下るを乙の音とす○呂は悅びの音なり陽なり雙調黃鐘一越調等は呂の音なり是天を司どる天上には樂多き故に此調子を悅の音と云なり○律は悲しみの音なり平調盤涉は律の音なり陰なり是地を司る下界には苦しみ多き故に歎き憂ふるの音とす○角の調子は肝の臟より出る和調にして直なり是雙調なり○徵の調子は心の臟より出る和調にして長し是黃鐘調なり○宮の調子は脾の臟より出る大に充て和かに緩し是一越調なり○商の調子は脾の臟より出る輕く少けれども勁し是平調なり○羽の調子は腎の臟より出る沈て深し是盤涉調なり○壹越斷金平調勝絕下無雙調皃鐘黃鐘鸞鏡盤涉神仙上無是を十二調子とも十二律とも云なり

熟思ふに筑後越前は天性の達人にて音聲の開語自然と五調子十二律に合ひし淨瑠璃一道の聖也孟子に曰大に而之を化するを聖と云と云々生得にして事の理に達するを聖と云也と註す然れば兩元祖の當道に達せられし所を以て見る則は聖といふに何ぞ憚る處のあらんや周易の略註に曰聖人の道は天地の萬物を育るが如しと註せられしは尤宜なる哉竹本豐竹の兩氏當道を世に弘められし德に依て今當流の淨瑠璃世上に專らに流布し是を產業として世を渡る人諸國の中に幾千萬人といふ數をしるべからず天地の萬物を育てやしなひ給ふ理に違ふべからず其功大ひならずや

名人上手下手評判の事

故陸奥茂太夫多川源太夫豐竹幾世太夫竹本播磨掾同賴母大和太夫和泉太夫河內太夫以下其時代に名人と呼れし太夫衆も筑後掾越前掾の兩元祖に及ぶ音聲は一人も有べしとは思はれず兩祖師は天性自然の達人なる故に卻句甲乙編頗の輩の師範にはなりがたかるべきか其故如何となれば斯る衆中の師傳を受得ても音聲不都合の輩は其流を直寫しに語る人は稀成べし

喩へば庵相なる木地の道具を上手なる塗師がぬり上たるを又島桐さつま杉杮の杢目よき木地道具との違ひ有がごとく成べし兩元祖は木地道具の如し其外上手分と呼るゝ衆はみな下手を塗上てよく仕立たる上手成べし夫故に今の世に譽れ有衆中は皆下手を塗直して能藝にする筋を魂膽しての上素人の弟子中に教へらるゝ故に此理を以て考ればかやうの太夫衆を師匠と頼み稽古せられば利方よからんと存せらる故竹本播磨掾當時の豊竹筑前掾豊竹駒太夫竹本錦太夫等は音聲兼備の達人と云にはあらざれ共切瑳琢磨の功をつみて名人の譽れを取られしと存る兎角上手ぶんと呼るゝ太夫衆は何分にも生質の器量薄くては名は揚られまじ又都ての藝者に名人と上手と下手の三品あり先名人と云は其一道に生れ付ねば達人名人杯といふ場にはゆき届がたかるべし下手にても骨髄に徹して其藝に執心ふかく修行の功つもりなば上手といふ迄にはなるべきなり名人に成べき淨るりは未だ功もなき内より程拍子の間合能關語譯能開へ清潔なる音聲なる上序破急の氣轉取廻しよくかたらるゝ人は名人に成べき器量兼て見へ透ものなり然れども其名人と成べき仕出しの淨瑠璃なれども稽古修行に精の入らざるは惡挫になり上手分と云場迄も行とゞかず終る太夫衆も有しなり又炊付て當をとらんとのみおもひ語る衆中は大方下手分の爲業なり顔氏家訓に曰上智は教ずして成下愚は教ふといへども益なし中庸の人はおしへざれば知らずと有此語實に宜成かな所詮名人と云は藝の道堪能にして其爲す業自然と至極の場にいたり感應見物の心魂に的するを云成べし故竹本筑後掾同播磨掾隱居豊竹越前掾三味線故鶴澤友次郎人形當時の吉田文三郎等の類は神化不測の名達人と稱して誰か非言あらんや次に上手といふは夫々の業をよくなすを云ふなり併し上手なれ共名譽の少き人も前々に有し故陸奥茂太夫竹本頼母和泉太夫等なり又上手の至る所にて名譽有しは故河内太夫當時の竹本大和掾同政太夫等成べし又上手分の中にて大丈夫なる聲柄は見物のほむる掛聲も多く是等の衆は時に合たる名物と云べし故竹本大和太夫當時の豊竹若太夫等を云べきか何分上手と呼るゝ太夫は數無こそ

太夫教訓名言の事

井上播磨掾清水の理兵衛に示されて曰淨るりの一體秋は隨分聲花やかにかたるべし是人の陰氣を引立んが爲なり春は引ゑめて和らかに語るべし人の陰氣浮立時なれば引しめざれば人の情寄らず時の氣に乘じてやはらかならざれば人の情に應へがたしと敎訓せられし由是に依て思ふに增補錵槌に北村季吟の曰呂は凡て和らか成音なり律は立て硬き音なり唐土の音聲はやはらか過て聞わけがたし日本の言語は清濁分明鮮然にして剛く聞ゆる唐土は呂の國なり日本は律の國なり是和漢呂律の不同呂は陰律は陽なり和朝には呂は春に用ひ律は秋に用ゆ唐土は是に反すと云々依之見る時は井上氏も此理に達せられし名人と覺る

竹本筑後掾へ陸奥茂太夫初心の砌問て曰女の詞はいかゞ心得てかたり可申や筑後掾答て曰第一に傾城の詞をよく合點して語らるべし瓢々と語れば儒弱に聞えて下品なりたゞ取止なく茫然と柔從成言葉を能々考へらるべし是さへかたり胝姪るれば外々の事共は皆語り易かるべし其故如何となれば語る處の者元來男成故信としたる事は生質に持て居る故なり次に心得べきは高位成御方の詞をばよく勘辨せらるべし貴き御方の詞なりとて位を取過てかたれば仔細らしく成て聞ぐるし此段稽古に工夫せらるべしと敎訓有しとかや

豐竹越前掾門弟和泉太夫河内太夫等に ゑめされて曰藝に精入ると云はわが役割の場をよく工夫して稽古に飽迄精を出し扨床へ上りて心を安らかに思ひてかたるべし稽古に精を入てさへ置ぬればやすらかにかたりても少も間抜はせぬものなり兼ての工夫に心を盡さず床にて計り精を入るれば力身立行づまりたる樣に聞へて賤し其上操へのうつり人形の働迄が不都合に成とおしへられし由聞たり

加賀掾門人宇治甚太夫伊太夫寄合談せしは師匠のかたらるゝ節所は見物衆極めて讃ざると云事なし我らは隨分精を入大事に語りても見物衆の掛聲なきは合點ゆかずと咄し合けるを加賀掾聞て曰皆の衆はかたり出すと否や讃られんと而已思ひ始終面白き樣に語らるゝ故要の場に至つて聲いたみ聞ゆる故讃度ても聲の掛られぬ樣に成なり某はたゞ何となく安らかに語り節所の場所にいたりて精を入語るなり始終共見物衆の掛聲をとらんとのみ心得ば肝心の場當るべか

らずと云々がゝる示しを傳へ聞れしにや又自分の發明成や故竹本播磨掾當時の豐竹筑前掾等は此教訓の理にかなひし語り方の樣に聞ゆる也

岡本文彌の曰荒事を語る時は淨瑠璃の文句相應に強みを引張て語るべし上邊計りを語り並べても人形の働きと相應せず心と形と二つに成る故當り目なしと云れし由尤成理なり併し事は一圖に計了解すべからず或太夫酒の醉の場を受取てかたられしに床へ上る時に臨んで茶碗酒を二三盃呑で語られしに一段と見物の請よく出來晴せしとかやかやうの人に若手負の場抔をかたらさば床へ上る時毎日肩先にても二三寸計り切られて後に語らるゝや一笑〳〵何樣の場成共只一心の工夫に有るべきなり

芝居を勤給ふ太夫衆は文句の淸濁り節付等にも心を付給ひて麁相の無樣に心得給へかし物置納屋の連子は破れても人目にたゝず座敷の障子紙は少しの破れにても見苦しく元祿年中に岡本文彌のかたられし淨瑠璃に老女の戀慕せる段の文句にしらがみすじに油付と云所を岡本氏は白髮三筋に油つけとの關語にかたられしなり虎屋源太夫此處を難じて曰此文句作者の心には白髮筋に油付にて有べし如何なれば三筋や五筋の髮の毛には油を付る事は成まじ勿論三筋計の白髮は目にも見えず手にもかゝるまじ併し文彌は天性の妙音にて何事も聲にて押せば是非に及ばず一聲二節と云なれば文盲にても時の譽を取し人なりと云々故實を知り顏に自慢せられても聲がらの甲斐なき人を喩へて云ば智惠有人の貧乏成に同じ不都合にても聲のよき語手は有德成人の阿房に同じ賢くて金持たらんは猶以て好ましかるべし然れば聲のよきを賴みにして修行のうすき太夫衆は名人といふには成がたかるべし

藝者の身の上計にも限ざる事なれど運の能と惡きと有先運あしき人は至極の上手なれども時に合ずして用ひられぬ身の上も有或は自分の器量を顧みず古實を守るがよひと計り心得筑後越前兩元祖のかたられし通を直寫しにせんとのみ思ひ語らるは了解違ひといふべしかゝる人をたとへて云ば學問によく達したる僧の談義の下手なると同意なり佛の本意計說て方便の說をまじへざれば聽衆眠氣出次第に參詣も薄らぐものなり然れば何を以て衆生に濟度利益を施さん

や機に因て法を説と云なれば此段淨瑠璃に引當工夫有べし併し芝居を見淨瑠璃を聞は欝氣をはらさんが爲の慰み事なれば兎角して成とも見物衆を悦ばさんと名譽有し太夫達の眞似をし又は歌舞妓役者の詞色を似せ或ひは放曠にて當りをとらるゝは本道の當りとは云難し道外がましき語り方は場の見物衆へはあたりは有べけれど棧敷に居らるゝ衆の耳へは悦ばれまじ何とやら此近年に及びては兩元祖のかたり弘められし遺風はうすらぎし樣に聞ゆる也

五段續語場役柄の事

連中問て曰淨瑠璃五段つゞき十一二幕の內いづれの場か大切に候哉筑越翁答て曰是を五段に綴るは能の番組に同じ初段は脇能二は修羅三は葛事四は脇所作第五は祝言なり大體是に表せる物なり其內第一太夫の重んずる所の役と云は大序と三段目の切第二は四段目の切と道行第三は二段目の切と三段目の口なり第四は初段の切と四段目の口なり又出語りは三段目の詰と同敷大切成役なり其外作趣向に依て景事抔に限らず此餘の所にも要とする能場所有べし古來より兩元祖大概此意を以てつとめ役割をもせられたり右に談ずる如く大序は一座の立物太夫のつとめらるべき第一の大役なり先は其日の祝義と云次には見物衆への一禮の爲なり尤一部の始なれば末々の輕き衆には語らせ間敷場なり爾雅の釋語に曰序は叙なり緒なりと然る時は其綱要をあぐる事蠶(かいこ)の絲を抽づるが如しと云々序と云字を糸口と訓なり其糸の口亂れなば始終の亂と成なんものを然るに此近年良ともすれば輕き太夫衆の大序をかたらるゝは歎かはしき事にあらずや併し今時の太夫達は兩元祖ほどに大丈夫にあらざる故三段目四段目の本役を大事と思はるゝから未だ見物も入そろはざる間の役目故此大役を未熟なる衆中に勤さるゝと推量せり故筑後掾存命の節は今時ほど淨瑠璃も長からず越前掾時代に至りては五段續も次第に永くなりしか共大序三段目四段目の切は勿論五段目に景事の有しか共要の場は越前掾一人してつとめられしなり老子經に曰天下の難事は必易より作る天下の大事は必細成より作ると云々然れば大序は勿論其外の役義をゆるかせにし給ふべからず又末々の太夫衆初段の中五段目落合等の輕き場を受取給ふとも其役義を大切に存られ工夫を付て勤め給は

〳〵次第に立身し給ふべしさせる場にあらずとて捨鞭を打給ふ事なかれ

淨瑠璃作者の事

淨瑠璃の作者と極まりたる人古昔はなし俳諧師あるひは遊人などの慰みに作れり中昔暦といふ淨瑠璃は西鶴翁の作也とかや是を産業となせる人は近松門左衛門に始る此人博學碩才にしてしかも當世の人氣を察し世間の世話をよく呑込て百餘番の淨瑠璃を作られけり文句玄妙不思議を綴る元來は京都の産にて去る堂上の御家に仕へ本姓は杉森氏にして由緒正敷人なりしが故有て浪人と成又宇治加賀掾の淨瑠璃をも作られたり此人世上作者の元祖なり其後大坂に立越竹本筑後掾の作者とならる享保九年辰十一月廿二日七十餘歳にて死去せられぬ平安堂巣林子と號す法名は阿褥院穆矣日一具足居士と稱せり近松氏過ゆかれしか共猶餘光失ず相つゞき數多の作者出來りて趣向作文をなすといへ共元來近松程の器量なき故か古語の取誤り古實の相違有職のたがひ等間々ありて見聞苦しき品も多ければ畢竟は狂言綺語也と了簡せねばならず併し機轉發明の作意劣らぬ所も有又は希有の趣向等も出さるゝ故大當りを取らるゝ段是亦何れも達人と云はんに強て難有るべからず其外作者と名を揚られし人々には錦文流村上嘉助紀の海音西澤一風筑後の座本竹田故出雲松田和吉長谷川千四並木宗助同丈助安田蛙文爲永太郎兵衛江戸にては北條宮内塚原市左衛門岡清兵衛等此外にも有しかど換骨の餘情薄く名高き衆ならねば略し畢ぬ併し是等は皆故人と成られしも多し當時東西の座共に名譽を顯はされし作者達は人々の知れる事なれば談ずるに及ばず

淨瑠璃古今の序

夫淨瑠璃は人の心を種として万の趣向とはなれりける世の中に有人事業繁き物なれば心に思ふ事を見る物聞物に付て作り出せるなり色に愛る世話事義理に清る時代事を見れば幾年生るもの何れか此道を好まざりける力をも入れずして人の情を感せしめ嫁を惡む姑にもあはれと思はせ男女の中をも和らげ悋き親父の意をも慰むるは此道なり過し時世の竹本筑後掾なん淨瑠璃の聖なり又豊竹越前掾といへる人有けり淨瑠璃に奇敷妙なりけり賴光山入の道行は竹本氏の一節に綾錦の如く語り雪の段の出語りは豊竹氏の音

聲に雲井迄も響きなんと思はる越前は筑後の上に立む事難く又豊竹は竹本の下に立む事難くなん有ける此人々を置て吳竹の世々に薹茂り多き門弟達の中に竹本播磨掾なん世に知られし名人なりしかど惜や不幸にして短命なり爰に往古の事をも此道の意を得たる人當時は僅に五六人なりき而はあれども彼是得たる所得ぬ所なんあれり豊竹若太夫は歌仙第一僧正遍昭の歌の意に同じ淨瑠璃のさまは得たれども其言葉花にして實少し譬へば圖に畫る女を見て徒に情を動かすがごとし

豊竹筑前掾は歌仙第二在原の業平の歌の意に同じ其情餘りて調子低し譬へば盛り過たる花の色は少しといへども而も薫香あるが如し

竹本政太夫は歌仙第三文屋の康秀の歌の意に同じ淨瑠璃は功者にして其體俗に近し譬へば商人の好衣着たるが如し

豊竹駒太夫は歌仙第四喜撰法師の歌の意に同じ詞幽なる樣なれど始終り正しく喩へば雲隱れせし秋の月の曉の風に晴るゝがごとし

竹本大和掾は歌仙第五小野の小町の歌の意に同じ古への竹本賴母の風なり音聲艶敷して氣力なし喩へて謂はゞ好女の惱める所あるに似たり

竹本錦太夫は歌仙第六大伴の黒主の歌の意に同じ頗逸興有然れども少し野鄙なりたとはゞ薪を負る山人の花の蔭に休めるが如し此外の太夫達其名聞ゆる野邊に生る葛の榮擴ごり林に繁き木の葉のごとく多かれど未だ淨瑠璃の奥義には至らざるべし竹本の流絶せず豊竹の節細にして正木の藤永く傳り鳥の跡久敷とゞまらば程拍子をも知り事の心を得たらん語人達は大空の月を見るが如くに上代を仰で今を希望ざらめかも

淨瑠璃東西外題番附

天明年間竹本豊竹東西の淨瑠璃外題を見立番附として半切二枚にわかち角觝番附の如く摺し板行の寫を爰に出す

西方
大關 五段續
關脇 同
小結 同
勸進元竹本
國姓爺合戰
ひらがな盛衰記
蘆屋道滿大內鑑
前頭 同
同 同
同 同
同 同
同 同
同 同
同 同
同 同
同 同
同 九段續
同 五段續
同 十一幕
同 上中下
同 五段續
東方
大關 五段續
關脇 同
小結 同
勸進元豐竹
北條時賴記
祇園祭禮信仰記
和田合戰女舞鶴
前頭 同
同 同
同 同
同 同
同 同
同 同
同 同
同 同
同 同
同 上中下
同 五段續
同 同
同 同
同 入場
菅原傳授手習鑑
大塔宮曦鎧
大內裏大友眞鳥
加賀國篠原合戰
三浦大助紅梅鞠
須磨都源平躑躅
鬼一法眼三略卷
壇浦兜軍記
夏祭浪花鑑
義經千本櫻
假名手本忠臣藏
新うすゆき物語
小野道風青柳硯
賴政追善芝清和源氏十五段
攝津國長柄人柱後三年奥州軍記
粂仙人吉野櫻那須與市西海硯
苅萱桑門筑紫轢藤原秀鄉俵景圖
釜淵雙級巴一谷嫩軍記
風俗太平記
東鑑御狩卷
八重霞浪花濱荻

前頭　七場
同　初中後
同　五段續
同　同
同　同
同　同
同　同
同　同
同　同

男作五鴈金
愛護雅名歌勝閧
津國女夫池
佛御前扇車
井筒業平河内通
三莊太夫五人嬢
信州川中島合戰
右大將鎌倉實記
小栗判官車街道

行司

近松門左衛門

松田和吉

前頭
同
同
同
同
同
同
同

御所櫻堀川夜討
本朝三國志
行平磯馴松
平家女護島
姫子松子の日の遊
相摸入道千疋犬
戀女房染分手綱

前頭　五段續
同
同
同
同
同
同
同
同

相馬太郎荘文談
義仲勳功記
倭假名在原景圖
百合稚高麗軍記
安倍宗任松浦簪
本田善光日本鑑
武烈天皇艤
潤色江戸紫
酒呑童子出生記

行司

紀海音

並木宗助

前頭
同
同
同
同
同
同
同

忠臣金短冊
建仁寺供養
身替弓張月
客競出入湊
岸姫松轡鑑
楠正成軍法實錄
前九年奥州軍記

同　持統天皇歌軍法
同　日高川入相花王
同　吉野都女楠
同　古戰場鐘懸の松
同　曾我會稽山
同　源平布引瀧
同　日本振袖始
同　太平記菊水の巻
同　天神記
同　敵討櫺樓錦
同　孕常盤
同　敵討未刻の太皷
同　山崎與次兵衞壽門松
同　大經師昔暦
同　嫗山姥
同　曾根崎心中
同　心中重井筒
同　傾城反魂香
同　傾城八花形
同　淀鯉出世瀧徳

同　昔米萬石通
同　人丸萬歳臺
同　奥州秀衡有髪婿
同　物ぐさ太郎
同　丹生山田青海釵
同　難波丸金鶏
同　田村麿鈴鹿合戰
同　祇園女御九重錦
同　鎌倉大景圖
同　三國小女郎曙櫻
同　惡源太平治合戰
同　攝州渡邊橋供養
同　雄結勘助縞
同　櫻姫賤姫櫻
同　先陣浮洲岩
同　茅源氏鶯塚
同　秦始皇帝太夫松
同　富仁親王嵯峨錦
同　本朝五翠殿
同　袂白絞

前頭　雙生隅田川
同　七小町
同　車還合戰櫻
同　應神天皇八白幡
同　赤松圓心緣陣幕
同　京土產名所井筒
同　軍法富士見西行
同　楓狩劍本地
同　本海道虎が石
同　曾我扇八景
同　心中天網島
同　心中宵庚申
同　心中二枚書雙紙
同　卯月の紅葉
同　冥途の飛脚
同　河內國姥火
同　二人靜胎內探
同　百合若野守鑑
同　傾城吉岡染
同　鎗の權三重帷子

前頭　鬼鹿毛武藏鐙
同　けいせい三度笠
同　けいせい吉原雀
同　鎭西八郎唐土舟
同　日本傾城始
同　賢女手習鑑
同　心中戀中道
同　西行法師墨染櫻
同　南北軍問答
同　お初天神記
同　曾我錦儿帳
同　記錄曾我玉簪箒
同　大佛殿萬代礎
同　蒲冠者藤戶合戰
同　源家七代集
同　赤澤山伊藤傳記
同　莠伶人吾妻雛形
同　萬屋助六二代紙子
同　和泉國浮名溜池
同　尊氏將軍二代鑑

同　長町女腹切
同　賴朝伊豆日記
同　曾我五人兄弟
同　博多小女郎浪枕
同　娥歌がるた
同　松風村雨京帶鑑
同　日本武尊東鑑
同　鎌田兵衛名所盃
同　忠信廿日正月
同　雪女五枚羽子板
同　彙好法師物見車
同　伊勢平氏年々鑑
同　元日金年越
同　太政入道兵庫碑
同　丹州爺打栗
同　兒源氏道中軍記
同　伊豆院宣源氏鑑
同　双蝶々曲輪日記
同　將門冠合戰
同　崇德院讃岐傳記

同　南都十三鐘
同　待賢門夜軍
同　本朝檀特山
同　鎌倉比事靑砥錢
同　戀の寒ざらし
同　女蟬丸
同　茜染野中の隱井戶
同　狹夜衣鴛鴦釵羽
同　鵜山姬捨松
同　本朝班女扇
同　靑梅擇食盛
同　播州皿屋敷
同　道成寺現在鱗
同　紀僧正旭車
同　遊君衣紋鑑
同　詩近江八景
同　浦島太郎倭物語
同　花筏巖流島
同　萬戶將軍唐土日記
同　夏楓連理枕

前頭　出世握虎稚物語
同　役行者大峯の櫻
同　楠　昔　噺
同　昔男春日野小町
同　極彩色娘扇
同　奥州安達原
同　工藤左衛門富士日記
同　出世景清
同　百日曾我
同　天智天皇
同　佐々木大鑑
同　源氏烏帽子折

頭取　蟬丸　用明天皇　酒呑童子

千秋萬歳樂

前頭　玉藻前曦袂
同　浪花文章夕霧塚
同　日蓮上人御法海
同　天智天皇苅穗庵
同　裾重紅梅箙
同　双扇長柄松
同　甲斐源氏櫻軍記
同　寫儘足利染
同　義經新高館
同　心中二腹帶
同　神功皇后三韓襲
同　大友皇子玉座靴
同　玄宗皇帝蓬萊鶴

頭取　枕久末松山　鎌倉三代記　八百屋お七

淨瑠璃繁榮

身替弓張月の寫

享保十巳年五月豊竹座淨瑠璃丸本今年迄百廿六年になるむかし狂言なれば寫して爰に出すものなり

美丈御前
幸壽丸

身替弓張月（ゆみ）　作者　西澤一風　田中千柳

鷹の身馬の足牛の尾まろき蹄蛇の頭燕の頤龜背魚尾の妙質いかんぞ時に得がたしとせん文武を兼し英雄良士則人の麟鳳にして。德をならぶる聖が御代六十六代一條の院。寶算わづか七歲にてあまつ工を日の本にヲロシうけ繼給ふぞ。やんごとなき。君いとけなくましますが故。

古今いろは評林の序

陳眉公的、評二西廂記一、李卓吾的、評二琵琶記一、千古撮當、後人尙且、有二紙鶴泥龜之慨一、是个甚麼緣故、謂其翅不施足不レ縮也、原來院本的評論、世人唯知二介做一乾扮做レ坤、未レ知二凍蝦蒸寒之趣意一、是故到底不レ免二膠レ柱鼓レ瑟之見識一、噫嗟蚤子無レ眼、知情有レ辟、是个古今通病、遂入二膏肓一、況且後世灰飛煙滅、不レ見二一個扁倉一、平安自笑主人、原是捕趣的元師、其論二俳優一、眞個似詹尹君平的善レ卜、唐擧子卿的善レ相一般、些寸花嘴、說レ綠談レ紅、遇二人所レ喜、登場子弟縱然做レ套做レ圈、能彀得二青龍擬一白虎一麼、件々有二君眼中一、如今這忠臣藏院本、生則上從二澤邨訥子一、下至二尾上芙雀一、三都四十余次拘欄、一座之且、淨、丑、渾、論二其本事一頓盡、其明辨當論誰入レ筏麼、啊噫恁地的咱、自笑主人的才却在二陳李二公之右一者可レ知、俺於二自笑一、一路友班、故人所レ謂酒兄肉弟也、諺道貍子打レ鼓猫子舞、得下不レ爲二左氏一作中玄晏上麼、奉レ勸當今趨情步趣的徒、死心揚地、熟讀二這書一、他日做二那知情的掌盤一者、不レ待二七十三八十四一呢、于レ時天明乙丑之冬日、書二于淨福門前一、一條衡衙之寓居一、

平安第一風流才子宿花眠柳幇襯主者　出生子

古今いろは評林の發端

己を發して白盡すを忠と云とかや其心を盡して欺かざるなりとは自然の字論忠を體として義を要となすの作意〳〵どう取なしても當らざるといふ事あらず抑元祿十五癸午年東武なる俳諧師寶田晋齋其角のもとより浪花の何某へ來りし文中に

此程の一件も二月四日に片付候て甚噂とり〴〵花

やかなる說も多くして無上忠臣と取沙汰此節其事計に候境町勘三座にて十六日より曾我夜討に致して十郎に少長五郎に傳吉いたし候へども當時の事遠慮も有べきよしとて三日して相止候（前後略□但し少長は元祖中村七三郎傳吉は二代目宮崎也）

是を此趣向の始として大坂にては寶永七寅年篠塚庄松座におゐて吾妻三八作にて則篠塚次郎右衞門大岸宮内の役力彌には中興までつとめし佐野川萬菊若衆がたの時是を勤めしが歌舞妓狂言にての始として此狂言大當りなるよしとて中寺町正法寺日親堂へ繪馬に此圖をあらはし次郎右衞門悦びの餘りに是を奉納なし今に殘れりとぞ京都にては同じく寅年の秋二芝居共右狂言を出す一方は大岸宮内に山下京右衞門一軒にては小佐川十右衞門此役をなす小佐川跡より初日出たれども大々あたりを取しとぞ其後享保二酉年大坂にて故澤村長十郎大岸となりて姉川新四郎寺岡平右衞門の役をぞ勤め大當りを得て同十一午年の秋大坂嵐三右衞門座にて又も澤長此役をなせど此時は狂言少しかはりて不破數右衞門に嵐勘四郎勤めしなり享保廿卯年四月大坂にて中村十藏則座本にて大岸宮内の役をなして此時堀部安兵衞に藤川平九郎夫より後狂言いろ〳〵とかはり作るあるひは大岸に姉川新四郎などの勤し事もあり後延享四卯年京都中村粂太郎座元の時大矢數四十七本と外題して澤村宗十郎後に助高屋高助元祖訥子大岸役にて六月朔日より初日出して大入を取しなり其矢聲大坂にひゞき同じ外題にて市山助五郎宮内の役にて狂言つとめたり今の假名手本七つ目は此時澤村宗十郎が形となりて凡其俤を手本と成來れり其後歌舞妓狂言にも

寶曆十一年巳十二月廿二日
泰平いろは行列　續　十　段　大坂角の芝居　座元中山文七

明和八年
小袖藏いろは配　七　冊　物　京北側西の芝居　座元尾上粂助

安永六年酉十二月八日
日本花赤穗鹽竈　四十七段續　大坂角の芝居　座元小川吉太郎

是らも追々出て各當りを取るといへども兎角忠臣藏出て後は此狂言を第一として仕打も是にこそ工夫物好を入大に委く成たり

一操淨瑠璃狂言にては其頃近松門左衞門作にて寶永三戌の年五月五日より竹本筑後掾の座に兼好法師物見車といへる切に碁盤太平記と外題し此趣意を出したり尤此淨瑠璃には高師直鹽谷判官また大星由良之

助と出し初たり又豐竹越前少掾の座にては享保十八丑年十月朔日より忠臣金短冊と外題を出したり此時は小栗横山の時代にて大岸由良之助の名で出たり夫より後寛延元辰年八月十四日初日として同竹本座にて初て假名手本忠臣藏と外題を出して大當りの評判つよく有しが其頃太夫がたのもめ合出來て此太夫島太夫など半にして豐竹座へ入かはりて大和掾初め内匠太夫後有軒上總太夫入來りてしばらく勤といへども自分の節付なせし程にもあらねばおのづから勢ひうすく成りて思ひの外に其年十一月中頃迄して蘆屋道滿にぞかはりたりされども始にいふ如く此狂言のほまれつよくして始の大岸宮内の名は是にて消て是よりして大星由良之助にぞ改りたり故吉田文三郎此大星の人形を遣ふもかの澤宗訥子が風儀をあらはし並木宗助が作意に丸にて七つめを其儘にて用ひ入たりとぞ一操淨瑠璃にて同趣向の狂言の外題其年記をしるす

竹本座は　碁盤太平記　上下　寶永三戌年五月五日初日

假名手本忠臣藏　十一幕　寛延元辰年八月十四日初日

太平記忠臣講釋　讀切十一册　明和三戌年十月十六日初日

鰭方武士鑑　十幕　明和九丑年七月廿八日初日

いろは藏三組盃　續十幕　安永二丑年七月廿八日初日曾根崎芝居にて座元竹本染太夫

忠臣金短冊　五段續　享保十八丑年十月朔日初日

難波丸金鷄　五段續十三段　寶曆九卯年五月十四日初日此狂言大序夜討墓前に首を手向る

いろは歌義臣鑒　十一段物　明和元申年十二月十七日初日

忠臣後日噺　上下　明和九辰年四月日刻初日堀江市側座元豐竹此吉

合詞四十七文字　十段續　天明二寅年九月廿三日初日堀江市側座元豐竹此吉

太平義臣礎　十册物　天明四辰年正月二日初日堀江市側座元豐竹此吉

忠臣いろは實記　續十一段　安永四未年七月十五日初日江戸豐竹肥前掾座

豐竹座は

其外女ゆらの助になしたり又は中芝居或は操などにても其侭を端くれに加ふる事有といへども今是を略してかの忠臣藏の各仕打のかはりめをしるしそれに評を付て古今いろは評林と題する物ぞかし

一寛延元辰年より今天明五乙巳年迄年數三十八年の間に假名手本忠臣藏を三ヶ津の芝居に於て四十一度の興行なり其役割殘らず左に記す

天明五年乙巳霜月吉日　　八文舍自笑述

忠臣藏狂言の說

右古今いろは評判は中本二冊に假名手本の狂言を三十八年の間に四十一度興行の度毎の役割及び其時々の仕うち思入の評判をくはしく書し書なり天明五巳年より六十六年此かたの忠臣藏のみを擧て評せばなか〳〵際限なかるべし予近頃忠藏類聚と外題して假名手本は誰も人のよく知る所なれば是を省增補の書を集るに前に云碁盤太平記忠臣金短冊より此かたの外題四十餘部あり尤歌舞妓淨瑠璃の佳作なる者を拔萃して四十七段を一部とし櫻木にのぼさんと早草稿半に及べり此書の附錄一卷に雜劇の番附書雙紙迄悉く寫て戲場好人の方に示さんと欲すやがて上木のうへ見給ふべし爰に四十七士の實說を書たる書頗多し舊赤穗義臣傳といふ板木を始め赤穗精義內侍所寫本四十卷芝泉雜記泉岳寺にて義士の働を聞書せし書なり介石記良雄の行狀の聞書なり義士順從錄寫本廿五卷淺野細川の大守家中に命じて實說を集させられし書也此餘誠忠武鑑など呼で諸家の聞書をこと〴〵く見しが大同小異にして趣は變らねど珍說も又なきにあらず其よき條を舊として予大石摺義士法帖と題して一日の狂言十一段兼て仕組てあり未よき座組にあはざれば世に出ず是も類聚に續て上梓すべし抑此一件は誰もよくしる事なれど元祿十四巳年三月に發つて翌十五午年極月に夜討し翌十六未年二月四日に落着す然れば復讐夜討の年より今嘉永三戌年迄百四十九年となれり此一條より歌舞妓淨瑠璃の雜劇にかゝる輩を始講釋錦畵等に至る迄年々歲々是が爲に業を發し口に糊する事いか計りか皆此義士の餘光成べし

伊賀越復讐の說

此傳奇の事は前編にも演たれども序に云實說と呼ぶ書殺報轉輪記寫本廿卷渡河記實錄寫本三卷水月記寫本五卷など有戲場狂言には伊賀越乘掛合羽天永六酉年淨瑠璃には伊賀越道中雙六天明三卯年始て狂言とはなれり此實說は武將感狀記板本十卷の中にも演て寬永九申年正月廿四日池田家の臣渡邊靱負同家中河合又五郎に討れしより騷動おこり伊賀上野にて荒木又右衞門が助太刀して數馬が父の敵を討しは寬永十一戌年十一月六日なり今年より二百十七年のむかしなり安永に始て狂言にせしは百四十三年めなり尤御當代のことにて遠慮もあれば足利時代にして管領上杉の家臣和田志津摩澤井又五

郎と呼かへ譽田大内記の家來唐木政右衞門助太刀せしとは歌舞妓作者奈河龜助が一世の作にして此右に出る狂言なかるべし淨瑠璃に近松半二が道中雙六は乘掛合羽を原として七ヶ年後の作なれば第二義となる事勿論なり近世予が增補の外題に袖硯伊賀越日記とし此春又けいせい譽の兩刀と文字にかきほまれのすけだちと讀せたり外題に伊賀越と呼ずして伊賀越としらせん爲の戲なり其上翫雀（當時訣右衞門成駒やなりふ）十三ヶ年ぶりにて東都より上坂なれば其口上を割外題に書込て

伊賀越通る初旅の曙は上野か淺草から乘掛合羽のお目見へは唐木流の奉書試合渡邊澤井が仇討の道は吉田か岡崎泊り道中雙六ふり袖を古市躍の花笠試合とは賦しけり尤奉書試合笠試合と云は水月記に有て柳生但馬守に二人の子有兄重兵衞は和州千壽院に居二男又太郎父に勘氣を受大久保忠敎の世話にて諸國を劍法の修行に廻り練磨の功をへて東都に歸り忠敎の屋敷にて父子の名乘をせずして但馬と立合ふ但馬我躬としらず鎗にて突てかゝる又太郎は無刀にて是に向ひ庭前に作りある菊の上にふるき笠有此笠をとつて鎗をふせる是を柳生の笠試合と云但馬親子名乘をして又太郎跡目にたちいまだ柳生の奥義をうけぬ間に父但馬は相果けり兄十兵衞も和州にて歿し又太郎但馬の守と名のれども眞の奥義をしらず天下の師範をせり爰に和州柳生十兵衞の門人伊賀の産荒木又右衞門と云劍術無雙の達人有て十兵衞より柳生正傳の奥義を受後東都に出て劍術の道場を出し海內無雙柳生眞傳とか書たる看板を出す柳生の門人諸大名二代目但馬（始又太郎名）に告る但馬は眞の奥義を受ざれば呼寄て試み父兄の弟子にて眞傳を受し者か又虛をもつて名を賣る者ならば討すてんと又右衞門を屋敷へめしよす又右衞門臆せず但馬の屋敷へ行無刀にて稽古場に通され但馬次の間より透見して人相のたゞならぬを感じ半信半疑なから餘人を遣ざけ稽古場に入て立合んとす又右衞門木刀しなへなどを取らず神棚の瓶子に挿たる奉書の造酒の口をとつて但馬が木刀清眼八雙の構へにむかひ是より但馬又右衞門が素性を問ふ荒木は十兵衞殿より直傳を受しと云是より但馬へ奥義をつとふとの實說を奉書試合とて呼て手にもとられぬと云意を以て水月記に出たり是は伊賀越の狂

言にはのきたる說なれども予兼て此條を仕組伊賀越の狂言に取組んと思ふがゆへ割外題に書入腹稿は有たれども狂言幕數にかぎりあり重ねてさせんと腹の內に溜置たりかゝる著作道に戲るゝ腹中にはいかなる物のあらんもしれずいともおかしき業にあらずや

昔八丈城木屋の說

實は白子屋お熊と呼て江戸新材木町葺屋町堺町兩芝居の有し隣町の事にて其跡今に有白子屋庄三郎とて材木屋の娘なり實說と云書大岡仁政錄及近世江都著聞集にも出てよく世人のしる事なれども爰に畧出す主庄三郎は世事にうとき虛氣者にて女房お常は心持いたつてかたましく欲心ふかき女なり故に亭主を尻に敷町內を廻る髮結と密夫をし娘お熊は器量姿とも申ぶんなき美人なれ共母に似て身持正しからず衣裝の好かみかたちも芝居町に近ければ役者の如く仕立上氣の者にて忠八といへる手代と通じ家內取しまりなく奢つよければ身上少々不廻りに成けり仲人有て大傳馬一丁目地主彌太郎の手代又四郎といふ者五百兩の持參金にて聟に入りお熊との中に男子一人出生しけれども是忠八が胤なりとは世間の者迄よくしりけり母お常は出入の者と通じ娘は手代と密通すれば下女下男迄姦婬して更に人家の交にあらず手代共は引負の上駈落取逃して身上さん〴〵になり持傳へたる角屋敷を賣んとす同町に加賀屋長兵衞と云者有て律義なる人にて常々懇意の中なれば白子屋の家內に段々異見を加へ聟又四郎の持參金も多きに親もとへ聞へもいかゞなれば三百兩は此方より貸べき間屋敷を賣拂ふはとゞまるべしとて質素儉約の事のみをさとして合力有しに俗に云燒石に水とやら其年もつかひなくし聟又四郎を不緣にせんと計れども表向に離緣の時は持參金をもどさゞればならずとお常お熊忠八と姦計を廻らし朝飯の膳部に大毒をゑこみ聟又四郎をころさんとせしを下人長助と云もの密にゑらせければ又四郎大に驚き早速懇意のかゝや長兵衞方へ行いさいを告る長兵衞是をなだめて白子屋へゆきよそながら異見を加へ聟離緣には金子入べし爰でこそ家屋敷を賣てなり共持參金をつくなはれよといはれて庄三郎御異見こそ忝しと屋敷を長兵衞方へうり金子五百兩受取けり（此かゝや長兵衞といふ人は其頃の篤實家にて其後公儀かざり御規式御用をつとめ子孫今に有）扨右の金子を又四郎に付

離縁すべきを常忠八此金子を惜しみ外に科を付又四郎を追出すべきと謀をめぐらし下女久より腰元菊に申ふくめて聟又四郎に剃刀を持て疵を付させ心中の仕そんじなりと流布させ持參金を返さず離縁せんと工みしも忽天罰にて事あらはれ又四郎菊をおさへて町奉行所へ訴へければ大岡越前守殿御捌にて御吟味の上享保十二未年十二月七日に落着しけり又四郎妻くま廿三歳此者儀手代忠八と密通し母忠八らと申合夫又四郎を殺害致べく爲下女きくへ申付疵付候段不屆至極に付町中引廻しの上淺草に於て獄門に行ふものなり庄三郎手代忠八此者儀主人庄三郎養子又四郎妻と密通いたしふとゞき至極に付町中引廻し淺草に於て獄門に行ふ者なり庄三郎下女菊十八歳此者義主人庄三郎妻常何程申付候共主人の事に候へば致方も有べきの處又四郎に疵付候段ふとゞき至極に付死罪可申付候但し引廻しに不及候庄三郎下女久此者儀庄三郎聟養子又四郎へ疵付候やうにと傍輩の菊へ申すゝめ候上又四郎つま熊へ手代忠八密通の儀取次いたし旁不屆に付町中引廻死罪申付候庄三郎妻常四十九歳右常儀養子又四郎に菊疵付候儀に付熊事母子の儀に候へば惡心たくみ候事露顯依之遠島可申付候但し事濟候迄牢舍たり又四郎養父庄三郎養子又四郎へ菊疵付候節もさつそく樣子をも見屆ず候上妻娘幷に手代忠八ふとどき成儀一所に有ながら不存候段重々不埒なる儀に付江戸中追放可申付候庄三郎養子廿九歳又四郎を始手代清兵衞下人彦八長助權助伊助右之者共御搆無之右之御書付は御用番御老中松平左近將監殿より大岡越前守殿へ御渡し被成候となり此時お熊は引廻しに出るに衣裝上に黃八丈の小袖下着白無垢きよらかに着繩にくゝられ馬に乘り襟に水晶の珠數をかけ口に法華經の普門品を高らかに唱へて引渡されけるとかや斯る時觀世音も何として救ひ給ふべき此已後をばらくは婦人黃八丈の小袖はお熊が引れし時着しとて忌嫌ひけるとなり享保十二未年より五十三ヶ年後戀娘昔八丈と云江戸淨瑠璃安永四年九月に仕始けり今よりは百廿四年の昔語りなり白子屋庄三郎を城木や庄兵衞お熊をお駒母お常の密夫髮結を娘の色として才三と呼び忠八を丈八と作り聟の又四郎を佃屋喜藏と云惡者にせしは聟又四郎が不幸なるべし淨瑠璃の後いろ〳〵と增補せしもの少からず色盛八丈鏡など

外題に呼し事も有けり

椀久物狂ひの說

椀屋久右衛門は浪華御堂前の豪商にして古き家とぞ舊趾今詳ならず椀久新町の松山とふかく馴染端手に遊ぶ事增長して延寶の頃中元に正月の遊びをし廓中の靑樓に門松を建させ其身は年男の豆打なりとて步金小粒を桝に入れ坐敷〳〵に蒔たりける親類緣者其奢侈をとがめて座敷におしこめ世間へとては出さゞりければ鬱氣のあまりに發狂して炮烙頭巾の儘くるひ出る故京師五條坂に出養生をさせ後すこしく病ひ治して京都にて歿したりとも云寺は大坂八丁目寺町實相寺本堂南の方に有て宗達の墓とのみ記して年號見へねば歿年の程ゑるべからず五條坂に居る頃近隣には陶器師多く住所なれば椀久も手づくねにて金魚の如きの魚の素燒を拵らへ庭中の池へ投こみ樂みとし其遺る物なりとて京師の陶器師より予に先年送りし事有椀屋と呼は木具の膳椀を商ふにあらず陶器商ひの問屋にて五條坂の職人は多く椀久方のかゝへにてかの地に別莊あれば扨養生に登せたりと云寶永の頃椀久末松山椀久熊谷笠と云淨瑠璃に物狂ひを仕始てより享保十八丑年に椀久松山元日金年越と外題して文耕堂長谷川千四作せしより此狂言行はれ椀久狂亂笠椀久松山由緣の十德などゝ呼て明和頃には毎度椀久の狂言は出けり既に自笑其磧が作の御伽紙子などには一番に出たり曲亭馬琴寬政のすへ京攝にのぼりて戲作者の常なれば是らの事蹟をたゞせども詳にしる事あたはず本願寺書院の庭に有椀久が寄附せし石の手水鉢をたづね正保三年十二月九日椀や久右衛門寄進とあるを石摺にして山東京傳に送ると簑笠雨談に書たり此書に馬琴椀久の宅趾は大手筋に有しとのみ聞てゆかず浪華の古老の話に聞たる一話也とて出せるは椀久其始老實にして嘗花街の地をふまず同庚の社友是をあざけり强て靑樓にいざなひ恥かしめんとす椀久が母はやく此事を聞て心憂や思ひけん俄に文認めて松山と云新町の花魁の方へしか〴〵の事をつげて椀久が事を賴む椀久是をしらず母に辭別して花街に赴んとす母の云商人の利に走るは常の事ながら廓にあそびてはわきて心を見らるゝものぞとよわれ聞松山は全盛たぐひなく其心みやびたりと御身くるわにゆかばかならず彼をよべと云椀久母の命を得て遂に

其友と丶もに樓に登る友人等おのれ〳〵がしれる妓を呼むかへ椀久一人熟妓なきをあざけり笑んとす椀久母のおしへを守りて松山をよぶ松山來りて一別の會話を叙る事ひさしく相しれるが如し衆皆思ふにたがひて驚き羞椀久もいぶかしくは思ひながらよき程にあしらひつ扨房に入て云りけるは吾元よゟ御身をしらず然るをさきの如くもてなし給ふこそ心得ねされど御身が情にて今宵の恥かしめを免たりと篤く是を謝す松山うち笑てあなおかし是皆母君のいつくしみふかきにありとしか〳〵の事を語る椀久始て母の慈愛のふかきを感じ且松山が情あるをよろこびて終に家をうしなふにいたりけるとなん椀久が紋は扇車なりしにや其事曲三味線に見へたり又寶永の頃瓢箪かしくといふ弱法師佛説を俗談して人を興じ市中を徘徊せし事有歌舞妓狂言に椀久と此ひやうたん〳〵とを附會して作りしなり愛敬昔男といふ冊子にひやうたん〳〵が圖有摹して爰にのす（昔繪の圖なる書曲三味線巻の二に右は此津に名を殘せし椀久むかしの姿その儘にむしやくしや天窓に立烏の布子丸絆のひとへ帶革巾着のあきから懐に伊勢天目吸口なしのきせるとろめんの沓足袋細緒のなら草履かはらぬものは扇車の紋所今はなさそふな顔して座せり（下略）此曲三味線に書し椀久が打扮はへうたん〳〵が模様ともきこゆ近世の俗談に名高きはへうたん〳〵と江戸の志道軒なり又椀久が事を小曲に作りしは昵近竹と云冊子にのせたる椀久道行是始なり今の唱歌は皆是より出たり昵近竹の唱歌左に抄出す是らを見てもへうたん〳〵を附會せしをしるべし去りて益なき事ながら夜話の一助ともならんかと爰に附す椀久道行

三上り一中ぶし（上略）ほさぬなみだの露しぼりくちなば袖に今の身はせいしがのべの思ひ草葎の宿にたゝひとり床はなれ行あかつきの其きぬ〴〵の俤をとへどこたへもしよんぼりときのふはけふのむかしにて法師〳〵は木のはしと思ふはやぼかわけしらぬ心の花のかほりをばしらせたいぞやあゝはち〳〵此十徳も過し頃ゆかり法師が一ふしに智恵も器量も身體もみな淡雪と消うせてかわせし事のかはるともはなれまいぞの君こわくわれはちりかや身につもる心のあくたむねにみちそれがこうじた物ぐるひ（下略）へうたん〳〵は後狂人となりて夜な〳〵新町の廓をくるひ

ありきしとなり椀久物狂ひとて是を作れり
右は曲亭子が簑笠雨談に出せる考にて古老に聞たる説といふも御伽紙子にある作り話にて實説とはいふべからずへうたん〳〵と附會して物狂ひの淨瑠璃成れりと云も曲亭子が推量の説なり既に傾城禁短氣の中より椀久と山崎與次兵衛の二人を出し寛政七卯年戀と一字外題に書てことばのいと其下心とかな付して椀久爲十郎松山國太郎與兩人一時に狂亂となる仕組あり此文句に茶碗がわれたらついで見やそれサ〳〵又納戸の掛がねそつとあけ親の鮮をさとるも大事などの文句有近來三つ面といへる椀久の文句は大かた此戀といふ狂言の文句を梅玉にてつかひし也然れば椀久が事跡は予が始に演る所實説にちかし大坂本願寺へ寄附の手水鉢有は椀久の父にて一向宗なり瓢箪〳〵は空也念佛に似たる説經者なれば禪宗が淨土なるべし近來梅玉にて仕組し折は彼法華宗なれば我宗に引つけ經宗とはしけり何にもせよ俗に云燈臺元暗とかにて浪華の者はかゝる事實を投やりに穿鑿もせざるを東都より來てたま〳〵古老の物語を聞それを實説なりと思ひふるき作ものを讀て推量の説より附會して誤る事いと多し次に説く三勝半七が傳を見て齟齬せしをしるべし

傳奇作書續編中の卷

目次

一三勝半七情死の話　元祿年間の事
一簑笠雨談の齟齬　寬政年間の事
一梅の由兵衞小梅の話　元祿年間の事
一勢州龜山敵討の話　同
一箱根彦山靈驗記の話　天正年間の事
一累怨靈解脫の實話　正保年間の事
一播州皿屋敷の實說　延寶年間の事
一鴈金組五人男の話　元祿年間の事
一扇屋夕霧が略傳　延寶年間の事
一八百屋お七が事跡　同
一黑船一代男狂言の話　寬保年間の事
一女達奴の小萬が事跡　同
一盜賊日本左衞門が話　同
一東海道茶屋娘の話　寬永年間の事
一灰屋紹益吉野の話　同
一景清重忠茶湯の話　同

凡十六ヶ條

西澤文庫傳奇作書續編中の卷

西澤綺語堂李叟著

三勝半七情死の話

元祿八亥年十二月七日攝州下難波村今千日寺墓所邊也代官辻彌五右衞門殿支配所墓所南側石垣の根畑中にて年比卅四五歲の男年比廿四五歲の女相對死の趣願ひに出則檢使として關戶條左衞門殿渡邊爲右衞門殿改られる所男の疵咽二寸計腹臍の上一寸計突疵と見へ女は咽四寸計突疵くり候樣に見へ男の衣類郡內縞兩面綿入一細帶一筋羽二重下帶一革足袋一足珠數一れん手に持脇差一腰拵付燒付金具糸柄長さ二尺一寸小刀一本但し脇差の鞘に有女の衣類日野絹煤竹小紋綿入裏日野絹茶一郡內縞綿入一糸ろく帶一日野絹湯具一木綿足袋一足縮緬紅裏の服紗一右は男女着用外に木綿茶服紗に封狀一通三勝母さま美濃屋平左衞門樣とし るし有を包有檢使改ずみ番人付置所上本町八丁目札辻町京屋安右衞門の訴狀に私女房の妹さんと申女に紛れなく男は存申さず候長町四丁目荒物屋市兵衞借屋美濃屋平左衞門の訴狀には私娘さんに紛れなく男女相對死と見へ候上は女の死骸申受たき願ひ也又長町一丁目近江屋庄右衞門貸屋中村屋安右衞門よりの願ひ狀には私方常に宿仕置候大和の國五條赤根屋半七と申者當月五日に參り罷在昨晩罷出今朝早速見屆候處女と相對にて相果候は申分もなき次第に候宿に書置一通候ゆへ御番所へさし出し候處大和の上書に候ゆへ直に爲遣樣仰に付遣し申す相果候樣子は曾て存不申宿仕候仁に候へば半七の死骸申請たき願ひ書狀五通外に半七書置一通御番所へ持參の上玄蕃頭殿御奉行と見へたり御聞屆有雙方の死骸半七の書置とも下し置れ兩町よりも請取差あげ事濟しけり書置の寫

尙々御袋樣にはいつぞやくれ〴〵御申置候御事も皆僞りになり今更に恥かしく存候へ共しかしくわ

このごうなりと思召御あきらめのみ〳〵

今度三勝私かた相果候事扨々にくしと思召候わんなれ共互に捨がたき一命にかけかく成行候事くどく具に書き候へども戀のせつなる事推量可被下候各樣に

も身の上の大事なる娘我身も獨りの母と申殊には身上の事も不辨人口にかゝる死をとげ候も銘々うわきなると思召被下間じくとにもかくにも筆にはいわせがたく候まゝ跡不便と思召下され間敷まづ〳〵次第に跡にてしれ申候間筆をとめ申候已上

十一月　半七

三勝どの御袋様

平左衛門様

千日石碑靈名は　一蓮　嵐雪月照信士　月雪妙雛信女託生

和州五條新町　赤根屋半七

攝州大坂長町　美濃屋三勝

右兩人情死の節の願ひ書は十九年後正德三年に辻彌五左衛門殿の扣へ書を發に出せば實說にして又千日寺の石碑は其比の歌舞妓役者の誰彼直に狂言に取組大當りせしゆへ長町親もとも心易きゆへ其當座に建たるものなり扨も五十六年後寛延三庚午年に出板の俳書嵐雪句集一名玄峰集とも云は嵐雪の別號なればなり此中に

あかねやみのやと聞へたるなき名のながれとゝまるところは千日寺の露ときえかへりぬ盆の比は夜毎に群集し逆緣とぶらふ人あまた侍りけり戒名嵐雪月照と石の塔婆に彫入たりあるまじきことならねど思ひかけず思ひはべりければ爰によく似たるゆめかな墓參嵐雪

簑笠雨談の齟齬

文化改元甲子年正月に出板の簑笠雨談三卷は東都曲亭馬琴子が其前京攝見物に登りし時の紀行の內より珍らしき事のみ拔萃せし書なり其中に三勝が古墳と辨を出せり美濃屋三勝が墓は大坂難波新地法善寺金毘羅堂のこなた茶店のむかひに有世俗此寺を千日寺とよべり七月廿七日此地の友とともにこゝに遊びて三勝が古墳を見る石塔に南無阿彌陀佛の名號を彫付て外に法號なし予がかねておもひしに違へば此外にも彼ものゝ墓ありやととふになしといふ墓のかたわらに新しき塔婆を建て寛政十三年辛酉二月日美濃屋三勝茜屋半七爲二百回忌追善一也と記せり今もその由緣の人あるにこそといへれば嚮導せし人のいへるはさにはあらずかゝる徒は俳優家より追福いとなむといふ寛政辛酉年百回忌に當れば歿年は元祿十五年二

月也石塔婆の角缺てありしれる者の云勞痎を患る者此石を末にして飲ば治すといふ又此寺の門前にある乞丐女六が墓もしかすれば酒量すゝむとて俗子往々かゝる殺風景をなすとなんこゝに疑しきは嵐雪句集に（前に云玄峯集の文夢によく似たるの句を云）かゝれば予が見しは後に作りかへたる物か又別に嵐雪月照と戒名彫入たる墓あるか序あらば再び尋ぬべし又大坂長町といふ所は傘張多く住り三勝が家なりといふ傘屋長町東側中程にありみのやは藝子の店の名なり故に一名を笠屋といふよしいへり是全く附會の說なるべし雜劇にて笠屋三勝とかへたるは慶長のころ女舞大頭の座元なりし笠屋三勝を擬したるなり事迹合考といふものに女舞は白拍子の事なり慶長の比桐屋大藏笠屋三勝女舞大頭の座元なり云々是は平家物語盛衰記等のおもむきをうたひものにつくり大皷にあはせて是を舞ふ舞の打扮は天冠をいたゞき狩衣を穿大口をはく是を女舞大頭と名づく此舞に岩戸開天地拍子羅生門などいふ傳受の舞有しとぞ永祿の頃室町家より祿給はりたる舞女に笠屋夏といふ者有夏が事室町殿物語にみえたり是笠屋と名付るの始かその子孫に笠屋新勝同万勝同春勝などいふ女有皆寛文の比までの女舞なり三勝も此門より出たる女にて由緒あるものなり歌舞妓狂言作者並木五瓶といふ者三勝がいたゞきし天冠をおさむるよしきけり天明四年十一月桐長桐芝居興行免許の時馬揃とやらんいふ狂言をしたり天冠狩衣大口のいでたちにて大皷一挺にてうたひまへりこれいにしへ女舞の遺風なるべし三勝は寛永の比既に老女にて京に住せしといふ此一條醒世子の說なり亦茜屋半七といふものと不義の死をなせし三勝は大坂かごや町額風呂次郎左衞門が抱えなりし小さんと時を同じくせしお三といへる湯女なりとぞ然るを歌舞妓狂言には昔の笠屋三勝が高名をかりて笠屋にみのや對もよく其名もともに三勝といへば狂言作者の働らきにてかくは作りなしたるを後人笠屋三勝が事迹を考ず戲文の說に泥みて三勝が家は長町の傘屋なりしなどゝ附會の說をなすにこそあらめとまれかくまれ三勝が墓など只何となくをかしきものなればこゝに記かやうなばか〳〵しきことを論じをくも又わが黨の一癖なり又追考に此頃一奇書を得たりと始に出す本文の書置を出して此おさんは世にいふ三勝が實名にして當

時の作者笠屋三勝と附會せし事しるべしと有是皆推量の說にして曲亭子が考は皆齟齬せし事明らけし始法善寺の一名を千日寺とも呼りとは誤の始にして嚮導せし人とは是浪華の雅人にはあらで宿屋より雇ひたる案內者世に云猛者曳の事にて一文不通の雇人なれば何をしらんや其者の詞を信じて深く穿鑿にも不及かゝる戲作の草紙にもせよ書のするは非なるべし文化の始比は道頓堀繁昌の餘りにや毎度失火有て法善寺邊始終燒跡の荒しまゝにて東北の小門を入りし所に石塔凡十基ばかり有けり所謂南無三寶正三が墓又德利の形を畫中に平の字書たる墓石の地藏尊など狹き所に並び有し事有（今源氏そばやの居る所にて井筒嘉といへる酒屋の向ひがはなり今取のけて何國にあり や不知）其墓の內古き名前のなきを三勝が石碑といひ又長町をつれ通て爰がかの笠屋の跡也など案內者の出るまゝに欺かれたるなるべし亦俳優家の建たる百回忌の塔婆も現に今千日墓所の東榎の社の後に一蓮託生の石碑遺れども手遠なるゆへ法善寺中八目にたつ所へ建たるなるべし尤年號も七年の相違有歿年元祿八亥年なれば寬政六寅年則百年に當れり寬政十三酉とあるせば享和元年にて歿年より百七ケ年となるなり爰にまた予が家の板淨瑠璃外題年鑑にて見る時は寶永六丑年八月笠屋三勝廿五年忌と云外題見へたり三勝歿年より寶永六年は十五年目にして廿五回忌には違へり此時始て淨瑠璃にとり立後すこしづゝ增補して延享三寅年に女舞釼楓明和九辰年艷容女舞衣と外題出たりされば此法善寺中に雜劇者より追善に建たる塔婆は歿年より七年目に其比の名代俳優坂田藤十郎杉山勘左衞門等歌舞妓狂言に取立大當りせしゆへ長町の親もとゝ言合せ狂言當りし冥加の爲に千日の石碑を建たるなるべし石碑臺石に俳優の名前を彫しは此由緣あればなり扨此七回忌の時を原として百年の追福の塔婆を法善寺に建しものと思わる又淨瑠璃にて十五年目に廿五回忌と外題せしは所謂取越にして近き事故遁れぬ遠慮の事有しなるべし正しき神社佛院にも大ようの年數にあはせ五年七年の遲速を論せず年忌開帳等をすればいわんや心中情死の輩深く論ずるも無益なるべし扨事跡合考をひきて笠屋三勝は古き名なり女舞大頭と名付て白拍子の祖なりなど醒世子（山東京傳）の說といふも曲亭子の考かごや町額風呂の抱へ小三と時を同じふせしお三といへる湯女

なりと云説は皆推量の説にして論ずるに足らず金屋金五郎は島の内笠屋町額風呂の小三と情死せしを浄瑠璃にて元祿十五午年八月金屋金五郎浮名額とて外題によぶ（此年赤穗四十七士敵討ありし年なり）既に唱歌にも笠屋町千たびもと有て坂田藤十郎杉山勘左聲を似せつゝ合圖を玄らすとも有て島の内の遊所を六軒丁と云古名有玉屋塗師屋笠屋など呼ぶ家六軒を開發人にて笠屋町も六軒の内なり三勝の親もとは長町四丁目の美濃屋なれど島の内笠屋を假店して垢摺女なり故に笠屋三勝なり何もむづかしき譯あるにあらず六軒町の小夜格子といへるは木と竹を交て二階の格子に打しなり其頃島の内置やと唱ふる家は皆其格子なりしとかや重井筒おふさ德兵衛の浄瑠璃に有重井筒は寶永元申年の事なり（四十七士敵討又金五郎の三年目也）ゆへにすこし好者の癖ある者は是も附會の説なりとて遠き舊事をひき出してかへつて我附會の説をもふくる事多し都て此一條によらず何事にても東都には平賀源内より發りて京傳三馬馬琴など寛永此かたの人物を評じて小説をもふくる物多し京攝は都ての人氣高尚にして中興のことには甚疎く假初にも古代の人を評じ古き事のみを論ずるの土地なり東都は古き名所とてもすくなく古代の事を論せずして二三百年已來の事を我おとらじと穿鑿して傳記をもふけ彼地のことを盡したればとて京攝の事を彼地へひきて揚巻助六などを東都のものとはなせり近世奇迹考などに出たる江戸の俠者の事は實説にもあらんが京攝のこと書たる物は土地の方角年月の相違などいと多くて讀に片腹痛き事まゝ有京攝に中興の事不穿鑿なるは名所古跡人物など多きゆえ未手の屆ざるなるべし

梅の由兵衛小梅の話

是は又心中情死の類ひにあらず夫婦とも強惡のものなり此實説は新著聞集にも出て大坂聚樂町に梅澁吉兵衛と云者胡椒頭巾といふ事を始て（盜賊に勝手よき頭巾なるべし）仕出す程の大惡黨なり大坂中の兩替やの手代小者の親兄弟在所の荒增をも能覺へ盜の方便とせしとぞ常に丁銀板を兩替屋へ持行子銀にかへ今一度見せよとて丁銀を手にとると思へば摺かゆる事神變を得て兩替屋毎に兩三度宛是に逢ざるはなし因て異名を板替の吉兵衛とて恐れしが博奕の事につき牢舍して元祿二年四月十九日の大赦に獄を出てその五月十九日天王

寺屋九左衛門小者長吉金子百兩かへに行を何とかしけん途にて呼かけ其方の在所より親來りたり云度事有により早く逢度よしいざ來よとて誘ふ長吉我は大切の用事なれば參るまじ心得てたまへ扨汝は誰ぞと問ふ其方の在所の者にて親とは入魂にするなり當地に久しく住て其方は我を見しらねど我はよく見しりたり是非來よさなくば親恨みなんと云ふ然らば立ながらまいらんと吉兵衛がもとに行ける吉兵衛が妻に小梅とて十五六の年增りを博奕の上手ゆへ妻にせしそれに云置て長吉が後より蒲團を打かぶせければやれ人殺しよと聲を立る處を吉兵衛さし殺してげり隣の者壁の破れより窺ひ見れば早脇差の血を洗ひし外の相借屋彼是出合ひ家主與次右衛門にかくと云ば以の外なる事をいふ人々かなあれは夫婦いさかひなり麁相なる沙汰あらせなと各をかへしける吉兵衛その金を奪ひ新地堂島北町にて茶屋をせんとて借宅し用意せし頃小梅が弟三右衛門いかなる故にか妻を離別しけるその女天王寺屋に落し文して長吉は梅澤吉兵衛夫婦して殺し死骸は三右衛門捨しとぞ書たりしかば頓て公議へ訴へしに與力同心をあまた新地につかはしたもふ吉兵衛は新町曲輪へ行ければ六月十九日の夜なりしがしめだしにて吉兵衛を捕ふ小梅三右衛門與次右衛門相借屋召出されしに相借屋はしか〳〵の斷悉く演て別議なかりき餘人は閉口してければ獄舍しけり扨死骸はと尋ね給へば小初瀨の邊の古井に捨しと云しを頓て搜させたまふに色も變せずありし金の御穿鑿ありしに取合せ八十兩ばかり出しぬ扨科極りて吉兵衛は磔にかゝり餘の三人は大坂追放侍りしに與治右衛門は高津に隱れ居たりしを訴人ありて首を刎られ小梅は其後子殺をして磔にかゝりしとぞ是は四十七士の敵討より十四年前にて今嘉永三戌年迄百六十二年になる昔なり元祿それのとしより五十年後淨瑠璃に仕組み茜染野中の隱井と外題して吉兵衛を由兵衛とし小梅の弟長吉を忠義の爲に殺すと惡黨を善人にかへたり其後は追々に此狂言を題して增補する事なれば梅のよし兵衛小梅といへば皆善人として愁ひ事に仕組めり寛政の末歌舞妓作者並木五瓶江戸にて隅田春妓女容性と題して其比の名代俳優澤村宗十郎に低鬢の俠者と書かへ梅堀小梅源兵衛堀と東都の地名に引直しさせたるゆゑ今の世の女子供は

江戸の事なりと思ひ違へるも多からん今にも小橋野中の井戸とて年老の衆はよく知りたる事なれども其實説をしらするものなり

勢州龜山敵討の話

此實説も新著聞集に有て敵討は元祿十四年の事にて赤穗義士夜討の前の年の事也然れば赤穗離散と同年の事にて半藏源藏兄弟父と兄の敵を討たるなれば世に元祿曾我ともてはやせしが翌年冬赤穗夜討は古今にためしなき事故元祿曾我の取沙汰は第二義とはなりけり抑此舊を尋ぬれば青山因幡守殿大坂御城代のとき家中に石井宇右衛門と云有西國方の浪人赤堀源吾右衛門玄るべ有りて宇右衛門方に食客となり家中の若侍と出合鎗の師をなす宇右衛門源五右衛門の未熟を異見せしを聞入ず立合を頼ければ是非なく試合源五右衛門物の見事にしつけられ其意恨によつて城より歸りを待うけ切たおし逃ける僕のしらせに總領三之丞かけ付漸助け返りしかど大疵なれば敵を討よと遺言して畢ぬ次男半藏は五歳三男源藏は二歳なれば母に預け免許狀を戴き若黨をつれ廿二歳の春迄東西南北尋ねめぐりしかど敵に逢ざりければ源五右衛門の繼父赤堀遊齋といふ醫者大津に有ければ此者を討て高札を建遊齋を討しは石井三之丞なり親の敵取んと思わば美濃の國何某が家に來れと書付たり扨夏にも也て三之丞は美濃の何某が庭にて行水しければ竹藪の內より源五右衛門かけ出親の敵と切付しを三之丞心得しと一太刀切付しかど其儘死しぬ若黨口惜き事に思へど敵を見失ひせひなく本國へかへり次男三男に事の段々を傳しが兩人も成人して諸國を駈めぐり源藏廿三歳の時勢州龜山の城主板倉周防守殿家中二百五十石取し下村孫左衛門へ森平と變名して草履取に入込奉行他事なく仕へしかば同家中に赤堀水右衛門とて百五十石取の內へ森平が家來を若黨に入込せひとしほ念頃に出入せしが比は元祿十三年夏の比主人の用にて水右衛門方へ森平參りしに水右衛門は行水してげり日比情をかけし森平なれば呼よせ背を流させしに背に以の外の疵有是はいかよふな疵と尋ねし時其方は格別のものなれば語らんとて若き時石井宇右衛門を討其胤三之丞某を引出さん爲某が親遊齋を討しゆへ美濃の何某方にて四五十日窺ひ三之丞行水せし所を討しがさすがの者なれば某逃る所を

拂ひし時の疵なり其弟兩人有しが四五歳の水子なれば生死をしらず殿にも此事知り給ふゆへ隨分かこひ給はる此事搆へて人に語るなとの咄を森平心中に歡び色にも出さず返りいさい文に認め江戸なる兄半藏方へしらせけるに半藏もつてを求て周防殿扶持人跋打棗八兵衞方へ吉助と名をかへありつき龜山へ供して來り翌三月に暇を取り森平口入にて七十石取し近習役鈴木芝右衞門方へ奉公し兄弟と水右衞門方の若黨と三人出合ひ何卒殿江戸參勤の前に本意を遂べしと内談極め家來敵打助太刀を願ひしかどゆるさず母の方へしらせよさなくば七生迄勘當ぞと云に此上はちからなし爰より一里計りの所は松生ひ茂り影あらはれがたければ糧をもち行相待ん本意の上にて來り給へとて主人水右衞門方を一兩日の隙をもらひ出行けり吉助は四月九日に主人芝右衞門に暇を願ひ國方の者尋參りしと髮月代をして出城の裏堀松の木影に紺の單物大脇差にて待かけたり森平は主人より若黨に取立名を津右衞門と呼び刀を賜る森平此事を伯父に聞せしにいか計よろこび重代の一腰を呉しと兼て所持の刀を主人に見せしに關和泉守の二尺三寸氷の如くにて主人も肝をひやせしとぞ扨八日に水右衞門方の下女に白の下帶二筋のはし縫を賴み九日の早朝油元結を調へんとて出しに大手にて水右衞門に逢是はいつに變り小野郎一人にてお下りは心もとなしと云しかば水右衞門今朝は殊の外頭痛せしゆへ五つの番替りを待かね同役に斷り野郎が藥もち來りしを幸ひに連歸るとあれば然らば我等按摩をして參らせん抔と供せしに水右衞門の曰其方口入の芝右衞門が家來吉助何共がてんのゆかぬ眼ざしなり重ねて慮外あらば討てすてんと云折しも松影より吉助飛出て石井宇右衞門が躰半藏なり父兄の敵覺たかといふ儘頭より鼻の下へ半分に切て落す同弟源藏なりとて肩先より大袈裟に切放す兄弟三十三歳と三十歳年來の素意達せりとて四方を拜し扨書置し一封を水右衞門が腰にゆひつけ足早く松山の内へかけつけ三四日ためらひ往還の人の噂を聞届けもはや追手の氣づかひなしとて若黨を本國へかへし兩人は上方の帳面をけさんとて坂の下にて五六百石もとらんと覺しき武士の下向に出合かよふ〳〵の趣にて此三夜まどろまず殊の外疲れし儘暫しお圍ひ有て休ませてかしといへば侍

互ひの事なりとて茶やの奥にて半日計り寐させ料理をすゝめ金子十兩取出し不自由をたせよといへど斷りて貯はかくの通りと百兩計りの路用を見せければたのもしゝとて雙方禮儀をのべ南北へ別れける扨水右衞門の小野郎は早速殿へ言上し件の一封をひらけば大坂以來の事書つくし假名實名刀脇差の銘迄くわしく印せり追手には誰彼のと二時計案じ給ひて漸仰出されしとなり誠に深き御思慮やと皆人感じあへり青山因幡守殿御子息下野守殿は遠州濱松の城にをわしければ右の三人立歸りしをいかばかり悅びたまひ兄半藏に親の本知二百五十石弟源藏に新知二百石賜り屋敷嚴敷かこひ下されしとかや未曾有の事とて人人感じほめけるとなり

評に曰宇右衞門横死の節半藏は五歳源藏は二歳なれば復讐のとし三十三歳と三十歳にて廿八年目に當れり然らば横死の年は延寶二年なり廿八年が間敵を尋ね討をゝせる内の艱難辛苦いかばかりかいと難き事ながら此うちさせるふしもなく三之丞も手立に盡遊齋を討しがゆへ返り討となりいはゞ五分〳〵の事なれば淨瑠璃歌舞妓に取立るにも爰ぞととらふ仕組なけねば狂言遺らず淨瑠璃に道中龜山噺往昔模樣龜山染敵討優曇華龜山有歌舞妓にも種々とあれ共千手助太刀のみ稀々に外題を出す石井明道志と呼ぶ寫本にもとづき（伊賀越の前編 龜山話の後編）平井權八吉原衢（がよひ）といへる歌舞妓狂言あれども世に用ひず是等も實に種はよくて仕組にならぬ世界といふべし半藏源藏の名は呼ずして三木重左衞門中野藤兵衞の方世人皆覺へてよく呼ぶは兄弟の不幸なるべし

箱根彥山靈驗記の話

箱根靈驗躄仇討といへる淨瑠璃は芝屋司馬叟が作にて舊は太閤起亡錄といへる實說の寫本よりなれり是もたゞ躄の腰が立親の敵を討しのみにてさせる仕組もなきゆへ始に佐々成政の黑百合献上など出し勝五郎は下部道助と變名して北條の家臣九十九新左衞門に仕へ娘初花をめとり當もなき奥州路へ行風疾を病て足なへとなるなど都てのことの本文になき事故是ぞといふべき筋にならず一日の仕組に足らぬ物から狂言浮て居らず其上三平といふ者を拵へ返り討にあへども是も浮物にて佐藤鄕助がなすわざと筋立ねば憎みも少なし予以前玉匣箱根曙と題して增補し成政

が献上せる黒百合を飯沼勝五郎に言付大汝山千蛇が池へつかはす池に年經し蝮栖んで勝五郎に退治せられ毒氣を其時吹かけしゆへ勝五郎は聾となつたり父の敵を討んにも足なへなれば行事ならず嫁の初花車に夫を乘せて甲斐〳〵しく出立し旅に初花眼を煩らひ盲目となり夫は聾妻は盲となり艱難すと愁を添へたり尤狂言は其時々の座組に合せ仕組む物から其俳優には此役誰には此役と見込て書がゆへ俳優に病氣等有りて替り俳優にさせる時は狂言の蓍違ひて作者の苦辛せし事もむだ事となる事ま〻有此狂言の時も病人有て看板も出し稽古もしたる儘に始ずいと本意なかりし

彦山權現誓助劍も梅下風の作にて鎭西御軍記といへる寫本の内より毛谷村六助吉岡の娘に助太刀して京極内匠を討せる條を仕ぐめる物にして是も筋は至極よけれど兎角狂言にまとまり兼たる筋なりなせと問へば京極内匠は劍術不鍛練の卑怯者なり吉岡の姉妹は女ながらも剛力の者なりそれに毛谷村六助助太刀すれば所謂鬼に金棒にて敵を討は大丈夫なり故に危くひやいなる事なきにより狂言になり兼るなり尤おきくと絹川彌三郎の返り討有ても聾の飯沼三平とおなじく餘計の仕組にして有てもなくても事かゝず浮たる筋なり以前梅玉此事を言ひ出し六助を梅玉の柄に出來よふの工夫を誂らふ予本文に不拘一條の筋をもうく其筋といつぱ先發端幕外にて六助一味齋のもとに寄宿して劍術の奥義を授り姉娘お園と言號迄出來たる當座に途中にて天狗に抓まれ一朶の雲の下より六助の着物のはし下りたるを引糸にて向ふより舞臺へ引とる吉岡の中間下部ども是をしとふて出て日比正直なる六助ゆへ天狗につまゝれたり何にもせよ有家をさがさんとて幕の内へ這入る幕明ばいつもの通り若殿の放埒など有て狂言至つて大きく書六助の有家はしれても氣抜の如く前後をしらずあほう同前にて生國にいる一味齋は一たんの約束なれば姉のおそのを介抱がてら彼地に下さんとするを内匠奥義の一巻と姉妹の内一人婦妻にくれよと望む一味齋内匠の奸佞を知つて耻しめ跡待ぶせして一味齋を殺すお菊彌三郎の返り討は新奇の仕組有て毛谷村の場に至つては贋婆を拵へて試合の負を頼むなどはなく未塵彈正も臆病ものゝあほう同前の六助を討すへて武名

高く仕官をしたりお園は是を口おしく思ひ彦山權現へ願ひをこめ後自害して血汐を六助にのます六助俄に強勇となり庭の踏石三尺計と云所になるなりお園を秋津島六助を國松又お園を乳母お辻六助を坊太郎と仕組かゆる時には小男の梅玉にても出來るなりと筋を拵らへ梅玉に聞せたる時誠に妙なりと手を打て悦びしが彈正に初代鍛十郎お園に國太郎にてなくば仕榮なくいつぞは〳〵と云うちに梅玉も故人となり終に趣向も畫餅とはなりけり都ての仕組は此よふに危ふく立ねば敵に憎みすくなくよもや得え討まじと思ふ敵を討てこそ面白みはあるなり昔の仕組に敵討の世界といへば敵はいつも一役にて出ると人を殺し出ると惡事をするが役にて決して二役に立役抔はせぬ事也近來此敵役をして憎まるゝを嫌ひ外に立役を一つ宛ひかへにする樣になりたるは皆此道の衰へとしるべし

累怨靈解脫の實說

下總國岡田郡羽丹生村與右衞門といふ者は入聟にて妻の累姿甚だ醜きのみならず心ばへまでかたましきゑせ者なれば絹川に誘ひゆき突おとし沈め殺し同村の法藏寺にて妙林と法名を弔らひしは正保四年八月十一日なり其後與右衞門妻を迎ゆれども死せる事五人なり六人目の妻菊といふ娘を產む菊十三歲寬文十一年八月中旬に母は身まかり翌年正月四日より菊いたく病日々におもり同く廿三日に口より泡を吐眼をいからし父をにらみ我は廿五年以前に絹川にて殺されし累なり我最期の事は法恩寺村の淸右衞門も慥に見たりとさま〴〵の恐しき事共言し人々恐れ噪ぎ村の者共來て問ばしか〴〵と答ふ頓て僧彼是を招き祈禱せしかど更に驗なかりし然るに三月十日飯沼弘經寺の所化祐天同侶二三人訪ひ來りて見たもふに件の苦しみにて有ければ同音に數遍念佛して苦を問へば怨靈今迄は胸の上に居て苦しかりしが今は脇に居て我手を放たずと云祐天名號を書四方の柱に張りて一向に念佛せよと勸め給へば怨靈胸をおさへて唱へがたしといへども强く責給へば漸々二三遍唱る辭につゞきて十念を授け畢ていかゞと問へば手を放ち退く又十念すればいよ〳〵退て西の窓にむかふて居る又十念すれば何方へか去て見へざりしが又東の方に居けり時に守り本尊を拜せければ有がたく頂戴しけ

り暫し有て本尊をとらんとし給ふに目を付て慕ふ樣子なれば扨は此尊を慕ひ奉るにこそあらめ然らば是にて念佛せよとて持る珠數をあたへて各歸りけり翌日又來りいかにととひ給へば地獄極樂をまのあたり見侍りぬ極樂の門前に僧おわして此所の事語るなと固く制し給ひぬその僧珠數をあたへて我名を妙槃と付たまひし又累其門外にて汝は定業來らねば歸るべしとて衣の半を我に掩ひて爰は地獄なるぞと云て去りにき我衣のひまより窺ひしに白き途ありて累その方へ至ると思へば夢の覺たる心地しけりと語れり最前與へし珠數を見せければそれなん我得たりし珠數なりといへり累が法名を理屋照貞と改め菊を不生妙槃と名づけて一夜念佛して絹川の邊に石塔を建しとなり同四月十九日の早朝に又菊俄に苦しむ事前の如し村人集り問ば祐天來り給ひて汝は累にてはあるまじ彼は決定往生せし事なれば再び來る事あらじ狐狼野干の所爲ならんと責しかば我はさある者にてはなし助といふ者なり慶長年中に絹川にて沈め殺されしが此度累が往生せし事を浦山しく思ひて來れりといへば村の老年が曰それは累が兄なり其者の母助を他所にて產六歲の時此村に嫁し來れり然るに繼父助が生れ付あしきをいなみて他に育はせよと一向に云しかば母此子醜く生れ我だにいぶせく思ふに誰人か養ひ侍らんとて絹川に連行て終に沈め殺しつ其後川の邊りにて雨の夕暮などには五六歲の童を見し人多かりしは此助が幽魂ならん祐天くわしく聞得させて十念を授け菊か助かと問ば菊也と云助はとあればかたはらに居るといふ頓て單刀直入と法名を書たまひて佛檀にはらせければ菊ゆびざしてあれ〳〵只今助が佛檀へ往たといへばかたはらの人々も雲煙のやふに稚き者の形を見ると思へば忽光明かくやくとして家內を照らしけり與右衞門も甚だ慚邪懺罪して髮をそり西入と改名し端直に念佛し延寶四年六月二十三日に終りしが七日前より死をしりて稱名をこたらず聖相拜せし事共くはしく語りて往生せしとなり是正保は今より二百年の昔にして與右衞門死してよりも百七十餘年となれり是ら怪談にて題につかふ累は醜女なれば色氣薄く狂言になり兼よふ〳〵明和に粧水絹川堤と題して浪華にて淨瑠璃とし安永に伊達競阿國戲場とて江戶淨瑠璃に仙代萩と混じて狂言とはなり

けり故人尾上松緑此頃の菊五郎が父尾上松助化物の名人妖物幽靈をよくせしゆへ累は彼家の狂言となり誰のするも皆此流義となれり

播州皿屋敷の實說

是も累とおなじき怪談ゆへ淨瑠璃歌舞妓の狂言になり兼よふやくお菊虫とて女の後手に括られ髪ふり亂したる容の虫を見れば此說出るのみにて江戸番町旗本衆多く住所也の事を播州と云又江戸青山の屋敷にての事ゆへ青山鐵山がお菊を殺すとも脚色せり實は小畑孫市殿奥方召遣ひ菊と云女は膳部の役なりしが或時物縫おわりて膳を調へ何としけるにてか飯椀の中に針の有しを奥方見給ひ大に怒りたけりて日來疑敷思ひしが自らを殺し己が儘にあらんとて恁る恐しき巧せしは憎さよとて髪をつかみ引立て庭の井筒に落し入れて殺されけりそれが母も家に有しが此事を聞情なき事とて炒芥子を井の端に持行菊よもし心有てしけるか左もなくば今蒔所の炒芥子を生て見せよ此恨を返しなんとて井の邊りに蒔ければふしぎや此芥子見るうちに悉く生出たり奥方是を見たまひて憎き仕業や我をのらふはとて母も又井の底へ落して殺されし夫より兩人が怨靈時ならずあらはれ出て孫市殿夫婦を始其類葉の方々を次第に取殺しけるまゝ諸尊に祝願し大法秘法を修しけれど更に驗なくて餘りの事に甲州の知行所に菊寺とて一字を建立し給ひてさま〴〵に弔らひ有しかど猶も止ざりし病人あらんとては彼寺に灯多くかゝりぬ病人死すべき時至れば飯の湯を乞ふて湯桶に二つ三つ呑畢て忽死する事なりどれも〳〵同じさまなり詮方なくて出家したまひしも有しかど逃れやらで幾ばくの一族悉く滅び果て今は他家より名跡を繼たまひしとなり此書に年號をしるさねば確とはわからねど新著聞集は寛延二年の出板なれば大體延寶天和の比と思わる然らば今より百六十年以前の事なり既に元文六年に播州皿屋敷と外題して爲永太郎兵衛淺田一鳥兩作の淨瑠璃出たり此比は皿屋敷の說專らにせしと見へ延享三年出版の八文字屋自笑の作勸進能舞臺櫻といへる書の中に骨間三郎左衛門といふ家老家の重寶珊瑚珠の玉の皿十枚預るを妬あやまつて一枚割たるを科として庭の古井へ切込みしが夜な〳〵一枚二枚と九枚迄數へて跡はワッとなく女の聲して三郎左衛門は其内人事を辨へず七

顚八倒して惱むを圓山といふ伯父敵よりの上使明石梅軒と云敵役合役加古川右近と云立役目前に怨靈に惱さるゝを見て返る跡に三郎左衞門召遣ひに至る迄人どめして庭の井筒へよれば井の內より硫黃ゑんせうを持若き男一人飛出てお賴の通り菊五郎もどきでやりましたがいかゞと問ふヲヽ出來た〳〵その方井戶堀に似合ぬ役者物まねの名人ゆへ賴みしが元來寶の皿を伯父敵に渡せぬから妙を手討にしたと長櫃へかくし置けふ見屆の見分役人の前にて言合せし通り其方の物まねにてまんまと敵はたばかつたり褒美呉んと招きよせ井戶堀藤治を手にかくる是藤戶の盛綱の仕ぐみになる條有又寶曆中歌舞妓狂言にけいせい播磨廻の中にはお菊の役を立役にして嵐三五郎やつし役めくらにて隣の娘と色事しけふお家の寶具足皿十枚の賃受に金子つまる隣りの娘身を賣りて具足皿手に入る皿受取の役に來りしは靑山鐵山三升大五郎敵役にて皿が手に入らずば夜半の鐘を合圖に若殿の首を切ゝと奥にいて三五郎の盲を幸ひにそつと出て皿一枚を隱しもつて這入る三五郎は是をしらずに娘の身賣を跡にてき〳〵愁ひ有て又悅び若殿の命の親の具足皿と箱をあけ一枚〳〵さぐりながら數へる所九枚よりなし大惱りにて一枚二枚と又數へ直す內遠寺の鐘ごん〳〵となり出すありや何時と鐘の音に合せて一枚ゴン二枚ゴン九枚ゴンア、かなしや！この仕組あり是ら其頃の穿にて古き狂言にはどこにか一所二所はよき所有是らは天下に博識の方數多なれど詠て知つたる者は予獨りなるべし時節來らず再び世に流布する事なく徒らに朽る事惜しむべき筋なりけり

鴈金組五人男の說

五人男は元無賴のあぶれ者のことは其節の口書等寫し傳て諸所にもてる者有簑笠雨談にもそれを略出せり元祿十四年（前に云龜山敵討と同年四十七士夜討の前の年なり）六月六日の夜大坂南久寶寺町四丁目河內屋五兵衞が雇人喜兵衞と云者同じ町なりける三木屋勘兵衞が下人五郎といふ者と西橫堀の濱際に納涼し家に歸らんとて北久太郎町の濱際を過りける時上難波町に住ける木挽庚申の勘兵衞及同町板屋三右衞門が下人市兵衞と云者喜兵衞五郎に喧嘩を仕かけ互に摑合ける所へ博勞町の溢者庵の平兵衞來かゝりて懷劍をもて喜兵衞が膳を突破り立去ける是より事起りて元祿十五年八月廿六日さら

に虎狼の如く人も恐れたる五人男等終に法場に屍をさらせりその名をいはゞ先鳶金文七は奈良屋町雁金屋七兵衛の躬年廿八是を七組の頭とす其手に屬するもの博勞町庵の平兵衛年三十立賣堀中の町極印屋庄三郎が躬極印千右衛門年廿三坂本町の雷庄九郎年卅一天滿六丁目七兵衛が躬ほての市右衛門年廿九是を撰み出して五人男と云此外にかいたての吉右衛門喧嘩屋五郎左衛門とんび勘右衛門三つ引治兵衛からくり六兵衛因果の平兵衛なんど云溢れ者川船水手の飛乘して半俠半賊の惡徒なりしが是も此時路傍の霜と消て無祀の鬼となれり此内喧嘩や五郎左衛門三つ引治兵衛を頭とす雷庄九郎も川船水手の飛乘して喧嘩や五郎左衛門が手に屬せし者なりしが後七組の手に屬す又讃岐屋町に道具屋與兵衛といふ者有異名を親仁の三郎といふ元溢れ者にあらずといへども彼等に脇差をかして是をさゝせ其恩をもて群集の場所の後楯とせしが此時我身の善惡いひわきがたくて口に溜る津の國の住居を許されず棚なし船の行衛もしらずなりぬ予浪花に遊びてその實記を閲す是その略なり

元祿十六年始て五人男の事を作りて板せし冊子に彼等が我名をのせたるよし聞しがいまだ面あたり見ざればこゝにもらしぬ天王寺の塔中に鳶金文七が奉納せし八島合戰の繪馬有しが近曾天王寺回錄の時失て今はなしとある人かたりきと簑笠雨談に出せり扨も淨瑠璃外題年鑑には雁金文七と外題を呼て元祿十五年午八月十六日に御仕置に合ひ同九月九日に初日を出すと有是は岡本文彌の淨瑠璃にして續物の淨瑠璃にあらず今云說經祭文の如きものなり夫より四十一ヶ年後寬保二年七月竹本座の淨瑠璃に男作五鳶金と題して作者竹田出雲掾なり此時たゞの俠者として善人とせるより後追々に新作して今にては浪花男とて名うての男達と思へりまた彼等が墓は生玉寺町正法寺日親寺に有て鳶金屋極印屋と臺石に彫たる有是らを曲亭子に見せなば嘸よろこぶべし

扇屋夕霧が略傳

夕霧が墓は大坂下寺町淨國寺に有て花岳芳春信女脇に延寶六戊午年正月六日俗名扇屋夕霧と彫入六尺計の見事なる石塔なり今を去る事百七十餘年にして遊里の女郎とひとくちに呼べるもの丶東都に三浦屋高尾（墓は北野立本寺灰屋紹益が妻なり）京都に林屋芳野（墓は鳥越橋詰に有俗に土手道哲寺）浪華

に此夕霧の三人は一個の名物なり伊丹の俳師鬼貫此墓に詣て此塚は柳なくても哀なりと詠たり此三都遊君の内にも高雄は三派の横死によつて名高く芳野は灰屋紹益に嫁して數寄の道に志深く吉野廣東に名を呼ぶのみ夕霧には一點の難なく唯全盛の拔群なるゆへに名高きなりされば夕霧の書たる文を扇屋に珍藏して後夕霧文章といへる端唄有此文中にその扇屋の金山と名に立登るとの文より後人いろ〳〵と附會の說をもふけ折屋の夕霧扇屋の金山と二人の全盛有しなど云は論ずるにたらず金山は金箱金藏と稱するの詞なり延寶六年二月三日より夕霧名殘の正月と云歌舞妓狂言を始坂田藤十郎が女郎買の大盡の骨髓に當りを取三十年後寶永五年迄に夕霧の狂言を出せしこと以上十八度なりしが皆悉く繁昌せしと云是夕霧は此津第一の名妓坂田は俳優中の名人なりしこと是にてもしるべし寶永七寅年七月に夕霧阿波の鳴戶といへる淨瑠璃出てより夕霧筐の袂浪花文章夕霧塚澪標浪花詠など皆夕霧を題にして藤屋伊左衞門と云大盡は別にもふけて拵へし名なるべし箕山が大鑑に夕霧は尤麗容澤なれども目は瞎目なりとしるせり又太夫の引舟女郎をつれる事夕霧より始るといふ都て夕霧が事は自笑其積が比の書にいろ〳〵出て全盛遊君の冠たるものなり其後此名を繼者なきを以てしるべし

八百屋お七が事跡

近世著聞集と云書にお七が傳は委しく出たれども少しは推量の說有湯島の天滿宮へ松竹梅の額をお七自書して奉納したりと專ら世人の口碑に遺れども湯島にはなし實は谷中感應寺中祖師堂に常在靈鷲山法華最第一と額をお七が十一歲の時書て延寶四年辰春二月と落款したるを訛に傳へたるなり扨罪を得しは十六歲の時のことにて天和二年戌の二月なり墓所も駒込吉祥寺と狂言にはすれど實は小石川指谷町南緣山圓乘寺と云天台宗の寺なりお七が法名は秋月妙榮天和二戌三月廿九日と石碑に彫て有今より百六十九年の昔語なり天和笑委集と云天和年間の江戶大火をしるせし書の奧に實說有是らは江戶の事故彼地にては歌舞妓に早く取立浪華にては廿三年後寶永元申年に八百屋お七歌祭文と云淨瑠璃なれり享保十七子年に八百屋お七戀緋櫻安永に伊達娘戀緋鹿子など追々

增補有歌舞妓にては初代岩井半四郎お七の役にて大當りせしより代々岩井の家の狂言とは成けり

黒船一代男狂言の話

寛保の比浪華の俠者黒船忠右衛門と云るは舊より歌舞妓狂言に拵へし人名にてあるべき筈なし故に其事跡を書たる書もなきか予が亡父の話に兼て聞實説に近ければ爰に出す抑享保元文寛保の比は前集にも演る如く男色世に行われて途中にても狼籍の事まゝ有けり（其頃が傾城禁短氣に男色女色の大問答あり）北濱加島屋何某の丁稚（此頃は前髪徒らといふ物を出して結木綿ふり袖をきたる也）米切手を懐中して中の島を通りしに片町の馬士頭庄兵衛と云者此丁稚を呼とめ男色の念者とならんと口説ども隨がはずゆへに米切手を隱し取さらぬ顔にて返しけるが歸つて見れば米切手なし正しく馬士庄兵衛が業なりとしれども取かへすべき手立につきて堂島の親仁（米仲士の頭を云若き者にも親仁の號有又年よりたる者にても若い者と呼通稱なり）根津の四郎右衛門と云俠者を呼よせ相談に及ぶ根津の四郎右衛門一義にも及ばず請合て新町橋にて庄兵衛に出合ひ取返したり（尤庄兵衛も切手を取ても仕方なくたゞ戀の意趣にて隱したるのみ也）庄兵衛是を無念に思ひ度々四郎右衛門方へ行立引をせんと云ふ四郎右衛門今晩とか翌の晩とかどこそこにて出入せんとて期を延しけるうち庄兵衛も拍子を拔し大津へ逃行事なく濟けるとなり爰に其比俳優初代姉川新四郎は座頭座元を兼作も自らすと云名代役者なりしがふと夢に此立引を見て趣向をつけ四郎右衛門方へ行あら增の筋を聞て新町橋の上に黒き帆掛舟の行燈を出し女悦長命丸を賣るは古き事にて今の新町の廓開發の比より賣る事なり（廓中細見みほつくし等に委し）是に准らへ黒船忠右衛門と云名をもふけ狂言に始るよしを四郎右衛門に云て歸れり寛保三亥年正月二十八日より初て中の芝居にて黒船一代男と外題を賦しけり其比實惡の名人嵐七五郎獄門庄兵衛やつし事の名人山本京四郎は鎌倉や五郎八（男色より思ひつきて鎌倉街道との滑稽なり）初日出て評よく四郎右衛門も見物に行しが北の立引に手ぬるしとて中座をして歸れり新四郎又北へ行て立引の心を聞て工夫に及び根津を又呼て見せたりければ四郎右衛門是でこそとて悦びけると其狂言今に遺れり始五郎八に煙草の烟りを吹かける其仕かへしに花道にて行合ふ時忠右衛門庄兵衛につを吐かける庄兵衛しらぬ顔して行かけるを舞臺より是若いのと呼とめる是四郎右衛門の誂らへなりとぞ又立引にか

丶り庄兵衛を見事に取て投る此時七五郎も大立者ゆへ投らるゝを不承知なりと云投ねば根津了簡せず作者並木丈助挨拶に入りて投らるゝ不肖に幕切に下駄がない〳〵とわめく時忠右衛門下駄屋に一足買ふて北の者の立引して何がないかゝないといわるゝもいな物此下駄はいていねと云庄兵衛いや下駄もらふたといわれるは否じやそんなら爰へ捨ふわいとちよんと一足直す捨た物ならひらわふわえと履是忠右衛門がはき物を直すが七五郎の投られ駄賃なりとぞ僅六十年前なれど役者にも古風なる事有たりなど亡父の咄幼き比聞たり是も今からは百年の昔なればさも有べし寛延元年に黒船忠右衛門當世姿とて歌舞妓にて同年淨瑠璃にて容競出入湊と外題出しけり故に黒船の役といへば誰も初代姉川新四郎俳名一幸をまねてすること習ひなりとぞ黒船の着る頭巾を姉川頭巾と號銘々冠り流行せしなり安永年中には性根競姉川頭巾又昔追風出入の湊と云外題も有後段々に增補して新奇に巧めり附て云出入の湊新町橋の口幕を五行床本にも瓢箪町の場と書有見る人皆茶屋場と心得り院本にては播才といへる町の料理屋なり瀧川は他所行にて駕に乘り來る黒船は判事物をつれて彼岸參りの歸りがけに此料理屋へ來たるなれば今の四つ橋とか御池橋邊に其比播才といへる名代の貨食店有しなるべし因に云關取千兩幟上の巻惠海庵と云料理屋は安永天明の比まで西照庵の隣に有しとなり浮瀬の舊は高津植木屋吉助の所に有し事は予が綺語文草に出せり遊所貨食屋などの興廢はまゝあることにてよふ〳〵淨瑠璃歌舞妓にのみ遺る物なりお染久松の比は天滿天神社内小山屋盛んなりし事は此淨瑠璃にてしらるかしくの文句に爰も流れの島の内と南新屋敷とて幽な遊所も皆昔とは成けり

女達奴の小万が事跡

黒船一代男に奴の小万と云女俠子を書込しより續て容競出入の湊にも乘たるがゆへ髪は奴髷に結び脊に尺八をさしあるきし女有と思ふも有べし是は又其比より五六十年の昔土佐畫と號し古風なる畫に合せ容を別にもふけし者にて實は木津屋の養女お雪といへるを仕組るものなり平野や何某の娘雪女長堀木津屋何某へ養女となり幼稚より書をよくし詩歌糸竹の道にも暗からず實家養家の家督の儀に付親族に爭ひ有

雪は是をうるさく思ひ身の片付を好まず氣に入の妙二人お龜お岩を連て氣儘に暮せり十五六歳の時二婢をつれて四天王寺へ彼岸會に詣口繩坂にて惡者二人雪が簪をとらんとするを左右へ投のけ再びきたるを二婢と共に打こらしければ惡者恐れて逃行しより其力量をほめそやし名高くなりけり實母の名を万といへば我名も又万と呼びけり扨万が廿計の年寛延元辰年に出入の湊又當世姿の狂言出て奴の小万と呼て奴髷に尺八もてる圖を出しけり或者万に告て曰今淨瑠璃歌舞妓にて奴の小万と云女達有は御身のことをするよしお万は事に拘はらぬ氣象なればあゝおかしと笑ひ捨けり後に芳澤崎之助芳澤あやめの悴中村富十郎の兄なり奴の小万の似顔書を持て或人万に贊を乞たり其贊に眼前不受綺羅紅何願後身住二上空一憂憤由來除二國賊一千生萬古護二皇宮一此冬京師に登つて或堂上方に仕へ四五年を經て浪華にかへり氣儘にくらし遙後薙髪して正慶尼と稱じ養家の氏三好正慶と云長慶が後孫なるゆへ然呼とも云谷町寺町月江寺に住又難波村の別莊に移り文化元甲子年七十六歳にて終りぬ木津村幽泉寺に雪龕嵩と彫たる石碑有正慶尼の書たる物予も一二枚もてり奴の小万とは雜劇より附たる名にて我も人の呼ぶまゝに奴の小万といへば我事なりと思ひしもいとおかしき氣象にして是も又浪華の名ぶつなり

盜賊日本左衛門が話

先年東都にて東海道濱松英賊とか外題したる十卷ばかりの寫本を見たる事有虛實相わからねど日本左衛門一代の事を書たり年號時日も忘れたれ共思ひ出るまゝ爰にあらはす始遠州掛川宿の百姓の躰にて濱松庄兵衛とか呼べり人品骨柄いとよければ京師堂上方に暫らく末の奉公をして堂上方の事粗委しく覺へ後賊徒に交り器量あるまゝ首領と仰がれ近國の大名代官地頭へ堂上方の拵へごとをして衒を業とし後惡事あらわれ公義より召捕の場を逃さり上方に行暫らく影を隱すうち以前京都に奉公せしうち言かはしたる女有當時浪華に居ると聞直に長堀に來る長堀富家の娘奴の小万と異名をとる女にて格子の內より往來を詠る前を庄兵衛通名日本左衛門と云通り顔見合小万仕かたにてしらせ門へ出て東堀人なき濱へ下りて絕て久しき對面を悦び庄兵衛は筐の品を小万に渡しさりがたき儀有て遠方へゆけば今生の暇乞ひせん爲態々と下れり

とて袂を拂ふて別れ京都御所司屋敷へ名乘つて出る尤日本左衞門が人相書は諸所に廻りて紋所は丸の内に橘なるよし其節の所司（名前不覺）早速に召捕るべきをさもなく今日は公儀繁多なれば明日來べしと歸されけり家來の面々何ゆへ御歸しなされしぞと問へば我と名乘出る程の曲者なれば子細あるまじなれど彼が英氣を拔く爲に返せしと云翌朝又來りて尋常に繩目を受梟首せられしと書たり寶曆十二午年二の替り中の芝居にて作者竹田治藏秋葉權現廻船話と外題して日本駄右衞門に中村歌右衞門（加賀屋歌七梅玉の父なり）玉島幸兵衞（濱松庄兵衞と二人に割たり）に三桝大五郎（初代逸風）月本圓秋に中村四郎五郎德島五平（其時の役人德の山五兵衞とあればなり）に藤川八藏牙のお才（是はこしらへ物にて東海道茶やの娘と云古き盜賊ありしとの事なり）嵐小六（小六玉の親女形の名人小六は雛助と云娘方の比なり）大入大當りをとりしとなり中入衒ばに衒ぞこないましたとの間は本文所司代屋敷へ名乘出し時の大膽不敵を含めて書し物と思わる八九十年の今に廢ず時々此狂言は出る又楓紅（からにしき）秋葉話など增補したるも有扨も此中に奴の小万の名出たるは珍らしけれど案るに小万寬延元年に雜劇にせし年の冬より四五年京に居しと云によくかなへり又日本左衞門と云かはし暇乞ひに下りしとは誠にもせよ餘人のしるべき事ならず後に左衞門の話によつて寫本には出したるなるべし是らの譯あるゆへ早く薙髮せしかとも思はるゝ也依て數ふれば秋葉權現の狂言出たる年は小万は卅四五才なるべし都て前の條小万が傳によく叶へりと云べし又一說に奴小万は柳里恭（柳澤權太夫淇園とも云）に畵を習ひ此妾となりしといへるは小万の寺友達におなじき女有て是も一癖ある女にて小万〳〵と呼れたる女その比有しと云柳里恭に物學びせしは正慶尼の小万にて妾となりしは今一人の小万なるべし此小万の家は丸屋何某と云しとぞ扨も文化の始江戶狂言に玆着綿菊の嫁入と外題して奈河七五三助出入の湊の世界を東都に引直して黑船町の船宿忠右衞門（淺草觀音前に黑船町と云有助高屋高助）獄門正兵衞（本名は濱松庄兵衞松本幸四郎是をする）鎌倉河岸米屋五郎八（御堀ばたに鎌倉がしと云有澤村源之助後宗十郎なり）奴小万（瀨川菊之丞後仙女となる）此狂言にはもと遠州濱松の屋敷にて庄兵衞小万不義あらはれ追放となり小万は吉原へ流され女郎となりしが餘の客を嫌ひ奴と異名を受年明て忠右衞門の男氣をきゝ突かけに嫁入して身の上を賴む表むきは女房ぶんにて黑船かくまふ獄門庄兵衞此內へ盜賊にはいり小万と顏を見合す

石川染大佛前妾宅へ小鮒源五郎盜賊に入ると同じ五郎八二階にかくまれ居て口幕よりの詰合となる黒船わけ入て獄門と五郎八は兄弟となのり合ひ庄兵衛立役にかへると云狂言有是はかの江戸にて予が見たる寫本濱松英賊より案じたる狂言なりと思るべし歌舞妓とても筋なき事は書れず各より所あるとしるべし

東海道茶屋娘の話

是は又いと古き事にていつの時代何國の者としるべからず舊より美しき名代の娘か又名に聞へたる女の盜賊にて有しか是も詳ならねど古き手鞠歌にのこれり肩と裾とは梅の折枝中は五條の反橋と諷ふは寛永南島變と云寫本天草一揆の書四十巻ものなり四に天草天の四郎に言號の娘有て一揆滅亡の折此田舍染の振袖を取出して歎きしと有きされば寛永の比より諷ふ事と思わるゝに又其歌の續きに反橋とてちよつきりこつきり小女房をどこでうたした吾妻街道の茶屋の娘はにほんちよつきりこと討したと有ば是もその比より諷ふ物か又後に反橋の歌についだる物か其程は不分明案るにはほんちよつきりこと討したと有文句より東海道の茶屋の娘にてにほんと云緣あれば竹田治藏日本左衛門の世界によせて牙のお才は舊茶屋の娘にて玉島幸兵衛此女に三千兩の金子をつかひなくし勘當を受護摩の灰を業とすお才は又幸兵衛をもとの武士にさゝんが爲日本駄右衛門の手下となると仕ぐみし物か秋葉權現の割外題割外題脇外題の事は前編にくわしく出すに東海道の茶や娘と書り後天明二年淨瑠璃に吾妻街道茶屋の娘と外題を出せり文化文政の比ちよんがれぶしに諷ふたる笠松峠の女盜賊夏見何某と云武士を谷川にて其身は脊に負れたる儘殺して金を掠しと云を狂言に仕組て牙のお才と呼びもとは東海道茶屋の娘なりとせしは秋葉權現の名をかりたる物なり何ぶん古く人口に膾炙して確としたる說を聞ず後考をまつ

灰屋紹益吉野の話

此傳はよく人のしる所にしていまだ淨瑠璃歌舞妓につかはざれども後々狂言に緣なきにしもあらざれば爰に出す兩人が傳は曲亭子が雨談に出せば讀でしるべし灰屋紹益は智惠小路上立賣に住て豪富の息子なり六條の廓柳町林屋の肥前益子が禿林屋吉野太夫となり突出しの比より紹益なじみて夜を日といわず通ひけり吉野云我名を芳野と呼れながら吉野の花を見

ぬは勤の身の悲しさと紹益易き事なりとて和州吉野の櫻を一樹求めさせ吉野に送る吉野歡びて我獨見んも惜しとていと見事なる箱に植させ吉野が揚屋入には多人數是を舁もて次に吉野長柄さしかけさせて練り行物から廓中に是につゞくものなく全盛の名いよ〳〵高し貴人高位にもしられて紹益とはいよ〳〵深き中となりける紹益の父是を聞て吉野が身の代と思ふ計の金子をくれて勘當せり紹益も年若ければ苦にもせず吉野を根引して小川に庵を求めて夫婦住けり父一日他所へ行てかへるさ雨ふり出しければ軒下に辿入て晴間を待うち格子の内よりいとうるわしき女是を見てそこは吹降の雨にて身や濕り給はんこなたへ入て待たまへと云に嬉しく玄關へ通るに爐に釜をかけて閑雅の人の庵と見ゆ女こなたへと請じつゝ茶を立て出しぬその爪はづれより茶の手前まで所に見なれざればいとゞ心置せられるうち雨も晴たれば一禮をのべて立かへり次の日親族の人來て話の次手きのふ雨舍りせしうちはいかなる人の住家やらん勘當せし躬紹益などあればかりの女なれば親がゆるして嫁ともいわんに遊君に魂奪はれ呉々の不孝者と子を思ふ身の親心涙まぎらせ話にぞ親類の者其家を聞扨其樣の女ならば令郎の嫁とてゆるさるゝかそれこそ子息の隱宅にて其女こそ吉野なれと告るにぞ父始てしりて其奇偶を感悟し遂に紹益が勘當をゆるし吉野も共に引とりて世間親族にも風聽してゞあはせしとぞ是らは實によき狂言の筋なれ共今是をすべき俳優なし李冠湖鹿鬼丸ならではその人品に合ふべきなしいと惜き筋なりけり扨も吉野は寛永八年六月廿二日行年纔十九歳にて歿せり紹益は和歌を詠て貞德と友たり又蹴鞠茶事にてくわしく吉野哀悼の歌に都をば花なき里となしにけり吉野を死出の山に移して後世事を妻子にゆだね小川の隱宅に籠つて茶事に遊び元祿四年十一月十二日八十一歳にて歿しぬ法號を古繼院紹益芳野の法號を本融院妙供と二行に彫付墓石は北野立本寺に有

景清重忠茶湯の話

扨或人の云此紹益が世事を捨て小川の隱家に籠つて閑を樂しむに一夜盜賊忍びいりて庭中に彳む樣子紹益しりて次の間に退りぞきいかゞすらんとためらふ所に盜賊は茶の數寄者にて臺子の儀茶室の樣も見ま

ほしきまゝ忍び入たる者にて心靜に庭廻りを詠め待合よりにじり上り迄來て窺ひ見れば爐には熱の音して薫物の薫りそとして誰も見へねば我を忘れて手水をつかひにぢり上りより靜に通りて客の間に着紹益次の間より窺へば人柄よき者にて進退茶事に馴たり獨服と思ひしによき友を得たりと紹益も客あしらひにて次の間より茶室に出て目禮のみにて詞を出さず茶を立て客に出せば客も辭せる氣色もなく飲む事皆禮にかなへりやゝ有て挨拶の贈答に及び扨も御身は何國の方にて今宵爰に來らせ給ふと問に客答へて拙者は名もなき盜賊なり兼て尊名を聞及び此よふも見たく思へど傳手なくてはたさゝりしが今宵ふと忍びこみ不思議と主のお手前にて日比の望叶ふたりと厚く禮をのべるに主もよき友を得し事よ毎度いらせられよと打くつろぎ談話に及び夜更るもしらず有しが又重ねてと約して路次の方へ出る紹益短檠の明りを燭に移して見送り出しが此盜賊は後にきけば大佛前に居たる石川五右衞門と云盜賊なりしとぞ此一奇談はよく人の云所なれども紹益は元祿四年八十一歳にて歿したれば生年は慶長十五年なるべし石川五右衞門は文祿に釜煮の罪に果れば紹益が生年迄に十五六前なり是こそ實に附會の說にてもし石川が忍びこみしものならば古田織部とか織田有樂とかにて有べし又紹益の宅へ來し盜賊ならば餘人なるべく亦盜賊ならねど好る道紹介の人なく忍びいつて姓名をとはれ戲れて盜賊なりといひしもはかるべからず紹益も五右衞門も茶事に名のあるゆへ年曆によらず附會の說をもふけしにぞあらん東都の古き狂言に惡七兵衞景清に中村仲藏（俳名秀鶴）秩父庄司重忠に松本幸四郎（俳名錦紅）にて是を此まゝ仕ぐみ景清盜賊に入て重忠と茶の湯の場其比大當りせしとて後又景清乞食茶の湯の狂言を出せり近來海老藏（七代目團十郎）浪華にて一兩度せしが舊江戸狂言ゆへ鎌倉の大佛供養とし七里が濱の非人小屋にて茶の湯の狂言なるを上方の地名に予が引直して少しく增補したり是は自笑其績の比の當世茶人形氣と云書より出たる趣向なり上京の或茶人の方にて二三人の客有て路次の切戶細目にあき有菰を冠りたる乞食通りかゝりて切戶よりそな〳〵這入り庭廻りを詠待合の邊よりしきりに圍ひの方を延上りて見る樣子を客見付て主に告る主も一奇人なれば彼今こそ乞食

なれ以前は相應のくらしにて茶事を好るならんといへば客も各好ものなればいか樣爰へ呼いれ茶を飲せんはいかゝそれよからんと庭に呼こむ乞食おづ〳〵と庭へ通り踏付石の向ふにうづくまる亭主の云茶事には貴賤の隔はなきから汝好まば一服飲せん乞食大に悦びて面桶を出して茶碗より是に移して飲んとす亭主も客も興に入面桶に移さんより直に飲べしとすゝむるにより一兩度辭退のうへ達てとの詞に茶盌取上飲事都て禮にかなへり棚の餝り付床の軸物など庭より詠て賞る詞にもいち〳〵名を言ひ當我等も一會相催ふし各方にさし上たしと云に皆々ほとんど興に入催ふしあらば行んと云然らばいつ幾日吉田山にて催ふす間必其節と約束して乞食は歸りけり跡にて衆評まち〳〵にて其約束の日主客連立吉田山に行ければ粟田燒の大土瓶の新きを三本の竹に釣り瓦を半ば地に埋めて風爐となし青竹の茶入に茶を入鳥の餌入を茶盌とし青竹の茶筌茶杓悉く新しきを餝り新の菰の三枚置しは是を敷との心なるべし見る程に〳〵感心して扨乞食を尋ぬれども見へず扨は身を恥て爰に出ぬよのまづ土瓶の素湯もたぎりあればと莚の上に銘々座し其潔白を感心して興に入たる其折節俄に一天掻曇り魔風發つて吹あるゝ何れも是はと騒ぐうち杉の梢にあり〳〵と彼乞食は天狗と化し我は利休の靈なるぞや茶を飲むはそれにて足れり今時の數寄者共はゐしれぬ古き道具を並べ千店商人に異ならずと當世茶人の癖を言立罵凝らせ一陣の魔風に姿は見へずなりにき此一話よりもうけしもの也又大久保政談とか云書に長崎の豪富の家にて香の會有乞食庭に入つて我も一品有とて面桶袋より一木を出して薫て歸る翌日長崎市中を順見司有て此香を嗅出し終に乞食を召出して調ぶる乞食は長曾我部の落胤とかにて東都へ送る大久保忠敎是を捌くの一話も恐らくは此茶人形氣よりもふけたる話なるべし此乞食茶の湯の狂言も錦江は口跡あざやかに多辯の男にて重忠を至極世話の辭にて云秀鶴は時代のせりふに云兩人の取合ひいとよかりしと東都の雜劇好の老人ははなされけりさもあるべしと思はるゝ事なり

西澤文庫傳奇作書續編中の卷終

西澤文庫 傳奇作書續編下の卷

目次

一狂言人名實說の話
一英一蝶遠島の說　元祿年間の事
一生島新五郎流罪の話　正德年間の事
一市川才牛横死の話　元祿年間の事
一江戶三芝居替地の說　天保年間の事
一芳澤春水名譽の說　元祿年間の事
一能に新工夫を用ひぬ話
一書に書虛事有の話
一詩歌連俳を評ずる話
一狂言綺語を評ずる話
一淨瑠璃狂言穴の話
一古淨瑠璃名作の話
一歌舞妓狂言穴の話
一古名人役者に妙有る話
一同狐忠信思入異なる話
一菜種御供狂言の話
凡十六ヶ條

西澤文庫 傳奇作書續編下の卷

西澤綺語堂李叟著

狂言人名實說の話

お千代 半兵衛 肯庚申 菊源五兵衛 野五大力 お長右衛門 半桂川などの事跡は前集に出して遺るは此編の上中の卷に出せり此餘にも狂言にするのみを知つて其傳記を玄るさぬ物甚多し所謂山崎與次兵衛 ふじや吾妻 おもとかめ松 おしゆん傳兵衛 小いな半兵衛 梅川忠兵衛などの事跡は前集に出して遺るは此編の上中の卷に出せり此餘にも狂言にするのみを知つて其傳記を玄るさぬ物甚多し所謂山崎與次兵衛 ふじや吾妻 おもとかめ松 おしゆん傳兵衛 小いな半兵衛 梅川忠兵衛などの事跡は前集に出して遺るは此編の上中の卷に出せり此餘にも狂言にするのみを知つて其傳記を玄るさぬ物甚多し所謂山崎與次兵衛 ふじや吾妻 おもとかめ松 おしゆん傳兵衛 小いな半兵衛 梅川忠兵衛などの事跡は前集に出して遺るは此編の上中の卷に出せり此餘にも狂言にするのみを知つて其傳記を玄るさぬ物甚多し所謂山崎與次兵衛 ふじや吾妻 おもとかめ松 おしゆん傳兵衛 小いな半兵衛 梅川忠兵衛などの事跡は前集に出して遺るは此編の上中の卷に出せり此餘にも狂言にするのみを知つて其傳記を玄るさぬ物甚多し所謂山崎與次兵衛 ふじや吾妻 おもとかめ松 おしゆん傳兵衛 小いな半兵衛 梅川忠兵衛などの事跡は前集に出して遺るは此編の上中の卷に出せり此餘にも狂言にするのみを知つて其傳記を玄るさぬ物甚多し所謂山崎與次兵衛 ふじや吾妻 おもとかめ松 おしゆん傳兵衛 小いな半兵衛 梅川忠兵衛など也爰に記せば實に際限なき物から附錄に出すべし亦かゝる浮たる物の外に河村瑞賢和田雷八など惡人にあらぬ人を狂言によりては敵役謀叛人に仕組しものも少からず木津の勘助渡守の源八と名よりもふけし狂言も多かり是もともに附錄に委敷出所を正して玄るすべし爰に狂言にはあらねど劇場に緣ある奇談を出す是ら人口に膾炙するのみにて正敷書に出ざれば實說とは言難き事なれど又實說に遠からぬ事もあるべし

英一蝶遠島の說

寶晉齋其角が一蝶を船場に送り後鹽魚の中に笹の葉の有しを得て信友の情を盡せし事は予が綺語文草にのせたり天和貞享元祿の比狩野安信永眞の弟子に多賀長湖と云者有て畵の道に執心厚く精身を入て上手の名を得たり然共正風の畵にてはいかなる名人に成りても家元の上に立がたしと多年工夫をこらし一流を案じ出し今世一蝶流と云畵を書初遙後英一蝶と云しは此長湖が事なり此者元祿の初公聽の咎めにて遠流になりしは常憲院樣好色にふけらせ給ひ許多の美女を寵愛し給ひおでんの方と云は中にも第一寵愛の上臈なり吹上御庭の池水に小船を浮め公が棹さし給へばおでん殿は船中に座し綾羅の袂を飜し小皷を打此御遊の平日成けるは貴賤とも是を知らぬ者はなかりけりされば繪師多賀長湖その比百人上臈と云繪を書て世に鳴らせり其畵面貴人高位の女臈より賤の女迄いと麗しく姿繪を畵けり其中におでんの方船にて皷打給ふ所公の棹さし給ふ所を書たるに此事誰公庭へ告たりけん忽召捕られ獄舍の上終に遠島仰付られけりされ共此事御咎とはなく多賀長湖御制禁の殺生を

好み鳥を取魚を釣候科とぞ御書付にて仰渡されなりとぞ長湖願て配所へ繪の具筆等持參の儀願ひ叶ひ配所にて英一蝶と改名し一子を設る是を島一蝶と云後年有章院樣御代歸朝免許仰付られけりされば百人上臈の內おでんの御方逍遙の體至極出來よかりしゆへ御咎に逢し事不幸といへども其藝の業に依て刑せらるゝは本意にも近かるべしとさして愁ふる色もなかりしとや後其圖を書改て小舟に女の舞裝束にて羯皷を打圖として是を世に淺妻舟とは呼ぶなり淺妻船の贄にあだし仇浪よせては歸る波あさづま船の淺からぬあしまたの夜は誰に契りをかわせて枕はづかし我床の山『今霄寢ぬる淺妻船の淺からぬ契りを誰にまたかはすらん後水尾院御製此一蝶が百人女臈の繪を本として其後京師西川祐信と云る浮世畫師春畫枕畫の達人百人女臈品定といふ大內の隱し事を畫又夫婦雙が岡と云枕畫を板にして雲の上人の姿をつがひ繪に圖しやんごとなき方々の枕席密通の體を摸樣して淸冷殿のつまがくれ梨子壺の隱し妻萩の戶ぼその別路夜のおとゞの妻迎へと色々公聽にもれ聞へて是又嚴敷御咎にて板を削られ絕板となり西川も一蝶同樣になりしよし云り

生島新五郎流罪の話

正德四午年正月十二日芝御靈屋へ從三位月光院樣御代參として江島と云御年寄を遣はされけるに江島霄日增正寺役者中へ明日代參の節芝居を御振舞下されと申送りしに返答に芝居の儀は決して相成申間敷由斷る江島殊の外腹立し御呉服所後藤縫之助の手代治郎兵衞淸助兩人を呼て明日木挽町山村長太夫芝居見物に候間二階棧敷五十間計り辨當百餘人前申付呉候樣云けるによつて兩人早速木挽町松屋といへる茶屋へ誂らへ翌朝治郎兵衞淸助は二階棧敷より座元長太夫方へ廊下傳ひに道を付させ棧敷には簾をおろさせ袴羽織にて待受座元長太夫役者生島新五郎作者中村淸五郎袴羽織にて酒宴の相手に出ける江島は增正寺へ御代參に行方丈役者への賜り物金七十兩銀二貫五百匁其外呉服物品々有を少しにて賄ひ殘りの金銀呉服物は芝居へもたせ代參に事よせ多くの女中を誘ひ出し增正寺を早々立木挽町へぞ行けり其節御年寄に肩を並ぶる面々此日同道せし衆中は新御中老役宮路五百石廿八才同役木曾路七百石廿七才表御使番梅山五百石廿二才御內御使番

吉川四百五十石廿七歳同役沖津四百七十石廿四歳御用人およの四百八十石廿五歳同役四百五十石おより御小姓衆おげん十人扶持十七歳同役お仙十人扶持十四歳右女中を初として末々の女中供の諸士迄都合百卅人ばかり不殘棧敷に入て彼役者を相手に酒宴を催し狂言の物音も聞へぬ程にぞ見へける此江島は當年卅一歳にて高六百石とり月光院樣の御意に入なれば心すゝまぬ人も江島が威勢に恐れ上下共に隨ひけるとかや八つ時棧敷より廊下傳ひに長太夫が居宅の座敷へ行女中皆々打混じて酒宴となる作者清五郎女房お梅はもと祈禱者の娘にて先公方樣御代御城へ召出され御意に入御奉公勤けるゆへ江島とは至つて懇意なるゆへ取持に出けるなり江島と新五郎は七年此かたの馴染にて深き中の上新五郎が娘を水戸殿家中奥山喜内と云者の娘にして喜内の兄奥山交竹院手引にて江島が部屋子に致置ける此日も早七つ時にも成ければ長太夫が座敷を立裏通山屋と云茶屋へ行役者野郎茶屋の者共に增正寺より持參の反物金子迄殘らず花に出し餘り時刻移るがゆへ付來りたる御徒目付御小人目付より御立候へと度々云ければ江島立腹して漸木挽町を立平川御門より夜五つ時に入り月光院樣御前にても江島口にまかせて申ゆへ何事もなかりけるが翌日御徒目付御小人目付黑鍬同心中立合せ若年寄中迄一書を以て訴ける夫より御詮議となり二月二日御詮議相濟何れもお暇下され皆々上著御取上白無垢計はだしにて御城を追出され各宿へ御預となりけり江島一人は白無垢計はだし髮とり亂せしまゝ平川御門より飯田町江島が兄白井平右衞門方へ御預とぞ平右衞門座敷牢を拵入置たり此江島は元三河國苅谷村の土民の娘にて幼少の時關東へ賣られ吉原にて遊女なりしを白井平右衞門吉原にて馴染此女を受出し置しが江島奥方の思わくもいかゞ奉公に出しくれと云に平右衞門も尤に思ひ紀伊中納言殿御簾中鶴姫君へ奉公させしに姫君御逝去ゆへ江島も浪人しそのゝち櫻田甲府樣へ御奉公に差出せし所甲府樣御本丸へ入御有三の丸樣御供にて月光院樣付とはなりたるなり扨外の女中衆は何れも五六百石の面々なれば召仕の女房達下女はしたに至る迄上下三百人の餘其日の內に皆々御城を追出され跡は殘らず闕所となり下女の分は當座に下され二月ばかり過て女房達の分は下されけるとなり二月三日より評定所にて御詮議と相

成り木挽町役者共不殘召呼れ生島新五郎中村清五郎座元長太夫手錠仰付られ江島に貰ひ候物殘らず書上候樣仰渡され皆書付にて差上御詮議の上にて新五郎牢舍となりけり其時の狂言右衞門櫻と云外題にて丸橋忠彌が事を作り二月朔日より替りを出す其節新五郎の衣裳紺地の金入立波の模樣紅裏付の小袖江島所望して御紋付縮緬の小袖と取かへ候に付入牢仰付られしなり長太夫座の團十郎勘彌座藤田花之丞堺町の野郎共葺屋町市むら竹之丞座にて瀧井半四郎召出され半四郎は手錠にて殘りはお搆ひなし十三日に御奥醫師交竹院喜內清五郎と對決有清五郎女房入牢後藤手代治郎兵衞清助下男七兵衞入牢江島は其日より揚り屋へ入ける清五郎女房嚴敷拷問にて白狀に及び終に責殺され江島も白狀に及び樣子明白に相知れける其比三位樣御大切の御道具二三品紛失に付若江島より役者共に吳候やとの御吟味有有體に申ものは御搆なし少しも僞り候者は牢舍手錠に成り段々御詮議相募り或は御免或は彌增の御詮議に逢ふ者有ける瀧井半四郎始手錠後々は入牢喜內事新五郎娘を自分の娘と僞り江島が部屋子に遣はせしは水戶殿家中喜內と新五郎女房竹とは一腹一生の兄弟にて喜內の妹とも有べき者が新五郎女房となりしはさるお屋敷奧方に奉公中新五郎に心をかけ駈込て夫婦となり兄喜內交竹院共勘當の中なりしを清五郎喜內方へ立入すれば段々と詫言して勘當もゆり我姪なれば娘として江島が部屋子に出せしと也其上芝居吉原抔へ同道せし事顯れ喜內は水戶へ御引渡しとなり彼屋敷にて成敗有けるとぞ長太夫は棧敷より居宅へ通路を付女中衆を引込し科にて入牢になり新五郎清五郎半四郎長太夫不殘闕所仰付られ妻子は店受人の引取に成ける其うへに吉原の茶屋に御紋付の長持へ芝居衣裳をつめ江島吉原へ行候節は役者共めしよせ狂言致せし事迄顯れ雜司が谷の別當も此事にて江戶追放となり增上寺中德水院と云出家も駈落せしとぞ此一件にかゝりの者悉く入牢仰付られ三月四月御評定所にて落着仰渡されけるは俵島へ流罪江島猿しまとも云三崎より海上四百九十里死罪江島兄小り海上四百九十里是は奧向預りの役なり三島普請白井平右衞門利島へ流罪原田伊右衞門お竹が兄なり三島より海上廿七里御藏島御奧醫師奧山交竹院島より四十七里八丈島小普請奉行金井六右衞門江島と惡所へ同道の科三崎より海上百廿里同島越後御代官金九四郎兵衞改易御勘定西忠左衞門追放御

徒杉山平四郎（皆々惡所同道の科にて計らふ）へ死罪水戸家人奥山喜内（お竹が兄なり水戸江島が兄三崎より廿八里）同島後藤手代清助追放後藤手代治郎兵衛御免後藤下部七兵衛大島原田彦四郎（御書院番原田伊右衛門養子父と同罪なり三崎より海上十八里）追放今井六之助（今井六右衛門悴）同金丸四郎兵衛悴又三郎（二男）二十郎親類預け白井平右衛門悴伊織（二男）平七郎遠慮豊島平八郎實子疋田吉十郎（實父平八郎へも又伯母江しまへも諫言せしゆへ也）大島（木挽町五丁目狂言座元）長太夫（三崎より海上十八里）三宅島（長太夫抱役者）新五郎（三崎より海上四十二里）神津島（竹之丞座狂言作者）清五郎（三崎より海上三十六里）追放（竹之丞抱役者）半四郎

右三月十三日申渡されの後三位樣より御たのみに付江島は内藤駿河守へお預となり在所におしこめ綿服にて朝夕一菜下女一人付置他出させまじき旨申渡し有けるとなり四月朔日より堺町葺屋町木挽町三座とも御赦免にて狂言相始向後棧敷に簾下げ候事堅く無用衣裳は木綿紬絹迄着用と仰渡され四月四日島船までもつかふに乘鹽留靈岸島永代大橋兩國と乘場々々に一類暇乞に行もあり一かたならぬ群集にてぞ有けると也島より新五郎市川團十郎（二代目栢莚）方へ書狀參り候中に此節鰹澤山にとれ候へど辛子なきゆへ何卒辛子を送り下されかしと申越其奥に釣鰹からしもなくて泪哉と書たり栢莚のかへしに釣鰹きくも泪の辛子かなと言送りけるとなり正德四年より今迄百卅七年となる昔語りなり

市川才牛横死の話

元祖市川團十郎は俳名を才牛と云市川家系は役者大全に見へ又かの家の藏板の書父の恩にもくわしく出たれども舞臺にて横死の事は人口に膾炙のみにて慥なる書に遺らず近世江都著聞集に僅に是をしるす尤其年月は家系に出る所とは相違せる所もあれど先實說に近ければ爰に出す元祿の比杉山半六と云役者才牛を恨て殺害せし舊を尋ねるに半六身持よからぬ男にて伯母と姦嫁して我家に置く世間の者も是をしつて浮名高ければ才牛氣の毒に思ひ杉山を呼で屹度異見し一所に居ては世間の仇名留がたしと才牛の方に預かり暫しは不義の通路もきれしがいかなる惡緣にや表は切れし體にて密に文の取かはしなどせり才牛は物堅き性なればかの女を三味線ひき權次郎と云者へ衣服金など付て妻にくれけり渠が方にて一子を設け杉山が浮名も自ら人云止けるかくて年月立しかど杉山が行跡直らず一とせ市村の頭取となり詰囃子等

を抱ゆる節かの三味線ひき權次郎をも抱へ心安く渠が方へ行又密通に及けり其年堺町類焼して和泉町杉山が宅は殘りければ焼出されたる彼女杉山が方へ來り思ふ儘不義を働けり後は忰も半六が方に引取り養育する事才牛は聞ども人面獸心の女なれば見限りてよせ付ずされ共才牛は小兒を寵愛し大勢集めて菓子など與へ樂しみとする癖あれば居宅へは勿論樂屋へも來り遊ぶに銘々に菓子をくれかの半六が方に居る權次郎が忰も此中に交わり居たるに是一人には呉ず其方は親に貰ひ候へ親父は菓子を多く持居るぞと云しを其忰半六が頭取座にひかへし處へ行才牛樣我に菓子は賜わらず親父に貰へと申給へど親權次郎殿には菓子は持給はずと述懐心に云ければ杉山聞て才牛は小兒へのわけ隔は何事ぞや親父とは權次郎にあらず我をさしての當言なるべし此間樂屋にて我惡事を人々に話て恥辱をとらする事の無念さよ生置ては後日のあざけり討て意恨をはらさんと本身の刀を持て其透間を待たりけり是元祿十七申年二月十九日星合十二段と云狂言一番目大詰甲賀三郎役素袍の儘にて樂屋へ入る所を後より寄添腰の脇差拔もちて脇壺を一刀さし通す才牛手をとりおのれ男に似合ぬ卑怯者尋常に名乘かけて討はせで何ゆへかくはせしといふ聲も段々弱り手もゆるみけるを半六は終にとゞめをさしにける夫と見るより樂屋大に騒動し芝居かへり大勢の者おり重なり杉山を取て押へ忽繩をかけ引すへたり此折から團十郎二代目栢莚は才牛が甥にていまだ前髪名は九藏と云しが飛來つて杉山にむかい狂言の太刀にて伯父の敵思ひしれと二太刀三太刀打けるとかや尤狂言刀なれば疵付べき樣はなけねど時に取ての勇氣なりと人々ほめけるとぞ扨杉山を公儀へ差出し意恨の程を尋給へど唯恨有とのみにて強てお尋有時申けるは戈牛にあらざれば我心を不知我心にあらざれば戈牛に意趣ある事をしるべからずとて其後無言にて刑罰せられける御府内にて正月兒子の翫ぶ骨牌と云物に三光と云手を江戸にては團十郎と呼ぶとなり元祿に戈牛殺されて後は六三枚持し手を半六とて團十郎を崩させけり中興其事を止め二代團十郎元祖よりも勝れしとて骨牌を慰む者此事を止けるとなり一とせ二代目栢莚始の俳名三升元祖の追善をせし時塗顔の父は長柄や雉子の聲と晉子其角は詠て送れ

り是も今より百四十七年の昔なり

江戸三座芝居替地の説

天保十二丑年十月六日の夜堺町芝居樂屋より出火にて葺屋町芝居を始隣町六七町焼たり其節堺町の狂言蔦屋道滿大内鑑保名に薪水惡右衛門海老藏葛の葉狐二役榮三郎與勘平多見藏切雙蝶々長吉多見藏長五郎海老藏お關牡若にて六日目米屋場初日の夜也葺屋町市村座雙蝶々新作長吉羽左衛門長五郎歌右衛門大切六歌仙の所作事大入之所類焼普請願ひ御聞屆なく元來此度の火事は甚少しの事なれど毎度芝居町に限り火事あるゆへ替地仰出され候となり十二月十八日三座御召出しの上仰渡の寫

堺町葺屋町木挽町三芝居狂言座幷に操座同人抱役者座頭出方惣代料理茶屋惣代

此度市中風俗改候樣にと御趣意有之候處近來役者共芝居近邊住居致候町家之者同樣に立交り誠に三芝居とも狂言仕組甚猥りに相成り右に付市中へも風俗押移り近來別て野鄙に相成又々時々流行之事多くは芝居より起り候哉に付依之往古は兎も角も當時御城下市中に差置候ては御趣意にも相戻り候事に候一躰役者共儀は身分の差別も有之候處いつとなくその隔も無之樣に相成候へば不取締之事に付此節堺町葺屋町兩狂言座幷に操芝居其外右に携候町屋の上は不殘引拂被仰出候乍然二百年來居着之地相離候に付ては品々難澁之筋も可有之哉に付相應之御手當可被下候替地の儀は取調追て可及沙汰候木挽町狂言座の儀も追て類焼致候か普請大破に及び候節は是又引拂ひ申付候間兼て其旨可存權之助狂言座之義は來春興行相始候共狂言仕組幷に役者共猥に素人え不立交候樣に取締方之儀をも厚く可相心得申候右之通被仰渡奉畏候仍而如件

天保十二丑年十二月十八日

前書當人

同町役人

北御奉行所

同年大晦日一統御呼出しの上聖天町へ替地仰付られ御手當金として五千五百兩下し置るゝとなり然れども聖天町には小出信濃守殿同主稅殿の屋敷地なれば是も御替地へ引移りの間卅日の内に鼠山と囘向院の東空地へ移し二月朔日に堺町葺屋町の者共へ引渡し

賜ひける此土地は俗に淺草の姥が池とて往古孤家有し所とて地形甚低く一万八千坪とか有地形一丈計地上せざれば普請にもかゝる事出來難しとて元地より先地形普請にかゝり翌十三寅年七月に地名を猿若町と名付一丁目中村勘三郎二丁目市村羽左衛門三丁目河原崎權之助歌舞妓三座操座結城座薩摩座二軒共笈に移りけり河原崎は仰渡されの表なればやはり木挽町にて顔見世翌春狂言三月狂言とも興行せし處市川海老藏お預と相成り御老中水野越前守殿御差圖にて寅年六月二十二日申渡しの寫し左の通り也

深川島田町熊藏地借
十兵衛方同居同人父　歌舞妓役者　海老藏

其方儀家作之義は長押塗がまち等不相成雜幷に道具之義も結構に致間敷と前々より町觸有之所其方家業體之儀は時之風俗に隨ひ專ら表向を儉り不申候ては贔負も薄く道具類も右に准じ金高之品に無之候ては融通も不立候迚右町觸を背居宅長押造床かまちに致赤銅七々子釘隱し打付庭向へは御影石燈籠其外大石數多差置亦は同所土藏内へ不動之像を儉莊嚴向惣金箔彫物有之須彌壇朱塗之彫物惣金泥合天井に致或は小簞笥へ赤銅七々子に金丸桐の紋付小柄に鐵物に致其外手込り候鐵物相用唐櫃幷に額奈良細工木彫彩色之雛等追々買取右雛道具も島桐にて金砂子を置胡粉紺青にて瓢簞を菊桐五三之桐紋形に置名前不存町人より貰ひ受候迚右壇に猥々緋を敷座敷内へ相儉其上狂言に用候品も一通りにては見物之人氣に入申間敷と革製具足一領鐵にて甲無之具足一領何れも武用之品を所持致狂言に相用且又先代より持傳り候共珊瑚珠の根付緒〆付候高蒔繪の印籠等狂言之節相用又は銀無垢のちろり等所持致候所金子に差支右之内ちろりは所持致其餘之品は質入又は可賣拂と預置金子借受候後去丑の十月質素儉約之儀被仰出候に付不相濟後悔致居宅造作等取崩候場所も有之候得共右體身分をも不顧奢侈僭上之至殊に先年より買置候共高さ一丈七尺之石燈籠一對深川永代寺境内に於て開帳有之候不動へ可致奉納と右境内へ差置候段旁不届に付觸に背候品幷に居宅被崩候木品ども取上江戸十里四方追放申付候

右十兵衛

其方儀父海老藏儀町觸相背居宅向長押造塗がまちに致し道具類其外華美高價之品所持致し奢侈に及所業

に候を如何之儀と乍心付父之儀に候迚差留も不致其儘に致置候段不届に付屹度呵り置

右家主　熊　藏

同　町　甚　右　衛　門

其方共之内熊藏地借十兵衛父海老藏儀町觸等を背居宅向長押造塗がまち等に致し道具類其外華美高價之品所持致候をも不存罷在候段畢竟平日心付方等閑故之儀兩人共不埒に付過料三貫文申付之

同町宇右衛門店　質　屋　六　三　郎

其方儀海老藏より質に取候雛道具は手を込候奢侈之品に有之處前々より町觸をも相背無判にて質取候段旁不埒に付右品取上過料十貫文申付之

岩代町家主　質　屋　作　七

其方儀武器之類は容易に質に取申間敷と先年觸置候所相背殊に身分不相應之品と乍心付海老藏より具足二領無判にて質に取月數相立菊治郎へ賣拂の段旁不埒に付過料十貫文申付之但菊治郎より請取代金錢可償候

神田平永町
源右衛門店
赤阪裏傳馬町二
丁目忠兵衛店

古道具屋菊治郎

同　平　兵　衛

其方共儀武器之儀に付ては先年町觸も有之處篤と出所不相糺菊治郎は作七より具足二領無判にて買取所持致候段兩人共不埒に付右品取上菊治郎は過料拾貫文平兵衛は同五貫文申付之但し菊治郎は平兵衛へ相渡候代金錢同人へ可償作七え相渡候金錢同人え償申付候間可受取

右町役人組合名主

右之通被申渡海老藏は於數寄屋橋御門外追放被仰付候右寅年六月より海老藏儀は總州成田不動へ落着居候へども彼地にても噂高き者ゆへ上方へ相赴駿州の最屓先に暫食客と成翌卯年紀伊國高野山には墓もあれば詣でんと伊勢路より伏見へさして登りし所大坂芝居興行人堺屋惣右衛門より大坂芝居へ出勤させ度願ひに依て海老藏大坂へ召れ江戸表へ伺ひ候上卯年十月大坂住宅となり角の芝居へ出勤となりけりそれより八ヶ年が間京攝の内にて興行致せし所嘉永二酉の六月八代目團十郎父海老藏に逢度願ひにて江戸表にて暇乞狂言を出し上坂し七月歸國せしが孝心の聞へ高く同年冬御赦免を蒙り同三年の春九ヶ年ぶりにて江戸表へ歸國し三丁目芝居へ再び出勤の身と成り

しは業こそかはれ先に誌せし多賀長湖英一蝶と同日の論なるべし

芳澤春水名譽の說

元祿の比歌舞妓役者若女形三ヶ津惣藝頭と呼れたる芳澤あやめ俳名春水此系圖も役者大全綱目等に出たれば改云ず二代目あやめとなりしは芳崎咲之助を惣領にて立役山下又太郎元祖中村富十郎も此あやめが舅なり芭蕉が句に郭公啼や五尺の菖蒲艸と云も此春水に送りし句なりと云蕉風俳諧の傳授と云附會の說も有春水は歌舞妓者といへど元能の手をよく辨へ其比四座の人々の習ひ事とする祕事亂道成寺石橋も悉く習ひ覺へ扇子の手は他の及ぶ處にあらず故に二代目あやめ始の名咲之助又太郎富十郎何れも道成寺石橋のうつしをするに並々歌舞妓の藝とは格別に違ふ事なりとぞ近世著聞集に云故あやめ大坂にて海士の玉とりやつし舞をせし時地謠共うたひつれ春水扇子の手格別なりと稱美する其手の中に直下と見れども底もなくと云段に至り扇子を上て顏をふり上件の扇子を見るの振なり或人故春水に難じてあの場は海原を見やる體なり海上へこそ心を移すべきに扇子をふりあげ仰ぐは其情氣取り惡からんと申ければ春水答て申けるは凡舞の一手と申習ひは其舞臺の儀に搆わず海も山も花も雪も惣じて萬物を扇子を的に見る事なりたとへば地謠然れども此松わと謳ふ時は扇子を上て松にたとへ月は隈なくてり渡りと謠へば扇子へのみ氣をとるを舞の傳授と致事なりそれを扇へは心をば用ひず月といへば空へ目をつかひ山といへば仰のき川といへば下を覗く身振は皆々素人藝にて拙し眞實の事を一向知らざる者のする處なりそれ舞の扇は無にして有虛にして實陰にして陽なり陽中の陰又陰中の陽とて開くを陽の手疊むを陰の手取落したる扇を虛の扇取上拾ふ扇は實の手雪月花になぞらへ見る扇の手は有の扇と云てには持置す扇を無の扇と云なりされば天台大師智者大和尙の文句中に風大虛に入ぬれば木を動して是をさとし月重山に隱れぬれば扇を上て是にたとふと申御句有法華比喩の大事と云有がたき佛說なり扇の手は此樣な子細にて中〳〵詞に盡難し何ぞしる事かたかるべしと物語しけるゆへ春水の大達人たる事を明らかに考べしその後中村慶子元祖名人がせし娘道成寺の折長唄の文句に月は殘りて有明のと云時に扇を開て其扇を見たり其節八丁堀の平井平右衞門御部屋御役者なり物語に扨も慶

子が扇の手は不思議なりと譽けるゆへ始て子細を右平井に聞けり嵐和歌野も今の菊之丞も龜藏も其外月は殘りて有明のと云時は皆あなたの空を見たりしが獨慶子は格別なりと申されし其外本座の人々の咄けるはあやめ一流の扇子は奇妙なりと申さるゝ中〳〵御府内並に京大坂の歌舞妓役者に所作事師といふも多く有といへども皆々歌舞妓扇子とて本手にあらず素人は面白しとほめても眞實（ほんま）の目からは偏に山猿の烏帽子着たるが如し故春水二代あやめ（俳名一鳳）富十郎又太郎が如きの地舞は古今に有まじと右平井平右衛門も稱美申けり是少しは眞實の功者と申べきかと出し有此餘地狂言の役々によつて心得とすべき事をあやめ草と外題して躬ども門弟子へ遺せし書有然れば此比は振付と云もなく皆我ふりを拵扇の手にても我工夫にてせし事なり中卷夕霧の條にもいへる如く遊女役者と一口にはいへどかゝる名譽の者となれば金持の町人にのみ付合べからずやごとなき高位にも召るゝ事有てよき事を聞居るなれば別てあやめは幼稚の比色子にて其比名譽の能役者太夫達にも最負となり本手も委しく習ひしなるべし今時三都の雜劇に振附と稱する者有て唯婦女子に舞を敎へて業とし邂逅歌舞妓に新しき所作事といへば此振付が三味線歌も出來たるを聞て所作らしき振をつけ扨役者に敎ふる事なり依て本手の故實のとの論もなく皆々歌舞妓踊りなり唱歌も古きものゝ寄せたるのみ三味線の手もあれ是とよせ物振は所謂あて振にて野鄙なる事流弊の習ひ是非なし

能に新工夫を用ひぬ話

本行の能に限り新奇の工夫を以てする事を禁ずといへりさも有べき事なり歌舞妓などゝひとつに混ずべき事にあらねど梅牖主人が新齋夜語にも造りもふけしことなれど一話有爰に出すいつの比にか有けん四座の外に梅若太夫と云有若きより家業に志深く藝に精神加わり觀世に劣らぬ名人の聞へ有しに一とせ信州を領ずる侯家にて家督の嘉儀に能有梅若木賊を舞ひしに領分の百性らにも見物をゆるされたるが其中より下手なる木賊の刈よふかなと笑ふ者有能果て梅若其譏りし者を領主に願ふて呼出し嘲りを問ふ百性答へて我は此信濃にて名におふ園原山の麓に生たち木賊を苅て年比業とすれば心ゆく見物なりと見侍り

しに木賊刈ふと鎌を右の手に持て左へ〳〵と刈らせらるゝは餘り拙く尋常の草こそかくは刈れ木賊をかく刈る時は半より上へ裂て眞帆には刈れず鎌を逆手に持て左より右へ掻切こそ法なれと述ければ梅若今迄木賊刈の所作は師傳を得てなせども未誠の木賊を刈たることなし誠に老圃に問へとは此事なりと感じ一時の師にこそと物多くとらせ歸して後此家にては二鎌は昔の如く刈り後一鎌を逆手に刈る業を入たるとぞ此後南都薪の能舞に登り一夕西大寺迄用有て歸るさ夕月夜にたどるにも心を凝機位を考つゝ行先にいと老たる乞丐婆の杖にすがり行を跡に從ひ渠が容貌足の運び杖の突ざま心をとめて躡行しが尼が辻にて渠は南の方へゆかんとするを呼とめ年老て嘸苦しくこそ物取せんと印籠の内より方金一顆取出し與へければ婆忝しと手に受しが直に返してかゝる貴き寶より只一二の鵝眼を賜われと云梅若我一時の師なれば其恩を謝すなりと云に婆我殿の師たる事を覺へずと答ふ我は梅若と云能太夫なり今年薪の能に檜垣を勤るに付工夫する所汝が一年老屈りて杖つき行さまかの檜垣と云老女の能を舞んに感ずる所有ば是師にあらずや謝物を受よといへば婆その謝物ならばいよ〳〵以て請がたし殿の猿樂こそ覺束なけれ今婆を見て老女の能の妙を得給ふとも鬼神の能は何を見て其玄微に至り給ふへき其御心よりは何事も枝葉に拘はりて謠曲の文章に時代違を作り牽合附會の俗説どもを胸わるく思して彼の是のと改めんの計も出來ぬべし迚も是は慰事にて事實に用ゆべきものにも非ず白樂天を唐音にては諷われぬ物から只家傳の節墨譜を深く修練し世々の舞の手の優なるを慕ひ給ふには玄かざるべし習ひ學ぶべき師傳の書いくらも有べきを置て遠く外を需給ふべからず歌舞妓物まねする者こそ賤きさまを其儘に摸すをもて譽とすなれ貴人高位御慰にも成べき爲の能なれば卑き乞丐のさまを見寫しになさばさこそ見苦しかるべき我はさまこそ賤しけれ心は殿に恥べうと思われずと流るゝ如く述けるに梅若大に閉口し思はず地上に頭を低て稍涙を拂ひしが去にても如何なる人ぞと問まほしく仰見ればいづち行けん姿も見へず失ぬる事こそ不思議なれと有是は舊より作り物語なれども亂舞猿樂にも限らず諸藝共に通じて上卷淨瑠璃太夫の名言に云酒を飲て生

醉のせりふに當りをとれば大疵を受て手負の場を語らずば其情通じ難しと云るも同じ日の論なるべし

畫に畫虛事有の話

巨勢の金岡が畫る馬は夜な〳〵出て萩の戸の萩を喰ひしなど名畫に精神入てふしぎを見する事和漢其例多し狩野探信が圖せし處の竹の繪は古今の出來なりといへども其葉皆陰形にして夜の竹の姿なりと云探信幼少の比父探幽が手本に竹を畫て渡しけるを數度清書して見するといへども父の氣に應せず大に呵りて以ての外不器用なり是にて繪といわるべきか其方分としては家元の家督は成るべからずと散々に罵りければ探信稚心に是を恥て筆を手に持茫然として夜更る迄寢もやらず案じ煩ひ居たり其折ふし秋風冷やかに吹音信ける時しも庭前の竹戰ひで葉形あり〳〵と障子に寫りければ始て是を本として忽其姿を畫翌日父探幽に見せければ是でこそ畫といふべし精神悉く具り妙なり奇なりゑかし是は葉の色陰形にして夜の竹なりと云しとかや名人の上にはかゝるふしぎの見分よふこそあるらめ中興尾形光琳は此探信の竹とおなじく障子に寫る影を寫して光琳風とて一流を畫始けるこそ名譽といふべし是も始より其風ばかり書にあらず諸流にわたり眞草行を篤と胸に納めての上の事也大江丸舊國の句に三日見て光琳常の百合を書と詠しは爰なり曩に云英一蝶などは浮世繪とて所詮土佐狩野などの家元とひとつに混ずべき物にあらぬは誰もよくゑる所なり中興眞寫とて都ての畫を生寫しに書始しは丸山應擧なり是又一流を立る程の名人なれば此畫を愛する者少からず或方より臥猪の畫を乞れけれども應擧未嘗て野猪の臥たるを見ず矢脊より薪を運ぶ老婆に問ばたま〳〵是を視ると云重ねて見ば我にゑらせと云に老婆日あらずして我家の後の藪に野猪臥し居れりとゑらす應擧俄に門人一兩輩をつれて矢脊に至れば猪は藪に臥したり應擧筆を採て寫しかへり清書なる比鞍馬より來る老人有話の序に臥猪のことを云翁山中にて常に見ると云にかの畫する所を見せるに翁熟視して是病猪なり凡野猪の藪中に眠るは毛髮憤起四足屈蟠おのづから勢ひ有以前病る猪を見しが此畫の如しと云應擧翁に臥猪の形容を聞てさきの畫をすて新に畫く四五日有て矢脊の老婆來てかの猪翌日藪中に死たりと云應擧是よりして生

寫しと云書を止めたりと云さも有べき事なり梅若太夫の話ともおなじく目前視る所の草花鳥獸は眞寫もならんが龍神鬼神など書には何を以て手本とせんや皆往古より書來る古圖によつて書く事なりかゝれば書虛事とて古今名書の上にも法則具わりたる事と云るべし

應擧若かりし時野馬の草をはむ圖を書けり或者難じて馬の草を喰ふには草に目を傷らんことをいとふて兩眼を閉る此馬草むらに鼻づらを入ながら兩眼見開き居るは盲馬なるべしと應擧是を聞て書を改たりと云又今にも東都淺草の觀世音の堂内に高嵩谷が畫たる賴政猪の早太鵺を退治の大繪馬有或人難じて嵩谷は古今の名人なれども鵺の尾に蛇の頭の方を書しは誤なりと云予思ふに嵩谷程の名譽の者心づかぬにはあらざるべし尾は蛇の如しとあれば蛇の頭を書ず尾計書時は蛇か蝮かわかるべからず所詮鵺といふ獸有といふも實說ならねば爰ぞ書そらごとを心にこめ見易からん樣に頭の方を尾に書たるなるべしされば應擧が野馬の圖を書かへたるは見識嵩谷が鵺に劣り第二義ともいわんか猶識者の後評を待

詩歌連俳を評ずる話

漁獵を好む人の云を聞ば魚をとるより鳥を捕は面白く鳥を取るより鹿狩は又面白き物なりと云或儒の曰和歌より詩はおもしろく詩より文章は又面白しと又或俳諧師の曰詩は長刀和歌は刀連歌は脇差俳諧は懷劔なり心切に思ひ詰れば其利事早く始皇の胸先を刺に至る刀長くば其所に至りがたからんと皆己々が好みの道へ水をひくとやいわんされば惡堅き儒者の口にかけては周公孔子をのみ尊みて我朝の至寶と稱ずる源氏伊勢の物語を嬉亂にみちびくの書なれば若き男女には見すべからずなど云て佛法は世を惑はし民を誣るの法なりなど難じて其餘の事は有てもなくてもの樣に云り見ぬ異國の事ばかり有難がる人に今時の雜劇を見せたらば何と評を付るやらん爰に捌けたる物は俳諧なり風俗文選のうち獲麟の解の解は五老井許六の作なり其文を爰に出す

魯の哀公十四年西の狩に麟を得たり孔子大きに歎きたまひて春秋をとゞむ夫麟は何れの時出て孔子は見覺へたまふぞいといぶかし鼠は愚にして火難の家をさけて命を保つ麟は四靈の隨一にして狩ある事をし

らずうろたへ出たるも又いぶかし孔子自ら聖に高ぶりもしや牛馬の生れぞこなへるにてやありけむ是も又いぶかし麟うせ道おこなわれざる物ならば道は麟にのみありて聖人の上にはなき事にや猶又いぶかし麟ほろぶれば聖人も共にうせ給ふ例にてもあるやたとひ聖人うせ給ふ例有とも道はまさしく存せり是とても歎に足らず儒道貴しと思ふ者は麒麟を第一にたふとび次に聖人をあがむべきか箸折るれば親に離れ櫛の齒虧れば子に別る丶占とて童蒙のものはふかく悲しめり箸おる丶毎に親にもはなれず櫛木履虧る度に子を失ふにてもなしされば仁義の占もあはぬためしもありぬべし麟をすかぬ聖人もありや又聖人を好ぬ麟鳳もありや三皇五帝より以來孔子の外出たる聖なし和國も神代より打つゞき當時百年枝をならさぬ聖朝なるに麟鳳出たる取沙汰もなし犬は戸口を守り鷄は時を報ず麟出て人もおどさず鳳啼て旅客の夢を破る能なし出ぬ方の聖人いよ〳〵目出たかりぬべし見ぬ唐土の鳥もねじと徹書記があやまりたるはもし出ぬ方をよみたるにや世間聖人をしらずして麟鳳にのみ目をつけて末の凡夫の不目利はかの一言のあやまりにて聖人なしと思ふなるべし今此麟を解して見るにとまり兼たる春秋のよき場所に出合せ擧句の趣向と見こなしたらば何の麒麟に理屈あらむや云々

是らを稱じて俳諧と云なり世の人和歌連歌は雲上なる詞を用ひ俳諧といへば鄙陋なる詞を遣ふと心得たる有さにあらず詞花言葉を翫び俳諧も八雲の末なれば一口に卑むべからず

狂言綺語を許ずる話

上巻音曲を擧たるうち狂言綺語のこと詳なり直に言を言と云論難するを語といひ道理に卒くを綺語と云堅き事を和らげ方便の爲に戯れ言をなして愚なる人を善道にみちびく謀を狂言綺語と云なり今の世の人芝居ごととて戯場の狂言道理に當らざる事ながら芳野川の早瀬に兩岸より道具を流すなどのこぢ付を芝居事なれば仕方なきと云是を混じてそこで狂言綺語なりと批判をいわれし時の逃場と心得たる人有是は雑劇事とて狂言綺語とは心甚違ひたる事と心得べし狂言綺語とは戯場の事のみに限るべからず佛經にも讃佛乘の因と說て廣きことなり戯場狂言に無理なる仕組有事を皆芝居事とて書空事と云に同じいわば一

幕の狂言に一晝夜の事をなし月に雲かゝれば眞の闇となる暗を探り合ひ庭も座敷も隔なく座すなどは五六間の舞臺に道具を飾り廣き殿舍佛院深山幽谷も摸す物から所詮眞實の事はならずそれ〳〵に法則有て是を一體に芝居ごとゝは云なり又始終に連續せざることを雜劇通言に穴と云有是は又一種別にて其穴をのみ見出す者を穴捜しとてこれを是とする人まゝ有る物也穴多き狂言は淨瑠璃歌舞妓共に當り藝に有穴なくても面白からぬ狂言は再び出ず假名手本菅原抔は穴頗多けれども毎度興行の度に當りを取るにて思ひ合すべしされど淨瑠璃歌舞妓とも近世の狂言の事をいふにあらず古作の名狂言の事を評じて云なり戯場に限らず諸道諸藝ともに其道の事を委しくしらずして其穴を探り批評するは俗に惡口云と云者にてたとはゝ念佛無間禪天魔など迚佛家の事を唱へるも後世の評にして祖師元祖の事をいふにあらず後世流弊の者を評ずるなり其道の事を辨へずして批判を打輩は惡口いひとて論ずるは無益なるべし

淨瑠璃狂言穴の話

右に演る如く古く遺る當狂言には穴多しされども今更是を改るによしなく故人の節墨譜を守り木偶にても昔を守り歌舞妓にても俳優のするも皆古への格をはずさずするを此道の習ひとする也譬はゝ物草太郎といへば桃色の上下にいたら貝の紋を付曾我の兄弟の紋は蝶と衙を用ひ道成寺の清姫の帶は鱗形と仕來りたるを紋切形とて今更新奇の工夫有とて猥に改替ぬを此輩の法とするなり邂逅新奇に案て以後一變するもあれど故人へ對して失禮なるべし判官代輝國打裂羽織を着漁師簔七半上下を着るなど道理には叶ふべけれどかの芝居事と云に考合さば新奇の思入はむだごとなるべし爰に近比の話なれど一二話有海老藏菅原をせし時松王丸にて首實檢の前に此首は贋首なるべしと誣問ふて後我子の首を見て實に菅秀才の首なりはて討ましたよく討たと云思入是は故人の誤りの穴を埋しにはあらず我のみの才覺にてする事なり實に穴をふさぐと云は道明寺の場にて始贋迎ひの來たる時後室覺壽は誠の迎ひなりと思へばこそ丞相を渡したれ輝國を呼かへして誠の丞相一間より出れば驚くも尤なり然れば先に木像と別るゝ時にも苅屋姫を連出て詞はかはさずとも見送るべき筈なり先に其

事なくて段切にのみ姫をつれ出る時は先に饗迎ひに渡したは木像なりと知りたると思わる依て予海老藏に是を云海老藏成程と思ひしにや先饗迎ひの時にも妙二人に叩ぎて苅屋姫にそつと見送らせ手にて仕かたして奥へ入たり是らは實に穴を埋る思入なれど見物に心づかねば誰が手柄とも云べからず當時の歌右衛門が又平手水鉢にかゝり是今生の名殘の畫姿は苦に朽る共名は石魂にとゞまれとあつさ尺餘の御影石と云文句の内こなたより畫を書ば手水鉢の内へ道具方這入て向ふへ書事定例なり操にては向ふの畫像に紙張付有て是をまくるなり歌舞妓にては又平鼻を書ば道具方後ろを見かへりて向ふへ鼻をかく諸事又平の書だけを向ふへ書「墨もにじまず兩方より一度に書たる如くなりと云文句一ぱいに双方書終る事梅玉すら是をする今の歌右衛門か様なる事に至つて念を入るゝ癖有以前予に問ふて曰古筆の名畫向ふへ抜ると云は半身書たれば半身抜る物かと予答へて半書たるを半抜る事有まじ俗に云佛作つて眼ともあればいかなる名畫といへども未書さしたるはよも抜まじ全身書終つて後じつと見詰る此時魂具わつて向ふへ抜るなるべしと云ばそふなくては叶わじ此度の手水鉢の仕かけは中より書とも我書く内は筆をとらせずぐつと見込む折一時に書すべしと誂らふいかなる早筆の者にても狹き所にかゞみ麁畫鈍畫なりとも一時に書く事甚かたく色々工夫の上形をほり針にて縫つけ刷毛にて摺つて間に合せたるが箇様な事數百人の見物しるべからず又平の狂言こそ見れ手水鉢名畫の抜よふは見物心にとめねば皆むだ事なり昔の役者はやはり操の如く張りたる紙をめぐらせしなり中興何によらず眞實物とて御厨子黒棚茶道具の類迄正眞の道具を遣ふ是皆藝人の衰へなるべし

古淨瑠璃名作の話

古淨瑠璃に名譽の作多き事は上巻東西の見立番附を見てもしるべしされど唯名高きものを先に出して外題を擧たるのみにて遙末に書たるにも世に行なはる名狂言有又さもなき作と思ふも上座に出たるも多し又番附出板の後に出たる名譽の狂言も有書洩して落たる外題も少なからず其内豊竹座の關脇に出たる祇園祭禮信仰記は寶暦七年に出來て今より九十餘年昔の作中村阿契淺田一鳥兩人の作なり全體一部の趣

向を年暦前後に拘はらず思ひ切たる作と云べし三好松永の世界へ雪姫直信を取組山口九郎治郎改名して明智となるなと自由に仕組めり三の口乳母侍從の詞に此跡の大坂といふ在所で尋ねたれば岸野の里へもまあ一里とは今云鳶田邊りと見込て其比天下茶屋新家などは名に呼ぬものから岸の姫松は思ひより是齋の住家を岸野の里と假名を呼び曾呂利を下人新作とつかひしなど脚色の働らきいと妙なり四の切金閣寺にても今纔に遺る瀧を見ては狂言にするはいと仰山にして物々しと笑ふ者有是を彼狂言綺語とは云なり今こそ水落ずとも其比ならば水勢漲り落たるかもしるべからず又大膳が瀧のもとにて釼を拔て雪姫に見する時の詞に河内の國慈眼寺山灌頂が瀧のもとにて老人を手にかけしが扨は其方が親將監雪村に有けるかと有予以前より此瀧ある所を考がふるに慈眼寺山とは野崎觀音山の事にて灌頂が瀧などは名所舊跡とてもなく此三四里片脇に瀑布といはゝ額田村長尾の瀧北には倉治村源氏が瀧より外なし源氏が瀧とは白簱を流したる如きゆへ然呼ぶと新らしき碑を建てしるせるは附會の說なり昔此倉治村に興元寺と云古寺有荒廢して跡方もなくなりやうやく元寺のみを土人覺へゐて元寺の瀧と呼なるべし信仰記の作者此瀧に思ひよせて慈眼寺山灌頂が瀧と作りもふけて號しものならめ人物時代の前後を論せず舊記實錄に頓着せず善人を惡人とし惡人を又善人として別に一個の世界をもふけ勸善懲惡の深理を說くがゆへに狂言綺語とは云なり此狂言に限らず趣向のよきと作文のよきと二種有趣向もよく作文もよきは實に名狂言とて後世にも廢る事なしよき狂言ながら人のしらぬも多かりそれらは其時にあはざりしとしるべし享保十七年文耕堂と長谷川千四が作壇浦兜軍記は名譽の狂言なれど阿古屋琴責の場ばかり人知つて餘の狂言をしらざる人多し委しくは予が綺語文草四編祇園下河原の條にあれば爰に略す延享二年並木千柳竹田小出雲が作の軍法富士見西行など奇々妙作といふべし墨染櫻は古今集に岑雄が詠此春ばかり墨染にさけとあるを西行の歌とし義仲江口の里に遊び西行銀の猫を家來松並靱負が子にやり脊虫大盡となつて娘寫繪に出合ひ襖に書し富士を見て軍法を語るなど一つとして仇なる場はなし是らを花實兼たる名狂言といふべし昔

よりすこしも捨る所なき物を平家法華經經節といへる諺有揃ふて屑のなきを云なり

歌舞妓狂言穴の話

歌舞妓狂言は淨瑠璃と違ひ興行度毎に役者もかはれば少し宛の增補有て確と板行に殘らねば其時々に評ずるのみ然れど名高き狂言にて一二をいはゞ中巻にも云秋葉權現廻船話大序は京都屋敷逸當身一つに科を引受殿圓秋を本國へかへすに陸地を行ず海船にて乘ると云是難波へ下らせて大廻しに乘せるなるべし扨跡にて敵役を討捨切腹する五平遺書と首をもつて陸地を走り粟津の松原にて幸兵衞に合ひ遺書を渡して直に走れり此前に幸兵衞は駄右衞門に逢ふて別れ兄逸當が遺書を讀駄右衞門の跡を追ふて駈こむ祐明鐵炮を打が序の幕なり二つ目本國の屋形へ圓秋入部の悦びにて家中一統さゞめき合ふ中へ街の駄右衞門手廻し早く入り込み情をかけて暇乞をさせること餘程の時移れり今切腹といふ所へ駈付たる五平は一向の道下手と見へたりさなくば餘程戯談が過しと見へたり幸兵衞駄右衞門の跡を尋ね主人圓秋が家を大事に思はゞ遲くとも此幕切に駈附一方は切防ぐべき筈なり何國へ這入り居しか甚不忠不義の男なり五平も又序二とは働らきたれど大井川宿屋の二幕の内は何國へ這入りおりしやらんとか樣に一々難じる時は狂言は書れず穴といへば斯の通り多けれども見て面白き狂言なればこそ八九年の後今に少しも增補もせで用ふるなり又けいせい黃金鱗の序切は宇治の小倉堤なり夜明前と見へて齋藤龍興京都より本國美濃へ交代の行列出て鴈の內より發は何國と問ふ家來小倉堤なりと答ふ鷄笛吹によつて最早鷄明乘物やれと此人數這入る跡へ柿の木金助西國順禮の姿にて出る向坂甚內は東國道者赤蜻蛉の姿にて出て雙方國の訛りを言ひしが後には我を忘れて其身の望を語り互ひに落首の狂歌を取かへ又廻り合ふ時節も有ふと雙方へ別れ行稻村の中より龍興乞食の形りにて風ふかば沖つ白波のせりふを云兩人あやしみ小戻りして顏見合す心々の世渡りじやなと云是序幕なり是夜明とも日暮とも少しわかり兼たる狂言にて東國道者の出にあれ〳〵お月さまがつん出やをやつたとせりふも有顏見合す時がんどふ提灯稻村の中より雙方へ突出すを見れば夜なり又交代の道筋東海道もあるに小倉堤は

來るも何とやらおかしき物なり扨二つ目幕の内諸國歌枕南宮左中將當城へ旅館なさること家老山形道閑出むかひ幕の内へ這入る幕明て今日殿龍興入部なりと出迎ふ殿歸國のよろこびに一家中へ土產をくるゝ都より院使監物入來り貫之自筆の古今集を持かへらんと云奥殿にとくより入込たる南宮左中將出て前幕西國順禮の詠たる狂歌を短冊に書てそれをもたせかへせと云院使又返歌をせんと東國道者の詠たる狂歌を其短冊の裏へ認め是をもたせて衒をかへせと雙方よりいさかひ立かゝるを龍興中より兩人へ手裏劍を打兩人見覺へあれば驚乍ら打かへす龍興面桶を以て是を受とめ三人きつと見へになり「日外小倉の堤にて「時は東雲面體も「空も朧の朝影に下略是三人が默りほどきに成り序切に出合ひし二人の道者と乞食再び爰にて逢ふとの仕組拔さしならぬ名狂言とはいふなり然れ共穴多き事甚しくまづ日外と云は餘程日數の立たるを云なり是は城州の小倉堤よりどふ廻つて歸國せしかはゑらねど美濃の岐阜迄は三日か四日路なるべし大名の龍興本國へ歸らぬ内に東國道者の甚内が公家となつて入込しは是も餘程よき手廻しなり又時は東雲とも朝影ともいへば序幕はどふでも夜明ての狂言なり此餘大序は宇治の茶摘の場にて二つ目庭前櫻の盛りなり是らは此狂言に限らず間々ある事也口幕は一年前の狂言にて次幕一年の月日は立ど出る人數は皆去年の顔揃へなど又一人計老くろしくなりて外の役の輕き者はいつ迄も同じ容など有是らを皆雜劇事と唱へてさして難ずる事にあらずされば黃金鱗は序二ばかりにも此位の穴あれども人是を咎めぬは見たるめよく面白き狂言なれば六七十年の今に廢らず行わるゝにて名狂言なる事をゑるべし

古名人役者に妙ある話

往古の名人役者に妙ある事は役者七書に出たれば云ず爰に中興の事をいわば金門五山桐は並木五瓶初代始吾八の作にて是又歌舞妓の名狂言なり此序茶屋場へ盜賊五右衞門靈山國師となつて入込み千鳥の香爐を奪取筒井順慶を殺し向ふへ這入る折南無あみ豆腐と戲れて入るを本文とす嵐雜助後小六玉は至つて肥滿して女形は似合ぬと思ひ親小六より女形の家なれど立役になりたる程なれば肥太りて尻も見事なるがゆへに僧頭巾紫の衣を着たる儘にて此場には頭巾をとらず

二段目幕山門のおり大百日を見せればなり　花道中程にて衣のまゝぐつと尻をまくる見事な尻に紅木綿の越中褌にて舌を出して南無あみ豆腐と根を盗賊と見せるが趣向にて書もすれ仕手も珍らしければするなり折ふし奥にて石橋の獅子どうでんと太鼓入にて囃子になる雛助尻をまくりしまゝ此囃子に合せ向ふへ這入るなり大膽不敵なるを思入にてせし事とぞ後片岡仁左衛門今の我童が父此場にて師匠小六の通り尻はまくつたれどさまで見事な尻にもあらず跡石橋の鳴物あれども其業の出來ぬ物から南無あみどうふと云がいな尻引まくつて向ふへ駈こんだり評に曰あの五右衛門は衒があらはれふかと尻ひつたてゝ辿てかへつたと云り師匠はかうしたと知りながらも其身に出來ぬ所作なれば批判せられても是非なし其後歌右衛門梅玉坂三津秀佳角中兩座にて金門出たりしが梅玉は鼠の衣にて後なむあみどうふの時頭巾を脫捨衣の裾をまくり上げ兩肩へかけてぐつと引ゑめる裏は黑天鵝毛にて裾は下に四天付の形りとなる是は當時專ら流行引拔の裏にて引起しと云好なり六法をふりゑづ〳〵と這入尤梅玉小男にして尻まくりゑたり共痩たる體にては當り有間敷と新工夫にてする事なり禪僧ゆへに南無阿彌豆腐なれど盗賊の容にては何とやら背けたる物なり三津五郎も又痩地の男なればいかゞすらんと見たりしが是は又工夫妙なり紫の衣頭巾にてさしてかわる事なく後忍びをポント當る忍びたち〳〵と跡へよる折秀佳の頭巾を摑むゆへ脫る下百日鬘にて秀佳ふと頭冷たる思入にて頭を撫る頭巾脫てなきゆへ忍びを見て扨はといふこなしにて頭巾を引とりちよんと着ると忍びポンと返ると一時なり懷より拂子を出してなむあみどうふ〳〵と輕くいふて向ふへ這入る見たる所淋しけれど難なし都てかゝる役は二つ目金門鑼上迄は五右衛門の袴を見せまじき爲序は禪僧の姿にて見せたる物なり嵐雛助は僧のまゝにて頭を見せず尻引めくつて盗賊と見せる好近世は百日かづらを早く見せたがるを習ひとして梅玉などの好は鼠の衣尤背けり秀佳の好尤妙なり其後當時の歌右衛門手下の盗賊同宿伴僧の形りにて六七人出て五右衛門と共に花道にかゝり皆々なむあみどうふと同音にて云て一時に尻をまくる下盗賊の思ひ〳〵の形りとなる是らは何の好もなく論外なるべし此狂言を近來は大かた山門ぎりにて大

佛餅屋桃山御殿はせまがちになれり餅屋場中納言となり冠裝束にての出も雛助は京都芝居にてせし折は繼上下にてして當りを取しとぞ只十三里の道なれど皇都は公家衆の通行を毎度見來り浪華の者は公卿といへばいつも冠裝束なりと思ふ者多しゆへに大坂にては譬へ背けたり共公家といへば冠裝束にてし京都にては繼上下にす是芝居事とは格別郷に入ては郷に隨がふの場所なり桃山御殿の場片岡のせしを予幼き比見ていとおもしろかりし其拵は四天大小大百日にて出て宿直の近習睡り居るを見て笑ひ乍上手へかゝる綟子張の御殿を引道具にて出る此内に久吉（團藏の父先團藏な）り脇息にかゝり睡り居る五右衛門忍び込み刀を拔んとする千鳥ぶへ久吉妹許行ばの歌を云内綟子張引拔五右衛門やゝなんとゝ高二重よりぽんと飛下り屹となる近習目覺しきつと取卷いとおもしろければ歸つて幼心に感心して咄ければ亡父云雛助のせしは中々さやふの物ではなし其譯は五右衛門此場は打裂野袴忍び頭巾にて出て障子ひらく時久吉梅幸（初菊五郎）川風寒み衞なくなりと云ば雛助やゝなんとゝ高二重よりふうわりと飛下りつゝと下つて花道際へちよんと座す尤影拍子木なしに居る事なり是忍術にて忍び入りしかど懷中にて千鳥の香爐啼て久吉の眼力にて忍術あらわれし思入にて始終懷をおさへし儘にて和らかに云しとなり片岡のは忍術の心なしあゝ衰へたるかなと歎息せられしゆへ幼心にも又名人の心は違ひしものと聞しより四十年の今にも忘れず爰に誌せり

同狐忠信思入異る話

義經千本櫻狐忠信の役は古今來役者の心々にていろ〳〵にすれど今大物浦にて靜御前を義經に預かり鎧を貰ふ場より狐なりと見物にしらせん爲順切靜は向ふへ這入る忠信つゞひて行かけツカ〳〵と戻り溜り水にて水鏡を見るテン〳〵とらいじよを打一寸狐の思入有て氣をかへ忠信の見へになり向ふへ六法ふつて這入るは誰々も常となりてするなり眞の名人役者のする事ならず上手めかせし下手俳優の好てする事なり此場にて狐と見せる程の心入ゆへ道行にもやゝもすれば狐となりたがりて見にくし四の切御殿にても靜殘つて皷を打ば花道の切幕をツイと明るゆへ此方へ見物の眼の行隙に本舞臺下座又は花道へせり上

る事とせり衣裳は各好にまかせ玉の模様長下などなり是にては先に誠の忠信を詠め見れば衣裳もかはつて有扨はと靜が心付しせりふに背けり夫より皷にて折檻せられ跡じさりして大小を拔さし出す時手早く蕨沓に竹をさしたる刀とかへる抔道外めきて惡き思入なり是にては時々靜に馬糞なども喰せしと思わる源九郎狐にあらで眷屬の野郎狐の所作なり中興嵐來芝二代目三五郎は中々さ樣の事なく先大物の場にすこしも狐の心を見せず道行も一通りにてをくればせなる忠信がと云出より幕切まで下座岩臺に腰かけ靜とゝもに手踊り等はなく漸雁と燕も靜とは間遙に隔てゝ踊れり其餘誰々の道行にも口說文句ありて義經に恨みのたけを云名代につかはれ靜に胸もと持れなどする是らは若鼈の見物見たらば靜と忠信は夫婦かとも思ふべし狐は通力自在なれば靜を犯さんもはかられずとの疑有よく〳〵男女と主從の隔を考ふべし扨御殿にても來芝はやはり道行の衣裳源氏車の縫衣裳にて脊に道行の包を脊負ひ花道より皷に聞入畜生足にてつか〳〵と出て御殿の下につくばふ靜とくと見ればけさ迄連立來たる忠信なり衣裳かはらねば誠の忠信とは姿かはりしと云文句に合へり扨せつかんになりて上をぬけば狐の好衣裳となる延享四年始て竹田出雲並木千柳の作せし義經千本櫻にすこしも背ける事なし我才覺有共其作者の意に背かずよくするを名人上手とは云なり舊淨瑠璃に作せしは誠の忠信に靜を預け道行も靜は誠の忠信とのみ思ひ詰扨御殿にて忠信の姿かはりしを怪しみよく〳〵思ひ出せばどふか違ふ所有がゆへに皷を思出打ば今門前迄連立來たる忠信なり扨こそと詮議すれば始て明す狐の正體初音の皷は親狐の皮にて張しと語るが此狂言の趣向にて始て千本櫻を見る人も有べし見物に是迄狐としらさぬが出雲千柳の作意なれば生智惠の新工夫をするは僻言なるべし其上せりふに狐聲迚尻聲あやしく云を習ひとす然れば淨瑠璃にてもいとむづかしき場なり近頃組太夫藍玉が葛の葉の子別れを聞しが幽靈に聞へし忠信多くは癇症病の聲になる物なり來芝盛んの比歌右衞門梅玉もせしがいと不評にて落首に歌右衞門忠信ならば行もせふ錢を出して這入は來ん〳〵と笑へり當時か樣な心得もなく見臺又は三味線の胴より忠信出て鐵線の宙渡り輕業狂言とはなしたり嘸故作者

是らをきかば歎ずべし〳〵

菜種御供狂言の話

文政十一子年天滿宮の狂言予梅玉と共に著述せしが抑此狂言の舊は正德三巳年近松門左衞門作天神記と云淨瑠璃狂言を六十五年後歌舞妓狂言に增補して安永六酉年中村阿契並木吾八（後に五瓶）天滿宮菜種御供と外題を賦しけるより又增補せしものなり（近來增補せし迄又五十二年に及べり）一部の趣向は菜種御供とは大に變りたれども彼笑ひ幕迄は御供の趣とおなじ是又笑ひ幕とて此道の好人はよく聞居る事にて幕切時平一人殘る迄狂言書たれど幕をゑめる工夫付ず大內紫宸殿の前にて中通りの公家などが出て樣子は聞た此通り注進と駈出すを時平がぽんと殺されもすまじ幕となるきつかけなきゆへどふか工夫をせうと云しまゝ總稽古となり時平に嵐雛助（やはり小六玉金門の前年なり）菅相丞尾上菊五郎（大梅幸）向ふへ這入る跡時平獨舞臺となり（ひとり舞臺と云は樂やのころを云なり）通言にて獨殘らず這入るをから舞臺と云長きせりふ有て道眞はいかひあほうじやなアハヽヽヽと笑ふて大笑ひをするを拍子にちよん〳〵と木を入て見たる所昔よりか樣な幕は決してなかりし故是のみ噂となり笑ひ幕と號たり爰に或國學者一日此狂言を見て扨も俳優と云ものは埒もなき作り事のみをするかと思へば中々博識の者の作する物なり藤原左大臣時平公は笑疾と云癖有て俗に笑中風と云如きの病氣有て一時朝廷にて此疾發り詮方なく政事を菅公にゆだねて退きたまふ日比不和にて權を爭はるゝ敵手に斯の如きは實に止事を得ざればなりと確とせし記錄に有それをしつて笑ひ幕とはよく作したる物なりとて五瓶を先醒々々と尊敬せられしゆへ五瓶大きに迷惑したりしと亡父予幼き比の噺に聞り是らは世に云まぐれ當りなれ共故人作者役者にはかゝる妙有菅原傳授手習鑑は延享三年竹田出雲並木千柳作にして是又古今の名狂言なり（今迄百五年になる）振袖天神記は明和六丑年並木正三の作なり（今迄八十二年となる）予此世界にて趣向をたて十五六年以來待ども未世に出ず腹稿の儘に打捨あるが持腐りともならん事を惜しみ所謂狂言の筋書を爰に出す曲亭馬琴が著編里見八犬傳は數編重ねて出たれ共見てよき所は初編より四編五編迄なり是も先年予が歌舞妓に潤色せしが未見たらぬ所有依て世界を菅原と見立仕組の種は八犬傳を用ふるなり二幕目河內士師村覺壽の三年とか五年とか

の年囘を宿禰太郎と云立役つとむ奴宅内は本名竹部源藏にて爰に奉公す宿禰の伯母に鶴壽と云敵役の女其夫土師兵衞娘龍田を兼て宿禰と見合さんと云しが欲心より宿禰を追出し三好清貫の方へ嫁入せんと計る右大辨希世序にて追放となり土師村へ來て寺子屋をし娘龍田の聟にならんと娘をくどく宿禰は菅家再興の爲天國の劔をもつて宇治に時平の別莊有是へ願ひに行んと暇を乞ふ兵衞夫婦天國の劔のほしさにさまざまとの工みをする娘龍田宿禰に別る事を悲しみ淵へ身を投んと書置を置て這入宿禰是を助けんと淵へ飛こむ此内に希世天國の寶劔を摺かへる龍田は身をなげんとせしを宅内に助けられ無難なり兵衞夫婦は劔を摺かへさせんが爲娘の死骸が見へぬと言立鷄を戸の上にのせて流しそりやこそ啼たはとつてんこと騷ぐおかしみ有とゝ龍田助り凶事なき事しれて宿禰は劔に心付ず宅内を連て宇治へ立を幕なり三幕目希世又にせ物を兵衞夫婦に渡して龍田を盜み出し逃る跡へ清貫輿をもたせて龍田を迎ひにおこせし所行方しれずいかつて兵衞夫婦をころす返し玉手山にて希世龍田を連のいていろ〳〵口說天國の寶劔を見せる後の山影より紀の長谷雄有て伺ひ希世龍田を殺すゆへ長谷雄又希世を殺して龍田と兄弟の名乘りとなる宅内の源藏道迄送つてかへり道に長谷雄に出合ひ是丸塚山のだんまりの幕なり四幕目宇治平等院の別莊にて判官代輝國菅公に志を傾くるゆへ押込て春藤玄蕃是を責る宿禰寶劔を以て菅家再興の願ひに來る改し所にせ物なりそれよりめしとらんとす宿禰あれ出して芳流閣の屋根へ上る捕方につきて輝國に龍頭卷の衣裳をゆるして取にやる宿禰輝國閣の上にて組合ひ下に繋ぎし柴船へ落こむ繩きれて柴船川下へ流るゝ幕なり五幕目佐田村の川ばたにて四郎九郎祖父釣して居る前へ柴船流れくる中を見れば宿禰輝國なり躬梅王來つて三人を内へかへし船を流していなんとす妹聟松王伺ひよつてだんまり小文吾房八の畫面合せ幕なり六幕目梅王内法性坊神主春彦大夫爭ひ有て雙方松王梅王を賴み以前角力をとらせ松王まけて意恨となり此程は中絕の仲なり宿禰は金瘡の病臥輝國は藥を買ひに行跡へ鷲塚平馬宿禰の詮議に來て祖父四郎九郎を人質にとりて歸る梅王とつおいつ思案の中へ法性坊かへつて奥へ行跡へ松王春彦大夫來

て惡口を云て喧嘩仕かくれども梅王相手にせず兩人惡口云てかへる荒藤太と云角力の弟子來てすまぬ〳〵と云を投出して追ひかへす松王の母千代嫁お春を籠にのせて去に來て嫁を置てかへる跡梅王妹春殘つて今夜は內に置事ならぬ出てゆけと云此中へ松王仕かけて來て兩人立廻りに成松王を一太刀きる切られて梅はとびの歌をいふ戸口より母千代下の句を云松王母者人よろこんで下されおりや身替になりましたとの愁ひにて松王の首宿禰の代りとなり血汐で宿禰の金瘡直る四郎九郎出て愁ひ荒藤太注進とかけ出すを輝國かへつて來て是をさゝへる荒藤太くわん眼にて段切まく七幕目室の津の茶や場にて白太夫と云全盛の揚屋入には白の牛に横乘りして禿大勢に綱をとらせ出る是本名櫻丸にて八犬傳の毛野の役と見立都て房總のまぎろしき地名を五畿內の地名に引直し名は菅原始菜種の御供振袖天神記の人名を借る事なり斯の通り手段を付腹稿する事十四五年に及べども未時節來らず此餘腹稿のもの數多なれ共役者の座組と時候に合ねば世に出ず此一部にのする如く實說をよく胸に納めて扨實說に遠ざかり別に一部の趣向を立るを是なん綺語と云趣を聊說て此道の好人に示すものなり猶書もらせしを集めて附錄三卷に演れば其戲墨を見て笑ひたまふべしと云

維時嘉永三庚戌年狂言綺語堂に多籠して

西澤一鳳軒李叟記

雜劇作者湖上笠翁先生肖照



西邨楠亭写

題簑翁先生肖像

芒鞋竹杖見天子龍艦
春湖賜御扈一曲懷仙
人不解聲々惟有沙鷗
知

祇園張新炳

西澤文庫 傳奇作書附錄上の卷

目次

一唐土奇譚の寫
一古淨瑠璃本の寫
一諸流能舞謠名所競の寫
一謠曲作者目錄の事
一同內百番の部
一同外百番の部
一同習十番の部
一同獨吟八十五曲の部
一同作者姓名附
一復讐見立番附
一武藝名譽一覽番附
一男達見立角力番附
一新大橋復讐新聞
一同歌舞妓潤色の話
一天王橋復仇の紀聞
一同歌舞妓潤色の話
一下谷浪人者爭論の話
一苅萱桑門狂言の話

西澤文庫傳奇作書附錄上の卷

西澤綺語堂李叟著

唐士奇譚の寫

李笠翁先生は清の康熙年中の人にして湖上に住伊園老人と號す元より家富仕官を好まず天性其才人に勝れ文章一家の風をなす書を能くし畵を能くし又音律の絃歌に至るまで能くせずといふ事なし康熙皇帝是を召して官位を授んとの詔あれど辭して受けず老年に及んで閑暇ある時は詞曲傳奇を作りて樂しみとす先生の作の傳奇多き中に康熙二十六年の春北京百花坊の戲場にて千字文西湖柳といふ外題にて歌舞妓芝居をなせしを清朝第一の流行狂言とす唐にて芝居といふ事を演場とも戲場とも枸欄とも戲臺とも又小芝居を小枸欄ともいふ本邦にて宮芝居といふが如し但し人形芝居は傀儡棚と云舞臺の事を戲棚と云樂屋を戲房と云樂屋入口を鬼門口と云棧敷を山棚といふ又官人などの坐す棧敷を青龍頭といひて欄干に龍虎の彫物青漆塗にして歷々の見物する棧敷なり尖棚といふは出棧敷の事也狂言といふ事を引戲とも演戲とも戲齣とも雜劇とも戲文とも云ふ身振するを介とも科とも云顏見世を艷段と云二の替を二艷段と云稽古は花穿役者の物まねするを口技といふ根本正本を院本とも欵段とも云一段二段を一齣二齣と云唄うたひを念と云幕引を啓科と云役者を戲子とも梨園子弟とも惣じてかうやうの者を俳優家と稱す抑唐の枸欄の始は漢魏六朝の頃東府と稱して行はれしは皆詩を謠ふて舞し事にて日本にていふ白拍子が朗詠などに合して舞ふに同じく唐の玄宗皇帝の時始めて傳奇院本として芝居狂言なるといへども未盛に行はれず又宋の徽宗皇帝の時爨國の人來朝せしに各美麗に粧ふて面に紅粉を施したる體を其まゝ優人に命じて其顏に擬して舞せらる是を五花爨弄の舞と稱して其時に行はるは是を芝居狂言の始とす此時より民間に一種の枸欄戲子と云もの出來多くは漢楚の戰三國志など狂言に取組み世に行はるゝ事とはなりけり其後金の章宗皇帝の時董解元が西廂記といへる狂言を作る是唐の元稹

が會眞記に擬して作れる狂言にして古今芝居狂言の規範とす夫より後は皆西廂記のかたにて作れる狂言多し唐朝より以後代々流行狂言多しといへ共あらましを左に記す唐の世にはやりしは

演記長恨歌　烈女降黃龍　晉宣成道記　煬帝白花鈴
粉墻梨花院　女狀元春桃記
宋の世にはやりしは　三國一夜談　王子端捲簾記
四坐山偸酒牡丹香　花香千字文　三藏法師不抽關
金の世にはやりしは　西廂記　講家求記　水酒梅花
爨
元の世にはやりしは　琵琶記　水滸千字文　蘇武和
番曲
明の世にはやりしは　截紅鬧浴堂記　長慶春夢談
賞花燈　汴京十樣錦　范增覇王曲　楊大眞戀鶯山
等なり扨作者といふも唐の世にては白樂天、元徽之皆院本の作あり宋の世にては東坡先生秦少遊なども作文あり元の世にては羅貫仲、施耐庵尤も作の上手なり明の世に至つては李卓吾、祝允明、唐白虎、王世懋、金聖歎、鍾伯敬など諸歷々皆戲文の作に巧みなり扨笠翁が作の千字文西湖柳の頃の戲子の名は生（たちやく）揚雲伍淨（かたきやく）顧元山淨（かたきやく）張天兒淨（かたきやく）李三之淨（かたきやく）王達兒浪士（やつしがた）王眞琬生（たちやく）劉秀卿浪士生（やつしがた）李娥郎旦（をんながた）武郎子生（たちやく）劉士卿淨（かたきやく）張胡兒淨（かたきやく）夏逸打渾（どうけがた）王金老小旦（こやく）王紅連等なり是に戲伶扮名目（やくしやかへなのしだい）次の番附幷に一枚看板の圖を出し其院本を譯文して三冊の書あり實に本朝の芝居に少しも異ならざるを記す其外題脇書は

試問池臺主當爲將相官
千里柳塘偃月刀
承恩不在貌敎妾若爲客（容カ）

右唐土奇譚三冊は寛政二戊年正月上梓するを爰に略出するものなり

古淨瑠璃本の寫

井筒屋源六戀寒晒享保七寅年七月六日より豐竹越前少掾座にて世話淨瑠璃大當りせしとぞ嘉永三戌まで百二十九年となる所謂一夜附狂言にて京五條御影堂にて男女情死の次第を作りしものにて男の名を佐々木源六といへば其頃町々を井筒屋源六とて菓子飴の類を賣歩行しと同名なるゆゑ外題に付し物にて中の卷伊勢山田御師の場は後世伊勢音頭戀のねたば（寛

政中伊勢古市十八切）二卷目御師の場は是をはめたるものにて此下の卷に東がねの茂右衛門サアきた〳〵又々齋藤太郎左衛門ちよつと逢たい事ぢやとの唱歌を諷ふ事あり此二つの歌はいと古き物とおもはる文化に中村歌右衛門（始芝翫後梅玉）の七化に座頭越後獅子の唱歌につかひしも又をかしからずや此餘の狂言の仕組いと珍らしければ此頃の古淨瑠璃三十五部を類聚して當世榮花物語といふ書に出せば讀てしるべし永祿より享保の頃の詞其頃の衣裳の好み流行物など考へ合する好者達はかならず見べき草紙也

井筒屋源六戀寒晒　作者　西澤一風　田中千柳

皐月雨ふりし昔をけふとへば則けふが其むかし播磨の領主に宮づかへ御家に古き古柱佐々木源太兵衛と中一かまへかまへし門に幟をたて内は女中が粽まくはやいおそいとせりあひの菖蒲菰をあしにつく身につくしごと手につくは口につくかとなまめかし茶の間のまかなひ名さへおせりといふ女

諸流能舞謠名所競の寫

嘉永元戊申年開板松壽堂藏板と記せし見立番附あり奥に此は能の位又は口傳祕曲にかゝはらず只古作の面白さを撰て甲乙を記すとなん斷りたり是も作者道に因みあれば爰に略出す

次第御免不同

行司

近江　鸚鵡小町
筑前　碪
都　野々宮
天竺　石橋
筑後　柏崎
津の國　求塚
信濃　姨捨

肥後　檜垣
大和　采女
津の國　梅枝
近江　望月
相摸　千手
山城　小鹽
津の國　卒都婆

勸進元　道成寺　紀州
差添人　關寺小町　近江

世話方

近江 志賀
都 右近
出雲 大社
つの國 吳服
近江 竹生島
山城 放生川
丹後 浦島

大關 津の國 松風
關脇 加賀 安宅
小結 都 定家
前頭 同 熊野
同 日向 景清
同 近江 三井寺
同 陸奥 善千島（知善鳥カ）
同 都 葵上
同 大和 井筒
同 都 融
同 越後 山姥
同 大和 花筐
同 都 斑女

世話方惣

駿河 富士山
陸奥 千引
常陸 常陸帶
淡路 淡路
唐土 東方朔
同 西王母
播磨 高砂

前 みやこ 田村
同 やまと 當麻
同 つの國 苅萱（蘆苅カ）
同 さがみ 盛久
同 いづみ 蟻通
同 やまと 玉葛
同 近江 白髭
同 するが 夜討曾我
同 つの國 滿仲
同 山城 弓八幡
同 みの 朝長
同 筑前 唐舟
同 常陸 櫻川
同 紀州 卷絹
同 山城 賴政
同 佐渡 檀風
同 新宮 玉の井

世話方

加賀 木曾賴光
唐土 大瓶猩々
都 東岸居士
同 加茂物狂
津の國 須磨源氏
天竺 大般若
信の 土車

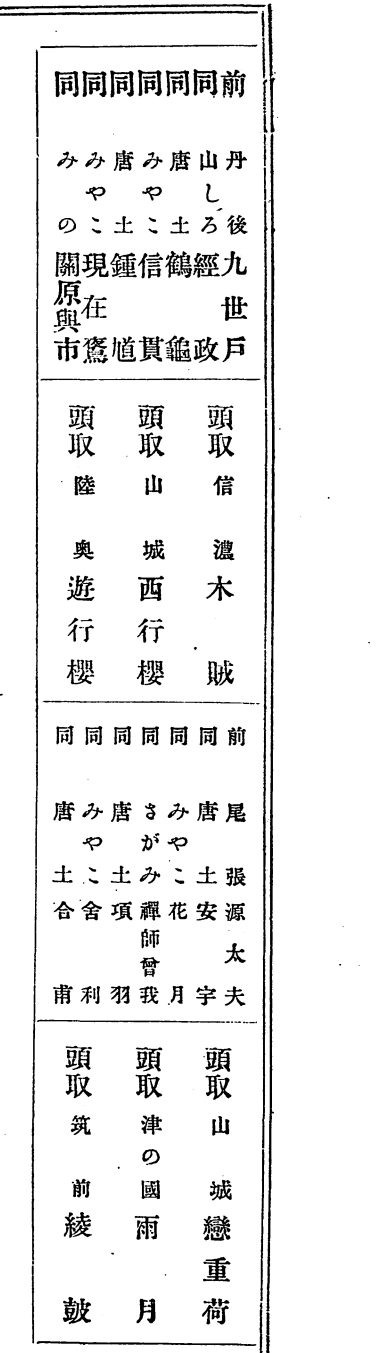
前 みの 烏帽子折
同 やまと 谷行
同 みやこ 清經
同 伊豆 七騎落
同 さつま 鳥追（鳥追船カ）
同 甲斐 現在七面
同 つの國 敦盛
同 山城 女郎花
同 大和 二人靜
同 みやこ 夕顏
同 安房 鵜飼
同 大和 大佛供養
同 みやこ 東北
同 河内 道明寺
同 丹波 氷室
同 近江 自然居士
同 山城 鞍馬天狗
同 つの國 箙
同 山城 百萬

世話方惣

都 正義世守
駿河 池贄
唐土 呂后
駿河 文覺
都 半蔀
唐土 河水
紀州 鐘卷

前 丹波 大江山
同 つの國 知章
同 さがみ 六浦
同 陸奥 護法
同 加賀 佛原
同 伊豆 放下僧
同 さがみ 浪觀
同 加賀 藤
同 越後 木久山鏡
同 大和 吉野天人
同 甲斐 身延
同 みやこ 俊成忠度
同 さがみ 元服曾我
同 山城 車僧
同 やまと 忠信
同 唐土 龍虎
同 はりま 室君
同 みやこ 植田

同 同 同 同 同 駿河 羽衣
同 同 同 筑前 老松
同 同 大和 龍田
同 津の國 難波
同 信濃 紅葉
大關 關脇 小結 前頭 同 同 同 同



謠曲作者目錄の事

抑當流は觀阿彌に起りて世阿彌に成り音阿彌より傳へて三百年に越えたり然れば其間中絶する事あり又訛れる所も不少また世阿彌が頃能數甚多くして正すにいとまあらず依て能作書曲附書等を殘して子孫に改正すべきを示せり今元章不肖なりといへども先祖の志を繼がざるに忍びず中絶するをおこし訛れるを正し又今になす所の能といへども古意に叶はざるは略き中絶せる能に及び未爲能も古意にあへるは加へ將に子孫童形の間よりはやく秘事をしらしめんため且先祖みづから能を作れる例にならひ梅の能を作り加へ總て二百有十番とす其中一番の習ひなるものを分て十番とし其餘見聞に近きを內百番とし遠きものを外百番とし謠本を著せり然れども猶誤あらん事を恐る子孫相繼て改正せば孝行是にしかじ

明和二乙酉四月五日　觀世左近秦元章

內百番の部

高砂	元清作	弓八幡	元清作
白髭	清次作	難波	元清作
追松	元清作	志賀	元清作
白樂天	元清作	養老	元清作
氷室	宮增作	加茂	氏信作
吳服	元清作	玉の井	信光作
右近	元清作	竹生島	氏信作
田村	元清作	通盛	井阿彌作
屋島	元清作	實盛	元清作
兼平	元清作	賴政	元清作

經政	元清作	朝長	元清作	葛城	元清作	遊行柳	信光作		
清經	元清作	忠度	元清作	百萬	清次作	小督	氏信作		
項羽	元清作	船辨慶	信光作	柏崎	江波左衛門作	安宅	信光作		
軒場梅	元清作	佛原	元清作	三井寺	元清作	花月	元清作		
夕顏	元清作	江口	氏信作	芦刈	氏信作	東岸居士	元清作		
紫式部	氏信作	芭蕉	氏信作	角田川	元清作	自然居士	清次作		
采女	元清作	楊貴妃	氏信作	櫻川	元清作	邯鄲	元清作		
野々宮	元清作	半蔀	內藤左衛門作	天鼓	元清作	唐船	吉廣作		
井筒	元清作	千手	氏信作	錦木	元清作	女郎花	龜阿彌作		
玉葛	氏信作	熊野	內藤左衛門作	舟橋	元清作	鶉	清次作		
浮舟	元清作	斑女	元清作	通小町	元清作	鵜飼	江波左衛門作		
二人靜	元清作	花筐	元清作	阿漕	元清作	山姥	氏信作		
松風	清次作	雲雀山	元清作	善知鳥	元清作	殺生石	安清作		
定家葛	元清作	梅枝	元清作	藤戶	元清作	安達原	氏清作		
三輪	元清作	富士太鼓	元清作	大會	氏清作	葵上	氏清作		
龍田	氏信作	卷絹	清次作	車僧	元清作	鐵輪	元清作		
西王母	元清作	小鹽	氏信作	善男	竹田法印作	泉良	元清作		
羽衣	元清作	雲林院	元清作	鞍馬天狗	宮增作	當麻	元清作		
燕子花	元清作	西行櫻	氏信作	野守	元安作	融	清次作		
誓願寺	元清作	六浦	安清作	春日龍神	元清作	猩々	元清作		

外百番の部

放生川　元清作
大祉　長俊作　作者未詳
寐覺　長俊作
榎の島　長俊作　作者未詳
逆矛　宮增作
嵐山　元安作
繪馬　作者未詳
磐船　作者未詳
海藻川　作者未詳
金札　元清作
敦盛　元清作　作者未詳
五條忠度　作者未詳
籠梅　元清作
生田敦盛　元安作
知章　元清作　作者未詳
空蟬　作者未詳
宮城野　元清作
三山　元清作
佐用姬　元清作

御裳濯川　元清作
松尾　清次作
淡路　清次作
富士山　元清作
葛城鴨　元清作
佐保山　元清作
阿古屋松　元清作
東方朔　元安作
蟻通　元清作
鶴龜　作者未詳
碇潛　信光作
巴　清次作
吉野靜　作者未詳
妓王　清次作
卌子洗　作者未詳
住吉　元清作
大原御幸　元清作
弄太皷　元清作
鳥追船　金剛作

落葉　元清作
藤　安清作
吉野天人　安清作
牽牛花　小田切能登作
胡蝶　信光作
雨月　氏信作
道明寺　元清作
輪藏　長俊作
枕慈童　作者未詳
三笑　作者未詳
丹後物狂　井阿彌作
弱法師　元雅作
高野物狂　安清作
檀風　元清作
咸陽宮　作者未詳
松虫　元清作
張良　信光作
泰山府君　元清作
明王鏡　信光作
小鍛冶　元清作

六月祓　安清作
蟬丸　元清作
待羅物狂　福來作
求塚　清次作
名取嫗　元清作
布留　元清作
室君　作者未詳
接待　宮增作
景清　元清作
俊寬　元清作
鉢木　清次作
木曾　作者未詳
盛久　元雅作
七騎落　作者未詳
藤榮　作者未詳
放下僧　氏信作
橋辨慶　安清作
忠信　作者未詳
大佛供養　作者未詳
土蜘蛛　作者未詳

鍾馗	氏信作	羅城門	信光作	不盡	金村作	豐宴	家持作		
昭君	氏信作	紅葉狩	信光作	敏馬浦	福麿作	芳野	赤人作		
松山鏡	作者未詳	谷行	氏信作	祭神	大伴坂上郎女作	好可來	憶良作		
染川	作者未詳	大江山	宮增作	所聞文彌	能登作	深江石	憶良作		
昌俊	長信作	葛城天狗	長俊作	香菓	家持作	玉取	作者未詳		
熊坂	氏信作	第六天	作者未詳	近江八景	作者未詳	兵揃	作者未詳		
烏帽子折	宮增作	舍利	元清作	四季	作者未詳	皷瀧	作者未詳		
龍虎	信光作	樒天狗	作者未詳	香稚	作者未詳	和國	作者未詳		
國栖	元清作	蛇	信光作	眞方	元清作	蛙	作者未詳		
合浦	作者未詳	紘上	金剛作	重盛	作者未詳	一字題	作者未詳		
一角仙人	元安作	梅	元章作	經山寺	作者未詳	島巡	作者未詳		
習十番の部				俱梨加羅落	作者未詳	上宮太子	作者未詳		
卒都婆小町	清次作	道成寺	清次作	反魂香	元清作	砥並山	宮增作		
檜垣	元清作	戀重荷	元清作	當願暮頭	作者未詳	笠取	作者未詳		
砧	元清作	木賊	元清作	美人揃	宮增作	妻戸	作者未詳		
落葉	元清作	石橋	元雅作	由良港	作者未詳	鳥羽殿	元清作		
關寺小町	元清作	鷺	元清作	隱岐院	元清作	星	元清作		
右二百有十番は當流代々自筆の謠本書物等悉く見合せ改正既成就依之正判書寫に加奧而已猶此外に獨吟八十五曲の部				博多物狂	作者未詳	佐夜中山	作者未詳		
				更科	作者未詳	橫山	元清作		
				八雲	作者未詳	五輪碎	作者未詳		

西國下　玉林作
泊瀨六代　元清作
樂水　氏信作
法樂　作者未詳
葛袴　元清作
照日宮　清次作
寂光院　元清作
橋柱　元清作
賢女鏡　清次作
三元　作者未詳
桃花節　作者未詳
三月盡　作者未詳
□蒲節　作者未詳
夏祓　作者未詳
羅騎節　作者未詳
星夕　作者未詳
五三夕　作者未詳
重陽　作者未詳
九月盡　作者未詳
初雪　作者未詳

東國下　玉林作
生田川　元清作
外濱風　元清作
松竹　作者未詳
上巳　作者未詳
雪山　作者未詳
端午　作者未詳
自然物狂　清次作
乞巧夕　作者未詳
八日　作者未詳
浦下部　作者未詳
朱夏　作者未詳
飛火　作者未詳
中秋節　作者未詳
青春　作者未詳
素秋　作者未詳
陽數節　作者未詳
九月十三夜　作者未詳
玄冬　作者未詳
歲暮　作者未詳

歌人意　冬信公作　更衣　作者未詳
勸進帳　信光作　起請文　長俊作
願書　作者未詳　都合八十五曲

今此類を蘭曲といふ抑蘭曲優曲閑曲といふは至れる上に此三つの姿ある事にて謠ふ人を外より稱美せる詞なり然るを俗に蘭曲を謠はんなどいふ事あるべからず故に獨吟の曲と題せり勸進帳起請文願書の三つを習ひの三つの讀物といふなり

謠曲作者の姓名附

結崎治郎秦清次　本氏平服部稚名觀世丸後三郎落髮號觀阿彌宗音應永十三丙戌五月十五日死五十二歲
結崎左衛門太夫秦元清　清次嫡男稚名藤若丸後三郎落髮號世阿彌宗全康正元乙亥七月二十二日死八十一歲
金春式部太夫秦氏信　元清舅若名彌三郎後禪竹
結崎十郎秦元雅　元清嫡男法名大圓長祿三己卯十二月九日死
金春十郎秦元安　法名桐林禪鳳
觀世小次郎秦長俊　觀世音阿彌七男法名大雅宗松永正十三丙子七月七日死八十歲餘
觀世彌次郎秦長俊　信光嫡男天文十辛丑年死五十三歲月日未詳法名心祐
外山又五郎吉廣
金剛彌五郎
宮增
日吉四郎次郎安清　後佐阿彌長祿二戊寅八月四日死七十六歲

龜阿彌
與江元久
江波左衞門　號五郎
內藤左衞門
井阿彌
竹田法印
福來
小田切能登

復讐見立番附

大關　元祿　忠臣藏仇討
關脇　寬永　伊賀越仇討　同
小結　慶長　宮本武藏仇討　同
前頭　正德　崇禪寺馬場　同
同　文祿　伊達正宗仇　同
同　天祿　箱根權現仇　同
同　承應　名古屋山三仇　同
同　□　虎千代仇討　同
同　寬永　民谷小太郎仇　同
同　享保　加賀貴俗撰　同
同　元祿　福島天神森　同

前頭　延寶　酒多法師仇　同
同　元和　福島雲井仇　同
同　□　伊豫燒山仇　同
同　元文　郡山非人仇　同
同　寶永　荒川武勇傳　同
同　元祿　勢州龜山仇　同
同　寶永　神道川仇討　同
同　寬文　西國順禮仇　同
同　永祿　都部新十郎仇　同
同　享保　越後木豆川仇　同
同　天文　同村山仇　同
□　遠州掛川仇　同

前頭　寬文　淨瑠璃坂仇　同
同　延寶　越後高田仇　同
同　元和　高松民部之輔仇　同
同　慶長　目黑行人坂　同
同　天保　下總絹川仇　同
同　□　西國多賀仇　同
同　天保　下總不津都村　同
同　寬永　越前敦賀仇　同
同　萬治　勢州長野仇　同
同　□　丹州柏原仇　同
同　延寶　日本堤仇討　同
同　□　越後厚ヶ郡　同
同　文政　淺草天王橋仇　同
同　□　四ッ谷仇討　同
□　奧州岩沼仇　同

東都にて一枚摺にしたる板行を見て珍らしければ爰に出す此作は全く講釋師等の手にてなれるなるべし尤も中に遠慮ありてか異名變名に記せしもあり東西と分ちたる中央に書たるは爲御覽天正山崎主仇討建久曾我兄弟仇討永祿藝州廣島仇討奧に右は往古よりの荒增を相記し候此に洩れたるは追て奉入御覽候

江戶馬喰町三丁目吉田屋小吉板

大關　明暦　武道白石津山　前頭　寛永　備中松山仇　前　元祿　鵜岡善右衛門
關脇　慶長　天下茶屋住吉　同　正保　細川血達摩　同　寶暦　不動利生記
小結　天正　毛谷村六助仇　同　□　岩井善之丞　同　文政　讃州龜丸
前頭　寛永　越中サラサ越仇　同　寛永　西方孝子傳　同　文政　水戸岩井町
同　正保　合法辻仇討　同　同　和州隅田川　同　元祿　高田馬場
同　□　夏目四郎三郎　同　明暦　兩面藤三郎　同　天明　牛込神樂坂
同　正保　松前屋五郎兵衛　同　延寶　白井權八仇　同　享和　新大橋仇
同　寛永　長崎丸山仇討　同　□　鏡山仇討　同　正德　筑前福岡仇
同　□　臼井本學仇　同　正保　奥州白石仇　同　享保　伊豆下田仇
同　□　源藤左衛門　同　永祿　甲州仇討　同　□　奥州松前仇
同　□　岩井實記　同　貞享　江州水口仇　同　明暦　豐後森仇
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　享保　神田須田村
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　天保　伏見今町仇
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　護持院原仇

右東西に見立上の段は文字あらく末程文字細く此末に□石川民部仇文政王子奥渡とあり猶是にもれたるは貞享御堂前仇討□親子塚仇討安永小栗栖十兵衛文化粟津原仇討□上田慶二郎□永井源三郎など數多あるべし□年號不詳分此次に出せる見立番附三枚共東都にて求め歸りしが各講釋師の作せるものとおもはれ甚だ杜撰ながら各狂言著作道に因みあれば是に寫す元より東都にて名高きを擧げたる物なれば京攝の耳に聞馴れぬ物多く京攝に名高きを書もらせるも又すくなからずされどもかばかりの人名を集るにも相應の見聞の力なくては集錄する事難くかゝる板行も需るものあるがゆゑにこそ彫もすれ實に繁華の地なる事思ひやるべし

武藝名譽一覽番附

待浦意心軒
吉岡鬼一法眼
軍學元祖 中納言匡房
山鹿甚五左衛門
尾鹿本半助

一刀 戸田一刀齋
鎗 法藏院爲清
一刀 石川郡藤齋
二刀 宮本武藏
關口 關口彌太郎
鎗 種田助六郎
一刀 伊東彌五郎
一傳 淺山一傳
射 輪左代八郎
鐵炮 井上新左衛門
眞影 上泉伊勢守

蘆塚中右衛門
乳坂兵部
方條安房守
火術 張光堂松雪
此下肥後守
山本帶刀
毛利惣意

鎗 奥平傳藏
一刀 青木一刀齋
眞影 長沼七郎
軍學 原田外記
手裏劍 吉田初右衛門
兵學 時與左衛門
鎗 千々和五郎左衛門
弓 大宮內藏之丞
水練 源藤彌平太
軍學 大石齋人齋
同 岩淵兵左衛門
一刀 辻文次郎

年寄
竹中半兵衛
山本勘助
宇佐目駿河
差添
大石內藏助

劍 鳥川太兵衛
同 多宮源八郎
同 藤井勘兵衛
同 和久半太夫
同 戸川半平
火術 三宅林左衛門
劍 高木折右衛門
同 藤田水右衛門
軍 小幡勘兵衛
長刀 星合團四郎
劍 加藤市左衛門
同 衣笠六右衛門
同 關口隼人

勸進元
源義經
楠正成

長刀 中津川祐半
鎗 林玄蕃
同 半次郎
奥平主馬
劍 川田源吉
軍 大石賴母
劍 石井半次郎
同 源次郎
劍 熊谷三郎兵衛
同 大戸嘉兵衛
劍 牧野兵庫
同 僧覺善

銃　八木宇五郎左衛門
鎗　安部白五郎
念銃　堀部安兵衛
柔　竹内加賀之助

代々　鹿島神流

同　小林平八郎
同　丸毛何某
鎗　鳥居新左衛門

同　飯沼勝五郎
同　松波隼人
劍　村上庄右衛門

一刀　神古上天膳
鎗　多島運八郎
卜傳　塚原卜傳
荒木　荒木又右衛門
三流　太田忠兵衛
劍術　吉岡兼房
棒業　阿部什四郎
弓術　日置彈正
無敵　佐々木巖流
射術　千野官左衛門
鐵炮　稻富伊賀
劍　樋口十郎右衛門
同　鹿目井新十郎
鎗　圓橋秋彌
八重垣　吉岡太郎左衛門

劍　潮田主水
同　石井兵太夫
鐵炮　荒川六右衛門
鎗　橋本一巴

一刀　關根彌次郎
軍學　堀部彌兵衛
兵學　吉田忠左衛門
長刀　穴澤賴母
鎌　金井半兵衛
軍　柴田三郎兵衛
同　楠不傳
同　駒杵八兵衛
水練　伊勢小京太
念流　大貫淺右衛門
劍　相馬四郎太夫
劍　宇和島主水
同　井戸宇右衛門
同　高倉長右衛門
同　高木右馬之助
劍　鍬名賴母

代々　香取神流

劍　東軍又八
弓　松井民次郎
劍　同官兵衛
同　塚口源太左衛門
同　北藤茂右衛門
同　山添伊兵衛
鐵炮　廣瀨鄉右衛門
軍　安宅鄉右衛門
鎗　高松半平
同　櫻井甚左衛門
弓　奥村八郎右衛門
劍　石川兵助
劍　白井權八
同　臼井本學
軍　上田藤雲才
劍　清水一角

女武藝　朝小局

鎗　奥平隼人
同　赤井小源太
劍　東谷五郎兵衛
同　輕部六郎右衛門
同　大内十太夫
同　林源次郎
同　鹿子木左京
劍　平野左衛門
同　大和田藤馬
同　川俣三之助
同　桑名友之丞
同　三七郎
同　遠城治左衛門
同　安藤彦八郎
同　福代源七郎
弓　櫻井甚助
劍　竹内玄丹

俠客　幡隨院長兵衛
一刀流

男達見立角力番附

爲御覽行司喧嘩屋五郎右衛門市川才牛團十郎伊平とありて次に

大關	幡隨院長兵衛	前	梅堀小五郎兵衛
關脇	唐犬權兵衛	同	和泉長太郎
小結	浮世戸平	同	兵藤平内兵衛
前頭	半時九郎兵衛	同	出來星勘兵衛
同	溝野十郎右衛門	同	鬼子左平
同	朝比奈藤兵衛	同	唐犬十右衛門
同	辨慶小左衛門	同	同三右衛門
同	腕喜三郎	同	おひやりこ庄左衛門
同	度々ノ伊兵衛	同	唐犬五郎治
同	白柄十左衛門	同	居首勘兵衛
同	甚三分	同	小川八郎兵衛
同	二見十左衛門	同	てくない庄五郎
同	鎌田又八	同	唐犬五郎左衛門
同	鍾馗半兵衛	同	平井軍八
同	陀羅庄九郎	同	寺西閑心
同	成田運平	同	笊源五兵衛
同	小佛小兵衛	同	笊八兵衛
		同	笊安左衛門
		同	目窪傳兵衛

前	笊友之助	前	鍔屋兵左衛門
同	笊伊兵衛	同	牛の五兵衛
同	矢田權四郎	同	鑓屋金十郎
同	鍔屋源兵衛	同	達摩伊左衛門
同	かちの勘助	同	火堤五郎左衛門
同	大屋五兵衛	同	眞木屋市十郎
同	きさい五兵衛	同	油取六之助
同	佛師庄左衛門	同	兩がへ五郎兵衛
同	糞壷五郎右衛門	同	小腕利左衛門
同	扇屋與平次	同	みかん又兵衛
同	赤銅藤兵衛	同	たれはき平左衛門
同	こぶ市右衛門	同	竹馬三左衛門
同	かみこ市兵衛	同	あげ次郎左衛門
同	矢倉八郎兵衛	同	のでの喜三郎
同	前がみ三右衛門	同	こぶの長三
同	風呂の五兵衛	同	ひなや三五郎
同	きれの彌兵衛	同	金かん坂與三郎
同	首切れの彌平	同	ぼく岩
同	みげん小左衛門		
同	こもの十藏		
同	利寶院		

前頭 花川戸助六

行司
雁金文七
雷庄五郎
布袋市右衛門
極印千右衛門
安野平兵衛

大關
夢野市郎兵衛
關脇
放駒四郎兵衛
小結
荒五郎茂兵衛
前頭
濡髮長五郎
同
矢部白五郎
同
時宗五郎兵衛
同
狼喜兵衛
同
金時半兵衛
同
五尺染五郎
同
黑船忠右衛門
同
鮫鞘四郎次
同
雷治兵衛
同
消炭五郎兵衛
同
鳶の九藏
同
柏屋庄五郎
同
生の淨玄
同
巳等三又左（誤字アルカ）

無類
阿房惣左衛門
元祖
合法利左衛門
珍人
死人小左衛門
谷野武兵衛
今井吟吾

前
霰小兵衛
同
枕十兵衛
同
因果小藏
同
夜這星みふ
同
鬼の左吉
同
驚抓金平
同
天狗團七
同
鹿野洞右衛門
同
宵の口喜三太
同
蝦夷の新助
同
早川船之助
同
一寸八兵衛
同
死人喜左衛門
同
大鳥一平
同
上州屋吉兵衛
同
浪紙半左衛門
同
腕の庄次郎
同
在鄉久兵衛
同
刷毛四郎兵衛

行司
一寸德兵衛
團七九郎兵衛
釣舟三武
不破伴左衛門
名古屋山三郎

前
須田五郎兵衛
同
雷市右衛門
同
おとがひ勘兵衛
同
とち木六右衛門
同
ひたひ治郎
同
あごふく利兵衛
同
はなみぶ
同
一時清兵衛
同
せん臺四郎兵衛
同
野良三十郎
同
田中十郎右衛門
同
宗けい太郎兵衛
同
大金右衛門
同
はすつば吉兵衛
同
だるま小左衛門
同
會津平右衛門
同
ふとの藤兵衛
同
馬場七郎兵衛
同
やとり治郎兵衛
同
生村與左衛門
同
大壽院

勸進元
東金茂右衛門
差添人
筑波茂右衛門

前
糸びん庄右衛門
同
面ぼう平左衛門
同
小ざらし小兵衛
同
らつび半左衛門
同
おくりんか茂兵衛
同
ぬつくり四郎兵衛
同
白柄作左衛門
同
前がみ傳藏
同
跡見ず五兵衛
同
佐々木文清
同
まむし十郎左衛門
同
馬の庄兵衛
同
大また與三兵衛
同
小また又左衛門
同
みぞの彌兵衛
同
かんべら門兵衛
同
朝がほ千兵衛
同
いがらし平助
同
眞木屋小左衛門
同
おとまる清三

馬喰町三丁目
泉永堂壽梓

新大橋復讐新聞

杏華園筆記の中に東都新大橋籾藏後にて寛政十午の十一月十二日敵討ありし其實說を扣へ置かれしを爰に出す十二日の朝深川六間堀さるこ橋の邊にて復讐ありと風聞す前原孫市下女（元神保の藩中に居しものなり）いふ樣それは神保の家中にてあるべしといふ何ゆゑさいふやと問へば先年同家中山崎彦作といふ者をやみ討せし事あり數人徒黨とはいへども崎山平內頭取ゆゑ討たれし人の妻子附ねらひ候由聞傳ると答ふはたしてそれなりと翌十三日籾藏に詰居候者の話に承り候平內を親の敵と切付し者は年十七の娘なり助太刀せし者は此娘の繼母と聟となり聟は南塗物町權三郎店に住居せし仙龍といふ書家なり平內を附ねらひ候ため今年春六間堀森下町幡長山兆澤寺門前へ出張をせしとぞ其日朝平內通り候處を娘出向ひ親の敵なりと云ふ平內いや我一人にはあらず敵は大勢なりとあらそふ此問答手間取內娘先刀を拔き平內も拔合せ二太刀三太刀打あふ時母後より一太刀切平內驚きて駈出す娘遁さじと追ふ平內逃行戎屋といふ餅屋の裏に入兼て入魂の釣針師の家にかけ込（口後町の樣子かはり入魂の者はあらであらぬ者の家にてありしと）娘追付て切かくる平內いらつて拂ふ娘刀を打落されて表へ出て仙龍が脇差を取て又敵にむかふ時其邊藏普請ありて土こねし所ゆゑ泥にすべりて倒るゝ時平內刀を振り上げすでにかうよと見ゆる所を仙龍そばに有合ふさいとりを以て拂ふさいとり腮にあたり泥目口へ入りひるむ所を娘一太刀切るきられて逃る母出合ひて又切る敵縱橫に奔走して籾藏の普請場へ逃入らんとする時竹を荷ひたる者にさゝへられて入る事を得ず娘又〳〵切る切られて倒るゝ時母とゞめをさし立のく敵また起上りて逃出んとする時人々出あひて雙方共におさへけるなり（とゞめさしける時あやまりて肩のかたをさしけるとぞ）平內に殺されし彦作もとは賣卜者にて親方吉村市正と公事をして江戶搆へになりし者なるが神保へ住込しなり寛政六年二月山崎彦作江戶拂の者を不吟味に召抱候に付神保左京差扣仰付けられしとなり山崎彦作賣トせし時の名は渡邊左京といひしとぞ是より先當主幼年の砌平內親兵左衞門家老にて三千兩程私欲押領して言語同斷なり長子をば町與力となす今吟味方中

村八郎左衛門と勤役なりと云或は町屋敷を買或は田地をかひさま〴〵の奢などせしかば主人知行ひしと行つまり彦作働きにて漸取つゞきける夫より追々私欲露顯して平内親兵左衛門遠慮いひ付らる此一味の者共漸々に身分にもかゝはるべき勢ひゆゑ徒黨して彦作を闇打にせし者平内の外に七人岸上主水鹿島藤兵衛奈良原將監川口嘉作山岸平角高橋七兵衛宮島治兵衛此中に平内頭取しと云彦作妻子をば下屋敷へ移し男子なきゆゑ扶助米をあたへくれ平内又親の遠慮させらるゝは私欲より事起りて人を殺せし次第故切腹すべきやなど取沙汰せしをさもあらで過さりしなり彦作妻は扶助をうけ候ては復讐の事遂がたしといとまこひて流浪し娘を養ひ育て夫の云付ゆゑ去年仙龍に嫁せしなり仙龍は東江門人書家を業とし京橋邊に住居し南塗師町權三郎店に住居せしと云ふ崎山兵左衛門(名保晁字は景陽號東橋)葛陂山人高峻の門人なりかつて葛陂山人書墨本にせし事あり序を予に求めし故書つかはせし事もありき本所一つ目辨財天の額は崎山兵左衛門が筆なり辨財天東橋山保(橋山崎山ナルベシ)晁謹書とあり崎山平内平日出る日は供など多く連出るゆゑ打つ事あたはず其日は笛の稽古に出る日にて供少しゆゑに其日をうかゝひ當朝も屋敷の門番に今日は平内がいよ〳〵出る日なるやと聞し者ありしとぞ平内不敵の者にて劍術などよくしかつて殿の遠馬の供などして歩行にておくる事なかりしが翌日また遠方へ使者を勤めしとなん平内は下駄をはき居候娘は草鞋をはき居候肩を切り候節も平内脊高く娘の手届き兼候由なり娘は彦作が遺物の刀名は相州藤原正國(二尺餘)を風呂敷に包み手に持居候を見たる者有之由承り候同年十一月二十一日原井仙龍傷を病て同二十八九日頃死す妻追悼の歌いもとせのかたらひをなし程なう身まかりたる夫をこひてかず〳〵のたのめし事も終らぬに

はかなくなりし人ぞ戀しき　はる女

名殘をし野邊の草木となりし身に

さそふ此世にや心のこさん　はる女

寛政十午年十一月十二日深川元町月行司平次郎口書の寫

一今晝四つ時同所六間堀町中の橋邊より子細不知年齡二十五六歳に相見え候惣髪之男同三十歳許りに

相見え候侍體之者幷に四十歳位に相見え候女十六七歳位に相見え候女都合四人扱身にて互に打合參り往來騷敷御座候間町内一統罷出制し取押へ右之者共名住所承合候得者相名乘敵討之由申立候間早速疵人共へは醫師を懸けおき五人組名主幷申聞一同御訴申上候得者御檢使被下置候

南塗師町權三郎店　みき
同　人娘　はる
深川森下町吉兵衛店手跡指南致罷在候浪人　平井仙龍
右三人申口

一私共神保左京殿家來崎山平内へ手疵被負私共儀も手疵取候に付御檢使之上子細御尋に御座候みき申上候私夫渡邊左京と申神職にて八丁堀岡崎町忠兵衛店に罷在候處六年已前丑年八月中御寄合神保左京殿家來崎山兵左衛門幷に同人悴同平内世話にて右屋敷へ勝手小役人に相住み山崎彦作に相改め妻娘共屋敷へ引移り相勤め罷在候處同九月中家老役被申付尤其節同役は右崎山兵左衛門幷に同人悴平内儀は見習にて夫彦作と三人にて家老役相勤罷在候處同役兵左衛門幷に同人悴平内儀年來不正之儀有之町屋敷等も三ヶ所所持致し其上金三千兩程不正之筋有之趣にて取調之義主人より同十月中被申付候に付段々取調候處町屋敷之儀は一ヶ所有之幷に三千兩程之不正之筋之儀は千五百兩程の由取調主人へ申立候由之儀を遺恨に存候や同月廿三日夜九つ時頃主人用向之由にて小使中間呼に參り候間罷出候處傍輩共之内前書平内併に同人弟川口嘉作其外岸上主水鹿島藤兵衛奈良原將監山岸平角高橋七藏宮崎治兵衛右之七人にて夫彦作を及殺害候間私儀直に罷出右之通見受候間其時主人へ相願可申と奉存候處其砌より私共儀は宅番付委細之儀は追て被申付も可有之候間何れにも神妙に致し罷在候樣に川口嘉作達て申聞候間見合罷在候處十日程過ぎ何れにも私共儀は御屋敷にて扶助被成下候間安堵致し罷在候樣被申付候に付乍殘念屋敷内に罷在候處翌二月二十七日永之暇被下候に付知人深川六間堀嘉右衛門と申者方へ參り親子共世話に相成罷在候處同三月十一日より南塗師町權三郎店神職香取相模と申者方へ參り世話に相成居候處右相模儀萬端世話致候陰陽師平井仙龍と申者名前にて右店

借受罷在候尤はる義仙龍妻にも可遣約束にて未だ盃等は不爲致候へ共當月九日娘召連右仙龍方へ逗留に參り居候處今晝四つ時頃崎山平內往來を通候を見受候間兼て遺恨を晴し可申と心懸罷在候間娘義は仙龍刀を持私義は所持の脇差を持罷出右平內へ夫之敵之由申候へば人違ひのよし申逃出し候間追駈け參り兩人にて切掛候へ者平內義も拔合互に切合罷在候處跡より右仙龍義も罷越共に助太刀致し呉れ存念相晴し可申と存候處町內より大勢罷出制候間仕留不申殘念に奉存候此上右平內幷に外七人之者被召出御吟味奉願上候私共義町內騷し候段奉恐入候何分御慈悲奉願上候

一はる申上候前書に母みき申上候通り相違無御座候父彦作義先年平內其外之者共に殺害に逢ひ候段兼て承り殘念に存し罷在候處今朝表を通り候を見受頻りに殘念に相成り仙龍所持の刀を帶し罷出母共に親の敵のよし乍申切懸候へば平內義も刀を拔私共へ手疵被負申候義に御座候尤仙龍義も參り助太刀致呉候得共其內町內より大勢罷出制候間打留不申殘念に奉存候何分此上母共々御慈悲奉願上候

一仙龍申上候義は右みきはる世話に相成居候陰陽師香取相摸と申者は山崎彦作義元渡邊左京と申神職致候節弟子に有之彦作相果候後は弟子之義に付みきはる兩人共參り世話に相成居候右相摸儀去春中より病氣にて職分も不相成候よしにて私へ萬端相賴候間引受世話致し罷在候處同九月中右相摸儀致病死候間私儀則香取相摸と相改め陰陽師職分致罷在候得共勝手に付遠藤正健と申者へ香取相摸と申名前を職分とも相讓り相摸儀は本郷邊へ參り陰陽師職致罷在候私儀は右吉兵衞店へ當七月中引移り平井仙龍と相改め手跡指南致し罷在候儀に御座候尤みき儀は其節より私名前にて右權三郎方店借受差置候勿論追てはみき娘はる儀は私妻に貰ひ受候趣約束は致しおき候へ共未だ盃は不致候處當月九日にみき儀娘はるを召連れ私方へ逗留に參り居候處今晝四つ時頃はる儀私所持之刀を持みき儀も所持之脇差を持表へ駈出し候間何事に候哉と私儀入湯に可參哉と脇差を帶し出懸り候間直に跡より追駈參り見候へば侍體之者をみき儀夫の敵のよしはる儀親の敵のよしにて切掛候處右侍體之者も刀を

拔き互に切合罷在みきはる危き樣子に付不得止事帶し參り候脇差を拔き共に切合候節手疵受候儀に御座候尤委細之義は不奉存候へ共右始末に及候段奉恐入候何分御慈悲奉願上候

寄合神保左京家來家老役崎山平內口上

一私儀手疵被爲負候に付御檢使之上子細御尋に御座候今日四つ時頃用事有之屋敷を罷出六間堀下之橋を渡り河岸通りを罷通り候處同所中の橋際にて何者とも不知私後より肩先へ理不盡に切付候間驚き振かへり見候處先年相果候傍輩山崎彥作妻娘幷に惣髮の男一人都合三人にて切懸候間私儀も刀を拔き互に打合候へ共手に餘り殊に場廣にて小桶に取可申所も無難防御座候間段々相しらべ引退き同所元町裏屋を小桶に取待居候間跡より惣髮體の男追かけ參り候間手疵被負候へば脇差を投付逃去候處みきはる儀引續き參り候間右之者へも手疵被負刀もぎ取申候へば右三人之者共も追々逃去り申候私儀も數ヶ所にて疵痛候間其場所へ倒れ町內の者に介抱に逢申候儀に御座候尤山崎彥作妻娘理不盡に及候儀は全く六年以前丑年十月中子細有之私幷に傍輩川口嘉作岸上主水鹿島藤兵衞奈良原將監山岸平角高橋七藏宮崎治兵衞右の者寄合彥作を殺害致し候儀有之其砌私共儀は主人より押込被申付何れも日數相立被差免候彥作妻娘儀は翌寅年二月中永之暇被申付其後は見受不申候處此義は遺恨に存じ私へ手疵被負候儀と奉存候不慮なる儀に逢ひ數ヶ所手疵受迷惑仕候勿論三人之者共へも不得止事私手疵被負候儀に御座候何分此上御聞濟被成下候樣奉願候

崎山平內疵所　年三十一

一左腕肘下橫に三寸程切疵　壹ヶ所
一同方下貳寸程切疵　壹ヶ所
一同方手の平より腕へ掛け六寸程切疵　壹ヶ所
一右脉所を懸け橫に貳寸程切疵　壹ヶ所
一百會左へ寄竪に三寸程切疵　壹ヶ所
一同方橫に貳寸程切疵　壹ヶ所
一襟橫に三寸程切疵　壹ヶ所
一同左の小指先少々疵　壹ヶ所

〆八ヶ所

平井仙龍疵所　年二十六

一右眼の下より腮へ掛け竪五寸程切疵　壹ヶ所
一右之人指ゆび竪貳寸程切疵　壹ヶ所
一左大指除け手の平二寸程切疵　壹ヶ所

〆三ヶ所

みき疵所　年四十一

一左之肩竪に三寸程切疵　壹ヶ所
一右脉所竪に一寸五分程切疵　壹ヶ所

〆貳ヶ所

はる疵所　年十七

一左の大指へ掛け竪に壹寸五分程切疵　壹ヶ所
一同方小指一寸程切疵　壹ヶ所
一右脉所横に一寸程切疵　壹ヶ所
一額除髪の内竪に二寸程切疵　壹ヶ所
一同方竪に五分程切疵　壹ヶ所

〆六ヶ所

其節所持の品書

一みき拵付脇差　壹腰　銘出羽大掾藤原國路長さ一尺三寸程但し血付有之
一仙龍拵付刀　壹腰　銘近江守藤原繼廣長さ三尺一寸程但し血付有之
一みき短刀　壹腰　銘助宗長さ七寸五分程但し血なし
一はる短刀　壹腰　銘平安城能長裏に永祿三長さ九寸程但し血付有之鞘無之

其節平内儀疵所痛候に付召れ不申尤疵養生之内主人方へ預け場所に於て引渡し遣す三人之者共は於御番所店請人に預け遣す尤店請人共より銘々口書差出し預り中平井仙龍も相果同年十二月二十八日戸田采女正殿御差圖に依て神保左京家來宮川嘉内を以てみきはる兩人を被召出申渡しの寫

寄合神保左京元家來山崎彦作後家にて
南塗師町權三郎店に罷在る

みき
同人娘　はる

其方儀先年崎山平内外七人之者共彦作を致殺害候處右子細も不分明其節重立取計ひ候平内を敵と存込何卒討果し申度と存候へ共其節娘はるも幼年にて殊に平内も油斷無之樣子に付差扣罷在候内はるも致成長候間彦作殺害に逢ひ候趣申聞せ俱に平内を可討果と六ヶ年以來心掛罷在候内當十一月十二日平井仙龍方へ兩人共逗留致時節を伺居候内仙龍宅前を平内一人罷通り候をはる見受け刀を持追駈出候に付みきも短刀を携へ罷出候處仙龍儀も助太刀致し吳候間俱に平内と打合ひ互に疵受既に平内

は無難相果候始末に相成候段父夫之敵平内を年來心掛右及始末候儀共女の身分別而健氣なる致し方に有之其上はる儀は未若年にて右體の働致し父之敵平内へ數ヶ所疵被負父母之憤を散じ候段別而孝心奇特なる儀に付兩人共無攝みき其方儀夫山崎彦作不埒有之先年江戸拂に相成候處其後武家方へ奉公住致し候を其分に致し連添候段夫の儀と申殊に舊惡之儀に付咎不及沙汰候とて落着なしける

右は杏花園の筆記にあり正しき實說なるべし

同歌舞妓潤色の話

右復讐は寛政十午年十一月十二日の事なるを早く浪華に聞えてや翌十一未年角中兩芝居二の替り狂言に取組たり中の芝居は傀儡淺妻船といふ外題にて作者は並木五瓶なり江戸より澤村宗十郎上り立にて美濃庄九郎近江の源五郎の世界にて大かた狂言並びあれ共小幕へ此敵討を衒の挍事にて書入たり江州瀨田の橋詰に粂太郎三右衞門（後叶珉子）親子の女茶店を出し隣に賣ト者出店ありて玄柳と云ふ法印歌右衞門（後梅玉此頃はまだ敵役なり）橋詰普請壁の道具ちらかり有茶店親子共往來を見かけ傳內樣ぢやござりませぬか〳〵と始末尋ね居る所へ山崎傳內といふ浪人にて雛助（小六玉怜小珉獅なり）深編笠を着て出て粂太郎三右衞門親夫の敵と切てかゝる危き所へ歌右衞門飛出て左官の採取にて支へ敵討となるを金作武家の後室にて猪三郎の若黨を連是を見松影ての硯といふ寶物入用に付此復讐を扱ひ金を與へて此敵討を延す是元より言合せの衒事にて傳內の本名近江源五郎と云世話場の役なり正月二日より初日を出す角の芝居は正月十三日より始め外題をけいせい會稽山是は池上七九郎上田慶治郎とて古く寫本にもある敵討へ此大橋の復讐を取組敵討二組を混じ合せ潤色せし物なり母親三桝德次郎娘芳澤いろは大序有馬湯本にて池上七九郎に淺尾爲十郎敵にて關三十郎の岡本三木之進と云神職を欺し討にて（本文彦作の妻みきを取て三木之進と云）此敵を討んため心を碎京北野の天滿宮に參る途中にて狼籍者に逢ひ難儀の所を寺子屋師匠新柳に嵐吉三郎（本名上田慶治郎）大勢の手習子を連れ天滿宮へ參り見兼て生醉の惡者等を投付る此手の內を見込に娘に弟子入をさせ助太刀を賴むとの作者は近松德三なり仙龍を新柄として此狂言大

に當り今も時々出る事ありされども此大橋の敵討より古くありしと心得て其前後を知らぬ人もあるべしと爰に云ふなり口の番附に享和とあれど誤りなり敵討は寛政十午年にて狂言となりしは翌十一未年なり今嘉永三戌年まで五十有三年となる昔がたりなり

天王橋復仇の紀聞

是も杏花園藏書の中にありしを見しゆゑ爰に出す口の番附の内には淺草天王橋仇討とありて文政と誤れり俗に藏前の仇討とはいふなり寛政十二申年十月九日淺草天王橋の北西側鈴木といへる休所の前にて敵討あり其人は仙臺侯の封内名取郡根岸村長町といへる所の商人善助が子貫藏と云者年は二十八才なり敵は札差伊勢屋幾次郎が手代喜兵衞とて年は四十二歳なり貫藏十五歳の夏父に別れ少年の事なれば宮城郡小泉村百姓長三郎が子長松と云ふものを其としの冬よりたのみて（看抱人といふよしなり）渡世しけるが長松酒を好み行跡よろしからざるにより八年前の二月母がいふやうはや看抱に及ばざれば勝手次第に何方へもかた付候へといひて四五日を經る程に或夜丑の刻ばかりに母のうなり聲聞えければ貫藏側によりて見しに右の耳より頰へかけて一刀切られたり其まぎれに長松逃出しかば其儘おひかけしかど折あしく暗夜なりければ行衞さらず成りし跡にて見れば金拾兩うせぬ是全く長松が盜み取りしものならん母をばとかく介抱せしかど其かひもなく事きれたりなく〳〵愁訴さけれぱ侯より檢使下されしとぞ是よりして長松が行衞を尋ねもとめけるに江戸にあると聞てことし三月當地に來り馬喰町に旅宿して兩國橋の邊に住居せる大越主稅といへる劍術の師の口入にて和泉橋通りの御徒町に住る櫛淵彌兵衞が弟子となり劍術をはげみ江戸一見に事よせていたらぬくまなくさがし索めけるにけふしも淺草寺に詣て歸るさ此處にて敵長松に出逢ひしゆゑ頓に捕て奉行所に至り公裁をあふがんとて八年前に母を殺せし覺え有やと問ひければなにとばかりいらへて振放し逃けるゆゑせんかたなく討留しなり先ぬき打に打かくれば左の耳の上より頰まで筋違に七寸程切きられて振むく疊みかけて小鬢より月代へかけて五寸ばかり切込深手にて倒る是を見て貫藏は自身番所に入る長松今は喜兵衞と名を改めて今年八月十三日より來年三月まで給金

二兩のさだめにて幾次郎が許へかゝへられし者なり
櫛淵彌兵衛は一橋殿の徒にて神道一心流の達者なり
貫藏是が內弟子になりて德力と稱す刀は備中國爲家
が作二尺七寸計りあり喜兵衛切られしは夕七つ時過
にて茅町一丁目に住める長江玄意と云へる本道を兼
たる外科をむかへて療治を加へしかど疵深くして治
し難しといふ暮過る頃息絶えたり是其夜檢使の問ふ
に付て彼等が申所なり十六日に予廩米賜はるとて伊
勢屋嘉右衛門が許にて聞く所なり幾次郎は嘉右衛門
が北隣にて家々三軒をへだてゝ（意義解し難し）南の方なり其
前を過れば見せ戸さしてあり鈴木の前にいたれば昨
日の雨に土ぬれて血痕あざやかに見ゆ

弘賢

ますらをが手にとる太刀のつかの間に
はかなくなりし跡を見しはや
（原本見しはや誤字なるへしとあり）

寛政十二年庚申十月九日七つ半時敵討口書

下谷御徒町御徒佐々木忠三郎地借
一橋殿御徒劍術指南櫛淵彌兵衛內弟子
德力　貫藏　二十八歲

淺草御藏前町札差
伊勢屋幾次郎召仕中働
長松事　喜　兵　衛　四十二歲

右貫藏儀松平陸奧守領分奧州名取郡仙臺領北方根
岸村長町五右衛門借家善助悴にて父は十五歲之節
病死十ヶ年已前寬政三亥年まで母と兩人にて小商
賣致居候へ共手廻り不申候間母相談之上同國宮城
郡小泉村杉の下百姓七三郎悴長松同年十一月中看
抱人に賴相稼候處大酒にて身持不宜身上も難相續
八年已前二月下旬長松へ母申渡し候は不如意に相
成候間外へ稼付候樣申聞差置候處四五日過同月二
十四日之夜臥し罷在候へば八つ半過と覺しく母う
なり聲致し候間驚き目覺見候處母を右之方耳より
頰へ掛け切付長松儀は逃去り候駈付候へ共暗夜に
て見失ひ母は相果候間右之段領主へ相屆け檢使濟
其後家內取調べ候へば賣溜金十兩紛失金取逃仕り
候依之其節より敵討可申存念に候へ共在方之儀故
相分り不申候處御當地へ參り居候よし承當三月下
旬私儀も御當地へ罷出藥研堀埋地に罷在候劍術指
南大越主稅儀は知人に付便り參り右櫛淵彌兵衛方

へ申込内弟子に相成劍術指南請長松行衞諸所相尋罷在今日彌兵衞悴彌司馬へ相斷淺草觀音へ參詣仕罷歸り候途中今夕七つ半時頃同所御藏前片町往還にて敵長松見當捕御役所へ召連可申と存候内振放し逃去り候樣子に付拔打に仕止めは刺不申候へ共長松儀は相果申候

一長松事喜兵衞疵改

左り鬢に五分程突疵　壹ヶ所

同方鬢より頬にかけ七寸程切疵　壹ヶ所

同方月代より鬢に掛け五寸程切疵　壹ヶ所

一刀銘備中國柴郡住河野利兵衞尉爲家長さ二尺六寸八分

右書面之外同所支配名主咄に聞候は右貫藏儀喜兵衞を及殺害候上町役人を尋候に付行事罷越候處前書之始末粗申聞候間町法に付先帶刀可預由申聞候へば成程承知に候併し刀は師匠より借物にて拙者刀には無之旨申候に付即刻前書彌兵衞を呼に遣し候處悴彌司馬罷越成程此者は召仕には無之候へ共内弟子に相違無之夫故刀をも貸置候旨申聞候其後檢使に相越候由物語なり但喜兵衞夜五時頃まで存命に候へ共口書之間に合不申相果候由是も杏花園の筆記にて正しき實說なり都て實說はどれも〳〵かやうなる物にて面白をかしき條は作り物語り狂言としるべし

同歌舞妓潤色の話

此藏前の敵討を其當座江戸葺屋町市村座にて近松門喬狂言に取組敵討皖雁的（ねらいのがんまと）と外題して藏前米屋の主を市川八百藏（後助高屋高助）にさせたり是は舊寬政三亥年三月浪華中の芝居にて近松德叟作にて敵討非人實錄と云ふ狂言を出したる所芝居出火して北の新地へ引越し狂言其まゝにて敵討郡山染と外題替せし六つ目大坂福島米問屋の主大和屋五兵衞に雛助（小六玉）娘に國太郎敵に山村隣家浪人者に嵐三郎にて坂東甚六春藤治兵衞にて作せし場を其まゝ役割をかへて藏前札差いせや幾次郎方の敵討にはめたる物なり近來今の歌右衞門（翫雀）江戸にても札差の役をし今年浪華にて稻葉雙紙にきりはめ大津屋又兵衞の場は則是にて元は郡山染の世話場より役割のみいろいろと變化せしとしるべし

下谷浪人者爭論の話

江戸下谷にて或浪人蹲りて小便せしを侍二人話しな

がら袈を通り一人の侍浪人の刀に行當りしかどさらぬ體にて過行浪人思ふには此人終に見知らざれば意恨あるべき理なしとは自分の了簡なりとて跡より走り付唯今かゝる事候ひしが定めて御心のある事にはあらじ但しいかなる事もやと尋ければ誠にこまやかの仰詞や只に御免あれと互に慇懃に禮を述て別れたり彼侍の連は一町計り過て相待つ所へ侍追付件の荒增を語れば連の侍以の外氣色をなしそれさまの事云せて聞しや何條討ちすてざるや汝は腰拔なりと散々に罵りければ是は何事ぞや互に意恨のなき事なれば討果すべき謂れなしそれに我を腰拔と云ひしは堪忍なりがたしとて雙方拔合ひ火花を散らして討對ひ互ひに手を負ひし所へ以前の浪人町中の噪を聞きかけ付けて窺ひ見しに件の人血刀にすがりありければこはいかなる故にやと近より事の要を問へばしか〳〵と答ふそれ遁さじと追かけ詞を懸け造作もなく切伏首を引提立歸り是見給へとありければ斜ならずよろこび慇ろに禮を盡し我は喧嘩の相手なれば切腹すべしと云へば浪人が曰く其元は某なり然らば互に刺違んと有しに町人打寄押留奉行所に罷出一々の事訴へしかば委しく聞得させ上へ御伺ひ有しにや是は喧嘩にはあらず死したる者は亂心なり何れも神妙の事なりと仰有て濟けるとなり

右は寛政二巳年出板の新著聞集の中の一話なり既に此書出板より十五年前享保二十年に豐竹座淨瑠璃に並木丈助作苅萱桑門筑紫轢二の口狐川の渡し場にて旅人行違ひに浪人の旅指の柄に袖を引かけ折る龍相せし方詫て我刀を拔見する雙方共竹みつなり互ひに浪人のおばうちからし一腰まで賣しろなし人目ばかりの竹刀なれば打合ふ事もならずと笑ふて別れんとす時に加藤左衞門重氏供人大勢召連れ渡し舟の着を見合すうち敵役の家來此兩人を腰拔なりと笑ふゆゑ一旦別れし兩人又立歸りて重氏に刀をかり打果さんと云ふ重氏我家來をぼんと切て兩人に一腰づゝ刀を遣る兩人の旅人は是れ玉屋與次鬼柳一學にて此恩を報せんため四の切にて與次は妻子を御臺と石童丸の身代りに渡す一學大內方に仕へて捕手の役に來て贋物合點にて與次が妻子を引立歸る仕組あり狐渡しの場の仕組は前に云ふ著聞集に出たる一話を潤色せしものなり道理のかなふたる條は故人作者如才なく遣

ふたる事をしるべし

苅萱桑門狂言の話

世に苅萱坊は舊加藤左衞門重氏と云九州の大名發心したるなりと古より云ひ來れどしかとせし書に加藤重氏の姓名記せし物なしとも云委しくは予が綺語文草高野の卷に出せしこそ實說ならめ爰に又閑窓雜話の中に藤澤一遍上人の事跡ありよく似たる話なれば爰に出す一遍上人は伊豫の國の住人河野七郎通廣が次男なり家富榮えて國郡多隨して勇壯なりければ四國九州の間他に恥しめ思ふ事なし二人の妾ありて何れも容顏麗はしく心ざま優なりしかば寵愛尤も深かりし或る時二人の妾雙六盤を枕として頭さし合せ寢たりしに二人の髻忽ち小蛇となり鱗を立て喰合ひけるを見て刀を拔て中より打切りたり是より執心愛念の恐ろしき事を思ひしり輪廻業報因果の理を辨へ發心して家を出比叡山に登り受戒桑門の姿となり西山の善惠上人に逢ひて本願念佛の法聞を學び十一年を經て自智眞坊と名を付それより熊野に參詣し山また山を越て中略普く念佛を弘通し相州藤澤に道場を構へ鎌倉を廻りて念佛を結緣し爰に名を止め修行者の志おこたらず攝州兵庫の觀音谷に於て正念して遷化あり正應二年八月二十三日生年五十一歲なり弟子僧阿彌陀佛其遺敎を守りて一遍上人時宗の流義末世に至るまで退轉なし云々かゝれば今世に云ふ苅萱の發心は一遍上人の事跡をかりし事明らけし又宇治加賀掾の頃の古淨瑠璃鳥羽の戀塚の院本を讀しに袈裟御前と源の渡の中に男子ありて成人の後父は南都東大寺に出家せるよし聞て都より奈良までの道行有て次に東大寺の場にて俊乘坊に出逢ひ今道心に尋逢たきよし告る時きのふ剃たも今道心をとつひ剃たも今道心といふせりふ有て一旦佛門に入りし身なれば親子の名乘もしかぬる內山の上より師の坊敎誡の文句あり都て此筑紫轢の大切高野山の通りなり然れば享保に並木丈助が作せし折の鳥羽の戀塚の南都を高野山にはめたる物にて集て玉屋與次と云ふ宿屋の名まで書込たる狂言なり此後苅萱は加藤左衞門重氏の事に定まり歌舞妓にても九州苅萱關と云ふ狂言ありて與次をすべき役者なき仕組ゆゑにや與次の後家に富十郎（元祖名人慶子なり）にてせしもあり今紀の高野學文路の苅萱堂の後に千草前の石塚一基ありて緣起

の一枚摺をよめば筑紫蠑の通りを書きたりかゝる作り物語を定規として名所舊跡となるもをかしき物なり苅萱堂へ丈助の木像を納め祖とあがめてこそ能けれと思はる此高野の玉屋與次芳野下市の惟盛彌助のすしや伊吹山の麓芥屋久作伏見人形屋幸右衞門住吉新家の新作皆淨瑠璃歌舞妓狂言より名高き名物とはなれりける

西澤文庫傳奇作書附錄上の卷終

西澤文庫 傳奇作書附錄中の卷

目次

一元文奇說銀の笄
一同續兩家落着の話
一歌舞妓潤色の話
一三十石艠始人名の話
一極彩色娘扇の話
一富士見月通者墳の話
一淀屋辰五郎の事跡
一持丸長者狂言の話
一心中情死人名錄
一長崎丸山細見圖の話
一角觝取狂言人名錄
一中興奇賊撰の話
一妹脊山婦女庭訓の話
一花相撰蝶々紋日の話
一東鑒御狩卷の話
一素人藝畠水練の話
一近來歌舞妓外題の話

西澤文庫傳奇作書附錄中の卷

西澤一鳳軒李叟著

元文奇說銀の笄

元文四未年浪華吉野屋町辰巳屋久左衞門養子乙之助手代新八後見同町木津屋吉兵衞を相手取江戶表へ出訴して江戶町奉行石河土佐守殿寺社奉行大岡越前守殿の御捌きとなり翌五申年落着までの事を銀の笄と外題せし寫本あり其あらましを爰に出す元辰巳屋久左衞門は攝州尼が崎の產にて蠟燭屋久兵衞と呼びしが浪華へ來て辰巳屋久左衞門と改名し蠟燭炭油を商賣し段々繁昌して炭問屋となり悴久太郎二代目久左衞門となり娘一人あるゆゑ同町同商賣木津屋吉兵衞此間脫字アラン久吉を養子聟とす是三代目の久左衞門にて家益々繁昌のうへ正德元年九月朝鮮人來朝の時久左衞門商賣の運に叶ひ買込おきたる炭を直賣して大金をもうけ是より大坂にて指折の身上とはなりけり出入の仲士に牛の次郎兵衞といふ有て十貫目炭を十六俵壹人にて長堀伊達の屋敷へ一遍に持行し者もありけるされば三代目久左衞門に子五人あり惣領を平三郎（是四代目久左衞門となる）二人目は女子おさよ（白髮町の町人平野屋清左衞門へ嫁す）三男久八元服して茂兵衞四つ橋平右衞門町へ分家す四男庄八は木津屋吉兵衞に男子なく養子となり伯父病死の後木津屋吉兵衞となり末子富五郎部屋住にて辰巳屋に居りしが早く病死しけり三代目久左衞門法體して久鐵と呼び隱居せしが四代目久左衞門放埒にて新町の大藏太夫を受出し番頭手代等異見をすれば京へ行き金銀を湯水の如く遣ひければ久鐵勘當せんと云ひしより志を改め大藏にも暇を出しおてるといへる妾を入れ至極實體となり妾にお時雨とて女子一人出來し後は始終多病となりける然るに三男木津屋吉兵衞は大坂廻舟年寄まで仰付られしかど首切癰といふ腫物出來て金銀にあかせ療治したれども終に相果て跡を立つべき一子なければ二男茂兵衞兄なれども父の出所なれば家督を繼ぎ木津屋吉兵衞と改名す隱居久鐵は中風を煩ひ是も程なく死去しけり時に吉兵衞は平右衞門

町宅には手代共には入質を取らせ其身は炭商賣と兩家を司りお里といへる妾を平右衞門町屋敷におきて寵愛し綱次郎といふ男子をもうけおさとの親を隱居させ平生學問を好むがゆゑ高慢氣違のやうになりしを醫療手を盡しやう〳〵少く快氣しけるが本家辰巳屋久左衞門は若きより嬉亂放逸なれば長命の程心元なしと和泉佐野唐金與茂作悴乙之助を娘お時雨と後々娶はせ家相續させんと養子とす與茂作數十人の手代の中より新八といふ器量ある者を付けて送る久左衞門悦び新八を番頭格として乙之助の附人と定め幼少なれども乙之助養子の事を早速町内へ弘めしに其翌享保十九寅の夏久左衞門病死しけるゆゑ乙之助の名前となり木津屋吉兵衞は幼少の乙之助がためには伯父なれば後見となりしより學問高く元より烈しき氣性なれば自ら奢に長じ親久鐵菩提のためと號し新難波町欄(掛カ)屋敷の中へ見事なる閣堂を建て下を一面の敷瓦とし父久鐵が木像を本尊にする道の左右へ石燈籠八九十建つらね其壯觀耳目を驚すばかり其上名ある儒者僧俗を集め日々精進物とはいへども數百人を養ふ其物入幾何といふ事なし辰巳屋番頭共異見をすれば大に怒り我孝心の道を以て慈悲善根を施すを妨るは不忠不孝なりと云ふ此事御役所へ聞へ吉兵衞御召にて本家に於て御ゆるしも受ず閣堂を建て僧俗を集る事御制法を背く段言語同斷なり急度御咎仰付らるゝ所なれど孝行なりとの心得違ひの儀故御慈悲を以て其分に差置るゝ條右の堂今日中に取拂申付る以後相愼めと御呵りを受吉兵衞殘念とは思へども閣堂を其日中に取崩しければ久鐵の木像置所にこまり金藏へ入置ければ久鐵は金の番人なりと與じける吉兵衞御しかりを受け閣堂を潰せしを無念におもひ町人の悲しさ仕方なし京堂上の家來となり何事を企る共役所より手出しはなるまじ其時今の無念を晴すべしと幸ひ烏丸大納言殿は代々御用を達す事なれば金銀を送り諸大夫と懇意に成り金銀にあかせ鳥居圖書と名を受け寶物と致度とて御裝束幷に御裏樣の裝束の古を拜領し夫を手本に新敷を二品共調へ歸宅し是より彌奢增長して元文元年の正月拜領の裝束を床に飾り新しく仕立たる冠裝束を其身は着し妾おさとにも女官の衣を着せ堂上の規式をし本家辰巳屋の金銀も自由に遣ひ前代未聞の奢誰知らぬ者もなく評

判とはなりぬ其上彌儒道神道に傾むき父久鐵兄久海が命日にも辰巳屋へ來り佛前へも魚肉を備へ家内の者にも喰ふべきよし指圖するに主人の命日なれば精進仕り度といへば吉兵衞立腹して善惡共詞を背かば暇を出すべしと云に是非なく食すれども乙之助附の番頭新八は是を恐れず親の日に精進するを誤りとは存せず乙之助お時雨には堅く精進させけるを吉兵衞怒りて新八を早々佐野へ歸すべしとあるを番頭共段々挨拶して其日は其儘濟しかど是よりして吉兵衞は新八を憎み我辰巳屋の悴なれば辰巳屋木津屋兩家を納るとも誰か點の打手もなき筈新參の手代として我を侮りたる仕方不屆なり金銀に事かゝねど共態と辰巳屋の金を自由に遣ひ彼等に見せしめんと金子入用の由をいひ取出させ新町島の内にて末者藝者を集め金銀を時ちらしけれ共吉兵衞が上に立つべき一家もなく誰有て諫る者なければ心の儘に振舞ひ乙之助お時雨も家來の如く呵り付け麁末なる體たらくなれば番頭新八は此儘にては終に辰巳屋退轉に及ぶべしと深く嘆き番頭をも手代等と相談し後見をあげさせんとすれども吉兵衞が威勢に恐れ相談相手もなければ力及ばず新八一人命にかへて稻垣淡路守殿へ一通の訴狀に吉兵衞後見退き候樣認め願出ける是元文四未年二月の事なり今嘉永三戌年まで百十二年となる昔がたりなり

同續兩家落着の話

淡路守殿御病氣にて家來馬場源四郎司り捌ける上常々吉兵衞と源四郎は茶花の友にて懇意の中なり公事功者の中田勘平といふ浪人をかたらひ吉兵衞より返答書をさし上對決と成りしかども吉兵衞方は勝公事となり新八は一人の願ひにて後見を退けんとする段不屆なり殊に吉兵衞放埒と書上し事主の非を上て訴人同前なりと新八を呵り裁許相濟みけれど新八は獨り殘り達ての願ひに源四郎裁許もどきの科人なりとて新八を牢舍させけり辰巳屋一家町内は新八が忠心を感じさま〴〵お詫申せしゆゑ一月計り過て出牢し辰巳屋へ歸りける吉兵衞早速新八に逢ひ我後見をそねみ理を非に申せし天命思ひしつたるか牢舍したる者先祖久鐵久海への穢なれば此家に差置く事ならず今日中に泉州へ歸るべしとあるに新八も吉兵衞が學問立に表を飾り内心は辰巳屋の身上を横領せんとの

工みゆゑ此度も金銀のまいなひにて勝たる事を遠慮もなく云ひければ吉兵衛憤り強く叩出さんとありけるを新八云ふには木津屋吉兵衛は主人ならず乙之助殿お時雨どのこそ主人なれば久海より譲られし掛屋敷身上諸共佐野へ引越すべし我家來同前に叩出さんなどゝは慮外千萬なりとの理屈にさしもの吉兵衛も閉口し御役所へ訴へ是非を以て逐歸さんと云ふを兩家の番頭段々云ひなだめて中の島の上田三郎左衛門は吉兵衛と懇意なれば中人に入り新八に理を解きやう〳〵泉州へ歸しける新八與茂作に委細を告げ所詮大坂にては埒明くまじ江戸表にて出訴せんと主人與茂作へ委しく申置き大坂へ來て辰巳屋一家番頭を集め江戸表へ行くべきよしを告るに同志の者八人あり是も共に行くべしと云へども先新八一人下りて其上の樣子次第にて下るべしと元文四年六月上旬に新八江戸へ着淺草久保屋助右衛門方へ着し御町〳〵行石川土佐守殿へ出訴せしかども大坂にて一旦御裁許相濟たればと御取上なく八月に至り土佐守殿直に御申あるは辰巳屋乙之助下人新八とあれば後見吉兵衛も主人なり下人として主の訴人は曲事なり願書には辰巳屋を追出され泉州へ歸りしとあれば主從の縁は切れしを辨へず不屆至極の馬鹿者めとお叱りを受け新八始めて心付御前を退き願書を泉州佐野岡部美濃守殿領分唐金與茂作下人新八と書改め御評定所へ出訴に及び九月に御老中松平左近將監樣より寺社奉行大岡越前殿にお指圖有り越前守殿お掛りとなり岸和田の城主岡部美濃守殿にも御聞合有て新八召出しの上お尋あり追て御沙汰有るべしと願書は留りければ新八旅宿より大坂へ書狀を認め送るがゆゑ同志の番頭八人十月下旬に江戸へ着八人口書差上御評議有て十二月二十日大坂吉野屋町木津屋吉兵衛年寄五人組お召にて六日の道中急御召と有ゆゑ吉兵衛甚驚き馬場源四郎方へ告ければ江戸南八丁堀鵜野長順といふ醫師へ賴みの狀を付け中田勘平よりは親類島田作太夫と云ふ浪人へ賴の狀を付け賄賂の用意金五千兩挾箱に入れ吉兵衛は通駕上下三十九人十二月二十六日出立して翌元文五申年正月三日江戸本石町壹丁目大黑屋小兵衛方へ着直に着屆濟其後吉兵衛を御召有て近々對決申付ると不首尾の體なりければ彼作太夫を始め長順其外深川永福寺の住持智眼和尚弟子賢道茅場

町箔屋勘兵衞等は元より吉兵衞の近付なれば呼集め内々役人衆中へ賂ひを送るべしと皆々の奸智捗事に計られ五千兩の金を悉く蒔ちらし又もや大坂へ五千兩金子を送るべしと取寄せそれも皆掠め取られけり吉兵衞の留守中妾おさとは手代治吉と密通し有金多く盜み出させければおさとが父伊右衞門は是を苦にして首を釣り相果けるとぞ扨三月に至り吉兵衞新八兩人に對決仰付られ重ねて越前守殿お尋ねには吉兵衞事町家に於て堂上の規式をし公卿の裝束を着せしはいかにと吉兵衞は烏丸家より拜領して床に飾りしのみと答へけるにそも此事の始より京太坂にて聞合せ置たり其節京都にて新しき裝束を仕立させしはいかにと嚴敷お尋に閉口す是故吉兵衞は入牢となり夫より泉州唐金與茂作大坂辰巳屋乙之助別家一類挨拶人上田三郎左衞門もお尋にて常々吉兵衞方へ心安く出入して毎度金子を貰ひし輩まで殘らず懸合にて御呼出し有ければ其町々騷動し大坂發足の者二百餘人かゝる大行なる公事は三都に珍らしく江戸本石町一丁目二丁目は悉く木津屋辰巳屋懸りの旅宿とは成りけり木津屋手代與助は吉兵衞義は烏丸殿の家來なれば病身者なり何卒出牢の段願出るに此義は腰押なるべしと越前守殿仰出され箔屋勘兵衞鵜野長順の兩人召出され白狀のうへ入牢と相成り作太夫智眼賢道等も召出され拷問のうへ吉兵衞に彌御にくしみ強く大坂表稻垣家來馬場源四郎同三郎兵衞浪人上田勘平を急に召れければ勘平は木津屋入牢と聞くより腹切て死し稻垣殿馬場兩人を網乘物にて江戸表へ引かれ再應御吟味のうへ吉兵衞儀辰巳屋を横領せんと謀計を搆へ官位裝束を取扱ひ堂上の家來と申一身を二名に用ひ金銀を猥に仕過分の奢上を恐れざる段不屆に付死罪仰付けらるべきを御慈悲を以て三ケの津御搆にて追放木津屋の家督綱次郎に仰付られ兩家手代共事なく上田三郎左衞門印子（意義不通）の判形持參せしを呵られ以後取扱無用馬場源四郎島田作太夫は打首馬場三郎兵衞似せ與力同人六人は江戸追放智眼賢道長順勘兵衞は大金を衒り取りし科にて江戸中引廻し獄門小池相摸殿出家をかたらひ町人より助力を受し科にて切腹稻垣殿は病中ながら家來の取計らひ存ぜざる段不調法と有て半知小普請入乙之助お時雨は夫婦となり辰巳屋相續致すべし木津屋綱次郎喜三郎と改名し

て家督を繼ぎ木津屋へ出入し者悉く御呵りにて相濟唐金與茂作は其方より以後辰巳屋へは我儘の計らひあるまじく新八其外同志八人の手代共同志の咎めあるべき所忠義にめんじ差ゆるす乙之助のためには忠義の者共なれば隨分不便を加ふべしと一件悉く相濟み大坂へ立歸り吉兵衞は大津高觀音にて借宅し手代共より合力を受けその後病氣にてひそかに木津屋へ歸り相果おさとは放埒なるゆゑ剃髪させ天王寺巫子町へ庵室をしつらひ入置乙之助勝利を得しは偏に新八が忠義ゆゑ過分の別家をさせんと云へど利欲に拘らず泉州へ身退きて蟄居同前に暮しけるは誠に町家に於て珍らしき忠臣と皆々譽めぬ者こそなかりけれ

同歌舞妓潤色の話

此年より三十九年後安永七戊年浪華角の戲場にて作者並木五瓶棹歌木津川八景と外題して盆替りに出す其時の番附は次に出す宇治屋七兵衞（木津屋吉兵衞事）腕次郎兵衞（仲士牛の次郎兵衞事）番頭勘助（番頭新八）炭屋後家お里（久左衞門妻おてるの事）なんどそれ〴〵に名前を替へ序幕より四つ目河口番所裁許の場までは此本文の通りにて手代勘助は侍となり木津勘助となり林三十郎は渡し守となり兩人役目替るより一つ狂言ながら先切狂言となるなり都の巽より名を字治屋と替へ其餘の人名は木津川安治川の地名に合せ木津の勘助林三十郎と拵へし名なり此時の看板に樋の口ありて此前に三十郎着流し一本指にて竹棹にて筏をさし傾城淺妻も着流しにて此筏に乘り居る樋の上堤に木津勘助肌脫にて刀を持あれの姿に立居る圖なり梅幸花桐珉獅三人の人形なり今木津勘助と云男達にても有し樣に心得し人もあるべきが唯勘助島の開發人にて外にあらん樣なし天滿天神祭お迎ひ舟に木津勘助の人形あるは此木津川八景の時の雛助の木偶看板を其儘に寫したるなり尤寶曆三酉年豐竹座淨瑠璃に雄結（をとむすび）勘助島といふ狂言はあれども三十郎渡し勘助島と地名をよせて木津屋の一件を取組しが故に木津勘助と呼しは此時よりの事なりとぞ

べし

安永七戊年七月二十九日より新狂言　角の芝居

座本　小川吉太郎

附り今此所にて出合の印は銀のかんざし打ぬいた紋は卽ち丸にもつこう

勘助嶋　新田
三十郎渉　棹歌木津川八景　六反

幷に後此堤にてうちあふかためは金掛の脇ざし取組だ盆と正月

こしもと　さくらぎ　あらし新之助
同　ちどり　中山爲之助
同　小よし　藤川きく松
同　さらしな　あらし千太郎
同　さえだ　あらしきの助
たいこ持　一作　尾上丑之助
同　喜六　花桐伊三郎
手代兵助　小じま和三郎
かこの又兵衛　大谷彦十郎
たいこ持　喜作　嵐權十郎
代官小文次　山下四郎五郎
宇治屋手代三助　市山三津藏
早野彌藤次　中山乙五郎

かぶろ龜之丞　中山富三郎
こしもとまん　中村万藏
げいこ小いと　嵐万三郎
勘助子勘吉　坂東吉松
船頭傳兵衛　中村傳九郎
やりてすぎ　中村仙助
やッこ半藏　中田善右衛門
角助　中山三八
玉澤や女房　澤村五郎吉
入方八兵衛　中山東藏
桂順ト　中村友十郎
住吉や權八　桝傳藏
入江圖書　藤川十郎兵衛

仲居おみよ　萩野三代藏
けいせいあふよ　小川千菊
三十郎娘お品　嵐松次郎
手代文六　桐山紋治
三十郎女房おけいせい三浦　藤川山吾
手代與助　三桝化人
佐次助右衛門　三桝化人
炭や後家お里　花桐豐松
仲居おつる　花桐豐松
けいせい淺妻　花桐豐松
腕の治郎兵衛　藤川八藏
林三十郎　尾上菊五郎

狂言作者　中村阿契
同　長谷村眞八
狂言作者　津打亭助
同　並木新藏
狂言作者　筒井半二

千穐萬歲樂叶

仲居おげん　嵐雛次郎
仲居作兵衛女房お照　山中平十郎
馬士の八　山中平十郎
淺山源十郎　中村十次郎
桝屋太右衛門　桝山四郎五郎
柴崎林左衛門　中村十次郎
柴崎林左衛門　堀江万右衛門
柴崎林左衛門　早瀨兵藏
鹽田三左衛門　尾上新七
同悴佐市　尾上新七
米屋作兵衛　嵐雛助
木津勘助　嵐雛助
同弟幸助　小川吉太郎
宇治屋七兵衛　小川吉太郎

狂言作者並木五兵衛
頭取中山音五郎
世話人中山百治郎

三十石艠始人名の話

安永元辰年角の芝居二の替り狂言艠始の作者は並木正三にて是はさして實說に基き工みたる狂言ならず唯淀川筋にある地名をよせて平太の番所源八の渡と開發人の名より思ひ付て關口平太神道源八と武士の名に作りもうけて淀與三右衞門と云ふ捌き役の相手實惡の名に事かきて河村瑞軒は此川筋を浚ひし緣あれば敵役に遣ひしより婦女子は惡人のやうに思ふこそ瑞軒の不幸なるべけれ此人古今獨步の才子にて始東武神田の產十右衞門と云ふ車力なりしが明曆三年江戶大火の時僅かの金を懷にし僕一人を雇ひ供に連れ夜を日に繼て信州の山路に至り材木多く持る家に行き材木を求んと咄のうち其家に小兒あり十右衞門懷中より小判一枚取出し火箸にて穴をあけ紙撚を通し輪にむすび小兒に與へしより亭主驚き並々の金持にはあらじと十右衞門のいふまゝに材木を送りけり十右衞門一々材木に燒印を打江戶へ歸りて價高く材木を賣り夥しく利を得是より家富榮え諸大名方へ立入して普請の請負をし他より價安く美麗にして無雜作なる事皆十右衞門が才智より出る所にして後河村瑞軒安治と呼けり或方へ召れし時官名ほしきよし申ければ安き事なり兵部卿と名のるべし併し假名にて書くべしと仰せあり瑞軒かなにて書見ればひようぶぎやう則日雇奉行といふ事なりとて大笑ひして退きしとぞ晚年淀川筋土砂堀浚の請負となり土砂を殘らず川口浪除山に積世の人河村の功を賞して瑞軒山と云川の名に我名乘安治を呼て安治川と今に呼など世に勝れたる才子ゆゑ俗に瑞軒を山師の棟梁なりとも云ふものあれど水脈に委しきは角倉了意にもおさ〳〵劣らぬ人ながら芝居狂言にて謀反人にせられしは此人の不幸なるべし三十石狂言なつてより今戌年まで七十九年とは成りけり其後に此世界の人名を用ひ花艠淀川話けいせい戀艠夏粧淀川堤との增補狂言もありけり

極彩色娘扇の話

寶曆十辰年七月二十二日より始たる極彩色娘扇の淨瑠璃は竹本座にて二步堂と三好松洛の作にて朝比奈藤兵衞の聾と寺子屋兵助の盲人と兄弟因果の寄合は誠に古今の類なき作にて大當りせしとぞ此中にお夏清十郎を題とす是はいと古き心中物にて極彩色より

五十二年前寶永六丑年にお夏清十郎五十年忌歌念佛と云ふ近松作の淨瑠璃ありお夏は播州姫路但馬屋九左衞門の娘清十郎は手代なり然れば百年餘になる人名なり又男達喧嘩屋五郎右衞門は元祿年中五人男の頃有りし俠者なり是に朝比奈藤兵衞と云へる男達を書入しは思ひよらぬ事なり前に云ふ木津屋辰巳屋の先祖尼ヶ崎に住居の内青山侯(尼ヶ崎城主)の家老に朝比奈藤兵衞と云有りと銀の笄にも有て然も大祿取の名なるを俠者として聾にまで作りしはいとをかしからずや上卷男達見立番附になき上方の事ゆゑ江戸の人はしらぬ筈なれど以前男達の多き折に此同名の俠者ありしか不知又是より十六ヶ年已前延享二丑年竹本座にて七月十六日より始し夏祭浪花鑒は並木千柳竹田出雲作にて此時より人形に帷子衣裳を着せ始しと云今まで百六年になる狂言なれど夏の頃はいつも興行の度に當りを取名狂言也此團七九郎兵衞一寸德兵衞釣船みぶと云る俠者の事跡何の書にも見當らず田島町に九郎兵衞の住たる家の跡ありと所の者のいへども淨瑠璃の文談より附會して云ふなるべし又釣舟の內は高津地下町又清七(本名玉崎磯之丞)手代奉公する道具屋內は本町鼻殺しは長町裏と現に町所淨瑠璃に出しおれば少しは形のありたる事明らけしお辰が燒鐵を當て面體を損ふは天和年間白翁和尙に法を受んと火攪を燒き面を燒爛したる了然禪尼の行狀を書込しものなり無宿團七堺に住し折の名にして彼地を拂はれ大坂にて九郎兵衞と改名して魚賣をすれど以前の名と兩樣に呼ばるゝものからそれを通り名とす前々の編に釋く岩井風呂の人殺佐助も元は堺の者なれば無宿團七の名をかり團七茂兵衞と名を附したる者なり

富士見月通者墳の話

天明三卯年角の芝居にて五月狂言に出せし富士見月は並木五瓶作にて以前博徒に名高き大工與兵衞惡馬の佐吉等を始新町槌屋の抱綾鶴太夫機關師竹田近江抔を取組たる世話狂言にて此綾鶴は誤つて借振の折放屁せしを其頃口の惡き客端唄に作り音は幾瀨の浮名にひゝくとの文句あり此狂言には幾瀨里次郎とか呼てやつし役にし合方は綾鶴太夫なり惣體の仕組夏祭によく似ていと面白き狂言なり元祿中五人男御仕置にあひし時阿波座讃岐屋町に道具屋與兵衞と云ふ

者その頃の喧嘩買に脇差をかし群集の場所にては其輩を後楯とせし科にて浪華の地を拂はれしと云與兵衛と此大工の與兵衛は別人なるべし又寶永四亥年四月に梅田にて心中せしおかめ與兵衛と云あり竹田出雲作にて卯月の紅葉と呼ぶ竹本座にて淨瑠璃とす是は久太郎町心齋橋角笠屋と云ふ道具屋の娘お龜（十五歳）養子智與兵衛（二十一歳）なり又安永二巳年七月十六日朝盃の心中とて有しを直に盆替りに角の芝居にておかめ與兵衛の名をかり七月二八曙と云ふ外題にてお龜に雛助（後立役小六玉）與兵衛に小川（元祖英子）是又古今大當りせしとぞ與兵衛は御堂前港屋の息子嫁は座摩の前饂汁屋の娘にて至つて肥滿せし大女然も懷胎して七月なり男はひがいそなる優男にて盃の夫婦の心中なりとて名高かりしを雛助小川の體に合せ難波鐵眼寺門前道行の跡心中の所雛助方より小川をはげませ刀を持そへさせ我胸へ突込せる小川悩りして後の高土手へ跡飛に飛上り南無あみだ〳〵と所體を捨てふるひながら拜む所誠にかうあるべし英子は古今の名人なりと其時の評判記にも載り古き見功者は後々まで覺え居て賞たる事聞おぼえり故に與兵衛と云へば道具屋與兵衛と呼べども皆別人にして其時々の仕組に名のみかりたる事をしつて一つに混ずる事なかれ

淀屋辰五郎の事跡

寶永□年酉五月上旬浪華北濱の町人淀屋辰五郎奢に長じて莫大の金銀を費せし科にて家内闕所となり辰五郎は城州八幡へ引退き古く持傳へたる寶を始め有金地面古證文まで殘らず闕所仰付られし事は護國女太平記に委しく出たれば改めて云はず或書に實說なりとて有には淀屋辰五郎の家滅亡の起りは辰五郎遊里に通ひ世間の取沙汰をも憚からず家内の納りも麁略なりければ母是を愁ひて兼て親しき老醫あり此醫者利害を解き辰五郎を諫めければ合點行しか遊戲を止まり母大に悦び老醫に禮詞を述べ猶謝禮として家に持傳はる茶壺を送る此老醫茶事を好まず商人に賣り夫より諸所の手に渡りて流布する内公役人何某といふ者此壺の事を公聞に訴へ此壺先年公儀より御尋の茶壺也其時は手前に所持仕らずと僞りかくし置候段不屆なりと御咎めあり其外彼是に依て辰五郎は追放せらる依て家滅却しけるしかし此壺ばかりにあら

ねども畢竟此壺御咎の第一となりし事時節の不幸なり辰五郎は後三郎右衞門と云元來八幡の侍なりと云々是實說に近かるべし彼忠臣藏夜討の年より第四ヶ年目なり又前に云ふ木津屋吉兵衞追放になりしは淀屋闕所より三十五ヶ年後の事なり何れも豪商の家柄滅亡するも奢侈僭上の咎なり彼近松平安堂が淀屋の事跡を書て金の冠着ぬばかりしやくは持病に有とかやと編りしは何と云ふ淨瑠璃に出せしや外題しれず淀鯉出世の瀧德と云近松の作には江戸屋勝次郎茨木屋吾妻として癪は持病の文句見當らず近松翁死せしは享保九辰年なれば淀屋滅亡より二十年後なり又木津吉の滅亡は近松歿して十五ヶ年後なれども金の冠着ぬばかりと奢の文談は淀屋辰五郎の廓遊びには似ず木津吉が堂上の規式をせしにかなふと云ふべし察するに近松の文談を聞覺え後木津吉が其奢侈を行ひしか橘庵漫筆に近松の草稿を見て感ぜしと云穗積以貫（業は醫半二が父）は俳諧師半時庵淡々と共に木津屋吉兵衞が幇間なりと銀の笄に有り遙か後安永二巳年七月北の新地芝居にて近松半二（穗積以貫悴前編に委し）作時代蒔繪世話模樣いろは藏三組盃は替外題難波丸金鷄とも有て忠臣藏と柳澤と淀屋辰五郎を混じ合せたる狂言なり手代新兵衞と云へる世話立役は木津吉一件の折の新八より思ひよりて書入しものなり天明七未年盆替り角の芝居にて仇討寶永記と外題して此五月假名手本忠臣藏（江戸中村仲藏秀鶴上り出勤志賀山一流三番叟の祖）大當りせしゆゑ其後日狂言として寶えん祭りは見事な事よちと又此世のうさはらしと云はやり歌を元として付たる外題なり此中に淀屋與茂四郎悴三郎兵衞酒を飮家內土藏をこぼちあばれる場あり是は其頃岩城ます屋をこぼちたるを狂言に仕組み名は淀屋をかりたるものなり（近來岩木屋藤三郎と呼ぶなり）又寬政五丑年中の芝居にてけいせい楊柳櫻と外題して二の替りに出せしは彼女太平記を潤色して柳澤と聞せし物にて淀屋辰五郎は舊榮飛驒頭の落胤にて父の謀反を諫めんため態と放埒を盡し川口の新田へ拂はれ融の大臣の鹽竈を移し遊興す其跡を前內裏島（本名は前垂島）と號仕組にて是は專ら木津吉の奢を辰五郎に混じたる者なり果は本妻妾妬を三方に追せ八幡の領地へ拂はるゝを脚色めり是を淀屋辰五郎の狂言にては慥かなる仕組といふべ

し

持丸長者狂言の話

爰に享和の頃堂島裏町に住居する尼ヶ崎屋庄九郎と云ふ盜賊有て玉水町加島屋の土藏へ入て金子五千兩奪ひ取りし事あらはれ引廻しとなりし事ありそれを直に堀江市の側芝居にて持丸長者金笄釵と外題して淀屋新兵衞故主辰五郎のために淀屋の金藏へ盜みに這入る仕組にて芝居の看板に土藏の屋根を餝り新兵衞頬冠り尻からげにて番傘をさし黃金の鷄を抱へ居る所を出せり外題割書を土藏の白壁へ落書のやうに書きたり此實說とて予幼き頃その邊の人の話に聞儘爰に記す虛實はかり難しといへども近き事なり實說に遠からじとおもふ加島屋より藏屋敷への納金五千兩には宵日より燈明をあげ金藏に餝りありと出入の仲士が髮結床にての咄を聞て其夜ならでは盜み難き金なりと然も其夜大雨の只中庄九郎は傘をさし忍び入り獨りにて五千兩の金子を持出しとは大膽不敵のみならず力も相應にありしと聞えし元の屋根に歸りし所傘の邪魔なりと屋根より横堀の川中へ投込しが折ふし干汐時にて濱の石垣にとまりしもしらず盜賊は歸りしが其夜加島屋主人は屋敷振舞有て島の內足代屋へ來り翌朝早く駕にて歸り駕舁は南へ歸りがけ濱に落ある傘を何心なく拾ひ駕に付て歸り足代屋長左衞門に傘を拾ひし事を咄してかへりぬとぞ足代屋の主はいつも駕の歸りを待受け夜前の禮に見舞旁行くを定例なれば玉水町へ行きし所前夜屋根越しに盜賊入て五千兩金子を奪取られし噂ありさるにても大雨に屋根をめぐり土藏へ忍び入し事を驚き屋根を吟味せし所金樋の內に金子一包落ち有りしゆゑ此所より入たるとの評議を聞き足代屋の主人今朝駕かきの傘を拾ひ歸りし事を告ぐるそれこそよき手掛りなりとて取寄せ見る所尼庄との印あるゆゑ役方より段々吟味の上尼ヶ崎まで尋ねし所彼地は傘も骨組等違ふよしにてそれより大坂を吟味の所堂島に尼庄といふ者あれども俠氣ある男にて中々盜賊などすべき人柄にあらず傘はいかにも尼庄の傘なれども借傘とて諸所の者に借す事ゆゑ確と證據とも成難し誰に聞てもあの人に限り盜賊との疑ひは氣の毒なりと有て役方さへ遠慮してむざとは吟味さへ得せざりしとなり其頃名うての濱の何某かれが宅へ行借傘の事なれば若

し誰にても借手の內心當りの者はあるまじくやと相談に行きしに誠に迷惑なりとの返答に詮方なく歸らんとせし時先づゆる〳〵となされよと挨拶して手水に立けるが天命遁れがたき事にやありけん裏口より逃んとするを表に待受たる役人支へしかばいかにも盜賊は我なりと早く白狀に及び戶棚より金子を取出し手下同類とてもなく着物を着替ゆる〳〵酒食の上召捕れしとの事誠に前後に類なき賊なりとて取沙汰よく入牢も僅かの日にて引廻しのうへ打首となりしとなり後に近付の者の噂に翌日風呂屋にて加島屋へ盜賊入し噂を尼庄も共々してありしが濱に傘の捨ありしが證據となり吟味最中なりと聞て其時尼庄はつとせしが顏色かはり其儘ついと歸りしが扨は其時始ておもひ當りしゆゑなるべしと又尼庄常々北の新地にて茶屋遊びの節馴染の藝子共いつにても暗三重の三絃をひけば直に頬冠り尻からげにてお頭首尾はコリヤシイと俄狂言を一藝のやうにせしが跡にて思へば盜賊持前なればさもあるべしなど取沙汰して賊ながらさせる惡事せし事を聞かねば惜しみしとぞ其頃京と大坂の狂歌問答に京より三千兩の藤田大助と云へば大坂より五千兩の加島庄九郎と贈答の句ありけり此尼庄を淀屋新兵衞とせしより後々は淀屋の狂言と混ずるものも多かるべしと爰に演る者なり前に出せし復讐俠者の見立番附あるからは盜賊の名高き者を見立番附も出そうなる者なり熊坂長範袴垂保輔を東西の大關として勸進元は石川五右衞門なるべし中にも自來也は唐山の小說我來也より思ひもうけし作り物語なれば格外にして日本左衞門、稻葉小僧、柿木金助、曉星右衞門、玄海灘右衞門など小說稗史歌舞妓淨瑠璃に遺る名を拾ひ近くは此尼庄大助東都の鼠小僧などまで書集めなば實に濱の眞砂と共に盡る事あるまじ是に繼て番附に出すべき者は心中情死の見立なり是又三都の淨瑠璃歌舞妓に遺るもの少なからず元より是に位はあるまじく世に名高きを土產として名の高からぬを末の段とせば見るに興あらん是らはいらざる世話ともいふべけれど著作道の一癖なれば思ひ出るにまかせて次に出す笑ふべし〳〵

心中情死人名錄

世に男女對死する事を心中とも情死とも云ひて多くは父母の戒に逢て己が非の改め難きを悔るか互志の

叶はざるより起る所にして戰國の砌には絶て聞かぬ事なり又此太平の御代となりても遠國邊鄙には聞ぬ事にて譬へたま〳〵有とも其所のみの噂にて都會の地まで沙汰に及ばざるかはしらねども先人口に膾炙するは三都の者にかぎれり是を世上には鈍根なる男よ愚なる女よと彈指して笑ふ者もあれど凡そ眞實の情は死をもて驗とするより切なるはなし情死のもの志は殉死の者に似たり然れど大道を曉りて眞に仁義の眼を開かば何ぞかゝる不正の死を慊とせん故に天下には大道を示し給ひて殉死を禁ず況や男女の對死をや然るに其大道を明めずして只私情の向ふ所に切なる者天理を私欲に昏まし仁義を名利に害するに至る事實に過て實を失ひ正を欲して正を背き信を邪路に守る事憐むに堪たり是を譏る人は己が色に溺れざるを賢しとおもふべけれども其薄情より忠孝の道も文武の藝も至所需る事有るべからず云へば云はるゝとて人を譏り己が不實を顯す事恥をしらぬに似たり渡り奉公する者の殉死を嘲り遊女を欺て財を貪る人の對死を譏らんは五十歩を以て百歩を笑ふには非して百歩を以て五十歩を笑ふと云ふべし情死せるも又契約の違ひしを怒り無理殺せるも實說を正さば種々あるべしまづ誰彼と浮名立たる人名を時日新古に拘はらず云はゝ椀久松山、彦三小吟、お俊傳兵衞、お夏清十郎、夕霧伊左衞門、三勝半七、お花半七、お初德兵衞、お房德兵衞、お万源五兵衞、おもと龜松、お三茂兵衞、お龜與兵衞、小万與作、お梅粂之助、揚巻助六、おきさ次郎兵衞、梅川忠兵衞、おさが嘉平次、お島市兵衞、吾妻與次兵衞、小女郎宗七、小春治兵衞、お千代半兵衞、お吉空月、お仲清七、お染久松、お七吉三、彌市お高、おらん源六、小紫權八、お染半九郎、小稻半兵衞、いろは新助、おその六三郎、梅川新七、おはん長右衞門、お駒才三郎、小糸佐七、小三金五郎、お賤文藏、お菊幸助、花扇甚三、小女郎新兵衞、お妻八郎兵衞、八橋治郎左衞門、小菊半兵衞、錦木口三、尾上猪太八、浦里時次郎、なんど實に枚擧すべからず猶委くは此程予が著述當世榮花物語に出す好者は是を見給ふべし

長崎丸山細見圖の話

俗に唐人殺と云ふ狂言は明和元申年朝鮮人來朝して東武より歸路浪華北の御堂を旅舘とする事定例なりとぞ此時の通辭役人鈴木傳藏なる者道中にて正使五

齊官を恨む事有て御堂に於て切害して逃去八町目寺町正德寺の住持は知音なりとて暫しかくまはれ居たれど御吟味嚴しければ池田へ落けるを終に捕はれ九條島竹林寺にて御仕置になりしとぞ鈴木物語といへる寫本に出たり是を歌舞妓に潤色して長崎丸山細見圖とも擧禪廓大通とも外題を呼て狂言今に遺れり通辭香齊典藏正使の名代となり相良の家來鈴木傳七に討るゝとし清德寺に匿はると仕組めり後漢人手管始と云ふ增補狂言あり寛政八辰年の春角の芝居にてけいせい花大湊と云る狂言は傳七中山文七典藏玉小六を殺し立退典藏跡にて西天草をくはへ蘇生する狂言なりしが餘り當らず日數僅かの興行にて止けり

角觝取狂言の人名

前編に云眞世話氣世話といふは心中情死男達の類なり其中に角觝取行司等あり是もすこしく爰に云はゞ秋津島國右衞門、鬼嶽洞右衞門、木村庄九郎、岩川次郎吉、鐵ヶ嶽陀々右衞門、雷電源八、八十島吉平、千羽川吉兵衞、白藤源太、明石志賀之助、仁王仁太夫、早川又兵衞、姥吉兵衞、八岩源五郎、初花傳七、斧川大助、本町丸綱五郎、半時九郎平、濡髮長五郎、放駒長吉など是又數ふるに際限なかるべし世話狂言にても角力取と男達とは紛れ易く既に昔米萬石通にて見る時は濡髮は角力取なれど放駒は角力取にあらず大寶寺町米屋の悴にて所謂新町ぞめき東都にて云ふ地廻りの喧嘩買なり後雙蝶々曲輪日記には早素人角力のやうに仕組めり文化の始頃浪華日本橋詰宿屋にて其頃の上取荒馬に意恨有てかたやの角力取大勢込入しを荒馬の弟子九十六是を切殺せし喧嘩ありけり直に竹田芝居にて關取千兩幟の岩川鐵ヶ嶽の名を假りて狂言にせし事あり都て新奇の名を呼ばず昔より在來りたる名を借るがゆゑ稗史小說にも俠者の名を角力とし角力の名を侍と作するがゆゑ後々は混じて紛らはしくなるとしるべし昔の俠者に達の小六と云ふ者有て淨瑠璃にも關東小六東六法關東小六丹前姿などゝ外題あり六法丹前と云ふは江戸吉原舊御府內に有し頃丹後侯の屋敷前に浮世風呂とて湯屋あり爰に抱への女郎ありて此湯屋へ通ふが故丹前といふ又六法とは長大小を十文字にさし雙の手を振て步行がゆゑ六法をふると云其頃の俠者は是を達とせしとて專ら呼たる名なれど今は廢りて

前に男達の番附にさへもれたり曲亭馬琴近頃俠客傳に舘の小六の事跡とて南朝北朝の頃に引直して出せりかゝる浮たる人の名にも興廢有て丹波與作は伊達の與作と古く云も昔の俠客の名なるべし

中興奇賊撰の話

近來講釋にて專ら讀流行と見えて諸所に此外題を見る二十卷の寫本有て鶴本屋本之助燈籠竹源藏白銀屋與左衞門と三人の者心ざしを異にして後與左衞門は仕置にあひ本之助は敵を討れ源藏は立身すると作り物語や實に有し事にや其原はしらずといへども是を歌舞妓に仕組み角の芝居にて寬政六寅年冬當世奇族撰と外題して鶴本屋（小六）白銀屋（山村）源藏（新七）にて序切桃園に義を結ぶ書面に准らへ此三人義を結ぶ場あり玄德に珮獅張飛に山村關羽に芙雀准らへの容となる所にて初日芙雀金棒を青龍刀の樣に持て見えとなる折誤て取落せしゆゑ當世奇服撰と惡口を云はれて僅かの日數にて狂言取置其後再びこの狂言出ず其頃の名人役者寄合ても人氣に合はねば是非もなき物なり此世話場に菅笠賣戶田八と云ふ惡者小六弟の前髮三五郎隣の娘八百藏兩人駈落をせんと相談しながら場のぐるりを廻るを兄の惡者附步行き兩人を殺し心中なりと見せて誠は若殿と姬君の身代とする場あり此場を近頃煙管のらうやに直して外の狂言にはめ度々するなり題に立し奇族撰は殘らず箇樣な場が遺るとは是狂言の善惡によらず世にあふ合はぬと云場所なるべし

妹脊山婦女庭訓の話

明和八卯年正月竹本座にて近松半二が作妹脊山の淨瑠璃は古今の當り狂言となり淨瑠璃歌舞妓共に年に一兩度づゝはせぬ事なく見るに飽かぬ狂言也此もとは寬保三亥年竹本座にて竹田出雲作入鹿大臣皇都諍と云ふ淨瑠璃より出たるなり三の切大判事淸澄の屋敷へ天智天皇の后采女の方預り有り淸澄入鹿の疑ん事を恐れ膝行なりと作病す入鹿采女の首を討取れと鎌足を勅使に立る鎌足是非なく仕へ居れど天智帝の忠臣なれば贋首となり居る采女の首を見屆るために入鹿の乳人阿茶の局と云ふ老女を橫目にす此婆々聾なり是能狂言の三人畸を取組たる趣向にて鎌足淸澄心中にて探りながら盲と聾が討か討て見せうとの詰合の內局は聾ゆゑきよろりとして居て此局は見分の

役贋か眞か見届ると奥に入後清澄娘を身代りに討鎌足は贋盲ゆゑ若し眞の后を討しや身代りなりやと案じる時敵役の局も作り聲にて此姥は入鹿に乳を付たる折の娘にて入鹿とは乳兄弟局の實の娘ゆゑ身代合點で持歸る三の切なり姓名は是より妹脊山の名を出したり又元文五申年九月豊竹座の淨瑠璃に爲永太郎兵衛作武烈天皇艱と云ふあり大友狹手彦異國に行くべき勅を受け難波の津に汐待する松浦佐用姫は美人の聞えあれば入内させんと家老何某預つて是も舟にて港に船懸りす狹手彦とは元より云號なれば姫は狹手彦を慕ひ船より船へ石を投込此時の文句に何國よりかは水中に打込石は重けれど又あの石になり共なりたいと戀慕ふ場有て太體文談は此間を遣へり三の切妹脊山の場のもとは寛延四未年竹本座作者竹田外記役行者大峯櫻三の切矢脊の場に倣へり大友皇子を入鹿大臣清見原天皇を天智天皇村國庄司が妻濱荻を太宰後室貞高千島之助を久我之助秦の連友足を大判事清澄娘初日を雛鳥と都て矢脊の里を妹脊山とし川向ひに分たる趣向にして右三つの狂言何れもおもしろき作意なれども皆妹脊山の右に立つ事遠く外題さへ呼ぶ者なし是も世にあふあはぬ時節なるべし

花相撲蝶々紋日の話

享和年間浪華濱芝居作者に近松柳と云ふ者妹脊山三の切を雙蝶々に案じかへて眞中に淀川を隔とし上座を八幡下座を山崎とし八幡村は長五郎母と妹親子暮しの中へ長五郎人殺しの場所より落來る跡より爺親甘酒屋仁右衛門來て長五郎に元服させ河内へ落す山崎の方は長吉の乳母長吉を匿ひ居る姉お關來て是も長吉を落す場あり狂言の間〳〵に向ふの堤を子役船頭にて三十石船を曳登る事有て見渡しは氣替りて大によけれど妹脊山の如く兩向ひより詞かはす事なく狂言別々となり殘念なる仕組なり妹脊山は雛鳥久我之助の色氣有ていかなる大川を隔つとも其情は通ふなり長吉長五郎は假に兄弟分といふ計りにて色氣なければ狂言堅づまり連續し難し畢竟二幕か廻り道具にてすべき所を餝り付にてするなれば詮なし此狂言の二幕目阿波座土橋立引の段は雙蝶々元狂言昔米萬石通の趣向より出て長吉長五郎橋の上にて立引となり雙方を詠めて親(長五郎父甘酒屋)と姉(長吉姉おせき)が來るゆゑ南無三邪魔が入たやり過して跡の

事と兩人橋杭を傳ひ下りて隱れ居る向ふより姉おせき上手より甘酒や仁右衞門荷をかたげ甘酒ノ〳〵と賣ながら出て橋の上にて顏見合せおせきは今仁右衞門の方へ行く所よい所でお目に掛つたと云ふに仁右衞門何用でござつたと是より橋の上にて話となるを橋杭に取付兩人じつと聞居るおせきは仁右衞門にむかひ弟長吉は年も行かぬ者なれば立引に依て長五郎の方より誤て呉れてもよからうと賴に行く所と云ふ仁右衞門我子の長五郎最負にて悴にはようあやまらすまい何ぼうこなたの弟でもあまりあやかし過ると長吉の不足をいひ出しもとは仁右衞門の悴にて兄を長五郎弟を長吉とて藁の上よりおせきの親搗米屋へ子にやつたに義理を思ふて可愛がり甘う育てゝ下さるからあのやうな我儘者になりましたと泣悲しんでの昔語を兩人聞て扨は我々は兄弟で有たかと始てがてんゆき兩人おづ〳〵橋の上へ出て誤る姉と爺も悔りして扨は樣子を聞たかと云へば兄弟としらず諍ひし事を悔むゆゑ途中ながら甘酒屋にて盃事有て以後は兄弟せり合はせぬかと怠狀乞（怠狀不明）する何が扨誠の兄弟なればと云を姉と爺が云合せにて兄弟といふたは嘘兩人に中直りさせんがため元より近付の事ゆゑ拵事にて兄弟分の盃をさせる仕組なり是は萬石通の小野屋膏藥を甘酒屋に直したる筋なり扨此狂言を先年江戸葺屋町芝居にて處々增補のうへ菜花蝶々色成穉と云ふ外題にて長五郎歌右衞門長吉羽左衞門おせき九藏仁右衞門三十郎にてさせ弘化元辰年盆浪華中の芝居にて長吉片市長五郎璃寬おせき金作仁右衞門大友にてもさせしが何分色氣薄く和らかみ少なければ殘念なり此兄弟なりと云ふ筋は江島屋其磧八文字自笑兩作の略平家都遷と云ふあり此中に松王兒童病氣にて宿へ下り宇治の母の宅にて保養し快氣ゆゑ與正寺へ詣る同里に彌陀次郎と云ふ漁師の娘蓮葉此松王を見染め互に文を取かはしまだ一つ寐はせねど談合ははやできたり所に彌陀次郎は親の敵を討つ望みあり其敵は兵庫築島の人柱に取こめられ敵討つ事叶はず故に娘を白拍子にして淸盛にさし上げ其手筋より敵を申受んと拵て娘に告る娘は松王に添んとおもふ心當違ひ忍びて松王が家に行き涙ながらに是を告る松王の母奥より松王を呼ぶゆゑあはてゝ巨燵の內へ蓮葉をかくす內母出て與正寺日參なれば早う參れ

と云ふゆゑ巨燵に心を殘しながら外面に出る向ふより見知らぬ女房一人來て內へ入るゆゑ何やらんと外に伺ふ是蓮葉が母にて松王の母とは古き馴染の樣子なり絕て久敷挨拶有て蓮葉を松王の嫁に貰はぬかと云に松王の母腹をたてそれでは此世から畜生道へ落すのか元松王は彌陀次郎より貰ひ子にて蓮葉とは兄弟なり其兄弟をしらず互ひに文を取かはしてわりなき中となつたかならぬか親々の身では淺猿しくそれで忍んで告に來しと親々の物語を戶口と巨燵に立聞兩人扨は兄なり妹なりしらぬ事とて妹脊のかたらひあゝ淺猿し〳〵ようマア枕をかはさぬが互ひの身の仕合せと愛着戀慕のきづな切れあせおし拭ふ計りなり母と母とは涙を拂ひ歸りし跡に松王蓮葉顏見合すも耻かしく互ひに思ひ切たれば蓮葉は內へ歸り佛御前と名を呼びて淸盛の伽に行き松王も全快したれば敎經の傍小姓築島の人柱大勢の命にかはり彌陀次郎の敵も討佛は妓王妓女と共に嵯峨の庵に隱るゝまでを終とす此兄弟も僞りにて二人に輪廻を切らさんがため二人がかくれ居るとゑつて昔話をする作意奇なり妙なり彼蝶々も是に似たれど戀路ならねば情とゝかず親子の情に愁ひを聞さんには孫でなくては愁ひこたへず實に喜怒哀樂の四情に色情恩愛薄くてはならざるとゑるべし嗚呼穿てるかな自笑其磧の才是等を狂言の種と云ふべし

東鑑御狩卷の話

東鑑の淨瑠璃は豐竹座にて並木丈助作寬延元辰年七月十五日より始る竹本座竹田出雲作の假名手本忠臣藏は寬延元辰年八月十四日より始れり然れば同年にて一ヶ月東鑑の方始はやく何れをまねび何れを似せるといふ事なけれど御狩卷三の切鳴立澤朝比奈義秀住家の場と忠臣藏九つ目山科の場とは地名と役名こそかはれども一場の仕組狂言の趣向相同じとゑるべし先大星親子を一役として朝夷義秀なり曾我の母万戶と娘片貝を一役としてお石なり備前大藤內は加古川本藏妻の柳は戶奈瀨にて娘乙女の前は小浪なり大藤內の本名備前平四郎の流矢當り實父木曾義仲の敵は判官を抱留たる加古川本藏におなじ乙女は自害し小浪は死なぬのみの違ひにて心は皆おなじなり此頃の兩座(竹本豐竹)は前編にも演るごとく決して仕組の筋を隱し包て人に咄す事なければ互ひに始るまで

知らん筈なしされ共かやうに似たる事も數百番の淨瑠璃に又珍らしからずや小說稗史にも亦是に似たる事あり文化年間浪華芝居司馬叟が遺稿の長噺櫛と云へるに呉服屋十兵衞木曾街道にて郷戸の龜四郎と云ふ盜賊に出逢ひさま〴〵と難儀して玉の挿櫛を證據に女に預くる小說出たり同年東都より曲亭馬琴作にて大岡仁政錄の內より抄出して靑砥藤綱摸稜案二編目蚕屋善吉護摩の灰鵜太郎に出逢ひ難儀に及び路銀を招婦お六に預け證據に古き櫛を受取る是信州お六櫛の起原なりと書きたる小說出板す是も云合すとなく符合したるなり又歌舞妓にて二軒三軒同じ狂言を出す事あり是は隣の芝居の狂言を聞て態と跡を追ふて張合に出す事なり昔は是も行儀よく浪華にては濱芝居に狂言の世界極る時は角中の大歌舞妓座へ斷り若し歌舞妓に同じ世界の催しの時は差支あると云へば濱芝居より世界を取かへしものなり角中兩座勿論互ひに問合せそちは足利世界ならば此方は源平とか雙方得心のうへ差合ぬやうにし又同じ世界同じ狂言にて人氣をよせんと合點にて張合ひし事も儘有りけり擧て云はゞ天明二寅の春大願成就殿下茶屋聚中連歌茶屋譽文臺と同世界張合なり文化五辰の春角けいせい輝雙紙中けいせい品評林文化十四丑春角けいせい稚兒淵中兒淵花白波文政十亥春角けいせい遊山櫻中けいせい遊山櫻文政十二丑春角花雪歌淸水中新薄雪物語と是皆同じ世界にて少しづゝの增補はあれども同じ物を合點にて見立となり人氣をよせんがためなり此外合替に忠臣藏やひらかな盛衰記など古淨瑠璃狂言或は切狂言心中物など張合に出せし事度々あり此澤山なる狂言の中にて同じ狂言を出すも何とやら不自由のものなり或田舍の人忠臣藏五つ目定九郎與一兵衞の早替りを見て此大勢の役者のあるに殺す者も殺さるゝ者も獨りにて世話しきめをして早替りをせずともの事なりとつぶやきしは金言なり同じ狂言を出すもそれとおなじけれど是も適には珍らしき心地ぞせらる

素人藝畠水練の話

淨瑠璃文談の中に謠また端唄などを書入し物幾等もあり云はゞ義仲勳功記三の切地藏經、娘景淸三の切謠、壇浦兜軍記三の切琴露組、阿波鳴戸順禮歌大文字屋の題語、妹脊門松の御文章伊勢物語の妹脊川など

淨瑠璃を語る時我得手〳〵の物有て眞を諷ふ時淨瑠璃と其曲はだ〳〵に成りて甚聞憎きものなり是は淨瑠璃の謠淨瑠璃の端唄淨瑠璃の題語御文章とて別に眞の節を捨て氣を放れて稽古するものなりと故播磨の大掾子に咄されし事あり一藝に達する人は假初の物語りにも金玉の論を云はるゝ者なり歌舞妓にても同じ事なり少し茶を得たりとて舞臺にて手前を本式にすれば舞臺淋しく樂場より欠伸せらるべし似事をすれば能物としるべし前に云遊山櫻を兩座にてせし折角の芝居にて木村亦藏(關三十郎俳名は奇山)切腹の場にて法華の題語を遣ひ是もよく諷ふ者を尋ねし所町の軒付にてよく諷ふ者を抱へて樂屋にて諷はせし所妙音にて中々芝居の歌諷等の及ぶべき者にあらず日に何程の建錢と極め過分の給金を取らせ諷はせしが初日に其場となり諷はせるに音聲細く低くして舞臺前までも聲屆かず首のみ振つて啞の如し張らんとする程聲しぶりて翌日より詮方なく湖出市十郎に諷はすれば音は題語の骨髓ならね共張聞えて正面聾棧敷まで聲通れり是播磨の名言に叶ひ芝居は芝居の題語ならでは聲屆かずいか程節がよくとも聞えぬ時は其詮なしまして素人の旦那藝などは巨燵に臥して水練の稽古するにおなじければいと詮なき業なるべし附て云役者身振聲色の連中とてよく夜分軒付に來り又酒席へも招かれて身振聲色をする輩あり昔の役者は皆口癖有て今に遺るあり云はゞハレやくたいもないとは訥子(澤村宗十郎)本にマア〳〵とは英子(祖小川吉太郎)嗚呼つがもねいとは白猿(市川團十郎代々の詞)本にヤレ〳〵は雷子(祖嵐三五郎)おだてない〳〵は三笑(嵐三八)如此の口癖有り物のまねは癖をよく取て次に身振をよく似せ其上にて聲色を遣へば音聲は銘々にわかち有てさまで似たる聲にあらずともどこにか癖を取てよく似る物なり先づ團藏と云へば龜の如くして舌を頰の中へ入れて遣ひ片岡は少しうつむき首を振つて遣ひ鬼丸は顏を少し上めにし大友は向ふ齒を嚙出して遣ふなど其頃はよく似たるを見聞しが今時の役者に口癖なきはたしなみて云はぬ者か聲色にせる程の俳優もなきか昔の役者と見競て巧拙何とも辨じがたし

近來歌舞妓外題の論

前卷に演る大外題の事は一部の惣評にして猥りに付

べき事ならず既に古淨瑠璃にも不解有り享保十七子六月作者近松門左衞門竹本座にて伊達染手綱とて上中下物出る此外題付までは丹波與作と云ふ外題なり既に忠臣藏七つ目に由良之助丹波與作が歌にと云は外題をよんで江戸三界へ行んしての歌を諷ふなり是戀女房の元狂言にて上の卷重の井三吉子別れの段中の卷白子屋の段下の卷小万與作道行より錢かけ松の場までなり此狂言古今珍らしき當りなりければ二十年後同座にて是に跡先を繼足して吉田冠子三好松洛兩人の作にて序は東山端の寮より下河原重の井與作不義あらはるゝ場訴訟場より道成寺の張場沓かけ坂の下まで前狂言をふやし子別れの場は十段目となり十一段目別れの鐘の歌にあはせ江戸兵衞逸平立廻りの場を大切として戀女房染分手綱と外題を賦しけり是もおなじく當り淨瑠璃とは成りたれど戀女房と染分手綱と連續せず伊達の與作は馬士なるゆゑ伊達染手綱と付るは妙なり戀女房に染分とは解せず又妹脊山婦女庭訓と云ふも重復にて妹脊山にて陰陽首尾したるを女庭訓と斷りしも何とやら叮嚀過たりされば故名人の作者達にもかゝる外題あれば今時の外題に誤りは有うちの事なるべけれど前々の編にも演るごとく一日の新狂言を作する事絕てなければ古き外題を借て遣ふたる物にて新外題を付る時には上本と唱へて草稿をまづ作者誰彼と書て公儀へ願ひ差障りのなきや改めを乞ふて本下りての上興行する事定例なりしに近來作者たる者なく上本なくても納る事と見え作者なくて役者狂言方と申合せて埒もなき外題を付て看板に出す事とはなりけり嗚呼嘆かはしきかな皆藝道の衰へより起るか拾遺に云江戸三座の外題のごとく五性の相剋にて付るが故近來江戸外題に後に其儘（ママ）付る外題なくけしからぬ誣言文字の外題多く付假名なくては何とも讀兼る外題多し江戸役者浪華へ來ても江戸の癖付て外題は何と付てもよいものと心得しは情なし東都にて近來の外題を一々難論せしを彼地の友よりおくられたれば爰に略して浪華の一二を出す天保十一子年八月角の芝居にて靑砥藤綱と筑紫權六と書入たる狂言の外題に大湊戀の噸當とせしは何の世界か分らす噸當と書て白波と讀せる事何の心やらん天保十三寅年春角にてけいせい櫻城砦（さくらのちんだて）とあるは古き外題にて大內尼子の世界なるを遊山櫻の

外題に心なく遣ひしはまだしも此角外題に朝山の木々に色增す櫻花谷間〳〵の鴈雪は芝に降つむ銀世界と書たるは狂言の筋やら何のたはことやら分らず畢竟朝鮮征伐後の狂言なれば唐人の寢言とも云はんか嘉永元申年中の春けいせい曾我鎌倉鑓(だいじん)是は又論外なる外題の付ざまかな金扁に集ると書て大盡との付假名は論なし曾我と云へば鎌倉に及ばずけいせいと有るに大盡と書ずともしれたる事是よりは唯曾我のよせ物とすれば心よく聞えて難あるまじ二の替りにてけいせいと上に置きたくばけいせい曾我集にて事足るべし譯もなき文字を書並べ角外題割外題に何を書しか皆書ずともものことばかりにて是を外題とは云ふべからず當時こそ曾我の世界を歡ばねど以前淨瑠璃にて種々の作有て曾我の外題といへば根元曾我物語、元服曾我夜討曾我、小袖曾我、世繼曾我、本領曾我、團扇曾我は數日興行せしと有て、後百日曾我と呼たり本海道虎石、曾我五人兄弟、大磯虎稚物語、曾我扇八景、曾我虎石磨、曾我會稽山、工藤左衞門富士日記、江戸櫻愛敬曾我、富士日記菖蒲刀、傾城富士嶽、曾我三部經、富貴曾我、御前曾我姿富士、記錄曾我、王笄髷(かうがいわげ)曾我錦几帳、赤澤山伊藤傳記、曾我昔見臺、東鑑御狩卷、けいせい扇富士、筆始いろは曾我、加增曾我、河津相撲意恨(本ノマヽ)大曾我富士牧狩、蛭小島武勇問答、右大將鎌倉日記など擧て數ふべからず又大歌舞妓にも會稽富士僕(ほこれ)、建久四年五月二十八日、三國一裾野紋日、荒事江戸畫曾我、粧倭畫曾我、八百屋萬誓曾我、大都會見取曾我などあり江戸は三座とも例年春毎に曾我をすれば色々の外題を賦す江戸の事は云はず京攝の歌舞妓淨瑠璃は表號(げだい)にて一日の趣向をしらせるが外題也故に無學文盲の族が賦すべき者にあらず能く古外題を覺え居て附すべき者なりけいせいと置けば浪華の二の替り外題となると心得るは俳諧發句に初心の輩詞の終りにけりかなと付くれば句になるものと心得し輩と同日の論なり外題は文字數多き程狂言の大意をよく聞かせる者なり二の替りにけいせいと置けば跡に三字か多くて五字にて其世界をしらす者なれば餘程手際なる物なり陸玉川と三字にて仙臺をしらせ黃金鱗にて尾州を聞かせるを大外題とは云ふなり此九月中の外題花街摸樣劇の稻妻是又重復にて連續せず是を外題にせんとおもはゞ麗(はで)摸樣劇場稻妻

とすれば難なかるべし以前に伊達競阿國戲場と賦したるあり是は仙臺萩と累と混じたれば伊達は容を云て戲場は題なり花街摸樣と置く時は此中に廓あり扨下に歌舞妓と置ば廓と芝居と居所二つとなり劇の一字にて歌舞妓とは讀めず花街摸樣劇の稻妻とより詠べからず是を外題と思ふ心根こそ悲しけれ京顏見世に鬼一法眼三の口切と御所櫻三の切と一つに寄せ英傑三略卷との外題は何事ぞや別々に外題を書くべきこそ有體にてよけれ義經牛若の頃の狂言と堀川夜討の狂言と數年隔たりし事を誰有て此外題を付らるべき辨慶の事は外題に見えず其上かゝる古狂言の見取に狂言作者としるせし者多く何を作して名を出すや片腹いたし其上にも田舍より出たるか大作司と云ふあり何を以てかゝる名を出すや言語同斷の事也此頃來春の看板出たりと聞て外題を聞くに角は姬競二葉書雙紙とてもと濱芝居にて小栗橫山を殘らず女形にしたる狂言の外題ゆゑ姬競とあるなり歌舞妓にて寬政六寅の秋角の芝居辰岡作洛陽菩薩池と云ふ狂言あり小栗二代目嵐吉橫山淺尾爲十郎太郎のあほう變じて謀反人になる仕組なりしを是へ書本小栗外傳を加へて故奈河一泉書きたれども外題は古外題雙葉書雙紙と逃たるは公儀上本ならざる濱芝居にてせしゆゑなり昔はかく作法を守りたる物なるを若太夫に岩見重太郎と云ふ外題出しとの事是又法外なる事にて新外題甚いぶかしされ共右に云ふ如く歌舞妓にすら法に背くゆゑ濱芝居はいよ〳〵以て事しる者はなきと笑ひすてんより仕方なし扨も中の芝居に遊山櫻へ乳貰ひと愛護稚の關取を集し書面にてけいせい清船諷とやら外題出しときくます〳〵惘れて予も暫し絕倒したり此加藤毒酒の狂言のもとは淨瑠璃にて萠生飛驒守朝清と作り名して世界を小田の幼君北畠の名君とし灘右衞門の本名を五斗兵衞四の切は佐々木高綱の場何か時代は取しめたる事もなく出して見たる者なりそれさへ外題を八陣守護城と賦しけり八陣は加藤に限らぬ事勿論なり唯肥後の本城を守護城と呼て云ば地口にて聞せたる者なり遊山櫻も阿蘇が嶽を遊山ともぢりて賦したるなり故人作者は遠慮有て深切に外題を付る事感ずべし以前東都にて海老藏八陣の加藤閣の場にさまで狂言なきゆゑ狹間合戰の官兵衞になる趣向を予に誂へたり予直に筆を採て草稿なれり毒

酒の場にて鞠川玄蕃は雛衣に惚て抱付折腹帯をしめ居るゆゑ不義者也と云ふを春雄科をゆるして主計之助と夫婦とし仲立して毒酒を飲すと增補せり（鞠川は八平次雛衣は重の井主計は與作と戀女房に似たり）扨船の内は八陣の通り雛衣懷胎して居るか居ぬかと云ふ丈の違ひなり閣の場にては雛衣安産して母に子を育てさせ百日の物忌に父の傍に助抱の役千島冠者灘右衞門も入込すみ閣に道具かはつてより主計之助は犬清の役となり父の怒りに切腹す我強き朝清刀を振上る母と嫁是を支へる灘右衞門出て抱子をさしつける朝清始て孫の顔を見て嗚呼いゝ子僧めだなアと官兵衞となり灘右衞門は久吉役となるに仕組めり此時の役割は加藤に海老藏五斗に團十郎八代目灘右衞門に多見藏冠者に薪水雛衣に榮三加藤妻に常世外題は守護瓢箪場八陣と賦し角外題に題目の旗印蛇目の楯板とせしを白猿の戲れに大〳〵蛇〳〵と誣つけではいかにと云たるが其時二ヶ町（堺町葺や町）燒失して惜むべし畫餅とは成りけり然るに清の船諷は先年文政亥春遊山櫻にて燒たるゆゑ今度は清めてする心か清正の清に歌右衞門の歌の心にて賦せしかしらねど船の場にて具足櫃に忍びの者居るゆゑ討取て清めの船歌うたへ〳〵とて血汐の穢れを清めるためなりさなくば御座船は元より清めあるべし此狂言を見たる者こそ加藤の辭なりと思へども始ての者には解まじ詞により て外題を付れば心底憎鞠川玄蕃、詠麗湖絕景などゝも外題になるべしと腹を抱へん此度アメリカの船の噂高く又浪華に清正公大神義と云ふ紛しき木像も有しにや所詮それらの汚名を清めの船歌にやあらんと道理を付て笑ひ捨たり嗚呼痴なるかな

西澤文庫傳奇作書附錄中の卷終

西澤文庫 傳奇作書附錄下の卷

目次

一雨夜三盃機嫌の寫
一同跋牧童の辭の狂文
一天河屋儀兵衞の實說
一續赦免景清の草稿
一伊勢と日向の物語の草稿
一南北軍問答院本の話
一泣男杉本佐兵衞の說
一古代狂言人名の話
一鹽賣長次郎の話
一歌舞妓に名高き人名の話
一響灘入船噺の笑話
一彫物師左甚五郎の話
一目貫後藤浮世又平の話
一鍛冶正宗國俊の話
一高野女人堂心中の話
一島原の青葉薄情の話

西澤文庫傳奇作書附錄下の卷

西澤綺語堂李叟著

雨夜三盃機嫌の寫

元祿六酉年春出板の書雨夜の三盃機嫌三冊は作者垂蘿軒無轍其頃男色盛に行はれ此野郎界に遊び嵯峨山の麓へ追やられ弱隱居の身となる其友木笛庵痩牛庵を訪て轍牛の書たる三都の女形に贊をなし肖像を畫きたる次に立役の贊をせし書有り是や水道一盃難波一盃白河一盃此三水を飲むが如しと三盃機嫌と題し梓にのぼすと痩牛が序あり今まで百五十八年にもなる古き役者共の名を聞さへもをかしければ其目錄の名のみを爰に拾ふ者なり

水木龍之助　櫻山林之助　谷島主水
宮崎式部　岩井平次郎　玉川半太夫
澤村小傳次　山下才三郎　玉川三彌
音羽勝之丞　吉澤菖蒲　今村半之助
竹中正太夫　村上竹之丞　竹島林之丞
近松勘之助　袖崎政之助　中村數馬
袖崎色葉　市川團之丞　玉村艷之助
松本類之助　勝山與之丞　桂山式部
松島半彌　筒井專太郎　上村井筒
岸田小才次　露浪千壽　吉川一彌
玉村淺之丞　櫻若小山二　外山千之助
三津島藻鹽　袖崎歌流　坂田藤九郎
山村吉三郎　鈴木平七　藤田大次郎
小野川宇源太　松本兵藏　山中勘太郎
市川香織　荻野左馬之丞

右四十四人各畫あり贊あり是より立役は贊ばかりにて肖像なし

坂田藤十郎　山下半右衛門　市川團十郎
竹島幸左衛門　大和屋甚兵衛　宮島傳吉
鈴木平左衛門　荒木與次兵衛　西國兵五郎
村上平十郎　中村七三郎　斧山宇治右衛門
柴崎林左衛門　中村傳九郎　南北左部
小勘太郎吉　杉山勘左衛門　今嵐三右衛門
岩井半四郎　市村四郎次　竹中藤三郎

藤本平十郎　西村彌平次　三國彦作
猿若三左衛門　仙臺彌五七　小佐川十右衛門
村山平右衛門　永島磯右衛門　藤川武左衛門
古今新左衛門　佐渡島傳八　音羽次郎三郎
三原十太夫　山下又四郎　川島彦左衛門
右三十六人は立役の名なり彼金五郎の端唄に坂田藤十郎杉山勘左玉川半太夫の名はあれど大約廢して今纔に遺れり

坂田藤十郎の贊

我朝藤十唐莊周、突出天方口自由、加白傾城買倒體、揃成格外彌爲遊

牧童（此書の跋にありをかしければ爰に出す）

無轍既鼻垂遊西山行吟廣澤顏色憔悴形容枯槁牧童見而問之曰此樣非色男大臣何故至於斯無轍曰父母皆堅我獨和一門皆下戸我獨上戸是以見潦倒牧童曰推人不凝滯於物能與世推移親達皆堅何不爲其作顏屈其腰一門皆醒何不語其樂而啜其分何故高灑深盡自追出爲無轍曰我知之新押者必乘三枚肩新揃者必芥數兩金安能以身之寬濶受一物之儉約者乎寧入此澤食於鯉鮒安能以破落理請艷世智異見乎牧童莞爾而笑扣牛而去乃歌曰四條之水呑兮可以遣吾銀四條橋渡兮可以濯吾足遂去不復與言

天河屋儀兵衛の實說

忠臣藏より後に增補狂言の內天河屋入牢の仕組種々あり此實說赤穗精義內侍所（四十卷寫本）にも有て大坂三鄕惣年寄天野屋利兵衛とて町人ながら古き家柄なり然るに大石に賴まれ彼夜討の道具を調へ江戸表へ出しけれども其鑓梯子職人に事かき內本町上之町加賀守藤原の神力丸市左衛門と云ふ者へ藏屋敷よりの賴まれ物とて繪圖を渡して誂しを鍛冶市左衛門より町奉行太田和泉守殿へ屆けしゆゑ利兵衛には不審かゝり細工は暫らく延引に及ぶべしと先利兵衛を召れ御尋ねに天野屋いかにとも答ふる事あたはず唯家內の用心にらと我工夫にて誂へ候なりと陳じけるゆゑ彌々疑ひかゝり元祿十五午年二月の始頃入牢となり家內御預けとなりしうへ種々の拷問にかゝりし事は義臣傳に委し元大坂三鄕惣年寄の身分なれば諸所の屋敷へ出入用達もする家柄なれば是程の道具を誂へしとて左程強き御吟味もあるまじき事ながら此年

より七ヶ年前表町四丁目分銅屋借家に住し軍學兵術の師範を表とし内心には及びなき謀逆を企てし畑野藤右衞門といふ浪人鈴ヶ森にて磔となりたる者あり其徒なりとの御疑ひより後々は妻子まで入牢し種々珍らしき責苦にもかゝりけれど彼夜討の沙汰大坂まで聞えし上ならでは白狀せざりしとかや實に大石のよく人を見立たる事感ずべし其畑野藤右衞門の陰謀露顯せしは俵屋治右衞門糠屋傳兵衞の公事より起ると云ふ一話を爰に出す大坂阿波座納屋町の町人俵屋治右衞門と云ふ糠問屋身上千貫目計の商人なり子二人あり惣領治郎助次は娘なり治右衞門召仕の下女に手を付け懷胎しけるゆゑ家内の手前を恥て攝州平の村桐木町に糠屋傳兵衞と云ふ者近郷の糠を買集て俵屋治右衞門方へ數年商ひ心易く出入しけるを治右衞門内分にて頼み產代を付け下女を傳兵衞方へ預けけるに臨月に男子を產み母は產後に相果ける依て治右衞門出生の水子に養育代を付け傳兵衞に貰ひくれよと頼みしゆゑ傳兵衞に子もなく幸ひ養子として治郎吉と名を付け育てける其後俵屋方には惣領治郎助相果治右衞門も半年餘り過て病死しける故家督相續の者なく後家の指圖にて娘の名前とし實體なる手代善右衞門代判して諸方を引受商賣せしに翌年娘も相果後家も續いて死しければ親類別家相談のうへ手代善右衞門數年の舊功あれば名を治右衞門と改め家督相續しける時に平野の糠屋傳兵衞思ひけるは俵屋の妻子殘らず相果他人の物となれり治右衞門血筋といふは某が貰ひおきし治郎吉計なり是を申立て俵屋へ對談に及びけれ共治右衞門の存生中に聞かぬ事とて取合はず依て傳兵衞は治郎吉に俵屋の跡式を繼せんと願書を認め御奉行松平玄蕃頭殿へ願ひし所血脈なれば御裁判となり度々御吟味のうへ血脈ありながら差置手代を家督に立し事親類町内無念の樣に思召れ治右衞門首尾あしく負公事と見えしゆゑ兼て聞及びし長町畑野藤左衞門（前には藤右衞門とあり）方へ行きて訴訟の事を頼みければ藤左衞門聞て此公事至つて六ヶ敷義なり然れども金銀に厭ひなくば勝利掌にあらんと云ふ治右衞門此公事に負る時は主家押領の沙汰に落ち人に面を合せがたし金銀は何程にてもお望に任すべしといふに畑野訴訟の案紙を認め此禮三百貫目なりと堅く約束しけるに三度對決に及び果して治右衞門勝利を

得約束通り畑野は三百貫目取けるとなり糖屋傳兵衞は公事に負け平野の住居も成難く無念に思ひ親子袖乞同前になり江戸へ下り町奉行川口攝津頭殿へ願ひに出ければ大坂にて御裁許相濟たる事ゆゑ再訴に及ばん事不屆なりと御呵りを受ければ親子御仕置になりても毛頭御恨とは存せずと達て出訴に及びければ御評議の上俵屋治右衞門江戸表より御召となり對決數度の上兩方へ身上書をさし出す樣仰付らる糠屋よりは俵屋の身上千貫目計とあり又治右衞門方よりは三百貫目と書上る七百貫目の相違なれば早速大坂町奉行永見甲斐守殿へ申來り俵屋身上御吟味の所古帳面には千貫目餘と見え新帳の表には三百貫目餘とあり銀代物都合四百貫目にも足らざる事申送る是に依て治右衞門召出され帳面と有金相違の御吟味となり拷問にかゝり治右衞門包みがたく大坂長町畑野藤左衞門を賴み訴狀を認め貰ひ禮銀として三百貫目遣はせし由白狀に及びければ早速大坂へ申來り畑野藤左衞門召捕られ網乘物にて江戸へ下り嚴しく御吟味にて藤左衞門元は松山の浪人にて軍學兵術の師範をし公事訴狀を書き賃銀を取て渡世とし彼三百貫目にて武具馬具を拵へ兼て軍學に高慢し諸家の浪人を語らひ天下を一呑せん抔との工みにて由井丸橋等に似たる陰謀の由白狀に及ぶ依て鈴が森にて磔となり俵屋治右衞門は御公儀を僞り橫道を搆へしと有て身上殘らず闕所となり三ヶ津拂ひ糠屋傳兵衞は理分を得といへ共金銀のつる切て空しく流浪しけるされば畑野ゆゑに武具馬具の細工人もあまた掛り合にて難儀しける當座なれば此以後町家より箇樣の品誂へある時は內々にてしらすべしとの兼てお觸ありしゆゑ加賀守市左衞門後難を恐れ訴へしが利兵衞に御疑ひ掛りさま〴〵の拷問にあひしは時の不幸と謂つべし利兵衞は後京都に退隱して歿す墓は大將軍地藏院（俗に椿寺）中にあり法正院空譽士齋善士と塔婆に記せり是等を眞の任俠とも賞すべし近松半二作太平記忠臣講釋の九つ目牢屋の段役人を石堂右馬之丞藥師寺治郎左衞門とし鍛冶屋を堺宿屋町二（一カ）文字金房と呼び儀兵衞を拷問の所にて先達て云ふごとく新田義貞が家臣畑六郎左衞門が餘類の諸武士をかたらひ歩行との風聞當地にも其內緣ある由と云ひ師直鹽冶の時代なれば畑野を畑六郎左衞門にしたるなど實に作

者の用心とは是等の事を云ふなり忠臣講釋の牢屋にて敵討を儀平夢見て寺岡の注進を聞き白狀するに仕組また泰平いろは行列大切牢屋の場は近藤源四郎假にさんぴんの太助といへる小盜人となり入込て婆婆の噺しをして聞かせよかしと牢屋の科人共取廻して聞たがるより鎌倉にて夜討を見たとの話をするより儀兵衞白狀に及ぶ誠はまだ本望は達せねども一日も早く儀兵衞を出牢させんと大星の指圖にて入込しと作せり故人名作者はかゝる事にもよく穿鑿足り感ずべし

伊勢と日向の物語の草稿

去ぬる天保十三寅年三月木挽町河原崎座にて市川海老藏家の狂言十八番の内景清牢破の段一場出せしが其時計らず御咎を受け東都を拂はれ翌卯年冬まで諸所に漂流の身なりしを幸ひと浪華角の芝居へ出勤の願ひ叶ひ浪華の住人となり舞臺出勤八ヶ年去嘉永二酉の冬御赦免を蒙り再び江戸表へ歸り彼地にて出勤せしは全く悴三升(八代目團十郎)の孝心と云古き優家の長と呼るゝ家なればなり此御赦免の噂以前より江戸にて粗聞しに依り予弘化四年未の冬東都冬籠の徒然に古き淨瑠璃を題として海老藏赦免の時勤めよかしと赦免景清と云ふ口切二段を書き草稿のまゝ三升に吳れたり牢破の景清役にて誦せられたれば其裏を象り赦免景清とは賦したり牢破の景清の原は謠曲の春親を題とせし者にて青竹の牢屋體の內に鬢桶(かつらおけ)に腰かけ地髮を四方より紙撚にて釣手械足械にかへたるものなり是は又思ひもよらぬ仕組にて古風ながら珍らしからんと草稿のまゝ爰に出す所謂筋書にて役者は其時の座頭によれば記さず役名は畠山庄司治郎秩父重忠 梅澤屋五郎兵衞(宿の主)飛脚 庄六榛澤六郎本田治郎備前大藤內伊勢小京太(伊勢三郎の悴)同妻豐久野上總小市郎(景清の悴)同妻宮崎惡七兵衞景清此內景清親子は海老藏團十郎小京太は九藏の積りなり外の役名は其時の見合としるべし道具一面の旅籠屋の表のかゝり大磯宿梅澤屋綠張觀音開の門口出女旅人を留居る上ルリ「所とて往來の人を松が枝に並ぶや梅の花笠を笑ひながらも引とむる客大磯の脇本陣梅澤屋が門口に招婦女が泊らんせ〳〵鎌倉江の島御見物なら泊らしやんせ暮から道はとまります爰で泊て足休めお立の勝手のよい樣に敎へまするが花の

宿大赦參りの旅の衆とまらんせとぞ聲かくる國々の道者共幾組となく立よれば亭主五郎兵衞立出て（てい主）江の島かけて鎌倉御見物の御方ならお泊りが御勝手ヤア御一所にお泊りなされませ（旅人）ア、是々待てもらはう是から鎌倉へは二里餘りと聞たに爰に泊るが勝手とはどうした物ぢやな（ていしゆ）オ、遠方のお方は御存知ないが御尤此度御先祖のお弔らひに付非常の大赦行はれ牢者科人を殘らずお助なさるゝ賴朝樣の御仁政大赦の時は罪有も罪なきも鶴が岡のお庭を踏めば武運長久と申傳へ近國の人々夥しい鎌倉參り夜は足弱に怪我有ては大赦行はるゝ甲斐なしと申て鎌倉への這入口に御門が立て暮過よりお打なさるゝそれゆゑ此大磯の宿中は常に增して泊人の繁昌今宵は爰に一宿して明朝お立がお勝手でござりませう（旅人）ハテ尊いおとむらひ大赦の噂聞てきましたそんならこちらは爰に泊らう（旅人）おいらの組も一所に泊らう御亭主早う八つ立に賴みます（ていしゆ）なる程宜しうござりますサアかうお出でなさりませ「打連れ奥へ伴ひ行く跡より來る夫婦づれ伊勢の小京太武盛は生國伊勢に引籠り親の敵の生死をば尋ね合して月重ね女房豐久野諸共に表間近くさしかゝり（伊勢）小田原にて聞たる梅澤屋とは此家よな賴まうぞよ〳〵（ていしゆ）ハイ〳〵御用でござりますい（せ）和殿は此家の御亭主よな某は勢州より鎌倉へ參る者承れば鎌倉に大赦行はるゝに付夜中にかしこへ入がたきよし奇麗なる奥の間で一宿賴たし（ていしゆ）ハイ〳〵奥の間と申ては最前丁度お前方と御同年な御夫婦連へ貸ましてござりますが此方にお斷申口の間とおかはりなされて下さる樣おたのみ申して見ませうマア〳〵是へお通りなされませそれ女子どもすそぎをもて來いよ「主は奥へ走り行暫く有て奥の間に休息の夫婦連日向の國の住人下總小市郎景忠父の生死をはかり兼女房宮崎召連て爰に一宿したりしが亭主が賴聞入て（上總）夫婦ともおかはり申サヽ是へ「襖おし明け立出ればこなたの夫婦氣の毒顏（いせ）先達てお休息のお坐敷見れば貴公にもお刀携へ給ふお方へ近頃是は無體のお願ひ（豐久野）それ〳〵唯今夫が申さるゝ通り女子連は互ひの事やはり其坐にござりませ（上總）是は御挨拶手前は夜の内に立まするゆゑ端近がかへつて勝手（宮崎）私共は願のある身人樣のお氣にかなふは願成就の基ゐ（上總）さうとも〳〵御遠慮なしにいざ

〳〵是へいと御意あるに御辭儀は不禮然らば御免下されう「然らばせい御免と入りかはる女同士は和らかに辭儀も會釋も笑ひ合ひ間のしきりも宵の間は襖も立ず是や此一河の緣の二夫婦積る咄にいつとなくむつまじくこそ見えにけれ亭主は奥より立出てていしゆ申伊勢のお侍さまお風呂おめしなされませいせいマア此方よりは御兩所から上總イヤ此方はお先へ入りましたお入なされませいせい然らば何女共草臥休めにと〳〵入やれの豐く左樣ならお先へあなたがた御免なさりませ「解てほどくやかゝへ帶夫の詞に隨ひて浴衣片手に入りにけり日向の侍つく〳〵と打詠め上總ノウお侍御夫婦中のむつまじさ傍から見てもよい物なァいせハレ當付たそりやお互ひ御自分は日向の國とござるが御內證のお詞には何かお願ひのある由是から何國へお越しでござるな上總されば女が半分お咄し申たれば願ひの筋お咄し申さう元來手前の父は少し由緒ある侍某が五六歲の時科有て牢びたしとなられ母も相果成長の後父が生死の聞まほしく存じながら鎌倉武將の牢獄なれば心に任せず其內此女が緣にひかれ國許にのみをりし所お聞下され此度大赦行はれ多くの科人御免あるよし拙者が父も存命ならばお助にあはんと存じ萬事を打捨筑紫の果より鎌倉へと心ざしてござります「語るに付て小京太は我も牢舍の其中に親の敵のあるものをとあやしみながらさあらぬ體いせハレそれはおめでたやシテ御親父の入牢は何年になりまするな上總サア拙者が六歲の時なれば今年が丁度二十ケ年に罷りなります「聞て小京太胸ぎつくり牢舍と云ひ年數と云ひ扨はきやつが父こそ我敵惡七兵衞景清と悟れども色にも出ずいせハレ〳〵中々の御事でござるよなう「詞すなほに云ひながら忽心隔てしは世に敷越の挨拶は是より嫌ふ始かや折から妻は風呂上りの豐くサアこちの人いざお入りなされませ「いふに夫も座を立て胸に折込敵の枝葉目をのこしてぞあゆみ入る敵の子細しらざれば小市郎は氣も付ず宮崎もけんよなく本ママ小京太妻に打向ひ上總最前御亭主の御挨拶に勢州の御方とやら承るはる〳〵の御夫婦連いかなる事でござるな「しとやかに打とへばの豐くされば連合のをさない時父御は不意の死をなされ其事に付仇ある者の候ゆゑ其者の生死を尋ね恨申に下りますのでござります「それとは云はず淺はかに語

れば共に宮崎が宮それは深い思召お前も御夫婦こちとも女夫親々舅の事ゆゑとは思ひ合たる御一宿でござりますなァ（上總ア）、是々あなたも嘸お草臥此方も明日はとく立つ積り早く休まうゆるりとお休みなされませい「もうお休みと會釋して合の襖を立切りし伊勢や日向の旅宿り旅は物うき身の勞れ枕に夢をや結ぶうち伊勢の小京太武盛は風呂よりひそかに立戻り見れば妻ははや臥したり襖のひまよりさしのぞけば日向の國の夫婦共是も疲れに寢入りし樣子打うなづいて勝手口（ていゆ）御亭主（しゅ）ハイ〳〵御用でござりますかいちと聞たい事がある是へ〳〵「亭主をそつと呼まねきかたへによりし足音小聲小市郎はまだ寢入らねばそろりと起て襖に耳聞共しらず亭主五郎兵衞（亭主）ハイ〳〵何事でござりますないア、密に〳〵尋ぬる事餘の儀にあらず此度の大赦行はるゝに付牢びたしとて久しく年へし者ありや噂はなきか何と〳〵（亭主）成程外の者は存じませぬが先年壇の浦での戰ひにも名の高い惡七兵衞景清と云ふ者二十年以前より今日までも土の牢に入ありしが今度の大赦に助るとて是のみ噂いたしまするい何惡七兵衞景清が存命とや「ハ、ア有難しと喜ぶ體小市郎は猶爺親の無事を悅び手を合せあなたの空を伏拜み是天道のお蔭ぞと兩方無事をいさめども命救ふと殺すとは裏表なる襖ごし小市は猶も耳よすれば小京太は近〳〵よりいシテ鎌倉への堅めの門はいよ〳〵明六つ前ならでは明ぬぢやまで（亭主）いかにも左樣おあつらひの七つ立がよい時分もうお休みなされませ「いひ捨奥へ走しり入る小京太跡に立直り心そゞろの足ぶみに女房が枕につまずけばアイタ〳〵オゝいたやのと目をさまし（豐の）是は扨何うろ〳〵夜の內にたつ者が今までなせにお寢ならぬサア〳〵ちやつと休ましやんせいなア「引よせられて小京太もなよ竹なびく風情にて障子引立臥にけりこなたに獨り小市郎敵討ともしらばこそ我父上を尋ねしは何者やらん不思議やと小首を傾け手を組で思ひわづらふ折からに走り來るは飛脚の正六門口からすたき聲（正六）是五郎兵衞殿お宿にか五郎兵衞殿〳〵「聞より亭主出迎ひ（亭主）オゝ、是は正六夜中にりゝしいなり何處へ何の用でいかしやる（正六）さればいのお上からの急御用で今から直に伊勢の國までいかねばならぬ內を出しなに火打を忘れたゆゑかりによりました

「聞もけはしき詞のする端近なれば小市郎立寄聞けばてい主の聲ていしゅオ、それは大儀な事幸ひ此に旅火打是を持てゆかつしやれちやがそりやマア何たる御用ぢやなア正六サア世には珍らしい事がある物今度の大赦は皆科人殘らずしらべて助かつたにソレ二十年前から牢舍になりて居る惡七兵衞景清と云ふつはもの伊勢の國の侍小京太といふ者のためには親の敵勝負をするか了簡するか小京太に逢ふまではたとへいかなる事あつても牢より外へは出すまいと是獨りで埒が明かぬそれゆゑ伊勢まで小京太といふ男を呼びに行く早飛脚隨分無事でさらばぢやぞや亭主オ、それは御苦勞早く戻りや正六皆にもよう云ふて下されや「おさらばとかけゆく跡の門口をしめて亭主も入にけり小市はハツと心付飛脚がいひし小京太とは必定隣の相客ならん打はなさんとは思ひしが上總イヤ〳〵もしも人違ひせば父を助くる妨ならんハテいかゞした物であらうな「心を碎き氣を削りとツおいつに思ひしが隣の客に足音を悟られじとや添臥の寢ての思案とまどろめばすき間もれくる風につれ宿屋行燈の灯もしめり跡はくらやみあやもなく旅の疲れや出にけん二間の四人諸共に今を盛りの寢入花しばらく時こそ移りけれ夜はふけてもう丑の時八つ立の道者共大戸ひらいて打むれ出で旅人ア、まだ夜は深いさうなぞや旅人然し是程がゆるりとしてよからう旅人ソレ〳〵早い位にいて方々と見物しませう旅人サア〳〵皆靜に行ませうござれ〳〵「皆々連れていそぎ行く跡の大戸はやりばなし明には遠き夜嵐にひは〳〵さつと窃に合し大戸はどふと打當るひゞきにびつくり二間の女房共に驚き起上りそれともわかぬくらがりに何事かはと胸騷ぎよく寢入りたる夫を起し宮崎オ、あんどの灯がしめつたか豐くの今の音はありや何ぞ宮崎是小市郎殿豐くの是小京太殿兩人起さんせ〳〵「はや起きたまへとゆり起し急に起せば雙方が一度にむつくりむく起うつとりしたる有樣に宮崎ゆだんのならぬ旅の空豐くのちやつと目をさましやんせいなア「女心の諸共に枕元なる二腰を夫にさしこみあなたもおしこみ兩人マア灯をともしてきませうわいなア「いひ合せたるごとくにて二人は勝手へさぐりゆく猶くらやみに小京太小市郎性根はいかに立上り途に迷ひしか寐ほれしかそこともしらず入かはり宙を探り闇を蹴て正

體もなき折からに女房〳〵は勝手よりともし火てらし手燭をば風にけさじとかゝげ出るあかりを見るより小京太が何思ひけん駈出すをすかさずとむる小市郎妻と妻とがさし出す手燭叩落して跡白浪夢か現か魂の飛が如くにと三重にて幕

續赦免景清の草稿

一面鶴ヶ岡段臺の道具笹龍膽の紋付の幕東西に假屋口出這入床几を直し半澤六郎本田次郎上下にて赦免の帳を持打裂股立の侍大勢扣へ時の太皷にて幕明「誹謗の罪も誅せざれば良臣來り集る習ひ御先祖の御弔ひ仁德潤ふ大赦の庭右大將賴朝の仰を受け畠山の庄司次郎秩父重忠鶴が岡の段かつらに場所を構へ多くの牢者科人を助けゆるせる慈悲萬行民を惠の印かや檢非使の役目半澤成清本田近經赦免の姓名見あらため半澤のう近經殿此度右幕下賴朝公御先祖の御弔とて此鶴が岡の社段に於て主君重忠に仰付けられ科人大赦行はれ據なき重罪人は殘し置き皆それ〴〵おゆるしあるは有難い儀でござらぬか本田半澤殿の仰の如く大赦御免の科人共殘らず助かり出たるが今一兩人殘の內廿年前より土のへ牢こめ置し惡七兵衞景清かれは伊勢の三郎義盛が悴小京太が爲に親の敵と名乘此者に出合ずば牢より出じと申に付伊勢飛脚を立つべき旨主人の仰貴殿計らひ申されしか半澤夜前直樣立たせたれ共伊勢と申せば遠方なればどうで當月中には事濟まい本田景清一人にて跡々の一兩人も事濟まじ兩人ハテ氣の毒千萬な儀でござる「眉をひそむる折からに重門をおしひらき下司罷出侍牢に殘りし惡七兵衞景清が悴日向の國の住人上總の小市郎と申者重忠公へ直訴申度旨願ひ候が如何計らひ申さんや「いふに兩人聞屆け御前へかくと申上る檢非使の別當秩父の重忠兼て設けの御座の間に裝束正しく立出たまひ重忠惡七兵衞景清が悴願ひとあれば父を迎ひに來りつらんかの伊勢の小京太とやらんは其身をねらふ敵と有て牢より出じと老氣をはる幸ひかな日向へ下りし景清が悴とあらば愛にひかれて助かる心もおこるべし其者是へ通してよからう「かくと傳へて出來る日向の國の住人上總小市郎景忠と申上たる若男大磯宿よりむく起に出し心は白洲の庭いざつくらふて畏りせ恐れながら某は廿年前牢舍せし惡七兵衞景清が悴同名小市郎と申者此度大赦行はれ某が父も御助命

あるよし悦び迎ひに參上せり父をお助けあほぎ願ひ奉る「詞工みにいひ上る重忠とくと聞し召し重忠汝悴といふによも僞はあるまじさりながら父景清が思ふ子細もあるなれば一應心腹を尋問ひ其後對面とげさすべし先々かしこに扣へてよからういぜ何分よろしく願ひ上奉る「かたへに扣へる折からに又も取次走り出侍伊勢の國の住人小京太武盛と申者御訴訟有て參上仕つてござりまする重忠ホ、割符を合すが如き小京太より訴訟とな是へ通せ侍長つてござりまする「案内につれて出來る是も齡は若男おめる色なくあゆみより御前遙かに畏り上總某は伊勢の小京太武盛と申者此度牢に殘りたる景清は父にて候三郎義盛が敵に紛れなし御上の罪科御免あらば由井が濱へ連參り尋常の勝負仕りたしあはれ此小京太に景清をたまはらばいか計の御厚恩有難く候はん「申上れば重忠も雙方一度の願ひゆゑしばらく工夫したまふ內以前の侍つか〳〵とあゆみ出で御前に向ひいせ多くの科人お助あり父景清計りをばおゆるしなきは大赦の妨はや〳〵悴小市郎に下し置れませうならば廣大の御慈悲有難く候はんと「願へばあなたの侍が上總慈悲の道には隔なし親の敵を討果さば則慈悲萬行景清は某へお渡しなされて下さりませう「すゝみ出ればこなたにもいぜイヤ悴の某へ上總イ、ヤ敵の拙者めへ兩人下し置れば有難う存じまする「あらそひ願ふに重忠もあぐみ果させ給ひけり折こそあれ小京太が妻の豐くのかけ來り小市郎と名乘たる男の傍に走りより豐くのノウ小京太殿推量に違はず此處へ來たまふは親の敵の景清を申受るお願私が爲にも舅の敵夫婦一所に討たんため伊勢からはる〳〵付ゑたがひし自を見はなしたまふは胴欲でござんすわいなア「詞の違ひに重忠公各不思議と見る所に夫は妻を突飛しいせヤアこな女は何のたはこと某は小京太でないぞ以前日向にて人と成りたる小市郎親景清を迎ひにこそ來たれ敵討とは何の事そこきり〳〵と立されい「目に角立て呵り付取ても付かぬ挨拶に女房豐くのぎよつとしての豐くこはそも何をのたまふぞ現在敵を親といひ小京太といふ名をば小市郎とは何事でござんすぞへなア「いへどもきよろりと答へなく付ほなければ顏打詠めの豐くコリヤどうゑた事ぢやぞいなア「思案工夫の其內に又も來るは小市郎が女房宮崎小京太と名乘たる男の姿見るより

も門内へかけ入つて宮崎ノウ小市郎殿父御のお迎ひに來るは一所の筈女房の此宮崎なぜふり捨て來やしやんしたヱ、胴欲なお心ぢやなア「半分云はせずはつたとねめ付け總上ヤイ〳〵こゝなうろたへ者今ぬかす景清は某が親の敵我は伊勢の小京太武盛といふ者取違ひたる馬鹿者め相手にならぬぞすさつてをれ「云ふに惚り女房宮崎宮崎てもけうとい小市郎殿いつの間にやら名をかへて現在爺御を敵とはそりや何でゝござんすぞへなア「いぶかしそうに立よればこなたの女房猶あやしく豐のノウそこなおかもじさま扱めんようなこちの夫も其通り小京太ぢやない小市郎ぢやと連添ふ女房の私にさへけんもほろゝの挨拶は狐が付たか氣が違ふたか只事ではござんせぬ心を付けてごらうじませ「互ひに夫に取すがり豐の是小京太殿女房の豐く野見ゑつてか宮崎是小市郎殿妻の宮崎見忘れてか兩人性根を付て下さんせいなア「いへど夫は兩人共振放して怒りの體豐のくてもめんような此有樣宮崎コリヤマアどうゑた事ぞへなア「どうした事と諸共に驚を烏の夫婦中何を云ふてもあんがうのとりゑめもなき風情なり豐久野ゑばし思案顏豐のハア思ひ出したノウ宮崎さまどうやらゆうべ一所に泊りし時何かは知らぬ響に恐れ宮崎お前もこちらも夫をば急にゆすり呼起しそれより駈出し二人の衆豐のく互ひに詞のてんでんはよう寢入たる其人を急に起せば魂が入かはるとやら云ひ傳ふ宮崎おまへの夫とこちの人一度に起した其魂もしや入違ひはせまいかいのう豐のくいかさま世に云ふれし事なれば有るまい事とも思はれず物はためしぢや宮崎お前もわしも共に夫の魂に兩人詞をかはして見るのが近道「心付くより兩人が互ひに夫を入かはり宮崎ノウこなたの心は小市郎殿かいオ、いかにも豐の是こな樣が小京太殿か總上オ、いかにも豐のくいかにもなれどいかゞせんいかに心は夫でも互ひになれぬ顏かたち宮崎こつちの心がすまぬものうかつに傍へもよられぬゑゞ兩人コリヤマア何んとせうぞいなア「顏打守り跡ゑさり二人が二人を見合せて又立戻ればねめ付けて傍へもよせぬ其風情豐のくお前も宮崎お前も兩人コリヤどうぢや「こは何とせん悲しやと涙の糸もむすぼれてさばき兼たる計り也重忠委しく聞し召し重忠天竺の離波多尊者は骸をぬきかへ唐土の華陀が療治は心の臟を入かへたる例もあれば女が詞も

あるまじきにあらず又あやしくも不思議なり元牢舍の景清は平家方にて名高き兵又殺されたる伊勢の三郎義盛は義經公の家來にて以前大佛供養の頃景清を擒となし又三郎は義經の恨を報はんと魚の鱗を目にはめ我君を覗ひしゆゑ男山にて捕子とし兩人共君に敵たふ科人なれど主の恩を報せんための敵たいなれば忠心を感じたまひ幼少の悴共へは助命させ伊勢と日向へ追拂ひ二人を一つ牢舍させしが雙方劣らぬ强力にて須磨壇の浦の合戰の物語我君所望有し時兩人更に辭するの色なく互ひに戰ひの有樣を力に任せてせし折から日頃は怨意の中なれども源平と立別れ武勇を爭ふは武士の習ひはづみを討つて景清が打たるこぶしの强かりけん伊勢はあへなく相果たりむざんなれども定業にや伊勢は其儘生かへらず景清は此鎌倉へ召かへし土の牢屋につながせども此度の大赦を幸ひ助けんものとは思へども景清よろこぶけしきもなく昔にかはらず我を張て相手の伊勢が悴を呼べといふに是非なくけふのえぎそれ聞付て二人が願ひ何れを何れと分けがたし所詮景清を呼出してのうへ先此所にて對面させよ半澤本田長つてござりまする「本田半澤兩人に叱きたまへば打うなづきやがて御前を立にけり程もあらせず警固の役人前後左右を取卷て連て出たる召人は慈悲に弱らぬ丈夫の筋骨惡七兵衞景清と人も見えらぬ牢びたし助けとあるに隨ひて御前にこそ畏る重忠ヤア景清子細は本田半澤等に承り定てとくと會得すべし汝二十年前よりの牢舍なれば敵の悴又我悴にも幼少の時別れ見覺えまじ夫ともに見しりあるか眞直に申聞せよ大藤內いかにも子細承り得心致し候へ共何れが悴何れが敵と拙者めも見分け難し定めて彼等が申詞に僞りは候まじコリヤ〳〵悴迎ひに來る志孝心の程過分々々いざ同道して立歸れ「しづ〳〵と居直れば小市郎と名乘りし若者嬉しげに立上りいざハア、有難や忝や我孝心のとゞきしかいざ御同道仕らん「云ひさま傍ににぢりより刀すらりと拔はなしいざ敵景清覺えたか「唯一刀に切倒しすかさず上にのつかゝりとゞめをさせば各仰天敵と云ひしかたへの若者上總こはたばかられしか無念やな「刀引拔き切掛るをはつしと受る間もあらせず透間を覗ふ互ひのはげみ二人の女房は氣をあせり寄付かたもなき所に重忠怒りの聲はげしく重忠ヤア此所を何處と思ふぞ

雙方共にしづまらふぞ「しづまれやツとの御上意にはつと雙方扣へしが敵と云ひし若者はじだんだふんで聲をあげ（上總チェ、殘念や口をしや何をかくさん我こそは誠景清が忰の小市郎魂かはらず性根も亂れず親人をお迎ひにと大磯宿まで來たりし所敵小京太に出合ずば牢より出じと宣ふよし飛脚が詞に聞しゆゑ俄の大事と女に包み小京太と名乘來て父を助けんとおもひしに油斷して眼前にやみ〳〵きやつが手に懸り御最期させしが無念やなア「齒噛をなせばこなたの若者につこと笑ひ（せいハテ天道は明らかな我こそ誠は伊勢の小京太その大磯で飛脚が詞は聞かねども何卒敵景清を討て亡父に手向んものと心ばかりはいそげどもよく〳〵思ひ見れば大赦は人の命を助る作法敵討と云はゞよも御免あるまじと態と忰小市郎と僞り本望とげて滿足やなア「いふに豐久野いさみ立（豐くのオヽお手柄〳〵そうした心と露しらずよしなき案じは鼻の先智惠まん〳〵な我夫「あふぎ立ればあなたの女房夫の本心聞くにつけ落付ながら眼前に舅を討した無念さは胸にせまれど夫婦共上を恐れて扣へ居る本望遂げし小京太は重忠の御前に向ひ（いせ私の宿意を以て上の大赦を妨げる科のがれがたしいかやうとも御制法に行ひ下さるべし「覺悟の體に小市郎やがて御前に兩手をさげ（上總子細は唯今お聞の通り此場で彼等と勝負をば仰付られ下されうならば有難う存じまする「願へば重忠取上げ給はず（重忠汝が願ひは復讐叶はぬ〳〵小京太は親の敵を討たる事孝の道順の道大赦には搆ひなし急ぎ古鄕へ歸るべし「仰せは身にも寃加にもあまりてハツと浮立つ夫婦（いせ豐くのエヽ有難う存じまする「唯有難しと一禮し行んとするを小市郎反打かけて立ふさがり（上總ヤアお上におゆるし有とても某がゆるさぬ依怙贔負あるお捌き場所の恐れももう搆はぬいざこい小京太サア勝負〳〵「いざこいやツと拔放す是非に及ばず小京太も運は天なりサアこいと月たんきれんの太刀捌き女〳〵も身をかためすき間を覗ふ鵜の目鷹の目重忠も詮方つき（重忠ヤアヤア半澤本田最前云ひ含めし科人にあれあの爭ひをとめさせい（本田半澤畏てござりまする「御錠と共に兩人が伴ひ出る勇氣の老人中に飛入左右へはたと當わくる又打かくる二人が刀老氣を張て弓手馬手しつかと柄を握り詰め留るにあらでこはいかに左右に持た

る刀を重ね己が首に引かけてエイと引たる弓手の肩うんと引たる馬手の肩しゝむらかけてすつかと切り左右へはなしどつがとふし各是はとてんどうの思ひがけなき仕業なり重忠ふし議と詞をはげまし(重忠)是々景清何故この最期汝が命を助けんとさま〴〵心を砕きしに無足にするかなゝんと「仰を聞くより小京太かけよりいヤア景清は某が最前手に掛け申せしが今また此者を景清とは麁忽なる御一言「妻も驚く其風情小市夫婦も共々に(上總)景清と申者但しは二人候や「ふしん立れば重忠公莞爾と笑ひを含ませ給ひ(重忠)愚や汝等最前敵と悴と入變り何れを何れとわかたぬゆゑ以前調伏の科ある備前の大藤内を斷ざいの牢舍申付しが命助るといひ含め面體見しらぬを幸ひ景清に仕立小京太に討したり是たばかるに似たれども天下の科人討取りしは親の敵討たるに百倍の高名又小市郎にはひそかに父景清を渡さんと思ひしにその間も待たぬ若氣の狼籍はて殘念至極やなァ「最期を悔む仁者の詞四人の者は一度にハッと計りに感じ入る手負の景清起直り(景清)頼朝公の慈悲心を無に致せし一通り又兩人が刀にて相果る子細憚ながら重忠殿にも若者共もよつく聞け假にも最前汝等が敵悴と僞りて來りしは僞ならずそれが則誠の事と計りでは合點ゆくまじ元小京太が親伊勢の三郎義盛と某は同年にて源平兩家と爭ひなきうち兄弟の如く中睦じくいかなる事にや諸共に四十二の二つの子をもうけし時は其子に災難ありといへば妻にもかくし臺の上にて汝等二人を取替たり(四人)エ、エ、エイ(景清)サ、驚は尤も〳〵其證據は此兩腰備前正常波の平互ひに刀を相添へ養子とし共に災をのがれんと思ひしに災難はのがれずして夫より源平鎬を削り戰果て二人共主君の恨を散せんと頼朝公を付覘ひ終に擒となりしかど二君に仕へる所存もなく都に牢舍の折からに合戰の咄を好まれ望む所と我々兩人仕方ばなしの物語に三郎は我に殺され此鎌倉へ此身はひかれ土の牢にこめられて二十年の春秋は身のふけゆくを思はずして伊勢と日向に人となる子供が年をかぞへしぞや「肉身わけし因果さは我長命はいのらずして小京太が手にかゝり(景清)敵討たる手柄者運に叶ひし侍と譽させたく云はせたく助る命を助からず牢にいちばる我心「子ゆゑのやみとしらざるか(景清)又小市郎は健氣にも敵といひ

寄り助る所存孝行とも過分とも我子といへど根が他人冥加の程も恐ろしく汝が刀は右の肩小京太は左の肩實父養父の敵をば一度に本望遂げさせしぞかならず親を討たと思はず敵を討たと勇んでくれそちらが代りに嫁たちはせめて舅といふてくれ六十年來我を張りし矢竹心もけふの今一時に打れし景清が身のなる果を推量せよ「推量せよと雙方に引寄〳〵かたるにぞ宮崎はすがり付宮崎養子とあつても我爲には舅御樣豐くの　イヤ自が夫こそ眞實の親ともしらず討んと云ひし身の冥加「勿體なやと銘々が言譯涙兩人の夫々は諸共に不孝をゆるして給はれと四人一度に臥しまろび消入ばかり泣しづむは七里が濱の夕風に浪打上る計なり重忠深く感じたまひ誠や麒麟も老ぬれば駑馬に劣ると平家の一門西海に沈みしより我君を敵と覘ふ上總の景清忠義の程を感じたまひ御味方申せよと是まで度々すゝむれどもいつかな聞入る所存も見えねば二十年來牢びたしと相成りしが今日只今肉身の悴に逢ひて我とわがさんげの上に相果るも立通したる梓弓誠の武士はかく有たし伊勢と日向に追拂ひし二人の悴は今日の大赦に付てお搆なし今より我君に奉公せん心はなきや二人の心底いかに〳〵「いかに〳〵と慈愛の詞二人もかたち改めていすりや親々の誤りにて二ヶ國へ捨られし咎めもあり上總我々兩人今日より賴朝公へ御召抱へ下されうとないせ願ふてもなき此身の仕合せ上總有難くお受申すでござりまする「喜びいさめば宮崎豐くのあゝ有がたやとふし拜む景清慈悲心身にこたへ景清ア、有難や忝や二人の悴は惣追捕使賴朝公に奉公とや神か佛か重忠殿の御恩忘るなよ伊勢と日向に育ちしゆゑ國は隔てど心は隔てないで〳〵生涯放れぬやう兄弟の緣を結ばん二人が持し其刀とく〳〵是へ「いふに隨ひ兩腰を右と左にさし出せば其まゝ兩方取かはし景清小京太が刀は小市郎小市の刀は小京太とかう取かへて渡す心は最前女原が云ひし疑ひ今でおもへば神の告コリヤ刀は武士の魂を入かゆれば一體分身兄弟同然「いせや日向の魂が入かはりしと末代の文句に殘す我筐景清死だ跡でも中よくせよさらば〳〵「死る今はも丈夫の景清重忠ふびんと立寄たまひ重忠ホヽウ勇ましき武勇の魂今相果る際となり二人が悴の身の面目その身の武勇あらはす爲め八島の浦の戰を物語て聞すべし「所

望〳〵と有ければ眠る眼をくわつと見開き景清オヽ面白〳〵かく戰國に生れし身は其合戰の物語所望とあらば身の譽いで物語て聞せ申さん悴共も承り末世の手本にいたすべし「物語らんとどつかと座し景清いで其頃は元暦元年船と陸との戰ひに我先かけんと敵味方「はやり切れども深手のなやみ重忠始伊勢上總嫁子〳〵も立かゝり重忠思ひぞ出る壇の浦の其船軍今ははやいせ閻府に歸る生死の上總海山一度に震動して豐くの船よりは時の聲宮崎陸には浪の楯重忠月に光るは兜の星の影「水や空そら行くも又浪のたてとの打合ひさしちがふる船軍の掛引浮つしづむづせし程に景清景清心に思ふやう判官なればとて鬼神にてもあらず命を捨ばやすかりなんと思ひ敎經に最期の暇乞陸に上れば源氏の兵「あますまじとてかけ向ふ景清是を見て物々しやと夕日影に打物ひらめいて切て掛ればこらへずしてはむかひたる兵は四方へパッとぞ逃にけるのがさじと謠いせさまふしやかた〳〵よ源平互ひに見るめも耻かし謠上總一人をとめん事はあんの打物小脇にかいこんで景清何がしは平家の侍惡七兵衞景清と謠「名乘かけ〳〵手どりにせんとておふてゆく三尾の谷がきたりける甲の鍰を取はづし〳〵二三度逃のびたれ共思ふ敵なればのがさじと飛かゝり甲を追取エイヤとひく程に鍰は切れて此方にとまれば主はさきへ逃のびぬ遙に隔てゝ立歸り景清謠去るにても汝おそろしや腕のつよさと云ひければ景清はみをのやが首の骨こそ强けれと笑ふて左右へのきにける昔忘れぬ物語「語る內にも血死期時はや目をねむるだんまつま二人が嫁の介抱にもうお別れかとなき出せば心亂るゝ小京太小市いせ上總けふ逢始の宮崎逢納め景清秩父の庄司重忠殿重忠惡七兵衞景清景清悴らさらば四人おさらば「今ぞ往生安樂と落入る玉や伊勢日向入かはりたる魂よばひ咄しを世々に殘しける

是弘化四未年の冬東都淺草綺語堂に於て一時の戲に書たる草稿のまゝ爰に記し置く者なり

南北軍問答院本の話

我祖父西澤一風翁の作にて享保十巳年三月三日より豐竹座の淨瑠璃にて今嘉永三戌年まで百二十六ケ年となれり

付り楠帶刀正行は智謀　つばさとして九重にはうつ日本のほうわ
宇都宮公綱は武勇を　うけいせいの服にも時至つて色香うみ出
す吉の櫻

南北軍問答

作者　西澤一風
　　田中千柳

井に左兵衛督直義は奸曲　つばさとして九重にはうつかまくらの
高武藤守師直は我慢を　てんぐあかはたにまき込泣顔のまゆ作
り仁智の六本杉

序詞孟子三子者の勇を論ず。北宮黝は子夏に似れり。孟施舍は曾子に似れり。二子の勇は血氣より出強きに似て實はよわく。曾子の勇は仁義にもとづき柔なるに似てかへつてつよし。我日の本の天津君後醍醐天皇。北條高時入道の逆意をしづめ暫太平の代なつしも再び花の九重に色香爭ふ梅櫻ヲロシ春やむかしの春ならぬ楠判官正成延元元年の五月雨や。湊川の泡ときえ新田左中將義貞は北國の雪に武威を凍し。手を出す官軍もなかつしかは。位は光嚴院太上天皇

此軍問答四の切は赤坂城にて楠正行父正成の追善を營むに燒香の列は軍功に依て定むと恩智早瀨等の女房を始め家中の女房揃の場にて女形多く出る狂言なり此中に泣男杉本佐兵衞シテの場なり佐兵衞本名は大佛陸奥守の忰にて楠家は君父北條の敵なれば間者となつて入込居るいと珍らしき趣向にて世人しらざる事殘念なる狂言なり泣男は太平記等に有てよき筋なれど淨瑠璃歌舞妓に脚色しものなく漸やく歌舞妓に安永四未年顔見せに角の芝居にて潔楠噺にあり是は楠昔噺の宇都宮公綱と蘭奢待の妻鹿彌三郎を混じて作し馬鹿と見せて後本心を明すよき役なり目計花野吉野山には泣坊主とて敵役に仕組めり此餘に泣男の脚色見えず此軍問答の杉本佐兵衞は實惡の役にて仕手の役なり淨瑠璃歌舞妓に滑稽役にて名高き物草太郎是は古き物語物にある名なり是を本名千の利休として十帖源氏に出せり次に謠曲の狂言に見物左衞門と云ふ道外役あり是も本名有て歌舞妓にては謀反人とせり小栗判官車街道の横山太郎或は太閤記の世界に曾呂利新左衞門等なり道外の儘にては役かろくよき役に成り難きゆゑ底を立役か謀反人と仕組む此道外がヽりの役を近來歌舞妓役者は好まず早く本心をあらはしたがりて馬鹿にていく場も出る事を嫌ひ始より作り馬鹿を見えすく仕手甚多く皆藝道の拙きより發るなるべし濡事やつし役も是におなじ昔やつ

し役はいつまでも女に迷ひこなし和らかなればいつもやつし役のみをしても當りを取れり坂田藤十郎の女郎買などの名譽は云ふに及ばず元祖小川吉太郎元祖嵐三五郎の頃までは座頭にてもやつし役ならば外の役をせず其後段々人氣さかしくなるに隨ひぴんとこな(梨園通言きつとせしやつし)流行事とはなりぬ今や惣ぴんとこな計りにて眞の濡事やつし役者を見ず世の流弊なれば是非なしといふべし

古代人名狂言の說

淨瑠璃歌舞妓の狂言に遣ふ人名にも種々の仕組に出るあり又事蹟ありとても狂言に遣はざる人あり所謂西行一休定家行成などを始あるは長明兼好近くは俳諧師芭蕉なんど狂言に遣ふ事少なし中にも西行は軍法富士見西行あり一休は一休噺あり爰に享保年間錦文流の作に西行法師墨染櫻と云ふあり此西行の役は佐藤則清とて北面の優男入内ときまりし姫君に思はれ加茂の競馬の節不義あらはれ追放となり出家して西行と改め富士の根方への道行有て江口の君比丘尼と成り廻り合て口說の文句あり西行をやつし役にせし事いと珍らしき心地す又享保の末に田中千柳の作にて本朝檀特山と云ふあり是は一休いまだ在俗の時の狂言にしてやはりやつし役なり仕組おなじく宗純親王と云敵役の王子の仰を受て姫君に入内をすゝむる役目にたつ姫君一休に惚れて競馬の棧敷にて不義の汚名を受け遁世して一休となるもと宗純親王と一休と取替子にてとゞは親王亡び一休の名を宗純と名乘る此取かへ子は役行者大峰櫻に大友皇子と役の小角と取替子におなじき仕組にて都て墨染櫻の西行をはめて檀特山の一休とする三の切蜷川新左衞門敵討の場などは墨染櫻の儘なり元祿の末近松の作最明寺殿百人上臈と云あり是は北條時頼記の女鉢の木によく似て鎌倉着到の席に諸侯の女房達計りを具し時頼の御臺所出座あり經世は妻に馬の口綱をとらせ着到すると仕組めり又近松の作に兼好法師物見車といふあり是は鹽冶判官の妻顔世の前に高の師直戀慕して侍從といへる女を仲立に頼む侍從は兼好の弟子にて師直の手打にあひ兼好の菴室へ侍從爺親衞士の又五郎娘の最期を悲しみ告來るなんど徒然草の文を書入れたれど何れも世に行はれずまして赤人人丸なんど歌道に名高くても傳奇に遺らず書道には名高きなれ

ど反魂香に狩野元信信郷記に狩野尚信等遣ひ有ても浮世又平の方世人よくしりて狂言になるならざるありまして宗祖の名智識の事蹟などは狂言に有て堅づまりて其宗徒ならでは喜ばず戯場小説の作者の得意とする者は其傳奇詳かならざるもの年月時代のわからざる物を題として善人を惡人とし惡人を善人とし時代に古今の相違有ども道々の對する者を集めて狂言の種とはなせり思へばあやしき業なりかし

鹽賣長次郎の話

寶暦年間京師の町々へ鹽商人長次郎と云ふ曲者有て達なる胸前垂をして賣歩行しを堂上方のやんごとなき姫君此男を垣間見たまひ門前を賣聲のする度にお物見より透見し給ひ後々は門内へ呼込み鹽を求めさせ浮世噺などをさせ此者に懸想ありける體を見て鹽賣或夜忍び込み姫君を盜み出し二條新地とか六波羅とかに己が住家あるまゝ姫君を連歸りむさくろしき埴生の小屋に入置き心の儘になぐさみける館にては姫君見えさせたまはねば密々に御吟味ある所やう〳〵見當り段々の御理解にて姫君を歸せとあれども我を其館の主とせんには歸すべしさなくては金錢に拘はらず姫はいつかな歸さじとて傍若無人の挨拶に及びければ堂上家にも詮方盡き御所司より町奉行へお頼有て油斷をはかり終に曲者を召とらせられ無事に姫君を取かへし其曲者は梟首にかゝりしといふ一奇談有りけり明和四亥年の盆角の芝居にて歌舞妓狂言に取組み則外題を大坂日記鹽長次郎と賦して其頃の立役藤川八藏鹽賣の役をしけり明和六丑年の冬竹本座淨瑠璃に近松半二作近江源氏先陣館に是を書込み鹽賣長藏本名三浦之助北條時姫の事に作れり是より後は鹽賣長藏は美男の立役のする事と心得れど實は梟木にかゝりしかどわかしの科人なり續編に云聚樂町梅澤賣の由兵衛とおなじき大惡人なり文政四巳年中の芝居にて二の替り狂言にけいせい廓島臺と賦して鹽の長藏に嵐橘三郎三好長慶に松本幸四郎足利時代に取組しが姫の役を岩井半四郎に見込書上しを杜若姫の役を斷りしゆゑ著を失ひさまで當りもなかりしはいと殘り多き事にて有りけり

歌舞妓に名高き人名の說

播州高砂の船頭德兵衛は一とせ漂流して天竺に行き年月立て無事に歸國し異名に天竺德兵衛と呼る是等

は歌舞妓作者の得意とすべき物にて謀反人とせうとも善惡心の儘に遣へる名なり既に天竺德兵衛聞書往來と外題して古く狂言口はなしけり大阪廻船問屋に桑名屋何某とて有り其船頭に海上乘の妙を得し德藏と云ふ者大晦日の夜は渡海の船を出さぬ習ひなるを尤も據ろなき急物にて船を沖に出す船にあやかし付て今宵をいつとおもふ又恐ろしきものはなきかと問ふ其答に大晦日合點なり世に恐ろしき物は世渡りなり其餘に恐るゝ物天地の間になしと云ふ海上のあやしみ此返答に消散せしとは古く人口に膾炙していつの世の人といふ事をしらず明和八卯年春中の芝居にて桑名屋德藏入船噺と外題して並木正三作せしからは是より前の人なるべし際限なき大千世界なれば昔より漂着せし船頭も多かるべく海上乘の名譽の者も數多あるべきに此二人の名のみ高きは所謂其名の德藏德兵衛なるべし此餘船頭にて名高き者は豐太閤朝鮮征伐の御時肥前名護屋へ渡海の船頭與次兵衛おんどの瀨戸にて難風に逢ひ船を破りし誤りとて切腹す與次兵衛灘と異名は冠れども狂言にては遊山櫻に敵役に作せり元より拵へ事にはあれども逆櫓の船頭の名に福島の松より呼て松右衛門とはよく思ひよせたりといふべし矢口の渡の頓兵衛とはとんよく深きといふ心にて福內鬼外も名付けしなるべし爰に一笑話あり船頭の因みに出す

響灘入船噺の話

寬政三亥年の盆狂言角の芝居にて響灘入船噺と云ふ狂言あり船頭五太夫に淺尾爲十郎娘の聟の爲に濕氣日和合點にて海上へ乘船し破船（渡海カ）させんと風雨を厭はず乘出す場は序切なり近來濃紅葉小倉色紙に島の小平治嵐吉三郎のせしは此狂言をはめたる物なり其時奥山（淺尾爲十郎）一體狂言の働き烈しく早切早立にも妙を得たる事自慢の心なれば若き折沖中にて難船したるも度々見及び又船に乘合せ難風に逢ひたる事も覺えあれば此五太夫役にて難風に逢ふたる重船頭の苦心をして見せんと道具にも誂有て船の段々波に當つて碎くる所をまのあたりにして見せしが餘り正寫しにて見物も心に小凄く覺え別して海上商賣の者は緣起惡しきとて一向見物に來ず其場すみし跡へは見物來る奥山は船頭の骨髓をして見するを自慢にて見物揃ひてからでなくては此幕を明けず後

後は評判高く見物まるで來ず成りけりと云ふ是等は餘り凝り過て人の好嫌ひをしらざる所なり是に似たる話あり寛政五丑年角の春狂言勝武革奴道成礎に尼が崎武庫川などにて年々催ほす花火狼烟を舞臺にして見せ花道戸屋の內へ筒を向け打こめば五色の絹など向ふ棧處の上にあらはれ出る趣向なり作者並木五瓶奇を好む癖ありて朝四つ時とも思ふ頃序切にて本銕炮の音二三十も鳴らせば舞臺にてはいかなる事をするやらんと早く見物をよせる工にて有りしが子持の見物は音に恐れて泣子を抱へ逃て出るなど騷動せり是も一つ二つなれば我慢なれ共二三十も響く事ゆゑ甚不評にて纔の興行にてけいせい陸玉川とかはりたり又此前年の二の替り中の芝居にて入間詞大名賢義序切は大友宗麟の養子殿大友市正澤村宗十郎江戸よりの歸り立にて本國へ初入部の狂言此時の行列は古今に珍らしき程の美を盡し惣座中表方は云ふに及ばず日々本行列の雇ひ共多く紀伊樣の行列を學び花道舞臺明地もなく並び見せんとの趣向にて乘馬に事かきいつもの芝居の馬にては恰好あしきとて馬屋にて毎日三疋を借り此行列に引出し所小道具の馬とはかはり見えよければ日々乘馬を遣ひ居し所或日畜生の事なれば舞臺にて糞をしけりそりや馬が糞をせしよと笑ひ出せば棧敷場の人々皆同音に笑ひしゆゑ乘馬驚き列出すそれにつれて乘替の馬も列出し舞臺花道とも行列並びいて馬をどこへも引出すべき所なく大に騷動して翌日より是に懲てやはり小道具の馬を遣ひしとなり是も五瓶が戲れより出て此不覺を取りし事云ひ出しては笑ひしと以前は假初にもかゝる滑稽の笑談あり

彫物師左甚五郎の話

淨瑠璃歌舞妓にも有て世に名高きは彫物師左甚五郎なり此人紀伊國根來東坂本の產にて彫工の名人なり天正年間根來の亂を避て城州伏見に移り皇都の寺院及聚樂桃山城內の欄間の彫物に名譽を遺し伏見にて歿す此門人に左宗心左勝政等あり飛驒の內匠とて古く呼るは一人の名にあらず飛驒の國にはよき內匠代代多かりしゆゑ然か呼來る名にして甚五郎は左利なれば左の異名をその儘に呼ぶものにて後人飛驒の內匠と左甚五郎とを混じて思ふも多かり何を見ても古き彫刻物を見れば甚五郎の作なりと云ふは其名高か

りければ時代の新古に拘はらず左の名を呼ぶは幸ひといふべし是等は狂言作者には誠に勝手よき名にていつの時代にも用ひてさし障なし當時專ら歌舞妓に物する九條の里にて傾城を見そめ丹精をこらしお山人形を彫るその人形働きて後主人の姫の身代りとなる狂言の元は彼鍛冶屋仁藏島原の全盛吉野太夫を見そめ戀病となる吉野是を聞憐みて仁藏を呼入れ煩惱をはらさせしとの一話は其實自笑の頃の雙紙にまゝあり山崎與次兵衛壽門松の淨瑠璃にはなん與兵衛（難波屋與兵衛）藤屋吾妻に戀病ひと近松翁は作れり此鍛冶屋仁藏に思ひよせて甚五郎傾城を見そめ其姿を彫刻するに精神具はり働くと作り設けし者なり

目貫後藤浮世又平の話

目貫彫に名高き後藤祐乘の名をかり後藤又兵衛基次の事を三位重衡の後藤兵衛盛長と三つを混じて義經腰越狀の目貫師五斗兵衛を作り心は朱買臣身貧しく妻に詈られ後出世して其妻悔むとの事蹟を作りし物なり又大津繪の諷（祖カ）なりと云湯淺又兵衛世に浮世繪の鼻祖なりとて浮世又平を土佐の將監の弟子とし手水鉢に肖像を畫けば拔通りし妙を感じて土佐の又平光與と改るなどは反魂香に近松翁の作せしより今物しらぬ婦女子なんどは實說なりと思ふ者も多かり小栗宗丹といへばけいせい花繪合といへる歌舞妓狂言に色惡方に作せしより惡人と心得長谷部雲谷といへば何の狂言にても敵役に遣はれり其人々の幸不幸なるべし

鍛冶正宗國俊の話

鍛冶に名高きは三條小鍛冶宗近なり彫工の甚五郎とおなじく何にても古き刀劍類を見れば小鍛冶宗近の作と云ふ所謂祇園の薙刀鉾の長刀又北越くさり山のくさりは數年經れども打ず宗近の作と云尤も謠曲に小鍛冶有て名高きゆゑ然いふは理りなれ共鍛冶にも薙刀もくさりも鍛ふ事はなるまじくと思はるゝに何を見ても宗近の作といふも又をかしからずや宗近の狂言は神勅嫁入小鍛冶と云有り刀鍛冶には古來名譽の人多けれども新薄雪物語の淨瑠璃に五郎兵衛正宗來國俊圍九郎と共に刀を鍛ひ圍九郎湯加減を見んとて右の腕を切落され左計りにて後に打をてんぼ正宗と云ふ事を作り込みしより此三人は名高し是に似たる話は四代目河內守國助代々名鍛冶の家ながら幼く

して父國助におくれ奥義をしらず小林伊勢守國輝に鍛煉の術を學べども湯加減の一大事は秘傳なればゆるさず故に國輝に一人の娘あり貌醜陋なるを乞受て國助妻となし年月立て妻にかたるは汝をむかへて妻とする事かの湯加減の秘傳をしらんが爲と心底を明かせしかば妻も鍛工の娘なれば道に切なるを感じ近日一刀を鍛煉して湯を渡さんとする時我病氣發せるよしを告げやらば取る物も取敢へず來るべし其跡を伺ひたまはゞ湯加減をしらん事必定なりと謀を極めて待所に何某より命ぜられ刀劍鍛煉の事有て國助も合槌に行やがて湯を渡さんとする時國助が小僕走り來て家室急病發し絶入したまへりと告しかば國輝大に驚き河内にも來れと云ひながら側にありし一桶の水を湯船にどうと入て走り出たり國助は謀破れ茫然たり國輝は國助が家に至り見れば娘は尋常の體なれば子細を問ふに國助も走り來たり夫婦詞を揃へてかの湯加減の事をかたり火急の期に臨んで業に切なる事を感じ其罪死に當れりと謝せしかば國輝も父祖以來の知音といひ聟舅の間柄惜むべきならねど古も是を窺ひ片臂を打落されたるもある物をと深く秘したれども重々の深意を見届けたれば相傳せしむべしとて委しく傳へけるより後國輝國助一雙の名劍を鍛ひ出せるとぞ是國助を國俊とし國輝を五郎兵衞正宗娘をおれんとしててんぼ正宗を團九郎と作り設けたる者なり

高野女人堂心中の話

寶永五子年竹本座の淨瑠璃に近松門左衞門作にて高野山女人堂心中万歳草と云ふあり紙屋宿雜賀屋與次右衞門の娘お梅と南谷吉祥院の小性成田粂之助との心中あり此道行に高野の名所々々を出してとゝは女人堂にて心中對死の所の文句にいと珍らしき文あり都て最期の場に及んではいつも南無あみだ佛とはいへど題目を唱へるも口拍子あしく大約が念佛なるにまして陀羅尼などは色氣すくなくて唱へる事なし此高野計りは念佛題目は唱へずいかゞあらんと見れば「夫婦親子一蓮のしめしの時刻のばされず只今ぞと脇差拔胸におしあておんあぼきやべいろしやのまかもだらまにはんどまじんばらはりたやウンと突こむ切先の肝に當ればのりかへりはりたやウンとくり通すあうん息もきえ〳〵とのッつかへしつ苦しむ聲下略此

淨瑠璃今嘉永三戌年まで百四十三年となれど昔も是らは作者の穿とやいふべし

島原の青葉薄情の話

寛永年間六條柳の馬場より當時の島原へ廓の引けたる頃廓中に青葉と云へる女郎あり餘り繁昌もせず借金年々に嵩むを愁ひ座都何都(いち)とか云ふ盲人と契り心中をせんと謀る盲人も青葉が手管にのせられ或夜廓を抜出て樫木原より丹波路さして兩人とも落行しが途中にて青葉の心底かはりかゝる盲人と死ん事このましからずと云て今更變改もならずと何となく街道ならぬ山道へ連れ行情なくも盲人を獨り捨置て其身は廓へ歸り何しらぬ體にて勤め居りしとぞ盲人はかゝる事とはしらざれば青葉〳〵と呼かくれども答へなければ終夜尋ね迷ひとかくする內夜も明たれば里人に逢ひからうじて廓に歸り青葉の事を聞くに[illegible]の事元より表むきに連立出たるにあらねば恨[illegible]其薄情を唱歌に述自ら手を付け絃諷ふたる青葉の唱歌なりとぞ「こは情なの仕業やなさのみ人にはつらからで悲しみの涙眼にさへぎりて西も東も白波のよるべ定めぬうたかたのいつそ浪とも消もせでこがれこがるゝ身の行衞青葉〳〵と呼べども濱のはまの松風音ばかり松風濱のはまの松風音ばかりそよと計りの便もがなと恨み嘆くぞあはれなると恨の唱歌明らかなり廓中に諷ひはやりしかば女聞づらくやありけん亡命して行方をしらずと此一話予幼き頃好人より聞けり依て梅玉に此事を話したり文政五午年の盆角の芝居にて戀女房染分手綱にて鷺坂左內竹村定之進座頭慶政お乳の人重の井比糖の八藏五役歌右衞門(梅玉)勤しが慶政役にていつもは虫の音を諷ふ所を青葉に諷ひかへたり其場の移り甚だよしと悅びける名人役者はかく聞く事〳〵に捨ず用ふる所感ずべき事にあらずや

西澤文庫傳奇作書附錄下の巻終

西澤文庫傳奇作書後集上の卷

目次

一京攝戲場三番叟の圖
一同脇狂言の事幷に圖
一東都三座脇狂言の事
一中村座酒呑童子の文句
一市村座七福神の文句
一河原崎座甲子待の文句
一中古江戶三座通詞の事
一江戶狂言待た暫の事
一當世榮花物語の序
一同初編六編迄の目錄
一傾城纏幕湯の筋書
一續新齋夜話の一話
一纏幕湯後齣脚色の話
一豫州松山開城の一奇話
一假名手本四齣裏の正本

大歌舞妓戲場
三番叟之圖

狂言の
種々
尋ける
珍菜り脇
綺語堂
李叟



二の替り脇狂
言花盗人之
圖

拘いもぬ
唇おこし
春の風
大坂
[illegible]



京摂服狂言
炮燥賣之圖

あらろくの
まれぬ
日を
ふし
花の春
[illegible]



中村座
服狂
言
酒
呑
童子
之圖

作り
獨活
舌打
してぞ
笑ひぬ
[illegible]



森田座脇狂言
甲子待之圖



正本の
飛びらき
とる 神子待
森田勘弥

市村座脇狂言
七福神
之圖



あらぎ
代に
その名
廣ぶれ
春の水
市村
家橘

西澤文庫傳奇作書後集上の巻

西澤綺語堂李叟著

京攝戲場脇狂言の事

毎朝明六つの矢倉太皷を打切れば三番叟初る是に次て狂言の大序までの內に勤るを脇狂言と云ふ囃子鳴物は太皷鉦甲太皷のみにて二の替りには花盜人前に圖を出す通り盜人大盡酢口三人にて各無言仕方ばかりにて京師壬生地藏堂の狂言の通りなり次に炮烙賣大名鴉皷賣三人圖は前の如く是は壬生狂言とは違ひ詞あり此餘地藏祭川渡寺子屋聟入米盜人未盜人カ不明奴駕籠舁等京師千本閻魔堂の狂言の如く數番ありといへども今は二の替りの花盜人のみかはらず跡は大體炮烙賣にてすませる事とはなりぬ

東都三座脇狂言の事

江戸三座は四季に變らず狂言は其家々にあり是も朝の三番叟を番立と唱へ續いて脇狂言なり中村座（勘三郎舞鶴）酒呑童子市村座（羽左衛門家橘）七福神森田座（勘彌當時河原崎也）長者開甲子待共前に出る圖の如し是にも往昔は替り狂言ありて炮烙聟竹生島壽大社那須與市馬揃壽二人猩々等あれども當時廢りて右圖に出せる三番のみ勤る事なり淨瑠璃歌の文句古雅なるゆゑ爰に出す

中村座酒呑童子の文句

貞光にて暫の役を勤めし時の句に暫くは碓井嶺の春寒し　七代目白猿將門冠初雪と云ふ江戸昔狂言の第一番目の三建目に加藤兵衛重光市川團十郎中村座にて莊子論語の編暫のつらね團十郎自作の文に曰く東雲南山に横たはれば西鳥啼を出るとかや又北海に大魚あり此魚化して鳥と成る名付けて是を大鵬と呼ぶ水擊棧敷切落中の間引船鼠木戸チイタチよりのお目見えは云はずと御存知四年ぶり四國を廻つて猿若が花の顏見世今日霜月の〳〵團十郎御所記一本化に作るの言傳もまめで御無事で御取立立ば芍藥ト　すりや牡丹あるき姿はしんぞ鬼百合鬼若衆鬼振廻の獻立には敵討のこくしやうに實惡の煮氷魚飯をくらひ酒を呑うでをもつて枕とす樂しみしんぞ新參者死生命あり富貴天

生むてつぱち此人にして向ふ見ず學て時々首を抜く亦樂しからずや三舛にして立五十にして天幸を知るとかやかきの素袍の禿より一度に(も)御げん中島の牽手あまたな公家惡に今日といふけふでつくわしてお江戸一對のしやつゝらをならべ重光千万大慶に存奉る祭は季氏泰山よりおもきは海老がゆづりのくま素袍(異本素きをとあり)さきにあかつゝら一陽來復の御目見えは八百八町おなじみの加藤兵衞の佐重光といふ肝癪若衆とホゝ敬白

召よする暫らく有て奥よりも大格子の織物に紅の袴を着鐵棒杖に突あたりをにらんで立たりしは身の毛もよだつばかりなりかたり聞んと申ける（此間せりふ）酒と聞しをよろこび先客僧たちこなたへと椽の上にぞせうじける合(セリフ)童子盃取上て一つ受てはさらりとほし賴光にさしにける肴はなきかと有ければ今切つたると思しくて股と腕とを板にのせ坐敷へこそは出しける某こしらへ申さんと腰より差添すらりと拔しゝむら四五寸おし切て舌打してぞまゐれける合(セリフ)童子も却て賴光を禮拜するこそ嬉しけれ合(セリフ)鐵棒を突はつたと白眼(にらん)て立たりける合(セリフ)誠しやかにのたまへば合(セリフ)殊さら持參の酒に醉たゞくりこと、思し召我等も御身の其姿うち見ては恐しげなれど別てつよい(異本馴れてほひとあり)つは山伏とうたいかなで、心付奥をさしてぞ三重

市村座七福神の文句

それいざなみいざなぎ夫婦寄合まん〳〵たるわだつみに天のさか鉾おろさせたまひ引あげたまふ其したゝりかたまりて一つの島を月よみ日よみ蛭子そさのをもうけ給ふ蛭子と申は戎が事よ骨なし皮なしたあいなし三とせ足立給はねば手くる〳〵〳〵來る船にのせ奉りて青海原へ流し給へば海をゆずりにうけさせ給ひ西の宮の戎三郎いともかしこき釣針おろし萬の魚をつり釣た姿はいよ扨しほらしやひけやひけ〳〵ひくもの品々さまがきはずみ琵琶や琴皷弓三味線しのゝめ横雲そゝこでひけ小車子供たちござれ寶引しよ〳〵と帆綱引かけ寶船ひゝて來たいざや若衆網ひくまいか沖に鷗のはつと〳〵立たは三人ばり強弓ひよつぴきひやうりひよつと射落せば浮つ沈みつ波にゆられて沖の方へひくこの水無月半祇園殿の祭山鉾かざり渡り拍子で引で來た合拍子揃へて打や太

皷の音もよさ鳴かならぬか山田の鳴子〳〵引ばからころからりころり〳〵からころ〳〵〳〵やくつばみそろへて神の駿馬をひきつれ〳〵いさみいさむや千代の御神樂令神の利生はつげの櫛〳〵引て七五三繩のながきえにしを

河原崎座甲子待の文句

甲子待に聟取りすました中にたつ人誰々なるぞ事も愚かや戎三郎扨又料理は布袋福祿まち女郎には器量自慢の辨才天十二の女郎が酌床盃おとりもちさせ給へや金銀うら〳〵（異本からかとあり）福德そく〳〵家藏まん〳〵億さい孫彦やしや子にかえつくひつつきさつさゑいさつさゑいさつさゑいさつさ數の寶を〳〵船に車に不二の山ぢやぞ〳〵富士はこゝ拍子揃へて手拍子揃へて祭る今宵ぞ叶ふたり千秋萬歲末ぞ久しき

中古江戸三座通詞の事

木を入るとは（拍子木を打つ事）きれたとは（幕がしまつたといふ事）きいたとは（見物のうけのよい事）わつは詰（つめ）とは（何事もよいと云ふ事）あらしやばとは（始て役者になつた事）すかまたとは（間違ふた事）おべつとは（つゐしやうけいはくの事）樂屋落とは（仲間ばかり分る事）首とは（緣切といふ事）性根があるとは（きが有といふ事）時代とは（古風なかたくるしき事）いたゞくとは（物事しくじりし事）鳶子とは（素人の子供の事）でんぼうとは（只見る見物の事）穴とは（土間棧敷の明てある事）丸とは（土間棧敷のかりきりを云ふ）とんちきとは（役に立ぬたはけの事）さしがねとは（我がかくれて人を遣ふ事）掌握とは（人の物を掠める事）ゑへんとは（間拔の事）はねたとは（馬鹿の事また打出しの事）櫻丸とは（身錢を遣ふ事自腹を切るともいふ）鞘當とは（色の事にて不和なる事）しめろとは（ぶちのめす事）矢ぶみとは（無心の事）怨靈とは（催促の事）柳とは（女郎買の太皷持の事）つゝ込とは（人の中言いふ事）忍ばせるとは（くすねる事）しやうがとは（しわい事）右の外に數言あれども通用せぬは略之

江戸狂言待た暫の事

市川家代々の藝にして顔見せに限り時々勤る事ありといへども甚だ古風なる物にて當時の人氣にかなはぬ物ゆゑ大に廢れたり暫の素袍は柿色に三升の紋と定む市村家橘はかちんの素袍にて紋は渦卷を三升に

此畫は鳥居流にしかみと云ふ畫なり團十郎代々いつにても如此畫なり故に別に似顔を出さぬをならひとすと云ふ



豐國画

して  とし嵐雛助は紋を  叶を角に改めたり文化中江戸森田勘彌浪華へ來つて暫の役を勤めたれども常に見付ぬ古風なる狂言ゆゑ不受なりしが是らは江戸荒事師の勤る役にて江戸の風土に叶ひし者なるべし七代目白猿碓井

當世榮花物語の序 附初編六編迄の目錄

伊物源語は倭語の妙を得たる書なれば我國の寶とす是に次ては清女が枕の草紙赤染が榮花物語なり此書始世繼物語とありて他の作物語と變り歷世の事實を憚る所なくしるし衣裝の色調度のかざり言語の樣其代の趣を盡したれば古の證とすべき事多し爰に元祿より享保の頃竹本豐竹の淨瑠璃の中に近松門左衞門西澤一風錦文流紀海音等が作せる文を見ればはかなき世話の作物語とはいへども言語のさま調度の品衣裝の色まで其頃の男女の癡情趣を盡し其頃の一班を見るに足れり伊勢源氏枕の草紙抔はやん事なき方々の弄物なれば其書も遺れど此淨瑠璃などは纔かに遺り薄き綴り物のうへ細字に假名のみ多く讀に煩はしく年々に破れ損じてしみの栖となる事を惜み佳本を原として讀易きやう文字に直し文に聊も筆を加へず世話の三段物六部を撰書集めて後に評を著し昔も今も變らぬ男女の痴情をしらしめ勸善懲惡の端にもと三卷の雙紙となし外題をおもふに癖物語鄙源氏などはとくに呼て今枕草紙といへば浮きたる春畫とおも

へるものをかしく其事實に近からんとの意をもて當世榮花物語と號し追々に卷を繼て世に弘めん事を思ふのみ

維時嘉永四年亥春　浪華西澤一鳳軒李叟述

同初編より六編までの目錄

濡髪長五郎昔米萬石通　越川屋竹取七長町女腹切　刀屋半井筒屋お花嫁道具屋與兵衛卯月の柂　但馬屋清十郎夏歌念佛　手代お花半七心中重井筒　井筒屋源六戀の寒晒　重井筒屋おふさ博多波枕　阿彌陀くじ小町や宗七二十五囘忌　笠屋三勝半七阿波の鳴渡　藤屋伊左衛門夕霧琉球屋おさと萬屋淀鯉出世瀧徳　薩摩歌妹脊の中酌　薬酒屋おき幸　茨木や吾妻　江戸屋勝次郎　菱川源五兵衛　南手代野口屋小勘助　大文字屋平兵衛（南野屋草野カ）　紙屋伊國や治兵衛　紀の國や小春心中天網島　天満市郎兵衛　長柄の小まん心中二枚繪雙　關の波や與作待夜小室節　丹波や久兵衛山のするゞの松山　八百屋半兵衛代心中宵庚申　嫁八百屋お千代心中二腹帶　茶碗や喜平次衛心中生玉の心中　丁稚屋忠兵衛冥途の飛脚　油屋お久松袂の白絞　龜屋梅川忠兵衛冥途の飛脚　柏屋お才重帷子　藤井筒屋お雪之助男色加茂侍

山崎與次兵衛壽の門松　藤屋あづま助六二代紙衣　淺香野櫪三郎重帷子　萬屋やなぎ揚卷心中涙の玉の緒　扇屋稻野屋半兵衛小いな廓の色揚　妻お糸代久兵衛井戸端女房小むめ野中の隱れ井　藤屋巴

都合三十六部各上中下三段物六部を一編（三卷）として奥に本說の時日書加へ興行の月日作者の名をしるし六編目まで出せり猶是にもれたるを追々に七編より卷を繼て讐はゝ額風呂小三信濃屋おはん雁金屋金五郎帶屋長右衛門等を始め前に出たる名前にも增補のおもしろき物は再び出し後には三都の歌舞妓狂言宮薗宮古路常盤津富本新內祭文等に殘りし名を擧る時は心中情死の人名甚多し其內舊本の正しきを撰好人に備ふ

傾城繧繝幕湯の筋書

傾城戰國策と賦したれども外題かたく色氣少きにより戀女房の世界に寄せたれば繧繝の幕湯とは賦しけり但馬城崎の溫泉を心にこめ手綱は但馬の似口なり有馬には幕湯ありて城崎に幕湯はなけれど所謂狂言綺語なれば唱へのよきを呼ぶなり殿を道之助家老を左京といふより由留木馬之助鷺坂左內と呼ぶを趣向のもとゝして但馬丹波は隣國にて同じ但州なればなり丹波の國守由留木左衛門は養子にて若殿馬之助の姉

城崎御前の聟は當殿左衞門なり伯父敵高橋玄蕃の頭國を横領せんと鷲塚官太夫同弟八平次等とはかりて馬之助に放埒をすゝめなきものとせんと計り惡事を工む若殿は有馬の湯もとに遊んで島原の傾城を呼寄せ湯女交りに遊興しもと捧へたる短氣者にて伯父敵を始め佞臣共を討すて家國に心を掛くる者共の根を絕さんとの心なり古く用達の町人丹波屋與三兵衞悴與作親子共有馬へ饗應方に付添ひ來て與作は若殿の放埒に遣ひ捨たる用金の科をあびて追放となり若殿は諫言する者を勘當し又は手討とするゆゑ國家老鷲坂左內若殿を預り歸るは序幕なり二つ目左內の屋敷に若殿と傾城預り有町人丹波屋與三兵衞若殿を日毎の見舞に來る以前若殿に勘當受たる伊達の與作と云ふ立役有て若殿の面體に似寄なるゆゑまさかのとき身代りにならんとの心にて左內の屋敷へ詫に來るこしもと重の井是に兼て惚れ居て左內は此二人を思ひ合たる中なれば夫婦としてけふ足利殿より若殿に切腹させよと使者來る故與作重の井を若殿と傾城の身代りに立よと謎々をかくる若殿は一間より立聞して身代りより我死んとの心なり暮六の時計にて左內は

鳥目なれど隱して見ゆるふりして檢使を出むかふ伯父高島玄蕃城崎御前入來り若殿に切腹させよと云ふ左內若殿に用意よくば是へと云て身代りの與作を呼出す誠の若殿奥より出て切腹する傾城も自害する姉君は誠の若殿故愁嘆伯父敵はよろこぶ左內は與作重の井の兩人と心得見えぬ眼を見える體に見せ只尋常に御最期を云ひ居る姉君そうではないと云はんとするを若殿は左內にしらさぬ樣に姉に仕方する與作重の井は事おくれて身代りにも立ず蔭より身をもむ八平次は序にて追放と成り官太夫は兄殿を城の崎の溫泉の中へ毒を入殿は毒氣に當り俄かに死去としらせに來る皆々驚く伯父敵はよろこんで跡目はさし詰おれじやと云ふ心にて切腹見屆ければと官太夫を連れて跡にて御臺兄殿は湯にて死し弟殿は切腹どうしたらよからうと泣く左內は始めて若殿の最期を聞て大に驚き與作重の井殉死せんといふを兄殿の樣子覺束なしと館へ走らせ跡にてあら嬉しやなアと鳥目も偽りにて本名名乘り當殿は伯父の手をかつて死せ若殿を忠義顏して腹切らせ日頃の本望なりと謀反人となる御臺若殿扱はと詰よるをあれ出して廣庭へ突出す

跡へ與三兵衛見付愁嘆若殿は切腹ながら與三兵衛を親人樣と云もと丹波屋與作が誠の若殿にて馬之助と欲心にて取替おきし事あらはれ與三兵衛身の懺悔して腹切る與作重の井取てかへす御臺は伊達與作を新左衛門と改名させ追放の丹波屋與作は誠は由留木のお胤なれば行衛を捜せと云付る新左衛門若殿の在家を捜しに出る是二つ目なり三つ目四つ目は彼神谷轉といへる薦僧と成り居たる一話あり此こむ僧の實說はさして仕組となる筋にあらざれば安永年間の小說梅龍主人の作にしたる續新齋夜話の卷一農夫の信義公廳を感せしむと云ふ條を由留木の落胤丹波屋與作に綴りて脚色せり其本文

續新齋夜話の一話

武藏野の廣き御惠の風に偃(のべふし)て草葉數多に結ぶ軒端の忍が岡近きあたりに泉屋某と云ふ酒肆あり棟高く住なしたる老店にて奴婢大勢扶持し貨財庫中に充ぬ一子得太郎は寬柔に長(ひとゝな)りて鑼羅の術に疎く剩へ近年花街に入て多く金銀を費し侍りしかば父母大に怒りて家內を追出さんとせしを親屬どもやう〳〵に宥め去るにても一旦若氣のあやまちなれば有るまじきにもあらず以來をこそと得太郎へも敎訓し遠からず婦を迎へてなど丶世上一般の經濟に父母も一子の事と云深き罪ならねば怒も春氷となりて兎角に迎婦の事を急ぎ得太郎も過を改め經紀(經書カ)に心を委ねしばらく實貞(體カ)に見えしが赤繩結び難くして三年計り過ぬ獨枕のつれ〴〵又或夕紅塵を分けしに宴席の欣々たる紅閨の艷々たる腸にしみていつしか冷炭再び炎となり或時は酒を携へて龍山の花に遊び或時は船を浮べて墨水の月に戲れ放蕩先年に超過し亡失せし黃金忽ち二百斤におよび秘置の一隅を空しくせしかば父母再び怒を發しこたびは親屬どもに肯はて終に久離して一家を放逐しぬ得太郎詮すべなく元來一鶩の袖中に在るなければ只茫々然として路頭にイしが窮情の內に一策を思ひ出して梵論(はろんじ)寺走り入て身の上を語り托鉢せん事を訴しかば事務聞屆けて兼て戲席にて玩しを幸ひに笠下に是を鳴して日每に潘中を廻りぬ渠等が中にもさま〴〵の掟ありてかゝる放蕩者は同鄕にのみ長居する時は又禍を生ずるものなれば遠境修行すべしと先達を添へて京師に送りぬ旅中とても唯一管の音中に得る一握の雜穀をもて薪

にかへ鹽にかへ宿り需ればいと心うき旅衣馴にし故郷のみ慕しく先非を悔ゆる事切なれども落花枝に還らず流水源に回らぬ身の上たもとの露の零落はて漸にして京都に至りかの先達の計らひにて幽なる旅宿を取與へられ先達は浪華の地に所用ありと別れ出ぬ得太郎其宿より出て洛中を托鉢せんと市中縦横に廻りしかど爰は元より町の名だに綾や錦を立續きたる紫陌の地繿縷の袖の恥かしく何とやらん肩身すつけにて竹の音だに快からねば邊土の地こそ心やすく中々施物あらめと昨日は岡崎眞如堂の邊を吹めぐりけふは太秦鳴瀧の在家そこゝなく修行し侍り夕かけて廣澤あたりの農家の門に彳吹よりしを繩すだれの内より六句餘りの男出て修行者にこそ侍れ今日は吉日なり進らすべきものはなけれども此方へといへば辭するに及ばず内に入りしに漸夫婦自炊のやうなり茶などを與へ天蓋をも取てくつろぎ給へと云はるゝに然らばゆるさせ給へと蓋打置あやしの折敷に强飯盛てさし出さる圍爐裏にふすぶる一塊は老婆莫レ怒飯飩無、笑指灰裏芋栗香と作れるもかくやと佗しく哀れなり御施に預りし御禮に一曲手向奉らんと竹取出ししばし吹て早日も暮近くなり侍れば暇たまはらんといふを主の男暫らくと留め扨も旅僧は何國の人ぞと問ふに東都の産のよし荒増を語れば泉屋某殿の所縁やと問れて大に驚き夫は如何にして見知たまふ申に付て恥かしく侍れどもかやうの身分になりて猶も命の捨がたく斯く雲水の客と成りぬる、語ればあるじ大に嘆息し扨野老は往時泉屋の奴にして御父の大人には數年恩惠に預り君の三歳に成らせたまひし年まで奉公せしが故郷の親老衰し家業を繼ぐべき者なくなりて暇たまはり其折も深く惠に預りて爰許に歸りしが親も程なく失せ夫より打つゞき凶年に逢ひ今に幽なる煙を立侍れども大人の御惠みは束の間も忘れ奉らずけふ計らずもお顔を見奉りしが何とやらん大人の容貌におぼえたまふを夫とはかけてもおもひよらねど御面影のなつかしさにかく問奉る事のかくても朽ぬ三世の御緣にこそまづ〳〵我家にとゞまり給ひ心安く起居もしたまへ併しかゝる困窮の身なればゆるやかに養ひ奉る事は叶ひがたし日々托鉢に出給ひて助たまへと隔意なき辭に甚感じさらば兎も角もと爰に草鞋を解て日々近郷を修行し些の施物を

收けり一日主の云君以往の非を改めて故郷に歸り父母の勘氣を詫て家業を繼給ふ御志はなきやと有りしに得太郎夫こそ夙夜の願ひなれども再應命に背きし不孝と云ひ何一つ志を改めたるといふ證據なければたとへ貴丈の挨拶にても詮あるべしとも思はず尤もかくまで辛勞せる身に不孝の罪を思ひあたりぬれば以來柳花を見る眼なしと涙を流す主が云ふ君その志おはせば試に云はん君彼費失せし二百斤の金子を辨じて故郷に歸り先非を悔て詫給はゝ雙親の御怒解けざる事あるべからずと問ふいかさまさもあらば勘氣もゆりぬべけれども天よりや降なん地よりや涌なん其嘘年を待つべしと一笑すれば主色を正しうして若し誠に其數の圓金有て歸郷の本懷成就せんならば我に一策ありいぶかり給ふなと云得太郎は主の我を慰むる志の老實なるを喜び厚く恩を謝しぬれども一顆の金銀だに日を重ねて入らざる門の何の計あつて斯くはいふよと心裏には肯ざりしに日を經て主得太郎を招き君の御運未盡ず今日斯の如しと二顆の黃金を袖より出しかくある上は明日急ぎ關東へ旅立給へ御名殘はおしけれどとく〳〵と諫るに一向夢中の心地しこは何とも不審なりかゝる貧家の內に何としてかくまでの黃金を需めたまへる事よと問ば夫はお物語の長く侍れば後日野夫江都に下つて御歸家の悅びを述ん後寬々語り奉らん善は急げとやゝうん申せば少しも早く下り給へと其夜は首途を祝ひ一壺の魯酒をぞ汲かはしける得太郎は餘りの嬉しさに終夜眠に就かず熟おもひ廻らすに去るにても貧窶人のいかにして得たる金なるや覺束なく是を受るも空恐しきやうなれ共人の志をもどかんもいかゞ也夫よりも少しも早く關東に下り彼者の鴻恩をも父母に訴へ其上にも我身の勘氣ゆりずば再び京師に持登り主に返して後いかなる淵へも身を投べしと所存を極め曉深く立出るにも主夫婦の日頃の恩惠といひ況してや莫大の黃金を投せられし仁慈の程滿口に霜を含める心地して袖の涙ぞ萬分一の志を見せける斯くて旅中の要心に半は笠にかくし半は腰に卷て故郷に歸る道ながら父母の心のいぶかしければ錦にあらぬ旅衣日頃の恩を謝しかねて彼繩簾をのみ願がちに遲々としてこそ別れけれ斯して逢坂山を越え大津の驛にかゝりしが路費なくてはと其所の交貨店に立寄り彼金を一片出して

方孔にかへんとせしを交貨店の副手（てつだい）其判金を見て甚だいぶかる體なれば若し怪しくば取替てんと又一片を出しければ是を取見て暫く思惟しけるが内に入て何やらん告ると見えしが忽ち三四人の力者出て來り盜賊遁さじと追取り巻きぬいかに麁忽と呼ばれども耳にも入れず直ちに縛して京師の廳官へ引行ぬ頓て京兆の前に曳出し交貨店の者申すは某の月某の夜我店へ盜賊入て判金百斤紛失せし事既に訴へ奉る所なり今日此者の懐中より出す處の二片の金我家の極印有て紛失の品に極れり公廳の糺明を願ふと言上すれば得太郎へ如何と公問有り得太郎は思ひも寄らぬ事なれば一言の返答もなく低頭して考ふるに是全く彼農夫が我を救はんため盜賊して得たる金と察せり是を陳ずれば咎を恩人に蒙らしむべし迚も我は是までの薄命なりと覺悟し今は何をか隱し奉るべき某月某夜渠が倉壁を穿て盜取たる所にて候曾て同類なく我に親戚なき者にて候へば速かに罪に行はるべしと款條明白なりしかば強て推問に及ばず獄中に囚はれ懐中の金は廳に預り置れぬ去るにても此上は死刑に行はれん事疑なし彼恩人の我が東行を果さゝる事を聞かば定めて恩を空しくせしを怒るべし是又黄泉の愁なり今又斯と告ばもし訴出て我を救ひ己を罪なはれん事も計り難ししかし我刑死の後にかゝる事ども告んにはと同じ獄中に居合せたる輕罪の人の此程に免れて歸るに因て傳言し我刑死せしと聞たまはゞしか〳〵の譯を廣澤の農家何某に具に語り給はれ厚恩の程は生々忘れ侍らずと慇懃に頼みやりぬ其後大津交貨店に脱捨し天蓋の内に又百金のあるを見出して急ぎ持參り訴ぬるに扨は是は他の家にて盜みたる金なるべしと獄中より引出され再び糺問を蒙れども元來盜まざる金なれば此款條に當惑し只洛中の家々にて盜み集めぬるとのみ云ひしかば京兆甚だあやしみ先回の百金をも盡く出して交貨店の人をして見せ給ふに彼が家の極印は六七十片に過ず彼是故ある款條と見えたれば後日の糺明たるべしと又獄中に歸されぬかゝる折節誠の盜賊共の死刑に行はるゝ有りしをかの傳言を肯し者聞て今こそと廣澤にて何某が家と尋行て細々物語りしに主大に仰天し其金は我女子有て幼よりさる槐家に仕官させ置たるが貌も見苦しからねば惠み深かりしを強て御暇を乞て直に島原の娼家

へ賣渡し償金として得たる二百斤なるにいかにして盜賊の疑ひは受け給ひけん我貧窮の内に大金を得たるを怪しみ思したるは理ながら大きなる齟齬なりしかし足下に語りて益なしと傳言の情を謝し頓て一通の訟書を捧げて廳前に斯くと告ぬ京兆固より彼金數の合ざると云ひ得太郎が欵狀の潔き却て疑なきにあらざれば未だ其罪を決せず猶外々の穿鑿を促されしに果して如此なりしかば亡八を呼寄せ尋問ありしに何の違ふ所あるべきや其金は大津の交貨店の息男父が函鎖を穿て花街の奢に遣ひ捨にしを盜賊の入たる體にもてなしたる事まで掲然と露顯に及びぬ元是彼農夫が一渾の信義より得太郎が先非を改ると云且恩人のために命を抛しも大に公廳を感せしめ江都の父母へも始末の意趣を達せられ得太郎斯く志を改る上は不孝の罪をなだめて家業を繼がしめ農夫が恩の厚きにめでゝかれが娘を島原より購身して得太郎に嫁せしめよ然る上は農夫夫婦も別に謝恩を待に及ぶまじかの購身の料は則此二百金を以て償ふべし交貨店の男は己が盜を人に託し既に過て罪なきを罪するに至らしむるの姦賊なれば死刑に行ふべしと一々微細に命じ給ひしを得太郎遮つて願ひ奉るは交貨店の男若輩の一應親の寶を掠し事小子も同じ罪にして彼者は雙親まだ愛を斷ず然るを死刑に行はれん事甚見るに忍び侍らず且今公命を以て小子が歸家を免され侍れども我父母に對して些少の功なし願くはかの二百斤の半を小子に給はり恩人の志を告げて父母の怒を解くの品となさしめたまへ交貨店の夫妻には男が罪を金百斤にて贖はせたまひ彼是黃鸝の金をもて娼夫へ購身の料に宛させたまはらば有がたからんと滂泣して訴へしかば京兆も得太郎が理を盡す詞と云仁恕あるを稱し給ひ願の如く命せられしかば交貨店は多くの金を費すといへども豪富の愁とするに足らずして子の刑を免かれしをよろこび得太郎は窈窕たる婦を伴ひて舊里に歸りぬかくて後は心を正しくして家事を修め父母の後半生を安樂に在しめかの農夫へも寒暖暑冷を訪ふて睦しく世を渡りけるこそ愛度けれ

纒幕湯後齣脚色の話

此一話を題として得太郎を丹波屋與作當時零落して梵露寺慶政（けいまさ）本名は丹州由留木家の胤馬之助也廣澤の

農夫を伊勢街道横田村彦兵衛島原へ身を賣し娘を小万とし大津の兩替屋を白木屋佐治兵衛息男の名を義兵衛役人の名を本田彌惣左衛門と呼び悉く戀女房染分手綱の人名をかり三段目四段目に仕組み五齣目沓掛の場竹村定之進後家の老母遺りゐて奴僕逸平馬士を渡世として老母をはごくむ重の井由留木家再興に付道成寺の能を先例にまかせ勤むべき旨いひて鷲塚八平次序にて定之進の能の秘書を奪ひ取持居て當時馬士江戸兵衛と改め此場へ出て勤めようと云ふ奴逸平能の秘曲を覺え居て江戸兵衛と能の秘事を問答していひ勝ち貧家にて屋根漏り柱傾きたる能舞臺にて逸平道成寺を舞て重の井に江戸兵衛を討す場有て團圓六齣目まで腹稿なれり逸平世話場にて道成寺を舞ふは舊勝負革奴道成礎とて先に市川團藏奴與次平にて勤め近來梅玉東都にて櫻菅笠といふ外題にて勤めしかたを今の翫雀玉の手綱にさせしかど皆大序につかひ見所すくなしかゝる曲をするには狂言の奥に至て見せずんば佳境に入る事遠し依て今までの古き筋を捨て一部の趣向を新奇に巧み頗る穿多し抑戀女房の世界は世話時代を兼御家狂言にはよき世界の物なり始近松平安堂丹波與作と外題して三段物に作りし上卷は丹波由留木家の玄關先にて調の姫東へ輿入の用意の中へ馬士三吉道中雙六を振て通し馬に雇はれお乳の人重の井と親子の愁ひ中の卷は關の宿に與作馬士となつて招婦小万と艱難し三吉干糠の八藏を殺し科人となり下の卷小万を馬に乘せて道行の跡錢掛松にて與作小万と心中せんとするを鷲坂左内兩人を助け本知に歸ると作し後伊達染手綱と外題をかへたり此後戀女房染分手綱と呼て丹波與作の上の卷を十段目とし中の卷を十一段目大切とし重の井與作の不義あらはるゝといふ前狂言を增して書廣げたる物ゆゑ舊作丹波與作とは齟齬したる所も有けり先舊本に沓掛とあるは京師より丹波街道へゆく沓掛なり道中雙六の場は丹州の館の玄關先なるを戀女房には本陣宿とし沓掛を乳母在所と本文にあるを東海道に宛て關坂の下沓掛と作せり三吉の詞に乳母は鳥羽の祭の團子が咽につまつてと云ふは都の鳥羽なり伊勢街道沓掛の乳母都の鳥羽祭に行くは道隔りて聞えず然れども戀女房の方世に行はれて丹波與作の淨瑠璃を憶し人少く庇貸て母屋とられしとも云はんか舊本丹

波與作は其頃の當り淨瑠璃にして竹田出雲が作の忠臣藏茶屋場に由良之助のせりふにも丹波與作が歌に江戸三界へ行んとしてとは淨瑠璃の外題丹波與作をさして云ふなり今是を外題とおもふ人稀なるべし猶此外に與作の考評多けれど當世榮花物語四編目丹波與作の部に出せば好人見たまふべし此世界に增補數多ありて東海道戀關札驛路小室諷新板道中雙六けいせい染分手綱けいせい玉手綱淨瑠璃にては伊達染手綱と云も待夜の小室節といふも丹波與作の替外題なり予が纏幕湯に此世界の穿を委しく演んとおもひながら近頃の事遠慮なきにしもあらずと腹稿のまゝ出すなりけり

豫州松山開城の一奇話

介石記に元祿年間赤穗開城の兩三年前伊豫の國松山の城主にいさゝか過ち有て開城申渡さるゝ事あり此時の城受取の役目は脇坂侯と赤穗の淺野侯なり長矩病氣に付家老大石內藏助主人の名代に行く城中に一家中籠城して防戰の用意まち〳〵なりしを大石良雄理を解て速に城を受取りし事を記せり海老藏（七代目團十郎）此一話を忠臣藏裏表四段目の裏に仕組くれよと予に托せり松山開城には大石請取の役にて云ひし事是は我主家の事にて道理おなじければ近頃脚色してさせしが忠臣藏明渡しの場は兎に角狂言少く實說によれば甚淋しく講釋を聞くがごとく鳴物囃子等もあしらひ方なく實に仕にくき場なり故名人役者種々工夫を凝らせすれ共明わたし幕切に至つてはいかんとも仕難き役なり海老藏もとより此役に色々工夫をこらし予松山開城を書入舞臺にかけて見たる所道理に背く事なく大によく諸見物も批評なく其後誰々も四段幕切は皆是を眞似する事とはなりけりされども予が書きたる正本と海老藏に一部書て與へし書のみにして他に此本の散在する事なく有るべき筈なし所謂盜本にてする事なれば其文句はいかなる事を云ふやらん覺束なし元來假名手本の世界にて予が增補ばかりも數十部あれば昔より淨瑠璃歌舞妓に珍らしき場のみを類聚して忠臣藏類聚大成四十七卷を著述して世に弘めんと思ひ草稿半にして果さず此裏表四段目の裏も類聚大成に出すべき物なれど奸盜本に言語の過ち有るを予が虛名を賣られん事を恐れ爰に出す是松山開城を種として脚色したるものなり

假名手本四齣裏の正本

口幕の時浪幕を舞臺前にひくト（直におきのくらいのにの歌になり漁師腰簑にて三四人網を引ながら下手より）外へ出て（漁師）何と皆の衆けふは天氣もようて此樣に漁のきく事も珍らしい（同）△それ〳〵此國は鹽冶判官樣の御領鹽といふては日本一（同）□かういふ結構の國にくらすはこちらの仕合せといふ物じや（同）×此間から御先祖の御法事毎年大山寺でのおつとめ（同）○あれを仕舞ふたら國家老の大星さまも鎌倉へ行かしやるのぢやそうな（同）△思ひなしかゑらう網がおもいぞ此勢ひに曳うぞや〳〵（同皆々）よからう〳〵（ヨイ〳〵と網を曳きながら幕の内へはいるヨイヤナ此なみまくを切ておとす）奥深に浪幕舞臺一面に鹽屋の屋根磯ばた打寄の書割後所返しになる仕かけ有り直に淨瑠璃になる「堪忍の文字は貴賤の寶なれども時によつてはやむ事を鹽冶判官高貞一たんの短慮にて鎌倉にて御身の禍ひしらせを聞て國家老大星由良之助良金はけふ鎌倉へ出立と共に見送る一家中鹽燒濱に立どまりト（此内由良之助野袴ぶつさき跡より十内久太夫勘六丹平各上下にて見送りの心跡より家來大勢鎧びつ鎧など持出て上手より由良之助出て）何れも見送千萬忝う存ずる（十内）誠に此度鎌倉より早うち到來致すといへども其後何の沙汰もなければ先づ安心久太夫貴殿とくにも御發足のお心なれども御先祖の御法事も大切（丹平）是も例年の格式なれば打捨御立も心がゝり（勘六）然し今日御法事も勤終れば嘸御安心でござりませう（ゆら）仰の通り此程早打到着より鎌倉表へ心はいそげど毎年御先祖の御法會殊に今年は五十回忌御大切の御名代此儀も相濟したれば直樣發足晝夜を分たず旅行いたす（十内）さぞかの地にもお待兼立（四人）道中隨分御機嫌よくゝ（ゆら）各方にも御無事に「挨拶とりゞ〳〵なる所へ漁師がどや〳〵と（まく外の漁師籠にこのしろを山もりにしたをめいゝ〳〵もち出て）○鹽ハイ〳〵私共は此浦の漁師御家老さまと御見受申して此肴がさし上たう存じまする（同）□此通りのこのしろが今一網に上りましたが船に山もりにして十三艘（同）△此邊に限り今までは一疋も取れませぬのに此樣に取れるは珍らしい事（同）×私共も心いはひ又は冥加のために御家老さまへお目にかけます（同）○お納め下りませうならば（同皆々）ハイ〳〵有難う存じまするゆ此濱の漁師共が心ざし過分至極誠に見事なこのしろ東國にては澤山とるゝ魚なれども西國にては珍らしい（漁皆）さやう存じましておめに掛けます「大星つら〳〵魚を見やりゆら此つなせをこのしろといふは昔奥州に有德に暮す老夫一人の娘をもつ國の領主其娘

のみめよきを聞き娶らんと云娘は外に密夫有て嫌ふが故老夫領主に言譯なく娘は病氣と欺り此つなせを棺桶に詰め野邊の煙となす領主此あらましを知つて詠みたる歌にみを奥の室の八島に立煙り誰が子の代につなせ燒くらん此邊には稀なる魚の日々に夥しく上るといふは十内濱方の大漁は御閉門も御免あるべき立四人吉さうでござりませうからゆつなせを子の代りに燒しより子の代といふ此城の上るといふは立四人ヱヽゆらアイヤ國恩をおもひ志の段過分〳〵「汀の方より遠見の者あわたゞしく走り來て侍ハッ御家老さま是にござりまするか只今早打と相見え御城内へかき込ますやうにござりまする立四人ヤヽすりや又もや鎌倉よりゆら早打とあらば對面のうへ發足なさん立四人御歸城〳〵「城内さしてぞ引かへす跡につゝくり漁師共と皆々上手へ家來魚かごを持引かへしてはいる漁○さてはまた早打が來たゆゑ御家老さまは走つていなれた同□しかし今御家老のはなしでこのしろとは子の代り同△つなせを子のかはりに燒たゆゑこのしろ同☒此因縁もさつとわかつたサア皆ござれ〳〵と橋懸りへはいるチヨンチヨンにて所がへし向ふ遙か打拔の千疊敷橋懸り切幕の所鏡戸となり打寄の板は不殘疊のへりにかはり鹽屋の屋根仕掛にて打返すと大衝立となる此陰に力彌後鉢卷上下の上を刎早打の形り氣絶の體是を速見藤右衞門千崎彌五郎富森助右衞門片岡源吾上下にて立かゝり介抱の體城の太皷にて道具納る四人大星力彌殿ト藥湯などのませ呼わる内奥より由良之助上下に改め跡よりまく明きの四人の諸士付出て由良之助能所へ座につく力彌少し心付きて力彌何れも此所は八人御本國のお館でござるぞゆら力彌〳〵過急の早打子細は何と力彌誠にお館オヽ親人何れも今日の早打は殿樣の御大事お家の大變でござりますトいひさしのりかへるを皆々介抱するゆら御大事とはして〳〵樣子は力彌先達の早打にお聞の通り十一日勅使御到着の始より十四日御勅答の時殿師直を及傷に及び給ひ師直は其まゝ安堵殿には扇が谷のお上屋敷へ嚴しき閉門仰付られし所翌日御上使として石堂殿御入なされ私の宿意に依て殿中を騷がせし科と有て殿にはやみ〳〵御切腹仰付られてござりまするわいのう皆々ヤア〳〵〳〵力彌國郡は沒收鎌倉のお屋敷も卽刻召上られ候へ共猶豫ならざる殿さまの御遺言かつはお筐の此短刀暫時も早く親人へ相渡せ委細は堀部安兵衞殿に言送らんと斧九太夫のお指圖ゆゑ何か捨置はせかへりましてござりまするト箱入の短刀白布にて腹にまきし

をといて渡す　速ム、すりや閉門のおゆるしもなく殿にはやみ〳〵御切腹仰付られしとなァ御切腹を千崎尤も日柄御場所も辨へず私の意恨にて師直を及傷に及び給ひし誤はあれど富森さす敵の師直は安堵にて殿に切腹仰付らるゝとは近頃以て依估の沙汰片山國郡は元より扇が谷の上屋敷まで即日召上らるゝとは餘りといへば情なき四人御取計ひト四人顔見合せ茫然と當惑のこなし由良之助いろ〳〵とこなし有て力彌シテ御臺さま御家門方にはお咎めはなきやカ彌サア其儀は私も心付かぬにはあらね共何を申すも過急の事殊に九太夫殿が諸事おさしづゆゑ其まゝ出立仕つてござりまするト由良之助つか〳〵といて扇にてう〳〵と打つ四人の諸士といめて四人大星どのコリヤ御子息を何ゆゑにゆら殿には御切腹國郡は召上られ是に上こす大事が有うか左様な大切なる國への早打此大役を勤めながら御臺さま御身の納り御家門方の御事なぜ聞たゝして出府いたさぬ九太夫が詞にしたがひ御大切を聞糺さず生づらさげて本國へよくも歸りし大だはけ不忠者めがカ彌其儀は程なく堀部安兵衛殿がゆ詞をかへすか立てうせうトきつといふ片由良之助殿御立腹は御尤なれどもそこはまた御若年ゆゑ富森殊に鎌倉より此伯耆まで二百里餘りの行程と云ひ千崎五日半に來たられしは中々若年の力彌どのには忠義の一心水速殿御切腹と聞御當惑ゆゑか存せぬと我々が御詫申す四人御了簡下されいゆら各々方の御懇意忝う存ずる殿の御大事を告んとおもふ一念にて鎌倉より御國表へ五日半に參りしとは世の常ならずあのまゝにさしおかば心ゆるみて落命におよぶ唯今嚴しく呵りしは張をゆるまさぬやうのためお家の浮沈御家中の安否いづれも退座無用とふれさつしやい速水畏つてござりまする何れも二度の早打來るまでは退座御無用でござるぞ四人心得ましてござりまするト幕明の四人下の鏡戸へはいる諸士向ふより諸士一人走り出て番手の早打堀部安兵衛殿只今到着致されてござる立人それ待兼し此所へ早く〳〵〳〵トはいる直に向ふへかけて諸士向ふへかけて四人り堀部安兵衛早打の摺にて上下の上をはねうしろ鉢巻にて走り出て花道でウンとのりかへる下座より元の四人の諸士出て藥湯を持出て四人の立役に渡す立役四人堀部安兵衛殿〳〵皆々本國の御四人安兵衛を介抱して城内でござるぞやトきつといふ安兵衛心付向ふを見てはら帶をきつとしめ本舞臺へつか〳〵と來て安兵衛由良之助殿何れもトいろ〳〵心落付るこなし有て皆々を見て双方より諸々ハットかけきて安兵衛御家老には御出席か何れも是へ皆安先達のおしらせは御閉門とばかり委しき事は申さず初度のしらせは力彌殿より御聞の通り扇が谷の上屋敷門戸を

閉して籠居の所石堂さま御上使として御上意の趣は私の宿意を以て御日柄御場所を辨へず執事高の師直へ及傷に及び殿中を騒がせし科と有て國郡を召上られ殿には卽刻御切腹相手師直はお咎なく手疵養生萬事の御手當本復次第出席〻の事檢使の横目は師直が昵近藥師寺治郎左衞門お下屋敷も明渡させ御本國の當城も受取有と直に發足今明日には當地に着せんまつた殿樣御切腹の砌大星殿へ吳々との御遺言唯恨むらくは殿中にて加古川本藏に抱留られ師直を討もらせし殘念楠正成湊川の戰に人は最期の一念によつて生をひくと云ひしごとく生かはり死かはり恨を晴らさでおかうかと怒の御聲諸共に短刀を逆手に取直し弓手に突たて引まはし御無念とゞまる短刀は大星殿へ御筐我欝憤を晴すべしと吳々との御仰有て立派の御最期御心底おし量り五臟六腑を裂く思ひ涙ながらに御尊骸は御菩提所光明寺へ在鎌倉の一家中御供申て御葬式まつた御臺所は御家門縫殿さま御下屋敷松が岡の御別莊へ御移し申鎌倉屋敷の取捌は萬事九太夫殿の指圖にて一先彼地を離散なし城を枕に討死するか又亡君の御供に追腹殉死を致すとも追て本國にはせさんじ大星殿の御下知を受ん先づさしあたるは今にもあれ當城受取のため藥師寺の來るは條それまでに評定が肝心とサア此事を存するから善とも惡とも分らねど九太夫殿の指圖を幸ひ鎌倉表の混雜を餘所に見なして過急の早打御國鎌倉召上られ家もなければ主人もなし力とするは大星殿追腹殉死仕るか城を渡して離散するか生ての忠か死ての忠か二君に仕る心はなく一心極る評議は此座何れも大切の評議でござるぞかやう申せばおこがましいが新參者の某も古さんの各も忠義の文字に二つはないじぎに依ては親も捨義のためには妻も捨る恩愛妹脊はさゝいな事忠臣義士といはるゝも武名を泥土に埋むるも大星殿の御發言腑をかたむる極意の程が承りたい彼地を立て只今までこらへ〳〵し口惜なみだ何れも御免くだされいト愁のこなしにて落涙す此内由良之助始終思ひ入にて短刀をおしいたゞき又箱へ入れ茫然と手を拱き思案の體四人の立役是を聞居るうち色々と身をもみ無念のこなしにて速水諸士の何れも我々四人大星殿へ密談の間暫時お次へおひかへ下されい四人心得ましたト皆々下座鏡戸へはいる千崎安兵衞殿には長途の御勞れサア暫らく御休息なされいト安兵衞を介抱して下座鏡戸の前にすゑ二人づゝ由良之助の雙方より詰めかけて片山由良之助殿只今安兵衞殿の仰せ一々御

聞取なされたでござらうな千崎鎌倉詰の一家中さへ過急の大變心の轉動どうせ方角はござるまい富森其上斧九太夫殿とても老人の事なれば一朝一夕で歸國致さるゝ事でもあるまい速水いかにも左樣その内只今にも當城受取の使者が參らば如何召さるゝ御所存ぢやな片山貴殿御先祖八幡六郎殿より代々御家老の御家柄なれば下知に付くは一統承知千崎たとへいか程よい御思案でも是がのひては詮ない事申さば一家中が一期の浮沈富森我々始め一家中末々の者に至るまで貴殿の心底承つて安心が致させたい四人サア思召は如何でござるなト雙方より顏を詠めつめかけていふ由良之助だまつて居るゆゑ片山是さ御家老由良之助殿おし默つてござつては相分らぬ千崎何となりとも御發言はござらぬか是さ御家老是は又どうした義でござる富森我々は代々殿の御恩を蒙る者御遠慮には及びませぬ速水いまだ御思案が付きませぬかハテ扨困つた義でござる片山此上は倒れもまづあれへおこしなされい三人さやう致さう〳〵ト花道中程へいて四人座を組みふと安兵衞を見て片山各方あれ御覽なされい先刻より我々が評議御家老はまた御所存も有う富森いかさま安兵衞殿は早打の勞れもあらうが我々が評議を餘所におしだまつて居ても濟ぬ儀速水堀部氏御手前も是へござつて相互に力をそへ評議さつしやれてもよいでないか千崎落付顏は其意を得ぬサア安兵衞殿是へ來しやつしやれ〳〵安イヤそれへは參るまい四人とは又なぜ安何れ大星殿のお思召もござらう手前は御家老の御意を承り其下知に付く存念その評議にはお省き下さい片山何れもあのたは言をお聞なされたか色々に申て見るが評議ではござらぬか省て呉ろと落顏付富森捨ておかつしやれ〳〵ありや轉動致し血迷ふてをる馬鹿者だ相手にさつしやるな〳〵千崎此上に評議は無益城を枕に討死は覺悟の前大手先へ出張して城受取の藥師寺めを討取申さう速水左樣〳〵此方は必死の働き付添ふ奴ばら何千騎をるとも切て〳〵切死まづ軍神の血祭りは片山幸ひ臆病者の堀部安兵衞富森血祭にぶつ放し一家中への見せしめ四人是ぞ屈竟と舞臺へ戻る（つか〳〵と本安何に血祭りに此安兵衞を討ち果すとか切らばきれ突かば突け軍神の血祭りに討たれもせうがコリヤお手前達狂氣したのか無分別と云うか氣の毒千萬片山さすが他家より養子の安兵衞千崎勇も武もなき臆病者富森譜代恩顧の我々にむかひ速水狂氣したとは能々申た四人いで此上は

ト四人刀のつかに手をかくる安兵衛きつとなる此時とめて　ゆヤレ待たれよかたく〳〵扨は城を枕に討死する御所存か四人いかにも我々が心は金鐵トめい〳〵胸をたいていふらハテたのもしい忠臣と思ひしに揃も揃た不忠不義不孝不仁の無道人大惡人とはお身達の事だはトきつといふ是にて四人顔見合せ安兵衛の方をすてつか〳〵と太星の前へいて雙方よりつめかけて　富森ヤア過言なり大星君のために命を捨る我々を山片不忠不孝不義不仁とは何のたはこと千崎大惡人とは法外千萬聞すてられぬ速今一言いふて見よ生てはおかぬ四人なゝんと反打てきつといふらまづ承らうは殿判官さまばかり御主人にて御臺所は御主人にてござらぬか四人しれた事御臺所も御主人さまさゆらば然らば各々方大不忠者でござる四人とはまたなせ〳〵トてい反打せいふら各々當城に籠城なし城受取の御上使へ敵たふは足利殿へ敵たふ同前是天下に對して逆賊ならずや然らば御臺所は刑罪御家門方に至るまでいかなるお咎めあらんもしれず手はおろさずと各々方の心より主人を殺し奉るは是限りなき大不忠まつた鎌倉在番の衆は固より城中に住む一家中親子兄弟緣者の輩幾千の數をしらず御仕置となる時は子として親を殺す不孝城中五百有餘の人々に討死さすは不仁ならずや類葉數多の妻子眷族何國にかくれ忍ぶとも天下の御威光を以て悉く大罪に行はるゝ時は是不義なり大惡不道人と申たが此由良之助が誤りか四人ム、サそれはゆらば誠の忠臣孝子と云ふべきは當城は天下の御城速に明渡し時節を待て御家門より御養子を願ひたとへ半知半所にても贋治の御家相立ば是ぞ全き忠臣義士親兄弟の安心は目前の孝養多くの人命を助くるは仁なり義也然る時は仁義禮智信の五常に叶ひ美名を末世に傳ふべしサア拙者が所存はかくの通り上使到着の節すみやかに開城あるか但し不忠不孝不義不仁天下へ對し逆賊の汚名が取たいか四人サアそれはゆら城受取の御上使へ敵對なさば冥途黃泉より亡君のおよろこびあるべきか四人ゆらサア〳〵〳〵ゆ各命にかけがひがござるか何れも方まだ了簡が若い〳〵トきつといふ四人段々理窟に詰る思入にて互に顔見合せ居住をかへる内安兵衛下座にて安ハ、アお國家老大星是を聞居て此時すこしまへ出て殿が只今の御理解安兵衛承知仕てござるトかんしんのこなし四人の立役銘々刀を提げ花道へつか〳〵といて中程にてすわり互に吐息をつき仕方ない腹切らうといふこなしにてうなづきあい肩衣をはれ肩をぬぎ素肌になつて腹切らうとする此内由良之助は安兵衛と力彌を招きさしづする兩人ハツと奥へはいる花道の四人かくごして速水上使を引受け討死とは存ずれど今大星殿の仰にも逆臣反謀となれば是非に及ばず千崎御本城を明渡すを

生頬さげてのめ〳〵と見てはをられず片山かゝる時節に討手を引受一筋の矢も得射出ぬは生身の腰抜同前富森鹽冶の御家に恥をしつた武士はなきかと隣國まで物笑ひは亡君のお恥辱速水一命をおしみ浪人となつて朽果んは武士たる身の恥る所千崎元より我々二君に仕へて後榮を計らん所存は毛頭なし片山討手來らざる內いさぎよく切腹なさば城を枕に討死同前富森義によつて命は蘆芥此場の殉死を望む所各心一致の上はおくれは致さぬ四人今こそ切腹ト立身にかまへ腹へ突立ゆヤレんとする本舞臺より待れよ旁殉死とあらば承知致したが御一統にお心殘の儀はござらぬか速水此期に及び何心がゝり千崎覺悟極めし我々が一命片山一旦つがひし詞は金鐵富森卑怯未練に生長らへる四人所存はござらぬト又刀を取直すを拙者はゆら敵師直を安穩に生置が死後の殘念四人ヤアゆら各々には此儀心殘りにござらぬか四人ムウゝト思案してきつとなる由良之助是と制す四人かたへ入てつか〳〵と本舞臺へ戻り由良之助の雙方より顏を詠める由良之助すこしひそめきて全うし時節を伺ひ師直を討取て亡君の御墓に献じ其後切腹いたしなば亡君尊靈如何計りの御滿足此場は無事に古例をたゞし作法を亂さず速に御本城を明渡しますイヤサ片手打の御沙汰とは申せども上へ對しゆら各々命をてお恨の筋はござらぬ唯一人でござるぞ昔が今に至るまでとゞまる所は各一心でござるぞ御承知御合點が參つたか御會得かゝ、手前に於ても千萬忝う存ずるト四人は聞屆るこなし由良之助は承知の禮をいふこなし有てきをかへゆらまづ御代々御金藏に納めある御軍用金を配當仕り思ひ〳〵に當地を離散し手前直さま鎌倉へ立越え縫殿樣へお目通りを願ひ御臺さまお跡々の事どもお願ひ申くはしく御內談申上御思召を伺ひなば大體由良之助めが存じよりと恐ながら符合致す事も御座あらん中々の御才子樣にござればお國勝手の拙者など迎も愚案の及ばぬ所でござるとくと御賢慮も伺ひし上ならでは容易に計らひませぬ最も御家門方には何の御沙汰も是なきよし是一つの安心直に手前は引返し都山科にしるべござれば是に引籠りまする御苦勞ながら其節彼地にて御會合下されば各々方の御存意も承り手前が存寄も打明て御談じ申す各々方は御當家格別の御家柄ゆゑ御若年とは申せ共かくは御評議に及びまするぞ別て爰に一つの難事がござる今にもあれ城受取の御上使御發向の節若侍一統に御上使へ對し不禮慮外御座有ては相濟ませぬ其砌手前一人が高聲に申共中々以て行

届きませぬ各方には手寄〳〵組下へ由良之助が下知なりと有て御制し下され い此義偏に頼まするぞ何事も委しき儀は山科にて再會のうへ心底打明し申談ずるでござらうまづそれまでは隠密〳〵ト 各々を制する所へ向ふより 幕明の四人の諸士をはじめ大部屋中通り紋中惣出にて上下諸士のこしらへ花道際より戸屋まで つゞきならび出て 久太夫只今遠見致せし所城受取の役人と見え早馬にて凡同勢五百騎ばかり御城下へかけ付ましてござる丹平して〳〵由良之助殿の御評議はいかゞ相成ましたな片山只今由良之助殿の心底承りし所千崎御軍用を配當して當城を明渡さん評議一決十内すりや當城を明渡し思ひ〳〵に離散となヱ、奇怪至極勘六我々には上使を引受一合戦仕り物の見事に切腹致さん皆々何れもござれト勢ひこんで花道へ引返さうとする四人の立役千鳥に入替り此中へおし分け入り雙方をとめる由良之助は本舞臺にてレ静まられよ何れも由良之助が唯一言申出す儀がござる立騒がずと各々方一同席に着つしやれト手をあげて云へど も皆々やはり向ふを見つめかけ出す四人の立役待つしやれ〳〵と捨ぜりふにてとゞめる由良 情なしかた〳〵亡君御存生の節は愚昧の拙者が申す事お聞濟あつたれどかく相互に浪々の身となればはや由良之助が詞取用ひはないと見える是非がない亡君の御無念御存意を達せんと思ひよりし儀もござれど手前が詞用ひなくば各々方には御勝手になされい冥途にて尊霊に申譯仕る御一統御介錯跡々よきに計らひめされト刀に手をかけ切腹せうとする手もとの諸士とめて 諸士皆ヤレはやまり召るな由良切腹諸士でとゞめ召さるゝは手前が詞用ひさつしやるか皆々も由良切腹せうか諸士皆々はやまり召るな由良詞を用ひさつしやるか皆々でも由良切腹せうか皆々サアらサア皆々サア〳〵〳〵らかやうに各々方をとゞむるには良兼所存がなくて申さんや待といふならサ、引う〳〵ト手にて本舞臺へもとれとする四人の立役ともにとめぬて手ぐりに本舞臺へくり戻し下手一ばいに戻る由良之助下座の諸士皆々にむかひ御一統よく聞かれよ今にもあれ城受取の上使發向の砌不禮が有ては相濟ませぬ亡君御死後の御恥辱と相成りまするぞ此義第一に承知召れよ又城を枕に打死と決心あらば各々方の一命は亡君尊霊現世に於てはかく申す由良之助大言にはござれ共各々方の一命を預りますが手前に預けさつしやるか御不承知か遠慮なく一身の外味方なければ御思召の通り答へさつしやれ又夫々に評議のうへ返答さつしやれかならず遠慮さつしやるな四サア評議〳〵ト下に居さす是にて三人四人位づゝ膝を合せ七組にも九組にも別れ小聲にて談合の思入にて四人の立役いろ〳〵何か言聞かす事暫く有てやう〳〵皆々得心のいたるこなしにて四人へそれ〳〵にあいさつする四人由良之助にむかひ 四人由良之助殿一統承知仕つ

てござりまするらすりや御一統御得心か皆々ハヽアトつらりと並んらヱヽ忝いその志あるならば立騒ぐ所でない皆愼んで是を見られよ上血に染る切先を打守り〳〵らん亡君の御無念殘る御切腹の短刀は由良之助へ御筐恐れながら御無念の血肉は五臟六腑に守護し奉りやがて時至りなば御筐の短刀にて上拳を握り無念の涙ハラ〳〵〳〵扨こそ末世に大星が忠臣義臣の名を上げし根ざしはかくとしられけりトみし短刀をさし出し愁のこなし皆々身をふるはしきつとおさへて短刀をいたゞき納めてらハヽア忝い亡君の尊靈嘸や御悦び遊ばされんサヽ何れも御席へ〳〵ト皆々行儀よく後ろへ並ぶ此内奥より力彌安兵衛本ま物の結構なる位牌六つ帛紗に包み又文庫に入し結構なる過去帳を持出して由良之助の前に置き後ろへ共にならんで安ハツ由良之助殿の仰の通りお床飾萬端力彌御書院廻りの掃除等まで致しおきましてござりまするらお床飾おかけ物立花お表道具其外お持物おかざり付調ひたとなト右の位牌を一つづゝ出しいたゞき四人の諸士頭と力彌安兵衛に一つづゝ渡して右過去帳の文庫より結構なる帖を出して始よりくり出し見て中程にてらん御當日は賣切院さまばかりとおもひしに思ひがけなく當君にもト文庫へふくさぐち納めふたをしてらん御先祖代々皆々我々も代々皆々晝夜詰たる館の内「けふを限りとおもふにぞ名殘りおしげに見返り〳〵ト皆々愁の思入にて後ろ向になりあたりを詠めるむかふより御上使トふれこむ皆々きつとなつて皆々思へば〳〵ト言上るを宣敷とゞめて手をつくチヨンと木頭らん御上使是へトお通りあられませうト本幕よろしく

右正本は弘化三午年彌生角の戲場にて增補裏表忠臣藏二十二段續四段目の裏趣向は東都眼玉堂白猿作者西澤一鳳軒李叟世に類本ありと雖も拔本又は寫しなるゆゑ辭の長短語路の運び違失多かるべし今此本は西澤綺語堂直正本を以て爰に出す者なり

西澤文庫傳奇作書後集上の巻終

四澤文庫傳奇作書後集中の卷

目次

一星野和佐矢數の話
一最明寺諸國行脚の話
一佐野治郎左衛門人殺の話
一宮城野信夫敵討の話
一山崎與次兵衛吾妻の話
一富士淺間復讐の話
一佐々木巖流敵討の話
一嵐小六忰雛助へ教訓の話
一三浦屋高尾最期の話
一尾上岩藤草履打の話
一妹脊山の鴛鴦景事の話
一衣裳好み上手下手の話
一謠曲望月復讐の話
一復讐望月譚の草稿

傳奇作書後集中の巻

西澤綺語堂李叟著

星野和佐矢數の話

尾州の藩中星野勘左衞門は寛文九酉年五月二日皇都蓮花王院の三十三間堂にて惣矢一萬五百四十二本の内八千九筋通矢にて弓の天下なりしが十九年後貞享四卯年四月二十七日紀州の藩中和佐大八郎惣矢一萬五十三本の内八千百三十三筋通箭にて弓の天下は和佐に定りしと云ふ是を歌舞妓狂言に大八郎を敵役とし勘左衞門を立役として坊州苗討松と云ふ外題にて潘谷（しるたに）のお寅茶屋山科の奴茶屋などを取組めり此もとは何とか外題覺えぬ十五卷の寫本（濃州大垣の家中に和田大八とか云ふ者の事を書て紀州の和佐大八郎とは別人なり）より出て其後けいせい倭莊子出來たり大和の助國花壇の花を愛して後蝶となり花壇に戯れしと云ふ艷道通鑑戀の部にある作り物語によりて仕組み倭莊子と題せり是は矢數の狂言とは別物にて京岡崎に妹殺しありしを戯場にても早速に仕組建部凉帋（綾足とも云ふ片歌の祖なり）が作西山物語には大森彦七の末孫の事にして萬葉體の古言に書たる三冊の小說あり是岡崎の妹を殺せし話を書きたる物なり倭莊子は小槇助國の名に直して古狂言をはめたれども狂言一日に足らぬゆゑ苗討松に出たる和田雷八と越野勘左衞門を交へてやうやく一つ世界の物としなり以後是を題として增補するゆゑ矢數の狂言にはかならず小槇助國軍治兵衞等の役わり出て和田雷八を敵とし星野を立役とするは和佐氏のいかい迷惑なるべし

最明寺諸國行脚の話

寛元弘長の頃鎌倉の執權北條時賴入道最明寺道崇と呼て諸國行脚したまひしと云事普く人口に膾炙すれどもたしかなる書に見えず是謠曲の鉢の木に作せしより藤榮謠曲なんど作りもうけて北條九代の內時賴を賢人と稱する事尤も古く云傳ふる所なり淨瑠璃にも北條時賴記最明寺殿百人上臈とて元祿享保に西澤近松等が作せしも彼佐野源左衞門經世が事蹟をおもと

して出たり爰に天明四辰年三月二十四日に一奇事ありて意恨のもとは前年卯極月五日お鷹野の折にして佐野氏切腹は辰年の四月三日なり淺草門跡寺中神田山德本寺に石碑ある事は誰もよくしる所なり其當座歌舞妓にて稻光田毎月と呼て曾我の世界とし又けいせい含筒(ふくめづゝ)條と外題して梶原と結城の世界として始めしかど未だ其境に至らず夫より第六ヶ年の後寛政元酉年八月十五日より堀江此太夫座の淨瑠璃作者菅專助有職鎌倉山と外題を呼び佐野源左衞門經世三浦前司泰村の悴荒次郎義勝を及傷にすと作り都て北條時賴記の役名を借りしは近來の淨瑠璃に珍らしき働なるべし尤も時賴記にも鷹狩の場ありて由解大助原田六郎の詰合あればそれに倣ふて三浦と佐野とし七つ目佐野の隱れ家に天逸坊をちよんがれ坊主につかひたるはよき書物といふべし天逸坊の一話は享保十三申年秋八月大岡侯のお捌にて落着せし事是又よく人のしる所なり佐野氏一件より五十六年前の事なれども此狂言に書入たれば後には同時の事とおもふ者も多かるべし此鎌倉山にて田沼の世界定まりし後はけいせい佐野の船橋鎌倉比事靑砥錢など〻歌舞妓にて外題をよぶ事とはなりけり先狂言の佳否は二段にして世界人名をよく案じ付たるは作者の手柄にして前集に云ふ忠臣藏の狂言は夜討の年より四十七年目に漸く高野師直鹽冶判官大星由良之助と世界人名定りたるに佐野は六ヶ年目に世界定まりし其すみやかなる事感ずべし

佐野治郎左衞門人殺の話

元祿の頃江戸新吉原にて萬字屋の抱女郎八橋を切害しかの籠釣瓶の刀(水もたまらぬとほめたる謎なり)を以て廓中にて大勢の者をあやめ召捕られ死罪になりしと云佐野治郎左衞門は總州の郷士なり菊岡沾涼近世東都著聞集にも出し江戸にては歌舞妓に仕組靑樓詞合鏡と外題して大通人と云紀文と混じて二番目物の世話狂言とせり紀文事は大盡舞の文句にもありて紀の國屋文左衞門とて東都の豪商なるが活達の聞え浪華の椀久に相似たり此紀文の外に植木屋文藏お賤女郎と情死せしを紀文お賤と取組佐野に八橋お賤に紀文と對にし佐野源左衞門鎌倉山を前狂言とし切狂言は源左衞門の別腹の弟治郎左衞門と作り花菖蒲佐野八橋とせしもあり何分八橋治郎左衞門も紀文も

江戸の事なれば京攝の耳には遠く狂言に呼ねば自らしらぬ人も多かるべし

宮城野信夫敵討の話

慶安年間陰謀を搆へ梟首となりし由井丸橋等が事跡をしるせし書數本ありて何れも實説〳〵とあれど皆推量の説のみなれば信ずるに足らず中にも寛慶太平錄と云ふ書は慶安太平記鼠猫太平記などゝ違ひ珍らしき所ありて實説に近からんかとも思ふ條もあり此中には彼の宮城野信夫に助太刀をして復讐の事を載せず外に由井女敵討の助太刀せし事を記したり由井丸橋を淨瑠璃にて享保十四酉年尼御臺由井濱出と外題して泉の親衛に托して出したれども末世に行はれず慶安某の年より八十ヶ年後にさへかくの如し是より後歌舞妓にも廓習書夜正説(きとならひかきつゞけはなし)とてやうやく外題に小説と匂はせ見れどもと謀逆の族なれば和らかみなく狂言になり兼たり寶暦九卯年太平記菊水の巻にて南朝北朝を世界にかり宇治の常説鞠瀬秋夜と誣つけしより漸此世界とは定りけり然れば慶安より百十年目に狂言とはなれどするどき計りにて和らぎなし安永九子年江戸にて碁太平記白石噺とて宮城野信夫の敵討を題にせしより狂言に和らかみ有ていよ〳〵此世界とは定りぬ其後は歌舞妓に姉妹達大礎など作して白石噺の作者烏亭焉馬が作功なりけり今駿府兩替町北側に梅屋勘兵衛宅の跡ありといひ又府中上の口彌勒寺に姉妹の尼が由井の菩提のため建立せしといふ墳墓あり是も安永の白石噺後姉妹の尼が建立なりと唱ふるにやあらんかし

山崎與次兵衛吾妻の話

享保三戊年近松門左衛門作にて山崎與次兵衛壽門松と云ふ淨瑠璃に新町ふぢや吾妻といふ傾城に身(ママ)をうち與次兵衛狂人となる仕組ありかの椀久に似て同時の頃の人なるべけれど與次兵衛には證とすべき者なし是は全く淀屋辰五郎家屋敷闕所となり城州八幡へ引籠りたれば其放蕩の事を寫して八幡山崎の對に見立與次兵衛と拵へなしたるなるべし新町の傾城も淀屋辰五郎が通ひしは茨木屋吾妻與次兵衛が馴染しは藤屋吾妻なり茨木屋幸齋奢侈の咎め請し事あれば藤屋とせしものか又與次兵衛の父を山崎淨閑と呼たり是山崎宗鑑によりて名づけしものか又難波屋與兵衛(俗に是を南與平と云ふ)吾妻を見そめ母より賴みて

吾妻と盃をし兄弟分となつて金を貰ひ江戸へ行き油商となりて立身する事あり是は宗鑑の句に宵ごとに都に出る油賣更てのみ見る山崎の月是よりおもひ設けて南與兵衛油商ひに利を得ると仕組し物なり歌舞妓狂言にけいせい黄金鱗と云ふは美濃國齋藤家の狂言にして先祖は庄九郎と云ふ油商人より立身せしと云ふ系圖をかたり家老に山形道閑と云ふあり是も山崎宗鑑を云ふか壽の門松には與次兵衛の嫁をお菊舅の名を梶田治部右衛門とて淀の郷士となし敵役は津の國服部の下人葉屋彦助と云此狂言より八年後享保十巳年に昔米萬石通とて西澤一風作濡髪長五郎放駒長吉の狂言出是より又二十五年後寛延二巳年壽門松萬石通を一つに作して雙蝶々曲輪日記と竹田出雲は作せり然らば山崎與次兵衛は壽の門松より三十三年目にして雙蝶々の濡事師役とはなりけり此時淨閑の名を與次兵衛として與次兵衛を與五郎と改め治部右衛門を橋本の郷士とし嫁をお照と改め難波屋與兵衛（一名南與平）を八幡の郷士南方十次兵衛の忰と改め狂言の筋は其まゝながら世界爰に一變して淀屋辰五郎が事跡とは誰も心付かぬやうには成りけり夫より後は長吉長五郎の狂言といへばいつもやつし役は山崎與五郎をつかひ南與兵衛の役名は第二義となりけり芝屋勝助（司馬叟）長噺の内賣油郎と云唐山の小說を通俗して油と題し山崎の油商人傾城を見染一生の思ひ出に此君を抱寢せんと日々纔の錢を溜置後大盡の姿となりて青樓に遊ぶ一話を作す此名を油屋與兵衛と呼傾城を藤屋吾妻と呼ぶは舊壽の門松難與兵衛の事にしてかの宗鑑が職人歌合の油賣の狂歌より出たるものなり近松翁は都六條柳町の遊君芳野（後灰屋紹益の妻）太夫に惚たる鍛冶屋仁藏が一話と材木にて利を得たる河村十右衛門（河村瑞軒）の事を合せて壽門松の難與兵衛とせし考は追加に出すべし椀久の紋所は扇車なりとは自笑其蹟等が作の雙紙に出山崎與次兵衛の定紋は蛇の目なりと壽門松にあり淀屋辰五郎の定紋は未だ考へねばしらずといへども若しや蛇の目の紋にやあらん後人の考へを待つ

富士淺間復讐の話

信濃なる淺間嶽のもゆといへば富士の煙のかひやなからんとの古歌より思ひ設けて謠曲の富士太鼓を作せしより後に小說稗史淨瑠璃歌舞妓にも種々と趣向

を付一かどの物とはなりけり舊より作り物語にて根なしごとは云へども是等はいつの時代と定めず其うへ舞樂伶人の雲上なる事なれば作者にはよき得意なるべし自笑其積等が雙紙に種々有て淨瑠璃には弱法師（高安の一子俊德丸）と混じ合せ莠伶人吾妻雛形と外題して享保十八丑年に並木宗助作せり文化の始頃東都戲作者曲亭馬琴三國一夜物語とて小說を出せしより今は專ら此世界になり歌舞妓にも是を潤色して復讐高音皷また內百番富士太皷と呼もあり馬琴の讀本に御座船の內にて淺間と富士が舞樂の問答は千路行者の作英雙紙か繁夜話の中に豐原の兼秋音を知る一話をはめたりかれは琴これは太皷と變りたる計りなり因みに云小說は英繁の作者（十河六藏）に見所ありて京傳馬琴よりは遙に立仲たるものなり曲亭も每度此小說を採たる文あり又弱法師の俊德丸を攝津合法辻に加へ半二は作せり富士淺間住吉天王寺の樂人弱法師は西門にさまよひて日想觀を拜し合法辻はおなじ所の古跡なれば何れも荒凌山に緣あればおなじ世界に取組てよき見附物なるべし

佐々木巖流敵討の話

劍術に名高き佐々木巖流はいつの時代に有りしか其うへいつも敵役にせらるゝは不幸とやいはん淨瑠璃には延享に花筏巖流島安永に花禦會稽褐布染とて日本武者之助助太刀して敵討の仕組なり文化の始宮本無三四（劍術名譽の人書畫をよくす）の實父吉岡太郎右衞門の敵巖流を討と劍法の達人に名高きを作り設け二島英勇記と題せし稗史出たり是より舊の巖流島の狂言廢り二島英勇記に一變して近來段々是を增補し東都の講釋師劍法名譽の人名を集め數日に讀延し長々敷物語となしたりされ共狂言には成がたく色氣なくいつも劍術のするどき話のみなれば忠義水滸傳を讀ごとく心ばかり强くなりりきんで聞くのみなれば講釋にはよく共喜怒哀樂の四情に通せず狂言には成がたし敵討巖流島共復讐二島英勇記ともよびて近來歌舞妓に每度すれども舊濱芝居狂言にして無三四一人は變らねども相手役一遍づゝ出合ひて後に出る事なく見所すくなし是等を濱芝居狂言竹田狂言と唱へて好者家には嫌ふものなり

嵐小六悴雛助へ敎訓の話

嵐雛助（始中村十藏小珉獅の事）寬政八九年の頃しき

りに評判よく見物より聲かゝりゝ褒てかゝれば其身も嬉しくいよ〳〵舞臺出精して肩をいからし樂屋に入りし時父小六（始雛助小六玉なり）呼で今見物の褒たるは誰を祝ひてほめたるぞと問ふに珉獅付の下男若旦那を褒てのぢやと（ぢやとは樂屋方言にほめるを云）いふ小六小珉獅をにらみ付て扨も〳〵苦々しき事なり即座に褒る見物は濱芝居の見物なり門へ出れば直に忘れて仕舞ふ切見の見物のする事なり大歌舞妓の見物は一日の狂言を見歸つて一日の惣評をして誰渠は上手なりと感心して褒るが故に芝居藝中に褒るものにあらずそれをしらず聲さへ掛くれば嬉しがり見えを切らずともよき所にて見えをきりせりふの言はなしにも場當りよきを考へ褒るやうにするは下手役者濱芝居の十文役のする事なり大歌舞妓の古名人役者は誰言合すともなく仇褒をさせまい〳〵と計り考へて大事に勤む去とては情なやうぬが仕やうの下主張ると見えたりたしなみおらうと大音にて詈りこらせしとぞ實に其道に秀でし名人の詞には金玉の論あり感ずべし右に云ふ二島英勇記の狂言に心を付て見るべし二段目無三四凱陣してよりさせる役なきにより壘礎花大樹の中入來芝が拍手公成いろはの櫻子と傾城買の論噓より出たる誠眞より出たる噓といふ間をはめてすれども（此誠の噓と云ふ事は傾城禁短氣自笑其積合作の書にあり）實の濡事師ならねば狂言浮てしまらずそれより直に立廻り（金輪又は玉川の歌に合せ八人詰のたて）跡の出立はけいせい會稽山二段目加藤清正淺尾爲十郎上田慶治郎嵐吉三郎のはめ物なり三つ目備前一の宮の場にて白倉の娘糸萩武者修行の無三四を見染直に白倉屋敷より風呂場となり命を捨て無三四を助くるとは狂言淺くしていはゞ仇惚する浮氣娘なり兼て大序にても見染ねて一年と二年立事狂言ならでは情ふかゝるまじと思はる薄情の移り氣は當世のはやり物ゆゑ英勇記などは當時の人氣に叶ふかはしらねども但見ため計りよくて實少し是を濱芝居狂言と云又小六玉の悴に敎訓するも大歌舞妓濱芝居の差別ある事を云ふなり今や古への大歌舞妓の役者なければ見物もなし賃子役者と賃子見物とが大歌舞妓の小屋に集り見せ見られつする事なればかく論ずるも無益ならんか世の流弊のなす所嘆ずべし〳〵

三浦屋高尾最期の話

延寶の頃江戸新よし原に名高き女郎多かる中に三浦屋高尾は三股にて提切となりたればこそ意氣張強き美名を遺しけれ卑しき女郎と一口にいはゞ云へ其廓中に流を汲む輩は神とも佛とも崇むべし爰によく似たる一話あり梅龍主人の作せし新齋夜話に作りもうけし話ながら或る日大石良雄次男大三郎を連れ北野の聖廟に詣で繪馬堂にやすらひあれ是繪馬を見するに大三郎王昭君の繪馬を指して其譯を問ふに良雄くはしくとき聞せ古人の詩にも昭君若贈二黃金賂一定是終身奉二君王一と作せりと語る時後の方に口惜き詩の誦しやうかなといふて過る者あり老たる法師の御灯の油をさして本社の方へ行にぞありける良雄心に掛れば本社に至りかの老法師に逢ひ今昭君の詩を吟せしを御僧の聞咎め給へるはいと心にくし我等は田舍に育ち假名付本のみ讀習ひし事なれば都の人の耳には嘸をかしと思さん今の詩はいかによめるがよき事に侍ると問へば法師の云我等こそ遠き田舍の生れにて侍れば梁塵の雅聲などは夢にだに聞侍らずされどいさゝか手爾遠葉にて事の大意大に違ひ題の趣も作者の心もかくる事あり愚案をいへば昭君が畫圖に寫されし時外の宮女の中にも昭君に劣らぬ美人いか計有けんに今其名をだにしる人なし昭君獨千載に哀を殘し顏かたちのみか心の內の正しき事美しかりし事誠に天下の美人といふべし譬ひ外はおとらぬ貌ありとてもかの黃金贈りし心の醜さはいかで愛するに足るべきや諺にも人は一代名は末代といへる如く利慾を離れて名望をおもはんにはしかじされば江の相公も其心をふくめて昭君もし黃金の賂を贈りなば定て是身を終るまで君王に奉るのみならんと作り賂を贈らねばこそ末代に美名を殘しつれとの意を含ませて昭君が潔白を賛し給へるなるを足下の吟じ給ふやうにては昭君が清潔を過てる樣に心得給ふやうに侍れば不圖難じ侍るなり凡今の世に仕ふる人を見侍るに其心得違ひあるも少なからず桀紂は天下に王たれども人是を惡み夷齊首陽に餓たれども人是を好す清盛の榮華ならんよりは正成が薄命なるぞ美しき僧の利の爲に法を說を賣僧といふていやしめ士の利のために仕るを商奉公といふて譏る名利兩ながら忘れてこそ道に近づくとも云ふべけれと老法師の高論

に良雄は内に思ある身にしあれば感じ別れ重ねて尋ね侍りしかど其僧はいづち行けんしる人なしと書けり高尾は事こそ替れ喜は相同じからずや貴人におもはれ身の幸ひを喜ぶべきを兼て契りし浪士に操を立意氣地を立通せばこそ提切ともなれ其儘貴人に仕ふれば誰高尾ともいふものあるまじ廓の意氣地といふは則操なり操を守つて清潔の名をとゞむる是らを廓中の王昭君ともいはまほしき事なりかし

尾上岩藤草履打の話

或書に是は大久保家に有りし事なりとあれど天明二寅年江戸淨瑠璃加々見山舊錦繪と外題せしより加州の奥向にてありし事とはなれり諸侯お屋敷の大奥には是に限らず毎度あるべきともおもはる古くは鎌倉見聞志に局松島朝比奈義秀を思ひて北條朝時に嫁するを忌て自殺の時召使の婢女に書置を渡す所粗尾上のお初に狀箱を渡す内に似たり鏡山いざ立よりて見てゆかんと黑主の古歌ありて江州の事とし文字に加賀見山と書て聞せしものを東都歌舞妓三月狂言には年々歳々仕盡し其世界を北條にし足利にし色々增補すれども惣名を加々見山と唱ふるもをかしからずや中にも金龍山婦女行列と云ふ外題あり是等は打出して東都の事と顯はし鏡山と始て外題に付し時の作者の苦心はむだと成りけり忠臣藏の世界にても浪華にて本國を伯州と唱へ法を崩さず江戸にては播州赤穗とあらはして唱へ兩國橋の泉岳寺のとあらはに唱へても咎めもなく仕來りしと見えたりされば東都は唯濶達に土地廣きがゆゑ瑣細なる事は咎めず狂言に取しまりなく着物を重ね着して帶をしめず歩行におなじとは江戸狂言のよき惡口なり浪華は古くより狂言の作り方甚だ手澁くやゝもすれば狂言の穴を見出す輩多ければ淨瑠璃歌舞妓ともに作に骨の折たる所なりしも近來何事も江戸物といへば通ぢやとか意氣なとか褒て江戸狂言の帶解廣げなるを咎めもやらず見事とはなりけり三都名物も多き中に淨瑠璃歌舞妓の狂言は浪華第一の名物なり上手下手の位は浪華の相庭に極る所なり年々衰へ諸藝人はもとより見切者とてもなくなりしは流弊の世是非なしといはんか

妹脊山の鴛鴦景事の話

所作事景事に扇の手ありて故芳澤あやめ故中村富十郎妙を得たる事は前にも演たる如く能太夫より流儀

を傳はり我一流とする事勿論なり中にも蝶の道行とて倭荘子に小楨助國番ひの蝶戯れて花壇に遊ぶさま故來芝其答に始り今は扇を蝶と見て遣ふ事になりたり又鴛鴦の景事は大歌舞妓にはけいせい妹脊鴛鴦とて泉川桶藏芳澤吉松勤む是は謡曲能に鷺亂の所作あり神泉苑の池の汀にて五位の位を賜りたるを歓びて舞ふなり此能には秘傳ありて前髪ある者ならでは勤めずと云ふ實にそれなるや不知歌舞妓の鴛鴦の所作番ひ蝶の所作は鷺亂より趣向を取て所作を作せるものなり文化中に三ヶ津三番ひ鴛鴦の所作事を出しけり彦三大吉來芝友吉芝翫いろはと三組なり此時の見功者おし鳥にてはなくあひるの所作事なりと批評せしが其後は木兎か梟にてやあらん家鴨のうち今一組殘らば歌舞妓もかくは衰へまじきを昔戀しとやいはん因みに云昔は能も手輕き事にて臨時に見物より所望の能を勤し事今の御乞におなじ當時は數十日前より番組を定め騒ぐより猩々の亂昔は太夫の心にて若切幕より扇を廣げて出せば囃子の役人心得て亂を打然らざれば常の猩々なりと是らも手輕く其道に達者なるゆゑなり藝は下手になり事は重々しくなる事何の藝もおなじ

衣裳好み上手下手の話

安永五申年盆狂言に博多小女郎浪枕（近松門左衛門作）の淨瑠璃を題にするゑ和訓水滸傳と外題して志摩の小平次異國へ漂着の一話を書加へ歌舞妓狂言になしけり其時の役割は小町屋惣七元祖小川吉太郎小女郎山科甚吉島の小平次中山文七黒谷そろの後平治毛利九右衛門二役淺尾爲十郎錢屋奥山なり此九右衛門役は海賊の頭なれば衣裳みな唐物ならでは寫り悪しとて着附羽織は白羅紗の對下着は唐更紗足袋は金唐革其餘提物に至るまで古渡りの唐物計りをつかふとて五十兩の用内（給金の外入用金を云）を奥山は取けり此頃は衣裳小道具とても甚質素なる者なりしを五十兩の用内を取りし事ゆゑ定めて美々敷衣裳ならんとおもひ初日に見れば着附羽織は白の紋羽足袋も木綿に摺込みし金革紛ひなり興行人より奥山へ約束の違ふ事をせめしかば奥山云大金を出すが故に噂をする噂高ければ見物おどされて紋羽も羅紗と見るさすれば羅紗を着ようと紋羽を着ようと奥山の德分にて毛利九右

衞門が取るなり大金を出すゆゑ噂高く始より紋羽ですると有ては人氣よからず斯樣な用内を取るは此役と此役者とに有と云ひしが羅紗金革と見物は見て取る古今の大當りを取りしとぞ近來御趣意後は止みたれ共其以前は銘々衣裳小裂までも金銀にあかせ善美を盡せども藝道の拙きを衣裳にて餝るのみにて着曠する事なかりし先璃寛（二代目嵐吉）は衣裳好み上手なるうへ着曠して何の時の衣裳かの時の衣裳を見物もよく見覺えし程なり既に靑柳硯道風の役勤めし時洛東山狼唄窟の主人（俳師大卵）より官位に合ひし本裝束を取寄舞臺に勝手よき樣それを手本に仕立させ用ひたり釋迦如來轉法輪處の文字を書くにも四天王寺額の大掛物を特々床にかけ三五年前より隙ある時は書習ひ居たり狂言も故名人の仕來たりしをよく見覺へ居て工夫に渡り勤めしゆゑ小野の道風と云は此樣なものにもあらんかとおもふ計りなりかやうな役は輕卒に勤むべき役にてはあらじかし當時けふ云ひ出して翌から始めんと芝居にもかゝるむづかしき役を勤むる藝人の心行計り强く所詮妙境には至らざること知るべし

謠曲望月復讐の話

内外二百番の謠曲の内故作者大約に取用ひ淨瑠璃歌舞妓稗史小說にも出し鉢の木富士太皷の類ひ各其世界を定め仕はやせる物から見物にも皆馴染となり種々增補もする事になり望月なんどは能にても俗に近く見るにいと面白き物なれども絕て淨瑠璃歌舞妓の狂言に出ず予は兼て是を歌舞妓にせんとおもふ事久し以前半書きかけたる草稿あり小澤刑部友房をすべき俳優とては當時是なきものから打捨おきしが徒らに紙虱の栖とならん事を惜み草稿筋書のまゝ爰に出す石橋の所作を得たる役者は亭主の間を仕兼亭主の役をこなす者は石橋の業を得勤めず是らは花實兼たる名人役者ならではうかつに勤め難き役なりかし後世此役を勤むべき役者出なば愚の喜ぶ所なり尤も追善とか一世一代とか唱へて道具衣裳萬端再吟の上出すべき場なりやり附急稽古等にてはせぬ方餘程手柄といふべし

復讐望月譚の草稿

一面化粧やね軒に講札張詰たる宿屋のかゝり下手に見事なる門甲屋と印せし宿屋の印爰におじやれ四人仕出し旅人を呼て居る旅人の仕出し五六人留られ

居る體有在郷にて幕ひらく百是おとまりぢやないかいなア女三人泊らんせ〳〵旅いや〳〵おいらは武佐までゆかねばならぬ小女郎むさ所か鏡までもよつ程ムんすぞへお半守山で名代の甲屋はこゝでござんす小万旅籠も安うて坐敷も奇麗でござんすぞへ百またお伽が入るなら私がゆくがどうぢやいなア旅あゝなさけないいかに三上山の近所ぢやとて百足の妖物を伽とは御めん〳〵旅人ソレ〳〵あちらの三人の内が伽ならお旅人いらも一所に泊る氣ぢや百是々あの衆達ぢやとてわしぢやとて味にかはりがあるかいなア旅人いや味にかはりはなけれど貴さまはえならぬかざがする皆旅ほしか納屋へマ入つたやうなハヽヽヽ旅人サヽござれ〳〵トわやく〳〵いふて這入るわかれ何ぢや泊らにや泊らぬでよい事をわしを百足の化物ぢやの臭がするのとあの赤とんぼめらが小女郎お百殿もうよいわいの何ぼう此樣にお客を引ても肝心の旦那樣やお家さまのおるすコリヤどうした事であらうのお半されば此十日程已前からお家さまは坊さまを連てふつと出やしやんして今に行衞がしれぬよつて近所のお衆が毎晩〳〵かねや太鼓で尋ねさんしても小万しれぬと云ふて現在女房や我子の事近所のお衆に苦勞をかけるも氣の毒なといふて旦那さまはきのふから尋ねに出て是も今に戻つて見えず百おめんようなこちのお家さまは拔參りさしやる年でもなし一體わしとは違ふて器量よし今度の家出はてつきり狐が見入て旦那さまに化て毎晩〳〵稻村の陰で狐にだかれて寢て居やしやんすか小女郎何のマアそんな事があらう百さうでなけりや叡山の天狗が鼻をじまんで女房にして居るか女三人あれまだあほらしい事計りホヽヽトわらふ此時橋掛りにて百姓かれ太鼓をたゝき大勢か大勢はやして出る小女郎是は〳〵皆々樣御苦勞でござんすおまあ〳〵お茶なと上つて下さりませ七篠サア皆の衆一やすみしませうトめい〳〵腰をかけ半おさうして何ぞ手掛りでも小万しれましてムんすかへ七篠いやしれぬ〳〵氣の毒はお內儀といひちつさまでのう皆の衆八むさサア息子のよし松計りなら迷子の子ぢやが母親も一所にしれぬからはこりや迷子の親子ぢや何ぼ尋ねてもしれぬとはもつけな物ぢや吉やすサアそれでおいらも氣の毒さに隨分と精出して夕べ彦根の町から日野長濱まで尋ねたがしれぬ七篠あゝ嘸才兵衞殿も氣がもめ

うが皆々才兵衛殿は内に居られるかの小女郎イエ旦那さまもゆふべから尋ねに出てゝござんす吉やすさうであらう内儀や息子の事内にじつとして居られうぞおいらなら氣違ひになれどいふても以前が武士の果むさ八今は宿屋の亭主でも以前は歴々かういふ騒動にもあはてず落付た物ぢや皆々さうでござるわいのト在郷になる花道より亭主才兵衛羽織一本差にて若君の子やく着ながしかゝへ帯旅なりの北の方を連れ立出て花道にて才兵衛是は思ひ掛けない所で御親子様御對面を仕りましてござりまする北の方そなたに逢ふたは主従奇縁の盡ぬしるし此子のため自らが喜び何かの様子をとつくりと才兵衛何を申すも爰は往還あれに見えますが私が宅むさうはござりますれどマア〳〵御二方共にト本舞臺へ來て兩人を下座に置きずつと通る女四人ヤア旦那さまお百皆々本に才兵衛殿オこりや皆近所のお衆此間女房悴が行衛がしれぬゆゑ思はぬ御苦勞に預ります篠七何の苦勞はいとひませぬが何ぼう尋ねてもお内儀や息子殿の行衛が今にしれいでお百皆々ア、氣の毒にござるわいのオサア私もあなた方のお心ざしが忝なさせめてはと存じましても昨日から大津の方を心ざして尋ねに出ましたが女房の事は何共存ませぬが道々も餘所の子供が遊んで居ると悴めが事を思ひ出しイヤ〳〵二人の事はとんと思ひわすれて幸ひの事ができましたお百皆々才兵衛殿幸ひな事とは女皆旦那さま何でござんすへオサアそちらも喜々べ近所のお衆にも御苦勞を掛けずもつけの幸ひな事ぢや皆々なんぢやもつけ幸ひぢやオその様子只今お目に掛けませうト北の方にさゝやきオハテ何であらうと私次第に成てマアお通りなされませトお百皆々北の方と若君を皆々の前へ連て出る是此女中や此子はオ此才兵衛が女房悴皆々ヤアオサア出船あれば入船と行衛のしれぬ女房悴それを尋ねに出た道でふつと相談して儲て戻つた是此女房悴お百皆々ハアヽそんなら此女中や此子をオ早速私が女房悴にしませうと連て歸つたは何とよい手まはしではござりませんか篠七成程行衛のしれぬ女房子を尋ねに出て直に女房子を連て戻つたは本に出船あれば入船ぢや小女郎申旦那さまいかに行衛がしれぬとてあんまりさつきやくなお手廻し今にもお家さまが歸らしやんした其時は皆々それ〳〵大事あるまいかのオ何のかまふ事皆のお衆も聞て下され女房のお近は現在の男に暇も乞はず悴を連れて家出をしたは皆々オヽしたはオ狐狸の所爲か但しは不義間男か皆々何のまあオマア其詮

議は二段にして歸せ戻せの迷子ぢやのと近所のお衆にまで思はぬ苦勞をかけまするは皆々オ、掛るはオ時にけふで十日計りも行衛のしれぬ女房子どうなつたやら向ふもしれぬ事に幾日も掛つては居られぬ事又お前方に事をかゝすといひこちの身の上はめつきやくの基でござります皆々成程尤ぢやオそこで似合なあの女房忰連て戻つて改めて持替るは今物怪の幸ひぢやあるまいかむさ八いかにも〳〵幸ひなる事ぢやこりや持かへたがよからうやす吉それでおいらも晩から尋ねに行くを助かるといふものオサアそこで兩だめに持つ女房子何と皆の衆聞えましたかお百皆々オ、聞えた〳〵オ此上は女子供わいらも隨分氣を付てせんの女房お近どうぜんにおもふてくれよおア半イ〳〵さういふ事なら申お家さま女皆々おたのみ申ますぞへお百申新米のお家さまへ北の方ヤアお百なぜ物をいはしやんせぬぞいな北の方サア何といふてよからうやらオアレアレ皆の衆見て下されまだうひ〳〵しいよつて恥かしがつて挨拶も出ぬぢや篠七そりや道理ぢや恥かしい筈ぢや見れば見る程あたま付と云ひ衣裳付おても結構な形ぢやが申旦那さま百女皆々一體此女中はオ白拍子ぢや皆々何ぢや白拍子ぢやオサア野上の宿の白拍子年が明けての身の上片付そこで我等が女房に呼迎へて候篠七ヨウ百おヨウ々皆聞えたオ此上はあの形もかへさせて宿屋の嬶小女郎髪は私がゆひ直して上げうわいな北の方そこは宜しう頼みまする若君母さま早う都へおのぼりなさらぬかいのう北の方イヤ〳〵都へ上るに及びませぬ此上はあの刑部にオア、是ぎやう〳〵御忌ギヨキ參りなら正月に都の智恩院へはおれが連れて參ツてソレ大工が忘れた傘を見せるはいのう女房ども北是そなたも母次第になつておとなしうして居や、若それでもわしはとゝ樣のオ爺さまといふはおれぢやぞエ、是なじみがないによつて無理もない小万アレ見やしやんせ内のよし松さんと違ふておとなしいぢやないかいな篠七時に才兵衛殿が新らしいお内儀をもたれたら下地の内儀を尋ねるにも及ばぬ百皆晩からかへせもやめにせうわいのオさうして下さりませ今までは段々お世話でござりましたむさ八おいらもしんどいめを助つたは物怪の幸ひやす吉ソレ〳〵いんでやすむもゝつけの幸ひ篠七幸ひ盡しの祝ひ事は追ての事オ成程祝言の時お前方も呼ませうむさ八そりや忝ない時に今迄か

へせ〳〵と尋ねあるいた此太皷かねやす吉篠七サアそこはおれが思ひ付才兵衛殿は物怪幸ひ女房子替へた〳〵ト太皷鉦にて皆々はやして下手へ這入百お近をかへたよし松をかへた〳〵ト皆々はやして下手へ這入るお半お申旦那さま何はなく共晩の御祝言の拵をしませうかいなアオオ、よう氣が付たおれはいふても花聟の事なれば構はぬ程にわいらよいやうに拵てくれ〳〵女皆々そんならお家さまオハテ女房共に挨拶はいらぬ早う〳〵女皆々アイ〳〵ト奥へ這いる　オそれ島臺も餝つて雜煮もがてんかト奥口伺ひ相方になり兩人を上座に直して　オ御主人の北の方白菊さま若殿花若君北以前の家來小澤刑部友房オヽア、恐れ多い拙者が其名乘も御主人安田の庄司友治公の一字をたまはり大恩を蒙りし身も御不興によつて今町人と成て賤しい宿屋は仕れど何卒元の主從と歸參の義を平日の大願所に今朝瀨田の橋詰にて不思議に御對面申せし御親子さま途中の事ゆゑまだ樣子は承りませぬが心元なう存じまするして事の子細はどうでござりまする北友房そなたに樣子を語るも無念なやら悲しいやら今更涙が先立つ計りぢやわいのうオイヤ〳〵申北の御方左樣に御愁嘆あつては事の樣子が相しれませぬたとへいかやうの儀でござりませう共拙者が對面申上憚かりながらお氣遣ひはござりませぬ何故御親子上方へさまよひお上りなされしぞ其樣子早う仰聞られませう是はしたりやはり御愁嘆誰ござらう甲斐信濃の御主安田の庄司友治公の北の方ではござりませぬか北サアその我夫友治公には人手に掛りて相果なされたわいのうオヤヽ何と仰せられますな北口をしや我夫には過つる葉月名におふ姨捨山の月御遊覽の歸るさ長柄の鑓をもつて乘物ごしに突通され急所の深手にやみ〳〵と御最期をとげ遊ばしたわいのうオヱヽ〳〵北そのうへ家に傳はる司馬法の一卷まで奪取られたわひのうオナニすりや大江の匡房公より傳はりし兵家の奥儀をしるせし司馬法の一卷を奪ひ取らんためチヱヽ若母樣早う都へのぼつてとヽさまの敵が討たい刑部討たしてくれいやいオ若君樣には健氣なお詞然らば北の方には敵を討ん其ために北此子を連れて上洛の道にてそなたに對面とげしは神佛のお引合せオ君父の仇には倶に天を戴かずと申せば北どうぞ親子の力となつてオ御不興の拙者なれど北以前のよしみオ古

主の敵北かならず共にオお頼みなくても討たにや叶はぬ二君に仕へぬ拙者がたましひ何卒御不興のおわびを申今一度御主人とお目見えとげんと思ひしに武運の拙き御主人の御不幸してその敵は何者名苗字とくと御存じでござりまするか北サア我夫の御最期に御無念の血汐をもつて肌着の袖に印し給ひし敵の姓名ト懐中より白絹を出して見せる　オ流石は御主人御最期の場所に天晴の御賢慮何敵望月左衛門秋仲を討取て修羅の妄執を晴すべきものなり安田庄司友治すりや敵といふは北望月左衛門秋仲都在番とあるゆゑオお氣遣ひなさるな敵の名苗字しれし上はお家の重寶奪ひかへし拙者が助太刀北夫の敵此子のためには親の仇オ御主人への修羅の忘執北サ一時も早うオ心はやるはお道理なれど敵望月は名におふ大名うかつに向ふは事の破れ是には手立がござりませうト手を組みじつと思案する向ふより問屋場役人袴羽織にて關札をかげて役人サアござれ〳〵甲屋はきつい仕合せぢや△役□さうでござる共才兵衛殿〳〵オオ、仲間衆けたゝましい何事でござる役人是めでたいは〳〵爰な内へ大名衆のお着ぢやしかも都在番のお大名ぢや□役隨分と丁寧にせにやならぬ其代り旅籠代は摑取ぢや△役とんと錢もうけの晝になツて來たぞや　オ是々こちの内へ大名のおつきかな○役サアどういふ事やら本陣をさし置て甲屋がさし宿ぢやオアノ都在番の御大名がこちの内をさし宿で○役追付お着ぢや此關札を表へ立ておくぞやオどれ其關札を○役何ぢやおいらはヱ、よまぬ字だトさし出すを見て　オ望月左衛門宿北ヤアオもしお喜びなされまし望月左衛門が私方へのさし宿北思ひがけなう此家へ來るもオ時節到來北天の惠みかオ御主人のお引合せかヱ、忝い○役オ、悦びは道理ぢやおいらは迎ひに行ねばならぬ座敷も奇麗に掃除しておかしやれ役△○此宿札はかう立ておくぢや○役本においらもあやかりたい□役△サア〳〵ござれ〳〵ト三人しかく有て橋がゝりへ遁入る北の方若君懷劔を出し身ごしらへして　北サア花若用意がよくば日頃の本望とげさすぞ若嬉しうござる北サア友房約束の通りオ敵望月を討せまする北サア一刻も早うオハテ一途にはやるはお道理なれど我家へ來る望月は袋の鼠網の魚せいては事を仕損ずる何事も拙者に任せマアそのお姿も改めオ、憚りながら女房悴が着物なりとト押入をひらきがへを出す　北そんなら是をオ旅籠屋の女房悴と心をゆるます一つの手立北成程尤もオぢやつとお召か

へなされませう（ト所知入に成り向ふより先挟箱行列の人數しづかに出て來る内北の方若君にオ兵衛手傳ひ世話なりを着かへさす行列立派に蝙傘立笠の人數出て次に女房おちか衣裳襠にて子役吉松上下大小にて連出て花道能所にてとまりお近）皆々樣御大儀でござんしたもう爰がわたしが内しかし辛氣な事にはおまへ方も今宵は一所にとめましたいが大勢の泊人では内にも方角があるまいよつて（侍イヤ〳〵）拙者共は先達て下宿は申付てござりまするかそんならお前方は外に宿をかつて置て下さんしたかへ（侍御意の通りでござりまするかそれはマア〳〵氣のきいた事そんならちやつとそこへいて休んで下さんせ（役皆々ハウかしこまつてござりまするト兩人を殘し行列花道へ引返へして這入るお近あとを見てかいかい御苦勞をかけました其かはり爺さまにわしがいふて知行をましてもらふてあげうぞへ本に大名の娘といふものはたいてい氣のはる物ではないぞイヤ是坊ちやつと此樣子をこちの人にいふて喜ばさうサア〳〵わが身もおじやト子役の手を引てずつと内へ這いる此内北の方若君きつとなるをオヤアそちや女オ兵衛とゞめながらおちか子役見て悔りして房おちか悴よし松かこちの人やう〳〵今戻りましたよしと、樣おそかつたかや北ヤアそんならあの女中松と子供はオ此間から行衛のしれぬ私が女房悴でござりまする北ハテなアかこちの人是はなアこちの人終に見なれぬあの女中と子達はどなたぢやへオサア此二人はかさうして見ればありやたしかオ、やつぱりさうぢやよし松わしが着物を着てこちの内に居るからはオイヤ大事ない者ぢやかエ、オサアマアあの形よりはがてんのゆかぬ結構なわれが形といひ坊主がなり殊に今の供廻りの大勢におくらして戻つたはかイ、エイなア私よりはあの女中はへオハテありや下女ぢやかなア何ぢやオ、下女ぢやサアしかもけふ置た留女子着がへがなさにそれであの着物をおれが出してかしてやつたも是からは道者の下り上り大名の參勤交代で此街道もいそがしい夫で置た下女あの又ちつさは丁稚ぢやが何としたかどうぢややらがてんのゆかぬわしが留主の間にあんな美くしいマア下女なら下女にしてわしは爰の御家さまッやぞオ、慮外ながら才兵殿の女房ぢや是下女の女子衆何ぢややらぞへ〳〵として宿屋に奉公しそうなふうとは見えぬマア一體今迄そなたはどこに居やつた北サア自らはかなア何ぢや自らぢやア、そんならこぶやに奉公して居やつたの北そんな事はしらぬわいのうちしらぬわいのうとは横柄なそうして名は何といふぞオハテわれ何のため

にあの女子に吟味するのぢやイヤ吟味せにやならぬわいのうおまへはだまつて居やしやんせサアわが身の名は北ハテ白菊といふわいのうナ何ぢや白ぎくぢやアオコリヤ〳〵あれはお菊ぢやナサア是までどつこへも奉公にゆかず元より勤めた事もないお菊すりや白ぢやなしらなお菊ぢやによつてそこで白菊ハテついお菊といへばよいにヱヽとつとどき〳〵と辛氣な事ではあるぞ松是と〳〵様ばんは侍になつた是見て下されト大小をひけらかすオオヽけうとい〳〵あつぱれのお侍ぢやがコリヤお近此様子はサアどうぢや早ういへか是お前もそれ見てはあんまり腹は立まいがな本にこんなめでたい事はござんせぬわいなオサア其目出たい様子はサア其様子はなオその様子はあの女子は下女に違ひないかへオ何にぬかすサア早う云はぬかコリヤ皆爺様のお蔭ぢやわいなアオ何親の蔭とはサア聞て下さんせソレお前にも兼々はなした通りちいさい時に別れて名も顔もしらぬわたしがとヽさまこちやお前にそふて居るゆへ親があるとも思はずにうか〳〵と暮して居たが此間坊を連て草津の八幡さまへ連て參つた所が姥が餅屋で隣に腰かけて居た侍衆がふと此子に提させて置た守りの裂を見て委細をいはずに親子共に乗物にのせどこともしれず舁てゆく本にこわいやら恐ろしいやらコリヤマアどうなる事ぢと氣が氣でなかつたが聞かしやんせ乗物を出た所は都室町の結構なお屋敷でれつきとした殿様が出やさんして守りの裂に見覺え有と段々と様子を問はれ思ひもよらぬ親子の名乗びつくりせまいものか本に產の親の慈悲といふ者は忝い有難い物でござんす爺さまの云はしやんすには現在血を分けた娘親子の名乗するからはもう宿屋などはさしておかれぬ孫諸共立身さしてやるといふて直に是見て下さんせ此子もわしも此形殊にお前の身の上けつくわたしはしらね共爺様はようしつて居やしやんすぞへオ何此才兵衛の身上をやサア爺さまのいはしやんすにはコリヤそちが連添夫才兵衛は安田家とやらの浪人小澤刑部友房とて由緒ある侍ぢやてヽオすりや安田家の浪人といふ事までかようしつて居やしやんしてお前に頼まにやならぬ子細もあり追付いてお前にあふて聟舅の名乗もしたうへ元の侍にしてやるといふてぢやわいなオそりやマア耳よりな

はなし幸ひこちからも折入て頼まにやならぬ子細も有なァ申北成程さういふ大身なれば後立にオこちらも大名舅も大名まさかの時はち是お前は何をあの女子にいはしやんすぞいなアオイヤサ客あしらひをとつくりとをしよふと思ふてちイヱ〳〵そんな事は旅籠屋の女房の役男のいひ付る物ぢやござんせぬオマアそれは格別女房共今度ふしぎに廻り逢ふたそちが眞實の親父といへばおれが爲にも現在の舅其舅殿の名はマア何といふぞち爺樣は慮外ながら甲斐信濃兩國の殿樣望月左衞門秋仲と云ふお大名オヤア〳〵〳〵すりやそちが親といふはアノ望月左衞門秋仲ト大悔りにて北の方と顔見合せ兩人思ひ入か何とけうといと樣を持うがな北舅は親聟は子といへばどうも爰にはサア若おじやト若君の手を引て立上るをオ是まつた何國へござるぞ北イヤそちには聟舅の緣があればオサアその緣があれば猶いなされぬ女房共北さヱ、イ心々にこなしオソレ一旦いひかはした約束の詞を反古にして今出てゆかうとは尤なれどあれあの表の關札に心が付かぬかどうで今宵イヤサ今宵祝言の盃をせねばなるまいがな北それでもどうやらオハテ友にちからイヤ友白髪まで添ふといふたは僞りか北サアそれはのちこちの人そりや何をいふのぢやぞいなアオイヤ此お菊は下女といふたが誠はおれか女房ぢやちかヱ、ト大悔り北の方も悔りして物いはふとするオハテ扨下女となり女房となるも皆望みを達せうためサア女夫となるは其身の本望であらうがなト北の方へ顏にておさへるおちかいろ〳〵にこなしあつてかそりやこそ〳〵亂騷ぎだてつきりわしがこんな事であらうと思ふた是こちの人イヤお前はト〳〵むなぐらをとるをふりはなしてオヱ、見苦しい何をするのぢやち何とせうぞいの現在わたしといふ女房のあるのにあれあの女子づらをあたすばやいようも〳〵内へ引こんでおかんしたなア〳〵一體マアお前はお前とも思ふがあたなめたあつかましいあの女子づらがようマアわしをふみ付けたなよい〳〵いつそわしが追出してと北の方へかゝらふとするを才兵衞とめる北の方こなしあつて北事おくれては何角の妨どうで此所へ來るはぢやう途中に待受さうぢやト若君の手を取て出ようふとするを引とめか北サアそれはちかヱ、あたいやらしいかまはんすなト引わくるをオ兵衞北の方を上手へ突やり女房を下へ引まはしオ女房去たちヱ、オおちか我には緣切れてひまやつたぞちかヱ、そんならあの女子と添ふばかりにオオ、去た程にこまごと言はず

ときり〳〵と出てゆけ（ちか）いやでござんす（オヤア）（ちか）サア私も今までのおちかぢやござんせぬぞへアイ慮外ながら望月左衞門秋仲と云れつきとしたお大名の爺さまがござんすからは侍の娘侍の娘といふ物はそのやうにかるはづみに男に去れる物ぢやござんせぬそれにマアあほらしいいかにあだ美しいお内儀さまが出來たと云て私にはまた何の科どういふ誤りがあつて去らしやんすサアその譯を聞ませうか（オサア）其譯はオヽさうぢや嗅い（ちか）ヱヽ（オサア）嗅い〳〵もう古くさいぢやに依て我を去て爰に居る此新しい女房を持つのぢやが何としたさう（ちか）云はしやんすからはお前もくさい〳〵わいなア（オ）何ぢやおれが嗅いそりや何がサア（ちか）くさい〳〵水くさい（オヤア）（ちか）僅か十日程内に居ぬ間にちやんとあの樣に女房子まで拵へて科もない私を去るといはしやんすは何と水嗅いぢやござんせぬか（オ）ハテ飽た女房を去るのは男のこうけぢや（ちか）何ぼ男のこうけでもわたしには是此よし松と云ふ子まであるぞへ（オ）オヽ其坊主めも緣切て追出す一所に連て行おれト（よし松をつきやる）（よし松）かヽさまこわいわいのう（トおちかに取つく）（ちか）オヽ道理ぢや〳〵可愛さうに何を此子がしつた事現在血をわけた我子にも思ひかへヱヽ是も皆あの女子めゆゑ（ト北の方の方へゆくを）（オ）コリヤお菊はおれが大事の女房指ささす事もならぬとつとヽ出てうせおらぬか（ちか）夫程までに（ト身をもだへてきつとなるを）（よし松）かヽさま堪忍ぢやわいのう（ト取つく）（北）思ひ廻せばどうでも血筋兎に角此家を（ト立上るをとめて）（オ）是誰が何と云はうが大事ない現在の女房子にも見かへる今宵の祝言それを立破つて出ていては一もとらず新枕はもとより三々九度の盃すんで四海浪も目出たう打ナア納める迄はめつたに身動きはなるまい〳〵（北）サアそれはオハテ追付抱て寢る程に是じつとして待ちやいの（ト下におくお近きつとなりて）（ちか）そうぢや（トゆかふとするよし松とゞめて）（よし松）かヽさまどこへいかしやるぞいのう（ちか）所詮わしがどのやうに云たとてあの樣にのぼり詰ていやしやんすこちの人是からは爺樣を賴んで望月左衞門といふ大名の威光でもとの女夫にしてもらふわいのう（よし松）そんなら坊もゆかう（ちか）イヤ〳〵わが身は爰に居やわしがつい一走り（ト又ゆかふとするよし松とりつき）（よし松）いやぢや〳〵（ト志がみ付てなく）（ちか）ヱヽ因果なそなたまでが邪魔するかいやい（ト抱上げながらとんと下に居て）（ちか）才兵衞殿こな樣はのう（トきつとオ兵衞が顔を見る）（オ）たとへ大名で有うが公家

を親にもとうが縁は別物いかうでもつい立でもさつたといふからは金輪際さりこくるのぢやぞちさう云はしやんすとわたしも意地もう〳〵金輪際去られまいがどうさしやんすオさうぬかしやいつそおのれをト箒をとる北　北是まつた此爭ひも自らが此家に居ねばオイヤ祝言するまでは滅多に動かけまいがな北サアそれはちエ、〳〵あた腹の立つト煙草盆を投げるオヤうぬ投打さらすなかオ、何をせうやらしれぬぞト又はり箱様の物を取て來て投付る　オさうすりやおのれト箒ふり上る北の方とめるお近段々そこらの道具を打付る此内奥よりお百お半女四人小女郎小万出て打付る四人取さへ　小女郎是は何となんす女三人マア〳〵お待なされませちイヤきかぬ〳〵　オあれあの通りなればお百且那さんも待たしやんせさつきの言付晩の拵へ祝言の料理は出來ましたぞへかヤアそんならそちらまでが取持でどうでも祝言するのかいやい女四人マア〳〵お待なされいなアかイヤ〳〵はなしやはなしやトもを北　此體をじつと見てはオハテ氣兼に及ばぬ幸ひ祝言の料理出來たとあれば奥へいて盃を北それじやといふてオハテ大事の前の小事じやがやトきつと云ふ北の方是にて成程といふこなしにて若君の手をとるオ搆はずと奥へおじやといふおちがおこづくを突はなして

にト歌になりオ兵衛若君北かアレ〳〵あれを見てはどうの方を連て奥へ這入るもトゆかふとする女よし松かゝさま堪忍ぢや〳〵お百是坊形皆々とめる　小女お道理なれどマアお氣さんが泣てぢやわいなア郎皆々しづめ成されませいなアかイヤ放しや〳〵トもみあふ内最前のぬぎすての衣裳をほうり付る白絹ちらほら女形皆々コリヤ叶はぬとにげて這入るかおのれおめ〳〵と祝言をさようかよし松とり付きトゆかうとするのうト引とめるおちかきつとなりてよし松を見て白絹と衣裳を見て取上かこりや何ぢやあたいやらしい此絹に血で書てあるは大かた二世までもかはらぬと云ふ起請であらうエ、憎てらしいト奥をきつと見て絹を廣げ何ぢや敵は望月左衛門秋仲討取て修羅の忘執をはらすべき者なり安田庄司友治敵は望月左衛門秋仲討れたは安田庄司友治こりや夫の古主ム、そんならそれで此子やわしをト奥を見又絹を見いろ〳〵と思入ありて成程さうぢや胴慾とおもふたはかへつて情ホ、ホイてトとんと下にいる向ふ望月左衛門樣のお着ト呼ばおちか向かヤアとゝ樣がよし是かゝさまふをきつと見てト取付くをきつと抱上けかさうぢやト奥へ行かけるチヨン〳〵化粧屋根引上見事なる破風付の欄間おりる正面三間の二重少し上手へよせて兩方落間下手青竹けつかい付能の橋懸りと見ゆる廊下を前へ突出す所々に若松の

實木正面屋體より下手へ續け大襖能舞臺と見せる模
樣都て本陣宿を能舞臺と見ゆる好み二重橋懸り共に
すツと前へ突出す留の木にて所知入やむ靜に序の舞
になる橋懸りより緞帳をあげさせ望月左衞門素袍立
烏帽子にて長上下の近習二人付出て上手に並ぶ次に
鹽灘仙右衞門狂言方裃にて望月の刀をさし出し出る
下座切幕の所より神主齋宮烏帽子裝束にて仕丁二人
に獅子頭入たる唐櫃を荷はせ出て橋懸りの下に座す
仙右衞門御主人には今朝都室町の舘をお出駕有て當守山
の宿にお泊り遠路の旅行嘸かしお草臥にござりませ
う望月何さ〳〵當近江の國守山の宿には本陣あれども
ちと思ふ子細有て甲屋とやらんへ旅宿申付たが中々
存じたよりはよい住居ぢやわへ仙御意でござります
夫に付け此度室町殿へ願ひに出し上諏訪の神主御射
山齋宮當宿迄お供申御挨拶に罷出ましてござりまする
望オ、上諏訪の神職みさやぢ齋宮大儀〳〵齋宮ハツ
此度室町殿へ出訴致したは信州甲斐の境に絕所の谷
間凡四五十間餘り谷の深さは底しれず是迄橋杭を組
立大勢の人夫を掛け成就仕懸けて碎くる事兩三度夫
故此御工夫を願ひし處幸ひ望月秋仲公には此度甲信
兩國を賜り御入部ゆゑ萬事御工夫を持て橋普請成就
の儀を願はんため御供仕つてござりまする望此度甲
斐信濃の兩國を安堵の御敎書を賜り入部の某我領分
の事おろかが有うか橋の工夫も付置たれば追付普請
成就させん甲信兩國の百姓共は仕合せ者だ此望月が
國の守となれば堯舜の世も同前戸立ずに寢ても盜賊
にあふ氣遣ひない追付甲斐信濃に麒麟や鳳凰が出て
遊ぶてあらう樂んで待たがよい齋其儀に付橋成就の
節は渡り初の奉幣獅子の謠曲亂舞を相催せとの神託
を蒙り則裝束獅子頭共此の如く持參仕てござりま
ト唐櫃より獅子頭取出し見せる
す谷間に橋の工夫は元より渡り始の獅子の亂舞も相勤むる者も此方にあ
れば氣遣ひ致すな齋然らば拙者は一日も早く歸國仕
りたう存じまする望オ、聞屆けた仙獅子頭裝束の唐
櫃は家來共に渡しておきやれ齋ハツ畏てござりまする
ト仕丁に唐櫃もたせはし懸りへ這入る
仙先程より此家の亭主めがお目見えも致さぬ憎くい奴いかに此家の亭主はいづくに
居る是へ出ませいオハア、トのつとになるオ兵衞橋懸り緞帳より狂言長上下にて三寶へ盃をのせ若君の子役に持せ長柄の銚子をもちつれて出て能可にて下に居て
ござりまする仙誰有ふ今空飛鳥も落る御主人の御威

勢望月左衞門秋仲公のお宿を致すは願ふてもなき其方が仕合せじやぞよオ左樣存候間御禮の爲に麁酒を持たせて參り候然るべき樣に御申候へ仙お聞あられましたか望何さま一献くもふ酌を致せ仙かしこまつて候ト仙右衞門酌する望月一つ飲んで望此家の亭主其方に指さうかオアノ私に望オヽゆるすサヽ一つオ有難う存じまするトにじりより盃をいたゞく仙お盃頂戴とは匹夫に似合はぬ果報者ト銚子をさし出す才兵衞取て若君にもたせへて酌をさす仙右衞門若君に目を付け オそれお酌〳〵ト若君望月の方を見てきつと成る顔にておさ仙コリヤ〳〵亭主わつぱめは何やつぢやオヘイコリヤ放下師でござりまする仙何放下師とはオ此宿に住居致す親子の放下師母親は八撥をうち又此悴は此青竹一名を玉すだれとも申すを遣ひまする故おれき〳〵のお着にはいつも御前へ召されて御機嫌を取りまするが親子の者の業でござります望亭主がもてなしとあらば夫を肴に所望いたせ仙其青竹とやらを始めい〳〵オ然らば御意にまかしましてト盃を三寶のうへにかへす仙右衞門酌して望月取上る花若きつとなり行かうとそるを才兵衞程よく留て オサア御大身の御前ぢや隨分心を付けて此青竹を遣ふた〳〵若君ヱヽ打たいなアオオヽうたふてほしくば聞覺えて居る青竹の小歌は是ト目顔にておさへる鳴物にかゝり拍子を取て オおもしろの花の都やサンヤ物の始めは天の浮橋是も神代のをしへ草ぬれてとるのは粟の穗にひくや鳴子のサンヤ〳〵さつと生たや花手桶又取直せばあまの岩船金襴緞子綾や錦の帆を十分に風をたもつや柳の梢サンヤ〳〵ト諷ふうち花若青竹を遣ひながら望月のかたへ行かうとするを才兵衞宜しくさゝへる仙左衞門目を付け居て仙ヤイ〳〵〳〵先程より見る所何共あやしきわつぱめが振舞御主人御油斷あられまするなオイヤ何も胡論な者ではござりませぬ次には女が八撥を打まする仙サア其の討つと云ふが主人の禁物まづ其わつぱめをト立上るを望コリヤ〳〵仙右衞門何をざわ〳〵其稚き者の母が八撥を打ではないか仙サア討といふのがあやしうござれば望ナニそれ式亭主其者是へ通し候へオハッ御所望なるぞ急いで是へト橋懸り緞帳の内より北ハアヽトかつこを付撥を持ち出るよしの龍田の花紅葉更しなこしぢの月雪の歌になり北の方かつこの舞にいたり間々は望月の方へゆかうとするを才兵衞よろしくとめる望月は大ように見て居る仙右衞門は始終目を付け油斷せぬこなしいろ〳〵此内三役よろしく有て舞をさむ仙最前より親子の者が立振舞主人をねらふ結構よなオイヤ中々左樣ではござりませぬぞ望成程仙右衞門があやしむも道理安田の庄司友治が妻子ありと聞たるが年頃と云ひ似よりの者共仙ぢやに依てめんぱくいたさんトつか〳〵と北の方花若の方へ行かうとするを才兵衞よろしくとゞめ オイヤ此者共

は元より放下師左樣の者ではござらねど安田の庄司の妻子には何科あつて其樣に望庄司友治は姨捨山にて何者共しれずやみ討となり不覺の最期を遂げしゆゑ所領は殘らず沒收にて從類をたやせよと嚴命受けし某なれど見のがしおくは武士の情仙それを有難いとも思はず反つて主人を恨む馬鹿者望たとへ彼等が恨むとも此方に何も恐るゝ覺えはないてや北覺えないとは卑怯の一言オ是々放下師の親子お大名の御前立騷いで無禮千萬ひかへませうぞト兩人を顏におさへる望仙右衞門氣遣ひするな此家の亭主も唯の者ではないてさ仙サアそれ故彼等が力と成て望何の〳〵聲舅の中龜略が有うか仙すりや此家の亭主は望身共が聲それゆゑ宿を申付た仙扨は此程召寄せられし御息女の望いかにも幼少にて別れ此頃不思議に名乘り合ふたる娘の聲先刻より名乘らぬも心あつてさオ拙者も先刻聞と惻り併し舅はお大名聲は宿屋も似合はぬ緣組望イヤ今こそ宿屋の主なれど以前は小澤刑部友房といふ侍オ妻子もしらぬ我本名をどうして又御存じぢやな望天眼通を得て居る某凡そ世界の事に身共がしらぬ事はない刑部噸討たからうなオ何をな望そちの古主安田庄司友治が敵をオヱ、望姨捨山にて闇討となりし庄司友治はそちが古主無念にあらう口惜からう其敵が討たからうと云ふ事さ北花云ふにや及ぶトいうとするをきつとおさへて オ所を何とも存ぜぬてな望ヤアオサア友治公が討れさつしやつたと云てさのみ無念口惜しいとも存ぜぬなせと申せ以前勘當を受けたれば主從の因は切れ古風な侍堅氣をいはふより今は此通り宿屋の亭主とかく欲德にかゝる方がマア當世でござりませうかい望友房そちや中々の粹ぢやわへ仙なぞと申てめつたに油斷はなりませぬオハテ何とござりませうやら望何と刑部其方とは聲舅のよしみもあれば共に活計歡樂の身に取立て呉れうが身共頼みたい子細がある何と頼まれて呉れうかオ緣組むからは逃れぬ中改つたお頼みとは望外でもない安田の庄司友治が所領たる甲信兩國を某に賜り則安堵の御敎書をもつて此度の歸國しかるに甲信兩國の堺に通路叶はぬ絕所有て是まで橋を架さんとすれど急流に橋杭立たず足場碎けて成就せず是をすみやかに掛くる工夫そちや能く存じて居ようがなオイヤ存じませぬ絕所の谷間へ橋を架す工夫なぞとそのやうな智惠があれば

宿屋商賣は致しませぬ　望イヤ〳〵僞るな此事計りは其方より外に存じた者はない事身共よく存じて居るわい　オ是は迷惑何しに其樣な工夫をば　望しらぬか　オ存ぜぬが有樣　望ハテ深う包むなア刑部絶所の谷間に橋をかくるは年まだ若き婦人と其骨肉の男子とを人柱にたて墓目の口傳を以て成就させる兵家の秘密是を能く存じたる者は其方一人存ぜぬといふ事はよもあるまい其上普請成就して渡り始には獅子の亂舞を催せよと諏訪神託元より謠曲亂舞に堪能の其方此儀を勤め呉るに於ては甲州の郡内の庄をあたへる所存名を取うより德を取るが當世と只今も申たでないか聟舅の間柄此外に望みもあらば聞て得さそう何と望みを叶へて呉る心はないかオ成程何をいふも欲德づく殊に甲州郡内の庄を下さるとあらば絶所に橋をかくる工夫親子二人の人柱を立墓目の口傳もあら方は存じてをるアッと云ふてお受申まいものでもなけれど俗眼に通せぬ秘文の梵字をしるせし一書を所持せねば事成就は受合はれぬ　望其義ならば氣遣ひ無用秘文の梵字をしるせし一書は身共が所持して罷りあるオすりやアノこなた樣が　望我手にあれども讀下らず唯いたづらに此ごとく肌身放さず所持する某（ト懷よりふくさに包みし一卷を出して見せる）オオ、それこそ大江の匡房公より傳はる兵家の秘書司馬法の一卷北あの一卷を所持するからは　若いよ〳〵敵にきはまる　望月（ト兩人きつとなる望月ちやつと一卷を懷中して）扨こそおのれとあらはす本名仙いでまつ二つに（ト北の方と若君へかゝるオ兵衛さゝへながらきつと留り）オその一卷を所持あるからは敵はいよ〳〵　望イヤ身共はしらぬ覺えはないぞオそれに又どうしてこなたが　望授つたオヤア　望庄司の敵は身共は知らぬ此一卷は善光寺にて通夜の折から夢の告で如來の手から授つたさすれば阿彌陀が敵であらう北ヱ、をがくづもいはゝいはるゝ若日頃の無念父の敵仙何をこしやくなト（かゝるをオ兵衛仙右衛門を突のけ北の方と若君をポン〳〵と當る仙右衛門悔り）仙ヤアコリヤ親子の者をオ當殺したは舅へ面晴　望すりやいよ〳〵身共が賴をオ秘文の一書があるからは橋を渡して立身の足代仙乃むかひ立する親子の奴はオ年ども似合の人ばしら（ト北の方と若君に手早く繩をかける）　望それで是から夜が寢よいて仙ハテ味い手つがひだなア　望いで此上は成就の手はじめオ獅子の亂舞を御覽に入れう仙それを肴に改め一献オいで獅子頭をかつぎ參らん仙オ、サちつとも早くオ然らば舅殿（ト兩人の繩を取り引立る）

望持つべき物は聟だなア（ト歌になり）オ兵衛は北の方と若君を引立橋懸りへ這入る望月跡を見て立上る仙右衛門近習二人手傳ひ上手鏡戸をあけて這入る跡すぐにばたゝにて下手より北の方若君走り出て繩をとき懐劔を以て上手へゆかふとする女房お近よし松の子役出て是をさゝへ一寸立廻り有てあやうく下座へおふてはいる後見紅白の牡丹付の臺をもち出て能所へ直し這入る能程に正面の鏡戸と見せたる襖を殘らず引て取る奥深にまた能舞臺の書割になる此前に褥を敷き望月左衛門此上に酒宴の體仙右衛門近習二人銚子を持ちひかへ居る囃子方本行の形にて橋懸より靜かに出てゆるりと拵有てテン〳〵と太皷にかゝり地謡にて「しゝとらでんは時をしる雨むら雲や奏すらんあまりに秘曲のおもしろさに猶々めぐる盃の醉をすゝめばいとゞなほねぶりも來るばかりなり（ト此内本行望月獅子の形にてオ兵衛出てよろしく獅子の曲納る望月仙右衛門も眠り出す所を才兵衛獅子頭を取りすてあいづする北の方若君出て望月を兩人切る才兵衛は仙右衛門を切すてるはやし近習はにげこむ）オホゝヲお出かしなされた北若此年月の恨みのする今こそはるれ望月左衛門覺えたかし（トばた〳〵にてお近よ松走り出て取りつき）近よ扨は討れさしやんしたかいなア（ト泣落す内才兵衛望月の懐より一巻を取り出しあらためて）オ是こそ尋ぬる司馬法の一巻北若チエヽ、忝い敵は亡びてめでたし〳〵「かくて本望遂げぬれば〳〵かの本領に立歸り子孫に傳へ今の世に其名かくれぬ御事は弓矢のいはれなりけり〳〵（ト謡にてオ兵衛よろしく舞納む目出度打出し幕此復讐望月譚一段物は以前文政七八年頃小澤刑部友房に歌右衛門後に梅玉望月左衛門秋仲に鍛十郎初代新升甲屋女房お近に三光後に松江安田の北の方白菊に國太郎始錦子等と見こみて草稿なりしも追々故人となり徒らに打捨おきしが此頃ふと文庫より取出し爰に誌す者なり

西澤文庫傳奇作書後集中の巻 終

西澤文庫傳奇作書後集下の卷

目次

一那須與市宗高の話
一扇的西海硯の草稿
一同後段那須野狐退治の場
一中興世話早見年代記
一堀田稻葉安宅丸の話
一下總佐倉宗吾の話
一齋藤吾櫻花日記の草稿

西澤文庫傳奇作書後集下の卷

西澤綺語堂李叟著

那須與市宗高の話

源平盛衰記平家物語東鑑等に與市と云ふ名甚多し眞田與市淺利與市關原與市那須與市等也抑與市と云ふ名は總領を太郎と呼て二男を二郎三男を三郎と段々十人目の十郎までに及びて第十一人目に當るを餘一郎と昔しは付けしものといへ共確と定めがたきか此うち那須の與市宗高は下野國那須の住人にて西海の戰に扇の的を射て武名最も高し淨瑠璃に那須與市小櫻威と云ふあれど善光寺如來を信向して五十嵐文次に預けられし身の明り立ち本知に歸るのみにてさまで狂言なし後並木宗助那須與市西海硯と題して化生屋敷にて狐の面をかづき育君の手にかゝり愁の場を三の切に仕組めり其頃は大いに行はれし狂言なれども當時の人情にかなはぬと見え淨瑠璃に語るさへ稀々なりけり是に化生屋敷を與市申受けしと計にてさせる仕組なきにより予兼て趣向をもうけ平家の女蔦玉虫鎌倉の明屋敷に隱れ住妖怪の人を威すといひふらせる與市宗高妖怪を退治せんと荒屋敷に來て正體を見顯はし玉虫を助け見遁す後西海の戰ひの時扇の的を射て弓勢の譽を顯はさんと約束の場を二の切と仕組み又宗高の塔今山城深草の東大龜谷に在て西國へ出陣の時堂前の幡をかりて旗となし譽をあらはし後即成就院とて一宇を建ると寺記に見えたり是等を思ひ合せて西海硯を增補なし三の切を仕組一部の讀本淨瑠璃に筆を建たれども半にて捨たるが三の切の草稿を見出せしまゝ扇的西海硯と題して爰に出す猶與市宗高の事蹟は予が綺語文草四編目深草即成就院の條に出せば好人是を見給ふべし

扇的西海硯の草稿

薪伐る鎌倉山の星月夜綺羅を磨ける其中に那須の與市宗高は武門の春に扇が谷さしもに人の恐れたる化生屋敷を申受弓矢の德に居納て新たに繕ふ普請の結構その身は西國合戰の加勢願ひに登城の留守心なき姥婢一つ所に寄こぞり春の姥何と皆の衆此お屋敷はも

と化生屋敷の妖物やしきのとおち恐れた地面をばこちの殿様宗高様が墓目とやらのお徳にてあやかしをお拂ひなされし御褒美とあつて御拜領妙夏の直に御普請の出來次第松葉が谷から此お屋敷へお移りの當座はもし妖物は出はせまいかと氣味惡うおもふて居たれど今では奥さま始め召仕のこちらまでが化生やしき妙秋それ〳〵殿様には鎌倉中の譽め者其うへ此度西國の平家とやらを攻めに行軍の御加勢にお出ましなさる、お願ひの御登城妙冬又御兄弟の若殿様には銘々お乳の人が付添八幡さまへ御參詣ほんにそれはさうと春のどのや小夏どのは此お家に長う御奉行なさんすゆゑ委しい事を知つてゞ有う若殿様は慥かに孖ぢやないかいのう妙春サァ其孖ゆゑお二人共寸分違はぬ様にお育てなされ兄御様のお乳の人には御家老の刑部様の娘御お菊殿お附人には御臺さまの兄御五十嵐小文次さま妙夏御次男の小次郎様にはお蘭殿と云ふお乳の人お附人には刑部様と何でも對に拵て育るとお達者なといふ様ぢやわいのう妙秋成程それで様子が分つたが刑部様は小次郎様方お蘭殿は小太郎さまと最負〳〵でいつともなう親子御の中でもすれる様子妙冬

夫にお蘭殿は口やかましいお人と云ひ本に笑止な物ぢやわいのう「よればかはらぬ取沙汰も皆下々の習ひかや呼とはなしに表の方若殿のお歸りとしらせの聲に妙共妙春そりやこそ二人の若殿一時にお歸りなされた妙夏噂すれば影がさすと呵られぬ内御出迎ひ申さうわいのう「そしらぬ顔に出迎へば程なく惣領那須の小太郎跡に附添ふお乳の人お蘭と呼で端手ならず年も三十に三つか四つ取りなりしやんと襠に武家の育の片譽こなたは次男小次郎とて年は元より形かたち兄小太郎に寸分もかはらぬ出だち誰目にも孖と見えて附添ふはまけぬ姿の乳母お蘭和子を自慢の鼻高く雙方家來打連てしづ〳〵と座に着けばおらんは皆に會釋してらオ、皆さまお出迎ひ御苦勞若殿様にもけふの御歩行嘸御草臥でござりませう小太郎イヤ〳〵わしが草臥より心掛りは父上の御登城もうお歸りなされたかや妙皆イエまだお下り遊ばされませぬ蘭西國の平家を攻ん御加勢の御評議小次郎父上にも其お願ひで隙取うして母様はいづくにぞ妙皆今奥にお休み遊ばしまする菊オ、それは重疊の儀和子様には御武運長久祈のため鶴が岡の八幡様へ御參詣ようおひろひ遊

ばしたな蘭そんなら兄御様は鶴が岡へ御參詣か此又和子はたくましい星合寺の馬場先へ弓箭の御稽古にお出でなさりましたわいのう耶小太オ、小次郎殿はよい心掛星合寺の本尊は弦かけの觀世音弓箭取る身は銘々に信ずるにしくはない耶小次サア私も常々刑部が咄にも利生を祈る稽古の的場と存じて今日參りました菊オ、それはマアようこそお越誠に此度西國表平家の大敵須磨の都に籠りしを義經様の軍配にて只一戰に勝利有たも弓箭を守る弦かけの觀音様の御利益此上にも御佛の力信ずるにしくはござりませぬ蘭ア、是々お菊どの觀音の力をかつて軍に勝とはちと廻り遠いちやござんせぬか早いためしは今度の軍に鎌倉中のお侍達終に普門品一卷讀だやうなお人もなけねどさしも手ひどい平家の大敵四國とやらへ追落したは皆我君頼朝様の御勝軍けれう佛と思へばこそ稽古がてらの御參詣觀音位の御利生でかつまい軍に勝つたやうで人が聞ても不外聞ハア、聞えたお前は和子様をお連れ申て鶴が岡へ參らしやんしたゆゑ兎角神佛を祈るがよいと云はしやんすのか詞の艶いふも程があるこちらの和子そんなまどろ嗅ひお氣ぢやないヱ、たしなんだがよいわいのう上「強い自慢に我ひとり高慢顔を聞流しよらずさわらず柳に受け菊ホ、コリヤいな事がお蘭殿の虫にさわつた御機嫌を損じたは私がいひ下手堪忍して下さんせ成程神佛の力を頼めば武士の身の不外聞一分のすたるといふ事弓箭八幡私は今までしらなんだ是を思へば古への坂の上の田村丸とやらは鈴鹿の鬼神を隨へられしも清水の觀音の御利生を蒙り嘸外聞を失はしやんして後悔でござりませうホ、ハテ笑止な事ではある程にの上「笑止な事やと打笑ふこなたはひよんな事いふてぎつちり詰つたふくれ顔小次郎上段の間の床を指さし耶小次申々兄上あれに飾つた日丸の陣扇きのふ父上にも母様にも申上て置たれば此小次郎が貰ひますぞや耶小太サアあの扇は父上が大事にせよと常々の言付ほしくば一本分う程に好たを取て大事に持ちや「兄は兄だけしとやかに云聞かすれば弟は懐育ちの氣儘者耶小次イヤ〳〵陰陽揃ふた陣扇どちらが一本足らいでもならぬもの一本なればほしくはないサア二本共私が貰ふ耶小太そりやそなたが欲どしい一本あれば事はすむてふど二人が分けて取り又ほしい折には貸し

て遣ります郎小次イヤ〳〵侍の子が貰ひ掛け貰はずに得おくまいそれ共成らぬと云はつしやりや兄上でも用捨はない小太郎オ、やらぬと云へばどうするぞ小次郎オ、力づくでも貰うて見せう小太郎さういやると猶やらぬ上「言ひつのつたる中違へせりあふ兄弟付々の乳母諸共に引わけて菊是は又せり合ひ遊ばすかおとましい妙おしづまり成されませいなア上「取さゆれども子供の癖いつかな靜まる氣色もなしお蘭は以前の出過にこり素知らぬ顏に只まち〳〵傍に見兼て兄の乳母菊マア〳〵お待ち被成いなアヱ、こなお子は御無理計り勿體ない兄御樣にむしやぶり付てどうした事おたしなみなされいなア上「つかふど聲の破れ茶碗はちわりましの弟の乳母むつと下地に針持つ挨拶蘭ア、是々お菊殿御主はかはらぬ小次郎樣けん〳〵云ふて貰ふまい又しても〳〵兄さま〳〵と惣領風に身を入て晩稻の和子を吹ちらして下さんすなヱ上「苦い詞にぐら〳〵の返答菊オ、惣領風がいやならば養君にわんぱくを云はせぬやうに育ちやいの上「ぶつけり云へば燃木に油蘭オ、置てたもそなたの口からわんぱくとは舌長な慮外であらう弟子とはいふものゝおなじ月日の御誕生なりやどちらを兄とも弟共別にかはつた事もなしもしや兄御のない時は御次男でもお世繼け侮どつて蹴つまづき惣領育てた高い鼻へし折られぬ用心しやあんまり鼻が高いとの天狗が妬んでつまむぞやア、笑止な事ではある程にの上「口に任せて出放題云はれて居ぬ兄の乳母きくオ、さういやるので奥より口天狗は扨置そなたの心小太郎樣がないならば小次郎さまに此家を繼せたいと思ふ欲心折々お威しにおしやるやらうたゝ寢のおそはれ枕刀にお手かけられおひんなる事があつても御結構でおうようで見遁し給ふを有難い冥加ないとおもやいのう仇どんくさい事いやると安閑と聞ては居ぬヱ、あた〳〵あほうらしい上「是ぞと覺えない事もさもあるやうに云ひふせればこなたもまけず憎て口蘭ア、ちいさい時は虫驚きとてまゝある事それを妬むといやるならこつちのお子も威に來やるか御結構でも大ようでもそなたが育たお子計り餘り結構過るとのあの字とほの字の異名が付く自慢せずともおきやいのうきくそりやそなたがいやらいでも御兄弟共お主の事どちらをどうと云ひはせぬ是こな樣は丁度その

お子には三人目のお乳母殿五つのお年から育た事なりやどういやつても馴染が淺い私はそも奥さまがお産なされた其日から片時放さぬ大事の和子結搆づくめにいふたが無理か蘭そりや結搆な事でござんす譬へ五つが七つからでも育て上げたはこつちの手柄現在お前の父御の刑部さまでも此お子計りは兄御より遙か器用で發明で一口に云はれぬと褒てござるに何にもしらず我身最負くハテ身最負とはそつちの事刑部殿と親子ぢやとてお主に仕へりや私事忠義の道にはかへられぬんこつちもおなじ忠義でござんす我得手勝手にいひ並べるのはお免しぢやくハテいはいでもかいの弓も引方らそつちがいふゆゑこつちも云ふのぢや妙皆ハテもうようござんすわいなァ上「やつつ返しつ乳母とうば互にまけぬ爭ひは何國もおなじ事やらん小太郎始小次郎もとゞめ兼たる折からに駒の井御前立出で給ひ駒の井二人共はしたないコリヤ何事小太ヤァ母上様きく御臺さま妙皆しづまらしやんせいなア上「制す詞に是非なくも靜まる二人を近う寄せ駒銘々子供を大切におもふての小いさかひ惡うは思はぬ去りながら人毎に此屋敷を妖怪屋敷と云ひならはし誰も住人のなかりしを我夫與市殿申受て納り弓箭の德を褒らるゝ其子供等が寢覺にもおそはれるのおびへるのと沙汰あつては第一は家の疵殊に夫は西國へ加勢の願ひ兄小文次殿の取次にて吉左右待つも心のいたみ其譯しつたそなた衆がよしない爭ひ不遠慮な以後をきつとたしなんだがよからうぞや上「呵りながらも子をおもふ心に惚れし風情なりきく段々らんの不調法御免なされて下さりませう上「折からとつかは次の間より主人に先達立歸るは御臺の兄たる五十嵐小文次相家老宍戸刑部加勢の願ひゆりしゆゑ心をいさみ打通り小文次刑部御臺所是にござりまするか駒オ、小文次殿にも刑部にも吉左右を待兼ましたか小文次ハッ兼て主君の念願通り加勢の願ひ相叶ひ今宵諸軍諸共出陣せよとの御上意刑部御臺およろこび遊ばせ殿には歸りに松葉が谷の尼公へ御暇乞にお立寄小文次我々は此趣しらせのために先へ歸宅仕りました駒オ、夫は兩人共御大儀御大儀母樣にも嘸およろこび夫の譽此上が有うかそれ女子共には門出を祝ふ熨斗昆布軍にかちん打鮑祝儀の料理用意しや妙皆畏りましてござりまする上「俄かにざゝめく館の内妙共は

奥にいる小文次威儀を改めて小某事は御臺駒の井とは兄弟なれども元より譜代の家老なれば此度の出陣にも供に附添ふそれに付二人ある子息の内何れぞ一人連行たき主人の心底刑部此度の戰ひは源平及金をならす曠の軍以後の心得にもなる事と主人の仰せ夫ゆゑ御臺所への御相談小何れぞ獨とある仰兄小太郎殿を召連らるゝか刑但し御舍弟小次郎殿を御同道なさるゝ心か御臺の御所存小承りたう存じまする上「樣子ありげに伺へば駒の井も途方にくれ駒されば自らへの御相談とは我夫の思召どういふ心かしらねども軍は時の運といひ討死の程も覺束なし是非一人は國に殘さねば家相續の心當り去りながら何れを殘し何れを遣つてよからふやらハテどうがな上「二人を始め付々の心の程をはかり兼思案の内より兄の乳母きアイヤ〳〵御臺さま始め何れもさまの思召もござりませうが同じ年どの御兄弟とは申すものゝ小太郎さまが常々おつしやつてござる事もござりますればお聞なされて上の事に遊ばしませなアそれ和子さまそれ申ちやつと兼々おつしやる事お願ひなされたがようござりまする上「袖を引また素振りでしらせ耳へ吹こむ氣の張弓さし心得て母の前おし直つて手をつかへ小太郎惣領は家繼ぐ役跡に殘さん御評議かは存じませねどもし此度の軍にゆかねば弟さへ供するに兄が腰が拔けたりと人のそしりも恥かしゝ小次郎は弟の事跡に殘して私をお供に連れてたまはる樣偏に願ひ上げまする上「詞もいまだ終らぬ内はや負けぬ氣な弟の乳母小次郎に目交して手先で切合馬乘の仕方でをしへ願へよとしらせに小次郎おとなしく小次郎申母樣父上がどちらぞとは定めて私とのおさしづならん今お詞が違ふては常のお敎が嘘となる是非に私を今度のお供にのう乳母らそれ〳〵今も今とて惣領ぢやのお世繼ぢやのと育た人の廣言いやといはれぬお留守の役わんぱくでもわるさでも私がいはぬ其内にようお願ひなされた流石この乳母が育てたお子程あるオゝおでかしなされた〳〵上「褒そやして諸共に是非にお供と願ひいるこらへ兼て兄の乳母小太郎おしのけずつと出き申御臺さま一時半時でも先へお宿りなされたりやこそ御惣領とお定めなされたを兄御をさしおき小次郎さまをお供にとは憚りながら御思案違ひ但し子達に依怙贔負でも遊ばしての儀でござり

まするかな上「我親ながら刑部がまへ詞するどに遠慮なくたくしかければ駒ア、是乳母子供がためには内縁ある小文次殿さへ批判なきを慮外であらうとサア呵るではないよう聞やゝ兄弟共に大がらには見ゆれどもまだやう〳〵ととしよわの十四連合が日比から射藝の道は教へおけども小文次殿刑部も何と思やるぞ小さればサ討物取ての戦ひは手の内のかたまらぬと申せば兄弟共に同じ事さすれば何れと申て頼にならず刑夫故にこそ御主人が篤と評議を取極め何れぞ一人定めおけよと呉々の仰とはいへ最負とおもふも氣の毒小文次殿の心底は小さあればかう致したらどうかな刑どうでござるな小イヤ〳〵それも戦場一人殘しておきたいとの仰も尤駒よい分別のあるべき事三人ハテどうがな上「三人が又も思案にとつおいつ暫く有て駒の井御前駒誠にあやうい軍場へ是非にと望む二人が心底どちらをどちらと定めがたし此上は鬮なりとも引かせたうへ天利に任せて軍の供何と此思案はどうあらうの小何様コリヤ御臺がよい御思案雙方依怙なき此計らひ是に増したる儀はあるまじのう刑部殿刑オゝしたり〳〵夫にこそ屈竟の儀がござる是々この陰陽の軍扇を矢竹に挟み東西の庭に立わかれ射る矢の的と定めおきお二人の内何れでも射當てたるをお供に連られもし射損じたるを跡に殘さん是で雙方依怙なき道理駒オ、それこそは敵に射かつ軍の門出によい前表小幸ひ主君のお歸りまでに奥庭にて勝負を催しあづちの稽古を見るも同前刑射るも慰み見るも樂しみ駒ソレ小太郎小次郎二人の乳母も合點か小太郎願ふてもなき扇の的箭小次郎時に取ての曠の勝負小太小次きつと射當て見せませうきくオ、いさましい和子さま伯父御せの小文次様がお仕込の手練をあらはすは今此時らそりやこつちもおなじ事刑部さまの教を受け大人も及ばぬ和子の強弓かならずお負けなさるなへきホゝウ讐刑部さまの教を受けいかなる弓箭のお上手でも小太郎さまのお勝とは目に見えすいて有るわいのうらんてもあつ皮なおきく殿けふの勝負はこつちが勝のぢやきくアノこな様がらんアノおまへがきかたしやんすからんかたして見せう上まけずおとらず角芽立つ中を隔て小文次刑部小文是は姦しい靜まり召れ刑其爭ひより勝負が肝心駒たとへ射損じ殘るともかならず恨とおもやんな小文いで雙方共奥にて

用意小太小次長りましたらんどりやそれまでに私らもき奥へ参つて共々に刑イヤ〳〵娘其方にちと申聞す子細もあればくアノ私に刑いかにも駒そんなら刑部刑御臺さま小文次殿小太郎サア母上様小次郎乳母もこいよらんサアお供申ませう小文まづ入らせられませう上」勇む兄弟付々を乗しづめつゝ駒の井は打連れ奥へ入にける跡には家老お乳の人親子の中も付々の育君には敵と敵鎬を削る胸の中いひ出す詞も物に角き申父上私に用とは何の御用銘々的場の用意に氣がせくちやつといふて下さりませ上」いらつて掛れどこなたは落付刑ハテいら〳〵と世話しいやつ其方ばかりいらつても雙方一度に射術の試み此方にも用意が出來ねば詮ない事何も其やうにいそぐ事はないイヤそれに付て娘其方を召連當那須のお家に有付たは御兄弟の若殿の生た年思ひ出せば早十五年よもや忘れも致すまいハテ光陰は矢の如しぢやてなきく爺さまにはもと京家の武士私はまだ十六の年ゆゑ有て御浪人嘸さまはお果なされ親子二人が鎌倉へ來た當座私がよしない不埒を仕出し其先の人の名もしらず顔もしらねど種をやどししるべの方に預けられ身二つになるその内に爺様には幸ひと此那須のお家に御奉行刑其時當家の奥方にも御懐胎娘のそちも同じ臨月主人の奥方といひ獨の娘雙方共に恙なう安産のあれかしと願ひし甲斐にあれあのごとくお家には玉のやうなる男子の二子きく其御誕生の日もかへず私も念なふやゝを産み其夜は惱みに氣を失ひあくる日聞けば産れたやゝは男子ながらはやくさの病にて産れて直に死別れかへつて此身は惱みもなうひだつたを幸ひに刑主君の若君は孖なれば乳母がなくては叶はぬと娘のそちに乳のあるを幸ひ惣領の小太郎殿へお乳の人きく十四年のけふが日まで親は御次男の小次郎さま附私はまた惣領の小太郎さまの乳人役今那須のお家でも大勢の御家來衆にもてはやさるゝ身の大慶是もみなお主さまの御恩と寢た間も籠畧におもはぬ此身刑すりや忠義に心を碎くぢやまできく男女子の品こそかはれあなたは小次郎さまの附人ゆゑ育君を大切になさるが忠義の道此身は育た小太郎さま大事に掛けいでなりませうかいなア刑ハテういやつ出かしたなア女ながらも忠義を忘れぬ志此刑部も聞て安堵さりながら其方が産落した悴其節に死ずとおつて此祖父がともかふ

も育て上げてをつたらば何ぼうそちが忠義にこり主君大事とおもふても親子の愛情はまた格別忠義の的も狂ふであらうのくホ、是はまた爺樣の改つたおつしやりやう譬へ我子があの時に生ながらへて居やらうが夫といへば名もしらず顔さへしらぬ中といひ世間の人にも面ぶせ殊に主人に仕へるからだもし誰子と問れた時何と答へん詞もなしおもへば死だが物怪の幸ひ何の未練を殘しませうぞ刑ム、すりやあの時の孫が生ながらへてをつた所がくなまなか我子が生て居ては御主人へ不忠にならうもしれず死ずは不通にやる心死で呉れたが互ひの身のため今では年月育た和子さま麁略にせぬが此身の冥加それをまたこと〴〵しう何とおもふて問はしやんすへ刑イヤサ其事を尋ねたはそちが忠義にこりかたまり育君を大事にかくるは娘ながらも此刑部感心はするものゝもしや今にもそちが悴此刑部が獨りの孫無事に生長いたしをつたりや嘸其方も嬉しからうがもしや忠義の切先もなまりはせぬかとためして見たのさくホ、てもマア色々の事をいはしやんす譬へその子が爰へ今生のばはつて出やつても親子の輪廻に引されて一旦盡した忠義の道忘れる樣な女ではござんせぬ刑オ、さう有う我子の事さへ思はぬからは兎角育君の小太郎殿大事おなじ主人のお胤でも御次男の事は苦になるまい此又刑部も育君小次郎殿にけふのかけ的物の見事に勝して見せう其時そつちにおくれを取りむごい親ぢやと恨むなよきくそりやおつしやらずとも互ひの事こちにもおくれを取らさぬ用心譬へおまへが恨ましやんしても親子の中は私事忠義の道にはかへられぬこつちに勝して見せませう刑アノ見事そちがやきくアイおんでもない事刑此あらそひもきく武門の意地刑とはいへ孫のきエ、刑イヤサ的場の用意言付おきやれきさやうならば刑部さま刑お乳の人早く〳〵きくお先へ參ります上「互ひにそれとおれそれも行儀崩さぬ武家育矢竹心に兄の乳母爺には心奥の間へ用意にこそは入りにける跡見送つて父刑部何か心の一思案刑ム、あの心底ではかの事を今更どうもかうかうと親の口からあからさまにはなされず今まで仕込みし此一條ハテ何とがな上「胸に手を當て工夫の只中奥よりそつと弟の乳母伺ひ寄てひそ〳〵聲ら申刑部さま刑オ、乳母して的場の用意はらアイ何も角も拵す

み是からが勝負の一段しかし案じらるゝは大事の和子軍のお供は跡目の定め此勝負に射まけては今まで高い此鼻がへしやげる計りか和子の外聞殊にお前の娘御ぢやが小太郎様のおうば殿にこなされるのが口おしい御家來なれど伯父御の師範兄御を相手の射合はこわ物こつちばかり勝つ工夫はござりませぬか刑部さま刑身共とても其工夫をしておる所ヲ、幸ひ〳〵よい計略上「お蘭を近付け耳に口聞たび毎に小踊りしてらんすりや曲り矢を小太郎殿に刑ア、是靜かに合點かんら心得ました刑ちつとも早く上「しめし合して兩人は奥と口へぞトオクリにて道具庭先紋付の幕張りし射場になる上「別れ入る程なく奥に御臺の聲駒雙方共に用意がよくば射術の試み早う〳〵小太小次ハア、上「ハッといらへて一間より小太郎小次郎りゝし氣に乳母〳〵も附近ひ雙方に控ゆれば御臺を始め小文次刑部指圖に隨ひ妙共かの陰陽の日の丸の扇各竹にゆひそへて家來は心得弓と箭を二人が前にさし置たり是ぞ矢島に高名の扇の的の前表を爰にしらすも花やかなり何れをひけと思はぬ親の心の氣配り目配り小文次刑部も片づを呑み乳母〳〵は息をつめ差出す四手の手もふるひ風に木の葉の散るごとく小太郎は西の方東は弟小次郎が射向の袖のしほらしく引かためたる一筋勝負矢聲を掛けて一時に切て放せばあやまたず東は射當西の方兄は射はづす心の騷ぎ弟の乳母は飛上りらんあたり〳〵「悦びの聲を聞くにも兄の乳母扇を捨てゝどうと伏し無念涙に暮れ居たる刑部は勇の聲をあげ刑ホ、ウお出かしなされた育君小次郎様には軍のお供に極りましたぞ小文小太郎殿の射はづせしも家を繼ぐべき御瑞相神佛の加護頼もし〳〵駒オ、勝も負るも軍の習ひかならず意恨に思やんな上「詞に千貫百貫の鷹を放する軍だち刑いで〳〵和子には尼公の御隱居とがみが原まで出陣あれ小文此小文次は鎧親出陣の儀式御親子餞別のお盃申上ん駒其内我夫にも御歸館なされう出かしやつた小次郎とは云ふものゝかわいや小太郎上「心の内を思ひやり態と勇みの聲はげまし駒サア皆もこなたへ皆々まづお入あられませう上「こなたへ來たれと引連れていさむ弟につく乳母としほるゝ兄のお乳の人よそに見なして五十嵐も鼻打かみて紛らかし小文いざ刑部殿刑まづ〳〵上「ともなひ一間へ入ける跡に小太郎打しほれ涙に暮れし有樣を乳母は思

ひにくれながら態と詞のはり強くき是申和子さま大功を立んと思ふ者は小事にかゝはらぬとやら何をくど〳〵思召軍に立ずばあゝまゝよまんまの皮でおすましなされくし〳〵と思召との又ぎく〳〵が出まするぞやヱ、氣の細い何ぞいのう上「しかる内にもお道理と胸に涙をこぼし居る小太郎思案極めても面へ見せず目をおし拭ひ小太郎オ、いやれば本にさうかいのう去りながら父上には最前からまだお歸りなされぬか今一應とゝさまへお願ひ申してたもらぬかそれが本の念ばらし上「いふ顏つれ〴〵打守りきオ、おいとしや夫程にまでお心殘りなかオ、御尤ぢやお道理ぢや成ると成らずと殿樣のお歸り次第この乳母が願ふて見ませう其お返事をいふまでは此庭先にござつてはお風をめすサア〳〵いつものお間へござつて是此刀などかならず手に取て下さりますな一筋なお生れゆゑ短氣な心が出ようかとそればつかりが氣掛りな上「サア〳〵こちへと抱かゝへ袴の塵を打拂ひ落散る弓矢を拾ひあげ案じる涙しほ〳〵としほれて奥へ入相の小太郎おきく居流れにて靜かにもとの道具へ戻る

後段那須野狐退治の場

上「鐘につれ立つ夜嵐は無常の風と身にしみていと〳〵思ひに小太郎は涙ながらに硯箱書置品ぞ哀れなる小太郎獅子は我子を谷へ捨その勢ひを見るとかや父も我子をためせども其甲斐もなう射はづせし不覺は此身の未熟から上「さぞや詮なくおぼされん面目なさと口おしさ小太郎腹切て相果るはせめては恥をしつたかと思し召下さるべし上「おなごりおしいは母さま小太郎お頼み申すは乳母が事不便を加へて下さりませ上「繰返し〳〵書ては目をすり袖絞り小太郎よつく武運に盡果たか上「わつとばかりに聲をあげ我と我身を打付て消入る計に泣居たり時しも強く吹風の音につれたる襖戸障子ぐはた〳〵〳〵ざは〳〵〳〵と一時に騷ぎ出しは風にはあらず化生屋敷と人毎に云ひしに違はず家鳴震動心魂に徹する響きは物すごき愁にしづむ小太郎が勢ひふくんですつくと立小太郎アヽラ不思議や兼て妖怪有とは聞けど是まで障碍なさゞりしが心氣疲れし弱みを見こみ性根を奪ふと覺えたり憎さも憎し冥途の供いで引つれてゐて呉れん上「窺ひよつなる心の不敵案に違はず一間の障子はつしと蹴破り飛出る化生はとしふる野干の眼は日月利劍を

引提げ怒りの歯をかみ(きゃァ)ぬしある舘としりながらうぬが弓矢の高慢にて望んで受たる主を始め家内の奴原取殺しほむらをやすめんァラ嬉しや上┐はつたとにらみし有樣は身の毛もよだつ計なり其時小太郎ちつとも騷がず南無八幡大菩薩と心中に祈念し小太刀を抜て討かくればひらりと外すを付入てぐつと突こみ一ゑぐりゑぐればかつぱと伏す所を乘かゝつて聲はりあげ小太郎ヤァ〳〵化生の物を小太郎が組とめたり突とめたり明し〳〵上┐をりあへやッと呼はるこゑゑスハ事こそと御臺小文次刑部も共に走り出見ればあやしき化生の姿こは〳〵不思議と銘々が引立見ればかづきし面落てあらはす乳母の顔刑ヤヽこりや娘小文誠に乳人駒お菊かいのう上┐人々是はと興さめて呆れ果たるばかりなり驚く内にも小太郎は乳人にひしとすがり付小太郎のう情ない何ゆゑにおそろしき姿となり我手には掛りしぞ子細を語つて聞しやいのう上┐いふさへもおろ〳〵涙手負は其まゝ抱き上げくオ、健氣によう遊ばしたお出かしなさつた是でこそ我育たお子程ある悲しい事はござりませぬぞや泣て苦にして下さりますな申奥さま御惣領を云ひ立軍のお供を願へども十四やそこらで腕かたまらず弟御連にも同前とはおめがねが違ひませう是見たまへ右の腕より左の肩胸骨かけての働きはあつぱれゆゝしきお手の内是を見こみに軍のお供連れましていて下さりませ大事の一矢を射損じて面目ないと突つめたお心の程いとしほく恥を清めてあげましたくあざとい智惠の古狐化生屋敷といふを幸ひ鑓切折て劔となし手遊びの面引かづき畜生道を此世からまねんで死るも和子の爲なすのゝ原の狐共那須のお家の野干とも云ひならはして十五に足らぬ小腕にて變化の物をしとめしと觸れ流し言ひふらし手柄と末世に云はしてたべ上┐死る今はの際までも思ひに暮れし有樣を聞くに刑部は胸に釘實に斷りと小文次も詞を出さず扣へ居る御臺はワッと泣叫び駒のう淺ましやいとおしや其身は四足の數に入り畜生道の苦を受けても手柄にさせんとおもふ厚恩小太郎かならず忘りやんな尤も刑部が娘と云ひ親子諸共家來なれど世の譬にも云ふ通り乳母は他人とおもひしに手汐に掛ければ夫程にいとしかわいゝ物かいのう不便の最期を見る事ぢややなァ上┐くどき立〳〵嘆きにつれて小文次

も涙の外の挨拶は袂をしぼる計り也刑部は始終詞なくさしうつむいて居たりしがこたへ兼しかつゝと寄り傍に落ちる小太郎が刀を取るより早く我腹へがばと突立れば人々是はと驚に又驚を重ねつゝ顔見合せて茫然たりおきくは苦しき息繼あへず「是爺さま何故にお前までが此樣子上「樣子聞かして〳〵と問はるゝ度に苦しさの刑部は涙呑込〳〵刑オ、とはずとも語らねば娘は元より御臺五十嵐嘸此刑部が切腹を不思議にも思はつしやらう是なる娘が忠義心我身を死しても育君にひけを取らさぬ心の程適れともなげとも夫とは替り此刑部不忠のさむげに此切腹駒何是なるおきくが忠義を感じ小文切腹の上さんげとはき深い樣子がござんせう三人サ、なんと〳〵刑サ、此事を物語るには人々の前といひ我子ながらも娘の手前おめ〳〵生きては居られぬしぎ今日の只今まで主君御夫婦の目をたばかりし惡事の報さんげのために此自殺ア、思ひ出せば十五年已前我當家に仕へし頃御臺所の產み給ひし孖の內惣領の小太郎殿は達者にて今一人の御次男は生れ落ると早瘡にて產聲あげし計りにて跡は忽御落命駒ヤア〳〵すりや其時の二子の一人は死やつたか小文それに又あの小次郎殿は刑サア人として始より惡人といふはなく其時ふつとおもふには世の諺にも二子の內もし一人が相果れば殘る一人も育てぬものと聞に付とやせんかくやとおもふうちしるべに預けおきたる娘も其日身二つになりしと密かにしらせの一書を見るより思ひ付たる心の目算京都より親子連當地へ下り仕官の當座主人大事とおもふに付娘の產し子の親は何國の誰とも相分らず父のゆるさぬ徒ら孫表立て育てもならず是ぞ幸ひ和子の死骸と其孫を取かへて御兄弟共御無難と當座を欺り置く時は主人の喜び孫めの仕合兩方よしと馳歸り娘に出生の男子は相果てしと言聞かせ今日の只今主人の和子とかしづきし御次男の小次郎殿こそコリヤ娘そちが產だる悴ぢやわいやい上「始てあかす孖の素性聞くに御臺も小文次も餘りの事に興さめてあきれ果たる計りなりおきくはかなしさやるかたなくきヤア〳〵そんなら我子と和子とを取かへおき現在產の親子さへしらぬお前が心底は善か惡か樣子があらふ駒取かへおきしは忠義ときこえ其後長の年月を現在の娘にさへ包み隱す心底は小文主君に云へず

ば某に咄も有うに根深く工む惡心か三サ、樣子は何と〳〵上「不審はれねば雙方より詰よる中に手負の刑部いた手を屈せずどつかと座し刑サ、夫故にこそ此切腹ァ、情なや世の人情始は忠義とおもひしも月日の立つに隨ふて段々募る我慾心たつた獨りの初孫め爺の素性はしらね共日にまし夜に增し不便さ增り主人は元より我娘も此事をしらぬを幸ひ二人の和子に乳を上んと主君へ申して娘を呼寄せお乳をくゝめて見し所どうした緣か惣領の和子に娘はお乳をあげ我肉身小次郎殿には餘の乳母取て是も養育兎角浮世の事とては思ふやうにならぬも因緣其內娘は育君大事〳〵と一圖に思ひ小次郎殿の乳母は元より附添の某まで親子の中にも隔してうかつに心をゆるさぬ樣子さほどにおもふ我娘に取かへ置たと云ひ出されずけふやいはんか翌やいはうと思ひながらも送る年月積りつもつてけふの今主君は西國へ軍の加勢此お供には何れぞ一人召連んと主人の仰聞くと其まゝ心の惡念何卒弟小次郎殿に首尾よく跡目も取らせたし殊には末世の龜鑑にも殘さす程の高名もさせたいが腹一ぱい又乳母のお蘭こそ惡人梶原が身寄の者上べは忠義と見すれども那須のお家に仇するもの我意を立んと惡事の腰おし孫子に迷ふ某に何かと惡事をすゝむるゆゑ幸ひ彼に申付け曲りし一矢を入しれず小太郎殿にあて行ひ我孫の小次郎には狂はぬ矢をば持たせしゆゑ扇の的には射かつ筈それから起つて娘には妖怪變化と姿をかへても和子の手柄に身を殺しお供を願ふけなげの最期むざんな死をさせたるも元はと云へば娘にもしらさぬやうに取かへし孫に家督を繼さんと祖父の惡事の報い來て今此果を各のお目に掛るがせめての言譯かくの通りでござるわいのう上「包みかくせし身のさんげ扨はとばかり主從は呆れて詞なかりけり小太郎怒の聲をあげ小太郎扨こそ〳〵そちが肉身の孫を軍に立さんため我には態とまがり矢持たせ不覺を取らせしにつくい奴切腹とはまだしも〳〵いで小太郎が恨の及とは云ひながら親はおや乳母はさうした工みとしらず我を大事と育てしうへ身を捨てゝまで某に忠義を立る志おもへば是も不便の有樣母さまコリヤマア何と致しませう上「胸の怒も義理故に及もなまる曇り聲御臺はあるにもあられぬおもひ駒オ、其悔は尤もなれども長の年月

我子ぢやと偽りおふせし刑部が悪心憎さも憎し小次郎も共に此座へ呼出して科糺さんとはおもへども是とても刑部が工み露ちり程もしらぬ事殊には乳母が肉身の悴とあれば乳兄弟小文主君の心は存ぜねどいかなる重き罪科も懺悔には滅すと聞く今刑部が切腹せしうへは乳母が深き忠義にめんじ小次郎が科をなだめ改めて家來の數に加へ長く忠義を盡さすやう此小文次が受合しぞ上「安堵しやれと五十嵐が詞に刑部は有がた涙お乳は中々義理さがしくおもき頭を打ふつてく其お志はありがたけれど化生野干の姿となつても育君のお手にかゝるは忠義の道是まで受けし御恩報じなまなか今はに我子の命此乳母ゆゑにお助あるは情の罪科和子の敵何ぼうでも始から死だ我子に相違はないハテ生なりと殺しなりとなされた上お家の掟を立るが道ことの起りは此乳母がよしない若氣の徒らから子をもうけたるばつかりに爺さまの慾心もおこるといふもの彼是きくも冥途の迷ひ皆さまおさらばなむあみだぶつ上「おもひ立たる忠義心いつかなたゆむけしきなく懷劍取て引廻す其手をおさへて御臺小文次マア〳〵待てと引とゞむ立よりながら小太郎もとめてよいやら悪いやらいつか果てしも泣入る折から遠音に聞ゆる貝鐘は早西國へ出陣の人數を揃へる時刻ぞと人々驚く其隙に一間の内より聲高く宗高ヤア〳〵刑部親子とも那須の與市宗高が申聞す子細ありマア〳〵まて上「聲かけ出る宗高が甲冑姿に采配打ふりしづ〳〵出る優美の出立跡に附添ふ家の子郎等刑部はハツとうづくまり乳母は苦しき息ながら御臺小太郎小文次も共に姿を打守り駒ヤアあなたは我夫いつの間に小文今鳴響く時の聲小太郎扨は最早御出陣か刑始終の樣子をお聞あつてく最期をおとゞめ遊ばすは皆いかゞの子細でござりまするな宗ホヽウ我兼てより刑部が心底合點ゆかずとおもふゆゑ態と母尼公の屋敷へ立寄時刻を移す體にもてなし裏道より立歸り樣子委しく聞取たり去るにても恩愛に引かされ宍戸刑部が悪心は取も直さずそれ其弓もとは直なる竹なれど娘と孫が弦を張り慾に曲りて身を果たす又乳母おきくは主思ひ矢竹心の一筋に親ならぬ身の親よりも深き思ひに身を捨つる云はゞ忠でも義でもなく眞實底から大切が餘つて死る不便さに今はの際の兩人に我心底も云ひ聞さんため出陣の時刻と

云ひ世話しき中に呼とゞめしぞかならずはやまる事なかれ上「さすが源氏のものゝふにも弓箭は並び那須の宗高物に動せぬ其振舞さもゆかしくぞ見えにける刑すりや取替子の事兼て君には御存じとや駒それに又今日までしらぬ體にてお過し有たは小文深き御賢慮有での義かな宗いかにも是なる小太郎が誕生の折からおもひも寄らぬ孖の出生惣領は小文次に預け次男は新參の刑部に預け兩人共に乳母を取り育つる内刑部に預けし次男の顔よく〳〵見れば母には似ず兄小太郎が乳母たるおきくの面體によく似たれば合點ゆかずと思ふゆゑ物によそへて樣々と附々の者をためして見るにそれなるおきくは忠義一圖刑部は始終に次男を世にたて惣領をなきものにせんと計る樣子扨は刑部が我孫を取かへをきしに相違なし此事とくよりたゞさんとは思へども云はゞ悴の乳兄弟と育置しも我情然るに先程より此場の樣子聞くや否物のためしは親と子の血合せをして證據を見んと小次郎が腕を引某も又かひなを突き二人が血汐を合せし所思ひも寄らず一つに寄りしは誠の親子ならずして血汐のよらん筈もなしそれゆゑ今はの汝等を呼とゞめしも此子細そもアノ小次郎を身に宿せしおきくが夫といふは何者今はにせまる親子の者委しく語つて此世の思ひ出迷ひをはらせサヽなんと上「何と〳〵と尋ねられ今更何と返答もおきくはおもなき其風情刑部は痛手も打忘れ刑有難き殿のおしめし我孫の小次郎と殿の血汐が一つに寄りしはいかにしても合點がゆかぬコリャ〳〵娘そちが身籠りし其樣子かくなる上は包むに及ばぬ委しう語つてお聞せ申せ上「早う早うといらだつ爺親娘は息をつぎあへずきヱヽ此事はけふが日迄言はず語らず濟せしが今はのさんげも罪障消滅恥かしながら聞てたべ思ひ出せば十五年前爺さまには瀧口のお侍傍輩の讒言にて御浪人その内私は深草の庵室に叡山横川の大德たる惠心僧都の說法ありて正眞の阿彌陀佛の姿を拜んで刻み給ふと都の人々通夜あれば私も共にお通夜の内つひとろ〳〵とまどろむ間に明りは消えて眞のやみ隣に是も通夜のお人どうやらしたが緣のはし勿體ない事ながら其くらがりの忍び路に多くの人のヲ込なれば後のしるしと其お人是此香包を渡し置かれ是(彼是カ)する間に群集に紛れ夜明けてさがせどお顏も見とめず是非も

なく〳〵我内へ歸る其日が吾妻へ旅立爺さま諸共有付のため此鎌倉へ心ざす内たつた一度の其夜の契りおなかに宿して此成行香の包に一首の和歌鎌倉とあるを便りはる〳〵尋ぬる甲斐もなう夫には行あはずし此身は一生尼同前再び殿御を持ぬ身に乳母の役が相應とお主大事和子大事とおもふより外心も移さず暮し〳〵たけふの今なまなか我子は生殘り爺樣のさんげといひ思へば此身は因果者恥かしい情ない我身の上でござりまするわいなア上身のなり果のかなしやとどうと打ふし泣さけぶ始終の話しに宗高は思はず膝をはたと打ち宗ハ、ア奇妙〳〵不思議としれし小次郎が素性コリヤおきく其方が深草の庵室にて忍び合し男より後の筐と送つたる香包に一首の和歌とあるからはもしや掻くもりなどか音せぬ郭公鎌倉山に道やまどへるとはしるしなきやきくエイ〳〵〳〵あなたはそれをどうして御存じ宗しらいでならうか其夜の男といふはかくいふ那須の與市宗高なるわい皆エイ〳〵エイきくすりや其夜の殿御といふは宗高さまであつたかホ、ホイ宗オ、我其頃は父諸共左馬頭義朝の手に隨ひ都にありしが叡嶽横川に居給ひし惠心僧都の說法ありと聞しより深草の小庵へ一夜の通夜をなせし折からふと若氣の移り氣より通夜の女と契りをこめ後の筐と自筆にて實方中將の和歌をしるせし香包を彼女に渡しおきしが扨は其夜の女は小太郎が乳人にて小次郎と入かへ置し刑部が孫は廻り廻つて我肉身の悴にて有りしよな上コレハ〳〵と感じ入る年月過し物語り扨はと皆々疑ひの晴るに付て恥かしきおきくは元より刑部が仰天餘りの事に詞も出ず互ひに顏を見合せて溜息ついたる計りなり折から庭の小影より窺ひ聞たる乳母おらん小踊りして走り出てらんヤア聞た〳〵もと此蘭は梶原樣の家來番場の忠太がおめかけさま乳のあるを幸ひに乳母となつて入こみしも御主人に意恨ある那須の家をなき物にせん工みサア此上は小太郎兄弟始として皆の奴原を打取て手柄にする覺悟しや上懷劍引拔我慢のおらん宗高目がけて切かゝる刑部は居ながらさゝゆる内エイと放せし矢聲と共にお蘭はワッと息絶えたり何れも是はと見かへる内次の間より弟小次郎小櫻威に身をかため弓箭携へあらはれ出小次郎最前から委しい

噺し一間の内から聞ましたが父上と血合せしてやつぱり誠の親子とは分りながらも何故と疑ふてばかりをりましたが扨は兄小太郎殿の乳人といふたは實の母家來刑部は祖父さまで有たかしらぬ事とは云ひ乍ら此身を世繼にせんために祖父さまの惡心も元はと云へば此お蘭めさつきに曲りし一矢にて兄上に不覺を取らした其報い我矢に掛けて此通り惡事の報い覺えたか上「刀すらりと拔放しおらんを直にとゞめの刀さしも苦しきお乳親子ォ、健氣やと云ひたさも早引息の斷末魔見るにたへ兼ね人々もワッと計りに泣しづむ共にあはれの小文次は立上つて小太郎引立小文次小次郎殿には産の親又小太郎殿には乳母ならぬ云はゞ其身の守り神父御の仰を待たず共弟御に先越されずいそいで出陣の用意用意小太心得ました父上御めん上「いさみに詞なき捨てゝ一間の内へ駈入たり駒オ、潔よし〳〵是々何れも目出たい子供が初陣に嘆きはかならず無用〳〵宗ホ、ウいしくも制されたりそれ二人の仲が馬ひけやいて内にハア、上「ハッと引出す栗毛の駒小次郎ふわと打跨り小次郎ノウ〳〵父上常々からの仰の通り國を出る時親を捨軍の場所には其身さへ忘るゝは武士の習ひ始めて聞た此身の素性誠の母や祖父樣に別るゝは悲しけれどそこを泣ぬが兵ものとやら婆さまの御隱居砥上が原までお先へ參る父に越たる先陣ぞや上「呼はり駒を乘廻すそのけなげさを見る母も祖父も今はのよろこび顏小文次はいさみを付け小文天晴候小次郎殿いそいで先陣いたされよ上「下知に隨ひ手綱かいぐり一鞭當て乘出す所に小小次郎待た〳〵上「おゝい〳〵と聲を掛け兄小太郎も緋威の鎧にひしと身をかため金覆輪の筋甲猪首に着なし月毛の駒に打跨り廣庭に駈來り小太ヤア〳〵小次郎御隱居尼公のお屋敷砥上が原まで是より二里半三里に近き道の法馬の腹帶がゆるんでは鞍かへされんあやうし〳〵上「しめ直されよと呼はるにぞ實に尤と乘ながら小ゆすりしてしめ直す其間に小太郎あふりぼつ立眞一文字に駈通り小太郎御免候へ弟殿是は最前一矢の勝負射まけし返報に去んぬる頃宇治川にて梶原を出しぬきし佐々木殿の謀事ちよつと學んで候ぞや上「につこと笑ひて乘するたり今はの乳母は起上りくオ、其智謀がもう手柄刑未來の土産にする本望宗刑部親子は冥途へ出陣我又親子が菩提

のため深草の小庵を修造して佛前の幡を乞受け笠印となし卽成就院と末世に呼さん心殊さず成佛せよ刹きくエ、忝い上「なむあみだ佛と引く息のよわるにつけて此世の別れハッと氣も落小太郎が駒引かへせば弟がはや乘出すいさみの駒先取られじと涙の手綱くりかけ〳〵くり戻し色香あらそふ兒櫻駒其姥ざくら散りゆけば小文胸に涙の糸櫻小太小次もつれあふたる兄弟が宗駒のいなゝき轡の音上「あぶみにあふり手綱にむち打引立引立引廻し虎の尾をふむ軍場へ花をちらして宗いそげ小太小次ハッ上「かけり行三重幕

右は天保三壬辰年の著作にして其節の役割は那須與市宗高實川額十郎乳母おきく坂東壽太郎宍戸刑部中村歌右衛門駒の井御前嵐璃光五十嵐小文次中村歌七乳母おらんに大谷友衛門那須小太郎中村芝翫小次郎中村梅花の心當に脚色しも其まゝにて打捨置しが追々役者は故人と也二十ヶ年の內役割のうちの俳優一人も殘らず殘るものは草稿と予計りなりと笑ひながら爰に記るせり都て立役よりする女形の藝には皆すこしづゝの曲ある役ならでは勤めぬ者なり所謂戀女戻重の井子別れの段安達が原の袖萩祭文の段花上野のお辻志渡寺の段和田合戰の板額市若初陣先代萩の政岡御殿等にて皆一つの癖をつらまへて女形を勤むる者なり今女形拂底の世なれば良もすれば眞女形戯場方言に若女形を云ふの勤むる役を立役よりする事あれども譬はゞ矢口の渡のお船大內鑑の葛の葉などは若女形より勤めずは其情通じ兼れど近來は立役よりする事とはなりけり右に云ふ曲者の役は往古より立役より仕來り今眞女形の勤ては何とやら物たらはぬやうに思ふも當世の人氣なれば是非なし此西海硯の乳母などはいまだ歌舞妓にて仕たる事なし本文西海硯は享保中の狂言なれば脚色たらずあつさりとしたる狂言なれば斯書廣げずば當時の狂言とは成り兼るなり

中興世話早見年代記

寛永元年より寛政十一年まで百七十六ヶ年が間の世話事を見易からんがため爰に出す寛政十二年より後五十年餘りは近き事ゆゑ略す

寛永 子 江戸中村勘三郎座始る	二 丑 山崎宗鑑北村季吟殁す	三 寅 矢代家對決落着す	四 卯	五 辰 松前屋五郎兵衛落着	六 巳
七 午	八 未 宇都宮騒動	九 申 日本橋にて馬切狼籍	十 酉 伊賀越敵討	十一 戌 江戸市村座始る	十二 亥 石川丈山殁す
十三 子 寛永通寶を鑄る	十四 丑 島原切支丹起る	十五 寅 天草一揆亡	十六 卯 瀧本松花堂殁す	十七 辰	十八 巳
十九 午 民谷坊太郎敵討	二十 未	正保 申	二 酉	三 戌 國姓爺日本へ加勢を乞ふ	四 亥 大久保彦左衛門殁す 累絹川にて死
慶安 子	二 丑 宮城野信夫仇討	三 寅 細井廣澤殁す	四 卯 由井正雪丸橋忠彌死罪	承應 辰 合邦辻敵討	二 巳 松永貞德殁す
三 午	明暦 未 林道春殁す	二 申	三 酉 江戸大火人多く死す 回向院立	万治 戌 江戸日本橋始てかゝり吉原山谷へうつる	二 亥

三	子	寛文	丑	二	寅	三 卯 さつま源五兵衛お萬心中
森田勘彌座始る		去年姫路にてお夏清十郎心中				
六	午	七	未	八	申	九 酉 星野勘左衛門矢數
				京六條吉の太夫歿す		
十二	子	延寶	丑	二	寅	三 卯 高尾三股にて死す
奥平家敵討		隱元禪師寂す		碗久歿す		
六	午	七	未	八	申	天和 酉 安宅丸一件堀田稻葉刄傷
扇屋夕霧歿す		平井權八死罪				
貞享	子	二	丑	三	寅	四 卯 和佐大八通し矢
於三茂兵衛召捕らる		御堂前敵討				
三	午	四	未	五	申	六 酉 井原西鶴芭蕉翁歿す
姫路にて於夏清十郎心中（寛文元と重複）		灰屋紹益歿す		佐野次郎左衛門吉原にて人殺		

四	辰	五	巳	六	午	七 戌 畑野藤左衛門死罪
京大佛木とかばる						
十	戌	十一	亥	二	戌	元祿 辰
		累怨靈解脫す		八百屋於七火罪		
五	巳	六	午	七	未	八 亥 三勝半七千日寺心中
		伊達原田對決		西山宗因山崎闇齋歿す		
二	寅	三	卯	四	辰	五 巳 梅野由兵衛死罪

九 子	十 丑 岡本一抱子殁す	十一 寅	十二 卯 京にて於花半七心中	十三 辰	十四 巳 淺野吉良刄傷龜山敵討
十五 午 義士夜討五人男死罪	十六 未 小三金五郎於初德兵衛心中	寶永 申 河村端軒殁す於房德兵衛心中	二 酉 淀屋辰五郎闕所	三 戌 梅田心中服部嵐雪殁す	四 亥 於龜與兵衛心中榎本其角殁す
五 子 高野女人堂おむめ心中 粂之介	六 丑 揚卷助六千日にて心中	七 寅 今宮かけ鯛小かん平兵衛心中	正德 卯 お染久松心中梅川忠兵衛捕らる	二 辰 崇禪寺馬場敵討	三 巳 小松屋宗七死す
四 午 貝原篤信殁す奥女中江島流罪	五 未 竹本筑後掾森川許六殁す	享保 申 去年國性爺淨瑠璃始る小西來山殁す	二 酉 長吉長五郎死罪	三 戌 祐天上人寂す	四 亥 白かれや與左衛門つる木や本之助死罪
五 子	六 丑 小春治兵衛心中	七 寅 お千代半兵衛心中池西言水殁す	八 卯 京御影堂心中	九 辰 近松門左衛門英一蝶殁す	十 巳 新井白石殁す
十一 午 北條時賴記淨るり始る	十二 未 白木屋おくま死罪	十三 申 天一坊死罪徂徠先生殁す	十四 酉 交趾より大象を獻ず	十五 戌	十六 亥 西澤一風殁す

十七 子	十八 丑	十九 寅	二十 卯	元文 辰	二 巳
		お半長右衛門桂川心中 室鳩巣殁ス		おしゆん傳兵衛心中 北の新地五人切	大安寺堤非人仇討
三 午	四 未	五 申	寛保 酉	二 戌	三 亥
伊丹鬼貫殁す		木づや吉兵衛追放	江島屋其磧殁す	紀海音殁す	
延享 子	二 丑	三 寅	四 卯	寛延 辰	二 巳
	八文字舍自笑殁す	豐竹越前掾一世一代	日本左衛門死罪 大宰春臺沒す	忠臣藏淨瑠璃始る 菊岡沽涼殁す	かしく死罪 おその六三郎心中 梅川新七心中
三 午	寶暦 未	二 申	三 酉	四 戌	五 亥
觀世太夫一代能興行				二代目芳澤あやめ殁す	
六 子	七 丑	八 寅	九 卯	十 辰	十一 巳
	竹田出雲掾沒す	柳里恭殁す	鹽賣長次郎召捕らる		半時庵淡々藤川平九郎殁す
十二 午	十三 未	明和 申	二 酉	三 戌	四 亥
		鈴木傳藏唐人殺し			根津四郎右衛門殁す

| | | |

堀田稻葉安宅丸の話

元祿中淺野吉良殿中にて刃傷の年より二十一ヶ年以前天和元酉年十二月十五日殿中にて刃傷ありけり大老堀田筑後守殿を若年寄稻葉石見守殿刃傷に及ばれ雙方相討になりしと云ふ一奇話は淨瑠璃歌舞妓の狂言に綴りなばおもしろき筋なれども其仕組なければ人口に傳ふる事稀にて赤穗又は佐野の刃傷の如く世に取沙汰をせぬ話なり或書にて讀み東都にて講釋に聞しまゝ爰に記す今東都大橋の東御船藏の側に安宅といふ地名殘れりこは文祿の頃豐臣朝鮮征伐の砌安宅丸と號し御座船金銀珠玉を鏤め善美を盡し作られしあり元和以後東國に移し豆州下田の湊に置れしを後々東都へ御取寄せ有て御船藏に入置れしゆゑ其船の名を以て安宅とは呼ぶなり爰に天下御政事御役向も多き中に大老職といふは誠に重き御役柄にて酒井讃岐守殿勤められ次に酒井雅樂頭殿次に堀田筑後守殿（上州安中城主十萬五千石）御大老御勤めの頃お船藏邊の水中にて夜陰に至れば物悲しき聲にて伊豆へいのう〳〵と呼聲聞ゆ依て此聲を聞しもの段々噂をして全く安宅丸の泣聲にやあらんと市中專ら此噂さのみなり公儀より其聲のする所を聞とめんと夜更に小船に乘り或ひは川岸ばたに夜を明し聲ある方を聞とむれば水中に自然と聲ありて姿を見とむる事かたく諸役人一統の評議となりけり時に大老堀田侯の曰く昔三井園城寺の鐘を叡山法師奪取て歸れば其鐘自と三井寺へいのうとの音聲を發し近くば妙國寺の蘇鉄も音を出せしと聞ば安宅丸にも精有て其聲を發するなるべし彼是と評議せんより此船を破却なし餘の金具等は公儀の物とすれば子細あるべからずと申出され衆議是に一決して彼大船を破却し取片付ければ何のたゝりもなく事濟みける（元和年中此安宅丸を伊豆より江都へ引きたる時船重くして動かず此時中村勘三郎音頭を取りければ船自由に動きしゆゑ御褒美とし其頃の御老中稻葉美濃守殿（相州小田原城主十萬三千石）此御分家若年寄稻葉石見守殿或日本所中屋敷へ歸路一人の醉狂人乘物先に立塞り狼籍に及ぶ家來用人等もてあまし繩付にして中屋敷へ連歸るやゝ時移り其者醉も少し覺めたりければ始て心付き見れば繩かゝり居たる事なれば大に驚きこはいづくにて何故此身を繩付にせしぞと問ふ番人本所稻葉石見侯の屋敷なりと云ふ其者彌驚き醉に乘じて前後は覺えねど扨は伊豆へいのう〳〵の惡事露顯

せしか嗚呼恐るべし〳〵と誰が問はぬ獨り言を吐き嘆息しける近習是を聞咎め主人石見守に此事を告る石見侯も兼て安宅丸一條に付堀田侯の所爲合點ゆかずとおもはれければ密に其者を目通りに引すゑ御尋有ければ始は彼是陳こけれ共詮方なく白狀しけるは此者産は上州安中にて吉右衞門と云者水練を得たるがゆゑ堀田侯へ心易く出入し水中に沈み一日一夜居たり共勞れぬ事取得に賴まれお船藏の水中にて伊豆へいのう〳〵と毎夜叫びしは此吉右衞門なり又船を破却して一步通りは公儀へ上り九步は堀田侯へ私欲せんが爲なり我には其褒美として江戶川々の船役仰付けられ過分の役德を賜るとまで皆白狀に及びければ石見侯は先其曲者を屋敷中の籠屋へ打こみ番を附け世間に此沙汰せざるやうにし扨堀田侯に日頃怪敷と思ふ惡事の箇條書をして堀田行狀記と外題を付け本家稻葉美濃守殿へ委細を告げ天下のため祿を捨て一命を擲ちて私の宿意のやうにもてなし十二月十五日殿中にて刀傷に及ばれしとなり是古今比類なき忠心より出る所にして表立て此吟味となれば天下の騷ぎ時の將軍家へ對してもかゝる不忠の人に大老職を仰付られし過を咎るに當りて不敬なりと扨こそ私の宿意にもてなされたるなりされば後々淺野佐野の人々は私の意恨なり是はいさゝか意恨なけれど天下の爲に一命をはたし家斷絕するを心得ての意趣なれば言外の餘情いか計りか深からん然れば其座の人々にも何の故といふ事をしらず大老を切害に及びしゆゑ我も〳〵と石見侯にかゝり其日の詰衆のために石見侯は討れて何れを善とも惡とも分らぬなりに雙方死したれば事濟しけり石見侯の家臣に夏目茶右衞門と云ふ忠臣あつて死骸下され引取る時おもしろき問答あり是ら講釋にては眞事嘘言取交へ云ふ事なれば狂言に作らばいかなる脚色せんともまゝなるべけれど前々の戲編にも演る如く筋よきは狂言に成り難しと故人作者の見殘しなるべし

下總佐倉宗吾の話

是も地藏通夜物語とか云ふ書にありて今現に下總國佐倉領將門山宗吾明神の社とて遺り東都にて講釋に講じ流行せる話なり年號は聞忘れたれども近き頃の事とおもはる佐倉の城主堀田相摸守殿の領內に宗五郎とてもとは由ある百姓なり年々堀田侯より年貢の

取立嚴しく領分の百姓困窮に及ぶゆゑ手立に盡き數十ヶ村申合せ愁訴に及びもし聞入なき時は一揆を企て年比つれなき地頭代官を始め領主の屋敷まで狼籍に及ばんと一決するを宗五郎はまだ老年と云ふにもあらねど常々正直なるうへ才覺もある者ゆゑ隣村の者等此宗五郎を頭とあがめいさゝか詞をもどく者なし宗五郎も一揆徒黨をさせまじと色々利害をとき諭し取りしづむれども多人數の飢窮にせまる事なれば是非なく年老の者共四五輩を撰み江戸堀田原相摸守殿屋敷へ愁訴し聞屆けあらばよし萬一聞屆なき時は自分等の望に任せ一揆を發すとも支へ申すまじと能々申聞せ江戸屋敷へ趣きけり若手の百姓此返事を聞んため數百の徒黨半は國に殘り半は左右を聞んと下總より江戸までの道一町毎に二人程づゝ待受て國への返事を告んとす國には道場寺院等に集り竹鑓を持ち簑笠にて返答次第恨を晴さんとぞ待かけたり然るに江戸堀田原の屋敷にて頭取たる五人の者召捕れ既に牢舍ともなるべき所家老何某（姓名は忘れたり）領主の弟なれども家老役となる堀田侯に諫言して五人の牢舍を救ひ屋敷内に今宵はとゞめ明朝取捌き得させんと有るに宗吾は兼々淺草觀音を信仰なれば事なく此度の一件濟むやうにと獨り忍びて淺草へ通夜に籠り殘り四人は屋敷へとゞまるかの情ある家老は退出すると殘り四人をひし〳〵と縄かけ牢舍となしけり門外に樣子を聞かんと付來るもの屋敷内の樣子を聞けば彌々重き牢舍ときゝ宗五郎も共に手討にもなりしと心得國の方へ注進に歸ると待もうけたる百姓共善惡の合詞を申合せ返事を待ゐる事なれは取上なき趣を大音にて呼繼ぎ十里餘の道を三時が程に佐倉領に聞えければ今こそ出あへと道場寺院の釣鐘半鐘を打立て惣勢がゝりに荒出し日頃つらかりし地頭代官をこと〴〵く家をこぼち佐倉の城内へ狼籍に及ぶ此趣江戸表へ注進しければ江戸より一揆の者共を一々召捕に來るなど古今未曾有の大騷動となりけるは是非もなき事共なり宗五郎かゝる事とは夢にもしらず其夜は觀音堂に通夜し翌朝堀田原へ歸らんとせし道にて噂を聞けば早夜前一揆起り江戸屋敷より一揆ども盡く召捕に行やら行德船橋の街道筋往來も自由にならぬ程の大騷動なりと聞くより宗吾はこは夢かや現かやと驚きながら老分の四人はいかゞなりしや其程も

聞たく手拭にて面體を包み堀田原近邊にて聞合す所一揆の頭分は江戸屋敷に禁獄にて惣棟梁の者夜前逃去りしを今日召捕らんため街道筋にて旅人殘らず吟味のよし噂取々なるゆゑ宗吾も今は詮方なくお尋ね者の科人なれば麥をかへ江戸近邊をさまよひ段々國の噂を聞くに數百人の一揆は皆村方へおもき預けとなり棟梁宗吾の配符廻り人相書を以て御詮議のよし聞えければ今更宗吾も思案に盡き所詮將軍家お成の折直訴して數百人の命にかはり科を引受んものと覺悟しながら夫婦の中に三人の子あり妻子は如何相成りしやら其程を案じられ或夜雪降も厭はず我村里へ忍び歸り我家ながらうかつにも得入らず外面に立聞く折内には女房三人の子供を寐させ居る體三人の子供此爺さまはどこへ行かしやつたもう歸られそうな物みやげを待つと頑是なき詞に母は愁ひもだへて土產を持て戻る程ならかくまで辛苦はせぬ物と涙ながらに添乳して寢さすを見屆け戸口を明けて入る宗吾の影を見るより女房は外へ突出し領分は素より別して我家のほとりには吟味役人鵜の目鷹の目もと江戸へ出訴の折から聞屆あればよし若し願ひの叶はぬ時は諸人にかはつて死んものと妻子へ心の暇乞して出たる心はや忘れ給ひしか今更おめ〳〵妻子にひかされて繩目の恥にかゝる所存かヱゝ腑甲斐なやと勵まされて元より我は其覺悟なれどいつ幾日ならでは將軍家のお成はなし其内一度暇乞にと立歸りしといふも仕方と呟きて涙ながらに立出る子は三人共起上り爺さまのうと取付くを母は引分け呵り付け宗吾は其まゝ駈出す此愁の間は講釋にて第五日目位の性根場なり歸りに渡場あり雪にて川は埋れしを手ざしにさへて渡らんとするを役人に見付けられ誠に危き折渡し守治右衞門といふ善人是を助けて役人をさゝへ船を向ふへ突遣られ命からゞ〳〵其場をのがれ歳の暮上野御佛參の折から宵の口より上野黑門の前に三枚橋といふあり此橋の裏にかき付（かき付解しがたし）隱れ居て將軍お輿の前に飛出て直訴に及びしを御供廻りに支へられしが半死半生ながら終に將軍家の御聞に達し御老中へお預けとなり願の如く棟梁一人の命にかへ數百人徒黨の科を身に引受け其身は磔と科落着しけり爰に哀をとゞめしは宗吾の從類を絕せよと領主の命にて三人の悴女房まで宗吾と共に場所へ引出し打首と

なるを隣村に宗吾の妻が爲に一人の伯父坊あり出家の願ひにて子供の命をもらひに出れど聞屆なきゆゑ伯父坊主あたりの池に身を投じ宗吾夫婦子供三人伯父坊と以上六人の命を下總國佐倉領に捨數ヶ村の一揆の百姓殘らずゆるされにけり此後伯父の靈崇りをなし佐倉の領内に種々の怪しき事多かりしとなり一揆の百姓命の親の宗吾なればとて則爰は相馬將門の舊地なれば將門山と唱へ宗吾大明神と一つの祠を立て神と崇めて祭りしより伯父の靈も出ぬやうになり當時江戸近國より公事訴訟に出る者は先此社に祈誓をかける時はいかなる入組みむづかしき訴訟にても速に上に達すると有て詣人多く年々歳々この社美麗となり今は一と廉の宮地とはなりけるとぞ予この一話を聞かんため講釋師何某を呼で未明より讀切らせ聞し所其筋のみを講ずるに夜九つまでに讀切けり此餘宗吾始他國より來り伯父に便り百姓宗五郎方へ養子となり兩親を見送り我二代の宗五郎となる話堀田相摸侯の先祖より當主までの傳又宗五郎の死後堀田家成行の事など種々の話あれども一揆にかゝはらぬ事は大方忘れたり是を狂言に仕組よと或人予に勸めしかど東都にてはよく人のしりたる事なれど京攝にては餘り耳遠き話なれば東都歌舞妓狂言に書んものとあらかた腹稿をしつゝ其儘に捨おきたり重ねて彼地に遊ばゞ書くべしと腹稿を爰に出す同じ堀田侯の名にしあれば安宅丸を一番目（上方にていふ前狂言なり）宗吾を二番目（上方にて云ふ切狂言なり）と見込み世界はおなじ續狂言なり看官其心にて讀たまへかしと云ふ

齋藤吾櫻花日記の草稿

世界は鎌倉星月夜の人名にて木曾の公達清水の冠者義高頼朝の息女大姫の聟となり七里が濱にて大磯の傾城を呼よせ放埒の序幕なり爰に長井別當實盛の悴齋藤吾は今武門を遁れ秩父在の長井村に百姓となり名を隱して藤吾と呼び父の遺言を守つて餘所ながら冠者義高の力となり居る然るに袂の浦に義經奥州より蝦夷へ落んため羽州佐竹の一黨に言付渡海の大船を作らせ有り名を佐竹丸と呼び善美を盡し拵へたる船も義經滅して後鎌倉へ取寄せ袂の浦の御船藏にこめあり此海にて夜に入り蝦夷へいのう〳〵と此船のうなる聲すと聞清水の冠者若氣の放埒により梶原平次稻毛三郎等にすゝめられ此船を賣拂ひ大磯の太夫

新造等を身受する事あり道具かはつて鎌倉の營中にて此船の詮議とよる御臺政子の方の前にて平次と稻毛は科を冠者義高にぬり付け義高罪となる所へ梶原源太父平藏所勞に付本國一の宮に在て父にかはり別當職を預り居る至極實體なる立役にて是を捌き稻毛と弟平次が惡事を見あらはし義高の科を言譯して比企の能員に預け此場を取捌く政子の方も共に大姫を比企の能員に預くる是序幕なり次幕に結城七郎朝光滑川の屋敷へ歸りがけ船番所の忠太酒の上あしく乘物に行當り惡口を云ふ家來の銘々反打を乘物の戸を明け結城七郎家來の雇相を詫て名を聞くに袂の浦の船番役人番場の忠太をしらぬかと梶原風を吹かせて惡口いふ結城わざと家來を呵り屋敷へ連歸つて馳走すべしとなま醉の忠太を連歸る道具かはつて結城の屋敷に成り友光種々の馳走をして忠太を酒責にする忠太大に醉てかう酒で責付らるゝは偖は蝦夷へいのう〳〵の一件が露顯したかと云ふそれより姫婢いろ〳〵たらして白狀させる忠太景季の謀反をかたり義高に科をぬり付け佐竹丸は皆梶原が押領その泣聲は則鼻が水中より船の聲色をつかひしなりと問ず語りに惡事の段々をいふ姫皆々奥にむかひ殿さまお聞きあられましたかと云ふ襖を開き結城朝光出て忠太をぼんと切る姫共を立せ忠太の家老夏目主膳を呼寄せ梶原行狀記といふ書を書き主從暇乞の內は桃の井と本藏の如く此行狀記を秩父の重忠に渡せと言付る早幕にて引かへし殿中となる結城朝光梶原を殺し乘かゝつて腹を切る重忠彼行狀記を懷中して出て適れ忠心と云ふをいゝや私の意恨にて討たりと云ひなすばた〳〵にて東西より梶原平次夏目主膳死骸を請取にくる朝光落入る重忠心に感じるを一番目大詰の幕なり二番目比企の判官能員義高大姫を預り物入多きと云ひ立領內の百姓をしひたぐるゆゑ百姓一揆を催して比企の舘をこぼたんと云ふを藤吾比企の舘には義高が居る事ゆゑ一揆をとゞめ皆々にかはり願ひ其返事次第にせよと云ひながら比企の屋敷へ訴訟にゆく能員の家來の敵役此願ひ叶はぬと云ふ所へ千葉之助常胤冠者義高を見舞にくる比企能員齋藤吾が大勢になりかはつて來たからはそちや一揆の惣大將かとなじり藤吾の額をわり討すてんとする千葉之助是を拯ふて藤吾を救ふ藤吾此まゝでは歸られぬゆゑ鎌倉

長谷寺へ通夜して和睦なるやうと參る千葉之助も歸る跡にて比企義員家來にさゝやき預りの科人冠者を云ひ立百姓共へ課役をかけしを藤吾はしつて愁訴にうせたきやつめを討とれば百姓共は何千あつても氣遣ひなしと家來に齋藤吾を殺しに遣る返して並木松原にて百姓一揆藤吾の返事を待わびる所へ敵役の家來來て見とがめ棟梁の藤吾は最早討取たと僞りおどす百姓藤吾が討たれたと聞てあれ出し家來を一々竹鑓にて突伏せ比企の屋敷へ行く屋敷になる爰へ大勢の一揆出て屋敷をこぼちあれまはる大ばた〳〵にてかへし鎌倉長谷寺夜の體にて藤吾右の一揆を夢に見た心にて堂の內よりつか〳〵と出て大勢をしづめる獨言をいふてふと心づきあたりを見まはし爰ははせの觀音堂そんなら今のは夢であつたかア、嬉しやどうぞ正夢でなくばよいがと胸撫おろすを幕次幕藤吾世話場藤吾はお尋の身の上女房と子供三人泣悲しみ居る所へ伯父阿靜坊安念見舞に來て愁ひ中へ冠者大姬落足にて爰へ逃來る比企の家來詮議に來る安念坊と女房はかくまふた覺えはないと云ふ證據は是ぢやと渡し守治衞門を引立馬士船橋の鉢兵衞出て爰の內へ逃込んだとくり上になる千葉常胤鷹狩の形にて出て取捌いて情をかけ皆々を引立歸る伯父安念坊村界まで送つてゆく跡淨瑠璃になり藤吾暇乞に歸る子役取付き本文の如く夫婦の愁ひ有てよゝ振切出ようとする鉢兵衞伺ひ居て藤吾にかゝる治右衞門支へる段切幕次は鶴が岡段かづら三枚橋將軍賴家公御供には秩父重忠興にて御社參右の橋の下より藤吾右上下を着て出供廻りに支へられ鬢は亂れ着物上下も破れ繩にかゝる比企の能員出て反打を重忠出て將軍にかはり取捌く能員は女房子供三人を繩付にて引出さす安念坊命乞に出る能員こばむ千葉之助は義高大姬に姿をかへさせ家來のごとく連れ出て將軍の嚴命を傳へて藤吾の死罪に極り數百人の百姓をお助と云ふ藤吾よろこんで女房子に覺悟せよとの愁ひ有て水盃を重忠の情にてさせ三人の子供にかはつて安念坊能員に手を負はせ腹切る藤吾は松の梢にくゝられ重忠鑓にて突く千葉之助は冠者と大姬を藤吾に見せる藤吾苦しみの中に是を見てにつこりと笑ふて落入る女房子役泣落すとまで趣向は付置たり凡狂言の筋を立るには先づかやうに見込書事なり原條さへ立置時は仕

組に掛り枝葉のをかしみ人數のさしくりは其時の筆拍子によつて幾らにもおもしろおかしく書るものとしるべし鎌倉時代に取ては梶原家滅亡の時は清水義高滅して五六ヶ年も後の事なれど是を引出して齋藤吾をつかひ安念坊は十ヶ年も後の人名なれど此世界と定むる時は年號月日に少々の前後あれどそれに拘はらず名高き人の名と馴染ある名を遣ふ事肝要なりとしるべし所謂狂言綺語の抜道あれば實説本文をよく胸に納め扱著作にかゝる時は些にても實説本文に近からぬやうに書くべきなり實説本文といへども作文にて講釋なんどは其時々聽人に讀かゆる物なれば確と正説とは云ひがたくなまなか本文實説にからまれては狂言となりても片詰り堅く淋しく取とめし所なく一日一部の趣向に體を失ふ事あり都て世話時代にかゝはらず狂言著述は本文をよく心得構へて實説に遠ざかるべし著作道第一の心得なり

西澤文庫傳奇作書後集下の巻終

西澤文庫皇都午睡初編上の巻

目次

一表題の起原、枕を碎く
一秀句の渉守
一似口行燈
一川柳點
一折句
一尻附跡附
一雜俳の品目、札の立見
一鶴助の發句
一何に附
一考へ物
一字謎
一前句附
一戲場の落首
一金毘羅樽
一字にて畫を書く
一俗言の齟齬
一東都の地口
一浪華の口合、畫口合
一冠附
一もぢり笠
一粘頭續尾（山科の跡附）
一二字段々
一物は付
一何曾々々
一古代の謎
一字謎の發句、犬の足跡
一落首
一所俳諧
一畫に似たる文字
一古代の看板
一畫噺
一鈍畫
一講釋
一玉川三吾
一幼童の遊戲
一俄茶番
一所作拳
一十夜童謠
一地藏の勸化
一遠國の唱歌
一手鞠唄
一置錢壹銖（大盡舞）
一おつこち
一四谷鳶阿波座鴉
一いろは譬
一寺子屋庵室
一茶佳否記（餞宵會）
一祭將棊
一佛像雙六
一早口そゝり
一宛字讀
一落噺
一浮世物まね
一大人遊
一鳥指
一拳
一童謠ふれ〳〵小雪
一橋の下の菖蒲
一木遣音頭
一鞠のかけ聲
一十二月萬歲
一鑄懸駱駝
一胡麻摺
一天王囃子天滿巫子
一弄の名を異にす
一投壺投扇興
一圍碁將棊
一むべ山骨牌
一道中雙六
一竹田機關

一大道具
一細工見世物
一座敷影畵
一子守歌
一潮來節
一馬士唄
一臼挽田植歌
一淨瑠璃節
一娘道成寺
一雪の唱歌
一謠曲を唱歌にす
一鉤簾の戸
一輕業放下師
一猿狂言、馬藝、力持
一おどけ開帳
一順禮歌
一伊勢音頭
一船歌船頭歌
一豐後ぶし
一ちよんがれ節
一歌景圖
一靑葉の解
一綾鶴

皇都午睡上の卷

西澤綺語堂李叟著

表題の起原、枕を碎く

或片鄙の相應に暮せる人すこし學問の志はあれど師と頼む人もなく彼の經典餘師と云る書籍を買ひて論語を大半讀頃京より來る旅人に逢ひ四方山の話に及ぶ京の旅人は年も若くさまで身を持し體とも見へぬに何かと物語をすれば贈答速かなれば鄙人深く感じ足下の如く博識なるは年頃の學問も容易ならじと云京人打笑て我等生れてより書物といふもの一冊も見侍らず兎角田舍の學問より京の晝寢と社存じ候とそこ〳〵にして去る鄙人國に居て學問せんより京へ往て其晝寢社せん物と多分の路用もて獨京に登つて三條の宿に着日毎に祇園下河原あるひは加茂糺の茶店に晝寢すれどもさせる博識にもならず睡には枕にもよるべしと邯鄲枕を求てすれどもさまで能もなければ括り枕塗枕香爐枕箱枕歌種（ウタタネ）枕船形枕張枕と枕のあらん限りをして晝寢をすれど能寢入てたま〳〵には國の事のみ夢に見て詮方盡手枕ひお枕をして睡れども驗しなければ半年餘りの京登りもむだごとなりと見限りて歸路の路銀をきらさぬうちにと今迄求めし枕の分（ホド）を打碎きて捨我田舍へ歸りしとある昔話をおもひ出皇都の午睡と題して今迄三都にて晝寢朝寢宵惑に聞たる種々の話に虛實を撰まず我僻案も打交へ書集る事になん是や宰予が晝寢ならで日本人の寢言とも笑はゞ笑へと東都淺草に三とせが間假寢せし枕石山人が戲言也

俗言の飜譯

行水と沐湯（モクユ）とを唱へ違へ浴湯は湯を浴ると書ばさまで忌はしき詞にもあらず死行人に湯水をかけ棺桶へ入るなれば行水をもいまはしとも云ん丁灯と行燈を混じたる行燈は往來を通行の時ともす丁灯は居所に置べき也提灯（シイドウ）挑灯の文字は後に書たる物と聞けり牛馬の止動も止はとゞまれと云詞なるを畜生の悲しさには是を聞て動動はうごけと云詞なるに是を聞て止る鑿と烟管の名を取違へ烟管は煙草を呑む具なる

ゆへ是をのみと云鑒は金具にて木をせる物ゆへ木せると云とは滑稽者の云出せる詞なるべし

秀句の渡守

今云口合と云ものは往昔秀句と云て謡曲の狂言記にも秀句の渡し守と云あり旅人船渡しを渡るに賃錢なきを歎く一人是に無錢にて渡る工夫を教ゆ其渡し守は秀句を好めば薩摩の守也といふべし心はと尋たらばたゞのり也と申せよとて別る旅人教の如く渡し船に乗り薩摩の守と云船守船を川中にとめて心を問ふに忠度の詞を忘れて彼是云延す中船向ふの岸に着く旅人心は青なりといふて逃る船守やるまいぞ〳〵と追ふて入る是則口合のもとにして秀句とはいふなり

東都の地口

東都にて口合を地口と云近世出たる三養雜記に地口は土地の口合と云事にて假令ば地酒地卵など云類ひにて地とは江戸をさしていへる詞也とはあたらず是似口にて似かゝりたる詞を云がゆへなり扨似口口合に種々のわかち有三養雜記に出たるは天神の姿にて口をおさへたる繪に「だまりの天神鉛の天神圓子三串書るに「圓子十五三五十五今は四文錢にて商ふがゆへに四つざしなれど以前五つざしにて五文に賣りし頃なれは百年跡の口詞也

似口行燈

又地口行燈とて初午にともす行燈には繪を半もたせたるなり「達磨大師の茶筌の姿（図）ゑびたこかしく（図）又句を長くいひつゞけしは「精靈のまこと〵棚經の坊さま見ればみそ萩露が垂るゝと女郎の誠と卵の四角あれば晦日に月が出る「君が射姿的場で見ればふだん尺二を射んなさる君が寢姿窓から見れば牡丹芍藥百合の花「小田原提灯細くかたばみ印の定紋今川了俊愚息仲秋にたいして制止の條々など也又通例の地口と云は「繪馬あげ願ほどき胡麻あげ「梅は見てさへ酷とや申す雁もどき「雪見に出たる三谷船一富士二鷹三茄子「年の若ひのに白髪が見える沖のくらいのに帆が見える「玄關に席を改て口上を聽林間に酒を煖て紅葉をたく「銅の鍔渡邊の綱「檢校唁嘩杖が澤山天上天下唯我獨尊「娘は琴より三味のことり鞁はもとより波の音是らは江戸の似口也

浪華の口合、書口合

京攝にての口合を書口合とて下に繪を書上に文句有て安永天明頃の草紙に有「ほの暗に戸を明て此浦船に帆を上て振袖の娘羽子板を持て門松立し門の戸を明いる圖な

り此書にて句の餘情をきかせるは先書賛の心なり繪に勘平簑笠にて火繩の火をかす曾我の五郎朝戻りの姿にて煙草の火をかるを書「時宗勘平馴染にもあらず時に范蠡なきにしもあらず地獄閻王の前にて牛頭馬頭仙人の目をかけ居る圖」仙人かけ目なし現銀かけ直なし鞍馬天狗牛若に誤り居る圖「鼻杉の根に付にけり早住の江に著にけり是らは書にてきかせたる句ゆへ書口合と云も佳なり又書なくとも能きけるあり「赤き襷の紅屋との淺きたくみ「本堂涼しさ圍扇捨本藏苦しさ「袖萩勘當になり悲し某佐々木になりかわ打わすれり「反橋はだしになりかゝり同題「天神質屋へ自身に御座る天神七代地神五代などなり近世段々巧になり同字を嫌ふと見へて口調一變したり金壹朱と銀壹朱と吹替の頃「金で見馴て又銀で死んで生れて又死んで「仙臺高雄を目に懸て現在母御を手に抔と題の詞に新奇を工夫し「濱邊の蜑人山邊の赤人かけて「垣の外の四斗樽柿の本の人丸抔は古風になり「あんずより梅が安ひあんじゃうよ産が安ひ抔は愈古風となれり

似口に似て異なるは語路なり語路は自然と語勢の通ひて夫と聞ゆるを云「九月朔日命はおしゝ饅頭は喰たし命は惜し「お染久松廣ひ樣で、せまひ遠州濱松は廣ひ樣で狹ひ又一種異なる有「氣がもめの吉祥寺「堪忍信濃の善光寺「有がたい屋の眞柳さん「そふは左遷堂の不動さん「あつと頂戴鏡立「嘘を築地の御門跡「恐入屋の鬼子母神抔なり是を口合の源ともいふべし

川柳點

東都の川柳柳樽浪華の冠附笠附は其土地に附たる物にて他國の人の眞似るべきもあらぬ業なり川柳のうがちは世人の能しる所なれども一二をいはゞ「拜領の頭巾梶原縫縮め「由解村へ勅使より先山師たち「惚藥佐渡から出るがいつちきゝ「其手代その下女書はものいはず「その當座書も簞笥の鈬が鳴るなど寔に人情をよくうがちたる物なり今此口調を古しとて廢り近世は「蜻蛉の出臍駿河の富士の山「誰が廣くしたと女房理窟云「關取を女房ばかり小さがり抔變れり時々の流行あつて是も古くなりけん

冠附

浪花の笠附も寛政より文化の頃は流行に隨ひ月々に句集出たりしが近頃は甚廢りしと見へ句集も出板ならず人口に膾炙する句も盡たりと見へたり

折句

以前はやりし折句は端唄の唱歌に讀込あれば今にも

廢らず「蕣の盛りはにくし迎ひ駕アサムノ折「餘處でとく帶ともしらず絆て居るヨヲクノ折是らは其頃の折句なり浪と云題にて「芥子の花さわらば落ん下心ケサシノ折「きぬ〳〵と云題にて皆嘘の突仕舞なり寒山寺ミツカノ折か樣に有しものなり口調今時の樣に鄙陋に無ゆへ發句かとも心得るもの有り「萍は思案の外の誘ふ水或は又「山吹や傾城に子は有ながらと作せる端唄は俳諧の發句より出たり「傾城の晝寢ぬ程に思ひ詰と云ひ出すはケヒヲの句より出せるとしるべし

もぢり笠

一種もぢり笠と云物有中の詞を上下に讀入てきかすなり「御祖師樣ありがたかりし瓜の皮「百性はおのがわたに風すもふ好「あぶり餅こがしやかとなる摩耶夫人などなり

有難　己　綿　蟻　集　堅　小野川　谷風　釋迦

尻附跡附

又江戸にては尻取附廻しと云京攝にては跡附と云有句の下の詞を次の句の上に置事なり江戸上略「六じやの口をのがれたる「たるは道連世は情「なさけの四郎高綱で「つなでかく繩十文字下上略方「稻荷の鳥居に猿の尻「のしり〳〵と上下で「下の關までおゝせ〳〵「お關が弟は長吉で「長吉〳〵あばゝにつむりてん〳〵「天々天滿の躶巫子「みこが戻ろか住吉參り「參り下向の足休め「すめの判官盛久は「久松そこにか冷かろ「たかろは船頭の松右衞門「ゑもん繕ひ正座する「するがに淺間富士の山下略などなり

粘頭續尾（山科の跡付）

今浪華稻荷祭禮に御輿太鼓を舁掛聲となるは「近江に石山秋の月「月に村雲花に風「風の便りを田舍から「唐をかくせし淡路島「島の財布に四五十兩「十郎五郎は曾我の事下畧是ら安永頃に忠臣藏山科の文句のみにて跡附書たる板行を見し事有暗記ながら爰に現わす「扨山科の住所「所おなじき女どし「どしをさしたる大星が「星がる所は山々の「山とはづせば直に居間「今はの本藏眼を開き「ひらき見ればこはいかに「いかにも底意は奥庭の「庭に雪つむ奥座敷「坐敷の案内いち〳〵に「いち〳〵立聞奥と口「と口のんで跡を明「明ていはれぬ謎詞「詞の鹽茶汲むお石「石をむかひに片男波「お浪はすぐれて器量人「りよふじん嚴敷師直が「師直どふれと下女の淋「りんきすなとおつしや

心なり　星なり　ホシなり　雨戸なり　屋敷なり　一ト口なり　小浪なり　物モウなり

つた「しやつた切たと言はなし「はなしきめでたきその中に「中に泣母泣娘「娘は父の御ほん藏「本藏苦しさ打忘れ「忘れぬ忠義の武士と武士「武士ある女の不義同前「せん石違ふを合點で「がてんで力彌が手にかゝる「かゝる親子の緣深き「ふかき契りの新枕是唐山に粘頭續尾の戲と同じ趣なり

都て此種類甚多くて其時々流行し世に流布せる板行にも遺らず詩歌連俳に心を碎くも右に云句どもに心を盡すも同じ隙を費すなれば其當座にて云捨るはいと惜きものなり此惣名を只雜俳と云是にもそれ〴〵の點者有て業とする者少からず然れども其句者はもとより點者の名後世に傳わらずいと本意なし

雜俳の品目、札の立見

爰に雜俳の點者程あやしき業はあるまじ世上の流行を能くしりて昨日はどこに店開きありけふは彼所に喧嘩ありしなど委く知らざれは句者は銘々新奇を吐人のしらぬ珍說を吐て持來るゆへ其流行を知らざれば判者とはなり難し先年書口合集に札の立見とて四天王寺再建其外開帳の建札橋詰に立たるを往來群集して見居る圖を書り點者飛驒の內匠なりと思ひ取天王寺再建等を思ひ合せて秀逸とせり句者は鮒のさしみの口合にて案じたる物を點者深く考とりて思わぬ手柄をとれりと云

二字段々

東都に一字附二字段々とて今にも流行するいはゞ尻取跡付の類にして藏主との二字あるは前に二字有て藏王と地主權現の心なるべし是を親子と付たり折節泉岳寺に開帳始る處にて時節といゝ點者よく聞て秀逸とはなしけり又七夕との二字に借伊（カルイ）と付るは夕霧伊左衞門七を借る狐泪に孕扱（ツヾ）とは女を抓んで子を孕泪金にて扱ふと聞り又夏中のよせに西行に傾盥と付る是は日は西に傾き盥にて行水すると聞く拔井に秋葉是は東海道荒井を拔て秋葉廻りをする事よく聞たり又點者云山を拔く子葉の句と井の端の秋色の句とも聞けるなど前の二字を的として附る中に誠に流行を盡し和漢の故事を云とすれば思ひもよらぬ食物の名高きを入又高名の藝者の名を出す是を聽聽ぬとて句者より點者をたしなめる事有點者は机を放すやいな東都の市中を駈廻り新奇の雜談珍說を聞歩行となり戲場遊里は森羅萬象の難說早く聞ふる物ゆ

へ點者かならず此兩處に來つて遊ぶと云

鶴助の發句

○文政中に俳諧の師宗月夜庵三津人（ミツンド）と云有其身膝行（イザリ）の疾あれども流行をよく知りて御靈の芝居にて中村鶴助（當時中村歌右衛門成駒屋甑雀の事なり）七化九化の所作事をして大入せし頃の句に「田植るや鶴助が事云ひ合ふてと詠しが當時三都の俳優の長となるをよく流行に云當たるとしるべし

物は付

又一種物は附と云有東都にて以前はやりしと云「見へそふで見へぬ物は富士山より駿河町と有り

何に付

又もぢりの一體に奥樣のお寢間へいつかそろ〳〵と這かけてくる蠅の花と云有是浪華では何といふ物といふ物と類せり昔の流行歌に「娘したがる母親までもさせて見たがる繻子の帶「長もあれば短かひもあるはお侍の腰の物是何といふより歌となりたり「われたもありわれぬのもある物なアに「茶碗屋の店などゝ云いはゞ謎の類なり

何曾々々

謎々はいと古きよりもてあそぶ物と見へて徒然草などにも見へ近くは文化中東都より謎とき坊主來つて卽席に謎を解大に流行し事有其頃人口に膾炙せしは「虎屋饅頭とかけて天王寺「心は五十で十「誰にても抱れる男の子とかけて芳野の花「心はひと見せん坊抔有しも今は掛盡し解盡したりけん絶て佳謎を聞ず

考へ物

考へ物とて紙きれに題と詞を書て配り跡より心を解て錢を集る事はやれり是も一通りの事にては早く心のしれる物から遠掛（トヲク）たるを善とし名高き考をいはば錢五百文にて長尺の木綿一疋大丈夫「是を武者の名一つの考「六せうの半貫爲よし「子守女「是を大名の名三つの考「もりには毛利丹波秋田あきた「海老藏の心「魚の名三つの考「勢かれに鰈鮎鯛あひたひ是ら謎々より一變したるなり

古代の謎

往古の何曾々々は今とすこしく異なり「こばたひつくりかへして七月半を「たばこ盆「雀が利を持ながら目を拔れされども子をば羽の下に有を「硯ばこ「あさ

つてはあたご參りを「たまご是らを上古の謎々と云

字謎

又字謎と云有「三人は日を踏一人は日を戴き日月相並んで袖を貫く是「春日大明神也又「有レ節不レ于レ竹三星繞二月宮一一人居二日下一弗下與二衆人一同上是節の竹冠を除けば則卽の字也「星の如く三點して下に半月を置ば心といふ字也「日下と書て下に一の人と字を置ば是の字也「弗と人と同すれば佛の字也」卽心是佛の四字を大覺禪師の字謎の詩也

字謎の發句、犬の足跡

又洒の一字の賛月と風躾になつて相撲かな是らは字謎の發句なるべし

又是に似て異なるは雪舖滿地雞犬踏成竹葉梅華といへる絕對の句より出して「初雪や犬の足跡梅の花と云句はなれり五元集に雞去書竹葉犬走生梅華と云聯句によれりと云是らを呼でこそ眞の雜俳とも云べし今時冠附などの鄙俚なる物に混ずる事なかるべし

前句附

以前流行し前句附は誰も知たる句なれど「切たくも有切度もなしと云題に「盜人をとらへて見れば我子也といふ句を附る「己(ツヌ)が使ひに己れが行けり抔も前句附なり是其頃の一體にして俳諧連歌の附句にあらず或人宗祇に云「一つある物三つに見へけり「たぐひなき小袖の襟のほころびてと祇答ふ又「二つ有物四つに見へけり「月と日と入江の水に影さして祇答ふ又五つある物ひとつ見へけり「月にさすそのゆびばかりあらはれてと祇の付られたり其外安倍貞任が衣の袖梶原景季が鞠子川は上の句を詠うち直に下の句を詠是二人にて一首となれり和歌にあらず連歌と云ふにあらず贈答の一首はいはゞ前句附の原(モト)ともいはんか

落首

爰に又作者の名を呼ぬものは落首なり落首とは多くは人の惡口を讀たる物ゆへ句者の名をかゝず譬はゞ我詠出たりとも人傳に聽たるふりにて云又昔は我手跡をかへて幼童の手跡にて書るさまして市中の街に落し置がゆへ是を落首とも言よしそれは天下の政事をなじり公役の私を誹謗せる物ゆへ姓名をしるさぬ

も尤なれどもいはゞ戯場の評判など卑賤の事を落首するには何の遠慮かあらん打出して作者の名も書くべきに其事なきは善事は賞じ悪事はいはぬが善と思ふが故に遠慮なるべし近く憶えし一二を出す或大儒の供部屋より失火せし時焼跡へ張たる落首に「大學も孟子譯なきしだらにて珍事中庸論語同斷又賣藥屋の店出しに夜分墨黒に書て貼しと聞しは「五龍圓ろくしゆの壁で質置て八朱のあひで内は九へまひ是らは其商賣敵などの族の詠なるべし

戯場の落首

戯場には毎度ある事にて文政中璃寛芝翫の兩座最負〳〵の落首替り度毎に木戸へ貼し事有り思ひ出る儘爰に記す（角璃寛達大木戸始金花山と云看板を出して吹る中「出芝翫繁夜話切に七化始めて出せし時にて當れり）「出し物は尻から兀る金花山人がたらいで達の大木戸（中芝翫一谷熊谷「熊谷が夏の道風に當られてあたま丸めて京へ御隱居（中璃寛薄雪角「瑠寛大膳仙臺錢角があるゆへ通用せん（中璃寛熊坂「長範に四翫まけたる歌右衛門中の餘りを平井權八（芝翫堺宿院へ行堀江へ戻「歌右衛門堺宿院堀江出され非人になつて角にうろ〳〵（中璃寛小倉色紙角芝翫先代萩）璃寛「此度は不座も取へず手向山小倉の色紙角はまけ〳〵など最負〳〵の爭ひ喧かりしも三十年の昔となりて道頓堀の繁昌も其頃果をとりこせしにやあらん近世は此落首立べき兩座の賑ひは稀になりけり

所俳諧

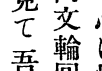
前に云冠附を始時々はやり物の惣名を江南（ドウトンボリ）にては所俳諧（トコロ）と云て他國の耳には通せぬ心なり是に各高手有て點を定る予幼き頃しれた物盡しと云を聞し事有「井戸堀は段々天に遠くなる此餘に一二句もきゝたれど外は忘れたり又角の芝居の横手西側に地藏尊有て其寶前に奉納の額に書口合書有しを思ひ出すに（詞の題菅原詞の種忠臣藏）にて凡廿句計り有て句者の名もしるしありしが其頃毎年失火して地藏尊さへ所がへせしか今は見へず此額の中におかしと思ふは今に忘れず書は勘平を母財布にて打擲の圖に「勘平死ぬのじや母氣強のじや（何で死ぬのじやはらきるのじや是幇間の第一鶴非權八也）權羽と記せり其餘の句覺へず思ひ出偏眼にちらつき其頃爰は何屋彼所は誰々の住家と思ひ出しぬれば今は又後の世の昔となるべしとなつかしき物也

金毘羅樽

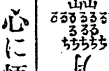
其頃又一種の金毘羅樽と云ものはやりしこは東都の柳樽の口調にて淨瑠璃歌舞妓の穴捜を云也忠臣藏と夏祭とは其頃番附に板行して今稀に遺る予が著述の傳奇作書殘編に出す見べし都て樂屋内にて月並に編集して外題二つ宛三ヶ年ばかりに數十題集り一小冊となり亡父より珍藏せしが或友に貸たるを友失ふたり惜めども甲斐なし其内おかしきと思ふを爰に出すひらがな盛衰記「義盛は其翌出陣病氣する「景高は呑ぬ藥禮たんとする「駒若は樋口が跡の假名前、一谷嫩軍記「江南の梅より先に山櫻「敦盛の馬いつの間か逃て去ぬ、義經千本櫻「梶原は歌人と聞くにはめ句する「靜をば萬歳の娘かと人は云ひ、雙蝶々「長吉は異見の後もやはりのら「時折はなまけでお早呵らるゝ、伊賀越乘掛合羽「其後は雪隱に苦を病む武助「和田の三語らにや巳之助拍子ぬけ、菅原「其頃は廿五日に休みなし「口蜘蛸で時平の大臣還御也「龍田の前焦付したり玉子酒など當狂言は大約言盡し果は三國志を題とし「孔明を鼻紙代で先抱へ「孔明周諭一文摺かと手を開き「戲れに關羽胡弓を髭で摺「赤壁に今度解船町が出來「黄巾の賊梔花の直が上りなど有しが此中に樂屋の通言あまた有て病氣する鼻紙代はめ句する抔は他所の人に通せず樂屋の穴捜にして所俳諧最第一なるもの也

畫に似たる文字

昔より何人の作り始しともしれず文字にて自然と其容形になる物有李鼎筆臼などを始古篆の文字に鳳龍の容に書有り多く兒童の弄にのみなれり數種ありて文字と畫を交へたるも有文字計りも有畫計りも有先文字には圓横井傳内口田中十内是らは先に云字謎の類なるべし



是を三山通る兒のさかづき



是を米如此善心を起し惡心を止一心に悟れば佛心に同是は野馬臺詩に類して和歌の回文輪回體ともいふべし錢の容を書中央の孔を口と見て吾唯足知といへるも共に浮屠氏の書る也

字にて畫を書く

「梅と云字の刎たる所へ梅の花を四五輪書人丸と文字にて書人丸の肖像と見へ「山水天狗「のしこし山「花と云字に山岡頭巾を着せ花盜人とす「へまむし入道は古き物にや山の井に「繪に似たる顔や

〈ヨマムシ夜半の月雛や立圃の句有り正保の頃也又葉室大納言の自畫自賛とて「世の中を樂にへまむしよ入道あればある儘なけりや其ぶん〈ヨマムシ道是らを思へば後世のものとはいわれじ



古代の看板



糊屋の看板に丸き曲物を張りて〇有と印たるはりが細ひといふ謎なるよし煙草屋の看板にも予幼き頃は〈むこ〉と印たる物そこ爰に有しが今は絶て見ずたばこ假名一字に一畫そへて三字に通わすかなにはひなど一字を直に二字に渡る書法あり草行の文字にも此類多く有事也

畫噺



文化の始山東京傳奇妙圖繪と云小冊を出す是には人丸の文字にて人丸の容を書梅の文字のはねたる所枝となり梅花をあしらひ〈ヨマムシ道などを始に書て禿とかなにて書て禿の容としおいらんとかなにて傾城の容を書り其後文化六七年頃亡父畫噺と云事始たり一二をいはば鴻池の主其頃俳名鷲江と云が こう髷とてはやれり」か樣な髷にて來り向ふより辰巳屋の主「かやうな髷して行合喧嘩となる眞中へ加島屋の主」かやうな髷にて分入挨拶に及び丸ふと云乍ら○と書そへ元の如くに納つた〇是を畫噺の起原として社連を組銘々新奇の畫噺を巧出し月に兩三度の會有て畫噺當時の梅と題して三編まで出板せり此中に朝早く内を出て本海道をずつと住吉へ參つたが〇歸りは〇阿倍野街道を戻つたら云乍書て足がすりこ木になつた又さる所の娘の居間へ忍び込ふといた所が〇こふ障子がしまつて明ず庭には〈こふいふ塀は有又こちらから忍び込ふとすれば〇こふしまつて有とふ〳〵ゑゝ蠅不入這入らずと書き終る是ら一時の戯れとは云ながらいとおかしき遊戯ならずや





宛字讀

假名にてとと書てへちまと讀すほへとちりぬへとちとの間也是字謎の類也中興角觝取の名にいと一字書てかな頭京がしらと書て假名どめ九十六と書て一字九十六讀方不明と讀すよし上總の九十九里村の文字を白里村と書一を足せば百となるゆへ白を九十九と讀すよし皆字謎なり近江國小六月村は子育村の書損を改めず書來るよし

鈍書

字直しとは多く片假名の一字を題として是に書そへて書となすの遊戯なり又一種鈍書（ドンエ）と呼以前は炮烙頭巾  柱の向ふに箒を釣  天狗の厠に這入し抔にて有しを其後段々巧となりぬ随分解し難きを書ば點者はそれをよく見出す事となりぬ  酢吸の三聖  是を淨藏貴所なりと上座に撰むなどよくうがちたる物なり祖中村慶子（俳名富十郎）  釣鐘岬の嫉妬娘にて書たるい十し藤（フヂ）は字直し書直しに通ひて字謎の一種異なるべし

落噺

世に落し咄といへる事は古きより有と見へ曾呂利新左衛門井の上新左衛門など頓作の咄有て多くは秀句謎々の類にて狂言記又醒睡笑などより出る寛文延寶の頃の落しばなしの冊子兩三部も見たる事有近くは天明頃の板行に三都の落し話の佳なる物を集めて舊觀雜話と題して序は坂東岩子（ガンシ）（俳名道外坂東岩五郎）書て三都の咄を三冊にしたる物有其後追々新作出來て東都にて櫻川慈悲成無樂可樂が三題咄とて卽席にて來客より得たる題の趣をはなす浪華にては松田彌七辻講釋の如く市中の軒にて高き臺の上に乘前に臺を置て拍子木を鳴らして聽聞の願をはづさせ桂文治は別に咄小屋を建て日々新奇を咄出して一派を立たり後に道具鳴物を入此道の名譽と賞す文治作の咄を冊子とし數種出板せり中にも臍の宿替名高し別に薄物の綴本に著せし道具太平記蚤虱人間體道中記大開好色合戰などを出せり此好色合戰は甚鄙陋也といへども以前聞し事有て其文のおかしき所を思ひ出て爰に書つく（好色合戰の一章放ありて削る）

講釋

講釋師といへば古くは志道軒の辻講釋よく人口に膾炙せり京攝には吉田一方名高く近くは吉田天山老人也是を講釋の師とも云べし其後三都に誰彼と云もあれど天山に及ぶべからず今や豆藏講釋とて戯場の狂言身振聲色に類して咄家に異ならず諸藝とも昔より衰へるは流弊の習ひ是非なし

浮世物まね

又輕口物眞似とて姓もなき馬鹿口をたゝき頤をはづさせ戯場俳優の物眞似をするを東都にて豆藏聲色と云浪華にて忠七の身ぶり物まねと云豆藏忠七は小屋

主座元の名也寛政文化中に吾妻清七と云者身振物まねに妙を得て野郎帽子を當て芳澤いろは（俳名巴江）帽子を脫で淺尾爲十郎（俳名奥山）などをまねるに其者爰に顯れ出しかと怪しむばかりよく似たり昔唐土函谷關にて孟嘗君の客鷄の聲をつかひ關の戸を開きしといへば今浮世物まねとて牛馬鷄犬諸鳥のまねをする事和漢共に古き事と思わる

玉川三吾

亦清七と同じ頃三絃胡弓の曲絃（キヨクビキ）に妙を得たる玉川三吾と云盲人は竹の皮にて胡弓を摺一挺の三味線にて二挺三挺の連絃ときかせ放屁の音などをひくに妙を得たり此者歿して後かゝる曲を聞ず

大人遊

文化中出板の草紙に大人遊と題して松好齋の畫にて座敷の遊戲のみ擧し書有「棒捻」枕引「正直聖天樣どこらがよかろ」「疊の緣踏んだり緣ふまずなどを始」「白鬚明神御鬚の掃除」「蛇の尾とろ或は紙のこよりにて目鼻口を拵へめんない衞をさせて眉毛耳などとて一つ〳〵に渡す爰と推量にて（図）か樣に置を是とする戲也

幼童の遊戲

多くは鳴物停止の折の慰みにして遊戲數種有浪華にて幼童のつらまへごくらと云を東都にて鬼ごつこと云浪華の白眼ごくらは江戸にてにらめくらと云ふ浪華にて座敷遊戲に宇治は茶所と云は人數に合せ椀のかさ或は小皿等の中へ酒茶菓子煙草など座中にある物を書て中に一枚書ぬを入是に當る物は我思ふ勝手に遊ぶ休の印也各前にふせて扱三絃に合せ宇治は茶所茶は宴（緣カ）所娘やりたアヤ聟ほしやと謳ひ乍ら座中車座に成つて廻して各前に廻りし器をあける酒の字に當りしは呑煙草に當りしは呑又追々に右の通廻す事也

鳥指

鳥さしと云遊戲よく似たり酒席にて骨牌の札に殿さま用人鳥指と三枚の外は鶴雁鴨雉子など鳥盡しの繪札人數にあわせ裏むけてよく札を切配る也殿の札に當りたる人殿の札を出して用人と呼用人札持し者前へ出して何の御用と問ふ殿けふは鳥をとらして遊ぶと思ふ鳥さしを呼べ用人鳥さしと呼鳥指の札の者ハツと答て札を向ふへ出す用人鳥さしに殿の御意をの

べ殿の好の鳥を云付る鳥指雉子とか鶴とか仰の物を其座中に持居る者をさすさし違る時は罰酒一盃呑又外の者に云當らぬ時は又一盃呑三盃呑ても得あてぬ時は改て札蒔直す也廓中居續などにはかゝる遊戯など仕盡して遲日を暮すをいと興あり

俄茶番

浪華の俄と云遊戯は原謠曲の狂言より一變したる物と思わる東都には茶番と云て俄に相似たれ共又異也口上茶番は何にまれ我當りし題に合せ地口口合にて落す茶番狂言と云は京攝の俄に落しのなきを云いわば豆藏めきて素人狂言をする也上方の如く流し俄の類を江戸吉原の俄とは云也京攝の俄にも數種有て文化中には袖岡繁辨連湯桶草履吉など老練の輩有て夏祭の頃は二人三人宛の仕組俄有て祭禮の日には所望に任せ店先にて仕又座敷へも往てせしもの也素人の俄は多く流し俄とて異なる姿して物賣の聲又は流行唄の口合もぢり等にて落せしもの也其頃は五十才以上の者色黑く或は老人大男の隨分色氣のなき人を俄男など賞たるもの也近來村上淀川本虎などいへる老練の輩新作の俄をなせしより連を結び俄師と呼びしより素人俄黑人俄と二流にわかち今や三喜新幄南玉なんどほとんど歌舞妓役者の心となり給金いか程と定め芝居の小屋にて道具鳴物を入場棧敷にて見する事とはなりぬ是幇間牽頭とおなじく忠七豆藏の類とはなりけり嗚呼浪華の名物も廢りたり文化中に俄選といへる雙紙二編有て天保中それに倣つて俄天狗と云書も出板に及べり

拳

拳は原長崎へ來泊人のもて來し物にや此道に達人多く文化中に浪華の義浪名高く松好齋書を交て拳會圖繪二冊を著す拳會には土俵を俵り手に拳褌をはめ角觝に倣ひ名乘りをあげ五人拾ひ十人ひらひ抔云有虎拳狐拳虫拳など出來れば其後拳のかわりに種々の所作をし打や囃せや太鼓に鼓に大鼓ヒヤリテン〳〵チリンカ〳〵コロリン〳〵大名公家お上人に山伏はゝち〳〵座頭の坊屋根屋に大工に疊差船頭馬方四つ手駕頼ませよ〳〵そこらでセイ跡狐拳になる也

所作拳

又菊々猴々豆々と云拳も有近頃東都にてはやりしはジャン拳也酒は拳酒色品は蛙三ひよこ〳〵蛇ぬら〳〵

ジャンジャカジャカ〳〵ジャンケンナ　婆様に和藤内が呵られて虎はハウ〳〵ツテトロンテなめくでサア　來なせへ跡は狐拳也是より色々の趣向をつけといふは三國拳とて天照大神孔子釋迦有たれどはやらず予此上は樽次底深が酒戰の時の盃を思ひ出蜂龍蟹の拳より趣向あるまじくと思ふ蜂はさす龍は呑蟹は肴を挾むと是に甲乙を附たらばおかしからん

童謠ふれ〳〵小雪

童謠俗謳は古く傳ふる物なれば字音の轉ずる事多く言誤る事多し徒然艸に烏羽の院幼くおわしませし時雪のふる日仰られしふれ〳〵こゆきたんばのこゆきと云は米の粉をふるふに似たれば粉雪を云たんばとはたまれ粉雪かきや木の股にとうたふを聞語れるよし

十夜童謠

俗謳と云は京師に例年十月六日より十五日迄十夜とて淨土宗の寺に法會有洛中町々の子供鉦を叩き夜毎に門々へ來て米を乞ふて曰なむあみだ〳〵おうづるてんまの人あみだ地獄は遠からず毎年よねんもほかになしいちの盃劔の山おうさてこうさて其時涙の暮六つ觀音勢至は蓮のれんげに打乘給ひなまいだと謳ふを何か譯もなき事と聞居しが南無阿彌陀と申する間の人は彌陀地獄は遠からず愛念餘念は外にもなし道も嶮岨劔の山追立々々其時涙に暮六つ觀音勢至は跏趺の蓮華に打乘給へと云べきを兒童の言誤り也と佛足を組て端座するを跏趺といふとぞ俗に藏六かくと云事也

橋の下の菖蒲

鎌倉賴朝時代に俗間の謠歌也ときけるは橋の下の菖蒲は折どもおられず刈どもかられず伊藤殿土肥殿土肥が娘梶原源八助殿太郎殿是蒲の御曹子の御連枝なれど弱きにも强にも何の用に立給はぬを菖蒲の折どもおられずと云伊藤殿より下は大名權柄の人にてもてあつかひしと云心也とぞ予幼年の頃浪華にも此童謠を專ら諷ひし事有其時の文に木杭隱し九年母橋の下の菖蒲刈どもかれぬたい殿同鯛の虫は輕業味噌ちつくり酒ちつくり呑でもお腹はたちやぬなやと云しが何の事を云しにやと思へば鎌倉時代の童謠の遺し也

地藏の勸化

國々にての童謡いと多きもの也其内に國々の訛方言等言誤りて愈他國のものには解すべからず京攝と東都には其物は異にしてやゝ似たることまゝ有浪華に七月廿四日には子供持遊びの地藏尊と鉦を土にて製したるを丸盆にのせ地藏の勸化米ちとたんせと近隣の門々にたち米を乞ふ東都にて二月初午に土細工の狐を小さき書馬にのせ稻荷樣に十二銅をおあげと子供口々に云て門々に立賽錢をとらす時には珍重〳〵と云とらせぬ内には貧乏やアイと高聲に云て歸る春秋と時候はかわれど大約相同じ

木遣音頭

音頭掛聲木遣りの類も種々ある物也上方にて物を運ぶ掛聲にゑいさやちよふさと云京建仁寺の榮西長老鴨川より今の陀羅尼の名鐘を寺中へ運ぶ時榮西や長主（チヤウス）と云しより發る又京の大佛造營の時大石を運ぶに勢州路より大津迄引來る折の音頭に松坂越へたやつさと云しより遣ると云船歌馬士歌小室節の類いち〳〵數ふるに際限なかるべし

遠國の唱歌

中にも一種おかしきは浪華の七夕より八朔迄童女の一連に並びておんごくといへる物を諷ひ市中を歩行いつの頃より始まりしと云事を不知是童謡に類して歌數種有一二をいわば遠國（ランゴク）なはゝなはゝや遠國なさヨイ〳〵船は出て行帆かけて走る茶屋の娘は出て招くハリヤ　ヤアトサア〳〵愛は松坂越へたやつさ踊りもアリヤ〳〵サア〳〵よいヤサ抔思へば音頭より出たる童謡なるべし一置（イチオイ）てまわりやコチヤ市立ぬ天滿なりやこそ市立まする二置てまわりやコチヤ庭はかぬ丁稚なりやこそ庭掃まする三置てまわりやコチヤ三味彈ぬ藝子なりやこそ三味ひきまする四置てまわりやコチヤ鰯よらぬとしよりなりやこそ鰯よりまする五置てまわりやコチヤ碁はうたぬ能衆なりやこそ碁を打まする六置て廻りやコチヤ艪はおさぬ船頭なりやこそ艪をおしまする七置て廻りやこちや質置ぬ貧乏なりやこそ質置きまする八置てまわりやコチヤ鉢わらぬ麁相なりやこそ鉢破まする下略さあてさて〳〵扨横堀の饂飩屋の子が心中をしたともふし母樣男は誰じや男若ひ者米屋の手代下略扨も艷（ヤサ）しや螢の虫は草の小影に身を焦すハツヤリヤさあさよひやさなど此類數種有

中にも京師は又是と同じふして異なるは男子のみにて竹螺を吹拍子木を首にかけうかその面（大きなる丸面をあたまより）かむり大勢謠ひ連歩行事なり其文句にも數種有盆の十四日に廿日鼠へさへて元服させて髮結て牡丹餅賣にやつたれば牡丹もちや賣ずと晝寢して猫にとられてひんよいよほ又昆布屋の嚊が一枚紙惜んで昆布で開ふいてひりつくや〳〵など謠ふ又浪華にて童謠にお月樣いくつ十三一つそりやまだ若ひこんど京へ登つてと謠ふを東都にてお月樣いくつ十三七つと云何れが是なりや不知

鞠のかけ聲

東都にて羽根突折一子に二子三わたし嫁子いつやの武藏（ムサシ）七重の藥師九つ十を浪花にては一（ヒイ）や二（フウ）や三つに四つやと云手鞠を突に一（ヒト）ころ二ころ三（ミ）ごろ四ごろ五ごろ六ごろ七ごろ八ごろ九ごろ十ごろ十で豆腐屋のお內儀が三つ子を產しやつて一人の子は木綿屋へやつてモメン〳〵〳〵ヨまひとりの子は茶屋へやつて茶〳〵〳〵ヨまひとりの子は紙屋へやつて紙半帖もろて爺御に半枚母御に半枚跡に半枚遺つていろはと書て左義長へあげてとんどの道で喧嘩が有てわけ〳〵〳〵ヨと謠ひながら手鞠をつくなり又ハリヤ一（イツ）反（タン）ハリヤ二反と突有是は蹴鞠の（ヤリアチウ）の掛聲より出るものならん

手鞠唄

十二月手鞠唄の唱歌は鄙陋なるものなれどこは天和貞享の頃浪華新町の廓中繁昌の節太夫天神に行儀躾方を敎ふる師の作せしものとて紋日名寄にて一ヶ年の年中行事を集めしもの也百七十年の今に廢らず行わるゝもの也三絃に弦唄ふも正月より四五月迄にてすへは唄ふもの稀也じつと手に手を七五三（シメ）の內とて嗚呼よい彌生は指（ユビ）で惡哂落憎と（フツツリ）もゝの節旬卯月々々も後にや廣く釋迦も御誕生道鏡增りの幟棹立通（ツウ）を失ふ萩月又（ハアギツキ）とりかゝる二度めの彼岸などよく此長々しき文句を色文句によせての作は手際なる物なり

十二月萬歲

京に京土產とも十二月萬歲とも云物有是は色文句ならず唯年行事のみにて初春の壽祝ふ松飾表にさら〳〵新袴（モノモウ）大黑屋德右衞門年始の御禮忝ひ禮者の外はストントン〳〵手鞠や拍子と諷ひ出しちよど三

百六十豆の數皆禮者の事こそ目出たけれと終る迄いと興ある物なり

置錢一銖(大盡舞)

抑廓の始りはと諷ひ出す東都の大盡舞は近來流布隨筆に委しければいわず此三つの歌は三都の風儀をしるに足るおもしろき物也此餘時々流行のはやり歌も佳作の物は後々迄遺るあれども多くは其節うたふのみにて廢る物也是も其時々の人情を述はやり詞有て幼稚の時はやりし歌などフト歌へば昔慕しき物も有ておかしき物也流行詞は其當座のみにして後々は何の事を云しにや解せぬ物多し予幼年の頃より段々變化せしは置錢といふ事也誰々を相思ふと云男女の中を置錢と云しが多くは幼童の辭にて是をいわゝと赤面したる物なりしを段々人氣賢しく相なりて今時十歳未滿の小童たりとも恥るけしきなくなりたり置錢は幼童の遊戲に六度穴打などに錢をもつて錢を打時我はうたずと錢を置人に打せて勝敗を論ずるの詞也又沖に漂船のごとく戀の心の切なるをかけて沖船ならんとも云り

鑄懸駱駝

前老夫婦土瓶燒鍋の鑄懸とて市中を歩行職人有しを見て男女連立歩行を土瓶の鑄懸と異名を附天竺より渡りし獸牝牡の駱駝を見しより男女の連立を駱駝と呼變たり天保年間江南の妓家にて我思ふ戀路の話を云時は聽賃受賃を取る金一銖の定にて是のたまりし時芝居行或は食悦などにす是を市中へ移つて男女の色を一銖〳〵と異名せり

おつこち

又ツコチとも云東都の方言に都ての物を落たる事をおつこちたと云是口說落した又口說落されたとは古くいへる詞にて出家などの墮落せしを坊主落と云嵯峨野の女郎花に遍生の我落にきと人に語るな是落たと云詞の往昔よりとなへ來る證とすべき物也あの女には落たあの男には落たと云心よりヲツコチと變名せり遠國他邦の人の耳にはさぞ解すべからず

胡麻摺

上手を云とは口上手に云事にして油を云ともいへり東都にてはヲベッカを云と云近來是さへ胡麻するとも云此名義委敷予が綺語文草に出たれば見べし流行詞はいと多くして中〳〵際限なかるべし昔の詞にいふ

てもおくれな小夜嵐何ぞいふてか幽に聞へる中興はやりしはそんならそふ猫にやんチヤカホンよふいわれた事じや何ぞと至つて近きは扨子じや熱アツ〳〵などいかなる事より言出しか解らず此道の識者に問ふべし

四谷鳶阿波座鴉

東都の俗四谷鳶と云浪華の阿波座鴉と云能對句なるべし奴僕の藤巻柄に手をかけ白眼いる空に初鰹を掻たる鳶の圖有是四ッ谷鳶にして阿波座鴉は錢もゝたずと新町へうせて買〳〵と啼との俗謡より發るぞめきひやかしの異名なるべし松本五粒俳優祖松本幸四郎幡隨院長兵衛のせりふに藪鶯は京育阿波座鴉は難波潟吉原雀を羽がひに附と連ね詞に云たるは何の心もなく三都の枕辭に冠したるならめ大聲は俚耳に入らず論高ければ俗に通せずと聖賢の辭のむづかしきも詩歌連俳の雅言の通じがたきも一度戯場の俳優のせりふにいわせ淨瑠璃端唄の文句に入て耳に觸るゝ時はいつか聞馴言馴て何の事とも辨へずかたこと交りにも云もの也君子危うきに近よらず其罪を憎んで其人を憎まず前車のくつがへるを見て後車のいましめを說或は哀別離苦の會者定離の唱ふ事を思へば戯場も道をしらせるの近徑也

天王囃子天滿巫子

爰に賤しき業なるものなれど古書浮世齒也に遺りて今姿を見ぬものは東都に天狗の面を頭に戴き扇にて小さき板行をちらし居る圖有是天王樣は囃すがお好と云物貰ひにて浪華に躰身に茜木綿の前垂をして女のぼて髷を着テン〳〵天滿のお神樂堂からお巫子が參りましたとて物貰ひの有しも卅年此方見へずなりぬ近來或好者家古書の懸想文の姿に出立正月元旦の朝夜深きより出てけそう文〳〵と賣歩行しが買者は一人もなく古雅なる見付ぬ容に犬にほへつかれ五疋七疋に取まかれて困じ果て逃歸ると聞しがさも有べし奇は好むべからず異なる容はなすべからず

いろは譬

古き諺の中より撰出し幼童弄の骨牌に書を摺いろは譬と云物有是に數言有ていわば石の上にも三年否々三盃また三盃鰯の頭も信心がら石原を藥鑵一寸先は闇の夜などあれば一組〳〵に違ふたる有東都の譬又異也針の穴から天覗くを江戸にては馘のすいより天象を見る惣領甚六大前髪ゆひをくはへし馘是江戸道外役者なり浪華にて云十五の涎くり京

の夢大坂の夢など云譬也幼童の弄にさへ出す程の事なれば常々譬にも云事也

弄の名を異にす

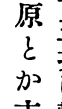
言語は勿論此餘幼童の弄にも呼名の變りし有上にてせゝ貝と云貝を江戸では金砂子(キンシャゴ)上にてむくろじ取と云を掠取(ムクドリ)小手鞠七つを取るを上にて勘彌手鞠(もと江戸森山勘彌所作事にて二寸計の袋を製し中へ小豆を入れ縫ふ七色の縮緬の小裂にてとりしゆへ也)江戸にては手玉取弓矢毬打(ユミヤギッチャウ)を弓破魔(ユミハマ)羽子板にて羽根を突を二人にて突をおよばね又やりはご突ばねと云總に幼童の弄物にさへ名の異る事しるべし

寺子屋庵室

東都にて手跡の師へ幼童の手習に行始いろはを習ふはかわらず跡かな文章江戸往來(オウライ)かねめと云は遙に後に習わす婦童には都路とて江戸より京迄五十三次の名所々々を書し者を學ばす京攝にての京名所を習わすにかへたり上方手習の師匠男子には九々の割聲或は小謡女子には百人一首女大學等をよませども東都にはよませず男女とも幼童を育てるには甚やりばなしなる所なり

附て云和州奈良にて手習の師の家をあじちと云愚考にあじちは是庵室の略語にて三都にて寺屋お寺と云も同じ唱へなるべし高野の麓學文路(カブロ)も是に似たる名義ならん歌

投壺投扇興

漢土より渡りし投壺といへる弄  此圖の如きの壺へ箸の如の竹をほふり附壺の內へ立つ上に乘るに各名有て高手下手の遊戲有我朝の投扇興は是より出たるなるべし文化中大に流行して今稀に遺る源氏の卷々の名に准らへ五十四帖の香の圖に思ひよりしにや風流なる遊び也予以前ふと是を五十三次に轉じて譬はゞ  直(チョク)に扇のもたれし時は原とか吉原とか富士の容と見夢の浮橋は瀨田か矢矧と見立て草津とか岡崎と呼扇のそれて山越殘念といふべきを亡命殘念といはんと戲れし事有可笑

茶佳否記餕宴會

大內の鷄合は鬪鷄(トウケイ)鬪草(トウソウ)は草合菖蒲合菊合とてやん事なき方の翫弄にて草簞笥(クサ)といへるに入て鬪す事也鬪茶は近來煎茶の流行せし折專ら弄て鬪香の式に倣ひ花月の式茶佳否記(チャカブキ)などせしが果は新奇を巧てきゝ茶を止め土俵の內へ茶盆を仕こみ天地人と三枚の札に

て行司雙方へ茶をつぎ唐團（トウウチワ）を上て表德（ヒヤウトク）を呼び茶組は正面の壁に張有左右の人は頤に褌を耳より懸呑より早く三枚の札の內是と思ふを出す行司勝の方へ團を上負の方は跡へひく勝者は五人びらい十人びらいにも及ぶ是も古しとて餒嘗會（アンナメ）と云事を思ひ付たりいわば虎屋駿河屋東雲堂大手饅頭錢屋丹後など菓子に名高き家の餒を求め懸目何程に水何程と定煮て吸物椀に盛嘗（ナメ）分（ワケ）て一二三四の式に當る當日の床には菊咲や露を家內の嘗る程と書し月居の軸物を懸抔して戯れしが長くしては飽易く一兩度にて止たりきあゝ痴なるかな腹のみ張ていと苦しき戯れなりかし

圍碁將棊

琴棊書畫は貴人の翫弄なれば卑賤の者のすべきにあらねど中にも碁は本因坊棊は大橋とて家元有て賤しき者を此業に達する時段を免され姓名も記さるもの也摩迦羅大々將棋大將棋は名のみ聞ていまださしたるを見ず中將棋すらさす人少なく唯世上にもてはやすは小將棋也是を幼童にもたせば指方いくらも有て何の書にも遺らず十六武藏は別に盤あれども先王詰（テウヅメ）はさみ將棋駒の山崩都詰（ヤマクヅシミヤコヅメ）三挺並（デウナラビ）三枚飛廻（トビマワ）り將棋は道中雙六に倣ひし物か三挺の駒をふつて賽にかへたり（玉將）立は十（[illegible]）横は五（[illegible]）逆立は廿表は一裏は無十二詰（ツメ）とは十二枚の駒にて王を圍ひ外に餘りし駒は採つて圍ひの內に打也駒讀五挺並など種々の手段有されども勝負にかゝわれば深くは樗蒲雛打（チヨボダウチ）に似かゝりて野鄙なるべし



祭將棊

俗に浪華には祭將棋とてさせる高手にあらぬどし此勝敗に食事を忘れ少しく勝の手あらわるゝ時は高聲に鼻唄一口淨璃瑠など出るを最上の樂みなるべし是に限り地口合（ヂグチアヒ）云ありお手はと問れ銀桂町の夜店角銀一步銀桂船子に力を合せ中飛（ナカビ）のうるめ仇なはし步のちらし書おも白し頭も白し尾長鳥また待の綱かなどゝ現になつて云もの也此道を好ぬ人の口には親の死目にも得あうまひと譏らるも此道の失なるべし

むべ山骨牌

歌輕多は續松と云て貝覆（貝合せ）とおなしく古く上々女鵑方の弄物也むべ山骨牌を見立繪に書たるは何人の作かしらねども中〳〵卑俗のせし物にては非ざるべし忍ぶる事のよはりもぞするの畫に石川五右衞門忍

術の圖を書人こそしらねかわくまもなしに下女くる巻にて井の水を汲圖われても末にあわんとぞ思ふお千代半兵衛の中に八百屋の婆立いる圖などそれ〴〵俗に近く婦女子の目に附易き樣に書り古き骨牌に謠曲の次第をフシ付にて書畫には仕手の姿を畫し有古きはやり歌の文句を文字に書合せて畫し物も見たる事有唐山の水滸傳百八人を畫し物革にて製せし札三枚計煙草入に製せしを先年長崎の俳友より見せし事有珍敷物也

佛像雙六

雙六も古き弄物にして今廢りたりとはいへど時代の蒔繪したる盤所々にあるを見ても以前流行せし事思ふべし公卿補任官位昇進雙六有佛像地獄極樂雙六有共に廻り飛と混じたる有此佛像雙六の中に餓鬼道の苦しみを書て血の池劍の山を廻りとゞは極樂淨土に入て蓮臺に乘佛となるを上りとす此中に泊りといふべき所に永沈とて爰に當れば長く沈むとの意にて止りはたの者は賽をふつて極樂へ行ど永沈は其儘落る事を云未來永々奈落に沈むと云心にて此雙六に限り永沈と云詞有りて佛書經文に見へぬ語なるを淨瑠璃の文句にわしやよふちんに逆ふたわいのとどふと臥す（軍法富士見西行江口の里爲盡の愁）など是雙六の詞なるを佛語と思ひ誤る物也

道中雙六

今幼童のもてあそぶは東海道五十三驛或は都名所など也廻り雙六の中に飛所有て東海道には大井川川留とて一順廻る內見合有京名所には島原出口の柳桶伏（近松門左衛門作戀の原女房本）有泊りと同じ道中雙六は享保年間伊達染手綱自然生三吉雙六をする條あればいと古きよりの弄也としるべし

早口そゝり

世に早口そゝりと云は洒落淨瑠璃の新關にて小田原外郎賣の長〳〵とせし文を早口に辯じる事也端唄に言興寺とて有は此早口そゝりを集し物也先一二をいわば天王寺の塔々念佛十申たら佛になるといな是を息なしに十遍いふ也客一人に柿一つ客二人に柿二つ是を又息なしに客十人に柿十を迄云法性寺の入道前の關白太政大臣さん法性寺の入道前の關白太政大臣めといふとお腹を立なさるよつて今から法性寺の入道前の關白太政大臣さんと申ませふなア法性寺の入

道前の關白太政大臣さんと是も息繼ずに云事也孫兵衛後家〳〵〳〵是を合せて三孫兵衛後家ひつへき長〳〵三菊桐是を合せて六菊桐向ふの長押の長薙刀は誰が長押の長薙刀ぞ兵部が屏風を刑部にかわせて刑部が持ずは刑部が坊主の屏風にしよ殿樣の長袴若殿樣の長袴武具馬具三武具馬具是を合せて六武具馬具のら如來〳〵三のら如來六のら如來是を合せて十二野等如來まだそれを合せて廿四のら如來蛙ひよこ〳〵三ひよこ〳〵合せてひよこ〳〵六ひよこ〳〵向ふの溝から鮒ちよつとによろりと書續れば實に際限なかるべしハテたわいもない

竹田機關

機關は竹田近江の戲場にて例年春毎に見せ阿蘭陀人來朝の時は見物させる事なり其頃の機關と云は唐兒の人形に筆をもたせ氈の上に紙を置ば口上に隨ひ福壽などの文字を書或は大きなる力士の躰木偶に階子差の曲持をさす又は皷を改見せて箱に入宙に眞紅の紐にて釣口上にまかせ天皷の謠に合せ箱の中にて打などにて有し此機關の前藝として子供の役者に狂言をさせる是を竹田狂言とは呼たる也

大道具

卅年此かた機關一變して小さき木偶載たる臺有少し間を置て岩山に樹木など飾りたる臺を居て淨瑠璃又は唄にあはせ木偶の働き有て樹木折て橋となる木偶此上を傳ひて岩臺に移り放れ業を見せる事を專らとし其臺碎て檀尼鉾の類ひ又は神社の餝り附となる是らを前藝として次は嚴島の回廊又は高野山の名所或は都の名所廻りとか號けて囃上せり下大道具を見せしも今は難波新地横堀新築地等にて見世物小家をかけ見する事にはなりけり

輕業放下師

輕業は多く宮寺の境内にて放下師の輩往來に錢を乞ひ仕たる物也獨樂廻しなども手妻にても今は小屋を建高小屋物とて歌舞妓所作事等に似せて見世物の第一とはなれり予が幼年の頃は見世物といへは駝鳥猿猴猿人魚の干物海龜抔を云たりしが近世駱駝の後は見世物の名は細工物に混ぜり

細工見世物

文政の始天王寺外にて一田庄七籠細工にて涅槃像を

見世物とせしより羽二重細工貝細工瀬戸物細工など大きなる細工ものを見せしより果は梅細工菊細工と四季の草木を細工ものになしけり予が幼年の頃は難波の蹴鞠野田の藤浦江の杜若三番の荻菊は高津の綿(メン)鐵天満の大源など四時の花を相觀せしも今は見世物に位を奪われて風流日々に衰へたり

猿狂言、馬藝、力持

以前馬藝とて野村柳吉女の馬(のり)橘宮丸等馬に乘て道成寺松風此兵衛などの所作を難波新地夕納涼にて見せたるが是も今は廢りて近世樋口矢多丸にて一變したり

猿の狂言女と熊の角力など古風となり葛籠抜(ツヾラヌケ)を始れば隣の小屋に壺抜釜抜の看板を出泥と清水の吹分を見すれば棒呑刀呑を始る齒ぶしと號て楊枝の先に數十貫の重石を付て嚙上れば眼力とて兩眼をむき出して十貫の錢をかける山雀に歌骨牌をとらせる樣にはなりたり

木村與五郎土橋久太郎とて數百貫の重石を曲持して米の俵を足に履腹持中ためとて種々の曲持して關角舐にまけず威を張りしもいつの間にか廢り田舍の八幡天王の社前に貫目を彫たる石のみ遺れり

座敷影畫

昔より廢らぬ物は座敷遊びに用ゆる影畫なり硝子の畫板を逆にはめて人物花鳥の働らき近江八景宮島金閣寺天神祭りなど古風にて品よき弄び也是も近來鳴物囃子を入寫畫と呼て四ツ谷怪談などをす甚下卑(ゲビ)たり座敷手妻座敷影畫など古風なる所を愛すべきもの也

おどけ開帳

文化中一心寺にて嵯峨清涼寺の出開帳有て寶物の內牛の華曼の會說僧(エトキ)に呑龍と云辨者出て大に群集せりそれより呑龍墮落せしがおどけ開帳と號てわけもなき細工物にて佛像の作り物して阿坊陀羅經(アホダラクヤウ)とてなが〳〵と自作經文を唱ふ昔の志道軒に倣ふかわしらね共果は滑稽噺家に混じて道樂懺悔の願人坊に類す惜ひかな

子守歌

年々歲々流行に移り替るは世の習ひなれども古風を失なわぬ物は幼童の子守歌也「寐ん〳〵ころゝん寐んころや寐たらかゝ樣へつれて行起たらおかめに

とつてかまそ抔諷ひよふには國々の訛も出ぬれども唄の唱歌はかわらず「大坂道頓堀竹田の芝居錢は安ても面白ひ「お市こけてこひ菜種の中でサ菜種折らぬよふにこけてこひ「わしがちいさいときやお龜といふたがサ今は七村の庄屋の嫁とかく古風なれば聞よし平の忠盛白河法皇より懷胎の后を下され出生せし清盛なれば幼稚の時院の子〳〵と云て育しとは誠しからず思へども天神七代地神五代にも子守歌はなくて叶わじ

順禮歌

世に西國卅三所の觀音を廻るに順禮歌とて詠歌と唱ふ物卅三首何人の作ともしれず文雅ある人は是を拙と笑へども歌のよしあしにかゝわらず古へより諷ひ來りて一文不通の人もおなじ節にて諷ふを聞ば經文を唱ふるこゝろ也畿內近國を廻るを西國と呼ぶは東國の人の詞にして第二番紀三井寺の歌にふるさとを遙々爰に紀三井寺花の都も近くなるらんとは關東の人の詠なるべしと云人もあり秩父坂東の外にも詠歌といふ物あれども順禮の唱わぬからは順禮歌は西國卅三所に限るべしたとへ歌は連續せずとも順禮歌は古風の諷ひ物と悟れば間違あらじ

潮來節

角力取節といへば「おゝせおせ〳〵下の關迄はと諷ひ新潟ぶしといへば新潟出た時や泪で出たが今はにがたの風もいや潮來ぶしと聞ときはいかなる古風なる唄もやと予鹿島香取を遊歷の時潮來に遊びてもと歌を聞に「大きな陽莖の質流れいくら待ても受手がないヤツトセヨイ〳〵此唱歌也と聞て愛想盡たり

伊勢音頭

伊勢街道の音頭といへば大坂出てから早玉造笠を買なら深江が名所深江菅笠は古き名物にして萬葉に古歌有り予が著述綺語文章に出す奈良より青越山田松坂津椋本窪田關より大津迄宿々驛々に音頭あれども委く諷ふ者なしよふ〳〵「伊勢の豐久野錢懸松よ下略坂はてる〳〵鈴鹿は曇る下略など人口に唱へり

馬士歌

馬士歌は負りやナアヱまける程ナアヱ長持や輕ひ「富士のナアヱ白雪ア旭で解けるナヱ、娘ナア島田は寐てとけるナヱ、そふだか〳〵是を才領歌とも云木曾街道の馬士が諷ふは小諸節又追分節とも云又諷

ひ方一流有木曾に棧大田の渡し和田と碓井がなけやよかろなど諷へり

船歌船頭歌

船歌といへば將軍家御船御成の時又は大名の御座船に諷ふて「めでた〳〵の和歌松さまよヱヽイ〳〵」など謠ふなど古風を遺せり小豆島の船頭ども「爰はどこべやとなア船頭衆にとへば爰は須磨の浦敦盛の石塔ヨイ〳〵ヨヲイと澱川下船に謠ふも睡を誘ふよき伽なるべし

臼挽田植歌

田舍には臼挽歌田植歌は其國々の訛有りていと風流なる物から翁も奥の田植歌とほめ來山もよごれぬ物や歌ばかりとは詠せり

豐後節

都會に名のみ傳ふるは薩摩ぶし豐後ぶしなどにて其餘國名を呼ぶは受領せし太夫の人名多く京攝の宮薗宮古路國太夫東都の一中加東肥前ぶしなど今は廢りて謠ふものなし

淨瑠璃節

淨瑠璃の東越前西筑後も今は混じて義太夫と惣名に呼冷泉表具は節の名となり東都に常磐津富本清元とて中興より發り是も惣名を淨瑠璃と唱へり京攝にては是を豐後と云是ら委敷は操年代記竹豐故事に有常磐津の事は近世出版の書聲曲類纂に出たれば略して爰にもらせり

ちよんがれ節

歌祭文說經も古き物にて聞て鬼門の角屋敷とお染久松の頃は流行せしものなるべし說經がゝりとて今は節に遺りてちよぼくれちよんがれに同じちよんがれは小春紙治の紙屑し鎌倉山の佐野の隱れ家にのみ語りて女盜賊笠松峠尾張源内明石鐵炮順禮殺八鬼山峠などちよんがれぶし廢りて聞事を得ず六歌仙の喜撰法師の唱歌にヤレ〳〵〳〵愚僧が住家は京の巽の世を宇治山とは人は云也下略是のみ幼女の諷ひ物に遺れり

娘道成寺

娘道成寺の唱歌は元祖中村慶子始て今に廢せず是もと一つの唱歌ならず昔よりふしのよろしき文の佳なる物を此時集めて並べたる物也ふつゝり悳氣せまいぞとの條は三勝半七長町の場の院本に有てお園がさわりの文句也かく當り文句のみ類聚にせし物ゆへ此

唱歌に添削ならじとしるべし

歌系圖

歌景圖とて京攝の撿校達調端唄（ケンギヤウタチシラベハウタ）の作者は誰々と表德をあらわせし書有中にも大石浮（ヲヽイシウキ）赤穗浪人内藏助雅名晋其角元祿俳人柳里恭柳澤權太夫等の作せし物數多あり今時無學の人の諷ふ物から語路の違ひ手爾葉の誤りを論ぜず彈もし諷ひもする物から譯なき事を諷ふさぞ作調の故人達今彈所謳ふ所を聞ば歎ずべし悲むべし

雪の唱歌

近世北船場にて歌三絃に大關とか關脇とか云るゝ妙手の者九州地へ遊歷し糸竹を好める人の座敷へ請招ぜられ主の好を聞くに雪を望まる戀する人は罪深くと唫じければ主大に感じてそれさへ聞ばよし遉浪華に名を得たる人也と雪のみ彈て數金を惠まれたりと道々の好人もある物也遠國片鄙の人なりとて侮るべからず戀しき人は科ありとも迷ふ身からは見ゆべからず待宵後朝（キヌ〱）をかこつは戀の情也惡する人は罪深かりさればとて袖をかざして夫（ツマ）じやといふてとは實になりて興ならず片敷袖を褄と見しとの心にて謠ふべし紫女清女が古き物語のみやび詞を婦女子に謠わす物から齟齬のみにて聽もうるさし

青葉の解

青葉と云唱歌は六條の廓の比何都（ナニイチ）とて盲人有て日々廓中へ出稽古に行勾當になるべき官金なくて苦しむ何某の抱へ女青葉太夫も年々親方に借財のみ多くなる歎きの餘り此盲人と密に契り共に死なんと廓を拔け出樫木原（カタギ）より丹波地さして走りしが女道にて心更りいかに勤の身の苦しきとて名もなき盲人と情死せん事好ましからず夜明ぬうちに歸るにしかじと情なくも盲人を捨て廓へ歸れり盲人かゝる事と露しらねば夜終山（ヨスガラ）中にて青葉〱と呼ども答へず良て夜明ければ往來の人に道を尋ね京に歸り密に青葉が事を問へばかわらず廓に居ると聞怒りに堪兼しかど盲人の詮方なく其薄情を演て作れる歌也こは情なの仕業やなさのみ人にはつらからで悲しみの泪まなこにさへぎりて青葉〱と呼べども濱の濱の松風中略聲ばかりそよとばかりの便もがなと恨歎くぞ哀れなる此歌廓中にはやりて青葉は大に迷惑し其行方をしらずと云へり

謠曲を唱歌にす

端唄は謡曲より出しもの數多有海士八島鐵輪放下僧葵の上虫の音は松虫より出し西行櫻石橋邯鄲の類ひ皆謡曲の文を潤色せしもの也道成寺は語りを一直せしもの也東都山田檢校は琴唄に熊野を其儘に調ぶと聞兼てこの琴曲を聞たく思ふのみにて今に緣なくいと遺り惜し

綾鶴

綾鶴といへる唱歌は新町槌屋の綾鶴といへる太夫放庇せる事を諷ひ物に作られ音は幾世の浮世に響くと賦せり鳥邊山と時雨の松は心中道行の文のみにて情死せしにあらず依て祝儀の席にも彈けり是にも席によりて嫌忌ありて新艘船祭の酒席に八島を彈かず袖香爐はもと追善に作せし歌ゆへ彈初又は婚姻振舞の席にては彈ずともあるべきものなれ

鉤簾の戸

鉤簾の戸の唱歌に萍に思案の外の誘ふ水戀が浮世か浮世が戀か下略此諷ひ出しの文句は由平の發句なり此後乙由の發句に萍やけふは向ふの岸に咲くと云は馴染重ねし遊女と中を裂れ田舍の親類に預けられしうちも女の事のみ案じて一年ばかりの年月を送る親もとより迎ひ來つてなが〳〵の勘氣をゆるされ歸宅のよろこびに親類ともに芝居見物に行棧敷に居て向ふの棧敷を見れば死ね死なふと言かわせし女客の膝にもたれ餘所の見る目も耻ず千痴の體乙由は遠目に是を見て賣女の薄情を憎めども今更かへらず人の心の飛鳥川をかこち色情のあさましきを悟り此句を扇子に書て向ふ棧敷の女がもとへもたせやりしかば女鐵面皮なる身にもさすが耻かしくや有けん棧敷を辷り出たるとなり鉤簾の戸の唱歌其比の口調にしてなれりと云

西澤文庫 皇都午睡初編上の巻終

西澤文庫 皇都午睡初編中の卷

目次

一萬歳の唱歌
一女達磨の畫讃
一正五九月
一孫の手竹奴
一粹と通と程の解
一文七元結
一八百屋お七
一三井の家系
一皷烏帽子裝束
一三十六町一里
一伏見の里の考
一疱丁刀
一兵庫の蕪
一二月堂の茶筌賣
一飲酒の十德夏日七快
一七艸薺を囃す詞
一男色影間
一松蟲鈴蟲
一金岸の發句
一曾呂利の畫讃
一懸鈎引墨
一妓王妓女
一假面打の作名
一扇子の指方
一鯉鮒の地名
一甑落月の客
一燧袋
一定家家隆
一遊女町の銜
一肖柏ノ貫賊に逢
一鷹匠
一向島の狸囃子
一蝶番
一折助亡六
一水尾盡
一宗鑑の物數寄
一金春の太皷
一小人の閑居
一瓢輕者
一醫者の看板
一杜鵑の蘇生
一木曾の猿酒
一鵙の草莖
一蛸と蠏に灸をすへる
一熊野の大樹
一閑間の御遊
一六憎
一謠曲の發明
一曾我兄第六代御前
一慶庵肝煎
一太平の腹皷
一山科のノ貫
一陶淵明の菊
一文寶の石
一無藝の大食
一竊香
一宗禪の笛
一隱居一枚起請
一木端の火
一煮染
一雀の隼人
一飛驒の篠魚（サヽナ）
一鵤鮨（ミサゴ）
一鯖の酢
一北野の連歌
一茶人への諷諫
一餝磨の搗染
一太郎餘一郎
一猪口太郎
一四方田四方八面（ヨモヤモ）

一上米刎る
一日披露（ヒビラ）
一燈臺元暗
一富士の裾野
一日想觀
一大雅堂霞樵
一天明京大火
一七里けつぱい（反物商物）
一手枕の歌
一板倉の明斷
一梓巫子
一安德帝忌
一兜軍記
一辻能狼籍

西澤文庫 皇都午睡初編中の卷

西澤綺語堂李叟著

萬歲の唱歌

萬歲は正月十四日男踏歌（ヲトウカ）十六日を女踏歌とて大内にて節會有殿上地下の輩催馬樂をうたひ舞かなづるより發り末の代に千秋萬歲といひて餘風遺れり今江戸にては參河萬歲京攝には大和萬歲とて早春に來れり唱歌は無住國師の作のよし云へり

七艸薺を囃す詞

正月七日七種の若菜を囃すは都鄙ともにする業なり六日の夜七種を敲くはやし詞に七草薺唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬ先に七草薺と云つゝ七度敲ば四十九敲なり是は七曜九曜廿八宿五星と合せて四十九の星を祀なりと有職の人申されしとぞ

女達磨の畫讃

何九年苦界十年花衣と云祇空の句ある女達磨と云畫は英一蝶書始しと云こは新吉原中近江屋の抱に半太夫と云遊女有しが後に大傳馬町の商人へ緣付たり其家に朋友集りて物語の序に達磨の九年面壁の事言出けるにかの半太夫聞て九年の面壁の座禪は何程のことかは浮女の身の上こそ紋日もの日の心遣ひに晝夜店をはること面壁にかわる事なし達磨は九年我々が苦界は十年なれば達磨よりも悟道したりとて笑ひけるとぞ此話を一蝶が聞てやがて半身の達磨を傾城の顏に繪きたるが世上にはやり女達磨の源なりとぞ市川栢莚が畫讃にそもさんか是こなさんは誰と前書して九年母も粹よりいでしあまみかなといふ句をよみたりしとぞ

男色影間

男色はもと天理にそむける邪淫にて在家出家の分なく皆いましむべし大明律に云以陰莖放入人之糞門者杖一百此刑の放とは無理にと云事無理業をすれば杖一百との義若衆は男色を賣も相對なれば杖に不及か中富郎（祖慶子富十郎）と云男色暫時を金千疋の價を以て春宵を壓（ヲシ）たり暫時に千疋を臭淵に投る者必杖一千と淡々は云り（俳諧師半時庵）近世迄東都にて葭町京に宮川町浪華坂町に有て若衆野郎新部子（シンベコ）世外子（セグワイコ）影間抔多名有成長に

及びては俳優の若女形となる娘方の内を新部子又制外子とも云也いまだ舞臺に出ぬを影間といふ他國を飛めぐるを飛子（トビコ）とは呼ぶよし

正五九月

正五九月を三齋月三長月一切諸佛神通月三神變月共いひてもと佛家の詞には正五九月を何事にも忌て屠殺を禁ずるを今世俗祝ひ月と心得たるは僻事なるべし

松蟲鈴蟲

松蟲の鳴聲を知呂林古呂林といひ鈴蟲の鳴聲は鈴を振る如く里々林里々林と云世俗蟲の名を取違へ松蟲を鈴蟲と云鈴蟲を松蟲と呼ならんと云り松蟲の音は松風の凉々と響にちんちろりと鳴は鈴蟲なり法師のふる鈴の音に似たればなり

孫の手竹奴

痒を抓の具を孫の手といへど麻姑の手とて麻姑と云仙人の手の爪は鳥の爪の如くなれば皆痒を抓によしと云又一名を木童子（モクドウジ）と云夏日閨具に用る抱籠を竹婦人（ヤッコ）とも竹奴とも云的對と云べし

金岸の發句

彼岸と云はもと佛語にて到彼岸と云事也春秋分の名とし曆に書くわへる事とはなりぬ晋子其角石摺の句帖に金の岸（カノキシ）とうたひ侍れど金岸の二字諸經になしさらでは渡るかの岸と諷ふ時はこがねども彼岸に至るなるべしと前書して渡し船武士はたゝ乘る彼岸哉此帖の跋に元祿十丁丑年重九應山其尾需而溫飽醉裏漫投毫晋其角と有俳諧師の墨帖珍らしければ爰に出せり

粹と通と程の解

遊里にすいと云は推量する心にて粹と書萬事に委敷人と云義なり東都にて通と云も萬事に通達する義なり近世又程と呼ぶ有り程が能ひ程を賣るなど云出せり粹通とおなじ所より云出せしならん

曾呂利の畵讃

曾呂利新左衞門自畵讃と云もの世事百談に縮寫せり上々樣へあげる  か樣に畵て京みやげ祇園會やせんきまち〳〵ひくの山そろりと有珍らしければ爰に出す

文七元結

文七元結とて東都にて專ら用ひるは彼浪華の五雁金

の俠士雁金文七を賞じて强きを云ふと思ふに文七はもと元結に製す杉原紙の印の名にして至つて古くより云よし隱し賣女を地獄と云は清左衞門と云者始しゆへ箱根の地獄清左衞門に思ひよせ地獄と云ちよき船は船頭の長吉を約語せし事は予が綺語文草に委しければ爰に略す

懸鉤引墨

詩歌連俳に點を加へ又回文の書面にも點を懸る是を點と云は當らず懸鉤（ケンコウ）とも引墨（ヒキズミ）ともいへり懸鉤とはそのかたち翠簾の鉤の如く「〓」すべしと也又引墨とは〆夕書狀の封じめに書をいふとぞ

八百屋お七

八百屋お七は湯島の天滿宮へ松竹梅の額を自書て奉納したりと世に云傳ふれど實は谷中感應寺の祖師堂に常在靈鷲山法華最第一と云額をお七が十一歳の時書て延寶四年辰春二月と落欵せしを傳へ訛れり

扨罪を得し事は十六歳の事にて天和二年戌二月也葬所も駒込吉祥寺といへど實は小石川指谷町南緣山圓乘寺といふ天台宗の寺也お七が法名は秋月妙榮天和二戌三月廿九日と石碑に彫あり天和笑委集と云書にお七が事詳に記せり

妓王妓女

城州嵯峨往生院の開山妓王妓女は江州野洲郡永原村の北中北村の出所にて惠那（エナ）九郎時長の娘也妓王法尼の往生は建久元年七月十五日と中北村の妓王堂に印せり盛衰記によれば妓王妓女が遁世は治承四年にて妓王廿一歳妓女十九歳閉（トヂ）四十七佛十七（ホトケ）と有然れば建久元年は妓王卅一歳也妓女廿九閉五十七佛廿七になるべし往生院にある四人の木像は古作とは見へず中興三譽利貞比丘尼寶永年中に彫刻させしものなるべし

三井の家系

三井越後守源高安は越後守高次の男にて伊勢の國安濃郡一色村に住し高安に男子四人有長子三郎助高時次男治郎兵衞某三男傳藏某四男則兵衞高俊也高俊の長男三郎左衞門俊貞京に出て賈に服し三條室町に住す四男八郎兵衞高利も亦京に出て新町角に住す高利に男子十三人女子五人有勢州松坂及京江戸に三井と呼越後屋八郎右衞門とあるは此高利にて世産を治る術に妙を得たるなるべし然るに越後の回國松坂にて

廢家に宿し庭の三つの井戸より金銀錢の精出て往事を告る回國是より三井と呼越後屋と名乘るを鼻祖とするなどは後人出る儘の説をもふけし事にて論ずるに足らずとしるべし

假面打の作名

假面工に日光彌勒夜叉と云は承平元年に翁次を山城の住人文藏と云長元四年に殁す次を大和竹田住小牛清光永德二年に殁す次を越前大野住赤鶴吉成法名は一透平安城四條住龍右衞門志重政應永十九年に殁す次を越中日水宗忠永見と計も稱せり次に和泉貝塚住越智吉舟次に鎌倉住德若忠政と云寛正二年に殁す次に三光法師もと越前平泉寺の住僧のち叡山に移り住是出目助左衞門が父也とかや日光より三光迄を十作と云又實作と云なり

烏帽子の前へ靡たるは平禮うしろへなびきたるは梨子打と云裝束の袖にひだをとるを掻といふ也古き物語の書に袖掻合せとあるは是を云也

扇子の指方

扇子を隨身するには常には手に持也懷中の時は柄の方を懷中へさし入る也右の方の腰にさすを笛指と云後へ指を矢筈指と云左の腰にさすはなき事なりと或有職の人申されしとぞ

三十六町一里

三十六町を一里とする事は鯉の鱗尾頭かけて三十六枚有鯉は里なれば是にかたどりて三十六町を一里とするとは附會の説也天に廿八宿有地に三十六禽有地靈の數を表として三十六町を一里とするにや又周易に一三五七九を天の陽數とし二四六八十を地の陰數とす六は地數の最中なれば地數に用ゆ六尺を一間とし六間を一段とし六十間を一町とし六々の數三十六町を一里とす

鯉鮒の地名

川魚に鯉鮒といへば鯉は司にして三都に表し駿府甲



敲の胴の名所 乳ぶくら 如孤といふ

敲烏帽子裝束

府の府中の符を書て鮒に當るかこは予が杜撰の癖考かもしらねど是につゞきて津と文字を書所は繁華の稱なるべし攝津安濃津勢州大津江州皆入津の賑ひを賞ず草津江州上州などは入津の地ならねど旅人の往來多きを賞ず沼津駿河なども是につぐ識者にたゞすべし

伏見の里の考

城州の伏見は平安城を遙に伏拜の和訓にして大和菅原伏見が岡もならの都の頃帝都の方を拜せし所也難波の伏見の里は今の三津寺八幡の邊にて高臺の帝都を伏拜し所也と云り中仙道の伏見は伊勢兩宮の遙拜所か八幡のふし拜みなどゝ古書に見へたるも此類なるべし

甑落月の客

禁中にて月水のある女を手なしと云とぞ御調度に手をふるゝ事ならざれば手有てもなき如くなればかくいふにや世俗に手桶番と云も穢れを洗ひ通しにすると云心か御客と云は須磨の俚言にて月の御客と云謎なるよし因に云徒然草に出たる御産の時甑落(コシキヲト)しと云は御胞衣の滯りし時の咒と有も腰氣(コシケ)落しと云事也東都にて手なしを猿猴坊とはいかなる所より呼ぶか其謂をしらず

庖丁刀

丁の字をよぼろと訓じて下部の者の事也仕丁使丁の類也火丁と云は一隊の飯をかしぐ者也俗に飯焚と云又庖厨の下部を庖丁と云其者の料理に用ゆる刀を庖丁刀と云俗に庖丁とのみ云り又料理する事をもいにしへより庖丁と云は古き物語の書にも見へたり

燧袋

燧袋は三角に縫もの也三角は火の形也火打は旅行には必らず持行又餞にも送りし物也神事火を改るによりて穢れたる火なりとも燧を用ひ火を打かけて清淨にする專用の物也又紙服(カミコ)に火打と云物を付燧袋の形は三角なる物ゆへ其形容を摹せしなるべし

兵庫の蕪

慈鎭和尙蕪菜を貰ひにやられたる折の狂歌に武士の射るやひやうづの蕪菜をよつぴきしめて十五束たべ扨ひやうづの蕪とは兵津は土佐の地名にて蕪菜の佳なる所のよしヒヤウズは矢の辭也はつしと立はたと當るへいふつと射るなど皆箭の詞なり

定家家隆

或人話の序に定家家隆（サダイエイエタカ）と云ものなくて定家家隆（テイカカリウ）との
み稱するは何のゆへぞと問尤らしき老人の答に古人
を崇るにはあらわに名を稱せず夫ゆへ訓を除て音を
用といへり然らば何とて人丸赤人（ジングワンシヤクジン）とは稱せざるや
といへば老人答るに詞なかりし迚跡にて一座腹をか
かへぬ

二月堂の茶筌賣

奈良の二月堂にて昔は青竹にて麁末なる茶筌を賣り
老若男女詣たる印として求かへり是をもて茶を立客
をもてなすこと南都の風なりしを今は此茶筌絶てな
し青竹の茶筌の麁なるに茶を立て老を養ふことなら
わせとせしを今は價貴き器にて茶をして心を勞し壽
を縮る人少からず昔の人今の人と懸隔ある事かくの
如し

遊女町の衕

遊女町をくつわと云は文字に亡八と書て所謂孝悌忠
信禮義廉耻の道を亡ふよりの名也と說あれど又一說
に昔吉原の淺草に移されぬ前は今の傳馬町に廓を構
へ丸く堀をほり其中に十文字に衕をつけ是を娼家と
なし廻りに茶屋を置しと也中の通りを十文字にわけ
しゆへ衕町（クツワマチ）の稱是より出ると此說の方近からん歟

飮酒の十德夏日七快

飮酒の十德は禮を正し勞をいとひ憂を忘れ鬱をひら
き氣を廻らし病をさけ毒を解し人と親しみ緣を結び
人壽を延ぶ又夏日の七快とは湯浴して髮を梳る掃除
して打水したる枕の紙を新にしたる雨晴て月の出た
る水を隔て燈火の寫る淺き流れに魚の浮みたる月の
さし入たる共に柳里恭の詞なりおもしろき文也

肖柏ノ貫賊（キクワン）に逢

壯丹花肖柏は西山に居られし時百金を賊に奪われノ
貫（クワン）は山科の草庵にて茶器を賣たる錢七十貫を盜人に
取られたり盜賊は金銀と衣服を奪ふ物なれば在俗の
人は格別にして世を捨たる佗人華美の衣類と金銀は
儲ふべからず家の調度もなるだけは麁なるをよしと
す是賊を防がん第一の用意なるべし

鷹匠

昔鷹匠とて公家衆禁野（キンヤ）片野（カタノ）邊に出らるゝ園（ソノ）とは參議
正三位基氏卿の流を云坊門とは權大納言宗通卿の流
を云楊梅（ヤマモ）とは太宰大貳季行卿の流也但園の基氏卿は
弓馬に達し鷹犬好み其妙を得て此流を持明院と云鷹

犬の故實を記して十巻書と云秦下毛（ハタシモツケ）兩家は隨身の鷹匠也此藝は百濟の酒君より傳はり文安四年の頃波多野豐後守尚政（ナヲマサ）と云御所の鷹飼口訣を記し一色内藏助親行（チカユキ）に傳ふ又蒙求臂鷹往來の作者松田左馬助元藤（モトフヂ）法名宗是（ムネミチ）は下毛野（シモツケノ）武氏（タケウヂ）の弟子也と云又百濟の米光由光（ヨネミツヨシミツ）の藝を傳へしは出羽守源齊賴（ナリヨリ）無雙の鷹飼にて其藝武家に傳わり信濃國諏訪の贊鷹下野（シモツケ）國宇都宮の贊鷹等の徒皆此齊賴の流を相承す禰津神平が流は諏訪の贊鷹の派にて禰津左衛門尉道直（ミチナヲ）の子を神平貞直（サダナヲ）其神平宗直（ムネナヲ）其子神平宗道（ムネミチ）其子神平敦宗（アツムネ）其子神平宗光（ムネミツ）大宮新藏人と云酒君の流と米光由光の流と禰津の家に一統し相承すと云宗光十五代美濃守信直（ノブナヲ）入道して松鷗軒常安（ショウオウケンツネヤス）此弟子に屋代越中守吉田多右衛門家元（イヱモト）熱田の鷹飼伊藤清六小笠原某羽根田某横澤某荒井豐前守平野道伯等皆新得發明する所有て各一家をなす是鷹飼流派の大概なり

太平の腹皷

狐は奸智有て疑ひ多き故に彼が邪にひがめる性を忌て人愛せず狸は癡鈍にして暗愚なれば人も憎まず予先年東都新場に寓居の頃夜陰に及びさも面白く太皷を打音一二町脇にて聞へり戯場町（葺屋町堺町を云）迄は八町有て鳴物聞ふべからず又浪華の如く市中にて鳴物囃子をなす如きを彼地は禁せる物から影間茶屋（八丁堀に有今は廢して）なにて茶番狂言にて有かと思ふに毎晩〳〵深更に及び聞ふるゆへ或日溪齋英泉（畫工茅場町植木店に住む）方にて此話に及ぶ英泉云是狸囃子とて九鬼丹波守屋敷（新場中の橋東詰の屋敷）にて狸の囃す也屋敷の内にて聞てもやはり一二丁脇にて聞ふる也と太平の民は皷腹すと古語にもいへば狸囃子は則腹皷にて目出度例にや

向島の狸囃子

此後六ヶ年目に又東都へ行淺草に住ふ戯場は薄暮に果して（江戸にて芝居の果るをはねると云なり）深更に太皷聞ふる樣なし吉原十町餘の道（芝居町三町大手八町有）にして中々聞ふる筈なし其上川を隔て（隅田川也）東に聞ゆ向島は小梅牛島寺島等にて葛西（葛飾郡に東西有て云也）の百姓なれば太皷の囃子深更にあらん樣なしと怪しみ乍ら其音を友として寢る事とはなりぬ是やはり狸囃子也と云又此近在に廿五座とか唱へて田舍の神事祭禮には社頭に家體を組古雅なる假面を着て壬生狂言に似たる事をす其稽古を在々の若き者晴雨を論せず夜に至ればさらへるを向ふ島の狸囃子と唱ふとぞ八町堀は市中なれば眞の狸の業也向ふ島は

百姓の囃せるならんと思ひぬ土地に住ものは怪しむ事なし

山科の丿貫

山科の隱士丿貫（ヘキクワン）は利休と茶道を爭ひ利休が媚ありて貴人に寵せられ諂多き事を常に怒り利休人の盛なるを知て其衰ふる所をしらず情欲は限りあり知れば身を全うし知らざれば禍を招けり蓮胤は蝸牛にひとしく家を洛中に曳我は蟹に似て他のほれる穴に宿せり暫しの生涯を名利の爲に苦しむべきやと丿貫世を終るの年自書たる短冊を買得て灰となし風雅は身とともに終るとて歿しぬ無量居士と號す

蝶番

葉（テウ）は雙びて離れぬ物に用ふ蝶は雙び飛ぶ鰈は雙び行褋（コガケ）も左右の手を通し儿蝶（キチヤウ）も左右を打合すもの也鰈（テウツガヒ）は大約一つは打ず上下に二つ打てば蝶番（テウツガ）ひと成りて一つうつおりは鰈（テウ）と計呼事ならん

陶淵明の菊

陶淵明は菊を翫ぶ祖の樣に思ふは非なるべし菊を東籬の下に採とあれば摘採て藥用食用に充られしにて桓景が重陽に高きに登りて呑む酒に漬す類ひ成べし元稹が衆華の中に偏に菊を愛するにあらず此花開きて後更に花なしといへるもことに賞するにあらぬを云り菊は花の隱逸なる物と茂叔のいへるも唯叢中に交て見ゆるを哀と思ふなるべし今世の如く根を分ち一莖數十の金に代るは繁華の重疊せるもの也花も隱逸ならねば翫ぶ人も隱者ならず和名にはからよもぎといひ又翁草（ヲキナグサ）とも異名する也

折助亡六

東都にて武家に仕ふる僕を折助と云は折助と呼ぶ者ありての通稱なるべし椿の花に詫助の名あるが如し又一名ガヱンと云は寒の冬も袷一點にて苦にならぬは火焔にもゆるが如しと云心にやグワヱンを詰てガヱンと云は東都の俗語也京攝にて是をモウロクと云是も仁義禮智忠孝の六を亡といふ心にて亡六ならんとも云又一說に城外へ用に出て暮六つ迄に歸らずば門の出入かなわねばもう六つが鳴つたか〳〵と耳を立るゆへもう六也といへるは少しく滑稽者の助言なるべし

文寶の石

湖上李笠翁（李漁）の語に机邊の翫物文寶の類ひを清煩惱

といへり清の字下し得て面白しと閑田子嵩蹊は申されしと也

水尾盡

和歌に詠ずるみをつくし常につを濁りくを清て唱ふるは非也是は水尾串といふ事なればつは助字成べしさらばつを清みくを濁てみをつぐしと呼を音便ならんと云り

無藝の大食

世に言行に飾ある者を見えをすると譏れども見えは先禮の端也見へなきは不禮なる物也人は自負するをもて吾人ともに勤るは自負も亦道具也自負にも見えにも差別あるべし或人大酒を好東坡は竹なければ人をして俗ならしむるといへども我は劉伯倫李太白に倣ひて一生此世を過さんと思へりとて只酒飲事を一藝と自慢して外に何の能もなし能なし男が大酒したりとも何もおもしろき人とはすべからず劉伯倫李太白は唐士にして天下を治べき程の器量ある人なれども佞人上に有て賢者を退くる世なれば用ひられざるを知り自避て其國を去る時を憂ふる心より歎息しそを忘んとて飲酒なれば天下の酒客ともいふべし只酒好にて大酒する族は生醉の糟喰ひなり大酒大食は多く無藝の人に有り愼しむべし

宗鑑の物數寄

古田織部山崎宗鑑が宅へ茶の湯に行れ暮に及迄語られ打くつろぎ寢轉びなどせられしまゝ御裾へ小袖にてもかけ上よといひしまゝ召遣ひの者廣蓋に小袖をのせて織部殿にきせかけしにとめ木の香すぐれて匂ひしを織部殿申さるゝには宗鑑の物すき是にてしれたり香はよき木程稀なる故いかにも少なく大切に聞にてこそ其譽も有此よき木をか樣に澤山にくゆらせては香の意に叶わずといはれしと也

竊香

或貴人常に坊主共に空炷の伽羅をわらせらるゝ時四角に割て削屑は坊主共が配當しける事常也或時新參の小姓に此木をわれよと仰られければ御用始とて次に出四角に割て四面の割屑微塵も散さず割たる木の側に乘せて御前へ出しければ御機嫌損じていつも坊主共が割て出すとはかわり蘿芥の如くむさくろしき仕方也坊主共割直せとある坊主例の如く割屑を配當して美しき所ばかりを差上ければ是こそと仰有て暫

思惟して伽の人を召かばかりにも違ふ物歟と尋給ひければ伽醫者申けるは坊主衆は屑を包置て次々の御用になすべき致方ならん御新參は律義眞法に屑までさし出し候事お次御用の心いまだ到らざる也と申に笑わせ給ひ新參を召て坊主共は屑を盜むにぞあらん古人も竊香と書置侍れ責るに不及我はあほう也と御機嫌共に宜しかりけると也

金春の太皷

金春三郎左衞門は太皷の上手なりしが右の目あしかりしゆへ出端見にくし夫ゆへ自然と橋掛りの方へ顏曲りしと也其弟子眞似て皆顏曲て打觀世新九郎生れ付やみ癖やみ是も顏曲る也門人同じく曲て打幸清次郎かけ聲甚あしゝ皷は上手也弟子共皷を似せる事叶わず聲のあしきをまねる人々笑へば流儀也と答ふ西施が顰を倣ふ物也近來歌舞妓俳優に此徒甚多かりし

宗禪の笛

尾州のお抱へ笛に名を得たる森田庄兵衞（後宗禪と云）尾州にて御客の節松風の囃子有し時シテは喜多七太夫太皷葛（カド）の一郎兵衞小皷幸五郎治郎各支度出來ける時庄兵衞見へず御座敷より早く始よと度々仰下されけれども庄兵衞見へず諸所尋ける時程過てふら〳〵と出來れり皆々せり立いかゞ〳〵といはるれども少しも動せず二便滯れは業ならず頻りに腹もちあしくなりし故隱所へ行しなり只今腹くつろぎ過たり是にてもまだ笛は吹れず今少またれよと云元來庄兵衞は不足の質ゆへ各彌せきたち御催促度々にて上の御機嫌甚あしく辨もなき男かなとて呵りけれど猶々騷がず各も其せきにては氣たかまりて必定松風の位には至るまじ今少し心を落し付て出たまへ尾張樣の御機嫌に違へば御出入止らるゝ計り藝者の一藝を仕損ずるは一世のみならず末代迄の瑕瑾也とて烟草盆引よせけるに各あきれながらも尤也とて感じけると也此松風殊の外出來にて尾州侯にも委細聽し召庄兵衞に御褒美有しと也

小人の閑居

小人閑居して不善をなすとあれども小人ならずとも閑居して不善をなす者すくなからずされば獨居の閑を樂しむ事はかたし大約は據なく隱居する輩世間に多く自得して世塵を避思ひ捨て身を遁るゝ者は稀にして隱居しながら物を貪り世路に執着するは隱居に

似て隱居にあらず隱宅に標札せる抔予是を顯居と呼べり世に顯れ居れば云也諸事古語に反して貞男兩女にまみへずとて女房のみを貴しとする人もあれば眞の隱居は予のみにて世間有來りの隱居は皆顯居なるべし山端の念佛堂の庵主正念坊の行水は淇園が雲萍雜志に見へたれば此人の書たる一枚起請と辭世を出す

隱居一枚起請

隱居一枚起請「もろこし我朝のもろ〳〵の智者達の致し申さるゝ隱遁の隱にもあらず又學問して道の心を悟りて致す隱遁にもあらず唯不用の者の爲（ナンニ）にも世の妨となるまじとさへ心得れば疑ひなく氣樂なるぞと思ひとりて隱居するより外別の子細はさむらはず但し肝心の世渡りと申ことの候へども皆衣食住の內に籠り候也此外に欲深きことを存せば諸人の憐にもはづれ候べし假令鳶をかぶり糟糠を嘗人の軒端に臥せるとも食ては寐食ては遊ぶ君が代の有難を忘れば身は安樂になりたりとも生た甲斐もあるまじく候穴かしこ」辭世「來て見ても來て見ても皆同じこと爰らでちよつと死で見よふか

瓢輕者

東都の俗言に物にこぞり戲るゝ俠者を瓢輕者と云豐太閤の出陣とさへ云ば千生瓢簞の指物を一番に持ゆくゆへ滑稽者流は云浪華にても馬鹿口を敲く者を又ひやうばくをいわしやると不通の老婆など云是瓢泊とて矢張瓢輕と同種か但し漂泊の身は輕きゆへ輕口とて口の輕きと身の輕きをかけて云かとも思へり

木端の火

物の役に立ぬを河童の屁と江戶では云へりかつぱは河童（カワツパ）の略語にして京攝にて河太郎也此屁を聞し者も見し者もあるまじ是木端の火にして煮焚する程の間にもなるまじ俗に木端石と云は誤也木端は木のきり端にして時賴記の淨瑠璃にも炭の折か木の端かと云樣な此坊主と有木の端則木端（コツパ）の事也

醫者の看板

今京攝にて醫者といへば僕に紺看板を着せ家々の印或は苗字の一字を染上る物を着す此始りは慶安中に由井の正雪門弟の輩途中にて駕にあへば他行なりとて早く知るゝ樣にと由井の由の字を看板に染こませたると也東都には武家多く駕に乘る者も多きがゆへ

此事有今時兩三軒の病家を見舞藪醫者僕に印付たる看板を着する事笑に堪たり

煮染

食物の內煮染といへるは醬油にて煮さへすればにしめと心得たるは僻言のよし去る料理家に聞り松魚のだしをよく煮出して酒又醬油を化し煮べき品を分量して其汁を其品に煮付れば染る也是を煮染といふて十種あらば十遍に煮る先の餘り汁にて次の物を焚時は鰹酒醬油の味ひ先の物に染て漉水にて煎るが如し

杜鵑の蘇生

信州高遠の者冬日薪を伐に山へ行切たる節木の中に郭公の死したるを見出し是は藥種にもなるべき物と持返り箱に入置しが其後忘れて翌年三月の末頃にかの箱をひらきしに件の郭公飛出て去りけり古歌に奥山の朽木に籠る郭公夏を待てや子には鳴らんともあれば秋より春迄は朽木の中に隱れ居るにや冥途の鳥と云ば再び蘇りしかもしるべからず

雀の隼人

高野山に時鳥の歸り後れたるが木の節穴などにかゞまり居てやゝ寒くなる時は得動かず餌食もとより得せぬを雀がつどひて餌をあたへ來る年の夏に及ぶ迄養ふいと不思議なる事にて是を雀ほいとゝ云ほいとは乞食の事にて雀の爲の食客と云事也とぞ

木曾の猿酒

岐蘇の猿酒は以前信州の俳友より到來して呑たるがこは深山の木の股節穴などの中へ猿秋の木の實を拾ひ取運び置たる雨露の雫に熟し腐るを山賤見出して持返り麻の袋へ入絞りし物にて黑く濃して味澁みに甘きを兼ていかさま仙藥ともいふべき物也

飛驒の篠魚（ササナ）

飛驒の高山の名物篠魚（ササナ）と云魚は三尺餘りの笹の節に生じる魚にて初夏の頃谷川に落る其味鱒の如く美味也と聞未魚とならざる內を篠の儘一枚持返り予に見せたる人有一か樣なる容にて二尺七八寸もある笹の中程の節に三寸計の筍（タケノコ）付有自然と魚の刻たる形有てよみ鰯程の大きさ也筍の先には早鱗見へて尾先あらわれたり溪川を少し隔て高みに生ずと云り又外に此書を摸寫して狂歌一首をそへ何翁とか落款せし摺物に暗記ながら慥「高山の谷間に生る篠魚こそさゝを進る肴にぞなる」七十何歲とか書有は高

山の人也予考ふるに雪中に谷川も降り埋もれし頃魚此笹の笋へ子を産付置しが翌春雪解して谷川は低く流れ笹は遙の岡に有篠の子やゝ成長に及んで魚も共に成長して初夏に笋自然と落る時谷川に刻入て竹の皮を脱で游ぐならんと思へり非情の笹の節に有情の魚の産ずるも珍らしからずや愛すべき物なり

鵙の艸莖

鵙の草莖百舌鳥の早熟（ハヤニエ）は度々見し事有鵙は虫けらを取て餌とすれば冬虫類の地中に入ては不自由なれば秋の末種々の虫を爪にかけて木の先に刺置冬の餌に當るを云予河州暗嶺の麓にて見しは蛙を梅の枝に貫きし也難波大黒庵の庭に有しは大なる蚰蜒にて實鳥類迚も賢しき物也「草莖はいつとりに來る梅の花」と奇淵叟の句は其時の唫にて有し

鵙鮓

鵙鮓（モズシ）は鳥と云鳥沖にて浮みゐる魚を爪にかけ海岸の巖に生たる藻を掻分て埋み置を海士の子藻の影より是を取食する也藻の上より取る時は重ねず漬る事なし下よりとる時はしけ日和の食料にととてかいやが上にも漬置物也とて海邊の者に聞たり

蛸と蟹に灸をすへる

九州地へ下る者の數日大船に乘て風待汐待の徒然に絶兼播州路にて三里の灸を居る次手求ある蛸の頭へ灸を大きくすへたるが熱に苦しみてや船中をかけ廻り這廻りして兩足と覺しきを頭へ上て掻落せしを見て與に入又下の關にてかさみといへる蟹を求め甲へ灸をすへたれば苦しみ横這に這廻り泡を吹身を峙て鋏にて泡を切て甲の灸を消せしと聞しが無用の事ながら其物々に難を避る法あり萬物の長たる者常〳〵それ〳〵の難を避る心構へなくては有べからず

鯖の鮓

京師にては祇園會には鯖の鮓を漬て客に出すまた鯖の鮓には鹽加減第一也加減は米壹升に鹽目四文目のわりに入れ飯に焚て至極能加減なりしを今にては鹽目五文目入ても水嗅くて加減あしゝ諸人幸ひ好になりしか又鹽のきゝの薄く成りしかと云に是全く左にあらず近世一統奢の境なれば前々の如く辛き鹽の下鯖は用ざるゆへ也と京師の料理に心ある人の話にてしりたり

熊野の大樹

寛政六年の春紀州熊野の深山より卅里奥山へ御用木見立に行て榎の木の大木を見出しぬ是まで折に來る者もあれど唯山とのみ思ひしが此度大木なる事を見出し則人夫の杣人等其大さを積り大守へ上覽に奉りぬ一榎の木一株百廿抱へ（六十丈なり）高さ三百廿四五間（百九十五丈餘也）枝三本に別れ南の方の枝凡八十二廻り丈にして（四十一丈也）宿り木一杉長さ七間半二本有一椎長五間二尺七本有一檜長五間半十二本有り一黄楊長四間半九本有一松長さ四間半七本有一柳長さ四間半六本あり一竹十八本有一南天長さ二間半七本有右紀州表より書狀にて申來る寫し書餘り珍敷ければ話の種共なるべき事ゆへ爰に出す

北野の連歌

北野の神前祈禱の連歌有し時かくなるものかさすらへの果との前句に此神のかへり北野に跡たれてと此付句を執筆書とむると同じく社頭震動して暫くやまざりつるは神も納受し玉ふにやと皆感じ申たるよし或人連歌の席に句を出しけしからず慢じたる顔付を見て脇より生天神〳〵と云て膝を突ければ餘りなつかれぞ社壇がゆるぐといわれしゆへ一座腹をかゝへしとぞ

閑間の御遊

昔は貴人にしゝまの御遊と云事有人々つどひ給ひて種々と談話の中にひと度は無答にて戯れ給ふを云也とぞしゝまはしづまる間と云事を略し音便の詞にして閑を守る也壺矢五寸乃至一尺を度として物いふ時は鐘を打ならす今此わざ絶てなしとかや我〳〵の雜談にても互ひに語り聞などせる内燈火の消たる如く話のきるゝ事ありやゝ暫く無言にして興盡る事也貴人のしゝまの御遊はかゝる事のあるまじき爲の用意と思わる後考をまつのみ

茶人への諷諫

利休居士が詞に貴き價の器物を愛するは心利欲に走るが故也缺たる摺鉢にても時の間に合ふを茶道の本意とすといへりされば茶道を好む者の他の手前をも辨へなく我習ひたる義のみ心得是こそ我流になくて叶わぬ品也と無益の器を高料に求め飾置は古道具店にもひとしくうるさき限り也數寄咄といふ物にも主人家居と道具に自負し客に云けるは我數寄屋の内によろしからざる物あらば詞に隨ひ省べし遠慮なく云

給われとありければ客は諂なき人にて家と云器といひ行屆ざる所なけれど唯此内に其元一人なからまじかば風流雅境是に過たることはあらじと云りいとおもしろき諷諫なり

六憎

六憎とて憎むべき物六つあり金持て高ぶる程憎きはなく書を見ずして物識顔する程憎きはなく人に物をやりて恩にきせる程憎きはなく吝きほど憎きはなく欲深き程憎きはなく人をそぬむ程憎きはなし

餠磨の搗染

餠磨の搗染は播州餠磨郡餠磨の津細江町に紺屋多く昔より相續の家も有べけれど染法悉く傳へたる家はなきよし搗染は唯幾度も藍に染て臼にて搗唯厚く染たる成べし仍て臼にて搗をかつと云餅を搗飯(カチイト)と云にて知るべし濃き藍染の事也

謠曲の發明

奥州にみてぐら(ミテグラ)と云武家有彼舘にて能に鐵輪をしかかり恐しや御幣(マタグラ)と云を行當り俄に直し恐しや胯に三十番神おわしますとは淺猿しき神の居所やと笑ひぬ又或人三輪の謳にある夜の睦言(ムツゴト)に御身いかなる故によりとは作意もなき作りやうかな惣じて理のつまぬ文章やたゝ或夜の六つ時に御身いかなる上に乘と直したらばよからふとは作者いかい迷惑なるべし

太郎餘一郎

昔は第一の惣領子を太郎次を次郎と云夫より三郎四郎より十郎まで名付十一人目は餘一郎十二人目は餘二郎と次第に名付る也とぞ十は成數なれば十郎よりあまると云意なるべし盛衰記に金子十郎家忠の弟金子與一郎那須十郎資隆の弟那須與一也餘を與に作るは假借也平惟茂を餘五將軍と云も十五郎也源義經は第八子なるを九郎判官といへるは八郎爲朝の成行よからざれば八郎を忌て九郎としたると云り

曾我兄弟六代御前

曾我の十郎は十男にあらず父河津に死別れ伊藤九郎祐清の弟として十郎祐成と呼び弟の五郎は北條を烏帽子親と頼み四郎義時を兄として五郎時宗也平家の六代御前は平貞盛忠盛清盛重盛維盛と第六代目に當るがゆへ然いふとぞ

猪口太郎

昔噺の桃太郎金太郎は惣領にて狂言の鈍太郎惡太郎

も是におなじ沼太郎川太郎火太郎は其品によつて號し物か雲に丹波太郎あるが故に霧太郎を天狗の名に冠らしめたり東都の料理家に葛西太郎と呼砂糖漬に太郎梅と付しは梅は兄にて太郎とはしれたり是惣領は甘ひと云心より號なるべし卅年前何にでも太郎〳〵と呼て猪口太郎など〵呼びしが重猪口の三つ或は五つ重の大なるものを然よびしなるべし

慶庵肝煎

肝煎口入する者を東都にて慶庵と云遊女の肝煎を女衒と云慶庵と云は江戸木挽町にて大和慶庵と云醫師也同じ比伊達三郎兵衛は長谷川助右衛門と云浪人と三人申合せ男女婚姻の媒酌などして世を渡りせげんと云は女衒の轉訛にて衒はうると讀り三人共寛文中に悪事有て江戸を追ひ放されしと云其頃よりして人の世話するものを慶庵と云肝煎とは古き詞にて胸上之炎焦心中之肝是らよりいふ事ならん

四方田四方八面

明智光秀の臣に四方田但馬頭は四方田但馬頭と讀江州に四方田と云地名あるよし又四方山の物語りに及ぶと云も山にあらず八面と書て八方を八面と讀り四方八面の物語をするなど書べし

上米刎る

物の運上をとるをうはまへをとるうはまへを刎ると云は上米取ととて口米をとる如く百石積たる船にて一俵をとり三俵積たる駄荷にても幾升をとると云が如く住吉神領として調進せしより云事也とぞ

七里けつぱい

俗語に忌嫌ふ事を七里けつぱいよせ付ぬと云は高野弘法大師行狀記に七里結界と有るを轉訛せし詞なるべし

商賣往來は京師の手習師匠の作にして商賣盡とも外題を置べきを庭訓往來などを倣ひて文通の往來ならぬに呼び來りしと物しる人は譏き其上端物雇物の雇の字は衣の字にて衣通姫と書衣の字也織上たる儘の物を反物と云裂たる物を衣物と云よし附て云召使の者に時の衣服を給するを仕着とも四季施とも書り四季着の約語なれば四季着と書をよしと云へり

日披露

近世戲場の俳優又は淨瑠璃の會などの引手進物の目錄を送る書附をびらと云ビラは披露の約語ラウを詰

て披露とは云也いつ幾日より始ると云をひゝらと云は日披露と云事なるべし

手枕の歌

濃州岐阜の片邊にて人々或草庵につどひ連歌などし侍り庵主は六十もやゝ過るばかりの尼なりしがいみじく行ひすまして誠に塵を出し心の流石に敷島の道はひとつの癖と惠心僧都のよみおき給ひしごとく捨かねてやさしき人なりし連歌も滿備して因に古歌などの物語しける中に一人の若輩の宗匠に問は雪ふれば木毎に花ぞ咲にけるいづれを梅と分て折らましといへる歌は梅といふ字を分て木毎にと巧みによまれたるよし申す人侍るはさこそといへば宗匠頭をうちふりて否々左は心得給ふな成程或説その事いひ出し侍れども鑿説にて歌はさやうに入おがによむものにあらずむべ山風を嵐と云らんとよめる山風は嵐の字にかよひ又春のよの夢計なる手枕にかひなくたゝんとよめるは手枕に腕をいひかけたるなど一首の上の自然の逸興にて是を求めてよめるには非ずと語れば滿座いづれも服膺の體に見へ侍りしかくて人々わかれ歸らんとせし折ふし雨ふりいでゝ蓑笠合羽やうの物もてるは先へ出一人二人は雨の具なくてイみ侍るを主の尼見てまづ〳〵留りて晴間を待給へ宿したまわんとても古稀の老尼が浮名もあるまじ苦の衣は唯ひとへかさねばうとし二人ねんなど戯るゝまゝ立どまりて又火桶かきまさぐり膝うちくつろげて語るに尼せが云先にそなたの問はせられし木毎に花の歌につきて宗匠の物語さこそとも思ひ侍れどかひなくたゝんの歌は千載集の詞書にもかひなをみすの下よりさし入たると有て且その歌の返しに忠家卿もいかゞかひなくとよみ給へばかひなをいひかけたるものと尼は思ひ侍れ夫につきて尼が物語の侍る雨水晴間待給ふ内語り侍らん申につけて恥かしながら且は懺悔のため且は出離の緣の善知識を尊む事に候へばはゞかりもあるまじ尼が出生は丹波の國の民の女なりしが十歳許の頃凶年相續し上疫癘流行し父母うちかさねみまかり伯母なるが許に養れ侍るに此伯母婿情なきものにてつゐに都の人商人にわたしやり島原といふ傾城町に賣て小鬆となりつかへし始めは父母の事のみおもひ出古郷の戀しかりしばかりなりしが稚き心は愚なるものにて日毎に媚になれ花やかなる

人の出入たちふるまひも羨敷いつしか芝蘭の室ならぬ婬亂の室に入て其香に染ぬるぞ淺ましき後には客をおくりむかへ僞て悦び僞て怨むるもはづかしとだに心付ざりし一夜を限りに去て再び來らざるも多き中に年をかさねてわすれず訪はれぬるも嬉しかりし或下京邊より通ひ來て是も一とせ許も馴たりし人の唐の文字よく書る有しに一日妾(ワラハ)が扇の白くしてさう〳〵しかりぬる一筆書て給われといひしを辭するやうもなくさら〳〵と書てたまわりぬ固女のよむべき文字ならねば何といふ事とたづねしかば一雙玉手千人枕半點朱唇萬客嘗といふ詩のよしいかなる事の心ぞと問しに是はぬしのごとき遊女を作れる詩なり一雙の玉手とは一對といふ心にて左右の手のうつくしく玉をのべたるごとき腕も夜ごとにかわる口びるも張郎が妻と成李郎が妾となる身の萬客來つて嘗るとは作りて世に淺猿きものは傾城なれば是を憐て作れる詩也と語らるゝに初て心付身のほどの宿世おもわれ侍れど今更色にも出しと酒汲かわし物語などして夜ふかく客人は歸ぬるにつく〴〵思ひつゞくればたまたま人と生れながら士農工商の妻ともならで禮儀廉恥を忘るゝ屬と成事よと胸うちふさがりて目もあわずいかにしてか此苦界を出て人倫に立入べきとゝざまかうざまと思ひめぐらせど女の思慮の白地に考得べき事かわかくて其日は引かづきてありしが夕かけて客人の來りぬるとて案内するまゝ今日は心地あしく髮だにも梳らずなど云しかどあながちに名をさして對面せんといひこし給へる客人にて從へるとの家主もあながちにいさむればしぶ〳〵に出行ぬ是までしれる人にもあらずしかも田舍人のふつゝかに見へ侍るいと興なくそこ〳〵に酒宴も過て閨に入しに枕のほとりに彼の扇の有つるを客人のひらき見たるに又胸つぶれて顏も紅葉する心地なれば奪んとせしをいなみて此筆の蹟こそいとうるわしけれ徽明が骨法を傳へし詩の心もあわれ深きをこそ書けれ誰が筆なるなどめでたりし翌朝はとく別れ侍しに夕方何心なくかの扇を開しにいと美き手にて

手枕にかすともなにかつらからん
おしむかいなき假の此身を

と書添侍る誰がしわざかと思ふに夜べの客人の外にすべきものもなし去にても初の詩の心を引たがへて

四大假合の此身をすてゝこそ浮むせもあれとおしへたるも尊く遊女となれるは宿世の緣身を盡しなばおのづから道にも叶ふにやさらば今より假の此身を惜まずして心は生死の外に出離せんと思ひつきぬ去にても此歌よめる人の心の尊くやさしかりけん如何なる人にや尋ねたく思ひけれどあやにくと其後はよすがなくて二年許過るに或夕暮案內しておとゝしのいつ〳〵一たびまみへたるばかりのよすがは今更云出し難くやと有しに嬉しく頓てむかへそれらの事をも語いでゝ其後は折々忘れずとぶらはれぬればわれも此人をこそ終のよすがと頼む心なりしまゝそのうち長へ約束の年月の過ぬれば伴われて此國加納と云所へ移り侍りて初て荊棘林を遁れて一農の妻と成ぬ彼主頗る心有りて情ふかくおしへ給わり二十年許先におくれ侍りて後かゝる身とはなりて爰に世をふるなり去にても古へ人の情のほど夫妻のむつみのみならずかくまで身を助け給わりぬるも尊く將詩を書る人もいかなる宿世の善知識にやかゝる事には導引給ひぬらんと忝なく忘がたく侍れば旦暮に回向して現世ならば安隱後世は無上菩提とゝぶらひ侍るなりと語るに雨もやみて道たど〳〵しかりし夕闇も月待出しかば人々は又かさねてを契りてかへりぬとぞ

燈臺元暗

享保の頃室鳩巣翁は江都駿河臺に住て老後痰痺の疾ありて起居も心に叶わねば日夜衾枕をのみ親しみ日頃問來る門弟子に仁義の道を講せらるゝ中に世俗の諺に燈臺もと暗しと云は世に何事にてもあれ外にはかくれなき事を其もとにて聞ば却て分明ならぬ樣の事に云ならし孟子の道在邇而求諸遠といふ意にもかなひ申べきかと座客のひとりがいひければ又ひとり近代日本にていはゞ織田信長關東關西の諸國迄手をのばし討したがへられしかども手元に暗ふして明智に殺されしは燈臺もとくらきに候わずやと倭漢の故事をひろて云けるを翁聞てすべて比喩の語は義理のとりやうにて色々に申さるゝ物にて候此諺も各の申さるゝは燈臺もと暗しをあしきかたにたとへらるゝに翁は又此諺をよろしき方に取なして韓退之が短檠の歌に長檠八尺空自長短檠二尺便且光と作れるごとく燭臺も長きは燭のもと暗く短きは燭のもとあかるし夜中に書をよみ字を寫すやうの事には手もとを

明らかにして其用をかなふる故に短を貴ぶにて候得ども一二尺の手燭にては此座上にてもくまぐ〳〵のくらきを照しぬる事は難かるべししかればもとをあかるくしては遠きをてらし難く遠きをてらすは必もとくらきものとしるべし翁關尹子を見侍りしに吾道は處レ暗が如しよく明中の事を區畫すといへり關尹子は關令尹喜が書也尹喜は老子の弟子にて道德經五千言も此人の爲にあらはせると也譬ば吾身くらがりに居て明りを見れば明りの事殘りなく見ゆる也吾身あかりに居て暗を見ては一せつ見へぬ物ぞかしされば暗に居て明りを見るやうに己が智をふかくひそめ養て暗より明らかなるを生ずるやうにすればそれこそ眞の明といふべけれもし己が材智にほこり聰明を盡して唯手もとのあかるきを專にせば但手もとの事のみ見へて下手の碁をうつが如し末の手は見へざる程に毎々是非をあやまる事も多かるべし

板倉の明斷

近き頃故板倉周防守京師に留主たりし時訴訟をきかれしに己が材智のはやぎり（ママ）聲色の動なば我もそれに氣乘し彼もそれに氣奪はれ兩造の辭を口せず雙方の情を盡さゝる事あらんとて必障子を隔て態と手づから茶をひきなどし唯心のちらぬやうにして聽れしと也さすが近代の名人とはいひながらおのづから聖人の心にもかなへりそれゆへ曲直理を盡し聽斷神に通じ人々畏服せざるはなし周防守ある時京の在家を通られしに或家に幼少の子出て遊びしがあれ周防こそ通らるれといひしを周防守馬上にて聞とがめて我不肖といへど上の御代官としてこゝにあれば京中村閭に住する者男女老弱をいはず我をかくおしくだしていふ事あるべからずしかるに此家の兒輩かくいふは常に家人の我を恨みてかくいふを聞馴し故なるべし是は定めて子細あるべしとて其家主の名を聞せて通られしが翌日其家主を召よせて汝先年何にても訴訟したる事やある今尋ぬるは少しもきづかひなる事にてはなし有し樣に申べしといはれしが始は何かと辭退しけるが再三問れて此上はかくさず申上候それの年某の月の事にて候父の配分の事に就て一類の者と爭ひ候て訴へ候しが某者無實の事を申かけ候へども證人を多くこしらへ候て申出候故御聽斷の上相手の勝に定り候其次第かやう〳〵とくはしく語るを下役

人に命じて其年にあたりし簿案をくらせけるにすこしもたがひなかりしかば其上にていよ〳〵尋ねきはめて是はたしかに某が聽あやまりたる也いと殘念なれどももはや年久しき事なれば今更すべきやうなし其配分の程某償て我過を謝すべしとて自分の金銀を出して其者へとらせられしとぞ周防守己が威勢をつのらず己が過失をかくさず我は常に晦に處て明を衒はず我は常に愚に處て智を先だてず其心公にして私なし誠に古今に有がたき明智といふべし今是等をもて此諺を考るに燭臺は長くしてもとの暗にて其明おのづから遠きに及ぶ君子の道は闇然として日の明らかなるが如し若短うしてもとあかるければ其明わづかに近うしてやみぬ小人の道は的然として日をほろぶるがごとし此理をしめして明かなるものは必もとをくらうすといふ心にて燈臺もとくらしといふにもあらむかし

富士の裾野

又爰に其意とは同じからねど一話有昔憲廟の御時或士人の好學ありけり其人按察使に命ぜられて畿內の郡縣を巡りしが首途に臨て學問の師に贈言を乞しに其師此度道中にて富士山の下を通り給ん時よく裾野を見て行れ候へあれ程の山はあれ程の裾野なくてはたもつべからず都て山は上より土下りて下の肥厚なるにてこそ持候へ若上に嵩ありて下細く上大きにして下小さくば忽に崩れつべし此度上の御爲をおぼさば只下を厚うするやうに御こゝろへ候へ此外に申べき事は候わずと云しとなん是易の剝ノ卦の意にていへるなるべし剝の卦上は艮にす艮は山なり下を坤にす坤は地なり是地上に山ある象なり山は高く上に位すれ共地は下に附て放れず是山は地を基本とする也人の上たる人上を剝落して下を厚うすれば邦安うして山の地上に安置するがごとしもし下を剝落して上にませば山在地上の象にそむく程にやがて危かるべしとなり

梓巫子

天王寺のはやし町は梓巫子のすめる處にして二季の彼岸には在所の人のこゝに來りてなき人の口を寄るとて梓の弓に其鬼神をまねき往事を泣く殊に二季の彼岸にひとしほあわれに覺ゆかしこのはやし町にすめる巫子の名の昔めきておかしければ書つく橘屋小

女郎、隱居藤、黒格子の元家、栴檀の木の姉、藪の内の龜、舛屋女郎、藤屋の小女郎、黒格子の方、黒格子の嫁、此餘にもあまたある中に黒格子殊に名高し

日想觀

津の國天王寺の西の海つゞきを那古の浦と云也春の入日は武庫の山の北に沈み冬至の短き頃の日は淡路島の頭に入給へり又二季の彼岸の中日といふには落日天王寺の大鳥居の中心にかゝりて須磨明石の中間に入也是を日想觀の大事と申て昔後白川の上皇と圓光大師とともに此岸の落日を拜給ひし御跡を源空庵と申せしが今の一心寺也と申傳ふ又壬生の二位も此の邊りに庵を結び名古の浦の入日を見て七首の和歌を詠給ひし跡家隆塚とて遺れり慈鎭和尚天王寺の別當になり給ひし頃とかやいゝつたへたり

安德帝忌

物の名も所によりてかわりけり難波の蘆も伊勢の濱荻と或人賣用に付享和年中長州に下り數日滯留しけるが都て上方と替りし事多き中にもまづ年頭より中元せつ句の禮勤るに錢一二文宛紙に封じて上書に金百疋と我姓名を記し是を家毎に置て廻るに先方も又かくの如く同前也禮式は固より節振舞法事髪置夷講の類何にても先より招かるゝ時はいつにても上下を着て行又其禮に行のも上下也開帳參り抔にても七分通りは上下着たる有也扨又赤間が關あたりは女に位有て俗に爺嚊と云樣子也先目上の内儀より同輩の妻女迄をおがうさんと云目下を姉さんと云おがうさんはお后さまといふ事とぞ是往昔元暦の戰に平家打負西海の波に漂ひ此八島の沖にて安德天皇を始二位の尼公公卿官女達に至る迄入水有しかども相殘れる官女は此赤間にさまよひ世を渡る業も知らざれば人に雇われ或は身を賣て世を渡りしかど流石賤しき漁師等に操を穢さん事を耻いとふ官女は鹽或は漁船に釣する鮮魚貫ひ是を緋の袴を着乍ら天窓にいたゞき賣ありきて營とせしかどもいつしか仕馴ぬ業にはか〴〵しからで如何して世を渡らんと途方に暮ていけるを邊りの寡暮しの漁師是を見てかゝる乏しき仕業にて乞食せんこと今目前也それよりは我々が宅へ來ていか樣共身を過し給へとせちに乞ふて伴ひかへり御客やら妻やらにして敬ひける是によつてお后さま〳〵といひしより今も内室をお后樣といひならはせ

になりしとぞ扨今に赤間が關の遊女は其頃身を賣りし官女より始りし也依て毎年三月廿四日には安德帝の正當忌日なれば家毎に遊女爰をはれと粧ひ襠姿にて阿彌陀寺に參り遊女毎に燒香を捻りて歸りぬ此日年中の大紋日にてあみだ寺は安德帝其外入水の公家達の陵石塔ある寺也文化五年の夏祇園の練物に新屋小鶴と云藝子破れたる裾の緋の袴を履鹽を折敷に入れ頭にいたゞきし體なりしが是かの官女に出立し也

大雅堂霞樵

大雅堂はもと嘉左衞門とて貨殖家也其業を惡み避て畫工となり池野秋平と云又霞樵とも云其質雅にして聊も利にわしらず書もまめやかに殊に象得たり一日書林の許にて年頃望みし一書を見る恍然としてその價を問に價最貴し大雅云我にたくわへなし故に望を空しうす希は是が爲に今より務て金を積ん積て後此價に足りなば我にたびけん去乍賣物の事ならば其間に他に望む人もあるべし若さあらば我に知らせよと云書林云此書は高價なる物ゆへ容易に望人もあるまじ若あらばその由告申べしと約してそれより大雅は日頃に替り俄に物事を約にして年を經て望の通り金子溜已に價調ぬれば彼書林方へ走り行年頃の望み足りぬとて價を出し其書を我にたまへと云書林大に當惑して實も先年足下へ約せし事唯今存出せり其書は其後望人有て賣遣はしぬ其時足下に約せし事を忘却して告ず罪多く今更如何ともする事あたはずと悲愧す大雅案に相違して愀然として申けるは我かく迄貧しき中にて金子拵しは此書の爲なり既に價調て望を果ざるは天也苟も此金を他用につかわん樣なし不如祇園の地に住からは恩謝の爲に御社へ奉納せんにはと右の金子を殘らず束ねて祇園へ奉納す是を世に傳へて大雅の廉潔を稱じ倍此人の書畫を世に翫ぶ惣じて常の風俗中華の唐人に似たり月明らかなる夜近江の守山を過るとて宇野氏が家を深更に敲く主人是を聞て時四更に及で勵しく門を敲は唯ならず自分起て立出見れば大雅也いかにや深更の夜行をと問大雅答て近江のそこ〳〵へ罷りて月夜の面白さにうかれて夜行せり餘り淸明なれば我獨り詠んも無下也足下を訪ひて夜とともに月を賞せんが爲也とて主客內に入て酒を酌興じ明せしと宇野氏が物語也齡耳順に滿ず歿す其妻玉蘭女も夫の雅にならつて風流也寡婦の後

も扇面を書て鬻て世を渡れり是も今は歿したりとぞ

兜軍記

享保十七年九月竹本座淨瑠璃文耕堂長谷川千四作壇浦兜軍記二の口菊水下河原の講釋場關原甚内と假名して阿古屋の兄井場の十藏一幸(カツヨシ)母を養んが爲講師をして其日を送る面體格好惡七兵衞景清によく似たるが故榛澤六郎組子をもつて召捕畫姿にあらためるに景清にあらずよつて榛澤詫て繩手とき母を孝養の爲辻講釋の業をすと聞て感じ殊に人立の商賣を妨げしを氣の毒に思ひ金子を母に惠むと出す十藏是をいなみて景清に似たるは此身の不幸也何此金子を受んやとて受ず榛澤は是非にとある其時十藏折角の御志無足にならじけふ緣日とて清水觀音の賽錢箱菊水の辻に有母の無病息才を祈りの爲奉納せんとて榛澤の見る前にて右の金子を賽錢箱へ打込む脚色有是則大雅の書を求めん爲の金子を祇園の社へ奉納せし一話よりなる物也大雅は祇園の社地へ出し店して書畫を認井場の十歳は菊水の河原にて辻講釋を業とすと仕組あり都て此兜軍記は此頃の名譽の狂言にして一場毎に佳境有今三の口琴責のみを淨瑠璃歌舞妓ともに用ゐて名狂言なる事をしらずいと惜しむべき事也

天明京大火

天明八戊申年正月晦日京都大火は平安城開けて未曾聞の大變也抑平安城は桓武天皇延曆十三年より天明八年に至曆數九百九十五年其間に禁裏炎上數度に及び保元平治壽永元曆承久元弘建武明德應仁永祿元龜等洛の兵火にも京中燒亡の事なし就中應仁の亂は前後百十餘年諸國の武士京師に出花洛の荒廢此時なれ共兵火の爲に京洛皆焦土となりし事を不聞其證には洛内の老樹亂を避て存在せる物多し而して御當家御治世後二百年の間に百有餘年前下京タイウメ燒とやらん餘程の火事なりと聞傳ふれども年久敷事ゆへ當時是をしる人なし其後三月廿日燒失をだに慥に覺たる人なし本ノマヽ意義通ジ難シ近くは八十一年以前寶永五子年三月八日の大火こそ古今稀有の事に申傳へたり其時禁裏炎上町數四百貳拾九町燒たり又五十九年以前西陣燒は町數百貳拾三町也今茲天明八年の大火は京洛中十にして九つの餘燒畢ぬ正月晦日曉洛東橡(ドングリ)の辻子(ズシ)より燒出て翌二月朔日卯の下剋迄晝夜十三時の

間に東西凡十八九町南北凡一里二三町燒町數凡千五六百町長延にして四拾四里餘也猶燒出しより始終幷に心得咄等は萬民千代の礎初午詣などゝて草紙に有ば略之今嘉永三まで六十三年になる也

辻能狼籍

元祿年間京町奉行に改のうつし京都町數千八百四拾七町千四百五十町は地子御免殘りは年貢地也家數四萬五千八百七十七軒と有其後百年を經る間に新地追々建續當時は凡京町數千軒爰に京都大火の前日正月廿八日和泉式部誠心院寺內にて堀井專助辻能を致居けるに邯鄲の能半過樂も終る頃帶刀の壯士四五人つか〳〵と這入て舞臺へ上る見物こわいかにと見る所に能太夫共に舞或は着座の大臣の冠を落し理不盡狼籍甚しゆへに太夫其外役人も半途に樂屋へ逃入れば作り物臺抔を踏碎きワッと叫び笑ひて何地ともなく去りぬ是何の所意たる事をしらず女童足弱の類は悉く逃去ぬれども壯者は去にてもいかなる事と始終を見んと皆擧りて見物しけるに如此是に依て其日の能はそれぎりにて相止ぬとて則東洞院六角下る町の某見て歸り是を語る大變なくば色々評判すべき事なれども其又翌日大變故に其段にてはなし誰か是を評ずる者なし怪異の事なりかしと幽遠雜話に出たり

西澤文庫 皇都午睡初編下の巻

目次

一白氏文集
一淡々の示教
一十干十二支
一定頼の和歌
一大佛餅屋
一市中は中を行
一毛抜鮓
一赤良の狂歌
一百翁の茶會
一長生殿の繪
一饅飩豆腐
一支考の俳言
一蕉雨の發句
一無名の短策
一紹益吉野を悼
一輕卒者の連歌
一金烏玉兎
一和泉式部
一江島屋其磧
一道路は左を行
一一噌の笛
一藤公の笑疾
一富士と達磨の畵
一月見の松
一李白仲麿を悼
一年中の雨
一行脚に句を買ふ
一光次
一内科外科
一よしにせよ
一短文の書狀
一自鳴鐘
一兼良の元服
一不出門行の詩
一馘塚三所に有
一磯の浪
一狐川の名義
一そこにべ殿
一辻能の道成寺
一古今傳授
一七瀨川の秀句
一故人の句を詠
一山伏の德政
一難波次郎（カタボシ）
一岡兩の歌
一内舍人老黨
一馬の詠たる歌
一粂平内兵衛
一基俊歌を盜まる
一商人の學問立
一國姓爺弟
一大男小男
一夜詰の太鼓
一義孝の連歌
一徂徠の戲言
一下谷の爭論
一潘谷橋姫の考
一名月は俳諧の題
一泊船寺住持
一大佛の御首
一蘆邊殿の婢女
一靑砥の續松
一三船の才
一重衡盛長
一六德牒記
一蕨風の子
一かんにんの四字
一馬術に雅なし

一羯摩乘親の面
一南方鑷
一春日野の蟲
一賴政の亡魂
一鹿の時立
一置皷
一鳥貝
一はなじろ
一南面の障子
一二萬堂西鶴
一記錄表紙
一兄弟の爭ひ
一運慶の口傳
一長範の詠
一清人發句を譯
一兼好を評す
一解脫上人
一幽齋の狂歌
一普賢像
一利休織部の詫
一雅人の傑
一竹田近江
一鶯白魚
一於菊蟲
一猿蟹を嫌ふ
一水引
一放島の試み
一和歌に師なし
一差合くり
一三句の渉り
一餓鬼つばた
一佛は佛師
一鴟(ミヽヅク)㒵の文
一日本に象を渉
一師直の歌を譯
一勢語源語の評
一西行の歌
一信西豆
一楊貴妃櫻

百六ヶ條

皇都午睡初編下の巻

西澤綺語堂李叟著

白氏文集

嵯峨天皇河陽館に御幸有て御製の詩句を參議篁に示し給ふ閉閣唯聞朝暮鼓登樓遙望往來船所存申べきよし勅あるけるに篁が曰聖作いみじく遊され候但願くば遙に望の遙の字をかへて空望と改させ給はゝいますゝ絕唱と申べく候わんと申されけるに帝愕然として驚かせ給ひ汝もとより此兩句を知れるやと仰られければ篁謹て聖作の一聯臣いかであらかじめ存じ候わんと答奉る帝重ねてのたまふは此二句は白樂天が句にてもとは空望とありしを汝が才を試みんが爲假に遙望とかへて示せしなり實に汝は白樂天と詩情相同じきもの也とて大に賞美したまへりとぞ此時白氏文集幾に一部渡りて官庫にあるのみにて世人いまだ見る事を得ざりければ篁もとよりしらるべきやうなかりしとぞ

紹益吉野を悼む

灰屋紹益は智惠小路上立賣に住て和歌をたしみて貞德と友たり亦蹴鞠茶事に委敷折には召れて高貴の席にも出ける事有とぞ若き時六條の廓に遊びよし野を根引せし時父の不興を受暫く下京に廬求めて夫婦住けり父一日他へ行し歸るさ雨降出ければ路傍の家に走り入て晴間を待此内には爐に釜を懸て閑雅の人の廬と見ゆ主の留主と思しくて女房のいと麗しきが此方へと請じつゝ薄茶を立て出しぬ其褄はづれより茶の手前迄所に見馴ざればいとゞ心おきせられ一禮をのべ雨も止たれば立歸りて次の日しか〴〵のよし人に語ればそれこそ令郎紹益の妾なれ其家は子息の隱宅よと告父はじめてしりて其奇偶を感悟し遂に紹益が勘氣をゆるし吉野を引とりてめあはせしとぞ程遠からぬ下京に其子忍び居をせしらざるは其頃豪富なりし事しるべしと云り吉野は寛永八年六月二十二日に歿す本融院妙供と法號す此時紹益哀悼の歌は都をば花なき里となしにけり吉野を死出の山に移して紹益が菩提寺は内野新地立本寺也紹益は八十一歲にして歿し元祿四年十一月十二日古繼院紹益と法名す是

をもて數ふれば吉野が歿年は紹益が二十歳の夏也然れば吉野紹益が婦となり程なく十七八歳にて身まかりし物なるべし紹益が玉を失へるの恨前の歌を吟じてもしるべし吉野カントウと蟹の盃の事は人口に膾炙して世に名高し

淡々の示教

俳諧師淡々半時庵門人富天に贈る示教に詩は鑓薙刀和歌は刀連歌は脇差俳諧は相口也並べて短刀は利遠く見をとりするや然れども一機よく胸を定め候へば時に望て至て功有爲氏が舘にて口公を弑し荆軻は始皇の膝近く寄たり此時鑓長刀脇差ならば側へよる事なるまじ短刀を圖に巻たればこそ一念存分はなしたり此時秦王の佩たる劒の長きよりたゝちに抜事あたわず夏無且が藥嚢なくば則終るべし長きとて頼まれず恐るべからず能つらぬき心を定め候得ば藝道何ぞ何をと云事なし唯見性たしかに其的を指べしあらく用ひ候へば俳諧は卑俗に落る事はやし嗜て高きに心を置ば神代の教へ倭朝の道はとゝむべき也されば中興俳道の祖花咲社（ハナサキシヤ）の貞德季吟芭蕉翁其角引下て陋老富天道統たり時今清得舎（コンセイトクシヤ）此秋押花（ノアキオウクワ）を以て業を行ふ點格並に家説の舊例式新古式本式及褒貶の繪摺物三つ物撰集笠着古式の會等普く教候上は能愼み克守り遠慮可有之候他門もとより正統有べし不知候へば不論候凡餘る程は教候なれば日々執行の外は有間敷也序跋幷撰集三章の雪月花おもしろく候不才の病老文章も書忘れたり句は一句「稻の穗の如し蘆の穗水かゞみ座の句初尾花と置たく覺ゆれども若々しからんと扣候竿秋へ几領を譲り候時は唯夜の花雨の蘆と申侍りし此蘆の穗は蘆の芽の穗となりたると祝し候や鶯の人來〳〵といとはず怠らず一道の清曉梅咲冬春夏の實秋の紅葉のもみ出るがごとく束てかゝやき榮へたまへ半時庵ふ

幷

輕卒者の連歌

或人連歌一順の月次などはやらすを浦山しく思ひ我もちと稽古せんと思ひ立宗匠する人にむかひ大體一句の仕立はいかなる心持にて工夫致し候わんやと尋ねるにされば此道を學んと思はゝいと深くも崩れよらぬ和歌の浦なれば詞短くきりたくば心をまがふ物哀れに華奢風流につく樣に有べしと云彼人聞と同じく早合點參りて候一句申さん「首際や二季の彼岸に

茶香杵と云たりして心はと問れされば水をわたるに首際に及ぶは深ければ也物の哀は二季の彼岸華奢風流なるは茶と香つくやうには餅つくきねと云れて宗匠返答なくて腹をかゝへぬ

十干十二支

甲乙丙丁戊己庚辛壬癸を十干と唱へて子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥を十二支と呼ぶは當れり婦女子は十二のえとゝ云り五性にエト二つ宛有て十干を云也兄弟にて木の兄木の弟とて兄弟也十二支は別にして十のエトにて十二支をいふにはあらずとしるべし

金烏玉兎

月の中に兎を書日の中に鴉を畫東西南北にて土と黄は中央也北は子の方にて南は午也東は卯にして西は酉也日月を東西に象りて月に東方卯の影移り日に西方酉の影移るを畫しものなり是にて金烏玉兎のわけも明白也手ぢかきことなれども是をいへる人なかりしを百人祿といふ書に出たるより人しる事を得たり

定頼の和歌

權中納言定頼歌に巧みに能書の聞え有し人也一條院大假川へ行幸有ける時定頼父の公任卿とともに帝の供奉として各歌よみて奉らるゝに公任卿の心に定頼よき歌をよまれかしと念じ居られしに講師次第に歌をよみ上る定頼の歌を公任耳をとめて聞れければ水もなく見へ渡るかな大井川とよみ上ければ餘りに手筒なる事を云出されたると思ひて公任卿顔色かはりけるに岑の紅葉は雨とふれども詠終りければ公任卿思はずうちゑまれたりとぞ

和泉式部

和泉式部播磨書寫山の性空上人に贈りたる歌拾遺集に入たりくらきよりくらき道にぞ入ぬべきはるかにてらせ山の端の月是は法華經に從冥入冥永不聞佛名といふ文あり其心を詠たるにて世に名高き歌也式部の本名を辨内侍と云り

大佛餅屋

京にて大佛餅流行し爰彼所にて商ふ中に四條畷に此饅頭を鬻げる近江上味（ジヤウミ）と云者有或時店先へ乞食來りて饅頭を十ばかり賣りて給われと云に主人出來て非人には商ひせずと云乞食の云るは我等迚も同じ人也錢をもて買ふに商ひ物をいかで賣ざるや此理りを聞べしとて詈りけれ共主人は聊挨拶もなくて居たりけ

るが言る事の餘り烈しければ主人店先へ出さらば其譯申聞すべし下に居れとて乞食に向ひ汝等ごとき乞食に賣れぬと云其子細は乞食の身分としてか様な菓子を食んと思ふは不所存也無益なれども耳あらば聞置べしとて乞食が冠たる手拭を取らせ我商へる饅頭は尋常の製にあらず上品に造りて高貴の方へも奉る菓子也乞食の分際にて食べき品にあらず汝若吾家の菓子を食たくば人並々の者となりて後に求めに來るべし汝諸人の憐みを蒙り僅に露命を繋ぐ身を以て錢有は迚上菓子を食事のあるべきや世を恐れざる不屆奴速に行べし須臾も店先を塞べからずといたく叱りて追立ければ乞食は頭を抱て逃去りぬと此商人一見識有人也

江島屋其磧

予が著述の傳奇作書に出せし江島屋其磧は八文字屋自笑が代作をせし市郎右衛門と云書林なるが始四條御旅町にて大佛餅鬻て業とすとあれば前に云近江上咏の氣象高き所相似たり江島屋其磧の菓子店近江上咏にてはあるまじくや暇と御旅町と書誤りし歟とも思へり其磧自笑と絶交して忰に書林をさせ自作の冊子を多く板せしに不幸にして賣れず其磧が才自笑に增れども其名自笑が右に出る事あたはず幸不幸は是非なし

市中は中を行

路の竪横交りて曲る所は眞中を行べし然らざれば曲る角にて人に行當り牛馬又は荷など持たる者に出會思わぬあやまちをす是互に向ふが見へざれば也總二三歩をいとひて馬卒販夫の類ひは必曲る所を行物也こなたより心すべし

道路は左を行

路を行人互に左りによりて行は常の禮也斯すれば牛馬口付の者も其付たる方に當ればあやまちなし薩州にては夏は自日の照方へ行日陰を人に讓る冬は是に反すとぞ路を讓るの禮至れりといふべし宮寺の開帳に參詣道下向道と分たるは滯らせず怪我あやまちのなきよふの計らひ也

毛抜鮭

東都の鮭といへば皆握り鮭のみにして京攝の如く切鮭なし家體店上方にて云出し店也の製は格別安宅の松の鮭安宅は御舟藏の地名松五郎鮭也兩國與兵衛等の製は念の入たる物也竈河岸

に笹巻鮓とて一宛笹の葉に巻て賣家有此名を毛抜鮓と呼ぶ上方者の口に合へば毎度求めながら毛抜鮓とは魚の骨をよく抜たる故呼ぶかと思ひしによく考見ればよふ喰ふとの謎なるべしと悟りぬ

一噌の笛

故一噌又六或諸侯方にて能有し時融を吹しに俄に雷動しければ盤渉を改めて黄鐘に吹たり人々如何の事と云しに雷の調子盤渉調なる故吹かへると也道によつて賢し

赤良の狂歌

江戸數寄屋橋邊の或武家を恨みて其人の形を藁人形にて拵へ眼に大なる釘を打て其門に捨しを「のろふとて眼に大釘を打とても耳でなければきく筈はなしと四方の赤良祝ひ直しければ其後耳へ打て捨しかば「大釘を耳へ打たら耳潰れ聾になれば猶きかぬなれと詠けり扨其後又骸中へ惣釘にて打しを捨しかば「身うち皆釘を打とも何のきかふ糠に縁ある藁人形じやと赤良が句にてそののちは捨ずなりけり

藤公の笑疾

藤公時平笑疾あり一時朝廷にして此疾發りいかにもすべからず其日の政事は菅公にゆだねて退き給ふとなん不和にて權を爭わるゝ敵手にあひて如此はさこそ止事得ざるべし五雜俎に陸子龍有笑疾古今一人のみといへるも同じかなたにても珍らしきなるべし唯世に笑中風哭中風といへる物有て是ら實におかしきにあらず悲しきにあらず內より催して詮かたなき也藤公も子龍も此甚しき物歟天神記と云淨瑠璃を增補して天滿宮榮種御供の狂言の時菅公（尾上菊五郎の祖梅幸）流罪となり時平（叶雜助小六玉）獨り紫宸殿に殘り玄老の道眞も課るに手なしはれ心地よいと笑ふを幕にしたるは此時平の笑疾を脚色したる物也今に笑ひ幕と云作者並木十助（並木五瓶の師也）歌舞妓狂言にも書見（ショケン）だけの力はある物也

百翁の茶會

飛喜（ヒキヒヤクオウ）百翁が利休を招きし時西瓜に砂糖をかけて出しければ利休砂糖のなき所を食て歸り門人にむかい百翁は人に饗應する事を辨へず我等に西瓜を出せしが砂糖をかけて出せり西瓜は西瓜の味みを持し物を似氣なき振舞なりとて笑ひ侍りき

富士と達磨の畵

ある人淇園に畵を學ばん事を乞て僕畵を學ばんと思

ひ立しは他の物を書く事を求めずたゞ富士と達磨とのみを書きたしそれも上手とならん事を求めず富士はいかにも富士と見へ達磨はいかにも達磨と見ゆる様に書たしと云り此詞尋常に聞ゆれどもいとおもしろし何藝によらず此所をよく辨へぬる時は過不及あるべからず

長生殿の繪

白石先生陸奥洞巖老人へ長生殿不老門の書を望れし書翰のうちに長生殿裏春秋富不老門前日月遲は本朝の人の句にて候間書の景色も本朝の如く有度物に候昔本朝大内裏圖のやうに東叡山の文珠樓門のごとく中に門ばかり候て左右に塀もなく候中門には柊子も有之塀も左右に候か地取繪様のあら增如此なる望に候四時をこめ候へば春の方は春の諸木遲速を撰ばず秋の方は下より梢を見せ何れも雲やりの上下に見へ候様春には來燕秋には來鴈前に白鶴三つ計但し雛二つばかりも候わんか書様は眞草行御交へ細密に賑やかなる所もさらりと仕候所も可有之候其段御筆意に任せ置候彩色も同じくは輕き方に可有之候歟俗に入俗を脫し候望に候額字の事板はいかにもひれは上の方隱し度候泥金可然候か春秋富日月遲は上の方四字づつ隱れ候心得に候下はつまりて上の明候がおもしろく可有之候か雪船の明朝にて書れ候富士三保の圖中天に富士をいかにも根張廣く雲頂より出候體にて殊外引下候て足柄箱根前は三保西は薩埵清見等の山々浦々を殊の外小さく書れ候それにて富士の三國に蟠り候體を其儘に見て奇代の物に候意匠の程感じ入候事に候不老門の圖雲やりか隱どりにて中を書切候て殿も門もさのみ大からずして大なる心を含ませ度右の如くに存寄の圖御目に懸候本朝の鴟吻(シフン)をくつがたと讀來り候心得ぬことに存候に彼大內裏の繪に今の鯱と申ものとは以の外に違ひ候て沓の形にて候さればこそクツガタとは申と存候只今は制法を存候ものも是なく候不及是非に事に候か右は要文を摘書書は筆とる人のみならず書する人の心ばへも雅俗わかれて耻かしき物也

月見の松

いつの頃にか有けむ殿下の君立入の去る書工を召御襖に須磨の風景を書書べしと也即つかふまつりて參らせしに能出來たり但月見の松今二本足らでやと

仰あり彼工は須磨の近き邊りに産れし者なればいかでか此處の事あやまりぬべきと思へども心濟難く其後國に歸り須磨に至り月見の松を數ふるに十一本有我畫て奉りしは九本也不思議にも恐入て御内の衆に伺ひしかども只打笑ひて語られず年を經て又承りしにいつの頃にか忍びの御遊ありてよく思召こめられし事と密に承りて驚入しと即其畫工の物語なりしと也

饅飩豆腐

豆腐は太閤秀吉公朝鮮征伐の時生捕し朝鮮人の教へし物也唐土にて淮南王製し初しゆへ淮南王と云キラズを雪花菜といふとぞ其砌は豆腐に紅葉の形を付て紅葉かうようならでは遣わぬと云しよし今は◇やら公用やら思ひ〳〵に付て定る事なし饅飩豆腐を細く切には及物を左りへ〳〵と切て行くべし常の通り右へ切ては豆腐及物に付碎くる也猶々細くせんと思ふ時は心太の如く突出す也尤湯を熱立し置其湯の中にて突出すかよしと云り

李白仲麿を悼

遣唐使の事をよつの船と歌にはよめり阿倍朝臣安麿を大使とし藤原宇合を副使として唐へつかわされける此時下道の眞備後に吉備大臣と云安倍の仲麿を留學生として遣わさる仲麿は唐朝の風をよろこびて唐に殘り此後藤原清河を大使として大伴古麿と吉備公とを副使としてつかわされし時仲麿に命じて今度の遣唐使を接待せしめられたり清河日本へ歸らるゝ時仲麿も歸朝せんとて玄宗帝に暇を乞て歸られんとしたる時平生交を結びたる詩人文人に書殘されたる仲麿の詩有文苑英華唐詩品彙にのせたり明州と云海邊にて海上の月をみてあまの原の歌をよまれ明州を出船せられたるにはからず海上にて難風にあひ安南國に漂着しければ清河と共に再び唐朝に入られぬ此時仲麿日本歸朝の海上にて難風にあひ溺れ死したりと唐土に風聞有ければ李白は哭して詩を作りし也其詩は日本晁卿辭帝都片帆百里繞蓬壺明月不歸沈碧海白雲秋色滿蒼梧晁卿とは仲麿唐にて改名して朝衡と云ける朝の字と晁の字と其音通ずる故なるべし

支考の俳言

俳師支考の云月雪花郭公は君にもあらず父にもあらず我等が爲の慰もの也糞とも云味噌とも云人參附子

ともあがめて四季に心易き出入の者ともいふべし賞てよき時はほめおかしき時は譏ても遊ぶべし心に止めざれば氣一物の人也とて月花も腹は立ぬ物也とぞ

年中の雨

信貴の毘沙門堂に四季連歌の句合有其中に五月雨に年中の雨降盡しと云句有何某の大納言聞し召れて何者の申たるにか此句の主を尋ぬべしとありける時高橋某その者を問ひければ彼あたりなる村長の申たる句也としれ消息して京へ出るならば參るべしとの事ゆへかの村長わざ〳〵京へ行御館へ上りしに逢ひて物語せんとて一間に通じ給へば風流の面白雲の上迄聞へけんこと祉いと有難けれと云に大納言も四方の話有て扱尋給ふは年中の雨といへる趣向のおもしろく覺ゆるからに其句意を聞度侍れば逢申たりいかなる故事や有てかく申せしぞと有ければ村長答へて云やう別に故事と申も候わず只五月雨のきのふも降けふもふり續て翌も又斯降くらしなば一年の雨も降り盡しぬべきと思われ申たるより外所存なく候と申ければ面白く覺ゆる也とて入給ひぬ村長が歸りし後高橋出て尋ね參らせければ大納言の仰にさりとては麿が思ひしとは違へり五月雨には四時の如く雨のさま色々に降りけるゆへ春雨の淋しきにくらべ夏の夕立にたぐへ秋の雨の物凄きにかこち冬の雨の寒きにも譬へたり此事古き物語りにもあればそれをしりたる句にやとゆかしく尋ね侍れどもさはなくて只雨の降り盡すのみ作りし事故卑怯とは思ひ侍りぬと仰られし

蕉雨の發句

予が俳友信州の蕉雨以前四季の句書をこせし中に五月雨や時雨村雨春の雨と云句あり此殿の古き物語とあるは清女が枕の草紙にやあらん俳師鬼貫の云未熟の人の俳諧は春雨のと五文字を云出し時春雨先に出候といへば秋さめのと付かへ侍らんと云祉うたてけれ春の月はくれ初るより朧立て物たゝぬけしき夏の月は灯を遠く置て詠め深し秋の月は窓に軒に海に川に野に山に詠有冬の月はひとむらの雲の雨こぼし行隙をてらしていそがし春の雨は物籠りて寂し夕立は氣晴て涼し秋の雨は衾にて淋し冬の雨は底より淋しさの聞郭公は待佗るこそ詮なるべけれ四季折々の草木ひとつ〳〵辨ふべしと有蕉雨の句は則是なり大納

言の話は古く蕉雨は近世の人なれば是非なけれど此句を彼大納言殿に見せたらば嘸かし褒美あらんものをいとのこりおし

行脚に句を買ふ

予が幼き頃俳友の一老人有暮三と云てさ迄聞へたる句もなき人なれど癖物にておかしき人也俳諧行脚一人來て暮三の方に宿り日毎に諸々の詞宗家を訪ひ一日俳席の通題に五月雨の佳句詠出一座の評よかりければ歸りて主人に語る其句は降中に降出す音や五月雨主人大に感じ古人五月雨の句數多あれどもかふも打付に詠たる句なし此句を我に賣よといへども行脚はかゝる句を詠出ん爲の修行者なれば賣らじと云折節更衣の時節なれど旅の身なれば古着の儘にて容甚見苦し此句を我に賣て新に衣を更よと一圓金にて求め扨摺物をすらせ是にさる行脚より求たる句にと前書して降中にの句を社友に配り此摺物のちらばりし先だけは我句也他所では自身詠たる句なれば自由に書給へと云しもおかしからずや是ら風流の上の滑稽なるべし

無名の短策

源俊頼朝臣は歌をよむに容易はよまず心を入て案じられ物に感ずる事ありてよき歌の出來たる時は是を書付置てさもと思ふ時出して人にも示されたり又人のいまだ讀ぬ新奇の事をよみ出たる人也俊頼常にいはるゝには和歌を判ずる者十德を備ふるにあらざれば能わざる也いはゆる德望門地明辨強記の類也と云り德望とは人にめざゝれ仰がるゝ也門地は家柄なり明辨はあきらかにわかつ事強記は物覺へのつよき事也或時法性寺殿にて會有けるに俊頼參られたり兼昌講師にて歌よみあぐるに俊頼の歌に名を書れざりければしばし見合せて打しはぶきなどして御名はいかにとしのびやかにいひけるを只よみ給へと云れければ讀上ける其歌は「うの花はみなしらが（俊頼）ともみゆるかな賤が垣根もとしよりにけり」と書たるを兼昌きりにうなづき感じけり（年寄）やがて此歌の中に我名をよみ入られたればわざと名は書れざりしと也

光次

小判壹歩判に光次の字有五世後藤德乘が名乘也四郎兵衛家は世々大判座也德乘在京の節御用あるよしにて江戸へ召れしに病氣と申立名代に家來永井庄右衛

門をさし下す此時初て小判を吹候様にとの事也庄右衛門下りて御用承り候まゝ直に庄右衛門を願候て小判座に取立後藤の名字を譲り後藤庄三郎と成今以て相續也徳乗初て承り候こと故光次の字を設け今に其儘にふく也

内科外科

醫師に内科外科有科はしなをわかつて内外を別にして療治する也然れども内外元ひとつ也互にしらずんば有べからず

基俊歌を盗まる

藤原の基俊は生得文才ありて和歌をよくし又兼て詩をよくせられたれど人にほこりて當世を見下しとかくに人を批難することを好まれければそれに付てそしりを得らるゝ事多かりし或時人々和歌を詠じけるに基俊傍によりて深く歌を案じ入て我しらず聲にあらわしてめざましき迄ちる紅葉かなと吟せられたるを其座に有ける顯仲入道是をもれ聞てかたわらに居たる右馬助何某が歌出來かねて歎くにさゝやきていはく早く此上の句をよみそへて出されよと敎へられければ右馬助よろこびておしへのごとく上の句をよみそへて我歌としてさし出したり扨一座みなよみ果て披講の時右馬助もと下臈たるにより先此歌を講じければ基俊聞て大に興さめたるけしきなるを顯仲ほゝゑみて聞居られたり扨次々に講じて上座の基俊の歌を講ずるに彼右馬助と同じ下の句なりければ顯仲わざとしらぬ顔にて會釋して右馬助はよく思ひよられたり歌仙たる基俊ぬしと同じ下の句なる事今日の名譽也と申されければ基俊は我歌を盗み聞れたるとは思はずしていよ〳〵不請（フシャウ）のけしきなりし是も基俊兼て人々に中あしかりけるゆへあざむかれたる也

よしにせよ

物を無用といふ詞のかわりよしにせよと云はあら鹽も戸ざしもよしや駿河なる清見が關は三保の松原此歌にて心得ぬべし三保の松原の面白きけしきを詠めゝば關に及ばず行ずとも清見が關はよしにせよとよめり

商人の學問立

江戸に材木商賣の伏見屋才治郎と云者有常々學問（シャウグワンタ）だてせられしある時手代に物云付るとて深川松丸太長短下直調（チヨウタングジキデウ）と云しを手代は聞馴ぬ詞にて心得ざりし

を汝文盲なりとて大に呵りしとかやかばかりの心ゆへ材木屋仲間及び隣家の人とも不和にて有しと也

短文の書狀

さる強氣の武士京に居て知音の僧へ遣したる書狀に送り進ずる十八本松茸恐惶謹言又國への文に一筆啓上火の用心子供泣すな馬肥せ〳〵と書おくられし武夫の實情あり只入用の專計かぞへたる是らも俳諧にとりて疊之上たる働ならずやと大江丸舊國は申されし也

國姓爺弟

長崎紙屋町田中七左衞門と云者は大明の鄭一官が子國姓爺が爲には弟錦舍が爲には伯父也父母ともに異朝にて韃靼人に殺されしにより渡海の訴狀奉りて來朝せしは延寶七年八月の事なり

自鳴鐘

ある人時刻を知らん爲にとて自鳴鐘を求めんとするを其妻是を止めて云けるは自鳴鐘の爲にかへりて時を失ふこと多らん止給へといへばさあらば庭鳥を飼べしと云に其妻又止めて云けるは時刻は人の上にあり汐の滿干も是とおなじかるべし自鳴鐘を便りとするは勤に怠る者の致す事也と夫を諫め終に鷄をも飼ずなりにき

大男小男

南部信濃侯國方より石方雲藏（イシリキウンザウ）とて丈七尺五寸杉臺右衞門とて長三尺一寸ある男を珍らしとて連給ひし雲藏が右の袖口より臺右衞門手入て左の方へ拔出し誠に過不及の違ひ也在江戸の中邸にて人々に見せたまひしと也

兼良の元服

一條攝政兼良公十二歲にて御元服有し時虛空に何ともしれず怪しき聲有て猿のかしらに烏帽子着せけりと聞へしかば頓て緣の方に走り出させ給ひて元服は未の時に傾てと附させたまへるとなん此公の御顏のかゝり猿に似させたまへる故なりとかや幼き時よりかゝる俊才ゆへにこそ著し給ふ書籍世に多く傳へり

夜詰の大皷

牧野長岡侯に仕へし吉田助六は大倉流の大皷をよく打數年泊り番の節革をよくほうじさめぬ樣に帛紗に包み夜具の內に入れし也或夜君侯夜詰の節ふと謠を諷ひ給ひ夜が更ずば助六が一調を聽べきがもはや九

つにもなるべし今より革など取よせ候は遅くなるべし殘念也とのたまひしゆへ御所望に御座候はゞ仕るべきよし申上ければ急には革出來まじきかとありけるまゝ當番の節は急なる御用もはかり難かりしゆへ常に持參仕ると申て早速取出し打けるが一段よく出來しとて褒美なりける其後又所望有けるが一度は御用相立申候事故夫よりは泊り番ごとに持參不仕候と申ければ是も尤也所望のたびに間にあわばけつく珍らしかるまじとて彌賞美せられしよし此助六は和歌も心がけし者なれば常に雅なる咄しも有しと也

不出門行の詩

菅原道眞公の右大臣の官職を停て太宰權帥に左遷せられかの地にても不出門行と云詩を作りて何方へも立出たまわず都府樓纔看瓦色觀音寺只聽鐘聲此一聯は白樂天が遺愛寺鐘欹枕聽香爐峯雪撥廉看と作りしにもまさりぬべしと昔の博士どもは賞じあへりとぞ

義孝の連歌

藤原義孝は謙德公の三男にて或年一條院の御前にて人々連歌しけるに秋は只夕間暮こそたゞならねと云句の出來たりけるを人々聲々に詠じてたび〳〵になりけれど是に付る人もなかりけるに義孝の少將十二歳なりけるが萩の上風萩の下露と付られければ人々驚て賞歎しあへり中務といふ歌よみの女房上東門院へ申上ければいとこまかなる下の句にて殊に有がたく聞ゆるは人丸赤人又昔のめでたかりし人々の再び生れたるならんと仰ありしよし中務もわたくしに申そへける萩のほに風をとづるゝゆふべには萩の下露置ぞましける此事を聞傳へて其頃は天下にやさしきわざ也と申あへりけるとぞ此義孝はのちに痘瘡の病にて失たまひ賀縁阿闍梨と申僧の夢に義孝昔契蓬萊宮裏月今遊極樂界中風とぞ誦したまひけると也此義孝の御子は能書の名高き侍從大納言行成卿也

穢塚三所に有

筑前國濱男と云所に耳塚有神功皇后三韓を討たまひし時其國人の馘を埋給ひし所是本朝馘塚の始にして此後源の義家朝臣奥州の戰ひに打勝河内國に馘塚を築き耳納寺を建らる是第二度也豊臣公京大佛に耳塚を築かれしは第三度也耳塚は左氏傳所謂京觀也と云り

徂徠の戲言

正五九月に寺より祈禱の札とて持來れば徂徠先生其儘いたゞきて居間に張られしと也門人何とて札をはり給ふと問へば是も寺の役にて精を入れしもの也麁略にせんやと云れしと也

磯の浪

光源院殿京都四條の道場陣を取御座有し時夜九つの太鼓を寢惚七つの時打けり公方より御使ありて番の僧を召す定て折檻に及びなんと震ふて參りければ樣子御尋ね有つるにさん候深く睡り入目覺仰天仕ての故とありの儘申上ければ案の外御機嫌よくて「此寺の時のたいこは磯の浪おきしたびにぞ打といふなると狂歌を下されしと也

三條三光院殿十六歳の御時禁中にて懷紙と云題出たりつるに幼稚の御身には古今の難題なれば何とも讀にくしとあれども一座皆面白き顔にみなし誰題を取かへよまんと云人なかりしに程近き我昔さへ戀しきに老はいかなるなみだなるらんと遊ばされしと也

下谷の爭論

江都下谷にて或浪人蹲りて小便せしを侍二人話し乍袗を通り一人の侍浪人の刀に行當りしかどさらぬ體にて過行浪人思ふには此人見しらざれば意恨あるべき理なしとは自分の了簡なりとて跡より走り付只今かゝる事候ひしが定て御心のある事にはあらじ但しいかなる事もやと尋ねければ誠にこまやかなる仰詞や只に御免あれと互に慇懃に禮を述て別れけりかの連は一町計り過て相待所へ侍追付件の荒增を語れば連人以の外氣色をなしそれさまの事云せて聞しや何條討捨ざるや汝は腰の拔しとて散〳〵に罵りければ是は何事ぞや互ひに意恨のなき事なれば討果すべき謂なし夫に我を腰拔と云しは堪忍なりがたしとて雙方拔合ひ火花をちらして討戰ひ互ひに手を負し所へ浪人町中の騒を聞駈つけて窺ひ見しに件の人血刀にすがり有ければこわいかなる故にやと近より事の要を問へばしか〳〵と答ふそれ遁さじと追かけ詞をかけ造作もなく切伏首を引提立歸り是見給へと有ければ斜ならずよろこび懇に禮を盡し我は喧嘩の相手なれば切腹すべしといへば浪人が曰そのもとは某也然らば互ひに刺違んと有しに町人打より押留奉行所に罷出一々の事訴へしかば委敷聞得させ上へ御伺有しにや是は喧嘩にはあらず亂心也何れも神妙の事也と

仰有て濟けり

狐川の名義

右は新著聞集の中の一話也此書寛延二巳年出板然れば百年餘跡の話也新著聞集出板より十五年前享保廿年に苅萱桑門筑紫轣(イヅツト)作者並木丈助の淨瑠璃狂言二の口狐川の渡し場にて玉屋與治鬼柳一角との口論を加藤重氏が扱ふて一腰づゝ刀を遣る場は此一話を潤色せしもの也此狐川の名義は古くより有て不解予が綺語文草に往古木津川一名泉川の流八幡の上に流れて木津(キヅ)根(ネ)川とも云爰にある渡しゆへ木津根渡しとも呼やらんと例の癖考を記せしが如何あらん

潛谷橋姫の考

癖考の因に京の潛谷(シルタニ)は苦集滅道と古名を呼び俗に澁谷(タニ)ともいへど蟬麿の詠是や此行も歸るも別れてはしるもしらぬも逢坂の關とあるしるもしらぬもは潛谷の地名を讀込みしにやあらん又宇治橋三の間の水汲場所にて川上へ建出せしは往古橋姫宮此橋上に有て宮の舊地也と云愚考委しく文草に出せしが故人の說にもれしは如何是も予が淺見にやあらん尋べし

そこにべ殿

備前の國岡山にそこにべと云魚有餘國には稀なるよし大守浮田直家より藝州小早川隆景備中笠岡の城におわしける時彼魚を送らるゝ隆景近習の侍に仰夜中に備前そこにべが來し程に家老の衆に今朝ふるまふべき由申せとあれば彼者まわりて備前より夜前そこにべ殿御越にて候今朝振舞あり出仕あれとぞ申ける各慇懃に出立參らるゝに客とてはなく出たる膳部を見ればそこにべの汁なり右の樣子を申されて大笑ひありし也

名月は俳諧の題

去る止事なき御方の說に名月の文字史記月令爾雅などにも見あたらず又源氏須磨の卷にこよひは八月十五夜にても有夕顏の卷に八月十五夜月のあきらか成とあり詩歌の題にも八月十五夜とあり邇近明月とかけるは只月の淸光なるを詠ず按るに八月十五夜を名月といへる事俳諧の家より云始て本邦の俗稱となれるならひか良夜とはいつにても月のよき夜といふ事也たゞし中秋の十五夜は動のとれぬ良夜なるべし今更是を改がほなるもいかゞ心にこめてあるべしと仰られしと也

辻能の道成寺

能太夫橋本何某友人と二人古堀井専助が辻能を見物せらる其日は道成寺なりしを見ていかにも感心の體有しかば友の曰辻能はよく能に似たる事をして間を合す物とこそ承れいかにかく迄ほめ給ふやと云橋本の答にさら〳〵左樣なる事にはあらず専助が道成寺始て見申せしが感心いふばかりなし今の世にて口利く太夫のうちに是程道成寺をこなすべき人あるまじく覺ゆる也其體はともあれ一體が我ものになり濟してゐる也外のものをするとかわる事なし故にくつろき有て面白し道成寺の場數専助ほどつとめし者あらじ誰にてもあれすは道成寺なりと心の改まらぬ者あらじ是くつろぎを失ふ所なるべしと申されしと也書畫をしたゝむるにも詩歌連俳にても其序に出で心あらたまらずくつろぎ有たきものなり

泊船寺住持

江戸品川泊船寺住持延寶七年十一月廿四日の夢に高僧來らせ汝は來年二月廿四日に身まかる也其心得あれとて詩を賦し示したまふ六十四年混世塵夢中不覺養殘身不來不去是何者二月花開南谷春翌朝より此事を口癖の樣に云れて明る庚申の年の元日の發句に見じ聞じいわぬがましじや申の年と云戯れて二月中旬より違例の心地にてさのみ惱む氣もなく廿四日に六十四才にて正念に臨終せられし此人は常に大酒を好み佛道に愚に見へければ他の嘲りも多かりしかど心中にいかなる目出度事ありしや と人々慚愧しけり

古今傳授

將軍家光公の中院通村卿を召て古今傳授ありたきよし仰られしかど此義は公家の秘する所にて容易に武家に渡し難き道也思召とまらせたまへとて傳へおはさゝりしかば御心よからで三年歸洛御ゆるしなかりしに「行方に身をば誘はで夜な〳〵の袖に露とふむさしの丶月と詠じたまへるを聞召ていと貴みうつくしみ給ひて都に歸したまへるとかや

大佛の御首

京百万遍回祿して後其地を東河原に移されし時釋迦の像大佛なれば御身を取放ち御首を車にて牽けるに日野大納言殿折しも格子より顔さし出し見給ひ只今釋迦の首を引はいかなる咎めされしぞと仰られしに

其儘顔格子に取付て離れざれば大に驚きさま〳〵詫言したまひて漸々離れし忽日蓮宗を改め百万遍の中養春院の檀那となりたまひし釋迦堂は則大納言殿より建立したまひしと也

七瀬川の秀句

西行法師修行の時津の國七瀬川にて麥粉を喰ふとてしきりにむせられけるを馬上より侍の見つけ「此川はな丶せの河ときくものをお僧をみればむせわたるかな時に西行の返歌此川を七瀬の川ときく物を召たる馬はやせわたるかなと笑ひて別れし

蘆邊殿の婢女

新古今に道のべに清水流る丶柳陰しばしとてこそ立どまりつれとは下野國の蘆野と云所にて西行の詠たる歌とて今も柳有りて古跡と云いつの頃か蘆野殿へ京より女の宮仕に參りて三とせ計勤て都へかへる時御餞どもいと興ありて其方の名をけふよりつれと替よと仰ありければ女とりあへずしばしとてこそと存候に御恵にひかれて三とせは立どまりつれと申上けるとぞ心あるそだちの女なりけり

故人の句を詠

古き歌を折よく誦し出たらむはあらたによめるよりも風情ありとや淀のあたりの杜宇宗盛の宇治の奉納など手柄有てきこゆと承る近頃尾張の人の妻の七とせまで腰たゝで有しが終に身まかりし時「麥喰し雁と思へど別れかなと野水が句をつぶやきしはいと哀にして野水が作せるよりも情あつかりけると鴫海の蝶羅が物語也常に風流の心なき人も物の善悪に感じて思わず秀逸の句あり遠江の國に或人の子をうしなひて其一年の廻り來りし頃「去年迄呵つた瓜も手向けり千万の哀を含ませ出したり

青砥の續松

北野通夜物語に昔青砥左衛門夜に入て出仕しけるにいつも燧袋に入て持たる錢十文誤つて滑川へ落したりけるをよし扨もあれかしとてこそ過行べかりしを其邊の人家へ人を走らせ錢五十文持せやりて續松を十抱買ふて是を燃しつ丶川を渡て終に十文の錢を求め得たりけるが十文の錢は只今求めずば水底に沈て長く失ぬべし五十文の錢は商人の手に渡りて永く失ず彼と我と何の差別かあるべき彼此六十文の錢を失はず豈天下の利にあらずやと云しとぞ五十文の錢を

費して十文の錢を求るは小利大損と俗は云べけれど道理においてすべき所を考てする事なれば拔群の見識なくてはなるまじき事也商人と我と何の差別かあるべきと云るは楚人得之といふよりも其識量かさ大きなる事也其言行世に傳らざるこそ遺恨なれ

山伏の德政

將軍天下を治め給ふ此御代に賢臣義士多き中に京都の所司代として訟を聽理非を決斷せらるゝに富貴の人とてもへつらふ色なく貧賤の者とてもくだせる體なし然る間上下萬民裁許を悅んで奇なる哉妙なるかなと讃嘆する人街に滿り一滴舌上に通じて大海の鹽味をしるとあれば其金語の端を云に餘は知ぬべきや然る時越後にて山伏宿をかりぬ其節國主の迎ひに宿の主も罷出るに彼山伏のさしたる刀拵と云作りと云世にすぐれたる物なるを借りて行未宿に歸らざる間に一國德政の札立けり去程に亭主歸りても刀をかへす事なし山伏堪へ兼しきりに乞ふ宿の主返事に其元の刀借りたる所實正也され共德政の札立たる上は此刀も流れたる也さら〳〵歸すまじきと云出入になりければ雙方江戸へ參り大相國の御前の沙汰になれり其砌京の所司代下向あり御前に侍られしが此裁許いかにと御錠あるを謹で造作もなき儀と存候幸ひ札の上にて亭主が借りたる刀を流し候はゞ又山伏がかりたる家をも皆山伏がに仕べきもの也と申上られしかば大相國御感甚かりしとぞ當意即妙の下知なるかな以正理之藥治訴訟之病挑憲法之燈照愁歎之闇といふ金言もよそならず

三船の才

大納言經信は博學多藝にして殊に和歌をよくせられしかば藤原公任と並びて世に稱せらる白河院大堰川に行幸ありける日詩歌管絃の三の船をうかべて其道々の人を分てのせられけるに經信卿遲參の間主上の御けしき殊の外あしかりけるがしばし待れて參られたり此經信卿は詩も歌も管絃も三事ながら兼まなびたる人にて河の汀にひざまづきて何れの船なりともよせ候へといはれたるは時にとりていみじかりけりかくいわんとてわざと遲く參られたるなるべし扨管絃の船に乘て詩と歌とを献せられたり三船にのると云しは此事也先に大納言公任も三船にのられたる事有ければ此兩人を三船の才人といひ傳へたり

難波次郎

平氏の士難波次郎が母は小松殿の乳人に仕へて嚴直大慈二つながら全く歳六十にして故郷攝州難波に歸り住家極て貧しかりしが次郎常に母に仕ること恭謹にして農業のいとま薪を負て市に鬻身に被袴なしといへども母には滋味を盡せり後平家に仕へて郎を洛中に賜わり母を迎ふるに母行ずして云老嫗歳既に六十に餘れり世に在の日少し汝今官に仕へ身を立家を起すの時至れり獨の老嫗の爲に心ひかれて奉公に懈らば忠を盡し名をなすの妨なるべし吾飲食だに足らば都へ出て榮耀にほこるの志なしとて迎への輩を洛に歸して自害して果たり次郎悲歎に堪ずして暫の暇を乞ひ故郷に歸り老母の亡跡を弔らひ洛に立歸りて清水寺に供養の塔を營みいよ〳〵忠勤をはげみ相國に仕へりと云り此事平家物語盛衰記などに見へずかゝる忠孝を擧ずしてさせる功もなき人のやうにしるし傳へたるこそ恨なれ無道の君に仕へたれば至孝誠忠二つながら埋もれたるはいと口惜き事ならずや

重衡盛長

平家盛りの比本三位重衡參內の折から帝より扇の地を賜わりける時郭公を一羽畫たるを折らせられしにあやまちて鳥を切はなち尾のみ殘りたるへ歌よめと仰有ける時さ月やみくらはし山の杜宇姿を人に見する物かはとよみたり又後藤兵衛尉盛長に平氏殘落の時重衡逢給ひて我馬を射られたり汝が馬を貸せよとありけるを盛長いなみて今我敵と戰ふの時也逃のび給ふには歩にても有なん是は雨夜の傘なり貸參らせんとて走り行て戰へりとぞ

罔兩（カゲボシ）の歌

柳里恭が影法師の文に汝吾産れし時より吾側に在て暫し間も離るゝ事なしといへども我親にもあらず子にもあらず主にも召使にもあらず妻にもあらず乳人にもあらず只朝夕吾なすことのみして更に他の業をなさず悦ぶ事なく怒事なく憐む事なく樂む事なし思ふに目しゐたる者を友とすれば是を見せんとするに煩らひ耳しゐたる者を友とすれば是を聞せんとするに煩ひ唖を友とすれば是をさとさせんとするに煩ふ汝今吾有なるによりて汝が無を守るとも吾又汝が無によりて吾有を守る所をしらずそも〳〵汝は吾影なるかはた又人の影なるかと問へば返したる歌とて我

影を我ぞと思ふ世の人にものいふ口はもたぬ影法師

六德牒記

六德牒記に云綾羅錦繡もて夜の物を造り薄ものすゝしに蚊のわづらわしきを避るは定紋に片意地はりて紙子に淺瀨を渡る事をしらざるなるべし土燒の火鉢ひとつは道具買も遺念なく紙もて作れる蚊帳一張紙屑かふ者の眸をうながすはともあれ盜人をして心を動さしむる事なかるべし薄紙一重に世塵をさけ濕をのぞきて寒冷せず風を入るゝ時は水濱にあるよりも凉しく書を見る時は螢雪の窓よりも明しねぎたなき姿を人に見せぬ計り夏候が妓衣の巧にもまされり晝は丸めて屏風の後へ投込み折目を正す世話もなし秋去冬來れば被りて霜雪のはげしきをも凌げば一物にして六用あり彼太宗が歌舞のからうたにはよらねど我是に名を與へて六德の牒とよび道こそなけれど驚きたる山の奥にも思ひ入らず只此うちに延臥してやがて出じとは思ひそみけり

內舍人老黨

內舍人は人數多くて紛るゝが故に其姓を付て源內藤內平內善內伴內と云也天野藤內は藤原氏の內舍人也紀內行景は紀氏の內舍人也伊賀平內左衞門は平氏にて內舍人と左衞門尉を兼帶したる人也今世源內平內などゝ呼名につくは僻言也老黨若黨といふ名目は昔武士の黨（紀清兩黨の類）の者の中に然るべき者を老黨と云其次を若黨と云は此餘風なりとしるべし

蕨風の子

東都にて冬日の暖きを辻番の布子と云前句附に辻番の布子は西へ入給ふと有浪華にて小春頃に幼童の詞にヲヽ寒小寒猿のべゝ借つて着よ（猿の甚兵衞とも云甚兵衞羽織とて所謂殿中羽織の事なり甚兵衞は始て着たる人名なるべし）辻番の布子と品こそかわれ對句なるべし又寒風の吹もいとわで幼童の足袋もはかで朝の間に門に出て用水の氷を割雪を固めて兎を拵るなどを見て厥風の子と云是童風の子の訛にて風の子とは夫婦の間の子なれば也といへり

馬の詠たる歌

少し假名を讀人の友に云けるは此程徒然草を見て遊ぶが面白ふ候よとありしかば其座に居たる者差出て講へて口當りよしと思ふて多く參るなつれ〳〵草のあへ物も過れば毒じやと申せしよしか樣な差出者古今の序を聽はづりて昔は花になく鶯水に栖蛙を始馬

など迄歌をば詠たれば人倫たる身をうけながら五文字七文字のわかちさへしらぬは殘念なる事やと歎くをあらやさしの心ばへや去ながら馬の讀たる歌とはいまだ聞ず聞たしといへば世の中にさらぬ別のなくもがなちよもと祈る人の子の爲是こそ馬の詠たる歌也否それは業平の歌にてはなきか念もなひ湯屋の謠にそも此歌と申は長岡に住給ふ老馬のよめる歌也と云たり

かんにんの四字

或人文盲なる者を意見して世の交りは他の事はいらず唯堪忍の二字をよく守るべしといへば文盲人は頭を傾けかんにんとは四字にて侍らずや御許には思し違なるべしかんにんと四字にて侍ると指をもて數へながらいへば意見せし人云愚昧の人かな堪忍とはたえしのぶと讀て二字也といへば又頭を傾けてたえしのぶならば又一字ふえたり五字となり侍るべし何と仰有とも我等は四字と思侍れば四字にてかんにんは致し侍る也と云るに其人又云汝が如き愚昧の文盲は實に諭難し人に似て蟲同樣也己が儘にすべしと大にいきどほりければ文盲人笑つて何とも仰あるべし我等はかんにんの四字を知り侍れば惡口せられても少しも腹立侍らざる也とて笑ひ居しとぞ其智には及ぶべく其愚には及べからず

粂平内兵衞

淺草觀音の寺内に粂の平内兵衞の石像有てよく人口に膾炙すれ共いつの頃の士何國の藩中と慥に書しものもなし内藤山城守の家中家富馬も二疋迄は繫しと也剛質にて力業を好み件の石像を存生の内に作らせ死後に印となすべしとて庭に居置しと也歷々の侍なれども石像拙なければ其跡卑し雅を學ばざる人の失知べし又品川東海寺澤庵和尙の石碑の邊りに丸き石いくらもまろばしあり道に轉び出などせしまゝ自往來の足にかゝり石に銘なければ他所の者しらずといへど寺には別に帳有て南より何番目は某印北より何番目は某の印と詳に圖せる由也

馬術に雅なし

昔より馬術に達したる人に學問ある人は稀なる由八條家に故實遺りたれども今傳ふる人なし大坪流の馬書も俗なる事多く詞古からず雲霞集には雅なる事少しく有「さなみ」「みさご鳥」「遠山の月」「櫻かげ」などは馬

騎の口からは出まじき詞也近年に至りて「刎(ハネ)ぎり」「もろあたり」「放し刎など云は全く當時の馬乘り詞也馬の目所も「山合」「小松原」あつかふ目所甚詞卑し馬乘の内にも少文字の讀る者は馬は餘り上手の沙汰なし夫より末になりては只世間並の馬騎とはなれりとぞ

羯摩乘親の面

羯摩乘親は極て面打の上手なりけれども一年に一つは打ず性酒を好みて醉て舞ふ事を樂しむ老母の曰來の櫃蜘の巢をかけたり勤めて打べきにやとせめければ乘親驚てさあらば今日よりして懈らず打べしとて籠けるが四五日を經て面を打て誂へたるかたへ持行料を持歸りて母に渡しければ母悅びてかく多くの金を得しは面いくつ打たるやと問に面は八つ打たれども心に叶わざるが七面あれば皆家に殘せりとて取出し見せたり鬼女の假面なりければ見るさへ恐しとて傍に置けり其夜盜人入て親子臥たるを伺ふを見て母かの鬼面を顏に覆ひて眼の穴より見ながらやよ盜人の入たるぞ乘親起よと云けるを盜人見てあとさけび驚何國ともなく逃失ぬとぞ

雅人の傑

遊樂は費なることに有費を省ば樂なし慰みは無益なる物に有無益をいとふ時は慰みなし面白きは危き所に有危きを避れば面白き事なし長生は勞と食とに有勞せずして食に過不及なければ命天然を終る事を得べし調度と人身と同じ多く遣へば損じ遣わざるも又損せりされば養生は過不及なきを守るべし病は不養生に有て世に氣を屈託するもの常に病なきにあらず右は柳澤淇園の詞なり里恭は文學武術を始人の師たるに足る藝十六に及び中にも書は長ず近世畸人傳に悉しく出たれば云ず此人に對する人二人有彥根の森川許六是又俳諧に達し書を善す次で尾陽の横井也有なり此人書はならねども狂文には妙を得たり此三士ともなす事は違へども大約氣象の同じき所有近世雅人の三傑と云べし

南方鐲

尾州名古屋の毛抜師の銘に南方と云あり諸葛亮孔明出師の表に深く不毛の地に入て今南方を定むと有て不毛といふより昔近衞殿下より下されし名なりと云其角の附句に毛抜にも名を給ふ君が世と有夏祭浪華鑑住吉の場の淨瑠璃の文談に其間に抜さいた髮抜ふ

と床の床机に上足打(アガアシウチ)煙艸入から出す鐲もなんぼうふときせんさく也と有るも此南方鐲の事也

竹田近江

近松門左衛門國姓爺合戦といへる淨瑠璃を作して大當せし跡を猶面白き趣向もがなと枕を割て工夫に渡る其時の芝居主竹田近江云には作者の心にはさこそ存せらるべきかかく大當りの跡は大體すら〳〵としたる事をなして置るべし國姓爺にて餘程の德分あれば一二年不當りしたりとも我等式が給る程は澤山也其間は古き物にても出し候内には自然と能狂言も出候わん夫より上夫より上と趣向に趣向を重ねたらむ時は我業は盡果申さん只天然にまかされよと申たるは一道に秀たる者の詞諸道に通ぜり感ずべし

春日野の蟲

南都の人松虫鈴虫を捉ふるに挑灯を携へて叢中に夜行けば其光によつて飛來ると云は昔の事にて當時蟲を捉ふ者は竹を二本持晝行て薄を押分れば蟲共驚て飛出るを捉ふ又飴を持行て捉ふとも中にも黠智者は薄を根ごしに吾庭に植ゆ都てかゝる蟲は薄の中に卵を殘せばことしの卵來る年の秋に至りてかへりて聲をなす吾庭にて生じたるをとりて籠にこめて賣ればいと安し春日野にて蟲も捉り薄も根こせば聲格別によきと云り

鶯白魚

東叡山の宮江戸の鶯には訛有とて京都の鶯數千羽を取寄て上野の山に放されしを年々卵をのこし今に上野の鶯は訛らぬよし鶯塚の名も是より呼桑名の城主白魚の種を品川に取寄られしより今白魚は東都第一の名物とはなりけり往古は嵐山へ芳野の櫻を移し植させ奈良の都の八重櫻を取寄せらる抔皆風雅の道を盡せり何れも優なる事にぞありけり

賴政の亡魂

螢と云虫は腐草化して螢となるとあれど年々卵を草の莖に殘すを翌年初夏の頃自然とかへり飛かふよしの故に石山は早く宇治は遲しと云萍或は藻にとまりて流るゝゆへなりと兎道にて扇の芝邊に飛かふを賴政の亡魂と云は俚言にして茅根化して螢となるを誤りしものなりとぞ

お菊蟲

駿河の町に蚊蜻蛉と云蟲溜生牛に飛廻り往來の鼻口

へもはいらんばかり也是今川義元の亡魂也と里人はいへども風土によつて生ずるか是も茅根化して蚊蜻蛉となるにやあらんお菊蟲とて女の後手に括られし姿の蟲生ずるも其土地の風土に生ずる也播州皿屋鋪とて狂言にはすれど實は東都番町の事にて小畑孫市の室嫉妬深く神妙のお菊を井戸へ落し入て殺す其靈祟りをなす故甲州の知行所に菊寺とて一字を建ると新著聞集にあれ共青山の邸にての事なり故に狂言に青山鐵山お菊を殺すとも云り何れが實なるや不知

鹿の時立

南都春日野の鹿よく寢入居るもむくと起立て誰追わねども駈廻り戯るゆへ傍の鹿共に狂ふ是を鹿の時立とて春日明神鹿に乘移り遊戯し給ふ事と土人は云り雪の朝に駈廻る犬の如し猫鼠にも時々合手なきに戯狂ふ事まゝ有金魚腹を摺つて游ば三尾五尾是を追ふも皆故あるなるべし

猿蟹を嫌ふ

昔話に猿が島へ蟹の敵討に行事を綴る（東都にては桃太郎なり）猿は蟹を嫌ふ事甚しと聞り藝州宮島の囘廊にて猿徒らをするを幼童ソレ蟹じや〳〵と云ばあわてふためきて囘廊の上に駈登り鹿の通るを見ては鹿の脊へ飛乘山清水小流れ等の蟹の居そふなる所は鹿の脊にて越ると云思ふに磯端の小蟹は鳥類の羽虫人間の蚤虱に應じて嫌ふなるべし

置蛟

置蛟に四季有「子の日「桃花「あやめ「七夕「菊重等也花重と云置蛟は月見小左衞門御城の御能務むる宵の夢に嚴島辨才天枕上に立せ給ひ置蛟を一通り夢裡に習ひ奉ると見て夜は明にけり感じて一手も忘れず翌日打ければ御機嫌斜ならず何と云置蛟ぞ尋參れと御上意ありし時昨夜夢中に辨天より習ひ候とは申上がたく花重と申候と樂屋への上使に答へ奉りけるとぞ此置蛟の留に「ハ「ハ「ハと三つ重ぬるより花重ねと當意に申上侍るよし是によつて幸の家には今に嚴島辨才天を尊む此一名紅葉重ねとも云よし亂舞は必風雅なくては叶わず謡の文段わからずしては舞も謡ふも打も囃すも形の心づかいならんか

水引

秋草の中に水引草と云物は細く物を括る水引と云物

に似たれば呼ぶ也色に赤有白有しまらしき草也扨水引と云は何によりて名を附しかと思へば素麺の名を切麺とも又水引餅とも云よし然らば素麺の形に似たればなり

鳥貝

鳥貝は鴾（カイツブリ）に化するがゆへに鳥貝也とも云又鴾の化したる貝なれば鳥貝也ともいへど其味烏肉の如き嚙しむる所有ゆへ云か併し月令に雀化して蛤となるとあればまんざら縁なき名ともいふべからず

放島の試み

放島の試といふは學生をこゝろみるに池の中島などにて詩文章を作らせる事也人に談合させまじき爲也うつぼ物語に季房試の題を賜りてひとり船に乗られて出たりと有是放れ島のこゝろみ也

はなじろ

古き軍物語にはなじろに付合たるとあるは敵味方思ひもよらず出合て互ひに惝りして慮したる事を云にやはなじろは臆したる事也臆すれば鼻の白くなる也源氏物語におくしがちにはなじろめたる人多かりしと見へたり

和歌に師なし

文武の道もろ〳〵の藝能に至りても師となる程の人は其藝術をあまねく弟子に傳へんとすれども弟子の修行うすければ其道を受得ざる也されば物の上手下手になるは全く師のする事にあらず弟子の力にて上手にもなる事也假令孔門の三千も聖人の弟子なれば皆賢人君子ともなるべきに纔に七十士中にも顔子九哲の如き是皆弟子の力なり或云京極中納言殿の和歌に師匠なしと宣ひけるよし此事よろづの事に渡るべきにや

南面の障子

權中納言定家卿は五條三位俊成卿の子にて我家にて歌をよまるゝに必南面の障子をひらかせて遠く外を望み衣を整へ正しく座してよまれたり此事を人に申されけるは常々心を清く正しくしてよみならわざれば高貴の御前にてよむ時心あはたゞしくしてよみあやまる事ありと申されしとぞ又申されけるは歌よまんと思ふ時には先白樂天が故郷有母秋風涙旅舘無人暮雨魂と作れる詩の句と又蘭省花時錦帳下廬山雨夜草庵中といふ句などを吟じて歌をよむ時は其歌も自

心深ししらべも高くよまる也とのたまへりとぞ

差合くり

晋其角常にいはれしは「好氣根稽古のみつにくらぶれば好こそ物の上手なりけれ將棊の師大橋宗桂もつねぐ〳〵此歌を誦し申されし俳諧に差合くりといはれむよりまづ句者といはれよ句集なりでさし合は自由なるべしとは尤の事也たとへば非常の時鳴物音曲今日より御免とあるを待兼て出さんはよからず一兩日もさし置て扱可ならむ句者は此處につまりて外のものを作さむさしあひくりは六句め宛に松の句を出さめ笑ふべし

二萬堂西鶴

井原西鶴は浮世物の作者にして俳諧は西山宗因の門人也淨瑠璃作者近松門左衞門俳諧は西鶴にならへりと云西鶴住吉にて二萬三千句を吐て夫より二萬堂といへり住吉大矢數は貞享元年子六月五日也此時の矢見は其角也とあれども此年其角十六才也

三句の渉り

活々舊室曰俳諧一卷の變化は起承轉の三つ又見聞志の三つを旨にとりて其場の働きにあるべしや昔太平記にいへる楠判官正成が討手として六波羅より須田高橋數萬騎にてせめ下りしを正成方寸の謀にて散々に追散らし其跡へ宇都宮纔五百騎にて迎ひしかば楠はやく天王寺を逆て公綱に勝をとらせ扨近邊の山々浦々にて篝火を焚疑がわせ又骨折らずに追かへしたり是程面白き三句のわたりはあらじと語り申されたり

記錄表紙

記錄の書とは大納言を大〻言中將を中〻應永を応永元和を元禾嵯峨を峨〻醍醐を酉酉と書を云也釋家にても讀誦を言言瓔珞を玉玉菩薩を井と書類を云我戲場にてもムり升ムんせいなアなど書て通字とせり記錄とは古く正しき名義なれどもわざと佐川田昌俊が製ならんかと俳諧して「日に當る 喜六表紙屋水仙花と予が戲れしも卅年の昔也

餓鬼つばた

松江雉舟が犬子集に三條殿山崎宗鑑を召れ庭の杜若けふ翌と唉り思ふ程折とるべしと御許ある鑑何の心なく有がたしとて池の傍りに望み花を折公「宗鑑がすがたを見よや 餓鬼つばたと仰らるゝ宗長やがて

「呑むとすれど夏の澤水といまだ詞もひかぬうち」くちなはに追れていづちかへるらんと鑑つかふまつりければ殊の外めで笑わせられ數の賜物ありしとぞ又支考が章平をつれて芳野山にあそび「歌書よりも軍書に悲し吉野山と申せしも貞德紅梅千句に「公家は衰ふ元享のすえ正章「歌書よりも尺書(シャクショ)を專にもてあそび可賴此附句を一つにして句となせり何れも風流の戲れ事今世の人の句を盜むなどの心とは同日の論にあらじ古書は常によく見て覺悟すべしとぞ

兄弟の爭ひ

伊勢二見が浦に百性兄弟山をあらそひて九鬼長門侯に訴へ侍りしにいかに下々なればとて兄弟づからかゝる非道なる公事をするふとゞき也仕方あるべしとて年經しかど埒明たまわず其間に雙方より賄を運ぶ事數をしらずある時兄が方より物もち來りしを長門侯彼が聞樣に此公事にて我は大なる德付たり只いつ迄も濟すまじきぞと宣ひしを彼者物越に聞て立歸り弟を呼び汝山に望あらば取べし殿の心かくこそあれ然らば爭ひて何の益かあらんと云弟實もと思ひ其事止侍りし

佛は佛師

洛陽本滿寺の日蓮の像は靈驗ことにあらたにて同宗の輩崇敬淺からずある時像すこし損じたまふて佛師を呼しに佛師が曰此像を日蓮の像に改めよとの事に侍ふやと問ば住持は留主にて弟子僧數多寄合扱も文盲なる佛師の云事かな忝くも此尊影は北山芹生(セリヤウ)の里の土中に久しく法華經讀誦の御聲ありしかば此寺の開山聲をしるべに堀たまへば有難や大聖人の尊像にておわせししらざるをしり顏になせる大惡人やと散々〳〵に詈りければ佛師かたくてそれは各の僻事にて候是はまぎれもなき元三大師の影也と互に口論となり法師ども佛師が頭をわり內證にて事納めがたく所司代牧野佐渡侯にしか〴〵の事訴へしに佛師が申ところ證據有やと宣へば佛師がいわく影の御首を破りて見たまひ良源とか慈惠とか記しあるべし若日蓮とあらば某が首刎たまへと申せば又住持にいかにと問せたまへば一言の返答なかりしゆへ其方より醫師をかけ疵養生せさせよ職人の事なれば其日數を積り手間代急度わたされよと捌き給ひしまゝ內證より詫言し白銀廿枚送られしとや

運慶の口傳

佛師運慶が口傳に佛を作るには耳鼻をば先大きくすべし若耳鼻を十分能程に削ば後に小さく見ゆる時に大きくしたくても叶わず又口と目をば成丈小さくすべし若口を十分よき程にあくれば後に大きく見ゆる時小さくしたくても叶わざれば耳鼻は大きにし口目を小さくするを第一の口傳とするとぞ是はもと韓非子に出て宋の蘇頌が云し事也此木偶人を作る心得は何事にもわたるべしと駿臺雜話に出たり

鴟鴞の文

或人鴟鴞(シキョウ)を畜てそれを囮にして鳥を捕けるに同じく殺生をする友達のもとよりみゝづくをかりに越けるが其文に鴟鴞を略してづくと書て其末にづくとはみゝづくの事にて候みゝづくと書候へば文字數多くこと長に成候故にづくと書候となが〳〵と斷けり夫ならば始よりみゝづくと書かし文字を縮めんとて多くの文字をそへ詞を短くせんとて却て長くなる事は片腹痛し

長範の詠

高野西谷(ニシダニ)に入て熊坂長範蓮社の寶を奪ふの夜數多の盜賊を召連たり長範いかゝ思ひけん樹下岩上に休みて御山の靈妙の光を感じけるが寺に入て黃金を捧奉りて四面を拜し誓ひて永々賊徒此御山に入るまじ後後の供養などしめやかに賴み鐵槌を借りて向ふ齒二枚缺て生前死後の思ひ出唯今得たりと筆走らせて則「たかの山峯の嵐ははげしくもこのは殘れ後のかたみに强盜長範と書けるとぞ戒るも悟るもいましめも和歌にてぞすむ國なりける

日本に象を渉

南掌國十四年毎に象四隻を例貢す乾隆二十八年使を遣して大象一小象三つを進むと秋坪新語にみゆ乾隆二十八年は此方の寶曆十三年癸未也廣南大泥國より日本へ象の渡りしは享保十四年己酉なり大坂を通り京より江戸に行寬保の始迄江戸に育しとなり始渡りし頃は七尺計なりしが後は一丈五六尺に及びしと也

清人發句を譯

○東都俳諧師雪中庵蓼太が句に「さみだれやある夜ひそかに松の月といえるを清人程劒南が賞てこしけるを爰に出す撒密他列耶阿兒要披促革尼麼子那次吉

雪中庵蓼太蓼太先生者隱君子也都人士岐爲侍從之流亞矣乙未春於崎陽客舘得俳諧歌一章言是先生所著僕不能讀其國字故就譯士某得解則興在景中意在言外大非俗品可知蓋僕亦有所感也因賦一絕寫其意倣鄭之誚所不辭也長夏草堂寂連宵聽雨眠何時懸月色松影落庭前乾隆四十年孟夏月望後三日雲間程劔南」句のうへはとまれかくまれ俳諧の道唐土に聞へたるは雪中庵翁なるべし是安永四年乙未也是も七十餘年の昔とはなりけり

師直の歌を譯

○高師直鹽冶判官の妻に貽る「かへすさへ手にやふれけんと思ふにぞ我文ながら打もおかれずといふ歌を徂徠譯して我思美人貽之書美人不見棄庭除吾拾吾書歸十襲心謂美人手所觸と譯せり

兼好を評す

室鳩巢兼好を評じて太平記に高師直が爲に艶書を書し事を云其後伊賀守橘成忠が招きに仍て伊賀國に赴成忠が姫に通せし事園太曆に載たれば世に諂らひ色にふけり隱逸を好み名利をいとふといへども隱者の操ある人にあらずされど徒然に載る所佛法のさた好色の事を除て風景をのべ人情をかたり理趣ある事をしるせり中にも雜念をいましめて我心に主あらまじかばそこばくの事は入來らじと云懈怠をいましめて道を學する人夕には朝ある事を思わず朝には夕ある事を思わず只今の一念の上におゐてたゞちにすゝむべしといひ貝を覆ふ譬を引て萬の事外にむきて求むべからずたゞ爰もとを正しくして前程をとふ事勿れと云松下の禪尼のあかり障子を張れし事を引て世を治る道儉約をもとゝする事を云高名の木登りが云し事を引てあやまちは危き程はなくして安き所になりてある事を云何れも簡要の旨にて聖賢の敎にも叶ひぬべしと云り

勢語源語の評

儒道の人の口にかけては伊勢源氏の物語は淫亂を導く媒なれば年弱なる男女には禁じて見せまじき物也然るに薦紳(シンシン)家に源氏物語を我國の寶といへるは倭語の妙を得たるに心醉しての事なるべし是に註釋して毛詩に淫奔の詩を擧勸懲を示す如く人の戒世の敎とするは俗にいふ扨子定木なるべし二南は修身齊家の本也雅頌は論道述德の辭也國風はもとより里巷の

男女各言情の詩なれば正も邪もあれども其邪と云も媒妁によらずして淫奔すると云計也何れか后妃を盗み繼母寡嫂に淫する樣の事やある伊勢源氏の如く邪淫の事云盡すにはあらず正を見ては自勸て邪を見ては自懲すぞかし伊勢源氏はいはゞ長恨歌西廂記などの品にて其冗長にして醜惡ある物也然るに聖人垂教の書に比して云は誠に氷炭薰蕕をひとしふするなるべしといへり

解脫上人

山の端にさそはゞいらん我も只憂世の空に秋の夜の月解脫上人の世に隨へば望あるに似たり俗にそむけば狂人の如しあなうの世の中や一身何れの處にかかくさんとかゝれしを右の歌に引合せて衣の袖を絞りにきとぞ

西行の歌

普光院殿の御詠に「面影はうつすもやさしとにかくに命は筆も及ざりけり」「憂事も嬉しき事も過ぬればその時程は思わざりけり」「すて果て身はなきものと思へども雪の降る日は寒くこそあれ」と西行はよめり

幽齋の狂歌

青海苔を煎豆に付たる菓子を太閤の御前へ出せしを幽齋公にむかわせ給ひ何と〳〵と御意ありし時「君が代は千代に八千代をさゞれ石のいわほとなりてこけのむす豆と申されければ興に入らせられしとぞ

信西豆

今新製豆とて京の町に賣るはもと上京信西（シンセイ）の辻の尼寺にのみ製して大根葉の干葉を粉にして鹽を加し煎豆にまぶして信西豆と云が原ぞと予が綺語文草にくわしく出せども幽齋公の狂歌の因みに爰にしるせる物なり是鑿說にはあらざるべし

普賢像

同書千本閻魔堂の前に咲く櫻を普賢像と云は色白く花形世の常の花より大きなるゆへ普賢菩薩の乘給へる象の鼻に比して普賢像と呼しと云又一說には閻魔堂の次に普賢堂有し頃堂前に生ひし櫻樹なれば普賢堂とも云とは鹽尻に京の部に出せり此櫻翌ひらくと見る時月の奉行所へ一枝送るを奉行所より牢屋鋪へ遣わす牢前に生て科人共に見せて春をしらせる是を

牢屋の花見と云此盛りの内を閻魔堂にて壬生の如きの狂言をする事例なりと都はすべて風雅なる事あり

楊貴妃櫻

東山東漸寺に泰山府君と云櫻は櫻町中納言殿泰山府君へ祈誓をかけられしゆへ號奈良の猿澤池の邊楊貴妃櫻は與福寺の玄宗と云僧の寵愛せしより號ると云都て物の名を付るにも昔はいと風流也今時付る名は雅ならず唱いとむづかし

利休織部の詫

「何となく人にことばをかけ茶碗おしぬぐひつゝ茶をものませよまた「花をのみまつらん人に山里の雪間の草の春を見せばや利休はわびの本意にて此歌を常に吟じ心かくる友に迎ひては搆へて忘失させなん「契りありやしらぬ深山のふしくぬ木友となりぬる圍の埋火是は夢庵の歌にてあれども古田織部冬の夜つれ〴〵に吟ぜられしと也

目次

一心太
一盆踊
一造り物
一煙草入
一神佛の興廢
一空鐵炮（葛城の奇談）
一復讐の次第
一魁の笋
一通人の子
一鰻の鮮
一蜃氣樓
一古き俄
一清姫
一新町橋
一雪の五輪
一砂持
一安らひ花よ
一かん〳〵踊
一瀬戸物細工
一繪馬の繪
一出開帳
一石川の洪水
一泉岳寺
一皿の爭ひ
一八坂の塔
一蜆の夢
一檢校
一國姓爺
一新町橋
一鼻黑
一若江の碑
一御影參り
一倉治の瀧
一高野の玉川
一朱買臣
一經聲人を感せしむ
一妓家の星合
一琵琶に落涙
一來山が門松
一釣狐の意見
一馬の餞
一高麗王の惡瘡
一鼠喰の具足
一雙魚扁鵲の文
一懷劒の發句
一猫の飼やう
一永井正宗
一古き文に有味
一應擧の畵
一一蝶魚を鬻ぐ
一遊女黃鳥を放す
一韓信を題せる歌
一戲場の和歌
一猴に似た顏
一狐戲るゝの詩
一箔の小袖
一平語小曲
一雪中庵五世
一句の新しみ
一淀川の抱鯉
一經信の和歌
一白龍網にかゝる
一匡房の強記
一孕句
一流行詞は卑し
一永井の肩衝
一音曲の譽詞
一領巾振山
一臥猪の眞寫
一鸚鵡籠を放る
一臨寫摹寫

一天龍川　一行素夢常清
一煙管筒の銘

西澤文庫皇都午睡二編上の巻

西澤綺語堂李叟著

心太

曩に皇都午睡三巻に三百條の話を著はし其餘れるものを爰に拾ひてまた三巻とす是やまた寐の夢なるべし晋子其角の句に殺された夢は誠か盃の跡とはよく自在に讀をふせたり予幼き頃此句を轉じて松島の夢は誠か心太と戯れし事有角の句は夢に劒難にあひ驚覺れば盃にせゝられし跡を云予は松島の絶景を感じ居れば起されて冷やかなる心太の出來しと持來るさまを云り一句の仕立同じけれど趣向は變れり是等を皇都の午睡と云べし附て云心太は今上製の物をスイトン(コ、ロフト)と云下品なるをトコロテンと云是心太にて心太也水太もおなじ心なるべし

安らひ花よ

京師紫野今宮の花鎭祭にやすらひ花と踊り諷ふは人皆しれる事也是古くよりありと見へ寂蓮法師(後賴の弟子にして本名を定長と云)建仁二年七月二十日今社(いや)社士の家にてやすらひ花を詠ぜし歌有「高雄山あはれなりけるつとめかなやすらひ花と鼓打なり又今踊の謡ふ歌に「やすらぎたるやすしやたるや安らひ花や花咲たるややすらひ花や富草の花や安らひ花や富をせはみくらの山に安らい花や此藤をなまへ安らひ花や此藤とならぬのせきと安らい花やいはしめ給へ安らい花やいはしとて千代振神の安らい花やみよとのにせんや安らい花やさけなへこなへやうにまろもいはれや安らい花やさけなへこなへやすらひ花やひくまなもあらかおなじくかへし歌「さなこをたび候とりたりなるや彌生によひにきてねなましかけやとりたらまじやたよりたましや今あらそはんねなまじ物をいまをよひ出てあなうしたくこひ〳〵」と諷へり

盆踊

年々初秋には盆踊りとて諸國の在に七夕より八朔まで幾日〳〵と日を定め牛頭天王とか八幡宮とか或は道場の庭とかにて篝を焚男女老若を撰まず踊りを催す中にも十五日十六日を大踊と呼ていと賑はしき物

にて有りし都會の城下津々浦々にも有て各其國の音頭有て踊り振も又異なるべし京大坂にも昔は町踊とて有けれども天明の頃より此方は止て漸芝居にて年々盆替りには水狂言とて場の中へ水船を仕込み角力男達の狂言に水試合をして大切は大踊りとて子役は黒紹の腰巻羽織手拭を吉原かつぎにして千代の始の一踊り躍はありや〳〵黒羽（織カ）踊りが所望じやが合點かと音頭の内につらりと並びテヽサがつてんじやと踊り始めとゝは渡したと云て這入る是より女形立役と種々の仕組踊雀踊など有て是もとゝは大踊とて惣座中思ひ〳〵の容にて踊りし物也今は此事なく市中に組踊と呼び舞の稽古屋の連中など呼るゝ者たま〳〵催有といへども衣裳引抜好みの揃となるなど歌舞妓の所作事に類せり遊所にも遜迩有といへども是におなじ皆古風廢りて踊はいつしかなくなりたり寺習屋の七夕に婦女子の踊りのみ遺れるとしるべし

かん〳〵踊り

勢州古市の女郎屋の踊りは彼地の名物なれば御師の方にて太々講中の人等はかならず古市の踊を見ねば歸國の土産にならずといへり博多踊は小女郎の狂言にのみ見ていまだ彼地に遊ばねばいはず潮來踊りは予が綺語文草に出して古市の下品なるもの也山城の北嵯峨の盆踊りはおちやめのとの端唄に遺りて葛籠帽子とて手拭を冠る名のよし近くは文政に長崎のかん〳〵踊とて唐人の姿して大きなる蛇をつかひ唐音めきたるおかしき歌にて踊りたるが踊りのふり覺易く仕易きゆへ大に流布せり其後天保山の川浚砂持等には踊りのさま掛聲も一變してセツ〳〵コノ〳〵或はテウまけなよ抔と云出せり皇都に此ふり移りて下のおかたにおまけなヘチヨイト〳〵などかけ聲迄京師は物やわらか也と笑ふ者も多かり

造り物

祭禮開帳の折種々奉納寄進の物何にまれ造り物として飾も古き物と見へたり近世は奉納寄進の物は只竹馬地車に乘て運び作り物は別種と成りけり始は素人の小細工好など程よき物を集めて作り物をせしならん近來は形を思ひつけば人物の顔手足は大約木偶となり大江何某柳何某と人形師に誂らへ見世物の看板に類せりかゝる作り物を飾り見せ其神佛はいかゞ思

ひ給ふやらんいぶかしき限りなり笑ふべし

瀬戸物細工

作り物に名を得たるは浪華西横堀の地藏會に磁器店多く陶器瀬戸物一式にて作るに人物鳥獸生るが如し是古くより異形の瀬戸物來る時作り物の爲にとて仲間中へ買取たくわへ置と也又か樣なる物のほしきと思ふ物は兼て竈元へ誂らへ燒せ置事也と聞りされば こそ鎧兜など錦出金襴手の鉢皿の類にて拵るを見れば其物々にあはせ拵あるゆへさ迄奇とはいふべからず一頃又大きなる物を置すへて作り物とする事はやれり或は土藏を三番叟の面箱とし帆綱の太きを紐にかけ下の釽は車の輪をつかふなど又大江橋の欄干を杉皮にてまき籠細工の葱帽子をつけ伊勢の宇治橋とし堂島の濱手にお杉お玉を雇ひ島の内大丸の屋根に富士山を拵らへるなど何れも仰山なる事を好めり皆細工物にして作り物とはいふべからずまして役者の似顔の人形など雇ひたるは見世物めきていと見苦し東都吉原の燈籠猿若町芝居顔見世の飾物は兩側の屋根に種々の造り物をす是らは土地賑ひの爲に人を呼物なれば神佛の正遷宮開帳などとは別の沙汰にて飾る人形又戲場によれる事なりとも差合あるまじく覺ゆるなり

煙草入

予以前より見たる造り物の中に手輕く出來よかりしは青物一式にて夕立雷をせしを見たり南瓜を雷の顔とし帶を鼻と角にし口は南瓜をくり拔たるが上下の齒と見ゆるは種を其儘に見たるなり小芋を親齒褌は眞桑の皮に茄子の皮を交寅の皮の斑と見てつなぎ太皷は小西瓜を跡先切てずいきにてつなぎ太皷の撥は割頭（ワリガシラ）を兩手にもたせ十八さゝげの雨をふらせ有しが其容より振のよさ是も大江何某などの細工にやあらん又一種衣着を疊みて煙草入とし對鋲のかな物は吉原枕を二つ並べ茶呑茶碗二つを鳩目とし鹿の子の細帶を紐に拔出し火入の底を拔緒〆にして座鋪たばこぼんの上下をはづし雀形の張たる屏風片々を煙管筒に見て斜に立かけ煙草盆は筒の金物にはめたる也閨の道式一種にて誠に無雜作なる作也是らを眞の作り物ともいふべし

繪馬の繪

神社佛閣へ繪馬を納るはもと神には神馬を獻ぜしが

年に一二度の神事ならでは乘らぬ馬なれば數疋有ても益なかるべし馬の繪を畫かせ或は木にて彫たる馬も奉納せしより繪馬と呼ぶよし近來遍額軌範とか云る書に出たる如く洛東清水和州初瀨藝州宮島などには古き額數多ありて其世々の容を見るには是にまさるはなし然し是好者家又は畫師などには其道を學ぶ便ともなるべし尤清水寺に掛たる田村丸鈴鹿の鬼神退治などは其寺の來由を知らせ靈驗等をしらせるなれば有べき筈也其神佛にも拘はらぬ武者繪などは願主の心いかゝあらん覺束なし筆道に名高き弘法大師へ書の額は上らずして嘗神へ大字眞行草の額を納る又は弓箭神ならぬ所へ射術柔術劍法の額を掛るもあり中にも熊坂長範袴垂安輔など强盜の惡人の繪などまゝ有畫師は願主の好によつて畫けども奉納せる人はいかなる心にか有けんいぶかし

神佛の興廢

神佛にも興廢ありて何々の尊と敬む神は諸人近附なきやらして誰も參らず只通用のよきは八幡宮天滿宮つゞいて多きは牛頭(ゴヅ)天王稻荷の社也佛も釋迦と阿彌陀はかはらねど勢至普賢は流行にをくれたり近來藥師はをくれの部にて觀音はます〳〵盛ん也只金毘羅と妙見菩薩に人氣塊り諸神諸菩薩は足元へも近よられず此二體は當時の花方なるべし

出開帳

餘國はしらず浪華には彌生の頃諸所の神佛出開帳の時はまづ手寄の旅宿へつき開帳の場所を構へいつ幾日には場所へ移るその道筋は前々日より披露有て寶物靈佛の類ひを人夫にもたせ講中世話方前後に警固し神主別當の人々は乘物にのり靜に行列して跡をさへと稱す大阪市中の講中世話方より其組の挑灯或は猩々緋緋羅紗の幟をもたせ堂島雜喉場十二濱市場靱の世話方なくば湯豆腐に辛子なく毛のある所に毛なき心地して甚淋し十三反十五反の廣き大幟の曲差(キヨクヂン)には肩車に乘りて差淨明の肩に立たる一來法師の威勢をふるへり小さき籠の長き柄をつけ散物〳〵と賽錢を乞ひ鉦を敲きて詠歌をとなへ齡七旬に及べる老婆の伊達なる衣裳を脫かけて雙の手に扇をもち詠歌念佛に合せて遊戲する有是なん躍婆と云歡喜踊躍の念佛に傚ひ佛緣に導く方便かはしらねども乞食物貰ひの輩にひとしく相應に身をもてる人ならば其子孫子

の頗よごしなるべし此出開帳の來る時はさも賑はしき物なるに開帳果て歸國の時終に諸人の送るを聞ず世俗に始有て終なしとは此事をいふなるべし此近年開帳迎ひの賑はしきを絶て見ず年々馬鹿の減るなるべし

空鐵炮（葛城の奇談）

爰に亦さも有そふなる虛言を云事を鐵砲也と云は空錵砲と云ならん夫より又焔焔嗅し共大砲を放すとも云り又一種嘘らしき事を聞ときは又例の出し物ならめなど云此詞何より出るか分らず以前出し物話とて眞らしき咄口にて仕舞は落噺となる事はやれり一二を爰に出す河內國葛城山の麓に古き三面の石碑有中央に梅園中將殿と鐫左に愛宕圭稅右に船頭與次とか鐫て文字も苔に埋もれ誰訪べくもなき墓碑一基有土人に此謂を聞たる所梅園殿とて堂上方の子息諸國歌枕の望有て愛宕圭稅といへる郎黨を連先都を立て大和路より芳野葛城を視巡り河內路へ赴きし所此土地の絶景中將殿の心にかなひ山寺に數日滯留せられしかど行衞遙けき旅なれば爰を立出和泉より便船して四國九國も見ん物と船出せしが阿波の鳴戶沖にて海賊に出合ひ圭稅にもたせたる旅用の百金を賊首奪はんとす圭稅は渡さじと爭ふ隙に賊共中將殿を手込にする船子は見兼て是を支へ天間（テンマ）とか云小船の內へ中將殿を乘る間もけはしき浪にゆり上られ友綱きれて大船小船左右へひらき行衞も知れず成にけり圭稅は賊首と只二人金の財布を奪合ながら海の深みへ沈みしが生死もしれぬ身の行衞爰に又播州網干邊に住與次と云る船頭放蕩ぶらゐの惡者ありしが一度難風に合ひ既に洋中にて死べかりしを金毘羅權現に祈誓をかけ辛ふじて助かりしより生れ代りし如く善心となり或日小船に睡りて夢に圭稅の靈あらはれ足下の善心を見こみ賴あり我は梅園殿の家來にて去年鳴戶沖にて海賊の爲めに百金の財布を奪合賊と共に海中に沈み此世を去れり然れども其金は波に漂ひ汐にゆられて此浦の彼所にとゞまる主君は小船に流されて今に存命河州葛城山の麓に閑居し我尋ね來るを待るゝ何卒海底の金子を取上主君に手渡し首尾能歸洛させてたべと忠義の魂魄あり〳〵と與次が夢に告けるにぞ與次夢さめて彼所に水入し潮に朽たる財布を取上數へ見れば百金ありかの中將に手渡しせんと直に河

内に尋行人里遠き山寺にて梅園殿にめぐり合ひ夢にしらせし主税の頼み委敷告て百金を渡す期になり欲心生じ此金の半をわけて主君に渡し殘る半は足下の世話代納め呉よと頼みにぜひなく爰迄尋來つたりいざ百金を分取にと金の包みに手をかくるを中將聞て暫しととゝめ遠路の所尋來て家來が託せし其金を渡し賜る志先以て祝着せりさりながら此金子は歌枕の路用にとて勿體なくも主上より恵み賜るものなれば私には進じがたし一旦之を天子へさし上首尾能歸洛せし時は五十金はさら〳〵いとはず百金も得さすべし苦勞序に都迄送り届けて給かしと頼むもきかずあざ笑ひ己なればこそ幽靈に頼まれもすれ渡しもすれ百兩ながらしてやろとは位倒れの安公家殿そふ咏よふは釣られまひ半分わけが氣にいらずば元の深みへ沈めて呉ふ海から取て持てゆけと傍若無人の喧嘩腰中將あはて押とゝめ腹立の段最もなれど此金子のなき時はいつの世にか歸洛せん何卒情に此金をと財布に手をかけ引戻せば生れ付たる強惡者ェ、彼是と面倒なむごいめ見せざ成まひと刀に手をかけ切らんとす中將ハッと飛しさりやれ聊爾すな先まてと留ても留らぬ非道の惡者一旦拔た此刀物納めたとてどふで科人ゆるしはせぬと突掛る中將今は詮方なく遁れんだけはと逃出す何國迄もと追行與次葛城山の半腹迄轉(コケ)つまろびつ逃行を遁さじ物と追掛る船頭が追ふて公家が山へ登るとは此ときより云始しとぞ

石川の洪水

文化の末頃珍らしき洪水にて河州は半水に流され人家はもとより牛馬まで大和川に流れ落大方ならぬ騒の頃河州石川村に一人の農夫あり又六と呼正直なる事天性の産れ付にやあらん人是を佛の亦六と稱す其壁隣りに一個の惡漢農業はすこしもせず亦彦道と殺生のみに世を送る土右衛門と云有幸ひ此石河村はさせる水損もなけれど隣村は水につかり跡の騒ぎ大方ならずかゝる折にも惡者の彼土右衛門は時を得て日毎に石河大和川に行て水上より流れよる器財のむき熊手にかけて拾ひとり賣代なしては酒食にかへ思はざる此洪水にて一もと手に取付して獨り笑して川ばたに待居る内に川上より新らしき木地長持になひの棒を付しまゝ流れ來たり水練得たる土右衛門は熊手を掻込腰ぎりに流れへ這入りててふど引よせ靜に堤

へ引上つゝ見れば長持に錠おりたり定めて中には絹
夜具か衣類のむきを詰たるなるべし我家へ運んで改
めん片棒持す者がなと見ゆる向ふへ隣の又六堤の上
を通るを呼かけ又六どこへと尋ぬれば向ひの鳴衆が
癪氣がつゝぱり藥買ふてと頼まれて求めて今が歸り
がけと云に得たり〳〵土右衛門が片棒かゝす早速の嘘
是此長持はをれが伯母貴の大事の品物そちが内へ預
けたと頼みにぜひなく持ていにしな難儀を助ける佛
の又六片棒頼むとのせられてそりや幸ひと歸りみち
かいていなふと肩を入れ土右衛門が内へ舁込んで癪
の藥がひま取たと向ひの内へと走り行跡に笑坪の土
右衛門が錠叩きあけ蓋とれば長持の底に蒲團を敷七
十餘歳の老母一人長病にやつれ苦痛の體外には七り
ん藥鍋茶碗と尿瓶も打返りあたら蒲團も濕付て得な
らぬ臭氣紛々たり土右衛門大に業をにやし此長持の
重さでは一廉の金目じやと又六めを賞そやし持て歸
つた甲斐もない死損ひの糞婆めうん〳〵うめいて居
るからはどふで生てはゐまいをるまいむだ骨折らせた
其代り往生させて呉ふぞと熊手片手に獨りごと壁の
崩れの隣りから覗いて悔り又六がヤレ待しやれと飛
で入り熊手引とり分入りて扨は又だましたの伯母貴
の所の長持と聞て爰まで運んだが見れば病人の此婆
樣たゝき殺そふと云こなたの惡心病氣で死ねば常業
なれど敲殺せばこなたは科人ヤレ滅ぼうなと震ひ聲
土右衛門はゐせ笑何こんなひんこめを殺したとて下
手人所か婆々めが悦び殺し助也よひ死旬邪魔さらさ
ずとそこのけと云に又六あきれ果爰迄片棒舁たをれ
が手走り受るはしれた事婆樣はこちへ連ていぬをれが
貰ふた下されと云をつきほに土右衛門は夫程ほしか
持ていね屎瓶も婆に付物じやと壁の穴よりほりやれ
ば病苦の老娑を肩にかけ佛の慈悲者又六がよふ〳〵
つれて我家に寢させ肉身の母の如く日々助抱のおろ
そかならねば兩三日經て病人は少し病苦も忘れけん
又六に素姓も告高安の近郷五ヶ村ばかりの庄屋の母
十三ヶ年が間の長病も躬や嫁子孫共まで餘り大事に
かけ過し醫療に驗なくばかり所に今度の洪水も病苦
に人事を辨へねばいつ長持へ入れしかしらずどふし
て爰へ來し事ぞ終に相見ぬ此母を眞實の親の樣に介
抱給はる實心の肝にしみしか十餘年覺へぬ母の快さ
爰はまづ何國にてこなたの御名は何と申すぞ此躬や

孫子共は水に流されて何國にぞと過こし方の物語聞て又六小膝を叩き扨は高安の近郷某の母子よな此所へ來られし始はかよふ〳〵と云聞せ又高安郷は大方流れて今に住所も定らぬよし聞ども夫にこそ仕樣ありて屋根板二三束求かへり何村何某の老母は石河村又六が方に居るよし書て水上へ行折には是を數十枚づゝ流しけり洪水の騷も少し靜りければ高安の何某母の行衞を案じながら水損の場所を見あるく所に屋根板に蚯蚓書ながら又六が住居に母のましますよしを流れよるに知りて何某大によろこび家内親族打揃ひ駕籠を釣らせ迎ひに來て互に命の恙なきを悦び其上十餘年の病氣もをこたり全快の歡びとて又六へ百金の謝禮を送るに又六決して是を受ず何某の云此金子を受るは後世の人の爲也と云又六何が故と問何某云兎角欲の世の中なれば以後のかたりぐさともなりて老母の介抱し百金を得たりといはゞ人皆是を眞似るべしと理解にまかせ又六は然らば是にて橋なき所に橋をかけ供養にせんとよふ〳〵受る何某は母を駕にのせ厚く禮を述て歸りけり壁隣の土右衞門は是を聞又六が内へ來てあの婆は元洪水に流され來しを拾ひ取しは我等也然れば百金の金主は我なりすみやかに渡せとはたる又六云其時我なくばあの老母を殺すならん今日歡びの裏をかへして老母の敵とて足下を討ん我に惡心なきゆへ十餘年の病苦を助かり理を解て百金を送れり何ぞ足下に渡さんやと此爭ひに及びしかば一村の者庄屋年寄集りて此評議まち〳〵なりしを庄屋の曰元老婆は水上より流れ來たるなり然れば此百金の財布を大和川の落川へ投込べし何れなりとも水練を得たる者飛入て取上べしと皆々打連大和川へ行に水嵩は漸減りたる樣見ゆれど水聲喧しく四方山の物流れ來る事高きより谷底へ材木などを落すが如し淵には渦卷漲る水勢いとも危ふき水中へ庄屋は件の財布を打込土右衞門もとより水練を得たれば素裸に成つて水中へ飛入たり亦六は水音に驚き只忙然と詠居るを庄屋懷より百金を出し是こそ汝が金なり今打込みし財布には程よき小石を拾ふて入たり此水勢は土右衞門がいか程水練得たる共搜取る事難かるべし此間に早くと又六に金を持せて歸しければ一村の者あをぎ立庄屋の才智を感じける去程に土右衞門は浮つ沈みつ渦卷中へ入よと見へしが彼

財布を取上て口にくはへ頭を漸顯はせてこなたの岸へ泳ぎ來るさま皆々呆れて扨も我慢の土右衞門も一ばい喰ふてあの財布の石の入りしを金ぞと心得かづき上たる大馬鹿と口々そしれど漲る水音間遙に隔たれば聞べき樣なく拔手を切泳ぎ來る內水上より三間ばかりの藁屋根屑家土右衞門の方へ流れ來る皆は手を打天罰(罰カ)にてあの屑家にて鼻でも打とて土右衞門の死ねかしと其財布は金ならず石を大事にくわへておるはいかいたわけと聲々に言る內に件の藁屋土右衞門が脊にどふと乘るそりやこそ今に死をらふとどよめく聲の聞へてや土右衞門は頭をあげ屑家負ふたがおかしいか

復讐の次第

此頃國はどこそこにて敵討が有たとの事取引先より委敷記せし此書面姓名まで書ありとて半切に書有を出す其書にいはく

今井何某
野村何某
花むらさき

しづはた
和田見益
水口屋喜兵衞
宇源太
惣九郎
駄八

此今井と云は家中一番の美男にて同役野村何某と遊處に通ふ和田見益は牽頭醫者にて水口屋は茶屋なり花紫は廓一番の全盛なるが今井と深き中となり野村はしづはたと云相方はあれど花紫に惚て蔭より口說ど手にいらぬを憤り戀の敵と醫師と亭主に相談して駄八惣九郎と云惡者を駕舁に出立せ今井の若黨宇源太主人の供に付來るを酒に醉せ夜深く屋鋪に用有とて花紫とよく寢入たる今井を駕に乘せ野村は途中に待伏して駄八惣九郎等と謀つて終に今井を討果せり宇源太は主人早歸れりと聞て駈戻れば主人今井は道にて死たりこは口惜と足ずりして屋敷へかへりか樣〳〵と委細を語り其夜の人數の名を記し今井の後室と舍弟に見する舍弟何某追取刀にて敵を討んと駈出すを後室暫しと押とゞめ有まい事にはあらねども心を靜めて此書付の字頭ばかりを讀で見やと女ながらも武士の母たしなめられて宇源太が見せたる書面の頭字を讀ば今野花しは水宇惣駄とか樣な事をさも實らしく云て落す是を出し物語りと云り此餘に噺もあれ共略しおもひ出る儘右に出せり

泉岳寺

東都無樂が三題噺と云を聞しが見物に何なり其題になる物を乞ふ見物所持の品を出す其品をもつて卽席に作して話す事なり此後謎解坊主此卽席をす今はよし此どゝいつ坊などみな卽席を興とす右三題噺の題に江戸三芝居の狂言と題を出したる時の芝居の狂言忠臣藏に廿四孝今一軒の狂言は忘れたり忠臣藏は彼泉岳寺へ詣て義士の石碑を見て今に芝居にでもして諸人の賞ずるは全く大石始四十七士の忠義故也と念頭に拜み居る內其碑震動していと物凄き體なりければ扨は忠士の靈爰にあらはれ出るかと恐しく思はず逃出し江戸の方へ足早に歸る道にて思ふ樣よしなき石碑を見て忠義をほめたるがゆへに一山の內のみ荒れて震動したりヤレ恐しとつぶやく向ふへ友達來たり何國へ行れしと問に泉岳寺へ詣し事を語り震動したる事を云友人笑ふて今珍敷地震ゆりたり扨は寺中にて地震にあひしを靈魂出ると思ひしならんたはけた人よと笑はれて扨はと心付ながらイヤ我見たるは地震にあらず石碑の影より亡靈のあらはれ出しに相違はなし四十餘の墓碑が一時に聲を發して義士〳〵と鳴出したと落せり

魁（ハシリ）の筍

廿四孝の外題を見て近所の友の物識りに廿四孝とは何の事をせし物ぞと問に友云唐土に廿四人の孝行者をすぐつて出す其內に郭巨孟宗など尤名高しそれを日本に引直して慈悲藏横藏などにせし物也とかたり聞す此者に一人の老母あり今迄は身持あしく親の事も苦にならざりしがふと此話を聞てより老年の母孝行にせでは叶はじと心づき內へ歸りて詞を改め母親の機嫌を問ふ母はいつも持あつかふいたづら者に似合ず詞も甚叮嚀なればいとゞ不審も晴やらず躬は母に何ぞ食物を御好あれ直に求めてさし上ふと云母はさのみ食好みもせねばふと思ひ出しまだ寒中にはならね共冬の筍よかるべしと四日市の青物やへ駈行小さき筍の魁（ハシリ）を買ひ歸つて直に煮て出し是は孝行の仕始めなればいざ召上れと進めけるにぞ母親大によろこびて少し喰ひ初物を喰ば七十五日命延はると聞ば殘りの分はそなたたべやれといはるにぞ息子然らばお相伴と茶漬の菜に喰ければその味き事咽を飛口まら發して立上り母の殘りの筍は只二きれか三切れ也中々是では堪えられずまそつと買て思入食せんソフ

レと駈出す息子を呼とめ先には母への孝行に求たるゆへ有もせふ四日市へ駈出してももうそふはおじやるまひ

皿の爭ひ

前編の咄の部に云舊觀雜話の序は坂東岩子（ガンシ）の作せる咄にて行燈の上皿下皿とせり合昔より同じ皿に生れながら我下皿にのみなりいるは口惜しちと上下とかはるべしといへば上皿大に迷惑して上皿には受なく下皿には受の輪有是生れ付たる役目なれば今更替る事出來まじと云所詮下では濟まじと御奉行所行燈美濃紙殿へ訴へければ燈心衆を左右にしたがへ上皿下皿が言分を聞てヤア申樣が暗ひ〳〵まつと委しく搔立て參れ此一話を序にかへ次に三都の噺を集めたり覺居る分をこゝに出す

通人の子

江戸淺草藏前の豪富の主人吉原のをいらんを根引して妻とせしが懷胎して十月に及び安産せし小兒を見れば本田髷の大盡姿着物羽織に至る迄其頃はやりし好の仕立金拵への小脇差煙草入から紙入まで誠に美盡し善盡し當世仕立の大通人盥の湯を浴もせでずつと表へ駈出すゆへ番頭跡より付てゆけば北へさして足早に行るゝゆへ扨は觀音樣への申子なれば御參詣かと思ふに違ひ馬道より田町へかゝり土手の方へ急がるゝゆへ何ぼう親が通人でも今產れるやいな吉原へ駈出すとは呆れた物じやと言ながら番頭は袂をひかへ若旦那おまへはどこへお越じやなと尋ねに產子はふりかへりおぎやア〳〵

八坂の塔

京の者夜岡崎邊の畑に隱れ鳫鴨の下りるを捕らへ我腰帶へ首を通し凡十羽も取りしと思へば鳫鴨一度に羽敲して中空さして飛でゆくあれへ〳〵ともがけども羽風に連て段々と遙の空へ飛るゝひあいさこりやたまらじと一羽とり二羽三羽とつて放すにぞ帶はゆるんで追〳〵飛ぶ何でも平地へ下りたく思ひ兩手をかけて何やら持ヤレ嬉しやと氣のゆるみに鳥はのこらず飛去たり命限りとらへし物よく〳〵見れば九輪にて下は反ある瓦屋根去にても何國なるぞと氣をしづめ月明りによく〳〵見れば八坂の塔の五重目の屋根の九輪に取付居れり轉び落ては粉に碎けんされば とて下るに道なし助け舟〳〵と聲の限り泣わめけば

よふ〳〵近所の人集り人間の降る嵐（アラシ）でもなしどこから散て來た物と問ふにも答よふにも數丈隔てし塔の上下かれ是いふ内夜も明れば何分人を助る工夫中にも智恵者案じ出し萬年坂の艾屋の艾の限り地に敷て是でたらぬと穗口やの火口も共に地へ敷て此上へ飛下りよと差圖に上よりふし拜み穗口の上へ飛ければ體には恙なくふうわり落てたすかりしが兩の眼より火が出しゆへ火口へ移つて燒死けり

鰻の鮮

浪華の北船場の豪商の丁稚二人魚は夜寢る物か寢ぬかとのせり合ひに一人は夜中泉水の金魚を見よ泳ぎ居るを見る時は寢ぬと云一人は又番頭殿がよふ寢る物じや鰻のよふな鮮を搔をるといわるれば魚はねる物に極まつたと互に爭ふを奥の間より秘藏娘のいと樣が聞つけこりや寢る方が勝ならん床の間にかけてある懸物にさへ蛤が夢見て居る

蜆の夢

此話を出入の牽頭醫者が聞付ていとの判斷感じいると主人にむかひ蜃氣樓の講釋よりいつそ今から安治川か尻なし沖へ見にゆかふと船に酒肴を取乘て夫婦娘に醫者妙手代丁稚も打乘て傳法邊にて船をとめよく〳〵見れば虹の如く葛屋につゞく蘆塲の内より見越の梅の盛り在所げしきの蜃氣樓は前代未聞とふねより出て堀出し見たら蜆であつた

蜃氣樓

とてもなら眞の蜃氣樓を見たき物と尻なし沖へ船を廻させ暫く見合す其内に烟りの如く金殿樓閣硝子細工の龍宮模樣あり〳〵と立昇るにぞ是こそ誠のしん氣樓といふ間もあらせず一時にばた〳〵と崩れ出し微塵に散つたはこはいかに地震ではあるまひかと干潟を堀れば道理で蛤があくびして居たと是にて一つの噺に三つの落し有此餘にも有たれど忘れたり

檢校

桂文治の落し噺は膝の宿替と云書あれば爰に略すその後道具入の咄あれども多くは所作と道具を用ふれば事長くてくどき所あり此道具入の前に一つ二つ素咄をしたる中におかしきと思ふ分を爰に出す

或檢校の妻弟子の何都とか云座頭と密通して檢校の前も憚らず見苦しき事多かれど盲目なればしらず近所の事觸の老婆檢校を呼こみて是を告る檢校も兼て

それとは推量しながら盲目の悲しさ詮方なく虫を殺し適片目にても明らかなれば安穏に置べきかと天王寺の庚申堂へ祈誓をかけ一七日が内井の端にて水を浴庚申堂へと参りけり三日目ばかりに妻はしり彼座頭をつれて跡より行主堂前にひざまつき一心不亂と願ふ跡より必聞て給玉ふなと夫の祈誓をもどきつゝ念じて先へ歸りけるかくて檢校一七ヶ目の滿願に又參詣の後より妻と座頭は跡付て天王寺へとこそ歩行ゆく檢校堂前に拜居ればあた面倒と前なる茶店の奥をかり携へ來たる酒肴さゝへ開くもさし向ひ檢校はかく共しらず念じをれば實青面金剛の利益にや兩眼ともに始て開きあたりもしかと見へければ檢校大に呆れ果ヤア扨は庚申の靈驗にて兩眼立どころに開きしかあら有難たや忝なやと天へも上る心地して堂のあたりを打詠かくあらんとは兼てより思ふに增たる御堂の尊さ是がかの紅絹猿か向ふに高きは天王寺の塔なるかと餘りの嬉しさにゆる〳〵と爰等見物して歸らん物とまづ茶店へ腰打かけ煙草呑つゝ葭簀より奥の間をさし覗けば現在我女房と弟子の座頭が痴話の體生れて此方盲目の闇地を拂ふけふの今女房や弟子とは夢にもしらずおなじ盲人とは言ひながら餘所の女夫は睦まじいなアと此噺などは情深くして實有今時鄙陋の下がゝりの咄とは混ずべからず

古き俄

前編にも演たる俄と云も文化に俄選天保に俄天狗といふ書出たれどもそれにもれたる物を爰に云文句を覺へ落しを忘れたる有落しをしりて文句を覺へぬも有只趣向の佳なる物をしるせり屋根葺釘をくわへ鐵槌にて屋根の漏を葺かへゐる淨瑠璃にて天滿に年ふる千早振ると紙治の茶屋場をかたると紙治の拵にて屋根の上へ來る屋根や惚りして盜人かと怪しむ爰は定て河庄で有ふちよと覗かしてくれと天窓よりあのマア痩た顔はいの文句になる屋根やどふして屋根から出て來たのじやサア連て飛なら梅田か北野アゝ爰からどふして飛れる物かなど有て紙治窓から覗き侍客の姿を見て腹を立る屋根屋異見するといゝはいかなる天窓が見入しぞ錢もなき世の馬鹿じやなアといふ落し也

國姓爺

或は國姓爺樓門の道具置淨瑠璃有と唐人の着屋出て

よごいと云妻の女房樓門に駈上りの上るりにて上へ錦祥女出て肴や何がある日本より客人有上そふな物があるかと問ふ肴や豕の切賣饅のよひのもござりますは是置ませふかと立かゝるをヤレ豕と鐵炮放すなよなど有て錦祥女云日外味ひ肴と白い細ふ切た物をくた事があるが何であらふそりや日本の肴鯛と云魚と麵類をひとつに焚て鯛麵と云がそれでござりませふヲヽそれがたべたい有まいかどふしてそれがござりませふ三千餘里向ふ迄取にやらねば喰われませぬヤレ情なや三千餘里のあなたとや此世の鯛麵思ひたへ抔也落し覺へず

清　姫

又日高川渡し場へ女鬘着てヲイ船頭さん〳〵と呼ぶ船頭欠伸仕ながら苫船より出て何じやと云今爰へ肴やはこぬか其肴賣は今の先渡したそりや片眼かへヲヽがんちの生節賣じやその生ぶし賣のがんちんに逢ひたいのじや早ふ船を出しておくれ是からむかふへ渡しても逢れまい今頃は日高屋でどふぢやうじ汁で一ぱいのんで居る時分じやそふしてお前何の用じやサアわしが小用する間風呂敷包をあの肴やに持てもらふたら其儘で逃をつた取かへさねば置ぬサア船をイヤもう日はくれる水は高し向ひがはへは出されぬ船が出せずば泳ひでなりとゆかにやならぬ蛇はおろか蚯蚓に成ても渡らにや置ぬおまへ蚯蚓になるかゑらい器用な姫じや器用姫じやなアそうして金でも包みに入て有たかアイ鏡袋に三歩二朱入れてあるもう二朱たしや兩になる蛇（ヘビ）でも蛇にでもなつて渡らにや聞ぬ此落も忘れたれば略す

新町橋

新町橋の欄りつけ橋詰烟草やの親仁の腎虚の體にて烟草をほどき玉にしているヱイ〳〵の歌になり五郎八黒頭巾にて出て扨も〳〵今夜に限り黒船は賴母子の顔よせとて內にいず獄門にあふて川の起請を取歸さねばならぬとふと烟草やを見てちよと店先をかりまするサア〳〵お安い御用あなたは鎌倉やの若旦那じやござりませんかちとお烟草の御用を仰付下されませヲヽよし〳〵店の者らの烟草はおぬしの所のをかはせるかはりちと賴まれてはたもらぬか此通り手足がなへておりますれど勤まる用ならサア何でもない事じや聞てたも跡月晦日の晩に獄門の正兵衞とい

ふ男にをれが深ふ言かはして居る姫の起請をとられたそれを今夜とりかへすには黒船を頼んだれどるすで間に合ぬゆへこなた黒船の姿になつて立引して起請を取返してもらわふと思ふてア丶めつそふもない茶筌組の親仁分いつも私の店へ來てもこふれ烟草屋なぞといかつい人どふしてあの男と立引がサアそこで是じやと懐より投頭巾と尺八を出してこれをこふ着てこふすると黒船じやと見へるそこでせりふはわしが教へるハテそれでも體がそふ自由にはなりませぬハテこふすればよいと二本杖を兩の袖へくゝり附木偶の姿にし我も頭巾を廻し袖をくゝり人形遣ひの姿となつて腎虚親仁を立ておしへてこふれ若ひの一寸待てもらをふかいとせりふをいふては杖にてつかふ覺へぬのをいろ〳〵おしへて若旦那こりや何となされますハテ是が腎虚つかひじやとの落にて有けり

雪の五輪

山科雪の五輪と云外題の俄は其頃評よかりし影にて淨瑠璃人の心の奥深きより直にとなせお石のつめ合へとび去つた切たの文句の時ばた〳〵にてお石一間より出る力彌茶を汲出て母をなだめるせりふの合に

は奥にて上るりほしがる所は山々の時お石おこつてハイこちの息子にも方々から貰ひ手がござんすと立かゝるを力彌おさへてマア親人に何かの相談をなされませイヤ相談の出來ぬは折あしく夫由良之助は他行と始からるすつかふたよつて仕方がないといふ内小浪のさわりになる力彌聞て折角あの樣に思ふている物などある内なさぬ中の娘故をよそにしたかと思われての文句を聞てモシ母人小浪はとなせ役の實の娘じやござりませんかヲ丶ありやま丶母で本間の母親は三角赤飯と云ふ醫者の娘で有たそふなモシこちの内で殺させては跡の迷惑イヤそりや如才ない小浪御寮を殺すに及ばぬ祝言さそふと云わいのへエ丶してどふなさるな聟引手が所望じやと云たれば定めて浪のひらとか何とかの名作を出そふそこで浪人と侮つてかよふな引手は望にないして〳〵何が御所望ぢやといふた時にはこなたの夫本藏殿の白髪首がもらひたいそりや母人御無理じや鎌倉にいらる丶本藏殿の首が今云て今間にはあふまい殊に赤紙付で急飛脚にも出されまいハテマアそふいふて見ねばわからぬとせりふの内奥にて鶴の巢籠の文句になるアレ〳〵

もふ御無用といはねばならぬ其跡が直に謡じや力彌そなた諷ふてたもイヱ私は一向存ませぬ剣術の稽古で謡などはついに諷ふた事はござりませぬヱ、千秋萬歳のとツイ一口諷へばよいじやそれでも私はヱ、婚禮式の事をしらぬと云は謡ゐてい子じやのふと落しなり都て九段目の穴捜にて大體俄はかよふな作り方を是とせり今時の俄とは異にして是を坐敷にわかとは云けり

鼻黒

文化の始つかたに玉造稲荷正遷宮に付砂持有尤男女入交て運ぶ物から賑はしき事甚しく氏地ならぬ船場上町島の内迄も砂持の人數出て其中にて若き男婦女子に轉合などせし者の鼻の先へ何者の仕業ともしれず墨を付あり砂持せぬ者は鼻黒じやと掛聲をして運ぶ事也餘り群集仕過して市中の男女晝は何しらぬ顔なれど夜になれば現になりて砂持に出るゆへ御公儀よりさし留とはなりけり其後夜深く大勢の人聲にておもしろく鉦太鼓にて囃し立門を通る銘々起出て門に出て見れば早一二町行過たる體也若き者共は跡より駈付見屆んとすれば數丁かけ廻るのみにて終に其囃子を見ず是なん狐の宮上りとか前編に云東都の狸囃子の類なるべし

砂持

文政中朝日神明宮の砂持に素躰に越中褌を大道へ引ずるばかりにして駒下駄を履頭へ好みの行燈を冠り灯をともし數十人連立砂持の掛聲して市中を夜深る迄踊り歩行事はやれり砂は持ずして頭の行燈の灯を消ざる樣に踊るを是とせり是や輕の大臣が燈臺鬼の故事より出たる物か後は是も火の用心あしきとて禁止となりけり中におかしきは朝夷三郎が姿になり紅隈の御酒の口を頭にさし甚平羽織を着て砂持をして朝夷甚平の砂持じやと云歩行しも有けり白中と號して行燈は茶やの掛行燈生洲宿屋の行燈通ひ船の行燈とある限りをこしらへ褌駒下駄と三品揃へて其料さへ持參の者は其徒に入るゝ催主有しが禁止の時咎を蒙り長く預となりし者も有けり

若江の碑

天保の始頃河州若江村木村重成の墓へ參り何か幸ひを得たりと云て參詣の輩多く有しが後には群集する事夥しく法會開帳に殊ならず鎧兜武者と出だち雜兵

陣笠にて數十人竹螺を吹鉦太皷にて參詣などせしかば近在の百姓は田をあらされ制すれども止まらず是も禁止となりて參詣の輩いち〳〵名所家名書とめられ預となるあり暫らくの内にて後はよふ〳〵參詣人も絶へたり惣體浪華の人氣は根のなき草の如く何事によらず騷がしくこぞり安く飽安き人氣にしてどこの稻荷かしこの占ひ又大師の夢想なりとてこぞりて群集すること一ケ月を過ず

御影參り

伊勢參宮御影年は六十一ケ年目なりと云ふれしが明和六丑年より廻り年に當れりとて文政十二丑年の春誰云となく拔まいり〳〵と云出始阿波の國の參宮大坂へ來るより段々と拔出し近國近在は云に及ばず浪華市中一町内の人別半は參れり道中群集して宿もなく難澁なる事甚しと聞り尤御公儀より道中筋へはそれ〴〵の人歩を出され至つて幼少の者又は老人の輩は送り屆給はるなど有諸所より御影施行とて旅の具食物の類ひ或は湯髮月代の施行は道中筋數多出たれど伊勢路にては宿を貸者なし商人百姓の家に迄泊人にてつまり大約は野宿する輩多くたま〳〵泊りたる者も夜中に朝飯くはせて宿を立すなど混雜夥し浪華の拔參宮は五月の末よふ〳〵に納りたれど遠國田舍は翌寅年の春になりても絶へざりけり一說には御祓の札を鳩にくゝりつけ放す時には空にて羽叩きして落す是を御祓のふりしと云せ未其時候ならざるに御影年とせし拵らへ事なりとも云しが然りや虛實はしるべからず

韓信を題せる歌

俊賴朝臣の「世中は憂身にそへる影なれやといふ歌を鏡の傀儡（クヾツ）どもが諷ひたるをいたり〳〵にけりなと喜れしを又永緣僧正が夫をうらやみて琵琶法師どもに物をとらせてかたらひ我詠たるいつも初音の心地こそすれといふ歌を爰彼所にて諷はせけることあれ是の書にも出て俊賴朝臣の自然に思ひかけぬ者共の諷ひしは時にとりての面目なりけん寛政中扇矢數四十七本といへる狂言に由良之助と安兵衞が開城の場にて韓信の故事を引所にて「末終に海となるべき谷水もしばしこのはの下くゞるなりと韓信を題せる歌をいはせしかば人皆是を小澤蘆庵の歌なりとしるもしらぬも人口にふれけり俊賴朝臣のためしをひかば

蘆庵には咄面目ならんが此うたは蘆庵にあらず伏見中書島の隱士學舟が歌にて誰か蘆庵に語りしかば四句然らずとて直したるをいかに聞ひがめけん蘆庵也と云ふらせし也我人以前自作の淨瑠璃端唄を忘れ果たる頃餘所にて諷はるゝはいと嬉しき物にて永緣ならねど呼とめて物とらせたき心地せらるゝ事也

倉治の瀧

詩歌連俳とも故人の名譽の句どもを許するは其道々に遊ぶ人のみにて一文不通の者にまで覺へ和歌やら俳諧の發句やら何人の作ともしらず耳に馴させるは淨瑠璃歌舞妓端唄等に言入たる句也勿論手爾葉語路の誤りはあれど俗耳に通じ易く名所舊跡等にてもこちつけ合點にて故人作者のはめたるも後にはそれを誠と心得相應に物も讀たると思ふ人まで是を呼もの少からず予が著したる綺語文草にもいふたる須磨の若木の櫻四天王寺の額などの如く物しる人も今更とがめず聞く事にはなりぬ寶曆中中村阿契が作の祇園祭禮信仰記三の口乳母侍從がせりふに大坂と云在所にて聞たれば岸野の里へはもふ一里と天下茶屋村は其頃いまだ呼ぬ名なれば岸の姫松をさして岸野の里ともふけし物也此愁ひの內にもすくへど露のたまきわると云文有たまきわるとは魂極ると書て萬葉集にも出たる古言なり淨溜璃に遊べる輩何事か辨ふべからず又四の切金閣寺の場にて松永大膳雪姫に龍の畫を望む時河內國慈眼寺の瀧のもとにて老人を手にかけしがとのせりふ有慈眼寺は今の野崎の觀音にて瀑布はなく倉治村に瀧有是を一名源氏の瀧と土俗は呼べり白幡を流したらんと云より源氏の瀧と呼ぶと傍なる碑面にあれどもより所なき鑿說にて爰にもと與元寺と云寺有しが荒廢して跡方もなくなりしよしは河內誌に有り此與の字を失して元寺の瀧といふなるべし信仰記の作者は是を慈眼寺の瀧と思ひしより然脚色し物なるべし寶曆七年より今迄九十餘年となれば野崎に瀧あらば其跡なりとも遺るべし是ら皆心得たる鑿說を源としてそれより案じかへる物なれば齟齬せる事多しとしるべし

戲場の和歌

雲井にまがふ沖つ白浪と云を宜山骨牌に石川五右衞門公家の容に出たつを書るより木下蔭と云淨瑠璃につかひ大宮人はいかゞ見るらんとの宗任の歌を安達

原の淨瑠璃に兄貞任のにせ勅使としりて梅の花とは見つれどもとかけたるなどこぢつけながら脚色とは是を言也和田合戰の四の切に荏柄の女房綱手の歎きを實朝の聞て海士の小船の詠歌成り竹取物語の三の切大江助千里入唐して父吳道子に逢ひ月見ればち〳〵父に物こその歌をよむなど皆俳言ながら博識の人に聞せて願をはづさせんとするの戯れ也強て文盲人に是を本説にせよとにはあらじかし

高野の玉川

此前編に演る如く端唄の袖香爐は或人の追善に作せし歌なれば今戯場にてもいはゝ腹切又は身代の時にこそつかふべけれさもなき色繪通言にて立役女形色情の事を云の時など唱はせるは笑ふに堪たり高野大師の玉川の歌は秋成が雨月物語と云作物にも論じたる如く和歌一首の中に毒と云事見へず又玉と號する物は何にまれ二なき佳品ならでは冠らすべからず毒ある清水に玉川とはいふべからず是も原は戯場傳奇に演たるを聞ひがめて云にやあらん「ちればこそいとゞ櫻はめでたけれといへば腹切よとの謎となり身を捨てこそ浮む瀬もあれとの歌は覺悟きわめし時のせりふと皆戯場より世にしらるゝ歌とはなりけり

猴に似た顔

前編に云し豆藏輕口の詞に儕が顔は猿に似たりといへば其者腹を立る中へ一人わけ入腹立の段尤なりそちの顔が猿に似たるにはあらず猿の顔がそちに似たる也と聞てそふ云るゝ時は腹立ずと暫思案してやはり同じ事也といかる道外をするは宋の拾遺錄に出たる何尚子顔延之の故事より出せし事と思はる宋の何尚之といふ者と顔延之といふ者少より馴親て無二の朋友なり共に其容貌醜し何尚之常に顔延之を猴と呼ぶ顔延之も又何尚之を猴と呼ぶ或時二人連立西起と云所に遊ぶ顔延之既に行路人に問て曰吾二人何れか猿に似たると其人何尚子を猿ていはくあれ程猴に似たるはなしと云顔延之大に悦て然らば吾はいかゞあると問その人答て曰君は乃眞の猿也と云尚之延之ともに轉倒て大に笑ひけると此語をひいて戯るゝ也諸葛謹の顔を馬に似たると吳の孫權の戯言せしも豐太閤を猴に似又犬に似たりとて猿面冠者犬面冠者と異名を呼しも同日の論なるべし

朱買臣

義經腰越狀の淨瑠璃を予が傳奇作書にくわしく著せしが五斗は後藤祐乘の鐫工に妙を得しを借事實は太公望と朱買臣を潤色せし物なり覆水もとへ歸らぬ古事の如く朱買臣字は翁子初貧乏にして薪を樵て賣常に書を誦妻其業に疎なるを責て暇をとり他に夫を求て住り買臣は獨身に成て路を行々歌ふ妻後の夫と家に在て買臣が飢疲れ凍て衣の薄きを憐む後に買臣學問至りて會稽の太守となり駟馬の車に乘り高蓋を擎て吳郡の界に入る故の妻と夫道の掃除を致し砂を蒔水を洒ぐ買臣車を留て夫妻を後車に乘て會稽に連往て家の園に置食を給して養ふ妻恥悔て一日計り有て自ら縊死せり目貫師五斗兵衞は是より出たる作意也

狐戲るゝの詩

故事談に出たる堀河右府（自注頭辨）四條中納言（定頼）に經を習ふ其ころ上東門院に好色の女房有（小式部内侍か）堀河の右府四條中納言と共に此女を愛す或時右府先に此女房の局へ入ておはしける時納言又彼局を伺ふの所既に會合のよしをしり納言方便品をよみて歸る女其聲を聞て感ずるに堪へず右府に背きて泣ば右府も亦枕をぬらし給ひぬ扨右府縞に思ふによろづ定頼に劣るべからざるに安からぬ事とて忽心を發して八軸を覺悟し給ふと有淫風の甚しき哉錦繡綺語花鳥の情を通ずるのみならず金口の寶典をもてすら女を誑惑する媒に用ゆ此頃の官女といふ者大方遊女の如く成しさま其世の書記を見てもしらる江村北海が蟲の諫といふ著述に玉階草生じて奔々の鶉を藏し上苑菊開きて綏々の狐戲るといへるはさる事也然れど定頼卿の經聲の妙をいわん爲か御堂殿車の內にて譬喩品を誦し給ひし時「門の外法の車の聲聞ばと和泉式部の詠しも其聲の麗はしかりし故なるべし

經聲人を感せしむ

義經記に牛若と辨慶と清水の寶前にて經をよむに牛若の甲の聲辨慶が乙の聲に參詣の人々感じたりし旨を見てもしらるゝ經聲の人を感動せしむる事此の如きは呂律に叶ふ故にや當地檗宗の經聲明風の唐音にて節を付て唱ふる所はよく人を感せしむ是を歌唱のごとしとて誚る人もあれど本朝のいにしへも讀やうの習ひありける事明風に讓らざるべし蛙鳴のごときを聞馴て昔を考へぬ人の謗りはうけがたかるべしと嵩蹊は申されし也

箔の小袖

鯛屋貞柳が詞に狂歌は箔の小袖に繩の帶仕たらんやうに有べしと云ふ亦雪中庵蓼太が云は俳諧は物の模樣だてなる中に淋しみを聞せたらんこそよからめたとへば故團十郎が顏は赤く隈どりながら紙子着て樂屋に居たらむ樣に有べしと是貞柳が敎とおなじ又云俳諧も年よりては詞を伊達に遣ふ樣に心がくべしさなくては物古びて靜なる句も出ぬやうになる物なりされば妓家の長と言ひし中村富十郎（慶子）が心がけを心の師として我はする也と雪中庵のいわれしよし

妓家の星合

大江丸舊國或妓家にて星合の夜「七夕の今宵大ぼし力彌かなと詠たるを其頃の俳友此句は餘りけやけくいかゞと評じけるに舊國の云東武雪中庵の附句に「おれも是から醫者になる筈と云前句に雪中「ひそ〳〵と矢間千崎堀小寺と附られしが其席にて魚紋連丈など諫て云おもしろき句ながら浮世めき候まゝ間神崎などゝあらたむにやと蓼笑つて夫にては近き代の遠慮もあり實にはまりてもいかゞ也都て和朝の弄び源氏伊勢物語など上古の人あながちに尋ぬべからず其作者只詞花言葉を翫ぶべきのみと戸部尙書の奧書あり是らを云にあらねど俳事も八雲の末なれば主稅とあらんには風流なし七夕のあふぼしとつゞけて力彌と洒落たる宗因の風致を思ふ計りひとゝせに數千の句を云捨る內の我なぐさみ也我にはゆるせとありし一つの癖と大樣に見なし給はれかしと申されし事あり

平語小曲

平語小曲に云琵琶は生佛平家を歌ふて一時に鳴慶長元和の頃前田檢校此技に巧也高楷訪月に相傳へて八世に及ぶと云寬政庚申の春上梓して二卷有節の名目節の象を爰に出す詢（クドキシラコエイカリクドキ）素聲怒詢（拾下音トモ云）下（サ）ゲシホリ詢（コハリサグ）強下（怒下ゲトモ云）中音（一ノ聲二ノ聲）中ユリ長下ゲ初重中音（二ノ聲中ユリ）半下ゲ初重歌（下歌曲歌）重初重三重（甲上）（四ツユリ一ノ聲重ノ一ノ聲）折聲（ヲリゴエ引捨引下ゲ）下（クダ）リ（二ノ聲ミネゴエ中ユリ）峯聲走三重（サシゴエゴウノコエヒロヒ）指聲強聲拾突（一ノ聲居）右強中音讀物（コバリチウオンヨミモノ口口下音）突居（ツキスエクライチウオンチラシクライクドキハコビ）位中音散位詢運以上（中略）鱸魚（スヽキ）烽火大塔建立嚴島御幸月見廻文實盛最期宇佐行幸生唼（イケヅキ）橫笛志渡合戰平大納被流我身榮花阿古屋の松少將都還鵺五節沙汰祇園女御聖主臨幸太宰府落樋口被斬藤戸內侍所都入紺搔祇王卒都婆流蹉跎（アシヅリ）嚴島還御文覺強行（アラギヤウ）喘涸

聲青山沙汰(セイザンサタ)忠度最期征夷將軍院宣戒文逆櫓泊瀬六代祝言紅葉の切以上卅六種也

琵琶に落涙

相州小田原北條の幕下佐野の城主天德寺豪健の勇將なりしが或時琵琶法師を招て平家を語らせ聞けるにいまだ語らぬ先に法師に云けるは某は只哀れなる事を聞たし其心得にて語り候へといへば法師心得候とて佐々木四郎高綱が宇治川の先陣を語りけるに天德寺哀れがりて雨雫と泣今一回聞度と云ば那須與市宗高が扇の的をかたりけるに天德寺落涙數行に及び後日に家臣の輩に過し日の平家はいかゞ聞つると問ふに家臣共面白き事にて候但し我々共ひとつ心得ぬ事こそ候前後二曲ともに勇烈なる事にて哀なる方は少しも候はぬに君には御感涙に咽ばれて候いかゞの事と今に不審に存候といへば天德寺今迄は各を頼もしく思ひ候しが今の一言にて扨〳〵力を落して候先佐々木が先陣をよく合點して見られよ頼朝舍弟の蒲冠者にも賜わらず寵臣の梶原にもたまわらぬ生唼を高綱に賜はるにあらずやされば其甲斐もなく此馬にて宇治川を先陣せずして人に先を越されなば必討死して再び歸るまじきと頼朝に暇乞して出ける其志を察して見られよ又那須の與市も大勢の中より撰ばれて只一騎陣頭に出しより馬を海中に乘入て的に向ふて至る迄源平兩家鳴をしづめて是を見物するにもし射損じなば味方の名折たるべし馬上にて腹掻て海に入らんと覺悟したる心を察してみられ候へ武士の道程哀れなる物は候はず某は毎に戰場に臨ては高綱宗高が心にて鎗を取候ゆへ右の平家を聞時も兩人の心を思ひやりて落涙に絕ざりし然るに各には哀になかりしと申さるゝに付て思ふに各の武邊は只一旦の勇氣に任せて眞實より出るにはなきにやと思われ候夫にては頼もしからずこそ候へと云しかば諸臣皆迷惑して辭なかりしとぞ

雪中庵五世

初雪中庵嵐雪(姓は服部)句を吟ずるに訛りては語路の運びあしく連衆にも聽へ兼て口惜しとて都に登り後々は少しも訛らずして執筆へ句を渡されしとぞ此二世史登三世蓼太四世完來五世對山元錄年中より今に連綿として東都深川に有

來山が門松

世に小西來山今宮萬堂十が「門松やめいどの道の一里塚といふ句を禁忌也と云いかに新しき事をいはむとて風雅の罪人也と云人もあり是は來山がすみたる家の裏屋に住居せし者大晦日に身まかりける山が隣は家主にて不斷は庭を通せしかど元日なれば翌こそと申裏の男はやもめにて遠き親類の取賄たれば早く葬りて仕舞たき心なるを山聞て氣の毒がり我は世を遁れたる風人なればかまひなしと許して元日の夕方我家より野送りを出しやりての詠なるよしそれを罪人といふも又道を重んずるの謂にて殊勝とも云べけれど物は其時の樣を能く考ていふべし來山翁が事跡は近世畸人傳にも出て御奉行の名さへしらずと牢中にてさへ詠ほどの畸人なれば歳旦とて何の遠慮かあらん

句の新しみ

都て句の新らしみと云は古より別に奇を求むる物にあらずある娘の子のいと寒かりしに友どちとの咄に風も寒ひかして懷へ這入ると云が新らしみ也去は寒さは動かぬ所肌に通るは本情也懷に入ると云が新らしき也予が淀川の渡し場にて乘合の百姓と船頭の話に卅石も是から凉しふてよけれど蚊の乘るには困るとの詞を聞人船に乘れば蚊も乘ると云は新らしみ也とて句には作りぬ

釣狐の異見

城州宇治黃檗山萬福禪寺は隱元和尚の開基なれば見物せんものと或西國の城主交代の節木幡より駕をまげて立寄給ひしに前にも參じ給ふ諸侯有て袴を取居縞衣に袈裟をかけ如意を持行道の僧中に交り經文を誦し給ふ有樣を見て驚き肝をつぶし厚鬢に衣をかけて武士の有まじき容也と大笑し歸國有て後御國の黃檗派の和尚を招待あり各の宗旨には唐にて武士が三衣をかけて出家の眞似をする者もありやとかの黃檗にての事を語り見兼候事也と申されける和尚云こなた樣には常に狂言をお好のよししかも御上手と承り候左樣にて候哉と問いかにもと仰有ければ然れば狂言の大事は釣狐と承り候畜生足は習ひ事のよし日外被成て見物の諸人感じ入今に其噂いたし候全く君は暫らく畜生の心になり正に狐にならずは勤がたしかの貴人も暫らく行道の中は釋迦の教を熟得して佛の心裡に叶ひ給ふなるべし然らば野狐の魂を似せんよりは行道の方增るべきか形より先其法其道を改め心

裡をはせ候事大事也と答られければ城主則佛道を感じ大寺建立ありけると也嗚呼賢しき哉此禪僧

淀川の抱鯉

淀川にて鯉を取るに漁夫水中に入て鯉と並び居て脇へかひこみて浮み出るを抱鯉と云人を諫るの道も是に同じ始にあしき事としりつゝ共に交はり居てよき所にて善に趣かする事肝要なるべし人を異見するにも大約の人は其者の非なる事を擧て異見するが故に容れざるなり先其人の功を擧て是を賞美しかゝる功をなしながらいかでか宜しからざる事に趣くやあたら功を失へりなどゝ善道に導びかば人かならずその理に伏すべしと云り

馬の餞

餞の字は說文に去を送ると云酒食を以て送る事とも註す詩經には道祖神を祭りて側にて飲とも註せり然るに此字を馬のはなむけとよむは去を送るにはあへど食に從ふ字義と詞とは大に異也馬の鼻むけとは旅立人の乘れる馬の鼻づらをこなたへしばし引むけて如此はやく歸り給へと祝ふ意也とは道理面白く覺ゆいづれ旅行をおくるなれば酒食をもてをくるにもちひ來れり

經信の和歌

經信八條わたりに住れたる頃九月ばかりに月あかゝりける夜空を詠めて居られしに礎の音のほのかに聞へければ「からごろもうつ音きけば月きよみまだねぬ人を空にしるかなといふ歌を吟ぜられけるに前栽のかたに北斗星前橫旅雁南樓月下擣寒衣といふ白樂天が詩をまことに面白き聲して高らかに詠ずるものあり誰ばかりの人にてかくめでたき聲したらんと覺へて驚て見やられたるに其丈一丈あまりもあらんと覺へて髮のさかさまに生たる物に有けり是は朱雀門の鬼などにや有けんかの鬼はすきものにて此詩歌ともに公任卿の朗詠集に入られたれば其歌を吟ぜられしに感じて其詩をうたひたるなるべし

高麗王の惡瘡

經信かく風流なるうへ事を決斷するに甚すみやかなりしとぞ承曆四年高麗王惡瘡をやめるよしにて日本の名醫丹波の雅忠を給はらんと乞申たり雅忠は後漢靈帝の裔にして正四位下主稅頭丹波守たり高麗國王雅忠が醫術のすぐれたる事を聞及び此度王則貞と云

商人に書を言傳て太宰府に達す其書中に奉聖旨訪問貴國といふ文有ければ其文言禮を失ふを以て其贈物をかへさんやいかゞなど陣の座の定に及びてさま〴〵評議有けるに大納言經信卿其座へ遲く參られけるが高麗王惡瘡をやみて死なん事日本の爲苦しからぬ事に侍りといはれたる一言に事定まり雅忠をつかはすべからずといふ事に成たり

白龍網にかゝる

又或所に野干を神體としたる社の有けるに其社のほとりにて狐を射たる者あり此射たる者の罪ありなしの事を陣の座にて評議有諸卿さま〴〵に論せられける中にて經信卿白龍も魚服すれば豫且が密網にかゝれりとばかり申されけり是はいみじき神なりとも狐の容にて走り出たらんを射るに何の科かあらんと云心也こは唐土の故事にて龍が魚のすがたになりて波に戲れて浮び出たりけるに豫且と云者の網を引けるにかゝりて悲しきめを見て大海にかへり龍王に訴へければ龍王いはく汝何とて魚の姿とはなりけるぞされば此網にはかゝりたれ今より後さる事をすまじき也と云り經信此故事を以て決斷せられたる故彼狐を射たる者罪を免れたり

鼠喰の具足

平安城にて質に具足を置請むとする時にみれば鼠が糸を喰たり請主難儀に思ひ色々理をいふを歎きさらば利息なりともすこしは免されよと詫けるに質屋更に聞ず剩鼠を一つ殺して是が藏に居て具足を喰ふたる科人なりしかる間成敗して候ともたせつかはす質置口惜き事に存じ所司代へ罷出初中後を具に申ければ多賀豊後下知せられけるやう扨は鼠は盜人也盜人の居たる家なる間闕所せよやとて家財悉く取質置に下されけるとぞ

匡房の强記

權中納言匡房はいとけなき時より人にすぐれて才智あり四歳にして書をよみならひ八歳にて史記漢書をよみ通し十一歳にて詩を作られたり其頃關白賴通公宇治の平等院を建給はんとて權大納言源師房卿と〵もに宇治に往て造營の地形の事などしめしあはさるゝに四足の大門を北面に建る例いにしへに有ける事にやと師房に問たまひけるに師房其例を覺悟せられざりければ大江成衡が子江冠者いまだ無官にて侍へ

ど下官が車の後にのせて參り侍り彼若者はよく故事を覺へ居候まゝ誠に召出して問侍らんとて匡房に此よし申されければ匡房謹で答られけるは天竺には那蘭佗寺戒賢論師の住所震旦には西明寺圓淵法師の道場日本には六波羅寺空也上人の建立何れも寺門北に向ひ候と申されければ賴通公大に其强記を歎賞せられたり

雙魚扁鵲の文

此匡房後三條帝白河帝堀河帝三朝につかへて官位昇進せられけるにかの高麗の返牒をかゝしめられける其文の中に雙魚難達鳳池之浪扁鵲豈入鷄林之雲といふ句有此句を人々聞傳へてめでのゝしりける此雙魚と云は唐土にて魚の形に文を封ずる事有故書翰を雙魚と云也鳳池とは禁中の御池の事也もろこしの名醫の名扁鵲鷄林は高麗の別名也

孕　句

世に孕句と云る有趣向うかびながらも句を惜みて其場をまつ今の世の懷劒辨當などゝいへるさもしき心とは同じ日に語るべからずむかし源の順楊貴妃歸唐帝思李婦人去漢皇情と兼てたしなみ侍りしが對雨窓月といふ題を得て此句を出せり津守の國基がうす墨にかく玉章と見ゆるかなの歌もおなじ伏柴の加賀白川の能因なども皆此類ひ也ばせを翁も浮世の果は皆小町也といふ句を久しく心にかけて品かはりたる戀をしてといふに出せりと雪中庵史登の話也嵐雪の二世蓼太の師也

懷劒の發句

淡々曰詩は薤刀和歌は刀連歌は脇差俳諧は懷劒也こゝろ切に思ひつむれば其利事早く始皇の胸先を刺にいたる又長くば其所に至りがたからむか昔戀といふ題を玉はり「夏瘦と問はれて袖のなみだ哉といひけむも卽懷劒のきれ味也と

流行詞は卑し

雪中庵云句振は我生れの儘にして修行有たしつくろへるはいやみなり土地によらずして句に都ぶり有鄙ぶりあり高雄といふ遊女の或田舍人に異見しけるはそこには田舍にて歷々の御方也此程は江戸衆のはやり詞など似せ玉ふがいやみなり能男と金つかふ人とはやり詞に傾城は倦て居れば只ありのまゝなるが可愛也其有の儘なる人に愚なるはなき物也ゆめ〳〵にせ給ふなと申せしとなりかゝるあそびものゝうちに

も名高きは心の置所格別也しからば風雅もおなじといわれし

猫の飼やう

淡々猫を飼けるに我喰ける飯野菜などを我器にて分ちかはし膳の脇にてくわせけり門人の曰先生餘りなる不行跡の飼せられやうかな猫の癖あしく成候はんと淡笑て曰さればとよ初め二三疋の猫は隨分と行儀に飼つけ首玉なども奇麗に諸事召使の女共の取計たりしが何國へか盗まれて十日と内の用にたゝず必竟美しく飼たつるゆへ人もほしがる也依て此猫は飼始しよりかくあしく育たる故一二度は盗まれたれども行儀あしきゆへ追かへされしとみゆ何れもよく御考候へ猫は所詮鼠の書物を荒すを防の役が專一也と見る時は餘事に搆わず唯鼠の役といふ所が眼の付所也俳諧も又かくの如し爰が眼字それが其題の專といふ事を見定めたしとありし

永井の肩衝

永井善左衛門は後に道救と號數度戰場へ出て高名あれども軍功にほこらぬ男也越前を暇取浪人にて上州深谷に閑居の砌旗本の士より瀨戸の茶入をもらひ秘藏せしに召使の女落して打破ぬ道救大に腹を立叱りければ彼女迷惑して我鏡臺の内よりふしの粉を入置たる壺を取出し其代りにあたふ道救是を取て役には立ずして是にて了簡して取らせんとて秘藏もせず捨置たるを或時小堀遠江守ふと此壺を見て手を打て稱美したり是唐物の肩衝に極り則永井肩衝と銘じ後には公方の御道具と成りけるとぞ

永井正宗

又道救は板倉伊賀守と懇意ゆへ將軍御上洛の砌直々御詫言申上御旗本に歸參させんと内意に任せ深谷を立て上京す道にて浪人と連になり尾州名古屋親類方へ立寄る間荷物を浪人に頼み先へ宮迄つかはす内彼浪人己が刀と道救が差替の刀と差替駈落す道救宮に來て大に驚くといへども詮方なしかの浪人が殘し置たる錆刀を尻付に入て京着し板倉方へ落付勝重物語に將軍家御上洛に牢拂申付るによりためし候刀脇差數十腰及を付させ候と也道救是を聞て道中の次第をかたり彼浪人が刀も次手にためし見んとて及を付させ見るに錆て分明ならねどねたばを合すに常の刀にあらず研屋が云此刀の及味幾腰の中にも類ひ是なく

候と云扱ためし者の中にふじみ有て不通に切れず彼刀にて切るに水もたまらず大切物也と譽る仍て錆を磨し見るに刀の出來常體ならず中心を彈落し見れば正宗と銘顯わる本阿彌一目見て押戴き正宗の出來物也と申に付是も公方へ上り永井正宗と呼べり

音曲の譽詞

音曲などを譽るにやう〳〵と云は洋々の字なるべし論語に洋々乎盈耳哉とあり孔子の樂をほめ云ひし詞なり

古き文に有味

平家物語は古き詞ありて耳遠きやうなれども幾返り見ても飽ず太平記は文勢はなやかに聞ゆれども數返見にくし況やそれより後の物語は二返とは見られず何にても面白きは古き文也

領巾振山

九州松浦のひれふる山は佐用姫が領巾を振て夫大友狹手彦が乘たる舟をまねきたる山也と云り領巾は女のかしらの飾にするものなり今の世にはありとも聞へずといへり

應擧の畫

圓山應擧主水若かりしとき野馬の草をはむところを圖せり一老翁見て難じて云是盲馬也擧云其故甚麼翁云それ馬の草をくらわんとするや必先其目を閉是草に目を傷らんことをいとへば也此馬叢中に鼻づらをいれながらその兩眼なを見ひらきてあり是盲馬にあらずして何ぞや擧深く其說を感じて畫改めしと也

臥猪の眞寫

或人應擧に臥猪の畫を乞ふ擧いまだ嘗野猪の臥たるを見ず心に是を思ふ矢脊に老婆有薪を負て常に擧が家に來る應擧婆に問て曰爾野猪の臥たるを見たるか婆云山中邂逅是を視る擧云汝重ねて是を見ば早く吾に知らせよ篤く賞すべし婆諾して一月計り有て京に走り來て老婆が家のうしろなる竹籔の中に野猪臥居るよしを告擧が云爾先歸れ必しも驚すべからずと云て俄頃に酒食を携へ一兩輩の門人を將て矢脊に至れば野猪は竹中に臥たり擧則筆を採て是を寫し婆に謝して其夜家に歸り後是を清畫して工描既に調ふ時に擧が家に鞍馬より來る一老翁有擧臥猪の事を思ふが故に野猪の臥たる所を見たるかと問翁云山中常に是を視る擧畫する所の臥猪を示して此畫如何翁熟視す

る事良久しくして云此畫善といへども臥猪にあらず是病猪也擧驚きてその故を問翁云凡野猪の叢中に眠るや毛髮憤起四足屈幡自ら勢ひあり僕山中にして病猪を見たる事有實に此畫の如し擧始て曉りて翁に臥猪の形容を問翁是を說事はなはだ詳也爰におゐて擧さきの畫を捨て更に臥猪を圖す工夫專ら翁が口傳によれり四五日有て矢脊の老婆來りぬ擧さきに見たりし野猪の事をとへば婆云あやしむべし彼野猪其翌朝竹中に死たり擧是を聞ていよ〳〵翁が卓見を感じ再び其音づれを待に一旬ばかりを經て翁來りぬ擧後に圖する所の畫幅を開きて是を見せしむ翁驚歎して云是眞の臥猪也と擧よろこびあつく翁に謝す其畫尤奇絕にして今猶京師某の家に秘藏すと擧が畫に心をもちゐし事斯の如し

一蝶魚を鬻ぐ

五无集の中にしまむろに茶を申こそ時雨かなといへる句はいかなる事にやと雪中庵にて夜話のせつ門人の尋けるに蓼太の曰此事先師史登の物語りに聞しは昔初代の英一蝶は其角なかよし然るに蝶故有て公の罪を蒙り伊豆の島に流さるに友人彼是別れをおしみ船場まで送りて信友の情をなす一蝶申けるはかゝる身の再び相見む事かたし是迄の御懇情いつの世にかは忘れ申さん我かの島の事を聞に大約の人魚をとり日に干乾かして江戸の便にひさぐと承る我も又さこそあらめ然らば魚の腮に木の葉やうの物をすこし宛入置べし若さやふの物の入たる干魚あらば蝶がなせる物よと思ひ給へかしといひて別れたり人々其舟影の見ゆるまで見送り其角はいとゞ胸塞りて立もさらでありし其後一とせばかり有て其角が僕日本橋の魚の店にて乾魚の有しを調へかへりかてぐさになさむとたわゝなる魚を火に炙りけるにむろといへる干魚の中に笹の葉の樣の何ともしれがたきが一枚出たり殘る魚共にも各同じやうに有しゆへ扨々島のやつらはをかしき事をなす物かなと笑ふを其角ふと寐耳に入りやをら起上り蝶が云し事を思ひ出し此乾魚は何方の嶋より參りし物かと其鬻げる問屋へ人走らせて尋けるに大かたは八丈大島より渡し申よしを申角爰に於て蝶がいひし詞を思ひ望友の情しきりに動き蝶が親しかりし友どちを集茶を入此干魚を出し是こそ蝶が申のこせし筐なれいまだ長らへかゝる業をな

しけるよと皆〳〵そなたの方に向て遙に信友の情今更涙とゞめ兼たりしとぞ角が句も此時の事也と聞へし

鸚鵡籠を放る

應永の始頃細川右馬頭頼之は篤實の君子なれば政事の餘暇には禪味を甘んじ嵯峨の天龍寺蕉賢道人を師として玄を談じ幽を問しむ一日法要の商量事終り寒暖の贈答過て頼之申出らるゝは柳營の御繁榮日に增て一天下德風に偃す如くめでたけれ其上當世子義持君漸十歳にならせ給ふが才智世に超え器量ある擧止に見へさせ給へば誠に末頼母しく侍ると語られければ師も眉の霜を拂ひ欣然として夫こそ海内の大幸なれ偖世子君にいかゞの才智と問はれしかば頼之謹て膝を屈しされば候聞し召過し春高麗國より舶來せしとて鸚鵡と云鳥を九州より下官に得させけるが此鳥は自餘の鳥とは異にしてよく人語をなし且鳥獸の啼音をも眞似侍るよし鸚鵡能言ども飛禽を離れずと禮記にも見え唐詩にも見及べど生たるを見る事なかりし物なれば御幼稚の御慰にもと世子君へ奉りしかば殊の外に愛思しめし架に繋ぎて飼せ給ひしに或朝いかがしたりけん其足皮の切れたるをしらで侍臣達の遣戸をやり蔀揚などせしかば彼鳥容易飛で出ぬアハと追出たれども行衞だに見送らず世子君の御秘藏と云日本の地に二羽となき名鳥を逃したる咎輕からねば當役の者は既に自害に及ばんとせしを年老暫しと宥め譬へ死だりとて鳥の歸るべきにあらず唯公旨に任せてよとて恐れ〳〵世子君に其事具に啓せしかば良有て彼鳥千里の蒼海をわたつて唐土へ歸るべきかと仰出さる近習の年老否渠さ程の飛行成候はゞ舶來をまたずこゝらへも飛來り候はんに其事なければ彼方へも飛去候はずやと存奉ると啓しければ誠にしかり渠が小き翅にて波濤をば越がたかるべしさあらば日本に留りなん日本國は我御國なれば逃出たりとて惜むにたらず其逃したらん者さこそ恐入て居つらめ速出て見參せよとの御諚に當人は蘇生の思ひをなし扈從近習の人々もその寛仁を感じ奉りぬ末頼母しき賢慮頼之等が知命を過る齡にても及び難くこそ侍れと涙を流し語られければ道人微笑して苟に志學にも滿させ給はぬ御心より其逃しつる人の患ひを察し給ひ異國へ歸るかかへらざるかと尋給ひし御心遣ひは

深く感じ侍りぬ但し執權の其事を褒給ひて御身もかくは及ばじとの御辭は過差なるやうに聞え侍る千里の蒼海を越て歸らんやいなやと問せ給ふ時若異國へ歸るに治定せば彼逃したる人を罪なはれんやさあらば人間をもて禽鳥にかへ給ふべきや此國に居たらば惜からず異國に歸らば惜とある御心も弘きやうにて弘からぬ御心也御幼稚の御丁簡にはさこそあらめ國政をとる御心には未可ならず珍禽奇獸國に育はず外典の內にも見えたれば唯逃したらん苦しからずと宣はんは最猶尊く侍るべし御慰にとて獻ぜられたるはなを劣りたるやうに思ひ侍る併是は樹下石上の浮屠氏の丁簡にて利世安民の家には用ひ難かるべきかしらねど兼て佛世不二の道理に御接心も候へば底意を殘さず申侍ると宣ふにぞ賴之は垢染の程を慚愧して默々として居られける

遊女黃鳥を放す

道人斯て宣く今の話につきて思ひ出せし一話有貧道若かりしころ諸國遍散して攝泉の沙界を通り侍りしに遠里小野の茶店に休らふ時其前を愛度粧ひし女與に人々多く付副て通るを其邊より皆々出て見送り口にめでのゝしる茶店の主語て此與此所の乳守に但馬といへる遊所の人に幸せられて今伴はれぬるにて侍ると云まゝに誠に前世の善因のなす所なるべしと答しに主の云さにこそは有べけれど夫は三世了達の身ならねばしるべからず此女などは善果の覿面に至る人にて此但馬西國筋の豪富の人を客として折々通はせけるに家裏に黃鳥とやらむ唐土の鶯とやらん珍らかに美くしき鳥一番もて來て贈りぬ但馬悅び一日二日座右に置て詠めしが何とか思ひけん籠の戸を開きて飛せやりぬ其翌日彼客來り此體を見て大に驚きいかにあやまちて逃しけるぞと問しに但馬打笑ひて此程給はりし時は美敷珍らかなる鳥なれば目離せず見侍しが日を累て愛するまゝ鳥の心に成て思ひ侍るに外よりこそ美敷珍らかに思ひて愛れどもをのが心には愛せられんより野山を廣み翔りありかん事を思ふべし我身の上も人より見たらば綾羅にまつはれ琴瑟を弄び暮していか計樂しからんやうなれども我身となりては苦しき世渡りなるを此身として此鳥を籠に入て愛ん事餘りとは情なき事也と思ひし儘に自ら逃しやりぬる也君の御志を仇にするに似たれども君

の賜りたるも自らが心を慰めよとの賜ものなれば飼て心よからざるより放て慊らんこそ御志に叶ふべしと思ひ君に窺ふにも及ばずかくの如しと語るに彼客大に仰天し彼鳥は近來初て渡りたる鳥にして價百金に及ぶ物なるを我なればこそ惜まず饋りたるを立處に逃したるは懼敷心の女也と去て再び來らざりけるよし然るに此事遠近に聞へ客人も繁かりしが近頃攝州の國士深く是を感じ今日しも價身して宿の妻となし給ふ也陰德陽報眼前なる物をと覺侍ると語るに貧道も衣の袖を沾して陶淵明が月に對して白鵬を放てりしは賢者の上なれば驚に足らず賤しき遊女の身としてかく思ひよれるを五柳先生に勝れる物かと覺侍れば其人の後影を遙に拜して過行侍りし是らを思へばさきの御物語は第二義に落たるやうに覺へ侍るまま不圖貶し奉りぬるは憚多きをゆるさせ給へと宣ふに賴之は頭を低て合掌するより外はなかりしとかや

臨寫摹寫

輟耕錄に臨寫は紙を傍に置て觀て是を學ぶ摹寫は薄紙をもて本書に覆ひて筆を用ゆといへるを譯文筌蹄に取違へて書れたりと或人見出せりさしもの徂徠氏なれどもかへりて大家の空覺へ成べし且豪傑人を詒くもまゝある例にて此老琵琶を轉倒して琶琵とつかひて韻にかなはしめられたる詩有と或人のいへりき

天龍川

橘經亮の話に遠江の天龍河をあめなかのわたしと西行發心記に見ゆ龍の梵語那可と云故也さるを海道記に鴨長明と云は非なり あまみつ空の中河とあるは誤れりとなん

行素夢常清

留青廣集といふ書に行素夢常清と出ればげに行ひのやうによりて夢をなすべければ夢もまた吾心にとへば恥かしき物也

煙管筒の銘

或人煙管筒に物書てよと乞ふに黃檗の隱元烟草を惡み給ふ偈に曰一管の狼烟呑復恰如炎口鬼神身當年鹿苑有此草不說五辛說六年と座禪看經の勤を空しくせるを惡み給ふならん二百年來もはら人の嗜む物となりて一たび吸ては忘れ難き故相思草ともいへり又何人の一聯かはしらねど烟草の箱に書付たるを見しに手拈姑娜千年草口吐蓬萊五色雲ともあれば「此草の

なき世なりせば講釋師遊女も閨につきなかるまじと
例の戯れを書て與へぬ嗚呼癡なるかな笑ふべし

西澤文庫 皇都午睡二編上の巻 終

西澤文庫

皇都午睡二編中の巻

目次

一茶臼山
一雪花の爭ひ
一香盆
一平家を評す
一去來の反古
一望月曇晴あり
一秋田の詠
一香阿彌の蒔繪
一かまへ太刀
一室の八島
一菜種の御供
一急流の心得
一住吉の奇瑞
一東海道の算用
一廣江寺の鐘
一飛梅
一似雲聞書
一阿閦寺
一熊野の謠曲
一釋智藏
一絕景に句無
一けふの櫻
一夜暦を見る
一室の名所
一繪島の石
一花扇
一粟田祭
一慶安の塵劫記
一粟津の冠者
一頭痛の占ひ
一漂流の話
一二鳥物語
一初午の句合
一西施が顰
一小納言
一一河の流
一初中後の子の日
一扇を鳴らす
一仁義を買ふ
一湛空の和歌
一水車
一兎波上を走る
一流水を枕にす
一老の接木
一草庵集
一千代能が歌
一味噌臭し
一連歌の一直
一戸津川の湯
一三輪の山もと
一無人島
一影の膳
一俳諧に學問いらず
一鷹狩の始
一天王寺の額
一燕子花を夏に定
一反魂香
一十寸穗の薄
一空公行狀の碑
一泥中に尾を曳く龜
一常任法師
一鵜は墨を費す
一門に鳳の字を書
一肘笠袖笠
一晝空言
一釋迦の法孫
一母子の訴へ
一如是院の米
一座頭の茶挽
一藍染川

一煙草一錢　一金の臺子
一妻敵討　一聖人賢人
一儒士の孝行　一龜田窮樂

西澤文庫 皇都午睡二編中の巻

西澤綺語堂李叟著

茶臼山

慶長十九年の冬將軍家大坂の城へよせさせ給ふ時日本六十餘州の軍兵一騎ものこらず出陣ある本陣は天王寺の茶臼山にて有しを何者やらん書て張りける「大將はみなもとうぢの茶臼山引まはされぬものゝふぞなき

飛梅

三百年前筑紫宰府の天神の飛梅天火に燒て再び花さかずこはそも淺ましき事也と人皆涙を流し知るも知らぬもあつまり思ひ〳〵の短冊をつけ參らする中に權校坊とて勇猛精進なる老僧のよめる歌こそ殊勝なれ「天をさへかけりし梅の根につかば土よりもなど花のひらけぬと短冊を木の枝に結ひて足をひかれければ卽緑の色めきわたり花咲春にかへりし事よ人々感に堪てかの師門を神とも佛とも手を合て拜せしとかや

雪花の爭ひ

比叡山にて北谷の兒は雪に過たる物やあらんと愛せられ又南谷の兒は花に增れる詠やあらんと興せられ後にはいさかひになり花をばあしく言ひちらし雪をばいな物にいひ遣わし雪の方よりは花を褒る狼籍の類をよせて勝んと云又花の方よりは雪を譽る虛氣者を只はたいて退よと互ひにいかれる心しげし山の騷殊の外なりし西三條逍遙院殿傳へ聞し召れ態々山に御登有雪にめでられしも理り有「花ならばさかぬ梢も有べきに何にたとへん雪の曙花に心を染られしも尤ゆへ有「雪ならばいく度袖をはらはまし花の吹雪の志賀の山越自今以後勝劣を爭はず中を直りて勤學あれと靜めてこそお歸りありけれ

似雲聞書

似雲法師の聞書に鞍馬に詣る次手市原野の相しれる庵を訪しに折ふし雨氣色なれば主傘を出し是持行給へとあるを未雨のふり出ざるにはかへつて邪魔なりといなみければ扨も惡しき心がけかなひとり旅の

よき道連と思し給へといへりしは身にしみて覺へしと書れき

香盆

近年出板の畸人傳にあらはす所の今西行(以雲)と云は生國伊勢の人にて洛南嵯峨に住せり其ころ京師に何某といふ風雅人此さがの閑なるを愛して爰に來りて住居し茶の湯連歌に日を送りぬ或日京都の古道具屋にて香盆を金二歩に買古代の器なれば秘藏しやがて茶會を催して兩三人の朋友幷に今西行も招かれしが扨飯酒相濟中立後爐の炭繼かへ掃除調ひしらせの半鐘ににじり上りして先床の方丈より爐邊に至り銘々彼秘藏の香盆を取上底迄も打返し見けるにいかゞしけん西行誤つて香盆を火中へ取落しけり是はと驚早速取上けれど炎盛んの中なれば餘程焦たり是に依て西行はもとより主秘藏の器物ゆへ今日始て自慢氣にて出しける所斯の仕合ゆへ甚悦びざる面色あらわれ一座しらけて西行何共氣の毒に思ひけれど詮方なく段々斷をのべ暇告けれど主不肖〳〵の挨拶ゆへすごすごと立出しが去にても斯秘藏せられし器を損じたる事返す〳〵も本意なく思ひ煩ひつゝ卅步計出行しがふと浮出し事有にぞ立戻り主に向ひて扨々怪我とは申ながら麁忽いたし氣の毒に存候ゆへ御斷の種にもやと一首いたしたり「もしほ燒伊勢男の海士のしわざとてふたみの浦に煙立けりと云主聞て俄に機嫌直り扨々面白き御歌忝候迚もの事に御自筆にて書たまわらば忝しと云西行もよろこび卽座に筆をとり書けり主此歌を金粉にして猶々秘藏せられしが後主病死せられ茶を好む世繼あらざれば茶器殘らず賣拂ひしが伯父なる人かの香盆を所望せられ金十兩に買とられしが今はいづこに有といふ事をしらず

阿閦寺(アシュク)

光明皇后貴賤をいわず千人に施浴し御自垢穢を洗淨し給へりし終りに癩疾の者到りしを猶いとはずさき〳〵の如く扱ひ給ひしかば忽阿閦(アシュク)如來と現れましましといふ事傳記に見へ今もなら坂に阿閦寺の名殘をとゞめ癩疾の者長屋を建て住り彼故事によりてや施浴の勸進するよしの札も見ゆその奇瑞の虛實は論せず凡善を修するも功德を行ふも其人の相應あるべし皇后の善は皇后の善有此后の御所爲甚しからずや御女孝謙天皇の道鏡を寵したまひしも畢竟閨門の法度

正しからざるに基する也

平家を評す

平家の一門に不和なる事なく況や一門の衆を殺す事なく家人一人も源氏へ降參の者なし盛衰記平家物語には關東の世の者ゆへに分外平家をばあしざまに申たるにて愚管抄續世繼等を見ても清盛は殊勝なる所是ある人にて老後耄のいたす所是非に及ばずと白石は評せり平族は互に相妬相忌こと聞へず西海の沈沒に及ぶまで功を爭ひ身を遁るゝ所爲なし賴朝の家風義朝其父を弑せしを基本にして親族の末迄相討て其系他人の手を借ずして亡ぶるには似ず世の諺に源氏の友喰ひといふは卽是なりといへり

熊野の謠曲

謠曲ははかなき物にて事實詩文章を引けるに誤り多きは論ずるに足らねどたま〳〵又思ふべきことあり熊野といふ曲に熊野といふ女內府宗盛公に仕へしが故郷遠江の國池田の宿の母老病により暇をこへども許されず此度は哀なる文を送りて讀聞せるに宗盛左樣に心弱き身にまかせては叶ふまじと强て清水の花見に召供せられしが清水にて歌を詠たるに感じて暇をたびける時熊野が詞にかくて都に御供せば又もや御意のかはるべきたゝ此儘にお暇といへり此前後の文句にて內府の心ばへをしるべしもと此熊野の一條は平家物語に重衡のとらはれて東に下り給ふ道此熊野が許に宿り給ひしに付て此女もと都に登り宗盛に仕へし時「いかにせん都の春もをしけれどといふ歌よみしとて其ゆへをしるせる所に出たるを取て此謠曲を作り出て宗盛公の趣をよく考て作りしなるべし熊野は音に云は誤也熊野と呼べし

去來の反古

落柿舍去來が書さしたる反古に書ては消し又改めなどして定かに讀がたしといへども漢文にて平家の士盛久のことを論じて旣に刑せらるゝに臨て觀世音の加護により刀折たれば命助かり賴朝卿の賞にあづかりしを謗りて不忠者といふ事義仲寺の文庫に納めしが盛久といふ人平語又盛衰記にも見へず只謠曲にのみ出たる事にて本據なけれどもしある人ならば觀世音の利益はさもあれ自助命を喜び賴朝の前に出て酒宴に預かり立まふべきかは上總五郎兵衞が身をやつし賴朝をねらひしに天地懸隔は勿論にて義經の妾靜

女が右大將の前にて詮方なく舞謳ひし時も昔を今になすよしもがなの古歌又よしの山峯のしら雪踏分て入にし人の跡ぞ戀しきと自の詠歌をうたひて大將を恐れず梶原源太がひそかに戀慕せしを忿り判官さかりにおわします世ならば汝達に言をもかはさんやと罵りしに比ておもへばいと悲しき振舞なり慈愛を蒙る觀世音にむかひてもはづかしからずやとの論はおもしろく覺ゆ

釋智藏

懷風藻に釋智藏淡海帝の世唐國に遣學す師本朝に向ふ同伴陸に登りて經書を曝す師も又襟を開風に對して曰我も又經典の奥儀を曝涼と衆嘲笑て妖言とす試業に臨んで座に昇敷演す辭義浚遠音詞雅麗論じて蜂起すと雖應對流るゝ如し皆屈服し驚駭せざるといふ事なし帝是を嘉して僧正に拜す時に歳七十三西土の郝隆が七月七日に仰臥て腹中の書を曝すといへる故事は人よく知りてこなたの智藏におきて事等しといへども隱れたるが惜くて記すとあり

望月曇晴あり

閑田子云大典長老對馬國にあられし時仲秋の月曇晴

京と異なりし旨を語られしを六如上人葛原詩話に記されしが享和三亥の仲秋京師は十四夜曇望夜は雨降十六日は朝小雨ふりたれど漸々晴十六夜の月清明也然るに河內國石川郡山田の人十四五の雨は同じく十六夜は初更過て晴たりと云又但馬豐岡の便には十四五六とも雨ふり十七夜始て空晴たりと云て「三よさ迄寐て立待の月夜かなと句を送れり對馬は地方遙に隔り朝鮮に隣たればさもあるべし河內但馬は空にては纔の間もあらじと思ふにかく計りの違ひあり翌文化元子年仲秋望日晝雨降薄暮より晴月明らかなりしを江戸橘千蔭よりの文に空曇夜更て少し晴しよし「暮るよりさやに都の望の月吾妻の空や汐曇りせしと云をこせり

絕景に句無

新井白石仙臺の洞岩翁に贈られし書翰に中秋月を賞し來人當年三十年一夕も缺ず訪らひ候を悦び候人に酒後和韻もなり兼情字の韻一句を書ちらしつかはし候千里郊外中秋色三十年來故舊情と一聯のまゝにてあと先もなく目出度來年足し候はんと一興に備へ候と有中秋の賞一聯に情盡て止めて來年足さんとある

はいとおもしろし詩人も歌人も情意なきに強て詠ばよき句も出來ず月にむかひ花に遊び酒など汲時に御作いかになど問ふ人は僻也凡美景に向ひ勝地に至る時強て其趣をよみ出んとすべからず其氣色を意にしめおけば題に望みて思ひ合してよきこといでくるものなりと或卿の仰ありしとぞ

秋田の詠

川北自然齋の云儀同三位實陰公の詠秋田の題に「あさ露に袖はまかせて小山田に遲稻干すべき日影をぞまつとあるは實に畫の如し我嵯峨の庵室より望むに秋のあした霧をわけ露を凌ぎて姥も家婦も打群てきのふ刈とりし稻を捌あるは煙草くゆらしなどして日のさし昇るを待付て掛干趣き全く此御詠の如しよく實景を見とゞめ給ひし物と感ずと語られし

けふの櫻

洛の諸九（ショキウ）松島行脚の折剛力を案内の爲に連ける元次郎と云七十五歳になる親仁風景のおもしろさにめでてやありけむ「命こそ寶の山の松島やとかく不風流の者だにも時に感じて自然とうかび詠出したるなり又奥州の二本松に俳諧すけるもの共櫻のもとに酒くみかわし遊び居ける中へ百姓の出で酒飲せ給へと乞ふ發句致し申されなば振舞んと戲れしに此者しばらく案じて「きのふより翌よりけふの櫻かなと云出されて興さめ人々是につゞくほつ句も出ざりけりとぞ

香阿彌の蒔繪

香阿彌勘右衞門と云蒔繪師堂上始大名衆へも御膝近く參る者にて人情の高低しらずと云事なく町人には至極の高情者と世人取はやし我も淺からぬ到り者と朝夕誇りける去大名御在國の時御自慢の御物好にて常にお氣に入の勘右衞門に硯筥を仰付られ模樣花鳥の匂ひ蒔繪の中に遠近の山川御誂通出來差上ければ御機嫌斜ならず勘右衞門を召出され其方古今の名人と世に譽らるゝ程有感心の至りと御稱美有ければ外聞淺からぬ御意有難くと座を退ひて御家臣にむかひ唯今の御誂生々世々有がたく縞に袖に露滴りしめやかに存奉り候私儀も常々御家の事は毛頭疎かに存奉らず殊に文華の殿樣他の御家とは格別に志を嗜奉りて此度の御用も神以て利益にかゝわり不申隨分御道具になり候樣にと一筆〳〵に魂を込候也と御一陣へ

申候時殿御顔色甚損じ奥へ入らせ給ひ御家臣を御召有て唯今勘右衛門が其方へ申たる一言奇怪至極唯今より出入をとむべし領分へも入るべからずと聢と申渡すべしとの御意御家臣畏り奉候さりながらいかゞの事を申上候やらんと問ひ奉れば其方心得ぬとは不埒也寧盗臣を置べきや硯箱はいか計の價にて申付けるぞ役人共より聞取其上の價に一倍遣はすべし黄金の多少をいとわず必ず一倍勘右衛門に遣すべしさなくば折角工夫に渡りたる物好捨り道具にならず渠は大名を廻りて益を貪りてこそ渡世共云べし其上妙手なれば用る方にも重寶たるべし御家の此度の細工には神以て利益に拘はらぬと誓を立ていひ侍るに益なきに僞はあるまじ何ぞ渠等が無益の細工を誂らへ側に置事きたなく見るに心むさくて遣ふに時なし此度の硯箱にて三年ばかりも他の事なくて渡世致候などゝ申てこそ某が物好も興あるべし慰みても心よからん利欲の外と云道具は道具にならず推參の一言是に仍て出入をとめよと申付るとぞ仰付られける勘右衛門すご〳〵京へ歸り心をつめり魂を刺計りの思ひなれども是非なく出頭の醫者へ行て此時町人の高情は何の役に立ぬ事皆下卑たる中にて云勝思ひ勝なり生得筋目ほど恥かしき物はなしかくばかりの赤面と思ふ赤面と云もまだ懲ずして我を我と思ふからぞ額に汗も流る也何分御出入留りては内外不立と頼けり三年ばかり經て醫の執なしにて御赦免を得てもとの如く勘右衛門御出入申けるとぞ

夜暦を見る

夜暦を見る事を忌人有り中古物忌ひ多かりし代にも此説はなかりしが榮花物語に東三條兼家公一條天皇の東宮に立せ給ふにつきて圓融帝の内勅にて祈などせさせ給ふ所に「女御殿に物さゝめき申させ給ひておほんとなぶらめしよせて暦御覽じて所々に御祈りの使ども立騒とあり

かまへ太刀

北越甲斐總州邊にて風神太刀を持と云より搆へ太刀と唱る風を俗鎌鼬と云此風の筋にあたる者は刀をもて裂たるごとく疵つく早く治せざれば死に及ぶ此事京攝にはなき事也と思ひしに京にて或家の下婢庭にて倒れたり介抱して正氣に復して後見れば頬のわたり刀もて切たる如く疵付しとなん是則かまへだち也

下總のある寺の小僧此風に當りて惱みしに古暦を霜にして付しかば忽治したると也此邊にては窓明り障子なども暦にて張れば此風入らずと云り

室の名所

室は紀の國室の浦は播磨室生（ムロフ）は大和室山は伊勢室野は備後室積（ムロヅミ）は周防俊賴朝臣の歌に筑前竈山を詠合されしかど船行の順路にて竈を過てとあれば疑なし證空上人の遊女を見給ふも爰也室戸は土佐にて法性の室戸ときけどゝいふ弘法大師の歌あれば證空上人の事に混ずる人もあらん土佐に室津といふ所有と土佐日記に見ゆ是は又別なるべし

室の八島

室の八島に立煙は古歌にも詠て下野國に小島の如く八ありて其廻りは低く池の如し今は水なし島の大さ何れも方二間計り杉少し宛生たり此島の廻りの池より水氣烟の如く立昇るを賞じける也今は水なきゆへ烟もたゝずと貝原翁の日光紀行に記さる是一所の名にあらず島と號る所八村倶に都賀郡にて鯉が島高島萩島大川島卒島（ソツシマ）曲島沖島仲島等也とぞ

繪島の石

淡路國繪島に出る石白くして人物花鳥恰も彫るが如し自然の物なり古人も此石を見出して繪島と號しにやあらん名によりて石の生ずべきにはあらず昔より繪島と號る故を云ねばいと珍らにて記す

菜種の御供

北野天滿宮二月廿五日の神供を菜種の御供といふは誤にて梅の御供也其故は平なる桶へ飯を高盛にして神前階上の八脚机の下へ供じ其机の上に香立と稱して小土器に白き紙をめぐらし三杵の米を滿てそれに梅の小枝をさして奉る或は花はちりてなき年にあひ葉を生じ實を結びても同じく折て挿數は左四十二右三十三是男女の厄の年の數に准ふいつより初りいかなる故ともしられず是西京の神人より奉ると卽神人の黨の話也

花扇

年毎七月七日の朝陽明家より內へ奉らせたもふ花扇といふ物あり御使は匂ひといへる婢者にて匂當の內侍の御許へ御文あり長橋へもて參れるさまいと興ありて衣被着ごめ高き足駄をはき雨降らねども大傘をさしかけさせ自ら文箱を携へ下部二人從ひてひとり

此大傘一人は花扇をもつ此下部も又助と何とかや此日の名は昔より定れりとぞ內にては小御所のおまへの御池にうかべて二星の御手向になし給ふとなんいつの頃より始りしといふ事定かならぬよしなり

急流の心得

河水溢るゝ時表は順行し底は逆流す河を渡る人心得べきこと也魚鳥は風に逆ひ水に逆ひて毛も鱗も順になる故に必逆風に飛び逆水に行く又滿水には大石も水上へ行もの也そのゆへは水波は砂を穿て石は動ざるものゆへ砂の穿たる所へ落返り段々上へ行也人の心づかぬことにて心得べきことと皆川淇園の話也

粟田祭

粟田祭は例年九月十五日なるが天明六年は國恤(俗に御停止と云鳴物を制せらるゝ也)の時にて霜月に延引せり此祭式に知恩院裏門前の上白川の流水に掛し獨木橋を重き劒鋒をさして渡る事あり其夕霜深く置て只さへ細き橋の見る(アキタ)も危きをいかゞと人々思へるにその河涯に住る明田利右衛門と云る猿樂の笛師心を得て木屑を敷せしかば障なく渡たり假初のことなれど時に取つての働を人々感じけり

徒然草に鎌倉にて中書王の御鞠ありし時地の溫りたれば木屑を敷たりしを人の褒ければ乾き砂やなかりけんと嘲けりしこと見へたれど此橋上は鋸屑ならでは用をなさず彼に增ること遠しと評せりとかや

住吉の奇瑞

後德大寺左大臣實定公和歌に堪能の人にて道因法師人々をすゝめて住吉社に於て歌合せられし時此大臣大納言にておはせしが社頭の月といふ題にてよみたまひし歌「ふりにける松ものいはゞとひてまし昔もかくや住の江の月其歌合の判者は俊成卿なりしが殊に此歌を感心せられ外の人々も褒のゝしりたる事なりしに其頃德大寺家の知行所筑紫の瀨高庄より貢米を都へつみのぼれる舟津の國に入らんとしけるに俄に難風吹出て既に其船くつがへらんとするに船人どもに兎角防けれども今はかうよと見へたる時何國よりともしらず一人の老翁出來てかの舟を甲斐〳〵しく漕直せしかば大風高浪もさはらずして恙なく浮びければ船人共歡び怪みて翁は何國の人にてかく危ふかりし船を救ひ給わりしぞといへば翁の曰殿の松ものいはゞとよみ給ひし御歌の面白さに此あたりに住翁

が參りたるよし申せと云て何國ともなく失けるぞふしぎ也住吉明神彼歌をめで給ひ現れ給ふ也とぞ

慶安の塵劫記

慶安二年京寺町通林長右衞門開板の塵劫記は纔に一小冊なれども當嘉永戊年迄二百有二年になり珍らしき算法有ば爰に出す跋に自是以前に有塵劫記は我邦のまめならざれば或はたらず或はしげきも有故に其違缺をたゝして今又新篇塵劫記と是を名付て板にひらく然れ共此書にも失ありなん自今以後世に行て算法の指南をなさん物可合符節者也としるせり

東海道の算用

京より江戸まで百廿里の間に錢一文並びに並べては何程有ぞと問合二萬千六百貫文一里には百八十貫文一間には八十文宛並ぶ也江戸より京までの間に金一歩を一つ並びに並べては何程あるぞと問一歩の數合三千零六十三萬二千七百廿八但一歩の長さ五分半にして右一歩枡にはかりては何程あるぞと問答曰四十二石八升二合二勺京より江戸まで百廿里の間に芥子一粒並びに並ぶる時は何程入ぞと問けし數六億七千三百九十二萬粒是を枡にはかれば一石六斗八升四合八勺也但一寸にけし四十粒宛並ぶつもり也一升には四百萬粒入つもり也芥子一億といふは長さ十七里廿九丁一間三尺五寸に並ぶ也江戸より京迄百廿里の間に一間に一人宛立つもりにしては人數何程あるぞと問答曰二十五萬九千二百人金子の一歩を枡一升に何程入るぞといふ時答曰六千八百四歩入但一歩に付長さ五分半廣三分半厚さ五厘のつもり也右一升の重但一つに付一匁一分七厘五毛のつもり也七貫九百九十四匁右銀につもり一つを十六匁がへにしては銀百八貫八百六十四匁金一歩一升を箔にのべては何程四方になるぞと問答曰八十二間三尺一寸六分一厘四方になる也下略是より錢算鼠算日本國男女の數など新奇無量の物を集たり今時算法の書には見及ばぬ所也金一歩の大きさ重を見ても其代の事を知るに足れり珍らしければ爰に出し置もの也

粟津の冠者

古事談に園城寺の鐘は龍宮の鐘也昔粟津の冠者と云勇者有一堂を建んと鐵を求めん爲出雲に下る大風俄に發彼舟に入しかば乘船の輩泣叫びたる所へ小船一艘小童梶を取つて來り冠者一人のれといふ心得ねど

乗移れば風浪忽に止む元船は爰に待べしと有て小船は海底に入ると思ふ間に龍宮に至る龍王出て從類多く敵の爲に亡び我も又害せらるべし依て迎へ申也一矢射てたべと乞ふ冠者樓に昇つて待所に大蛇許多の眷屬を卒て出來るを鏑矢にて口に射入れ舌の根射切て喉の下に射出す龍王深く歡びて冠者が一堂を作る爲鐘に鑄べき鐵を乞ふ事をしつて龍宮寺に釣所の鐘をおろして是をあたふ冠者粟津にかへり廣江寺を建鐘を掲る年移り變り件の寺破壞の後纔に法師一人鐘の主たりしが鎭守府將軍淸衡砂金千兩を三井寺の僧千人に施す三綱某五十人の分を乞集め五十兩をもて廣江寺の鐘を買ぬ廣江寺は天台の末寺なれば後日に此事を漏聞て件の鐘主の法師を搦め湖に沈め今園城寺に釣所の鐘是也と有り

廣江寺の鐘

紀州名草山紀三井寺の緣起も是に似よりて故事談に出たるも昔の作物語なるべきを潤色して田原藤太秀鄕勢田の橋龍宮の乙姫に遇ひ托みによりて三上山の蜈蚣を退治せりと云種々の寶物をたしてとれども盡ぬ米俵有ゆへ俵藤太といふなどの說をもふけしは甚拙なし出雲の海にて龍宮に至りしと云はよし有勢田の橋より龍宮に赴くとは海と湖を混じて道理當らず叡山法師鐘を奪取に來て谷間にすてしも廣江寺の鐘ならば奪歸す道理もあり何者が潤色せしか藤太秀鄕は此說によつて名高し大きなる仕合せなるべし

頭痛の占ひ

故事談に花山院頭風を病せ給ひさま〴〵醫療をましませど驗なし阿部の晴明占て君前生にては止事なき行者にておはせしが大峯某の宿にて入滅あり前世の行德によりて天子には生れ給へ共前生の髑髏巖の間に落はさまり雨風に動き今生かく痛ましめ給ふ也御首を取出して廣き所へ置れ候はゞ癒給はんかとあるに人をやりて見せしめ給ふに違はざりしかば彼首を取出して御頭風永く癒させ給ふと記せり今世に傳ふ後白河法皇前生蓮華坊と云熊野山伏にて谷へ落て命を殞せり後柳の樹生出其頭を貫き風に動く毎に御頭を病せ給ふ故に其髑髏を埋め其柳をもて三十三間堂の棟木にし蓮華王院と云緣起は花山法皇の典故なるべし

漂流の話

寶暦八寅年冬泉州波有手(ハウテ)村直船頭(ジキセンドウ)佐市郎船五人乗にて紀州有田にて蜜柑を積江戸へ廻し十二月廿五日明舟にて江戸川口浦賀御改を受同廿九日同所出船晦日伊豆下田湊へ入津し寶暦九卯正月五日同國子浦へ入船同十一日出船十二日遠州貝塚前にて南風になり掛り居て十三日の夜出風にて走る處十四日暮六つ時紀州熊野九鬼島を見付しかど殊の外沖立地方へ寄兼いろ〳〵に働けどもけしからぬ風波にて同十五日朝より西風になり伊勢路へ流され同日暮六時參州大山を卅里程も沖へ出大風にて地方へ寄る事叶わず諸神へ祈誓をかけ伊豆地へ走り同十六日朝富士山遙に見へれども地方へより兼最早身命は此沖へすてしと覺悟し天命次第何方へ寄るべしと巽沖へ流され船中へ波もりこみ帆持がたく其上山は一圓見る事なく渺々たる海上にて十七日十八日と兩日流され暮方巽風になり地方へ寄せる積りにて走らす處十九日夜中走り廿日明方より大風にて沖へ流され廿一日晝時始て島を見付しゆへ船中の者ちからを得帆を少々持走らせ何國の島と考ても大風にて數日沖に居る事なれば何と云島やら方角もしれず船中水きれしゆへ水を求た

く風間へ走り寄ても元船はより兼はし船をおろし島へ行んとせしに島より頻りにこへをかけ招くを見しに人やら鬼やら髪は女のごとく髭は胸まで届き眞黒なる恐しき者兩人招くゆへ聞及びし鬼界が島にやあらん倭寛僧都の幽霊かさもあらば一人ならんに二人居るは不思議也其うへ鬼界が島は西のはづれ長崎の沖東の方に有べき筈なしと皆々評議しながら水のほしさに恐れもなさず船を漕よせ磯近くなれば右の者海へ飛こみ船をめあてにおよぎつくこなたよりもしきりに押切漕よせれば彼兩人船に取付其元は泉州波有手村佐市郎にてはなきやと云に心覺へあれば早速船へ助け乗せ子細を問へば六年以前寶暦四戌年十二月行衛なしになりし泉州相作(アイツクリ)村鍋や五郎兵衛船五人乗の内紀州海士郡加茂谷下津浦藤八と云水主今一人は讃州鹽飽領の西島北の濱幸助と云者もとより心易くせし中なれば島の樣子を聞く所一向何島ともしれず無人島にて同廿六日の朝島へ水を取に行同日七つ時元船に歸り日和次第地方へ歸り度佛神へ祈りしに巽風となり帆捌へする内沖の方より大勢はし船に取乗是も難風に逢ひしよしにて船を漕よせ乗移り此

人數を尋ぬれば松平土佐守殿御手船にて十八人乘元船は乘はなしはし船にて來りしよし皆々打乘り色々働らき伊豆の國子浦湊へ同廿六日に着改吟味是ある所三百石計積船にて泉州波有手村直船頭佐市郎楫取德兵衞水主與一郎同又次郎右四人乘也外にかしき三之助は船中にて病死なり助り歸り候藤八幸助兩人の物語哀れともはかなしとも譬へがたなき話の次第代官所へ届の寫し事長ければ略してあら增を記す

無人島

泉州箱作り浦直船頭五郎兵衞同水主文右衞門備前久四郎紀州下津浦藤八讃州鹽飽幸助右五人乘にて寶暦四戌年十二月十二日紀州有田郡箕島浦にて商人荷物蜜柑積入尾州名古屋へ行積り出船し尾州勢田浦にて越年翌亥年正月七日出船同日志州濱島浦へ入津同十日朝出船の所大風にて同日八つ時安乘沖へ乘掛し所大風波にて雙方よゝ浪打こみ地方へ寄兼せひなく沖へ流され船中詮方なく神佛へ祈願をかくれど折々大風波にて帆柱有ては凌ぎがたく同十一日帆柱切折同十五日迄樣々と憂目に逢ひ再び故郷へ歸る事も不定にて茫然として悲しみ居たるに十五日の朝ふと島を見付船中蘇生たる心地して假柱帆繕らひ段々走りよせ同夜九つ時かの島近くなりたれ共磯際嶮岨にて元船より兼るゆへ乘り放しはし船にて島へ上らんとせしが磯ばたにてはし船を浪に反り倒され五人共海へ落入命からゞ〳〵島へかけ上れ共夜中なれば方角も分り兼皆々濡身ながら一所により夜の明るを待兼しによふ〳〵夜も明け元船を尋ぬれど早跡方もなく風波の難は遁れても便りとすべき元船を失ひ手計にて足なき如く盲目の杖を失ひしよりも悲しく力落れど詮方なくもし人家にても有べくやと山をめぐれど元來無人島なれば只草木生茂しばかり廻りは凡二里餘りの高山にて茱萸の木と蘆萱のみにて諸木とては一切なく嶮岨なる岩山にて峯より始終烟り立登り中程迄も登る事成り難く元船はし船共翌日迄遙の沖に浪にゆられ形は少し見へしが大浪にて碎け後は粉もなくなり心細さ見る度に肝をひやし最早故郷へ歸る望は絶食物とては何もなく磯にて貝を拾ひ又山にて茱萸を取喰ひ水甚不自由なれば方々尋ね少し計りの谷水遙山の上にあるを見出しかけ登り夫を銘々手にて掬ひ呑朝夕を送るのみ南面は平地にてあなたの空よと

詠めやり故郷のみなつかしく親妻子の事を思ひ生死の程も聞へねば嘸案じ煩はんものとおもひながら食事のせつろしさに取紛れ火の氣はなし差當る難儀に故郷の事を忘るゝ計り或日文右衛門磯へ貝を取に行日暮ても歸らず尋ねても見へねば扨は浪にとられしか又は妻子を慕ひ身や投しかと皆さがせ共見へず無人島に住者五人いか程故郷を隔候かしらず心細く互ひに親共子とも思ひ合一人を千人とも萬人とも思ふにかいなき此成行何れも肝にこたへ聲を上て泣ばかり詮方なく破船の板を集めて岩間へ雨露のしのぎを拵へ茱萸も取盡し食物もなくなりしが二月の末と覺しき頃鴻の樣なる鳥羽は白く足短き鳥此島へ下りしを幸ひ色々工夫し捕へ此鳥を船釘にて裂喰此卵大さ瓜の如きを食ひしところ逆上ければ以後は卵はくはず六月頃と覺しき頃磯ばたへ死骸一つ流れよるを見れば文右衛門の死骸なれば泣々山へ葬り七月頃五郎兵衛故郷の事を云出し不快の體三人の者さま〴〵看病に及べども藥はもとより湯を呑す事さへならねば次第に弱り顔色土の如く痩おとろへ此島の土となる事前世の業因ならん皆の衆は身を全ふして再び故郷へ立歸り親兄弟妻子にも逢給へもし我等が故郷へ便りあらば此詞を筐ともなしたべと賴み置終に息たへ果たれば三人は取亂し泣々是も葬れり又八月頃水主久四郎儀も五郎兵衛死後煩らひ出し故郷の事のみ言出し次第弱りに相果しかば都合三人死し殘る二人は我身の上と思へばいとゞ心細く最早兩人より外なければ山へ行も磯へゆくも連立片時も放れし事もなく亥の年中に三人死しかの鬼界が島へ流されし俊寬の昔も嘸となげきしが此三人は五十餘になり精氣も弱く殘る二人は年若なれば何卒存命一度は親達にも逢見ばやと互に力を付合心樂しみに憂年月を送りけるが茱萸は春秋兩度ならではなく白羽鳥も四月頃より八月頃までは何方へ行か島へは戻らず其内は穴鳥（アナトリ）と勝手に呼びたる鳥をとり食事とする鳩程の大さにて鳴聲は生れ子の如く岩穴に住鳥にて此島に鳥多く宿るゆへ鳥夜明に鳴時は此鳥穴へ隱れ候をとつて食ふ事也又岩山へ登るには足痛み難儀に及び始は衣類を引さき足へまけどもつゞかず五郎兵衛生前に考置の芽出しをよく打繩になへばよき繩になりしゆへわらぢを造り履物には事もかゝず及物は船釘を

つかひ扨三年目の正月頃廻舟一艘難風に遇しと見へ帆柱も折たる船漂ひ來る天のあたへと聲をかけ招けば此船も島へよりたきかいろ〳〵働漕寄れども大風にて吹飛し又冲の方へ流され影もかたちも見へずなり神佛にも見放されしかと濱邊に兩人泣倒れしが心を取直し覺悟を極七日計り食事もせず斷食すれども死もやらず只せつなき事ばかりゆへさすが故郷の親の事を思ひ命こそ物種此上は運に任せ便船の事を念じ一六の月と思へば濱邊にて汐こりを掻東を拜み今一度母に逢せたび給へと信神をこらし晝夜海の面を詠めやり暮すより他事なく其後八月頃食事に困り白鳥もこねば穴鳥を尋ねに行草萱生茂りたるを掻わけ〳〵這入たる所岩を切開凡十疊敷程も有べき穴を開き船板にて堅くしつらひ向ふに戸棚と覺しき物持佛等も有是はふしぎと段々改見るに古戸棚の内に茶碗と貳升鍋一つ有籾も少々あれど虫入にて性もなくなり五升鍋の内に五合桝に火打石共有炭殼も少々出候ゆへ直さま火を打色々才覺して燃し付五升鍋にて湯を沸し四年ぶりにて湯を呑是ぞ誠に天のあたへと悦び限りなく是迄火の氣はなけねど暖氣なる島にて寒中と覺しき頃が八月位の時候にて雪は降らず殊の外暑く此島へ鶯多く來るゆへ春をしり去寅の八月此岩穴を見付てより是に住居雨露を凌食物煮燒出來れども鹽醬油なければ潮にて煮て喰ひ生鳥を食からは遙に結構とよろこび油じみたる土器有て火を燈したる體なれば色〳〵工夫をし貳升鍋にて白鳥の油を取綿をひねり火をともし持佛へも備へそこら見廻し候へば外の穴に輪切れたる桶を見出し葛にて輪を入桶手桶等も出來候へど人間の住家にてはあるまじ全く此者らの如く吹流されし者の住居と思はれ極月頃鳥類なく不自由の所磯へ尺許の伊勢海老三つ刎上りしに付取て食是日頃信じ奉る大神宮のあたへかと有がたく其味今に忘れ兼しよし其後正月も參るべく食物の手當に茱萸を取しが北の方は取盡し南の方へ行しに至極の船着なれば何卒爰へ船がな來れかしと兩人信願をこめ山へ登り茱萸をとつて歸りかけし所南の沖の遙向ふに大船と覺しく段々島近く來るに付船と見さだめ兩人は天へも上る心地して祈誓しあの船無難に此所へ吹寄たまへと大神宮を伏拜み暫らく目を閉ひらき見れば船は間近く來る嬉しさ夢ではな

きやと我を忘れ大ごゑを出して招きし處此船も島へ志す體なればいよ〳〵力を得磯邊へ下り待たれ共先年も船來れど吹飛されし事有乘遲れてはいつの世にかは故郷へはなんと兩人申合す隙もなく其儘飛込浸付聲をかけ船へ乘移りしが兩人の異形に恐れいかなる者と詞をかけられ人々を見るに六年以前蜜柑を積一所に江戸へ行候泉州の左市郎なれば名乘合何れも落付島の樣子を物語り年月を問ふ所極月廿一日と思ふ所卯の正月廿一日にて日數卅日の覺へ違ひ也丸四年行衞しれずなりて都合六年とはなりけり此船に呑水なきゆへ兩人案內して岩穴に貯へたる水にて粥を焚六年ぶりにて食たるに其味甘露の如く一口二口は通りしが跡は咽へ通らず全く丸五ヶ年の間米は一せつ食せぬゆへと思はる夫より船へ水を汲入翌廿二日帆を拵へる所へ松平土佐守殿手船千石積は破損に付はし船にて十八人乘組巽風に帆を引上皆々一統相働凡二百里程走れども山も見へず皆々唐へも行樣に覺へ口々いへども左市が乾風にて來れば巽風にて歸る筈也と行々伊豆の子浦へ廿六日着船して船中の一統蘇りたる心地何にたとへん方もなし右の島に白鳥の油三升程殘したれど餘り嬉しさに取忘れしよし左市郎は右の鳥の干たるを二羽持かへりて人々に見せけると也

二島物語

正月廿六日より子浦にて御吟味中六十日ばかり逗留の內此噂諸所にてせしゆへ駿州の者一人藤八幸助に逢に來り話には右島の穴に先年其者の伯父遠州より千石船にて十八人乘難風に逢ひ其島へ船共打上られ岩の上にて破船に及び詮方なく船板にて圍ひ岩穴を切擴け諸道具を運び右の穴にて廿一年暮し候內籾一俵流れより夫を種として植弘め田地少々拵へ正月に植れば四五月頃米になり後には米も澤山にて茱萸鳥抔は食はず十八人のうち十五人は病死して三人殘り居たる所廿一年目に大坂の富藏と云船頭難風に逢ひ島より助け歸りし也此伯父は殊の外老人ゆへ其島にて歸る事不定なれば島にて定に入候よし右の跡は是なきやと尋ねに兩人其節は心付ねども右の仁の詞にて思ひ合せば定に入たる體の塚もあり右岩穴に書物多く張付あれども兩人とも無筆にて少しよみ書する五郎兵衞は先に死し後に岩穴を見付しゆへ讀事を

得ず駿州の者其書付には重ねて來たる者の爲に島中に暮し方茱萸白鳥穴鳥等磯の貝を食物とする事油は白鳥にて取る事その外委細に書付有れ共無筆にては是非なき事也島にて入定せし者の甥は我也十八人岩穴に住しは大御所樣御時代のよし八丈が島へも行二島物語と云寫本になり右本の内白羽鳥を此者共あほふ鳥と異名を付候由伊豆より八丈島へ三百里八丈より右島へ又三百里伊豆相摸の境より巽の方の沖に當り人語離れし孤島也との話に付不思議はよふ〳〵晴れたるが去にても右十八人の者廿一年が間島にくらし十五人死して三人殘るを思へば五人乘の内兩人生殘り丸四ヶ年の島住居にて此度左市郎に助けられしは命寃加なる事なりとよろこび合しこそ道理なるべし

影の膳

兩人御吟味相すみ兩人別れて藤八は故郷紀州海士郡加茂谷下津浦へ五月三日の夜歸り親子對面の上母の悦び行衞なしになりたる悴六ヶ年ぶりにて拾ひしと限りなき歡び涙に三四日は傍も離れず詠居しとぞ藤八も又優曇華增りのよろこびにて島の話をせし内三年目の日に當りある夜夢に何方もしれず殊の外馳走になり目覺ても腹大きく幸助へ此儀を話せば幸助も同じ夢見て其朝は食事もせず有しが此度母の話に三年目に泣々三回忌の弔らひをし僧を呼び供養せしがかの島へ屆き候かと互ひに話して悦びたり

御代官森久次郎殿屋敷へ召れ一宿して六ヶ年の物語を書寫させ膳にすわりたる一尺計の鰺の燒物は頭より食飯は常體の一口程を十口程に喰給仕の者尋ぬれば久敷米を食せぬゆへ大口にはたべがたく島に居候内は病氣はなし少々の事有ても藥はなし湯さへ呑ぬ仕合せなれば苦にもならず朝夕岩山を駈廻り漫々たる海上を詠めてもし便船もやと眼を配り身内少しも休まる間なく髮月代をせふとも思はず金銀のかしかりはなく色欲の道は絶へ明暮戸締りの苦もなし寒氣は暖ゆへ凌よく暑氣は難澁食事にをわれ何をくへば當らふとの心遣ひもなく見付次第に食雨の降る日は風浪を誘ひ難儀なれば貯へ置たる物を食折々けふは幾日とくりて草臥にころりと臥し誠に鬼ともいふべき姿にて此島には化物もなく天狗もなしよく〳〵の放れ島なれば天狗化物も我々が姿のすさまじき

ゆへ來ぬ物か然し又所の心になり候へば心も替るべきか思ひ出すも恐しく悲しく又嬉しく何國いかなる人の憂目も咄には聞傳へたれ共我と我身の命ある事又ふしぎに存候と此一書は亡兄鳳堂寫し置たるをくだ〳〵しき所は文を略し荒增を出して一話に備るもの也

初午の句合

活々坊の云一座の宗匠は軍中の大將軍商家の番頭の心持にして一座作にほこる時はしづめ一席閑なれば又引立て句をなすべしひとゝせ初午奉納の畵馬に連衆作に作をあらそひし跡へ櫻川が「初午やゆらり〳〵と人通りとかく云出しかば格別きらびやかに出來ばへせし是死活のあしらひ也此一句ばかり聞たる人の何事もなき句也など評じたらんもの其場の差略あり是をおもへば發句ばかり書傳へていにしへ人の句を評せむは覺束なき事ならんかし

俳諧に學問いらず

蓮二曰俳諧は只物の本情にまかせて木（ホンノマヽ）のよろしきに遊ぶ也古式につながれ其粕を舐るまじきやたとへば八卦には離坤兌乾坎艮震巽とあるを易には乾兌離震巽坎艮坤といへばおなじ文字にて走る也走て善も惡きも其時に望ての事なるべし古人の格式は初心の人の爲中品已上の俳諧は吾知りて吾するなれば一字一點の學問も入るべからず學問は階子也はやく登りていらぬとはしるべし下品の內走り過て階子ふみはづしたらんもいとあやうし

西施の顰

吳越春秋に西施は周の末越國の諸暨（シヨキ）といふ地の女にて絕世の美人也越王勾踐の臣下范蠡が計にて西施を吳王夫差に獻夫差その好色に惑て遂に國を傾くるに至るされば西施常に心を病て其眉を顰む其里の醜女ども常に夫の我を外にして西施を譽るを妬ていかなる容貌ぞとひそかに窺見て夫の好所は是なりとそれより心を押へ眉を顰て夫に近付ける程に彌醜して夫はもとより其里人は驚て門戸を閉て外に出ず是天怪の所爲なめりと魂を消けると云り莊子が寓言に棒心とて世の人の德の本をも知らずして威儀を飾人を欺にたとへたり

鷹狩の始

仁德帝の時秋九月依網の長倉の阿汙古異鳥を捕へて

帝に獻じて曰臣毎に網を張鳥を捕ふに未曾て此鳥の類ひを得ず故に是を獻ずと帝百濟國の酒の君を召て鳥を示しての給ふ是何の鳥ぞ酒の君對て曰此鳥多く百濟に有馴てよく人に從ふことを得たり又捷く飛て諸鳥を掠百濟の俗此鳥を號て倶知と云今の世の鷹是也乃酒の君に授て養馴しむいまた幾時ならずして韋緒(アシカハ)に鈴を着て和泉國百舌野の御狩に居出て數多の雉を捕しむ此月甫て鷹井部を定らる故に其所を鷹井村と云とぞ

小納言

草廬云大納言中納言といへば少納言も小なるべき歟と思ひしに明和七寅年夏大旱にて諸國水涸たる時大和高市郡の一向宗の寺に井を堀て墓誌を取出したりそれに小納言伊奈卿とあり然れば昔は小と書たるべし少字も去聲にて讀めば小の意になれりとぞ

天王寺の額

三井寺寺門の記に天王寺の額は慶耀己講勅を奉じて書と見ゆ慶耀は慶暹と云人の弟子慶暹は祭主輔親の息にて歌仙也と同じく草廬の話なるよししかれば世に道風の筆といふ空海也といふも皆誤なるべし

一河の流

一河の流を汲み一樹の蔭に宿ると云事古文類語四の卷に隋の張郎子が詩に汲流一川接彌深屛雨一樹思殊親とあるが出所也鵜飼信興が珍書考の說も是に同じ

燕子花を夏に定

古歌の題集に燕子花を春の末に出し牡丹を首夏の物とすれど今見る所しからずいつも牡丹は春の末にして杜若は四月に唉出萬葉集に橘に郭公をよみ合せし歌の終に天平十六年四月五日に大伴家持卿の詠あり「かきつばた衣にすりつけ ますら雄のきそひがりする月は來にけりきそひがりば藥獵(クスリガリ)とおなじく五月五日なれど萬葉には卯月と五月との程に藥がりつかふる時にとあれば四月五日にあへり今時俳諧者流は杜若を夏とするは連歌の式によるか正に見る所に隨ふが理ありといふべし

初中後の子の日

早春初子の日は小松曳の歌世々の集に有て誰もしりたる事也中の子乙の子を人餘り不知後拾遺集雜四馬內侍の歌詞書も有「けふ中の子とはしらずやとて友達の許なりける人松を結びておこせて侍りければよ

める「誰をけふまつとはいはんかく計忘るゝ中のねたげなるよに又おと子といふはうつぼ物語菊の宴の巻に「かくて后の宮の賀正月二十七日に出くるおと子になんつかうまつれりとあり

反魂香

漢の武帝の時李延年といふ者音律を得て善歌ふ常に侍して君恩を蒙る或時帝の前にて起て舞ふ歌に曰北方に佳人あり絶世にして獨立す一顧れば人の城を傾け再び顧れば人の國を傾く寧知らず傾城と傾國と佳人再得がたしとうたふ武帝歎じての給ふ今善世に豈此の如きの人ありやと平陽公主の言李延年が妹也と武帝の召て見給ふに實に當時類なき美麗にしてしかも善舞曲をなせり是に於て恩寵を得て李夫人と稱せらる親族みな祿を賜りて宮にすゝむ然ども李夫人早く卒しぬ武帝憐て其形を畫に寫して甘泉宮に置給へり方士李少翁と云者よく其神を致といひて九華帳の内に燈燭を照らし酒肉を陳ね反魂香を薰て夜密に武帝に見せしむ煙の中に李夫人の容髣髴として見る武帝いよ〳〵思ひ悲て詩を爲て曰是邪非邪立て望ば偏に何そ姍々としてそ其來ること遲きとの樂府に命絲竹に合せて歌はしめて思ひを慰め給へりとぞ

扇を鳴らす

信實朝臣の今物語に薩摩守忠度某の局によりて扇をたかくつかひけるを内より草葉にすだく虫の音よと云たればつかひ止たりといふ事見ゆ此歌はうつぼの藤原君の卷に「三のみこの御前ちかき松の木に蟬の聲高く鳴折にかく聞へたまふ「かしがまし草葉にかゝる虫の音よわれだにものはいはでこそ思へ今物語にはすだくとかはれるのみ平家盛の頃はうつぼ物語あまねく行れて其歌などもそらに覺へたる人ありければこそ纔に二三句をいふより忠度もさとり給ひけめ

十寸穗の薄

長明の無名抄にますほのすゝきまそをの薄まそうの薄といふこと出てます穗は十寸穗にて其穗の一尺許ある也まそをは眞麻也まそうはますはう也と見ゆ此まそうを蘇芳也といふことそは書誤にてさ也すはうも印本に誤てすわうと書りすほうにてすはの約なれば眞すはう色のむね明白也

仁義を買ふ

戰國の馮煖は才智人に勝れたれど貧乏にて自身のすぎはひ成がたく孟嘗君の食客也素より落魄たる者なれば朋輩も慢て常に麁菜なる食をあたへけりある時馮煖柱に寄添ふて劍を彈じて歌を諷ふて曰長鋏歸來乎食に魚なしと云嘗君是を聞て器量ある者なればかゝる事をも云ならめと客人に具ふる如きの膳部を云付て食せたり頃ありて又長鋏歸來乎出るに車なしと諷ふ朋輩是を聞て奢たる事を云者かなとて笑あへり嘗君は彼才ある者なるべしと思ひ車を與へ乘らしめたり又しばらく有て謠けるは長鋏歸來乎以て家を納る事なしと云聞者興をさまし餘りなる事をいふ者哉此者は貪欲にて足ことを知らぬと惡みけり嘗君は是をも咎めず其母の家に衣食を運せて乏しきことなく養ひたり其後嘗君薛といふ所の民に貸置たる金銀を取收べしと馮煖にあまたの券契を持せて遣したり馮煖出さまに此債共を取聚て歸る時何にても買求る物はなきやと問ふ嘗君の曰何にても我家に寡物あらば買來るべしと云馮煖薛に行て債の者共を呼集め此度嘗君よりの仰にて今迄の債を汝らに賜るぞと券契を悉く燒捨たり民共惡き夢の覺たる思ひをなして悅びあへり斯て馮煖國に歸りて何にても寡ものを買へとの仰にて君の宮中を窺見るに七珍萬寶いづれにつけても乏きことなし只寡ものは仁義のみなりよつて券を燒すてゝ仁義を大分に買て歸り侍ると云嘗君心に入らねども道理にせまりて物をもいはずなりたり其後嘗君齊王より薛の地を賜りて入部したりければ薛の男女老若は街に踞て喜び合事限りなし嘗君此ありさまを見て馮煖にむかひ云けるは其方以前に仁義を買たる驗をば今こそ見つれとて感じけると也

空公行狀の碑

嵯峨の二尊院に空公行狀の碑あり今其碑前に圓光大師御廟前と記せし石燈籠左右に二基を建たれば全く法然上人の塔となれり然るを先年ある人ひそかに此石を紙に摺寫せるを見しにいかにもおぼろげなれど湛の字にて源にはあらず源空は此寺を作りて後やがて師湛空を請じて開山とすれば此塔湛空なるべき事明らけし何者かかく文字を書損せしめ强て法然上人の塔とせるや凡尊貴又德者の墓を謬り傳ふる愚昧の土人の話は論にたらず爰に師弟の碑を紛らはすは點智の浮圖氏の所爲にして誠ににくむべし古佛寺の緣

起なども甚だあやぶむべきもの多し其趣意人に信せしめんとしてかへりて嘲りをまねくもの歎くべし

湛空の和歌

湛空上人はさして歌人の名はなけれど古今著聞集に出たる歌などいとよろしき有湛空上人嵯峨二尊院にて涅槃會を行れける時人々五十二種の供物を備へけるに花の上に立て歌をよみて付けるに西音法師水瓶に櫻を立て送るとて「如月の中のいつかはよはの月入にしあとの闇ぞかなしき返し湛空上人「やみぢをばみだの光にまかせつゝ春の半の月は入にき又一首を添られける「會をてらす光りのもとを尋れば勢至ぼさちのいたゝきの瓶今の世腕をこきて歌よみだてをせる僧衆のよき歌よまんとかまへぬるに似ず折にふれて其思ひを述られて歌ざまの殊勝に調へるは其心術によるべし凡一宗を興し末世を化度せる程の德ある人一向に詩歌のいできぬは少かるべし

泥中に尾を曳く龜

莊子莊は氏名は周字は子休楚國蒙縣の人なり楚王莊子が德を聞て贈物を遣し使者を立て國の宰相に用んとてめされたり莊子は濮水の邊に釣をたれて居たりしが何となく使者に向ひて楚國に神龜あり已に三歳也今此龜を錦に包み笥に入れて廟堂に藏るに此龜死して其骨を留て貴るゝがよからんや又生て泥中に尾を曳て遊ぶがよからんやと問使者聞て夫こそ生て泥中に遊ぶがよからめと云莊子が曰吾もさのごとし官に上りて壽を縮めんより釣をたれて命を延るぞとて使の者を歸しけり又或時莊子魚の水上に浮み豐に泳を見て是こそ魚の樂なれといふを惠子と云友聞て汝は魚にもあらずして魚の樂をいかんして知るやといひければ莊子こたへて汝は又我にもあらずして魚の樂を知りたるやらん我が胸中をいかんして知るらんといひけり

水車

良峯の安世は淳和帝の御弟にて廣才達藝の人也天長六年に勅を奉り諸國の民に敎へて水車を作らしめ農畊の資とせらる是和朝におゐて水車の權輿とぞ

常在法師

成源僧正は連歌を好む癖ありて其坊中の者共皆たしなみければ中間法師(チウゲン)の常在と云あやしの者まで心ありけり法性寺の花の盛に件の常在法師糸櫻の許にイ

み侍りけるを若き女房四五人花見て侍りけるが此法師を見てあれも人並に花見んとて有にやなんど嘲りつぶやき坊此花を一枝折てたびてんやといへりければ此法師うち案じて「山がつはおりこそしらね櫻花さけば春かと思ふばかりぞと云かけたりければ笑ひつる女房どもいらふることなくあきれてぞたてりける

兎波上を走る

博物志に兎は望月にして孕み口中より子を吐といへり八月十五日夜月明らかなる水面を走りて感じて孕む此夜月闇ければ來年兎少也と云又一説に兎は雄の毳を舐りて孕み五月を經て口より子を生ずともいへり

鵞は墨を費す

晋の王義之字は逸少能書の名有常に鵞を愛す爰に山陰に道人あり其許に多くの鵞有義之是を買求んといふ道人の曰老子の著す所の黄庭經を書寫して我にあたへられば鵞を贈んと云義之卽寫して是をあたへ鵞を得て籠に入て歸りたると也杜詩に鵞は義之の墨を費すとあるは是也

流水を枕とす

孫楚は材藝世に秀たる上辯舌殊に能足れり四十餘歳に及べども立身せざれば世を捨て隱居せん事を欲し王濟と云者に向ひて我は當に石に枕し流に漱んといはんとして誤て石に漱ぎ流に枕せんと云へり王濟聞とがめて流は枕にすべからず石は漱べからずと云孫楚が曰流に枕するは世塵に濁りたる耳を洗んと欲す石に漱は不淨の食に染たる齒を礪んと欲すと誠にやさしき答也と晋書にいへり今流石と書て流石と讀すは是也

門に鳳の字を書

世説新語に晋の呂安字は仲悌七賢の中の嵇康と親しみ深く互に路を隔て遠しとせず交りしが或時嵇康の留守に來れり兄の嵇喜家に有て强て內に入れよといへど嵇康他行にては面白からずと立歸る時其門に鳳の字を書して去れり嵇喜是を見て鳳は三百六十禽の長なれば我を重んじて歸りたるならんと悦び後に心を尋ぬれば呂安が心は嵇康や我に比ぶれは嵇喜が材智の拙き事凡鳥の如にて相手に不足也と鳳の字は凡の中に鳥を書たる字なればなり

老の接木

寛永の頃將軍家谷中の邊に御鷹狩有し時御かちにて爰かしこ御過がてに御覽まし〳〵けるが何某院とて眞言寺有覺へず渡御有しに折ふし其時の住僧は早八旬に及んで庭に出てみつわぐみつゝ手づから接木して居けるが御供の人々をくれ奉りて御側に二人三人付奉りしを中々やん事なき御事をば思ひよらねばその儘背き居たりしを坊主何事するぞと仰られしを老僧心にあやしと思ひていとはしたなく接木するよと御いらへ申せしかば御笑ひ有て老僧が年にて今接木したり共其木の大きになる迄の命もしれがたし夫に左樣に心を盡す事不用なるぞと上意ありしかば老僧御身は誰なればかく心なき事を聞ゆる物かなよく思ふて見給へ今此木ども接て置なば後住の代に至りて何れも大きになりぬべし然らば林も茂り寺も黒みなんと我は寺の爲を思ふてする事也あながちに我一代に限るべき事かはといひしを聞し召て老僧が申こそ實も理なれとて御感有けり其程に御供の人々追〳〵來りつゝ御紋の御物ども多くつどひしかば老僧それに心得て大きに恐れて奥へ逃入しを御召出しありて物など賜りけるとなん

肘笠袖笠

顯昭の袖中抄にひぢがさの條有六帖に「妹が門行過かねつひぢがさの雨もふらなんあまがくれせん是は萬葉集に「妹が門行過かねつひさかたの雨もふらぬかそをよしにせんとあるをやわらげたる歌也と云々こは和らげたるにはあらで誤たる成べし又催馬樂に「妹が門せなが門行過かねてやわがゆかばひぢがさの雨もふらなんしでの田長雨舍り笠やどりやどりてまからんしでの田をさ又源氏物語須磨に「風いみじく吹出て空かきくれぬ御稜もしはてず立騷たりひぢ笠雨とふりていとあはたゞしければ皆歸りたまひなんとするに笠も取あへずと云々萬葉の歌を六帖に誤てより催馬樂も本の出所を考へず六帖により源氏物語もまた催馬樂によりて文を成しと覺ゆひぢ笠雨といふ物あるべからずと斷られしは遠の顯昭也綺語抄俊賴の無名抄童蒙抄共に俄に降る雨をいふと引れたり俄にてひぢを笠にするといふ也袖をかづくといふとあるも詞に付て說をなしたるにて肘を笠といふこと心得ぬ事也赤裸にて行人なりとも肘を笠にはなる

べからず袖笠こそことわりなれ凡今の歌よみもいにしへによらず中世已後の說を宗とする人多し顯昭後契冲の復古なかりせば古學は埋れ果なん世の人顯昭の詠歌のなきをあなどり其說に據ある事を考へず聲にのみ吼るはいかにぞや

草庵集

探幽の畵はうはべ輕くしてしかも千斤の力有學ぶ人は其力を得ることあたはず只うはべの輕きと形をのみ寫すゆへに見るにたらず頓阿の草庵集もまさに然り今草庵集に倣ひて歌をよむ人美しきことは美くしくて力なきもの多し頓阿は然らず思ひ至らぬ隈なく心をめぐらして扨爰をと思ふ骨をやすゝと輕くつゞけし物ゆえ味へば限りなき風味出る也正に吾が題を得て思ひ得がたき時に當り此集を見るに誠にかうこそと思ふ常によみ流しては何とも心のとまらぬことにあたりて初て感服せらるゝは其趣意の行屆たるゆへ也と蒿蹊申されし

書空言

伊勢國多氣國司村親卿の撰多氣窓螢（タケマドノホタル）といふ書の中に昔東の京に後明といふ繪かき有久我殿めでたきものに思して當家へ送られき北多氣の別莊に繪書せけるに安藝守清盛勸請の八幡の社の體詞も及ばず書出しぬ是は度會延直が書たる繪の寫なり然るに彼八幡は東向なるに海を後にあてゝ書たれば西向けるやう也いかゞと難じけるにされば繪空ごとゝはかゝるになんすべて繪圖と申にはまさまに書ども唯かく事は必引違へたる例也と申せしをかしき哉かゝる世のことに才賢きをもて此國にとゞまり三十貫の所みそのにてたびぬ故殿の御時の事也と此頃唯生寫しといふこと行はるゝは古義にあらざるにや近來大森宗雲といふ人も只書を書がよしされど書がたければ心の及ぶ限り書に近く眞に遠ざかるべしと其門人に示しけると也古風を知る人といふべしや

千代能が歌

如大尼と云は夢想國師の弟子にて世に傳ふる「しづのめがいたゞく桶の底ぬけて水たまらねば月もやどらずとよみし人也此初五字或は千代能がとも傳ふ是は如大尼の俗たりし時の名也實は自らがといへり夢想の筆記に出たりとその宗徒かたられぬ是にて穩なり

釋迦の法孫

元亨釋書の著者虎關禪師は其父微官なりしかば小僧の時官家の童子達と群遊ぶのついで其父の微官なるを恥かしめんとて各其系譜をいひて此溝をこゆべしと云り皆大中納言の息なりしかば也虎關心得て大聖釋迦佛の法孫師錬と高らかに呼はりて一番に飛越たれば皆いふことなくて止みしとぞ

味噌臭し

近來黃檗竺庵和尙嵯峨桂州和尙に語りて曰唐山に在し時は平生獨參を服用す虛弱の故也しかるに本邦へ來ては味噌汁を喫するが爲に獨參に及ずと味噌の効を稱揚し給ひしと也彼土には味噌なし長崎へ來る唐人が日本人はみそ臭しといふよし又彼地へ漂流せし者居留りて味噌を造り商ひて大に富たりといふ話も聞し也實に珍らしく味も一美なればさもありけんかし

母子の訴へ

京にて銀子三拾貫目持たる者命終る時妻に向ひ我先腹の男子六歲也十五迄は育て十五にならば銀子五百目渡し何國へも商ひに遣はすべし殘る銀子は皆その方の儘にせよと遺言して書物を渡しぬ彼子既に十五になる時右の後家銀を五百目子にやり何國へも出よと云子さりとも難儀なる旨所司代へ申上る母と子を呼出し委細にいわせ聞て其町の年寄共に彼親の行跡はとあれば一同に世に越たる律義者又才覺も有公儀の御用を調べ町の重寶にて御座候へと所司代後家に問給ふ其銀子は元の如くありや中々あり扨は汝が夫日本一の思案者なりしぞかし其故は人の親として子に物の惜しからんや女房にとらするといはずば銀子を皆つかひすつべしと工夫の上にて云置たる也然る間後家にとらすると云し三十貫目をば子にやるべし子に遣はすと云ひし五百目をば後家に渡しそれを以て寺參の香花にあてそちは一圓子に打かゝり心の儘に馳走せられ安々と世をおくれもし子があしらひあしく氣にあはぬ事あらばこちへ知らせよ曲事に行なはんと下知有つれば聞者皆涙を流さぬはなかりき斯て座を立んとするに件の親の從弟たる老人とて書物を一通持て出所司代へ捧て云定めて一度は子と後家と出入あらん事疑なし是を上て申せ後家に云渡したるは始の日付也そちへ書置は日付後也と申せり今仰

出さるゝ御下知を謹んで承らん爲罷出たり親が存知たりし心底と御批判の趣少しも違はずと手を合せ禮して感じ下りたりとぞ

連歌の一直

連歌の席にて一句云出したるに執筆船が近ひ〳〵と云けるをとくと思案して「船でなし中くりあけた木に乘りてと一直しければ一座顔見合せ笑ひ暫しは堪ざりしとぞ

如是院の米

細川幽齋公の姉御前に宮河殿とかやいふて建仁寺の內如是院といふにおはせし事あり長岡越中守殿より大津にて米を百石參らすよしの文を見たまひて其返事に「御普請の役にもたゝぬ此尼が百の石をばいかでひくべきとありければげに理り也と則車にて送り給ひしとぞ

戸津川の湯

前の宮河殿子息雄長老頭痛の治ると聞戸津川へ湯治し給ひし時音づれとて人をつかはし給ふたよりに「御養生の湯入の心しづかなれやとつかはとして上りたまひぞ

座頭の茶挽

大名の扶持受る座頭有茶を挽せられしが呑で見給へば殊の外あらし大に機嫌そこねしに「あらくとも我とがのをとおぼすなよ茶磨に目なしひき手にもなし

三輪の山もと

泉州堺に山本雅樂とて小皷の上手有幽閑法印政所なりし時能ありかの雅樂を招きそちは三輪をうたれよ三輪の山もとゝあるなればと言下に忝なや殊によみて見ればうたなりと申せしはしほらしく聞へけり

藍染川

旅人在所の者に此河をば何とか云藍染川とこたふさらば是を染てたべとて手拭をさし出す則受取て水に入ひろげ渡す何とも色はつかぬのいや水色にそまり候はゝと云し

煙草一錢

煙草のひろまりしは色々の書に記して見へたり予が父弱年の頃高麗橋にて唐人の裝束したる商人竹のきせるにて一服一錢宛にて人にのませたるよし常に語りぬと八水隨筆に見へ又荻原泉阿彌の話に園殿下向

の節殿中へ金入のたば粉入もたれしが甚賤しく見へしよし左も有べきか近き頃は大名も更紗袋にして持りのまで叶わぬものならば奉書などに包たるが貴人は雅なるべき也

金の臺子

勢州阿野矦に金の臺子有世に珍寶とす或時此釜の蓋失たり色々詮議すれ共不出不得止事君侯に告奉る然らば別に補へとなり其時細工人を集めて云付しかむくの金にすれば其物入多し銅にて作り金を着する時は格別心安し其段又君矦に申す矦是をゆるさず元の如く無垢にすべし此以後失間敷物にあらず其時金にあらずんば今迄金の器といはれし事僞になる然れば末代什器に瑕を付るものなりと宣ふ群臣感じて千金を出して其器を補ひしと也

妻敵討

北尾貞齋物語にむかし松平伊豆守殿仙臺陸奥守殿へ浪人一人御頼にて三百石に呼出されし也此者何ぞ藝術ありやと伊豆守殿へ尋られしに伊豆守殿御答に家柄拙からぬ者にて相應の御用は可成にも相務可申候へども藝は申立候樣なる事御座なく候然しながら長く召つかはれ候ても妻敵打の御暇など願候やうなる者にては無之候よし仰遣はされし由一段かはりたる御答のよし家中にて沙汰しけるとなり

聖人賢人

天野丈右衞門孟子を講じその上にて門人へ各も隨分學問を精出し聖人迄はなりがたき事なれば何卒賢人になられよ予なども此年迄いまだ君子にも至らず併一生には君子迄には至るべし各は弱年の人々なれば出精次第にて賢人にならるべしといはれければ各拜謝して歸りしと也

儒士の孝行

或儒士其母に仕へて孝を盡すと思へ共猶母の意覺束なしいかにおもひ給らんしらまほしとものへ行まねして床下に隱れて伺ひしに婢とゝもに物語らひて今は某は何國迄行つらんけふは一日物堅からず心長閑也といへりしを聞て始て心付是より仕へのやうを改めしと也萬につきて此心得有べき事也

龜田窮樂

龜田窮樂は京の鍛冶職也業に倦て是を去り市中の隱者となり書を善くすといへども龍墨龍筆を持てあた

り合に書がゆへ嬰兒の書習ひの如しされども筆蹟の自在なる事は云べからず彼書は何れを見ても大方龍紙薄墨なり常に酒を好みて門生謝物を送れば悦びず酒を贈れば大に喜んで是を受る寒暖の服も垢付破れて門生より取賄自今は都て家事を知らず門生の贈れる謝物を封の儘に溜置て際々に上り口へ並べ置掛取共來りて封を切夫々に秤にて掛取歸る米代とてもしか也封銀盡たる跡へ來る人には最早なし重ねては早く來給へと斷る商人共皆合點して聊滯る事なし常に門生或はしるべの人來れば手づから酒瓶を携出て冷酒にて饗ず器あるに任せてむさき事類ひなし煙草盆の引出しより埃まぶれの柚子を出し机上にて自分刻み客へ出す來る人いぶせくも是を肴にして酒を飲或所へ祭に呼れ行店先にて快く酒を酌かはし居けるを乞食門に立て浦山しげに詠め居たり窮樂是を見て我前にある盃をかの乞食にさす乞食いなみ憚りて酒を面桶へ受んとすさにては盃事にあらず此盃にてのむべしと云ば乞食此上はとく盃を戴ひて彼是おさへ抔して餘念なし返盃の時乞食盃洗はんとするを止めて其儘それにて自分快く飲で次へ廻す列座の客大にあぐみ困りしとかや斯生涯安々樂しみて終りぬ隱君子といわんも恥ざるべし

西澤文庫 皇都午睡二編中の巻終

西澤文庫 皇都午睡二編下の巻

目次

一奢侈の咎
一薪の能
一狐瓜を喰ふ
一佐川田昌俊（苔の清水、筑間祭）
一一枚起請
一名人と功者
一松柏の節を顯す
一渡邊庄太夫
一芝泉雜記
一復讐の落首
一昭君の額
一碁打の言
一九念而壁
一宰予晝寢
一守武眞筆の極
一木賊苅
一堀池權兵衞
一逆木柱
一念佛無間
一故人の句に似
一良雄の放蕩
一赤穗順從錄
一介石記の一話
一追悼の詩
一義士筐の扇
一渡邊綱の贊
一筆道の論
一妓女勝山
一香の物
一比叡の山ぶみ
一座禪に妄想
一松茸山
一此木戸の錠
一松の雪
一乞食女の歌
一しやの〳〵衣
一池上意三
一應聲蟲
一四つ子を産
一十一屋の妻
一非人の詠歌
一竪題横題
一曾呂利の狂歌
一信綱三仁政
一角觝の句
一我に飽
一句より心を聞け
一鎌倉の初鰹
一泰時の無欲
一小野の於通
一鹿笛
一丸山權太左衞門
一大廻し三段切
一了然禪尼
一蛙の聲を止む
一木村重成
一金毘羅の神馬
一金蘭齋
一異形の觀場
一梅心の辭世
一五字の題目
一熊澤の和歌
一滑稽頓作
一井上の詼諧（玉の響）
一世を覆ふ句
一俳席の心得
一尊氏の和歌
一明慧上人
一畠山重忠

一藤房遁世　一正成韓信を許す

西澤文庫 皇都午睡二編下の巻

西澤綺語堂李叟著

奢侈の咎

元祿の頃京に中村某なる者奢侈に過て官の御咎を蒙り捉はれて東へ下る時大津にて宿りたる夜近き山に鹿の鳴をきゝて「寐ながらは是も奢りか鹿の聲過奢者の罪を得て懲たる心ばへあはれ也亦其後浪華の巽何某といふ者同じく過奢にて召捕れ東へ趣く道にて「笑ふものわらはれてみよ花の旅といふ句をしたり誠に笑ふもの此まねは及ぶべからねど己が罪を省みざる志大におとれりとある人併せて許せしは理りに覺へしが此巽何某は事果て後京にすみて導引をせしが病人の按腹する間物陰にて妾に箏を彈しむ按腹は心を靜めてなすべければといへりとぞ是は唐土にて蘇合樂を吹間に煉る藥を蘇合圓といへる故事より思ひよれるよし生涯過奢の意止ざりしとぞ

木賊苅

中興梅若太夫と聞へしは四座の外にはあれど觀金に名を爭ひ猿樂に精神を加へける名譽なりしが或時信州を領し給ふ侯家にて家督の嘉儀に能有て一門衆家中は申に及ばず領分の民に迄許して見せしめ給ふ其日梅若は木賊刈舞ふべきよし上手の面白き事を舞ふなれば第一の壯觀と貴賤息を凝して見物するにいざ〳〵木賊刈ふよと鎌もて其摸樣をなす時かの見物のうちより何者やらん下手なる木賊の刈樣かなと云て高らかに笑ひぬ席の奉行鳴高しと制し領知方の役人はいとゞけいめいし誰が云しとも知ざりき翌日大守それ〳〵の役人に命ぜられしは昨日能を譏たる事梅若太夫へ對し甚失禮也嚴に詮議せば其者も知るべけれど元來下賤の者なれば場所をも辨へぬ也咎を行なはんも家督祝儀の故障なればと定式の謝禮の使者へ口上を添へ領分の百姓等舊例にて見物申付候事なれば田舍ものゝ無骨にて失禮の詞奇怪の至に候努々心に留られ候はでと慇懃に演られければ梅若愼んで謝義を拜答し偖かの能を譏り候者は御威光を以て御穿鑿下されさし越給り候樣唯今參上の上相願べき存念の處御使者を幸に啓し奉る也と申せしかば使者其旨

を復命す大守も止事を得ず下司に命有ければ陳ずる樣もなく某郡某村何某と云老百性と詳に尋出し急ぎ梅若が許へ人を副て送りぬ彼老百性は思慮もなく云出ぬる事殃となりいかなる憂目や見ると色を失ひ胸轟かしぬ頓て太夫出て昨日木賊刈を嘲りしは汝にこそと云に唯恐入て頭を地に付返答もせず太夫大に憫何の恐るゝ事やある我師傳を得て所作をなすといへども未誠の木賊を刈らず下手也と見し事謂有べしいかに刈が上手ぞと問しかば彼者初て心地つき扨も思ひもよらぬ仰事かな我は信濃の民にて名にあふ園原山の麓に生立若きより木賊を刈て業とし侍べるがこたび守の殿の御祝義に召れて御能とやらん拜み奉れども仰の忝きにいかなる事かと見侍れば身に舊く仕馴たる木賊苅の舞になんある扨は心ゆく見物也と見侍りしに木賊刈ふと鎌を右の手に持て左へ〳〵と刈らせらるゝは餘りに拙なき御事にこそ尋常の草こそかくはかれ木賊をかく刈ときは皆半より上は裂上て眞帆にはかれぬ也鎌を逆手に持て左より右へ掻切やうに刈候こそ木賊の刈やうなれと思ふが何心なく申出し事の恐多さよと猶懇々述ければ梅若大に感じ誠にかの老圃に問へとは此事也一時の師にこそとて酒肴をもてなし物とらせなどし附副し人にも厚謝詞を述て歸しぬ夫よりして渠が家にては二鎌は昔の如く刈後の一鎌を逆手に刈る業を入れるとこそ傳へぬ

薪の能

梅若太夫其後南都薪の能舞に登りて一夕西大寺まで用有まゝ行て歸る道夜に入夕月夜のほのかながらたどり〳〵も其業に心を凝機位を考行先に年いと老たる乞丐姿の杖にすがりてたどり行に頓て追付ぬ梅若歩を靜めて跡より從ひ渠が容貌足の運び杖の突さま心をとめて見とめ二三町行しが尼が辻にて渠は南の方へ行んとしければしばしと呼とめ年老て嘸苦しくこそ物とらせんとて印籠の内より方金一顆取出して與へければ婆忝しと手に請しがいやとよ是は返し奉るべし我等が屬にてかゝる貴き寶もちては罪うる事に侍る殿にもいかに豊なりとて程もなき事ぞ只一二の鵝目たうべよと云しにいやとよ然らず汝我に於て一時の師なれは其恩を謝する也と云に婆頭を振我殿の師たる事を覺へずと答ふ左にあらば語り聞すべし我は梅若といふ能太夫也今年薪の能に檜垣

をつとむる筈にて旦暮其事のみ工夫する所汝が年老屈りて杖つき行さまかの檜垣の老女の能を舞んに感ずる所有汝はしらずとも我に得る事有は師に非や速に謝物を請よと聞へければ婆いよ〳〵頭打振その謝物ならばいよ〳〵請難し殿の猿樂覺束なかれ今婆が有さまにて工夫なしたまひ老女の能の妙は得給ふともさあらば鬼神の能は何を見て其玄微に至りたもふべき其御心よりは何事も枝葉にかゝはりて謠曲の文章に時代違を作り牽強附會の俗説どもを胸わるく思して彼の是のと改めんの計も出來ぬべし迚も是は慰事にて事實に用ゆべき物にも非ず白樂天を唐音にては諷はれぬ物から只家傳の節墨譜を深く修練し世々の舞の手の優なるを慕ひ給ふにはしかざるべし習ひ學べき師傳の書いくらも有べきを置て遠く外を需め給ふべからず歌舞妓物眞似する者こそ賤さまを其儘に摸すをもて譽とすなれ貴人高位の慰に成べき爲の能なれば卑き乞丐のさまを見寫しになさばさこそ見苦しかるべし我はさまこそ賤しけれ心は殿に耻べうも候はずと流るゝ如く逃けるに梅若大に閉口し思はず地上に頭を低て良涙を拂しが去にても如何なる人ぞと問まほしく仰て見ればいつち行けん姿も見へず失ぬる事こそ不思議なれ

堀池權兵衛

先年或人京寺町を北へ上る時一老人袴をつけ杖を突て先へ行なるさま樣體見ごとに寬にして威ある貴人かと思へば隨侍の者なしされども平常の人とはかつて思はれずふしぎにも追付て面を見んとせしが下御靈の社地へ入てぬかづくさまいよ〳〵唯ならずさて傍より窺ひ面を擧しを見しが能太夫にて其頃名人の聞へ高き堀池權兵衛にて有しと也塘雨の筆記に觀世太夫が切幕をきりて出し所を見しに其氣滿て一身の固すこしも透間なく容易立向ひがたく思はず聲をかけて褒しと柳生但馬守殿仰られしとかけるも同日の談也此伎は體を守り煉る事なれば名譽の人に置ては自然に勇にも見ゆるはさること也茶事を翫ぶ人蹴鞠を弄ぶ人も又氣を納め體を固ることゝかや書をよくするも亦然るべきか氣より體、體より腕に及ぶべし

狐瓜を食ふ

東都の御瓜畠狐來りて瓜を取喰ひければ吏大に迷惑

し吉川惟足に祈りて給はれとたのみしに惟足夫程の事にも及ばじとて何やらん書付て與へられしを其畠に建置しかば其夜よりとらざりしと是は「おのが名の作りを喰ふ狐かなといふ發句なりしとぞ此句は宗祇法師の句なりと以前よみたる書に有けり

逆木柱

京三條繩手の伊勢屋と云元結を商ふ者の家の造作せしより病者多く出きしかば卜者をたのみて筮させしに是は逆木柱の祟也といふ然れども其柱たやすく取かへがたかりしかば祈禱せんやと云あへる時或人吾祝ふべしとて「伊勢屋とは元ゆい一の家なればさかき柱も何か苦しきといへりしに不思議と是よりことなくなりしとぞ商賣の元結に榊まで取合せしは面白し

塘雨云逆木柱といふことは元來巫祝のいふことにて新に家造する時など木を逆につかふことはかつてなし古家の建直しに本末の知れがたき木あれば世に安部晴明の判といふ五行〆かく木に書て用る法也是本末始終なきよしの咒術也と古き工匠の說とかや

佐川田昌俊（吾の清水、筑間祭）

城州淀の城士佐川田昌俊は和歌の癖有て常に近衞三藐院殿を慕ひ奉り公も渠が風流を憐み玉ふ或時昌俊土産の一尾を奉るとて「折よくはまいらせたまへ二つ文字牛の角もじ奉る也とよみて添たれば公より魚の名のそれにはあらで翌のひるちと二つもじ牛の角文字と御返し給りけるも並々ならぬ御顧なるべし一年待花の題にて「芳野山花さく頃の朝な〳〵心にかゝる峯の白雲とよみしは古に恥ざる秀逸也とて口々に誦し筆ごとに寫し洛陽是が爲に紙の價を貴くすると云計也高く雲の上迄聞え叡感有て辱くも宸筆に其歌を扇の端に遊ばされたるを更衣達に給りしが淀の城主に緣有し女官の申請て送られたるを城主も悦び畏り給ひ昌俊を呼出てかゝる冥加なる事の侍れば汝が家の寶にせよとて賜りぬるを昌俊頂戴して涙を流し言語をもて申べき限りにあらずと頓て其席を退きしが私宅にも歸らず出行てその跡を闇しぬ城主をはじめ職々の役者親類知音に至る迄野山を分て索しかども終に在家をしらず和歌に執せるものなれば功成名遂て退の本意にて遁世ばしせし物なるべきと是に付ても風雅の名近國に響て賞歎せしとぞ聞へし此

遙に後或僧吉野の山踏せんと六田山口より分登り發心門をばいつしか跡に見なし御船山藏王堂を拜し猿の尾鷲の尾の名も珍らしく椿山躑躅の岡の時に逢たる所々も見廻りぬ彼匪位上人の汲給ひし菩清水は是にやなど尋る傍にかたちばかり結びたる草の庵ありしばし疲をも休めんと立寄れは主は七旬ばかりの老翁の頭は花の雪を欺きたるが出合てこなたへと呼入ぬ浮世に遠き此山の奥と云殊に此清水の下に住給ふ御心のうちさこそ濁なき事と感じければいやとよさにも侍らね共草木は人のさがをいはねばと住つきぬる也など何くれと語りあひ春ながら山は寒しと詠しに違はずと眞柴折くべて共に手さし伸て心置なき桑門同士の草鞋のまゝながら此山の昔物語に哀多く花に名高き事共云人麿が目に雪と見し古より代々の言葉の花さへ數々なる近年佐川田某が朝な〳〵なん花の色香を增ぬるよし都鄙もてはやし侍りしが客僧には何とか思ひ給ふらん此歌は定家卿の小倉山しぐるゝ頃の朝な〳〵を花によみ替たるに非や尤歌の等類とならぬとは都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散しく白河の關と賴政卿の詠るは能因が霞とともに立出でとよみし等類に非るよし俊惠法師も肯ひ歌合の判者も其沙汰なくて勝に成けるとかや佐川田氏の歌も心にかゝる峯の白雲とよめるわたり全く等類はまぬがれたるとは見へ侍れど古人の糟粕を免れざるべし然るに近世豪傑の歌人な〳〵唯範摹にたがへずよみ出るを專要とし殊に定家卿をもて古今獨歩の先達と尊信するより彼時雨るゝ頃の歌の體を摹せるを咸く感じて歌主の氣骨を賞美せず剩天聽に達して叡感の上はかけても譏べき事に非ざれども和泉式部がくらきより闇き道にぞ入ぬべしとよみしは巧なれども經文の詞を其儘につゞけたれば企も及ぶべしひまこそなけれ蘆の八重ぶきとよみしこそ盡く腹心よりよみ出たれば遙に增るべからむと古人は評し侍りぬれ是しかしながら歌道の衰微にして我人歎くべき事なるを是を事とし給ふ人々の輕忽にし給ふのみならず只和歌の事は堂上の家にあらざれば玄微に至りがたしと倣給ひ地下を賤んずる事は何ぞや夫堂上地下とは其もと職掌に依てわかるゝ所也中古以前百官その實ある世には其職殿上に侍すべき侍從內記などは高官に非れども必昇殿式部以下七省卿の如きは高官と

いへども故有て免されざれば昇殿せず昇るもの貴にあらず昇らざるもの必しも卑に非ず譬ば當時武家の奥向の役人との差別の如きのみ然るに末世に至つて昇殿せる人の子は追々昇殿す是を堂上の家とし昇殿せざる人の子はいつ迄も昇殿せずして是を地下の家とし其堂上より地下をみる事我臣僕の如くするより和歌の風も賤んずる事人丸赤人を何者と思ひ躬恒忠岑が官をしらざるや又和歌は上品なる藝ゆへ無位無官の人の野卑なる肺肝よりは出がたしといはゝ花に鳴鶯水にすむ蛙の聲をきけばいきとしいけるものいづれか歌をよまざりけると書る貫之が詞も妄語なるべし翁が嘗て思ふは佐川田氏かの吉野山の歌骨髄の詠には非るべし然るに叡感をかたじけなふして是に隋ひ奉れば道の衰を顯わすそれをことわらんとすれば勅に背く爰を思ひ歎て國に跡をくらませしものならんと語るうち鐘の御嶽のならん入相の聲聞ゆるに驚て又こそと契りて歸りぬ後都にて人にかたるに佐川田昌俊こそ吉野の奥に庵結びて住と人の云なれもし自ら餘所事のやうに語出たる身の上にやありけん其後尋ねんよすがなくて絶ぬる事こそ遺恨なれと聞へしも又人傳のものがたり也烏酔の曰俳諧の附句は次の句主の爲によきやうに心がくべしたとはゝ鞠のあしらい成べし猶さしあひ去嫌の多き物ありかの近江の筑間祭などいふ季は夏にして神祇也戀也名所也地名也句に依ては人倫傍などのさしあひ有むざと遣ふまじき季也と申されしは尤なる事也

一枚起請

書林何某煩らひて心地死すべく覺しに菩提所の和尚を請じ末期の安心を進むるあらましにて懇ろに後生の大事を述られけり何某むつかしき男にて有ければおもき枕をあげ樣々のおしめし有難く存候也ひとつ御尋ね申度事の候は皆死候跡にて野送りの節御引導と申事有定て能所へ參る事を御敎下さるゝ事にて候半んが折角仰聞られても其時は息たへ耳もなし生たる人のみ承り候あわれお情には只今仰下されたしと願ふ和尚すつくとたちて佛前にありける法然上人の一枚起請をとりよみ聞せ是有難き所へゆく道中記也と申さる病人大に悟り扨々結構なる道中記にてこそ候へ有難し〳〵と息の限り念佛し往生をとげゝるこそ是書林に對して題のうごかぬ所なるべし

念佛無間

河州の家中望月與市郎は代々日蓮宗にて殊に母は堅固の信者也江戸谷中に歸依の上人より末期におよび候時決定往生の一句傳へ申べしと常に云れしゆへ臨終の時上人を招きければ上人の曰それ一句といふは念佛を眞實心に申たまへ大切の念佛を淨土宗は疎略に申ゆへ念佛無間とはいふ也決定して申せば往生は疑ひなしとすゝめられし時病人子息をよび我此年まで日蓮宗のつとめを誠と思ひし悔しさよ今既に死門に望んで俄に彌陀如來をたのむとも何條御惠あらん自らこそかくはありとも汝らは早く淨土宗になれ上人も今はいらず疾歸り給へ情なくたぶらかされし悲しさよとさん〴〵に云れて早々歸りし跡にて深川靈巖寺の和尙を招待しければ一念十念佛來迎の御勸化にて一向に念佛し正念に往生を遂られしと也與市郎早速宗旨を改侍りければ河州にて傍輩八人ともに淨智寺といふ淨土宗の旦那となりしと也

名人と功者

良能曰初心の修行はいかにも無分別につよきと思ふ程の句をする人上手名人の場へも至るべし初からおとなしく姿情調ひ侍る人は功者と云中途にて終るべしと細川公の耳底記にもしるさせ給へり都ての藝能みなかく有べし

故人の句に似

舊國曰發句を案ずるに心にうかび我に珍らしく認見るに思はず故人の趣向におなじ樣なる句の出る物也是兼て聞感じ心裏にのこれる者か又は案其境に行合ふ物か故人の句に髣髴たる有皆好の道よりいづる物にして初心惡功の入たる人の他の趣向を盜みて一二字を入かゆる事などゝは混ずべからずとは古雪中庵の詞にて我近頃「後してや月の面も痩女（八重が句に似たり）「飯蛸や朝紫のほとしほり（巴人が句に似たり）「水鳥の頭並べて旭かな（布舟が句なり）猶去秋句「ぼた餅や小豆のかたに秋の風と案じて我もおかしく人も珍らしと申ぬ其後ふと江戸の春來が東風流といへる集中に附合の句「ぼたもちはあづきのかたに秋の風と有しに驚句帳を脫したり故人の句に作者の違へるもまゝあり斯樣の事にや有けむかし然れども常々に俳書を見て人の句をひらふ者と故人今人の句に同案の句をなすものとは一概に心得べからず人こそしるらめ我句の事を云にはあら

ず世情のあらまし述るもの也

松柏の節を顯す

ある人曰赤穗の政務は大野氏上席にして時を得て萬をはからひし程に民其聚斂に堪ず然るに事起りて城を除せらるゝに及びしかば民大に喜び餅など搗て賑はひしに大石氏出て事を謀り近來不時に借とられし金銀など皆それ〳〵に返辨せられしかば大に驚きて此城中に斯樣なはからひする人もありしにやと面を改めしとかや是迄大石氏は一向用ひられず一とせの間には六七度もさしひかへなどの罪を蒙りしと也凡世に人なきにはあらず用ひる人なければ千里の駿馬も櫪に伏て終るを大石氏は雪霜の艱にあひて松柏の節を顯はせる成べし

良雄の放蕩

良雄在京中の所行は人皆爪彈をする計にて或智ある人も復讐の後すら評して彼は餘りに人に誹謗せられて其言譯に事を發せし也とさへ言ひしと也かく計ならずは敵方に油斷すべしや誚りによりてます〳〵其謀の深かりしを感ず又或人云山鹿甚五左衞門久治官の疑ひを蒙る事ありて赤穗に蟄してありしかば良雄是に付て儒學軍學をも學びしと也さもあらんかし

渡邊庄太夫

良雄或日伏見撞木町遊所にて酩酊に及び歸りがけ箱屋町の溝の端にて醉倒れ前後もしらず打臥たり此日細川越中矦の家中に渡邊庄太夫と云人主人越中矦公退に依て伏見の驛に御着の旨を京都所司代へ御届の爲參られ歸るさ夜に入二更の頃此箱屋町を通られかの良雄を見られしに人體よき者ながら町中に打轉がり傍(アタリ)も其身も反吐だらけとなり前後もしらず打臥たるに惘果詠居たるに饂飩屋來しゆへいかなる者ぞと問ふにうどん賣答て此侍は山科の御隱居にて撞木町の御歸りと見へ候則内藏之助殿と申庄太夫良雄が面へ唾吐かけて云其方事は赤穗の執權職として大錄を戴き乍主人の生害剩へ我國斷絶に及ぶ事いかゝ心得おるや此方事は細川家にて渡邊庄太夫六百石頂戴し數ならぬ小身者といへども恩義に置ては片時も忘るゝ事なし夫に何ぞや復讐の心もなくかく放蕩に遊所にふけり亂酒酩酊に及び大道に打臥居る事言語同斷の人畜と詈り〳〵歸りぬ扨同年十二月十四日赤穗の義士良雄を始四十六士吉良の舘へ打入本望遂し後右

の四十六士を四家の大名へお預ヶ仰付られ中にも細川家は大家たるに依て内藏之助を始十七人お預也則姓名の書付を御老中より渡さる越中矦畏り早々下城有て家來中召集られ甚もつて御稱談有て後用人渡邊庄太夫に仰付らるゝは此度預る所の義士は實に忠臣の鏡たる勇士なれば我家の面目也去によつて其方受取に參り候はゝ表向は格別受取候はゝ隨分大切に敬ひ麁略有べからずと吳々仰付られ姓名書を渡さる依て庄太夫是を請取披見するにその筆頭は大石内藏之助と有庄太夫はつと吐息つきながら畏り奉り次へ立しが其儘屋敷へ立歸り切腹して相果しと也評に曰渡邊切腹の事主人の祿を戴きながら主人の用にも立ずして相果る事如何也と答て曰細川は代々の名家なれば渡邊氏などは九牛が一毛にてとにかく主家の名を穢すまじとの爲也と云々内藏之助は腰より下の短かき人にて祇園の社下河原邊毎度通られし時赤穗の家老〳〵と人皆ゆびさして笑ひしと也

赤穗順從錄

右良雄復讐の書は數書有て渡邊の一事は遠幽雜記にて見る所也予東都にて茅場町藥師の當主より古き書卷の寫しをかり一見せし事有復讐のせつ芝表へ引とりの圖菱川師宣とか英一蝶とかの書しを寫せし物と見へ至て古風なる物にて有し所々破れたる所もありし亦赤穗順從錄とて廿五卷の寫本細川家にての聞書をよせし物とて見しが内侍所四十卷とは余程珍らしき事有て萱野三平は大津にて切腹し主稅切腹の刻限薄暮に至つて死骸を改めず葬りと云など他の書に見及ばぬ所也

芝泉雜記

亦芝泉雜記と外題せる合卷の古寫本一冊花笠文京持來りて見しに泉岳寺の當主隣寺の住持と碁を圍み居し所へ復讐引とり住持驚きて用に立ず碁の朋友左仲（姓氏忘れて覺へずといへる浪人と隣寺（是も名忘れたり）の住持との計らひにて寺中へ引とり門をかためて粥を焚て饗すなど有跡は其席にて左仲が手柄働の次第を聞書にせし物なり其文甚麁にしていかにも聞書と思はるゝ所もまゝ有けり

介石記の一話

亦一書介石記といへる五冊の寫本を見たり此中を讀うち思わず涙を落したる一話を爰に出す暗記なれば

委細を云ず良雄始十七人の者細川侯に預られし其もてなし甚嚴重にして朝飯後風呂に入れ肌の帶手拭は毎日十七宛出る湯より上れば晝飯其後酒始り日々料理山海の珍味を賜る碁盤將棊盤など出て近習同朋相手に出詩歌連俳などに樂しむ輩には料紙硯など結搆なるを出す良雄深く辭して何にまれ望の物は銘々乞ふ時に賜り餘計の費は達て辭退に及ぶ程なく其年も暮て大晦日の夜に至る夜陰に至つて除夜の湯もすめばやがて廣蓋に上着下着繻白絆紋付の上下足袋まで揃へて十七人の銘々に出し一陽來復の時なれば目出度新年を迎ふる樣大守より此品を出さるゝ各々新に着かへ候へと有時良雄太守の厚き情を感じ是を辭せず近習に問て曰太守は今どの間に御座有て我々が間よりどの方角に當り候ぞや近習答て今宵は彼所に御座あれば此方角としめす良雄椽先に出て手水に清め太守の方にひれふして廣蓋を捧げ厚く禮をのぶる事太守に向ふて云が如し是を見て十六人の輩いち〳〵手水に手を清め良雄のなせる如く一禮をのべ靜に新衣を着かへて春を迎ふる所をよみて嗚呼誠の義士なるかなと思わず兩眼に涙浮みて暫く止ず是其實情に感じ落涙せしなり何事のおわしますかわと圓位法師の伊勢宮に詣て感涙せしも皆是情に感じて詠る也此書に文も飾らず有のまゝにしるせるを讀に涙を催すは情に通ずるゆへ也かへす〴〵も此一話は年月立ても忘れず又もや涙を催しながら爰に出す事しかり

復讐の落首

淺野遺臣本所の屋舖へ討入しは元祿十五年極月十四日の夜也十五日の朝本意を達し芝泉岳寺へ引取けるが御公儀にても十五十六十七日は御淸なれば言上もなかりつるが十八日に聞しめされて筋目よくいひ付よとの上意なりしとかや武家はいふに及ばず寺院在家ともおしなべて吉良殿の好みある者迄も扨々氣味よき事しけるぞや誠に武士の爲によき氣付など思ひ〳〵の評議評定此人の行すへかくこそあらまほしけれと唇をかへさぬはなかりけり落首「あいたいといふと其儘取にけりを取上なき巳の年の首午の年の春の仰出しに金銀の公事沙汰去る巳の年迄の事は御取上なきまゝ相對してとるべしと有ければ夫によそへけり又「憚りておきに甲斐ある大石は細川水のとま

りなるらん句のうちに隱岐甲斐細川水野をよみ入て御預けの大名衆へ下さるゝ事もありなんとかや誠に心ふかし又八景に作りて少將の夜の頸佐平の落涙遠方の批判泉岳寺の番僧など口ずさみ或は本所實盛と題して謠其外さま〴〵口にまかせし狂句ども陋に喧くしてなおかしけれど事繁ければ爰にもらしつ翌年二月四日切腹仰付られ追善の詩歌數多の中

追悼の詩

儒林林家某氏去歲季冬故少府監赤穗城主淺野長矩舊臣大石内藏之助等四十六人異體同志報讐趨義今茲仲春初四日官裁不令各處死刑其志雖遂其性不全天乎命乎將時運乎難堪哀情收淚而作

關門突入蔑荆卿　易水風寒壯士情
炭啞形衰追豫讓　薤歌淚滴挽田橫
精誠貫日死何悔　義氣拔山生太輕
四十六人齊伏及　上天無意佐忠貞

亦句頭に大石良雄忠節名士といふ八字を冠案して四十六人の義臣等を追悼す叢林沙門亡名

大事一謀如響應　石堅盟會烈夫心
良籌運帳勝千里　雄力拔山擲万尋
忠仰君恩曾撫劒　節臨自殺也彈琴
名碑洲六何當朽　士女口傳遺恨深

號を句頭に冠案して淺野遺臣等を挽する韻をつぐ

大勳煌々新臣道　石針豈刺鐵石心
良讓在懷爲殿最　雄雌鳴書勇追尋
忠宣伏劒不顧己　節應辭明預破琴
名翼四飛無處隱　士材盡奥又窮深

此義臣等先君におくれしより此かた野に明し武府に集り故郷に散じ心をつくし身を碎きし百千の謀いひもつきじ

昭君の額

大石良雄は都山科の邊に蟄居して「ものゝふのうきみのはての置所されどもてらす秋の夜の月など詠せしも日數へて冬も半の頃次男大三郎が八才許なるを伴ひて洛中の寺社など見廻り今宵は紫野のあたりに知人侍れば宿してなど思へば心閑に申の刻過る頃北野に至り神前に額突扨繪馬堂にイて佐々木梶原が川渡し時致義秀が草摺引など指さして大三郎に見せしめ古への兵はかくこそ勇て世に名を知らるゝなど敎へ聞へけるに默頭てかたへの繪馬を指さしあの唐の

女の琵琶を抱きて馬に乗り泣しめるはいかなる人ぞと問しかば是は唐土の王昭君と云し美人なりといへばそれは何ゆへかく馬にのり泣ながら何國へ行と問まゝに是は昔漢の帝へ單于といふ國の王使を遣して帝には三千の后を具し給ふよし其内を一人給らば好を結び長く貢を奉り命に背くまじと申せしに彼國は兵強き所なれば其詞仇とならば天下の亂となるべきまゝ頓て夫に事極りぬ扨三千の后の内つど〳〵帝も見覺へ給わず何れを何れと撰びがたければ畫工に仰て各その顔容を書寫させ中に就て醜からんを彼國へ遣わされんとの詔なりければ是を聞て後宮の后達我も〳〵と彼畫工に贈物して賄賂ける中に昭君といへるは容貌衆に勝れたりければ虎を畫て狗に類する筆にても劣るべきならねば其姿を憑て賄賂をおくらざりしに人の心は昔も今も變らず黄金多からざれば交り深からぬ習ひにて昭君が顔ばせをいと醜く書寫せり帝其繪どもを御覽ずるに論ずるにも及ばず昭君に極りぬかくて帝昭君を召て見給ふに國色勝れたりしかば取替んと思しかど信を外國に失わん事を憚み給ひ終に昭君を彼國につかわされけりと也昭君はもとより琵琶の妙手なりしかば都の裏に抱き行馬上にも調べける其樂を王昭君と號て今聞人まで涙を流す事となれりされば詩にも昭君若贈黄金賂定是終身奉君王と作れりと語る時後の方に嘆びたる聲して口惜き詩の誦しやうかなといふて過るをいかなる人かと咎れば老たる宮法師の御灯の油をさして本社の方へ行にぞ有けるいといぶかしく昔或人此社へ詣でゝ東行南行雲渺々二月三月日遲々たりと誦せしかば内陣より妙なる御聲してとさまにゆきかうさまにゆき雲はる〳〵如月彌生日うら〳〵とこそ吟ずべきにと宣ひしとぞ若や其たぐひに神の告玉へるにやと心にかゝれば徐に行て本社に至り宮守る僧の宿直所をさし覗けば夕暮近く參詣も絶へ外の宮司なども歸りてかの老法師のみ桐火桶まさぐりゐたるに幸と立寄て爰なる童のいとふ勞れ侍る暫くいこはせ給へといへば易き事とて茶などあたへらるゝも嬉しく此御社の尊きありさまなどいひて扨今昭君の詩を吟ぜしを御僧の聞咎め給へるいと心にくし誠に朗詠集は古は音樂に合せて諷ひ今も猶雲の上には郢曲の遊びもおはしますよし我等などは田舎にて唯假名の本よみ習へる事

なれば都の人の御耳に左こそおかしと思しめしけんさるにても深き習ひは遙なることなれ今の詩はいかによめるがよき事に侍ると問へば思わずなる事聞咎させ給ふて汗漿の至りにこそ侍れ我等こそ猶遠き田舎の生れにて侍れば梁塵の雅聲などは夢にだに聞侍らず只道理をもて案ずるにいさゝかの手にはにても事の意大に違ひて題の趣も作者の意もかくれ侍らん愚が思ひ侍るには昭君が畫圖に寫されし時外の宮女の中にも昭君に劣らぬ美人いか計か有けんに今其名をだに知る人なし昭君獨千歳に哀を殘し邊風吹斷秋心緒隴水流添夜淚行ありさまを今更見る心地して顔かたちのみか心のうちの正しく美かりし事誠に天下の美人といふべし譬ひ外に劣らぬ貌ありとてもかの黄金を贈りし心の醜さはいかで愛するに足べきや諺にも人は一代名は末代といへる如く利慾を離て名望を思はんにはしかじされば江相公も其心を含めて昭君もし黄金の賂を贈りなば定て是身を終るまで君王に奉るのみならんと作り賂を贈らねばこそかく末代に美名をのこしつれとの意を含ませて昭君が潔白を賛し給へるなるを足下の吟じ給ふやうにては昭君が清潔を過てるやうに心得給ふやうに侍れば不圖難じ侍るなり凡今の代に仕ふる人を見侍るに其心得違あるも少なからず我才覺の及ばざる事はしらで天下の大官に昇らん事を好み彼方此方の畵工をたのみて美しく彩色公卿の門に伺候し形勢の途に奔走して僥倖に勢ひを得て武夫前に呵し從者途に塞がるをもて賢しめでたしと思へども道の心より見れば晏子が御者の顔付の淺猿く見をとりすれ桀紂は天下に王たれども人是を惡み夷齊は首陽に餓たれども人是を好んず清盛の榮花ならんよりは正成が薄命なるぞ羨しき僧の利の爲に法を說を賣僧と云て卑しめ士の利の爲に仕るを商奉公と云て譏る名利ふたつながら忘れてこそ道に近づくともいふべけれ至人は名もなく德もなし猶可不可一條の道を得ば何ぞ是らを論ずるの勞を待んやと云しに良雄内に思ひある身にしあれば其心に貶する如く覺へて涙袖にせきあへず感じいたりしがかくて夕梵近く響くに驚きて暇乞して出ぬ余りになつかしく貴さに重ねて尋侍りしかば其僧はいづち行けんしる人なしとかや

義士筐の扇

昔義士有其妻の持たる扇とて骨をとり掛物にして秘藏せしを見侍るに夫の手跡にて「つゝめども絶へぬ思ひになりにけり問ず語りのせまほしきかな其頃の日々かくも有べき事切なる心を感じ侍ると半時庵淡淡は述けり

碁打の言

碁を得たる人云碁は三つ置せて打にはいかやうに術を盡しても三百番の外なし二つ置ては六千番有先互先は數つもりがたし方量なし四つからは不論の事也と云し人有又碁聖の云如此の論はなき事也無下の事ども也とも申されし

渡邊綱の賛

又淡々が頼光綱にむかひ金札を渡す繪の賛に「綱立て綱が噂の雨夜かなとは晋子春雨の句也此繪はいまだ二條大宮へ打出ざる俤「島原へ寄なと笑ふ山かづら頼光ホヽ咲(エム)

九念面壁

爰に哀れをとゞめしは達磨大師にておわします九年面壁とて尊者名僧和漢相とも背けたる像を念じける愚案淡々大悟の祖九年の間壁にむかひて尻を腐らし悟りたるは至て不器用也思ふに九念面壁ならん三念一念即情頓話禪一二三と念じて二念にもとるは桑華の恒情なり教の要主也一機九念にして向ふ所は壁にても窓にても岩にても栢樹にても海も山も吹風も其時の心の的也されば二祖の的を得て數年嗜みたる箭を放されたり又蘆葉の像とて蘆の葉に乘たる達磨目痛き物也柳葉蘆葉孤舟の一名也川上の觀念誠に見性成佛異國の虚名ならん澤庵も蘆葉の讃に至所信難しとは尊者の心裏をよく識りたるならん古賢禪師海印光にも達磨を責けり有難き事也

筆道の論

蒼頡に文字を教へたる鶏今飛來らば一字も讀事あたはず別れの邪魔をして飛去るべし手跡も先祖は惡筆也追々手練の文字細工積り〳〵て風情日に增より和漢相とも筆の自由を感じ墨色を稱じて其道に日を空しくせる者は眉を顰めて能書と呼也風雅の思ひ深からぬ人の手跡は額にも掛物にもつきなき物也自慢をいひ散らして聞苦しく淺ましく因以謝肇淛書は書べしなどいへり清輔も其趣兼好も手など拙なからずはしり書とこそ書弄びたりといへば傍人云半時庵無筆同

前の事にて筆道話し無用の事と笑ふ予云非也雲溪先生は能書の名有人なりしが予が書たる物を見て今天下の名筆は淡々也文字一行の俤誰か及ばんそのうへ一字々々を離見れば少も文字の道理なしもとより學ばざるものかくも有べし謝肇淛是を見ば其悦ぶべしと大笑ひ有けり長夜腹淋しく厨飯ありやと問ふ僕云有り何ぞ菜有るかと問ふ有と云何ぞと問ふ九年母三つ有と云此者鷄にだもおとれりと又大笑

宰予晝寢

宰予晝寢子曰朽木不可雕也（下略）よしや晝寢たればとてさほどに呵り散したもふはいかゞと若學者の顔赤めて云席に居合せとかく日本の道理に通じて我國の事よく〳〵學び給へ詰る所源氏のてにをはを能呑込候へば皆わかる成べし宰予晝いねたり〳〵〳〵と日々の事に讀くだけば夫子の不機嫌皆わかりてあきらか也末摘花の發端に夕がほの事を書出して思へども猶あかざりしとはとかくあかざりし〳〵と何遍もくり返してよむ心也猶の字心をとむべし我國の事を埒明ずして遠き國ばかり尊み敬るもいかゞの事ながら是又人の國を人々領するが如し源氏は金瓶梅の如しとは一圓に源氏の道理分明ならざる也「やを万神も哀れと思ふらんをかせるつみのそれとなければ須磨の卷源氏の歌也此歌にて此物語の大切なる事は明らか也推ては日本の事は中々濟かね候物也又韓退之云宰予晝寢奢侈を憎むの語ならん晝と晝と混雜の事か

妓女勝山

昔武陽に勝山と云妓有萬人肝を縮め朱唇を窺ふもとより黄金用盡せども心を撓めず酒家の一夫に生涯いふ儘にしたがひ傳く或時夫狐にか佛にか誘われて逐電しけり亂るゝ髪も袖も袂も齒に咬齒に裂みちのくの方にやあらんと茨に身をさかれてよふ〳〵「秋風もはや吹絶て冬の夜の霜ぞ寒けきしら川の關とよみてもとゞり切拂ひ山林深く入けるに忍の里人かた〴〵思ひとりて頻りに招じければ「來て歸る道しなければ山里に墨染衣いく代ふるとも又「糸竹の昔を今に引かへて嵐のみ聞く深山邊の里歌の風情はとにもかくにも眞の心葉を重ねたるきやうさくうへならんと感ずべし

守武眞筆の極

守武眞筆の奥書六波羅密寺の邊りに與治兵衛といふ豐有常に古人の筆の癖を覺へ世に埋るゝ古人の譽をあらわす事間に髪を入ず人以て老を稱ず守武の小色紙に句々書ならべたるを愛して寶ともてなす予是を望めば春宵一刻々々と笑ふ時有て今角倉の文庫にとゞまり正木のかづら俳諧の道の守たけき武士の心も和らぐべき一物なりけりと半時庵誌之

香の物

から漬と物を贈りたる人のもとへ淡々の送る文のうつしからの物といふ事いかなる名ぞと世に稀に論じける事有あら〳〵ならす或は糠に漬る物ゆへ糠の物と云又は大根を持て神に供すによつて神の物とこそ神々と云訓をかりたる成べしと皆たがへり禁中臺盤所へ女房の局よりおかうを參らせよと呼時味噌を調じ侍る事上古今更也みそに漬たるをかうのものと云也香の字を下す事文字を用るの餘情香はすべて清淨の心なるべし薫風あながち南より匂ひ來る事なけれども此類皆以て雅の要とする所ならん其かうに漬たるにあらで糖に鹽を加へて大根を漬て家々民ぐさの朝夕の事とはなりぬ其中に群を出たる物あり稱してから漬と云西域にあらずもろこしにあらずいかなるからぞ世のさまかゝやき榮して調度の俤眞菜野菜も到て風情のこまやかなりけり頻の日歌月と云人よりかうの物を得たり其味いひがたし若此蘿蔔は筑紫何某の押領使が朝々好みたる土おほねにやあらんかしさあらば夜盜の來りけるともおぢおのゝく事もあらじや日をそへて乾けるは此うへの歎きなるべし

比叡の山ぶみ

春日空しからざるは皇都の人の心かりけり二人連にて叡山へ參る者蹴上の知音の者の方へ立寄けふは大師へ詣候又歸りに立よるべしと云捨去りけるが暮過歸りに彼所へ一人立寄一人は跡におくれたり扨々今日は益もなき事に山坂をかけり候先は用意の割子もいつしか高觀音にてたべ切湖の風こそ生臭く胸惡く叡山へ登り暮兼々必といひ約束の捨坊主が所へ行着けるに甚腹淋しく何成ともあたへられよといひければ菜飯に田樂こそし侍りけれと同宿米を洗ひ一人の男は豆腐を厚く薄く長く四角におかしき物にきりちや〳〵くりて燒ぬも燒たるも山折敷に打入強く荒々敷菜の切たるめしをむくつけなる鉢へ入て突出し生

木の枝を折て箸にしていざ〳〵心まかせにまいれと
て何やら名もしれぬ草々を引て醤油打かけ出してき
よろりとして住持は佛と打つぶやき侍る扨々懲果候
叡山殿かな跡より連が立寄候はゞさきへ立歸り腹を
早くなをすとて飛で歸りしとお申たべと云ちらし立
歸りける跡へ一人の男立寄けふは近年の樂しみ覺た
る事あらば歌にてもよみたき事ばかり拙き身をこそ
自ら慙候へ常々大津へ掛取に往來の時は左右の山も
心にとゞめず木草も目にわたり候わず今日叡山參り
と改て出立より常にむさく嗅く息どしかりし車牛の
響も昔めき崩れかゝりし軒端のかづら山の霞伊勢戻
りの一ふし耳にとゞまり俄に走井の水鏡心はづかし
さ頻りにまして獨打笑高觀音にこりめしとり出し湖
の春風空と水と一つになりて吹こす花の匂ひイヤハ
ヤしばらく貴人の心になりぬ大師の御惠み先覺へ侍
りて扨叡山に上り約せしお寺へ立寄ければ何の待も
ふけもあらずあら〳〵しき菜飯に不加減の田樂春草
の芽のある限りひたし物にして強も進めもするには
あらでお住持は香盤の烟り絶さじと御佛につかへ申
給ふ世に離れたる趣き給物の不加減却て世間寺の重
味馳走には增て殊勝さいはんかたなし誠に王城の守
護山と承り傳へ候にたがひなし有難く覺候又々暇あ
らば遠からず登山致たしさらば〳〵と云捨出けると
ぞ兩人の風雅のあるとなきとの違ひめ是非の論なき
事也何藝に付ても上手下手の心的意箭各々斯の如し
予例の老のひがみの心出來て兩度芳野の花へは參り
しかども馬上にて坂を登りたしと思ひたちて六田よ
りいかにも瘦たる馬を借りて行李のもの引つけ見お
ろし見あげ恙なく藏王堂に至り「芳野山世界の花は
飮くらひと眞實の風情世人を罵詈して下りぬ其後老
友の方に一夜咄し侍る折ふし人々見し所の風色を語
り出て吾もよし野の趣申出れば俳諧の詞宗といふ者
其席に有て某も初て去年の春罷りけるもとより花は
おもしろけれども茶屋もなく喰物もなく扨々不自由
也と眞顏にて申出けり此人叡山にも料理茶やあれか
しとおもわるべし依て發句は申出さずなりにきと淡
々の風話なりけらし

小野の於通

喜藤太といへる絹布商人有其頃小野のお通に仕へし
ちよといへる有於通は此時美濃につかへて渠は京よ

り召具したる者にて粧ひよろし筆のさま拙なからず猶藤太を思ひぬ武門の嚴しく目かちなるにつけて「浦山し人目なき野の蟋蟀（キリ〳〵ス）なくも心のまゝならぬ身とは詠けるを聞て於通便なく思ひ女に合せければたやすからず悦び洛外におかしく住けるが不幸の男にてとにつけ貧しくかくにつけ乏しかりければ常に夫婦の口たたかひのつのりて離別せんなど罵りけることのお通に聞へければ猶憂を知りて便をして稻の上五つ永樂一貫取添へちよが方へ章こまかに認めたる歌「とにかくに折ふしごとのたがひめをうらぶる中ぞ契りなりけると世のたすけより人の心の和らぐならひなれば又ことなく業にとり付續きしに其秋を過さず藤太は身まかりて女はいたく歎果して物狂ひとなり極めて五條の橋の邊にさまよひ月のある夜あらぬ夜もかの文を見ながら髪もさばき恐しげにしてうらぶる中ぞ契りなりけるとよみて泣入けるを文ひろげのちよとぞ呼わたりぬいつしか終る所知る人なし

座禪に妄想

六如上人曰座禪看經など心を靜めんとする時かへつてさま〴〵の妄想思慮うかぶもの也是は卽一分の散亂麁動の心しづまるによりて也と日の明らかにさす所に塵埃のたつが見ゆるにたとふべし常にも塵埃はたてども見へぬ也日の光をまちてことさらにたつにはあらずと閑田子は云り

鹿笛

近江八幡に佃房といへる俳諧師鹿笛をもてり形凸かくの如し惣體木にて造る底は皮にて張黑漆にて塗れり吹時は左右の中指にて此底をしごくやうにすれば自由に音を出す是は信樂の獵師幸助と云者の與へしといへり此幸助此笛を吹事上手にて妻鹿の音を吹ば眞にせまりて寄來らざる鹿稀也されども若思ふがごとく寄來らざる時は子鹿の音を吹には必よると語れりとぞ悲しむべし其態によりて親しく其情はしれども憐む事をしらず百舌鳥が衆鳥の聲をまねびて其友かと思はせて執喰ふたぐひ成べし

松茸山

今の世松茸を守とて嚴しく鐵砲を打猪鹿をおどしうち殺しもすもとより田の稻をあらすは追はでは叶わずされば猪鹿田に下りては追れ山に入ては追れ住所もなく食もなし松茸などは彼等に應じたる食なるを

今世民の利を貪る事甚し領主もまた假初の物にも運上の利を射るゆへに上下唯分寸の事にも眼を光らして探りもとむ其禍鳥獸に及ぶといへりしは耳に留りぬ

丸山權太左衞門

丸山權太左衞門が角力の高名はいふも更也全體心やさしく風流にして雪中二世史登の門に入俳諧の發句をなすある時連中の望にて我手のひらを墨にて紙に押形となし其かたわらへ「ひとつかみいざ參らせむ年の豆渠が身の丈六尺三寸七歩手のひら長さ七寸九歩あればよき祝の句也荒々敷業の者ながらかく風流なりしもいとやさしかりけるとぞ

此木戸の錠

大江丸云手爾波とゝのわざれば天地の神に叶わず我人ともに受する處有べし彼伊勢の圍友讃岐の浦にて「なまこともならで果けり平家蟹との初案したゝめいまだ心行ぬ事のあればこそ其夜の夢にあまたの蟹にせめらるゝと見しかば再案「生海鼠ともならでさすがに平家也と是景清の謠にも叶ひたる手には自然と備わり句ぶりも格別也と我心中に腹せしかば心神ともに納る其夜はいさゝかの夢にも見ざりしとか又其角が「此木戸や錠のさゝれて冬の月是は平家物語のうちに此木戸は錠のさゝれて候ぞこなたへ下略「酢をさせば閻浮にかへるなまこかなとよまれし

大廻し三段切

細川玄旨法印の我も大廻し三段ぎれの仕よふは習たれどもいまだせぬ程にもはや一期すまじき也人のしらぬ事つよくしたがるは紛らかしの下手の事也「さればこそ花に思ひし野分かな紹巴が一段ほめて扨かやふの發句は重ねて御無用也さあれば人がしたがりてあしき也と耳底記に書給へり孔明が櫓の琴義經の鴨越それらは無據なき事にやあらめ今時たま〳〵ものゝ覺へたる人の三段切素秋などゝ好でいたさるゝは氣の毒也と魚紋のはなしにてありし

松の雪

伊勢の國何氏の娘に犬といへる者有本性やさしくて和歌を好めり後の朝の戀といへるに題して「きぬ〴〵のわかれの程の思ひでゝいまだにつらき鳥の聲かな十三歳の齡元祿十年正月に身まかりけるがいとよく後世の營をも悟りてある儕を招き我亡名を松雪

と賜われさりし頃松の雪といへる題にて歌よみ侍りけるとて「漣や志賀の濱松いつよりも今一しほの雪

の曙死出路の糧に十念を授け得させたまへと懇ろに念佛し「もろともに朽なば朽よ永らへて殘るもつらし仇しうき名のとよみて終りしと也程へて後此娘かゝる艶才のありし事いかなる便ありてか大内にきこしめされあまたの詠の中に五首とめさせけるとかや松の雪といへる題を案じわづらいて死せる人の再び來れるにやと人々云あへり

了然禪尼

了然禪尼は都の人にて大内に仕へ侍りしが婚姻の事人の媒しけるに子三四人も產なば暇たまわれと契約して嫁し行けり三十餘歲の時迄男女三人設け夫よりしか〳〵の事を云ひ終に髮を剃衣を染臨濟黃檗の諸禪林に入り參道隙なく務けり天和元年の冬編參の爲にとて江戶に下り井上大和守殿の屋敷にありし白翁和尙に見へ法を受んと乞しかど顏容美きには人口恐れ有と宣ひしかば頓て立歸り火攪を燒額より兩の頰に至るまで燒爛し和尙に參りしかば其懇志を深く感じ大法のこりなく附受有る時詩歌を賦して呈しけり

昔遊宮裡燒蘭麝　今入禪林燎面皮
四序流行更無跡　不知誰是箇中移

歌に「いける世に捨てたく身やうからまし終の薪と思はざりせば爛れたる疵頓て癒て少しも痕付ざりしも又奇特の事也江戶近き落合といふ所に自ら精舍を建立し一乘院と號し尼衆集め法を說しと也

乞食女の歌

寬文十二年四月上旬に洛東三條橋の下に廿歲餘りの乞食の女自害してけりかたわらに書殘せる一首有「ながらへは有つる程のうき世ぞと思へば殘る言の葉もなしとありし事都に隱れなき事にて有難くも天上の御沙汰に迄及びて或貴き御方和せさせたまひて「言の葉は長し短し身の程を思へばぬる〳〵袖の白露「なきと詫る其言の葉の殘るさへ聞に泪の袖にあまれるさりとも和歌の德いふも更也と聞人ごとに泪せきあへず侍りき

蛙の聲を止む

大坂谷町筋八丁目願生寺超譽は隨分の念佛の導師なりし此寺もとは草庵にて纔に三間四面の藁葺の一宇計なりしを今は佛殿方丈庫裡迄悉く成辨してけり修

營の始に根なき松を二莖門境に植もし寺門繁榮せば此松成長すべしと自祝せられしに果して鬱茂して今大木となれり又鹽町に閑居の庵を占給ひしに庭の池の中に蛙群鳴て喧しかりければ十念を授て停止せられしに生涯の内は曾て鳴ざりし元祿九年八月十七日七十二歳にて豫め滅後の葬式を營み前十一日より安養の聖像の數に入し事を覺へて貴く念佛して終りぬ

しやの〳〵衣

泉州堺の眞言宗の僧常に酒をたしみて暫しも醉の醒る事なくて只戲れごとのみにて世をおくられし然れども泊然といさぎよくて祈禱今ぞかりければ人々崇みし此僧身まかりて後遺封を開き見るに寺と書籍とは甥の僧におくる金三百兩は草履取に得さす出家の財寶は禍の基也衣服はそれ〴〵に與へよ辭世に「世の中はしやの〳〵衣つゝてん〳〵てぐる坊主に殘る松風

木村重成

大坂の城今を限りに見へし所に木村長門守風呂に入髮を洗ひて伽羅をたかせられし時江口の曲舞紅花の春のあしたを謠ひ餘念なく小鼓を打れしとぞ其次の日花やかなる討死せられし印を大將軍家康公御覽有て涙を流させ給ひ此若者討死を極め髮に香をとゞめ乍月代を剃ざりしと仰られしとかや其時髮をすき香を燒き女は江戸にて木原意運といへる外科の伯母にてありし老後まで常にかたられし

池上意三

池上意三大儒の譽れ世に聞へ十六歳にて水戸黃門公へ召出され和漢の萬卷に眼を曝しいと美じき人にておはしき去る佛緣の有けるにや或時延命地藏經を拜見して忽世の無常を悟り菩提心強く發りて大守へお暇乞ひ世になきものになし曾節と名を改め形を桑門にかへてけり都方に上りて童の風車を弄を見て「舞ば舞ふ舞はねばまはぬ風車是や我身の行衞なるらんと讀てけり風車軒と申けりそのゝち勝尾寺二階堂に籠られしが九日目に及び思ひよりし事有て火定に入るべしとて薪あまた積せ我中より香烟を出すを合圖に火をかけよと約束し辭世の詞とて「世の塵をはらひてのぼる勝尾山法の爲には又かへりこんと讀て入りぬ暫しが程念佛誦經の聲聞へしが人々烟を見て火

をかけしに山々谷々に充々參詣の輩同音に念佛し漸事靜りて各々寄て見しに左の手に香爐を捧げ右の手に念珠をもたれし行儀すこしも亂れずおはせしと也

金毘羅の神馬

謝肇淛名利を好むは丈夫の事鬼神を好む子の事丈夫にして鬼神を信ずるは丈夫の氣を失ふといへり凡理學家は云に及ばず少し文字をよみ書を手ならす人は神佛の妙を嘲りて婦女子の口實とする事珍らしからず然るにまさに閑田が視る所廿年前讃州金毘羅に詣し時常の神馬の外に駒一疋馬屋の外に繫げりいかにと思ひし折から詣でし人語らく此近き某の村に馬の難產に苦しめるを其主此御社へ祈請し平らかに產しめ給はゝ其駒は奉るべしと誓ひしがやがてやすく產れし後いとよき駒なれば惜む心出來て猶豫せし間此駒自ら走りて此頃爰に來れり速に置べき屋なければかくの如しといへり

應聲蟲

塘雨云元文三年の頃四條坊門油小路の東に觀場の催を業とする者有奥丹後の山里に農人の妻五十歲計にて應聲虫の病あるよしを聞傳へて觀場に出さんやと語らひしに行て二三日逗留せしがいかにも腹中に人聲有て病人の聲に應じて其詞の如くいふ事分明に聞ゆ其夫の物語に先年霜月に引連て六條詣せしに茶所にて休ふあいだ腹中にて物を言ひしかば諸人怪しみとやかくとふことのうるさく耻かしく覺へて其夜たゝちに歸へりしといへり

金蘭齋

近世畸人傳に出たる金蘭齋と云老莊者は腹中より聲に應じて物いふと覺へたりされども是は只自ら覺ゆるのみにて他人きかず暫の間にて止みたりと馬杉亭安といふ老人の話成し由自のみ聞は氣病にてもありけんかし

四つ子を產

備後神石郡袖邊町油屋久兵衞といふ者の妻四子を產り三子は男一子は女也四人目に產れしは髮黑く生齒悉く生じ頭に角二本有しかば恐しくて捨やりしに少も泣事なかりしかく四子を產る事は和漢ともにたぐひある事とかや

異形の觀場

延寶六年に泉州堺の夷島に面三つ手足六つある赤子

捨置たりしを大坂道頓堀觀場師諸人に見せ侍べりしかゝる異形の者いにしへも折には有しとかや今年まで百七十三年になる道頓堀の見世物は思へば古き物にあらずや

十一屋の妻

大坂手島町十一屋宗佐といふ者の妻若き頃より書典を好み佛法を信仰し本性やさしくて慈愛ことに深かりし延寶八年四月十五日高野山に詣けるに前百日潔齋して道伴ひし尼を女人堂に殘し置自らは兼て齒を白くし股引脚半鉢卷までものし二尺餘の大脇差を横たへ奥院檀上谷々院々殘りなく順禮し恙なく下向せしと也天和二年に時疫を煩らひ既に臨終も遠からず見へし時此世の暇乞とて洗米御酒清らかに調へ日本國の神祇に備へ奉りて純一に稱名し往生をとげけると也

梅心の辭世

阿州德島に梅心とて俳諧など嗜し人有八十二歳になりし迄心身まめやかに有しが貞享四年六月九日にかたわらなる懷紙に「世は夢と見しまも夏の一夜かな」となふれば心涼しや南無あみだと二句書のこして一向に念佛しておわりぬ

非人の詠歌

元祿の始の頃都の非人歌よみけるとなん「ぬるまのみ人にかわらぬ身なれども浮世にかへす曉のかね」「さむしろにおく露の身はきへやらで夜半の嵐の吹かひもなし誠の非人にやいぶかし

五字の題目

洛陽龍本寺日進上人御宸筆の題目を八條殿によつて願ひ奉られしに忝も仙洞後水尾の院妙法蓮華經の五字御宸筆染させたまへり日進重ねて南無の二字を添させてと願ひ奉りしとありければ五字の宸筆めしかへさせたまひて寸々にきらせ御前の火鉢にてやかせ給ひぬ五字の頭に南無の二字を置たる事いづれの經に證文あるや奏問申せと詔ありければ祖師日蓮始て此字を加えられしと勅答ありしかば此事かなはじとて止にき

竪題横題

昔水無瀨の上皇の仰に春夏の姿はふとく大きに秋冬の歌は細くからびて詠むべしと勅ありし我俳諧も是に倣ひ奉りて四季のほつくも其心をもて詠ぜむこそ

本情にかなひ侍らむかしと淡々は申されけり

熊澤の和歌

熊澤先生始て藤樹先生にま見へられし時熊澤氏「みな人のまねる社に神はなし心の内に神ぞましますといはれしを藤樹返しに「ちはやぶる神の社は月なれや參る心のうちにうつろふさすがの藤樹先生なり尊むべし是は藤樹の末孫中江久風といふ人の物がたりも也とぞ

曾呂利の狂歌

曾呂利新左衛門は堺の町人にて豊臣秀吉公のお氣に入狂歌をよくし御伽衆と成ける或時秀吉公諸士を集め何にても大きなる狂歌をよめと仰らるゝ時に福島左衛門仕りけるは「兩國にはびこる梅の枝に啼て天地も響く鶯の聲秀吉公御機嫌の體なりしが曾呂利一人是は甚だちいさき狂歌也と云に清正然らば某上もなき大なるをよみ候とて「須彌山に腰打かけて大空をぐつと呑ども咽にさはらずと詠けるに是こそ誠に大なる歌とて秀吉公始皆々感賞しけるに曾呂利まだ〳〵ちいさいと云清正すこしいかりて然らば是より大なるをよみ候へと云曾呂利心得候とて「須彌山を咽にさわらずのむ奴を眉毛のさきで突こかしけり滿座膝を抱へて笑ひけるが秀吉公重ねて仰に此度は隨分世話しく開敷狂歌をよめとあるに曾呂利畏り奉り「俄雨薪はぬるゝ雨はもる我子めがせがむ疳のかゆさよ秀吉公殊の外興じ給ひ何にても望みあらば申べし叶へとらせんとあるに曾呂利有難く存奉る然らば江州三井寺の石階の下より上迄五十一段御座候此下の段にて米壹粒を倍增に上まで下され候はゞ有難と申上る秀吉公笑わせ給ひ扨々ちいさき事を申かな望に任すべしとあれば曾呂利有難き段申上勘定人に算盤もたせ右一粒の米を倍增にして段々五十一段目迄置上見るに廣大の石數と成りしかば秀吉公笑わせ給ひ此石高を汝に渡さば日本の諸侯の知行三年の間斷いわでは渡しがたしとて困り給ふとなり日本大名惣人數二百五十餘人知行高凡千八百六拾万石餘と云ふ

滑稽頓作

豊公ある時諸臣にむかわせ給ひて世に恐ろしき物は何ならむと仰ある君こそ恐しき物の頂上にて候と一同に申上たるに曾呂利が云御前樣ほど恐しからぬ物

はなし手柄をすれば御褒美有のしき行ひあれば罪をお糺し遊さるゝ善も惡きも我心にあれば君は恐しき物に是なしたゝ世に恐しき物といふは無分別者にとゝめたりと申上ければ公大に笑わせられ諸士もアッと口を閉たりしと也唐土の東方朔我朝にては杉本其後は曾呂利井上氏あつぱれの俳諧なりとあり

信綱三仁政

寛文の頃かとよ松平故伊豆守信綱執政の時千年以來金錢を尊てかく成たる風俗の後に出て京の大佛を鑄て錢とし天下を利益せられしこそ先にも跡にも聞ざる事なれ其卓識誠に古今に傑出すともいふべし重衡鎌倉に囚れし時父命によりて奈良の大佛を燒し事を大きなる罪惡とて自恐れて賴朝の前にても陳謝し京師にて法然に邂逅しても此事を云出して深く悔しは罪障懺悔の爲とこそ思はれけめその愚暗是非もなき事也其後松永彈正が再び奈良の大佛を燒しを猛惡の信長さへ是を大罪と思わるればこそ松永が主君三好義長を弑し光源院殿を殺し奉りし大逆罪に並べて人のならぬ事を三つしたるとて彈正を耻しめられしぞかし嗚呼佛法の人心を蠱惑する事何ぞ爰に至るや御當家創業以後文明日に開けしゆへ伊豆守程の人も出るぞかし信綱善政多き中に天下の殉死を禁じ諸國の人質をやめ大佛を錢に鑄られし此三つをば世に大器量の事と賞するも宜也殉死を禁ぜられしは永く後世の害を除き人質を止られしは普く諸國の患を救ひ大佛を錢に鑄られしは大に古今の惑をとく天下後世に於て大功德ありといふべし重衡などをしてきかしめばほとんど驚死にも至りつべしと鳩巢は申されし

井上の詼諧（玉の簪）

されば信綱の平易にて無造作なりしは世に類ひなき事にて有けり其頃井上新左衞門と云人は執政府の從事たりしが素直に文飾なきをもて伊豆守の爲に愛せらる新左衞門常に詼諧を好みて其爲人東方朔に似たりある時何方より鱈を獻上しけるを御前に披露するとて伊豆守見届られしに鱈に塵つきてありしかば伊豆守氣色損じて取次し人を呵られしを新左衞門傍に有しがいや鱈には塵ある筈にて候と云を伊豆守いかにととへば三番叟にちりやたらりと申候わずやといふ時に伊豆守聞て笑ひつゝ氣色なをりて兎角物に念

の入らぬ故にて候何事も念をいるゝにしくはなしと云れしを新左衛門各様には御念入候がよく候我等如き輕き者は餘り念をいれ候へば却てあし事もある物にて候と云を伊豆守何が念をいれてあしきやうあるべきといはれければ其事に候昔唐の玄宗方士に命じて楊貴妃の有家を尋られしが方士蓬萊宮に到て貴妃にあひし程に歸りて此由を奏聞せんとて其證を乞しかば玉の簪を給わりけり然るを餘り念過て是は世にたぐひ有べき物なりとて重ねて玄宗貴妃との密語を聞て還り報じければ一旦首尾はよかりしが玄宗方士を疑ひそめられしより思わるゝは此密語は貴妃と我ふたりより外他人しるべき事にあらず然るを方士しりてかく云は兼て貴妃に通じたるにやと終に方士を誅し給ひしと也前の玉の簪ばかりにて能候をあまり念を入たるゆへにかくのごとしといひければ又新左が例のそゝろごとをいふとて一座興に入てやみける此後天草の事出來て信綱命を奉じて行れしが不日に賊皆誅に伏して江戸へ歸着せられしに旅裝のまゝ直に登城有しかば折ふし在城の面々殘らず迎勞しけり新左衛門も衆中に有けるを信綱早く見付てそこに語ることこそあれ今御前より罷りてとて御前へ出られやゝしばらく有て御前より退かれ衆中にて云れしは此度天草にて諸侯一度に賊壘へ向ふべしと約束定りて扨押よする時は某が本陣にて鐘を撞べし夫を合圖に諸手の衆集るべしと云合て僉議の間日を經けるが某思ふには今夜にても賊方の者か又は馬鹿もの忍び入て鐘を撞て我衆を誤る事もあらむかと撞木を取よせて我側に置けるが又思ふには必撞木にも限るべからず鐵炮やうの物にても撞まじきにもあらずと鐘を地へおろさせ菰にて卷て置せたり然る所賊徒戰て思ひよらず俄に手合せ有ければさらば鐘を撞べしといふに上へ釣上菰をとく程に終に間に合ずしてたゝかかりに懸りて攻潰しけり其時かのいつぞや申されし方士蓬萊宮の物語はか樣の事にこそと足下の事を思ひ出せしと話されし也是戯れに近き物語なれども信綱理にさとく人の言をすてず夫に只今馬よりおり御前へ出て天草の首尾を申上らるゝ折ふし常人ならば中々思ひもつけじたとひ思ひ付とも此節は扨やむべき事なるを只常の氣色にて稠人廣座の中共いはず我あやまちたりし事も有の儘に語られしにぞ伊豆守の

心公にして器量の大なるもしられける世に古今の良相とするもげに理りと覺ゆるぞかし

角觝の句

享保改元の頃は浪華の俳諧いと盛んなりし鬼貫才麿野坡員九淡々祇空芳室布門昭簾白羽法策海音矩州瓢水來山など也其後俳諧にて能人情を盡すものは蓼太蕪村の兩叟殊に妙有角力の句にても「大内の砂を土産やすまふ取蓼太是はかの古八名かみの成衡さつまの氏長がたぐひにて田舍の家づとに守りのかわりに取歸るさまこけても砂といふおかしみを含めたり又「負まじきすもふを寢物語かな夜半妻にあひての情思ひ廻らすべし「白梅や北野の茶屋にすまひより夜半すもふの祖野見の宿禰も菅神の御先祖なればひとしほ道の信心もこもれる也是らの力にて風月花鳥の情をいひかなへたらむ道に手だれの程を思ふべし鳥虫のうへばかり凡にさつしやりて句作したらむは大方人形の笛吹やうならんとさる人はいへり

世を覆ふ句

世に秀逸の句あり貞寶の是は〳〵又貞柳のにくまれての狂歌などは物しらぬ作者をもしらぬ者までいひもてはやす也誠に世をおほふものなるべし是に次では淡々の口癖の芳野も春の暮毎には必いひ出す也是らこそ道に入たる本意なれかゝる一句も願わしき事にこそと鳴見の蝶羅はかたられし

我に飽

許六の曰皆人發句を案ずるに趣向より入たるものは格別の句は求めがたし姿より思ひよせたらむこそ能句はいづらめ又數多句を吐てきのふの我に飽者俳諧の上手也とは尤の事也

俳席の心得

白翁の咄に少しにても我より上手の人の有場席にては發句にても附句にても早く打出して指南をうくべし我より劣りたる人の中にしては一段しづめて大事に案ずべし又他國他門へ行てはあく迄も案入べし師の前上手の前にては案じるは無益也早く教を受べしいろ〳〵の心得德ある事どもを聞事有と是俳諧にのぞむ第一の心得ならむ

句より心を聞け

周竹云發句に聞へがたき有らば其心をとふべし句のおもてより心のよき趣向あるもの也ばせを翁の門人

に初心の人有夕涼の句をいろ〳〵に案たれどよからず翁曰いざまづくつろぎたまへ我も臥なむと宣ふ然らばおゆるしじたらくにおれば涼しく候と翁の云今の詞則發句也「じだらくに居れば涼しき夕哉（宗次と有）」又去來の「俤の愚にゆかし魂祭翁其心を問ふに祭る時は神在すが如しとやらん玉祭の奥なつかしく覺候と申翁云しからば其心すぐによろし「玉棚のおくなつかしや親の顏と直し七文字なつかしやとして下をけやけく親の顏としてよろしかるべしと都て其思ふ所直に句になる所をしらず深く思ひしづみかへつて心重く詞しぶる也と教給ひしと承る世上大方かくのごとし早く心を打出して師に教をうけるがよしと申されたり

尊氏の和歌

白牛曰ばせを翁の日はつれなくもの句は昔尊氏の歌とて「すまよりも明石のかたにあか〳〵と日はつれなくも秋風ぞふく此歌を兼ておかしと耳底にとめひとゝせ北國行脚の時北枝を尋ねて秋の風秋の山の推敲に枝が器をはかりたまひし是は何れの集に有歌やしらず

鎌倉の初鰹

連丈の曰人情をはくには其人をあく迄もうつし得ざればいかゞ也といひし何れ作力の入る物也「初松魚重衡みやり給ひけり「初鰹宗盛むづとまいりけむ」はつかつを高時食はで死したりける始は三位中將の狩野の助が饗應を仇にせられざるみやび中の句は八島の大臣のおろかにして人前を恥ざるさま末の一句は鎌倉の入道の田樂法師にもてなさゝる恨を遺せり「俳諧に古人なし魚に初鰹共に舊國の句也

明慧上人

鎌倉治世の後に至て北條泰時こそ漢の丙魏唐の姚宋にも恥しからぬ人にて吾國にはあまり比類なかるべし此人栂尾の明慧上人にあふて某不肖の身をもて重任に當り群下に臨み侍るいかゞして衆を治め爭をやめ侍るべしと問われしに明慧只無欲に成給へといはれしを泰時かさねて某獨り無欲に成候共群下何とて無欲に成候べきといはれけるに明慧下に目を付ずして御身先無欲に成て見給へといはれしを泰時深く信じて父義時死去の時所領財寶大かた諸弟に配分して其身は僅にたるばかりとられけるを二位の尼泰時に

自分のとられやう餘りすくなき事といはれしに某は家督をうけ候へば何の乏しき事もなく候只弟共のゆたかなるやうにとこそ思ひ候へといはれしかば二位の尼も感涙に及ばれしが其後年を逐て親族粛穆し鎌倉の武臣も感服しけり明慧浮屠なれども孔子の季康子にのたまひし苟子之不欲雖賞之不竊といふにかなへり泰時の明慧の一言を信用して鎌倉よく治まりしにて聖人の詞誣べからざる事をしるべし明慧もたゞうどにはあらざりけらし

泰時の無欲

偖泰時家督以後日毎に勤て公廳へ出てひねもす蹇々として庶務を治められしに群長を待事恭謹にして爭を分ち訟を聽るゝ事明恕なりし事東鑑を見てしるべし泰時或時訟をきかれしに雙方對決しけるが半に成て一方の相手忽理に服して只今迄己が申所をよしと思て候へばこそ爭訟に及び候へども今日始て手前の非を覺悟いたして候此上はもはや一言申にも及ばずとて止ぬ泰時感じて此爭は汝が負也理非によりて決斷すべし但某今迄多くの訴を聞しか共即座に汝がごとく理に服するものを見ず是を賞せずして何をか賞すべきとて別に恩賞を行はれしが後は爭訟もやうやく稀に成て訴庭も閑になりしとぞ

泰時の公明にして正しき事此一事にてもしられたり其孫謀のよき後嗣に及て時賴時宗何れも遺訓を守り成法に依て善政を勤られしかば四方の人心鎌倉に歸嚮せざるはなし北條氏皇朝の倍臣をもて天下の權を執て數代の安きを得たるは泰時の功といふべし世に時賴を泰時より賢明なるやうに稱じぬるは早く高位を脫離して浮屠に歸し微行を好み下情を察せられしを奇特の事とこそいふらめ併しそれは道理をしらぬ人のいふ事也其身宗廟社稷の重きを承て自佛寺に逃れ微行を樂とする事やあるべき君德を穢し治體を失へり人主の法とすべからず是にて見れば其治規摸近小にして遠大に味かりけらし中々泰時に及ぶべき人にあらず

畠山重忠

其外鎌倉の人物を考るに上下ともにすべて取にたる人なかるべし幕下に數多の人材群集すといへども血氣勇悍の人迄にて何れも粗暴無識也其中に獨畠山重忠は勇力世にすぐれ古今の壯士といふばかりにても

なく志操潔白にして極めて正直の人也和田と並稱ずるは其倫に非ず梶原が讒にあひし時誓文をもて陳謝せよといひしを重忠一生僞をいわねば今更誓文に及べきやうなしとてうけざりしかども賴朝も疑ひをのこさず梶原も怒を加へず是にてもとより忠信の上下に感孚する事をしるべし其上己が善に伐らず人の功を蔽はずおのづから寛厚長者の氣象なん有けり當時諸將の中に求るに少しき似たる人もなし不幸にして三浦と同じく前後北條が爲に殺さるこそいと口惜き事なれ其最期もさすがは他より一きは潔よく見へしぞかし爰に至て時政義時が惡天道にさかひ人望に背く其罪誅しても餘り有もし泰時なかりせば北條家の滅びん事高時が時を待まじ獨田樂入道をのみ罪すべからず

藤房遁世

建武中の人物にては縉紳家に藤原藤房韜鈐家に楠正成もとより輿論の歸する所也其人品をいはゞ藤房は公卿輔弼の臣たり正成は將帥禦侮の臣たり其材の大小をいはゞ正成の材藤房の及ぶ所に非ず藤房龍馬の諫は直言極諫朝廷を聳動す誠に朝陽の鳳鳴といふべし然れども正成恢復の功とは並論じがたし其上藤房は一諫の後國を去り世を遁れしが正成は其身國難に死するのみにあらず忠義代々家に傳へ天下あらはるる當時誰か正成に比する人あるべき楠家の遺書として流布する書あれど後人の僞作にして其爲人委しき事はしれねど其しるき事は騷亂の始一城をもて天下を引受て始終少しも挫屈せざるにて其材量のたくましきを思ひはかるべし殊に仰慕すべきは天下一盛一衰の間名將勇士といへども時勢に附て反側を常とし朝夕をたもたざる中に獨楠家のみ子孫累葉かたく遺訓を守り一門闔族心を一にして力を戮せ各身をもて國に報ひ三代の間一人も二心ある事を聞ず古今比類なかるべし正成德澤深厚にしてながく人心を結ぶ事なからんにはいかでかくのごとくなるべき

正成韓信を許す

然るに世の尙論する人推尊で諸葛孔明に比するは兩人何れも兵略をつとめ興復を謀り父子國事に死するも同じければ也されど孔明は臥龍也道德を懷抱し功名を遺外し草廬にて一生を終らんとせしにはからざるに蜀の先主の三顧に遇て不得已して出て仕へしが

一朝關趙が上に立て君臣魚水の如く成りしされば其出處伊呂望に近しとなん古人も論ず正成はもと功名科中の人也後醍醐帝笠置臨幸の時近國の名士を徴れし間正成も召に應じて參じけり是其出處孔明とは大きに異なゝ上恢復の後も尊氏義貞の下に列して專に任用せらるゝ事をきかず孔明をもて擬せば恐らくは其倫にあらじ其兵を用るも孔明は正大にして奇計を用ず節制の兵といふべし正成が敵を料り兵を用るは韓信に似たり韓信楚に寄食する時より既に項王の制し易をしり正成河內に家居する時より既に鎌倉の弱易をしるよりて韓信高祖を見て盛に項王の勇を稱して其勇は恐るゝにたらざる事をいひ正成後醍醐帝に謁して盛に鎌倉の強を稱して其強きは恃にたらざる事を云其後兩人共に多くは籌策を用て勝を取し事掌握にあるが如し韓信は囊沙背水敵を破り正成は鉤屏木偶敵を塵にするを見べし兩人の兵を用ふること一轍に出ざるかは何れも摧堅拉銳といへど韓信が材は敏速に長じてよく攻いまだ其守るを聞ず正成が材は持重にたへてよく守るいまだ其攻を見ず韓信に城を守らしめばよく正成が如くならんか正成に敵を攻しめばよく韓信が如くならんか古人も攻守勢殊也といへばいかゞあるべき然れど韓信が兵は利欲の私にいでゝ一身の爲にし正成が兵は忠義の公にいでゝ國家の爲にす其底績の心おのづから同じからず昔河內の人の語りしは金剛山のほとりに南北の明神と號する祠有其中座を正成とす左右は孫子吳子也正成常に我天下に武功を立る事は孫吳の影なりといひしにより是を附祭するとぞ是にて今に正成が遺愛の民にある事をしるべし但正成かくのごとく絕倫の材をもて聖賢の道を學びずして孫吳が術のみ崇びしは遺恨と云べし湊川にて自殺するとて弟正季と最期の一念を語る事甚陋し

西澤文庫 皇都午睡二編下の巻 終

皇都午睡三編上の巻

目次

一冬籠
一名聞は罪深し
一大野氏の女
一源語の發明
一神道の受
一欲は身の毒
一作魔地を失ふ
一火替の神事
一武運の稽古
一羊肝牛干
一氏神正一位
一淺葱崩葱
一辨慶太皷持
一悋餓鬼
一看板の謎
一鐘撞の階子
一賊の母歌を詠む
一嵯峨の山住
一嵯峨の奥
一橋の下
一鼠大根
一下手のなき世
一天下の俳諧
一宇治丸
一氣違法齋
一七子の彫物
一ひやかし逃助
一角兵衛獅子
一戎紙神在餅
一看板の謎
一代神樂
一月待日待代待
一瓦葺
一愛子の庄司
一雷除桑原
一鐵火味噌
一蓮葉女
一桃鬼灯
一箱入娘
一鞦韆蜻蛉返し
一惣嫁の出火
一友衛貝盡
一秀吉門破
一鎗中村
一時平公の墳
一位牌の和歌
一穢多の訴
一弓に蜻蛉を付る
一惠心僧都
一元政魚料理
一宗祇の發句
一盃の銘
一七黨八平氏八庄司
一我國のかな附
一めりやす莫大小
一自墮落者
一鵜の目鷹の目
一蝸牛
一蚊の喰ぬ咒ひ
一道具と牛
一小倉色紙
一有樂翁の茶
一泣涕微笑
一石川丈山
一雪花圖說
一鯉の差身
一狐草履を送る
一九郎佛
一道明法師
一火の見矢倉
一幽靈の濡文

一疫病神馬に乗　一淀屋辰五郎
一村井軍兵衛　一國造の烏帽子
一日本左衛門　一鷹の尾筒

皇都午睡三編上の巻

西澤綺語堂李叟著

冬籠

嘉永庚戌の初秋皇都午睡と題して三百有餘條の話を書しが「ひや〳〵と壁を踏へて晝寢かなと朱樹士朗叟が殘暑をきかせし句に感じ第二編目二百二拾五條を著「皆人の晝寢の種と桃青翁が詠たる月の秋も過けり古き狂歌に「朝寢してまた晝寢して宵寢して其間〳〵は居睡りぞするとあれば寢通しにするが如し傾城の晝寢ぬ程に思ひつめとも折句にあれば迚もの晝寢つひでに宰予が晝寢に倣ひ又第三編目二百二十五條を著はしまた見たらすば四編五編と輯をつぎて綺語堂の冬籠爐邊に机を引よせてまた寢の夢を結ばんと思ふ若うなさるゝ事あらば起したまへ

鐘撞の階子

立春の和歌には多く霞の立そむるを云或は氷の解るを詠ものなるべし尤年内立春の題なれども年の内に春は來にけりの詠は其頃の歌仙達もいまだ詠出ぬ新らしみならずや我俳諧にも「鐘撞の今年へ下りる階子哉句者の名不覺はよく詠得たりといふべし文化中江戸四方の狂歌連より出たる五十人一首に此鐘撞の句を狂歌に詠て有るを見しが狂歌にてはさして働なし發句十七言によくも心を詠こみたるを感ずる也江戸八朶園蓼松が出せし俳諧畸人傳に此句者の表德を見しが忘れたり是に次て豐後の葵亭の句に「名月の翌は少き鴉かな予此句を感じ態〳〵文通して短策一葉乞求め今に珍藏せり夜終清光に啼あかし茜さす東雲に至れど朝の如く啼群れぬ心を翌はすくなきと僅一句に述たる働き鐘撞明六つを鳴らして階子を下りれば一陽に來復せし心を述此二句とも誠に不易流行を兼古今の名句とも賞ずべしかゝる名句生涯に遺したきもの也

名聞は罪深し

或學匠の話に名聞を好むこと甚しき僧は女犯肉食よりも遙に罪深し女犯肉食は罪其身に止る名聞の罪は他に及ぶ昔ある相者人に語りて我息夭死相あり某日

月必死すべしといへり然るに其朝に及びて常に變る事なければ彼話を聞たる者相の眞なきを嘲りしに一夜とみに死したり爰に於て又實に相の疑ふべからざるを驚きしが能たづぬれば己が說の違へるを恥て竊に其子を殺害したると也吾命にもかへて悲しと思ふべき子を殺しても其術の名聞を思へるを說給へる佛の敎誡なりとかや

賊の母歌を詠む

或者貧しくて母親を養ひがたきにつき盜をして捉へられし時其母悲しびてよめる「てらしませ神と君との惠にて親ゆへ闇に迷ふ我子を此歌官に聞えて死罪を免かれ追放されしとかや近き年頃のことゝかたる人ありき

大野氏の女

赤穗の難に不義にして逃走りし大野某が女東備梶浦某に嫁し居けるが此出奔の後何となく住居の裏の空地に隱居を營ける元來祿の分限よりも貧しかりけるにいまだ齡も老に及ばず無益の事なりと其妻諫けれども思ふよし有とて不肯扨良雄を始四十餘士復讐の事遂て日を經ず此わたりへも其人數の名を錄して賣ありきし中に大野氏は見へず是迄はもし一旦謀とありて奔り此復讐を催しぬるにや共疑ひ思へりしに似たる名も見へねば其女も心地あしくかき籠て打臥けるに家主あらためていふべきことありと下婢をもて云越しければあやしみながら頭をかゝげなどして出來るを常に似ず席を改めて是迄貧しき世をとかく扱ひ給ひし心盡しいはん方なしさるに父國老の長に有ながら國難に臨て逃走りつひに復讐の人數にも見へず不義甚しきことといふべからず其方には罪なけれどもかゝる人の女に伴なはん事は士の道にあらず恥べしされればけふより緣をきるべししかはあれど返すべき家なければ兼てかゝる事もやと造り置し裏の亭にて生涯を送らるべし三人の子あれば彼等が供養せんは其道也吾は再び對面せじと先より召使し婢を添てかしこに籠しめ自老婆一人によろづまかなわせてこと女を近づけず人勸めて妻をも使ひたまへといへどもきかずもとの妻其身に罪あるにあらず義によりて遠ざけし也されば彼に妬ませては自も心よからずとて一生鰥にて果されしたま〳〵庭際を緩歩せらるゝを彼妻窺ひて言はかはさずとも見かはしもせんと障

子など開けばやがて走りいりぬ妻も後は慣みて避けるとぞ此節操安きに似てかたきこと成べし

嵯峨の山住

三條西内大臣實澄公は道遙稱名二公の名譽を繼給ひ倭歌の名世に高く文才の聞へ並びなかりし源氏物語は代々の貴翫にして天下の至寶なりと雲上竹園に於て枕事とし給はざるはなし本文幽玄にして意味深長なれば列世の先達各註釋をなし隱れたるを顯わし微なるを明にし給へり三條西家も代々是に御心を寄られ和漢の事跡文書を渉獵まし〳〵實澄公の御說は孟津抄にしるされ三條公は細流抄を述給ふ當内府君も數年御玩味のうへ父祖御二代の鈔の外に猶發明を得給ひて其名雲井をとゞろかしぬ晩年に官を辭し入道まし〳〵嵯峨の寂寞を甘んじ給ひ小倉山大井川の邊へたび〳〵行通ひ天龍臨川の蘭若に遊び野宮桂院の昔を尋ね給ひぬ一日中院町をよぎり爲家卿の古墳時雨亭の舊跡など一見まし〳〵一の鳥居より南におれて落合といふあたりへ分入らんとし給ひしが山路嶮して容易登りがたかりければ折ふし傍の山間にかたちばかりむすびたる草の庵のあるに立寄やすらひ給へばあるじ七十許の男にてさながら法師とも見へずあやしき鶉衣着て居たりしが公の入來り給ふを見ても敢て驚くけしきもなく脚折たる几に何やらんやれたるふみのせて見て居たるを叟はいかなる文よみ侍ると尋ね給ふに光源氏物語なりと答へければかゝる山の奥に遁住てかの物語見る心のうちの尊さよなみ〳〵のしばふる人にはあらじと思して緣に尻うちかけさせ給ひさるにてもやさしき和主の心かなおのれなど若かりしより彼物語を學びて牛に汗する文どもを參へ考へ侍るにつけていと心深き事侍り叟が見侍るは本文計にてさこそ趣を得がたくこそと宣へばさればとよ年月をかさねて見侍れども喃々として讀下す事だにはかどり侍らず此頃都に三條西内府君などは新たに抄解を加へて雲の上にも講じ給ふよしその人々の從者に成とも逢まみへて尋たき事のみ多けれど蹇る病有て麓にだにも下り侍らねば都の傳は思ひ切ぬる唯おのれが心に反覆玩味して人一たび是をよくすおのれ是を百たびせばなどかその意に通せざらんと思ふのみと答へければ公は我才名の山林までに及びしを悅び且翁が志の深きを感じ我こそは三條西

實澄が致仕せるなれ斯相逢も宿世の縁にこそと仰あ
りければ彼翁大に驚き急ぎ座を蹂下り遙に跪て今ま
での無禮死罪を免がれずと平臥するを從者に仰せて
助け上させ給ひ我今官を辭し桑門の身となり山林の
閑を味ふいさゝかも敬する事なかれさるにても汝が
貧ふして源語を樂しむ志を感ず我おもふ人だにあら
ば東なる夷の里もむつまじきと聞ものをはかゞしき
本もなくば追て貸てんなど仰あれば涙を流して恩
を謝し偖もかゝる御惠に逢奉るも千歲の一遇老の命
は雨の晴まも待がたし近頃恐れながら日頃うたがひ
思ふ事一二問奉りたきと申せば夫こそ尤の事なれ行
先いそぐべき處もなくおなじ山路のたのしみなれば
此所にて休息ながら物語もせんと簀子の上にのぼり
給へば翁は圍爐裏にむかひ淸瀧の流れを釜に入小倉
の松を折くべて梅山の茶を煎じて參らすれば湘水を
汲て楚竹を焚にもまされりと公一入に感じ思しめし
都の奢侈に惑ひてかゝる深山の奥の庵筧の水のとく
よりも尋ざりぬぞ恨なると歎息數聲に及ばせ給ふ

源語の發明

かくて翁が申やうはかの物語の發端にいづれの御時
とかゝれたるはいかなる故にや公答曰これは伊勢集
にいづれの御時にかありけん大御息所おわしますと
書出せる筆法にて延喜の御時と書べきをおほめかし
く書出たるものなり翁又問紅葉賀の卷におそろしく
もかたじけなくもうれしくもあわれにもと書るはい
かなる事ぞ公答曰是等は和文にめづらしき筆法にて
式部が妙手のなす所家父既に賞美せり瑟兮僩兮赫兮
喧兮といへる毛詩の語勢にも似たると宣ふ又問式部
石山寺に通夜して中秋の夜水月を觀じて物語の趣向
うかみしをわすれぬ內にと佛前の般若經を本尊に申
請て須磨明石の卷を書けるよし此事いかゞ公答云河
海抄の序に既にかく見へて古くいひつたへたる事な
れども古書にいまだ見當らず翁快々（ワウ〳〵）として悅びざる
色を顯し山住のあさましさは都の人にすかさるゝ事
多しとひとりごちければ公の宣ふ我聊汝をすかせる
事汝何をもて不滿の色をあらわすと問給へば翁が云
君は實澄公にてはおわせじ翁が詞に乘じ某と名乘て
戲れ給へるならんもし左なくんば一樹の蔭の情をた
れて今少こまやかなる事をもかたりきかせ給へ今宣
ふ所は河海花鳥にも古く記して我等も稚き時人の許

にて見し事ありて覺へ侍る高家三代の考勘のうちさぞかし珍敷發明やおわすらんといへば公大に當惑ましく父祖三代の抄物數條の説少なきにあらざれども今問所の三箇條においては此外の發明なし汝また所存ありやとのたまへば翁が云それにたがふ事おわさずば翁が頑なるかうがへを少しく述侍るべしいづれの御時にと書るは長恨歌の發句に唐の玄宗の事を漢皇重色と書るより出る物ならん元來桐壺は長恨歌を俤にたてゝ書る巻なれば桐壺帝を玄宗に比し更衣を楊貴妃に准せる延喜とも桐壺の御門ともかゝでいづれの御時と書たる此意なくて叶まじ紅葉賀の巻におそろしくもかたじけなくもなど書る悉分個分の筆法とばかりのたまひては筆法はすめども文意はあきらかならず是は源氏の御心のうちにみづからの御身のうへのおそろしく御門の御事をかたじけなく冷泉院の生れ給へるをうれしく藤壺の御心を思しやればあはれなるをかく色々に思ひ給ふもの字四つにてあるべし賢慮いかゞならんといふに公大に閉口ましく先賢いまだ發せざる所誠に珍説といふべし般若の裏へ書る事に附ても又私説ありやと問ひ給へば然り此事古く云傳へたりといへども一通り肯ひがたし式部草紙書べき立願に參籠しながら料紙の用意なかりしは麁忽といふべし思ふに釋迦一代の藏經華嚴の大乘は聾唖のごとくにて聽衆の耳に入らず阿含方等に至りて小乘乳酢の經を説給ひ衆生の機やゝとゝのひて小乘を誠とおもひ有相の法に着せる時般若濤汰の經を説かれて色卽是空なりと今まで着せし有相有色は皆空なりと宣へりされば今まで有しを空と説るが般若經なるに源氏物語は寓言にして夢の浮橋のたとへのごとくもとなき所にかけわたして事を設たれば空卽是色の法味にて般若のうらをかへして書初しなるべしや是又賢慮いかゞと問に公いよ〳〵閉口し給ひしが渠がごとき賤夫に詰られて我のみが父祖の名を汚さん事口惜と思しめしければ汝が考へ得る所力を用ゆるに似たり去ながらさやうの鑿説は縉紳家には用ひぬ事なり只穩なる一わたりに心得ぬるぞよきとのたまへば翁微笑て云公今更過(アヤマチ)をかざり給ふな堂上家に鑿説を嫌ひ給ふと宣へどもそれは中古亂世に道衰へ上代の事の明らかならざるより云出せる事にして久堅のあめあらがねの土とのみつゞくものと

心得よと定家卿已來敎來るもたゞ歌などによむ時はそれを瓢形なりと爭はんもよしなけれど古書を註釋せんには少しも義理をよく辨じ作者の意をかくさぬやうにせん事專一なるべし兼良公の秘訣に子のこの餅の三つが一に左傳の絳縣の爺を引かれたる何とて是を鑿說とは捨たまわざる公三代の抄物もなき以前だに源氏はよまれし上はこと〴〵く無用の鑿說とやいふべき唯村老野翁に閉口をおしみて大道をあやまり給ふ事なかれ匹夫をも志を奪はざるは聖人の道なり此物語のうへは姑く舍て天下の政だに諫の皷を置批難の木を立て下民の詞を取用ひ給へるとこそ承りし今天下武家に歸して只文學にのみ募り給ふ身なればこそかく下情を蔽ひ給ふとも其害少からん若大臣天下の刑罰を行ひ給ひてかく威勢につのり給わば君を出して桀紂たらしめ給わんとはゞかる所なくのべければ公は面に汗してすべり出給へりとぞ

嵯峨の奥

入道前內府實澄公春服既成の頃ほひ花鳥の色音もゆかしく思して心置給わぬ近習の臣三人四人具せられ西の郊外に出給ひ大澤廣澤の池を臨み名こその瀧の舊蹟も尋ねまほしくいづれの緒よりとよみしも松ものいはゞとひこましなど戲れつゝそこととなく分行給ふに過し頃關らず立より源語の問答に及び給ひし隱者が事おぼし出てさるにても一見識の面白く殊に世を諂はぬ氣象の忘れがたければけふもいざ立寄て問ばやと嵐龜の尾の花に背けてかの山道を攀給ふに頓て其庵に至り給ひぬ從者をも走らせず柴の扉押明て入給へば主は例の脚折たる机によりてしばし午睡し侍りしを高らかに咳かせ給ふを驚て見上たるに忘るべくもあらぬ溫良の御顏ばせなれば急ぎ机を押やりふつゝかなる足にてまろび出ぬ公莞爾と笑わせ給ひ「山里にひとり詠むる心こそ花の有代もしづかならんと宣へば日頃音せぬ人のとふらんとよめるも花なさけなるを先々こなたへと入奉り所に付たる木の實など參らせて何くれと語り給ひ公元來賤を輕んせず翁も尊きを忘れて心の底を包み得ずはて〳〵はかの物語の事に及びて翁が云揚名の介ねの子の餅とのゐ物の袋を三箇の秘事とし侍る事何れの世よりの事にや甚不審全く式部が胸中に設たる事には非ず案ずるに後人解し難き事を考得るに高ぶり多く人のしら

ん事を惜みて我一人の才力に傲らん爲なるべし古今傳授など云事も貫之躬恒が腹心にはあらず古の事を後世に傳へんには書に增る事有べからず夫に書外に傳有と云事肯ひがたし且明白の大道に隱し包むべき事有べきともおもへず聖人の道五帝三王より周公孔子に及び今此國に傳えて一毫の秘說なし佛家に顯密と分れて眞言秘密の法あり是恐らくは竺土の妖術にして實に世を惑はし民の誣の法なるべし吾神道に神秘と稱じて同じく唯授一人門外不出と珍重する事又怪しきの甚しきもの也神道は日本の大道也上一人より下兆民まで知らん事こそ有まほしけれ押て支那天竺に及ずとも惜む事有んや案ずるに神道と稱ずるもの其權輿慥ならず先我國を神國と云事日本紀より文德實錄まで五部の書に見へず漸三代實錄に至て初てしかいへりさればそれより先に神道と云る事些に一二ヶ所に見へたれども神國の道と云事にはあらずして只大道の神にして測べからざるの稱也然れば今の神道と云事は全く凡常の建立なれば老佛の異端よりも其見解狹少にして巫覡の小道に比すべきものならんさればこそ儒佛莊老の道は遠く吾國にわたりて信ずるものあれども我神道は他の國はさておき日域にさへ絕々に成行事全く楊墨が屬なるべし然れども其狹少にして海外まで信ずべからざる事をば兼て作者も心得たるにや面授口決と辭を殘しくまぐ〳〵の覺束なき所をば神秘々傳と隱して奧深く思わするの謀なるべし是明白の論にして異論有べからずといへども吾國に生るゝもの其國を譏るに似たれば心あるものも皆覆て顯さぬ也夫をよき事として神學者流の强慾者是に謝物の數を極め何の傳は白銀何枚何の傳は黃金幾囘とよき價を求めて傳へぬる事うらめやうらめや恨めしき道の末と成行も初め秘傳と定めし故なるべし夫に倣ふにや何事にも秘傳と云事有を思ふに軍旅の法及刀鎗の術などは互に勝負存亡を爭ふものなれば人にしらせずこなたのみ知る事を尊ぶも有べし是既に六韜の六經に劣り王道の覇道に增れる所也中に就藥に祕法ある事更に信じ難し醫は仁術にして人の危難を救ふ藥なれば一人も多く知らしめて此藥にて天下此病をして人を損せしめざらん事こそ有まほしきを家法家傳と秘するは鬻ぐものを少くして我一家に價を納ん事を思ふ悋情にて何ぞ仁者の心を論ず

べき是又淺猿き事ならずや併公の尊意を伺ひ敎誨を仰ぐと聞えしかば

神道の受

公點頭まし〳〵翁が申處的論と云べし然れども經學にのみ泥て國學に疎也故に巫覡の末術を見て神學の本道を窺ふに似たり且醫家の秘藥眞言の密法の事我も疑ひなきに非して曾てさる老宿に問し事有其人の云秘藥と云は人の肝を入膽を入及び胞衣等を入る藥は猥に傳る時は己がために人を害するに至るべし人中黃人中白其餘穢惡の物を加ふる藥は病人是をしればいなむ心有かゝる配劑を秘藥と云て深く其劑を隱す今參蓍黃甘のみの藥を秘するは法に悖慳なるにして名利を貪るなり喪命墮胎藥をして愚惡の人に傳ふれば世間に大害有りこれらを秘法と云て又隱す眞言家には有驗の法を修す法に依て爰に利有てかしこに害の有あり增てや朝敵佛敵などをば調伏の法有此法をもて愚惡の人に傳る時は己に害ある人を調伏し己に利ある事をば他の害を厭わず行ふに至らん然らば師たるもの能門人の篤實を照して授くべき事なれば是全く秘するをもて道理とすべし刀鎗の術なども奥意は必勝の位なれば是又麁濶の人物に傳へば世に害有べし軍旅の法は尤翁が申ごとくならん扨神秘と云事は吾國の大道也夫をいかにと云に唐土は德を以德に讓と極て一天下の人皆帝王と成の國也日本は神代人皇血肉を傳て君は萬世の君臣は末代の臣也然れば天子の事は天子限の神秘にして他人の窺ふべき事に非ず攝關の事は五家の神秘三公の事は淸花槐家限の神秘にして是又他の窺ふべきに非ず征夷將軍は淸和源氏家傳の神秘にして他姓の窺ふべき事に非りしを鎌倉將軍衰癈の頃北條家執權として補任を行ひしよりいつとなく人心をして權勢いたれば誰人も天下を掌握する事と覺へ夫より而下列國の群雄競ひ起て天下を爭に及べりと雖織田豐臣の如きも終に靑幕を捲けざるにてしるべしかくのごとくに掟たる國風なれば其社は其社の神秘此宮は此宮の神秘として他へ洩さず他を窺はぬを道とし夫に倣て百工百職も己々が家風を守るをもて神秘とする事恒の產ありて恒の心あるの敎にして上下咸く其業を守りて爭わず天下萬々世安穩泰平の道ならずや然ども翁だに此趣は未知らざれば世俗知る人少く雲上月卿の家には各其職掌

をこそ秘傳すべきに誤を傳えて是は歌道の家これは鞠道の家と技藝の上を珍重する事衰世の有樣にて識者の嘲を恥ざる事にこそと宣へば翁大に感服し何か包まん今迄は堯舜の道のみ尊くて吾國の渠に及ばざらん事の恨めしかりき今圖ざるに山棲へ珠履を忝ふし尊貌を拜するのみならず始て君子國の正道を聞事を得て所謂天の八重雲を科戸の風の吹拂ひて蒼天を仰ぐ心地し侍ると聞ゆれば公も歎喜の御顏ばせにぞ見へ給ふ爰に所がら赤烏早く西山に沒しぬれば又かさねてを契りをきてぞ出給ひける

橘の下

北野隨念寺に寓居せる空心と云尼師疾病なる時生姜を需められしに若き尼生姜の皮をもさらで與へたれば莞爾として橘の下〳〵と獨言して嚙れたり是は古德の垂戒に他の病を介抱する人は菩薩に供養する思ひして懇ろに看待すべし病人は橘下に臥る乞丐の病る思ひになりて意に叶はぬ事も忿恨を發すべからずとあるを此尼師思はれたる也とぞありがたき志にこそ侍り

欲は身の毒

鳥獸を殺すのあしきはしりて人の意を惱ましめあるひは其業を妨げ奪ふやうの術をなすことのあしきをしらぬ人もあり世に念佛者にて欲深しなどいふ人も有學者にも私の逞しき人も有道をもて私し人をあざむくは天刑をいかん

鼠大根

江南の橘江北にうつせば枳となるは土地を替れば尤さるべきことにして又假染にも他の氣にふるゝによりて氣味を變ずることあり此頃近江伊吹山の蘿蔔を得たり象圓く根の末細き尾のごとくなれば鼠大根と俗稱す此物屎尿の力を借ず自然生にして辛辣比類なく調味を好む人は大に賞翫す然るに船をもて他方におくれば氣味大に減ず陸路にては元のまゝ也と云り是水氣に觸る故なるべし

作魔地を失ふ

良能云人のよき句したらむに驚き我も負まじと思ふ心是卽作魔也その日は其人に手柄をさせて遊ぶべし未來記にいへるかやうの時我も〳〵とあらそふ心いできたらむ己が俳諧の地まで失ふべしとかく承りながら餘人はしらず大江丸此慢心度々出て修行の地を

うしなひし事數度也後悔跡にかへらずよつてざんげして書置く也とあり

下手のなき世

信夫云何の道にても四十年計前かどに名人上手功者下手とわかり下手は下手なりに樂しみ年をつみて功者となり上手といはれ天然と名人の場へも至りし事也今は此下手に成ている者なくなりてむりおしに上手といふものになるゆへ名人といふものも出來ぬ樣になりしと語られしも早廿餘年の昔がたり也此下手になりてゐたる人こそ風流最上の人ならむに左樣の人のなき世こそ恨なれ

火替の神事

夏の季寄に住吉の御祓火替と有て此火がへといふ事いまだ句にもむすばずや見あたらず是はとし毎の六月晦日住吉の神輿を堺の津大小路の南なる宿院（一名名越）の丘へ移し奉り夜に入てまた御本所へ還御なし奉る和泉の氏子堺の町人手毎に松明ともしつれて七堂の濱といふ所を廻り大和橋の北なる御輿の居石に休め奉る津の國の氏子住よしの鄕民各挑灯をかゝげ迎奉り御こしを受取舁上奉れば和泉の方の松明一度に打消して闇を躍りかへるなり此祭を遙拜して紀の國和泉路淡路兵庫の湊西の宮尼ヶ崎の浦々に漁どる者共の限りは磯邊に出て提灯を照らし篝火を焚つゞけ祭まいらすに和泉の方の火の光りの消るを期として各還御を拜し己々が濱邊の光りども消して家に入とかやされば此火の光りをせんぐりに目あてとし程遠き浦々島々迄もかくの如く祭るとか然れば境遠き道はかりがたき廣大なる御はらひ也是を住吉火がへの神事と申奉る也和泉の人どもの家々にかへる時ははや夜半なれば秋のうつる折から誠に夏越しの正しき事是に增るはあらじとぞ思われける「火を替るさかひの町や秋の風舊國

天下の俳諧

天和貞享には談林元祿の頃は正風寶永には其角が洒落正德に不角が化調享保に沾州が比喩長水の五色墨乙由が伊勢風元文に淡々が浪華ぶり湖十が浮世などゝ流行すれど一人の俳諧にあらずして天下の俳諧なりと雪中庵蓼太は申されしと也

武運の稽古

駿河臺の鳩巢先醒の庵へ或日若侍衆武藝の場より歸

るさに來て例の文談に及べり翁云よう武藝は各の家業といふべければ常に稽古有べき事也但武藝と武運と何れが重き事と思ひ給へる翁は武藝より武運は重き事と思ひ侍る其故はいかに武藝に達したる人也とも武運盡なば何の詮かあらん長湫の合戰に森武藏守は打物取て鬼武藏といはれけれどもかけ出るとひとしく銃丸にあたりて卽時に果ぬれば武藝も武勇も用ゆべきやうなく侍る然れば武運ありての武藝ならずや各武藝の稽古あらば先武運の稽古し給へかしさて武藝の稽古はそれ〴〵の師に問給はゞ委しかるべし武運の稽古におゐては藝術の師のしる事にては侍らずそれは翁などこそと語りのこしけるに翁の仰事には候へども武運の稽古と申事こそうけられ候わねもし稽古にて及ぶ事ならば誰か稽古せざるべきといへば翁頭打振ていや武運に稽古こそ侍れさらば承らむといへば翁各思案して見給へ運は何國より出る事にて侍る天より出るにあらずやされば世話にも運は天にありと申候とかく運をば天に祈るより外はなかるべし天の心に叶わんとならば天の好める事は何事ぞ惡める事は何事ぞと尋ぬべし翁つら〳〵天の好惡を案じ見るに天は仁を好で甚不仁を惡む信を好で甚不信を惡む其いはれを云に天はたゞ萬物を生ずるを心とする故に古より今に至るまで年々人物を生じ〳〵てやむる事なし秋冬肅殺の氣行わるゝといへども果して肅殺するには非ず生氣を固うして根へ歸せしめ春を待えて又發生せんとなり易に生々之謂易といひ天地之大德曰生といふは此事也天に有て物を生ずるは人に在ては人を愛するなり各是をもて見給はゞ天の仁を好て不仁をにくむといふ事疑ひなかるべし又信を好む事をいはゞ日月星辰の行度萬古を經ても一日の如し日月の食を見給へ遙に大空の外なる事を爰もとにて推歩するに分秒迄もたがはず是に(過たるカ)愆なる事あるべきや天下の至信といふべし然れば人は外の事はしばらくさしおく只仁にして信にだにあらばおのづから天心に叶ふべし天心叶わゞなどか擁護なかるべきさりとてしばらく仁を行なひ假に信を守りて其驗あるべきとにはあらず是は平生にある事なり常に仁を好て人を損なわず常に仁を篤うして人を欺かずかくしつゝ歲月を積なば其誠天にこたへてはからざるに自然の冥助もありなんされば戰場にて

もおのづから禍機に觸ず矢石にもあたらざるべし翁が武運の稽古といふは是を申にてこそ侍れ老人の僻言と聞給ふべからずとあるに座中よりひとり翁にいひけるは武運の稽古と申事あたらしき事承りて感服し侍る今より此稽古忘れおこたるまじきにて候但世には仁にして信ある人に禍あるも有不仁不信なる人に福あるも有顔回は大賢なれ共貧窮にして夭し盜跖は大盜なれども富厚にして壽し翁のいへる武運の稽古も爰に至て少し疑はしうこそ候へ是はいかゞ心得侍べきにか候翁それ善をすれば福あり惡をすれば禍あるは是正理の前にて必定の事也それに幸あり不幸あるは時の仕合にて不定なる事也聖人は只正理を說給ふにて侍る不定の事をばいかで說給ふべき譬へば身に病なく長命ならんと思はゞ常に酒色を禁め養生するに有主君の氣にあひ立身せんとおもはゞ職事を懈ずしてよく奉公するに有然るに養生よくても夭死する人有養生あしくても長命なる人有さればとて養生しても益なし養生せずしても害なしとはいふべきやよく奉公しても不幸にて立身せざる人有奉公よくせずしても幸にて立身する人有さればとて能奉公しても益なし奉公よくせずしても害なしとはいふべからず若養生しても益なしといひて日夜酒色を恣にせばやがて病死に至るべし奉公しても益なしといひて度〳〵職事に懈らばやがて黜罰せらるべし然れば養生は長命を得るの道奉公は立身を得るの道たるは是不易の理といふべし只歎かわしきは世俗の有樣也專に身を利して人をそねみ偏に智を恃て詐り飾る自ら是を世を渡るよき計とこそ思ふらめど終には天に見捨られぬべし人として天に見捨られなどいかでよき事のあるべき翁若き時より世に時めく士大夫の邸宅を過て見るに三つ葉四葉に作り並べたるに歲々に諸寺諸山より捧げすゝめける武運長久の牌を門に釘せぬはなし然るに其家或は刑戮せられ或は子孫斷絶して武運長久の牌は其儘門に有ながら主うせ家滅びて跡方もなく成行もあまた有是皆武運の稽古なき故にこそとおしはからるれ日頃稽古なくして祈禱厭勝の力にて武運を守らむと思ふ事愚なる限り也とあるに若士の人々も感服して歸りけるとぞ

宇治丸

宇治丸と云は鱣鮎にて價金百疋の由人々云傳へたり

中は左樣の價にては是なき事とぞ近年大坂中の島の何某と云富貴なる人出入の幇間を召連れ京都へ登り數日逗留の内或日宇治見物に行しにかの幇間が旦那宇治丸立とはいかゞと云にいかさま來たこそ幸ひよきに計らへと有に心得候とて菊屋とやらん料理屋へ至り尋ければ亭主出宇治丸御所望に候やと云にいかにも所望也と云に然らば奥へお通り下さるべしと座敷へ伴ひ扨家内の樣子甚混雜の體にてやがて亭主上下を着し座敷へ出先以て大慶の段有難き旨一禮をのべそれより盃出取肴鉢もの類あれ是出せども鱚はかつてあらざればいかゞと思ひながらやゝ久しく待しに漸細き鱚二本燒て出したりされどもつゞいて持出る體もなければ今少し澤山に出し候へといへば畏り候とて又餘程ひま入りて三本燒て出しぬ是にて茶漬など喰ひ酒も納めて拂の書付取らんといへば亭主御心持次第下さるべしと申に夫にては如何なれば是非直段聞せ候へと再三尋しかど兎角御心持次第と申ゆへかの幇間亭主を片隅へ呼び内分にて尋ねけるに是迄斯樣なる格もあらんに心持といふは大體いか程なりやと亭主云是迄の格を申さば金廿兩又卅兩申受候至つて過分なる心持に申受候は五拾兩も御座候といふに驚き夫は何故左樣に高直にやと問ふにいかにも高直なる譯申さんと裏の小屋へ連行見せけるに大半切桶に鱚數杯有亭主ゆびざして云斯の如く宇治中の鱚を丸で買取申候去により宇治丸と申傳へ候此内にて纔三五本目利仕料理致し差上申候殘りの鱚は此宇治川へ殘らず放生致し候也右の樣子に候へば施主の御方所望被成候事甚稀候得ば私祖父の代に兩度親の代に一度御座候まゝにて私の代にては今日が初に候元より此儀に付口錢世話錢申受候儀は曾て是なく候只私の身に取つて外聞に候へばいか程にても御心持次第つかわさるべしとぞ申にぞ據なく亭主を京都の宿へ連歸り數十金の金子を渡しかへされしと也

羊肝牛干

羊羹は羊の羹と書ども羊肝にて求肥は干牛（ヒギウ）の容に似たるゆへ轉語したる也故に求肥と書松風と云菓子は表に罌粟をふり裏は模樣なき故浦淋しと云心にて松風と名付し由春日野と付しは予が綺語文草にもしるし置しが物の名を付るはこゝろすべきにこそ有べし

氣違法齋

氣違ひよほうさいよと云詞は法界を言誤れるかと思ふにさにあらで元和年間常陸國に法齋と云る貴き僧有て太皷鉦の拍子を揃へ躍念佛を催ふして勸進を乞ふ是を法齋念佛とて古き書にも見へたり寛永のころ狂人の法師の躍念佛をまねて獨り町々小路を走る幼童集りて氣ちがひよほうさいよと言はやせりとぞ

氏神正一位

世俗に我生土神を我氏神と心得たるは誤なるべし氏神とは源氏に八幡平家に平野藤氏に春日などを云産ずな神とは別なり神社に位階を授るは尊卑をわかつ爲にはあらず正五位には田十二町正四位には田廿四町を奉らるゝ也正一位には田八十町の神領を寄附する也今稻荷といへば一歩の田もなく正一位と唱ふるこそいとおかしからずや

七子の彫物

絹に七子織有金具にも七子とて細點に彫しを云其紋の魚胎に似たるをもて名付しなるべし魚を古語に魚(ナ)といへば魚子(ナノコ)と云

淺葱葡萄

紫の朱を奪ふとは今の江戸紫を云にあらず昔の紫は今の蘇枋に似たるゆへ云淺黃は黃色の淺きにあらず葱の色を葱(ギ)と云て根葱(ネギ)、刈葱(カリギ)、分葱(ワケギ)又葱帽子(ギボウシ)とも書り然らば淺葱葡萄なる事明らけし

ひやかし逃助

吉原へ見物のみに行を素見と云俗にひやかしと云昔山谷に漉返しの紙を製する者紙の種を水に漬置その冷くる迄に行く廓の賑ひを見物しけるより出たる詞なるよし京攝に無錢にて戲場を見物するを青田(アヲタ)と云油虫とは別に意あるにあらず逃助(テウスケ)とは逃(テウ)はのがれ助はたすかると訓札錢場錢共に逃れ助と云心なるべし

辨慶太皷持

遊所戲場等へ無錢にて供するを江戸にてヲンブ、ヲブサルなど云是負れ行の心にて人に負るをおんぶと云御側さらずの機嫌取を辨慶と云は旦那を判官と云より號牽頭幇間を太皷持と云は紀州の和歌祭に雜賀囃子に重き鉦太皷を二人宛して持行いかなる力量あつても兩方はもてず鉦をもつ者は太皷をもたず太皷もつ者は鉦をえもたぬと云謎々より名付しと云嗚呼ゆえあるかな

角兵衛獅子

京攝にて越後獅子と云を東都にて角兵衞獅子と云武藏の國氷川神社に古き獅子頭有角に菊の紋付て銘に御免天下一角兵衞作之と彫有といへば角兵衞は古代の獅々頭の名工と見へたり

悴餓鬼

我子を悴といふ詞は痩枯（ヤセガレ）の略語にて人を卑め詈詞也餓鬼といへるも是に同じ今は貴賤とも我子を稱する詞となれるは謙辭なり文字には悴と書今俗に躄又悴と書吾を憔悴枯槁と謙辭也と云夜豆加禮とてもとは奴僕の稱也今自稱して僕とも吾ともいふは我子を悴といふに同じ不佞野拙など皆謙辭の心ばへ也

戎紙神在餅

紙の隅の裁遺したる俗にゑびす紙と云りこは十月には諸神出雲の大社に集り給ふゆへ此月を神無月と云惠比須講は此月にするゆへ此神ばかりは出雲へ行給わねば神の立遺り紙の裁殘りとを兼てゑびす紙とは云とかや出雲の國にては神在月とて家毎に餅を搗小豆と共に煮るよし是を神在餅と云京攝にては善哉餅（ぜ）と唱ふ誠は箭祭餅とて武家にては呼よし予戲れに云江戸にては汁粉と云も戎の名にて我自刊我本戎の名に似寄とあり比留兒餅と唱へなば神在餅のよき對句なるべしと可笑

看板の謎

鏡の銘に天下一と鑄るは鑄手の自賞なるべし醴酒の看板に三國一とは醴酒は一夜酒ともいへば孝靈年間峻河の富士は一夜の內に顯せしと云心にて三國一と云なるべし饅頭を賣る店に刎馬の看板を出せしとはあらうましと云昔の謎なるべし浪華に虎屋饅頭名高かければ猿屋とも猫屋とも付たるなるべし或人虎屋の向ひにて饅頭屋をせんに虎にまけぬ名を付呉と云虎屋に負ぬ名ならば國姓屋饅頭こそよからんとは寶曆ごろの洒落なるよし紙屋の門に笹を立竹箆の昔をしらせ湯屋の入口に矢を出おくは弓射と湯入の謎なるよし白粉屋の出箱に凸の形あるは中高な顏には白粉のよく移るを云昆布屋の看板に富士山は水からの謎なるよし山椒を昆布に卷て見ず辛との說は予が綺語文草に出せり今燒芋の行燈に八里半は九里に近き味ひをのべ十三里と書は九里四里味ひと云よし生燒を十里と云は五里五里じやと云よき惡口なり

代神樂

太々神樂といふことは代神樂にて講中の人々に代り

て神樂を奏するがゆへ代神樂なるべし代大神樂と書べき也一万度の祓とて幣串を講中へ配るに串を入る箱を御はらひと唱ふるさへおかしきに千度一万度と云は佛家の經卷を誦す數を唱へて施主へ送る此卷數に倣て千度一万度の祓などとて幣串を祭主へ配る笑に絶たり

月待日待代待

巳待酉の待（十一月酉の日に鷲大明神に詣）　月待日待庚申待廿三夜待廿六夜待などの待は俟の義にあらずまちはまつりの約語にして祭祀の義也子待は子祭巳待は巳祭なりと云り代まちも代祭と云事にて代參代垢離などの意なり祈念する人に代て祭の稱なるべし

盃の銘

東都にて大盃の銘を武藏野と云りこは酒盃大者曰武藏野言は野見不盡之意也酒の多くて飲盡されぬを武藏野の廣くて野見盡されぬと云謎語なるよし聞けり

菟葺

寺を菟葺と云は往古貴人は皆檜皮葺を用ひ賤民は板屋茅葺などなれば和歌にも板屋もる月茅が軒端などよめり只寺院は壯麗を專らとすれば菟葺に造りしなるべし蕉翁の吉野の發句に菟葺もの先ふたつは是を詠せり

七黨八平氏八庄司

武藏の七黨とは私市（シヒタン）丹兒玉金子村山海老名須貝（スガイ）をいへり又坂東の八平氏とは平山稻毛長井榛澤榛谷都筑足立豐島等也紀伊の國熊野の八庄司と云は玉置（タキ）湯淺秋津芋瀨（イモガセ）眞砂山本日出湯川（ヒノデ）等をいへり

愛子の庄司

道成寺の謠曲安珍清姫が事は古き畫卷物にも有て謠曲に清姫が父をまなごの庄司に作れりまなごは氏にあらで實は眞砂なれども娘をふかく寵愛すると云心にて愛子の庄司と異名に呼かへしなるべし庄司娘を寵愛の餘りと文句にも見へて明らけし

我國のかな附

漢字には日月と書て我國の詞には月日と讀風雨と書て雨風と讀山海を海山風波を波風晝夜を夜晝夫婦を女夫東西を西東南北を北南と文字に反してかなを附たり

雷除桑原

桑原といふ所は昔菅家のしろし召たる所也延喜の霹

靂その後度々雷の落たりしに此桑原には一度も落ず雷の災なかりしとかやゆへに京中の兒女子雷の鳴時は桑原々々と云て咒しけると也

めりやす莫大小

手覆ひにめりやすと名付る物は一名莫大小と云て手のふとき細きによらず身にあふとの心也扨めりやすと云ふは原戯場の樂屋にて三味線の名目にして調子のめりやすきと云事を下略して名付ると云其三味の手長き有短き有かの手覆のめりやすは此三味線の手より名付しと知るべしめりやすは三味線の名にて唄の名にはあらず長き唄を長唄と云短き唄を女里家壽唄と云へり

鐵火味噌

金とさへ云ば鐵火も握り兼ぬと云心にてか袁彥道の黨に素躶の者を鐵火博奕又鐵火打とも呼よし東都にて味噌の中へ種々の加藥の入しを鐵火味噌と云は京攝にて諸味の中へ大根など切込しを泥坊漬（ドロボウヅケ）と號るに同じ芝鰕の身を煮て細末し鮨の上に乘たるを鐵火鮓と云は身を崩しと云謎なるべし

自墮落者

東都にて泥坊と云は盜賊の異名にして京攝にて泥坊と云は放蕩者の異名とせり銅脈とは雁金（ガンキン）の名に呼び道落者とは京攝の泥坊に類す是自墮落者と同じく放蕩人の異名なるべし極銅とは極道落者の略語と思わる俗諺に仕事幽靈飯辨慶其癖夏瘦寒ぼそりなんどいへる輩を云なるべし

蓮葉女

婦女子のおとなしからぬを蓮葉女と云事は西鶴が一代男に書有て長唄娘道成寺の文句に吾妻育ははすはな者じやへと故慶子（俳優長中村富十郎）が己を謙退の詞也此唄東都にては都育と諷ふ此名は浪華（浪華ヲ云フカ）の宿屋にて客馳走の爲置たる女の名のよしにて今も竹の皮のなき田舍にては諸品を蓮の葉にて包藁にて括る下品なるを云也御傳馬とは刎るより號奴と云は爺嚊又は金平娘などに類し衒妻とは色を賣る女を云なるべし發才とは賞たる詞なるを發才女郎とは卑賤の女の名と思ふは誤りなるべし

鵜の目鷹の目

目廉を付て人を見るを諺に鵜の目鷹の目と云二鳥は目の疾物ゆへ譬にいへると思ひしに硫黃に鵜の目鷹

の目と云有て上品なる物を云と也硫黄の色の黄なる彼の鳥の目の色に似たるゆへなるべし

桃鬼灯

京攝の南蠻黍を東都にてとうもろこしと云是に限らず都ての物名を異にする物甚多し中にも夏中金魚の餌とする物江戸にてぼうふらと云京攝に云子子（ボウフリ）にあらず子子は俗にどりぶりと云壬生狂言の棒ふりに似たるゆへ云カ　いわば上方に桃鬼灯といへる虫に似たり此桃鬼灯の名義解らず桃の如く甘み有て鬼灯の如く苦み有て云か金魚ならねば味わかるまじく只色の薄赤きゆへ桃鬼灯と呼か識者の考をまつ

蝸牛

蝸牛を京攝にてはかたつむりでゝ虫俗にデン〳〵虫東都にては是をまい〳〵つぶれめい〳〵つぶれと云はいかなる心にて呼やらんいぶかし

箱入娘

今俗間に深窓に養ひかしづく娘を箱入娘と云は彌生雛祭の時婦女子の弄ぶ娘の木偶は箱に入あれば夫を云にやと思ひしに竹取物語に竹取の翁赫夜姫を竹の中に得て美しき事限りなくいと稚ければ箱に入れて養ふと云より箱入娘といふよし古き詞也

蚊の喰ぬ咒ひ

世俗に正月寶引などの戯れをなして蚊の咒と云は譯なき事也實に蚊の咒と云は幼女のもてあそぶ羽子板にて羽根を突を云也ゆへいかにと問に秋の始蜻蛉といふ虫出て蚊を好食ふ也羽根は木蓮子を羽根に付羽子板にて突上れば落る時蜻蛉の容有是蚊を恐しめん爲也寶引雙六（道中雙六）などを蚊の食ぬ咒といふべからず

鞦韆蜻蛉返り

蜻蛉返りとは迯さまに落て下にて直になる事にて羽根羽子板にて突時突れて下に落る析則蜻蛉返りす又上巳の日大内にて鞦韆とて行なわる式には色〳〵あやぶ（どカ）りたる物を高き木の上より釣下す事を云是を鞦韆とも云世俗ぶらんこに釣下すなど云此事を云也

道具と牛

すべての器財を道具と云は佛語にて俗には器財を具足と云しを今道具とのみ云は佛語になづめるなるべしと或人いへり又家の棟木を牛と云は汗牛充棟と云事より誤り來りしなるべし

惣嫁の出火

寛政四子年五月十六日夜子の刻より同十七日酉の刻迄火元大坂七郎右衛門町二丁目鹽屋彌兵衛濱納屋より出火の寫町數八十九町家數二千百十八軒竈壹萬五百四十二軒納屋百九十七ヶ所土藏百八十三ヶ所穴藏六十二ヶ所橋九ヶ所宮三ヶ所道場九ヶ所寺二十九ヶ所藏屋敷十五ヶ所北組惣會所一ヶ所銅座一ヶ所俵物會所一ヶ所西與力四軒東與力九軒東同心衆四十七軒御弓同心十軒御破損手代十軒川崎村家數四十一軒竈百九十一軒寺一ヶ所北野村家數百十軒竈二百三十一軒寺一ヶ寺曾根崎村家數四十一軒竈二百十六軒船場東西五百三十五間南北五十九間四尺天滿東西五百三十四間南北五百五十一間四尺死人女一人男二人〆て三人也是辻君惣嫁の遺恨にて附火せし也と聞へし

小倉色紙

關白秀吉公小倉の色紙を集めて愛せらるゝに付新に數寄屋を建千の利休を招き給ふ相伴二三人有て四月下旬の事なれば風爐の茶の湯也各曉方に伺公す短檠に燈火となく有明の月床を照らす床の掛物を見れば郭公啼いる方を詠むれば唯有明の月ぞ殘れると云ふ小倉の色紙のかけ物也諸人其作意を感じあへりとぞ

友衛貝盡

世に貝程數品ある物はなし昔は金銀の如く重寶せしよし右は友千鳥と外題して尾陽藩中庵原氷室の兩氏同國野間の内海溫泉に遊びし紀行の中に海濱にて見たる貝の寫し也此餘いろ〳〵の名所など畫にも書有ておかしき書也

有樂翁の茶

大坂にて織田有樂老或二三人を茶に呼給ひしに貴人の茶なれば外人とは違ひ其上石燈籠の火をも見るべしとて未明より案内を申されければ歷々の人出て申けるは早々より御出有樂分て忝く存じらるべし老人の事に候へばいまだふせり爐に火をも入ず候先是へ御入候て御休なさるべしとて路次を明中路次の脇に小座敷のありけるに入て休息しけるに石燈籠の火幽に殘る松風の音のみして曉方の事なれば物淋しく又は凄く思ふ折節人のうがひする聲障子のあなたに聞へければあやしく思ひ居るに琵琶を調べ平家の小原御幸を語りける異なる上手なればいと面白く感に絕聽聞するに明ゆく空も名殘おしく夜も明ければ今一

句所望せばやとさゝやき居ける折節路次の潜を明て有樂よろこび出早々の御出忝なし老體の朝寐御免候へ嘸夜寒におわしつらんいざ御入候へとて何れも座入有けると也

彼平家語りけるは高山か小寺か兩人の內なるべし

秀吉門破

織田公勢州淺香の城を攻給ふ城主大宮忍竹嫡子大之丞同九兵衞防戰す寄手の先手には木下藤吉郎也大宮大之丞は無雙の弓勢ゆへ散々に射る箭藤吉郎が左の股に當るされ共藤吉郎是を事ともせずいよ〳〵進んで惣門を打破る信長公是を褒美して門を破る事朝比奈三郎にひとしとて其諱を返して義秀を秀義とぞのたまひけるされども義の字は公方義昭公を憚りて義を吉と改むる

泣涕微笑

治承元年五月十六日內府重盛の亭へ能登守教經彌平兵衞宗清惡七兵衞景清來りて夜話す三人云法皇御謀反の色有て大納言鹿が谷に來りて會合し給ふ由油斷有べからずと云小松殿宣ふは此兩條必ず推量しけるは疑ひより起るといふと有しかば景清申は關東に賴朝有近頃は關東の武士背く事有御思慮有て然るべしと云內府宣ふは汝が詞理に當れり只恐るゝは關東尊むべきは法皇也と宣ふ景清は涕泣し宗清は微笑してけり小松殿教經に向ひ宣ふは兩人の涕泣微笑の心を尋ね給ふ教經申けるは他の自(耳カ)目あり天の四智有と閉口す內府公又微笑していりぬ

鎗中村

中比攝津國半國の主松山新助と云人庶〻手柄を顯わしける其家老に中村新兵衞といふ者時の人毎に鎗中村といふ異名を付たり此者羽織は猩々緋兜は唐冠也何れの合戰にも敵味方是を見付てすわや例の猩々緋よ唐冠よとて未だ戰ずして敵兵敗北す其後或人強て所望しければ中村彼二品を與へける斯て或時の合戰に中村勢を寄手攻ければ中村を敵知らずして終に中村討死す是中村武具と勇を照合て敵を屈すしかし萬夫不當の勇者なれども武具等にはかゝわるべからず

石川丈山

大坂の夏御陣に石川嘉右衞門重之拔駈して扨門の前にて城方の勇士佐々十右衞門幷に其家臣を打とる其功有といへども拔がけの科ゆるしがたきによつて幕

府公より御勘氣を蒙るよつて剃髪して丈山と號して都靈山に蟄居して歌を詠ずわたらじな蟬の小川は淺くとも老のなみよる影も恥かしとよみけり始め嘉右衞門駿府を出る時に清見寺說心和尙に暇乞せしに和尙申さるゝは戰場は幸ひに居士の願ふ所也と挨拶也嘉右衞門返答には此度旗本に三人も手をふさぐ者あらば一人は某なるべしと廣言せしが果して詞の如し

時平公の墳

左大臣時平死去の前耳より蛇出てイツ〳〵と物云て又耳に入追付て死去也其後墳の邊りに出るゆへ種々供物を調へてすかせども退かず鳴弦をするに地中に閧の聲を作るゆへ又名香を燒んとすれば地中より陰霧起つて火消る供物を備ゆれば是を服す最前は三寸ばかりに有つるが備へ物を喰ひし後は一丈餘りに成ていよ〳〵墳の邊に居るゆへ時平の嫡子中納言敦忠墳の上に一の社を建此内へ納んとすれども入らず先考の魂鬼穢れしと嚴敷戸ざして置れぬ今の世に墳の上に卵塔を建る事是より始りし

位牌の和歌

北條時賴諸國の守護地頭の邪曲を考へんが爲に諸國行脚し給ふ時攝州難波に至り給ふ時一宿し給ふ其主は尼にて其先賴朝公より忠勤せし難波六郎左衞門の末にて難波六郎兵衞と云しが早世して嗣子なく所領は小舅瓜生權之頭に押領せられ身の便なく賤の伏屋の住居をなす時賴公憐み給ひ其庵の佛壇の內に有し位牌の裏に一首を書與ふ其歌「難波潟汐干に遠き月影のまたもとの江に澄ざらめやは其後行脚の節鎌倉に歸り給ひて彼位牌を取寄瓜生が世帶を沒收し尼の本領をそへて給わりぬ凡時賴公諸國を廻り給ふ間三ケ年非道の者をしるして歸り各決斷の上夫々に賞罰を加へられしと也

鯉の差身

或人招請せられて行しに鯉の差身を出すかの客賞味して云亭主の饗應至つて深切也此鯉は淀の鯉なりと思ふ遠路の珍物一入かたじけなしと云亭主客をもふけて何の馳走なし是一種の馳走也しかし客早く淀の鯉の味知る事不思議也と云客の曰淀の鯉に一つの替り有外の鯉は煎酒に入て賞味するに煎酒濁る也淀の鯉は幾度入ても濁る事なしと答ふ諸人其博識を感ず評に曰鯉を籠に入早瀨川に一夜置て調味すれば泥を

はひて清く成ゆへ煎酒濁る事なしと爰をもつて發明せり淀川早瀬なるゆへ其流に住うちに魚泥を貯わへざるゆへに其汁濁らずといふ

穢多の訴

武州在にて百姓の數年飼たる牛死す主人彼牛土葬にせんとす日頃主人と心易き者の云此牛迚も土中へ埋るものならば革をはいで埋め給ふべしとすゝむ主人同心して彼牛の革をはいで其肉を土に埋む其後江戸の穢多頭長吏團左衞門此事を聞て畜類の皮をはぐは我組下の職也彼在の者我手下に付べしと使をもつて云渡す在所中大に迷惑していろ〳〵と詫さま〴〵と扱へども聞入ずして既に公儀へ訴へ團左衞門云私先祖より持傳へ候頼朝公よりの御敎書に書有趣革をはぐ事全私手下に付申候事に候間早々右の村手下に付候樣御取計らひ下され度よしを願ふ此事小笠原佐渡守畏つてさ候はゞ某心の儘に裁斷仕度と有御老中成程其許心の儘に致被申べしと也佐渡守夫より團左衞門と彼百姓を私宅へ召寄られ段々聞屆其上にて百姓によく聞け其法をしらぬとて團左衞門が頼朝公の掟をもつて法を立るゆへ其法は破られずさあれば團左衞門が手下に付べしと有團左衞門大によろこび百姓は迷惑す佐渡守重ねて申渡さるゝは彼百姓は元來權現樣へ御奉公申上たる筋目なれば外人と替り有百姓を團左衞門が方へ引取事は罷ならず團左衞門が一黨を彼百姓村の並びへ引越させ申べしかくの如くすれば頼朝公の掟も立權現樣に御奉公申たる筋目も立なれば其通りに心得べしと申渡されける團左衞門大に迷惑して先達て申上候御願ひに少く間違の品も御座候間此度之儀は御免遊され下され彼願ひ御下げ下され候樣にと御詫申に付其通り事濟しとなり

狐草履を送る

狐火とて遠方より見るに青き火もへて消る事有或人の云我宅の野邊に度々ある事ゆへ考て見るに狐頭を上て息を吹度毎に火出る畢竟此光りにて墓を取と見へて時々蛙の啼聲すると忽止てしばらくして又光り出ると又一人の云は我豫州に有し時我方へ出入する百姓ある夜厠に行其邊狐甚だ多くして火をともす一つの狐厠の外へ來し折彼百姓急に厠の內より出る狐おどろきて逃歸るとて何か物を落す百姓是を取てよく見るに骨の樣なる物也不思議に思ひ箱に入て置し

に其夜狐來りて戸外に云やう先程我落したる物を其許ひらい給へり早く歸し給われ其許に有て益なき物我方になくて叶わざる物也と云百姓云われ物を拾ひたれ共何なるや不知あれはいかなる物ぞと問ふ狐の云あれは火を燈す物也早く返し下されよとしきりに頼むゆへ百姓出してつかわしぬ狐悦びて歸り其後返報と見て時々草履を五六足宛椽の上に置て有扨々奇特なる事かなといふて過しが同村の者草履鞋を作り賣る者有しが此狐の話を聞て彼百姓の方へ來り云様我らが作る所の草履折々四五足つゝ紛失せり尤人の盗むべき所にもあらずあやしみ思ひしが扨は狐が取其許へ進ずると見へたり我作る所の草履持參せりくらべ見るべしとて見くらべしに少しも違ひなく同じ作り草履也其時大笑ひせしと物語也

弓に蜻蛉を付る

人皇廿二代雄略天皇和州に皇居し給ひし頃御狩の時鹿を射給わんとて矢引つがひ給ふに虻來りて右の御肘に食付痛み甚しく既に矢を止んとし給ふ時蜻蛉飛來りて彼虻をくわへて去る是によつて恙なく鹿を射とめ給ふ其時天皇みことのりに宣ふは今日蜻蛉の功により鹿を得たり彼賞ずる爲に武具の紋にとんぼを付べしと勅ありしより今に至つて弓道具にとんぼを付る事故實のよしなり

九郎佛

東照宮若き御時より日課の御念佛御けだひなく御具足の下へは必五條の袈裟をかけ給ひしとなり世の愚人か様の事を聞儒弱の事に沙汰せりとなり然れど神君の御深意には此度の御在陣も必死と思し召又其次の御出陣も必死と思し召なり是必死の戰ひより強はなし暗將の知る所にあらず御守本尊の阿彌陀如來有黑佛と號す香煙と染て黑きゆへ黑佛との み世人思えり左にあらず古へ義經の守本尊にて信仰有し故九郎佛と申也或時御酒宴に勞れ給ひて御寢所に臥給ふに九郎佛枕上に立せ給ひ汝何とて今日我前へ來らざるや早々來るべしもし遲々せば災難有べしと也則御目覺早々御持佛堂に入らせ給ふとて御寢所を出させ給ふにいまだ御寢間の敷居を越させ給わらざるに御床の下より刀を以て御寢所を突上る扨こそとて御家臣に命じて椽の下を搜さしめ給ふに果して一人をからめ捕て見るに小四郎とい

ふ者也此者御傍に召仕れし者也いかなる事にて斯の如きぞと尋ねさせ給ふに元來武田方の者にて君を討奉らん爲に僞つて仕へ奉り近付候得どもかくまで御運強くわたらせ給ふに付て武田の微運の程口惜く存候とて落涙す神君感じさせ給ひて古への豫讓にもおとらぬ忠臣也あたら士を害せんもいかゞ也歸し申べしと仰られ靑銅壹貫文下されて甲州へ返し給ふ彼九郎佛は江戸增上寺に有と云々

惠心僧都

源信僧都博學殊勝の名高く禁庭にめされて僧都に任せらる源信法力の高きを悅びて老母のかたへ文を認め任官の名譽を告らる嘸母の悅び給ふべしと推せられしに老母殊の外此事を恨み歌を詠て送られける

「後の世を法の橋とも賴みしに世渡る僧となるぞ悲しき

源信此歌に感じて富貴を願わず唯貧窮ならではぼだい心も怠たると語り佛像を作るにも此尊體の佛力によつて信心の人貧乏ならしめんと念ず故に源信の作佛を所持して念ずる人は貧賤也とかや源信は世に云惠心僧都の事也

道明法師

昔比叡山の碩學道明法師禁中に來りて御祈禱をなす御簾の隙より和泉式部見染てしきりに戀慕の氣生じて道明方へ行其事を通じて密通し式部歌を詠ず「出てほせ今宵計の月影にふか〳〵ぬらす戀の袂を道明法師返歌に「出ずとも情のあらば影さして心をてらす有明の月其夜は終夜契り翌日夜法華經を讀誦す片隅に怪敷人座して法華經を聽聞す道明あやしみ何者と問ふ彼者いふやう我は北野天神也和僧は法華經の權者也よつて法華讀誦の時は諸神影向ありて聽聞あるゆへ我々如きの末座の神は近付がたし過し夜和僧和泉式部と契りて身穢れしゆへ今宵諸神影向なし幸ひ今宵は我近付て法華經を思ふ儘に聽聞すと也是より道明淺猿しく思ふて好色の念を斷しと也

元政魚料理

深草の元政上人は日蓮宗を尊んで等(篤カ)學にして殊勝の人也元來井伊家に仕へしと也詩をよくし歌を好り老母に仕ゆる事至つて孝心也老人の召仕ひし女ならでは取扱ひあしかるべしとて自目利して抱ゆべしとて隨分美なる女の若きをかゝゆ又老母の身養生の爲とて魚を調へて自料理して老母にやしなふ然れ

ども自今の行狀弟子中への法式はいかにも嚴密にして猥なる事なし去によつてさしも口さがなき京都なれども一人も元政を誹謗なりとそしる者なし元政老年の後中風を病時の人中症院と唱ふ元來佛を作る事上手也中風のゝちは常に手ふるひけれども佛をばよく作らる小刀を持て木にあつる迄は手ふるひけれども木を取て小刀をあてる時はふるひ止みしと云然るに紀州賴宣公の御母公養珠院殿法華經を御信仰ゆへ和歌山へ御まねき有て御對面有其時は御前にても中風ゆへとて安座御免有しと也元政辭世に「鷲の峯にてるてふ月の影の間にかりにあらわれかりに隱るゝ

火の見矢倉

大久保七兵衞殿火の見矢倉は外の火の見より甚だ高し或夜番人の首引拔て有其後彼火の見をば臺は殘し矢倉より上は打折ぬそれより外々の並にすると云綱吉公御代に何にても火の見矢倉の上にて怪敷事あらば書付て言上すべしと仰出されたりよつていろ〳〵の怪敷事を書付て上るに付段々怪敷事ありしと也其後怪敷事は申上るに及ばずと又々仰出されて後は不思議の事もすくなくなりしよし番人の機によつて生ずるなるべし

宗祇の發句

或人の云藤原の義孝の歌に「君が爲おしからざりし命さへながくもがなと思ひけるかな此歌の心は逢ざる前は君が爲には大切なる命にてもおしまぬ心なりしが逢ふてはいよ〳〵思ひ深くなりしゆへ命さへあらば又逢ふ事も有べしなれば始おしまざりし命さへ今はかへつて命長かれと祈る心に替りしと也命さへといふ此さへの字此歌の眼字也おしからぬ物がおしくなりしといふて外の事はいはねども其内にこもる宗祇がほつくに「限りさへ似たる花なき櫻かな是もさへの字大切の文字也外の花はしぼみ又は色替り落花などして見る所なれ共櫻ばかりは日數の限りありてちる所の奇麗に見事なるとても外の花の似よる事ならずましてや盛りの頃は外の花に增りて一しほ見事なる事いふに及ばず其筈也ちる時さへ餘花の及ばぬ物をといふ心也然れば此さへの字にて初中後の見事さをいひおゝせたる發句にて妙なる事義孝の歌に同じかるべし

幽靈の濡文

大坂にて或町人の女房死して翌晩より彼女房の幽霊持佛の前にあらはる家内恐れ騒ぐ事夥しく是によつて檀那寺へ行て此事を頼み何卒御手段を以て此後出止候やうなし給われと云住持是を聞て今夜我行てためすべしと約束し其夜彼家にゆき家内の人々を遠ざけ只一人持佛の間に座す案の如く暮過より幽霊出て忽然として入む僧其様子を見るに彼幽霊持佛の天井を見詰め外を見ずしばらくして消失せり僧思ふよふ扨は此天井に心の殘る事有と推量して密に天井の板をはづし見ればかなぶみ多く有是は女房存在の内不義をし密夫より來りたる文也扨は此事人に見付られては汚名世に聞へん事を恥臨終に心にかゝりたると見へたりと思ひ一々細かに切さきて納めさあらぬ顔にて座せし所へ出仰の通り幽霊顯れ出しゆへ重ねて出ざる様致し候まゝ御安堵あれといひ歸りたり果して夫より出ざりしと也

疫病神馬に乘る

中頃伊勢に住ける馬士夕暮に馬を曳て我家に歸る時に一人怪敷男來りて其馬をかせといふ馬士いふは此馬は今朝より遣ひ宿に歸りて休息させんと思ふ也と彼男がいふ我を乘ては少しも馬に勞れなしせひ借るべしといふ其景色何とやらん物凄く覺へければ辭しがたく馬を貸すあやしき男大に悦びて馬に打乘りて行彼男語つて曰我は疫病の神也此せつ疫神方々へ廻りて疫氣を人の家にうつしてなやます奸佞邪惡の人を先とす其方の家へも行んと思へど馬を借りたる報恩に此度其方の姓名を消べし今宵より鎌田村七兵衛が方へ赴也鎌田村の入口まで馬に乘り形は掻消ごとく失にけり馬士恐ろしく早々歸り翌日何となく鎌田村七兵衛方へ見廻に行て問ひければ七兵衛女房がいふ前夜より夫七兵衛大熱病を煩らひ前後不覺の體にて候といふ馬士内に入て様子を伺ふにきのふの怪敷男七兵衛が傍に居他人には見へず馬士計りの目に見ゆる扨疫神七兵衛が口に手を入て腸をだん〳〵と引出し井戸ばたに持行水を汲んで洗ふ事數遍也其後又はらわたを七兵衛が口より出し疫神團扇を持て七兵衛をあほぐ馬士をふと見て早く歸れと仕方するゆへ馬士は早々歸る其後七兵衛は病死せり其外家内大に煩らひ又は病死し世上以の外疫病はやり人多く死すに馬士の家内のみは安穏也しとかや

淀屋辰五郎

淀屋辰五郎の家滅亡の起りは辰五郎遊里通ひ世の取沙汰をも憚らず家内の納も麁畧なりければ母是を愁ひ兼て親しき老醫有利害を解辰五郎を諫めければ合點行しか遊戯を止むる母大に悦び老醫に禮詞をのべ猶禮謝として家に持傳わる茶壺を送る此老醫茶事を好まず商人に賣る夫より諸所の手に渡りて流布する内公役人何某といふ者此壺の事公聞に訴へ此壺先年公儀より御尋の茶壺也其時は手前所持仕らずと僞り隱し置候段不屆と御咎あり其外彼是によつて辰五郎は追放せらるよつて家めつきやくしけるしかし此壺ばかりにあらね共畢竟此壺御咎の第一となりし事時節の不幸也辰五郎は後三郎右衞門と云元來八幡の侍也

村井軍兵衞

村井軍兵衞は江戸にて朋輩を打殺し首尾よく立退御旗本何某に匿れ居たり五月頃芝居を見物に行しに瓜を商ふ者六人軍兵衞を取かこみ討んとす是前に討し朋輩の一族仇を報わんとて姿を變じ待掛たる也軍兵衞六人を合手にして五人を斬伏一人酒桶の影に隱れ居るを酒桶ともに切殺したり此刀は備前祐定の刀也此節切先少し折たれども至極の業物ゆへ軍兵衞秘藏して後年迄も先の折たる儘差料にする由兩度の働を旗本衆より紀君賴宣卿へ申上る其上軍兵衞劍術功者と沙汰有によつて紀君軍兵衞を二百石遣わされて大番に召出さる或時南龍院公御前へ軍兵衞を召さる軍兵衞畏つて出御尋の答は御手廻りの面々を御除下さるべしとて公と兩吟にて申上るは私儀劍術手練仕らずしかし心は誰にも勝氣にて御座候夫故か人に負申さず候か樣の儀は人の承り候ては氣にて勝者と存候て武家にても武藝の稽古油斷になり候間兩吟にて申上候といひしよし

國造の烏帽子

肥後國阿蘇の宮神主は國造といふ國造の職を受るより其職を退ぞくまでは外の人には言語をまじへず對面もせず只下人又は下手の社人に事を談ずるのみ也諸人は國造の神前へ出らるゝを見る計也然るに氏子一人用事に付京都へ赴に此者いふ樣いつも國造殿の神前へ出らるゝを見れば兀たる烏帽子を着て出らるゝ體甚氣の毒なる事いはんかたなし此度よき序な

れば是を持行修覆させんとて國造の家司に告て烏帽子を修覆させんと乞ふ國造の家司此事を神職に告る國造滿悅して奇特千萬也とて餞別として銀壹貫目を彼男に送る彼男思ふ樣夥しき餞別也此銀にては烏帽子何百も買べきにと思ひながら返すも不禮と受納して旅立扨京に着して用事を達し其後烏帽子やへ行て國造の烏帽子を出し修覆せん事を談ず烏帽子屋是をよく見ていふ扨此烏帽子は餘人の烏帽子にあらず是を着する人は肥後國阿曾の宮の神主計也と彼男横手を打て扨々よく知つたり其通也といふ扨亭主我いまだ烏帽子を見ずしかし家の傳授の一つにして書物の内に圖法有と云彼男いよ〳〵修覆を頼むべし料はいか程と問亭主がいふ是はつくろひをなすも新しく折たつるも同じ直段也其價拾四貫目と云彼男肝を消しいかにして折とても大概程の知れたる物也夫ならば天子將軍の御冠はいか程の價なりや亭主いふ尤上々の御冠烏帽子は外の割には下直也又是を折立るは我々一人にて七日の間に仕立るゆへ何の雜作もなしかるに是にばくだいの料を取るはいわれの有事に候我々此烏帽子を折事是限りにて一代所業をやむるゆへ外の家職人となる也ゆへに拾四貫目を外の商ひの元手銀となす故也と云此詞を聞て國造の大層なる餞別の心を得たり扨拾四貫目の銀子に當惑して先一度古郷に歸り一家中へ相談しよふ〳〵銀子を調へ又々京都へ登り烏帽子を折らせて事濟けるとぞ

日本左衞門

延享三年丙寅の冬日本左衞門といふ者人相書を以て御尋有ける此者本名は濱島庄兵衞といふて盜賊の張本也いろ〳〵と御吟味あれども出ず然るに梶井の宮御門跡に仕ゆる中村左膳と云新參者有又中村順助（我刊我本中村吟助と有り）といふ者有と訴へて云日本左衞門事は中村左膳よく存申べし元來左膳は濱島が同類にて候と云是によりて早速官夫（府カ）より中村をめし圍ひへ入置て拷問に及べり中村が云成程前かたは濱島と我厚く交りし也其後中絶して梶井御門跡に仕ふるゆへかつて濱島が行衞をしらずと斷れども役人決してゆるさずやはり其儘圍ひに入置けり然るに京町奉行所へ美服を着し金拵の大小をさして出る者有役所は判斷も濟て役人銘々宅へ歸りし跡にて殘りし小役人其者の訴へを聞に彼男云やう某は御たづねの濱島庄兵衞

異名は日本左衛門と申者にて候と云是を聞て役所以の外騒立取逃さぬ様に用意す濱島いふやう何れも何やら騒がしき様に相見へ候是は定て某を取逃さぬ御用心と存候かならず御心遣ひ被成まじく候逃んと思はゞ斯様に名乗て出候わず品により自身出る仕合に候へばゆめ〳〵逃走る事は候はず且又改て盗賊の御吟味にも及ばず其ゆへはいかにも某事盗賊の大将を致せり然れ共世人難儀に及びしよふの儀はいたさずまづ金子三千兩より下の物を盗みたる事は御座なく手下の者に下知してとらせ候是迄身を隠し候へ共此頃承り候へば中村左膳に某が有家を御尋のよし彼は前方は入魂に致し候得共近來は某が行衛は曾て存候まじさあらば某ゆへ罪なき左膳難儀に及び候段聞捨がたく終には露顯する身に候得ば名乗出御仕置を相待候といふ是によつて濱島を揚り屋へ入れ其後江戸へ送られけり牢輿にも乗せず駕の戸ひらき御紋付の長持を跡に持せ夜に入ば御紋付の提灯を出し旅宿にては上下着用の者膳の給仕など出させたり其後數日をへて遠州見附の町放れにて濱島以下四人獄門にかけらる濱島は初中後緞子繻子の類ひ着用しけると也

鷹の尾筒

將軍吉宗公より岡部美濃守に御鷹拜領仰付られ家中何某御鷹を拜見して扨て〳〵尾筒の見事なる事と云一座の面々云馬は尾筒とも云べし鷹を尾筒といふは珍敷詞と笑ふ其後は彼人さへ見れば云出して笑ふ後々は異名にして尾筒殿といふ彼何某は口おしく思へ共詮かたなしと打過ける其後在所岸和田へ歸りても尾筒の沙汰止ず何某私宅へ歸りて愁ひたる色あるゆへ家室是を見て何を愁ひ給ふと問ふ何某かの尾筒の事をいひ誠に面目なしと語る内室の云笑ひ給ふ人々の文盲也慈鎭和尚の鷹百首の内に「はし鷹の尾筒の上に置露は萬の鳥の涙なるらんとよみ給へば尾筒といふべき事也と云何某大に悦びて彼歌をいひ出して前日の恥辱を清めしと也

西澤文庫 皇都午睡三編上の巻終

皇都午睡三編中の卷

目次

一北山壽庵
一蠻名
一江口泊
一南畝の辭世
一饅頭の名
一往古の七種
一貝原の書籍
一武林の八介
一法性寺の執行
一對句頓語
一善光寺の號
一山家の秋月
一蝙蝠
一婦女の强氣
一要樞は蝕ず
一鵺の考
一陣兵羽織
一牛の懸物
一正通の詩
一漏刻の博士
一大守三介
一月卿雲客
一瀧口帶刀
一長谷雄の句
一歌の病
一錣曳
一東の家土産
一俠者は昔の事
一名物に濃味無
一八瀨や小原女
一古着市
一金相場
一地面持
一左官仕事
一毎日法會
一京の人別
一引越蕎麥
一河岸の船宿
一四季の物賣
一厠便所
一食物の異名
一婦人の情
一言葉の變
一屋號不呼
一樽代節句錢
一土藏造
一橋數少し
一昔の人數
一茶店中宿
一三都の商人
一辻駕籠
一湯錢
一雜具の名
一諸品の變名

皇都午睡三編中の巻

西澤綺語堂李叟著

北山壽庵

北山壽庵は廣學淳實也諸國を廻りし北國にて津浪有其所に了海といふ禪僧有諸人浪の來るを恐れてふるひわなゝけり了海は是天命也とて座禪をなす其内に高浪打來つて大海に打入又砂の上に死骸打上る扨浪靜まりて諸人集り是を療治する諸醫良藥を用ゆれども其驗なし時に壽庵に療治をたのむ壽庵其死骸の傍に行脉を見て退けり諸人何れも藥を用ひ給われと云壽庵云斯の如く天命をしつて死する人何ぞ藥を用ひ蘇生する事を願わんや是天命に背く也といふ是によつて諸人其高論を感ず是よりして壽庵名を諸人にしらる其後壽庵紀君賴宣卿に仕ふ若山の諸士を療治するに霜月頃一人の士煩ふ諸醫時疫也と云壽庵是を食滯也とて平胃散を用ひ四五貼用ひて後黑き物を瀉す壽庵其黑糞を考へ見てもしおばこ菜は食せざるや此時病人手を拍て當四月頃おばこを食せり夫より以後何とやらん腹合あしく覺へ候得共久しき事ゆへ夫とは心付ず候と云壽庵是正しく四月に食せしおばこの滯りし也とていよ〳〵四味の平胃散を用ひて病氣次第に平癒せし也又石田何某久しく煩らひ腰立ず諸醫手を盡せども治せず壽庵に見する壽庵脉を見て疝氣也三和散を用ゆべしといふ石田申は只今迄疝氣と諸人見立られ三和散を用ひたれど其驗なし三和散ならば無用と云其時壽庵大ひに笑ふて足下は鐵炮の妙手にて人々に其術を敎へらるゝと聞に其心得にては鐵炮の理にもくらかるべしと云石田いかれる色にて其意趣を問壽庵申されしは鐵炮を打におなじ筒同じ藥同じ間數にて足下の鐵炮はよくあたり弟子衆の打鐵炮はあたらず是は手練の業によりて彼と我との間數道具の釣合の覺悟による所也藥も又斯のごとく同じ病ひ同じ藥にても其調合の人の少しの匕加減によつて病に的中するとはづるゝ事是療治の功と不功とによる也何れの醫師の調合も一同と極むが則是におなじ同じ鐵炮同じ藥にて打とも上手はよくあたり下手

は當りがたし是に同じかるべし爰を以て鐵炮の理も推からんと察すと云其時石田殆んど心服して壽庵が三和散を服する事四十日程にして病は根を斷忽平癒しけるとぞ

要樞は蝕ず

高貴の人は日々美食に飽て安逸に住するがゆへ多くは種々の病有て短命也農を業とする百姓は平日麁食をなして日々耕作に身體を働かしむる故に無病長壽の者多し爰を以て流水腐らず要樞蝕ずとは古人も云り此意を五色墨の蓮之といふ者の句に精出せば氷る間もなし水車とは申き

蠻名

都て蠻國の名にイギリスエウロッパ抔と云又商人の持るゾンカラスボウトルなど奇妙稱呼なり往年平賀源内が持る平日の道具へさま〴〵の蠻名を戲れに名付たる中にも風流の蚊拂ひを製たりくる〳〵と振廻せば蚊悉く取れる器也是を號てマアストカアトルと呼たりしは面白き蠻名也とて其頃評判せしが其後萬年糊とて紙にて糊を包み隅の穴より押出して遣ふに蠻名をオストデール又泣上戶をエフトホユル又物覺のわるき人をスポントワースルなど號し者有みな源内にもとづくなるべし

鵺の考

賴政の射たりし怪鳥を鵺といふ是に種々の說あれども屋越の墓目を修せられしならん屋越の墓目と云は天地四隅を射る也四隅の形容を表じて丑寅未申辰巳戌亥を取て頭は猿胴は虎尾は蛇扨亥の形なきゆへに猪の早太といへる郎等の名を入たる物と思わると理齋隨筆に有おもしろき考也

江口泊

西行法師心を雲水にひとしくして國々をあまねく廻り暮つかたに津の國江口の青樓に一夜をあかさんと乞ければ若き遊君出て此所の掟なれば獨旅はとめざるよしを申侍りけるに「世の中をいとふまでこそかたからめ假の宿りを借む君かなと詠れしかば彼遊君返しに「世をいとふ人としきけば假の宿に心とむなと思ふばかりぞと聞えてやがて留けるとかや予以前此事を思ひ出て「西行も江口の君をひやかして一夜を和歌の二首泊りせりと戲れし事有此頃は賤の女なども斯とやさしき事どもにこそ

陣兵羽織

世に甚兵衛羽織とて袖のなき羽織今云殿中羽織と同じき物甚平と云者が製し始たるかとも思ひ居しが是は陣兵羽織にて大將軍は陣羽織を着せらるれど雑兵など寒氣の頃は綿入の袖なし羽織なりと着ざれば堪がたかるべし其時の着用にて陣兵羽織なるべしと例の僻案を出せり又勘六とて麻の着物に綿を入しは寒暑を兼る心より號しといへども是は簡略の云誤りにもあらんかといよ〳〵僻案を增しけり戯場の衣裳に雑兵の着物は木綿に金の摺込を着する是を彼黨の通言に銀蠅と云いかにも銀蠅の色合よく名付し物といへども是も陣兵軍兵の二つ内を横訛りて銀蠅ともいふならんと思わる

南畝の辭世

蜀山人杏華園南畝寢惚太田覃字子耜通稱直次郎後改七左衛門といふ人々知る所也死して白山本念寺に葬すかねて先生自ら戒名を杏華園心逸日休居士と考へ置しと也文政六癸未年四月六日死す此本念寺に北山山本信有先生の墓有此寺に蜀山人かつて北山先生を悼し自筆の詩歌有詩は略「我もまたおしつけ行て吾のした長夜すがら語りあかさん又辭世は「時鳥鳴つるかた身初松魚春と夏との入相の鐘北山南畝兩先生の名の對せるも亦おかしからずや

牛の懸物

或人云今より卅年も跡のことにて東海道水口宿本陣の主好者にて貴人の宿り給ふ床の間に並々の軸ものはかけられずと畵絹大幅の無地の懸物に相應の表裝して懸置たり或時紀伊公爰に宿らせ給ひ床のかけ物白ければ自ら筆をとらせられ牛の畵を畵御落款遊ばれける其後水野出羽侯京攝御巡見の折宿らるゝに付此かけ物を見て何の畵ぞと亭主を呼て御尋有卽牛の畵なるよしを申す出羽侯賛すべしとて牛の畵を書れたそふなと書て自分の姓名を書けり此後薩州の大守泊りの時又かけ置しを御覽じて又賛を添られたり其賛は牛の畵を書れたそふなと書れたそふなと有是は又能書の聞へある方なれば亭主大に秘藏して是三君にて事足れり此上は書れては寶にならずと今並々の諸侯方の宿には此軸ものはかけずと云實にそれなりやしらずといへ共聞し儘に爰にしるす

饅頭の名

東鑑に將軍家より十字を給ふといふ事有諸道の博士に御尋有けれ共知らざるよしを申す鎌倉の僧に御尋有ければ饅頭の事也と申す饅頭を四つに割に刀を入る故に十字と云とぞ

正通の詩

楠正通關東下向の時近江の湖を眺て一句を得たり蒼波路遠雲千里と此對句を賦せんと按じ煩ふ趣向うかばず道すがら意を碎き箱根山に至りし時に正通が娘歌を詠じて「道遠く雲井見るべき深山路にまたとも聞ぬ鳥の一聲正通是を聞て忽對句を得て曰白霧山深鳥一聲と右のこと十訓抄著聞集江淡抄等に見へたり嵯峨の釋迦を取來りし奮然といふ僧入宋して此句を我作とて鳥一聲を虫一聲雲千里を霞千里と直して見せければ宋人曰甚可也惜らくは虫を鳥とし霞を雲とせらればいよ〳〵可ならんと云しとぞ

往古の七種

正月七日の七種は稻麥豆粟小豆黍小麥此七種を以奉る事也夫故に七種と書てなゝくさと訓ずる也宇多天皇の御時改て芹薺鼠麴草（一名母子草）蘩佛の座（一名田平子）菘（青菘）蘿蔔（大根）右七草を用ひられし也古は上の子の日に奉りし所七つの字に依て七日を用る事とはなりしとぞ

漏刻の博士

漏刻の博士季親は周易博士にて其道世に覺有ければ風月の方にはことなる聞へ無りけり或時文亭の聯句の座にのぞみ沈淪したるを宗徒の儒者有けるが是を見て侮りけるにや閉口後來客と上の句を云たりければ含陰先達儒と季親付たりければ座にがりて詞なかりしとぞ

貝原の書籍

天正の頃より今に至りて段々文明になり鴻儒の人々多く出て著述の書數多ある中に貝原先生白石先生の著したる書籍ほど益多きはなし高遠の事は暫らくさし置て我々が今日身の爲心得になる事共多し書の頭書を標註と云又頭書のある所を上方と云何れも唐本に有唐の今世の印行の雜書に首書を標註とは云はずして鼈頭と云俗說也正證としがたし不可用又留別寄別我他所へ行時詩を人に贈るを留別と云人は留り我は行時也詩を留て別るゝ也人の他へ行時我より人に送るを寄別と云人は行我は留る時也我より人に寄て別るゝ也又日光の當るを陽の影あたらぬ所を陰の陰

と云誰も知る所なれど手近き事もよく心得になる様しるせり

大守三介

任官して國名を付く内に常陸上野上總は大國たるゆへ此三國に限りては親王家のみ任ぜられ親王は都に居ます事なれば任國に介を置給ふ俗是を稱じて三介と云て常陸介上總介とは名乘る也守となのる事叶わずされば此三國をば大守と稱す今おしなべて他國の諸侯を某の大守などゝしるすはあたらざる事とぞ

武林の八介

武林の八介といふは下總に千葉介上總に上總介相摸に三浦介伊豆に狩野介出羽に秋田城之介加賀に富樫介遠江に井伊介讃岐に大内介是を云也

月卿雲客

月卿といふは公卿をさす雲客といふは殿上人をさす是は則天子に仕奉るよりいへる也宮中を雲井とも云扨公卿といへるは攝政關白左右の大臣内大臣也卿といへるは三位以上の人を云也雲客と云は四位以下の殿上人を云是は昇殿をば許されたれ共いまだ三位に至らぬ四五位たる人を云とぞ右職原の書にみえたり

法性寺の執行

東山法性寺の執行俊寛僧都とあるはすべて寺務別當共に一寺の統領也されども所によりて名付ることかはる也高野山にては檢校といひ山門にては座主といひ東寺にては長者と云勸修寺又三井寺にては長吏と云法性寺には執行といふ是異名同義也何れもその寺の長也

瀧口帶刀

北面の侍とあるは院中警衛の士也禁中にはなし是は人皇七十二代白河院の御時院中に武勇すぐれたる者を差置る禁中には瀧口といひ院中には北面と云東宮には帶刀といふ字を異にして義は同じき也又西面といへるありし是は八十二代後鳥羽院に始る近世は絶たりと北面にも上下有今院中守護し奉る者位は四位までに至るといへり

對句頓語

五百羅漢渡川則是一千影 源君美 丈六彌陀越山纔見八丈光伯嶙後素庭前月白石奪紅日下霞樓當時以名對とする也駒引錢白石虫嚙米靈樓青葉紅葉白石細根大根支啓

と對し又山猫（傀儡師事）と云によき對有やと尋られしに海鼠と答られしはよき頓語也或人夢と思とは何とかわかち侍るべきと言しに鳴鳳卿の答へに晝は思ふ夜は夢と面白き對話なるべし

長谷雄の句

俗に云知つたぶりを云男俳諧の附句に「そもさんか淺草寺の十夜鉦といへる句をなして點を取に點者申越けるはそもさんかは禪也淺草寺は天台也十夜鉦は淨土也御句いかゞと非言せられしと也かゝる人いくらも有て以前予がしる者に一文不通の癖に發句合に加り故人の句集より出して其儘にいる〻點者も故人の句ともしらずに扱事有て相應に手柄有其者友に對して我古き句集より句を出すに其角嵐雪らは上手と見へていつも扱れと下手はばせをといふ人也此人の句を出してついど扱たるがないと大笑ひをさせしばせををにごらずはせをと云其角をそのかどと云男なればさも有べし

善光寺の號

信濃の善光寺には七月十四日十五日十六日の間に犀川より必龍燈上る西の方山際樹木の梢を傳ひ〳〵て御堂の南西の破風にかゝると也御堂は八つ棟造りにて鐘木造りともいふ也四方に破風あり南北廿五間東西十三間也此寺に四つの寺號有て南面をば南命山無量寺東の方を定額山善光寺西の方は不捨山淨土寺北の方を北嶺山雲上寺といふとぞ世人善光寺のみ覺へて外の寺號はしらざる者多しとぞ

歌の病

「さかざらんものとはなしに櫻花おもかげにのみまたき立らむ是は延喜十三年亭子院の歌合にてらんの字二つ有との事にて病に定らる「あふまでとせめて命の惜ければ戀こそ人の命なりけり是は長元八年三十講の歌合の歌なりけれど命の詞二つあれ共沙汰なく勝にけり同詞の病なれ共歌がらよくなりぬれば聞とがめざるにや人の有樣も是らにて心得べし平生の行ひよければ少しのあやまちは人とがめず

山家の秋月

十訓抄に遍照寺にて山家秋月といふ事を人々詠ける其中に範長朝臣若き藏人の時「住人もなき山里の秋の夜は月の光りも淋しかりけり件の草案共を正二位權中納言定頼取て父の公任卿の出家して居給ひける

北山長谷といふ所へ遣したりければ範長の歌を深く感ぜられ彼歌のはしに範長誰人哉和歌得其體を自筆に書付られたり範長喜びに堪ずして其草案を乞取て錦の袋に入て寶物としられけると也

鐚曳

八島の戰ひに悪七兵衛景清三尾谷十郎家清が兜の鐚を無手と摑て曳や〳〵と引合たりしが終に鉢付の板より鐚を引切たりと古へは甲の鉢に折釘の如きものを打てそれに鐚をかけはづしにしたるもの也景清が引切りしも此折釘を引切しなるべし糸にておどしたるは中々切る事あるべからずと也

蝙蝠

扇は昔蝙蝠を見て初て製す蝙蝠をかはほり蚊喰鳥（カクヒ）ともいふ近江國にては蚊鳥共いふとぞ衣笠内大臣の歌に「日くるれは軒にとびかふかはほりのあふぎの風も涼しかりけるかはほりは蚊を屠るといふ意にて號とも徂徠翁は厠守也と井守屋守と同じとぞ

東の家土産

或人冬籠の徒然を慰めよと吾妻の家土産と題せし雙紙を二冊貸くれけり早速巨燵によりかゝり是を見るに文化十三子年三月中旬より旅立して伊勢路より東都に赴き歸路に日光より善光寺岐蘇街道を經て水無月の初に歸路したる安心齋五福と云る人の紀行にして名所古跡は畫圖道中記に書盡しあれば珍らしからねど關東と京攝との詞の變り唱への違ふ事を筆まめに書て婦女子の爲に示されしなるべし僅の滯留によくも思ひ出て書たるものと感心せりされども其端書にも斷り有て中々廣き彼地の事悉く盡す事あたはず又日々夜々に移り替る流行あれば只其頃目前見當りし所を述ると有不佞は再度の東行に以上五ヶ年彼地に居れば何事によらず始のうちは珍敷書付置んとも思ひしかど後には彼土地の詞になれてさまで控置程の事もなく捨置しが今此書を見れば文化十三子年より卅五年になれば其唱への違ふも多く又見殘し書落したるも少なからずさればとてか樣なる俗言を何の書に書傳ふる事もなければ世間しらずの婦女子にはよき土産なるべし予は又五ヶ年の内見來り聞來る事の多ければ綺語文草十二卷の内に三都の事をあらかた出し此皇都午睡にも思ひ出す儘書付置ども此五編子の吾妻の家土産より當時に移りかわりし事又も

れたるをしるして未彼地に遊ばぬ若人達又世間見ずの婦子にも讀せ笑草にもなれかしと別に巻を分ちて三都異言と題し有のまゝに書かけしが是も皇都午睡の内ならめと此巻に書込侍りぬ是より末下の巻終り迄三都の詞の變りを述る物也天地の流行は日々夜々に變る習ひいわんや繁華の東都なれば四五年も立ば又此文と唱への變る事もあるべし後々同志の方是に継て書入らるゝ時は彼地に遊ぶ人の一助ともなるべし

婦女の強氣

扨第一東都の婦人は京攝より見れば遙に威勢強く中分以下の暮しを見るに京攝に云爺嚊におなじく亭主より女房がた一段上位にて女に勢ひを附たる土地なりお屋鋪方は格別市中にも男八九分にしてよふやく女は一二分也それゆへ自と女強く女の子を産ば器量よければ勿論醜女には何なりと藝を付屋鋪〳〵へ奉公に出すがゆへ小娘の内より氣ばかりつよく自然と女は少きがゆへ女房に威勢奪はれ亭主は多く誤りがち也是一體を云にあらず先々是が多ひと云也扨此内へ奉公に來る下女などは地の者は珍らしく五里十里の近在より來て江戸見習ふ物なれば我身分も顧ず自然と大ふうな事のみを云て憎まれるやつ也先世間をしらぬ女は世界に土地といへば江戸ばかりと心得中にも愚のはなはだしきは京攝の者に物を云にお前の在にこふいふ物が有ますか抔云者有其時又京攝の藝なし猿江戸見てこねば男でないと當なしに駈出し道中も喰ふや喰ずに難儀してよふ〳〵すこしの近付に逢判じてもらひ半季奉公する輩是を聞とまつ黑になつて腹を立お前の在とは何事勿體なくも攝州大坂何町何丁目とか又山城の國平安城何條何の辻上る所など云てもあつちにはちよつともこたへず京も大坂も一所と心得長崎者も四國の者も惣一體に上方者と一口にいわるれば是に合點の行様には蘇秦張儀が辯を以てもいつかな〳〵通ずべからず又聞てからが眞實に受ぬ筈伊賀や大和の山椒賣迄が京とか大坂とかにて掛屋鋪の何が所もある大金持の若旦那色狂ひにて勘氣をうけこふした身の上になつたのと空鐵炮ばかり放すがゆへ百人に一人本間ものが有ても贋物の方へ巻込まれて云甲斐はなかるべし中分以下の下女下男の爭ひは大かた是なり男のぼせ上つて鼻血をたら

し爭ひに云かつても仕舞は主人のおかみ樣が出て夫程能い上方には居なくして江戸で半季渡りの奉公をせなくてもの事さへエといはれてはどふ有ても負公事なるべし

俠者は昔の事

次に云は江戸は俠氣の強き土地にて人に物を賴まれ世話を仕出せば命にかけても世話を仕拔ゆへ江戸ッ子といふて幡隨長兵衞そこのけじやといふは遙昔の事にてかならず嘘にもその樣な人が有ふとは思わぬがよし大坂でも昔は有たか浪華男と云てあたまに血の多き者が有たと見へて薄情なものを京詞をいふ者じやといひたるが段々と世がひらけていにかけて門口へ出るを送り出て御時分じや御茶漬上つてお出被成とは大坂でも江戸でも一統に云樣になつたればあながち京詞とはいふべからず然れども夫一事に拘わらず薄情に口先ばかりで上手を云はどふしても本家根元だけで京の人が上手也江戸は土地も廣ければ尋ねたらありもせふが當時はやらぬと見へて一向見當らず其替り詞戰ひもせず人をこなしてかゝる事もなくなつたり舊は上方野郎の毛齊六のと糞おろしに惡口をいふたが江戸子の氣性を見せるには相應に錢が入事なれば天保已來此惡口とんとはやらず誰云合すとなしに上方衆は物言ひが艶しいなどゝ譽てかゝつて何ぞ奢らせるさんだん中々利口な物とはなりけりかういふ事は人しれず京都へ祝儀持て習ひに來る者が有かもしれぬ扨江戸子は甚だすくなひものにて二親共に江戸產れの中に出來たは眞の江戸子なれどそふいふ者はかへつて遠國又は在所へ引籠り二親の內何れぞ江戸の者なれば相手は皆他國の者也然れば大方が斑といふ者にて江戸子一步斑三步殘り六步は皆他國在鄉ものゝ寄合の中にて江戸へ出會して出生せしなればやはり田舍子也それが生長するとおらア江戸子だ〳〵といふからはイヤハヤ何とも詞なし

名物に濃味無

又有三都に限らず見物して歸つて其土地の事を咄しげに都だけある諸事に不自由なく結構な土地じやと譽る人は其地に福有な親類が有てその家より諸所に案內しられたか又は路用澤山に餘る計もち案內しつたる者をめしつれ日にも費にも搆わず實に保養見物に往たる人也當なしの駈落我栖んだ土地にさへ不義

理だらけに世間せまくせふ事なしに古ひ近付の居るをあてに道中切つめたやうな路用にて氣抜がてらに駈出して川支に路用を切らし荷物(持カ)したり野宿したりしてよふ〳〵向ふへ往た所其お人は何年先に死で跡は粉もない抔と聞てそれから難行苦行苦の行抔ふつて命からく〳〵歸り扨もどこそこの國は聞た程にもないせふもない所じや見る物とては何にもないまた喰物がもみなひ抔(ママ)と能く利口顔にいふやつ也遠國の山中へ往たらば蒔く程金錢が有ても不自由な物があれども三都に限つて錢金さへ出せば着物喰ひ物遊び事何一つ出來ぬと云事はなしそれにないといふは懷に有べきものがないゆへ也又錢金に不自在なくても廣ひ三都五日や十日の滯留して土地の案内もしらずに兼て噂に聞及んだ名物の行燈をめあてに喰てかへり喰物評判を人中でするは僻言の最上なるべし名にうてた名物にあまり好味な物はないと心得たまふべし先景がよいとか安いとかいつても出來合せであるか此三つを名物とはいふ也錢安な喰物でも腹の減つてある折は咽を飛ばかり味く腹の大きなる時はいかな高直な評判高き喰物にても味よからず又商ふ家にも年中日々の事なれば出來加減のよき日不加減の日もあるべし邂逅一度試みてそれを定規とはなるべからずまして懷中乏しく飮ず喰ずにいかなる絶景も目につかず命からく〳〵歸りし物其土地の善惡云べからずあしくいふと我恥を振舞ふにあたるべし予三都を衣食住の三つに見立て綺語文草に著せしが衣は京を一として二に江戸三に大坂也食は江戸一にて二は大坂三に京也住は一大坂に二京三江戸なるべし委敷評は文草を見べし

婦人の情

家づとに浪華の蘆も伊勢の濱荻と所かわれば自ら生るゝ人の氣魚鳥の味さへかわれば增て況や物の名や言葉の齟齬する事は天地自然の斷にこそ有らめ唯かわらぬ物は人間五常の道男女の色鹽と鷄卵の味ひなるべし三都を始め何國の遠國にても男の形りと風俗容儀はかわらねど婦人は國所により又は士農工商によりて物いひ髮の結よふ衣服の好み風俗萬端大同小異の違ひあり違わぬ所は物事に行屆かぬと偏執つよく互ひに人の非を上て蔭にて嘲り笑ふ事は何國の浦にても變らず同じ世に住女なれば諺に云不身持の儒

者が醫者の不養生譏るに同じく是紺やの白袴にて猿の尻笑ひといふ類ひなるべし

九州長崎邊の婦人は五六十歳まで眉毛も剃らず又關東の女は上方の男の如く立ながら小便するなどの事を京大坂の女に噂すれば腹筋をよる事なれ共そは東路と筑紫潟千里の道を隔つれば左も有べし纔京と大坂と一夜の船の隔あるにさへ大坂の濕ひは京で暖ひ京のきつひは大坂のゑらひ買ふて來るは調へて來る江戸にては買つて來る上方の借つて來るは江戸で借りて來る大坂の大きひは京でいつかい江戸で恐ろしい大坂でどゑらひは京で仰山江戸では大騒大坂のそふじやさかひは京のそじやけんど江戸ではそうだによつて大坂のこつちへおこしや京で爰へ來しや京でどこあたりといふを大坂では向ふなぞといふが如く又御所方の女中は豆腐屋へ行にも被に惣縫の小袖或は暑中にてもあつ綿を戴き江戸お屋鋪方の女中は葵づとひねりづとにて寒中でも頭はむき出し猶又町家の內儀を大坂にてはお家さん京では名を呼び江戸にては御上樣上方の御寮人と云を江戸では御新造都て關東にては人の名を呼にさんと刎る事なく樣といふ也三都の隔なれば其筈にてもあらんか毎日花の都へ入込て華奢風流の都人を相手に見習ふて居る京の田舍の片ほとり八瀨や小原女の形り姿裙は膝切に脛高くかゝげて脚袢を足の向ふにて合せ足半（アシナカ）とか呼て足の半よりなき藁草履をはき年のゆかぬ小娘の時分から馬を牽牛を追ひ首には臺輪を置て柴黑木或は葱いりやんせんかいなアなどと賣歩行さまいと艶しくもあれど又年とりし女は長階子打盤横槌の類ひ又は酒樽醬油樽種々の荒物を買ふて歸り二十貫目餘の重きを苦なしに戴くさまを見れば興覺る心地せらるゝ又物言ひも自らその荒き質に準らひて和御寮行かよノウ旦那殿よノウなどゝ巽上りの音聲にてさもぶこつ也又男を八瀨の外良（グラ）と唱へて皆惣髪（モトドリ）にて髷も結わず髻をくゝりて卷立公卿方の冠下同前にて齒は鐵漿を黑々と染恰も公家の姿にして業は百姓山がつを兼山に入て樵をなし柴を荷ひ內に居て飯を焚世帶をし女は日々京の町へ稼に出るゆへ此地の婦人が他を譏るに男一人得養わぬ女が何になる物かなどゝいふよし都て女は外を働き男は內を治る土地の習わし也亭主は皆若狹の和泉のと國名を付名跡を我子に讓り六

七十歳になれば漸に元服して何右衞門何兵衞と名付る也とぞ角力取にあらず醫者にあらず琉球人の下官に髣髴（サモニタリ）女は八瀬小原のみにもあらで高雄の近在に梅が畑と唱へる邊よりも出て皆々頭に帽子を當たり木綿にいろ〳〵の縫有て是には各深き由緒有事のよし傳へ聞り

八瀬や小原女

家づとに五福といふ人以前叡山より下りて鞍馬山へ廻りて京への歸るさ此八瀬村にて駕籠を借りたる事を記せり古今珍らしく今に思ひ出しては獨笑を催すと有てまづ八瀬村下り口の坂本と云茶屋にて駕籠を頼みしに此邊の者は終に駕籠など舁たる事なしと斷を漸頼みて若者兩人を雇ひ隣家にて古き打上かごを借り持來りたるが其駕籠の棒乘物の如く兩端を同じ程に出し扨杖といへば樫の丸太作りにて先程太く中々おもき杖と見ゆるを衝駕籠にて鞍馬迄二里半計の山坂を唯一肩にて飛が如くに行り杖を立肩をかへるといふ事なし肩をかへざるはいかにといふに右に云丸太の杖を以て右の肩より駕籠の棒をくゝり持て一二町づゝ柴を荷ひたる如くにして左りの肩を休める事ゆへ何里往ても肩をかへず杖を立ず行がゆへその早き事早打駕籠同前也兩掛持も供人も息なしには困り入たるよし京より纔二三里の里にても斯まで物事の違ふよしを書り是は京に限るべからずいかなる遠國にても道中筋は御大名の通行あるがゆへ馬駕籠の便利はよけれど三都とも二三里片脇へ行ば誰しも是には困る物也予小田原より熱海迄駕籠にて行しに駕籠の價最高し箱根八里の打こしより倍も取なり道は七里なれど道中筋は替駕籠有て箱根にても四里いて戻る時は駕籠舁に便利よきゆへ價少し安くても行り熱海などの入込みは替駕籠なければ七里行て七里歸るに甚難所なれば二日がけになれば價高く取也其時駕籠舁幸ひにて向ふより浦賀御奉行伊豆の下田伊東熱海など巡見の歸りに出合ひ吉濱の樵杣人等役にとられ駕籠を舁來れり此所道のふりわけなれば駕籠をかべり今迄は小田原の駕舁にてよく舁ども人は甚あしく吉濱の樵は朴訥（カリ）にて形こそ賤しけれども誠によき者ら也扨駕籠を舁は甚下手にて乘心はあしけれどもかの八瀬の駕籠の如く嶮しき山路海ばたの岩の上などを飛越へる事自由也日々重き薪柴のたぐひを持

山坂なれたるゆへ也馬にても東海道中仙道は自由也一時木曾の宮の腰にて雨催ふして風烈しければ心せき茶屋にて馬を拵へさせし所馬雌にて馬方も十七八の女也簑笠にていれば男やら女やらわかるべからず茶屋の店より馬に乗る所世話する者も女也藪原の驛を過て鳥井峠の絶頂まで三里の餘の道を日の七つ時より追ふて行還りは又藪原にて荷物にても附て歸り夜四つにもなるべし纔三百文位の錢をもふけんとて十七八の女一人雨風を事ともせず行事也三都の女はいかなる果報の有事やらん我身に埒の明ぬ事はいわず人の蔭ごとのみいひ立罵るは勿體なき事ならん此世にて極樂世界へ生れたる同前のくらしなれば死しては地獄の釜の底敷ならんと思ひやるべし

言葉の變

江戸は日本國の人の寄場にて言葉も田舍在鄉の訛りをよせて拵らへたる物ゆへ江戸言葉と云事は甚だすくなし其内關東八州の男女多きがゆへそれを皆取合せたる詞にて世俗に是を江戸詞とは云也古風を守り叮嚀に云詞もあり大體京攝の言葉をつめて短くいふがならはせの風儀とはなりけり京都にても上京と下京と少し宛の言葉も變り有大坂にても三鄉にて大同小異あれば是は又四國九州中國の寄場なれば安治川邊の者は西國の詞に馴れ上町玉造の者は大和伊賀伊勢の詞に移り堺の者は紀州和泉路の詞に通じ天滿の者は丹波丹後の言葉も交るべし遠國他境の人の開語のわかり兼るは各々生れた所の國言葉にて諸方の人を相手にする都會の者が其國言葉に付合ふて云を訛りとは云也笑ふべき事にはあらず凡三都の者程訛る者はなし能々心を付て聞べし江戸にて濱側を川岸と云略語勿論也大坂にて川岸(ガンギ)とも云是も略語にて少し變りたる也京に町(テヘ)と呼ぶ所多くて町(テウ)と唱ふる所すくなし江戸は町と云方多くて町と呼ぶはすくなし大坂は町(テウ)と町(マチ)と相半なるべし江戸にて町並よき所にていわば駿河町白銀町大傳馬町石町小田原町瀨戸物町本船町伊勢町堺町菖蒲屋町尾張町木挽町などとて丁と呼かた多し室町田町田原町中興出來し猿若町など町と呼ぶ所も少なからねど町といふより丁といふ方開語に走るゆへ丁と云方多しとしるべし京にて麩屋町お旅町宮川町先斗町とよん所なきを丁を呼び跡は町と呼ぶ方多きとしるべし大坂は半分づゝ取合せたれば

改いはず扨江戸にて日本橋と走る大坂にては日本橋（ニッポンバシ）と叮嚀に云江戸は短かく詰て云を是とする所なれば日本橋通りと云をまだ略して通りと計にて通用させ通り二町目三町目杯と呼來れり諸事かよふに詰て云土地なるゆへ京攝者の愚癡なる言葉に根から葉からどふもかふもなる物じやない腹が立て〳〵忌々敷ふ怪體（ケタイクツ）糞が惡ふて腹わたが煮くり返つてなぞと長く詞をつゞけて云ば直に口まねをして笑わるゝ事也十返舍が膝栗毛などにも京談と唱へてむりむたいに長くいわせて京攝者の氣の長さを誣れり講釋噺仕（ハナシ）我自刊本噺家などにても皆是をいひ出して笑ひを取れり誰しも始のうちは所最負國最負にてあの樣にむりに云ずともの事也とも思ふが習ふより馴るとやら後々は成程言葉の延る所あれば早く埒のあく分別にて附合ふとなしに詰て走る也されど共世間一統の通用は仕難し氣障（キザ）りなる事を氣障と詰雨合羽を桐油（トユ）と略しぶらり提灯を只ぶらと計云さればとて略して詰るばかりにてもなし京大坂より叮嚀に云事もあり尤流行詞は日々夜々に變化して何國にても所限りにて仕舞ふ事なれど大坂では鰻をうと計云京にては長と唱ふ大坂にて泥龜を丸（マル）と計いへば川千鳥と洒落るもあれど江戸の俗は御叮嚀に鰻泥龜と唱へり鷄（ニハトリ）を柏（カシハ）などゝ決していわず猪鹿の肉を京攝にてろくと云山鯨と變名すれど江戸にてはもゝんぢい又もゝんがアと云文華日にひらけて牡丹紅葉など呼ぶ事とはなりぬ此類甚多し思ひ出るに任せ追々云べし

古着市

江戸の町幅廣き事大坂の堺筋三つ四つも寄たる程也狹き所が京の三條四條通り程有別して日本橋通りは諸侯方の行違ひ牛馬車力共彌が上に通行すれども往來こずみ滯る事なく通るにて廣き事推量すべし扨魚市場は小田原町新場の二ヶ所有て大坂雜喉場の仰山なるもの江戸橋を中に置て兩所に別れり是を河岸の魚と云江戸橋の詰に御魚（オナヤ）屋と唱へて御本丸西の丸其外諸大名屋鋪方へ持運ぶ會所有此二ヶ所の魚市は江戸市中のまん中にて南には芝に生魚市有北には千住に川魚市深川より貝のむき身を賣り出す事夥し青物市鹽物干物類の市は中央に日本橋南詰に立て其餘方角にわかつて所々に有富永町には毎朝古手の市有て大道へ兩側より莚を敷古手類を仕わけて引擴げ買手

は江戸中の古手屋にて素人も中に交れり又古着古小裂解ものゝ類を竹馬にくゝり付町々を荷ひ賣するもの數多有都て江戸にては古手と云わず古着と云着類の外に古き物を古手とはいへど古着とばかり唱ふるは江戸の方が尤なるべし

屋號不呼

江戸にて問屋(トイヤ)を問屋(トンヤ)と云商人店(ミセ)を店(タナ)といふ呉服店藥種店など諸事店といふ借家もおなじく店(タナ)と云借家人を店子(タナコ)と云裏借家(ウラダナ)を裏店と家主を店主家守を大屋町年寄と會所はなし惣年寄を名主と云大屋の寄所を番屋と云下役を番太郎と呼て荒物糊燒芋の類を賣らせ辻番家の番をさせる事也御公儀へ差上る諸書付人別帳にも何町何屋何兵衛支配借家何屋何兵衛抔と上方の如く家號を記さず唯何町何兵衛店何兵衛と計にて筆數のすくなき事を是とす苗字を唱ふる町人も多くあれど公儀には通らずよく〳〵由緒ある家ならば(ではカ)苗字を呼事はなしそれゆへ家名やら苗字やら通り名やらわからぬ面白き呼名まゝ有り上方の料理屋の通り名の如し畢竟は上へ通らぬ事ゆへ出たらめの付次第なるべし

金相場

金は通用六十目と定て相場はなし錢の相場も四日市にて夜分錢小賣屋寄合云合せる計にて大きなる高下はなし一文目といへば百八文也金一兩六貫五百文二朱八百十二文にてとりやりすれば甚だすみやかなるもの也何によらず買物をして勘定をととへば何兩何歩に錢何百何十文といふゆへ小細の算用なくて世話なし也丁銀小玉は町家の女子供は終に見しらぬ物が多く秤は掛目の物を賣る內より外になし二文の渡し船の所には小錢二文づゝ向ふに並べ有四文錢一文出して向ふの二文つりに取る湯錢を以前十文の折も錢取場に二文づゝ小錢並べ有けり近來當百錢出來てより宮寺の門前に並びいる乞食或ひは坊主など只錢百文つなぎ合せて莚の上に出しあり小錢四文錢遣ひ切らせし人に兩替する事也自由なる事夥し是ら都會の證據なるべし

樽代節句錢

江戸は勿論五里七里脇の城下に疊一間と云は五尺八寸なり半間は二尺九寸也京攝の如く京間といひて六尺三寸の疊は曾てなし猶裏店は五尺間もあり裏家

は大かた一方口にて誠に箱を横に並べたるが如し裏店行抜の路次は昔はとんとなかりし所前方目黒行人坂より出火して江戸御府内大方焼て焼死したる者多かりしゆへ御公儀より御下知有て今は抜ろうじ澤山にあれど何れも其路次の狹き事漸々に身を横にして通る位中々上方の如く緩やかなる事なし扨裏表とも借家の分には宿替變宅を江戸にて引越と云上方にて家を借時印を入るを彼地にては樽代と唱へ家の大小によれども裏借家にて金一歩表屋にては小さき家にても二歩三歩は樽代に出す事也最上がたの式と云にあらず變宅度毎に流れて仕舞ふ事なり中にも繁昌な町柄には樽代三兩五兩もとらるゝなり上方の格にて腰かけがわりに一二月借らふと云ても樽代におされて毎度宿替は出來ぬ事也火事に燒出されし者は先樽代を第一番に入て假宅をする事也上方の町内月別町入用とて借家人にとるを江戸にては節句錢とて家相應に大屋より集る事ならわせ也近頃御趣意後此樽代を御政道有しかど矢張舊の如し何分身分相應に金錢の手放せず寐た間も用意をしておかねばならぬ土地なり

地面持

五福子曰江戸にても場所がらにはよるべけれど日本橋邊にて予が知己なる川井何某の居宅の屋鋪は表口五間裏行十間夫も右に云狹一間也それに建家はさつぱり別にして地面計の沽券が七千兩なるよし是も今といふて望時には中々八九千兩にても得がたきよし右らの地面を借手より建家して住居する事也右川井何某の地面に表家裏店とも四五軒有て人數凡五六十人住居する是らを以ても江戸の繁昌なる事思ひしらるゝと也上方の抱屋敷持の如く江戸にては地面持といひて遠方諸國よりも多く持居て其町内には家主の名代有大坂にての支配人家守の如し建家は皆住居人が地面をかりて建て住なり又地面をかり家を建て人に貸して居るも有是を店主と云此振合ゆへ人の身上をいふに家持の掛屋敷持のとはいわず地面持の大地面幾らあるなんど云也借家に故障出來しても又火難等の愁も家持の損にして地面持の難儀にはならず然るに井戸ばかりは地主よりのまかなひ也所々によりておかしき仕來りもある物也

土藏造

町並家建の樣子は大坂とは大に替りたり大抵は京都に類して一軒〳〵別建也尤端町場末には長家續きの家もあれどよき場所には町々十に七八軒程は居宅店共皆土藏作り也其仕樣の丈夫なる事表口は裏白の引戸を惣銅にて包み一二の書付して何枚も引〆戸の合せ目には雌雄の深凹凸（フカヘコクリ）にして目塗土を澤山用意し裏口の方は常の觀音開也二階も表化粧窓の所を大窓の兩開四枚開などに立派に仕立たる物から宛がら土藏に住心地にて何とやら欝陶敷もの也是も馴ればさ迄苦にもせぬよし併し暑中は暑さ甚しく思わるゝ也橋筋通り筋の中の往來を中通りと云京都の間の町と云に同じ狹き家は通り庭の內少なく往來門口より履物を脫持て表の間に置奥へ通るなどいわば芝居の世話場門口の體也年々歲々御觸出し有が故通り筋合通りは大方瓦葺とはなれど端々は叩屋根多く風除の爲細き竹にて屋根板の散らぬ樣に伏て手頃な石瓦の割を置たり中位の場所は表側のみ瓦葺にて裏手は瓦葺たるは珍らしまして場末は瓦一寸もふかず也然し予先年下りて再度の下りに見れば僅四五年之內に瓦葺餘程ふへたり追々開けて後々は京大坂同樣になるべし

左官仕事

大名小路諸侯方のお上屋鋪は勿論所々の中屋敷下屋敷迄立派なる事夥しくそれ〴〵の好みはまづ防火の爲大かた土藏作りしつくひ仕立多し大名方にて我劣らじと善美を盡したれば見事さ筆紙に盡しがたし神社佛閣にも惣土藏造りの伽藍有御柱象鼻計（ゾウバナシラ）にても左官の手間雜費何程の事ならんやと思わる全體町家の家居にもとかく石灰細工多く瓦葺も一枚々々厚しつくひにて竪橫に閉棟は勿論のし重ねにて鬼板鬼瓦又は軒別の境目の家根仕切と云もの是は上方には曾てなく尾州名古屋邊より適々に見受て江都にては專ら有物なるが仕切の軒瓦を鬼板の如く大きにして色々の模樣を付しつくい仕立にして甚だ立派なる物也元來江都の作事は火早き場所なるゆへにや近來出來の普請ほど猶々左官仕立の作事多し譬へば大工手間百人かゝれば左官手間三百人もかゝると思わる上方にて江戶黑と云本磨の黑塗又彩色入の繪壁など尤奇麗なる事也左官もおのづから數に馴て上手に塗れり土藏多き事町家裏々に有うへ河岸は大方土藏にて建續きたりしかし上方の如く大土藏は稀にして凡二三間

口の小藏にて何れも稜を往來の方へ向けひしと並べ建たり往來の正面と裏手川の方とに家號又は店印定紋などをしつくいにて置上に立派にあやどる兎角表を立派にするは武家方の風儀自然と移るならんか都て建家普請に壁はすくなく板の方多し壁土の直段高直にて座敷廻りの壁にても上方の如く下塗中塗上塗などと歩あつくなれば高直なるゆへ大體上の分中塗にて勝手廻りは壁下地泥にて薄く塗れば直に板を張る也厠は勿論上方の樣に壁塗なく皆板圍ひ也京攝濱納屋の惣厠の如し勝手の流元の下しつくいは稀にて皆板を敷水はけよき樣こうばいを付たり錢湯（上方の風呂や）の上り場尤板計にて敷詰し也よつて火事の節は悉く燒て壁土薄きがゆへ皆燃る事也壁土の價貴きゆへ自然と板圍ひ多く燒易きとしるべし

橋數少し

江戸繪圖にてもしらるゝ海に添ふ所は南東なれど東は深川本所と並びて遙東へ突出たる土地ゆへよふやく南の方一方なれどもかな川川崎品川高繩と東南は皆海にて芝より先江戸の川口にして築地御濱御殿永代橋の邊は大坂安治川口に似たり深川より東木場の邊は大坂の堀々に同じ永代より川上にかゝれば新大橋兩國橋遙か隔てゝ東橋（アツマバシ）と大川にかゝる橋四つ也間々には渡し船有江戸を過て川上には千住大橋有爰より今土の邊迄を墨田川と云夫より宮戸川と云川下永代にて海に入る也此川大よふ南北に貫ぬき昔は西は武藏東は下總にて有しが今は東西とも武藏の國にて東に中川戸根川と云大川二流有其戸根川限りに武總の國境となれり故に深川本所に橋は甚だ多しなれども大きなる橋はすくなし江戸前（大川より西手御城より東手）にも堀々有て橋相應に多しされども土地の廣き割には川すくなく橋もすくなし又大坂ほど橋數多き所も他國には珍らしかるべし

毎日法會

元來江戸は日本國中の集會の大都會なれば人數は多き筈也尤大通り所々廣小路などは往來人にてつまり有て田舍もの始めて此地の人通りを見ては年に一度とか二度とかの大法會でもござるのかと尋るもおかし江戸最負の土地自慢するもの口にかけては仰山なる上にまた嵩をかけて兩國橋上には年中朝より暮まで鑓百筋と馬百疋に往來千人宛は絶る事なしとい

へり是も餘り仰山過れど先日本橋兩岸通り南北へ四五丁程宛四日市京橋邊兩國橋兩岸淺草見附より觀音前下谷より上野廣小路市ヶ谷御門より四ッ谷新宿高繩大木戸邊などの往來群集の中に物賣店は大道のまん中に並び大名の通行女中達の乘物廻り駄荷付の牛馬辻駕籠の行返り車力牛曳を始として士農工商男女老若のざは〳〵と通る物から少し物を見んと思わば連の者にははぐれる也年中晴雨を論せず此位の繁昌なれば京の御忌詣東寺の御影供初午の稻荷詣大坂二季の彼岸參今宮の十日戎或ひは諸所の開帳などの如くの人群集每日斯の如くなればまして祭禮などの紋日の群集思ひやるべし然し日の內の賑ひに事かへ夜は甚だ淋しくて尤夜市夜店なども有所も晝の一割も人出ず尤十月朔日より二月晦日まで辻々の木戸（上方にての門也）しまりて潛りより出入すれば淋しき事又思ひやるべし火事有て大火となれば木戸〳〵を開く（八百屋お七狂言に有り）淺草觀音の境內明六つの門明より暮六つの門しまり迄は一萬人の人絕ずと云實に往來の人群集計り見に下りてもよき見物なるべし

昔の人數

五福子の紀行に寬政三亥年五月御勘定奉行より江戶宗旨人別書のうつしを借りて出し有江戶町數千六百七十八町家數十萬八千軒人數五十三萬五千七百十人外に出家二萬六千九十人山伏三千八十一人禰宜九百人此外に吉原廓中八千九百四十人右惣人數合せて五十七万四千七百二十一人后の外に武家方人數二億三万八千三百九十人惣都合して二億零六十一万三千百十一人右は宗旨御帳面表慥に在江戶の人別也此外に當座〳〵に日本國より諸大名方お屋鋪へ到着の人々並に業用見物に市中へ入込む滯留の人數は中々大造にして其數計知りがたかるべし然らば先右の慥にしれたる二億零六十一萬三千百十一人日々食料の費一日分玄米一升づゝとして此米高二十萬六千百三十一石一斗一升也此代金一石壹兩にして二十萬六千三十一兩餘となれば中々にも能く思ひ見れば仰山なる事にあらずやとしるせり

京の人別

元祿年間京町奉行所の寫しを予先年より寫し置所京都町數千八百四十七町（此內千四百五十町は地子御免殘り年貢地也）家數四萬五千八百七十七軒とあれば其後百餘年を經る間に新地

追々建續既に天明八年の大燒の頃凡京町數二千有餘と見へたり其頃の發句に若水や京中くまん八千軒と有右天明八年より此かた六十三年になれば又々町數家數も增減あるべし江戸の人別帳は寛政三年なれば今年まで六十年になれり是又町數家數いか程ふへたるやらん計り難し

京都より大坂は人數多く大坂より江戸は各別に人數多き繁昌なる所ゆへ諸事人の心の我雜なると騷々敷は理の當然也としるべし皇都に長袖と職人多く大坂は商人多く江戸は武家のみ多し夫故京都は風儀神妙にして和らかに華奢なるを本體として男子にも婦女の風儀有大坂は唯我雜にて花やかに陽氣なる事を好み任俠の氣風有東都は表向立派を好み氣情強きと思へば根もなく又心も解易き處有て其土地拵廣く人多ければ自と墮弱なる所も有人國記には武州の人氣は活達にして強氣也譬へば敗軍にも屈せず再戰に大功を立んとの志有としるべし

茶店中宿

京攝に目馴ぬ物は江戸の市中の商人店と並び居る茶店也大坂にていはゞ高麗橋にも本町筋にも茶店有が如し堺筋松屋町筋といふ樣なる通り筋には一町に五軒も七軒も有其さま表の間は落間多く床几腰掛に繪莚を敷中央に朱塗の竈に眞鍮の鑵子をかけ環は渦卷にして三尺計も高く卷あげ暖簾軒釣の提灯には信樂壽飢菊なんど通り名を紅にてしるし娘女房は奇麗に拵らへ客毎に始は素湯に香煎を入出て次にお煮花とて相應の茶を汲出て客あしらいは世事よく誠に馴たる物也神社佛院の門前などならば京攝にも有て珍らしくもあらねど町の只中に數軒あれば珍らしき也爰に又四季とも得意有て馴染の茶店へいて客も休む事也譬はゞ大坂にて天滿のはづれに住人堺の町に近付有何か用事有ていついつかに逢ふべき事有何れ一方より行時は其日に歸る事ならざれば雙方より約束して今宮で逢ふとか日本橋にて逢わふかと云おり誰それの茶屋は信樂とか山吹とかにて待ているべしとて尋來る也雙方爰にて咄合をして料理屋へ行とかして別れて歸る中宿なれば狀通にても此茶店へ出し置時は早速に屆ゆへ便利よく馴染の內に長く待居ても退屈なし增て若ひ者等遊山抔に行相談事には屈竟の寄場也御趣意前には諸々手寄の遊所へ行に此店にて駕

にのり歸りにも又駕にて爰へつくするに用事あれば此家迄言ひ置有など誠に自在と云べし五福子是らの譯をしらねば只茶を飲せる計と心得られしやふしぎそふに書たり

引越蕎麥

京攝にて饂飩蕎麥を商ふ家は饂飩の方を題とせるにや饂飩屋と云東都は蕎麥を題とするゆへ悉くそばやと云也扨加役ものにても唱へ大に違ひのつぺいしつぽく抔とは唱へずてんぷらそば鴨南蠻霰花巻などと呼て數種有それを只誂らへれば皆蕎麥題也饂飩を好まば饂飩にて南蠻とかてんぷらとか誂らへぬ時は蕎麥屋といへば皆そばにする事也蕎麥に二種有カケモリと有カケはぶつ掛モリは小青樓に猪口にだしをつぎ出す也食物の咄に饂飩蕎麥を始に出すは野鄙なる事なれど旅する者は先安直なる事より喰ひ始る物故第一番に是をのする前に云宿替引越しの節上方の宿茶とて附木を配る事なく江戸は悉く蕎麥を配る事也蕎麥屋もよく心得て附合は何軒大家は家主どこそこと皆配りて後其代いくら〳〵と取に來る誠に無雜作也奉公人の親判をもて來る是も蕎麥にて濟也こちより親元へ判取にやる是にも蕎麥也目出度につけ悲しみに付皆蕎麥にて仕來りとはなりけり是ら馴てはおかしからね共始の內は獨笑する事也

三都の商人

扨立延たる貨食屋には京攝の如く女給仕に出て是を仲居と呼ず女子衆也今御趣意後はなくなりたれども女郎屋の掛引する女を輕子と云也町々の仲衆を江戸にては車方を車力といひ荷を運ぶ者も輕子と云扱も此上料理屋は格別中より下の料理屋煮賣屋居酒屋蕎麥屋芝居茶屋惣一統に女をつかわず皆荒男の若ひ者が運ぶ事也見た目は女氣なければ我雜の樣なれ共其男皆物いひは甚だ譯しく叮嚀也中にも芝居茶屋の土間上方の場桟敷へ案內或ひは食物を持通ふも皆男子の役にて大坂のお茶子などゝ違ひて氣轉よく利て便利甚よろし此餘商人にても物いひ叮嚀にしてすこしの物を賣るにもぶせふなる詞は遣わず夫といふが武家大臣方輕き形りにて出らるゝゆへ朝夕是に相手馴しと思わる京都にては都て女の商人多くいわば直段何程と聞て半直段に付ても怒る事今なく少しお買なされてとある故少し付上る夫では夫では賣れませ

ぬもふ少し〳〵と今もまける様に云てとゞの仕舞は始の言直よりすこし引て賣る事也買手後には根にまけて高く買ふ也是皆土地の風儀にて物事和らかに氣長風也大坂はまた一流有て氣短く直段の付よふ違へば直にそんな直ならばこつちへ買ます餘所にあるか尋ねてござれ抔といらぬお世話にぽん〳〵と云ふを土地の風儀とせり又買ふ者もそふすげなくぽん〳〵云ふ所は代呂物が能ひか直段が安ひか口錢薄ければあの様に口立派に云と心得得心して買ふて歸る諸事の掛合斯の如し依て一口商ひとて是を大坂のならわせとする江戸の商人とくらぶれば大坂の商人と物いひつかふど存在なり餘り叮嚀にいふ者は懸直有と云るなど三都によつて皆それ〴〵癖あれば土地に馴る迄はおかしき様な物也

河岸の船宿

江戸町内河岸（濱側）ばたに船着とて大坂の茶船屋の如きいと多く濱がわより半町計内町にも有前に云茶店と同じく床几腰かけ出し有て入口に家號の行燈を出し棚に煙草盆火繩箱を並らべ客來てどこ迄と云ば言下にさあ御出なされと船宿女房或は娘など煙草盆に火を入船迄案内する船直に出すさやうなら御機嫌よくと見送る其手都合のよき事感心なるもの也御趣意前諸々の遊所へ行には皆此船宿より案内する事にて馴染の大事の客となれば船宿の亭主又は女房同船して向ふにての掛引勘定向船宿よりして入用〴〵て客衆より船宿へとる事也船中の酒肴も船宿より言ひ付て乘せ行誠に自由なる事なりしに今此儀なく只船計りの事とはなりぬ船に大坂とは唱へ違ふは先大坂の紅梅など呼はなし何市丸大御座などは何人乘り屋形船と云小船にては屋根船にたり三挺網船釣船猪牙小船と有船は何にて行先はどこといへば船賃いくらと家々にて定り有此猪牙船の異名は綺語文草江戸の部にも記せしが享保の頃長吉と云船頭よくさしたるゆへ長吉船名代となり其略語也猪の牙の如きなるゆへ猪牙と云とは湯桶讀にて後に拵らへたる字なるべし

辻駕籠

江戸通り筋の木戸々々（大坂の門也）見附々々に辻駕籠とて駕籠に尻かけ往來を見かけ次第駕籠へ〳〵旦那かごへと呼び居る駕籠屋と云も一町に五軒と七軒はなき所なき所なし門口に駕籠と行燈に記し是又船宿とお

なじく何時でも直に出る也其餘辻々に右云如く出張するを辻駕籠とは云也道中の雲助にはあらずいわば江戸裏店より出る駕籠舁也川端近くへ用有ば船にて行とも山の手在所道には駕籠の便利よければ老人病人など駕籠借らんと思ふ時勝手よろし又直段は大體極り有て道中の雲助の如き餘り餘計にむさぼる事なし辻駕籠の得意とする者は遊所通ひ也四里四方ある江戸の地に遊所なく深川本所根津谷中麻布赤坂なんど遊所諸所に有けれども當時禁止となりていよ〳〵不自由なれば南に品川宿西に内藤新宿板橋北に吉原千住と此五ヶ所也何れも日本橋より二里半三里に餘る道なれば行計にも隙どれば繰の隙に駕籠にて駈行歸りにも又其地より駕籠にて駈戻るゆへ辻駕籠大に流行るなるべし駕籠賃の相對も京攝の如く直切小切するにも及ばす四文錢何本とか南鐐とか埒早く乘ると直に駈出す事誠に宙を走るが如し人立多き四つ辻にてもエイハアと掛聲して腰をひねり肩には茶呑茶碗に水一杯入て乘せ行とも溢るゝ事もあらじと思ふ計りに駈行也是又能練れたるもの也駕籠舁寒中にも肌をぬぎ入墨見事にして手を盡したる武者繪抔あり物々とて駕籠舁などに入墨有は勇ましく見よき物也間には駕籠の垂を風ありとも見附〳〵にては手早く垂を上て走れり吉原大門口品川入口新宿入口には夜明前より駕へ〳〵と聲をかけ數十人控へり是は右に云江戸へ歸りをのせる也又町駕籠には垂駕のみにあらずあんぽつ引戸なぞとて大小望の如く有船駕籠是程に自由なる所他國には有べからず

四季の賣物

江都市中店並びの樣子は間口一ぱいに代呂物を飾り大坂白粉屋が書林の如く白紙の箱をわくに掘て店先の往來へ出し賣物の品と我名所を記し何商賣の小賣屋にても本家根元問屋などゝ書たりたとへばきせる問屋藥種問屋日本一家江戸本店正銘正本家などゝ書樣皆仰山也先煙草屋などは名葉いろ〳〵有れ共國分館二種をおもとして賣也小賣も刻みしまゝをわけて目をかけ賣京攝の如く捌たるを玉崩れ有とて別に賣れり酒は貧乏樽とて安き樽に入れ樽代共にいくらとて賣日毎に賣得意は德利也菓子屋は大方折の方多く饅頭羊羹にても折入の方多し鮨にても折入也蠟燭の櫃賣は格別いか程餘計買ふ共一挺々々紙にて卷有

四の五のといわず何ぼの蠟燭何挺と云が如し佛事等勤る内へ油一升とか二升とか油小樽に入て遣ひ物とする是調法にて京攝には珍らしかるべし鰹節など進物にするに箱入の方多し正月注進の内（元日より七日迄）扇箱買わふ〳〵と呼で年玉扇幷に臺を買歩行ものいと多く吉原芝居町などへは蠟燭の流れ買わふ〳〵共云歩行有四月の初蚊屋や萠黄の蚊帳とて大小母衣蚊屋の竹ども賣歩行此賣聲は別に聲よき者を雇ふて賣ると云初夏には簾葭襖を賣歩行五月雨頃は竹どゆふを割て掛る計にせしを一間計より三間迄を何本もかたげて賣歩行誠に自由なる事いわん方なし酢賣麴賣を始京攝にて賣歩行ぬ物を悉く賣る事所のならわせにて妙也中にも自由のよきは朝々齒磨楊枝を賣物一軒〳〵お早ふ〳〵と挨拶して廻る一日も楊枝齒磨きるゝと云事なし是に皆野師の（我自刊本是を廻り場得意場有者とあり）とぞ是らの事いち〳〵記さんには實に際限なかるべしされど認るうち思ひ出せる分は追ひ〳〵に解べし

錢湯

自由の足る中に自由なると江戸に限つて直の安き物は湯と髪月代也外に安き物といへば下肴（鰯こわた芝海老蛤馬鹿淺蜊むき身）燒芋此外は一切高直也尤物によるべけれど大坂にて諸品を買ふ割には京都は一割より一割半高く江戸は又京都より一割半二割も高し大坂と江戸にて三割四割は高直なりとしるべし都て江都は武藏野の果にて廣々たる平地の上海近きゆへにや常に風強く土和らかにして泥埃り立所也京攝の如く往來へ打水せんにも水不自由なるゆへ市中のどぶ（上方の溝也）の水を打故香甚だしく乾けば風にて吹散らす故男女共冬は別して縮緬の頬冠りをせし上手拭にて口の邊りを括れり京攝の如く丸綿帽子揃出し煉の上ヶ帽子頬冠り綿は至て稀也故に日毎に湯へ入らねば叶わぬ樣にする也其風呂を內にて沸す家屋敷方奥向は格別町家の大家にても風呂場ある住居はいと珍らしき事也旅籠屋にも風呂は沸さず客は錢湯へ行事にして町家豪商の內儀娘たり共殘らず錢湯へ行をならわせとして聊恥る事なし湯屋は大體一町に二軒宛は丈夫に有京攝の如く扇湯櫻湯大和湯なぞとは呼ず町名を上に付て湯と呼也いわば檜物町の湯とか菖屋町の湯とか扨湯屋の門口に男湯女湯と並び有て此二つの入口をば入し

所の眞中に内の方をむき錢取場有爰一所にて男女湯とも兼帯の番也鹵磨楊枝膏藥の類錢取場にて取次あり此傍に二階へ上る大段階子有二階は男湯のみにて高欄付二階より往來を見おろす座敷には隔なく碁將棊の關屋刊我本席屋に作るに似たり中央に二階番頭素湯を釜にたぎらせ客の顔を見れば煎花を捧へもち來る前に菓子羊羹鮓など重に入有爪取鋏楊枝傍に置有贅澤者はずつと這入て二階へ行二階に着物脫入る戸棚有是へ脫湯代と手拭を持階子を下りて錢を置入湯して二階へ上つてゆるりと骸を乾かす茶を持來る菓子を喰茶をのみ爪など取てゆるりとして着物を着る前にいふ茶店にて休まんより遙安上りにてゆるりとす近邊の若もの勤番の侍衆抔は此二階にて遊び碁將棊盤有て溫泉湯治場の如し又家内大勢の内は男女共幾人と定てふせたるも有未明より夜五つ迄上り湯とて汲出し次第湯は湯舟に沸有風呂は中狹く底深く腰かけなし此湯熱くして骸しめす計也外へ出て洗ふがゆへ中は暗くて晝にても顔は見へぬくらひなり扨爰に三助と呼びて脊を流す男有晦日〳〵に祝儀を錢取番へやればその客來ると拍子木を打勝手より來て留桶とて此客等計につかふ飯櫃なる大桶に溢るゝ計湯を汲平生の小桶二つにも湯を汲て置事也客は風呂より出て此桶の所にて洗ふ内三助脊を流しに來るたま〳〵行者は小桶より遣わす事なし幼子などつれ行近所の衆は此大桶の中へ子供を入置て親は小桶にて洗ふも有湯上りに又もとの如く湯を汲んで出し有是らを思へば上方の湯は上り湯は夕方ならではなくいぢましく思わる尤下にも二階にも其邊のよせとて噺講釋見世物の類の番附を張どこで切たのはつたの火事芝居の噂を聞ふなら錢湯に增事なし朔日節句紋日にはおひねりとて十二文紙に包んで持行也桃湯とて桃の葉を湯に焚て入る此日もはやり（やはりカ）おひねり也右云如きなれば豪商の内たりとも家内にて風呂を焚ず第一火の用心の爲二には勘定也風呂場焚場湯殿を江戸間一坪半も塞がれば此店ちん一間に一歩にては上らず桶釜の損じ薪炭高直なれば皆々錢湯へゆくとしるべし又江戸前髮結床は別に安ひと云は只叮嚀也首筋耳の穴鼻の穴迄細き剃刀にて自在に剃る也毛剃叮嚀に漉て渡す床主又剃刀にて清剃して漉事凡四五遍にてあかもふけもなき迄漉夫より油上方の愛付也を附て又漉てよ

り結ふなれば京攝の存在なる髪月代とは雲泥の相違也哀れ京攝もこふ有たき物なりかし

厠便所

扨も彼地の潔ぎよき事は船と駕籠潔白なる事は湯と髪月代に限る也よき事をのみ云ばかりにては興ならず京攝もの困るものは雪隱と小便所也男すら迷惑なるに京攝者の婦人は嘸々困るべし雪隱に板圍ひ多くもと下に壺をふせし所はなく大方船板にて拵らへし箱也上り段低く戸は肘壺を打しはなく其上厠へ這入り居る者外よりよく見へる計裙の方少し隱るゝ計也小便所別に有所もあれど大體厠と兼帶也辻々に小便所稀にあれ共只はぢきの板計にて地内へしみこますなれば其邊に散亂して嗅氣甚し百姓下屎は取にくれども小便は取に來らずそれゆへ自然と垂流し也故に男子は往來の透を見て格子先あるひは裏口とおぼしき所などへする事也それも鳥居を書きあり此所へ小便無用の張札有てはづみし折は甚迷惑する事也犬猫のなきがら幾日立ども取捨る事なし小便と犬猫の骸は京攝の如く用に立ぬと闕けり犬は下肴の腸を喰ひ厠へ入て糞をくらへば其皮用に立ぬと云が左樣なる譯あるか猫とり犬ひらひと云賊有との噂を聞ず下屎は大屋へ先金をかけて取る事と見へ大屋の息子で糞喰らへ抔惡口の時に聞り下がゝりの話次手に江戸では河太郎と云を河童（カッパ）といふ河童（カハワッパ）の略也物の用に立ぬ者を河童の屁のよふな男だと誣る是は木端の火にて京攝のこけら木屑の火は用にたゝぬ事を誤つてかつぱのへと云也とぞ上方の消炭殼消燃（オキ）を焚落し切炭を佐倉炭此至つて駄ものを駱駝炭と云也割木は惣名に薪と云なり扨も小便を寵愛するは京の事也矢脊小原など遠方へ持かへるは樽詰にし日々菜でせう蕪でせうなぞと野菜の物と替て直切小切する惡口は十返舍が膝栗毛に書たれば世間に名高し大坂にても適々往來の小便桶へ婦人の小便する事老婆幼稚の者は人目も恥ねど若き女の小便するふりは餘り見るべき姿にあらず江戸は下女に至る迄も小便たごなければよん所なくかはしらねど皆厠へ行ゆへ是だけは東都の女の方勝公事也京にても浪華にても藝子閨婦が送り迎ひの下男下女を待せて往來で小便せぬは餘程色氣を含みしゆへ也老若といわず往來の小便所に女は遠慮あるべき事也上州信州在の女は立はだかつて腰を突出

してするがおかしくて泊りし宿にてそれをいゝ出し笑へば此邊でしやがんで上方にてつくばる事也小便すると縁付が遅ひとて嫌らへりと云所々にて種々の忌嫌らひありと思へば臍にお煎花が沸けり以後下がゝりの噺しなし穴かしこ〳〵

雑具の名

座敷廻りの道具をいわば京都第一にして諸品器用に立派なる事也簞笥佛壇戸棚の類ひ戸障子襖に至る迄善盡し美盡して割には價も安けれど都て手薄く不斷澤山につかふには爲あしかるべし膳椀折敷手道具の類も是におなじ尤上つがたに有昔道具は格別の事也大坂は見ため不束にして手丈夫なるを愛せり江都は又火早き土地ゆへか諸道具は其日〳〵の用を辨じる計にて飾りの道具は見たくてもなき位也是も諸大名奥向は格別の沙汰也中道具にても上つがたよりの拂ひ物など出ればよきは至つてのよきもの下は至つての麁末なる物にて中にも荒道具の類極々麁相なる物多し相應の暮しの商人には袖簞笥一つあらば極上也跡は脊負ひ葛籠を人數程あればよきと見へたり故に佛壇金屏風重箪笥なんどに美を盡す事を好まず男女ともちいさき持もの鏡袋煙草入などを金に飽して持て寵愛す扨勝手廻りの雑具は誠に麁相也竈は多く黒塗にて三つべついが大家の分也通例は二つべついに大和風呂走り本を流しもとと云水壺は水瓶とて價高きゆへ船板にて製したる箱に水を湛る是にて大勢の客來をする人と人物は有合と世の諺に違わず夫にても濟もの也尤茶棚の庭戸棚のと並べ立たる住居なし是は中位の暮しかたの内の評也かるがゆへに空地に植木泉水など絶てなく家建詰たれば也場末端々に至りては空地植込もなきにはあらねど御府内繁昌の所柄は大かたが是也まず思ひ出るにまかせ物の名の違ひし事をいわば上方のいかきをざる切藁をたはし飯櫃をおはち飯臺(ジダイ)を膳箱齊とふを飯だい片手桶をさるぼ壺を瓶土瓶(ドビン)を土瓶(ドビン)と濁つていふ蓮木を摺子木神折敷を組入桶の輪を桶のたがなど〳〵道具は道具言語食物と部わけのしたき物なれど數多き事ゆへ遊所芝居の事は次の巻に出して此所は諸事混雑して思ひ出るまゝにしるせば重なるも有跡より思ひ出書もあり其心にて讀み給ふべし

食物の異名

江戸近國にて茶粥と餅茶（モチチヤ）を食する者なく尤製法さへもしらぬ位也粥といへば白粥也正月十五日の小豆粥には餅を入れず砂糖を皿に入て出す岡入（テカイレ）して喰ふ事也正月の雜煎は菜を入てすまし也餅に小餅なく切餅也お餠をおそなへ油揚を胡麻揚飛龍臼（ヒリヤウス）を雁もどき味噌赤白とあれども朝々食する味噌汁は中味噌也是をおみおつけすましはおしたじ味噌にても金山寺の類ひを菅物醤油を下地（シタジ）蕪（カブラ）を株（カブ）水菜を糸菜ずいきを芋殻實蜆（シジミ）をふり蜆南瓜を唐茄子茄子田樂を鳴燒生節をなまりぶし太刀魚を太刀の魚隱兒豆を藤豆名古屋鯰を鹽さいふぐさいらをさんまはつのみをまぐろ（きわだ上かし）き中し び下）刻牛房を削り牛房煎付肴を煮付焚合（タキアハセ）物を味煮ごろ煎を煮ころばし同肴を泥龜煮菓子碗の類を碗盛夏は是を茶碗盛柿を樽抜熟柿をさわし柿揚物を天麩羅又金ぷら善哉を汁粉（白玉入也）餅の入たを田舍汁粉薄皮餅を今坂餅數の子の水に漬たるを冷かし鰈をひらめ摺身をはんべん魚の田樂を魚田鮮魚（アタラシキウヲ）を無鹽座禪豆を煮豆鍋燒を諸事鍋と計り加役鍋鮟鱇鍋白魚鍋鴨鍋と云類ひ也合せ酒を割酒

諸品の變名

又小賣するを樽割番傘を大黒傘下駄を足駄履物直しを雪踏直し又でい〳〵とも云中風をよい〳〵ひがらめをすがめちんばをびつこがんちをめつかち手なべをてんぼ明盲を明じい出齒を反齒月役を猿猴坊男根をちんぼこ陰門をおまんこ置錢を色惚たをおつこち糸様をお嬢様お家様をお上様男の子を坊様姥をばゞア御寮人を御新造貧乏人のきたな口に娘を尼男子を餓鬼女子をめろのがきおてんばめらふあまつちよなどゝも云也按摩をもみ療治奉公人口入を慶庵肝煎を世衒隱賣女白ゆもじと云を地獄是も文草に記しあれど舊清左衞門と云もの是を始たるゆへ地獄清左衞門と云は箱根熱海に清左衞門と云湯有東都には此名通り惣嫁をば地獄と云也上方にて十五の涎くりと云を江都にて惣領甚六と云それより取て半道役者の名に付たる也口入の慶庵も始めし折の人名也下女の通り名をお三どんといふ是は上方で宵から睡るお清どんの類也下男にお科と云も惣名也信濃より出る奉公人なるゆへ然呼ぶ惣嫁を夜鷹屋敷者の下男を折助とも火怨とも云大坂にて耄碌と云類也老耄をもふろくしたと云子を抱寐さすにだれかしたと云所を誰が

よヲ〳〵人の(子をカ)愛するにもア、い丶坊様だネヱおと丶様にもおか丶様にもよく似ていさつせる事はいのうなぞと口上手をいふやつ也此追從をおべつかと云しが近世胡麻すると流行詞に變名をしけり委くは文草に出たりまた合點でほめそやしておだてる事をおひやると云子が産れると聞進物をするいまだ名を聞ぬゆへ御出生様と書て送る是は大坂にては餘りか丶ぬ事にて江戸の方正し丶と云べし子を脊に負ふ事をおんぶしてあげませふと云負れるをおぶさると云芝居遊所へ引つきにて只ゆく事をおんぶとも云ぞめきをひやかしと云尻からげを尻端折と云走るを駈る中分以下の我母でも餘所の老母にてもお袋と云中老が女を姉御親類内の子供をあのこ〳〵と云むかふからも伯父様と云幼稚の者はちやんと云わるさを徒らほたへるをしやれる炙すへるを赤團子をすよふかと子供を威す男女とも子供の内を小僧〳〵といふ給金取は其事なけれど年季の奉公人は正月七月十六日には一日養父入に歸らす惡口に年季野郎と云足のきびすを屈所(カヽト)そげの立しをとげが立たと紫蘇をちそと云せく事を大急暇の入る事をお間がござります意地穢なきをあたじけない氣のちいさいをけちな界性のないをいくぢがない見られぬ風俗をみぢめなざま見ろ追付取付喰付(ライツクトリツクヒツク)などもおつつくとつつくくつつく宜しふは宜しくよふなりましたはよくなりましたきつふはきつく括るはしばる結ぶはいわへる述懷を述懷觀音を觀音怪談をかいだん李冠(リクワン)(をカ)りかん喧嘩をけんか順氣のよしあしを陽氣がよい惡ひと云火事をかじ藥鑵をやかん菓子をかし一貫を一かん芝居をしばやすばくをすばく強ひ事をおつかないあぶなきをけんのん膽の太ひを度胸がよいいら〳〵するをせつかち何ぼをいくら大きいは強氣替つた事をおつな事夜前を昨晩滅相なを飛んだ事仰山を結構な家の附物を雜作盜人を泥坊知つた顔をするを生聞暇の入るをおつくうなあほうをべら坊鰹節をおか丶細いと云をこまかい太ひを荒ひ味ないはまづい是は〳〵をおや〳〵馬鹿者をとんちき無益をむだ落るをおつこちる仕方のなき物を難作物(ナンサク)又困り物一向をいつそ丸でをづぶ荷なふをかつぐ脊負て行をしよつて行おふごを天秤棒つとをたば髷をまげ髮先を刷毛先凧(イカ)をたこ登(ノボ)すを上る濕病(シツカキ)を瘡つ搔碎をこわすつぶれるをこわ

れる私をわつちヲ、すかんをいやだ（ねカ）エ行過者を高懐ものあばずれするなをふざけなァんな歸るをけへる這入をへゑるそちがと云を手前がそふせいをそふしろきつふはきつく也行をあゆむそふでないと云をどふして〳〵何（ナン）にと上方に引ばるを走つてナニ〳〵賢を利口頓とをさつぱり頃合を恰好下直に付たを安上り初めてをお初によい暮しをいひお住居な瓜を丸瓜わなるをどやぐこそばいをこそぐつたい辛氣なをじれたい身をもがくをじれるあどないをあどけないしどのなきをしだらがないもゝほうづきをほうぶらせゝ具を金砂子むくろじをむくかんや（刊我本、むくらんじ）手鞠取を手玉取る手鞠唄を鞠唄手製のおこしを豆煎舞の師匠を踊の師匠端唄を上方唄又めりやす倒者をどんだくれすめをしらぬ酒の酔をずぶ六すこし酔しを生酔久しい物じやをお株をいふと云也お前はいつもそんな事すると云をばお前に限る都て上方にて夫々憚りお世話様御面倒様などを有難ふと計にて濟す也お暇申ますと云をハイさやうならと計りよしにしませふをよしましよよしてくんねへよしにせいをよせへ〳〵嚴敷を素敵乞食にマア往ておくれを無よと計葬禮を弔らひ石塔場を卵塔婆色（イロキ）着を施主地べたを地下蒸（ヂビタ）を吹す門を城戸竹箒を竹ぼうき雷を雷様悋氣を甚助妬むをそねむ法界悋氣を岡燒餅みすぼらしきをそぼろ甲斐なきをやるせがなひ鉢山（ハチヤマ）を箱植（ハコウエ）犬猫を畜生少しをちよつぴり舐（ネブ）つて見いを嘗て見い女乞食の三味線引て來るを女太夫巫子（ミコ）をいち子京攝の猿など呼役人を岡つ曳影畵を寫し畵怪談をおばけ噺仕（ハナシ）を噺家忠七を豆藏又おでゞ子とも云淨瑠璃を義太夫江戸出來の道行を淨瑠璃一文もないと云を四文もない一文錢を小錢四文錢を大錢百文錢を當百賴母子を無盡好な物にて錢遣ふを道樂いわば女道樂着物道樂と云也かく書つゞくれば實に千言萬句際限もなけれども是にもれたるは次の巻に著はすべし是を東都の者に讀聞しなばヲヤ〳〵あの人も奇特な人だなアかう知れたる事を書ずともの事だと笑ふべし

西澤文庫 皇都午睡三編下の巻

目次

一流行言葉　一婦人の髪
一戯場の方言　一貨食店の名
一京攝の古遊所　一深川の古遊所
一吉原遊び　一品川宿
一内藤新宿　一板橋千住
一廻し床　一通と野暮、持る持ぬの論
一遊所の惣評　一訛の惣評

西澤文庫 皇都午睡三編下の巻

西澤綺語堂李叟著

流行言葉

絹木綿の文庫を四つ手といひ脚半をはゞき家の附物を造作と唱へ二焚食(フタタキメシ)をおちやと呼ぶなど悉く呼名の違ふ筈前に云如く東都の人の口にかくれば京も大坂もひとつ國の樣に心得る其京と大坂との言語いか程か違ひ物の唱も違はゞ三十石の乘合に毎度此論を聞こと也され共京の者の物靜にそろ〳〵と大坂を誣る大坂者は頭に血多く口やかましく大音にてのゝしる故先大坂が言ひ勝た樣也江戸とても貴き人々には聊も言葉は替りたる事なき物也いはゞ文通書狀に書送るに江戸なればとて訛りを入て書送事あるまじそれにても通る所を見れば前卷に演るは皆中より下賤の言葉也確としたる書籍に記さずしるさゞれども事をかゝず尤貴人方にも言の延縮云ひ放しなどには各國の詞を持生れ給ふなれば少しの事は有うちなれ三都と詞をわけて云時には江戸計は耳立て聞え京大坂とはさまで替りたる詞もなし是も詞の延縮引か放すかといふ計の違ひなるべし少しくいはゞ京の淺瓜は大坂の白瓜、かぼちやを南京、でかいをどゑらい、出來物(刊我本腫物)をでんぼ、目疣(イボ)を目ばつこ、辻子(ズシ)を小路(ヂ)、あんばいよしを田樂、おつかきを十能、道の上る下るを東へ行とか南へ入とか、せんどを何べんも、いつかいを大きい、くじたくさんをおこしたおこさぬ、ちろりをたんぽ、此餘澤山にあるべけれど五音の淸濁呂律の運びの違ひにていふ程の詞通せずして年老の人に聞ねばしれぬといふ程は絕てなし門々を商人の賣步行聲などは其所〳〵にて賣る物なれば其地の者さへ何を賣るやらんと見屆てしる事也京にて蜆を賣る聲にめエ〳〵と賣氷魚(ヒガイ)鮒(イヲ)などは大坂になけねば適に上京などしたる者解すべからず皇都の人大坂へ下らば物賣聲は曉解せぬ者多からん江戸上製菓子屋に京都御菓子と印せる所多くして京大坂は長崎御菓子と印せば長崎にては又京都菓子と云大坂には煙草入きせるは大方江戸產物といへば江戸にては何かの

物を下り〳〵とて皆大坂の物と呼で賣る然れば都會の地は名前をかる事御互ひ也是より京と大坂と別にわけず江戸人の思ふ如く一つ國の如くにして上方の事を云べし大坂に流行詞絶ずして追々に詞變れり京攝ともに舊より文花ひらけたる土地なれども近來ます〳〵開けたり言語に錢金はいらぬと心得都ての詞を高情に云也いはゝ誰それを調伏して誰々聞て大逆鱗などと洒落の言葉に天子將軍家に云ひ賜ふ詞を遣ふ其上醫者の諸生の詞を聞はづり專ら漢語をつかひのぼすはの腰が痛むのと素人らしくいわいで逆上の氣味じやの疝の業か殊の外腰痛するのと大路次操り此太夫が聞てあきれそふ也漢語遣ひ荒くなりて安ふ落下つた者は先生也直しを見ても垣外を見ても是先生〳〵と云ば本間の先生は穢多や垣外と同格にいはれる事也そこで易者などが負ぬ氣になつて我内から貼札するに何々大先生と我手にて書て出す大だけが官位昇進の心なるべし所詮斯ふ言葉が高ふなつたれば三都のいきすぎ者に茗荷飯を十年も續けて喰さねばもとへは戻らぬ也子供でも賢ひ子じやといへば嬉しうなく才子じやと聞と嬉しがる時節とはなりけり不仕合な男が斯ふ薄命では叶わぬ日夜歎息の外なしじや抔といはれてからは此方より何とも挨拶の仕よふもなくなれりそふ若手の調口が高ひから老人の物しらずが夫に付合ふて片言を多く遣ひ血に交はれば赤ふなるけふは暑寒の御見舞に參りましたの御朱印後は世の中がめつきりつまりました抔とどてもない鄙言をいひ出す馬鹿ながらにも老人の事ゆゑそりやこふじやといはれはせず道風の朗詠集也と笑ふて仕舞ふより仕方なし爰に又よひ事もあり江戸に似合はぬおまんま、おみおつけ、おつかさん、おとつさんとて何事によらずおの字を付る京は素より何にでもおの字を付てお米がお釜になどと乞食が若衆を口説よふな詞つきに聞へるが是も古きより叮嚀に云なれば甚宜し大坂は古淨瑠璃の子供のせりふにもとゝさまの名は阿波の十郎兵衛かゝさんの名はお弓と申ますと云程なれば我らが子供の時分は專らとゝさん嚊さんにて有しがいつの程にかおかあさんおとつさんと官位昇進しけりそれも身を持た下人大勢つかふて暮す内は舊からおとつさんおかあさんといひしが是も前に云先生と同格で裏住の子がそふいへば乞食の子

迄がおとつ様おかあ様になつたるは何と口が高ふなつたではないか役者に親方と云は座頭一人太夫といふは立女形一人にて有しを今は惣座中親方と太夫様になつたり銭拂ひの中女形中通り迄親方となれば今に稲荷町の親方も出來そふな物也旦那といふも呼んで貰ふてとんと嬉しうない時節也諸事が下から上つて來る物ばかりにて上の手に舊からいる者はさりとは迷惑せらるべし扨も流行詞は又一種別にて觸書も廻らねど銘々いはねばならぬよふに云がおかしき物也ゑらい扨子じやは至つて新物也以前の南京じやなアと同意なるべし何じやいふているはおゆるしじやなアちと氣じやなア一朱〳〵駱駝づれでよふいわれた事じやちやかぽんそんならそうかよふなはやり詞は多く色里芝居より弘まる事也中にも大熱くなぞとはどこから出るやら是もとは病人のたわことより出たるなるべし扨もはやり詞といへば昔からないでもなくいふてもおくれぬ小夜あらししよんがいなア松坂こへたエなども其昔のはやり詞なるべし子守歌勸進の詠歌などにも我ら子供の時分に聞たがふしが替りて諷ひかたに大同小異有念佛題目和讃にも人々の唱へ方によりてか年々すこし宛かわるやうに聞へり中にも片腹いたきは市中の相應なお内儀やお家様とか呼れる人が芝居の樂屋詞や遊所の下女が云ひはやらす詞を聞なれてわからぬなりに云改らるゝは情なし少し爰にのするぼ(ぼカ)ん〳〵と云をどん〳〵と云金棒ひくといふをじやりひく駈落したをどろ〳〵くわすだまつているをだんまり向ふのわからぬ事を黒幕、相談にならぬ事を咄にならぬ、うぬが手にあわぬ者を人が惡ひ、内證のかひ物を用内(ヨウナイ)、聞賃を受代(ウケシロ)などゝ素人の若手合がいふをよひ事に心得役者か芝居者の女房氣取になつていはるゝはさりとは受られぬ物也町は町らしく昔の詞にいふ通り古風にいひたき物也其身ばかりにあらず亭主の顔が詠らるゝ娘子供がそれを手本にいひならふと(はカ)さりとは下策なる物也さればとておやま買して藝子立幸頭物よんで上菓子たべてなども餘り古風なれば能程に有たき事也けふも旦那の散財じや位はよかるべしかかよふ申せばハテいらぬお世話ゑらい扨子じやと云るべし

婦人の髪

扨江戸男髪の風は特に流行有て一概にはいわれねど

武家にはいろ〳〵かわつたる古風な髪も有町人は大方銀杏計上方の如く丸髷二つ折などは見當らず上方にても今のんこと云髷珍らしく江戸に本田は屋敷方に適々見受る計也女髪は將軍家の奥女中の風儀は別段の事にて他家にて其風を寫す事は御法度のよし御三家始め御大名方にても其屋敷〳〵にて異容あればあれはどの屋敷是は何れの屋敷の女中也と彼地にては委しき人は見ても知るゝと也町方女の髪は齢の高下に拘わらず大方丸髷とて勝山のちいさく根低く押へつけたる樣也髻も上は小さくまつ直に横へ張出したる也髻附を多く附ずざんぐりと捌がち也月に三度計髪を洗ふをならわせとする也笄も短かきをさし大坂の如く四角に厚きは用ひず簪なども短くして薄手にて甚だ質素也常に多く櫛をさゝず他行にても鼈甲の厚櫛を用ひず御趣意前にても朝鮮の櫛かんざしなりしが當時は粉塗の木櫛專ら也上方の如く白粉べた〳〵と塗事なく至つて薄く目立ぬをよしとす元來女は男めきたる氣性有所の故なるべし惣體あたまのかけ物髷くゝり笄さし込の類は幼年の間計にて十二三以上の娘子は見受ず他出にも帽子冠り物を着ずむき出し也大坂の丸綿帽子の如く見物所にて後より目障りにならでよし途中にては黒ちりめん一重の頬冠りのまゝ着る也町家婦人薄化粧したるもあれど大かたはせぬがち也京江戸御所方屋敷方には老女に至る迄粧ひはすれど京江戸とも一體化粧は薄き方也大坂ほど化粧する所は他國にては珍らし見物所にて野邊鏡取出して自慢らしくせらるゝは實に見苦しき物也三都の遊所にても大坂は全體拵はで過る也京江戸は目立ぬ樣にするを風儀とせり江戸の女は右いふ如く質素なる故器量よき者はそれでもよけれど不器量の上にあたまがじみなると若い女か婆々樣か少しくらき所にては取違へるよう也

女用の煙管煙草入扇紙袋履物に至る迄大方男持のすこし小さきを用ふる也煙草入は腰にさして扇は帶の後にさしはき物は草履をはかず女雪踏鼻緒は以前は天鵝絨にて有たれど今は革鼻緒眞田打等也子供の髪を早く置事此地に限れり三才の盆剃より先合鬢(ガッソウ)を置男女ともに同じ此がつそう(のヵ)中を又剃〇あたまの皿に斯樣に置も有扶持(取カ)となる前表を視する也とぞまた前髪の所も)三ヶ月形りに殘すあり唐

子作りは絶てなし扨着物は縫上げして半振袖にして袖口八掛等に赤き裂(キレ)を付ず花色萠ぎ樺色等の絹を摸様なしに大人も同前の仕立多しそれにかわりて十三四位の娘子の他所行には緋縮緬板締等のばつちをはかせあたまも男髷前髪仕立にして尻高くからげさせ後の帯に挟む又女の惣名をたぼと云(男より云詞也)十三四より廿頃迄を新造と云廿より卅二三才迄を中年増と云夫より上を年増と唱へ極年をお袋とも婆々アとも云也女の帯の結び様竪に結びて帯の兩端を上下へ引出し尤も強くしめる也抱へ帯は丸で本帯の下にて結ぶ故外からは見へぬ也上方の如く本帯の次に見へる様に結ばず内にては大方が一つ結びに引通したるまゝ也帯をするとはいはず帯をしめると云也平生の着物は譬へ綿服にても四五寸計も裾を長く引ずらせ着て居る故近所隣へ一寸其儘にて出る時には褄をかい取して出る是則お上様の印にて下女はつい丈に着てゐる也上方にては端々の遊女が近所歩行するに似たり扨裾長に着た上へ前垂を放さず前垂を前掛と云ひ木綿立に二巾にて丈を疊へ一二寸もかゝる位細長き製にて近所歩行にたぐり上て帯に挟む也他出にも摸様ものゝ小袖は珍らしく縞物多く跡は無地也三四月頃一つ着又は袷頃に他出すれば薄綿にして重ね着にて出る帯に上方の様にしんを入れず鯨帯と云て晝夜帯多し扨縞物染色の好等は年々歳々流行物有て確とした事は記されず以前予が彼地へ行し頃は大名縞大はやりにて男女共に夏冬をいはず着はやらせしが上方にても四五十年前大に流行しよし大名に絣の入りしを田沼縞と云たるよし此大名縞は予が當推量かもしらねど白の筋を鎗と見て大名の供先鑓幾筋も並びしかと思わるがいかゞあらん上方にても以前より流行物を思へば松坂縞より郡山すりはがし染色にても路考茶璃寛茶伊豫染或は鳶色紋付とはやり茶色(裏カ)がやんで(刊我本鳶色鐵納戸茶裏が止で)花色裏になるかと思へば羽織の製の長いがお醫者計りに殘つて跡は殘らず短ふなる八つふじの摸様がうせると麻がたが流行など誰いひ合すとなく是が移り替る都會の流行と云也上方は此廿年計り綿結城はやつて餘の縞は皆廢りたり此綿結城は不易の都也今寶山縞じやの女帯に金花棧のと云てはどこの店にも餘計にあるまじ況んや東都の流行移る事の早き替る事のすみやかさ再度の下りには

大名縞は一寸もはやらずまして御趣意此方何かにさつぱりと改まつて能い物は高直ゆへそふ行渡らず不斷着にていはゞ男女を云ず綿結城夏は銚子縮少し上物でめいせん色はかわいろ（刊我本樺色とあり併し本書原本頭書に樺色にあらず革色なりとあり）襟でも裏でも合羽でも革色ならぬものはなし崩黄に黒みの掛つた色也又どんな色に替るか此六七年跡まで立横縞がはやつたと見へ辨慶の物を着ぬと江戸ッ子らしうない抔といふて流行らせる人氣也扨も我等男のしらぬ事乍ら都ての物のかわりしを少しく爰に出す上方にて云八掛を裾廻し八形袖を八つ口、前垂を前掛根子（ネコヤ）谷紬を二子、唐奥縞を唐棧、川越にて織る奥縞を川唐、檳郎（ビンロウジ）子木綿を棧留、八王寺袷袖口にするを黒八丈、生平をさいて湯具を褌、裾除を仕掛（刊我本八王子を黒八丈裾除は蹴出とあり）丹前を掻巻どてらとも江戸腹當を具足腹當抔中々いろ〳〵覺へべくもあらず書盡す事あたわず跡はよきにさつして其風儀の違ふをしるべし

戲場の方言

扨も芝居事をいへば是は又我等の業體なれば委敷記せば中々二冊や三冊には書たるべからずまづ荒増を申べし表のかゝり小屋根なしにずつと上迄立のぼせに二階口あたりへかけはづしにて看坂を毎朝あげて夕方はおろす也當時猿若町の姿にていへば南北に並び南のはし一町目中村勘三郎座北へ二町目市村羽左衛門座三町目北の端河原崎權之助座也是は三軒共西側にて東側一町目に薩摩座二町目に結城座と二軒淨瑠璃芝居也大坂の稻荷座摩ぐらゐの小屋也扨本芝居三軒共南のはしにて木戸口有其隣一間半勘定場表面に有そこを仕切場と唱へ隣に這入口有其次は矢筈格子の戸をはめ何枚も有内間（まなか）中計這入る門有此前へ高き床几を置上に土間番とは上方にて云木戸也是がサアごらふじませ〳〵などといへ共上方のよふに木戸札など賣る事なし此前に看板見てゐる者を引こんで旦那ごらふじませぬかといふて勸る者を河童と云なぜかつぱといへば人を引ずり込といふ謎也近頃の川柳に姥が池が埋まつて河童が出とは是をいひしもの也扨木戸口を直に行ば藝裏棧敷の通り道也（刊我本に藝裏棧敷の後通道也とあり）此故に一筋樂屋へ通る道有上方の樣に奈落なければ役者出這入は是を行が故棧敷の後とは二筋になりある也此取合板にて肩より上あらき格子連子に

して有花道は戸やより筋違に二間計有てそれより本舞臺へまつ直に花道を付たる物也舞臺と云は上方は略にて江戸の方本舞臺也なせといへば雙方にて場二軒並び宛内らへ引込で本舞臺は能舞臺の如く向ふへ突出し有上にて少し引こめて能舞臺の通りの破風餝り有幕は此向ふへ突出したるだけ引が故に西方棧敷からは幕の内よく見へる也扨舊地にては芝居北側に有たれば藝表の方大坂にて西場の方是東也藝裏大坂に東方是西也其例を以て今三軒とも東場棧敷を上とする也西棧敷場ども大坂の東同前也爰に又役者ひいきの客などは好んで藝裏西の下棧敷へ行と其後を役者が通つてかの連子から挨拶して行などすれば裏表に花道ある樣な利窟で餘計見られると云金太郎也樂屋裏にも向ひ兩隣皆茶屋也樂屋口三軒共北のはしに有是は這入ると直に板間にて履物ならず舞臺の方へ行は北に有り樂屋口に稻荷物とて若立役上方にても至極下役者居れり風呂場次に囃子町とて囃子方つらりと並び次に作者部屋に狂言方居る一段高みに頭取部屋有此次衣裳部屋是より舞臺の方へ廻つて小道具部屋棧敷の後通り道筋也頭取部屋の前に假階子有て中二階には女形ばかり也三階へ上る立役敵役大部屋にて西方に圍ふて座頭書出し役者別部屋に扣へる其餘は皆大部屋にてしきる事なし故に上方の樣にのろ〳〵と素人見物に行事ならざる也其三階の舞臺の方に隔の板有そこより内へ這入れば惣竹の上へ葭をのせ舞臺の上より向ふ棧敷の上迄天井はり有是を惣名日覆と云也雪をふらせ又櫻をちらし月の出這入り等は此日覆の上よりつかへばどんな上へ行ふとまゝ也又舞臺の下大ぜりと花道中程一人ぜりだけは奈落あり樂屋一方口にて穴倉の如し戸屋の方へゆけず地低ふして水涌て長雨の當座など困る事有三座太夫元を旦那と稱して京攝の座元とは違ひ至極尊敬する事也年八には大公儀へ拜禮に出て顔見せと正月元日仕初とには翁を勤る事例格也一町目三町目には間に役者ならねば銀主計る役也二町目は役者なれば帳元興行人也兩町は帳元あれども京攝にての大勘定の上格也次に大札と云役有大坂にての頭の上格也跡の手代を當番と云木戸とは格違へど東西棧敷番土間番火繩木戸藝者と云もの有て替り毎看板出しの日には木戸口の高みに上つて役者の聲色をかけ合或は一人にてもする事也看板出しの日櫓下

と唱へ繪入番附を町々へ賣歩行扨初日二日目あたりは一向入なし三日目より評判よき狂言ならば入多くなる月々晦日と十四日が上方の節季なれば六節季とも常と同じく芝居は節季休と云事なしはやる狂言はいつ迄もする事也扨舞臺せまく樂屋も下は甚だせまし舞臺橋掛りはなし今よふ〳〵横に成つて通る位の出這入り口出來たり此後口は囃子方の居所也ゆへに囃子を下座と云道具立は正面三間の間にて兩方は一間宛程よりなし遠見打拔の道具などはなしたま〳〵拵らへても甚だ麁末の物にして少し道具張込し折は大道具大仕かけ抔と仰山に書出す事也扨も狂言によりて藝表當時北方十あたりの下棧敷より出口を拵らへ花道へずつと板を渡して役者是を通つて本花道へ來て本舞臺へ來る也鏡山女行列の出など是也戸屋花道を揚幕と云大坂の棧敷前の出孫と云場を高土間とも高場とも云場は總體深くしてへきり仕切のことカは見物の肩のあたりに有此へきり甚だ廣し此下行拔也狂言は三座とも夜の內に七福神、大江山、甲子待などとて上方花盜人、炮烙割のよふな事をして一切刊我本やうなるを稻荷町若い衆計りにて一切次に中通り計にて稽古修行の爲にする一ぺん

一ぺん書狂言にて一場有其次に八枚の役者又仕こみの狂言有て此幕切だんまりにて始めて能い役者が出る也朝五つ半四つ時也それより四建目五建目と段々に有てもし切狂言あれば前狂言大詰として跡二番目と云也此中に所作事あれば是を淨瑠璃と云大坂の淨瑠璃狂言を義太夫狂言と云也十月晦日前には表町裏町の茶屋共惣一統二階へ餝り物とていろ〳〵の人形を餝りて大坂にて近世はやる砂持正遷宮の折の造り物同樣に種々さま〴〵の飾り物有釣枝毛氈暖簾等にて餝り立甚だ賑わし霜月朔日茶屋より町々の得意先へ鴨の身と切餅を折に詰配り役者の內では朔日來る人每に鴨雜煮をくはせる事定例也町方より此餝り物を見に來て群集する也年中の內冬は陰氣なるゆへ是ばかりは御公儀より御免にて夜に入ても灯を上させ賑わしく群集させる也此餘囃子鳴物等京攝と呼ごへ違ふ事數多有といへども今迄訓蒙圖會等に委しければ爰に略す御趣意前には宮地芝居と唱へ湯島天神社內市ヶ谷八幡社內芝の神明社地等に田舍座の狂言有たれども皆々御さしとめにて大歌舞妓は此三座淨瑠璃座は二座より外になし五福子の紀行に日比此廣き

繁昌の大江戸の地には芝居は十軒もなければ行當るまじと書有素人丁簡には尤なる事也今芝口の人や四ツ谷赤坂あたりの人芝居を見よふと思へば三四里の道を行日暮に果て又三四里歸る事扨々大儀なる物也以前舊地の頃は雨降りには芝居誠によく入たれど當時は俄雨は障りにならねど二三日も降りつゞく雨と見れば遠方の見物大儀なるゆへ誠によく入て有る芝居にても入落る天氣さへよければ又もとの如く大入となる町方にて堺町葺屋町なぞとは呼ばず勘三とか市村とか河原崎とか呼で評判をする也狂言初りにも果にも櫓の上にてトテ〳〵と太皷敲く事は絶てなしトテ〳〵太皷をかんから太皷とて輕業なぞでなくては敲かず芝居舞臺にて大太皷をどん〳〵と敲く事也角力にても門々へ敲き廻る事一頃京大坂の富興行しらしに來る通り也此太皷に甚だむづかしき因緣有て御城の時を打外に大太皷打事は芝居三軒と角力とばかり也とぞ扨果るといわず例ると云也見物のほめごゑは京攝とはさつぱり違ふなりイヨ成駒やァ、成田やァ、有難いぞ、高麗やァ、大和やァ、親仁の儘だぜ、ヤンヤ〳〵上方役者を先所馴る迄は下りイ〳〵と云てほめる也別に名をいわず二町目の下り三町目の下りと云ふよふな心也常に門々を飴をうるを下り〳〵と云て賣歩行紋には◎皆渦を書有上方役者は飴とおなじ皆下り〳〵と云也上方の割子辨當を幕の内と云上方にて三つ鉢女夫肴を三つ物二つ物乃至五つ物抔と云唄三味せんのゆるし物と取ちがへそふ也聞馴る迄はおかしき事幾分も有て獨笑する也

貨食店の名

扨も料理屋といへば是又年々歳々流行あれば確と定規には云かたけれどもまづ荒增を申べし評判の鳥越八百善と云る料理屋は以前は客の誂らへによりて好きな事が出來たれど當時は内で客をせず精進料理の仕出し屋となりけり町にて三十人五十人の法事佛事あれど誂らへると朱黑青漆とか膳碗家具の類迄殘らず取揃へ引菓子に至る迄揃へて送り膳の提箱も向ふより持來て勝手混雜なく誠に便利よろし諸道具は火早き所ゆへ内に有共遣わず皆誂へる事也因に云京攝とかわつた事は百回忌五十回忌などは馴染の人なきゆへ上方のよふに張込ず死んだ當座の方馳走也茶の子にても一周忌より三回忌は輕く七年十三年を段々

先程心易くして當座を叮嚀に勤成丈け張込む所也火早き所ゆへ近所の付合にても三年七年のたつ時は變り易きなるべし是らは上方より江戸の方能き差略也と思ふ也扨當時料理に名高きは深川八幡前平清是は極贅澤也八幡社地に二軒茶屋向ふ島に大七武藏屋平岩昔は葛井太郎と云し也小梅に小倉庵今戸に金波樓大七出店川口お直とて橋場に柳屋尾花屋深川仲町名代の女郎屋也爰に移通り名也駐春亭兩國柳橋に梅川萬八是は書畫會舞さらへ等の席とも云玄冶店に杉坂坂東三津五郎役者を引く是也爰らを上の分として中分の繁昌なる料理屋頗る多し少しくいはゞ青物町讃岐屋下谷の濱田屋同町鍋屋王子の海老屋、扇屋、雜司谷に茗荷屋淺草に萬年屋、鰻屋で極々上は筋違見付外深川屋、駒形の中村屋、鳥越の重箱うなぎ、淺草に奴鱣、水戸橋鱣屋、南で狐鰻、靈岸じまの大黒屋、尾張町鈴木、親仁橋の大和田、人形町の和田、深川の荒井鰻など也茶漬屋で通りの山吹宇治の里笹岡兩國にて五色、淡雪、蓬萊淺草菊屋など中々書出したらば際限なし此餘蕎麥屋居酒屋なんど始め名代の鮓やてんぷら屋など數へる時は一町内に半分の餘は喰物屋なり予が三都の見立に食の第一に見立しが中々食物是程に自在なる所は見ぬ唐土にもあるまじく思はるゝ也

京攝の古遊所

扨遊所といへば各若き折は絕へずうぬが遊びに行所が面白く馴染もおほく段々近付の顔がふへいわばうぬが相方に一度や二度あわずとも遊んで歸らるゝ所にして價の高き程餘計面白いともいはれぬもの也先手近く大坂にていへば御趣意前迄は實に遊所が多過る也いかに我等の樣な能樂人にても悉く遊所廻りは出來べからず一に新町九軒にて太夫天神と有ても其餘に店附女郎送り込より下は阿波座吉原堺の側と直段の高下有二に島の内道頓堀是又女郎は伯人古名は風呂屋の垢摺女藝子の古名は茶立女と呼て廓中には女郎の方を買はやらせ藝子はいはゞ座持也島の内は藝子の方を買はやらせて伯人は二段に下る此島の内と位を爭ふは北の新地也是は又島の内程にははでにはなけねども堂島中の島を引受れば客の種も違ひしつくりと遊ぶ場所也次に堀江是はまた一風立て氣性も外々の遊所より異なる所有て女郎にても金猫銀猫二座の一本付などとて深き口授有次に坂町は女郎よくて藝子はさまで名高くもなく是は又藝者と若衆を

おもとせし所次は難波新地是は又廣き場所にて小茶屋多く其わりには置屋はたゝ五六軒にて以前は繁昌の所なりけり爰に又藝子のよき種有て官位昇進すれば坂町を飛こして島の内へも出される藝子多かりし是に續きて北の新屋敷生玉馬場先天滿靈府是らを位の順なるべし扨名に呼ぶ物の終に遊んだ事もなけれど遊所女郎屋のある場所といつぱ右にもれたるは勝曼尼寺、のど町、上鹽町、眞田山、神主前、新宅、梅がえ、(刊我本、こつぽり下原網笠茶屋、羅漢前、大根畑羅城門新堀びんしよ)堀江六町目、藥師裏、いろは裏、新川、溝の側、坂町裏、南新屋敷、髭剃、高津新地、築地なんど遊所ならぬ所もなく濱側には辻君有市中には白ゆもじとて隱賣女あり石町には町藝子などざつと書出しても此位の遊所あれば市中の若ひ者に濕病(しつびやう)の多かりし筈也今悉く御禁止となり新町曾根崎幸町九郎右衞門町難波新地五ヶ所とはなつたれど五ヶ所が繁昌するかと見ればさ迄にもなく市中の色事がはづんで密男や下女はらますが多ひかと思へばさ程にもなきからは腎水の不作にて沸かぬかたしなみが能ふなつたか小遣ひ金が不自由なか何れ此内に相違あるまじ

京都にても其通り第一位の島原はもとから今の位の繁昌さにて二に祇園新地といへど此又遊所が幾所にわかれてあるやら中々廣大もなき物也川東と稱して極上代物を取扱ふ所は祇園町、富永町、末吉町、東石垣等を云ふ也宮川町、西石垣、先斗町有東に膳所裏繩手に螢二條新地、檀王下、(刊我本檀王の下に八軒とあり)下河原、安井前、五條坂、六波羅裏、橋下と數ふれば川より東は山手へかけて寺と宮と遊所とにて詰つてある也西では内野新地、五番町、壬生などとて所々に色町有て河原には惣嫁小屋有伏見に墨染、撞木町、中書島、大津に四の宮、柴屋町、八町の根婦迄數ふるに際限なく道中宿驛は格別洛中洛外の遊所止つて春夏は蛙の聲をきゝ秋冬は狐火のもゆるを見る島原廓中一ヶ所にきめたるは中々誰やらの業じや云てぼやけども其道の商賣往來にのらぬ者の親や親方の金取出させてもふける者らこそ詰らぬかしらねど子を持下人大勢つかふ人らにはいか程の安心やら夫を有難ひ事じやと悦ぶものゝないと云は誠にめふがしらずとも云べし商賣の不景氣は遊所が有てもなふても賣れぬ物は賣ぬ也

あながち遊所の減つたからではなし物しらぬ人は世が不景氣なから火事さへゆかぬとはけしからぬ言ぐさ先で繁昌するかしらねどふけい氣な所で度々火事に出あふたら夫こそ宿なしの物貰らひとなるべし世の中の小言をいはず我商賣をじつと守つていれば遲ひか早ひか繁昌の世の中となるべし

深川の古遊所

江戸の地は前にも演る如く三都の内にも人數第一に多き所なれば御趣意前にても御政道嚴しく御府内に限つて遊所は一ヶ所もなく錢湯さへ男女とわけて猥がはしき事を禁じて吉原の廓ももと今の高砂町、浪花町あたりに有たるを當時の處へ替地仰付られてからもふ二百年にもなる事今に大門通りと云は前かた吉原の大門の有た筋の古名殘れり我等先年始て下りし時はまだ遊所が方々に有て一遍通りは遊んで置ねば普く人情を察する事かたし扨とよい加減な理窟を付て遊んで見しが其年の暮に皆取拂ひ仰付られて今は跡方もなくなりたりそこで思へばア、よい時に遊んで置た事じや今一遍行とふてもいかれぬ事じやと自慢らしく云も馬鹿也親の死目にあふたのとは違ふ往てもよし往ずとも濟事也さり乍ら其時往かぬからとて金が延てあるかといへばどちらみち其時分からの金はなし見ただけ遊んだだけが德なるべし當時遺つてある吉原、品川、新宿、千住、板橋の外に深川に數ヶ所有けり極上が仲町、大新地、小新地、石場、裾繼お旅町、辨天、常盤町、松井町、安い所があひる、網打場、本所鐘つき堂、八町堀、影間茶屋、麻布市兵衞町、赤坂麥飯、根津谷中、湯島の影間、淺草堂前などとて御府内をはづれると有たるも上方の樣に數百軒有所はなし一所に十軒か二十軒迄也其かはりに女郎屋の外に案內をする茶屋有り女郎屋が十軒あれば茶屋は卅軒も有道理也前に云船宿よりつれて行客も有女郎屋といへば何れも屋體大きく奉公人の二三十人宛はある也茶屋は何れも夫婦下女とかにて四五人ぐらし也是ゆへ上方の格とはころりつと違ふ事也先遊ばんと思ふ時は此茶屋へ行どこにいゝ女郎があると云事を聞てそこへ案內させる事也三人連の內一人外の女郎屋になじみあればわかれてそこへ案內させて泊り翌かへりがけに茶屋にて出合ひ連立て歸る也又仲町は女郎より藝者遊びをおもとする所にして藝者

の置屋を見番といふ子供藝者を羽織と云是は二人一組として藝者一人の料にて二人來る也羽織とは腰より下は責らぬといふ謎也地前にて出るをでへしと云仕替に出すを鞍がへと云町の牽頭を野幇間と云幇間を男藝者と云仲町に限る通言は中興中本と唱へる書に委しければ略す粹書も中興のは佳作稀也京傳の作仕掛文庫、二筋道、虎の卷、粹好傳の頃の作おもしろく實に其地に遊ぶが如し爲永春水、鼻山人等の作は一向見所なし中にも八幡鐘は此地のきぬ〴〵に遣ひ京の建仁寺の陀羅尼、大坂北の新地の寒山寺鐘に同じ

吉原の遊び

吉原は東都第一の廓今さら云までにも及ばねど昔繁昌せし地なるべし諺に吉原は女郎千人客一萬人と積りし所のよしさすれば客十人に女郎一人なるべし今は中々五人づゝにも當るべからずされども舊そふいふ割なれば女郎一人に客一人宛にて毎日一年内續けばよけれどそふ絶ず客人の來るにもあらず亦廓中五丁町なれども御府内の地の割なれば八町計は丈夫に有矢張通り筋は三筋にわかり先日本堤は山谷より曲つて八町有是は古へ千住川のきれこまぬ樣用意に築し土手なるゆへ日本國中の大小名に仰付られ築たるゆへ日本堤と云よし淺草の方より行には馬道より田町にかゝり山谷より四丁目大門口へも四丁位中央にて日本堤へ出る事也此田町は兩側茶屋也爰より廓中へ案内させて行客あり又山谷は今戸橋迄一町の間を堀と云船宿也船にて爰へ來て船宿よりも廓内の案内をさせる客あり日本堤を直に行は千束金杉根岸の方へ行道也山谷より八丁目に左の方へ下りる是を衣紋坂と云也時に右手に高札場あつて武家たりとも鎗ならず馬駕籠ならず抔制札有是より大門口迄の茶屋を五十軒と唱へる同じく案内する茶屋也爰を七曲りとも云道すこし曲り有て大門口を入る正面仲の町とて往來廣く兩側皆茶屋計也店をおろし繪莚敷物敷つめ二階表座鋪には高欄手摺付にて往來を見おろし下より廣き段階子をかけ大體茶屋は間口二間半三間也仲の町突當に秋葉常燈明高燈籠有是より雙方へ道有兩方の筋へ行仲の町より江戸町一丁目二丁目又京町すみ町など呼て揚屋町女郎屋軒並びに有是も廣き筋にて大道まん中に溝有此上へ見事成る用水桶覆に揚屋

の名を印して是を天水桶と云店つき女郎を見るには右側を先にとか左側を先にか見廻る也扨仲の町の兩方の筋を西河岸又伏見町とて是は安女郎屋町也夫も雙方とも內側計にて外側は高塀此外大溝にて廓外也口は大門口一方よりなし女郎駈落等をさせぬ仕方也翹あらばしらず大門口より外出る所いつかなし扨も女郎は高下を論せず近所遊びには出す事をせず年中部屋か店の間より他行ならず籠の鳥かや恨めしきとは是也廓中紋日は細見の圖にも有てよく人のしる處なれば深くはいわず年の暮門松飾は仲の町軒毎に有て雪など積れば山の如し誠に仙境へ入るとも思ふ心地す揚屋の門々にもりつぱに門松を建る也二月廿日過より仲の町大道まん中へ下より少し土手を築上櫻の樹植て花盛り頃誠に麗わし盆は燈籠とて仲の町茶屋家々好の燈籠人形造り物又見事也續いて俄とて女藝者男藝者種々の所作踊り等を仲の町茶屋の門をして廻りて妙也代神樂二度の月見戎講などは揚屋にて家々にするなれば仲の町さしての事なし此紋日〳〵は勿論晴雨を論せず夕方には客有內もなき內も茶屋の女房娘など店先に出て待受る客來れば二階へ上て男藝者女藝者來つて表二階に客つかへれば下の表にて騷ぐ仲の町張りのおいらんと云は皆お職の飛切にて新造禿を隨がへ向ふに箱燈灯を一對もたせ好みの襠（ウチカケ）にて仲の町へ練り出す先に右側を通れば後には左側を通る中にて茶屋の亭主女房など挨拶に出てちとおかけなどゝいへば此店に腰をかけ往來の方を流しめに見て長きせるにて煙草のむ客衆の來た來ぬの噂は付そいの新造よりいわせるのみにて詞數甚だ少なしおいらん買始ての人は此時お顏を拜み置て茶屋より揚屋へいひ込む也扨此仲の町ばりに出るおいらんは家々に五人も十人も有る物ではなく多く三四人跡は二人一人といふ位にて此次を晝三とは云也晝夜三步と云心なるべし然し一概にはいへず晝貳步で夜も貳步有晝壹步貳朱で夜貳步もありそれは細見の口に※こんな事書てある處に印し有直が違ふとて直切られもせず扨仲の町へ出られぬ分は店をはると云て晝店夕店とて姿を吟じて店の格子の內につらりと並ぶ事也此時店清攬（ミセスカカキ）とて新造禿がチヤンラ〳〵と三味線をひくとは芝居ではすれども是も古風なりとてか今では餘りひかせる內もなき也扨仲の町

ばりの客は其時見定め其次の女郎を見立に行は茶屋男に提灯もたせ家別に覗ひて格子先より面像を見屆て氣に入た女郎ある内へ上る事也此餘田町、山谷、五十軒より案内させて行も是に同じされ共それはお職のおいらん買の客はすくなし先茶屋といへば仲の町からでないと聞た所の名が惡し極上の遊びは茶屋よりおいらん方へ尋にやるよろしひ何時でもと返事が有と其席の藝者男女とも茶屋女房付添ひずつと其揚屋へ行御客樣だといつて大段階子を上り先見附の大座敷へ通し又改て酒宴になる所へ揚屋の内に又家付の藝者有それが出て客人の俳名とか表德とかを仲の町の藝者よりよく聞取て何なりと一寸突出しの歌諷ふておかしくもないに追從笑などして少しく座敷になりかける所へ彼おいらん其間へ來て客人の隣へ座して酒事になる時移れば仲の町の藝者は引取跡あつさり飲んで閨へ廻るとなるとおいらんの座敷へ案内する各々部屋は二間宛有て仰山な夜具敷有り向ふは床の間、違ひ棚、重箪笥、立琴、雙六盤などを餝衣桁に晝の襠をかけ有次の間に岩永火鉢に眞鍮の茶瓶素湯ちん〳〵と沸有ずつと體の埋るゝ計の重ね夜具の上へ上る上着を脫せ帶をとる抔は皆新造がする也紙入、提物、扇子の類ひ羽織もたゝんで違ひ棚へちよんとすへる醉過たれば袖の梅など諸事粹書和印の文句の通りおいらんは手水へでもいたか見へず寢た顏して聞ていると次の間にて最前の肴るいを戸棚の小鉢重鉢の類へ入ておはちにおまんま取よせ置てもし客の咳拂ひ抔が聞へるとこふしておけばお客がのちにお茶漬の時勝手がいひと聞へる樣に云て又よその間へでも持ていて喰ふやつ也翌朝早く仲の町へかへつて朝腹直しにて飮で返るも有だゝうつて一日仲の町で遊んで晚に又出かける事も有藝者は翌朝どふなさつたか昨晚はなぞと出て來る直にひつ付蛸也祝儀〳〵におつたをされて重き紙入も忽輕くなる也夫より早くかへつて又出直すがよし二回目はまだゆるされるが三度目は惣花とて其揚屋々々に格式有て茶屋の亭主か女房に相談の上馴染金を出す也そふなると誰々の客人也と極印つきになる事也そふする内に其揚屋の内に買ふて見たいと思ふ女郎有ても買われず仕方なしに我佛と念じ奉つて今迄のおいらんを買通す也外の揚屋の女郎になじみ先の馴染のおいらん方へ御

不沙汰になるを新造でも聞出すと向ふから大門口に張番などして朝かへらふとするをとつかまへられ連てかへられ悪くすると荒事をくわされ甚だ外聞を失ふやつ也是は極上の部也中は茶屋から案内せられ二度目は茶屋なしに直に女郎屋へ行格子から一寸物いふてマア這入れで這入ると揚屋の男是は入らつしやれませと二階へ上る茶屋は都て二朱に付百文とか二百文とかの世話代を揚屋より取茶屋なしに行と揚屋の男のもふけとなるゆへゑらくちよん〳〵といふて世話をやくやつ也其かわりに酒事すんで閨へ廻る時へイお勤をといふて勘定を取にくる書付を見れば滅法界に酒が入たか女郎代には付掛は出來ぬが酒肴は書て來次第なれば飛だ目にあつたと思ひ乍らも拂ふやつ也是中位の所是が下は甚だ多くして西河岸なんどは貳朱店ゆへ物いひはしたなく座敷〳〵騒がしく一時〳〵に時でござい〳〵と拍子木を打廻るゆへ其度毎には女郎親方の前へ判取に行といふ言立にて餘計させては跡を煩らふゆへ傍輩の部屋へ寝に行やつ也是を田舎客がおこつて番の男を呼つけなまりちらけて女郎の不足を云其いひ草爰の内は旅籠やかそれにしては枕が二つあるがどふした物だ一人寝なら勤をかへせ脇の女郎屋へ行のと遠いからねぢかけるも搆わず女郎は外でよく寝ていて起されてエヽいめいめしい摺子木やらうだとぼやき乍ら出て來て客の顔詠めて此客人は何だな何もそんなにどなる事はありませぬわな來よふが遅くなつたはわつちがわるかつたこらへておくれよ抔といはれると海鼠に藁で直にぐにや〳〵となる男笑つてさやうなら御ゆるりと出て行跡は寂寞として物音聞へず是らがまだ下の上也女郎が客をふるといふは遙昔の事にて中々ふる事はなし然し爰に論有ふるといふは口口で降るの也口口口計が勤めではなし雙方惚あふて咄のもてる時にはあながち口口口計でなし女房きどりにもなつて合ふべし邪魔なすかぬ客だと思へば物數いはずと早ふ口口てしまひ跡からだをそむけてよく寝るかそれも寝ささぬ時には右田舎客のよふにほつておいて脇へ行やつ也紋日物日にこそよく賣る女郎は廻し座敷とて女郎一人に客二人はとれども今時は中々そふ客が大勢ないから我床の内をはづすのは廻し座敷にて他の客にはさら〳〵なし朋輩の部屋へ寝に行也紋日物

日は仕方なしこちはふらてん我自刊本たま〳〵に買ふ向ふには正月は誰盆は誰と不斷馴染の客有て往も行ずとも約束通りの金をとられている客あればとうてさしつかへる事有其時女郎が上手じやと始から打出して乃至あちらの馴染の客は御屋敷だから早く歸らつしやるから其跡で直にくるから待て居ておくれよどふも間が悪くてなどと初會から色氣取になつていはれると夫でもおらいやだけへるなどともいはれずいて來さつしいよしない苦勞をさせるなアチャランと歌になる時の立役氣取になる物也そふ立こかしにする女郎などは古狸のこつ長也下のぶんは深く其道をしらざれど咄にも毎度きく癡情は推量にも書る物也肴におき勤といふ折に出すのは邪魔だ翌の事と延して女郎をゑじめて立ふりさせたりそれが出來ぬと友達内へ手紙を書て無心にやりそれも埒明ぬ時は奴質（ヤッコジチ）とて物置納屋へほりこまれとゞは始末やとて其人を引とつて身のまわりはいで取り價にかへて算用する廓中に長屋と云ひ三ヶ月長屋何長屋とて百宛にて夜鷹小屋同前の細き路次の片側に並び有所へ這入る由當時なけねど淺草堂前鐘撞堂網打場麻布など是に同じき所の由是を鐵炮店と云也扨此廓中の名物といつぱ竹村の菓子、堅雀煎餅、最中、双葉屋の羊羹、山屋豆腐、甘露梅と云は京攝の太郎梅也仲の町茶屋家々にて手製にして客先へ配る也男藝者は大體常盤津、富本、清元を語る故何太夫とて太夫名也長き羽織を着て頗横柄也一寸當ぶりにて權兵衛が種蒔位を舞ひ狂歌發句の地口位を云て花をせしめる也女藝者（げいしや）各酒を能く飲む事長鯨の百川を吸ふが如しよつて鯨者（ゲイラン）と近頃の中本にはこち付たりおいらんはおいらなれど京傳は老亂（ライラン）とこち付子は於の字を不用より於不用（ライフヨウ）とこち付たり我自刊本おいらんはおいらにて新造衆よりおいらが所の太夫様といふ心にて新町の太夫をばあんた天神をまんたといふにおなじ心なりとあ地廻りとは廓中の若い者の頭にて喧嘩等を一番に分入る也上方のぞめきを冷かしと云是も鳥越に昔紙漉の職人大勢住て紙種を水に漬濕る内を廓へいて店付をぞめき來る内紙が冷けると云通語なるよし文草にも記置たり都て北里廓中に限る辭甚多しざんすは新町のなまし也是又いと澤あれど諸書に委しければ略す元來吉原女郎は諸國より抱集しとは云物の越後者至て多し其國々の訛りを消んが爲吉原育里訛りとて一家の口調を立し物也今岡場所外々の遊所を云へ鞍がへ

に出るも有故其詞をつかふが故客の輩もつい夫をまねて廓詞やら我自刊本吉原詞やら江戸詞やら混じる事とはなりけり予は別に馴染の女郎このもしからず只揚屋の容體座敷の樣子など見て置ねば著述の爲に不自由なる故同じ揚屋へ二三度も行し事あれ是と揚屋をかへて遊び見しが先一二をいはゞ岡本、岡田屋、玉屋彦太郎、尾張屋、久喜、万字抔也是は何れも大店とて當時盛んの女郎多し何れも座敷の建方に大同小異あるのみにて差て變りし事なし久喜、万字抔は亭主甚濶達を好むと見え大座敷より次の座敷へ大廊下を架し仰山にはでなる普請也お職のおいらん京都より抱へ入れしもの甚だ多し日々の雜費入用などを思へば芝居一軒位の人數掛りて夥しき暮し也客も餘程なければ勘定あふまじと思わる扨も此五軒抔は芝居役者などは決して客にせずそれと見れば茶屋へ斷りかへす事也夫故町人とか郷士とかに化て行事也役者など彼地へ着まだ人のしらぬ内にちよつと化ていて試みをするは出來れど舞臺へ出るとさつぱりと相手にならぬ也客の最負にて酒事には誘はれて仲の町茶屋へは行女郎屋亭主又は女房役者を最負にする者夫は勝手と云ていは

ば亭主の間にいて咄して遊ぶ事也心易くても我自刊本仲の町茶屋へ行事まゝありまた揚屋の亭主女房らの最負役者は勝手と女郎て亭主の居間へいで話して遊ぶ事ありいかほど心易くても の間へは通す事なし是に付ては種々無量の話もあれど書出せば實に際限なし深川の有し時分は當時の通人と稱(すか)る人は仲町のみを愛して吉原を野暮などいつて能々遠國の客などを連行常に深川遊びの方はづみしを深川なくなりてより廓中へ行ふより外仕方なき故通も不通も吉原計と成りぬ大坂にて新町を滛亂國と云て島の内を粋がつて遊び所とせしと同日の論にて有し也今芝居は近邊へ移り芝居町三丁目十手八町吉原五町なれば皆濟拾六町なればひとつ廓にすむが如し昔吉原も御府内に有て芝居も御府内に有し頃は芝居へ行ふか吉原へ行ふかと云ふ心にて思案橋とていまだに古名遺りし橋も有大坂の東堀の思案橋は何の思案をせし所やら名儀わからずいといぶかし吉原の古圖抔みれば六法丹前とて古風な姿を畫し有其頃專ら流行し成べし丹前とは丹後侯の屋敷前に湯屋有て浮世風呂など呼で湯女とか垢摺女とかを連て遊ぶ事ありしゆゑ丹後前と云を略して丹前と云六法ふるとは肩の行の短かひ着物に兩手をふり大小長刀を十字

にさす故四本脇へ出る兩手を入て六法となるとは京傳種彥あたりの書物に出たるが確とそふかとも定め難き説なれどマアそこら成べし廓の者を蠻（クツワ）と云は仁義禮智忠信孝悌の八を亡（クツハ）なせし族とて亡八とも云又能くとつては大坂新町開發人木村又次郎豐太閤より瓢箪の馬印と馬の轡を拜領せしゆへとも云が近來八水隨筆とて享保前に大坂御城番に見へしお人の隨筆には舊吉原の頃は地形を丸く取つて眞中に町を十文字に取り揚屋町として廻りに茶屋を住せし故十かやふな形ちにて有し故轡也とあるが是も尤とも思はる都て物事に正しき物は何の書にもひかへあれどか樣の事は覺へても覺へずともの事ゆへ書し物なく後人色々の考へを付て書事ゆへ道理に當つたるをよしとしてそれにする事也

品川宿

品川宿は東海道の咽首なれば又陽氣なる事此上なし高繩より茶屋有て（案內茶屋也）品川宿の中央に小橋有夫より上は女郎錢店橋より下は大店也女郎屋は何れも大きく濱側の方は掾先より品川沖を見晴らし遙向ふに上總房州の遠山見へて夜は白魚を取篝火ちらつき漁船に網有釣あり夏は納涼によく絕景也女郎は十文目にて雜用は別也先茶屋より白丁とて白の大德利を提て女郎屋へ案內して藝者を呼（女郎屋〳〵臺の物肴也大臺小臺と有に藝者有）を取酒宴始る內女郎出て向ふへ並ぶおりやあの子身共はあの女なぞと見立すみ酒事一寸有て次へ出改て酒宴の席につき部屋も隨分吉原にまけねば夜具も北里及べからず（我自刊本部屋も隨分吉原にまけれど夜具は北里に及ぶべからずとあり）先吉原はおいらんの見識高きは勿論なれど中位の女迄が上を見習ひ少し見識ばる氣味合有品川新宿始外々には其見識なけねば早く馴染遠慮有間敷初心な者も早くこなしてかゝる氣味合あれば下策にして賑やか也爰も役者藝者は照らして客にする事なし女郎屋頗る多し中にも土藏相摸、大湊屋抔名高し岡側の家は後に御殿山をひかへ濱側は裏に海をひかへ往來は奥州出羽より江戶を過て京西國へ赴く旅人下る人は九州西國中國幾內の國々より行旅人共參宮金ぴら大山參り富士詣鎌倉大磯の遊歷やら箱根の湯治參勤交代の大小名貴賤を論せず通行すれば賑敷事此上なし表の間は板敷にて玄關構へ片店は勘定場にて泊り衆の大名旗本衆の名札を張中庭泉水廊下を架

し琴三味線の音など聞へ道中女郎屋の冠たるべし名物は鮮魚をおもとし品川海苔柳鮫白魚貝のむき身の類

内藤新宿

次に内藤新宿と言は大城のま西に當つて甲府及び青梅街道の咽首なれば是又賑敷事限りなし女郎宿屋も家居廣く茶屋も甚だ多けれど舊内藤侯の屋鋪地にて内藤新宿と呼山手にて田舎街道なれば百姓の通行多く適に奇麗なる往來は堀の内詣の通るのみ裏手は多く藪か畑か崖地にして閑靜也客は武家出家多くして表構へは品川に同じ直も上は十文目にて錢店六百文四百文と交りて住り引手茶屋が酒肴を取よせ遊ぶ事也品川にも爰にも大店には風呂場仰山に建て錢湯の如く客に入らせる上方には餘り無かた也次に板橋宿是は又中仙道木曾街道の咽首なれど品川とは一口にいはれず至極陰氣也女郎屋も餘程下品にして皆錢店にて道中筋女郎屋と同じ

板橋千住

次に千住は奥州街道咽首にして板橋よりは宿も廣く家居遙に奇麗也大千住小千住とて大橋を中に置て南北に分り小千住の方を掃部宿共云ふ此傍に小塚原とて仕置成敗場有ゆへ土俗こつかつぱらとも云女郎錢店六百四百也江戸のま北なる故淺草邊の者らは吉原の安女郎を買わんより此千住の方よいなどゝ唱へて繁昌する也一體の女郎に何も變りし事はなけね共岡場所宿場の女郎共は殺伐にして賤しき事限りなし都て錢店の所は暑中蚊帳を垂る時節は薄綿の夜着是をかいまきとて敷物は比翼ござとて細き寐ござを二枚つづきとして緣をつけ敷す冷氣に赴けば蚊帳を取置夜具と替る事也爰らに又贅澤有て定めの外に百文增にて夜具の上(ジャウ)をきせる也大坂卅石の如し一笑に堪たり予が文草にも書しかど一笑話なれば爰にもしるす吉原の女郎客衆へ手紙を送るも仲の町花盛りとか燈籠俄などの事を書て賑わしければそれ見物がてらにちと〳〵おこしなどと書おくるを常とす千住の女郎に文送る程の事もあるまじければ馴染の客へ送る文に菜種も今を盛りにてよき礫火炙(ハリツケヒアブリ)もおわしまし候まゝちと〳〵御入らせと書送るならんと惡口をいへりさもあるべし去んぬる末の三四月頃にて有しが岩井杜若故人となり其弔ひに押上の御寺へ葬式有て予も馴

染の人故送りしが帳場は三座の作者狂言方の受取ゆへ此人數跡にて吾妻の森に名代の鯰のすつぽん煮を賣る家有そこにて酒を始て皆々酩酊の上予にいづこぞ奢らせんと附隨ふ者凡十一人我ともに十二人也兼て此千住あたりの遊びも滑稽ならんと思ふ上多人數なれば吉原にては中々安上りに上るべからず錢店の遊びは天窓からしれてあれば先千住行と相談極り中にも年がらや天窓役ゆへ鶴屋南北頭取と成り向島より橋場の渡し迄に鬮をこしらへ十二人の者にひかせ誰一誰二と番定り扨一の鬮を引たる者は女郎屋にて十二人よしあしを論ぜず並ばせて一の鬮の者一番に此女と思ふを取選り取らする事也二より段々〳〵相方定める此内あの女をと思ひても末の鬮に引當つた物は選り屑を取る事也内談にて取かゆる事をゆるさずと言渡すと皆々一統に妙也とよろこび扨宿場より取よせる酒は惡酒にして高料也と頭ぶんよりいひ出し酒屋へより五升とか七升とか樽に詰させ外に肴を誂らへ溪齋英泉子（畫師也故人と成る）の親類と聞しゆへ若竹といへる女郎屋へ行藝者一組呼で酒を始向ふへ十二人の女郎並ばせ一の鬮の者より段々に女郎を定させ我隣り〳〵へ並ばせて酒宴となり肴には何なりと一藝をさせる事にて戲れしが古今滑稽の司也と其時の者は後に迄是をいひ出しては笑ひしがか樣な惡ふざけの遊びにはこふいふ場所は妙也吉原にては見識有て何か女郎の方より故障を云出し出ぬ者有り色氣をはなれ樣子をせずば見ためが奇麗かきたなきかにて遊戲滑稽は多かりし江戸近くには右の五ヶ所より遊所女郎屋といふ物絶てなく淺草より三里東北に松戸と云有又四里東に船橋と云有何れも田舍の宿場にしてどこかむさくろしく東海道品川宿の上の宿に川崎と云有それを入て遊所八景といふ戲書を江戸にてせしが誰にかあたへて覺へねば爰に略す以前深川中町大新地小新地辨天裾繼（スソツギ）根津谷中等へも遊びに行しが本の土地よりかわりしのみにてさせる珍說と思ふ事なく只上方とは茶屋揚屋の變りの有て女郎は內に置すへ客の方から二階へ上て呉るか呉ぬかといふが習ひにて上方のよふにちと呼んでくれのあなた方は土地におなじみもたんと有ふがお事かけの節はなどゝせりふ打事は絶てなく裏表の相違なるべし

廻し床

或京攝の人予に難じて曰右の遊所の話にては紋日物日にても常々でも客二人と三人さし支へし時は廻し床とて現に脇外の客と寐に行をきよろりと閨屋に只一人寐てまじくじ〳〵と待てゐるは馬鹿〳〵しき物ならずや予答へて京攝の如く花と號して切賣をせねばさもあるべき事也上方の女郎を呼にやると今一寸餘所へ花に往てじやといへば客あるにあらずや尤なじみの客には座敷計といふもあれど先十人が九人は客に往かば逢ふべし然らば一晝夜かけて五軒へ花に往かば五人に逢ふべし江戸の方客にあふ事廻し有とても數十人の廻し床なく二人せいさへ三人なるべし數すくなくなれば其情深かるべしと又難じてさるからに逢ふ時呼て買ふ他の客と寐る間の花は買ず答へて夫こそ客の薄情ならずや江戸の方濶達にて心廣といふべし扨其廻し床も前に云ふ如く實に客あるやらないやらわかりし事なく先友達と三人連れにて揚屋へ行く隣座敷とか向ひ座敷とか近くに銘々の間を構へて閨居れば其客深切らしく世辭よく是は爲になる客で有ふとかどこか好な所が有れば中々そは〳〵と出歩行ず初會よりしみ〴〵と咄しのもてる物也同じつれにても其相方の女に好れぬと不奉公してよそへ寐に行冷たいふとんに獨まじくぢするからこりや廻し床へ這入ていやアがるといろ〳〵と氣が廻り廊下をばた〳〵と上草履の音が聞へるとうせたなと思ひ狸寐入して待て居ると外の間の女郎にて此間の女郎來る共客寐入りしと思へば起そふより朋輩の方へ寐に行などする也

通と野暮、持る持ぬの論

翌日三人返りがけに直に評判する事にておまへは夕アもてたネといへば先□□□□ひでも夜とも咄しごへしてひとつに寐てゐた物がもてたると獨り捨置れたはふられた樣な物也そこで先の女郎が朋友の手前を飾り述懷をいふとふられたと思はれ（るカ）からもていでももてた顏をする是江戸者女郎買に行人の習ひ也是は見へ坊と云てまぢおしみを云なりさする時には何がな女の氣にいる樣な咄しをして御機嫌をとるにしくはなし手水にも行ずげら〳〵笑ふて閨居るこふした翌日はもてなんだ朋友にさもこのもしく思わるゝといふだけが德也その上ア、夕べの女は嬉しがり上つておらア寐かけるとこそぐつて起したり

何か咄しを仕かけて一寸も寐させぬからけふは睡くつてならねへなどゝ受させるやつ也難じる人又曰そふいふ意味深長なる事も有べしされどもおれは上方の方が面白ひ江戸の事は聞てもとんと好もしくなひと答へて誰しもそふした物なれど郷に入ては郷に随がへにて彼地に馴て見ると廻し床有と思へば猶々意氣張有ておもしろく一寸も狂言を透さず幕なし狂言を見せる格でさま〴〵あやなし外の客の間へやらぬさんだん頗る面白み有て大かた是にて身上を叩き上る事としるべし何分若盛りには一遍は凝る事も有べし物の哀は是よりぞしるとあれば捨られぬ物なれど跡先を辨へ段々と年がよるととんとおもしろふなく此女に惚られふとも通人粋人じやとほめてほしうもなく勤をひかせて女房にせふとも思ふ望なく本によん所なき附合で女郎藝者を合手に遊んでいると茶屋場で敵討の望のない由良之助が遊んでいるよふで正味といへば金を大小つかふだけが損也錦城が書れし梧窓漫筆の中に女郎買遊所狂ひをする人は金銀の冥加に盡る計でない物事が自由過るゆへ果報を取越して後流浪をする也と其譯は酒といへば酒此肴はいかぬこふいふ物といへば肴を取かへ此女よりあの女などゝ注文に應じて歸りには泥草履でもちよんと直してくれるから畢竟場所こそかわれ將軍樣とも同じ身持ゆへ奢侈僭上とて物の十分過るを天より憎み給ふゆへとぞさも有べき事學力の有人の考は又妙也秋成が癖物語には京攝にて金持の粋な息子藝子や女郎に腹賣て程のよい事揃へをして可愛がられるつもりの所其藝子や女郎衆が役者が好でその方へはけしからぬ心底を盡すと聞出しおれが是程にして遊ばすのに役者を身にしておれを皮するとは心得ぬ鬢附屋じやの李冠のとよい男な役者は死んで今の役者らから見るとおれの方がよつ程よい男じやのになアと段々深ふ聞合せたら其息子より役者の方が金を餘計つかふよつてじやと書てあるが是らは試に動かぬ穴にてその役者さへ今は中々部錢貸や大法師よりも勘定高ひ時節若ひかた〴〵能々愼んで必ず程がよひおかたじやの粋なおかたじやのいわれ給ふな昔はよいお人じやが不仕合な誰それはいま〳〵しい憎てらしいやつじやが仕合よふて金を持ているといひしが今はいま〳〵しい憎てらしいと人に憎まれている者にねつ

から金がない人多き時節それによいお人じや結構なと云れては流浪してくへぬ筈と心得給へ嘘ではなし

訛の惣評

此餘に東海道岐蘇路を始め三都の近國近在の事を言出せば中々おかしき事詞の違ひ諸品の物の唱への替る事夥しくあれども此書は三都の事を一寸擧て云て見たるのみなれば何事も略していはず上方の詞の古き惡口に「大根とはねべき文字は刎もせず刎ず共よきごぼう牛房（ゴンボウ）ともいへば上方にても云誤る事は甚多し江戸の人がそうしてからこふしてからと云を聞ては京攝者は口まねをして笑ふがこつちの者にいはすとよつてと云そふしたよつてこふしたよつてと云也よつてとからとはどちらが古ひ詞じやと問はれるとからの方が古言也文屋の康秀の歌にも吹からに秋の草木のしほるればと有吹よつてとはマアいはぬからはからの方道理に叶ふといふべしさり乍ら江戸は土地ひらけてより新らしきゆへ諸國の田舍詞計を集めしゆへ賤しと有て上野の宮樣は前方京より鶯を取よせ上野の山へ數千羽放し給ふ京の訛りのない鶯の種が今に殘つて代々上野の鶯は妙音じやとも云ひ又雪中庵嵐雪は俳諧の席にて人の句のとり渡しに訛りが有ては口惜いと京大坂へ三四年も詞直しに來られたともいふ增て中興淨瑠璃の宮戸太夫は江戸產なれど上方で詞直して常の詞にも江戸の訛りは一寸もないと感心させる名人も有然らばどふ云ても詞は京攝が能いに相違なく江戸詞は惡いのではない江戸でも貴人高位は勿論眞の江戸產れの身を持た人は詞に餘計のかわりめはなき物也我等長らく彼地に居たれど終にそらつかふた事なし京攝にいる折も同じ詞にて贈答しけりまして芝居の正本など書にも江戸詞には書ぬ也それでも通るから也予が知る聾の畵人浪華の豪富の供をして身延か江戸日光あたりを見物して歸國せしが一寸も訛なし聞ぬからはいはぬ筈也是程正直なるはなし五福子の書に曰日本を人間の體にたとへていはゞ五幾內は胸腹にして四境へよく通じ安く又何れの地の詞風儀にても移り易し江戸へいつても長崎へいても一二月かの地にいればいつしか移り染る他國の人は然らず幼年より京大坂へ出て居る人にても國訛り出て直りがたし然らば江戸より東は頭の如く紀州と越路は兩手に屬し中國四國九州は腰より

脚共譬はゞいかにとある最なる說也予又先年浪華の或大醫に戲れて難問しけるには京師は四神相應の地にして王城の地なれど時々地震大雷の災あり東武は繁榮都會の地なれど常に風强く出火の災あるはいかにと大醫答へて京の地震江戸の失火人間の體にていはゞ脈處也と大笑ひせしが五福子の譬へによく似合ふたりける戲事を述るもふと吾妻の家づとゝ云書を見るより思ひ付て俗々たる事乍ら文を飾らず有のまゝに筆に任せて婦女子の夜話の一笑共成れかしと書記す事になん

黑川眞道
水谷不倒 校訂

西澤文庫皇都午睡三編下の卷終

明治三十九年四月二十日印刷
明治三十九年四月二十五日發行

非賣品

編輯兼發行者
東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地
國書刊行會代表者
市島謙吉

印刷者
東京市京橋區新榮町五丁目三番地
本間季男

印刷所
東京市京橋區新榮町五丁目三番地
東京活版株式會社